

模型戦士ガンプラビルダーズ I ・ B

コマネチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは……現実の世界にとてもよく似ていて……だけどほんの少しだけ科学の発展した、こことは違う世界のお話……

科学技術の発展は、CGによる仮想空間の中でガンプラ同士を競い、戦わせる『ガンプラバトル』が実現していた。

それに参加する者達、作り、戦い、作品を己の相棒とし、魂を込める者達を人はこう呼んだ……

「模型戦士・ガンプラビルダーズ」と、

このお話は、好きな物に情熱を注ぎ周囲を巻き込んでいく、ありふれた女の子の、でもちよつと変わった物語……

※この作品はTINAMIでも投稿しています。こちらでも興味を持ちマルチ投稿を始めました。

TINAMIではオリジナル機体をモデル項目で単独の投稿もしています。

何を使って作ったかも書いてあるのでじっくりオリジナル機体を見たい方はそちらもどうぞ。

目次

第一章 『ウルフ』編

第1話「やってきた転校生」(ガンダムAGE―2E登場) ― 1

第2話「性別の関係ない物」(ジェノアスキャノン登場) ― 23

第3話「青い剣豪」(ゼク・アイン斬撃兵装登場) ― 37

第4話「本当に必要な事」(ガンダムAGE―2Eナイトメア登場)

― 53

第5話「荒野の決闘」(AGE―2Eナイトメア VS ゼク・ア

イン斬撃兵装) ― 63

第6話「狼達の挑戦」(レジェンドBB武者頑駄無ガン普拉バトル仕

様 & バウ・H登場) ― 72

第7話『『始まり』のきっかけ』(エールストライクガンダム登場)

85

第8話「見えない敵」(ビルドダガーフルパッケージ VS ハイ

ゴッグオリジナルカラー) ― 101

第9話「ねじれた少年」(ガンダムAGE―2Eコカトリス VS

ザクIV) ― 111

第10話「わがまま部長」(アメイジングレジェンドガンダム

S ドラッツエ・オクトパス) ― 128

第11話「宇宙翔ける白狼」(ガンダムAGE―2Eフェンリル登

場) ― 149

第12話「狼達の決戦」(激突! ガンダムAGE―2Eフェンリル

VS スサノオ改・ミブウルフ) ― 164

第二章 『エデン』編

第13話「眠れる獅子達の目覚め」(ゼイドラ登場) ― 189

第14話「GOGO!ガンプラ猛レース!」(ライドサーペント&ボ ルケーノトータス登場)	204
第15話「可能性の獣」(ユニコーンガンダム VS HGクロノ ス)	229
第16話「我ら山回高校四人娘!」(ガンダムエックス黒王号 & シャルドールスナイパーカスタム登場)	250
第17話「チーム『エデン』」(ユニコーンガンダム四号機『デユラ ハン』登場)	276
第18話「ヒロ、再び」(HGCCパーフェクトストライクガンダム &デュエルガンダムAS&バスターガンダム登場)	292
第19話「ぶつかる壁」(ジャスティスガンダムセートウン & ガ ンダムアストレアFR2 登場)	308
第20話「好きになれた理由」(アイ VS ナナ)	323
第21話「再戦の足し算」(フリーダムガンダム・アルクス VS ジャスティスガンダムセートウン)	337
第22話「改造のススメ」(ビルトワイバーン『コピー』 VS ムトルーパー・スノーマン)	356
第23話「くじ引きガンプラバトル!」	370
第24話「勝利をその手に掴みとれ!」	391
第25話「思い出の宝探し」(アストレアFR2ダークマター & レッドセラヴィー VS ジムキャノンクラーケン)	409
第26話「面接バトル」	445
第27話「違法ビルダー」(ジェノアスキラー & エクシアリペア 登場)	459
第28話「推参!!パーフェクトユニコーン!!!」(パーフェクトユニ コーン登場)	459

コーンガンダム「不完全」登場	478
第29話「決戦前夜」(合体ミブウルフ登場)	500
第30話「ビルダーの意地と誇り(前編)」(マステマガンダム & ネフィリムガンダム登場)	519
第31話「ビルダーの意地と誇り(後編)」(デュラハン・デストロ イモード登場)	542
第32話「好きだから!」(パーフェクトユニコーンガンダム V S ユニコーンガンダム4号機 『デュラハン・デストロイモード』)	559
第33話「模型戦士ガンプラビルダーズI・B」(バイアラン・スパ イダー登場)	578
第二部 第三章『県内予選』編	
第34話「サポーターとフリーガン(前編)」(ビルドスペリオル& ガンダムAGE-1サムライリッパが登場)	601
第35話「サポーターとフリーガン(後編)」	612
第36話「少年の心を持ち続けた大人達」(前編)	622
第37話「少年の心を持ち続けた大人達」(後編)	633
番外編「スーパーガンプラ対戦OG(前編)」(ヒュツケバ……ビル ドアカツキ登場)	643
番外編「スーパーガンプラ対戦OG(後編)」(ビルトビ……ユニコー ンガンダム4号機・ヒポグリフ登場)	652
第38話「変わった友、変われなかった友(前編)」	659
第39話「変わった友、変われなかった友(後編)」(アツシマー・ デコレーション登場)	679
第40話「山回高校、学校七不思議(前編)」(ベアツガイ・スケア	

登場)

第41話「山回高校、学校七不思議(後編)」

731 699

第42話「開幕!!ガン普拉バトル選手権!!(前編)」(ガンダムAG

E-3E & ウイングガンダムノヴァ登場)

751

第43話「開幕!!ガン普拉バトル選手権!!(後編)」(Rプラン・ガンダムブリュンヒルデ登場)

769

第44話「求めたのは勝利の美酒と栄光」(ジ・Oグラップラー登場)

790

番外編2「アイの過去回想その1」※百合っぽいので注意

821

第45話『第三回戦!模型部と再戦!』(ジンクス(GN-X)・チャリオット登場)

837

第46話『ジェットストリームアタック』(ドムトルーパー三人衆登場)

852

番外編3「アイの過去回想その2」※前より百合っぽいので注意

867

第47話『トラップを越えろ(前編)』(チーム・グラン・ギニョール登場)

905

第48話『トラップを越えろ(後編)』(覚醒・ガンダムAGE-3Eサラマンダー)

925

第49話「極寒の決死圏(前編)」(チーム・ライオン・ハート登場)

940

第50話「極寒の決死圏(後編)」

957

第51話「流転とスウィートポテト(前編)」(メテオビルドイージスガンダム登場)

977

第52話「流転とスイートポテト(後編)」(参上!チームスイートポテト!)	1010 993
第53話「邪神像アイちゃん」	1010
第54話「破天荒なお姉さま」(オーバーデステイニーガンダム登場)	1036
第55話「炎のガンプリビルダー」(Gアザゼル登場)	1060
第56話「菜々」	1087
第57話「創一」	1171

第一章 『ウルフ』編

第1話「やってきた転校生」(ガンダムAGE—2E登場)

——宇宙……、モニター越しにアタシの目の前に広がる暗黒の空間……。

星々の煌めく闇の中を、数体の巨大なロボットがまるで庭といわんばかりに飛び交い、戦っていた。

その中で一際強い機体があった。あつという間に二体の敵を斬り伏せ倒す。

まるで剣とも取れる四枚の翼を持った肩、大型の銃、二つの目、額に一对に別れた角……その白い機体の名前をアタシは知っていた。

「ガンダム……」

アタシはふいに呟いた、ロボットの事は全然知らないアタシでも、あの機体がガンダムと呼ぶ物だという事は知っていた。

そして……あのガンダムに乗ってるのが、今日初めて会ったアタシの『友達』だと言う事も。

「何者なの？アタシは……」

茫然とするアタシの疑問をよそに、残りのロボットが一对一で戦いあう。

敵の青い、エイを背負った手足の生えたヒトデの様なロボットがガンダムに長い銃を向けビームを放つ。

ガンダムは戦闘機のような姿に変形、ビームをかわしヒトデに突っ込んだ。

銃剣つきの銃が機首になっており、巨大な銃剣が深々とヒトデを貫く。

ガンダムはそのまま機首を切り離し人型に変形、すぐさま刺さったままの銃を手にとりガーを弾いた。

「——!!」

ガンダムに乗ったアタシの友達が何か叫ぶ。同時に放たれたビームはヒトデを貫通し、ヒトデは風穴が空くと同時に爆炎に飲み込まれた。

「何を……？」

爆発により照らされる宇宙とガンダム、アタシは唾然となりながら、理解出来なくてもその一部始終を見ていた。

破壊されたロボット……それに人が乗っていたことは知っていた。そして今日会った友達が……人が乗った物を破壊した……。

でもアタシはその友達に対しても、やった事もおかしいとは思わなかったし怖いとも思わなかった。だってこれは……

——プラモデルを使ったゲームなのだから。——
……

——……こうなった経緯を話す為には、その日の朝へと時間を遡る必要があるだろう。

「ふあゝあ……お母さんおはよう」

都会すぎず、田舎すぎない町、山回（さんかい）町。そのとある住宅街の一軒家。

トントんと階段を下りながら一人の少女がダイニングキッチンへと入る。

冬服のセーラー服に身を包み。赤茶色のセミロングをポニーテールに纏めた髪、頭髪と同じ色の目。

本来ならば快活な雰囲気を出してるのだろうが寝起きの為か微妙に顔にしまりが無い……、名前は『ハジメ・ナナ』16歳の高校一年生だ。

「おはようって、顔が緩んじやってるぞ。まくだ冬休み気分にいるの？」

台所で料理中の、顔がよく似た女性が少女の顔を見ながら答える。彼女の母親だ。

「うゝ、しょうがないでしょ？今まで長期休みだったんだし、まだ本調子じゃないんだから……休みボケだわゝ」

怠そうにナナはテーブルについた。そう……今日は1月7日。冬

休みが終わり今日から三学期となる日だ。

冬休み明けというわけで一層ナナの気分は怠かった。

「運動部やってる子とかはそんな言い訳しないよ？やる事ないからそんなだらけちゃうんじゃないの？」

「……知らないわよ……どーせアタシは無趣味ですよーだ」

だらけた顔から一転、頬をぷうと膨らませながらナナはむくれる。このハジメ・ナナ、器用ではあるものの今の今まで熱中した物がない。本人はその事を気にしていた。

「ハイハイむくれない。そんな不機嫌な顔もだらけた顔もダメよ？今日アンタお隣さんの子に学校案内するんでしょ？」

「あーそうだった。前の終業式の日に先生に言われたんだっけ」

母がなだめ、ハツとしたナナが思い出す。

始業式の日つまり今日、同じクラスに転校生がやってくるから通路と学校の案内をしてくれと担任に言われたのだ。

「でも、転校生って言ったならもつとサプライズなもんでしょ？事前にそういう事言われるのもなんだかなあ……」

「同じクラスなんだし信用されてるって事でしょ？ま、そんな事よりせっかくお隣さんなんだもの、友達になれるといいわね」

「うん」

ナナが同意として頷く。ナナ本人としても折角隣に同い年の子が来るのだ。

友達になれる子が来てほしいとは思っていた。

「じゃあ、なおさらいつまでもお正月気分じゃまずいってわけよ。はい早く食べてシャキっとするー！」

ナナの母はそういうとテーブルに朝食を並べる。並んだのは磯辺焼き、あんこ餅、お雑煮……

「……なんでこの流れで正月料理？」

「いやーお正月の余りがまだ消化しきれなくて……、後ぶっちゃけアタシも正月気分抜けてないから使いまわして楽したくて……」

「アンタもかい!!」

「うゝ寒っ！」

準備を終えたナナは隣の子を迎えに行くべく外に出た。

制服の上にコートにマフラー、準備は万端だ。しかしそれでも早朝の寒さは肌に染みる。

ナナは白い息を吐きながら隣の家を見た。住宅街で売りに出されていた二階建ての家。

どんな家族が引っ越してきたんだろう？どんな子が来たんだろう？そうナナは一瞬思案する。

が、直後、隣の家から声が聞こえてきた。それも慌てた声が、

『オカーサンナンデオコシテクレナカツタノ!!』

『アンタジブンデオキルツテイツタジャナイ!!』

『ソレデモモウチョットキニカケテクレタツテイイジャナイ!!アーモウオクレチャウヨー!!』

『アーアンタアサゴハン！セメテリングモツテイキナサイ！』

かなりドタバタしてるらしい。少なくとも暗い人達じゃないだろうな、とナナは苦笑した。

「いー行ってきまあっす!!!」

切ったリングを口にくわえた少女が玄関から飛びたしてきた。急いで出たらしく右手には学校指定のコートとマフラーが握られていた。

急いで口にくわえたリングを噛み砕き飲み込む。

「んぐっ！はあ……はあ……お隣さんの迎えが出る前に早くしなきゃ――」

まだナナが出てこないと思ってたのだろう。コートを着ようとするが、その拍子に苦笑いするナナが思いっきり視界に入った。

「あー……」

「……」

途端に少女の顔が真っ赤になる。気まずさを感じながらも声をかけるナナ。

「はじめまして……」

「あ……はい……今日からこの街でお世話になります……はじめまし

て……」

萎縮しながら少女は答えた。

髪は首を覆う長さの黒いストレートボブ、やや垂れた目も髪に合わせた黒色で、全体的に痩せ型の体軀、断崖絶壁の胸、そしてほんのちよつと猫背。

人によつては地味に見えるかもしれないが素朴な可愛らしさがある少女だ。

ナナは緊張を解くようにやんわりと声をかけた。

「向こうで話は聞いてると思うけど……アタシが案内担当の『ハジメ・ナナ』だよ。よろしくね」

「あ……『ヤタテ・アイ』です。よろしくお願いします」

アイ、そう名乗った少女はボブの毛先を揺らしながら頭を下げた。

「へえ、この街へは昨日来たばかりなんだ」

「はい、正直右も左も分からないのでハジメさんがいてくれて助かります」

二人はナナが案内する形で通学路を歩く、住宅街を抜け、商店街を突っ切れば後は学校まで真っ直ぐだ。

学校が近くなるにつれて通学する生徒の数も多くなってゆく。

「アハハ、ナナでいいよ。そんなかしこまった態度される程立派なアタシじゃないし」

「え？でも……」

「同い年なんだよ？慣れてないから遠慮とかあるかもだけどさ。早く打ち解けてほしいしね、この街にもアタシにも」

「うん、ナナちゃん」

「OK！」

二人が話し込んでる丁度その時、

カシャッ！

後ろからシャッターを切る音が聞こえた。デジカメだ。

「いいねえ。可愛い転校生さんをエスコートするお隣さんの姿」と

「え!？」

「その声は、タカコか」

アイは戸惑い、ナナは振り返る、そこにいたのはデジカメを持った女の子だ。

セミロングの髪型と常に笑ってそうな口元、そしてパツチリ見開かれた目は温厚かつ、呑気そうな印象もある。

「あいあい、おっはよくナナ」

「おはよく」

「この人は？」

「アタシのクラスメート、タカコだよ」

「ういつす初めまして転校生ちゃん。フジ・タカコだよん。新聞部所属なんだ」

「で、さっき撮ったのも新聞に使うわけ？」

「いやいやプライベート用、初日の記念って奴？馴染む前の初々しさってのがたまらないよ。可愛くて」

「え？」

再びデジカメをアイに向けるタカコと呼ばれた少女、またもアイは戸惑う。

「理屈が解んないよ……そんな事言ってるよと変に思われるよ……」

もう一人女の子が現れる。長見で男子と間違えかねない程のベリーショート。目はジト目でちよつと近寄りがたいイメージがある。

「あ、ムツミおはよく、初詣以来ね」

「おはよナナ、転校生ってその子……？」

ムツミと呼ばれた少女はアイを見ながら言った。アイ本人は状況が解らない様だ。

「ナナちゃん、この人も？」

「そ、二人ともクラスではアタシと特につるんでる奴らだよ」

「ミヨ・ムツミ、陸上部所属。ようこそ山回町へ……」

通学のメンバーも増え、四人並んで会話しつつ学校へ向かう。内容はアイへの質問がもつぱらだ。

「ちよつと意外かな？ヤタテさんの好きな食べ物牛丼だなんて……」

「あはは、恥ずかしながら……女の子っぽくないってのは自覚してるんだけどね」

「じゃあ？……趣味は？」

「え？」

言ったのはタカコだ「何お見合いっぽく言ってるのよアンタ」とナナがツツコミを入れる。

その横でアイは少しためらう。

「？なんか引つかかる反応」

「まあ、これまた女の子っぽくないと言いますか……変わってると思いますか」

「趣味でそんなの気にする必要ないと思うけどな」

フォローをナナが入れる。

それでもどうしようか。と思索しながら頬を人差し指でかくアイ。

「そだよ。世の中色んな趣味持つてる人いるんだし、例えばこつちのムツミね。『SGOC（スゴック）』の大ファンなだけどね？」

「タカコ……？」

スゴック……国民的アイドルグループの名前だ。デビューからもう何年も経っているが人気は衰えることを知らない。

「特にリーダーのコウジ・マツモト君が大好きでさ。マラソン大会の時なんて（一位になればコウジ君がデートしてくれる……）って何度も願掛けみたいに呟いてたんだよ？」

「え？」

急にミヨの顔が真っ赤な慌てた顔になる。

「タ・タカコ！なんで知って・じゃなくて！言っていないよそんなの！大體趣味の話なんだからただSGOCのファンだって言えば済む話じゃないか！」

「え〜言ってたじゃん。つかSGOC好きってだけじゃ普通の趣味の話になっちゃうじゃん」

「普通でいいんだよ!!そんな事言うなら君だって！趣味の所為でボク

達不審者扱いされた事があつたじゃないか！」

ムツミはおかえしとばかりに話し出す。タカコはきよとんとした顔になる。

「え？あつたつけ？」

「前に皆で遊びに遠出した時の事だよ。ミシマ・ライ君って言ったわけ？」

「あ!!」

叫ぶタカコ。思い出した様だ。急に彼女の顔が冷や汗でダラダラになる。

「う！ちよつと待って！」

「アイちゃん……。コイツはね、新聞部の取材を言い訳に初対面の小学生男子を質問責めと撮影責めにしたんだよ……。おかげで近くにいたゴスロリ着た人に不審者と思われて……」

「え?!」

再び落ち着きを取り戻したムツミはアイに淡々と話した。

「しかもそういうのは一回や二回じゃない……。つまりタカコはそれが趣味……」

「い！いいじゃない！あのカワイイ年代はすぐ大人っぽくなっちゃうんだから！その時の姿を残しておかないと！」

「認めてる……」

「ああもう！はいはい転校生の前で恥をまき散らさない！」

二人をたしなめたのはナナだ。二人は「あ」と呟くと恥ずかしそうに言いあいをやめた。

「ま、そういう事よ。世の中いろんな趣味があるんだから、別に恥ずかしがる必要なんてないよ」

「うん、そうだよ。限度はあるけど……」

「こそ、変な行動に映るのも好きって気持ちが強いつて事で」

「タカコ、君の場合はどうかと思うよ……」

アイはそんな三人を見て緊張が和らいだようだ。言おうと決める。

「実は私……『模型』が趣味なんです」

「模型？ってことはプラモデル？」

「うん、特にガンダムのプラモデル『ガンプラ』って言うのをよく作ってる」

「色とか塗るの？」

「うん、まだ色々と未熟なんだけどね」

少し心を開こうとしてるのか。ほんの少しアイの口調が柔らかくなった。

「ガンダムかあ……昔アタシの周りでも流行ってたから、アニメちよつと見てたけどプラモ作ってる人ってのはいなかったなあ」

「女の子だし変だっという人も少なからずいるんだけどね、だから迷ったというか」

「んな事ないよ。アタシ趣味ないし……」

「うん、ボク達は別に変だとは思わないよ……コウジ・マツモト君もガンプラが好きだっって言っていた。コレクターとも」

「そだよ。思ったよりずっとノーマルな趣味じゃない」

三人の反応にアイはホッと胸を撫で下ろす。

「よかったあそう言ってくれて、ありがとう」

「じゃあさ、今日半ドンだし、帰りに商店街のプラモ屋見に行こうよ。今後よく利用するかもしれないし」

「本当？ありがとう！」

嬉しそうにアイが言う。と、話し込んでる内に学校についての。

アイは始業式で紹介される為先に職員室に行かなければいけない。

故にアイ、そして職員室への案内役としてナナはその場で別れる。

「じゃあ私は一旦別れるね」

「うん、またクラスでね……」

「じやついて来てアイちゃん！」

「あ！待ってナナちゃん！」

『また後で』

タカコとムツミは二人を手を振りながら見送る。

「プラモデルが趣味っていうのはちよつと意外だったけど、仲良くなれそうな子が来てくれたね」

「うん……、想像してたよりずっと、友達になれるといいね……」
「大丈夫だよ、きつと」
……

その後は始業式、クラスでのアイの紹介、新学期初日の為授業もなく早く学校は終わる。

その後アイとナナは通学路上にあるアーケード街『山回商店街』を通っていた。

タカコとミヨは部活がある為いない。平日である為人は少ないが買い物以外にも通勤や通学に使用する人間は数多くいる。

今はまばらだが、朝通った時は多くの人間が道幅8メートルの空間を行き来していた。

「それにしても商店街が通学路になるとは思わなかったなあ。家からも近いしプラモ以外でも結構使い勝手よさそう」

「この辺ショッピングモールないからね、大体のこの近辺の人はここ利用するんだ。駅とかも近いからね。通る人は一杯いるよ？つと、あそこかな？」

と、ナナはプラモ屋を見つめる。ナナには通り慣れた商店街だがプラモ屋を意識した事はない。

様々な店が立ち並ぶ中、看板にはデカデカと『ガリア大陸』と書かれていた。

「変な名前ね。プラモ屋なのに大陸って付くなんて」
「店の名前なんてそういうのばかりだよきつと」

二人は中に入る。入ってすぐ左にレジが見える。客はまばらだがどういいうわけか店員の姿は見えない。

商店街の店の構造故か横の広さはそれほどでもないが奥行きはかなりある。

ガンプラ以外にも別のプラモデル。道具、塗料、かなりの種類が揃えてあった。

「店員いないなんて不用心ね。それはそうとしてどんなもん？普段プラモ屋行き来してる身としては」

「結構、ううんかなりいいよこれ。広さもあるし揃えも十分。後はも

う一つあれば個人的にはいう事ないかな……?」

「ん?もう一つ?」

キヨロキヨロと何かを探す様に辺りを見回すアイ、とその時だった。

ドン!という爆発音が天井から響き、同時に上からどよめきが起こる。

「何?今の音」

「上の階か。行ってみよう」

「あ!待ってよアイちゃん!」

アイはレジの隣にある二階へ続く階段へと走る。ナナには何が起こったかさっぱりだがアイには馴染みのある音だった。

二階、そこには一階と比較してまるで別の店の様だった。模型に関する商品の類は一切置いておらず階段の近くに丸テーブルとイスが数個おいてある。

奥の部分には台座に乗った楕円形の機械が左右三個ずつ置いてあった。機械の左側にはスモークグレーの出入り口がついてある。

更にその機械に挟まれるようにして中央奥には大型の観戦モニターが設置されており、そこに数人の子供達が集まっていた。中には女の子もいる。

「おお!これぞまさしく」

「なんかゲームセンターみたいになっちゃったけど、何あれ?」

「ガン普拉バトルだよナナちゃん」

疑問を持つナナに待ってましたと言わんばかりにアイが説明する。

「ガン普拉バトル?名前聞く感じプラモで対戦するってわけ?」

「そ、作ったレベルや改造で強さが変わったり、何より自分の作ったプラモに乗れるっていうのが魅力なんだ。大人気なんだから!」

「へえ!こんなのが実現してたなんてね、で、早速やってみる?」

とそこへ後ろから沈んだ声が聞こえた。

「ガン普拉バトルだったら今は難しいよ……」

『?!』

不意打ちだった為、二人はビクツとなりながら後ろを振り返った。後ろにいたのは『ガリア大陸』と描かれた前掛けをつけた一人の中年男性だ。

年は40代半ばと言ったところか。ヒョロツとした体躯、短髪に無精髭、そして丸縁のメガネ、顔つきはいいのだが情けないオーラが出てた。

それとは別に落ち込んでるのか声の通りどよんとした暗い雰囲気や放っている。

「あ、もしかして店長さんですか？」

「いや、バイトの店員だよ」

「紛らわしい。で、無理ってどういう事よ」

「荒らしだよ。今日Gポッド6個中2個故障しちゃって、荒らしの人達が3個使って対戦相手リンチしてるの。」

『どかしたきや1人で俺たちに勝ってみせろ』って言っててね」

『Gポッド』先程説明した楯田の機械の事だ。1つの筐体につき参加出来るのは1人が原則となる。

つまり4個中3個を荒らしが占領したと言う事。

前方にたむろしてる子供達も言ってるのは文句ばかりだった。下に聞こえたどよめきもこの愚痴だったのだろう。

「うわセッコ！バイトとはいえ店員なんでしょ?!ならなんとかしてよ！」

「注意したんだけど、逆にボロクソ言われちゃってね……」

店員が悲しそうに俯く、その時の事を思い出したのか更に暗い雰囲気が増した気がした。

甲斐性なし、二人はそんな言葉が浮かぶ……

「だからそんな暗い雰囲気だったのね……」

「ともかく今は無理だよ。時間が経てば収まると思うから君達も……」

「要するにその3人に勝てばいいんですよ？」

黙ってたアイが口を開く。と、同時にアイが空いてるGポッドを見据える。

「アイちゃん?」

「次は私が対戦しますよ。急いであるから更衣室でヘルメットだけ借りますよ」

「え?!ちよつと待ってよ君!相手は三人だよ!」

店員は動揺する。アイの印象からして店員はアイが強そうには見えなかったからだ。だがアイはその反応を余裕ありげに返した。

「大丈夫。任せといて」

……

そして観戦モニターより奥にある更衣室でヘルメットだけを取ってくる、アイは空いていたGポッドの扉を開け中に入る。

ボールの内側のようなスペースの中にあつたのはシートと操縦桿、そしてフットペダル。ガンダムお約束の操縦席、その再現というわけだ。

アイはサイフからカードを取りだしシートに座った。

——住む場所が違つても、ここはどこ行つても変わらないよね——

アイはヘルメットを被るとシート右後方の機械からコードを引き出す。巻き取られたコードがカチカチと音を立てながら引つ張られる。

そのままアイはヘルメットの右耳部分に設置されてるイヤホンジャックに繋いだ。

Gポッドとヘルメットは繋がれ、これによりバトル中の通信が可能になる。通常はパイロットスーツと併用するのだが今は急いである着ない。

続けて前方の機械のスリットに自身の戦績やパーソナルデータの入ったカードを挿入。カードを認識するとシートの右側に備え付けであつたスキャナーが開く。

丸い黄緑色のスキャナー、その外見は機動戦士ガンダムにおけるマスコットロボ『ハロ』を模した物だ。

「初陣だよ。ここでの私にとつても、あなたにとつても……」

アイは呟きながら鞆からガンプラを取り出す。

ガンダムAGE2、ストライダー形態と呼ばれる戦闘機に変形可能

な機体だ。

スキヤナーにガンプラを入れ、数秒で読み取られるとそれが己の搭乘する機体としてガンプラバトルの世界へと映しだす。

まず映ったのはステータス画面、左側に自分の機体の姿、

右側には『素材剛性』『間接可動性』『間接保持力』『工作精度』『表面処理精度』『塗装／印字精度』と横棒グラフでガンプラの評価がされていた。

これがバトルでは機体性能に直結する。アイのAGE2はいずれのグラフもまちまちの評価だった。

——間接可動は……AGE系だしやっぱ素で高いよね。塗装は思ったより伸びないけど……うーん、筆でスプリッターはマズかったかなあ——

そう呟いてると画面が戦艦内の格納庫内に切り替わる。

目の前をCGで再現されたオブジェクトの整備兵が無重力の格納庫を通り過ぎる。

——今回は宇宙ステージなんだ……——

アイは無重力の演出からステージを予想する。ガンプラバトルでは多種多様なステージが用意されている、宇宙も地上もバリエーションは豊富だ。

『今回のステージはサイド7宙域です』と画面に表示される。

サイド7、ファーストガンダムに置いて物語の発端となった場所だ。

『ゲームをスタートします。戦果を期待します』

目の前のカタパルトが開き音声アナウンスによるバトル開始の合図が響く。

荒らしを退治しなきゃいけないのにワクワクする……。妙な高揚感をアイは感じていた。

「じゃ、参りますか……。ヤタテ・アイ。ガンダムAGE2！いえ！AGE2E（エンハンスド）出ます！」

アイが叫ぶと同時に艦のカタパルトがAGE2Eを射出する。強烈なGがアイを襲う。

「くううつ!!やっぱこれないと……乗った気になんないよ!!」

仮想空間にオブジェクトとして配置されていたペガサスを模した戦艦、ホワイトベースからアイの乗ったAGE2Eが飛び出す。

バトル中は機体の動きがGポッドに振動という形で連動される。

まさにGポッドに入ったアイはガンダムAGE2Eに搭乗しているのと同様だった。

「さて相手は……?」

目の前の画面に広がる宇宙をアイは見回す。真つ暗だったGポッド内部は、球体の内側状の360度全てがモニターとなりフィールドを映す。

遠くに円筒状の巨大な衛星、シリンダー型のスペースコロニーが見える。

あれがガンダムの世界において宇宙に出た人間が住居している場所だ。

と、荒らしがこちらを見つけたのだろう。結構な量のビームが飛んできた。が、距離が離れすぎてゐる為当たらない。

この距離じゃスナイパーライフルでもなきや当たりっこないのに……とアイは心の中で呟いた。

「まあいいやー!こつちから行ってあげる!!」

アイはAGE2Eを変形させる。下半身後ろに90度せり上がり、肩も90度畳まれる。

手に持った銃が機首となり頭が胴体に沈む。人型から鋭角的な戦闘機の姿へと変わった。

戦闘機形態、ストライダー形態だ。アイはビームを確認した方向へと大推力で飛んで行った。

一方荒らしの三人は獲物がかかったと歓喜していた。

「ハー!またカモがネギしよってやってきやがったか!さつきみたいに撃ち落しな!」

リーダー機のエイを背負ったヒトデの様なフォルムの青い機体、

『ハンブラビ』が重火器で固めた二体の僚機に指示を出す。

僚機は背中左右に、開いた扇型のバインダーを持った大柄な黄緑の機体。『パラスアテネ』。

右腕に二連装のビーム砲を装備、左右のバインダーには四つずつの対艦ミサイルを装備していた。

またパツと見では解らないかもしれないが全身にビーム砲を装備している。どちらもZガンダムに登場した敵機だ。

『了解だ！兄ちゃん！』

二体のパラスアテネが同時に答えながら撃ちまくる。三人とも兄弟の様だ。

肩部や右腕部のビーム砲で敵機をおびき寄せ、近づいてきたら背部の対艦ミサイルを一気に撃ち込む算段だ。

二機合わせてミサイルは16基、それで弱らせて倒すというのが荒らしの戦法だった。

「俺らは三機！向うは一機だけ！」

——今日は平日の昼だから来てるのはガキばかりだ！またとない稼ぎ時になる！——

ハンブラビに乗った長男が笑いながら思った。この三人の目的は勝利による戦績ポイントだ。

このポイントは勝利回数が多ければ多いほど溜まっていく。溜まったポイントは強者の証でもあるのだ。

同時にポイントの溜まった。つまり経験豊富な実力者は倒せば得られるポイントも高い。

だが経験や実力の浅い子供でも多少のポイントはある。経験の少ない子供相手でもち少量ののポイントは手に入る。

だがそれを重ねれば結構な量のポイントが手に入るわけだ。

「小さな事からコツコツと！そしていずれは、あの三人を超えて——」に！兄ちゃん！

悦に入ってた長男は次男の慌てた声で現実を引き戻される。

「どうした？」

「当たらない！いくら撃つても！早い！」

「なにいい!？」

高速でアイの乗ったAGE2Eストライダー形態は突っ込んでくる。

パラシアテネは撃ちまくるがストライダー形態のスピードに補足しきれない。

AGE2Eは一機のパラシアテネに機種銃『ハイパードツズライフル』をパラシアテネに撃ち込んだ。

高出力のビームがパラシアテネを襲う。

「うーうおお!!！」

慌てたパラシアテネの搭乗者は、機体をシールドで防御する。

ビームはシールドに当たるが、その衝撃は凄まじくパラシアテネの左腕ごとシールドははじけ飛ぶ。

はじけ飛んだといっても内部機構は存在しない。衝撃でパーツが分解しただけだ。

ガンプラはバトル内では20メートル近い巨大なサイズとってはいる。

が、あくまでプラモとして表現されている為、中に機械があるわけではなく空洞だ。

「なんだとお!!！」

割れたパーツと共に衝撃で体勢を崩すパラシアテネ。バーニアをふかし姿勢を整えAGE2Eに向き直る。

見るとAGE2Eは人型に変形し間近に迫っていた。

そして銃身についた剣を振り下ろす。

「うーうわああ!!!」

パラシアテネはあらかじめ右手に持っていたビームサーベルで銃剣を受け止める。

パラシアテネ全長はAGE2Eのひとまわり大きい。しかし相手の方がパワーは上だ。

「な！何だコイツ！外見だけじゃない！パワーも！」

素人じゃない！パラシアテネのパイロットはそう思わざるを得なかった。

ボディの色はコバルトブルーとスカイブルーの分割したような塗装。スプリッター迷彩という奴だ。

両足外側にはガンダムアストレアFの足についていたアタッチメント。銃剣の正体は同じくアストレアのプロトGNソードだ。その上完全にパワー負けしている。

「こんなもの振り回すんだから間接強化位やるでしょ？」

「お！女の声!？」

アイのAGE2Eは腕関節のポリキャップに瞬間接着剤（少量）を使い関節をきつくしていた。

バトルではこれがパワーの向上につながる。

そのままAGE2EはGNソードでビームサーベルごとパラシアテネを叩き斬る。

「何者なんだお前はああ!!」

真つ二つにされ断末魔と共に爆発するパラシアテネ。

だがそのタイミングを見計い、AGE2Eの背後からもう一機のパラシアテネが斬りかかって来た。

「私は……」

「敵は一人じゃないんだよ!」

「ああもう！人が答えようとしてるのに!」

声高らかに叫ぶパラシアテネのパイロット。だがアイはすかさず左手にビームサーベルを取りだす。

手を持ち上げ、後ろを向いたままパラシアテネのビームサーベルを受け止めた。ビーム同士が接触し激しいスパークを起こす。

AGE2Eの頭上が、パラシアテネの顔面が照らされる。

「何い!？」

「でもただのゴリ押しじゃ勝てないよ?」

アイはそう言うと、ハイパードツズライフルの握られた右腕だけを後方のパラシアテネに向ける。

「ヒッ!？」

パラスアテネのパイロットが気づくも遅く、ドン！という音が響く、直後パラスアテネの胸部、コクピットはビームに撃ち抜かれていた。

「強い……二体まとめてあんな簡単に！」

店員が叫ぶ隣で観戦モニターを見ていたナナはアイの操縦するAGE2Eを茫然と見ていた。

「ガンダム……」

観戦モニターを介して聞こえるアイの声は凜として、自信に満ちていて、

それでいて楽しそうで、あまりにも今朝の印象とは違い過ぎた。回りの見ていた子供達も見入っていた。

「ス・スゲエよあの姉ちゃん」

「ある程度やりこんでないと出来ないぞ……」

「戦い慣れてる！」

「何者なの？アンタは……」

「クソオ!!ただじゃおかねえ!!」

弟達の援護をしようとしていたらあつというまに弟達がやられた。ハンブラビの搭乗者が納得できないと言わんばかりに叫ぶ、そして手に持った長大な銃、フェダーインライフルでAGE2Eを狙い撃つた。

「んっ！」

アイはたやすく回避する。が、ハンブラビは急接近、

ライフルの柄から発生させたビームサーベルでAGE2Eに斬りかかる。フェダーインライフルは半回転により遠近に対応できる複合兵装だ。

「折角の稼ぎ時だったんだぞ！それをお前は!!」

「荒らしやってた人間の言う事ですかあっ！」

アイはGNソードの刃でフェダーインライフルを受けながら叫ぶ。

「勝ち目的なら数で押すんじゃないなくて自分で作り込んだらどうなんで

すか!？」

アイが叫びと同時にA G E 2 Eがハンブラビを薙ぎ払う。弾かれたハンブラビは隠し持ってた武器を取り出す。海へびと呼ばれる物だ。

名前の通り蛇の頭のような先端部をワイヤーで撃ち込み電流を流す。テザーガンの様な武器だ。

「初対面が説教垂れんなあ!!」

海へびを放つと先端部はA G E 2 EのGNソードに巻きついた。直後高圧電流がA G E 2 Eを襲う。

「つつつつ!!」

機体には電撃だがGポッドには振動という形で反映されていた。

ただ揺れ方が尋常でない。しばらくして電撃が止むがA G E 2 Eはその場で動きを止めたままだ。

「だがここまで俺達を苦しめたお前だ。いいポイントが稼げそうだな!」

フェダーインライフルを構えるハンブラビ。このままA G E 2 Eを撃ち抜くつもりだ。

「元は取らせてもらうぜー」

「くっ……」

フェダーインライフルからビームが放たれる。だがその瞬間

「なんてねー」

「!？」

全然効いてないといわんばかりにアイが叫ぶと同時にA G E 2 Eの眼が輝く。

そして再びストライダー形態へと変形。ハンブラビめがけ突っ込む。しかし前方にはハンブラビの撃ったビームが迫る。

「よつとー」

アイは速度は変えずA G E 2 Eを横向きだった姿勢から縦向きに変える。機体のすぐ横をビームが掠めた。

「何!？」

「うおおおお!!!」

AGE2Eは最大推力でハンブラビに突撃する。ハンブラビのど真ん中にGNソードが突き刺さり、そして刃が背中から貫通した。

「何故だ！海へビ食らって全然元気じゃないか！」

「さっきの海へビのパーツ切り取り後…バリ（パーツを切り離した部分のでっぱり）がまだ残ってたよ。あれじゃ本来の威力出せないよ！」

AGE2Eは、ハンブラビに銃剣が突き刺さったまま機首を切り離し変形、

刺さったままのハイパードズライフルのトリガーに指をかける。

「もつとも海へビ一発でやられる程柔に作っちゃいけないけど！」

「そ…そんな…！…！百均だけどちゃんとなツパーを使ったのに…！…」

トリガーを弾くとゼロ距離で放たれたビームがハンブラビを撃ち抜く。

「ニツパーは二千円以上がベスト！」

「駄目なのかああっ！！」

胸部に穴の開いたハンブラビは断末魔と共に爆散、これによりバトルはアイの勝利となった。

「何を…！？？」

そして見ていたナナは言ってる内容がさっぱり解らなかった。

「お！おぼえてるよー！！」

Gポッドからアイが出てきた時、荒らしは捨て台詞と共に姿を消していた。

「んん…完勝。幸先いいかな」

バトルの結果に上機嫌だったアイ、そこへたむろしていた子供達が集まる。

店員も喜んでいた。（暗い印象は無くなってたが情けない印象はそのままだった。）

「有難う君！ガリア大陸は救われたよおっ！！」

「凄いやお姉ちゃん！どうやったらあんな強く作れるの!?!」

「有難う姉ちゃん！これで皆でバトル出来る！」

「俺と一緒にお茶しない？」

「わわ！皆ちよつと待って！」

興奮気味の子供たちに戸惑うアイ、しかし一番戸惑っていたのは……

「アイちゃん！」

「あ、ナナちゃん」

ナナまで群がる子供にまぎれながらアイに詰め寄る。

「凄いよ！あんな簡単に三対一で勝っちゃうなんて！」

「いやーまだまだだよ。相手が弱かっただけで」

「でもあのガンダム……だよね？あれもアイちゃんが作ったんでしょ？あれ？モデラーって奴？」

「アハハ、モデラーなんて大層なもんじゃないよ。モデラーじゃなくて……」

——それは……現実の世界にとてもよく似ていて……だけどほんの少しだけ科学の発展した、こことは違う世界のお話……

科学技術の発展は、CGによる仮想空間の中でガンプラ同士を競い戦わせる『ガンプラバトル』が実現していた。

それに参加する者達、作り、戦い、作品に魂を込める者達を人はこう呼んだ……

「模型戦士・ガンプラビルダー」

——2014年1月、その日、山回町に新たな風が吹いた……

第2話 「性別の関係ない物」(ジェノアスキャンノン登場)

「ヤタテさんてき、前の高校ってどんな制服だったの?」

「ブレザーだったよ。前の学校の時はあんまり似合ってないとか言われたけどね」

「じゃあ好きな男性のタイプは?」

「うーん、あいにくまだ明確にそういうのはハッキリしなくて……」

「スリーサイズ教えて!」

「ノーコメント」

アイの席の周りに男女問わず何人もの生徒が集まっている。

ヤタテ・アイが転校してきた次の日、休み時間は転校生恒例ともいえる質問責めの状況となっていた。

転校生が珍しいのか、アイと仲良くなりたいたのか積極的に話しかけてくる。

アイも早くクラスに馴染みたいと思っており積極的に答えていた。

「人気者だねえアイちゃんは」

フジ・タカコが遠巻きにアイを見ながら言った。今タカコはアイの席から一番離れたミヨ・ムツミの席でナナとたむろしていた。

「人気者、になれるかは分からないけど少なくとも嫌われることはないだろうね……」

「最初に会った時のよそよしい感じも取れてきたしね」

「ところでさナナ……、さつき言ってた話、アイちゃんプラモで戦うゲームで凄く強かったんだって……?」

「って事はアイちゃんの作ったプラモも見たわけだよな? やっぱうまくいった?」

そう、今ナナはムツミ達に昨日のアイのガンプラバトルの様子を語って聞かせていた。

「うん。あいにく知識ないアタシじゃプラモの作り方がうまいかは解んなかったけどね。ただ一人で三人を圧倒するんだもん。強いって

のはよく解ったわ」

「ほほう、ていう事は模型部の連中よりうまいのかな?」

模型部、この学校内で聞き慣れない言葉にナナは首を傾げた。

「?この学校に模型部なんてあった?」

「あつたよ?少人数だし男子しかいないけど。前新聞部の取材した時そういうゲームに力入れてるって言ってたから……」

と、その時教室の扉がガラツと開き一人の男子生徒が入ってきた。

「あつ、噂をすればなんとやらつてね、早速模型部の奴が来たよ」

短髪で額が広い少年だ。

「へえ、別のクラスの奴なんだ」

「ん、確か名前はヤマモト・コウヤ」

タカコがデジカメに保存してある写真を見せながら言った。

写真には数人の男が並んでおりヤマモト・コウヤと呼ばれた少年も写っている。

「なあなあ、ガンプラバトルがすつごいうまい転校生がいるつて聞いたけどもしかしてそこにいんの?」

人だかりを確認するや否やとりあえず聞いてみるコウヤと呼ばれた少年。

「転校生……は私だけど」

アイは席から立ち上がる。

「お前?えーなんだよ女かよ」

アイの顔を見るや否や第一声がそれだった。「え?」と動揺するアイ。

「ガリア大陸でハセベさんが『凄く強いうちの制服着たビルダーが引越してきた』って聞いたけど女じゃん。本当にガンプラやんの?」

ムツとするアイ。あつけらかんとした顔で言う辺り悪気はないのだろう。が、反面遠慮もない。

「なんか引つかかる言い方だよ。それにハセベさんつて誰?」

「ガリア大陸の店員の名前だよ。丸眼鏡のおっさん。ハセベ・シロウね」

丸眼鏡、という部分でアイは思い出した。あの暗いムードの人か。と

「あああの人。でも私が女って事とガンブラやるかってどういう関係があるの？」

「だってそうだろ？女がガンダム好きになるって大概美形キャラ目当てだぜ。かっこいい機体が活躍するよりかっこいいイケメンが活躍する方が嬉しいがる。」

メカの良さを理解しない女にガンブラを本気で作るわけないだろ」とんだ偏見だ。世間じゃそういう偏見はあるっちゃあるがアイにはそう思われるのは嫌だった。

だがアイ同様に嫌な気分になった人物が彼に食ってかかった。

「ちよつと、よそのクラスから入ってきていきなりそう言うってどんな神経してんのよ。そんな事言う為にわざわざこつち来たわけ？」

ナナだった。昨日のバトル中のアイの様子を見ていたナナはアイがそう言われるのが我慢出来なかった。

他のクラスメイトもそういう挑発的な言い方ってどうなの？と言う。う。

「んにゃ、そうじゃないよ。要点だけかいつまんで言うならその……誰だっけ？」

「ヤタテ・アイだよ」

「ヤタテとガンブラバトルがしたいなって思ってたさ」

「アイ、どうすんのよ？」

ナナの問いにアイは答える。

「言い方自体は釈然としないけど、バトルならいいよ。まだこつちでちゃんとしたビルダーと戦ってないからね」

「マジで!?!よっしゃ受けたぜ!じゃ俺は戻るから、バイビー!」

「ってちよつと待ちなさいよ!アンタ他という事あるでしょ!」

ナナが止めるもコウヤはそのまま自分のクラスへと戻って行った。周囲はコウヤの行動に呆れるばかりだった。

……

「つたく失礼な奴だったわね。あのデコっぱち」

「絶対彼女出来ないねああいうタイプ……」

教室にナナの声が響く、昼休み、タカコ、ムツミ、ナナの三人は弁当をいつも自分の机を合わせて食べる。

今日からアイも一緒に食べようと言う事で誘われたのだ。買ってきたもの、親に作ってもらったもの、自分で作って来たものと様々な弁当が並ぶ。

「でもちよつと意外だったな。ナナちゃんがあんたの状況で怒るなんて」

「なーに言ってるの、友達なんだから当然でしょ？」

「でも嬉しかったよ。ありがとうナナちゃん」

「でもさあ、アイちゃんもああ言われて怒らなかったよね。よく平気だったね？」

アイがコウヤの発言に対して反応してなかったのがタカコは気になった。

「……平気なわけないよ。そういうの言われたらそりや私だって傷付くよ。今時ガンプラやってる女の子って別段珍しくないのに」

もぞもぞとコンビニのサンドイッチを食べながらアイは呟く。

「そういうえば昨日、プラモ屋じゃ女の子もちらほらいたわね」

「世の中色んな人がいるからね。そういう偏見持ちもいるって事なんだろうね」

「模型で一番とっつきやすいからね。女でガンプラやるのって変じゃないって自分では思ってるけど……」

偏見とか聞き流そうとはしても、なんか引っ掛っちゃうときってあるんだよね……」

ポツリとアイは愚痴を吐く。反応を期待したわけではないがいつか出てしまう。

「少なくともボク達は変だとは思わないよ……」

「ムツミちゃん？」

ムツミが反応をするのはその場にいた全員が意外に感じた。ムツミは表情を変えずに話し出す。

「昔、ボクは小学生の時、よく男子と混ざって野球やサッカーをやっていた……。性別なんて関係なしにね……」。

でも高学年になるにつれて周りは同性とどんどんつるむ様になってきた。『女の体力じゃ男の足手まとい、女とつるむなんて変だ。』とか言われてね……」

アイの不満を自分に重ねたのだろう。ムツミの口調は真剣だった。「変じゃない。ボクはそう男子に知らしめたくて一時期男子と一緒にいるのに拘ってただけ」

最終的にボクと遊ぶ男子はいなくなって孤立してしまった……。結局ボクも女子同士でつるむ様になってしまった……」

思い出してるのかムツミの顔はほんのちよっぴり悔しそうだ。

「もう今となつては男女一緒に運動で競う事も出来ないけどね。スポーツだとしても男女の差つてのはあるし。」

でもさ、ガンプラつていうのはそういう性別での差とかがない世界なんでしょ……？遊びか真剣かまでは知らない。

でもそういう平等なのはボクは凄く素敵だと思うよ……。変じゃない。変だつて言う奴がいたら実力で知らしめてやればいい」

「ムツミちゃん……ありがとう！」

「月並みな言い方だけど、思い知らせてあげなよ……あの模型部員にアイちゃんの実力を……」

「うん！」
胸がスツとした。他人にそう言ってもらえると凄く気持ちが楽になる。

「ムツミがそんなに長く喋るなんて……」

「言つとくけどボクは無口系じゃないよ？」

……

そして放課後、山回商店街の模型店『ガリア大陸』にアイ達はバトルの為立ち寄る。

店の二階、ガンプラバトルの出来るスペースにアイ以外の三人はいた。

「でもよかったの？タカコもムツミも部活あったんじゃ」

「大丈夫、理由つけて休んできたから……、しばらくは大会もないし対して問題ないよ……」

「そうそう、それにアイちゃんの晴れ姿だよ〜？バッチリ撮っておか
なきや〜」

タカコがデジカメを目の前に持っていき撮る動作を取る。と、アイ
が奥の女子更衣室から出てきた。

「お待たせー！」

「あ、出てきた」

「おーあの格好は」

アイの服装は学校のセーラー服からパイロットスーツに変わって
いた。いや、デザイン的にはレーシングスーツと言った方が近いか。
それも安物の。

体は白、手足は藍色、胸と肩にはオレンジ色のラインが走っており
左胸には『GP』と描かれていた。実際はこれにヘルメットを着用し
てバトルに望む。

「前使ってた色と同じ奴探してたけど、あつて良かったよ」

「おーカッコイイ、レーザーみたい」

「まああくまで気分出す為のものなんだけどね」

「お、準備万端ってわけ？」

と、今到着したのかコウヤが話しかけてきた。来たばかりの為格好
は学ランのままだ。

「こっちはね、いつでもいいよ」

アイは気合十分とばかりに答える。

「まあ慌てんなって。こっちも着替えてくるからさ、運か実力かはわ
かんないけど、荒らし撃退した奴と対戦一番乗りだ。腕が鳴るぜい」

反面コウヤはのんびりと更衣室に消えた。

「なんか調子狂うな……」

「大丈夫だよアイ、ファイト！」

そして暫くしてコウヤがパイロットスーツに着替えた後、お互いが
Gポッドに入る。

「行くよ。AGE2E」

Gポッド内、パーソナルデータの入ったカード、ビルダースカード

を目の前のスリットに挿入。

そしてスキヤナーにガンプラを入れる。ガンプラバトルは自分のガンプラをスキヤンする事から始まる。

読みこまれたガンプラは仮想空間の戦場に十数メートルの巨大兵器として降り立つ。

ガンダムシリーズの作品を超えた異種格闘技ともいべきバトル。それが最先端ホビー、ガンプラバトルだ。

『今回のステージはニューヤーク市街地です』

Gポッドの壁がスクリーンに変換、格納庫が表示されると共にステージ名が表示される。

ステージは『ニューヤーク市街』、機動戦士ガンダムにおいて敵総帥の弟『ガルマ・ザビ』の戦死した物語の節目とも言うべき場所だ。

『ゲームをスタートします。戦果を期待します』

「ヤタテ・アイ！ガンダムAGGE2E！出ます！」

音声アナウンスとアイの掛け声と共にアイのガンダムAGGE2Eはカタパルトで出撃する。

出撃のGを体を受けながらも昨日以上の高揚感を感じていた。

やはりパイロットスーツを着ていると操縦しているという意識が高まる。

半壊した雨天野球場、その中に隠してあったホワイトベースからAGGE2Eは飛び出す。

今回のAGGE2Eは両足のアタッチメントに追加装備を施していた。左足はGNハンマー、右足はGNピストル。

どちらもHGガンダムアストレアタイプFに付属していた武器だ。戦争で占領下にあった街、という設定だけあって辺り一面は廃墟だ。そして空は曇りの夜、雰囲気にも視界的にも暗いステージだ。

「隠れるにはもってこいのステージだろうけど……。こっちも早く身を隠した方が……」

高度を滑空をしながらそう考える。と、その時だった。いきなりアイのGポッドに警報が鳴り響く。

攻撃による警告だった。

「いきなり!?!」

突然左前方の朽ちた高層ビル、その中から大型のビームが飛んできた。それもキャノン並の出力のものだ。

「そこから!?!」

予想外の場所だ。咄嗟に回避行動をとるアイの目の前をいきなりビームが通り過ぎる。

「あっ!」

機体は無事だったもののハイパードツズライフルを損傷、破壊されてしまう。

「AGE2か! アイだけにIガンダムでも使うかと思っていたぜ!」

コウヤの声だ。ビームによって穴が明けられた高層ビルの中から潜んでいたガンプラが現れる。

四角い体躯に頭部中央からは一本の角が出ており顔の部分は十字型のゴーグルで覆われていた機体。それがコウヤの機体だった。

「ジェノアスカスタム!?!それも改造タイプ!?!」

アイが叫ぶ。……ジェノアス、ガンダムAGEに登場する機体であり、世代ごとに姿を変えてきたガンダムAGEの顔とも言うべき量産機だ。

『特長のないのが特徴』ならぬ『特徴がないのが特徴』と言わんばかりの外見と素の能力の低さからかそのまま使う人はあまりいない。

が、この機体の真の能力はその改造のし易さにある。簡素なデザインだけに改造が非常にしやすいのだ。

それによりガンダム系とも互角以上に戦える機体にする事も可能だ。

その機体は高層ビルの階層を複数破った状態で立っていた。

「偉い人は言ってた! 『ジェノアスは本編じゃどんなに頑張って改造しても、工夫しても、

一度もUE（別名ヴェイガン、AGEの敵）に勝ってないという現実
実に打ちのめされる』って!

しかしそれが覆せるのがガンプラバトル！改造や腕前次第でガンダムだろうがヴェイガンだろうが叩きのめせるのさー！」

デイープグリーンを基調としたパイロットスーツを着たコウヤが言う。機体はジェノアスカスタムという設定上の改造機を更に改造したオリジナル機体だ。

カラーリングはコウヤに合せたようにデイープグリーンで塗装、背中と腕がガンダム7号機の物に換装されており更に両手にライフルを装備、

元のジェノアスよりかなり攻撃的に見える。

「偉い人って誰?!」

「勝てるかな?!俺のオリジナル！ジェノアスカノンに！」

「聞いてよ人の話！」

アイの言葉お構いなしにジェノアスカノンは両手の銃で滑空中のAGE2E目掛けて撃ちまくる。

「うわっとー！」

両肩のスラスターとシールドを使い凌ぐアイ。

「このー！」

負けじとアイもAGE2Eの左足のアタッチメントからGNハンマーを取り出す。(要はワイヤー付のトゲ付き鉄球と考えて頂きたい)

ジェノアスカノンの立っているビル目掛けて打ち出した。

「来るかー！」

シールドを構えハンマーに備えるコウヤ、だがGNハンマーはジェノアスカノンにはぶつからずその足場にぶつかり床を破壊する。

「あり!?届かなかった?!凡ミスか!？」

「それはどうかない!？」

拍子抜けするコウヤにアイが余裕ありげに答えた。すると直後、ジェノアスカノンの立っている階層が崩れ出した。

「なっー！」

突然の事に意表をつかれたジェノアスカノン、そのまま連鎖的に崩れるビルの外に滑り台の様に滑り落ちる。

そしてガレキの地面にうつぶせの状態で倒れ込んだ。

「あ！味な真似を……」

「人間のビルにモビルスーツが立ってるんだもの。足場を少し崩せばこうなるよ」

AGE2Eもある程度距離を置いたところで降り立つ。

「じゃあこれならどうだよ!？」

コウヤはうつ伏せの状態のままジェノアスカヤノンの右肩のビームキャノンを展開、AGE2Eを狙う。

「!」

「吹き飛ばせ!」

放たれるビームキャノン、不意打ちだった為アイは回避を試みるが完全にかわし切れず右肩を掠めてしまう。

「つつ!」

吹き飛ばす二枚のウィングとアーマー。右腕自体は無事だった物のAGE2E本体も後方に吹っ飛ばされ、衝撃で倒れ込んでしまう。

「うわっ!」

ジェノアスカヤノンのビームは後方の高層ビルに大穴を開ける。倒れたAGE2Eをなおも狙うジェノアスカヤノン。

アイはこの状況を打開しようと右足のホルスターからGNピストルを取り出そうとする。が……

ゴゴゴ……と突如地響きが響く

『何（なんだ）？……ツツ!!』

直後に地響きの正体を二人は見た。ジェノアスカヤノンの撃ったビルがこちらに倒れ込んで来たのだ。

「うおーこりゃラッキー!!楽しんで勝てそうだぜ!」

巻き込まれまいと早々に起き上がり退避するコウヤのジェノアスカヤノン、ビルの倒壊場所には丁度AGE2Eがいた。

尻もちをついたままの体勢では避けられない。アイの目の前にビルが迫る。

「!!」

そしてビルはAGE2Eを巻き込み倒壊、大爆発を起こした。

……

「うわーアイちゃん負けちゃったの!？」

観戦モニターを見る数人のギャラリー、それに混じって見ていたナ
ナ達、タカコが慌てながらアイを心配する。

だがムツミは動じずじっとモニターを見続けた。

「大丈夫……アイちゃんはきつと……」

「どうやら俺の勝ちみたいだな」

火の海となった目の前を見ながらも勝敗は決まったと確信する
コウヤ。だが……

「とんでもない!!」

「!？」

アイの声が出た直後、コウヤの目の前に球状の物体が飛んできた。

「うーうわー」

慌ててシールドを構えるジェノアスキャノン。だが球状の物体の
衝撃は凄まじく防御したシールドは砕けちる。

勢い余ってジェノアスキャノンは後方に倒れ込む。直後、炎を突き
破ってAGE2Eが飛び出してきた。

両手にはハイパードッズライフルではない別の武器が握られてい
た。

「AGE2!?!どうして!ビルの倒壊に巻き込まれたんじゃないのか
!?!」

「やっきと同じー!」

アイが見せつける様に左手に持ったトゲ付き鉄球を見せる。先程
使用したGNハンマーだ。更に今は右手にGNピストルを構えてい
る。

「それは!そうか!さっきのビルもそれで自分の所だけ砕いたのか
!!」

「ご名答!」

そう、GNハンマーといえどビル全部を破壊するのはさすがに不可能だ。アイはビルの自分に倒れ込む場所だけを狙いGNハンマーで破壊、やり過ぎしたというわけだ。

「だからって負けたわけじゃない！」

コウヤのジェノアスキャノンはAGE2Eを迎撃すべく、両手の銃を連射させる。

「させない!!」

が、アイはかわしながら右手のGNピストルをジェノアスキャノンのライフルめがけて連射。

ジェノアスキャノンの両手のライフルはビームを受けて爆散。右肩を損傷しているにも関わらずAGE2Eの反応は早い。

「な！なんだって！」

続けてアイはGNピストルをしまい、AGE2Eの尻にマウントされたビームサーベルを右手に持ち替える。

一気にブーストをかけてジェノアスキャノンへダッシュをかけた。

「追加武装といい動きといい！素人の動きじゃあない！」

「そりやそうだよ！だって私が本気で作ったガンプラだからね！」

アイが自信に満ちた声を上げる。

ガレキの地面を走るAGE2Eを落とそうとジェノアスキャノンは肩部のビームキャノンを撃つ。

だがAGE2Eは軽く横へ回避、そのまま距離をつめビームサーベルを振り上げるAGE2E。ジェノアスキャノンもビームサーベルでそれを受け止めた。スパークが起こった。

「本気なら俺だって！女のお前に！女のお前に……」

コウヤの声が次第にどもる。自分が言っていた『女だから』、それが間違いだと言う事を今見せつけられているからだ。

「確かに私は女だよ！でもね！その前に！」

ビームサーベルで競り勝ったAGE2Eがジェノアスキャノンのビームサーベルをはねのける。

その際にジェノアスキャノンは大きくよろけた。

「今ここにいる分には！私はガンプラビルダー！ヤタテ・アイ！」

その隙をつき、アイはジェノアスキャノンを腹部から横一文字に切り裂く。

「お！俺のオリジナル！ジェノアスキャノンがああつ！」

「あー……後言つとくけどジェノアスキャノンってA G E公式であるよ」

「え？……マジで？」

「マジだよ。小説版だけど」

「なん……だって!?ウソオオっつ!!!」

間違いを指摘された叫びに答える様に改造ジェノアスは爆発した。これによりバトルはアイの勝利で幕を閉じた。

「次からは『ガンナージェノアス』にしよ……」

Gポッドから出てくるコウヤ

「あ……」

直後彼は固まる。目の前にアイが立っていた。

「いい戦いが出来たと思うよ。やっぱバトルはこれ位やらないと」

「あ、うん……悪かったよ。女がなんて無神経な事をいつて……」

気まずそうに謝るコウヤ、負けた事と今さらになってアイに言った事に罪悪感が出て来たらしい。

「今となっては気にしてないから大丈夫。必死にバトルしてたら全部吹き飛んじやった。それよりさ……」

ニツと笑うアイが右手を差し出す。握手しようというのだ。

「こういう時はこうするのが礼儀でしょ？気分よくバトル出来たし、せっかく同じ学校のビルダーなんだしさ」

「え?!あー」

女の子と握手をする。慣れない事にコウヤは赤面しながら慌てて自分の手を拭うが、お互いパイロットスーツで手が覆われてる事にコウヤは気付いた。

「うん……」

渋々とコウヤは手を出す。

「またバトルしようよ」

「……ああ！」

握手をする二人、カシヤツとタカコはその握手のシーンを写真に収めた。

「凄い凄い！もおバツチグくだよお！」

タカコが叫ぶ。観戦モニターでアイの闘いを見ていた他の二人もガン普拉バトルをスポーツの試合の様に見ていた。

そしてアイの勝利を嬉しく思っていた。

「やっぱり変じやないよ……アイちゃん。好きな事に打ち込む姿、格好良かった……」

「あれがアイの真の姿なのかもね……熱中出来る位好きな事、か。羨ましいな」

しかし、その握手とバトルを見ていたギャラリーの中に目を光らせる大男がいることにまだアイは気付いてなかった

——あの子が新しく引越してきたガン普拉ビルダーか……これは面白いバトルが出来そうだ——

第3話 「青い剣豪」 (ゼク・アイン斬撃兵装登場)

「うーん……困ったなあ……」

深夜、未だ煌煌と明かりのつく部屋、そこにいたのはパジャマ姿のアイ。

ここはアイの自室だ。

「改造しようとしたけど、どうもいい案が浮かばない……」

机の上の仮組みしたガンプラを眺めながら呟いた。HGのAGE 2ダブルバレットだ。

どういう形にするか寝る前にちよつと考えようとしたらそこで壁に当たってしまい、時間だけがズルズル過ぎてしまったわけだ。

「いつそ変形無視した方がいいかなあ、でもAGE 2だから変形するに越したことはないし……なんか別のロボット参考にするとか？」

ポリポリと頭を掻きながら時計を見た。もう午前1時を回っており日付も変わっていた。ふいに『ふああ……』と欠伸が出る。

「そろそろ寝ないとマズイよね……しようがない、今日はここまでにして……」

そのままもそもそとベッドの中に入り目を閉じる。すぐに眠れるだろう。とアイは思っていたが……

「……眠れない」

寝る前に頭を余計に使った所為かアイの脳は覚醒しきっていた。

……翌日

授業中、生徒達が教師の話を中心に聞く中、アイは一人机に突っ伏し寝息を立てて寝ていた。

「ぐく……貴様は電子レンジに入れられたダイナマイトだあ……」

……ちよつとアレな寝言付きで

「ちよつとアイ……！授業中だよ……！」

真後ろの席、ナナはアイを起こそうとゆする。しかし教師はアイの席まで近づき、アイの頭を丸めた教科書で思いつきりひっぱたいた。

「あいた!!」

アイはあわてて飛び起きた。

「ヤタテ！授業中に堂々と寝言言いながら寝るな！」

「うわあ！ごめんなさい！」

「ヤタテさん。口よだれついてる……」

「え!?ウソォ！」

隣の生徒の指摘に恥ずかしそうに必死に口元を拭うアイ、どつとクラスに笑いが起こる。

「なんか、ガン普拉バトルではあれだけ格好良かったのが想像つかないよねえ……」

ナナはボソツと苦笑しながらつぶやいた。

……

「災難だったわねアイ、結構ハデに叩かれてたけど大丈夫？」

昼休み、いつもの様にタカコとムツミ、そしてナナの四人で弁当を食べるアイ。

アイが引越してきてから一週間。もうクラスにも馴染むことが出来た。

「ありがとう。教科書だったからコブにはなっていないよ」

アイは自分の頭をなでながら確認する。

「寝不足みたいだけど大丈夫？眼の下にクマあって写真写り悪そうだよ」

「遅くまでガン普拉作ってたの……?」

「うん、本当は程々にしとくつもりだったんだけど長引いちやつて」

「そんなになるまで?時間かかるのガン普拉って」

「まあね、人によってマチマチだけど。私の場合は一週間から二週間位かな?」

「え?そんなに!?!」

ナナが驚く、十数センチしかないガン普拉だ。サイズが小さい為もっと簡単に出来ると思っていたのだ。

「時間かかる人はもっとかかるけどね。中には半年や一年がザラだっ

「て人もいるし」

「うひゝ、それだけ時間かかるなんて……アンタもうまいんでしょうけどそれ位時間かかる人ってどんな出来になるんだか……」

「私なんてまだまだだよ。本当にうまい人はもう、うまい通り越してリアル錬金術だもん」

「……錬金術……?」

「どんな例えよ」

「まあ言わんとしてる事は解んなくもないけど」

三人が顔を見合わせながら言う。

「でもさ、ガン普拉批判するわけじゃないけど、そんな風に生活に支障出てきたりするんじゃないかとマズインじゃないの?」

「う……!痛い所を……でも好きだからついこのめり込んじゃうんだよね。やっぱ今作ってるのもバトル出すから妥協したくないって言うか」

「本当、好きな事は凄い突き進むよね……」

「あいにく勉強と両立は出来てないけどね……」

自虐的にアイは笑う。この一週間、ナナ達はアイと過ごしてきたアイという人間を分かってきた。

ガン普拉がうまい反面勉強とスポーツは全然ダメだった。

「アンタ典型的な一度に二つのことが出来ないタイプだよ、集中したら凄いけど」

「じゃあさ、他人に作らせたらいんじゃない?」

「え?」

そう発言したのはタカコだ。驚くアイ

「作ってあげる専門の店とかあるって聞いたよ?専門職だったら出来も凄いだろうし、

バトルで使えばアイちゃんももつともつと強くなれるんじゃない?」

「へえ?そういうのあるんだ」

「いやそれは……」

「他人に作らせたガン普拉ね……ボク個人としてはあまり賛同できな

いけど……」

ムツミがペットボトルのお茶を飲みながら反対する。

「えくなんで」

「自分で作ったガンプラを戦わせるわけだから、そういうのって自分で作ってナンボなんじゃないの……？」

「基本的にはムツミちゃんの言う通りなんだけども」

食べかけのパンを持ちながらアイが答える。

「その辺結構複雑なんだよね。自分で作る分には時間も道具も必要なわけだし、

自分一人で楽しむ分には作らせるのもアリなんだろうけど、それでバトルするとなるとね」

他人に作らせたガンプラを使う、ガンプラバトルでは一種のタブーと言われている所もある。反面そう思わないビルダーもいる為その辺の良い悪いは曖昧だった。

「じゃあやっぱり人に作らせたのに乗るのって悪い事になるのかな？」

「うーん、実は私もよく解らないんだ。自分で作った方が思いつくアイデアもあるし愛着が沸き易いのも事実なんだけどね。」

作りたくても作れない人もいるし」

「ま、確かに他人のガンプラ乗ってデカイ顔してる様じゃよく思わない人間もいるでしょうしね」

「でも実際やるんだったら愛着とかは持ちたいよね……」

そして放課後、何か改造に使えるネタが欲しいから、とプラモ屋『ガリア大陸』に来たアイとナナ、

今の時間帯は下校の学生達で賑わっている時間だ。アイ達以外にも何人もの学生や仕事帰りの社会人らがいた。

「何か安く使えそうな奴はないかなつと……」

「改めて思うけど、本当種類多いわね」

ガンプラの棚の前に立つ二人。プラモに興味を持ってなかったナナは想像以上の種類に驚いていた。箱の大きさも物によって全然違

う。

「同じガンダムのガンプラでもサイズ自体違うのもあるし、同じスケールでも元になった作品によっては大ききバラバラだからね」

「なるほど、で、今日は何買うの？」

「ん〜まだなんとも……」

そもそもどういう改造にするかも決めてなかった。これでは何を買うかすらも決められない。

「あ！見つけたぜ！」

その時だった。アイ達の前に三人の太った青年が現れる。三人とも眼が細く首が太い、なんだか太った猫を思わせる外見だ。

「こいつらだ兄ちゃん！こないだはよくもやってくれたな！」

「……誰？」

「んな？！」

ナナに存在を忘れられた事にショックを受ける三人、

「待ってナナちゃん、この声、こないだの荒らしじゃない？」

「あああの時の、声だけはデカかったけど転校初日のアイにボコられた大人げない三人」

「大人げないって言うな！」

「そうムキになるのが大人げないつつつてんのよ。で、今日来たのは何？いちやもんでもつけに来たの？」

「いちやもんじやない。今日はリベンジとして再戦を申込みに来たんだよ」

三人の内、兄ちゃんと呼ばれた男、(恐らく長男だろう)がアイに指を指す。

「そうだ！あんな簡単にやられっぱなしは性にあわない！」

「そう言ってもまた三対一なんじやないの？」

「悪いけどそうだよ」

「アンタ達、んな堂々と……」

悪びれた様子もなく言う長男にナナは呆れる。

「ただしこちらは自分の腕はわきまえた上で言ってるんだ。リベンジとは言ったがこっちとしては記念にさえなればいい。」

かわりにこっちは正々堂々と戦う。受けてくれるか？」

「……どうすんのよ。アイ」

「うーん、とりあえず正々堂々とやるって言うんだったら断る理由にはならないけど……」

「ちよつとアイ。それ安請け合いしすぎじゃないの？」

三人の実力はアイもナナも知っていた。だが相手は荒らしをしていた人間。何をするか分ったもんじゃない。

「まあそうなたらそうなたで、別にいいよ」

「本当か!? サンキュー! 俺たちの名前は『ケイ』三兄弟! 上から名前はマツオ、タケオ、ウメオだ!」

アイは警戒しつつも承諾、ナナはなんか怪しいなあ。と疑うような目だった。

そんな5人のやりとりを途中から見ていた男がいた。

「ふむ、先を越されたか……」

そしてガン普拉バトルが始まる。転校初日に故障していたGポッドはもう全て修理されていた。

バトルステージはタクラマカン砂漠。地平線の果てまで砂だらけ、まばらながらも岩地が見える。

AGE2Eで飛行していたアイは、少し離れた場所に一人の敵がいることにすぐに気が付いた。

見通しがいいのがこういったステージの長所だ。そこに居たのは長男、マツオが乗ったオーカー色の機体、ジ・Oだ。

胴体は胸と腹部が一体化しており腰には化粧廻しの様なアーマー、対照的にとんがった小さな頭。

そのフォルムは相撲取りを思わせる体型をした機体だった。

「デカイわね、カ士みたい」

観戦モニターを見ていたナナがジ・Oのサイズに驚く。ジ・OはZガンダムのラスボスだ。身長だけでなく横のポリウムも非常にある。

隠し腕が腰に隠されてるなどギミックも豊富だ。

更にマツオのジ・〇には改造が施されてるらしく、ビームライフルを両手に持っていた。

うち左手のライフルにはチューブが繋がれており、わき腹に接続されていた。

「前は素組の為ボロ負けしたが、今度はプロショップで作らせた一品だ！負けないぞ！」

「プロショップで!?!」

「は？プロショップ？何それ」

驚くアイ、聞き慣れない単語に首を傾げるナナ。

「依頼で人のプラモを作ってあげる店の事だ」

そこへ一人の男が現れ、ナナに教える。

「……誰よオッサン」

「いやオッサンって……」

反応に困る男、かなりの大柄だ。身長は180cm半ば、社会人なのかスーツを着ているが相当鍛えているのだろう。

スーツ越しでも筋肉量が分かる。反面顔つきは穏やかそうな印象があった。

「……って、今プラモを作ってあげる店って言った?……汚っ！アイツらそれであんなドヤ顔で勝負仕掛けたわけ!?!最低!!」

「まあ落ち着け、ただ出来が良ければ強いというわけじゃない」

ナナが騒ぐ横で男はジツと観戦用のモニターを見ていた。

——何？このオッサン……——

「はああっ!!」

GNソードで斬りかかるアイ。ジ・〇は腰の隠し腕に握られたビームサーベルでそれを捌く。

マツオのジ・〇も隠し腕の二刀流で斬りかかる。

が、アイもまた空いてる左手にビームサーベルを持ち銃剣と剣の二刀流で対処していた。

罅迫り合いになる二機。

「チッ！やるじゃないか！」

「こつちだつてガンプラ完成度は劣っていても負ける気なんてない！」

「そうかよー！」

ジ・Oは右手のライフルで鏝迫り合いのAGE2Eを狙い撃とうとする。隠し腕がある分ジ・Oはこういう利点があった。

「チツ！」

アイは気付くとジ・Oに蹴りを入れる。蹴りは腹部に綺麗に入りよろめくジ・O。

「うおっ！」

すぐさま離れるアイのAGE2E。

「チツ！ちよこぎいなー！」

「兄ちゃん！こつちは準備出来たぜ！」

「お！」

その時だった。ジ・Oに通信が入る。マツオの弟のタケオだ。

「ふ、そうか！今行くぜ！」

そう言うとジ・OはクルツとAGE2Eに背を向け走り出す。（といてもホバーだが）

「どっこへ!？」

ハイパードツズライフルをジ・Oに撃とうとするアイ、だがジ・Oは素早く近くの岩場に逃げ込む。

「隠れたつてー！」

アイが岩場を撃とうとすると、ジ・Oの逃げた方向から幾つもの針状の小型ミサイルが飛んできた。

「!？」

ジ・Oにはミサイルが装備されていないのに！そうアイは思い飛んでくるミサイルにハイパードツズライフルを撃つ。

ドツズライフルの大型ビームはミサイルを巻き込み爆発させた。恐らく複数の機体がいるのだろう。

何度かミサイルを撃ち落としていると攻撃が止んだ。

と、同時にまたジ・Oの姿が見えた。今度はかなり遠くだ。

「あんなところへ？なら追いかける！」

ハイパードツズライフルでは射抜けない距離だとアイは判断、
AGE2Eをストライダー形態へと変形させるとジ・O達の前に回
り込もうと飛び立つ。

……

「なんだ、プロが作ったものだからどれだけ強いかと思っただけ普通にアイが押ししてるじゃん。」

「向うも何か考えてるみたいだけど大丈夫かもね」

「観戦していたナナが安堵の表情を浮かべる。だが横にいた先程の大男は厳しい表情だ。」

「いや、向こうが逃げ腰になるのが簡単すぎる。僚機も見えない所を見ると何か嫌な予感がする」

「……どういう事？オツサン」

「だからオツサンじゃないよ……」

AGE2Eは高速で先回りし、ジ・O達を頭上から狙い撃とうと前に躍り出る。

「覚悟！」

「が、その瞬間突然AGE2Eの周囲が爆発した。」

「うわぁー！」

「ひるむアイ、その隙について針状のミサイルが撃ち込まれる。」

「なっ！一体……どうして!?!」

「攻撃を受けつつもアイは周囲を見る。丸い物に棒状の物が四方向突き出してる小型の物体。」

「それが周囲にいくつも浮かんでる。浮遊機雷、ハイドポンプだ。」

「ミサイルを撃ち込まれた際にAGE2Eはバランスを崩し墜落しそうになる。」

「クッ……そのまま落ちるわけには！」

「変形し人型になって片膝をついた体勢で着地、その時だった。」

「ビシヤッ！」

「!?!」

「何か液体がAGE2Eにかかる、それも何度も全身に、Gポッドの」

モニターも雨が降ったようにずぶ濡れになってしまった。

「何これ!? 何がかかっているの?!」

「直にわかるぜ!」

撃ってきたのはジ・Oだ。液体はチューブに繋がれた方のビームライフルから発射されている。

「何をしたかは知らないけど! ビームじゃないならこれ位!」

対して気にもせずGNソードで斬りかかろうとするアイ、

「そうかな? 自分の塗装を見てみな?」

「!?」

体を動かした際に見えた自機の腕とハイパードツズライフルに驚愕する。

「な! 何これ!?!」

関節のグレーと腕のコバルトブルーが滲んできてる。塗装した塗料が溶けてきているのだ。徐々に下地の色が見えてくる。

「効果が出て来たな!」

「塗料が溶ける!?! まさかこれって……」

「そう! 塗料薄め液、模型用シンナーだ!」

全身の塗装が滲んでくる。AGE2Eのステータス『塗装/印字精度』のパラメータが一気に下がった。

「クツ! それでも一気に決めれば!」

「させるかよ!」

ハイパードツズライフルでジ・Oを撃とうとするアイ、

だが正面から針状のミサイルが再び飛んできた。

正面に甲冑のような機体、ギャンが二機並び、丸い盾からミサイルを撃っているのが見えた。

あれがマツオの弟、タケオとウメオの機体なのだろう。

「真正面から!?! そんなバレーバレーの攻撃で!」

回避運動を取ろうとするアイ、だがAGE2Eが反応しない。

「う! 動かない?! なんで!」

驚愕すると同時にミサイルの爆発に巻き込まれ吹っ飛ぶアイとAGE2E。

「うあつ！」

アイはこの状況が理解出来ずにいた。

「そんな！どうして!？」

「自分の間接を見てみな」

「え!？」

マツオの言葉にアイはAGE2Eの関節を見て驚いた。溶けた塗料が関節の隙間に入り込みそのまま固まっていたのだ。

「砂漠設定だったからな。高い外気温であつというまに固まったつてわけよ。」

俺が時間を稼ぎ、タケオとウメオがばらまいたハイドポンプのテリトリーに誘い込む。

そしてシンナーで動きを封じる。面白いくらいに引つかかってくれたなあ！」

爽快と言わんばかりに言うマツオに、アイは怒りが湧いてくる。

「このっ！」

ハイパードツズライフルをジ・Oに向けようとする。が、間接が固まってしまつてるので動かない。

「動いて！」

無理に動かそうと力を無理やり込める。が、次の瞬間、

バキッ！

「あー！」

無理な負荷に耐えきれずAGE2Eの右腕のひじ関節が折れてしまった。そのまま右腕が落ちる。

「自分で自分のガンプラを壊す！傑作だな！」

「クッ！正々堂々と勝負するって言ったのに！」

「オイオイ何言つてんだ？これだつて正々堂々だぜ？」

「何を！」

「だつてそうだろう？ガンプラビルダーつてのは自分のガンプラの實力を活かすもんだ。」

これだつてガンプラの實力を活かした戦い、正々堂々だ」

「こんな風に相手の動きを封じるのが正々堂々!？」

「分かってねーな」

ビームサーベルを構え近づくとジ・O。

「ガンプラバトルってのは相手のガンプラを壊せばいいんだぜ? どう壊れようが同じだろうが」

「あくもう! どうすんのよこれ! だから安請け合いだつて言ったのにいい!」

ナナがアイの絶体絶命の状況に叫ぶ。と、その時だった。突如観戦モニターに『挑戦者が乱入しました!』と表示された。誰かがアイのガンプラバトルに乱入したのだ。

「挑戦者? どういう事よオッサ……あれ? いない?」

アイの側にも乱入者のアナウンスは流れた。

「乱入?」

「そこまでだ!」

一機のガンプラが凄い勢いで砂塵を巻き上げながら突っ込んでくる。青いカラーリングとずんぐりしたボディ、

ガンダムセンチネルに登場したモビルスーツ、ゼク・アインだ。

右手には1/100アストレイのビームライフル。また腰にも1/100アストレイの日本刀『ガーベラストレート』

元々ミリタリー色の強いゼク・アインだが元々の印象からかなり離れた改造だ。

「ゼク?! 一体誰が?」

「あ! あいつは!」

驚きの声をあげるマツオ。そんなマツオめがけてゼク・アインはビームライフルをジ・O目掛けて撃ってきた。

すんでの所かわすジ・O。

「クッ! タケオ! ウメオ! 時間を稼げ! 俺はその隙にコイツを!」
「ガッテンだ兄ちゃん!」

今回のチーム戦ではリーダー機を倒せば強制で倒した側の勝利となる。

乱入者はリーダーにはなれないので先にアイを倒してしまおうとマツオは考えた。

二機のギャンがゼク目掛けて円形の盾から針状のミサイルを撃ってきた。

さつきAGE2Eを度々撃ったミサイルだ。幾重ものミサイルがゼクを襲う。

「フーン！」

ゼク・アインはビームライフルを左手に持ち替える。そして右手で腰に差したガーベラストレートを抜き、

ゼクはミサイルの中に突撃をかけ、刀をミサイルに振るう。

アストレイの装備を持つ為にゼクのマニピュレータは1/100アストレイに変えられていた。

弾幕の中をゼクがぐり抜けると同時にミサイルは正面から真っ二つにされ全て爆発した。

『うーウソォー！』

驚愕するタケオとウメオ。その隙をついて一気にゼク・アインが詰め寄る。

「胴おおおっつっ!!!」

剣道の掛け声で、ゼクのビルダーが叫ぶと同時に、大きく振りかぶったガーベラストレートを横に振るう。

並んだギャン二機をまとめて真っ二つに切り裂いた。

『そげなああ!!』

ギャンは二機まとめて爆発、ゼクは確認もせずじ・Oに向かって突撃する。

一方マツオのジ・OはAGE2Eめがけて隠し腕のビームサーベルを振り上げる。

「お前さえ倒せばー！」

「やられる!?!」

「待てー！」

ジ・Oが隠し腕のビームサーベルを振り下ろす瞬間、

ゼク・アインがAGE2Eを庇う形でビームサーベルをガーベラストレートで受け止めた。

「コーコンドウー！」

ゼクに乗ってるビルダーらしき名前をマツオは呼んだ。アイは目の前のゼクの下半身が、丸々リツクドムIIに変えられてる事に気付く。

だからホバーで高速移動が出来たのかとアイは自己分析した。

「男らしくないな。三人で、さらにこんな手で女の子を追いつめるなんて」

「丁度いい!このジ・Oはお前ら三人を倒すために作らせた一品だ!」

ジ・Oが薄め液の入ったライフルをゼクに向ける。

「こいつでテストを兼ねたりベンジだったが!ここでお前を倒せば俺達三兄弟はー！」

「やかましい!」

ゼク・アインは左手のビームライフルで薄め液入りのライフルを撃ち抜いた。

「何!?!しーしまった!」

マツオが驚愕の声を上げる。中の薄め液がビームに引火しジ・Oの腕が燃えはじめる。

「も!燃える!俺の腕が!俺のジ・Oがああ!!!」

「小細工なんかするからだろう!」

その隙につき隠し腕を両方ともガーベラストレートで切り落とすゼク。

刀が長かった為、刃はジ・Oの腹部も浅いながらも切り裂く。腹部からドプツ!と音を立てて薄め液が漏れる。

腹内部にタンクがあり、チューブを介して薄め液をライフルに送っ

ていたというギミックだ。

「お！おのれえ！」

ゼクはAGE2Eを抱えてジ・Oに向いたまま後退。少し離れるとビームライフルを向けた。狙うは腹部。

「プロシヨップだけならまだしもこんな手を使う！少しは反省しろ！」

放たれたビームがジ・Oの腹部を撃ち抜く。と同時に腹部の貯蔵した薄め液に引火。

「火！ひいひいひいひい！！！！」

引火した薄め液はジ・Oごとまとめて爆発した。半壊したAGE2Eの中でアイは茫然とその光景を見ていた。

「凄い……一人で三人を……」

勝負が終わるや否や、アイは急いでスキヤナーを開きAGE2Eの状態を確認した。

AGE2Eはスキヤナーの中で入れた時のままだった。

「良かった……壊れてない……」

アイはそれを見てホッと安心する。ガンプラバトルでの損傷はガンプラには反映される事はない。

自機がやられてもスキヤナーのガンプラは全くの無傷だ。それでもあんな損傷の仕方をすれば不安にもなる。

アイがGポッドから出てくると、ナナと一緒にゼクのビルダーを待つ。礼の一つも言いたかったからだ。やがて男が出てくる。

「やあ、大丈夫だったか？」

「あなたが……助けてくれたんですか？確かコンドウって……」

男のパイロットスーツの色は青と黒、更にその上から陣羽織の様な物を羽織ったデザイン、アイ達とは違うスーツだ。

そして顔はヘルメットで見えないがかなりの大柄だ。ナナはその体型に見覚えがあった。

「あーもしかしてきつきのオッサン!？」

ガクツと男が崩れる。慌てて男はヘルメットを外した。

「オッサンじゃない！俺の名はコンドウ・シヨウゴ！まだ27歳だよ！」

ナナの思った通り先程の大男だった。そして何より一週間前、アイとコウヤが戦った際にバトルを見ていた男その人だった。

「27って……オッサンじゃん」

第4話「本当に必要な事」(ガンダムAGE―2Eナイトメア登場)

「助けてくれてありがとうございます」

アイが頭を下げる。コンドウと名乗った青年はアイのAGE2Eを興味深そうに見た。

「ハセベさんから話は聞いてるよ。拝見させてもらったけど君のAGE2、なかなかいい改造をしているな」

「まだまだですよ。現に今回負けそうでしたし」

褒められたのにも関わらずどうもアイの反応はイマイチだ。卑怯な手を使われたとはいえ、

マツオ達に負けそうになった事が悔しいのだろう。

「でもあの動き、凄かったです。コンドウさんって『ガンプライスター』なんですか?」

「まさか!ただのしがないガンプラビルダーさ。修行中の」

「?ねえアイ、何そのガンプライスターって」

また聞き慣れない言葉だ。ナナはとりあえずアイに聞いてみる。

「ガンプライスターって言うのはガンプラを極めたビルダーに送られる称号の事だよ。」

作ったガンプラは芸術品、バトルは負け無しってね、中には神って言う人もいる位で目標にしてる人も多いんだよ」

——私もその一人なんだけどね……——アイは心の中でそう呟いた。

「あ、つまり錬金術師って事」

「う……まあそうなるね」

「?なんで錬金術の例えになるんだ?」

「あ、いやこつちの話ですから」

言ってる事が理解できないとキョトンとなるコンドウ、アイはいちいち説明の必要もないと誤魔化した。

「さて、まあ助けに入ったのはいいとして、今日君に会ったのは頼みが

あつたからなんだ」

「頼みですか？」

「俺とガン普拉バトルしてほしい」

ある程度予想は出来た発言だ。アイとしてもあの三人をあつという間に倒すビルダーだ。

勝てるかは分からないけど断る理由はない。すぐに自分の答えを言おうとする、が……

「ちよつと待て！まだこっちの勝負はついてない！」

低い大声が響く、コンドウが叩きのめしたケイ・マツオだ。

「往生際悪いわねアンタ」

「うっさいわ!!恥の上塗りして黙ってなんかられるか！」

「いや、それが恥の上塗りってんでしょ」

呆れたナナのツツコミに動じないマツオ、それを聞いたアイは

「いいよ。ただしこっちにも準備がある。勝負は一週間後、それが条件」

キツとした表情で返した。次は負けない。そんな意志を表して

「よっしゃ！それなら勝負は今度の日曜日だ！首洗って待っていやがれ！」

そう言うときケイ三兄弟は去って行った。

「つたく、嫌な三人ね。また来週あの顔拝まなきやならないと思うと憂鬱だわ」

「まあ世の中色々な性格の人がいるから」

「あんな性格だから他人に作らせたガン普拉平気で使ってるんでしょうね。」

やっぱ他人に作らせたガン普拉に乗ってる奴ってダメって事ね」

ナナは悟った様に言う。だがその発言を聞き捨てならない人物がいた。

「いや、そういう事じゃないよ」

「オツサン？」

コンドウだった。

「人の作ったガン普拉を使う。その行為自体は俺は悪い事じゃないと

俺は思う」

「えーじやああのデブ達肯定するって事?」

「そうは言っていない。確かに他人に作らせたガンブラでのさばる人間はいる。それが良いとは俺だって思わないさ。」

でも世の中には作りこみたくても作れない、ガンブラがうまくてもバトルが苦手で友達に託すって人もいるからな」

「それって屁理屈じゃないの? 苦労して自分の作った人から見ればそういうの手抜きなわけだし」

「まあそういう見方もあるな。でも俺は自分で作るよりもっと大事な物があると思うんだ」

「? 何よ。その大事な物って」

「それは……」

その時だった。コンドウのスマホが鳴り出す。電話がかかってきたのだ。

「あ……スマンちよつと……」

肩すかしを食らうナナ、ナナ達から少し離れるとコンドウは電話に出た。

「もしもし……あつ! 課長! はい……」

相手は上司らしい。電話とはいえ妙に余所余所しい態度になる。

「えっ本当ですか!?! 解りました。すぐ行きます!」

電話を切るとすぐにナナ達の所にコンドウは戻ってきた。若干焦ってる様に見える。

「スマン! 上司から呼び出し食らった! すぐに会社に戻らなければいけない!」

「え? ちよつと待ってよ! 『もっと大事な物』って何よ!」

唐突な状況にナナは驚く。

「悪い! 急いでるから今日は話せない! 来週の対決の時に話すから!」

「えー!」

「じゃ! 来週の日曜日に!」

すぐさま更衣室に入るとあつという間に元のスーツに着替え、コン

ドウはガリア大陸を後にした。

そこにはポカンと口を開けたアイとナナがそこにいた。

「あのオツサン……まさか答えられないからああやって逃げたわけじゃ……」

「さすがにそれは無いと思うけど……いつまでもこうしてるわけにはいかないから私達も帰ろうよ」

「ん？結局今回は何も買わないのアンタ」

「大丈夫、一個買うよ。ちよつとコンドウさんの見てたら思いついたことがあるんだ」

ナナの問いにアイは、先程の悔しさを感じさせない、いつものんきな調子で答えた。

……

そして一週間後の日曜日、プラモ屋『ガリア大陸』

「再び集まってもらったわけだが、今日の勝負は俺が預かる！お互い全力を尽くして戦うように！」

「なんでオツサンが仕切ってるのよ？」

観戦用モニターの前でコンドウが声高々に宣言する。コンドウにナナは突っ込んだ。

「正々堂々としたバトルになるように俺が審判を務めると言う事だ。妙な真似したらまたゼクで乱入するぞ」

「分かったよ……」

マツオを見ながら言うコンドウにマツオは渋々承諾する。そして四人ともGポッドに入った。

「で、また三対一になっちゃったわけだけど」

「そんなんで負けるようなヤタテじゃないさ。それにアイツの顔を見たか？」

ナナはGポッドに入る前のアイを思い出す。不安なぞ全く感じさせない表情だった。

「負けないよ。アイツは」

そしてガン普拉バトルが始まる、今回のフィールドもタクラマカン

砂漠、ただし夜間だ。

闇に包まれる砂漠。昼夜が違うだけで全然違う印象を受ける。

「さて……アイツはどこかな？」

ギャンに乗った三男、ウメオがまたもハイドボンブを散布しながらアイの機体を探す。

「ん？」

その時だった。前方から何か近づいてきているのを確認する。

黒い影だ。それも地上スレスレを高速で飛んでくる。

「見つけたぜ！」

ウメオは浮かぶハイドボンブを盾に、更にシールドを影に向け、内蔵されたミサイルを撃ちだす。

しかし影は何かを右肩から外し投げつける。それは回転しながら高速で迫る。

見た感じ実体兵器だろう、それもかなりの大型だ。

「ブーメランか!?!はん!このハイドボンブと盾の防御二段構えを簡単に貫けるもんかよ!」

が、物体はそのままハイドボンブ、ミサイルの爆発を受けてもビクともせずそのままの勢いでギャンを襲う。

「何だとお!?!」

ウメオが叫ぶ直後、ギャンは正面から真つ二つにされ爆発した。回転する物体はそのままブーメランの様に影の手元に戻った。

「次は……負けない……」

影に乗ったビルダー、アイがつぶやくと同時に月に照らされ機体の姿が露わになる。

紫にペイントされた忍者の様なAGE2が、ダブルバレットをベースに両足はスパロー、両肩の装備は農丸の物をいじった物だ。両腕だけでなく全身を新しく作ったAGE2だった。

先程投げた物体は巨大な農丸の手裏剣だったわけだ。これにはナナもコンドウも驚く。

「おお!これは!農丸のパーツを使ったのか!」

「姿が違う!?!忍者!?!」

「これが私のオリジナルウエア！AGE2Eナイトメア!!」

「ケッーなにがナイトメアだ!」

ガフランに乗った次男、タケオは余裕の態度だ。

トカゲが二足歩行になった様な機体『ガフラン』は、ガンダムAGEに登場する敵機だ。

背部のランチャーは見方によっては尻尾にも見える。そのランチャーを前面に展開、ナイトメア目掛けて撃つ。

放たれたビームを難なくかわすナイトメア。そのまま高速でガフランに接近しようとする。

「こーこのっ!」

タケオはガフランの両掌に設けられたビームマシンガンをナイトメアめがけて撃ちまくった。

だがナイトメアはジグザグに動きかわしつつガフランに肉薄すると、ナイトメアはガフランとすれ違った。

「な・なんだ!脅かしやがって!」

撃墜されるかと思ったタケオは安堵する。しかし次の瞬間。

ズルツ

「なっ……」

タケオのモニター表示が左右でズレる、直後ガフランは爆発する。ナイトメアの左手には農丸とGバウンサーのパーツを組み合わせた大型のシグルブレイドが握られていた。

ガフランはすれ違いざまにシグルブレイドで縦に真っ二つにされていた。モニターのズレはその所為だったわけだ。

「ちよこざいなあ!」

前回と違いチューブを外されたジ・Oに乗った長男、マツオはナイトメアにビームライフルを撃つ。

しかしナイトメアは軽やかにかわし跳躍、シグルブレイドで斬りかかる。

「うわっ!!」

とつさに隠し腕のビームサーベルで受け止めようとする、が反応が遅い、あつという間に隠し腕を切り落とされた。

「このー！」

すかさずマツオはビームライフルでナイトメアを撃ち抜こうとする。

が、読まれてたようだ。簡単にビームライフルを持った右手ごと切り落とされた。

「はああつ!!」

そのままアイはジ・〇に回し蹴りを見舞う。足のバーニアを吹かし勢いをつけたキックはジ・〇の腹に綺麗に決まりジ・〇はその場で倒れ込む。

「何故だ！クソツ！クソツ！ちゃんと動け！このポンコツ！」

自棄になったマツオが叫ぶ。細い目は感情が高ぶった所為か見開かれていた。瞳は小さく目つきが悪い。

「実力者を作ってもらったんだぞ！金かけたんだぞ！なんでこんな無様な姿さらさなきやいけないんだ!!言う事聞けよ！」

「なんか……無様ね」

観戦モニターを見ていたナナが呟く。

「……ガンプリビルダーは完成度はもちろん重要だ。だがそれよりも『作った時の楽しい気持ち』『完成した時の嬉しい気持ち』

それがガンプラに宿り力を発揮すると俺達ビルダーの間では言われている」

コンドウが観戦モニターを見たまま、しかし真剣な表情で話し始めた。

「じゃあやっぱり他人のガンプラだから？」

「いや、他人のガンプラでもそう言った力は引き出せるよ。ただ引き出すには大事な気持ちが必要なんだ」

「またそれ？一体……」

Gポッド内でアイはマツオの叫びを耳に受けながらシングルブレイ

ドを構える。

マツオはジ・Oが倒れた体勢のまま本音を叫び続けた。

「全然自分の機体のポテンシャルをひき出せてないよ、素組の時の方がまだ強かった」

「何が悪い！うまい人に作ってもらって設定も知ってる！引き出せない力がどこにある!?!これ以上に何が必要だっていうんだ！」

「……」

その瞬間、アイはマツオを見て悟った気がした……

『簡単な話だよ(だ)。好きって(という)気持ちと信じるって(という)気持ち、大事にしようって気持ち』

アイとコンドウ、二人とも発言したのは同時だった。

「何をわけのわかんねエゴことを!!」

「作ってくれたプロの人だって全身全霊を込めて作ってくれたはずだよ。それなのにそんな事言って！力を引き出せるわけない！」

「くっっ！」

ジ・Oは起き上がり残った左腕のビームサーベルでナイトメアに斬りかかる。ナイトメアは片手のシングルブレイドで受け止めた。

「綺麗事ぬかすんじゃない！」

「コンドウさんや私が証拠だよ！現にあなたは負けたし押されてるじゃない！」

ナイトメアは微動だにせずアイは話し続ける。

「自分で作れば見えてくるものだってあるよ。ううん、好きって気持ちがあればこのパーツを試したい。」

もつとこいつで強くなりたい。そう思えるハズでしょ!?!設定じゃカバーしきれないところも、気持ちを込めれば込めるほど解るものなんだよ?だから……」

ナイトメアはジオをパワー押し勝つ。ジ・Oのビームサーベルを払いのけたのだ。

その際よろめいたジ・O目掛けてナイトメアは飛び、ジ・Oの脳天からシングルブレイドをつき刺し上から下に切り裂いた。

「せめてその気持ち位持つてよ!!」

「ぐおおお!!!」

切り裂かれたジ・Oはそのまま沈黙、爆発した。

「対戦という形はとっけていても、結局はプラモの出来を競い合うのがガン普拉バトルだ。ガンプラの壊し合いじゃない。

やってる以上は作ってくれた人の想いも背負っている。だから一層信じたり大事にする気持ちを持たなくちゃいけないんだ。

そりや自分で作った方がいいかも知れないが」

「そんな簡単な事だったんだ。アイもそれに気付けたわけね」

「くっ……覚えてろ……」

捨て台詞をはくと三兄弟はそのまま立ち去った。安堵するアイにナナとコンドウは駆け寄る。

「やったじゃんアイ！前回は嘘みたいな活躍だったよ！」

「ああ、見事だったぞ」

「ありがとう。オリジナルウェア、大成功だよ！」

「あ、そういえばなんで忍者だったわけ？」

「ああ、コンドウさんのゼクが侍っぽい改造だったから」

「いやそれ安直すぎ」

ナナが笑いつつもツツコミを入れる。

「さて、いつまでも話を続けておきたいが戦いは終わった……帰るか？」

コンドウが質問するかのよう言うが

「何言ってるんですか。今日はもう一回対戦予定あるんですからね」

アイがニツつと笑う。

「やはりな……ちょうど今のバトルを見て俺もスイッチが入ったところだ」

コンドウも待つてましたと言わんばかりに笑う。

「付き合ってもらいますよ……！勝負！」

——初めて。アイが自分から対戦申し込むなんて……どんな戦いになるんだろ？——

ナナはその光景をただ眺めてるだけだった。

第5話「荒野の決闘」(AGE—2Eナイトメア VS
ゼク・アイン斬撃兵装)

勝負を控えた二人。お互いの空気は殺伐さは無いものの、緊張で張りつめていた。

「でも……アタシとしても見たいバトルではあるけどさ。大丈夫なのアイ？アンタ二連続でバトルする事になるわけだし辛くない？」

「大丈夫だよ。むしろ今ので慣らしになった感じだから、大体疲れてたら私の方から挑戦したりしないよ」

心配するナナにアイは笑って返す。

「そう言ってくれると助かる。全力で行かせてもらおうぞ！」

反対側のGポッド付近にいるコンドウが答えた。

「望むところですよ！」

アイもまた答える。そしてお互いがGポッドに入った。

……

今回のバトルフィールドは『テキサスコロニー』

最初のガンダム作品で登場した地で、名前の通り西部劇の舞台であるテキサス州の気候風土を模して建造されたコロニーだ。

当然荒野だらけである。しかし本編設定では戦争のゴタゴタで砂漠化も進んでいるという設定だ。これも再現されていた。

AGE2Eのオリジナルウェア、ナイトメアでホワイトベースから飛び出したアイ、今までで一番の強敵と戦う事に気分は不安と高揚で一杯だった。

「コンドウさんは……？」

飛びながら辺りを見回す。遠くにバッファローの群れが走っているのが見えた。

少し探すとコンドウのゼク・アインが見えた。砂漠の大地をホバーで巻き上げながら進む。

「見つけたー！」

「！」

アイがシングルブレイドを構えゼクに迫る。ゼクもアイとほぼ同時に存在に気付いたようだ。日本刀、ガーベラストレートを抜き飛び上がる。

「はあああっ!!!」

「うおおお!!!」

アイはナイトメアの小手部分のスラスターを点火、これによりシングルブレイドを打ち付ける勢いが増す。

ナイトメアとゼク、二機の刃がぶつかり合った。

「くうっ!」

「ちいっ!」

お互いに手ごたえがないと解ると一度バックステップにより離れる。そしてお互いが迅速に次の行動に移る。

アイは再び接近しようと試みる。得意なレンジに持ち込み一気に勝負をつけるつもりだ。

守りに入ったら自分がやられると思うが故の行動だった。

反面コンドウはある程度距離を置き、ナイトメアを近づけまいとビームライフルを連続で撃ってきた。

「くっ」

浅い考えだったか。と距離を取りつつ回避行動に移るアイ、だが動きを読まれてるのかコンドウの射撃が正確なのか正直避けづらい。

「甘いな、動きは早くとも読めない動きじゃない!」

「くうっ! 読まれてる!?!」

その時だった。シングルブレイドを持った左腕がビームで撃ち抜かれた。

「あっ!」

撃たれたのは肘の部分、砕けた肘より下の部分がシングルブレイドごと足元に落ちる。

その際アイの意識がシングルブレイドに行く。そのアイの隙をコンドウは見逃さなかった。

ガーベラストレートで一気にナイトメアを切ろうと迫る! シングルブレイドを拾っていたら間に合わない。

「メエエエエッツ!!」

——だったら!!——

すぐさまアイは手裏剣を二つに分離させ右足の裏に装着。水蜘蛛に四刃剣のうち二つをとりつけた足は足から剣が生えたかのように見える。改造の元になつた農丸のギミックだ。

「何イ!？」

驚きながらもガーベラストレートを振り下ろすコンドウ、ガキイツ!と金属がぶつかり合う音が響く。

ナイトメアはハイキックの体勢でゼクの刀を受け止めていた。

「やってくれるー!だがその体勢がいつまで続くかなー!」

そのまま鏢迫り合いになる。だがパワーはゼクの方が上、体勢の問題もあるだろうがナイトメアの方が劣勢だった。

「くうー解らないからこうするんですよー!」
「!？」

肩に残した四刃剣の内二つ、そのひとつから銃が展開しゼクの頭部目掛けて放たれる。

仕込み銃シグマ、これも農丸のギミックだ。

「うおっ!？」

とっさにかわすもゼクに隙が生まれる。その隙をついてシングルブレイドをアイは回収、右手に持つとゼクに斬りかかった。

「はああっっ!!」

「ぬう!!」

再び鏢迫り合いになる二機、が、さっきの勢いをつけたぶつかり合いはともかくとして、

先程書いた通りゼクのパワーは受け止めるのが精いっぱいだ。

コンドウのゼクは刀を持つ手に力を込める。刀とシングルブレイドがこすれると火花が散った。

「うおりゃああっ!!」

「くーうううっ!？」

業を煮やしたコンドウはナイトメアを薙ぎ払った。吹っ飛ばされ

たナイトメアは土煙を巻き上げそのまま後ろの岩山に激突する。

ガンプラが岩壁にめり込み破壊される岩山。

トドメをさそうと近づくコンドウ、が、ナイトメアの足に先程の手裏剣が無いことに気が付いた。

「手裏剣がない?!ハッ!」

コンドウが気づくと彼の横から手裏剣が迫ってくる。吹っ飛ばされた後さりげないところでアイは投げていたのだ。

とつさに回避するコンドウ、が、ビームライフルは手裏剣に巻き込まれ破壊されてしまう。

「なかなかの奇策、正直驚いたぞ。だが俺を追いつめるには少々詰めが甘かったな」

「簡単に勝てるなんて思ってたませんよ!まだまだこれから!!」

お互い剣を持ち肉薄した。

「うええ……なんつー戦いよ……」

観戦していたナナは何度もぶつかり合う二機を茫然と見ていた。

「ああ!もう始まつちやってるツスよツチャヤさん!」

「待てソウイチ、そんな慌てて走るなよ」

と、突然下の階から二人の男が上がってきた。ナナとちよつと離れた場所でアイとコンドウの闘いを見始める。

「コンドウさんが戦ってるって事は、三対一の闘いはもう終わってしまつたみたいだな」

眼鏡をかけた細身の青年が言う。コンドウより若そうな青年だ。

三対一というのは前回アイの戦ったケイ三兄弟とのバトルの事だ。

「どうでもいいツスよ。それよりコンドウさんが興味を持つ相手ツス、二人のバトルを見る方が余程重要ツスよ」

もう一人、こちらは少年だ。おそらくアイより年下だろう。ぶつきらばうな喋り方で生意気そうな印象だ。

——何?こいつら……——

ナナは二人を不審に思った。

斬り合いを初めてからしばらくの時間が経つ。徐々にアイはコンドウに追いつめられていた。

スピードの方はアイのAGE2Eナイトメアの方が上なのだが、コンドウのゼクは素早い動きで対応、打たれる一撃は重くナイトメアは受けてから攻撃に転じることが出来ないでいた。

これはリックドムⅡの下半身によるホバーを利用した戦法だった。本来ゼク・アインは可動範囲に難がある為、パワーはあっても接近戦は苦手なガンプラだ。

しかしホバーによる高速移動で勢いをつけて叩きつける。これによる一撃はかなりの物でナイトメアも押しきれつつあった。

そして次のゼクの面を上からシングルブレードを受ける。その衝撃でナイトメアは膝をついた。

「アイー！」

観戦モニターを見ながらナナが叫ぶ。

「ここまでのようだな！覚悟！」

そしてコンドウのゼクがトドメを刺そうと刀を振り上げる。だがアイはまだ諦めてはいなかった。

「まだまだ!!」

アイのナイトメアは膝のニードルガンをゼクのモノアイ目がけて撃った。

「!?ちよこぎいなー！」

すかさず刀で薙ぎ払うゼク。しかしその隙にアイは距離を取り

……

「あなたの一撃が重いならあー！」

「!?あの姿はー！」

AGE2Eナイトメアはシングルブレードを胸に取り付け。ストライダー形態に変形、そして全力噴射、ゼク目掛けて突っ込んだ。

「捨て身の！ストライダーアツツ!!ダアアアイブツツ!!」

「なんだと!!」

「あれは!？」

「変形機能を残してるんすか!？」

驚くコンドウと二人の男、突っ込んできたAGE2Eナイトメアを、
ゼクは右手で刀の塚を、

左手で刃の部分を持ちガーベラストレートの中心部で受け止めた。
お互い全開のパワーで相手を押す。

「うおおおおお!!!」

ガーベラストレートの刀身、シグルブレイドとの接触部分に亀裂が入る！

「くっ!!調子に…!!」

ゼクは受け流そうとする。が、勢い余って二体とも派手に同じ方向に吹き飛んだ。

『うああっ!!』

同じ叫びが聞こえた。

ゼクは勢いに負け後方に吹っ飛び地面を削るように跳ねながら転がる。

ナイトメアも放物線を描きながら飛び、ストライダー形態のまま墜落。

その際二人のGポツドの振動は相当な物だった。

しばらくして勢いが止む。

「う……止まった……コンドウさんは……?!」

アイは朦朧とする頭を振り、ストライダー形態から人型形態へ変形。そして前方を見て「あっ！」と叫んだ。

コンドウのゼク・アインは目の前で同様に倒れていたからだにいたからだ。

なお、コンドウもアイと同じ心境だった。

「チャンスー！覚悟!!」

アイはナイトメアのシグルブレイドでゼクを突き刺そうとする。

「くっ?!甘い!!ヤタテエ!!」

コンドウのゼクも手に握られたままのガーベラストレイトでナイトメア目掛けて、突きをかける。

『うおおおおお!!!』
お互いの剣の切っ先同士がぶつかり合う! 直後!

何かが割れる音が響くと共に……

AGE2Eナイトメアのシングルブレイドが割れた。そのままナイトメアは

ゼクのガーベラストレートに胸……コクピットを突き刺される。先程の突撃による剣の負担はシングルブレイドの方が上だったのだ。その所為で突きの負荷にシングルブレイドは耐えられなかった。

「嘘……」

アイの口から驚きと悔しさの混じった声が漏れる。

ガーベラストレートが胸から引き抜かれると同時にナイトメアは倒れ込み爆発。

「後一步だったな……だが」

アイの負けだ。コンドウはガーベラストレートの刃を眺める。直後、ガーベラストレートの刀身が折れた。負荷がかかっていたのはコンドウのゼクも同様だった。

「俺の剣を折ったのはお前が初めてだよ……」

「負けちゃった……」

ヨロヨロとGポッドから出てくるアイ、ナナはすぐさまアイに駆け寄った。

「アイ、大丈夫?」

「あ、大丈夫だよナナちゃん。ちよ、ちよつと燃え尽きちゃっただけだから、ここまで必死なバトルも久しぶりだったし」

そこへコンドウが駆け寄ってきた。

「いい戦いだっただ。今日というバトルが出来た事を俺は誇りに思うよ」

そう言うとコンドウは握手を求めてきた。アイもまた負けた悔しさはあれどここまで全力のバトルが出来た事が嬉しかった。

「あはは、光栄です。でも今度は負けませんからね」

小さな手と大きな手が重なり合う。今度は負けない。アイはその気持ちを胸に抱く。

「ああ！楽しみにしている！」

「いいもの見させてもらったぞコンドウさん」

とそこへ先程観戦していた二人の男が現れる。

「まさかアンタでもあそこまで接戦となるとはな。その子は話で聞いてた以上の実力だよ」

「おお来てたのかサブロウタ、ソウイチ」

眼鏡の青年をコンドウが親しそうに呼ぶ。

「そうスか？俺は最初っからコンドウさんが勝つと信じてたツスよ」

「失礼な事言うんじゃないソウイチ」

少年が言う。身長155cmのアイと身長差はほとんどない。横の眼鏡の男が注意した。

「誰ですか？この人たち？」

「同じガンプラーサークルの仲間だ、もっと早い時間に呼んではいたんだが……遅いぞお前達」

「悪い。ちよつと車が渋滞に引っかかっちゃって」

そして眼鏡の男がアイに向く。

「それにしてもいいバトルだったよ。いつか俺達とも戦って欲しいな」

「あなたは……？」

「俺はツチャ・サブロウタ」

ツチャと眼鏡の男が名乗り、

「俺はアサダ・ソウイチ」

少年が名乗る。そしてコンドウが続く。

「そして俺、コンドウも含めてチーム『ウルフ』ってわけだ」

「今回は挨拶みたいなもんだがリーダーのコンドウさんをああまで唸らせたんだ、いずれ俺たちとも戦ってもらおう！」

「やるからには勝ちをもらおうツスよ」

二人の男は自信満々にアイに向い宣戦布告をした。
「ウルフ……」
アイの戦いはまだ始まったばかりだった。

第6話「狼達の挑戦」(レジエンドBB武者頑駄無ガン プラバトル仕様 & バウ・H登場)

「えーっ!!男三人から告白されたあ!」

タカコの絶叫が昼休みの教室に響き渡る。直後周りにいた生徒が一斉にこちらを見た。

「誰もそんな事言っていないよ!バトルで宣戦布告受けたって言ってるの!」

慌ててタカコの発言を訂正するアイ、机をあわせてアイ、ナナ、タカコ、ムツミが昼食をとる。いつもの昼休みの風景だ。

アイは先日の日曜日、コンドウ達に挑戦を受けたことを話したわけだ。

「いやゴメンゴメン、確かにアイちゃんバトル強いからね。そうやって挑戦して来るやつって多いとは思ってたけど」

「負けちゃったけどね」

「なくに言ってるのよ。かなり食らいついてたじゃない。次やったら勝つ事だって夢じゃないって!」

バツが悪そうにするアイにナナがフォローを入れる。

「でもチーム『ウルフ』か……。荒らしとか模型部とかと比べて随分本格的な集まりが来たかもね……」

「そう?サークルなわけだし集まりとしては模型部と変わんないと思うけど、

それより可愛いじゃん『ウルフ』なんて名前つけるなんてさ〜」

ムツミが心配そうに言う。反面タカコは楽しそうだ。

「ヤタテエエツ!!」

と、ドタドタと音を立てて一人の男子が教室に入ってきた。額の広い男子、模型部のヤマモト・コウヤだ。

「コンドウさんとガンプラバトルして!さらに『ウルフ』のメンバーに宣戦布告受けたって本当か!!!」

またも教室に叫び声が響く。再び生徒が一斉にアイ達を向く。

「いや唐突な上にアンタ声大きすぎ」

冒頭のタカコより大きい声だった。アイ達が耳を抑えナナはそのまま呆れた反応で返す。

「とりあえず挑戦は受けたけど、コンドウさんとアサダって子と後……誰だっけ？」

「あ、確かツチャって言った。眼鏡かけてた」

「いやお前ら……コンドウさん達に直接挑戦されたんだぞ！どれだけの事かわかってるのか！」

「アンタがそう言うなんてそんなにあのオツサン有名だったワケ？」

「そりゃ確かに技術は高いし強い人だったけど」

「オツサンで……知らないのかよ?!あの辺じゃ最も強いガンプラビルダーの集まりだったのに」

ナナはともかく全く今の状況を理解してないアイにコウヤはただ呆れるばかりだった。

「あの辺で最強って、地域ごとになんかそういうのいるの……？」

ムツミが聞く。

「ん？その通り。コンドウさん達はあの辺では一番強いチームなんだ。反面強いビルダーって事でよく挑戦者やその座を奪おうとしてる奴もいるんだよ。」

前ヤタテが倒した荒らしのケイ三兄弟もズルい手でコンドウさん達を座を奪おうとしてたってワケ」

「へえ、あの三兄弟も」

アイは以前荒らしや卑怯な手を使ったケイ三兄弟を思い出す。

「そういえばプロシヨップに作らせたジ・Oを『お前ら三人を倒すために作らせた』って言ってたっけ」

あのジ・Oは元々対ウルフ用だったのだろうとアイは考えた。コンドウのゼクにアツサリやられたが。

「あれだけ強いとなると、あのオツサンもビルダーとしては相当なモンってわけね」

「へ〜いわばガンプラビルダーの番長って事ね。可愛い男の子いるんだったら取材したいな〜」

「オイオイ……模型部だって『打倒ウルフ!』を掲げて頑張って来たつてのに引越してきて一カ月も経ってないヤタテがこんな早く目をつけられるなんて。よよよ……」

「え? 模型部ってそんな目標あったんだ。前取材した時そんなのなかったよ?」

「あつたよ! いずれ催されるであろうガリア大陸『ガン普拉バトル大会』でウルフを下すのが俺の! いや俺達の目標だったんだぞ!」

——そっか……アイって結構凄い状況なんだよね。今聞くのって不味いかな——

熱弁するコウヤ。それを聞き流しながら誰にも聞こえない小さな声でナナは呟いた。

「でもアイちゃんそんな凄い相手に眼をつけられたとはね……正直怖くない?」

「全然? それより嬉しい位だよ。様は認めてくれる相手がいるって事だもん。全力で答えなきや!」

嬉しそうにアイは答えた。

「おっポジティブ」

「ちようど新しいガン普拉もあるしね。学校が終わったらすぐにでも試してみたくて……」

「それは出来ないよヤタテさん」

「え?」

アイが振り向く。後ろにいたのは一人の男子生徒、アイのクラスの委員長だった。

「今日は僕のかわりに生徒会手伝うって約束しただろう?」

「あ、そうだった。頼まれてたの忘れてた。」

アイは思い出した。少し前に委員長が家の用事で生徒会に出席できない為、何人か代理で生徒会の手伝いをすると、アイもその中に含まれていた。

なおタカコとムツミは部活に入っていた為除外、帰宅部だった事がアイの選ばれた理由だった。

「学校にガン普拉持ってきたのは黙っててあげるからちゃんと出席し

「てよね」

「う、解ってます……」

そのまま委員長は立ち去る。黙っててくれるんじやサボるわけにはいかないだろう。

「大丈夫？アイ、なんならアタシも手伝おうか？」

「有難うナナちゃん、でも私ひとりで大丈夫だよ。ナナちゃんは先帰ってていいから」

……放課後……

生徒会の手伝いも終わり、模型店『ガリア大陸』に向かうアイ。昼の会話で出てきた新作をガン普拉バトルで試す為にだ。

帰路につく人達をかきわけながらアイはガリア大陸に入った。

「あ、アイ、来たんだ」

「!?ナナちゃん?!」

丁度カウンターで会計を済ませたナナがアイを出迎えてくれた。ナナの片手には白い袋が見えた。

袋の角張具合からして中にガン普拉が入ってるのは想像に難くなかった。

「ナナちゃん、もしかしてガン普拉買ったの!？」

「……うん。アイがやってたの見てて凄く楽しそうだったからさ。本当は一緒に選んでほしかったんだけど我慢出来なくて買った」

初めて踏み込んだ世界にやや恥ずかしそうにナナが答える。反面アイはガン普拉仲間が増えるかもと内心大喜びだ。

「やあアイちゃん。今日も来てくれたんだね」

カウンターのくたびれた中年男性がアイに声をかける。無精髭の丸眼鏡、やとわれ店員のハセベ・シロウだ。

「あ、こんにちはハセベさん」

「今日もガン普拉バトルかい？」

「はい。試したい新作がありました」

「だったらうってつけの相手が今いるよ」

ハセベは待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべた。

「?誰だろ？」

「俺さ」

背後から声が若い男の声がした。アイはその声に聞き覚えがあった。

「あなたは……ツチャ・サブロウタさん」

そう、コンドウと一緒にいた眼鏡の長身の青年。ツチャだった。

「覚えておいてくれて嬉しい。コンドウさんが『ウルフ』のリーダーなら俺はサブリーダーってとこさ」

「サブリーダーって事はオッサンの次に強いってわけね」

「強さが次点からサブリーダーってパターンじゃないんだけどね、ただ俺の場合はその通りだけど」

ナナの発言に青年はニツと笑いながら答えた。

「まあ挨拶もそこそこに、俺と戦ってくれないか？」

「もちろん、断る理由はありません！」

アイの顔はワクワクしてるという心情が伝わってくる。ナナはその二人の空気に入り込めずにいた。

……

今回のバトルフィールドはフォートセバーン、ガンダムXに登場した雪に覆われた地で1クール目のクライマックス、

ガンダムXのパワーアップ、強敵の出現と主人公の精神的成長と、見どころ満載の場だ。

アイの乗るレジェンドBB、武者頑駄無は改造した支援機に乗り飛んでいた。

レジェンドBB、ガンダムAGE1ウエア専用キャリア『アメンボ』だ。ウエアとは手足の換装装備、

通常のアメンボにBB戦士の雷丸のライフルをアメンボの先端に装着に更に後ろに雷丸のブースターのついた脚部を取り付けていた。

「へえ、ああいう体系のもあるんだ」

観戦用モニターに映る見慣れない体系のガンダムを見ながらナナは呟いた。

相手はどこ?とアイが警戒する。周囲には木々は見え、雪の積もった丘が続いていた。

と、突然前方からビームが武者を襲う。距離が離れてる所為か簡単に避けることが出来た。

「いきなりやぶれかぶれ!」

「甘いぜ」

ツチャの発言にハツとするアイ、同時にツチャの機体が分かる。

「バウ・アタッカー!?てことは!」

ツチャの機体はバウ・アタッカーと呼ばれる戦闘機だ。登場作品はガンダムZZ、ネオジオンの量産機で試作型と量産型が存在し、それぞれ色が違う。

一見シルエットは通常のバウ・アタッカーと変わらない。(下部にソードインパルスのフラッシュエッジがついていたが)

だが目を引くのはそのカラーリングだ。

胴体の半身は鮮やかなオレンジ、もう半身は落ち着いたグリーン。試作型と量産型、二つのカラーリングが機体中心を境目に分かれているのだ。

と、アイが機体を見るやGポッドに警告音が響く、後方から何かが高速度で武者頑駄無に突っ込んできたのだ。

「くうッ!!」

後ろからの突撃をすんでのところで避けるアイ、

「まだ安心するなよ!」

追い打ちをかける様にバウ・アタッカーの両翼からミサイルが飛んでくる。数は全部で六発。

「しまった!」

どうにか回避しようとするも数発避けきれず爆発を受けてしまう。その拍子にバランスを崩しアメンボから落下。

「なっ!なんのお!」

バーニアをふかし、着地する武者頑駄無

「綺麗にはいかないがうまく凌いだじゃないか!」

「くっ！アメンボは!？」

アイは武者の頭を動かし上を見る。丁度空に残ったアメンボがバウ・アタッカーのビームライフルを後方部のバーニアに受ける所が見えた。

「あっ！」

「これでもう飛べないだろう！」

黒煙をあげたアメンボはコントロールを失いヨロヨロと落ちていく。アイはアメンボが気になる所だが目の前に敵がいるとなるとそうはいかない。

そのまま見る対象を変える。アイを後方から襲った物体はまだ空にいた。その正体はバウ・ナッターと呼ばれる戦闘機だった。

バウ・アタッカー同様、シンメトリーの様なカラーリングをしており、

装備の違いは機体前部の両サイドにインパルスのエクスカリバーを突き出すように備えていたところか、

「くっ！やっぱり、バウ・ナッター！」

その不気味なシンメトリーの機体はエクスカリバーでアイの武者を切り裂こうと襲ってきた、

「その通り！」

Gポッド内でツチャは合体の操作を行う。グレーのパイロットスーツを着たツチャはコンドウと同じ様にグレーの陣羽織を羽織っていた。

「どうやらこれが『ウルフ』のユニフォームの様だ。」

直後、バウ・ナッターがバウ・アタッカーへと突っ込む、バウ・アタッカーは下部を開きバウ・ナッターの先端部を納めた。

バウは上半身と下半身で分離が可能な機体だ、両方が合体する事で真の姿、バウへと変わる。

「なんて派手派手しいバウ!？」

尖った頭と肩、そして左腰のフロントアーマーに描かれた『龍飛』の文字、

だが目を引くのはやはりそのカラーリングだ。その機体はやはり中心を境にオレンジと緑、二つのカラーリングで別れていた。

「折角のガンプラの喧嘩だ、楽しもうじゃないか！俺のバウ・ハーフと！」

ツチャのバウ・ハーフ（以下H）はアイの武者を追いつめようとビームライフルを乱射していた。さつきとは違い正確にこちらを狙っている。

アイは両肩の鎧で受け止めつつ種子島雷威銃（タネガシマライフル）で撃ちかえしながら凌いでいた。

「防戦一方か！つまらないぞ!!」

「油断していると足元すくわれますよ！」

すかさずアイはタネガシマライフルを二発発射。銃弾はバウ・Hのライフルを破壊、もう一方の弾丸は顔目掛けて撃つが弾はバウの顔を掠めただけだった。

「おっと！やってくれるじゃないか！ならー！」

ツチャのバウはシールドに装備されていた二等辺三角形形状の武器、フラッシュエッジを取り出す。

フラッシュエッジからビームサーベルが発生、ブーメランの様な、否ビームブーメランとなる。

「くらえー！」

大きく振りかぶり武者に投げる、

「チッー！」

フラッシュエッジをかわすアイだがすかさずバウが迫ってくるのに気づく、アイは武者の刀『武久丸（ブキウマル）』を抜き身構える。

対するツチャはバウ・Hが腰に装備されていたエクスカリバーの底部を連結させ、一気に武者に迫る。

「はああっっ!!」

「うおおっっ!!!」

エクスカリバーを受け止める武者、お互いバーニアをふかし押し合う。二頭身のSDはバウの半分程度の身長しかなかった。

「くっ！なりは小さくとも！パワーなら負けちゃいけませんよ！」

アイが喋るたびに武者のマスクがもごもご動く、SDガンダムの中にはこの外見で生物という設定がある為こういった演出がある。

「パワーだけならな！だが前だけ見てていいのかな?！」

「!?しまった！」

アイが後ろに気付くとさっき投げたフラッシュエッジが武者に後ろから迫ってきた。気づくのが遅かった。

アイは左肩鎧でフラッシュエッジを受け止める。深々とビームの刃が肩鎧に突き刺さった。

「クッ!!まだ腕は切られてはいない!!」

「だったら今切り落としてやる！」

「!?」

さっきの不意打ちでアイの意識がフラッシュエッジに集中した。ツチャはその隙を逃さずエクスカリバーを二刀流に分割。

左のエクスカリバーは武久丸と鏢迫り合ったまま、右のエクスカリバーで武者の胸を貫こうとした。

「クッ!!」

アイは回避しようとする。直後、武久丸を握った右腕が宙を舞った。

右腕の付け根をエクスカリバーが切り落としたのだ。

「うーうアアッ！」

そのまま雪原に倒れ込む武者。

「あんまりいい気分じゃないな……SDだと乗り込むわけじゃなくて生き物の設定だからか……」

「随分と嫌らしい攻撃するじゃないですか！」

「コンドウさんとは違って確実な手で追いこむのが俺の信条なんでね！相手が君なら尚更慎重にやる必要があるだろ!？」

「支援機から落としたのもそれが狙いですか！」

「油断はしない性分なんでね！」

ツチャはこういった分離を活かしてかく乱させ、確実に追いつめる

戦法を得意としていた。

アメンボから武者を落としたのも、十中八九換装装備を積んでると判断したからだ。

普通飛ぶならサブフライトシステム（SFS）と呼ばれる飛行ユニットを使う為だ。

「男らしくない！」

「慎重といってもらいたいね！悪いがその寸詰まりの体。真つ二つにさせてもらうぜ！」

再びエクスカリバーを連結させ迫るバウ・H。アイはどうするか……と考えていた。

と自分の周囲を見ると、丘の向こうから黒煙が上がってるのが見えた。

恐らく先ほどのアメンボだろう。

「……見てみるか」

アイはモニターの端にステージマップを表示させる。地形と味方の確認用のマップだ、一つアイコンがそんなに遠くない位置で見えた。

「まだ落ちてない……いけるかも！」

アイはGポッド内でニツつと笑うと武者の兜を脱ぎすてる。

「!?」

その行動を理解できないツチャのバウに背を向け、アイは武者のバーニアを全力で吹かした。

「オマエツ！逃げる気か！」

追いかけるバウH。だが意表をつかれた行動のためか出遅れてしまった。

「見えた！」

黒煙を目印にした為わりとアツサリ雪原に墜落したアメンボが見つかった。サツと目で確認する。

「壊れてるのは後方部のバーニアだけ……いける！」

だが後ろからツチャのバウが迫っていた。

「チツ！換装する気か！そうはいかない！」

エクスカリバーを構えるツチャのバウ、

「まさか！私の狙いはこれ！」

直後振り向いた武者がバウ目掛けて突撃してきた。それもアメンボを直に片手に持つて。

「何?!支援機を振り回す?!」

すかさず盾を構えるバウ、しかし武者の未確認の武器、まるでハンマーの様な武器は盾を腕ごと薙ぎ払う。

「タイタスか?!いや違う！こいつは！一体?!」

その姿はなんとも奇怪だ。両足は武者のまま、破壊された右腕はタイタスに換装してるのだが左腕の位置がアメンボの中央に付いており

まるでハンマーの様な形になっていた。そう、アメンボが巨大なハンマーになっていた。

「これが私の切り札！タイタスG（グランド）ブレイカー!!」

「アメンボをそのまま武器にした?!アメンボ自体を換装したのか！」

「だああつ!!」

アメンボに取り付けたタイタスの肩部からビームスパイクが発生大きく振りかぶると一気に全力噴射し、

バウに振り下ろした。

「チイッ！」

分離し、回避するバウH、そのまま一度離れると下半身のバウ・ナッターを武者に向けて最大出力で飛ばした。

バウのkokopittoは胸にある為下半身をこのままぶつける戦法がバウ最大の特徴だった。迫るバウ・ナッター、

「甘い!!」

しかしアイの武者はバットの様にGブレイカーを横に振りかぶる。そしてバウ・ナッターを野球のボールの様に打った。

「なっ?!」

打たれたバウ・ナッターがバウ・アタッカーめがけて飛んできた。

「無茶苦茶だ!!」

慌ててかわすバウ・アタッカー、しかしアイはその隙を逃さずGブレイカーを振りかぶったままバウに飛び、そのままバウ目掛けて振り下ろした。

「ふつとべええつ!!!」

「飛行を封じるだけじゃなく!!完全に破壊するべきだったかあああつ!!!」

そのパワーにバウは一溜まりもなく押しつぶされ爆発した。

「やっぱ、凄いよ……」

観戦モニターでアイの活躍を見ながらナナは呟いた。

「あーあ、俺の負けか。ま、いい勝負が出来たよ。なるほどコンドウさんが目をつけるわけだ」

「凄いよアイ、こんな強敵にも勝つなんて、やっぱアンタ才能あるよ」

「そんな事ないよ。ただ必死だっただけ」

「そう?」

「才能っていうより、好きって気持ちかな」

アイの発言にナナは首を傾げる。

「あの三兄弟の時もそう言ってたよね」

「正直あの状況じゃやられるかもって気持ちで一杯だったよ。でも好きって気持ちがあったから自分の作ったガンプラを信じられたし、

支援機の装備なんてアイディアも浮かんだしね」

「そりゃあ嫌々作ってらあんなのは浮かばないな」

「好き、か……アタシも好きになれたら、ガンプラうまくなれるかな?」

買ったガンプラの袋を両手で抱きしめながらナナはアイに聞く。

「当然だよナナちゃん。もしかしてうまく作れるか不安?」

「……うん。こういうのって経験ないし」

「大丈夫。解らない所あったら私が教えてあげるから、だから……一緒に作ろうよ」

手を差し伸べるアイ、アイは内心嬉しきで一杯だった。友達がガン
プラに興味を持ってくれる事が、

「アイ……うん！」

安心するかのようにそれを掴むナナ、ツチヤはその二人が下へ降り
ていくのを見守っていた。

——コンドウさん、新しい風がまた吹いたみたいだぜ……——

若さが熱を生み、熱が風を生む。今ここに新しいガンプラビルダー
が誕生しようとしていた……

……おまけ……

「ところでなんのガンプラ買ったの？」

「あ、うん、これなんだけど」

ナナは袋からガンプラを取り出した。HGエールストライクガン
ダムだった。

「え……ナナちゃん、これって」

「ちっちゃい時見てたからアタシも知ってる奴選んだんだけどね」

「いや……これもうすぐリニューアル版出るよ……？」

「……嘘オ!!」

——HGCE版エールストライクガンダム、二月発売予定——

第7話 『始まり』のきっかけ」（エールストライクガンダム登場）

「あ……エールストライカー、尻尾（スタビライザー）組まないで作っちゃった。どうしよう……」

「大丈夫、接着剤使っていないんだし、それくらいの組み間違えだったら簡単に対処できるよ」

ナナをアイは落ち着かせるように諭した。二人がいるここはアイの家、そしてアイの部屋、部屋の中心にある四角い白テーブルを向かい合う形でアイとナナは座っていた。

ナナはアイのレクチャーを受けつつ初めて買ったガンプラを製作していた。ナナが買ったのは旧HGのエールストライクガンダム。

もうすぐリニユール版が出るとアイに言われて作り始めは少し不満そうだったが作ってるうちにそんな不満は吹き飛んだようだ。今は集中してガンプラを作っている。

時刻は夜八時を過ぎている。家が隣同士の為、この時間でもアイの家にいる事にお互いの親に許しは事前に得ていた。

「隙間にデザインナイフを差し込んで慎重に開けて……」

「ん……よしっ」

一度組んだエールストライクのエンジン部を開けるナナ、製作中の間違いの修正だ。

うまく開けるとスタビライザーを組み直す。

「ふーっ、良かった」

「本体は出来たからあと少しだね」

「うん、工具借りちゃって悪いね」

「いいって、工具だけでもお金かかるもん」

長い時間アイは教える形で喋りつつづけているが疲れた様子はない。反面ナナは慣れない作業で少し疲れたようだ

「後少しだけどちよつと休憩しようかな？ずつと体勢変わらなかったから疲れちゃった」

「OK、じゃあ飲み物持ってくる」

「お願い」

アイが部屋を出ると『んゝっ』とナナは両腕を上げて体を伸ばす、そのまま時計を見て時間を確認する。もうかれこれ組み始めてから一時間以上たっていた

「あつという間に組み立てられると思ったけど、結構時間かかるもんなんだね。ガンプラって」

アイが持ってきたオレンジジュースを飲みながらナナは言う、しばらく何も口にしない状態だったからか飲むと体全体に染みるようだった。

「うん、面倒に感じちゃった？」

「全然、結構夢中になって作っちゃった。出来上がってくると止まらなくなっちゃってさ。なんか、この年齢でこういう夢中になる気持ちって新鮮かも」

たはは、と笑うも直後フツとしんみりした表情をするナナ、

「そう？好きな事やってれば割と当たり前だと思っけど？」

「そんな事ないよ。アタシあんまり熱心に打ちこんだ事ってないからさ……あんまり趣味っていうのもった事ないんだ。

流行とかは付き合いで参加したりするんだけど、そのまま離れていくのがほとんどかな？」

そう、器用ではあるものの、あまり趣味らしいものを彼女は持った事がない、ナナはそんな自分を煩わしく思っていた。

「そんな時アイが転校してきた。普段どんくさいアイがバトルではあんなにカッコよく立ち回って、作る物も綺麗で、

なによりガンプラやってる時のアンタの顔、凄く楽しそうだったから、アタシもやってみたくって興味に繋がったってわけ」

「そっかー、……ん？どんくさい？」

途中の発言に戸惑うアイ、あ！と同時に戸惑うナナ、これは純粋な感想であってやましい気持ちのある発言ではなかった。

ナナは思ったことをすぐ口に出す為、こういったトラブルがたまに

ある。

「あーゴ！ゴメン！別に悪意はないから！」

「もうー！」

「まあ、要はだからアイと同じ物に触れてみたいって事よ。それがアタシにはきつかけをくれた感じ」

「そんな、きつかけになるような事私してないよ。でもちよつと照れるかな？」

顔を赤らめてやや恥ずかしそうに頭をかくアイ、

「そういえばさ、アイはガンブラ作るきつかけてどんなだったのよ？」

ナナの質問が出た瞬間、ビクツとアイの体が震えた。

「え？私……？いや、なんとなくだよ。そんな……」

ジューズ片手にどもるアイ。明らかに「何かある」という反応だ。「何か隠してる……？言つてよーアタシ言つたんだからさー」

ねーねーと笑顔ですがるナナ、アイはとぼけるような動作をしていたがしばらくそれが続いて根が折れたのだろう。

「わ・わかつたよ……話すよ……話すから」

手に持ったコップを置いてアイは語り始めた。

……

——あれは何年前、年に一度、全国のガンブラビルダーが参加する大会「ガンブラバトル選手権」での事だった。

当時私は中学生、その時の仲のいい友達が今の私並にガンブラ好きでさ。一緒に参加しようって言うてきて、わざわざ静岡まで行ったの。

当時はガンブラは男の子向けだったって印象持ってたから、とつつきにくかつただけど押し切られちゃって……その時初めてガンブラを作った。

HGの『ダブルオーライザー』ガンダムOOの後半主人公機だよ。

でも大会当日、会場で友達とはぐれちゃって……、会場の廊下で途方に暮れててウロウロしてたら転んじやってさ、

カバンにに入れておけばよかったのにガン普拉を手に持ってたから、落としてバラバラにばらけちゃったんだ。

散らばったパーツを這いつくばって探して、ほとんどは見つかったんだけど、一個だけ……額のクリアパーツだけ見つからない……。

周りに人もいなくて、すごく悲しくなってきたり泣きそうになって、その場にへたり込んで、

とうとう顔を伏せながら声を殺して泣いちゃった……『こんな思いをするのなら作らなければよかった……』そう思ったその時……

「あの……何かあったんですか？」

声が出た。顔を上げると青髪の男の子がいたの。見た感じ年齢的に小学校高学年くらいかな。年齢が近そうなお子だったよ。

「ガンプラ……落としちゃって……パーツがないの……」

「良かったら探すの手伝いますよ」

私が消え入りそうな声で伝えるとその子は一緒に探してくれたんだ。二人で探してたからか、それとも運が良かったのか、その子がパーツを見つけてくれたの。

「あつた！これですよね！」

「うん！それだよ！そんな所に飛んでたんだ！」

その子が失くしたパーツを見つけてくれて、私は壊れたダブルオーライザーを治す事ができた。うれしくてその子にもう何度も頭下げしてお礼言った

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「いいですよ。当然の事をしたままでですから」

こう謙虚な態度されるとどつちが年上か分からなくなってきた。ちやうど何故か私の方が敬語になっちゃった。

ふと私はその子がガンプラビルダーのパイロットスーツを着ていることに気が付いた。

情けないけど、探しているときは気が動転してたから気付けなかったんだ。

「その格好、あなたも選手なんですか？」

「え？あ！あああ!!いけない！試合参加するの忘れてた！急がなきゃ

！それじゃ！」

そのままその子は急いで会場に走っていった。名前位聞いておけばよかった。

そう思っていたまま会場に戻って、結局試合出れなかったから観客席で試合見てただけど……、

その時、突然白いガンダムが試合に乱入してバトルで大暴れしたの！もう物凄く強くてさ！そしてそのの相手をするのは青いアーマーを着たガンダム！

その戦いは別のガンプラが割って入れないようなバトルだったよ！

普通だったらレベルが高すぎて『私にはこんな無理だ……』そう思っていたかもしれない。でもね、そんな事は思わなかった。

むしろ『なんて楽しそうなんだろう。私も参加したい』そんな風に思えてきた。周りの皆も同じ気持ちだったのかな？

観戦モニターに集まって楽しそうに見ててさ！本当に楽しそうに戦ってたんだよ！

「フフフ……！楽しいな、少年！」

「はい、ガンプラは楽しいです！それに奥深い……、そしてなんととってもこんなにも面白い！」

その時、白いガンダムからした声から乗っていたのがあのパーツ探すのを手伝ってくれた男の子だって気づいたんだ。

大人びた印象すら感じた子が、相手とお互い大好きな物で楽しそうに戦ってる。

「そっか……君だったんだ……」

私はその戦いに見とれつつも、そう呟いた……。

その後、試合すっぽかしちやっただから友達に凄く怒られちゃった。助けてくれた子にもう一度お礼を言いたかったんだけど

怒られてる内に帰っちゃったみたいで会えなかった……、でもその子の事がどうしても忘れられなかったの。

「アンタがすっぽかきなきやもうちよつとはマシな結果になったのに！！ちよつと聞いてんの!?!」

「え……うん……あ、あの白いガンダムに乗ってた子は？」

「あ？白いガンダムの子？あくあのガンプラマイスターのボリス・シャウアーと戦った。確かイレイ・ハルって名前だったっけ」

「イレイ・ハル……ハル君……か」

「って何話すり替えようとしてんのよアイ！大体アンタはね……」

自分の中で、自分でも解らない感情が彼に湧いてるのを感じた。もう一度その人に会いたい。けど方法が思いつかない。

だからガンプラの腕を上げればもう一度その人……イレイ・ハル君に会えると思ってガンプラを進んで作る様になったんだ。

しばらく作ってていつの間にか凄く楽しく感じて、勝手に熱中しちゃってたけどね。

今は会いたいって気持ちから、あんなガンプラバトルをハル君としたいって気持ちに変わったのかもしれない。――

……

「え！えええ！？じゃあじゃあ！好きな人ともう一度会う為にガンプラにハマったわけ!？」

驚いたリアクションを取るナナ、しかし表情は物凄い笑顔で眼は物凄くキラキラしてる。恋愛には興味深々になるのはどこの女の子でも同じらしい。

「ち！違うよ！別に好きだとかそういう感情じゃなくて……だああもう!!だから言いたくなかったんだよ!!皆そう言うんだもん！」

顔を真っ赤にして頭をかきむしるアイ

「でも好きなんですよ？その子の事」

「そういうんじゃないよ……正直今となっては自分でも解らないよ……憧れか……恋か……それともあの試合位自分が熱中したい？」

それとももつと別の何か？……答えが出た試しがないよ……」

ジューズの入ったコップを両手で持ち、水面を見つめるアイ、

「そっか、でもちゃんとした理由になってる。いいと思うよ、アタシは」

「ありがとう……というべきなのかな？」

「でもまさかそんな理由だったなんてね」

ナナは頬杖をテーブルにつきながらニヤニヤする。アイはその顔を見ていたらまた無性に恥ずかしくなってきた。

「も！もう休憩十分でしょ！さっさと完成させようよ！後少しなんだから！」

「あはは。りよーかーい」

——…もし、アタシが興味もった理由があつたなら、バトル見たアンタと同じだったのかもね……—

ナナは誰にも気づかれぬ様心の中でクスリと笑った。

十数分後……

「出来た……」

「うん、普通に組んでシール貼っただけだけどよく出来てるよ」

「アイのレクチャーのおかげだよ」

そういうとナナは完成した自分の初のガンプラHGエールストライクガンダムを手に取り、自分の目線にもっていった。

「エールストライクガンダム……アタシの初めてのガンプラ。よろしくね。アタシのガンダム」

……

翌日、学校が終わり、家に帰るアイとナナは模型店「ガリア大陸」に再び集合する。ナナがガンプラバトルをする為だ。

「とりあえず、基本的な操作は私が言った通りだから後は自分の感覚で覚えて」

「でもアタシに出来るかな」

「大丈夫、誰でも出来るように出来てるから、要は慣れだよ慣れ」

「ありがとう、フォローお願いね」

店内ではアイがナナに操作説明をしていた。ナナは白地に赤と黒で彩られたパイロットスーツを着ていた。

と、その時カシャツとデジカメを切る音が聞こえる。

「へえ〜似合うじゃんナナ。まさに新しい戦士の誕生！って感じ？」

アイとナナにとっては馴染みある音と声だった。

「タカコ、ムツミも来たんだ」

「ゴメン、遅れちゃった……」

「それでも急いで来たんだよ？ナナがこうやって自主的にやりたがるってそうないからね〜」

タカコの発言にムツミもうんうんと頷く。

「勝利のシーンはバツチり撮っておくからね！ドーンとやっちゃいなよ〜！」

「あはは、ま、頑張るわ……」

緊張してるのだろう。ナナの声のトーンはいつもより低い。ムツミはそれを見抜いたようだ。

「初めては緊張するだろうけど、気楽にねナナ……」

「ムツミ……うん」

その後ナナとアイはGポッドに入る。今日はアイとナナのチーム戦、狙いはナナがガンプラバトルを体験する事、初心者の方に出る限りフォローを入れる為アイも同じチームだ。

「ナナちゃん。ムツミちゃんの言った通り、まずは気楽にいきましょうよ。私だって初めての時は緊張したけど今はこんな気楽にやってるからさ」

「わかった、やってみるね」

ナナのヘルメットにアイの声が通信で入る。そして暗かった画面が急に格納庫内部に切り替わる。画面上部に『シャングリラ内部』とフィールド名が表示される。

『シャングリラ』ガンダムZZにおいて物語の幕開けとなったコロニーだ。

「っと始まった！えっと……出撃は……」

ナナの表情に余裕がない。口ではああは言ったが緊張は拭いきれない。初めて体験するガンプラバトルに頭の中が真っ白になってしまふ。

「さつき説明した通り「いきますー！」っていつて出撃だよ！」

「……思っただけけどそのいきますってしているの？なんか恥ずかしい……」

「もお、挨拶みたいなものだよ！ハイ言った言った！」

「ああもう！わかったわよ！ハジメ・ナナ！エールストライクガンダム出ますー！」

母艦、アーガマのカタパルトからエールストライクガンダムが出撃する、……ストライクガンダム、ガンダムSEED前半の主人公機だ。

背中の装備を変える事によって様々な戦局に対応する事が出来る。今つけてるのはエールストライカーという装備で長距離のジャンプが可能となるストライクの代名詞ともいべき装備だ。

狭苦しい空間から一転、コロニー内部に出る、目の前に広がる広大な、だが円柱の内部にいるような街にナナは非常に新鮮な気分だ。

自分の眼下にはジャンクが積み上げられた山がいくつもあり、アーガマもその中に潜るように隠れている。露出した部分はカタパルトの部分だけだ。

その向こうには街、さらにその向こうの山の上には高級住宅街が見えた。

「凄い！本当に漫画の中にいるみたい……」

しかし呆けてる暇はなくナナは次にすべきことを思い出しうろたえた。

「ちよー着地方法どうやんの！ってきやああ!!!」

アーガマから飛び出したはいいがどうすべきか解らず、ストライクガンダムはジャンク山の中に頭から突っ込んだ。

「ナ・ナナちゃん……スラスターを全力噴射しすぎ……」

続けて出撃し、ジャンク山から足だけ出したストライクを引っ張り出すのは、アイの乗った105ダガーだ。

ストライクの量産型でこちらも背中の換装が可能な機体だ。今の装備は巨大なビーム砲、『アグニ』を備えたランチャーストライカーだ。

「うう……仕方ないでしょ、アタシ初心者なんだから……」

モタモタしてる暇はない、とダガーに支えられる体勢でナナのストライクは起き上がる。

敵が近づいてきているのは飛びながら近づいて来る機影で解る。

「といっても……敵は待つてはくれないんでしようけどね」

「あいにくね……きたよー!」

こちらが視認できたと同時に向こうも確認したようだ。今日のバトルは2 on 2。故に敵はこちらと同じ二機、片方はRGストライクガンダムルージュ、

もう片方は大型ビーム砲を持った細身の青い機体、シグーデープアームズ。

RGストライクルージュはグレーの戦闘機をそのまま背中に付けたような装備で、空からこちらに狙いを定める。

「アタシと同じストライク!?でも装備と色が違うー!」

ピンクと赤に彩られたストライクにナナが驚愕する。

「ううん!あれはRG(リアルグレード)ストライクルージュ!それも装備はI・W・S・P・!色も装備も通販限定の奴だよー!」

ストライクルージュ、ストライクガンダムの仕様変更ともいべき機体、装甲にかける電圧の変化で色が変わったという設定だ。

装備のI・W・S・P・は全てのストライカーの長所を合わせたストライクのいいところの重装備。

今回バトルで出てきた機体はプレミアムバンダイの通販限定の仕様だ。

もう一機、シグーデープアームズはこちらもガンダムSEEDの外伝に登場したシグーの公式バリエーション機だ。前途の通り身長ほどもあるビーム砲が特徴だ。

「げー!限定!?勝てるのアタシ!?!」

「同じ機体?!?!でもなんかナナのより強そう!」

観戦モニターでバトルを見ていたタカコも同じ感想だった。

「アイちゃん……ナナを守ってあげて……」

「私が注意をひきつけるからナナちゃんは隙をついて攻撃を加えて！」

ナナのストライクはいつでもビームライフルで援護できるように後方のジャンク山に待機している。

「うん……できるだけやってみる」

「こっちにおいで!!」

初心者のナナに無理させるわけにはいかない。二機の注意をひきつけるべく105ダガーは背中のアグニを展開。

そしてRGストライクルージュに撃つ、赤いビームの奔流がルージュを襲う、ルージュは難なくかわす、それはこちらからでも確認できた。

続けてシグーに撃つ、こちらもかわされたが狙い通り二体の敵はこちらに注意が向いたようだ。二機の頭部が105ダガーに向く。

「よし……こっちだよー」

まず近づいてきたのはシグーの方だ。上空から両肩のビーム砲を撃つてくる。アイはこれをかわすと腰のビームサーベルを抜き、一気にシグーに飛び上がる。

アグニでは連射が効かない上にエネルギー消費も激しい。その上撃ちあいでは向うの方が連射が効く分こちらが不利になると思ったからだ。

シグーも負けじと腰のレーザー重斬刀を構え応戦する。実体剣だが片刃の部分がビームになってる剣だ。

二体が斬り合いビームのぶつかるたびに激しいフラッシュを生み出す。

——よし!このままストライクルージュも——

アイがそう思った矢先だった。ナナの待機していた後方のジャンク山が爆発する。

「!? ナナちゃん!？」

「くうう……びつくりした……」

たいしたダメージは無いものの吹き飛ばされた状況に狼狽するナナ、上を見るとRGストライクルージュが飛びながらこちらを狙っていた。

見抜かれていたか。もしくは途中で目標を切り替えたのか。いずれにせよこちらは狙われてる。どうするかと一瞬考えを巡らせるナナ。

「アイ、狙われちゃった以上こいつはアタシが相手をする！」

「ナナちゃん?! 待って! まだ慣れてないのに!」

「大丈夫! 自分から動かなきゃ慣れやしないでしょ!？」

通信でまくしたてる二人、立ち向かうという結論になったナナは、相手の至近距離で撃とうとライフルを構えそのままエールストライカーのスラスターを全開、高く飛び上がる。

——そこはサーベルがセオリーだよナナちゃん!——

そう思ったアイをよそにナナのストライクはルージュに迫る。ナナの予想では相手の腹部、コクピットにライフルを押し当て撃ち抜く、というものだ。

——後少し!——

ナナはそう思っていた。だが急にガクンと機体が止まる、

「え?!」

その瞬間を待っていた。とばかりにRGストライクルージュが右手に刀の様な武器、対艦刀を持ち落ちかけたエールストライクに斬りかかる。

エールのジャンプ飛距離が足りなかったのだ。向うはこちらがどれだけのジャンプ力を持っているのか、おおよそながら知っていたのだろう。

「ヤバっ!」

とつさにシールドを構え防ぐナナ、だがRGストライクルージュはそのまま対艦刀をシールドに切り付けた。

ルージュの刀身は塗装されており、バトル上の切れ味は増してい

る。その所為でただ組んだだけのナナのシールドは真つ二つにされ、エールストライクはその勢いで地面にたたきつけられた。

「うわっ!!」

ストライクの落ちた地点はアイの105ダガーから離れた場所だった。

「ナナちゃん!もう!邪魔しないでよ!」

アイはすぐさまナナの所に向かおうとしたが、シグーはしつこく追撃する、アイはレーザー重斬刀をビームサーベルで受けながらも右肩のガンランチャーとバルカン砲を発射。

シグーの頭部に当たりシグーの頭は爆散。致命傷ではないものの際を作るには十分だった。

「もらった!!」

そのままアグニを展開させシグーのコクピットに『ガッ!』と思いつき押し当てた。そのままアイはアグニを発射。零距离でビーム砲を発射されたシグーは腹に大穴が空いたまま沈黙した。

「よし!」

すぐさまナナのところに向かおうとするアイ。

一方ナナの方はRGストライクルージュが対艦刀を両手に一本ずつ構え地面に降りてくる。接近戦で確実に倒すつもりなのだろう。

片膝をついた体勢のエールストライクの前で対艦刀を振り上げるRGストライクルージュ、普通ならここで諦めるのかもしれない。だが……

「諦めるもんか!こんのおお!!!」

エールストライカーのスラスターを全開にし、ロケットの様にRGストライクルージュに突っ込む。さすがに向こうも突っ込んでくるとは思わなかったのだろう。

ルージュはみぞおちにストライクは頭から突っ込み、そのまま後方のジャンク山に突っ込んだ。その衝撃で雪崩の様に崩れるジャンク。

『なっ!』

タカコとムツミはナナのやり方に唾然としていた。

倒れたR Gストライクルージュがジャンクに飲まれる一方でナナは無我夢中でスラストターを全開し崩れるジャンク山から脱出した。同時に駆け付けるアイの105ダガー。

「ナナちゃん！大丈夫!？」

「アイ!? やった！アタシやったよ！一人で倒せた！」

初勝利に喜ぶアイ、だがその直後、ジャンク山が爆発し、中からR Gストライクルージュが空に飛び出す。

ダメージ覚悟でジャンク山の内側から撃ちまくったのだろう。ルージユのパーツは所々取れていた。

「え?!」

ナナが驚く声を上げる。R Gストライクルージュはシールドに取り付けられたガトリング砲とI・W・S・P.のレールガンを二人に向けて撃ちまくる。

アイは逃げつつもエネルギー残量を確認する。アグニを何度も撃ったせいでエネルギー残量が少ない。あと一発撃てばエネルギーが尽きる。

向うもそれを狙っていて積極的に接近戦を仕掛けてこないのかもしれない。高度を変えないからだ。

「アイ……やっぱ……初心者のアタシじゃ無理なのかな？」

「そんな事ないよ。向うは射程ギリギリから狙ってるだろうから、せめてあそこまで飛べれば……」

「さっきアタシ飛ぼうとしたけどアタシ一人じゃ……ん？」

ナナはハツとした。ナナのエアーストライカーなら後ちよつとまで届いた。ある程度の距離を保ってるのだろう。向うは飛んでる高度を変えない。

もう少し高く飛べればサーベルで切れるかもしれない。

——だけどさっきアタシが飛んだらギリギリ届かなかった……なにか足場があれば……——

周りはジャンクの山、乗ったらすぐ崩れるかもしれない。もつと

しつかりした物があれば使えるかも……と、ナナは思いついた。

「アイ、そのランチャーでアイツを狙い撃ちできる?」

「?出来るけど、一発しか撃てないよ?」

「大丈夫!アタシに考えがある!」

ルージュのビルダーは逃げ回る二機が動きを止めるのを確認すると同時に105ダガーがこちらをアグニで狙ってるのが見えた。直後、アグニが放たれる。

撃つたと同時にギリギリでルージュは回避。安堵するルージュのビルダー、その時だった。

「ナナちゃん!お願い!」

「うああああ!!!」

ダガーの後ろで控えていたエールストライクが、105ダガーの肩を足場にし、そのままハイジャンプした。同時にナナはストライカーを最大に吹かす。

「いけええつ!!!」

ルージュの目の前にビームサーベルを振り上げたエールストライクガンダムが飛んできた。

「!?」

「これで!!」

エールストライクはルージュ目掛けてビームサーベルを振り落す。対応の遅れたルージュは頭から真つ二つに切り裂かれ、爆散した。

これによりバトルは終了。ナナは見事初陣を飾る事が出来た。

「ナナちゃん!やったね!初勝利だよ!」

「本当凄いよナナ!機転であのハイジャンプするなんて!」

アイとタカコがはしゃぐ、ナナのGポッドをアイが開ける。中でナナは汗びっしりですべて呆けていた。

「あ……アイ、やったんだ……アタシ」

ナナはとにかく無我夢中だった。自分が勝ったというのを実感す

るのにアイに言われるまで気づいてなかったのかもしれない。

「ナナちゃん？」

「なんて顔してんの。折角の初勝利だつてのに」

二人のあとからムツミが話しかける。

「どうだった……？ナナ……」

「ムツミ……色々大変な目にあっただけど……結構いいかも」

自分で作った感覚、本気でガンプラバトルで遊んだ感覚、そして勝利した感覚。

改めてナナの心の中から湧き上がってくる。いずれもナナの心の中では初めて、もしくは久しく感じてなかったものだ。

もっと感じたい、ナナはそう思った。そしてその為には……

「もっとうまく作れるようになりたいな、もっと作り方教えて、アイ」
「ナナちゃん……。もちろん！一緒に楽しもうよ！」

自分にとって熱中出来るものが見つかって、更に友達との距離が近くなれた、ナナにとって今日はそんな風に感じた一日だった。

「うん……。気に入ったみたいだね……。ナナ……」

よかった、と言わんばかりにムツミは微笑んだ。

第8話「見えない敵」(ビルドダガーフルパツケージ VS ハイゴツグオリジナルカラー)

朝日が部屋に差し込む中、目覚まし時計のアラームが部屋に鳴り響く。

「う〜……」

部屋の主、ハジメ・ナナがベッドから寝起きの第一声をあげた。ナナはベッドから手だけを枕元に伸ばし、目覚まし時計を探る。

手で目覚まし時計を探り当てると上のスイッチを押し目覚ましを止めた。

寝ぼけ眼のまま、ナナはベッドから上半身を起こした。寝起きの為、髪型はいつものポニーテールではなく解いたセミロングだ。

そして棚の上に眼をやる。女の子の部屋らしいぬいぐるみの中に一体だけ似つかわしいプラモデルが飾ってあった。

先日初バトルにて初陣を飾ったHGエールストライクガンダム。

「……」

見てナナの顔がフツとほころぶ、先日の勝利が嬉しかったのだろう。部活や趣味に無頓着だったナナにとっては久しく感じてなかった感覚だ。

人間勝つ感覚を覚えると病みつきになるもので、その感覚はゲームだろうとスポーツだろうと変わりはない。

「よしー！」

もつとガンプラがうまくなりたい。そう決意しながらナナはベッドから出た。

……

「で、色塗りに挑戦してみたいって？」

「うん、教えてくれない？」

所変わって学校の昼休み、いつもの様にナナ、アイ、タカコ、ムツミの四人は机をあわせて昼食をとっていた。

「やっぱオリジナルの色のガンプラだつて多いじゃない？アイだつて

そうだし、アタシもそういうの挑戦してみたくなくてさ、

まあオリジナルってのはあくまで今後の目標だけだ」

「へえ、随分強気じゃんナナ、これはちょっとしたスクープだよ」

「本当……今までなかったからね」

ナナが思いのほかガンプラに食いついてくる。タカコとムツミはナナの食いつきに驚いていた。

「あはは、で、オリジナルカラーってどんな色に挑戦してみたいの？」

「青い部分を赤にしてみたいかななんて」

「それってストライクルージュのパーツ使えば再現できるんじゃない？」

「あ、そっか。まあおいおいどういう風にするのかは考えるところとして……。そういうのどの種類選べばいいのか分からないからさ、

選ぶの教えてほしいんだ。絵の具？……塗料っていうの？」

「OK、私のほうも切らしちゃってるのがあるから行く用事あったし、帰りに行こう」

「サンキュー。これからどんどん実力つけてみせるわ！目指すわア伊ってね！」

「え?!ちよつとナナちゃん!?私そんな目標になる程うまくないよ!!」

「今回は本当はまったって感じだよねえ」

「うん……いい傾向だと思うよ……」

……

模型店『ガリア大陸』

「まあとりあえず、最初は筆とか使う必要はないよ。まずはガンダムマーカーで慣れてから筆、これが鉄則かな？」

マーカーの棚を指さしながら教えるアイ。

「でもよく考えたら言ってくれば道具貸すのに、どうして？」

「それはうれしいんだけどさ、やっぱあんまり頼り過ぎたらよくないつて思ったからね、いずれはアタシも道具一式揃えるつもりだし」「そっか、それでもわかんないとこあったら教えてあげるよ」

会計を済ませた袋にガンダムマーカーのセット(消しペン込)を入れるナナ、中にはそれ以外にもニツパーが入っていた。本格的に自分

でも道具をそろえるつもりだろう。

友達がこういった物に興味を持ってくれるのはうれしい、アイは食いついてくれた友達に対し心の中でガッツポーズを取っていた。

自分がこういった影響を及ぼしたのは始めてだから嬉しさもひとしおだ。と、そう考えていると店の二階から歓声が聞こえてきた。

「二階？なんだろう？」

「なんか凄いバトルでもあった？行ってみようよ」

二階に上がる二人、二階にはガンプラバトルの機械、Gポッドが1チーム3体、2チーム分の為計6体向かい合うように置かれていた。もう今となつては見慣れた風景だ。

その間のスペースには観戦モニターが置かれ、そこそこの広さを持った空間は観客でごった返しになっていた。

「何か凄いバトルですか？」

アイが二階にいた店員のハセベに声をかける。

「おおアイちゃん、ミッションステージだよ」

「ミッションステージ？対戦じゃなくて？」

ナナが聞き慣れない言葉に首を傾げる

「対戦相手がいなくても出来るガンプラバトルがあるのさ、特殊な条件下の相手と戦ったり、CPUで定められた相手を倒したり、まあアーケードゲームの一人用モードみたいなものかな」

「へえ、対戦以外にも出来るんだ」

「といつても今回はビルダー操作の機体が相手なんだけどね。ある能力を付加したビルダーの機体と戦う内容だよ」

「へえ〜」

ちよつとアイの反応が興味を持った感じだ。

「お？ちよつと興味ある感じ？やってみたら？アイ。」

挑戦を促すナナ。その時だった。

「おや？誰かと思えば……コウヤを倒したヤタテさんって人かい？」

聞き慣れない声がする。Gポッドの方だ。アイとナナが声のした方を向くとパイロットスーツ姿の少年がいた。ヘルメットは外して

おり三白眼が特徴だった。年齢はアイと近そうだ。

「ハセベさん、俺の機体は絶好調だよ。もうちょっと能力制限をつけていいくらいさ」

「おお良かった。紹介するよ。ミツシヨンステージの相手役を務めさせてもらってるカワサキ・ナガレ君だ」

「よろしく、コウヤから話は聞いてるよ。『ウルフ』のメンバーからも目を付けられてるらしいね。羨ましいよ」

コウヤ、以前アイと対戦した模型部の少年だ。

「ヤマモト・コウヤ君を知ってるんですか？」

「知ってるも何も同じクラス、同じ模型部だよ」

ニツと笑うカワサキ・ナガレ、意外そうに驚くアイ

「模型部の!?!」

「そう、で、まあ君の実力はある理解しているわけだけど、是非とも戦ってみたいもんだね。参加してみない? ミツシヨンバトル?」

促がすカワサキ、いつもとは違うバトル、アイはどんなバトルになるか興味がある。

「望むところ! よろしくお願いします!」

アイは二つ返事で応じる。

「よしっ。じゃあハセベさん。次はコイツと勝負ね!」

「じゃあ着替えてきますね」

「アイ、頑張ってね!」

盛り上がるアイとナナ、その向かいでカワサキと呼ばれた少年は内心緊張していた。コンドウに眼をつけられた人物が相手だからだ。

「ちよつとトボけた感じだけど……気合いれていかなきゃな……」

誰にも聞かれない小さい声でカワサキは呟いた。

今回のフィールド名が表示される。『ジャブロー』、一見すると地上はステージの端から端までジャングルだが、

地下に巨大な基地が格納された場所でファーストガンダムの連邦の拠点だ。地上のジャングルと地下の基地とでは戦い方がまるで

違ってくる。

「さて……能力付加の相手って言うってたけど……」

アイは機体を飛ばしながら敵機を探す。今回は105ダガーに『ガンダムビルドファイターズ』の主人公機、『ビルドストライクガンダム』の背面装備『ビルドブースター』

とビルドストライクの装備を取りつけたビルドダガー・フルパツケージだ。

敵が確認できない以上、ひとまずジャングルの中に身を隠すべきか、とアイが思った時、コクピット内に警告音が響く。

「!?下から!?!」

いきなり前方からアイのビルドダガー目掛けてミサイルが飛んできた。

「先制攻撃!?!」

アイはミサイルをかわそうと急上昇、だがミサイルは追尾してくる。

「くっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ!!」

アイはビルドブースターの出力を最大に上げる。可変翼が動きスピードが増す。そのまま追尾ミサイルとの距離を開けた。

「今だー!」

そのままアイはビームライフルをミサイルに向け発射、ミサイルを撃ち落とす。

「一体どこから?!」

高高度から下に目をやるが敵機は確認できない。だがミサイルが飛んできた付近に違和感を覚える場所があった。

「ッ?何アレ」

一部分で木々が不自然に葉っぱを散らし揺らしていた。その場所に何かがある事は直観的に分かる。

奇妙な事にバーニアの噴射してる火だけが見えてるからだ。透明な何かジャングルの木々スレスレを低空飛行してる。

あれが敵だと思い、すかさず背部のビルドブラスターの下部を展開させる。ダガーの両腋からビームキャノンが突き出す。そのままアイはビームキャノンを撃った。

二本の大型ビームが透明な物体に迫る。

「やっぱ気づいたのか、なら出し惜しみはナシだ!」

それは機体を縦にし、二条のビームの間をすり抜ける様にかわした。(アイからは物体は見えないが)そのまま一気に急上昇し急接近その際に正体を現す。長く伸びた片腕、もう片腕は円柱状のカバーに包まれ、背中に装備されたジェット・パック、メタリックの黒にペイントされたボディ、首のないずんぐりむつくりの体系、ダガーのすぐ近くに現れたその正体は……

「黒いハイゴッグ!」

ハイゴッグ、『機動戦士ガンダム0080ポケットの中の戦争』に登場した水陸両用モビルスーツだ。見かけによらずかなりの軽量だ。

「そう、こいつはミラージュコロイドステルスを装備したハイゴッグだ!」

腕のカバーを吹き飛ばし、中のミサイルをダガーに向ける。ハイゴッグはそのまま至近距離でミサイルを撃った。

いきなり目の前に現れたのだ。不意を突かれたアイはとっさにビルドダガーのシールドを構える。ミサイルはシールドに当たり爆発。

「くああ!!」

衝撃でビルドダガーはジャングルに落とされてしまう。

「くっ……ミラージュコロイドなんて……そんなのあり?!」

「能力付加って言ったろ?」

ミラージュコロイド、ガンダムSEEDに登場した技術であり、電磁的・光学的にはほぼ完璧な迷彩を施すことが可能なステルスである。

見えない反面、熱紋・電磁波の秘匿が不可能、エネルギー効率が悪い。

ステルス中武器の使用は出来ない等問題も多い。作品と時代の違う技術の装備にアイは違和感を感じずにはいらなかった。

「うう、汚れちゃった」

すぐさま起き上がるビルドダガー。落ちた際に顔を地面にぶつけてしまったのだろうか、葉っぱと泥で視界を汚してしまった。

ハイゴッグも背面のジェット・パックを切り離し、木々をなぎ倒しながら降り立つ。

視界の汚れをそのままに、後退しつつビームライフルで迎撃する。しかし向うもこちらを追いかけながら両腕のビームカノンを撃ってくる。

「くっ!!」

「甘いぜー!」

アイはビームを凌ぎながらビームライフルを撃ち続けた。しかしカワサキのハイゴッグは定期的にステルスを発生させ移動する。

「これじゃ当てづらいー!」

そして相手が予想してない方向からビームを撃ち、またすぐ姿を消し予期せぬ方向から撃つ。そうしながらハイゴッグはビルドダガーを追いつめていった。

「卑怯よアイツ!姿を消すなんて!」

「まあまあ、そういうミツシヨンだからね」

ナナが憤慨しながら観客と観戦する。横で見ていたハセベがナナをなだめる。ナナの迫力に対してかちよつと弱腰で口調も弱弱しかった。

「しかし今アイちゃんは機体を汚した……、これがこのステージが攻略のヒントだという事に気付いてくれればいいけど……」

「は？何言ってるの？」

ハセベの独り言に一人疑問を持つナナだった。

ビルドダガーが後退してる内に足が水に入った。川まで逃げてきたのだ。とその時、いきなり目の前に泥がビルドダガーの顔を掴む。

「!?」

驚くアイ、そして泥からハイゴッグのクローが浮かび上がる。泥の付着したハイゴッグの左腕だったのだ。

顔を掴まれ、宙に持ち上げられるビルドダガー。その拍子にビームライフルも落としてしまった。

「しーしまったー！」

「よく持った方だよ！だけどこれでチエックメイトだ！能力に頼ったこんな勝利はしたくないんだけどなー！」

ハイゴッグは右腕をビルドダガーの胸のすぐそばに向ける。コクピットをビームカノンで撃ち抜くつもりなのだろう。

一瞬アイは思う。姿さえ見えれば……と、とアイはある事に気付く、ステルスを発生させても付着した泥はそのままだった。つまり

……

「そうか!!」

アイはダガーの両手でハイゴッグの左腕を掴む。

「チツ！何をする気かは知らないがもう終わりだつ!!」

撃とうとするカワサキ、しかしビルドダガーは足を思いつきり振り、撃つ寸前だったハイゴッグの右腕を蹴り上げた。蹴り上げた右腕は真上にビームを放つ。

「なに!？」

思わぬ抵抗に気がそれるカワサキ

「い・ま・だああ!!」

すかさずアイはビルドブラスターを全力で吹かす。その出力にハイゴッグはよろけ、ビルドダガーの足が地に着いた。

アイはビルドダガーの頭を掴まれたまま、ジャイアントスイングの要領でハイゴッグを振り回す。

「うあああああ!!!」

「う!? うおおお!!!」

自分の機体の頭部が壊れてもかまわないと言わんばかりの勢いだ。そのままビルドダガーはハイゴッグを川岸に叩きつけた。

「うわああ!!」

寸前でハイゴッグの腕は外れてしまった為ビルドダガーの頭部は無事だった。

回転から衝撃とカワサキのGポッドを凄まじい振動が襲う。が、叩きつけてもハイゴッグを破壊するには衝撃が足りなかったようだ。

「じ・地面が柔らかかったから助かった……、一度体勢を立てなおさないといとー!」

「待ってよー!」

眼を回しつつカワサキはハイゴッグの姿を消す、逃がさないとばかりにアイはビルドブースターのビームキャノンを撃った。

「今更そんなもの……どわっ!」

当たるわけないとタカをくぐるカワサキ、だがビームは真っ直ぐハイゴッグの左肩を撃ち抜いた。

ビルドダガーはそのまま腰のビームサーベルを抜き真正面にビルドブースターを吹かす。

真っ直ぐ自分に向かってくるビルドダガーにカワサキは何故自分が分かるのか理解出来なかった。

「どーどうして!」

「切り落とされた腕……みてごらん!」

「なんだと……泥!」

切り落とされた左腕に泥がこびりついているのが見えた。さつき川岸に叩きつけられた際、ぬかるみで泥を塗られてしまったのだ。

自分で見えない部分、ハイゴッグのボディ大部分は泥でべつたりに

なっていた。

「今度こそトリックは通用しない！終わりだよ！」

そのままハイゴッグを脳天から真つ二つにするビルドダガー

「こーこんなベタな方法でやられるなんてええっつ!!」

そのままハイゴッグは爆散した。

「凄いよアイ！あんな土壇場で勝ったなんて！」

「やっぱ小細工しても勝てないよなあ、ウルフに目を付けられるハズだよ」

「しかしよく気付いたねアイちゃん、対策をかねてジャブローステージだったんだけど……」

「対策を兼ねて、ですか？」

「そう、ジャングルというあのステージでは川以外にも泥や葉っぱで汚れが付きやすい。長期戦になればなるほどハイゴッグは汚れて姿をさらしやすくなるわけだよ」

「げえ、俺知らされてなかったよハセベさん……」

「そんな意図あつてのステージだったんですか……じゃあなおさら運が良かっただけですよ、あそこで気付かなかつたらやられてました」「確かにそうかもしれないけど運も実力のうちってやつだよ」

「恥ずかしいのだろうか、感心するハセベをよそにそそくさとアイはナナの方に駆け寄った。

「でもあの敵もオリジナルカラーだったよね。アタシもあんな風に塗れたらなあ……」

黒いハイゴッグを思い出すナナ、ちよつと羨ましそうだ

「大丈夫だよ。練習すればきつと出来るよ」

「うん、じゃあ帰ったらストライクを塗ってみるかな？」

「どんな色にするの？」

「オリジナルカラーもいいけど……やっぱまずは設定通りの色で行ってみるよ」

こつちにきて初めてのガンプラ仲間……アイは改めてうれしく感じた。

第9話「ねじれた少年」(ガンダムAGE―2Eコカトリス VS ザクIV)

砂浜の広がる海岸線、そこで赤と白、二体の巨人が戦っていた。広大な砂浜もこの巨人の前には庭の様な狭さだ。

片方の赤い巨人、イージスガンダムは両腕の袖部からビームサーベルを発生させ突きの体勢で切りかかる。

攻撃対象の白い巨人、ソードストライクガンダムは巨大な片刃の剣『シュベルトゲベル』を両手で構え身構える。

二体とも『ガンダムSEED』に登場した機体だ。

「くうっ！」

イージスはまず右腕で突く。ストライクは機体をかがませ、うまくイージスの懐に飛び込む。

イージスはそのまま左腕のビームサーベルでストライクを貫こうとする。

「甘い！」

ソードストライクに乗ったビルダー、ナナが叫ぶとストライクのシュベルトゲベルを上に取り上げる。

切り落とされたイージスの左腕が宙に舞った。すかさずバックステップで距離を取るイージス。

「よしっ！」

ナナがガッツポーズを取る。またもイージスが突っ込んでくる。二機は何度も切り合いやがてイージスが後方に吹き飛ばされた。派手に砂を上げて倒れ込む。

「覚悟オっ！」

ナナは叫ぶと同時にGポッドの中で勝利を確信する。そのまま対艦刀を振り上げる。が……

『ヴンッ！』という音と共に、ストライクのすぐ横に黒い機体が現れる。ミラーージュコロイドステルスで姿を隠していた忍者のようなガンダム『ブリッツガンダム』だ。

これも登場作品はガンダムSEEDである。

「えっ？」

ナナが気づくも時すでに遅し、ブリッツは右腕のビームサーベルを発生させ、シユベルトゲベルを振り上げたままのストライクを腹部から真つ二つに切り裂いた。

「あくあ、負けちゃった。もう少しだったのにい」

落胆するナナ、『貴方は撃墜されました』の表示がブラックアウトしたモニターに表示される。

「お疲れ様。惜しかったね」

ガンプラバトルで敗北し、うなだれながらナナがGポッドから出てきた。ナナの脳裏には撃墜の瞬間のブリッツの顔が頭に焼き付いていた。

「せっかく色塗ったりしたんだけどなあ」

「まあしようがないよ、不意打ちだったんだし、それでもずいぶん前と比べて動きよくなってきたよ？慣れてきたじゃない」

「そう？まあこいつも結構手を入れたからかな？動かし甲斐が出てきたって感じ」

ナナが手に持ったソードストライクを取り出す。スミ入れ、色分けのされていない部分限定、ムラもありながらもガンダムマークで塗装したナナ入魂の一品だ。

「とりあえず今のアタシじゃここまでだけど……もっともっとうまくなりたいな。こいつもアタシの努力に応えてくれたわけだし」

「あそこまで原作再現するとは思わなかったけどね。私含めて外で見るギャラリィ驚いてたよ、そこでブリッツにやられてたのがなんとも……」

先程のナナのバトルはガンダムSEED本編でそっくり同じシチュエーションがあった。本編で撃墜されたのはストライクではなくブリッツだったか

「えっ？そう？見てたのちっちゃい頃だったから、わかんなかったけど……」

SEED自体ナナは見ていたがもう十年以上前の話だ。覚えてないナナは首を傾げ、それを見たアイは、アハハ……と苦笑する。

「ま、気にいったしとことんまでやってみるわよ、どうせなら無敗って言われるくらい強くなってみせようじゃん？」

「わ、随分大きく出たね」

「えくでもアンタそれくらい強いし、アイもそういうの考えていたってあるんじゃない？」

一見しつかりしてそうなナナも時たま調子に乗る様な面を持つ。アイも初めこれには驚いていたが

こうした面を見せるという事は、付き合的にアイを信用してきた証といえるだろう。

クラスではちよつとキツイが面倒見のいい、しつかり者という印象が強いのだ。

「そんな……こっちは必死になってるだけだし、正直いっばいっばいだよ」

「それで勝ってるんだから大したもんじゃん。それ位理想高くてもいいって思うでしょ？」

「そうッス。その通りッスよ」
『？』

ふと子供の声が出た。二人が振り返るとそこにいたのは一人の少年、赤毛の少年だ。年齢は13位か。

顔つきはいい、いわゆるカワイイ系の顔だ。だがムスツとした表情が近寄りがたい印象を放つ。

そしてアイとナナの二人は少年に見覚えがあった。

「あ、コンドウさんと一緒にいた……」

「アサダ・ソウイチ、『ウルフ』の三人目ッス。それよりも……」
眉間にしわを寄せながらソウイチと名乗った少年はアイに言う。

「勝ち負けってのはどんな競技や勉強にだって共通してある結果ッス。アンタならそれを十分わかってると思っただんすけどね」

『失望した』そんな感じのどことなくトゲのあるような言い方だ。

「？そりゃ私だって勝ちたいって気持ちはあるよ。でも勝つことだけ

に執着はしないよ」

「競うのにそれじゃいけないとは思わないんスか？時に、アンタはガン普拉作る時に何を思ってたって作ってるんスか？」

「そりや当然楽しいって気持ちで……」

「足りないッス」

アイの言葉をソウイチはバツサリ切り捨てた。

「え？」

「ガン普拉バトルの強さはガン普拉の出来も反映されてるッス。つまりバトルはガン普拉を作る時から始まっているってことッスよ。」

そっから勝つって気持ちが必要なけりや勝つことはできないッスね」

「それはそうかもだけど……」

「所詮アンタのは遊び、こんなのがコンドウさん相手にいい勝負をしたとはどうも信じられないッスよ。こんなポツと出がコンドウさんのお気に入りだなんて……」

苦虫を噛み潰したようにソウイチは言う。アイはムツとした表情になる。

「ねえ！いきなり現れてアンタ言い過ぎじゃない?!大体ガン普拉って遊ぶもんでしょ?!なんでそんな極論！他人のアンタに強要されなきゃいけないワケ!?!」

言いたい放題のソウイチにナナが止めに入る。が、時すでに遅し、アイもこんな風にケチをつけられて我慢は出来なかったようだ。

「そこまで言うんだったら勝負だよ。今度の土曜日10時にここで！」

「え!?!アイちよつと!?!」

「そうこなくっちゃ!俺としても実力をコンドウさんに示すチャンスッス!アンタに勝つ!必ずね!」

「望むところ!」

してやったり、とほくそ笑むソウイチ、はたから見てたナナは（あれ?ひよつとして乗せられた?）と思っていた。

……

「とまあ、勢いに任せてああ言ったもの……大丈夫なの?」

「言わないで……勢いで言っちゃったんってのは私も思ってるんだからさ……」

商店街を歩きつつアイとナナは帰路についていた。放課後にガンブラバトルで時間をつぶしていた為もうあたりは薄暗い。

「でもさ、アンタがあんな風にムキになるとはね。前の模型部の時はあんまり怒らなかつたのにね」

「いや、あの時はナナちゃんが止めてくれたからだよ」

「あれ？そうだったけ？」

ナナは忘れてしまつてたらしい、首を傾げて思い出そうとする。

「それはそれとして、でもさ、今日の怒り方はちよつといつもと違つた感じ」

「まあ、ね。ガンブラは楽しいつて前にハル君言つてたからさ……なんかそれも否定されたような気がして……」

「あ！好きな人の言葉を否定されるのは耐えられない!？」

からかうナナに顔を真っ赤にするアイ

「ち！違つてば!!!私はただ他のビルダーを馬鹿にされたのが嫌で!!」

「アハハ、ゴメンゴメン」

と、その時だった。

「やあ！お前ら、家にも帰らず大声出してどうしたんだ？」

一人の青年が話しかけてきた。アイとナナは眼鏡をかけたその男を知っていた。

「あ、ツチャさん」

以前アイと対戦した『ウルフ』のサブリーダー、ツチャ・サブロウタだ。否定した時のアイの声が大きかった為気付いたのだろう。

「ちよつと色々ありました」

「ちよつとツチャさん！後輩の面倒はもつとよく見てよー」

「ナ・ナナちゃん……」

「え？」

ナナの突然の発言にツチャはキョトンとしていた。

……

「なるほどなあ、ソウイチに勝負けしかけられたか」

商店街を抜けた住宅街を進みながらツチャを加えた三人は歩く。夜道を女の子だけでは危ないからというツチャの提案だ。

三人は並列で歩きながら、そしてナナは今日ソウイチに言われた事のくだりをツチャに説明する。

「勝つ気持ちが足りないから所詮遊びだっていったのよアイツ、失礼じゃない?」

「まあアイツの発言は悪かったけどあんまり言わないでやってくれな
いか。アイツも割と苦労してきたわけだし」

愚痴るナナをたしなめるサブロウタ

「苦労って?」

「元々チーム『ウルフ』ってのは俺とコンドウさんの二人で始めた集まりだったんだ。

その時はチーム名もなかったしお互いただ楽しくガンプラが出来ればそれでいい。って考えだったんだけどな。

それで色々バトルをこなすようになってビルダーとしても腕を磨いていた。そしてコンドウさん共々この辺じや有名なビルダーになってきたんだが……

そんな時、俺たちのファンと名乗る子供のビルダーが現れた」

「その人って……そこへ入ってきた新参があのアサダ・ソウイチ君ですか」

「そ、俺達に憧れてチームに入りたいてって言ってきてな、正直俺もコンドウさんも好きでやってきただけだから、ちよつとそう言われると気恥ずかしいもんもあつたんだが」

「チームには入れたんですよね?」

「当然、こつちとしても頭数足りなかったし、仲間が増えるってんだから大歓迎だったさ、でもちよつとあつてね……」

「?」

「入ったばかりの頃、ソウイチに文句言うビルダーが結構いたんだ。実力が釣り合っていないとか言われて、いちゃもんつけたりしてな。

アイツ、ソウイチはそれで泣かされることもしよつちゆうだった

よ」

「もしかしてその所為で……」

「まあ、な。だったら勝ちつづけなければいい。強くなればいい。そればかりが頭に優先しちやっつてあんなったってわけ、

実際俺たちもそういうやり方に注意とかはしているんだけど、アイツの中でその考えが固まっちゃっつてるのが問題なんだろうけど」

「そっか、そんな理由が」

納得するナナにツチャは再び口を開く

「ただ今回ヤタテさんに喧嘩吹っつけたのはそれだけじゃないだろうな」

「え?」

「ソウイチが泣かされていた時、いつもコンドウさんが庇って味方してくれたんだ。奴にとっちゃコンドウさんの憧れは人一倍強い。ただそのコンドウさんにはお熱な奴がいて……」

「まさかそれって……」

ナナがつぶやくと隣にいた人物に目をやる。

「まあそういう事だろうなあ……認めてもらいたいと思ってる相手が別の奴を認めてるって事で邪魔に感じてるんだろ」

同時にツチャも苦笑しながらその人物に目をやる。二人の視線を浴びる当人は……

「え……私!」

アイはようやく気付くと確認として自分を指さした。

「あくあ、要するに男のジェラシーと……みつともなく」

ソウイチの態度の正体が分かった途端に白けるナナ。

「憧れ……か」

対照的にアイは何か考えながら夜空を見上げていた。憧れという時点では少年ガンププライマィスター、

イレイ・ハルに憧れている自分と似ているのかもしれないと思ったからだ。そうこうしている内にアイの家につく、隣はナナの家だ。

「送って頂いてありがとうございます」

「本当、助かったわ」

「気にしないでくれ。それじゃあ俺はこれで」

用も済んだ為そのままツチヤは帰ろうとする。が、少し進んで確認するかの様に振り返った。

「なあヤタテさん、別に確認する必要もないかもしれないが、ソウイチに手加減はしないであげてくれ。ああは言ったがアイツはそういう情けは嫌いな奴だから」

「大丈夫ですよ。全力で受け止めますから」

解ってる。といわんばかりにアイは頷いた。

そして土曜日……

決闘当日、ガンプラバトルが始まる。

ステージは『南極・バークレー基地周辺』と画面に表示される。『ガンダムW』で主人公ヒイロと宿敵ゼクスの決闘が行われた場所だ。

「ヤタテ・アイ！出ますー！」

氷に覆われた大地にアイの機体が輸送機から降り立つ。今回のオリジナルウエアは『AGE2Eコカトリス』

ダブルバレットをベースにガンダムスローネツヴァイのパーツを中心に組み込んだ機体だ。肩にはツヴァイのファンクが供えてあり、足首下もツヴァイ、膝にレジエンドの両腰部のドラグーン。

ダブルバレットの肩についていたドツズキャノンを手持ちに改造したライフルを装備していた。

肩からケーブルが伸びておりドツズキャノンのエネルギーはそこから供給される。変形は不可能ながらある程度、単独での飛行が可能な装備である。

「参ったな……見え辛い」

アイが困惑した声を上げる。周囲はモヤがかかっており周りの状況を見るのは困難だ。

アイが警戒しているとGポッドに警告音が鳴り響く。同時に前方に

光が見えた。

とつさにアイは「ビームの光！」と判断。直後に七つもの砲撃がモヤを吹き飛ばし飛んできた。

「来たー！」

両足のバーニアを吹かし大ジャンプするアイの『AGE2Eコカトリス（以下コカトリス）』

自分の眼下にはさつき自分のいた場所をビームが飲み込んでいるのが見えた。

「チッ！惜しい！」

ソウイチの舌打ちが聞こえる。吹き飛んだモヤから機体が露わになる。『ガンダムZZ』に登場した機体、ザクⅢ改の改造機だ。

機体サイズはAGE2Eコカトリスより一回り大きく。本来緑のボディは赤と黒のツートンが中心、動力パイプやスパイクはイエローに塗られており攻撃的な色合いだ。

外見にも手が加えられている。頭部は『Zガンダム』に登場したマラサイの物に代えられており兜を被ったような頭だ。

右肩にはガンダムAGEのGバウンサーのビームライフル。

背部にはストライクノワールの翼が取り付けられており、両手にもハンドガンサイズのビームライフル、『ビームライフルシューティ』を両手でこちらに構えていた。

「赤いマラサイ?! ううん? ザクⅢ！」

「アンタを倒した実績を……刻ませてもらおう! このザクⅣ(フォー)で！」

ソウイチの格好は赤い陣羽織と同じく赤いパイロットスーツだった。やる気十分である。ソウイチは上空のアイを撃ち落そうと全身の火器をコカトリスに向けた。

「くうッ！」

避けてばかりじゃいけないとアイは判断し右腕のドツズキャノン
をザクⅣに向け発射、ドツズキャノンの光は真っ直ぐザクⅣに向う。

「っ！悪あがきをっ！」

撃つ動作を中断しかわすザクIV。アイは地面に降り立つとホバー移動しながらザクIVに両膝のドラグーンと右腕のドツズキヤノンでザクIVに迫る。

「舐めるな！手数はこつちが上なんだ！」

ソウイチもザクIVをホバーで前進する。三つのビーム攻撃をかわしながらビームライフルシヨーティで撃ちかえす。だがコカトリスは身軽な所為か機敏に射撃をかわす。

——コンドウさん達と違ってまだ粗削りって感じ！——

「らちがあかない！ウロチョロするなあ!!」

ソウイチは叫ぶとザクIVの背中の翼『ノワールストライカー』を展開、翼に仕込まれた2連装リニアガンを放つ。

「!？」

リニアガンは明後日の方向に飛んでいきアイの左右にある氷山に命中した。

「変な方向に撃って！」

直後破壊された氷山から雪煙が発生しコカトリスの周りを煙幕として包み込む。

「!？」

コカトリスの周りが雪煙で覆われる。こつちの目を奪うのが目的か!?!とアイは判断した。

「雪煙を煙幕に!?!常套手段だけど煙幕じゃそつちも見えなくなるんじゃないの!?!」

「見える必要なんてないんすよ！何故なら!!」

直後ノワールストライカーを展開したザクIVが飛び上がる。ザクIVはノワールストライカーを移植してある事によってある程度の飛行が可能になっている。

(元々取り付けてあったストライクノワールが飛べるため)

普通ZZの機体は飛ばない仕様だ。改造とはいえこの光景に見ているビルダーは絶句した者もいるだろう。

雪煙の上空に飛び上がると腰のビーム砲、翼のレールガン、両手と

右肩のライフルをいっぺんに下に構えた。
「フルバーストアタック!!! 消し飛べえ!!」

そして全ての砲門からまとめて一気に発射。発射された砲撃は雪煙の中のコカトリスを襲う。

『攻撃は最大の防御』それがソウイチの考えだ。手数で多さで圧倒する戦法をソウイチは得意としていた。

放たれた直後、砲撃は雪煙を貫き地表の氷原を破壊、大爆発が起こった。

「見えなくなっちゃった!? アイは!?」

観戦モニターで見てたナナは爆発の中のアイを確認しようとするがここからでは確認のしようがなかった。

仕留めたか? と雪煙を見つめるソウイチ、その直後、いくつものビーム刃のついた短剣の様な物が赤い粒子を吹かしながらザクIVに飛んできた。数は六つ。

「!? ファングか!!」

ファング、ガンダムOOに登場した遠隔操作武器だ。コカトリスの肩に搭載されていたそれは、複雑な軌道を描きながら高速でソウイチのザクIVに迫る。

「クソッ! 鬱陶しい!!」

ザクIVはビームライフルショーティを捨て氷原に降りると、ノワールストライカーに搭載されていた大剣『フラガラツハ』でファングを切り払おうと振り回す。

突き刺そうとするファングを後退しつつ、二刀流で捌くザクIV

「そればかり集中していると危ないよ!!」

「何っ!?!」

突如アイの叫びが聞こえた直後、ザクIVの背後から地面を割って二つのファングが飛び出してきた。本来ファングは全部で八つ搭載さ

れていたからだ。

二つのフアングはザクIVのバックパックに突き刺さり爆発。

「ぐあっ！」

よろめくザクIV、動きを止めたその隙をアイは逃さなかった。

「隙あり！」

アイはフアングをコカトリスに戻しつつ、爆炎の中からコカトリスの右腕に装備したドツズキャノンを発射する。

ソウイチは回避行動をとろうとするも間に合わず、右腕及びその後ろにあったストライカーの翼をビームが貫通、小爆発と共に右手に持ったフラガラツハが跳ね飛ばされる。

「ガッ！まだ！まだだあ！！」

「!?」

しかしソウイチはこれで済ますつもりはなかった。ザクIVはコカトリスめがけ猛スピードで突っ込んできた。

フアングを食らった背中のスラスターはまだ破壊しきれてなかったわけだ。

「特攻!?!」

近づかせまいとドツズキャノンを撃つアイ、狙うは大剣フラガラツハ。ドツズキャノンはフラガラツハに当たり爆発。

「くっ！やられるかよお!!」

一瞬ひるむもまた突っ込んでくるザクIV、

「しっ！いーうわー！」

コカトリスにタックルをかまし二体が氷原に倒れ込む。

「コイツがなければ!!」

その際にドツズキャノンをコカトリスから引つpegす。ケーブルがちぎれザクIVはドツズキャノンを放り投げた。

少し離れた氷の大地に突き刺さるドツズキャノン。

「！手癖の悪い!!」

「アイ！」

観戦モニターを見ていたナナが叫ぶ。

ザクIVは馬乗りの大勢で仰向けになったコカトリスの首を掴んだ。

「例え当人が負けて楽しんでも！他人にとって敗者は敗者以外の意味はない！！」

ギリギリとコカトリスの首を絞めるザクIV。

「コンドウさんは！俺の所為でチームやコンドウさんを悪く言う奴がいても！コンドウさんはいつも庇ってくれたし批判も気にしなかった！

だけど周りは違う！結果を見せつけないと他人は納得してくれない！俺の所為でコンドウさんが悪く言われるなんて耐えられない！

だから俺にとって勝つ事が唯一にして最大の楽しむ手段！故に勝たなきゃいけないんだ！ただ楽しいからって理由だけでコンドウさんに追いつこうなんて納得できるもんかよ！」

「……！」

見下ろす体勢で目の前のアイにソウイチは早口でまくし立てる。

「アンタを倒してコンドウさんに勝利を捧ぐ！アンタにもコンドウさんにも！俺のやり方が正しいと証明にするんだ！」

ソウイチのザクIVは腰フロントアーマーのビーム砲をコカトリスに向け、撃とうとする。

「そんなの!!」

アイは戻したコカトリスのファンングを二つ射出、ビームの短剣はザクIVの頭部目掛けて突っ込む。

「あっ!？」

気付いた時には遅かった。ザクIVの頭部を二つのファンングが突き刺さり爆発。

「ただのぐ機嫌取りでしょうが!!」

「！なんだと?!」

頭部を失うザクⅣ、更にアイはコカトリスのファンングを全て射出。全てのファンングがザクⅣを貫こうと襲ってきた。

たまらずソウイチはザクⅣをコカトリスからどける。

「どいた!!」

そして立ち上がるアイのコカトリス。

「クツ!ご機嫌取りだど!」

「勝つ事だけが楽しむ手段!?勝たなきゃコンドウさんは認めてくれない!そんなの!」

反撃しようとするソウイチ。だが起き上がったアイのコカトリスはそのままザクⅣにビームサーベルで斬りかかる。

「なっ!」

どうにか射撃で応戦しようとするソウイチ、だがファンングとビームサーベルの二段攻撃に下がるしかない。

「そんなのガンπρα作る理由にならないよ!自分が楽しまないでどうするっていうの!?!コンドウさんだって喜ぶわけがない!」

「くっ俺は!コンドウさんにとって誇りになるビルダーになりたいだけだ!」

後退しながらも反論するソウイチ。

「だからって!私は自分が楽しまないのにいい物が出来るなんて思わない!コンドウさんはなんであなたを庇っていたか分からないの!?!」

「何を……」

「なんとなくだけど私には解るよ!それは『勝ち負けに拘らないでガンπραを楽しめ』って意味もあつたんじゃないんですか!?!」

「!」

「自分のやり方がさも正しいかの様に……」

懐に入るコカトリス、

「考えを私におしつけるなあアツツ!!」

だがビームサーベルは使わずそのままザクⅣを拳で殴り飛ばした。

「なっ!!うわああっ!!」

ザクⅣを殴り飛ばした地点の近くに、さつき投げられたドツズキヤ

ノンが突き刺さっていた。

アイはそのままコカトリスのバーニアを吹かしドッズキャノンの場所へ移動、ドッズキャノンを引き抜くとザクIVに銃口を向けた。

——やっぱりあなたは私と違う！——

「クソッ！くそおとおおおっつ!!!」

言われた事と負けそうになる現実にはソウイチは絶叫し、左腰フロントアーマーに装備されていたビームサーベルを掴み突っ込む、

「うわあああ!!」

そのまま振るったビームの刃はドッズキャノンの砲身を切り裂く、だが切り裂かれた砲身の後ろからビームの刃が発生する。

——あ……——

コカトリスのライフルはダブルバレットの肩を移植している為、ビームサーベルとしても使用可能だったのである。

「勝ちにこだわるのはいいよ。けどね……」

ソウイチが気づいた瞬間、ザクIVは大型のビームサーベルで横一文字に切り裂かれた。

「まずは自分が楽しむ事を第一に考えてよ！」

「そんな……」

ソウイチの呟きと同時にザクIVは爆発した。

「……」

Gポッドの中、ソウイチは無言で俯いていた。そんな時Gポッドを誰かが開ける。コンドウだ。

「ソウイチ、お前はよく頑張ったよ……」

「コンドウさん!?見ていたんですか……」

「途中からな、サブも一緒だ」

「……すみません……、コンドウさんの顔に泥を塗ってしまいました」

眼をつむり、頭を下げるソウイチ

「気にするな、俺の方こそ……」

「言わないでください。俺が勝手に思ってた事ですから」

「……そうか」

謝ろうとしていたコンドウをソウイチは止めると、そのままGポツドから出る。そのままアイの所に向った。

「ヤタテさん」

渋い表情のままソウイチはアイに話しかける。

「ソウイチ君？」

「勝ちに拘る姿勢を変えるつもりはないツス。でも礼儀までないがしろにしたらそれこそコンドウさんに泥を塗っちまう」

眼を背けながらも「だからこれ位は」とつぶやきながら右手を差し出した。握手を求めての行為だ。

「戦ってくれた事自体は感謝してますから」

「ソウイチ君……うん」

そのまま握手を交わす二人。ソウイチの表情は強張ったままだったが

「まったく、最後まで愛想ないわね、握手するんならもつとニコニコしてればいいのに」

「ナ・ナナちゃん」

「ニコニコ……真つ平ゴメンツス」

ナナのツツコミにソウイチは相変わらぬ表情で返した。

「ま、コイツはずっとこうってわけじゃないんだ。見逃してやってくれ」

「ツチヤさん、やめて下さいそういう事言うの」

「さて……まさか本当に俺達二人に勝利するなんてね、大した奴だよ全く」

ツチヤがソウイチのフォローをすると、今度はアイに話しかけた。

「必死にやってただけですよ。そんな」

「謙遜しないで欲しいツス。勝ったのは事実ツスから」

二人の後にコンドウが口を開く。

「ならばヤタテ・アイ！君に改めて勝負を申し込もう！今度はもつと大々的な場所です！」

「大々的な場所、ですか？」

「こういう事だよアイちゃん」

「ハセベさん？」

アイの背後に現れる人影。雇われ店員のハセベだ。ハセベは現れるやいなや一枚の紙を見せる。

「二週間後この店主催のガンバトル大会があるんだ。ルールは三人チームのサバイバルバトルで参加者は大募集」

「ガンバトル大会……」

「そういう事。俺達との戦いを経験したお前とまた戦ってみたい、引き受けてくれるか？」

アイは躊躇なく答える。

「大会かあ、こつち来てからそういうの出てないし是非出たいですよ」

「……いや、ちよつと待ってよアイ」

アイにナナが止めに入る。

「？ナナちゃん？」

「大会は三人のチーム制なんですよ？アタシは当然出るけど。アンタ合わせても二人しかいないじゃん。後一人どうすんのよ」

「あ……」

しまった、という顔になるアイ

「どー当日には間に合えますから！」

三人に宣言するアイにコンドウ、ナナ、ツチヤは揃って

——大丈夫かな……——

と心の中で呟いた……

「……やっぱ納得いかないツス……」

第10話 「わがまま部長」(アメイジングレジェンド
ガンダム VS ドラッツエ・オクトパス)

「と、いうわけで都合つかないかな? ヤマモト君」

休み時間。アイとナナは廊下である男子をチームへ誘う。

相手はアイが転校2日目にしてバトルをした額の広い模型部員、ヤマモト・コウヤだった。

自分たちに一番距離が近い上に以前戦った時に実力は知っていたからだ。

「うくん……誘ってくれたのはありがたいけどさ」

広い額に手を当てながらコウヤは考える。

「珍しく考え込んでこんでるわね。普段人の話聞かない割に」

「うおい! ひでえよそれ!」

「ちよつ! ナナちゃん! ゴメンゴメン! やっぱり模型部とかの都合がある?」

「まあな。模型部の方でもガン普拉バトル大会には出るんだよ。スタメンに俺入ってるしそっち優先しなきゃなんねえから」

「そっか……」

残念そうにアイは答える。断られるかもしれないと予想はしていたが、受けてくれるかもしれないという期待もあったからだ。

——となるとあの三兄弟でも声をかけてみるかな? ——

そう考えつつ、一言挨拶をしてその場を去ろうとしたその時、

「チームメイト集めなら心配する必要はないわね!!」

アイ達の後ろで妙に黄色い、しかも大きい声が出た。

「あ! コドモ部長!」

コウヤの声が響く。と、直後声の主が姿を現す。

「コドモじゃない! コナミだ!!」

大声で返したのは小柄な女の子だ。135cm程度の身長と腰まで届くロングヘアーを一本のおさげにまとめている。

幼そうな外見だが、ツリ目の所為か小柄な割には負けん気が強そう

だ。部長と呼ばれたその少女は模型部と思わしき男子を数人引き連れていた。

「部長って……このちっちゃい女子？」

「ちっちゃい言うな！コナミは二年生だ！」

「二年生!?この身長で!？」

「キーツ!!また言った!!」

手をブンブン振り回しながら顔を赤くし怒る部長。

「部長、そろそろ本題に」

女子生徒の横にいた三白眼の男、カワサキ・ナガレが言うと女子生徒の表情が元に戻る。

「おっとーそうだったわね！コナミは二年生のウミノ・コナミ！模型部部长よ！」

コナミと名乗った少女は、笑顔でビシツと親指で自分を指す。八重歯が一層幼そうな印象を与える

「ん？模型部って男子しかいなかったんじゃ……」

そう、前にタカコから聞いた話では模型部は少人数の男子しかいないとナナは聞いていた。

「ああ、コナミが模型部に入ったのは割と最近よ！まあこいつら男子があんまりにも不甲斐ないからコナミがすぐ部長さんになったってわけね！」

『よく言いますよ。自分で勝手に生徒会にゴリ押し申請した癖に……』と横にいた男子たちが皆同じ事を考えた。

「ま、そんな事はどーでもいいのよ！本題に入るわ！ヤタテ・アイ！アントラ模型部の一人として今度のガン普拉バトル大会に出なさい！」

「……え？私ですか？」

唐突な指名に思わず自分を指さすアイ

「あの『ウルフ』のメンバー相手に渡り合うなんてなかなかやるじゃないの！アントラをチームに加えれば今度の大会はウルフを倒す事だって夢じゃないわ！」

「でも私ひとりですか？出来れば友達も一緒に出たいんですけど」
「ダメね！」

コナミはバツサリと切り捨てる。その発言にムツとするナナ。

「今度の大会は模型部の実力を知らしめる機会なの！そんなヘタクソな初心者いれたって恥かくだけね！」

「ちよーへタクソってそんなハツキリ言わなくったっていいじゃないですか!!」

上級生が相手な所為か珍しく敬語で抗議するナナ。

「部長……他のビルダーをそう言うのはやめて下さい」

注意するカワサキ、しかしコナミは聞いてるそぶりはない。

「……お気持ちは嬉しいですがそれならお断りします」

断るアイ。アイの口調はいつもより強めだった。

「えーなんで？」

「今度の大会に出るのはコンドウさんと戦うのは勿論ですが、ナナちゃんと一緒に大会を楽しみたいと言うのも理由です。」

それに先輩とはいえ友達をそんな風に言う人、正直一緒にやりたいとは思いません」

アイの口調は真剣だ。今回の大会は初めてナナと一緒に出る大会。アイ本人もナナと出ることを楽しみにしていたからそう言われると腹ただしい。

「ちよつと！大会はチーム戦なのよ！アンタこんなの連れてたら足引つ張るに決まってるじゃない！」

「そんなの協力すればいいだけです！確かにナナちゃんはまだ粗削りだけど、だからって足を引つ張るなんて思ったことはないですから！」

「アイ……」呟くナナ、コナミは面白くないと言わんばかりに頬を膨らませていた。

「……フンだ！相手はウルフだつてのに余裕ね。まあいいわ。実力を気にしないって言うならそのコウヤを持って行っていいわよ」

「え?!」

「は!？」

突然の許可に驚くアイ、しかし当のコウヤ本人は声が裏返るほど驚いていた。

「ぶ！部長！何を言ってるんすか！」

カワサキ等数人の模型部員が止めに入る。しかしコナミは意にも介さず言い続ける。

「ただし！ガンプラバトルで勝った場合よ！コナミと勝負して勝ったらコウヤはヤタテ・アイのチームに入る！」

「……負けたら私が模型部のチームに入る。ですか？」

「あら、理解が早くて助かるわね！ま、そのポニテ頭とやるより、コナミ達とやる方がずっとガンプラ大会も楽になるでしょけど！」

その一言がアイに火をつけた。

「解りました。いいでしょう」

本来なら断るべきバトルだったかもしれない。二度もナナをそう言われてはアイも我慢できない。

前回のソウイチとのバトルの時も似たような流れであった。一見温厚そうなアイではあるが、

バトルやこういった場面で見られるように気性の激しい面も持ち合わせていた。

ニヤリと笑うコナミ

「そう。ならバトルは明日の放課後、模型店『ガリア大陸』でするわよ！」

「望むところです！私は全力でお相手しますよ！」

答えるアイに対して再びフツと笑うコナミ

「ありや、誰がヤタテ・アイが戦うと言ったの？コナミと戦うのはアンタよ！コウヤ!!」

『は?!』

アイ、ナナ、コウヤの三人は意味不明とばかりに声を上げた。

「何変な声上げてんの！ウルフと戦うのよ！コウヤがコナミ一人に勝てないんじゃないやヤタテのチームに入ったってどうしようもないじゃない！」

コナミがコウヤのテストしてあげようってわけー！

「コドモ部長！何言ってるんすか！あ……」

カワサキが止めようとするも、ついコドモと呼んでしまった事に

ハツとする。

「コ・ナ・ミ!!」

「コ！コナミ部長!!それでコウヤが負けたらヤタテさんが模型部のチームに入るって無茶苦茶でしょう!!」

カワサキが必死に止める。だがコドモと言ってしまった事も一因なのかコナミは一切聞く耳を持たない。

「そしてアンタは指定したこのガンプラを使いなさい!」

「ガンプラまで指定ですか!?!」

コナミは模型部員が持っていた紙袋を手にとるとコウヤに手渡す。中を見るコウヤ

紙袋の中に入っていたのは『1/144、HGレジェンドガンダム』だった。

レジェンドガンダム。『ガンダムseed destiny(シード デステイニー)』に登場した灰色のガンダム、背中にドラグーンと呼ばれる遠隔操作兵器を10個も装備したのが特徴だ。

「レジェンド?コイツで……ってなんだこりゃ!」

「何?……これって!」

箱を開け驚くコウヤ、アイもコウヤの反応が気になりレジェンドの箱を見る。そして彼女も驚愕した。箱の中には一部のパーツが切り取られている。

それは先程言ったレジェンドの特徴、ドラグーンとビームライフルのパーツがごっそり切り取られていたからだ。

「これで戦えって言うんですか!」

「そのとーり!真のビルダーならそれ位改造でどうにかするもんでしょー!」

「ふざけないでよ!バトルとか屁理屈こね回して結局はアイが欲しいだけでしょ!!」

ナナが怒りの声を上げる。こんな相手に敬語を使う必要はないと口調を改めた。

「あーあー、聞こえない!じゃあ明日バトルでねー!」

両耳に指を突っ込み聞こえないふりをしてその場から逃げ出すコ

ナミ、模型部含めた全員がその場で呆れていた。

「……コドモじゃなくて小物ねありや……」

「まったく！なんなのよアイツ！とても上級生の取る行動じゃないわ！」

下校時刻の教室、帰り支度をしながらナナが愚痴る。休み時間のコナミの行動が理解出来なかったからだ。

「さすがに強引すぎるって私も思うな」

いつもはナナにフオローを入れるアイだが今回ばかりはナナに賛同する。

「まあそう言わないでくれよ」

その時、突然声をかけられる。声をかけて来たのは模型部のカワサキとコウヤだった。

「あ、カワサキ君とヤマモト君」

「昼は部長の事は悪かったよ」

そう言いながらカワサキとコウヤは頭を下げる。部長の勝手に巻き込んでしまった事に責任を感じた様だ。

カワサキはともかくコウヤのその姿は珍しく映るかもしれない。

「悪かったってアンタ、部長本人が言ってくれなきゃ納得いかないわよ。ていうかいつの間にか女子部員が入ったわけ」

「入って一カ月も経ってないよ。俺がヤタテと初めてバトルした後さ」

「そんな最近に入ったの？」

「部長はさ、部の実績作ろうと必死なんだよ。前は漫研部にいたんだけど部を追い出されちゃって、結果出してその部の連中を見返そうと必死なわけ」

漫研、漫画研究部の事だ。

「漫研ねえ、おおかたあの性格が原因な気がするけど」

「鋭いねハジメさん」

「部長本人に問題あるのは事実でしょ？よくアンタ達もよく不満出さないもんよ」

「そりや不満は俺達だつてあるよ。でもさ不満言ったら部長ゴネるしあんまり蔑ろにすると泣きだすし」

「あのね……文句言わないアンタらも問題でしょうが」

「でもさ、そんな事続けてるなら模型部もそのうち追い出されるんじゃないの?」

「そうなんだよな。事実模型部でも部長の不満は溜まってきてるし」

「さつきも言つたろ。前の部追い出されたって、入部してきた時凄くシヨック受けててさ。強く注意しづらい雰囲気があんだよ……」

その為、模型部はコナミを立ち直らせようと唯一の女子部員として大事に扱った。

しかしコナミは漫研部を見返そうと模型部の結果にこだわること、あの不器用な性格の所為であんな尊大になってしまったわけだ。

ちなみにコナミがわがままを言つても、他より女つ気のない模型部はどうかコナミが模型部に留まる様従い続け、

結果としてコナミのわがままがエスカレートしたのは秘密だ!

「オタサーの姫つて奴ね。生々しい……」

「まあ、ああ見えて悪人つてわけじゃないんだ。多少悪い事言つても許してあげて欲しい。」

それになんやかんやで模型部が好きなんだと思うよ。部長は」

不満こそあれど、模型部全員が彼女を嫌つてるわけではないのだから。カワサキとコウヤの二人がフォローに来たのが何よりの証拠だ。

とはいえ強引な性格なのは確かだが

「それはなんとも言えないけど……ブレーキ役とかいないの?前の部長とか……」

「ああ無理無理、前の部長はカワサキだったんだけどさ。コイツこう見えて相手に強く言えない性格なわけよ。部長に注意はしてもそれ以上は出来ないわけ」

そう、コナミが生徒会に申請しようとした時もカワサキは注意したが結局押し切られてしまったのだ。

「全く、これだから女は面倒くさいんだよ。俺の思い描いていたガンダムのイケメンオタクの女そのものだけ部長は」

「コウヤ……一番女子部員入って喜んでいたのお前だろ」

「ぐ……」

「そういや……初対面で随分アイにひどい事言ってたわよねアンタ」

アイにコウヤが勝負を挑んだ時の話だ。ナナが冷ややかな目でコウヤを見つめる。

「私の前で言うの正直どうかなくなって思うよ」

「ってというか一人で女性全員そう思われちゃ堪ったもんじゃないわよ」

『ねー』

アイとナナが顔を見合わせ言う。コウヤはウブな割に女の興味はしっかりあった。ついでにかなり他人に影響されやすい人間だった。

「まーまあ本題に入ろうぜ！やっぱ俺が戦うって言うあの条件を呑むしかないと思う！」

「あ、話そらしたよ。でも私もそれがいいと思う」

断ったら部長またゴネるだろう。アイはコナミとは一度しか会ってないがそう思った。

「二択しかないわけ。もはや脅しだわ……しようがないわね。もう受けるって言った以上後戻りできないでしょうし。」

その代わり勝たなかったら承知しないからね。で、後の問題、使うガンプラどうするの？」

「ぐう……それなんだよなあ問題は、このレジェンドじゃ……」

指定されたガンプラ、レジェンドガンダムは中途半端な状態だ。本体は作れるがドラグーン等武装はごっそり取られていた。

「良かったら私に考えがあるけど」

「どうすんの？」

「いい改造プランがあるの。とりあえず放課後ガリア大陸へ行こう。明日まで時間ないし話はそれから！」

「だったら俺も一緒に手伝おうか？」

カワサキがアイに提案する。

「その心配はないよ。これは私達の受けた条件だもの」

「え、でも」

「自分がビルダーである以上、意地を貫きたいの」

……

それから三人は模型店『ガリア大陸』へ場所を移す。

「ハセベさん。工作室借りますね」

アイが雇われ店員のハセベに許可をもらい鍵を受け取る。

「工作室なんてあるの？ここに」

「まあ見てて」

アイは店の一階奥、鍵のかかった扉を開け部屋に入る。倉庫を改造した部屋だろうか。長方形のミーティングテーブルが一つ、パイプ椅子が複数置いてあった。

壁には塗装用の換気扇があり、隅っこの棚には基本的な工具が一式入った工具箱が置いてある。

「へえ、店の一番奥にこんなところがあったんだ」

ナナは驚きの声を上げる。ガン普拉バトルが盛んな昨今、バトルで使うガン普拉のセッティングや

買ったその場で組んでバトルがしたい、というビルダーの声が多くなってきた為、こういった工作室を設ける模型店が増えて来たのだ。

部屋は店側からはガラス張りで中の様子が見れる。しかしナナはこの部屋にそういう意図があったという事は今まで知らなかった。

「で、さっき言った考えなんだけど」

そう言うときアイは鍵をもらうついでに店で買ったであろうガン普拉を出す。それは『ガンダムビルドファイターズ』に登場する

『アメイジングブースター』という支援機だ。パーツは分割、接続用ジョイント付きで一部他のガン普拉に取り付けられるという公式改造キットとも言うべきものだろうか。

「これを使ってレジェンドのドラグーンをカバーするよ」

「？ヤタテ、アメイジングブースターはジオン系前提だぜ？レジェンドには合わないんじゃないの？」

そう、あくまで一部の機体だ。レジェンドは対応しているガン普拉ではない。

「大丈夫、工夫すれば問題ないよ。アメイジングブースターなら装備

も豊富だしこれならドラグーンの分も補えるよ」

そして三人は作業に入る。1人なら1・2時間は組み立てに時間のかかるHGも、三人ならあつという間に組みあがった。

そして次はアメイジングブースターの取りつけ、ここはこうする。ああするとアイとコウヤは話し合い組み付ける。

ここまで来るとナナは見る事しか出来ない。アイとコウヤの二人は普段からは想像できない程真剣に、黙々とレジェンドの改造に打ち込んでいた。

——うひゝ、なんか入り込めない感じ——

二人は真剣そのものだ。ナナはそれを見ながらも自分のレベルでは入り込めない空気を感じていた。

「ありや？」

暫く組んでいてコウヤが声を上げる。

「どうしたの?」

「背中にブースターを移植しようとしたんだがどうもつけられる形しなくて……」

コウヤはレジェンドの背中を見せた。アメイジングブースターのブースター部は本来『ザクアメイジング』の両足となる部分だ。

故に二つ付いている。コウヤはそれを両方取り付けようとしたのだがレジェンドの背中接続ポリキヤップは一つしかついてない。

バックパックが残っていれば取りつけることが出来たのかもしれないがそれすらもなかった。

「大丈夫、レジェンドだったらフォースインパルスかソードのバックパックがピッタリ合うよ」

「インパルスか。持ってきたジャンクパーツの中にソードがあつたはず」

コウヤはHGサイズの箱を部室から持ってきていた。中には他のガンプラの壊れたパーツや余ったパーツ、ジャンクパーツと呼ばれる物がぎっしりだ。

「本当だ！ソードインパルスの背中パーツが合うぞ！これならいける！」

コウヤは背中中の接続部を繋げながら叫んだ。他の部分はもうあらかた仮組みは済んでいる。後は塗装し接着するのみだ。

「よし！一気に完成まで仕上げるよ！」

アイの号令に全員がレジエントに取りかかった。一日しか製作期間がないが限られた時間で3人は出来る事を全てつき込んだ。

「……」

その3人の様子を模型部員のカワサキが店側から遠目に見ている事に3人は気が付かなかった。

——コウヤ……、皆あんな真剣に……——

「意地……か」

……

そして翌日のバトルの日、アイ達とコナミ率いる模型部員達はガリア大陸二階へ集まった。

「逃げずに来たのは褒めてあげるわ！」

「部長、負ける気はないですから！」

「粹がるじゃない！コテンパンにしてあげるから！」

ミントグリーンのパイロットスーツに着替えたコナミは自信たっぷりだ。腕組みしながらの仁王立ちを崩さない。

「コウヤ君、ファイト！」

「勝ちなさいよ！アンタの勝ち負けでアタシらの運命決まるんだから！」

「……改めて今回責任重大だっと思うぜ……。ま、やるからには頑張るよ」

緊張してるのだろう。深緑のパイロットスーツを着たコウヤの感じがいつもと違う。コウヤは不安がまじりながらもコナミと共にそれぞれのGポッドに入って行った。

今回のステージは宇宙、母艦から発進したレジエントが飛ぶ。パイロットの抜けていたレジエントはアメイジングブースターを使い改修され新たな姿となっていた。

名は『アメイジングレジェンドガンダム』発進するや否や軽く手足を動かし挙動を確認する。

「どう？アメイジングレジェンドの感じは」

「派手に動いてみない事にはなんとも：でも思ったより早いわこれ」

飛びながらアイの通信に答えるコウヤ、直後Gポッドに警告音が走る。遠くで光が見えると共に何条もの緑のビームが飛んでくる。

「部長か!？」

コウヤは背中ブースターを吹かし右にかわす。機体横を30本近い細めのビームが通り過ぎた。

『この武装！』

アイとコウヤはこの武装がなんなのか知っていた。

「避けるなんて生意気じゃない!」

そして撃った張本人が遠くで姿を現す。

「部長!」

コナミの機体はミントグリーンに塗装されたドラッツエだ。この機体は『ガンダム0083』に登場した機体で

ザクⅡと宇宙戦闘機等のパーツを組み合わせて作られたいわばリサイクル品。

設定の性能自体は心もとないが、ここは出来映えと改造でどんな機体とも戦えるガン普拉バトル。

背中には円状のパーツが追加されており左手にもビームサーベルとシールドが追加されていた。

「そのバックパッカー!このレジェンドの物すか!」

「その通り!」

ドラッツエの背中にコーン状の物体が二本、板状の物体が六本、足のブースターに二本連結される。レジェンドのドラグリーンだ。

それ以外にもガンダムAGEに登場したドラドという機体の掌やシールドも移植されており、

その混ざり合いはドラッツエらしいともドラッツエらしくないとも言えた。

「余り物のアンタに！コナミのドラッツェ・オクトパスは倒せやしな
いわ!!」

「そっちだつて設定はリサイクル品でしょうに!!」

「うっさい!!」

コナミはドラッツェのドラグーンを90度前に倒し砲撃形態をと
る。

「ファイア！」

放たれたビームがレジェンドを襲う。

「おっと！」

コウヤは回避するとロングライフルを逆手で構えドラッツェを狙
う。

「遠距離射撃なら得意なんすよ！」

片手でドラッツェに狙いをつけると2発ライフルを撃つ。放たれ
た弾丸は真つ直ぐドラッツェに向かった。

「馬鹿ね！」

ドラッツェはコーン状のドラグーンを2つ射出すると先端にビー
ムの杭、ビームスパイクを発生、

レジェンドの一部のドラグーンはこれによりビーム砲以外に直接
打撃を与える事が可能だ。

弾丸の真正面から突つ込むドラグーン、ビームのトゲはあっさり実
弾の弾を貫通し砕いた。

「うそんっ！」

「部長が部長に勝てるわけないでしょ！」

そう言うコナミは残りのドラグーンを一斉に射出。狙いはコウ
ヤのレジェンド。

「自分の武器でやられちゃいな!!」

ドラグーンはレジェンドの左右横に配置、すぐさまビームを放つ。

「うおわ!!」

コウヤは両手の甲からビーム状のシールドを発生させ防ぐ、

「防いだ!? 生意気!」

すぐさま前にもドラグーンを配置させレジェンドを撃とうとする
コナミのドラッツェ・オクトパス、

板状のドラグーンには2門ずつ、コーン状のドラグーンには9門ず
つビーム砲が搭載されている。

これが全部で10枚だ。一斉に放てばレジェンドもひとたまりも
ない。

「させるか!」

ドラグーンが発射される瞬間、コウヤはアメイジングレジェンドの
ブースターを一齐にふかし前方のドラッツェに向った。

さつきいた場所がビームの集中砲火にさらされる。アメイジング
レジェンドの加速は凄まじい推進力だった。

「何よその勢い!!」

「うりゃああああ!!」

アメイジングレジェンドはブーストでのけぞった体勢を直し、右手
にヒートナタを持ちドラッツェに斬りかかった。

コナミのドラッツェ・オクトパスは左掌からビームサーベルを発
生、ヒートナタを受け止めた。

ドラッツェもまた両足のブースターをふかしアメイジングレジェ
ンドの勢いを相殺させる。

「受け止めた!?」

「1日で随分とマシなもん作ったじゃない!でもコナミに勝とうなん
ざ甘い考えよ!」

レジェンドの背後にドラグーンが配置、更にドラッツェも右手のガ
トリングガンでレジェンドを狙う。

「部長命令! やられなさい!!」

「!!」

前後の攻撃が放たれる瞬間、コウヤのレジェンドは真上にブース

ターを吹かし両方の攻撃をかわす、なお空振りしたドラグーンの砲撃は当然ドラッツェに向かう。

「へ？んわーーーーー!!!」

コナミは悲鳴を上げながらドラグーンの砲撃をシールド防御やらエビ反り回避やらで回避しきった。（多少は掠めたが）

「キーツ！部員の癖にいい!!!」

レジェンドは一旦ドラッツェから距離をおき、また接近戦を挑もうと離れていた。

離れるも背を向けるレジェンドをコナミはドラグーンで追いつめようとする。

「バーカー！自分から背を見せるなんて!」

ブースターを吹かすレジェンドに向ってドラグーンで集中砲火するドラッツェ・オクトパス、

だがドラグーンで狙い撃ってもレジェンドには当たらない。何故なら……

「ちよつと早すぎ！何なの!?!」

コナミが驚愕する。レジェンドのアメイジングブースターの加速力は凄まじい。ドラグーンで狙い撃っても撃った先にレジェンドが飛んでいた。

直線的な加速はそれほどのパワーだった。その上腰のバーニアを使いジグザグに動くからなおのこと当てづらい。

「うおおお!!!!すすすすげえ!!この加速力うう!!!」

コウヤはアメイジングレジェンドの推進力を身をもって理解していた。しかし機体も限界ギリギリな速度だ。

機体は派手に揺れ、Gポッドにダイレクトに振動が、そして疑似的なGが伝わる。その所為かコウヤの声も揺れ裏返っていた。

かなり声が出しづらい状況だった。

アイとナナも観戦しながらアメイジングレジェンドの加速力を理解した。

「ひゃー、アタシらが作ったとはいえ速い速い」

「うん、改造うまくいったみたい。コウヤ君も使いこなしてるみたいだし」

「にしても結構器用に動くわねー、前アイとバトルした時は考えなしに動くのかと思ったけど」

「考えなしって酷いよ。まあカワサキ君もバトル経験は結構多いみたいだからね。一応考えては動いてるんでしょ」

アイが微妙に酷いフォローを入れる。

「でもさ、防戦一方じゃない？これじゃそのうち追いつめられるよ」

「それなら心配ないよ」

心配するナナにカワサキは言った。

「え?」

アイ達が感心する中コナミは不快だった。すぐドラグリーンで圧倒出来ると思っていたのに。

「部長命令！全弾命中しなさいよ！」

「無茶言わないで下せえ！」

コナミはドラグリーンをなおも撃ち続ける。その時だった。

「!?何よ?!動きが!」

コナミはドラグーンの動作に違和感がある事に気が付いた。動きが鈍くなってる上にビームの出力が下がってるのだ。

「動きが鈍くなってる!?!」

ナナが疑問を口にする。観戦してる全員もドラグーンの異常に気が付いたようだ。その原因をアイは説明し始めた。

「元々あのドラグーンを装備していたレジェンドガンダムは『ハイパーデュートリオン』っていうエネルギー切れの心配がない動力を積んでいたんだよ。」

でもそれはアニメでの話、ガン普拉バトルではその設定は意味がない。

更にドラグーンは全部で30門以上の数のビーム砲がついてる。それをあんなに撃てば……」

「あつ！エネルギー切れを起こすって事!？」

ナナが答えると同時にコナミも原因がエネルギー切れだと気が付いたようだ。とうとうドラグーンの動きが止まる。

「チャンス!!」

コウヤもドラグーンが停止したと理解すると一直線にドラッツェに迫る。

「クソツ！アンタがややこしく動き回るから！だったら!!」

ドラッツェはレジエンドに背を向けると最大推力でレジエンドから逃げる。リサイクル品設定とはいえドラッツェの直線推力はとても高い。

このまま距離を取って時間経過で武器エネルギーの回復を待つつもりだ。

ドラッツェも限界ギリギリのスピードでGポッドが激しく揺れる。

「どうよっ……！あんたのわか仕込みの……！レジエンドなんか……！追いつけるもんですか……!!」

コナミは疑似Gを受けながらやっとの思いで声を出す。

「そうはいかんざき!!」

「!？」

コナミのすぐ後ろにアメイジングレジエンドが迫ってきた。こちららも最大推力だ。

「そーそんな!!ドラッツェの推力に勝つ・なんてええ!」

すぐにドラッツェに並ぶアメイジングレジエンド、両手には足にマウントしてあったリボルバーを握っていた。

「この勝負！俺の勝ち……ですぜ!!」

並行するドラッツェにリボルバーを向けるアメイジングレジエンド

「クツ……!!」

コナミのドラッツェもガトリングガンを向けようとするが、直前に

ビシツという音と共にドラツツエの胸に穴が空いた。

「あつー！」

リボルバーを受けた。そうコナミが判断すると同時に肩に、腹に、脚部に、頭部に銃弾を撃ち込まれる。直後にドラツツエは火を噴き爆発。

アメイジンググレンジェンドはそれを見ながらも倒したドラツツエを追い越していった。

これによりバトルの結果はコウヤの勝利に終わった。

「うわー！ー！ー！ー！ん！！！！！！」

コナミはぐずりながらGポッドから出てくる。そして大声で泣き出した。

「ああもう！一回負けた位でこんな大泣きするなんて子供じやあるまいし！！」

「悪い。今回ヤタテをスカウト出来なかったのもあるんだろうけどさ」

両耳を押さえるナナにコウヤはすまなそうにフォローを入れた。

「どーとにかく部長！！勝ったんだからこれでコウヤ君は私のチームに入れてくれますよね！」

「ぐすつ。……やだ！！」

「えええ！！」

「認めないもんそんなの！！うわー！ー！ー！ん！！！！」

なお一層鳴き声を大きくするコナミ、周囲にいた関係ないギャラリーもこつちを見ている。

ー結局私が入るしかないのかーそうアイが思った時だった。

「……いい加減にして下さい部長！！」

黙っていたカワサキの大声が響く、瞬間的にビクツとなるコナミ
「ナ・ナガレ……？？」

「他のビルダーの悪口に始まり！コウヤに戦う様しむけたり！余りのガンプラを押しつけたり！あげくの果てには自分の口約束も守ろうとしない！

部長がやってる事は部の恥を広めてるだけなんですよ!!」

「ぶ……ぶのはじ……」

ずず……と鼻をすすりながらコナミは気圧される。カワサキの堪忍袋の緒は切れていた。

勝手すぎる部長の態度が、限られた条件で戦ったアイ達に対して情けないと思えなかったからだ。

カワサキ自身も自分の意地を貫きたいと思った故の行動だった。

「カ・カワサキ君、こんな所で怒らなくても……」

「うちの部の問題なんです! 部外者は引っ込んでいて!!」

「い!!」

アイが止めに入るもカワサキは物凄い剣幕でアイを引っ込ませた。

コウヤ含め周りの模型部員もカワサキに気圧され動けない。

「ヤタテさん達は部長の無茶な要求も呑んで全力で戦いました! それをあなたは報いろうとせずなおも自分のワガママを押し通そうとする! 恥ずかしくないんですか!」

「ぶ・部長なんだもん……! えらいんだもん!」

「自分が部長だっていうんならせめて負けても堂々としてればいいでしょうが!! こんな卑怯な手で勝とうが大会で優勝しようが誰も部長を認めるもんか!」

「ち! 違うもん! 結果だせば皆認めてくれるもん!」

「すぐにボロが出ますよ!! そしたらむしろ卑怯者って言われます!! その態度が実績以前の問題だって気付かないんですか!!」

そんな簡単な事も解らないなんてコドモ部長じゃない! 部長の資格すらない!! ガキだこのクソガキ!! そんなだから漫研だって追い出されたんだ!!」

「う!! うわああああんん!!」

更に大声で泣き出すコナミ、ハツとするナガレ

「ちよつと!! 説教するのはいいけど逆効果じゃないの!!」

「!……分かってるけど……」

ついカッとなってやってしまったらしい、自分の行動に後悔するナガレ、その時だった。

「えつと部長、元気出してくださいよ……」

コウヤがコナミを慰める。

「グスツ……コウヤ……」

「ナガレだって部長の為思って言った事ですよきつと。ちゃんと謝ればわかってくれますって」

模型部員はコウヤ含めある程度泣いてる部長をなだめるのは慣れていた。コナミにティッシュを渡すコウヤ。

「びーっつ!!そんな事言ったって……アイを戦力に出来ない上にア
ンタまで渡すなんて……」

鼻をかみながらコナミは迷う。

「大丈夫です。確かに俺はヤタテ達のチームに入りますが、模型部のメンバーが入ったチームが『ウルフ』を倒したという実績は

少なからず部員が増える要因になりますから!」

「……部員が増える?」

コナミの眼が光る。

「それは実績に繋がりますから!そしたら部長は皆に認められます
!」

筋が通ってるようで通ってない説得だ。それはどうよ……とアイ
とナナは思った。が……

「なあーんだ!!そういう事ね!」

あっさりコナミは信じた。同時にさっきまで泣いていたのが嘘
の様に立ち直った。

アイとナナがえええ!と驚く一方、模型部員は皆やつぱりか、と
思っていた。

「ヤタテ・アイ!」

「え?はい!」

「負けたのは癪に障るけど部の為なら仕方ないわね!コウヤをアンタ
のチームに貸すわ!」

「え?あ・ありがとうございます……」

「それと……悪かったわよ……色々と酷いこと言つて」

渋々ながらもコナミは頭を下げた。一応彼女なりに応えたらしい。

彼女自身間違いを認める所はきちんとあった。

「やるからにはしつかり働きなさいね!!あはははー!」

上機嫌で帰って行くコナミと模倣部員、残ったのはアイとナナ、そしてコウヤとカワサキだけだった。

「ハア……やってしまった……、強く言い過ぎたかな……」

コナミに怒鳴ってしまった事に気まずくなるカワサキ

「いや、あの時はあれでよかったでしょ?それよりやるじゃん。見直したわよ」

「ハハ……そう言ってくれると気が楽になる……かな」

「ま、とにかくこれで晴れてヤタテのチームに入れるわけだ。よろしく頼むぜ」

「こちらこそ、よろしくね」

握手として手を差し出すアイ

「あ……ああ」

コウヤはまたも手を拭うと恥ずかしそうに手を差し出した。

「変なの。部長が女の割には免疫ないのね。アンタって」

「は!話するのと触るのは勝手が違うんだよ!」

顔を赤くするコウヤ

「フフ……」

なんやかんやでコナミは自分の言葉を聞いてくれた、自分も前部長だった以上ブレーキ役として意地を貫いてみせる。

そうカワサキはアイ達のやりとりを見ながら自分の心で誓うのだった。

——コウヤ君も頑張ってくれた。私も頑張らないとな——

そしてアイもまたアメイジングレジェンドの次、大会で使用するガンプラのイメージを強く膨らませていた。

第11話 「宇宙翔ける白狼」（ガンダムAGE―2E フェンリル登場）

果てしなく続くクレーターだらけの大地、月。そこを低空飛行しながら突っ切る一機の機影があった。ナナのエールストライクガンダムだ。

「どこに行ったの!？」

ナナはモニターを見廻しながら呟く。と、直後月面に堂々と立っている一機の機体を見つけた。

『ガンダムAGE』に登場したガンダムAGE2の改良型、『ダークハウンド』本来は黒い機体だが、映ってるのは白く塗装された改造機だ。

見つけたとナナはビームライフルで狙撃、

白いダークハウンドは難なくかわすと手に持った槍、ドツズランサーをストライクに向ける。下部に設けられたビームガトリングが火を噴いた。

「わわっ！」

足元に跳弾する弾丸に驚くナナ、だが白いダークハウンドに敵対していたのはストライクだけではなかった

「もらったぜ！」

上空からダークハウンドにロングライフルを向ける深緑の機体、アメイジングレジェンドガンダム。ダークハウンドめがけて二丁拳銃を放つ。

ダークハウンドは上を向くと横に軽く移動、回避された弾丸は地表に突き刺さる。直後真上にダークハウンドが飛び上がった。

ダークハウンドは左腕に装備された大型の刃・レイザーブレードを振りかざしレジェンドに斬りかかる。

「うおっ！」

レジェンドはヒートナタでその刃を受け止めた。下からとはいえ凄まじいパワーだ。このままじゃ押し切られるとレジェンドに乗ったコウヤに焦りがよぎった。

と、同時にGポッドにアラームが鳴り響く、同時に正面のモニターに『TIME UP』の文字が浮かび上がりGポッドは暗転した。
「え!?もう終わり?!」

暗転したGポッドの中でナナが拍子抜けといわんばかりに言った。

「これからだっただのに……」

Gポッドから出たナナは残念そうに呟いた。

「俺はこれからやられる所だったよ……」

続けてGポッドから出てきたコウヤが呟く。彼の脳裏には先程のダークハウンドの姿が焼きついていた。

「それでもないよ。皆ごんどん動きとか良くなってるし」

アイがそう言いながらGポッドから出てくる。その手には先程の白いダークハウンドが握られていた。

それこそ対コンドウ用のアイの切り札『AGE2E フェンリル』
今三人はガンプラバトルを通じての特訓中だった。二人とも徐々
にはあるが動きは良くなってきた。

「そういうアンタも随分いいのが出来たんじゃない?」

「それでもないよ。まだ使いこなせてる自信ないし」

「あの、ヤタテ・アイさんですか?」

丁度その時アイに声をかける人がいた。見るとパイロットスーツ
を着ている二人の青年がいた。

「?何ですか?」

「大会の特訓をしたいんですが、バトルしてくれませんか」

バトルを通じての訓練の頼みだった。大会が近づくにつれガンプ
ラバトルの特訓をするビルダーが増えてくる。

こういった時アイ等強いビルダーはよく相手に誘われる。

「もちろん!よろしくお願いします!」

快く受けるとアイはナナ達に断りを入れる。そしてGポッドに入
った。アイ自身も早くフェンリルに慣れようと必死だ。

……

ステージは再び月面、相手は片刃の対艦刀・シユベルトゲベールを持った機体、ソードストライクガンダムと

大型ビーム砲・アグニを持ったランチャーストライクガンダムだ。いずれもストライクの装備バリエーションだ。そして両機ともRGだった。

「本気で来てくださいいよお!!」

始まるや否やソードストライクガンダムはフェンリルに突っ込み対艦刀を振り上げる。ランチャーストライクもアグニを撃ち援護する。

アイはアグニをかわしながらソードストライクの懐に突っ込み、振り上げた体勢のソードストライクにドツズランサーを突き刺した。

「な!」

「いきなり大技すぎます!!」

アイが言ったと同時に、腹部を貫かれたソードストライクは背中から倒れ込んだ。

「よくも!!」

敵討ちと言わんばかりにランチャーストライクの射撃間隔が早くなった。アグニを撃ちまくってくる。

遠距離用の装備がないアイのフェンリルは相手に接近するしかない。

「やってみるか……」

アイはフェンリルにブーストをかける。猛スピードでランチャーストライクに迫るフェンリル。

「は!早い!」

アグニの砲撃の中を突っ込んでくるフェンリル、直後、ランチャーストライクの腹部にドツズランサーを突き刺した。これにより決着がついたかに見えた、が……

「チツ!浅い!」

アイが舌打ちをすると同時にランチャーストライクは右肩からバルカン砲を撃ってくる。当たったのはわき腹だった為まだランチャーストライクは生きていた。

「クッー」

至近距離で肩のバルカンを受けては面倒だ。左腕のレーザーブレイドを盾代わりにしバルカン砲を受けるアイ。

そのままレーザーブレイドでランチャーストライクの右肩の付け根を切り落とした。

「!?」

「はあぁっ!!」

すかさずドツズランサーから右手を離し、両腕のレーザーブレイドでフェンリルはランチャーストライクを左右から切り裂いた。

「いやはや、バトルありがとうございました。あっという間にやられちゃいましたけど、自分達のコンビネーションを改良する機会になりましたよ」

やられてもなお、悔しさを表に出さずに握手を求める相手のビルダー。アイは「こちらこそ」と笑顔で握手に応じるも、彼女の心にはしこりが残っていた。

二人はその後また特訓として別の対戦相手を探しに行くのだった。

「いやあ、本当強いわねアイ。見ててほれぼれしちゃった」

二人を見送ったアイに休憩していたナナが話しかける。

「うん……ありがとう」

「?何か浮かない顔してるけど」

「使いこなしてる自信ないんだろ?」

今度はコウヤが話しかけてきた。彼はバトル経験もナナより多い為アイの不安を察したようだ。コウヤは普段考えなしな為直観的に。

「うん、よく分かったね」

「まーな、ランチャーストライクの時一撃で仕留め切れなかったし、なんかそんな気がしたのよ」

「相手にはコンドウさんがいるからね、中途半端で勝てるとは思えな

いもの」

フェンリルは増設したブースターや軽量さから相当の機動力を誇る。だが問題がある。軽量かつ高機動な為余計な勢いがつきがちだった。

特にブーストは早いのが小回りが利きづらく射撃の狙いも定め辛い。更にオーバーヒートにもなりやすい。

その勢いは速く動くだけでなく、コンドウの重い斬撃を勢いで相殺して受けるという目的もあった。

以前コンドウと戦った時、自分が使用した『AGE2Eナイトメア』をヒントに考えた物だ。

コンドウと戦う事を考えるとどうしても重量を増やす事もこのまま使いこなせなくてもいいともアイは思えなかった。

コンドウの射撃精度を避けるとなるとあれ位の速度は必要だと思っただけからだ。

「でもあれだけ強かったんだし大会でも別にあのままでいいんじゃない?」

「……俺としては正直それは勘弁して欲しいけどさ」

コウヤが不満の声を上げる。

「ヤマモト?」

「誘ってくれたのは嬉しいよ。でもさ、結果的に部をほったらかしにしちまった俺としては、コンドウさん達に勝ちたい。正直中途半端は困るぜ」

打倒ウルフはコウヤ達模型部の悲願でもあった。部長のコナミの所為でやり辛さを感じていたコウヤは今の状況をありがたく思っていた。

しかし打倒ウルフは部全員が掲げていた悲願。自分だけがやり易い環境に移った事に多少なりとも後ろめたさと責任を感じてはいた。そして、せめて出るからには何がなんでもウルフに勝ちたい。勝利を模型部の土産に持ち帰りたいかった。

「解ってるよ。大会まで後三日、それまでに使いこなさない……」

アイはどうすればいいかと額を抑えた。

「……駄目だった……」

自室のベッドで仰向けに倒れながらアイは呟いた。あの後バトルを何回かしたが結局使いこなすには至らず、家に帰ることになった。結局どう使いこなせばいいんだ。色々考えているけど答えは見えない。

考え過ぎた為か頭がしびれる。普段ここまで考え込まないからまるで脳が筋肉痛にでもなったかの様だ。

——やっぱりナナちゃんの言う通りあのままで挑むしかないの？

そう考えていた時だった。スマホに着信が入る。誰だろうとディスプレイを見るとナナからだった。

「もしもし？ナナちゃん？」

「アイ……助けて……」

声が沈んでいる。何かあったのだろうか。

「どうしたの？何かあったの？」

「ストライク……アタシのストライクが……」

スマホ越しに聞こえる声はいつもの強気な声でなく若干涙声だった。ガン普拉抜きにしても只事じゃないとアイは思った。

「今行くから！どこにいるの！」

「アタシの部屋……」

……

「うわあ……こりやまた派手に……」

ナナの部屋で1/144ストライクを見ながらアイは呟いた。首から下をビルドストライクに挿げ替えた疑似HGCエールストライクだった。

ナナもまた大会への準備をしてなかったわけではない。HGエールストライクを完成度の高いビルドストライクを移植し

可動範囲や完成度を上げたこのストライクを作っていたのだ。加工や工作が必要な部分は全部アイがやったのは内緒だ！

(ちなみにHGCエールストライクを使わなかった理由は、ナナが

愛着のあるHGストライクで戦いたいから、という物だった)

話を戻そう。そのストライクは色がついた部分が全部真っ白になっていた。白く塗ったわけではない。色の部分がまるで冬の朝、霜が降りたかのように白く曇っていたのだ。

近くには水性トップコート(つや消しクリアー)というスプレー状の透明塗料が置いてあった。

「アイから借りた模型の本とか読みながらやってたんだけど……こんな風になっちゃって」

「外で塗ってたの？」

「うん、今日風もなかったし……」

元氣なくナナは答えた。水性トップコート、これは無色透明の水性スプレー塗料で、『光沢』と『半光沢』、そして『つや消し』の3種類が存在する。

これを仕上げに吹き付ける事により質感に違いが出てくるのだ。ナナは真冬の夜のベランダで、つや消しをストライクに吹き付けていたら白く曇ったというわけだ。

これは『かぶり』という現象でベテランモデラーさえも悩ます憎き現象だった。

「本とかじゃ修正方法とかないしどうすればいいのか解らなくて……」

「まあ普通は修正方法までは載ってないからね」

「ええ!?じゃあもう直せない?!」

泣きそうになるナナ

「大丈夫。とりあえず私の部屋に運ぼう」

そして二人はストライクを持ってアイの部屋に移る。準備として部屋を暖房で温める。

机の上に新聞紙を敷き、その上に上部を一部切り取った大型ダンボールを置く。

そして開けてない窓には換気扇の代わりに扇風機、

二人の手には百均の使い捨てポリ手袋。口には同じく百均の防塵マスク。

そしてもう一つ、お湯の入った桶にアイは自分の水性トップコートを入れていた。種類は『半光沢』だ。

「修正といっても基本的な事は変わらないよ。まずは三分位よく振つて」

アイはお湯の中からトップコートを取り出しよく振る。吹き付ける量のムラをなくす為だ。スプレー容器の中に入っている攪拌玉がカラカラと音を立てた。

「そこはアタシも注意したけど……」

「で、ここからポイント、吹き始めは吹きつけたいガンプラにはかけないで。ガンプラの隣から出す事」

「え？かける物がすぐそこにあるのに？」

「吹き始めって言うのはどうしてもスプレーの粒子が固まって出やすいからね。そしたら吹きっぱなしでかけたいガンプラを通り過ぎる感じで……」

それを二回か三回繰り返す。距離は20cmか30cm」

アイはかぶりを起こしたストライクにスプレーを吹き付ける。

「これを一時間乾かしたらまたやるの。かぶったつや消しの修正は上から半光沢か光沢を拭きつけければ結構中和出来るから、

下につや消しがある分つや消しっぽく残るからね、またつや消しを吹き付ける必要はないよ。

一気にやろうとしないで少しずつ進めるのが重要だよ。まあどうしても重ねた回数上多少厚ぼったくなっちゃうんだけどね……」

「わーありがとー！でもさ、なんで白く濁っちゃうたわけ？一応湿度とか調べたけど……」

ナナが見た本は湿度の高い日にやってはいけないと書いてあった。そして今の時期は空気の乾燥した冬の夜、条件は良かったはずだ。

「スプレーが冷えていたんだと思う。冷えてると吹き付ける粒子も固まって出るんだ。だからこうやって白くかぶっちゃうの。もともとつや消しはかぶりやすく出来てるからね」

その為アイはスプレーをお湯で温め、部屋の温度も上げていたわけだ。

「振る回数、気温、スプレートの温度、湿度、吹き付ける量、これらに気をつければ大丈夫」

「い、意外に多いわね」

「晴れた昼間ならある程度は楽かな」

「でもよかった……一時はどうなる事かと思っただわ。本当ありがたい。でも……」

水性とはいえスプレー塗料独特の匂いが充満する。

「なんか……気分悪くなってくるわね」

「仕上がったら換気すればいいよ。その為に扇風機を換気扇に使うんだから」

「ゴメンね……自分の部屋なのに」

「慣れてる匂いだから大丈夫。耐性ついちゃってるから」

笑いながら答えつつ、アイは思った。

——かぶりもこうやって修正する方法がある。自分も諦めなければきつとフェンリルを制御するコツを見つけられるはずだ。頑張ろう。——と……

……

翌日、ガリア大陸、明日はこのGポッドを大会会場の市民体育館に運ぶ。故に今日がフェンリルの練習が出来る最後のチャンスだった。

気合入れて行こう。と二階に上がるアイ、と、上からギャラリー達の歓声が聞こえる。なんだろうと上がった瞬間。モニターにコンドウのゼクが映っていた。

「コンドウさん!?!」

「いや、コンドウ君はここには来てないよ」

アイが叫ぶ直後、雇われ店員のハセベ・シロウが駆け寄ってきた。

「え?でもあれってコンドウさんのゼク・アインですよ」

「大会も近いからね。コンドウ君の戦闘データを利用して、似せた対戦NPCを作ったってわけさ、コンドウ君監修だよ」

「コンドウさん監修……やります!是非あのゼクとバトルやらせて下さい」

アイとしては願ってもないチャンスだ。アイはガバっとハセベに掴みかかった。

「わわっ!!ちよつと待って!順番を守ってね!!」

そしてアイに順番が回ってきた、アイはバトルへと突入する。ステージは以前コンドウと戦った時と同じ『テキサスコロニー』砂漠と混じった荒野にフェンリルとゼクは、向かい合うや否やぶつかり合う。ドツズランサーは振り下ろされたガーベラストレートをしっかりと受け止めた。

「よしー」

ゼクはドツズランサーを払いのけようと力を込める。単純なパワーではゼクには勝てない。

そうはさせるかとアイは左腕のレイザーブレイドでゼクめがけて斬りかかる。

すかさずかわし離れるゼク・アイン

「ここまでほうまくいつてる!」

距離を置いたゼクはフェンリルめがけビームライフルを撃つてくる。アイはゼクの周りをブーストで大きく旋回しつつ

ドツズランサーのビームマシンガンで応戦する。ゼクはホバーで器用に動きビームマシンガンを回避。

アイもまたナイトメアの時は避けられなかったビームライフルを避けていた。

「これなら!!」

コンドウに勝てるかもしれない。アイがそう思った時だった。Gポッドに警告音が響く。

「!?」

前方を見ると目の前に岩山が広がっているのが見えた。このまま直進すればぶつかってしまう。

「しまった!!」

バーニアを逆噴射させ急制動をかけるアイ、だがフェンリルの勢いは中々止まらない。その時だった。横からビームが襲ってくる。

「!」

コンドウのゼク・アインだ。スピードを緩め当てやすく、かつ無防備になった瞬間を狙って来たのだ。肩部のシールドで受けるも前方の岩山に衝突する。

しかしスピードを緩めていた為自滅には至らなかった。

「ぐあっ!!」

これじゃ前と同じだ……アイは岩山に機体をめり込ませながら毒づいた。前と違うのはゼクがビームライフルで追い打ちをかけてきている事。

アイは機体を起こすと同時に、攻撃に出ようとするがゼクは容赦なく撃つてくる。それをシールドで受けるが何度ももちそうにない。

——結局駄目なの!?私じゃコイツを使いこなせないの?!——

アイがそう思った時だった。Gポッドのモニターに『挑戦者が乱入しました!』と表示される。

「!?」

こんな時に!?アイがそう感じた時、ゼクの背後からレールガンが飛んでくる。ゼクは振り向くとレールガンをガーベラストレートで受け止め防いだ。

「アイ!大丈夫!?!」

「ナナちゃん!?!」

撃つたのはナナのストライクガンダムだ。それも昨日かぶりを修正した奴でほとんど曇りが消えていた。

今回のパックは大会用に用意していたI・W・S・P。全てのパックのいいとこどりのストライカーパックだった。(ちなみにまだ製作中で素組みの状態)

「いや!順番どうしたの!?!」

「割り込みしてはいっちゃった!」

「ええ!?それマズイよ!」

「……見てられないんだもん!ガンプラとはいえアンタのあんな思い詰めた顔!」

「……ナナちゃん……」

「とにかくオッサンのコンピュータの相手はアタシに任せて！」
「待ってよナナちゃん！分が悪すぎるよ！」

「大丈夫！このストライクは大会用に作った物だもん！アイに習ったようにスプレーを細かく何度も吹いて最高の出来よ！」

「でも相手は……細かく!？」

その時、アイの脳裏にナナの言葉が突き刺さった。

「はあぁっ！」

ナナは両手に片手サイズの対艦刀を持ちゼクに斬りかかる。ゼクは大振りのガーベラストレートでストライクを真つ二つにしようとするが

ナナは二本の対艦刀で受け止めた。

——つつ！なんて力!?アイの奴こんなのと戦っていたの?!——

ゼクは刀を振るう。その勢いでストライクは後方に吹き飛ばされる。

「あうっ！」

そのストライクを背中からアイのフェンリルが受け止めた。

「アイ!？」

「後は任せて！ナナちゃん！」

そう言うときアイはストライクの前に躍りだし、ブーストでゼクに迫った。ゼクはそのままフェンリルめがけビームライフルを撃つ。

ビームが迫る中、アイはブーストを止めた。

「え?」

ナナがその行動に理解出来ない一瞬、迫るビームがフェンリルに当たると見ていたギャラリィは思った。

だが次の一瞬でフェンリルの体が横に移動、ビームをかわす。

「避けた!？」

さっき観戦モニターで見ていた動きとは違う。何が起こったと思うナナ。

そしてフェンリルは動く、なおもビームライフルでフェンリルを撃

つゼクを

ジグザグにブーストを使いゼクの攻撃をかわしているのだ。

ナナは思った。さつきは大味な、直線的なブーストばかりだったのに今度は細かい動きが出来る。

——あれって……そっか！ブーストを細かく何度も使って動きやすくしているんだ！——

ナナが心で叫んだ直後、ゼクのガーベラストレートが握った左腕ごと中に舞った。ドツズランサーに手首を貫かれたのだ。

ゼクは形勢不利とみると後方に下がりながらビームライフルを撃つ。

アイも追いかける。ゼクとフェンリルが並行しながら撃ち合った。ビームマシンガンをくらいながらも耐えるゼク

アイのフェンリルは軽やかにブーストでビームライフルをかわしていた。

「アイ！凄いや！」

「……」

ナナが叫ぶもアイの耳には届いていない、それ程までにアイは集中していた。

そしてゼクのビームライフルはフェンリルのビームマシンガンを受け破壊、一気に勝負をつけようとゼクに直線的ブーストをかける。

だがゼクは無事だった右手で肩部のビームサーベルを抜き迎え撃とうとする。

「……！」

なおも直線的に迫るアイ。至近距離に入った時。ゼクは横一閃にビームサーベルを振るった。

「アイ！」

斬られた。ナナはそう思った。が、ゼクがビームサーベルを振るう瞬間にアイはブーストを止め、身を屈ませる。

そしてただちに再びブーストをかけゼクを追い越す。ほぼ同時に

ドツズランサーを地面に突き立て支点にし、グルツと周り右腕のレイザーブレイドを思い切りゼクの背中に斬り落とす。

勢いをつけたレイザーブレイドによってビルダーなき人形の上半身は切り落とされた。

「フェンリル……アイ……勝ったんだ！」

「……やった……やったんだ！」

集中の糸が切れたアイはフェンリルを使いこなす糸口の発見に、そして勝利を掴んだ事に喜びの声を上げた。

「やったじゃんアイ！完全にこれでフェンリルも物に出来たわ！」

アイに駆け寄るナナ。

「なんか、NPCとはいえ勝ったのが不思議だよ」

「そんな事ないよ。これでオツサンとも充分戦えるし、むしろアタシが格好悪いか？すぐやられそうになっちゃったし」

「そんな事ないよ。ナナちゃんいなかったら私がやられてたし、有難うナナちゃん」

バツを悪そうにするナナに笑顔で返すアイ、予期せぬ反応にナナは照れる

「え？あ、まあ結果的にアンタがそう思うんだったら悪い気はしないわね」

「でもまだまだだよ。今日は完全に物にするまでバトル続けるからね私」

「あ、だったらアタシもストライク使いこなすまでつき合うからね」

「フフ……今度は順番守ってね」

「う……それ言わないでよ……」

アイの顔にはもう迷いはなかった。アイ達はこれで万全の体勢で大会に望めるだろう。だが……

同時刻、某ゲームセンターにて

「うわああ!!」

縦真つ二つに斬られた1/144HGサイコガンダムが爆発する。Zガンダムに登場したその機体は通常のガンプラの倍はあるサイズだ。

自分の倍はある敵を切り裂いた機体は紅く怪しく輝いていた。

「凄いものだなコンドウさん、サイコガンダムを真つ二つか……」

「ああ、いいものが出来たよ」

感心するツチャ、そしてGポッドから出てくるコンドウも満足げに答えた。

「これで大会も優勝は俺達の物ツスね」

「俺個人は優勝には興味はないよソウイチ」

「何言ってるんスカ。俺たちは立場ある『ウルフ』ツス。勝利という結果を皆に見せつける義務があるツスよ」

「コラコラ、頭固くなりすぎだぞソウイチ。まあ俺も次の大会、妥協する気なんて一切ない。その為にコイツを完成させた」

コンドウは手に持った赤いガンプラを眺める。

——恐らく君は全力で来るだろうヤタテ、そして俺も全力で応えよう。この『ミブウルフ』で!!待っている!!——

決戦の時は刻一刻と近づいていた……

第12話「狼達の決戦」(激突! ガンダムAGE―2
Eフェンリル VS スサノオ改・ミブウルフ)

「ここか……」

肌寒い冬の朝。ミヨ・ムツミは市民体育館を見上げ、呟く。

「でっかいねえ。どんだけの人が出るのかな?」

隣にいたフジ・タカコが続く。

「さあね、でもアイちゃんやナナの晴れ舞台だ……。しっかりと応援しなきゃ……」

そう、二人はアイとナナがガン普拉バトル大会に出るということで応援に来たわけだ。

応援するからには自分たちも全力でやろうとムツミは気合を入れる。

「行こう……。タカコ……」

「ねえねえ君達い、ガン普拉バトルでんの?よかつたらお姉ちゃんのインタビューに答えてくれないかなあ。あと写真も」

が、当のタカコは後ろにいた少年二人(小学生)に目を輝かせながらインタビューをしようとしていた。

「……」

直後ムツミがタカコの首筋を掴み会場に引きずっていったのは言うまでもない……。

ムツミ達がロビーに入り程なくしてアイ達は見つかった。既にナナとコウヤもパイロットスーツを着て準備はOKだ。

三人はロビーのベンチに座りながら開会式を待っていた。

「アイちゃん……」

「あ、ムツミちゃん。来てくれたんだ」

ムツミが声をかけるとアイ達はすぐさま反応した。

「大会頑張ってるから……応援してるから……」

「へへっ!任せとけて!俺がついてるんだからよ!」

アイの代わりにコウヤが自信ありげに答える。

「自信あっていいわね……アタシなんかガチガチだわ……」

反面ナナは強く緊張していた。初めての大会だ。こういうのには慣れてない。

「大丈夫だよ。今まで練習してきたんだし、ナナちゃん頼りにしてるから」

アイがフォローを入れる。言葉に気休めや嘘はない。ナナもそれを分かっていた様だ。

「アイ……そう言われたんなら答えなきやね」

「優勝したらアイちゃんの好きな牛丼……皆で食べに行こうよ……」

そしてそれを見ているムツミも、アイ達が優勝すると信じていた。

「あ、ムツミそれ敗北フラグ」

「タカコ……黙って……」

そして開会式も終えて参加者全員がGポッドに入る。参加した隣のビルダーは40人にも上った。

ムツミとタカコも観客席から40個のGポッドを見下ろしながらアイ達の身を案じる。

天井には四方の観客席の方向に向けて大型モニターが吊るされている。そこから観客はバトルが観戦出来るわけだ。

「凄いね、Gポッドや会場の大きさだけでなくステージも大きいんだ」

タカコがパンフレットを読みながら言った。

「40人も出るからね……。そりゃそれだけ広くもなるよ……」

パンフレットに表示されるステージは『デブリベルト・ユニウスセブン』

プラントと呼ばれるそれは『ガンダムSEED』という作品におけるコロニーであり、

核ミサイルを撃ちこまれ、戦争のきっかけとなった因果の地である。

全長8kmにも及ぶ廃墟は、ガンダムが戦争を扱った暗く重たい作

品である事を見せつけるかのようであった。

宇宙で大量にデブリの漂う中、衛星軌道を漂うそれは、宇宙に浮かぶ朽ちた島そのものだった。

「それでは！ガンプラサバイバルバトルを開始します！」

そのアナウンスと共に全ビルダーが仮想の戦場へ飛び立つ。

「ヤマモト・コウヤ！アメイジングレジェンド！」

「ハジメ・ナナ！ストライクI・W・S・P！！」

「ヤタテ・アイ！ガンダムAGE2Eフェンリル!!!」

『出ます！（出るぜ！）（出るよ！）』

それぞれのビルダーが己を鼓舞する様に叫ぶ。そして母艦からアイのフェンリル、ナナのストライク、コウヤのアメイジングレジェンドが出撃した。

もう戦闘は始まっているのだろう。遠くで爆発の光が見えた。

「早速始まっている！」

「部長たちとも戦わなきゃいけない！気を引き締めていこうぜ！」

「模型部ねえ……で、思ったんだけど」

「？何ナナちゃん」

「なんでアタシらのチーム名『山回高校模型部（補欠）』なわけ!?!」

そう、アイ達のチーム名はいつの間にか模型部部長のコナミの手によって勝手に登録されていた。

「いや部長の横暴は悪いと思うけど我慢してくれよ！」

「納得いかないわよ！バトルで会ったらただじゃおかないんだから！」

「私だって納得いかないけど今言ってる場合じゃないよ！早速私達にも来たよ！」

「!?!」

そう、高速でアイ達に近づいてくる機影が三機。『ガンダムAGE』に登場した黒い二足歩行のトカゲの様な機体『ゼダス』だ。

下半身を後ろに倒すという簡易的な変形により飛行形態が取れる

機体だ。三機ともその形態で突っ込んできた。

「ガッテン！迎え撃つぜー！」

ロングライフルを構えるコウヤのレジエンド、

「待ってー！ここは私にー！」

そう言うとアイはフェンリルをストライダー形態に変形、ウォーミングアップといわんばかりに三機のゼダスに突っ込んでいった。

「あーアイー！」

フェンリルが突っ込むとゼダスは散開する。アイは一機に狙いをつけ追いかける。追われるゼダスは振り切ろうとするがフェンリルのスピードは凄まじく振りきれない

それを別のゼダスがフェンリルを追いかけながら両手のビームバルカンを放つ。だがフェンリルは機体を高速で左右に動かし回避する。

アイはブーストのタイミングを使いこなしていた。

「逃がして！！たまるかあっ！！」

フェンリルは前方のゼダスを機首部分のドッズランサーで貫いた。と同時にドッズランサー下部のビームガトリングガンを発射、零距离射撃によりゼダスは爆発。

それにより発生した爆風がフェンリルを包む。後方にいたゼダスは爆風の所為で状況を確認できない。かなり近い位置だった。

だがその時、突然ゼダスに乗ったビルダーのGポッドに警告音が走った。

「!?」

ゼダスのビルダーは状況を確認しようとする。直後、ゼダスの脳天はドッズランサーで貫かれた。状況が解つたと同時にゼダスのビルダーは敗北を悟った。

「このっ！よくも仲間をつー！」

残ったゼダスがフェンリルに向う。身構えるフェンリル。だが直後そのゼダスを二つの弾丸が機体を砕いた。

「何っ!?!」

ゼダスのビルダーが弾の飛んできた方向を見るとストライカー。

W・S・P・とアメイジンググレンジエンドがいた。

こつちを狙って撃つたのだと理解。同時にゼダスは爆散した。

「ちよつとアイ！一人で突つ走らないでよ！」

「そーだぜ！俺達だつているんだから！」

「あ、ゴメンね二人とも。早く機体を暖めておきたくて……ッ！」

突如アイのGポッドに警告音が響いた。多数のビームが地上からフェンリルの側面を狙い飛んでくる。

アイは高速で前へ出て回避。飛んできた方向に向くも、それが誰のビームなのか覚えがあつた。

「ザクIV！ソウイチ君！」

「覚えていてくれたんでスカ？光荣ツスよ」

地上の廃墟からソウイチの機体が姿を現す。赤いザクIIIの改造機、ザクIVだ。今回は右手にハンドガンの代わりにフェダーインライフルというロングライフルを装備していた。

「俺も忘れないでくれよ？」

「!?ツチャさんも！」

アイが反応すると同時に戦闘機が突つ込んできた。両サイドにインパルスのエクスカリバーが取り付けられた左右別々の色の戦闘機、バウ・ナッター。

アイはバウ・ナッターの突撃をかわしつつ、ビームガトリングガンで応戦。それにナナとコウヤも援護射撃を行う。

「アイ！今のうちに離れて！」

「クッ！やつぱり仲間も無視できないか！」

ツチャはかわしながらバウを合体させ距離を取る。

「いきなり真正面から攻めてくるなんて！アンタ達作戦とかないわけ!?」

「考えなしと勘違いしないでくれ。今回はステージ的にやり辛いんだよ」

「それに俺らあんま小細工が通用するとも思つてないツスよ」

「ステージ的に!?どういう事……ッ!?」

アイが言葉を返そうとしたその時、ガガガッ！と耳をつんざく音が

聞こえてきた。何か硬いものを掘るような音が、

「始まった。見てみなよ」

ツチャのバウがビームライフルである方向を示す。アイが見るとそこには三脚で立つ大型の緑色の物体があった。

それがユニウスセブン中に至る所に配置してある。

物体は中心部に取り付けられたドリルで地面を掘っている。ドリルはそのまま地面の中に消えた。

「あれってまさか……」

「あれって何よ。アイ」

「メ！メテオブレイカーだ!!」

疑問を持つナナにコウヤが答えた。メテオブレイカー、SEED（シード）の続編、SEED DESTINY（シードDESTINY）でユニウスセブン破碎に用いた大型掘削機だ。

元々は小惑星破碎に用いられる物で、一定深度まで穿孔した後、ドリル部が爆発して隕石を砕く物だ。

「あれをここで使うって事は……まさか!!」

「まさかってどういう事よ!」

ナナが疑問を投げかけると同時にドンツ!と地中で爆発するような音がし、全長部8キロにも及ぶ大地に亀裂が入り火を噴き上げる。そして……

「何なの!?!」

「ブレイク・ザ・ワールド……崩壊するユニウスセブン」

観戦してるタカコとムツミもその光景に絶句していた。

「何あれ!?!」

「火を噴いたラインに沿って……ユニウスセブンが……割れる……!?!」

同時に画面に小さく残り時間のタイマーが現れる。タイマーは画面上で『大気圏突入まで後5分』と表示されていた。

「そう、これはSEED DESTINYの崩壊し地球に落ちるユニウ

スセブンの再現ステージだ。アニメ本編とはちよつと違う仕様だがな！」

「その声！コンドウさん!!」

ユニウスセブンの向こう側、地球をバックに一機のモビルスーツが腕組みをしながら立っていた。細身の肢体に頭部に立つ二本の鍬形、ガンダム〇〇のスサノオだ。

見た目にも変化の知られる改造が施されており、元々黒だったボディはマルーンに塗装されており

背部にはジャスティスガンダムの背部ユニット、『ファトウムー〇〇』のエンジン部分を追加、

更にその外側にGNクローを移植、太腿部にイージスガンダムの肩アーマー、その外側にはイージスのサイドアーマーをバーニアとして使用、

空いた腰のGNクロー接続部にはスローネツヴァイのGNバスターソードが取り付けられていた。(更にバスターソードにも市販のバーニアパーツが取り付けられていた)

「赤い……血みたいに」

「鎧武者……その機体が……!」

「そう、俺のとおっておき!お前と全力で戦いたかつたんでね!ゼクじゃ役者不足だろう?」

「そう思ってくれるなら嬉しいですよ。でもそれ過大評価です」

「俺はそうは思わないよ!文字通り時間もない!速いとこ勝負といこうか!!」

コンドウは機体のGNクローから実体剣、シラヌイとウンリユウを抜く、同時にアイも機体のドツズランサーを持ちつつ、両腕のレイザーブレイドを身構えた。

「……」

両者の間で緊張が走る

「コンドウ・ショウゴ『スサノオ改・ミブウルフ』……」

「ヤタテ・アイ『AGE2Eフェンリル』……」

『出ます（参る）!!』

同時に二体の狼の名を冠する機体は飛び上がる。地球を背にして……

「アイッ！」

ナナがアイの勝利を祈るように見上げた。ツチャとソウイチはナナも加勢しようとする様に見えたようで、ナナのストライクを制止する。

「追いかけるのは勘弁して欲しい。それは野暮だと言うってものだからね」

「アンタ達！」

「アンタ達はアンタ達で俺達と戦ってもらうツスよ！」

ナナに不安がよぎる。相手の強さはアイのバトルを見てて知っているからだ。

「ハジメ！今までの練習を思い出そうぜ！そうすりゃきつと！」

コウヤはナナの緊張を感じとった様だ。

「解ってるわ……！アイも頑張ってるんだもの！アタシだって！」

ナナは自分を奮い立たせるとコウヤと共に、ツチャとソウイチに向っていった。

「るいりやあああつ!!」

ミブウルフは二刀流で突っ込んできた。

フェンリルは両腕のレイザーブレイドでそれを防ごうとする、しかしミブウルフの出力は追加されたリフターにより出力が強化されていた。

その勢いにアイのフェンリルは弾かれてしまう。

「つうっ！なんてパワー……」

「これで終わりじゃあないぞ！」

立て続けにコンドウが仕留めようと突っ込んでくる。

「こつちだつて守りだけじゃない！」

アイはフェンリルのレーザーブレードを構え突っ込む。お互いが得物を振りかぶり高速でぶつかり合った。

「出力は！そつちが上だろうけどねええ!!」

「チイツ！真正面から受け止めるか!!」

轟音を上げながら二機はつばぜり合いになった。フェンリルの両腕に取り付けられたレーザーブレード。

フェンリルその物は軽量な機体ではあるが、レーザーブレードの質量から発生する慣性力を利用した斬撃力、そして打撃力はミブウルフの出力にも負けていない。

「簡単に勝たせる気はありませんからね！」

「ハハハ！こつちだつて同じだあつ!!」

アイとコンドウが上空で戦つてる一方、ナナとコウヤも各々の敵と戦っていた。砕けた大地とはいえ1キロはあるユニウスセブンの破片の上で、

四機はその自機の実力をぶつけ合っていた。

「はああつ!!」

ナナが片刃の巨大な剣で斬りかかる。今回I・W・S・Pの手握られているのは対艦刀でない。『グランドスラム』という大剣だった。

ツチャのバウHはエクスカリバーでそれを受け止める。

「至近距離！頂ぎー！」

そのままナナはバウHの胸に膝蹴りを入れようとする。しかし分離して避けるバウH。

「おわつとー思ったよりよく動くじゃないか。細かい所で改修が光つてるな」

「当然！アイに手伝ってもらったんだもん！ほとんど色分け部分も塗ったんだから！」

「おまけにグランドスラムはホビージャパン付録のか！」

「知らない！アイからもらった奴だからね！」

「やっぱヤタテが頑張ってるんだからこっちも頑張らねエと！」

コウヤのイメージングレジェンドが、ソウイチのザクIVをロングライフルで狙い撃つ。

「納得はいかないツスけど！あの二人を邪魔させるわけにはいかねえんスよ！コンドウさんの為にもねえ！」

ソウイチは飛びながら難なくそれをかわす。そして背部のレールガンで撃ち返してきた。コウヤもそれをかわす。

ツチャとソウイチの二人……ナナとコウヤでは差はあれど必死に二人は食らいついていた。

もつとも相手の二人はコンドウとアイの方が気がかりのようだったが

「しかしヤタテさん……思ったより食いつくツスね、コンドウさんとぶつかりあえるなんて」

「アイちゃんは結構部を守ってるな。反面コンドウさんは随分と熱くなってる、ひよつとしたら……」

「ちよつとお！アタシ達と戦ってるのに雑談?！」

「俺達は眼中にないって事かよ?!」
呑気に通信を入れてるのがわかったのだろう。ナナとコウヤが憤慨する。

「いや失敬！真面目にやるべきだったな！」
「これでもこっちは真面目にやってるんスよ！」

二人は自分のやる気を示す様にナナ達に機体の射撃を続けた。
……

2機がぶつかりあってもう3分が経った。背景として遠くに見える地球はどんどん大きくなる。

このまま5分たてば地球に落ちる、それを全く意に介さないようにアイとコンドウの2機は高速で激突する。

コンドウの機体はオレンジの粒子を放つ為、遠くから見ればオレンジの光に見え、アイの機体は蒼いカラーリングの為か蒼い光となっていた。

ぶつかっては離れ、撃ちあい、またぶつかる2つの光……

『……!!』

お互いが揺れる機体の中、バトルのみに集中し、声を出す事すら忘れていた。

コンドウはまた接近戦に持ち込もうと兜の鍬形からビームチャクラムを放ち牽制、

機体を高速で移動させていたアイは自分の機体を追いかけるそれをドツズランサーのビームバルカンで迎撃。

直後、ミブウルフの腹部と両肩が展開、球体状のビーム、トライパニツシャーを相手の進行方向目掛けて放つ。

「！」

とつさに機体に急停止をかけてかわすかとアイは考える。だがかえって当たってしまうかもしれない。それならばとアイは自機をストライダー形態へと変形、

最大でフェンリルを加速させる。自分のストレスをトライパニツシャーが通り過ぎた。そのまま機種バルカンを乱射しつつミブウルフに突っ込んだ。

「ただ突っ込んでくる相手をかかわすのはたやすい!!そのまま切り裂く！」

ミブウルフは突撃をアツサリかわすと、そのままカウンターでフェンリルを側面から蹴り飛ばす。

「アウツ！」

飛ばされたフェンリルはクルクル回りデブリに衝突し止まる。ユウスセブンが割れた際に発生した浮かぶ破片だ。

「クツ……なんて人……あの一瞬で蹴り入れるなんて……」

人間ある緊張状態では相手の動きをゆっくりに感じるという。今のコンドウの挙動。そしてアイの判断の原因がまさにそれだった。

コンドウはシラナイとウンリュウの柄を組み合わせる、ソウテンへと合体させると突き刺そうと突撃をかける。

「これで終わりだあっ!!」

「クツ！まだ……まだあ!!」

ソウテンが腰のサイドアーマー部分に突き刺さる瞬間、突然フェンリルの腰部が90度下がった。

「ッ?!」

コンドウのミブウルフはそのまま勢い余ってデブリに剣を突き刺してしまふ。

「外した……っ?!いや!変形?!」

下がったのではないとコンドウは悟る。斬られる瞬間アイはフェンリルを変形させかわしたのだ。

突き刺した剣を抜こうとするコンドウ。アイはフェンリルの前身のスラスターでぐるっと回りミブウルフに向く。

向きながらレイザーブレイドのついた腕でミブウルフにストレートを入れる。

「これでええええっ!!」

「ちよこ……ざいなあっ!!」

とつさに機体を下からせるコンドウ、レイザーブレイドはミブウルフの胸を掠めた。

「クソッ……仕留め切れなかった……」

アイが悔しそうに吐き捨てる

「変形してかわす……更に勢いを利用して攻撃に転用する。大した奴だよ……本当に……フ……フフフ」

コンドウの声が震えている。そして笑っている。そして剣を捨て、機体の腰にマウントしていたGNバスターソードを手取る。

そして両手で構えフェンリルに斬りかかった。

「デカいっ!」

「俺をとことん熱くしてくれる!こんな充実したバトルは久々だああっ!!!」

GNバスター!ソードを両手のレイザーブレイドで受け止める。パワーはさっきの二刀流以上だ。そのまま二機はこう着状態となる。

「しかも重い一撃!!」

「だから!俺が本気で言ってるという事を示そう!」

「な……につー！」

「トランザムッ!!」

コンドウが叫ぶと同時にミブウルフが赤以外の部分含め紅く染まる。

『トランザム』ガンダム○○に登場したシステムで、機体に蓄積した高濃度の圧縮粒子を全面開放、一定時間スペックの3倍に相当する出力を得る。

ガン普拉バトルでもその機構は再現されており使用した機体は攻撃力とスピードがかなりアップする。反面原作では使用後性能の低下というデメリットがあり、

ガン普拉バトルでもこのペナルティがある。(ガン普拉バトルでは第二期、劇場版の機体、疑似太陽炉でも同じ仕様という設定)

「トランザム……！決める気ですか!!」

「あたりきよ!!一気に決めさせてもらう!!」

ジャカツ!とバスターソードが音を経て開く、そして背面に取り付けられていたバーニアを一斉に点火させた!

剣は威力を増しズシツとレイザーブレードにかかる重みが増す。

「うおおおりやあぁっ!!!」

そのままコンドウは相手を薙ぎ払い吹き飛ばす。

「うぁっ！」

そのままコンドウのミブウルフは追撃をかけようと両手で剣を構え突っ込む、そのスピードは自機の残像が出る程だ。

タカコとムツミは観戦している身でありながらこの状況の絶望的状况を肌で感じていた。

「うわっ!どうするの!敵があんな隠し玉持っていたなんて!」

「アイちゃん……勝てないの……?」

「ハジメー！マズイぞ！ヤタテが」

「翻弄されてる!?アイ！」

ナナ達のいる地点、ここからでもアイとコンドウの戦いは見えた。トランザムを使ったミブウルフはフェンリルに斬りかかっては弾き飛ばし、

斬りかかっては弾き飛ばしの連続で襲っていた。当のフェンリルは直撃は防いでる物のレーザーブレイドでガードするのが精いっぱいだった。

「二対一の戦いであれ?!卑怯よ！」

「つたつたつたあれも公式の戦法だからなあ」

「もう見てらんない！アタシ行く！」

「無茶だろ！お前が行つたつたつたあの二人の輪に入れねーよ！」

「言わないでよ！分かつてるわよそんな事！でもあのままじゃアイが……！」

「それは俺だつて同じ気持ちだよ！でも俺達だつてこんな状況じゃ……」

そう、二人もツチャとソウイチに追いつめられていた、今二人は背中を合わせ動けない状況だ。

ナナのストライクはシールドとI. W. S. P. のレールガンを損失、グランドスラムは折れずにいたがそれを杖に立っている程に消耗していた。

コウヤのレジェンドも手持ちのライフルとハンドガンを破壊され、残った装備はヒートナタのみ、そんな二人の機体をバウHとザクIVが挟み込むようにいた。

「こんな状況で会話とはね。さっきの言葉、そっくり返すツス」

「クソツ……実力差があるのは知ってるつもりだけど……ここまではよ……」

コウヤが呟く、ツチャ達がナナとコウヤの機体に銃口を向けた。

『これで終わりだ（ツス）！』

ここまでのか、と思った二人！だがその時だった。30条ものビームがバウとザクに飛んできた。

「な！なんだ!!」

「これだけの火力！どこから！」

「オーホッホッホ!!ご苦労だったわね！コウヤ！」

聞き覚えのある黄色い声だ。コウヤとナナは誰なのかすぐ分かった。

「ゲツ！部長!!」

そう、模型部部长、ウミノ・コナミだった。コナミのドラッツェ・オクトパスのドラグーンがビームの正体だったわけだ。

「身を隠していた甲斐があつたわ！消耗した所を狙えばウルフといえど倒しようはあるって事よ！」

ドラッツェに続き二機のハイゴッグがビームカノンを撃つ。片方はカワサキの機体だった。

「部長……さすがにこれはセコすぎやしませんか……」

「何言ってるのよカワサキ！サバイバルなんだから常套手段でしょ！わざわざ全部正面きって戦いを挑む奴なんかいやしないわよ！」

そう、もうほとんどのチームは破壊され、残ってるのはこの3チームだけだった。コナミ達が消耗していたチームばかりを狙っていたのは内緒だったりする。

「本当汚い！やっぱりコードモ部長じゃなくて小物よ！」

「小物言うな！」

「なんだかよく分からないが！俺達を倒せると思うなよ！」

ツチャはバウを分離させ模型部を迎え撃つ。

ドラッツェとハイゴッグ二機相手にツチャとソウイチは標的を変えた。

「……」

それを見たコウヤはナナに通信を入れる

「ハジメ……部長達がアイツらひきつける間にヤタテの所へ向かって
ちよ」

「！ヤマモト!?アンタ……」

「行きたいんだろう？ヤタテん所へ」

「でもアンタは……？」

「多分部長負けるだろうから、それをほっとけない」
「え……」

ツチャとソウイチは消耗しているとはいえ模型部達を追いつめかけていた。このままでは負けるだろう。

「つべこべ言うなよ！俺達はチームだろ!?そして同時に俺は模型部だ！負けるなら俺は両方の仲間の為に戦って負けたいんだよ！」

「ヤマモト……アンタ……ゴメン!!」

ナナはコウヤの真剣な声を意外に感じるも、それを口に出さず、ナナはI・W・S・P.のバーニアを吹かし飛び立つ。

「!?させるか!」

ツチャはバウ・アタツカーのミサイルでドラグーンを撃ち落としつつ、バウ・ナツターの突撃でハイゴッグを一体破壊。

そんな中でストライクがここを離れようとするのに気付く。迎撃しようとはバウの機首をストライクに向けようとした。

「こっちのセリフだぜい!」

それをコウヤのレジエンドがヒートナタを一本投げる。ナタはバウ・アタツカーの下部に吊るされたビームライフルを切り裂いた。

「!ライフルが!!」

「コウヤ!アンタ!」

コナミが驚きの声を上げる。

「部長!危なっかしいんだからもう!」

「そのやり方、嫌いじゃありませんけど邪魔ツス!」

既にもう一機のハイゴッグを破壊していたソウイチはアメイジン
グレジエンドを背後から狙い撃つ、

ライフルは命中しレジエンド背部のブースターが破壊される。その音を聞いたナナが振り向いた。

「ヤマモト!」

「振り向くな!ヤタテン所へ急げえ!!」

「!」

そのままナナはストライクで、アイのいる離れたユニウスセブンの欠片に向かった。

「アイ……！待ってて!!」

「逃がすか！」

「こっちのセリフっていったぜ！」

なおも追おうとするツチャのバウ・アタッカー、だがそれは阻止された。

バウにコウヤのレジエンドが組みついたのだ。バウ・アタッカーを腕で掴むレジエンド。

「な！なんて奴だ！ソウイチ！お前だけでも追え！」

「言われずともツス！」

「させるかあ！」

飛び立つザクIVに残ったヒートナタを投げつけた。背を向けていたザクIVにそれは当たり右の翼を損傷させる。ソウイチのGポッドに衝撃が走った。

「うわっ！コイツ！よくもお！」

ソウイチは怒りを見せると、残った翼のレールガンでコウヤのレジエンドを撃とうとする。

「待ちなさい！」

「!？」

だがそこへコナミのドラッツエがビームサーベルで割って入る。ソウイチはフェダーインライフルのビームサーベルでそれを受けた。もうドラッツエのドラグリーンはほとんど落とされた状態だった。

「部長!? どうしてー！」

「コナミは部長よ！部員のピンチを放っておけるわけないでしょ！」

そうは言うがザクIVと鏑迫り合いになったドラッツエは押されている。ザクIVのパワーにドラッツエでは及ばないのだ。

「啖呵きつたはいいけど無謀ツスよ!!」

ソウイチはドラッツエを薙ぎ払う。

「キャアッ！」

そのままドラッツエはユニウスセブンの大地に墜落する。コウヤはバウにしがみついたまま叫んだ。

「部長！」

「離れる！離れないというのなら！」

ツチャはバウ・ナッターをこちらに向かわせる。エクスカリバーでレジェンドだけを貫くつもりだ。

浮かぶバウ・アタツカーにしがみついた体勢のレジェンド、それを側面からバウ・ナッターが襲いかかる。

コウヤはこの状況をどうにかしたいがレジェンドにはもう武器がない。

「敵ながらあつぱれな奴！だからこそ倒さなきゃ厄介だ！覚悟するんだな！」

「くそっ！武器がない！」

「コウヤ！だったらこれ使いなさい！」

コナミはドラツツエの背部のビームライフルを外すとコウヤのレジェンドに投げつける。ドラツツエがザクⅣに撃ち抜かれたのはその直後だった……。

投げられたビームライフルはレジェンドの手に収まる。元々これはレジェンド用のビームライフルだから使用に問題はない。

「部長！うおおお!!」

コウヤはレジェンドのビームライフルを至近距離で発射。バウ・アタツカーを撃ち抜いた。

「ばー馬鹿なー！」

ツチャの断末魔が響く中、バウ・ナッターのエクスカリバーがレジェンドを貫通したのはほぼ同時だった……

「そんな……ツチャさんが……!?!」

ソウイチはまさかツチャがやられた事に驚いていた。

そしてアイとコンドウ……こちらも勝負は見え始めていた……

ミブウルフの猛攻に耐えるフェンリル。レイザーブレイドの刃もコンドウの何度もの猛攻に限界だった。

所々レイザーブレイドにヒビが入ってきている。

「クッ！もう駄目なの!？」

「どうやらもう防ぐ手だてはないようだな！この勝負！もらったぞ
!!」

「!？」

「覚悟オオオッ!!」

真正面からコンドウのミブウルフはバスターソード振り上げ、一刀
両断にしようとする。

「まだ……」

「何!？」

「まだ終わらない!!」

その瞬間、フェンリルの胸が激しい光を放つ。胸部のドクロに搭載
された眩惑用発光器『フラッシュユアイ』だ、

「グオッ！何も見えん！小癩なアア！」

不意打ちでモロに眼をくらませたのだろう。コンドウは一瞬たじ
ろき、腕で眼を覆いながらもバスターソードを振り下ろした。が、手
ごたえがない。

「！そこか！」

自機の左からフェンリルが斬りかかってきた。コンドウはミブウ
ルフのバスターソードでそれを受け止める。

「チッ！」

「甘いんだ！詰めが！」

バスターソードのバーニアの勢いでフェンリルを弾き飛ばす。が、
コンドウはミブウルフの腕に何かが巻き付いてるのが見えた。

ワイヤーだ。何かフックの様なものが先端についてる。手持ちの
アンカーガン『アンカーショット』だった

「やっぱりこれくらいの手じゃ勝てないか……でもまだ、私のカード
は出し切つてないんですよ!!」

「これは……アンカー!?!まさか！」

「そういう事！いけえ!!」

アイのフェンリルがアンカーに電流を流す。赤く発光していたミ
ブウルフが電撃により青く染まって見える。

「コンドウのGポッドは強烈な振動という形で伝わっていた。

「ぐあああッ!!!」

「おとなしくしてて下さいよ!せめてトランザムが終わるまで!!」
「なるほど……そういう手か……だがな!!」

「そんな!こつちに来る!?!」

「うおおッ!!」

振動するGポッドでコウドウは自機をフェンリルに突っ込ませる。
そのままミブウルフは右手でフェンリルの顔を掴んだ。

電撃はフェンリルにも襲い、振動はアイにも伝わった。

「くううっ!」

「観念してそのアンカーを離せ!!」

「離す……もんかあッ!!」

そのまま二機はもつれ合いながらきりもみしつつ落ちる。その際にフェンリルはドズランサーを手から離してしまった。

そして轟音を上げてユニウスセブンの地表へ激突した。

「ううっ……アンカーショットから手を離してしまった……っ?!」

アイは愕然とした。目の前にミブウルフがいる。もつれ合ったまま地表に落ちてしまったのだ。

トランザムは限界時間を超えた為終わっていたがまだ危機は去っていない。

「は!離れなきゃ!……できない!?!さっきのワイヤーが」

そう、さっきのきりもみ落下でワイヤーが二機をぐるぐる巻きついでフェンリルは離れる事が出来なくなっていた。フェンリルは腕すら動かせない状況だ。

ヒビ割れしているとはいえ、レーザーブレードに当たってる部分は切れるがそれ以外の部分は切ることが出来ない。

「フラッシュで足止めし、ブレードとアンカーの二重攻撃……俺も舌を巻いたぞ……」

「コンドウさん!」

「だが後一步だったな!俺の方は腕が動く!悪いが頂く!」

コンドウのミブウルフは腕を上げた体勢だったのでワイヤーが巻

き付いてなかった。腕を回しバスターソードを下に向ける。そのままフェンリルを突き刺すつもりだ。

「さらばだー！」

——よけられない！ここまでなの！——

もう駄目か！アイがそう思い目を瞑った時だった……。ビームがミブウルフのバスターソードを持った左手首を掠めた。

「ぬっ!？」

撃つたのはナナのストライクだった。ビームライフルを構え向かってくる。

「アイイイツツ!!」

高速で突っ込んできたストライクはバスターソードを思いつきり蹴り飛ばす。バスターソードはミブウルフの手を離れ飛んで行った。

「バ・バスターソードが!!」

「ナナちゃん!？」

「待ってて！今切るから！」

右手のライフルを捨てると対艦刀を右手で抜き、二機に絡まったワイヤーを切る。

「腕が動く！ありがとナナちゃん！」

フェンリルとストライクはそのまま離れると残りのまとわりついていたワイヤーを取り除く。

フェンリルとストライクは並び立ち。ミブウルフと向かい合っていた。

「俺としたことが仲間存在を忘れていた。しかしサブロウタ達を倒してきたか」

「悪いけどアタシは逃げてきただけよ。コウヤがアンタの取り巻きを倒してくれたんだから」

「そうか。だがあいにく倒し切れなかったようだな」

「え？—!？」

その時ストライクのコクピットが背後からのビームに撃ち抜かれた。撃つたのはソウイチのザクⅣだった。ナナのストライクを追っ

てきたのだ。

「ナ！ナナちゃん!!!」

「ゴメン……ドジった……ここまでみたい……」

ナナが悔しそうな声で答える。

「でもここまでこれたんだ……アタシ信じてるよ……勝てるって……」

ナナはそう言うのとストライクは爆散。そのままグランドスラムがユニウスセブンに突き刺さる。

「悪いコンドウさん、時間がかかったツス」

「ソウイチ……サブロウタは？」

「やられたツスよ……俺としたことが油断……?!」

言い終わらないうちにザクIVを巨大な回転物が引き裂いた。フェンリルの両腕のレーザーブレイドを組み合わせた投擲武器『レーザーブーメラン』だ

「俺としたことが油断したツスね……」

ソウイチが咄くと同時にザクIVは爆発した。

「決着……つけましょう」

アイはそういうとグランドスラムを引き抜き、構えた。そしてコンドウも同じくバスターソードを引き抜き構えた。

「そうだな……」

向かい合う二機、残り時間は30秒を切る、大気圏に突入した為背景の地球は大きく、そして赤く染まっていた。

『おおおおおっつ!!!』

お互いが一気にブーストをかけ、迫る。コンドウのミブウルフがバスターソードで横にフェンリルを薙ぎ払う。が、手ごたえがない。

「上か！」

フェンリルは上へ飛んでいた。上からつき刺そうとグランドスラ

ムを下に向ける。

「だが甘い！こちらから串刺しにしてやる！」

「間に合わない!?でも！」

コンドウは上にバスターソードを向けようとバスターソードのバーニアをふかす、……その時だった。

(パキッ)

「なっ!?」

ミブウルフの左手首がボロツと割れた。その所為でミブウルフは対応が遅れてしまい、

フェンリルのグランドスラムがミブウルフを脳天から貫く。そのままミブウルフは膝をついた。

「!!!!!!」

「観戦していたタカコとムツミはお互いの顔を見合わせる。」

「……やった……!!!」

「やりやがったよ!!!アイちゃん!!!」

——そうか……さっきのストライクの攻撃で……その所為でバスターソードの負荷に堪えられなかったのか——

——ナナちゃんが……助けてくれたんだ——

「最後まで……私ひとりじゃどうしようもありませんでした……」

「そんなことないさ、俺がランザムという手段を使ってもお前は耐え凌ぎ、最後まで仲間の期待にちゃんと応えた、それはまぎれもなくお前の実力だ、過大評価じゃないぞ?」

「コンドウさん……」

「満足だよ。ここまで楽しい戦いが出来て……これこそが……あの時俺が夢見たバトルだ……」

「あの時……?」

「数年前に見たバトルだよ……魂を震わすバトルだった。それを俺もしたいが為に……サブ……ソウイチ……わがままにつきあわせちゃったな……すまん……」

そう言うとミブウルフは膝をついた体勢のまま沈黙した。ミブウルフを中心にユニウスセブンに亀裂が入り割れる。

「時間ギリギリか……」

アイはフェンリル越しに眼前に迫る地球を見上げた。そうしてこのバトルは……大会は終わった。

「それじゃ記念写真撮るよ」

閉会式の後、タカコがデジカメを持ちながら並ぶアイとナナ、コウヤに言った。

「はーい！ほらアイ、アンタ主役なんだからもっと満面の笑みで笑いなさいよ」

横にいるトロフィーを抱えたアイにナナは言う。アイはほぼ燃え尽きた状態だった。

「いや……どうもこういうのだと緊張しちゃって……でもなんか優勝したって実感ないよ」

「フフ……最初はそんなものだよ……そのうち実感するよ……」
そんなこんなで授賞式を迎えることが出来た三人だった

「それじゃあ昼ご飯食べにいこうか……、優勝祝いにさ」

「あいあーい、でワリカン？」

「ボク達の奢りに決まってるでしょタカコ……」

「あう……やっぱり……」

「フフフ……でもコウヤ君はどうするの？」

アイはコウヤの方を見る。

「凄いじゃないかコウヤ！かっこ良かったぞ！」

「いやいやさすがに今回は運が良かったとしか思えないゼナガレ。無我夢中だったしよ」

「珍しく謙虚だなお前」

「何言ってるの！アンタはコナミ達模型部の誇りよ！ただしビームライフルはコナミが渡したからコナミの方が立派だけどね！」

——この部長は……——

コウヤは模型部のメンバーにもみくちやにされていた。

「ほつといて行きましようよ。終わったらアタシもお腹減って来たし」

「いいのかなあナナちゃん」

「今邪魔しちや悪いだろうし……いいんじゃないかな……」

「ほら早く行こ行こ」

ナナやタカコに手をひかれ、「明日学校で会ったら言い訳考えておこう」そうアイは思っていた……。

第二章 『エデン』編

第13話「眠れる獅子達の目覚め」(ゼイドラ登場)

濃霧立ち込める廃墟の街、Gガンダムで登場したフィールド、『ネオイングランドのロンドン』で複数の機体が飛び交い戦っていた。

緑のフルフェイスヘルメットの様な頭部の機体。『アデル』ガンダムAGE1の量産機だ。

逃げるアデルに相手の機体が高速で追いかける。霧がかかっている為相手の機体は判別出来ない。

「兄ちゃん！アイツ早すぎる！」

「待ってる！今行く！」

アデルのビルダー、ケイ三兄弟は慌てていた。三人でガンプラバトルをしていたらいきなり挑戦者が現れたのだ。

挑戦者は一人、最初は数で圧倒しようとした三兄弟だが逆に翻弄されてしまった。

そのまま散り散りになるものの次男、タケオのアデルが追われていた。

「に！兄ちゃああんっ！」

タケオのアデルがあつという間に追いつかれビームサーベルで真っ二つにされる。そのままアデルは爆散。

三男ウメオは長男マツオに通信を入れる。

「いきなり乱入してここまで引っ掻き回されるなんてな。兄ちゃん……」

「……少しはヤタテに対抗して自信つけたつもりなんだけどよ」

そう、この三兄弟、以前アイに卑怯な手を使い負けた。そして身を隠し腕を磨いていた。その時アイに説教されたが改心したわけではない。

彼らは打倒アイを掲げて腕を磨いていた。その為に他人に任せていたガンプラ製作も自分でやるようになった。

平静を装ってはいるが、自信と腕を砕かれた事にマツオは内心

ショックを受けていた。

「あ！もしかして相手はヤタテか?!」

「いや……:にしては感じが違うような」

そうこうしていると相手の機体が迫ってきた。

「クソッ！仇討ちだ！」

「ま！待て！」

アデルが左腕のビームサーベルを構え突っ込む。そのまま機体目掛けて大振りする。が軽くかわされる。

そのまま濃霧の中の敵はアデルの左肩の付け根を切り落とす。

「なっ！」

驚愕するウメオに、そのまま敵機は胸部からビームバスターを発射、至近距離で受けたアデルはそのまま爆発した。

「残念だけど、僕には止まって見えるんだよね」

——男の声!? ヤタテじゃない! ——

「ヒロ、あまり遊んでると相手に失礼だ。早く決めるんだ」

——もう一人いる? いや、バトルに参加してるのは一人か ——

通信から相手の人数を予想するマツオ

仕上げといわんばかりに爆風の中から、相手がビームサーベルを掲げ、マツオのアデルに突っ込んできた。

迎え撃とうとマツオもアデルのビームサーベルを構え突っ込む。

「うおおおっ!!」

「何度も言わせないですよ」

そのまま相手の機体はすれ違いざまにアデルを切り裂いた。

「止まって見えるんだってば」

「なんだ!! コイツは!!」

切り裂いたアデルは上半身だけの状態になり地に倒れる。敗北を悟ったマツオは霧のかかった機体に通信を入れる。

「余裕しゃくしゃくだけだな……俺達を倒したと思っいい気になるなよ……? ここには俺達よりもっと強い奴がいるんだからな

「それも女で！」

「もしかして君達……ヤタテ・アイさんの知り合い？」

思わぬ反応にマツオは一瞬たじろいた。

「……まさかお前の目的、いや、本命は！」

「そう、その通り、ヤタテ・アイさんと戦う事だよ」

「なんだとおおっ！」と叫ぼうとしたがその瞬間にアデルは爆発した。

爆発に照らされた機体は赤いカラーリングが露わになる。そしてスリットの目が勝利を喜ぶようにピピピ、と音を立て光った……

……

同時刻……山回高校にて、

「ん、今日も授業終了、眠かったあ」

「お疲れさん、なんで午後の授業ってあんなにきつついんだかね」

「本当、中学の時はあんなじゃなかったのに」

帰りの挨拶の後、両腕を上げて伸びをするアイ。あのコンドウとの戦いからしばらくが過ぎた。

季節は四月になりアイ達は高校二年生へと進級した。

「アイちゃん、今日暇？今日はボク達も部活ないし一緒に帰ろうよ……」

ムツミが誘ってくる。進級してクラス変えが起こっても、馴染みの友達と同じクラスだった。

「うん、今行くね」

アイはそう言うとななと一緒に歩き出した。

下校中、友達が集まると自然と会話も弾むもの、アイ達もそれは例外ではない。通学路を歩きながら今日も他愛もない内容で話が弾む。「そういえば『SGOC（スゴック）』のアルバム昨日発売だったよね。ムツミちゃんやっぱり勝った？」

「当然……！聴く用に保存用に布教用……！抜かりはないよ……！」

眼を輝かせてムツミは言う。アイドルグループ『SGOC』ムツミはリーダーのコウジ・マツモトを初めSGOCの大ファンだ。

「いつも思うけどS G O C関係になるとすっごいわねアンタ、別に複数買い前提の仕様じゃないんだから一枚でいいでしょうに。C Dならコピー出来るんだし」

「ナナ……君はわかってない……！ファンと名乗る以上は生で聞く事に意味があるんだよ……！」

「そういうもんかね〜」

ナナは当たり前障りなく返す。いつもの様な会話、

しかしその日はいつもと違った風に全員が感じていた。その原因は……

「はあああ〜……」

タカコが大きいため息を吐く。今日はいつになくタカコの元気がない。時折こうして大きなため息を吐いていた。

「タカコ、今日何度目よそのため息」

フジ・タカコ、今日彼女はずっとこんな感じだ。さすがに気になつてナナが聞く。

「タカコちゃんらしくないよ。いつもだったらどんな話題でも食いついてくるのに」

いつも会話するにあたって目立っていたのがタカコだ。いつも騒いでる彼女が黙っている事にアイとナナは違和感を感じていた。

「別に気にする必要はないよ……」

理由を知っているのかムツミが答える。

「ムツミちゃん？」

「個人で取材対象にしていた好みの男の子が彼女持ちだったただけの事だよ……」

その程度の事。そう含みを持たせてムツミは言った。ああ、そういう事、とナナはリアクションを取る。

「う〜、なんか皆酷くない？感受性豊かな高校生が失恋しちゃったんだよ？もつと皆慰めるとかしてよ〜」

タカコが口を開くと沈んだ調子で喋った。

「いつもの事じゃん」

「どうせまた年下だったんでしょ……」

ナナとムツミには見慣れた光景だ。

「タカコちゃん、失恋しちゃったんだ……」

二人と比べタカコと接する機会が浅い所為か、一人アイは真面目にその事実を受け止めていた。

「うあくんアイちゃん。わかってくれるのはアイちゃんだけだよ」

タカコはアイにしなだれかかる

「わ！タカコちゃん!？」

「別にシリアスに受け取る必要ないわよアイ。こっち引越して来てからコイツの性格よく知ってるでしょ？」

「自爆するのもいつもの事なんだから……」

「うゝ好きなんだからいいじゃん。あくあ、あたしもその子と共通の趣味あったら良かったのにな」

「共通の趣味なら仲良くなれるキツカケがあるから？」とアイは聞いた？

「お、やっぱり分かってるねアイちゃん。アイちゃんもガン普拉趣味だから分かる？」

「君と違ってアイちゃんにそんな邪な気持ちはないよ……。ね、アイちゃん……」

ムツミが突っ込みを入れる。が、アイは「え?!」と意外そうな、そして反応に困るように驚いた。

アイ自身、イレイ・ハルというガンプラマイスターに会いたくてガン普拉にのめり込んだ経緯がある。

ムツミの言った考えに当てはまってもいえないと自ら思った故の反応だった。

「？」

「えゝアイちゃんだつてガン普拉が高じて彼氏出来たらって期待した事位あるでしょ？」

「えと……どうかな。男女入り乱れているけど、むしろ小学生の男女一緒のサッカーチームみたいな感覚だよ。自然にやってるから異性とか意識した事ないし」

アイは平静を装いながら説明する。ムツミはアイの反応に何か感じたようだ。

「でもさ、この間大会でウルフ倒して優勝したんでしょ？アイちゃんに興味持ったり、アプローチかけてくる人とか出てくるかもよ」

「そういうもん……かな？憧れる側ってなつた事ないからどうもピンとこないよ」

「でもあの近辺で一番強い人に勝ったわけでしょ？憧れる立場になるのには充分だと思うな」

その時だった。

「ああー！いたいた！探したぜお前ら！」

『え?!』

アイ達は不意に声をかけられる。声をかけたのは見知った顔だった。線目で首のない太目の体型の良く似た二人。

「あ、前の兄弟の長男」

「ケイ兄弟だ！そして俺は長男じゃなくて次男だよ！」

声をかけて来たのは次男、タケオとウメオの二人だった。

「どっちでもいいわよ。一体なんの用？」

「お前に会いたいわって言うてる奴がいる」

そう言つて長男、マツオが二人の青年を連れて出てきた。

「君がヤタテ・アイさんかい？」

栗色の髪の青年が聞く。くせ毛の髪でややガッチリ目の体格。しかし呑気そうな印象だ。

「そうですけど……あなたは？」

「僕は『ハガネ・ヒロ』そしてこっちが……」

ヒロと名乗った青年が隣にいた青年を指さす。

「『フクオウジ・マスミ』という。よろしく」

軽く笑いながら、マスミと名乗った青年が会釈をする。少し伸びた黒髪を一本に纏めたツリ目の青年だ。こちらは中性的な印象がある。

二人ともウルフとは全く違う。年齢は二十歳位、長身のイケメンと言った感じだ。

「出会って早々単刀直入に言おう！ヤタテ・アイさん！僕と付き合っ

てもらいたい!」

『な!なんですつてええつっ!!!』

突然の発言にその場でアイとタカコは大声で叫んだ。ナナとムツミはポカンと硬直していたが。

「ヒロ。何誤解招く言い方してるのさ」

マスミと名乗った青年がヒロにツツコミを入れる。

「変な言い方をしてしまって悪かったね。ヒロが突飛な発言をしてしまったが、つまりは君とガン普拉バトルがしたいと……」

「タ・タカコちゃん!どうしよう!本当に男の人がアプローチかけてきちゃったよおお!!」

「おおお落ち着いて!ここは二つ返事はナシにして充分な検討を……」

「そ!そうだね!と・とりあえずお友達から!!」

「……もしもし」

「あ!すいません!少し待ってもらえます?!」

「すぐ落ち着かせますから……!」

顔を真っ赤にしてうろたえるアイとタカコの二人をナナとムツミは必死になだめた。

——この子がコンドウ達を倒したというヤタテ・アイか……——

マスミはアイを見ながら実力を見定めようとしていた。

……

で、模型店『ガリア大陸』Gポッド内

「普通にガン普拉バトルしたいだけだなんて……」

「最初からそう言えば良かったのに……アンタねえ!」

アイはガン普拉バトルのGポッド内で、タカコは観戦スペースでそれぞれ赤面した、うちタカコは同じく観戦してるマツオを掴み揺すつた。

今日いる知り合いのギャラリーはナナ、タカコ、ムツミ、ケイ三兄弟、そしてマスミとかなり多い。

「ぐええ!俺は関係ないだろ!言ったのはあのヒロって奴で勝手に勘違いしたのはお前らなんだし!」

「で、誰なのあの人」

「いや、俺も知らん」

「なにそれ?!」

「ただヤタテに会いたいたいと言って、俺が顔を知ってるという理由で案内役を任されただけだ」

「……でも確かに見たことない人だったな。この辺の人じゃないのかな? 常連だったらアイの顔知ってるはずだし」

「今回は視界が悪いな、気をつけて飛ばないと……」

Gポッド内でノーマルのAGE2E(オプションはGNハンマーとGNピストル)に乗ったアイは画面の隕石群をかわしながら進んでいた。

今回のステージはガンダムUCに登場した宇宙のデブリベルトだ。ユニコーンのライバル機、『シナンジュ』が初対戦をした場所である。

目の前を散らばった隕石やデブリが漂う。ぶつからないように注意が必要なステージだ。とそこに敵機接近の警告音が鳴る。

「早い……この速度は?」

非常に速い、いふなれば通常の三倍と言ったところか

「通常の三倍……ってまさか!」

アイの脳裏にある機体が浮かんだ。『通常の三倍』というフレーズはガンダムキャラの代表『シャア・アズナブル』の代名詞だ。

このステージではその再来と言われた『フル・フロンタル』というキャラが、シナンジュという機体で三倍スピードでユニコーンを圧倒した。もしかしたらシナンジュが?とアイは思案する。

敵は隕石に遮られまだハッキリと視認できない。敵機のスピードに使用機体を予想するアイ、隕石同士の隙間を高速で縫う様に飛びながら

敵はビームを何発も撃ってきた。

「くっ……こんな動きづらい場所じゃ!」

かわしつつ、アイもAGE2Eのハイパードツズライフルを構え撃つ。ビームはまっすぐ敵機に向かう。

が敵機は隕石の間を移動しつつかわす、お互いが機体がスッポリ覆うサイズの隕石やデブリを盾にしながらの撃ち合いだ。

アイが狙い撃ちしようにも、敵はすぐ次のデブリに移動する為決定打にはならなかった。

「チツ！見通しが悪すぎる！あれだけ早いつてやっぱりシナンジュ……ッ!？」

アイは大型のデブリに隠れながらぼやいた、その直後、敵が上からビームサーベルで斬りかかってくるのに気づいた。

アイはライフルのGNソードを展開、相手の攻撃を受け止める。そして初めて敵機の正体が分かった。

「シナンジュじゃない!？」

「あえてこの機体だけと言わせてもらおうよ！見せてもらおうか！コンドウさんを破ったビルダーの実力とやらを！ってねえ!!」

「ゼイドラ!？」

ゼイドラ、ガンダムAGEに登場したAGE2のライバル機だ。こちらもシナンジュ同様三倍の機動力を持つといわれた機体だが、

少なくともガンプラバトルではシナンジュ程の機動力及び総合性能はない。しかしシナンジュよりは扱いやすい機体なので好んで使用するビルダーも多い。

だがこのゼイドラは通常のものより強化されていた

「くうっ！出力が普通のより高い!？」

「本来ゼイドラにビームサーベルはついてこない！コイツのビームサーベルはジムⅡの物を移植した！一緒にスキャンさせたから通常の物より威力が上がっているんだ!」

「そうか！だからあんな高出力に!」

「そういった気遣いがガンプラの決定的差につながるのさっ!」

そのままゼイドラは猛攻をかけ、AGE2Eを裂こうとする、

アイはその攻撃を切り払いながら凌ぐ、が、サーベルの出力は高い、防御に構えたシールドは両断されてしまい、とっさにアイは機体を下

がらせた。

「シールドまで切り裂く!？」

「簡単すぎる。それがコンドウさんを破ったビルダーの力か!？」

「コンドウさんを知っている!？」

「僕はかつてコンドウさんに挑み、そして敗れた。そしてコンドウさんに勝つために腕を磨いた。でも挑戦しようとした時!コンドウさんを君が破った!」

ゼイドラは右手のゼイドラガンを撃ちながらAGE2Eを追いつめようとする。

「コンドウさんの腕は技術だけじゃない!ガンプラをただの玩具と扱わない……相棒……友として扱える人だった!」

そしてそれは強者のビルダーの腕以外の絶対条件!」

そして再び斬りかかる。アイのAGE2EはGNソードで防戦になりつつあった。

「君がコンドウさんを超えるビルダーなら!ただガンプラ作りがうまい女の子じゃないはずだ!」

「だから私に挑もうと……!」

「そう!君の実力を!」

そのままゼイドラはAGE2Eを蹴り飛ばす。

「くっ!なんて気迫と勢い……!」

それだけ強い気持ちを持った相手なのだと思つた。ゼイドラはゼイドラガンを捨てると両手にビームサーベルを発生させ斬りかかる。

アイもまたGNソードとビームサーベルで受け止める。ぐぐつとつばぜり合いになる二機、

「なんだろう……気合?気迫?技術だけじゃないものを感じる……!」

ムツミはヒロのゼイドラを見て呟いた。

「呑気に言ってる場合じゃないよ!あのままじゃアイちゃん負けちゃ

う！」

タカコの慌てた声が響く。観戦していたナナ達もゼイドラのパワーに押し切られこのままアイが負けるかと思った。

しかし一人、そうは思っていない人物がいた。

「どうかな？ 古人いわく『窮鼠猫をかむ』ってね」

マスミが呟く。突然のその発言にその場にいた全員が『ハ？』と首を傾げた。

「確かに技術ならコンドウさんには及ばないかもしれない……でもね！！」

マスミの言った通り、まだアイは諦めてはいなかった。

——…：…負けられないよね…：…私も…：…アナタも！——

アイが自分の機体へと心で呟く。それに呼応するかの様にAGE 2Eの眼が光った。

それはアイがレバーとペダルに全力で力を込めたからに過ぎない、しかしビルダーによつてはアイの心にガンプラが応えたと思う者もいるかもしれない。

その力はAGE 2Eの両手に伝わり、つばぜり合い中の両腕をぐぐつと広げた、間接強化したAGE 2Eの力は、押ししていたはずのゼイドラの両腕を外側に広げる。

「力負けしている!? ここまでパワーがあるなんて！」

「気持ちだけならコンドウさんに…：…!!」

そのまま、左足を目いっぱい上げ、足に装着していたGNハンマーをゼイドラにかかと落とし、否、ふくらはぎ落としの要領で叩きつけた

「負けてるつもりはないっ!!」

ゼイドラの右肩にGNハンマーは当たり爆発する。

「な！なんだってえっ!!」

ゼイドラの肩は破壊できたがアイのAGE 2Eも無事ではない。ハンマーを装着した左足は破壊されて…：…いや、自ら破壊してしまつた。

「くうっ！なんて無茶を！機体を粗末に扱うか!？」

「そんなつもりないよ!!」

そのままアイはGNソードで斬りかかる。斬撃のラツシユに今度はAGE2Eが優勢となる。

「大事だからこそやったんだよ！このまま負ける事を望んではいないもの！私もコイツもね！」

「何!？」

「負けたくないってこいつは言ってる！だから私は自分のガンプラに全力で答えてあげる！」

自分の全部を出し切ってみせる！たとえそれがコンドウさんのと違うかもしれないとしても！」

『ガンプラの声が聞こえる』。比喩である上におかしい発言かもしれない、だが自分の作った機体、ことガンプラバトルでは有名な話だ。

昔から『技術よりも作る時の楽しい気持ち、完成した時の嬉しい気持ち』がガンプラバトルの決定打となる』といわれているくらいだ。無論アイもヒロもそれは知っていた。

「ガンプラの気持ち……か！前々からオカルトだの付喪神だの言われていたけど……！僕だって信じるさ！だが負けない！」

「同じくー」

ヒロはゼイドラの胸部からビームバスターを発射、至近距離のAGE2Eを撃破しようとする。が、AGE2Eは高速でその場から離れた。

「戦法を変えた?!待て！」

追いかけるヒロのゼイドラ、残った左腕のビームバルカンで牽制しつつ、ビームバスターを撃とうと照準を合わせる、が、発射間際にAGE2Eは近くのデブリに身を隠す。

「それで防げるとでも?!甘い！」

発射されたビームバスターがデブリを破壊する。が、発射のタイミングでストライダー形態に変形したAGE2Eが飛び出し。そのままゼイドラに突っ込む。

「発射のタイミングを狙って!?!しまった!!」

「でえええいつつ!!」

機首に取り付けられたGNソードがゼイドラを貫き、そのままハイパードツズライフルを発射する。

「この情熱……コンドウさんに近い……」

「女にとって他人に比べられるって……好きじゃないです」

「いや……君独自か……負けたよ……」

0 距離射撃で風穴を開けられたゼイドラはそのまま爆発した……

「完敗だ、君独自の情熱と技術、見せてもらったよ!」

「こちらこそ!一見ノーマルでも凄い実力でした!」

バトルが終わった後、晴れ晴れとした表情でヒロとアイは握手をした。マスマミがヒロの左肩に手を置く。

「これで解つただろう?西ヨーロッパは中国を『眠れる獅子』と例えた。本気になったヤタテさんは鼠じゃなくて『眠れる獅子』だったということだよ。ヒロ」

「ああ、コンドウさんを倒した実力は伊達じゃなかった。いい土産話が出来たよ」と答えるヒロ。

ただしアイは「私日本人ですよ!」とうろたえ他の全員は「だから何言ってるんだこの人……」と若干引き気味だったが

「しっかしまああのオッサンにこんな執着する奴がいたなんてねえ」

ナナがボソツと口走る。

「コンドウさんをオッサンか……あいにくだけど執着するのは僕だけじゃないよ」

「え?」

「君達が思ってる以上にコンドウさんは実力あるビルダーだったんだ」

ヒロに続いてマスマミがアイに指を指した。

「ヤタテ・アイさん、『眠れる獅子』は君だけじゃない。君の戦いの激しさは各地のその獅子達を起こした。コンドウさんを倒した君にはこれから挑戦者が現れるだろう!」

……

そして全員は解散し、四人は帰路についた

「挑戦者が現れる……かあ」

「こんな展開になるとは思わなかったね」

アイはタカコの表情に不審に思った。何か言いたそうだな

「どうしたのタカコちゃん？黙りこくっちゃって」

「いや……帰りに言われた通りアイちゃんに興味持つ男出て来たなーって思ってた……」

「なっ！」

「更にあの勝ち方だとなんか今のガンプラが彼氏くみたいな解釈もありかなってあたし的に思っちゃったり……」

「いやそれはあんまりだよ！確かに自分のガンプラは大事だけどそれ認めたら次のガンプラ作り辛いよ！気持ち的に！」

「ありや、次の作品考えてあるんだ」

「まあね」

「といっても考えてるわけではない。色々AGE意外も試行錯誤してみたというのが本音だった。」

「ほほう、つまり男を吟味しまくって気に入った男を彼氏に……」

「だから違うって言うてんでしょ!!ああもう逃げないでよタカコちゃん!!」

「あはは！ゴメンゴメン〜！」

「あくあ、あの二人は」

「ていうかタカコ……、もう失恋忘れたんだね……」

夕方の商店街を走り抜けるアイとタカコ……それを呆れぎみに見つめるナナとムツミ、

そんな四人をケイ三兄弟は見つめていた。

「兄ちゃん。ヤタテへのリベンジ、やり辛くなっちゃったな」

「いいさ。アイツがどんなに実力をつけようとも、俺たちは追いかけるだけだ。アイツを倒すのは俺だからな」

マツオはアイが自分の適わない存在であると理解しながらも、これ

からアイの受けるであろう戦いを思い浮かべ、眩いた。
「ヤタテ・アイ……この台詞で聞かぜ。『君は生き延びることが出来る
か?』」

第14話 「GOGO!ガンプラ猛レース!」(ライド
サーペント&ボルケーノトータス登場)

「間に合った……」

バスから降りるとナナがため息を漏らしながら呟いた。いつも通りアイも一緒だ。

「もう、ナナちゃんが寝坊するからだよ」

「ゴメンねアイ、昨日遅くまで新作作ってたから、でもそれだけ自信はあるものが出来たわ」

ナナはバス乗り場から、目の前にそびえたつ市民体育館を見上げ言った。

……

話は数日前に遡る。学校帰りによつたガリア大陸での事だ。いつもの様にアイとナナの二人はガンプラバトルをやるうと、

店の二階に上がる。と見慣れた二人がいる。ハセベとコンドウ、何か話し込んでるようだ

「じゃあ当日にエントリーよろしくね」

「わかりました。っておお、ヤタテとハジメじゃないか」

アイ達に気付くとコンドウは向こうから話しかけてきた

「聞いたぞ、色んなビルダー達から挑戦を受けてるようだな」

「知ってたんですか。といってもまだ二人程度なんですけどね」

「でもちよつといい迷惑よ。これからどんどん強豪ビルダーが現れるとか言っちゃってさ。大方アイと戦って有名になりたいか、ポイントでも稼ごうってワケ？」

ポイント、ビルダーとの戦績ポイントの事だ。第一話で触れたが、勝利によって得られるこのポイントは勝利回数が多ければ多いほど溜まっていく。

溜まったポイントは強者の証でもあるのだ。同時にポイントの溜まった、つまり経験豊富な実力者は倒せば得られるポイントも高い。

必然的にアイも高いポイントを有していた。ナナはアイの戦績ポ

イントが奴らの狙いかと睨んだ。

「それもあるだろうが……もつと簡単な事だ。強いビルダーと戦って己の実力を試したいのさ」

「え？それだけ？」

「純粹にガンプラに熱意を注ぐ奴ほどそういうもんさ、己の操縦技術、己のガンプラの出来映え、そして相棒であるガンプラと自分の実力、強いビルダー程邪な気持ちはない」

ナナが両手を肩の高さに上げ、ため息をつく。

「言わんとしてる事は分かるけどさ、それってちよつと美化しすぎなんじゃないの？」

「そうか？俺はそう思うが、まあ皆に認められたビルダーの特典みたいなものさ」

「妙な特典ですこと」

「まあまあナナちゃん、私としてはなんやかんやで色んなビルダーとバトル出来るし、いつ現れても受けて立ちますよ」

アイとしては緊張はする。しかし自分の実力を試すチャンスであり、実力をもつとつけければ

憧れのガンプラマイスター『イレイ・ハル』に近づけるかもしれないと嬉しい状況でもあった。

「おお。そいつぁ嬉しい返事だねえ」
「？」

知らない声が出た。声のした方、階段を見ると誰かが上がってくる。ブレザーを着た細身の少年だ。

制服からして中学生だろう。頬のこけた顔つきからやや近寄りがない印象がある。

「俺の名はアマミヤ・ニワカ。ちよいと隣町では名の知れたガンプラビルダーさ」

「アマミヤ？あまり聞いたことがないな」

聞き覚えのない名前にコンドウが首を傾げる。コンドウも挑戦を受けてきた身、ある程度の実力者の名前は知っていた。

「恥ずかしながら割と最近力をつけてきたビルダーってわけだ。ヤタ

テ・アイ！俺は自分の実力を試してみたい、俺と戦ってもらおうか！」
指をアイに向け指名するニワカと名乗る男。

「解ったよ。自分で言った以上受けないわけにはいかないね！じゃあ
早速！」

が、この日はそうはいかなかった。

「何を言っているんだ？バトルは日曜日、市民体育館でだ」

「え？」

アイはきよとんとした顔になる。

「どういう事ですか？」

「知らないのかい？今日はGポッド市民体育館に運んじやったんだ
よ」

「？あ、ホントだ。Gポッドがない」

ハセベの発言にナナが二階を見回す。いつも二階の両端に三つずつ置かれたGポッドがない。いつもは狭く感じた二階もこうなると妙に広々と感じる。

「ちよつとあるイベントで使うんで市民体育館に持って行ったんだ
よ」

「イベント？またサバイバル大会？」

「これさ、読んでみなよ」

ハセベがA4サイズの紙を見せた。手に取り二人で一枚の紙を見るアイとナナ、

白い紙の上半分に『ガリア大陸主催！第一回ガンプラサバイバルレース』とロゴが書かれ、下には場所や日時、ルールが事細かに書かれていた。

「ガンプラレース？なんですかこれ？」

「単純にガンプラバトルのレースだよ。ここら近隣の模型店やゲームセンターのGポッドを集めて数十人でレースを行うって事、空飛ぶ機
体、

地上を走る機体が他の機体と戦いつつコースを抜けゴールを目指す内容だよ」

「へえ〜バトル以外でもそういう競い方あるんだ」

ナナが読みながら感心するような声を上げる。

「ガン普拉バトルも色々模索している競技だからね、ある意味実験的な催しでもあるのさ」

「そういう事だ。単純なバトルではつまらない！レースで俺と戦い、速さを競おうじゃないか！」

自信ありげにニワカは言った。

「レースは初めてですけど……勝負抜きにしても出てみたいし……ん？」

ふいにレースの紙を見ていたアイの目がピタリと止まる。と、急にアイの目は強く輝く。

「どしたの？アイ」

「賞品があるよ！『優勝者にはレースで関わった店全部で使える金券一万円分』だって！」

「そりゃレースなんだし賞品位はあるでしょ？」

「一万円かぁ……いいかも」

「？珍しいわね。アンタがそういう事言うって、アンタそんな金銭欲強かったっけ？」

アイの普段と違った反応にナナは違和感を持った。ガン普拉に打ちこむ姿とはまた別の印象がある。

「え？そういうわけじゃないけどさ……単純にちよつと今月ピンチだし……」

「ますます意外ね。ガン普拉以外であんまりお金使うイメージなかったし」

「え、それヒドイよ。元々月々の出費高いもん私、私んちほとんど自分の物は自己負担だし……」

「あ、そういう事」

一応の理由はある。

「フフフ……やる気になっただろう？だがあいにくお前に賞金をやるわけにはいかない！」

「なんですって！」

「勝つのは俺だ！そして俺は勝利と賞金を頂く！」

「言わせておけば！解ったよ！改めて受けて立つ！絶対に負けないから！」

アイとニワカ、二人の気合は相当なものだった。ガンプラを、否、趣味をやる以上、金銭的問題は永久の課題なのである。

特に最近は何物も上昇に消費税増税と厳しい故にビルダーもお金にうるさくなりがちだった。

ちなみにニワカは中学生、欲しいものが増えるにも関わらず、バイトも出来ない煩わしい時期だ。余計に彼は賞金が欲しかった。

アイも今はバイトしてない為同じだった。

「いつになく気合入ってるわね。ただお金絡みなのがなんだかなあ」

「まあそう言うな、趣味と金銭問題は切っても切れん縁だからな」

「で、オツサン、それはいいんだけどさ」

「賞金は俺の物だ！首を洗って待っている！」

「何言うの！賞金は私の物だよ！」

「どの辺が『強いビルダー程邪な気持ちはない』？」

「……聞くな」

「ま、いいわ。アタシもやるからには新作を作って挑もうかな？何作ろう？」

「お？じゃあRGのスカイグラスパーとかどうだ？」

スカイグラスパー、ガンダムSEEDに登場した戦闘機でストライクの援護用の機体だ。ストライク用のストライカーパックを装備する事が出来る等

戦闘機としては独特の特徴がある。

「スカイグラスパーかあ、戦闘機作った事ないし、それで行ってみるかな？」

……

そして日曜日に至る。とはいえRG（リアルグレード）はかなり細かい、ナナはスカイグラスパー製作に時間がかかってしまい夜遅くに

やっとなり完成。

しかし結果寝坊してしまい、二人は急いでバスに乗り市民体育館についた。エントリーを済ませ更衣室で二人はパイロットスーツに着替える。

着替え終わった二人はバッグから持ってきたガンプラを取り出す。

「で、アイは何で出るの？いつも通りAGE―2E？」

「うん。ちよつと装備が違うけどね」

アイが取り出したのはAGE―2Eダブルバレット。『ガンダムAGE』本編でも出た装備だ。両肩から銃を吊り下げたような肩部と四角い足が特徴だ。

一対多を想定した装備なので多くのガンプラが出るレースではこの機体が有利とアイは考えたのだ。

「AGE―2なら使い慣れてるからね。これで優勝は頂きだよ！」

アイはダブルバレットをストライダー形態へ変形させ、両手で持ちながら見せた。

「ナナちゃんは？いつも通りストライクはキツイと思うけど……」

「それだったら心配ないよ？アタシも一人で新作に挑んでみたんだ。

しかもRG！スカイグラスパーだよ！」

「う！でも負けないからね！今日は敵同士なんだから！」

「さすがにアンタに勝てるなんて思っちゃいないよ。でもま、全力は出すからね。ま、それは別として見てほしいな。アタシのスカイグラスパー、見てよこのハイデイト……」

バッグから取り出したスカイグラスパー入りの箱を開け、ナナは固まった……

「どしたの？ナナちゃ……て、え……!？」

アイもナナの箱の中身を見て愕然とした。箱に入ってたのはRGスカイグラスパーではなく……肩の長い砲身、

マニピュレーターのない四門ランチャーな手、そして足のキャタピラと、目のない顔……そう……箱の中身は……

「な・なんでガンタンクが?!」

わけがわからないと問いかけるアイにナナは両手で頭を抱えた。ガンタンク……ファーストガンダムで登場した人型と戦車の中間とも言える機体だ。

接近戦用の装備もなく、素早く動く事も出来ないが援護ではかなり活躍した縁の下の力持ちといったポジションだ。

「し・しまった!間違えて持ってきた!」

同時にナナの頭に今朝慌てていた光景が思い浮かぶ、あの時確認していれば……とナナは心の中で毒づいた。

「ええー!どうするの!?!今から家にとつてくる?!」

「と言つても……時間ないよ!どうしよう……!これで出たつて自殺行為みたいなものだし……!」

「出場自体は問題ないみたいだよ。コースを走るのは空飛んでも地上を走ってもいいって言つてたし」

「うー、……しようがない、コイツで行くしかないか!」

そしてレースが始まろうとしていた。コースは『Vガンダムで登場した渓谷』バイク戦艦アドラステア及びリシテアが走った渓谷だ。

戦艦が走った場所なだけに横幅はかなり広く、スタート地点にはかなりの飛行可能な機体が浮かびながら待機していた。

「戦闘機に可変モビルスーツ、太陽炉搭載機、空を飛べる機体が多いな」

「やつぱ飛べる方が有利って事でしょ?……それにひきかえアタシは……」

「ナ・ナナちゃん……」

Gポッドに待機したアイ、待機していたナナが、アイに通信で若干投げやりになった声を送る。

「なんでキャタピラ持ちはアタシしかないのよ……」

地上の周囲はバイクや四足歩行の機体はいるがどれもガンタンクより早そうだった。

「だ・大丈夫だよきつと、キヤタピラなら悪路に強いし、かえって走りやすいよ」

「ハア……まーいいわ、せつかく出たんだもの。意地でも完走してみせる！」

ナナが自分を奮い立たせる為に深呼吸、その後握った操縦桿に力を込める。と二人が話し込んでる内にレース開始のアナウンスが流れる。

「10・9・8・7・6……」

カウントダウンの声がヘルメットに響き、目の前のGポッドのディスプレイに赤いスタートシグナルが表示される。選手達に緊張が走った。

「3・2・1・0！」

0と表示された瞬間、目の前のスタートシグナルが緑に変わった。その瞬間、一斉に機体が飛び出す。しかしその後ろで動かない一際大型な機体があった。

「わかつてるわね！コウヤ！」

「フハハハ!!もちろんですよ部長！」

コウヤのアメイジングレジエンドガンダム、しかも腹部から後ろは大型のモジュールと接続していた。(バックパックは干渉する為外している。)

これはミーティアと呼ばれる巨大補助兵装だ。ミーティアに乗ったコナミが前方の何機もの機体をロックする。

「ロックオン完了！」

「ガッテン部長！ポチツとな！」

アメイジングレジエンドに乗ったコウヤがミーティアからのミサイル、ビームを一斉に発射する。

そしてそれは前を走るガンプラめがけて横殴りの豪雨の様に降り注いだ。

『?!?!?!うわーっっ!!』

同時に何人もの選手が悲鳴を上げた。スタートダッシュで密集していたのが不味かったのだろう。ミサイルに破壊される者。前の機体にぶつかる者。

弾幕は崖を削り落石で機体を破壊される者。地表に落ちた機体と衝突する地上の機体。

避けようとして渓谷の壁に衝突する者。数十機いたであろう機体は半分以上が破壊されてしまった。

「これで優勝はコナミ達のものね!!オーホツホツホ!!」

「そうです部長!この為にミーティアを部費で買った甲斐がありました!!」

「定価(8000円以上)だったから今月の部費はすっからかんだけど優勝すれば元は取れるわ!!」

二人は笑いながら飛び出した。コウヤとコナミ、この二人は意気投合すれば暴走の度合いは恐ろしい程上がる。

二人とも勢いで突っ走る傾向がある為だ。しかも人の話を聞かない。

バカ笑いする二人、しかし直後慌てたコナミの声が響いた。

「ん?!コウヤ前見てえ!」

「ん?デエーッ!」

次の瞬間、コウヤとコナミのミーティアはカーブになつて壁に激突した。浮かれすぎて判断が遅れたのと、

ミーティアのサイズが大きすぎた為曲がりきれなかったからだ。

(そもそもミーティアの推力は戦艦並にある。)

「はい、失格ね」

衝突で本体部のレジエンドが潰れた為失格、Gポッドから出てきたコナミとコウヤにハセベの無情な声がかかった。

「ちよつとーコウヤが曲がつてりや失格になんか!」

「いや、曲がつても失格になつてたよ?『巨大補助兵装』と『トランザム』は禁止つて渡した紙にルールで書いてなかつた?」

「なん……ですつて……?」

ハセベから渡された紙を見て「あ、ホントだ」とコナミは口に出し

た。次の瞬間コナミ達の所為で失格になった数十人のビルダーが一斉にコナミとコウヤを睨んだ。

「う……あー……皆さん怖い顔して……」

観戦していたカワサキは「バカ……」と自分の額に手を置き呟いた。

「あーあ……ドジだねえー」

ガンタンクに乗ったナナが衝突したミーティアを見て言った。ガンタンクのスピードが遅かった所為でミサイルの攻撃にさらされずに済んだのだ。

「乗ってたのがもっと早い機体だったら危なかったな……」

ガンタンクで得したかもしれない。そう思いナナはガンタンクのキヤタピラを走らせた。

「アイ……大丈夫かな」

「だいぶ減っちゃったな。後どれくらい残ってるんだろう」

ストライダー形態で渓谷を飛びながらアイは呟いた。自分はどうにかさっきの不意打ちを避けきる事が出来、トップに出ることが出来た。

しかし半分以上のビルダーが脱落してしまった所為か、まだ別の選手は追ってこない。

と、そこへGポッドに警告音が流れる。

背後からのビームだ。

「きたっー」

なんなくかわし、そのままストライダーを加速させるアイ、撃ってきたのは『ガンダムseed destiny』に登場した可変機、ムラサメだ。

戦闘機形態に変形したムラサメはダブルバレットに追いつき、容赦なく右翼に取り付けられたビームライフルを撃ってくる。

「くうっ！ピツタリストーキングしちゃって！……ん？」

と、前方から何かが迫ってくる。左右のガケから、てっぺんにビームキャノンがついた、巨大なタイヤが二つこちらに降りてきた。

「アインラッド!?」

アイは叫ぶ。アインラッド。『Vガンダム』に登場した支援機だ。タイヤ状のユニットの中には機体があり込み動かす構造だ。

アインラッドはガンプラが発売されていない。大会側が組んだNPCというわけだ。

巨大なタイヤは散開し、それぞれに体当たりを仕掛ける。

「チッー」

ダブルバレットは体当たりをかわす。が、後ろにいたムラサメはもう一機のアインラッドの体当たりを受けてしまう。

その威力は一撃でムラサメを粉碎した。

「チッー優勝させる気はさらさら無いって事ね！」

アイは叫ぶとダブルバレットが人型に変形、そして肩のドツズキャノンを両手に持つと肩部から巨大なビームサーベルを発生させる。

それはまるで翼と言ってもいい大きさだった。

「せえええええいっつ!!」

左右から迫るアインラッドを、ダブルバレットのビームソードは真正面から切り裂いた。

「しっかしまあ、上は騒がしいわね〜」

アイのかなり後ろ。ナナは遠くで繰り広げられる戦いを、眺めながらガンタンクを進めていた。

アインラッドは待ち伏せをしている為トップのビルダーしか会う事はない。ナナには無縁の相手だ。

残った機体も戦闘により撃墜され更に残りの数を減らしていた。

ただ一人戦闘に巻き込まれないナナは時折撃墜されたであろうガンプラの残骸を見る。

「ん!？」

とそこへ、一体の破壊されたアインラッドが蠢くのが見えた。中か

らボロボロになった黄色い機体、ゲドラフが這い出てくる。
アインラッドを操作する中身でこれもNPCだ。

ゲドラフは完全に沈黙していない様で、土偶の様な目を見開き、手に持ったビームライフルを震える手でガンタンクへ向ける。

「う・うわっ!」

慌ててナナはガンタンクの両腕の4連装ポップミサイルランチャーを撃ちまくった。ミサイルを受けたゲドラフはそのまま爆散する。

「こつちも呑気に走ってられないか。急ごう」

再びこちらはアイの方、コースも後半に差し掛かったところに、トップの機体を後ろにつきながら丁度撃ち落したところだ。

「これでまたトップ!アインラッドも今の所ない!そのまま逃げ切れば!」

「クハハ!そうはいかん!」

「!?ニワカ君!」

聞き覚えのある声と共に大型のビームがダブルバレットを襲う、かわしつつ後ろに現れた機体を確認した。それは『ガンダムW Endless Waltz』に登場する

サーペントという機体だ。重武装が特徴で単体ではあまりレースには不向きな機体かもしれない。だがその機体は違った。

「しかもメテオホッパーに乗ってる!」

そう、サーペントはメテオホッパーという一輪バイク（飛行形態に変形可能で今はその形態）に乗っていた。

更にフロントカウルが改造されており、ガンダムヴァーチェという機体のGNバズーカ、更にその左右にはGNキャノンが搭載されていた。

「恥ずかしながら俺はガンプラ単体では並の実力しかない!だが支援機と併用すれば話は別!

この『ライドサーペント』と『ボルケーノトータス』!二つの力を見せてやるぜ!そして優勝はもらった!!」

ライドサーペントはダブルバレット目掛けGNキャノンを撃つてくる。

「後ろにつかれたままじゃやられる！」

空中戦で後ろにつかれる事は撃墜同然だ。アイはダブルバレットを上大きく宙返り、サーペントの後ろに回り込もうとする。

「ループか！甘いぜ！」

ニワカはGNキャノンを上へと向ける。

「対空攻撃も!?!」

アイが叫ぶと同時にGNキャノンが放たれる。アイは機体を縦にしビームを回避する。そしてどうにかサーペントの後ろに回り込む。

「これで！」

アイはドツズキャノンを撃とうとする。

「甘い！」

ニワカはそう言うのとサーペントを立ち上がらせ、ダブルバレットにふり向く。右手にはビームガトリングガンが握られてる。

「なっ!?!」

アイが叫ぶと同時にサーペントは撃ってくる。アイはドツズキャノンを撃つのを断念。回避に専念するしかなかった。

アイ達の戦っている少し後ろの地点、そこでも飛びながら戦っている二体がいた。

「今日ばかりは同じチームでも容赦しないツスよコンドウさん！勝つつス！アンタにも！このレースにも！」

「また勝つ事に拘ってるわけか！」

「前も今も変わらないツスよ！」

見慣れた二体。ソウイチのザクIVとコンドウのミブウルフだ。ザクIVは自力飛行が出来ない為、ベース・ジャバーという支援機に乗り空を飛んでいた。

ソウイチは並行して飛ぶミブウルフにハンドガンを連射する。

「全く……元氣有り余っちゃってまあ」

程々のい後ろを飛んでいたバウ・H（分離）ツチヤが呟く。

「だがここにいる以上手加減はせんぞ！ソウイチ！」

「それでいいツス！」

——そうさ！勝つんだ！そしてコンドウさんに結果を捧げる！そして俺は強くなって……アンタを超えてやる!!——

そう心で叫ぶソウイチ、

コンドウのミブウルフは頭部の鋏形、その間から円月輪状のビームを発射した。ビームチャクラムだ。それはザクIVのハンドガンを横から切り裂き破壊する。

「あつー！」

ソウイチが声を上げる中、ミブウルフは十手とナギナタを構え突っ込む。

祭セットと呼ばれる武器セットに付属している武器だ。ナギナタは矛と柄を連結されており長さが延長していた。

不意を突かれたザクIVはそのままコクピットにナギナタを突き刺された。

「最近は少し眉間のしわもとれたと思ったんだがな」

「……冗談言っちゃいけないツス」

「そっか……」

不機嫌そうに言いながらソウイチのザクIVは落ち、爆発した。

「コンドウさん、終わったか」

後ろからツチヤがコンドウに近づくと

「おおサブロウタ。お前もやるか？」

「いや、いい、今日はレースに集中したいからね」

「そうか、さて……ヤタテの方は……」

再びアイの方、ダブルバレットは再びニワカのサーペントに追われる形となっていた。ぴったりマークされ離れようとしなない。

「クハハハ！いつまで持つかな!?」

「クッー！」

後ろからGNキャノンが何発も放たれる。避けながらアイはどうすればいいかと思案していた。

ふとアイは横を見る。横は切り立った崖でこのステージはずっとこんな風景が続く。

「……試してみるかな！」

何か思いついた様だ。アイはガケの側面にダブルバレットを近づける。

「逃げるのか!?待てよ！」

ニワカもダブルバレット追いかけてガケに近づく。

「来たー！」

アイは後ろにサーペントがついて来ているのを確認すると。機体をほぼ垂直に傾け、両肩のドツズキャノンを斜め上に向けた。

そしてすぐさま崖に向けてドツズキャノンを連射した。

「な！何をやる気だ!?はっ！」

ダブルバレットが通り過ぎた後。ちょうどライドサーペントの頭上から大きな岩が雪崩のように幾つも降ってくる。アイはドツズキャノンで崖を削りトラップにしたわけだ。

「こ・しゃ・く・なああ!!!」

振る岩を避けながらサーペントはコース内側に戻る。

「危なかった……っ！ヤタテは?!」

ダブルバレットを見失ったニワカは辺りを見回す。その時、Gポツドに警告音が響く。

「なんだ!?っ！」

ニワカが気づいた時、とサーペントの左腕をボルケーノトータスごとビームが貫通した。

「真下から……だと!」

そう、下にはダブルバレットがドッズキャノンを構えていた。続けてサーペントにドッズキャノンを放つダブルバレット

「おーおのれええ!!」

直撃はしていないものの、ビームにさらされながらサーペントは黒煙をあげ墜落していった。

「もう大丈夫……かな?」

アイが再び飛ぼうとすると、コンドウのミブウルフとツチャのバウ・Hが来た。

「おおヤタテ、ニワカのガンプラらしきものが落ちていくのが見えたが……」

「ええ、どうにか退けられましたよ。後はゴールするだけです」

「後続も来ていないみたいだし、どうだ?俺達と競争しないか?」

「いいですね。でも優勝は私が……ん?」

アイはGポッドに違和感を感じていた。画面全体が小刻みに揺れている。小さな地震でもおきたかの様だ。しかもだんだん揺れは大きくなっていく。

「なんですかこれ!?地震?」

「いや!見ろ!」

アイとコンドウ、ツチャのGポッドに警告音が響く。そして地響きと共に『それ』は姿を現した。自分達より10倍は大きいであろう高さ。

渓谷全体をゴゴゴ……と揺らす巨体と二つのタイヤ。その正体は……

「巨大なバイク!?じゃなくて、あれってまさか!!」

巨大なバイク……否、戦艦が走ってきた。

「ア!アドラステア!!」

コンドウが叫んだ。アドラステア、Vガンダムに登場する強襲用戦艦、その姿は艦艇にバイクの前輪と後輪をつけたとしか言いようがない。

全高150m、全長は426m、武装面でも全身にヤマアラシの針

の如く連装砲と対空砲を装備、

劇中ではリシテアという巡洋艦と共に艦隊を編成、地球の都市を直に踏み潰すという血も涙もない作戦を敢行した恐るべき戦艦だ。

ガンプラバトル時のアイ達の機体が10m代後半位の大きさしかない事を考えるとその大きさが分かるだろう。

「何ボサツと止まってるんだ！」

「お先にー！」

茫然と止まっているアイ達を後ろから追い上げてきたガンプラ達が数機追い越す。大型戦艦がいると言っても溪谷をギユウギユウに詰める程の幅はない。

脇を通り抜ければ楽に突破できると考えたのだろう。

「あー待てー！不用意に近づくな！」

「何言ってるんだ？これ位迂回すれば……なっ！」

追い越したガンプラのビルダーは驚愕した。対空砲火が一斉に自分達目掛け放たれた。更に横のハッチからインラッドが続々と出てくる。

『うわあああっ!!』

追い越したガンプラのビルダー達が悲鳴を上げる。上を飛んでいた者は対空砲に撃墜され、下を走っていた者は護衛のインラッドに撃墜され、

またある者は無理に通ろうとしてアドラステアの衝突してしまった。だがその中で一機だけアドラステアの地帯を突破したガンプラがいた。

「へへっ！どうだ！抜けたぜ！後はこのままゴールするだけ……」

そう突破したビルダーが言い終わらない内にそのビルダーの乗機が爆発した。

「!?攻撃は受けてないのに！」

「いや、見るんだヤタテ！」

コンドウが機体の指で示す、アドラステアの後方には溪谷の端から端までピンク色のビームが、壁の様にステージを覆っていた。

「バリアである先に行けない!？」

「先に行くにはあれを倒さなければいけないという事だね！」

「大会側が金券渡す気が最初からないってのがありありと分かりますよ。まったく」

アドラステアは渓谷を進みながら各々の機体へ連装砲を撃つてくる。こちらを追いつめるつもりだ。散開し、回避する三機、

「コイツを倒さなきゃ進めませんよ！」

「どうする？コンドウさん」

「ここは三人で手を組もう！俺が奴らの攻撃を引きつける！その際にお前らはアドラステアを！」

「なら俺も陽動に加わるよ。数が多いほうがいいだろう？」

「助かる、サブ、その隙にヤタテはアドラステアのブリッジ（艦橋）を！」

「解りました。やってみます！」

そして全員が一斉に取りかかる。ツチャのバウ・アタッカーはインラッドを引きつけようとビームライフルでを撃つ。がインラッドの正面には通用しない。

「やはり真正面は硬いか！だが！」

インラッドはバウ・アタッカーを潰そうと迫る。だが直後、バウ・アタッカーの下半身、バウ・ナッターがインラッドを側面からエクスカリバーで突き破る。

インラッドの弱点は側面だ。（中のゲドラフはビームシールドで側面をガードしてはいるが）

インラッドが倒された情報はアドラステアにすぐさま伝わる。アドラステアは連装砲をバウ・アタッカーに向け発射しようとする。

だがその部分に球状のビームが撃ちこまれ連装砲は爆発。遠くでコンドウのミブウルフがトライパニッシャーを撃つたのだ。優先順位を変えたのか、

連装砲と対空砲火がミブウルフ目掛けて放たれる。コンドウは連装砲を難なく回避する。

「そうだ……こっちへ来い！」

コンドウの叫びに応える様に前後からインラッドが襲ってくる。

コンドウは手に持った十手と矛でインラッドを受け止めた。回転するタイヤに十手と矛が激しい火花を散らす。

注意の目はコンドウ達に注がれている。

「ヤタテ！今だ！」

バウ・アタツカーで連装砲を引きつけていたツチャが叫ぶ。アイはダブルバレットで一氣にアドラスティアのブリッジに迫る。このまま肩のビームソードで切り裂くつもりだ。

「いけるっ!!」

対空砲をかくぐりながら、肩からビームソードを発生させ突っ込むアイ、もう少しでブリッジに届く、だがその時に警告音がGポッドに響く。

伏兵として潜んでいたのか、一機のインラッドはダブルバレットの横から突っ込んできた。

「側面!?!」

アイが気づくとダブルバレットは右側から跳ね飛ばされ落ちる。これにより右肩のビームサーベルとドツズキャノンは破壊されてしまった。

「ヤタテエッ！ハッ！」

ツチャは叫ぶと同時に上からインラッドが襲いかかってくるのに気付いた。眼前に広がる回転するタイヤ……

「俺とした事が……」

気づいた時には遅かった。バウ・アタツカーはそのままタイヤに潰され落ちて行った。

「サブ！何という事だ……」

ツチャがやられた事はコンドウ達も気づいた。自分の立てた作戦で勝てるかと楽観視してしまった自分をコンドウは後悔する。

「このまま……やられるの……?」

墜落したダブルバレットの中、アイが眩く。だがその時だった。

「まだ諦めんな!!」

聞き覚えのある声が響く。

「ニワカ君!?!」

声はライドサーペントに乗ったニワカの物だった。ニワカの声に続くように、ボルケーノトータスのフロントカウル、GNバズーカも大きな音を立てる。

最大まで蓄えたエネルギーが轟音を上げていたのだ。

「チャージには時間がかかる！アドラステアがお前らを引きつけていたのは都合が良かった！」

アドラステアもニワカが何をするのか気付いたのだろう。アインラッドをサーペントに向かわせる。

「今さら!!遅いんだよおっツツ!!」

ニワカが叫ぶとフルチャージしたGNバズーカが放たれる。エネルギーの濁流は防ごうと前に出たアインラッド数機を飲み込み、更にアドラステアのブリッジを飲み込む。

光の洗礼を受けた艦橋は蒸発しアドラステアの動きは鈍り、そして沈黙した。同時にバリアも消失、アインラッドも止まった。

「止まった……」

「良かった……でも凄い……一撃で」

アイは安心すると共にボルケーノトータスの威力に驚く。それと同時に複数のガンプラがアイ達を追い越す。

「あっ！」

「へへっ！アドラステアを倒してくれてサンキュー！」

「後はボク達がゴールしてやるから！」

アイ達がアドラステアを倒すのを待っていたのだろう。

「ま！待ちなさい!!」

「漁夫の利というわけか！俺も急がなければ！」

アイはダブルバレットを変形させると追いかける。コンドウもそれに続いた。

「俺を……忘れるなよ……」

その後ろでニワカのサーペントの眼が輝いた。

「こつちが倒すのを待っていてぬけぬけとゴールするなんて許せないんだから！」

アイはダブルバレットの残った左肩のドッズキャノン、ふくらはぎのカーフミサイルを飛ばしながら前にいるガンプラを撃ち落して行った。

コンドウのミブウルフもまたビームチャクラムで一機ずつ撃ち落してゆく。

先程のアドラステアが最終防衛線だったのだろう。アインラッドは一体も出てこない。

「残るは一機！」

前方を飛ぶガンプラ、二門のビーム砲を突き出した戦闘機に変形したセイバーガンダム『こちらも登場作品はガンダムseed des tiny』

に向けてドッズキャノンを撃つ。しかしセイバーはそのビームを左に回避、

「!?」

「甘いな！こちらは今まで温存して飛んできたんだ。消耗していたお前らの射撃なんて当たらないぜ！」

セイバーのビルダーが叫ぶ、が、横から大型のビームが飛んでくるのが見えた。

「な！何だ！うわああ!!」

そのままセイバーはビームに飲まれ爆散、アイは横を見ると愕然とした。ライドサーペントが黒煙を上げたボルケーノトータスに乗り

垂直である渓谷の壁を、アイ達と並行しながら走っていたからだ。そしてGNキャノンは真上、アイ達から見てこちら側を向いていた。

「そ！そんな！壁を走るなんて！」

「飛行は出来ないがこれ位の事は出来るぜ！まだ勝負はおわっちゃいない！覚悟しろ！」

サーペントはそのままGNキャノンでダブルバレットを狙い撃つ。ダブルバレットはビームを掠めつつも回避、

「うわっ！でもね！」

アイはストライダー形態のまま、左肩のドッズキャノンを切り離しビームサーベルを発生、

「ヨレヨレなのはアナタだって同じなんだから！」

そのままダブルバレットと肩を捻り溪谷の壁、ライドサーペントに叩きつけた。

「うーうわああ!!」

切り裂かれたサーペントとボルケーノトータスは爆発、と思いきや当たる前に回避行動をとったのだろう。

斬ることは出来たが直撃には至らずまだボルケーノトータスは走っていた。

「そんな！致命傷にはなった筈なのに！」

「フフフ……やってくれませ……」

ニワカはもうサーペントが持たないと悟る。だがこのまま終わるつもりはなかった。そんな彼が取る行動は……

「このボルケーノトータスは俺の足、こいつがやられる事は俺自身がやられる事を意味している。だが一人じゃやられねえ！」

ニワカは、サーペントとボルケーノトータスをガケの上でつぺんにのぼらせるとアイのダブルバレット目掛けて飛んだ。

「俺と一緒に落ちろおお!!」

ダブルバレット目掛けてボルケーノトータスが迫る。

「あーもうーうるさい！」

アイはカーフミサイルをボルケーノトータスに撃った。

「うーうわっ！」

ミサイルを受けたボルケーノトータスはコントロールを失い落ちていく。しかもその先には……

「コンドウにぶつかる!?!」

「な！何！こつちに来るだど！うおお!!」

ダブルバレットに近い場所で飛んでいたミブウルフに背中から衝突。

ミブウルフは疑似太陽炉を搭載していたバックパックを失い、ボルケーノトータスと共に谷底へ落下していった。

「コンドウさんが……ニワカ君……自分の命と引き換えに（※死んでません）私に優勝を託してくれたんだ……解ったよニワカ君！私必ず

優勝して賞き（ガシツ）あれ？」

自分の優勝を確信した所為か、失礼な事を言うアイのダブルバレットに誰かがしがみ付いた、

「何勝手に人を殺してんだコラア!!ぶつけたのはボルケーノトータスだけだあ！」

「うわ！生きてた！」

ニワカのライドサーペントがアイのダブルバレットに左足からぶら下がる形で掴みかかっていた。サーペントは上半身のみ。腕も右腕しか残ってない状況だったが、

「このまま地面にひきずり降ろしてやる！」

「くっ！しつこい男は嫌われるよ！」

振りほどこうとアイが操縦桿をガチャガチャと動かす。が、それだけでは済まなかった。

「フハハ〜！逃がさんぞおお！」

「そうだあ！まだ俺は飛べる！」

『え!?!』

アイとニワカが同時に驚く。ダブルバレットのすぐ隣でコンドウのミブウルフがボロボロになりながら飛んでいたからだ。

「疑似太陽炉は失ったが残った粒子でここまでこれる事は出来た！俺は力尽きるまで諦めんぞー！」

「ぎゃー！ふえてるうう!!」

しかしもうミブウルフに飛ぶ力は残っていなかった。すぐ失速しそうになる。

「まーまだ落ちるなあ！」

とっさに隣のダブルバレットの腰にしがみつくミブウルフ。ダブルバレットの重量はますますかさみ、ヨタヨタ飛ぶダブルバレット。

「うわーっ！どこ触ってんですかエッチイ!!」

「ガンプラ越しだろうが！」

「うおおお！いちまんえんらん！」

と、その時だった……

ばきっ

ダブルバレットのストライダー形態、その腹部の赤い接続パーツのピンと尻と背中中のジョイントパーツが……折れた。

「え?」

「え?」

「え?」

アイ、ニワカ、コンドウの三人が同じ言葉を言うと共に……真つ二つになったダブルバレットはサーペントとミブウルフとまとめて地面に落ちた。

『ええええええええええ!!!』

三人の叫びが重なった後、地上に激突した三機と三人のビルダーはまとめて失格となった。で……結局レースがどうなったかと言うと……

「え〜優勝は！なんとガンタンクのハジメ・ナナさんです!!」

最終的にナナだけが残ったため優勝はナナになった。故に二位も三位も立つ者はいないという状況だったが

「おめでとうございます!」

係員がナナに優勝トロフィーと金券の入った祝儀袋を渡す。ナナは苦笑しながら受け取った

「あ・ありがとうございます……嬉しいは嬉しいけど……いいのかなこんなんで……」

付け足すようには小声でナナは呟いた。

「いいのかなあ。こんな終わり方で」

離れた場所でツチャがナナと同じセリフを、苦笑しながら言った。

「最後に残ったのアイツなんだから仕方ないだろう?」

「まあ『無欲の勝利』という事ツスね。『ウサギとカメ』とも言う」

「で、そのウサギさん達は?」

「向こうでへこんでる」

コンドウが指を刺す。一番欲をギラつかせていた二人がへこんでいた

「いちまんえん……」

「ナナちゃん……」

とまあ初めてのガンプラレースは凄まじいグダグダで幕を閉じた。第二回からはさすがに普通のレースにしよう。と思慮不足だった役員達は思ったのだった。

「ところでヤタテさん、ハジメさんがガンタンク持ってたのが意外でしたけど、なんで持ってたんスか？」

「……あーナナちゃんね、ガンプラでガンタンクが一番可愛いんだってさ」

「あの人もあの人で変わってるツスね……」

第15話「可能性の獣」(ユニコーンガンダム VS HGクロノス)

「うああ〜……」

季節は四月半ばの金曜日……、教室の机に突っ伏したアイが声を上げた。

「どしたん？アイ」

いつもの様にナナが話しかける。

「ナナちゃん……ついに破滅へのカウントダウンが始まったよお……」

諦めた声でアイは言った。

「いや、何大げさに言ってるのよ。さ来週実力テストがあるって通告があっただけでしょ？」

そう、先程担任から実力テストの日の通達があっただけだ。アイをはじめとした成績に自信のない生徒はアイの様に落ち込んでいた。

「そうだよ……大体テストの日なんてその前から解っていたいたじやないか……」

ムツミもアイの机に寄ってきた。

「別に実力テストって言ったって一年生の時のおさらいでしょ？内容ある程度解ってるんだからそんな落ち込む事ないじゃん」

ナナとムツミ等は筆記でも割といい成績を出してる為余裕があった。

「そう言える二人がなんか眩しいよ……」

一年生の時の勉強内容を忘れているアイにとっては二人は直視出来なかった。

アイはガンプラはバトルと技術、共に高い実力を有する。だが勉強とスポーツはどちらも苦手だった。特に勉強はナナとムツミに教えてもらう事が頻繁にあった。

「アンタもガンプラは……ていうか自分が興味持った事に関しては凄い実力発揮するのになえ」

ナナが苦笑しながら言う。別にアイはガンプラ以外に才能が無いというわけではない。自分が興味を持ったものには凄い集中力を発揮する人間だった。

「典型的な一点集中型ってわけだね……。それを色んな事に向けられれば最高ののに……」

「お母さんみたいな事言わないでよムツミちゃん……。私だってそうしたいって気持ちはあるのに」

「あ……。ゴメン……。そういうつもりじゃ……」

「どしたの〜皆」

「あ……。タカコちゃん……」

その場にあっけらかんとした声が響く、タカコだった。タカコもまたアイ同様成績が振るわないタイプだったりする。

「実力テスト自信ないよ。どうしよう……」

「なんだ、そんな事でそんな顔していたんだ」

いつもと同じ笑顔でタカコはしれつと答えた。

「いや、なんだってアンタ……」

「別に中間や期末みたいに成績に影響あるわけじゃないんだし、別に諦めちゃっていいじゃん、勉強だけが学生の本职じゃないよ〜」

「さすが毎回赤点取ってるだけあるわねアンタ……」

「いや〜それほどでも」

「褒めてないわよ!」

「タカコ……。さっき先生の話聞いてた? 赤点組は宿題1・5倍だって言ってたよ……」

「え?」

「いや、だから1・5倍」

「……マジ?」

「マジ」

途端にタカコの顔が青ざめる。

「ど!どどどどうしよう〜! 一年生全体のフォローなんて二週間で出来ないよ〜!!」

タカコは慌てながらムツミを掴み揺すった。

「オメーはよ……」

ひきつった顔で呆れるムツミ

「うう……アイちゃん……どうやらあたし達滅びの運命を受け入れる
しかないみたいだよ」

「そうだねタカコちゃん、死ぬときは一緒だよ……」

現実逃避か大袈裟に言いながら二人は抱き合った。

「口で言ってる割には余裕ねアンタ達……」

「まあそれはそうとして……さすがに二人をこのままにしとくのは可
哀想だよ……。ボク達も復習とかやっておく必要はあるから皆で勉
強会とかしない……?」

『え?! 本当!』

そのムツミの発言にすぐさま食いつく二人

「じゃあ明日の土日にでも!」

アイが提案する。

「いや待ってアイちゃん……あいにくだけど来週からにして欲しいな
……今週の土日は他校との合同で部活やるから……」

「あ、そっか、ムツミ陸上部だし前そう言ってたね、じゃナナは?」

「ごめん、アタシも土日は親戚のお葬式出ないといけないから……」

「ナナちゃんも……てことは」

アイが隣のタカコとの顔を見合わせる。

「土日はあたし達だけでやるしかないって事ね……」

「タカコちゃん……」

「……凄く不安の残る二人だけど……いいのかな……」

「ま、いいんじゃない? 他にいないわけだし」

「アイちゃん……こうなったらやるしかないよ! 土日はあたし達だけ
で勉強会開こう!」

「タカコちゃん……そうだね! 頑張ろう!」

「気合だけなら見てて安心出来るけどね」

「本当に大丈夫かなあ……」

……

そして二日後……月曜日の放課後、四人はいつもの様に歩道を並ん

で歩いていた。

「最近は何と四人で帰れるよね」

アイが言った。ムツミとタカコは部活持ちな為、帰りは一緒になる事は少ない。

「そうだね……。毎日ってわけじゃないけど、うまく都合ついてるし……」

「そういえばさ、アイとタカコ、ちゃんと出来た？土日の勉強会」

ナナの発言に『え?!』と同時に反応するアイとタカコ。『ギクリ!』と効果音がつきそうなりアクションだった。

「その反応……駄目だった？」

やっぱり、等とは思ってないがリアクションを見れば予測はしやすい

「ナ!ナナちゃん!なんて事言うの!」

「そうだよナナ!あたし達だってやれば出来るんだから!」

ムキになって返す二人、かえってそれが怪しく見える。ナナは「ホントに?」と首を傾げながら聞く

「疑うなんて酷いよナナちゃん!」

「そうだよ!あたし達だって土日は凄い充実した時間を過ごしたんだから!」

と、その時だった。

「ヤタテ・アイだな!?お前に挑戦するぜ!」

男が声をかけてきた。

「うわ!挑戦者だよアイちゃん!」

「うわってなんだよ失礼だな!」

声の主はジャージを着たツンツンとした髪型の少年だった。年齢はアイ達と同じく高校生位だろうか。隣に同じくジャージを着た男がいる。

「学校指定のジャージ?その胸の刺繍、三帯(さんおび)高校の生徒ねアンタ達」

ナナが言う。三帯高校。アイ達の山回高校から5キロ程離れた農

業高等学校だ

「その通り！俺達はチーム『グリズリー』！そしてリーダーの『セキラ
ン・ライタ』!!コンドウ・シヨウゴを倒したというお前を倒せば
俺達は名を上げる事が出来る！その為に勝負を受けてもらう！嫌
とは言わさないぜ！」

自信有り気にアイを指さしセキランと名乗る少年は言った。

「いいよ、受けてあげる！」

「聞けばお前達はいつも二人らしいな。勝負は2対2でどうだ？」

「OK、アタシも付き合う」

「ありがとうナナちゃん。丁度良かったよ。本当はバトルしたくてた
まらなかつたんだ。初陣を飾りたい奴がいるからね……」

「あ！あれ使うんだねアイちゃん！」

ニツと笑うアイに続いてタカコが反応する。

「……アレ？」

そして模型店、『ガリア大陸』でガンプラバトルが行われる。モニ
ターには『今回のステージはギガフロートです』と表示された。

ギガフロート……ガンダムSEEDの外伝・アストレイに登場した
施設。民間用マストライバーを備えたそれは全長数10kmに及ぶ
人工島であり、

浮体構造物として移動能力を有した機械的な浮島だ。島と言つて
も自然の類はなく全体が機械的で巨大な施設といった方が正しいか
もしれない。

「あれ？アイは？」

母艦、アークエンジェルから降りたナナのストライクI・W・S・
P. が周囲を見回す。今回はアイとは離れた場所で始まった様だ。

『ちよつと離れた場所に出たみたい。すぐ行くよ』

と通信をしたその時、ナナのストライクに弾が飛んできた。

青空にライトグリーンの敵機が見える。立ち上がったトカゲ、ガフ
ランに似た機体。ガンダムAGEに登場したバクトという機体だ。

ガフランやゼダスに良く似た似たフォルムだがその二機に比べかなり太ましい。

バクトはゆっくりとした動作でトカゲの尻尾に当たる部分、ビームランチャーを展開させストライク目掛け撃ってくる。

「スローすぎるわよー!」

ナナは横にステップをかけビームを回避、距離があつた為背部のレールガンでバクトに狙いを定める。

「いけえー!」

ナナがレールガンを発射、バクトにレールガンは命中し爆発と共に煙が立ち込める。

ナナは心の中でこれで仕留めたという安心感があつた。だが次の瞬間、ランチャーのビームが煙を突き破りストライクに迫ってきた。

「嘘っ!?!」

とつさにコンバインシールドを構えビームを防ぐナナ。しかしその出力は大きくシールドは弾き飛ばされ。

ストライクは後ろに大きく跳ね飛ばされる。

「きゃあっ!!」

尻もちをついたストライク。姿を現したバクトは右掌にビームサーベルを発生させストライクに近づく。

「くっ!」

ビームライフルで応戦しようとするナナ、バクトは左掌のビームバルカンでビームライフルに撃ちこむ。

「しまっ!」

ナナが手放そうとする直前にビームライフルは爆発、誘爆によりビームライフルを握っていた右手は破損、ボディもダメージを負ってしまった。

「くっ!」

そのままバクトはビームサーベルの範囲まで近づき右手を振り上げた、だがその時。

「ナナちゃん! ジッとしてて!」

「えっ!?!」

アイの声だ。直後に耳をつんざく大きな音と共に、ストライクの前を大きなビームが高速で通り過ぎた。

ビームはバクトを左から直撃し、バクトを撃った方向へ吹き飛ばす。ゴロゴロと転がるバクト。

ナナがビームの撃たれた方、マスドライバーを見る。ジェットコースターの登りの様なマスドライバーのレールの上、

真っ白い機体、否、赤いラインの入った白い機体が両手で銃を構え、立っていた。

「やっぱ凄いな……ビームライフルの四倍の威力のビームマグナムは……」

「アイ！新しいのってそれ?!」

「そう！ユニコーンガンダムだよ！」

ユニコーンガンダム、『機動戦士ガンダムUC「ユニコーン」』主人公機、普段は真っ白いスマートな姿だが『デストロイモード』と呼ばれる姿になると

装甲がスライドし変形、赤いラインが入り、ガンダム顔の大柄な姿に変わるといふ変わった特徴のガンダムだ。

赤いラインはサイコフレームと呼ばれる独自の素材を使われており、設定上恐ろしい程の反応速度とパワーを持つ、その為パイロットにかかる負担も大きく

本編では専用のパイロットスーツやら薬剤投与やらでかかるGを抑制していた。……があくまでそれは本編での話、

ガン普拉バトルでは多少上級者向けではあるが高水準なパラメータを持つ高性能機だ。アイの機体は追加装備で『リボルビング・ランチャー』と呼ばれるグレネードと

『アームド・アーマーDE』と呼ばれる、ブースター兼ビームキャノン兼シールドという贅沢な複合兵装を背中に装備していた。

なおアイの使用しているHGユニコーンはサイズの関係上デストロイモードに固定されている。

「凄い……全身にあんなにシールが……」

ナナはユニコーンの装備よりも姿に驚いた。ユニコーンは真っ白な為専用シール、つまり専用デカールが発売されている。

ユニコーンは全身にそのデカールを貼りまくっていた。

「まるで本当に兵器みたいだ……」

観戦していたムツミもまた、ユニコーンの情報量の多さに驚いていた。

「へへく当然だよ。丸2日かけて頑張つて貼つたもんねく！」

タカコが自慢げに話す。

「……2日？」

「あ……いや！なんでもないよ！なんでもない！」

ハツとしたタカコは自分の発言を不自然に否定した。

「……」

バクトは形勢不利と見ると、背を向けてその場を離れようとする。

「逃がすもんですか！」

アイは背中のアームド・アーマーDEを吹かすとバクト目掛けて飛び立つ。

「ちよつと重いかな！」

Gポッドの中でアイは今まで使っていたAGE-2Eとの感触の違いを感じていた。かなりの推力だ。お互いの距離はぐんぐん縮まる。

「背中からならこれで！」

アイはユニコーンのビームマグナムを両手で構えバクトに狙いを定める。が、その時Gポッドに警告音が響く。別の機体の攻撃だ。

「チッ！いつもいつも！」

アイはしよつちゆう同じシチュエーションに愚痴りながら真上に急上昇、自分がさつきいたであろう位置を大型ビームが飲み込んだ。

アイはビームの飛んできた方向を見る。

「あのバクトを吹っ飛ばすとはやるじやないか！でもなあ！ビームマグナムの威力で出来たようなもんだ！」

セキランの声だ。彼が乗っているのだろう。

バクト同様、ゆるやかな速度で青空に不釣り合いな黒い機体が飛んでいる。背中からキャノンを備え、前回戦ったゼイドラによくフォルム、それは…

「クロノス!?HGは出てないハズなのに！」

「ミキシングしたんだよ！ゼイドラと組み合わせてなあ!!」

『クロノス』、ガンダムAGEに登場したバクトの後継機だ。設定上フレームがゼイドラと共通している為同じ部分が多い。しかし

高機動、接近戦用のゼイドラと比べこちらは遠距離戦に特化した機体だ。しかも肥大化した手足に関わらず、本編ではゼイドラ並に早い。

そのままクロノスは背中キャノン、クロノスキャノンで撃つてきた、二条のビームがユニコーンに迫る。

「チッ！」

背部の放たれたビームをかわすアイのユニコーン、
「こつちだつてえ！」

アイはお返しとばかりにビームマグナムで撃ち返そうとする。が、その時、横からビームの邪魔が入る。

さっきのバクトが胸のビーム砲を撃ってきたのだ。

「ああもう！邪魔しないでよ！」

かわしながらアイが愚痴るも、クロノスはその隙に右手のガトリング銃、クロノスガンを撃ちながらユニコーンに迫る。

「バンシィ・ノルンの装備か！だがフェネクス（二つ同じ装備を持つてるユニコーンバリエーション機）

が発表された今となってはありがたみがないな！その上中途半端にユニコーンモードか！」

セキランが言う。アイのユニコーンガンダムは今の姿の他に、『ユ

ニコーンモード』というサイコフレームの閉じた姿が存在する。

アームド・アーマーDEもデストロイモードで形が変わるのだがアイのアームド・アーマーDEはユニコーンモードしか無い。

つまりデストロイモードなのに一部装備はユニコーンモード、公式的にはあり得ない半端な姿だった。

ちなみにこれはアームド・アーマーDEを移植したユニコーン二号機がユニコーンモードだった為、デフォルトで装備しているフェネクス（三号機）は

きちんと対応したアームド・アーマーDEが付属している。

つまりセキランはアイのこの改造を意味がないと言ってるわけだ。

「仕方ないでしょー！持ってるのこれしかなかったんだから!!」

クロノスガンをかわしながら、アイはうるさいと言わんばかりに左腕にビームサーベルを持ち応戦した。

クロノスはなおもクロノスガンを撃ちながら突っ込んでくる。

ユニコーンのパワーはAGE―2Eの時より上だ。クロノスがクロノスガンの先端からビームサーベルを発生させる。そのまま二機はぶつかり、つばぜり合いになった。

「くっ！重い！」

クロノスのパワーは凄まじい。ユニコーンでも押し切られるかもしれないとアイは思った。

アイは、すかさず右手のビームマグナムでクロノスを撃とうとする。だがクロノスは残った左腕でビームマグナムを掴む。

「必要ないぜ？コイツにはさあ！」

「!？」

そのままクロノスはビームマグナムを握り潰す。

「嘘!？」

確かにパワーは大きいがここまで強いとアイは思っていなかった。

「次はコクピットを頂くぜ！」

「!?させない！」

そのまま左掌のビームサーベルでコクピットを貫こうとするクロノス、アイは右腕のビームサーベルのホルダーを前面に展開。

ビームトンファアを発生させクロノスのビームサーベルを受け止める。お互い腕を交差させながらこう着状態となった。

そのまま二体は力比べになる。その頃ナナは……

「しっこいなあ！」

ナナはバクトに追いかけれながら、レールガンで応戦していた。幸いバクトの動きは遅い。距離を取ればそんなに怖くはない。

と、バクトは急に動きを止めた。ナナのストライクを追うのをやめたのだ。

「諦めた？」とバクトの挙動に思うナナ。

しかしバクトはユニコーンに体を向け、ランチャーを構えた。このまま身動きの取れないユニコーンを狙い撃つつもりだ。

「ヤバい！アイ！」

アイが劣勢なのはナナにも見えた。すぐさまバクトのランチャーに向けてレールガンを放つ。ランチャーはレールガンを受けて爆破。強度が上がるとはいえ細いランチャーは耐えられなかった様だ。

そのままナナのストライクは残った左腕で対艦刀を抜きクロノスに飛んだ。

「ストライク!？」

「ナナちゃん!？」

アイはナナのストライクがユニコーンの背後から近づいて来てる事に気が付いた。

「アイ！待ってて！今助ける！」

『ヴェイガン系ってのは何度も戦ってるもの！大方コクピットは頭でしょ！』そう思いながらナナはクロノスの頭に対艦刀を振り降ろす。

察したクロノスはユニコーンとの力比べを諦めそのままバックス

テップ。

振り降ろした対艦刀は頭部には当たらず、左のクロノスキャノンに当たる。しかし……

「何これ!?切れない!」

そう、対艦刀はクロノスキャノンを切断出来ず、キャノンにそのまま突き刺さった。

まるで木にナタを打ちつけたように……

「貴様!!」

クロノスは後退中に右側のクロノスキャノンをストライクに向け発射。シールドを弾かれたストライクに防ぐ術は無く、ストライクのコクピットを貫通する。

「あつ」

「ナナちゃんっつ!!」

アイが叫ぶ中、コクピットを失ったストライクはそのまま爆散。ここでストライクは撃墜となった。

後ろからもバクトがゆつくりと迫る。このままでは挟み撃ちだ。

「これで事実上二対一だな!」

ライタはクロノスキャノンに突き刺さった対艦刀を引き抜きユニコーンに投げつけた。

「くっ!」

アイのユニコーンはビームトンファアで対艦刀を弾く、だが直後クロノスは右肩でタツクルをかましてきた。

全体重を乗せたクロノスのタツクルにアイのユニコーンは弾き飛ばされ。倒れはしなかったものの膝をついた。

「無駄だ!お前は俺に勝つ事は出来ない!」

クロノスは追い打ちとしてクロノスガンをユニコーンに放つ。

「まだまだ負けるつもりなんてないよ!」

アイは左腕のアームドアーマーでクロノスガンを防ぐ。弾き飛ばされた際に追い打ちが来ると解っていた為、すかさず背中のアームドアーマーを左腕に移動させていた。

そしてクロノスに先端のビームキャノンを向ける。

「撃たせるか！」

ライタはそう言うのとクロノスの火器を全てユニコーンに向け発射。
「っ！」

アイはアームドアーマーで防御態勢を取るも、ビームの嵐はユニコーンを襲う、そして大爆発を起こした。

「フーン！現実には厳しいんだよ！」

勝った。そう確信するライタ。だが撃墜扱いのアナウンスが流れていない。

「やってないのか！」

「安直すぎるよ！」

撃墜扱いになってないとライタが判断したと同時にアームドアーマーを失ったユニコーンが突っ込んできた。それも腹這いの体勢で。

「なんだその体勢はあつ！」

「うああああつ!!」

火器を向けようとするも瞬く間にユニコーンはクロノスの懐に入った。そして……クロノスの横を通り過ぎた。

「なんだ？なんともないじゃないか！脅かしやがって！」

後ろで立ち上がったユニコーンへ振り向こうとするライタ、だが

……

「あんまり動かない方がいいよ。倒れるから」

「何……っ！」

ライタがクロノスを振り向かせる途中、クロノスがバランスを崩し横転した。

「なんだとお！」

ライタはクロノスの足を見て驚愕した。両足首が斬り落とされていたからだ。その隙をアイは見逃さず、右腕のビームトンファアードでクロノスを袈裟に切り裂く。

右股間接から入り、そのまま右肩の付け根を切り落とした。

「うおおっ！どういう事だ！」

「さつきナナちゃんの対艦刀がクロノスキャノンを切った時、エポキシパテが詰まってるのが見えた」

アイはナナの切ったクロノスキャノンの切り口を見て気付いた。ミント色の切り口。これはタミヤの高密度タイプのエポキシパテだ。エポキシパテ……、粘土の様な形状をしている模型用のツールだ。硬化剤と組み合わせて使用する事により時間を置くとカチカチに固まる。

これにより形状を整えたり、無い形状を造形する事が可能だ。今回のクロノスに使用されてる高密度タイプは、数あるエポキシパテの中で最も固く弾力性があり、最も重い物だった。

ガンプラバトルではパワーに反映され、スピードを犠牲にユニコーンすら圧倒する力を発揮する事が出来たわけだ。

「それで体重を重くすれば、パワーは増す、だけど可動の邪魔になるから間接まではパテは仕込むことは出来ない。」

だから関節が弱いと思っただけど、ビンゴだったね」

そう、仮想アータ内では本来の重量より五倍の重さだ。スピードと燃費の悪さは半分以下だがパワーと打たれ強さは倍以上になっていった。

バクトも同様の改造が施されているのだろうとアイは確信した。

重くなったという事は総重量がモロに足に来るという事。だから足の関節が一番脆いとアイは予想した。予想は見事的中したわけだ。

「やった！アイ！」

Gポッドから出たナナが称賛の声が入れる。

「まだだ……」

「!?まだ生きてる!?!」

ライタが呟きと共にクロノスは飛び。そのままクロノスはその場から逃げ出し、海へ飛び込んだ。

「仕留め切れなかった!?!追わなきゃー!」

だがユニコーンにビームキャノンが迫る。アイはアームドアーマーで防御、さっきのバクトが胸のビームで撃って来たのだ。

「邪魔しないで!」

アイはバーニアを吹かしバクトを翻弄する。動きの遅いバクトは対応しきれずあつさりユニコーンに背後を取られた。

そのままユニコーンは頭部をビームトンファアで突き刺した。コクピットを潰された事によりバクトは撃墜扱いになった。

アイのユニコーンもクロノスを追いかけて海に飛び込む。水中ではビーム兵器の威力が半分以下になる上に動きも悪くなる。アイは注意しつつクロノスを探す。

クロノスキャノンが飛んできた事によりクロノスはアツサリ見つかった。

「待つてたぜ！まだ俺は諦めねえぞ！水中なら足なんて飾りだ！」

「こんな所に逃げ込むなんて本当に諦め悪いね！」

アイはユニコーンでクロノスの周りを高速で動き、クロノスをかく乱すようとする。

「チョロチョロ動きやがって！だがまだ……なんだ!?動きが鈍い?」

「ツ?」

「し……しかも沈んでいく!」

クロノスの動きが鈍い事にアイとライタは気付いた。更にクロノスがドンドン沈んでいることに、それを見たアイは気付いた。

「そうか……自分で墓穴を掘ったんだ」

「何……?」

「重量が重すぎたんだよ」

そう、高密度パテはエポキシパテの中で最も重い。水に入れてしまえば小石を入れたかのようにどんどん沈んでいく。

「クソツ！上がれ！上がってくれクロノス！俺は！俺達はなるんだ！アイツを！ヤタテを倒して一流のビルダーに！」

ライタは操縦桿とペダルを吹かしながら自分の相棒に訴えかける。だが思う様に動かない。

「悪いけどもらうよー！」

そのままアイはユニコーンを突っ込ませ、クロノスの頭部にビームトンファアを突き刺した。

クロノスはそのままだ目で弱々しくピピピ……と光を発した。自分の相棒に『勝てなくてゴメン……』と伝えるかのように

「ク・クロノス……」

最後にライタはそう言うのとクロノスと共に沈黙、深海へ沈み……見えなくなった……

これにより勝敗は決した。 アイ達の勝ちだ。

「ナナちゃんのおかげで向うの仕掛けを見抜けたし助かったよ」

両手でユニコーンを持ちながらアイはナナに礼を言う。

「いいよそんな事、それにしてもカッコいいわねアンタの新しいガンダム」

「そう！作るの大変だったよ。サイコフレームとボディで分けて塗装したから余計に時間かかっちゃって〜」

「あくやっぱり？それ以外でもそのシール。アンタに借りた模型雑誌で載ってたけど、それって水につける奴でしょ？手間かかったんじゃない？」

「ところでタカコ……、さっき『2日かけて』って言ってたけど……タカコも手伝ったの……?」

ムツミが不意に呟く。タカコは「え?!」と反応する。

「タ・タカコちゃん!？」

アイも明らかに動揺する。ナナは不審に思った。

「……アイ、アンタまさか土曰って」

「タカコ……君は」

「え?いや、別にそんな事……」

冷や汗を流しまくる二人。ナナとムツミはジト目で迫る。

「眼を逸らさない……」

「怒らないから言いなさい」

「アイちゃん……」

「タカコちゃん……そうだね、観念して言おう……実は……」

二人はしよんぼりしながら話し始めた。

——2日前——

時刻は午前11時、アイの部屋、アイとタカコは床に敷かれた座布団に座り、

テーブルで向かい合いながら教科書と睨めっこしていた。……二人とも頭からオーバーヒートの煙をふきながら

「ア……アイちゃん……この公式なんだっけ？」

「え？いや私に言われても……」

もうこんな感じで30分だ。

「あーもう！やめやめ！こんな調子じゃ絶対間に合わないって！」

タカコは座った姿勢から上半身を床に投げ出した。前を切り揃えたセミロングの髪がふわっと広がる。

「駄目だよタカコちゃん！今やらないと時間だけ無駄になっちゃおうよ！」

「そんな事言ったって解らないだもん、その上頭だけどんどん加熱しているみたいだよ。せめて休憩しようよ」

両手をバタつかせゴネるタカコ。

「休憩って……」

アイは部屋の時計を確認する。やり始めて1時間は経っている。

「まあしょうがないか……でも少し休憩したらまた始めるからね」

「やた〜」

タカコは上半身を起こしながら笑顔を見せた。と、その時、アイの勉強机の上にガンプラの箱が置いてあるのが見えた。

『HGUCユニコーンガンダム デストロイモード』だ。

「あ、新しいガンプラ？ちよつと見せて〜」

「あ！待ってそれまだ出来てない！」

タカコはガンプラに興味があるわけでは無い。しかし初めて入る友達の部屋だ。何かあるのか興味が沸いたのだろう。

箱を開けると分解状態のユニコーンガンダムが入っていた。組んだパーツはほとんど無い。

「うわっ！すっごい細かい」

「それまだ時間かかるんだよ。塗装とかは終わったんだけど」

「え？じゃあ後組むだけなんじゃないの〜？」

「そういうわけじゃないよ。シール貼らないといけないからさ」

同じく箱の中に入っていたHGユニコーン用のデカールとネットで印刷したであろう完成写真を見せる。凄まじく細かい上に凄まじく量が多い。

「ふくん」

その時タカコの頭にあるアイディアが思いついた。うまくいけば休憩時間を引き延ばせるかもしれない方法を。

「アイちゃん！あたしそれ貼るの手伝うよ！」

「ええ?!ダメだよそんな!」

タカコの発言にアイは理解できなかった。勉強しなきゃいけない状況なのにガンブラ作りになるのはさすがにマズイと思ったのだろう。

「アイちゃんだって本当は早く完成させたいでしょう?」

「そりやそうだけど……、日を考えてよ」

「じゃあちよつとだけ！息抜き程度だから!」

「そりや……ちよつとだけだよ」

ユニコーンを早く完成させたいと思っていたのはアイも同じだった。タカコが手伝ってくれるのなら素直にありがたかった。

教科書とノートを片づけてテーブルの上にユニコーンとデカール、そして綿棒の詰め合わせと水の入った塗料皿（金属製はさびるのでプラスチック製）を置いたアイ

「このシール……水転写デカールは普通のシールと違って一度水に浸す必要があるの。ちよつと手間がかかるから見てね」

まずは貼りたいデカールの部分をデザインナイフで切り取る。ある程度の余白は残しておく。当然デカールの下にはカッティングマットを敷いている。

「次に切った部分をピンセットでつまんで塗料皿の水に浸すの。水についたら皿のふちに置いてね。入れっぱなしだとデカールだけ浮くから」

そしてしばらくして、再びピンセットでデカールの余白をつまむ。

「そしたらパーツの貼りたい位置にデカール持つて行って、ピンセット持つてない方の親指でデカール抑えながら台紙を引き抜く。うまく台紙にデカールが浸透してればすんなりいくから」

そしてピンセットから綿棒に持ち替えるアイ。

「水がついてる内はある程度動かせるから、貼りたい位置に持つてこれたら綿棒で水分を吸い取って完成、ユニコーンの場合完成図と睨めっこしながら、ひたすらこれの繰り返しだよ」

「ひやく細かいく、うまく出来るかな」

「だったら辞めとく？」

「ううん、やってみるよ」

少し尻込みしてしまうがすぐテスト勉強には戻りたくない。タカコはデカール貼りに挑戦すべくデザインナイフを手にとった。

で、二時間後……

「やった……両腕完成……！」

デカールを貼った両腕のパーツがテーブルに置かれる。

「うあく目えシヨボシヨボするう」

ずっと集中していたのだ。タカコは眼がしらを抑えながら言った。

「とりあえずこれで終わり、さ、勉強にとりかかろうよ」

ユニコーンをしまおうとするアイ。しかしタカコはテスト勉強に戻りたくなかった。

「あーアイちゃん！でも腕だけだよ！まだ両足も武器も完成してないじゃない！」

「え？まさかまだやるつもり!?駄目だよ今度こそ勉強しないと！」

「だ！大丈夫だよ！えくと……、その分休憩時間削れば問題ないから！」

「ええ！ぶっ続けでやるつもり?!」

「却ってあたしが気になって集中できないよ！」

別にタカコがガンプラ作りに目覚めたわけではない。しかしこっちの方が集中出来る分こっちをやってた方がタカコ的には良かった。

「うくん、そう言うなら……両足だけだからね」

で、またまた二時間後……

「両足までこれたよ……」

「凄い凄い！」

デカールを貼った両足のパーツが（以下略）

「で、もう三時になっちゃったけど……」

「アイちゃん……もうあたし思ったんだけど今日の所はユニコーンに集中して、明日ガーツと勉強に集中した方がいいと思うんだ」

「いや……まあ確かに今から勉強に取りかかるんじゃないかと思うんだけど……」

「じゃああたしがお股に取りかかるからアイちゃんは上半身やって」

「充実した時間過ごしてんだか、時間無駄使いしてんだか解らなくなってきた……」

そしてまたまた二時間後……

「いや〜胴体もあらかた貼り終わって残りも減ってきたね〜」

デカールを（以下略）

「うん、でもまだ武器とか残ってるよ」

さすがにもうこれ以上続けるわけにはいかない。時刻は午後五時、タカコは今日お泊りする用意はない。今帰らないと真つ暗だ。

「じゃあ明日残り一気にやって完成までこぎつけようよ〜」

「そうだね、さすがに明日なら午前中に完成まで行くとしようし……」

そして結局明日の午前中でも完成には至らず……、日曜日の午後まで使ったようやく完成までこぎつけたのだった……

「というわけで完成したの。大変だったよ〜」

「……『大変だったよ〜』じゃなああいつつ!!!」

『ひうい!!』

普段ジト目のムツミが鬼の様な形相になる。大声が店に響いた。

「高校性が二人もいて!!二日かけて勉強そっちのけでガンブラ作成つてどういう事おお!!」

「ム!ムツミ!待って待って!勉強解んなかったから仕方ないじゃん!」

ひきつった笑顔でなだめようとするタカコ

「開き直るなあああつっ!!アイちゃんもアイちゃんだよっつ!!!ホイホイとタカコの言うがままにされてええっつ!!」

「ひいっ!!ごめんなさい!!」

「まあまあムツミ、まだ二週間あるわけだし、完全に取り返しのがつかなくなったってわけじゃないんだし」

「ナナ!でも!」

「その分スパルタでやればいいじゃない」

アイとタカコはナナの発言にビクツとなる

「そ・そうだね……、残りの期間で挽回すれば……」

「と、いうわけで残り二週間、毎日勉強会開こうね。アイ」

「ナ・ナナちゃん……」

いたずらっぽく笑うナナにアイは戦慄していた。

「あたしは新聞部があるから別にいいよね」

「駄目だよタカコ……。部活後でもボクが叩き込むから……」

「あはは……やっぱし?トホホ……」

アイとタカコはその場で頭を垂れた。可能性の獣……ユニコーン、しかしそれを生み出すのに別の可能性を削り取ってしまったアイ達なのであった。

「……あんな奴らに負けた俺達って一体……」

……ライタ達も別の意味で頭を垂れていた。

第16話「我ら山回高校四人娘！」（ガンダムエックス 黒王号 & シャルドールスナイパーカスタム登場）

「あんな奴らに負けた俺達って一体……」

前回アイとのガン普拉バトルで敗北したライタ達、だがアイ達の情けない姿を見てどうにも負けた事に納得がいかなかった。

それと同時に、ムツミの怒った声が大きかった為か、なにがあったと二階にギャラリーが上がってくる。

二階にかなりの人数がムツミやアイ達の周りに集まってきた。

「ムツミ、ちょっと声が大きすぎたみたいね」

「え……う？そんなつもりじゃ……」

こんな場所ですんなら大声を出せばこうもなる。苦笑いするナナにムツミは顔を真っ赤にして縮こまった。

そんな時だった。

「ソーフツフツフ。テスト前の土日使って勉強もせずガンプラとはね。ミヨ、君の友達はロクな奴がいないなあ」

ギャラリーの中から声がした。挑発的な言い方だ。アイ達全員が声のした方を見ると、学ランを着た少年がギャラリーの中から歩いてきた。

真ん中で分けたウェーブの髪、長身で余裕の笑みを浮かべた表情からはイヤミのような印象がある。

「ヒカワ君……」

「あ、ミゾレ君」

ムツミとタカコ、両名が少年を見ながら言う。面識のないアイには二人とどんな関係なのか気になった。

「知り合い？」

「うん……、ボクとタカコの中学校の時の同級生……。学校は違うけどボクとは同じ陸上部なんだよ……」

「解説どうも、ミヨ・ムツミの紹介した通り、ボクはチーム『ホークアイ』のヒカワ・ミゾレ、フジ・タカコとミヨ・ムツミとは長い付き合い合

いでねえ」

「特にムツミにはつつかかっててさ。勉強や成績で争っていたんだけど全敗してたんだよ」

タカコが自分の発言をねじ込む。

「よー余計な事言わんでくれたまえ!!」

それを真つ赤な顔で遮るミゾレ。

「コホン、まあ前置きはいいんだ。ヤタテさんといったね。明日の午後5時、僕と三対三のガン普拉バトルしてくれないかい?」

「明日ですか?あいにくですけど友達との約束がありまして……」

さつき勉強会を毎日開こうという事になった。怒られた以上やすやすと受けるわけにはいかない。

「おや?逃げるのかい?」

「そういうわけでは……」

「ウルフを倒したからどんな奴かと思ったけど、所詮ミヨ・ムツミの友達という事だねえ」

「……どういう意味だいヒカワ君……」

その発言に、眉間に皺を寄せたムツミがミゾレに詰め寄る。

「ノーフツフツフ。自分で言ったじゃないか。テストも近い土日にガン普拉を作るようないい加減な人間だという事だよ。」

ミヨがその程度の友達を連れてくる辺り、ミヨもたかが知れてるねえ」

余裕の態度のままミゾレは言う。友達をダシにした発言にムツミは不快だったがアイはもつとカチンと来た。

「そういう事ならいいですよ。受けましょう!」

ミゾレを指さすアイ。

「え……?アイちゃん……!?!」

「ただし私が勝った場合!さつきの発言は綺麗さっぱり撤回してもらいますー!」

「ンフツ!それでこそだよ!」

わざわざ挑んで来るだけあって自信があるらしい。指差すアイに余裕の態度のままだ。

「さあ皆、聞いたかい？明日の午後5時だよ？僕達の決闘を見たい人達は是非来るといい」

ミゾレはギャラリーを見回しながら言う。そして最後に視線をムツミに映す。

「ミヨ・ムツミ、当然君も来るんだろう？君の友達がやられる様を見にね」

「……アイちゃんは君には負けないよ……。ボクは信じる……」

「信じる……か。まだそんな事を言ってるのかい？まあいい、明日せいぜい僕の雄姿を目に焼き付けることだね」

そう言いながらミゾレはその場から帰って行った。

——そうさ。手の届かないコウジ・マツモトならいざしらず、あんなどこの馬の骨とも知れない女より僕の方を……——

誰にも聞こえない程小さい呟きを遺して……

「アイ……気持ち分かるけど挑発に乗り過ぎだよ」

「解ってるよ……でもあんな言い方ないよ！」

ミゾレの去った後にアイに注意をするナナ、しかしアイは悔しそうなままだ。

「でも……有難うアイちゃん……、嬉しかったよ……」

穏やかな笑顔を浮かべるムツミ、「お礼を言われる程でもないよ」と照れ隠しするアイ、

アイとタカコは怒っていた筈のムツミの笑顔に安心する。

「でも意外だったわね。アンタがあんな人と勉強で競っていたなんてね」

ナナが驚きを隠さずに言う。ムツミは人に自慢するような人間ではないからだ（アイドルグループ『SGOC』のグッズは例外的に自慢するが）。

「勝手に比べられただけだよ……。ヒカワ君、ボクは何もしていないのに勝手にテストの点数とか順位とか比べて自爆してただけだから……」

嫌そうな顔で否定するムツミ、つまりミゾレの一方通行だという事

になる。

「全然相手してなかったからねえムツミ、ちよつとは相手してあげても良かったんじゃない?」

「余計なお世話だよ……」

「そういえばムツミちゃんも小学生時代は男子と張り合っていたんだっけ?」

アイは転校2日目にムツミに言われたことを思い出していた。

彼女は小学校時代、男子に対抗意識を燃やしており頻繁にスポーツで競っていた時期がある。

ミゾレと通ずる部分があるとアイは少し思った。

「一緒にしないで欲しいな……。ボクはあくまで男子と一緒に遊ぶのに拘ってただけだよ……。あんな風に一方的に突つかかるやり方はしてなかったよ……」

一層不満を顔に出してムツミは返す。

「でもさ、ミゾレ君がガンプラやっていたって言うのは初耳だったな。中学校時代そういうの聞かなかつたし、もしやってたんなら新聞部一生の不覚だよ」

「ガンプラはここ半年で始めたってヒカワ君言ってたよ……」

「え?なんで知ってるのムツミ?!」

ムツミの発言に驚くタカコ。

「先週の土日、部活の合同練習があるって言ってたでしょ……?男子と女子で別れてはいたけど向こうから言ってきたんだよ……?」

「半年か……。短い期間だけど、それであれだけの自信持つって事はかなりの実力者って事だね。気合入れていかないと」

「でも勉強あるんだから余り時間とっちゃ駄目だからね……?」

親が子供に言いつける様な言い方だ。

「アハハ……。解ってますって……」

乾いた笑いでアイは返した。

「それはそうと、三人目どうするのよ?」

ナナが口を挟む。ミゾレの挑戦には三対三という条件だった。アイとナナは出るとしてもう一人がいらない。

「それなんだよね問題は、うくん、模型部のコウヤ君当たってみるかな？」

……

翌日、アイとナナ、タカコの三人は昼休みにコウヤを誘いにいった。(ムツミは陸上部の集会と今日の部活を休むという申請の為ここにはいない)だが……

「いや……あいにくだけどそいつは出来ない……」

コウヤの教室入口、左手に英単語カードの束を持ったコウヤが断る。いつもよりテンションが低い。その上目が血走ってる。

三人はその様子でどうして出られないのかすぐにピンと来た。

「……そつちもテスト勉強？」

「そうだよ……前のテストで赤点とつちまって丁度今日から補修なんだよおお……」

よよよ……とその場に崩れるコウキ、教室の中もなんだか騒がしい。

『いいじゃない！コナミにノート貸してくれたって！代わりにコナミのノート貸してあげるから！』

『何言ってるんですか部長！三年生なのに二年生の俺達のノート見せたってどうしようもないでしょ！大体部長のノート借りたって読めませんよ！字が汚すぎるんですから！』

『ケチーッ！死ねーッ！』

『気安く人に死ねとか言うんじゃないやありません!!』

『ひうつ!!』

カワサキとコナミが騒いでいた。アイとナナはこりや駄目だとお互いの顔を見合わせた。

「まあしようがないよね。うちの学校、連続で赤点取ると長期休み返上で補修と追試だし」

「げえ……」

サラツと言うナナの発言にアイは顔を青ざめる。

「大丈夫よ。回避する為に勉強会やるんだから。よほど成績悪くない

とああはならないし」

「ま、とにかく俺は出られないから他当たってくれ、しばらくガンプらは出来ないから……」

そのままフラフラとコウヤは教室に戻っていった。アイはコウヤの丸まった背中を見つめながら呟いた。

「ああは……なりたくないね……」

「ていうかなんであの部長、カワサキの教室にいたわけ？」

そして自分たちのクラスに戻ったアイ達……

「頼みの綱も切れちゃったなあ。どうしよう……」

「2対2に変えてもらうとかしかかないわね。それか現地で暇な人誘うとか……」

「いやナナちゃん、向こうも挑戦してきてる以上。そういう適当なのはちよつと……」

「う〜ん……」

「?どうしたのよタカコ」

タカコの唸りにナナが疑問に思う。今日はどうもタカコのおかしさがおかしい。いつになく真顔だった。

「……いや、今日になって思ったんだけど、なんか引つ掛るんだよねえ」

「何がよ?」

「昨日のムツミが怒ったのってさ。普段だったらああいう風に怒るのってないんだよ」

「そうなの?でもあの時もすぐ落ち着いてたし、たまたまじゃないの?」

アイが昨日の状況を思い出しながら言う。あの後ムツミは大声を出した所為で周囲から注目され、恥ずかしそうに俯き、周囲の視線を受けていた。

「そりゃあたしだって今までにもムツミ怒らせた事あったよ?でもなんか今までと比べてオーバー気味だったっていうか……」

珍しく眉間に皺をよせてタカコが考える。長い付き合い故にタカ

コはムツミを怒らせた事が何回もある。だからこそ引つ掛る反応だった。

「そういうの解るんだね。タカコちゃんって」

「タカコってムツミと付き合い長いからね。アタシは高校からだったけど、タカコとムツミの二人は幼稚園の時から幼なじみのよ」

「え？そうだったんだ！」

「ミゾレ君も変だったんだよ。今まで確かにムツミにちよっかいは出てきたけど。あんな風に友達をダシに挑発する人じゃなかったのに」

昨日の言いたい放題のミゾレを思い出すタカコ。後になって違和感に気付いたようだ。

「何か裏があるのかしらね？今日のバトル」

「さあね、少なくとも戦ってみれば多少は解るかもね……」

放課後、ガリア大陸に4人が集まる。昨日ミゾレが宣言をした所為か、2階はいつも以上にギャラリィで賑わっていた。

「やあ、逃げずによく来たね」

アイ達を見るや否や、ミゾレが昨日と同じテンションで話しかけてくる。

「バトルを約束した以上、逃げるわけにはいきませんから」

「フン、そういう割には3人集まったのかな？2人しかいないじゃないか」

「それは……」

その時だった。

「いないのなら俺をチームに加えてもらおうか！」

そう言って出てきたビルダーがいた。それはアイ達も良く知っているビルダーだった。

「ツチャさん！」

声の主はコンドウ率いるガリア大陸きつてのビルダーチーム『ウルフ』。そのメンバーのツチャ・サブロウタだ。

「俺もこの辺で活動してるビルダーだ。加えても不自然じゃないだろ

う?」

「あー有難うございます!よろしくお願いします!」

「丁度試したい新作が出来たからね。足は引つ張らないさ」

眼鏡をキラリと光らせながらツチャは言った。

アイとナナにとつてはこれ以上ない助っ人だ。それを見てなおミゾレは余裕の態度を崩さない。

『ウルフ』のツチャを加えるとは……彼を入れなきやボクに勝てる自信はないのかい?」

「ヒカワ君……!」

初対面の時と変わらないイヤミな言い方だ。ムツミは若干強くミゾレに声をかける。

「フ、そう怖い顔をしないでくれたまえ。それじゃあ早速バトルへと移行したいんだが……いいかな?」

「負ける気はありませんからね」

ギャラリーが対峙する2チームを見つめる。その中には昨日アイ達が戦ったセキラン・ライタの姿もあった。

昨日のアイの失態にアイの実力が納得できない為来たというわけだ。

——改めて見せてもらおうか。アンタの実力を……——

かくしてガン普拉バトルが始まった。今回のステージは密林地帯だ。時刻は夕方の設定、夕日をバックに黄色い輸送機、ミデアが飛ぶ。

ミデアの下部は巨大なコンテナだ。そこからアイ達の機体が降下する。

「ジャングルかあ、アイはやった事あるけどアタシは初めてだな」

木々に覆われたジャングルにナナの乗ったストライクガンダムI・W・S・P。が着地をし、辺りを見回す。

周りは機体の大きさに匹敵する高さの木々ばかり。遠くには岩山がいくつもそびえ立っている。

と、アイの機体が見えた。彼女の機体は前回に引き続きユニコーンガンダム・デストロイモードだ。今回は右腕にビームガトリングを二

丁取り付けている。

「出来る限りフォローはするよ」

「あ、アイ、前のユニコーンって奴と装備が違うね。そういえばユニコーンガンダムって通常形態と変形が出来るって聞いたけど」

「このサイズじゃ無理だよ。これよりもっと大きいサイズのガンプラだったら再現できるけどね」

前回も言ったがアイのユニコーンは装甲を開いたデストロイモードと装甲を閉じたユニコーンモードが存在する。

アイのデストロイモードはいわばパワーアップ形態の様なものだ。アニメ本編では装甲のスライドによって変形するが、

アイの使用する1/144だとサイズの無理がある。だから形態ごとに個別で売っているのだ。

「ややこしいなあ、アンタが両形態出来る様に改造すればいいんじゃない?」

「いや無理無理無理!!改造難易度どれだけあると思ってるの!?!と……それどころじゃなかった!」

慌ててアイは話を戻す。やれやれとツチャはフツと笑った。

「話弾むのはいいが相手は狙撃が得意な連中だ。どこから狙ってくるか分からないから気をつけてくれよ」

ツチャの通信が聞こえると共に機体も見えた。背負った大型バインダーと大きなキャノン砲。ガンダムエックス。

そのバリエーションでビルドファイターズに登場した『ガンダムX魔王』がツチャの機体だった。

「ガンダム、でも黒いわ」

ナナが初めて見るツチャのガンダムX魔王を見る。カラーリングは全身黒く塗装されていた。またサテライトキャノンの先端部にはシナンジュという機体のビームトマホークが取り付けられていた。

「ある漫画版では黒いカラーで出ていたからね。それを参考にしたわけだ。分離機構は今回はナシだけど……名前は『ガンダムX国王号』とでも名付けようか」

——……いや、そんな自信満々でそんな名前言われても……——
そう心の中で呟くナナであった。

「しかしよりによってこのステージでスナイパー相手にするなんて、運が悪いというかなんというか……」

「しかたないわよ。ランダムで決めただから」

「何にしろ気をつけろ。手を抜いちや勝てないぞ！」

そう言うとアイとツチャはバーニアを吹かしながらジャングルから飛び出した。二人ともやる気満々だ。

「ああもう！待ってよ二人とも」

一方こちらはホークアイ側

「リーダー！来ました！向うは飛んで我々を探しています！」

チームの一人が叫んだ。リーダーのミゾレは岩山の物陰に潜み、アイ達三体を確認する。

「ソッフ。ステージ上イニシチアブをこちらが取ったのも事実……手筈通りいくぞ！」

「了解です！」

別々の場所から濃紺の機体が二機飛び出す。それを見送りながらスナイパーライフルを構えた機体が二つのカメラアイを光らせ、物陰から姿を現した……

ジャングルから飛び出したナナのストライク、そこへGポッドに警告音が響く、

「どこから!?!」

ナナは身構える。ジャングルから飛び出てきたのは濃紺のドクロの様な頭部の機体『Gエグゼス・ジャックエッジ』だ。

ガンダムA G Eに登場した宇宙海賊の機体だ。ガンプラ独自の改造として右手にはビームサーベルが二本付いた槍の様な武器、ツインビームスピアを持っていた。

そのままナナのストライクに斬りかかる。ナナもストライクの対艦刀を抜き応戦。

「普通に戦おうってわけ!?!上等よ!」

ナナの行動に狙撃の隙を見せかねないと思ったアイは止めようとする。ツチャも一緒だ。

「ナナちゃん!?!マズイよ!それじゃ相手に隙を見せちゃう!」

「大丈夫!手短にすませるから!」

それでも止めなきやとアイとツチャはナナのストライクに加勢しようとするがその時、遠くの岩山から一条の細長いビームが飛んでくる。

それはストライクに近づこうとする二機を阻んだ。

「超長距離射撃!?!」

「向かわせないって魂胆か!」

二人の動きは止まる。

直後にもう一機のGエグゼス・ジャックエッジ（以下J）が真下からツインビームスピアを構えユニコーン達に飛び上がってきた。

「うわっ!」

アイは、下からの攻撃をかわしきれないと判断すると、ビームサーベルを抜き応戦する。

「!?!バカッ!ヤタテ!」

すぐさまツチャの黒王号がユニコーンの横腹に蹴りを入れた。

「わっ!」

ユニコーンは吹き飛び、さつきユニコーンがいた場所を狙撃ビームが襲う。目標を見失ったGエグゼスJは黒王号へと標的を変えて斬りかかる。

「んっ!」

ツチャは国王号のビームソードを抜きツインビームスピアを受け

止める。

Gエグゼスはすぐさま離れ、下の木々の中に逃げ込んだ。

「ツチャさん!? 助かりました……」

「礼はいい、それよりハジメを!」

同時にツチャが促した場所。ナナのストライクと戦っていたGエグゼスJも下のジャングルに逃げ込む。

「それで逃げたつもり!」

ナナは仕留めようとGエグゼスJが逃げ込んだ地点に背部のレールガンを撃ちまくった。上がる爆発。

「やった!」

「ソフフ。君は馬鹿正直だねえ……」

「え? ツ!」

ナナが相手からの声を聞いた瞬間だった。背後から狙撃ビームがストライクを貫いた。コクピットを一撃だ。状況を理解しきれないまま落ちるナナとストライクI。W. S. P.。

「そんな……でも一機仕留めれたから……」

少しは役に立ったと思ったナナ、しかしレールガンで撃ったGエグゼスJが再びジャングルからジャンプし飛び出してきた。

わざとツインビームスピアを撃たせ爆発させたのだ。

「嘘……何も出来ないまま負けるなんて……」

悔しそうにつぶやくと目の前のGエグゼスが背中中のビームサーベルでストライクを真っ二つに斬り裂いた。

モニターがブラックアウト、すぐさま『撃墜されました』の文字が表示された。

「ナナちゃんっ!!」

こちらもGエグゼスJと交戦中、GエグゼスJと鏖迫り合いになりながらアイはユニコーンの視線を爆散したストライクへ向けた。

「チッ! 一旦ジャングルへ隠れるぞ! ヤタテ! 牽制を!」

「く……はい!」

ユニコーンから離そうとGエグゼスJにシールドライフルを撃つ黒王号。気付いたGエグゼスJは一度離れ回避。

その隙にアイはビームマグナム下部のグレネードランチャーをGエグゼスJに発射、GエグゼスJはシールドで防御、

目くらましの代わりに発射したのだろう。受けた際の爆風が収まると、もうユニコーンと黒王号はいなかった……。

二人は一度下のジャングルに身を隠す。二機とも身をかがめた状態で通信を入れる。上空ではGエグゼスJが一機飛びながらこちらを探していた。

「撃ってきたスナイパー、同じ場所にいますかね？」

「移動してるだろうな。狙撃した事で場所はばれてるんだから」

さつき撃ってきた遠くの岩山を見る。高い所は狙撃するには格好の場所だ。しかし高出力のビームを撃ってしまう以上どうしても射点で位置がばれてしまう。

すぐ場所を変えてまた撃ってくるだろう。

このままアイ達が隠れていれば見つからないかもしれない。かといってこのまま身を隠していても時間切れになるだけ、

判定に持ち込もうにもナナがやられてる以上こちらの負けになつてしまうだろう。

「ヤタテ、常套手段だ。俺が囷になる。奴さんが撃ってきたらその射点に向って奴を仕留めてくれ」

「ツチャヤさん!?!危険です!」

「このまま待っても負けは変わらない、可能性がある分これが一番手っ取り早い!」

「……解りました!」

アイの了承の言葉を聞くとツチャヤの黒王号は背中のリフレクターを外側に展開、飛行形態のホバーリングモードで飛び出した。

「頼みます!ツチャヤさん!」

「さあ来い!出来れば二機とも!」

多少離れた場所で黒王号を確認すると、こちらを探していたGエグゼスJは突っ込んできた。

程なくして狙撃用のビームが飛んでくる。さつきの場所に近い岩

山の上からだった。

「チツッ！」

ツチャはGエグゼスJが二機来なかったことに舌打ちをしつつも狙撃を回避、1機だけのGエグゼスJの攻撃に対応する。

「ヤタテッ!!」

「やってますよおおツツ!!!」

その場所目掛け、アイはユニコーンを密林から飛び上がらせ、最大出力で突っ込ませた。スナイパーも気付いたのかユニコーンめがけビームを撃ってきた。

左腕の盾、アームドアーマーでそれを受ける。通常のライフルとは比較にならない出力のビームがアームドアーマーですらドロドロに溶かす。しかし貫通はしない。

「くっっ! ああああああ!!!」

アイはビームを凌ぎきるとそのまま機体を全力で飛ばす。ビームマグナムの射程距離に入るとさつき撃ってきたであろう場所にマグナムを撃ち込んだ。

起こる爆発、仕留めてない事を考え、狙撃されない様ジグザグかつ高速でその場所に向かう。そこに先程ナナと戦ったGエグゼスJと……ナナを撃った機体の正体があった。

「ここまで来たか! 地の利を利用した僕達に謁見するとはねえ!」

「シャルドール改!?!」

そう、狙撃した機体の正体はガンダムAGEに登場した量産機、『シャルドール改』にガンダムUCに登場した『ザク1・スナイパータイプ（UC版）』を組み合わせた改造機だった。

ブラウンとオーカーのカラーリング、ザクスナイパーのパーツはパツと見ても全身に装備されているのが分かる。

ランドセルにスナイパーライフル、右足のニーパッドに胸の固定用フック、更に胸部装甲の黒い部分をシールドとして右腕に装着していた。

何より目を引くのは右肩のセンサーだ。シャルドール改のバックパックを右肩に接着、さらにその上にザクスナイパーのモノアイが取り付けてあった。

元々シャルドール改は背中に装備されたビームサーベルマウント部を回せるという特徴がある。そのギミックを活かしたことにより360度狙撃用モノアイが見回せるというわけだ。

「まさに両機のいいところ……って事ですか!？」

「その通り! 『シャルドール・スナイパーカスタム』だ!」

アイはシャルドールを切り裂こうとあらかじめ左手に持っていたビームサーベルを発生させる。だがそれを阻止しようとGエグゼスが阻む。

「邪魔しないで!!」

アイはユニコーンの溶解しかけたシールドでGエグゼスを思いっきり殴り飛ばす。吹き飛ばすGエグゼス。

その際にシャルドール・スナイパーカスタム（以下シャルドールSC）は逃げようとする。

——ビームサーベルじゃ届かない!——

アイは離れたシャルドールSCめがけ、ビームガトリングを撃ちまくる。

しかしシャルドールSCは予期したかの様に崖下のジャングルに逃げ込もうと飛んだ。

「逃がすかっ!」

まだ隠れずに飛んでる。アイも追いかけて飛びながらビームマグナムを撃った。

だがシャルドールSCは右肩のモノアイを後ろに回しかわす。こちらが見えてる所為かマグナムをひらりとかわす。

「クッ!あの眼でこっちを見てる!？」

「その通り!僕の眼に見えない物はない!この右肩の『鷹の眼』には!」

「ならば!」

なおも追いかけてビームガトリングを撃ちまくる。右腰に掠めるも

直撃にはいたらない、そうこうしてる内にツチャの相手をしていたGエグゼスが戻ってきた。

シャルドールSCの危機に気付いた為だ。ツインビームスピアで斬りかかるが、アイはユニコーン右腕のビームトンファーで受け止めようとする。

だが次の瞬間、GエグゼスJが腹部から横に真っ二つになる。そして爆発した。

「何!?!」

突然敵機が爆発した事に驚くアイ。

「ヤタテ！生きてるか!?!」

「ツチャさん!」

ツチャの黒王号がGエグゼスJを背後から一閃したのだ。サテライトキャノンの先端にビームトマホークの刃が見えた。

「リーダーの撃墜、ダメだったのか……」

「ええ……」

周囲を見回すもシャルドールは姿をくらました後だった。二機とも離れた場所のジャングルに降り立つ。

「シーフツフッフ。無様だねえ。君達は」

通信でミゾレの声が聞こえてきた。それはフィールドや観戦していたムツミ達にも聞こえていた。

「どうだいミヨ? ヤタテ達を翻弄する僕の知略、やはりコウジ・マツモトより僕の方が優れていると思わないかい?」

「どこが……? ただ隠れて撃ってるだけじゃないか……! 卑怯な行いを知略なんてごまかすな!」

囷と狙撃は良くある戦法だ。だがムツミ本人は気に入らないらしくバツサリと切り捨てた。

自信があった発言を批判されたミゾレには不快だった。

「く……! 減らず口を! やはり君も君の友達も愚かだ。ミヨが信じた事も含めて間違いだという事だよ!」

「……ヒカワ君……？」

「ヤタテ・アイ！冥土の土産に教えてあげるよ！ミヨ・ムツミが怒った理由を！」

「怒った理由……？」

「あれは先週の土日の合同練習の時だった！」

……

——「ソーフッフッフ。やあミヨ・ムツミ」

合同練習は運動公園の陸上競技場で行われていた。練習も終わりに片付けをしている時、ミゾレはムツミに会いに行つた。

「……君か……」

ムツミは彼をうつとうしそうに、学校指定のジャージを着たムツミは片付けをしていた。

「聞きたまえ、僕はガンブラで地区一番になった」

「いつの間にガンブラを始めたのさ……」

「わずか半年前だよ。それで地区一番までこれたんだ。君の好きなコウジ・マツモトすらも凌駕出来る才能だと思わないかい？」

「……思わないよ……。それにボクはガンブラをやっていない……いつもみたいに張り合おうとしたって意味がないよ……？」

「ソフ。でも君の友達はやっているだろう？ヤタテ・アイ……『ウルフ』だって倒したビルダーだよ……」

「アイちゃんの事を知ってるんだ……」

「僕はいずれ彼女に挑戦する。だけどさして勝つのに苦労はしないだろうけどねえ」

「……何が言いたいのさ……」

「君の友達だからという事さ！どうせフジ・タカコのような無能な人間に決まっている！」

「……」

直後、ムツミはミゾレを睨みつけた。かなり凄みのある表情だ。

「普段僕が相手をしないからって……人の友達を悪く言うなんていつも言ってるよね……！」

「う……」

普段単純に突っかかってもムツミは相手をしてくれない。しかし最近はどうやって友達をダシにする態度が増えてきた。

その所為かムツミも突っかからざるを得なかった。

「フ・フン！君がそう思っていないくても本人の行動は僕が言った通りだろうさ。どうせ勉強も出来ずにガンプラで遊ぶしか能の無い人間に違いはないさ！」

「君がそう思うならそれでいいよ。でもそんな事ない……ボクはそう信じる……」――

「そしてミヨは君達を信じた。でも君達はテスト前にガンプラで遊ぶという暴挙に出た。君達は裏切ったんだよ！ムツミをね！」

「……だからムツミちゃんは……」

ミゾレの話を聞き、アイは愕然とした。

「ム・ムツミ……そんな事言われてたの？」

「……」

Gポッドから出たナナがムツミに問いかける。ムツミは無言で観戦モニターを見つめていた。

「勉強も出来なければバトルにも勝てない！僕の知略を打ち破る事は不可能さ！さあ大人しくやられなよ！」

勝利を確信したミゾレの言葉、だがそれを遮る人間がいた。

「……遊んでいたのは確かにあたし達の所為だよ……。でもあたしは……少なくともムツミが愚かなんて思わないし、

ムツミがアイちゃんを信じたことも間違いだなんて思わないよ？」

タカコだった。

「タカコ……？」

「ムツミが信じるって言ったのはアイちゃんが信じるに値する人間だったからだよ。ムツミは今までアイちゃんと一緒だったし、バトルも何度も見て来た！」

アイちゃんは信じられるだけ何度も行動で示してきたんだよ！君の言う知略とかいうレベルでのピンチなんて！いくらでもアイちゃんは突破してきた！

ムツミはね！いい加減な気持ちで信じるとか言ったりはしない！
そうだって解った上で信じるって言ったんだよ！」

「減らず口を！君達が裏切った事実は消せまい！」

「これから勉強して挽回すればいいでしょ！アイツが！ムツミが勉強
して欲しいんだっいたらいくらでもやってやるわよ！」

アイちゃんはそれ位できるしあたしだってやってみせるわよ！」

「口だけならなんとでも言えるー！」

「……ミゾレ……あいにくだよ……」

タカコの叫びにムツミが続く。

「この程度の相手でアイちゃんは負けやしない……。ボクは信じる
……」

「また根拠のない自信かい？」

「根拠はあるよ……。集中したアイちゃんは無敵なんだ……。！ボクは
信じる……。！」

「ムツミちゃん……。タカコちゃん……」

「いい友達じゃないか……。期待にそえなきやな……。で、どうする。も
う一度おびきよせるか……。？」

「……。それなら私に考えがあります！ツチャさん！私たちの切り札と
一緒に！」

思案するツチャにアイは自信のある声で言った。

「損害は一機、向こうもやりますね。リーダー」

さつきと別の場所の岩山にいるシャルドールSCに通信が入る、

さつきアイのユニコーンが殴り飛ばしたGエグゼスJだ。殴られ
た際に頭部が吹き飛んでいた。

——クソツ、どいつもこいつも……——

「リーダー？」

「ん？あ、ああ、なんだ。ん？」

その時だった。ミゾレは一筋の光が空から降るのが見えた。光は
真っ直ぐジャングルに落ちる。まるでその場所を指し示すかの様に、

「あれは……ガンダムエックスのマイクロウェーブ!？」

マイクロウェーブ、それはガンダムエックスの切り札『サテライトシステム』を使用する為の予備動作だ。

月からのレーザー回線を機体に受信し機体や装備のエネルギーに変えるシステムである。本編では月が出ているときにしか使用できなかったがガン普拉バトルではその制限はない。

サテライトシステムにより使用出来る『サテライトキャノン』は設定上コロニーを破壊する程の威力を持つが

その破壊力が災いしてか準備の予備動作が非常に長い。その上、このマイクロウェーブはガンダムエックスの胸部にじかに送り込まれる。故に……

「ンツフツフツフ！やはり君達は無能だよ！そつちから姿を現すなんてね！これで終わりだ！」

ミゾレは狙撃しようとスナイパーライフルを構え、トリガーを弾いた、しかし……

「リーダー？どうしました？」

「おかしい……撃てない!？」

慌てて原因を調べるミゾレ、程無くして原因が分かった。

「な！なんだこれは！ランドセルとスナイパーライフルを繋ぐエネルギーパイプが！」

「!？」

そしてこちらはアイの方、マイクロウェーブを機体に受けながらツチャはアイに訪ねた。

「本当に向こうは撃てないんだな!？」

「大丈夫です！追いかける時にエネルギーパイプを撃ち抜いておきましたから！」

「そんな！まさかさつききの右腰を掠めた時!？」

「来ます！リーダー！」

「!?」

黒王号のキャノンが展開し、前にせり出す。背中のリフレクターが開き展開、正に機体名称の通りX字になる。

同時に光がひととき大きくなり背中のリフレクターが、手足の紺色の部分が、強烈な光を発し始める。

「今度こそ出てきな!このハイパーサテライトキャノンで!」

ツチャはハイパーサテライトキャノンの発射させる。その砲身から放たれた光は全てを飲み込むほど大きい。

「ぐうーうおおおっ!!」

ツチャのGポッドがガタガタと揺れる。その出力は発射している黒王号すら吹き飛びそうになる程だ。撃ちながらツチャは発射しながら機体を徐々に横に回転。

巨大なビームの濁流が周囲の木、川、そして岩山、全てを飲み込み蒸発させる、ガンプラバトルが現実でなくバーチャルな世界だからこそ出来る作戦だった。

「なーなんてー無茶な事を!」

たまらず隠れていた地点から飛び出すシャルドールSCとGエグゼスJ

「完全にやってること悪役だろうがお前ら!」

GエグゼスJのビルダーは叫び、発射中のエックスに迫る。ハイパーサテライトキャノンの発射中は止める事が出来ない為、

全くの無防備にもなってしまう。ツインビームスピアが無い為、ビームサーベルを構えるGエグゼスJ、

だがそのGエグゼスJをユニコーンがビームサーベルで迎え撃つ。

「それはごもつとも!でもね!今日は一段と負けられないんですよ!私達はああっ!」

隙を付き、GエグゼスJを両断した。

「味な真似をおお!!」

断末魔を上げてGエグゼスJは爆発。そのままユニコーンはミズレのシャルドルSCに肉薄する。

シャルドルは左腕からビームサーベルを発生させ突撃した。つばぜり合いになる二機、しかしユニコーンの方がパワーは上、程なくして押し負けたシャルドルSCは左腕を切り落とされ、そのまま地面に墜落。黒王号も丁度サテライトキャノンの発射も終わった様だ。

ジャングルだったステージは一変し、周囲は焼け爛れた焦土と化していた。

「まさか……いぶりだしにサテライトキャノンを使うなんて……」

そのままミズレはシャルドルSCを立ち上がらせ、ライフルを突きたてた。赤い空、赤い大地にユニコーンとエックスが相對する。

ユニコーンもまた、ビームガトリングとビームマグナムをパージさせ両腕にビームトンファアを展開させる。

「何故……ミヨは君達を信じる……期待を裏切つてまで……クソツ……」

「私にこんな事言える義理なんてないかもしれない……だけどそれは……」

「畜生おおおつっ!!」

「お前が言うな」そう言わんばかりにミズレは絶叫し、シャルドルSCをユニコーンに突っ込ませた。

ユニコーンも迎えうつかの様にビームトンファアを構える。

「友達だからっ!だからこそ負けられない!!」

アイは叫び、お互いの機体がすれ違いながら剣を振るう。……その後、シャルドルSCの右肩のモノアイが砕け散る。

そのままシャルドルSCは横に切断され爆発。これにより勝敗は決した。

「ゴメン!ムツミちゃん!」

Gポッドから出てすぐヘルメットを脱ぐ、そしてムツミの前に立ち

アイは頭を下げた。

「ムツミちゃんがどんな気持ちだったかも知らないで遊びほうけちゃって……」

「アイちゃん……いいよ……、もう気にしてないから……」

ムツミはいつもの落ち着いた表情だった。

「でも……ムツミも凄いわね。散々あんな風に言われてまで冷静なんだもん」

ナナはアイが勝った事もそうだが、ミゾレの回想で、ムツミが挑発を受けてなお落ち着いていたことに感心していた。

アイ自身もまた、自分が挑発に乗りやすい事は自覚している故、ムツミの冷静さを見習いたかった。

「……平気なわけないよ」

「タカコちゃん？」

タカコが二人の言葉に割って入る。彼女はミゾレの回想を聞いた時、ある事に気が付いていた。

「悔しかったんでしょ？ 合同練習の時ああ言われて」

「……うん……」

その言葉にムツミの顔が曇る。

「本当はね……凄く嫌だった。でも相手にするだけ向こうは味を占めるって解っていたから……だから必要以上に言い返そうとしなかった……」

でもアイちゃんやタカコがユニコーンを作ったって言った時……自分勝手だけどヒカワ君の言った事が正しかった様に思えて……」

悔しかった気持ちを溜め込んでいたのだろう。ムツミの眼尻に涙が溜まる。

「それで頭に血が登っちゃって怒ったってわけね」

「ムツミちゃん……」

「ええい！ しんみりしちゃってえ！」

そんな雰囲気をもつミゾレの大声が遮った。

「今回君が勝てたのは助っ人のツチャ・サブロウタが持っていたサテライトキャノンがあつたからに過ぎない！ あれさえなければ僕が負

ける筈が……」

かなり悔しそうなのが声の大きさから解る。タカコはそんなミズレを見ていて気になる事があった。

「ねえねえミズレ君、もしかしてムツミの事が好き？」

「!?」

「はあ?!」

ツチャの発言にビクツ!とミズレは体を強張らせる。その向こうのムツミも大きく驚いた。

「な!何を言ってるんだ!突拍子も無しに!」

「いやだつてさ、あたし達を挑発してまでムツミの気を引きたかったんでしょ?何というか。好きな人には意地悪したくなるというか。」

後その人と仲良くしてる奴に嫉妬したとか、ムツミここに呼んだのもいい所見せたかったつて感じかな〜つて」

正直な話、タカコのカンだ。しかし今までの態度や行動がムツミの気を引きたいというのなら、意地悪したいというのならとりあえずの説明はつく。

そもそも彼の考えている事と行動が矛盾しているからだ。

「フーフナー!なんでも恋愛に結び付けようとする!やはりミヨの友達にはロクな女がないいな!」

顔が赤くなつてる。凶星な様だ。そんなミズレの顔を見たムツミは……

「え?いや……無理……日頃の行いの……」

心底嫌そうな顔で切り捨てた。

「なあっ!!」

嘘だ!とでも叫びそうな顔で固まるミズレ。

「いや……だつて散々やっておいて好きだとか言われても……」

「え!ええい不愉快だ!負けたならここにはもう用はない!帰るぞ!」

ムツミに指を指しながらミズレは更衣室に入る。すぐさま着替えてその場から去ろうとした。

「あ!待ってください!リーダー!」

「ヤタテ・アイ！」

涙目のミゾレは去り際にアイを指さす。

「いいか！この次はこうはいかないぞ！」

そのままミゾレはチームメイトを引き連れ去って行った。そして観戦を果たしたギヤラリーも帰って行った。

「ボクの方こそゴメンね……元はと言えばボクが勝手な理由で怒っちゃったから……」

ムツミは申し訳なさそうにアイ達に頭を下げた。

「ムツミちゃん……いいよ。私達に責任あつたんだし」

「そだよ。おかげで疑問が解けてスッキリしたよ」

「タカコ、君も有難う……。庇ってくれた時心強かつたよ……」

「気にする必要ないよ。付き合い長いもん。ま、今回は雨降って地固まる、だね」

「アンタが言わない」

ナナがタカコに突っ込みを入れる中、今回の功労者にもアイは礼を言う。

「ありがとうございますツチャさん。ツチャさんのおかげで勝つ事が出来ました」

「いや、気にしないでくれ、君の作戦のおかげだ」

「でも内心は本当ヒヤヒヤもんだつたんですよ。サテライトキャノンがなかったらどうなっていたか……」

「謙遜する必要はないよヤタテ、サテライトキャノンが無くとも君は勝利出来ただろうさ。俺はもちろん、コンドウさんもそう思うだろう」

ツチャは自信を持ってそう言った。

「……確かに奴の実力は本物か……」

ギヤラリーの一人だったセキラン・ライタが呟く。そして彼もアイの実力を認めた様だ。

——だとしてもコンドウを越えてるかどうかは別だ。奴に勝てるかな？……チーム『エデン』の『フクオウジ・マスミ』に……——

そのライタの言う相手とのバトルが、アイの運命の歯車を回す事に

なるとはアイ自身知る由も無かった……。

「それじゃ早速帰って勉強会しようよ」

「え?!待ってよアイちゃん、その前にギャラリィで可愛い男の子に
インタビュー位……」

「駄目だよタカコちゃん。私以上にカッコいいこと言ったんだから
ちゃんと実行しなきゃ」

「ちえ、ま、言っちゃった以上、今度こそ期待に添える様頑張ります
か」

「フフ……」

笑うムツミ、二人のやり取りを見ながら、「この人達の友達でよかつた」そう彼女は心から思っていた。

第17話「チーム『エデン』」（ユニコーンガンダム四号機『デュラハン』登場）

「これでテストは終了だ。浮かれるのもいいが来月末は中間、その次は期末だ。これら一回一回の結果がお前たちの将来を左右するといふ事を忘れずに勉強しろよ」

担任が話を終えてクラスを出ていくと同時に教室に下校のチャイムが鳴る。それに伴いクラスが沸きあがった。

今日で実力テストが終わったのだ。一部テストの結果に不安ある者は沈んでいたが……。

「やったねタカコちゃん！これでやっとテストから解放されたよ！」

「いや〜ホントホント、テスト終わってこんな安心するの初めて〜」

生徒が教室を出て行く中、教室後ろで立ちながら談笑するアイとタカコ、表情はほっこりした笑顔だ。実際いつもだったら先程言った沈んでいるパターンが常だったが……。

「やつほ二人とも、機嫌いいじゃない」

「あれだけ特訓したんだもの……。それ位出来てもらわなくちゃね……」

手ごたえがあったのか聞きたかったのだろう。ナナとムツミもアイ達の所へ来た。

「あ、二人とも、勉強有難う！」

「ちゃんと勉強会であつたところがバツチリ出て助かったよ〜」

「いやいや……。ちゃんとあの過密スケジュールについてきた二人の頑張りだよ……」

そう、あれから二週間、アイとタカコはナナとムツミにみっちり勉強でしごかれた。深夜までやるのは当たり前。

時には勉強する家を変えて、寝泊りした事もあった。それでもアイとタカコはやり遂げた。

「ま、あく言ったからにはね。きっちりやっとかないとカッコ悪いでしょ」

「フフ……頼もしいかぎり……」

「とにかくこれで肩の荷が下りたよ。これでガン普拉も出来るしね！」

アイの眼は爛々とガン普拉が出来ることへの喜びであふれていた。かなり今まで我慢していたのが皆には解った。

「いつになくテンション高いわね。ま、溜め込んでたのはアタシも同じだしね。帰りに寄ろつか。実はすでにガン普拉持ってきてるよ」

「やったあ！」

「二週間ぶりに復活だね。アイちゃん」

「好きな事に突っ走る。それでこそアイちゃんだよ……」

好きな事に熱中してこそアイは一番輝く、そう二人は実感していた。

……

そしてアイとナナは山回商店街の模型店『ガリア大陸』に場所を移す。ムツミとタカコは今日部活の無い。

そして店内二階にさしかかった時だ。

「待っていたよ。アイちゃん」

聞き覚えのある声があった。アイは声のした方を見る。

「あなたは……確かハガネ・ヒロさん？」

栗色のくせ毛の髪、ややガツチリした体格、数週間前、ゼイドラでアイに挑戦してきた大学生ビルダー、『ハガネ・ヒロ』だった。

「ん？なんか見ない顔もいるけど？」

ナナがマスミの横にいた人間に気付いた。二十歳位の女性だ。シャギーのかかったミディアムボブの茶髪が目につく。温厚そうな女だった。

「あ、自己紹介が遅れちゃったわね。わたしは『フジミヤ・レム』ヒロ達とは同じ大学、同じチームなの」

「ここに來たって事は大方アイとバトルがしたいって所ですか？」

ヒロが挑戦してきてからアイに挑戦するビルダーが何人も現れた。いつもアイの横で見てるナナにとつては見慣れた光景だ。

「そうだね。でも今日戦うのは僕じゃない。アイツさ」

ヒロが後ろの観戦モニターを指さす。モニターの中で黒いガンブラが戦っていた。

全身が黒く塗られた機体、それは……

「ユニコーンガンダム二号機、『バンシイ』ですか」

バンシイ、『機動戦士ガンダムUC』に登場したユニコーンガンダム二号機だ。全身が白いユニコーンガンダムとは逆に黒く塗られている。

それとは対照的にマスクと襟、そして額の一本角が刺々しいデザインになっており何より金色に塗装されているのがユニコーンとの違いだった。

といっても画面に映っていたのは装甲の閉じたユニコーンモードだったが、アイのユニコーン、デストロイモードとは違う形態だ。

更にそれは改造されており、追加パーツとしてビルドブラスター Mk-IIという支援機のパーツが組み込まれていた。

両腕にはシールドと一体化したビームライフル、背中にはジェネレーター、右には大型ビームキャノン、左にはミサイルポッドという重武装機となっていた。

モニターの中のバンシイはブラスターで都市の高速道路上を低空飛行する。

その上空から敵が二機襲う。『ガンダムOO』に登場したジnkクスIIIという機体だ。接近戦だけでなくライフルとしての機能も持つ馬上槍『GNランス』が特徴だ。

ジnkクスは一機ずつバンシイを挟み込むようにして上からGNランスを撃つ。ビームを受け破壊される高速道路、

しかしバンシイは軽やかに上空に上がる、ジnkクスと同じ高さに達すると両腕を左右に広げビームライフルを発射、

両方のジンクスⅢはランスを盾にビームを防御しようとする。しかしビームはたやすくランスを貫通、ジンクスⅢの股間、コクピットを貫いた。

そのバンシイの挙動に見ていたアイは驚愕する。バンシイが着地した直後、リーダー機であろう最後のジンクスⅢが現れる。

「よくも仲間を！」

リーダーのジンクスⅢは怒りを露わにGNランスからビームを乱射する。しかしバンシイは後方にステップをかけ回避、そのまま左のミサイルポッドを全弾発射、

煙を引きそれぞれのミサイルはジンクスⅢに命中、

「ぐあつ……！」

よろけるジンクスⅢ、そのままバンシイは右肩のビームキャノンをジンクスⅢに向ける。

「受けるがいい……！光血の洗礼を……！サングイスツ！！ルーメン！！」

バンシイのビルダーが叫ぶと同時にビームキャノンは発射される。ビームの濁流はジンクスⅢを飲み込みそのまま爆発、バンシイは無傷のまま三機に勝利したのだ。

「凄い。なんて無駄のない動き……」

「……いやアイ、なんか今変な叫びが聞こえたんだけど」

呆気にとられるアイと、叫んだ技名に「変だ」と思ったナナ、すぐにバトルの終わったGポッドからバンシイのビルダーが出てきた。

それから同じくGポッドから出てきたジンクスⅢのビルダーと挨拶をかわすとアイ達の所へ戻ってきた。

「やあ、来てたのかいヤタテさん」

黒いパイロットスーツを着たビルダーがアイに気付くと挨拶をする。その青年にアイは見覚えがあった。

「フクオウジさん！」

以前ヒロと戦った時、一緒にいた青年だ。少し伸びた黒髪を一本に纏めた中性的な青年、それが彼、フクオウジ・マスミだった。

「調子いいみたいね」

「うん、万全さ。これでベストな状態で戦えそうだ」

レムの問いにマスミの言葉、その意味をアイは簡単に予測できた。「ということとは……次に戦うのは私って事ですかね？」

「その反応を待っていたよ」

ニツと自信に満ちた笑みを浮かべてマスミは答えた。

「余程自信があるって事ですわね……全力で行きますよ」

バンシイの動きからしてマスミが並のビルダーではない事はアイには解っていた。それでもアイに勝負を拒否する事は出来ないしアイ自身そんなつもりは一切なかった。

「ヤタテ・アイー・行きますー！」

母艦から出撃するアイとユニコーンガンダム、今回の武装は左腕に竜の爪を思わせる装備がついていた。

『アームドアーマーVN』、高振動により相手を破壊する接近戦用装備だ。普段左腕に付けているアームド・アーマーDEは干渉する為、右腕に移動させられていた。

今回のステージは『ニューホンコン』機動戦士Zガンダムで登場した大都市だ。周りにいくつも立ち並ぶ50メートル以上はある高層ビル群。

その間にある道路をアイのユニコーンは飛ぶ。二車線ずつある大通りは十数メートルで表示されるガンプラの肩幅以上の広さだ。

「ん!？」

真正面、大通りの向こうで黒い影が見える。マスミのバンシイだ。

「自分から姿をさらすなんて!」

アイは右腕のビームマグナムを構えてバンシイに向け撃つ。豪快な音と共にビームマグナムが発射されバンシイに向う。

「フッー」

不敵に笑うマスミ、バンシイは右肩のビームキャノンを発射。赤いビームはビームマグナムのビームにぶつかり激しいスパークが起こ

る。

「避けるわけじゃなくて相殺しようって?!」

スパークに眼を覆いながらアイは叫ぶ。光が止むとアイはチカチカする目に我慢しながらバンシイの姿を確認する。が、バンシイはその場にいない。

直後、Gポッドに警告音が響く、

「クッー」

アイは左腕のホルダーを展開、ビームトンファアを構える。上からバンシイがビームサーベルで斬りかかって来る。

迎え撃つアイのユニコーン、二機のビームがぶつかり合い激しいスパークが起こる。

「ボクのサングイスルーメンを相殺するなんて大した腕だよ！普通のビームマグナムより威力は高いって事か！」

「塗り分けは徹底してますからね！」

答えながら右腕のアームドアーマーDEを振りかぶる。アイはバンシイを殴りつけようというのだ。

「いいバトルが出来そうだ！」

すばやく後退するマスミのバンシイ、すぐさま高層ビルの向こう側へと隠れた。

「このー」

アイはバンシイが隠れたであろう高層ビルをビームマグナムで撃つ。ビームを受けたビルの部位は蒸発、そしてたやすくビルが倒壊するがバンシイの姿はいない。

直後別のビルの向こう側からバンシイがジャンプして姿を現す。同時に両腕のビームライフルを撃ってくる。

「ちよこまかとー」

アイは横にステップをかけると再びビームマグナムで反撃した。

「前のジャングル焼きはらった時もあったけど、いいのかなあ。あんな風に建物壊しちゃって」

観戦しながらナナがぼやく。

「やあハジメ、ヤタテの応援か？」

ナナに後ろから声をかける男がいた。振り向くとそこにいたのは……

「あ、オッサン、皆」

コンドウ、ツチャ、ソウイチ『ウルフ』の三人だ。

「やあコンドウさん、久しぶりだね」

「ご無沙汰してますコンドウさん」

ナナに続き、ヒロがコンドウ達に挨拶をする。その瞬間、コンドウ達は固まった。

「ヒロと……レム……？てことは」

「そう、アイちゃんの相手はマスミだよ。本人がやりたいって言うてきたからね」

観戦モニターを指さしながらヒロは微笑む。

「じゃあ……勝てないツスよ……ヤタテさん……」

「？アサダ、いきなり何言ってるのよ」

訂正させようとするナナ、それにソウイチは答えた。

「理由があるツス！だってフクオウジさんは……チーム『エデン』のフクオウジ・マスミさんは！コンドウさんが勝てなかったビルダーなんすから！」

ユニコーンとバンシイの戦いは、ビル群の中を並行し飛びながらの撃ち合いになっていた。

二機とも距離を保ち、高速で飛びながらの射撃戦。しかし一瞬、二機の間を一際大きい高層ビルが過ぎた瞬間、バンシイの姿はユニコーンの眼の前から無くなっていた。

「上かー！」

アイが上に眼をやるとバンシイは上からビームサーベルを構え降りてくる。

「うおおっー！」

「ならカウンターをー！」

アイは左腕のビームトンプアーを展開させ迎え撃つ。上下で激し

いスパークが起こった。

「パワーだったらデストロイモードのこっちの方が上ですよっ！」

アイはそのまま左腕のアームドアーマーVNを振動させる。このままパワーで押し切りバンシイのボディを引き裂こうというのだ。

鏢迫り合いの為振動がバンシイに伝わる。

「チッ！古人曰く、『三十六計逃げるに如かず』か！」

バンシイは早々に離れるとその場から後退する。ユニコーンはアームドアーマーDEを背中に装着、ブースターとして展開、そのまま追いかけた。

「待ちなさい！」

「しつこいなっ！」

バンシイは一瞬振り返ると背部ミサイルランチャーをユニコーンに撃つ。

「なんの！」

アイは背部に付けたアームドアーマーDEの先端部のビームキャノンを発射、ビームはミサイルを飲み込み爆発させる。爆風のなかを突っ切ったユニコーン

そしてバンシイは最初と同じ様に、通りの距離を開けた場所でこちらへ両腕のビームライフルを撃ってくる。

だがかわせない射撃ではない。ユニコーンは回避しながらバンシイの懐へと飛び込む。

「もらったあっ！」

「っ！」

懐に飛び込んだユニコーンはビームトンファーでバンシイを薙ぎ払う。

しかし……

「えっ!?!」

アイは自分の感じた違和感を口にする。機体を切った手ごたえが無い。バンシイの姿が消えていたのだ。

どういう事だ？と一瞬思案するアイ、だが次の瞬間、Gポッドに警告音が響くと同時に……ユニコーンの両太腿が切り落とされた。

「?!な……んで……?!」

ユニコーンはそのままだ道路へ墜落し、勢いは止まらずその先にあるビルへ頭から突っ込んだ。

「フツ。甘いね」

マスマミの声だ。見るとバンシイは両足を180度開脚させた状態で座っていた。そして手にはビームサーベル

さつき斬られる瞬間、開脚させビームトンファーを回避、直後にユニコーンの太腿を切ったというわけだ。

「どういう事?!バンシイの股関節が横にあそこまで曲がるはずが!」

「コイツの股関節を見てごらん」

「間接?あ!」

両足を失ったユニコーンは両腕を使い、ハイハイの様な恰好でバンシイに向く。そしてユニコーンの目を通し、

アイはバンシイの股関節を見て絶句した。バンシイの足の付け根の部分にはHGU Cのメガガンダムの肩関節が組み込まれていた。

股関節に肩関節を使用したのだからあそこまで曲がるのはなんら不思議ではない。

「この改造により『間接可動性』『工作精度』が増し、ボクのバンシイ改造機『デュラハン』はパラメータが強化されてる!」

そのままバンシイは両腕のビームライフルをユニコーンの両肩に撃ちこむ。ビームはユニコーンの両型を貫通し両腕をその場に落としました。

「そんな!こんな簡単に!」

「古人曰く『備えあれば憂いなし』!このバンシイ……いやユニコーンガンダム四号機『デュラハン』は二号機、バンシイと一組になって運用される筈の機体だった!」

実際はバンシイ一体で要求されていた性能は事足りる事からペー

パープランで終わった幻の機体という設定だけどね！」

「え……う？」

いきなりマスミがガンプラのオリジナル設定の話を持ってくる。心なしか声のトーンが上がっている。テンションが上がってきてるのだろう。

「しかしユニコーンのストーリーが終わった後、地上、宇宙のジオン残党を殲滅するべく建造されたという設定さ！」

この機体のモチーフはズバリ、タペストリの『山羊』だ！その為実際に実戦に配備された場合あまりの強さに『バフオメットに魅入られた』と噂する者まで現れたという！」

ユニコーンガンダムはフランスのタペストリ『貴婦人と一角獣』に描かれた動物からとられている。マスミのデュラハンもタペストリに描かれた山羊からとられたという設定だ。

……タペストリに描かれた山羊の位置は左上……ただのモブ扱いの動物なのは内緒だ……

「え……え……う？」

「さらにガンプラバトルでは再現できないが、コイツの特徴はデストロイモードへの変形の際に現れる！装備そのものもサイコミュ、つまり脳波コントロールで

デストロイモード専用の装備が母艦から射出され装備を切り替えることが出来るのさ！」

熱を入れて自機の設定を語るマスミ、しかし聞いてるアイは何故こんな時に、と戸惑う。

「……ねえ、あんなんで本当にオッサンが勝てなかったビルダーなわけ？」

観戦していたナナがツチヤに問いかけた。マスミの実力はアイのユニコーンの惨状を見ればわかった。しかしああやって設定語りするあたりどういうわけか納得がいかない。

「納得できないかもしれないがその通りだ」

「オリジナルにああやって設定つけるのも多いの？」

オリジナル設定、一部ではオラ設定と呼ばれる。ガンダム作品に関する知識のないナナにとっては未知の領域だった。

「そうだな。オリジナルにオラ設定つけるのは珍しくない。皆好きな活躍シチュエーションを思い浮かべたりして作るからな」

「でも、正直言つて痛いだけツスよあれは、あの人がコンドウさんに勝ったつてのがイマイチ納得いかないツス」

答えるコンドウに反して面白くなさそうにソウイチが呟く。

独自設定は自分が楽しむ分にはいいが他人には受け入れられない事もままある。それは元から練られた作品設定に独自のものをねじ込むからとも言われている。

「だいたい無理があるツスよあんな設定、邪気眼か中二病ツス。もつと控えめにガンダムの世界観にすり合わせたものつけばいいのに、あんな設定つけたつて笑われるだけツス」

「中二病、ある程度成長して知識が備わり自分をもっと良く見せようと空回りする事、邪気眼は自分の作った設定に没頭しすぎて現実でもそれに基づいた行動をとってしまう事だね」

「?!」

ソウイチの発言にモニターの向こう側のマスミが食いついた。口調を聞く限り、自分を否定されて不快に思ってるわけではなさそうだ。

「そしてボクのように設定が突飛なものも中二設定と呼ぶ。あいにくボクはそれを悪い事とは思わない」

「マスミさん!」

意識がソウイチに向いている。アイが「無視するな!」と言わんばかりに、手足をもがれたユニコーンをデユラハンに突っ込ませる。

残った武装は背中のアームドアーマーに内蔵されたビームキャノンだけだ。それを飛びながらデユラハンめがけて放つ。

「ヤタテさん!君も聞くといい!好きな物を好きなように楽しむのがガンプラだ。そしてそれは設定も同じなんだ!」

意にも介さない様にかわすデユラハン。

「設定はガンプラに物語を加える!いわばケーキに入れるバニラエツ

センスの様な物だ！あるとないとは大違い！」

フクオウジ・マスミ、彼は設定の強さがガンプラの強さに直結するという考えがあった。デュラハンの様な突飛な設定も好む。

「強い設定によるビジョンはガンプラバトルにも直結するとボクは思う！」

右肩のビームキャノンユニコーンへと向ける。まるでこの一撃がその証明だと言わんばかりに

「それを見てる全員、心に刻むがいい!!」

そしてマスミはビームキャノンを発射、マスミが『サングイスルーメン』と名付けた赤い光の濁流はユニコーンに真っすぐ向かう。

「っ!!」

すぐさまアイは急停止し反転、背中のアームドアーマーで赤い光の奔流を受けた。

「くっ……この威力は……」

背中のシールドで防ぐもそれは最初だけの話、デュラハンのバックパックジェネレーターに直結されたビームキャノンは強力だった。

少ししてビームはアームドアーマーを貫通、ユニコーンは背中からビームで貫かれる。

「これが……コンドウさんも倒した実力?!うああっ!!」

アイはユニコーンの破壊される音を聞きながらマスミの実力を思い知った。

そしてユニコーンは爆散、今回はアイの敗北となった……。

「眠れ、紅き光に包まれて……」

「ガンプラにおいて自分がつけた設定は立派なアイデンティティだ。ボクはね、ガンプラのポテンシャルは改造だけでなく設定にもあると思っっているんだよ」

バトルが終わった後、マスミはアイ達に自分のガンプラの信念を語って聞かせた。

「それを恥ずかしがっておいてはその潜在能力を引き出すことなんてできない。

実力を持って筋を通せばそれはバトルに現れると思うんだ。その為に強いビルダーでありたい、これを馬鹿にするビルダーはひとり残らずかかってこい！って気位でね」

「少なくとも相変わらず強いのは解ったツス」

自信を持って答えるマスミにソウイチは否定的な意見を言うことは出来なかった。

「大事にしてるんですね。自分のガンブラ」

アイはマスミに対して驚いた部分もあったが、今はマスミの実力を認めていた。

「じゃあ次はさ、わたしとバトルしてくれないかな」

次にフジミヤ・レムと名乗る少女が出てきた。マスミとアイのバトルを見ていたら熱が出てきたようだ。

「え？」

「レムさん!?大丈夫なの？」

驚愕し問いかけるマスミとヒロ

「何大袈裟に驚いてるのよ二人とも、なんかマスミとアイちゃんとのバトル見てたら火がついちやっただ」

そして彼女が対戦したいという相手を名指しする。その相手とは

……

「君がバトルしてくれないかな」

「え？ア・アタシ？」

目をつけたのはナナだった。

「うん、アイちゃんと協力してコンドウさんと戦ったんでしょ？君とならいいバトルが出来そうな気がするな」

「あ、まあ……挑戦されるのって慣れてないけど……よろしくお願ひします」

自分が挑戦されるとは思ってたようだった。少し照れながらナナは準備の為更衣室に入って行った。それにレムも続く。

「ツチャヤさん……どういいうつもりなんスかね……」

「さあ、わからん……」

理解できない、そんな顔でナナとレムの二人を見つめるツチャとソウイチ、アイはその言葉がなんなのか気になった。

「?なんでですか?何か気になることでも?」

「あのフジミヤ・レムという女の子はな、彼女も俺が適わなかったビルダーということだ」

「え?」

コンドウの反応に耳を疑うアイ、マスミだけでなく二人もコンドウに勝つビルダーがいたという事だ。

「なんでハジメさん選んだかはわかりませんが……何秒持つスカね、ハジメさん」

しかし五分後……

「やったーアイ!アタシ勝ったよ!」

ナナが勝利に喜んでアイの元へ駆けつける。その横ではコンドウ達が勝負の結果に啞然としていた。

「なんで……ハジメさんがあんな簡単に勝ったんスカ……」

そう、意外な事に勝負はあっさり片が付いた。ナナのストライクが対艦刀を振り回すとレムの機体はビームサーベルで受けようとする。

が、対応が遅れた為に簡単にレムのガンプラは斬り裂かれた。

「たはは……駄目だった……」

「レム……」

駆け寄るヒロとマスミ、レムと戦闘経験のあるコンドウは不審に思った。最もそれはウルフ全員とアイに共通した疑問だったが。

「何かあったのか、フジミヤ……」

「コンドウさん……」

「お前は勝負に手を抜くようなビルダーじゃない。ハジメも筋のいいビルダーだがお前なら圧倒出来たはずだ」

「良く解るね……スランプなんだ、わたし」

それからフジミヤ・レムは話した。ある日急に勝てなくなった事、それでもバトルに対する熱意は変わらずこうして頻繁にバトルを見学しに来るといふ事を。

「前に僕がアイちゃんとかバトルした事を話したら、フジミヤさんは喜んでくれてね、今回のバトルにどうしても見に行きたいって付いてきたんだ」

「そうだったんですか」

「まだ本調子じゃないけどじきに実力を取り戻して見せるわ。その時はバトルしてね。アイちゃん！」

レムに対しアイは「はい！」と答えた。越えるべき壁がまた増えた。アイはその事実に関心を燃やしていた。

……

「今日は楽しかったね」

マスミ達三人は横一列に並び商店街を歩きながらバトルの余韻を話す。

「そう言ってくれると嬉しいよ。フジミヤさん」

建前か本心かはわからない、だが笑顔を見せるレムにヒロは安堵した。

「ヤタテさんもあれで終わるビルダーじゃないだろうね。ボクの方も腕を磨いて置かないと」

「……その時には……わたしも本調子に戻ってたらいいな……」

レムの表情が曇る。今の実力を出せない自分に対して不安を感じているのだろう。このままずっとスランプなんじゃないか、という、アイの前ではああは言ったが結構このスランプは長引いている。レムの心の中では焦りを感じていた。

「フジミヤさん……大丈夫だよ。きつと」

励ますヒロ、対照的にマスミはそのレムの表情をただ黙って見つめているしかなかった。気安く大丈夫なんて言ったら却って逆効果になると思ったからだ。

——やっぱり本心を見せるのはマスミの方なんだよな……——

ヒロはレムの自分とマスミの態度の違いを感じながら、早くレムの

スランプが治って欲しいと願うばかりだった……。

第18話「ヒロ、再び」(HGCCパーフェクトストライクガンダム&デュエルガンダムAS&バスターガンダム登場)

——その日のバトル、俺はゼクで宇宙のフィールドを飛び回っていた。対戦相手の姿はすぐに見つかった。

ガンダムAGEに登場したピンク色の丸みを帯びた機体『ファルシア』だ。

俺はすぐさまライフルの射程まで近づこうとするがそれは阻止された。あらぬ方向から細いビームが俺のゼクを襲ったからだ。

「!?!」

俺は急停止しビームの直撃は免れた。そのビームを撃ってきたのはファルシアの持つ自立砲台『ビット』だ。

五弁の花を思わせるビットは容赦なくこちらを撃ちまくってくる。

「わたしのビットからは逃げられません。これら一つ一つがわたしの手、わたしの目、わたしの指揮する演奏なんですから」

ビットと使用ガンプラを操るビルダーが呟く。そんな言葉も耳に入らず俺がビットを撃ち落そうとすれば、

別のビットが狙ったビットを守るようにこちらを撃ってくる。俺が後退しようとするれば退路を塞ぐように別のビットが撃ってくる。

統率のとれた鮮やかな動き、それはそれぞれが意志を持っているかのような。だが驚くべきはそれら全てのビットを一人のビルダーが操っているということだった……。

俺がそんな相手に敬意を持った瞬間、俺のゼクは背中を撃たれた。それに続くように全てのビットが俺のゼクを撃ち抜いた。

俺は破壊する間際、相手を見る。相手は勝利を確信しながらも、油断せず俺をただジツと見つめていた。——

「その全てのビットを操っていたのが『フジミヤ・レム』さんというわけですか……」

マスミ達が帰った後、コンドウはアイ達にレムがどういうビルダーだったか話す。

「そう、彼女はビット系の扱いが十八番だ。相手はたった一体だったにも関わらずまるで大部隊を相手にしているようだったよ」

「それがアタシが瞬殺する位弱つちやったなんてね……」

ナナが『本調子のレムだったら勝ち目はなかった』と噛みしめながら呟く。

そう、レムは重度のスランプに陥っていた。前回ナナと戦った際には得意のビットも使おうとせずあつさり斬られ倒されたのだ。

「いつかバトルしてみたいな。本調子のレムさんと」

「ああ、スランプなんてのはいつ克服するかわからないものさ。その日の為にもっと実力をつけておかないとな」

レムは、ヒロがアイのバトルを聞いた時喜んでいたと言った。それだけレム自身がスランプから脱しようとは本気だという事だ。

アイもそう言った名のあるビルダーに戦いたいと言われて答えないつもりはない。

「その為にはもっとチームの人数を増やしておく必要があるだろう。コンドウさん」

そんな三人の会話にツチャが割って入る。

「そうだな……。ヤタテ、今の状況だとチーム三人が当たり前になってくる。しかしお前とハジメでは二人だけだ。相手が三人となるとやり辛いだろう」

そこでだ。俺達を使ってくれないか？」

コンドウがツチャとソウイチを交互にみた後、アイに告げる。

「使うって……チームに誘っていいって事ですか？」

「別地域のビルダーと戦うってんなら、勝ってもらわなきゃ困るんすよ。それが二人だけなんて話にならないッス」

「ソウイチ、お前こういう時位そういう事言うなよ」

ソウイチがいつもの様に憎まれ口を叩き、ツチャがソウイチに突っ込みをいれる。

「そりゃ心強いですけど。いいんですか？私『ウルフ』と関係ないし」

「もちろんだ。一度本気でバトルした以上、仲間だと俺達は思っているからな。ビルダーの基本だろう?」

「恥ずかしげもなく言うコンドウ。だがそれはアイも思っていた事だった。」

「あはは……そう堂々と言われるとちよつと恥ずかしいかな。そう思われてるなんて……でもそれは私も同じですよ。有難うございます」
アイとコンドウ、握手をしながら

「いつでも俺達の力が必要な時はいつでも言ってくれ」と結束を高める。それを見守るツチャとソウイチ

「オツサン達が味方についたんだ。これならもっとアタシ達強くなれるね……」

「ナナも戦力増強に安心する。だが……ナナは自分の心に芽生えたある気持ちに、まだ自覚がなかった。」

——そして数日後——

「やったよナナちゃん! テスト全部70点越え!」

「あたしもあたしも〜!」

下校時刻、校庭でアイとタカコは返された実力テストの答案の束を持ちながら満面の笑みを浮かべていた。

今日も四人で下校だ。

「嬉しいのわかったからそんな見せびらかすような真似しないの」

「それにしても恐ろしいね二人とも……。どこまで持つかと思っただが見事ここまで食い下がったよ……」

「ま、あたし達が本気だせばこんなもんだよね〜」

「……そう言ったって次もまたボクを頼るんでしょタカコ……?」

「む〜言ったねムツミ。今回のテストで勉強に目覚めちゃった気がするあたしにはもうそんな心配は無用だよ!」

「随分強気になったねタカコちゃん」

「特に英語は快心の出来だったからね! 英検だろうと外人相手の会話だろうと出来そうな気がするよ〜!」

苦笑するアイとナナに『へ〜』と信じてないと反応するムツミ。そんな時だった。

「あれ？校門に誰かいる」

アイが校門の入口付近に一人の男が立っているのが見えた。ソフトモヒカンの金髪に青い瞳。

ガツシリした体型の白人の男だ。周りが日本人だらけな為か妙に目立って見える。

「あ、外国人だ。待ち合わせかな？あんな所に立つて」

「誰か探してるんじゃない？あんまりジロジロ見ちゃ悪いでしょ。速く行こうよ」

が、アイとナナが言葉を交わした時だった。こつちを見るや否やパアツと目を輝かせ凄い勢いで走ってきたのだ。

明らかにこつちを見ている。

「?!うわ!こつち来た!!」

「タカコ……会話は君に任せる……」

「え?!」

突然ムツミの指名にうろたえるタカコ

「さっき言ってたでしょ英検だろうと外人と会話だろうと出来そうって……」

「え!いや待ってあたし心の準備が!」

「よお御二方!!会いたかったぜ!!」

「あ!あいむのつとすぴーくいんぐりっしゅ!!」

ビビりすぎて唐突にへタな英語で返すタカコ。男が流暢な日本語で喋ってる事、話している相手がアイとナナだという事を理解していない。

「えと……言葉は大丈夫みたいですね。どこかでお会いしましたっけ?」

「あーわりいわりい!俺はゼデル・マツケイン!前に俺の友達が世話になったってんでさ!俺も相手してほしいって思って来たわけ!」

よく通る大きな声で喋るゼデルと名乗った男。

「ゼデル!皆来るまで待とうって言ったじゃない!何勝手に入ってん

のよー!」

その後ろからもう一人が走ってきた。今度は女性だ。栗色の髪を一本に纏め右側から前に垂らしている。見た感じ大学生位だろうか。

「おっとーすまねえヨウコ、あいつを負かした奴だからいてもたってもいられなくてさー!」

「だからってああいう警戒促す様な対応はご法度でしょ? ゴメンね。家のメンバー頭のネジが緩んでるの多いから、あたしはヨウコ、アズマ・ヨウコ」

「あ、どうも、えっと……いまいち話が見えてこないんですけど」「す・すとまつくえいくー!」

「タカコ……この人日本語喋ってるよ……」

「僕のチーム『エデン』のメンバーという事だよ。ヤタテさん」

聞き覚えのある声が出た。見覚えのある男が二人現れる。一人はコンドウ、そしてもう一人は……

「ヒロさん!」

「君と戦いたいって言ってたのはレムだけじゃなくてね。前は都合がつかなかったんだけど今回はこの二人を連れてきたわけだよ」

「それでいてもたってもいられないでコンドウさんにあなた達の学校までの道を教えてもらったってわけ」

「そういう事。いきなりで悪いけれど一戦交えてくれるかい?」

ヒロ達の申し出にアイは快く受ける。

「もちろん、やろうよナナちゃん!」

カバンからユニコーンデストロイ(以下D)を取り出す。だがナナは乗り気ではなかった。

「うーん、アタシは今回はいいかな?」

「え? どうして?」

予期せぬナナの反応に驚きを隠せないアイ。

「いや、だってさ。オッサン達のチームいるじゃない? そのメンバー入れた方が……」

「ん? あいにくだが今日は俺意外いないぞ、トシは仕事でソウイチは

テストだ」

「アイツも今試験中ってわけね」

「そういう事だよ、やろうよ」

「うん……、仕方ないか」

「おっけーべいびー！」

「しつこい……」

そして全員は場所を模型店『ガリア大陸』に移す。

ギャラリーの沸く中、緊張感に包まれたビルダー六人はバトルへと突入した。六機のガンプラが戦場に降り立つ。

「あれ？今回のステージはガンダム本編で出たステージじゃないんだ」

アイのユニコーンから離れた位置。ストライクI・W・S・P.に乗ったナナがモニター表示を見て呟いた。今回のステージは『山回町』だ。

アニメ本編でのステージが数多く再現されている中当然オリジナルステージもある。

周りは大きさのまばらなビルだらけの一方、畑や田んぼ等、このステージはアイ達の住む街山回町を忠実に再現したステージだった。

「まさか地元をモデルにしたステージがあるなんてね」

「そうだねナナちゃん。ガンダムに乗りながら日本語の看板を見るのってなんか新鮮に感じるよ」

数あるガンダムシリーズでも日本を舞台になった事はあまりない。ユニコーンに乗ったアイがビルの上の看板を見てるその瞬間、ポッドに警告が走る。

ナナのストライク目掛け上空から散弾が雨の様に降ってきた。

「うわー！」

シールドを構えしのぐナナ。撃ってきたのはヨウコのバスターガンダムだ。ガンダムSEEDに登場した遠距離用の機体だ。

「よつとー！」

バスターは上空から道路に着地、その横を一機の機体が突っ切る。

目指すはナナのストライク

「援護は任せたぜ！ヨウコ！」

「あーはいはい！皆のフォローはいつもの事！いつてらっしやい！」

ストライクめがけ突っ込んできたのは、ゼデルのデュエルガンダムAS、こちらもSEEDに登場した機体でバランスの良い汎用機だ。

ゼデルの乗ったデュエルは『アサルトシユラウド(AS)』というスラストーや火器を内蔵したアーマーを装着していた。

「おおりゃああ!!」

ゼデルは雄々しく叫び、デュエルのビームサーベルを振りまわし襲ってくる。

「くっ！」

ストライクの対艦刀で応戦するナナ、だがその隙を付き、ストライクめがけバスターの長距離ビームが向けられている。

「甘いわね！これで！」

「まずい！ナナちゃん！」

バスターの一撃を防ごうとナナのストライクの前に出ようとするアイ、だが……

「心配する必要はない！ヤタテ！」
「!？」

コンドウの声だ。声と同時に一機の機体がバスターガンダムに横から斬りかかる。バスターガンダムは横に回避、

機体はその場に着地し姿を現す。二頭身の体型に西洋甲冑の様な姿。それは……

「二頭身……あれって……」

「騎士(ナイト)ガンダムだ！」

騎士ガンダム、二頭身のガンダム『SDガンダム』のバリエーションのひとつでファンタジーを模した作品の主人公だ。

異世界『スダ・ドアカワールド』に降り立った勇者、それがコンド

ウの機体だった。

「コンドウか！戦ってみてえな！」

ゼデルのデュエルは罅迫り合いのストライクを弾き飛ばすとコンドウに真つ直ぐ向つていった。

「来るか！ヤタテ！デュエルは俺に任せろ！お前はバスターを！」

コンドウの声が聞こえる。そのままコンドウは機体をデュエルに向け飛ばす、否、ジャンプする。

「レジェンドBB！まさか騎士ガンダムが相手とはな！相手に取つて不足なああし!!」

「鎧を着込んだ者同士！尋常に勝負!!」

デュエルのゼデルもビームサーベルで迎え撃つ。電磁ランスとビームサーベルの激しい応酬が始まった。

そしてアイはユニコーンでバスターに向き直り、ビームトンファアを構え突撃する。接近戦装備のないバスターではこれを防ぐ手だてはない。

「ビームトンファアか！あたしはちよつと部が悪いかな？」

「ヨウコー！なら僕が！」

後方から一体の機体があつ込み、バスターの隣を通り抜けた。HG CEのストライクガンダム、それもエールストライカーにソード、ランチャーを全部乗せした機体、

パーフェクトストライクだ。対戦艦刀を構えユニコーンに迫る。ユニコーンはビームトンファアで受け止める。

「パーフェクトストライク!？」

「そう！再戦の為に用意した自信作だ！」

その勢いはパワーの高いユニコーンでも押される。しかしそのパーフェクトストライクを横から一体の機体が体当たりをかます。

派手に吹っ飛ばすパーフェクトストライク。

「アイ！大丈夫!？」

「ナナちゃん!」

「アイと戦う前にアタシと戦いなさいよ!」

ナナのI・W・S・P.の対艦刀を振るう。ヒロもパーフェクトストライクの対艦刀でそれを受け止めた。

声からしてナナの必死な気迫が伝わる。

「ストライクV Sストライクか!」

「アタシだってやってみせる!アイ!ここはアタシに任せて!」

そう言うのと二機のストライクは飛び去る。HGストライクは二振りの対艦刀、HG C Cストライクは一本の対艦刀で飛びながら斬りかかっていった。

「くうっ!基本性能だったら負けて無いはず!」

「スランプとはいえレムを倒した相手!油断は出来ない!」

その場で残ったのはユニコーンとバスターの二機だ。

「つたく……皆好き勝手なんだから……」

ヨウコはポッドで呆れたように言う。皆のフォローをすることは言ったが正直皆好き勝手に動きすぎる。こういう場合ヨウコが必ずしわ寄せを食うわけだ。

「まあ……、予想の相手とは違っちゃったいましたが……こちらも全力はつくしますからね」

「そうしてくれるとありがたいわ、接近戦装備がなくとも……」

ユニコーンDはビームマグナムを構える。バスターもまた両腰の銃を構えた。

「やられるつもりはない!」

アイがビームマグナムを撃つ間際、バスターは左腰の火線ライフルを撃つ、ライフルはユニコーンのすぐ右にあるビルに当たりユニコーンDの目線で小規模の爆発を起こす。

「わっ!」

「スキありっ!」

その隙を付きバスターはライフルを連結。散弾砲を撃った。

「くうっ！」

右腕のシールドで防ぐアイのユニコーンD、負けるものかとアイも右腕のビームキャノンで撃ち返す。しかし一定の距離を保ちつつバスターはかわす。

「射撃武器だけでも手ごわい！」

「当然！せつかく一対一なんだから！楽しみましょ！」

アイ達が戦ってる一方、コンドウ達もビルの並ぶ大通りで激しく斬り合っていた。

「やっぱり強ええなアンター！」

騎士ガンダムと斬り合うデュエル、ゼデルは接近戦だけではラチがあかないと一度距離を置く。そしてアサルトシユラウド右肩のレールガン『シヴァ』とビームライフルを撃ち込む。

騎士ガンダムは着弾地点から素早く前転しそれをかわす。

「お前さんこそ！」

コンドウは騎士ガンダムの剣をフリスビーの様に投げた。回転しながら剣はアサルトシユラウドのシヴァの根元を切り裂く。

「うおっ！そうかい！そうかい！！そう来るかい！！だったら！！」

最高に楽しそうに叫ぶゼデル、直後デュエルは上空に飛び上がりアサルトシユラウドをパージする。

騎士ガンダム目掛け落ちるアサルトシユラウド。更にデュエルはビームライフルとグレネードでパージしたアサルトシユラウドを撃った。起こる爆発。

「ぬうっ！」

爆風で見えなくなるコンドウのモニター、

「こいつで！！どうだああ！！！！」

デュエルはそれにビームサーベル二刀流で斬りかかった。爆炎の中に騎士ガンダムの盾が見える。そのまま二振りのビームサーベルが盾を貫いた。

だがそこに騎士ガンダムの姿は見えなかった。

「何!?どこだ!!」

「ここだ!!」

「!?あの姿は!?」

デュエルの後ろに騎士ガンダムはいた。ただし四本足のケンタウロスモードになっていた。この高機動の形態で爆風を利用し、デュエルの後ろに回っていたのだ。

「見えなかったのは!俺の方って事か!」

「そういう……事だあ!!」

騎士ガンダムは背中にマウントしていた電磁ランスでデュエルの背中を貫いた。

「面白かった……ぜええっ!!」

デュエルは敗北し爆散。悔しそうな、だが楽しそうなゼデルの叫びが響いた。

「凄い凄い!やっぱコンドウさん強いよ!」

外のモニターで観戦していたタカコが叫ぶ。コンドウの実力はアイがコンドウと戦った際に良く知っていた。

「この調子なら楽勝みたいだね」

「それでもないよ……」

ムツミは冷静にナナとヒロのバトルしているモニターを見ながら呟いた。

コンドウとゼデルが戦っていた場所から少し離れた場所、空中戦をしていたストライクも勝負はつきそうだった。

「どうだああ!!」

ヒロが横に対艦刀を大きく振るう。ナナは受け止めようと二本の対艦刀で受ける。

「くっ！うううう！！」

お互い渾身の力を込める。が、勝負はじきについた。二本持っていた対艦刀は弾き飛ばされストライクは腹部を両断、と言いたいところだが対艦刀を弾いた勢いで

ナナのストライクの場所もずれてしまった。ナナのストライクは両ももを切り落とされた。

「そんなっ！」

「駄目押しだ！」

そのままヒロのストライクはランチャー、アグニを構えナナのストライクに撃つ。

「くっ！」

ナナは回避できないと悟ると右腕のシールドで防ごうとする。しかしアグニはシールドを貫通。

「うああっ！！」

撃ち抜かれたナナのストライクは黒煙を上げ

パーツをばらまきながら落ちていった。墜落はしたがまだ撃墜扱いになってはいないようだ。

「ナナちゃん！」

ナナが撃墜寸前なのはアイも理解できた。

「こうなったら速くナナちゃんを助けにいかなきや！」

ユニコーンは左腕の巨大な爪、アームドアーマーVNを構え正面のバスターに突撃した。

「近づかせるもんですか！」

左右はビル、ヨウコはバスターにユニコーンを近づかせまいと後退する。だが突然後ろにあった何かにぶつかった。

「え?!」

勢い余ってその場に尻もちをついてしまうヨウコのバスター。

「何!?!さっきまでなかったのに!」

自分のつまづいたものを確認するヨウコ、そこに突き刺さっていたのはさつきストライクのばらまいた対艦刀だった。

「嘘お!」

「隙あり!!」

その隙を付き、ユニコーンのアームドアーマーVNはバスターを貫く、高振動の爪はバスターの体を容易く引き裂いた。

「こんな情けない形で負けるとはね……」

爆発するバスター、そのままアイはユニコーンをナナの所に向かわせる。

「ハジメさん!覚悟!」

墜落したストライクI・W・S・Pにアグニを撃ち込もうとするパーフェクトストライク、だがそれはビームキャノンに阻まれる。

「ヒロさん!」

「ヤタテさんか!」

ヒロはナナに眼もくれずアイのユニコーンへと飛び去ってしまった。

「とどめをささない?!眼中にないってわけ!?!」

ヒロのストライクはアグニを撃ち込むと同時にアイもユニコーンDのビームマグナムを撃ち込んだ。ビームはぶつかりまばゆい閃光が戦場を染める、

「くっ!眩しいな!」

「これだけじゃないぞ!」

対艦刀でユニコーンで迫るパーフェクトストライク、ビームトンファーで迎え撃つユニコーンD、だがヒロは休む暇のない程対艦刀を連続でたたき込む、

「くっ!なんて猛攻!」

「間接強化でパワーは上げてある!ユニコーンにだって負けていないさ!」

ヒロはそう叫ぶと一際大きい一撃をユニコーンに叩き込んだ。ユニコーンはその力強さにひるむ。前回からかなりヒロは鍛えているようだ。

「このままじゃジリ貧！」

アイに緊張感が走る。だがその瞬間、パーフェクトストライクの背中に爆発が起こった。何かがパーフェクトストライクの背中に撃ちこまれたのだ。

「なんだ！」

撃つたのは後方で倒れたままのストライクI. W. S. P.、それの115mmレールガンだった。まだ一門だけそれが使用可能だったわけだ。

「今よ！アイ！」

「うおおっ!!」

その隙をいついてアイはアームドアーマーVNでパーフェクトストライクの腹部を両断した。

「アンタの相手はアタシでしょうが!!」

「……因果応報……か。……すまない……」

ヒロは邪険にされたナナの悔しそうな声を聞き、そのままパーフェクトストライクは倒れ込み爆発。これにより勝負はついた。

「いや〜！面白かったぜ！またバトルしようぜ!!な！な！」

バトルが終わるや否や、ゼデルは満ち足りた笑顔でアイ達にかけ寄る。その笑顔は邪心の無い子供の様だった。

「いやあ、そこまで喜んで頂けるなんて……」

「ゼデルは前、僕がヤタテさんとバトルした時に都合がつかなかったからね。今日の日を楽しみにしていたんだよ」

ゼデルのテンションをヒロが説明する。

「そういうえば……、マスマさんも含めたらチーム全員になるんですか？」

「そうね。マスマとレムを含めた五人があたし達チーム『エデン』ってわけ」

アイの疑問にヨウコが答える。

「今度はマスマミの奴が都合つかなかったんだけどな。残念だぜ」

「あ、その事だったらマスマミが何か『克服するいい物が見つかった』とか言ってたわよ」

「克服ですか？」

「うん、『レムに渡す』って言ってた。とはいえ結構頑固なスランプだし効果が出るかはわからないけれど」

「アズマ、フジミヤ・レムの調子も相変わらずなのか？」

レムのスランプを心配したのかコンドウがヨウコに問う。

「まあね、色々試して入るんだけど……」

「さっき言ってたそれがいい結果を出してくれるといいな。そしていつか全員でバトルしたいものだ」

……

「またな！今度はもっと腕上げてくるぜ！」

「チーム戦でも実に充実したバトルだったよ。悔いがないわけじゃないけどね。また勝負しよう」

「あくあ、こいつらに粘着されちゃったわねあなた達、ま、あたしも楽しかったしまた戦ってくれると嬉しいな」

挨拶をそれぞれかわし、チーム『エデン』は帰って行った。

「いや〜復帰初日から濃い人たちだったね〜」

「うん……でもちゃんと勝って良かったよ……」

「でも山回町でバトルしたって事は外でたらバトルの通り町が壊れたりして〜」

「ライトノベルじゃあるまいし……」

タカコとムツミが勝利に安堵する中、ナナは自分の戦績に納得がいかなかった。

「アタシ、あんまり活躍できなかったな……」

結果を気にしているというのはアイも解った。ナナがさっきの会話に全然入ってこなかったからだ。

「そんな事ないよ。ナナちゃんいなかったら恐らく負けていたし」

「でもさ、あそこでハガネさんを止められればあんなにヒヤヒヤする事もなかったんじゃない？アタシとしてはさ。もつとアンタと並んで戦える位に実力つけたいよ」

「そんな事はないさ。お前はきちんと自分の出来る精いっぱいをやっていたよ」

コンドウがナナにフォローをいれる。きちんとナナの実力を認めた言い方だった。

「コンドウさんもありがとうございます。今日のバトル、助かりました」

「いやいや、気にするなヤタテ。また俺達の力が必要になった時は言ってくれ。俺達ウルフ、いつでも力を貸そう」

「ありがとうございます！」

アイは心強い味方が増えた事、そして自分たちが仲間なんだと改めて認識した。そしてそれが嬉しかった。

——じゃあ……アタシの居場所は……？——

……だがナナの心に小さな焦りが浮き彫りになっていた事、それをアイはもちろん、ナナ自身もまだ知らなかった……

第19話 「ぶつかる壁」(ジャスティスガンダムセー
トウン & ガンダムアストレアFR2 登場)

強くなりたい……ナナはそう思ってた。ナナがガンプラを、ガンプラバトルを始めてだいぶ経つ、今まで趣味らしい趣味がなかったナナにとつて、ガンプラは初めて熱中できる趣味だった。

バトルには出さなくとも作るガンプラも増えて来たし、バトルも勝つ経験も増えてきた。それでもナナにアイ程の実力はない。

それでも彼女は自分がサポートで役に立てるならそれでかまわないと思っていた。

だけど……最近はその気持ちも変わってきた。コンドウに勝ったことにより、実力あるビルダーが何人も挑戦してきたからだ。

加えて、ウルフのメンバーが助っ人としてアイに協力してくる。

それはナナも有難いと思っているのだが、彼らの強さは知つての通り。見ていると自分の今の立場が危うくなってしまうのは明白だ。

そうならない為、もつと実力をつけたいと思う様になってきた。

ナナ本人は気付いてないが、これはいわゆる部活で自分がレギュラーメンバーから外される焦りの様な物だった。

「ナナちゃん……？ねえナナちゃん」

「え？」

「大丈夫？なんかブーツとしてたよ？」

「イメージしてたんじゃないの？次のバトルで使う戦闘パターンとか」

「調子悪いんじゃないの……？」

上の空のナナにアイが声をかける。そして呑気なタカコの声、ムツミを加えた四人がいたのは模型店『ガリア大陸』のガンプラ売り場の前だ。

きっかけはナナが次にバトルで使う機体を選びたいからと寄つたのだ。

「あーうん！大丈夫だよ！次のバトルで使う機体どれにしようか迷っ

「ててぎー！」

慌てて弁明するナナ、

「何かあらかじめ決めていたんじゃないんスか？」

「いいじゃないか。次のバトルの相棒を決めるわけだし」

今喋ったのはソウイチとツチャダ。店内で出会ったコンドウ達も含めて今ナナの周りには六人集まっていた。

模型店の通路に男女六人が集まる光景はなかなか異様かもしれない……

「しかし……いざ選ぶほうとしても悩むもんね……」

「いっそ、HGから外れてみるか？」

コンドウが棚から一つのガンプラを取り出す。そのガンプラは……

「あ、フリーダムガンダム」

ナナが食いつく。

そう、リアルグレード（RG）の『フリーダムガンダム』だ。『ガンダムSEED』の後半主人公機で青い翼と翼に内蔵されたビーム砲、両腰のレールガンが特徴の細身ながらも高火力、かつ高機動の機体だ。ガンダム作品に馴染みのないナナも、

十年前にガンダムSEEDを見ていた為フリーダムは知っていた。

「レースの時RGのスカイグラスパーも作ったお前だ。RGフリーダムもお前なら使えるんじゃないか？」

コンドウの言葉を聞きながらナナは考える。

「うーん、そうは言っても……」

歯切れの悪い反応だ。コンドウはその反応が気になった。

「？嫌いか？フリーダムは」

「ううん、そうじゃないのオッサン。フリーダムってアニメ本編凄く強かったからさ。アタシにそんな強い機体使いこなせるかなって……」

フリーダムガンダムは高速移動と、一度にいくつもの敵機を一度に狙い撃つという芸当が特徴の機体だ。

ナナは自分にそんな動きが出来るのかと不安だった。

「なーにお前ならスジは悪くないさ、実力も徐々につけてきたしこいつでも乗りこなせるさ」

「そうだよ。ナナちゃんは何度も私を助けてくれたもん」

今度はアイがナナに言う。

「アイ……アタシ別にそんな役に立ってないよ？」

「そんな事ないよ。サバイバルでのコンドウさんとの戦いも、この前のヒロさんとのバトルの時もナナちゃんがいなかったら負けていたもの」

「そうだよ……ナナ……君は自分に出来ることをちゃんとやっている……全部なんかいきなり出来やしないもの……」

アイのフォローにムツミが加わる。アイもムツミも今までのバトルで理解していた事だ。

「アイ……ムツミ……」

「失礼、あなたがヤタテ・アイさんですか？」

その時、突然アイ達に話かける人物がいた。長身の少女だ。ウエーブがかかったシルバーブロンドが目を引く。

左右にはそれぞれビルダーらしき青年がいた。

「そうですけど……あなたは？」

「失礼、ワタクシはチーム『サターン』のビルダー、名前はサツマと申しますわ。まだ高校生でしてよ」

右手には扇子が握られている。大人びた雰囲気がありお金持ちの令嬢といった感じだ。

『サターン』？この辺じゃ聞かない名前だな？最近できたチームかい？」

ツチャが首を傾げるとサツマが答える。

「まあ…あなたは『ウルフ』のツチャ・サブロウタさんですわね！あなたとお会い出来るなんて光栄ですわ！」

「は…はあ……どうも」

眼を輝かせ迫るサツマにツチャはたじろく。

「お答えしましょう。ワタクシ隣の県から来ましたの。ヤタテ・アイさんにどうしても用がありました」

「そんな遠くから？用ってなんですか？」

「あなたをワタクシのチームに迎えたいんですの！」

手に持った扇子でアイを指すサツマ、

「チームに?!そりゃ私はまだチームに入っていないフリーだけど……」

「ワタクシはヤタテ・アイさんの実力に感服いたしましたわ!ワタクシは向こうでは相応に実力あるビルダーです!アイさんを迎えればワタクシのチームは更に強くなれますわ!」

「……ちよつと待つてよ!隣の県からでしょ!?!そんな遠くからチームに入れるなんて無理があるわよ!」

ナナが止めに入るとサツマは答える。

「あら?でも実力あるビルダーがチームに入るのは自然な事ですわ。実力者同士がチームを組めれば激戦や大会でも勝ち抜く確率は高くなりましょう?」

「そりゃ……そうだけど……」

「高校の部活動でもそうでしょう?競技の実力ある中学生をその高校に特待生として迎え入れる。実力者は実力ある場所に誘われて然るべきですわ」

「折角ですけど、誘ってくれるくらい認めてくれたっていうのは嬉しいんですが……」

「あら?駄目ですか?」

「ええ、チームは組んではいいですけど今私はこれで満足していますので……」

「でもあくまで今は……でしょう?その内今の周りの実力では満足出来なくなりますわ。自分一人が強くとも、

周りが見合った実力を持っていなければそれはいり合いは取れませんか」

「!」

ビクツとナナの体が震えた。コンドウがサツマを止めに入る

「なあ君、ヤタテはちゃんと断ってるんだ。ちよつとしつこくないか?それに初対面でそういう決めつけは正直失礼だろう?」

「あ……これは失礼いたしました。熱が入ると止まらなくなってしまう性分です、ではこれだけなら聞き入れて下さいませんか？」

「なんででしょうか？」

「記念にワタクシ達とバトルして下さいまし、チーム『サターン』と！」

……

お互いすぐさまバトルに入った。アイのチームはナナと、助っ人として消去法でまだ組んでないという理由でソウイチの三人だ。

「いきなりバトルになっちゃったなあ、まあ向こうが記念になってくれるって言うならいいんだけど……」

ユニコーンに乗ったアイが呟く、今回のフィールドは。タクラマカン砂漠、ファーストでランバ・ラル駆るグフがガンダムと交戦した場所であり、

同時にガンダム00で刹那達が15時間戦い続けた場所でもある。そして第3話でアイと三兄弟がバトルした場所だ。

今回は同じチームでもそれぞれ離れた場所に降り立った様だ。遠くでナナとソウイチらしき二人の機体が降りるのが見えた。

「でもさ……さっきの口ぶりなら向こうも結構な実力あると思うよ？チームにアタシ組んで大丈夫？」

ナナが通信を入れる。ナナの機体はお馴染みのストライクI。W。S。P。だ

「さっきと違って弱気だよナナちゃん。大丈夫、記念って言ってたんだから楽しめればそれでいいって！」

「そう……かな」

「ナナちゃん……大丈夫？なんかバトルに消極的になってない？」

「え？……そんなことないよ？……！ごめんアイ！敵が来たから切るね！」

ナナが通信を切る。見通しのいい砂漠だ。ナナはすぐ敵を見つけた。背中にリフターを背負った機体。トサカの長い機体。

「ジャステイス!?でも色が全然違う!」

『ジャステイスガンダム』ガンダムSEEDに登場したフリーダムガンダムの相棒的存在だ。

背中に飛行ユニット『ファトウムー00』を背負っておりこれを使用した飛行や遠隔操作、連携が持ち味だ。

今ナナの目の前にいるジャステイス。通常の赤いジャステイスと違い紺色に塗装されており。

足はキュリオス、左肩はリゼルの物に変えられており、リフターは重武装、そして大型化していた。

「この機体はジャステイスであってジャステイスではありません。悪魔と土星の二重の意味を持つ機体『ジャステイスガンダム・セートウン』とでもしておきましょうか!」

サツマがジャステイスガンダム・セートウンを自分の誇りであるかのように説明する。

「アンタ!?サツマっての!」

「あなたは先程ヤタテさんと一緒にいらした……『ウルフ』に女性メンバーがいらしたとは存じませんでしたわ」

「どうやらサツマはナナがビルダーである事は知らなかったらしい。

「アタシは違うよ!アイの付添いで友達!」

「そうでしたの。よく見れば確かに機体の工作は基本的な物ばかり……ではあなたからもヤタテさんにワタクシのチームに入ってくれるよう頼んでいただけませんか?」

「しつこいよ!アイは嫌だって言ってるんでしょ!」

そう言うとナナはストライクI W S Pの対艦刀を右手に、左手にコンバインシールドを構え突っ込んだ。

「まあいいでしょう。ウオーミングアップとしてお相手願います!」

ナナに興味なさげな反応をしながらも、サツマのジャステイスガンダムセートウン(以下セートウン)もビームライフルを尻にマウント、両手にビームサーベルを構える。

リフターの背後が火を噴くと共に物凄い勢いでセートウンが突っ込んできた。

「は！速い！？うわっ!!」

二刀流にストライクの対艦刀は容易く弾かれる。セートの改造は飛行突進力を重視した改造なのだ。

反面この改造だと飛行の安定性が悪くなるが彼女はそれを操縦技術でカバーしていた。

「このセートウン、伊達に自ら大口を叩いてるわけではありませんわ！反面あなたの実力はまだ未熟！」

なおも追い打ちをかけようとするサツマ、ナナは残りの対艦刀で迎え撃とうとする。

セートウンは舞う様に両手のビームサーベルで斬りかかる。ナナはどうにかセートウンにダメージを与えようとするも

ストライクの斬撃はセートの剣捌きに切り払われる。

「くっ！アンタの緩慢でアイをチームに引き込もうとしないでよ！」

ナナが叫ぶと同時に左腕のコンバインシールドをセートウンに向ける。先端についたガトリングでセートウンを撃つ。

「緩慢？では聞きますが……あなたはヤタテさんの背中を守るだけの実力はお持ちなのですか？」

が、ナナが撃とうとする直前、ガトリングはセートウンにたやすく切り落とされた。

「?!」

「こう言っではあれですが……あなたのレベルはヤタテさんに釣り合いません。差が大きければいずれそれはヤタテさんの墓穴となってしまいますわ」

サツマは全く余裕を崩さない。

そして実力差と言葉に動揺したナナの隙を突くかのようによろしくイクの対艦刀を右手ごと斬り落とした。

「あっ！」

「くわえて今はヤタテさんに挑戦者が次々と現れてる状況！あなたがいる事とワタクシ達のチームに守られてるのではどちらがやりやす

い状況かは分かるのではなくて!？」

セートウンはストライクの腹部を蹴り飛ばす。後方に吹っ飛ばすトライク、

「うあ……!？」

振動するGポッドに顔をしかめるナナ

そのままサツマはストライクを撃ち抜こうと、セートウンの左肩のビームキャノンにストライクに向けた。

「そんなことありませんよ!？」

その時白い機体がストライクを庇い、セートウンのビームキャノンにアームドアーマーDEで受け止めた。アイとソウイチの二人が駆けつけてくれたのだ。

「どうにか間に合ったツスね!？」

「アイ!アサダ!？」

「ナナちゃんがいないければ負けていた勝負もありました!？」

「まあ!待っていましたわヤタテ・アイさん!やはりあなたとでなければここへ来た意味ありません!？」

「アタシじゃなくてアイを相手にする気!?アタシだって加勢すれば……!？」

「ここまで相手はいなかったツスよ!そっちもチームを揃えたらどうスか!?それとも三対一で勝負する気ツスか!？」

「せっかちですわね!でも大丈夫!こちらにも到着してくれたようですわ!？」

雲一つない空から数条のビームが飛んできた。かわすアイ達、サツマのチームメイトの二機だ。

片方は台座のような支援機、ベースジャバーに乗ったヤクトドーガギユネイ機。もう片方はフォビドゥンガンダムだ。

ヤクトドーガは『逆襲のシヤア』に登場した機体、ずんぐりむつくりの体型と頭部のモノアイの上に鳥の目の様な目が描かれていた。

両肩に遠隔操作型兵器『ファンネル』を六期搭載してるのが一番の

特徴だ。

そしてフォビドゥンガンダムは『ガンダムSEED』に出てきた敵のガンダム。大鎌とひっくり返したお椀の様なバックパックが目を引き。

このバックパックは頭部に被るように装備し、敵のビームを曲げる事や自分のビームを曲げて敵の意表をつく戦法が可能なトリッキーな機体だ。

「どうやらちゃんと相手はいるみたいっす！」

ソウイチの機体は赤いアストレアFにエクシアリペア2の手足を組み込んだ『アストレアFR2』だ。

ガンダムアストレアは『ガンダムOO』に登場したガンダムエクシアの試作機だ。ソウイチはそのアストレアにエクシアの改修機のパーツを組み込んだわけだ。

フォビドゥンはアストレアを誘うように撃ってきた。難なくかわすソウイチ

「俺と遊びたいんスカ?!いいでしょう!やるからには勝つツスよ!」

右腕のGNソード改を展開し、そのままフォビドゥンに飛ぶアストレアFR2、

一方ナナの方の相手はヤクトドーガ、両肩からファンネルを展開しストライク目掛けて撃ってきた。

「!くっ!上等よ!アタシ一人でも倒せるって!アタシにも実力があるって証明してやるんだから!」

手負いながらも強気なナナ、

ファンネルのビームを翼に掠めながらも、負けじと115ミリレールガン撃ちながら迎え撃つナナ。

「ナナちゃん!待って!ビームサーベルもナシに!」

少し離れた場所でナナの心配をするアイ、

「礼儀がなっていないですね!他人の心配とは!」

「チッ!」

アイはユニコーンのビームサーベルをストライクに渡す方法を考えたが、

目の前のセートウンに隙を作ってしまう事になる為渡せない。現にセートウンの猛攻は早く、そして激しい。

かく乱するかのように周囲を動き回り、ビームサーベルのレンジ外からビーム砲を撃ってくる。

「速い！」

「当然です！重量は増しましたが！リフターの出力は倍以上上げた仕上がりですもの！セートウンの意味は悪魔と土星！」

土星エンジンを積んだジャステイスという設定と能力はツダですら追い越せますわ！」

「そして重い！」

隙を付き、ビームサーベルで決定打を与えようとするセートウン、とっさにビームトンファーで受けるアイ、加速がついた分セートウンの押しは強く、

ついにユニコーンを弾き飛ばした。大きくバウンドするユニコーン。セートウンは勢いそのままにユニコーンに追い打ちをかけようとする。

しかしその隙をアイは待っていた。

「だからってこっちもただ突っ立てるだけじゃない！」

アイは弾かれ、崩れたままの大勢で、セートウンが曲がりきる地点を狙いユニコーンのビームマグナムを撃った。確かにセートウンの突進力は高い、

だが反面小回りが利きづらく急カーブがやり辛いというデメリットがあった。大型のビームはセートウンに向かう。

「っ!?!味な真似をしますわねえ!!」

サツマは機体への負荷を承知で目いっぱいレバーとペダルを動か

し、セートウンに急停止をかける。止まったセートウンのリフター右側面にビームマグナムのビームが掠める。

ライフルの四倍ものビームマグナムの出力により片方のエンジンは爆発し、セートウンはバランスがとれず飛行を維持できなくなる。

「しまった！リフターを！」

「小回りが効かないってのは、直線的なスピードを強化した機体によく見られる短所ですよ！」

「不覚！でもやはり素晴らしい腕ですわヤタテさん！やはりアナタはワタクシのチームに欲しい人材です！」

バランスを崩し、砂漠の大地に落ちながらサツマはまくし立てた。

「さつきから同じ勧誘ばかり！しつこいですよ！今のチームで……友達とのチームで満足しないんですか!？」

アイは接近戦に持ち込もうとビームサーベルを抜く、そのまま砂漠の大地で斬り合う二機、

「友達ではありませんわ！ワタクシのチームはあなたと同じ様に勧誘し、作り上げたものですもの！」

「なんですって!?!じゃあ他のメンバーも勧誘して!？」

「そう！かつてはワタクシも友達とチームを組んでいました！その中でワタクシは全国一のビルダーを目指し！精進してきました！なのに！」

友達はそこまで高い志は持たず！そこそこの腕で満足していたんですの！」

「それで自分だけチームを抜けて!？」

「その通り！ビルダーである以上、あなたも憧れているガンプラマイスターはいらっしゃるでしょう!？」

その方と同じ領域に踏み込むには自分だけ強くなっても意味はありませんもの！

自分個人が強くとも！周りが釣り合うレベルでなくては強者はなりましたませんわ！

だから解るんです！あなたも周りの彼女！ハジメ・ナナさん！彼女のレベルではいずれあなたの足を引っ張るだけですわ！」

「ナナちゃんをそんな風に言うな！！前半は一理あるかもしれないけどね……だからって……友達をそんな事に言われても腹が立つだけですよ！」

「体験談ですもの！ワタクシの！！」

つばぜりあいながら二人の叫びが響いた。そのまま二機は一度離れる。

「くそっ！さつきから全然当たらないよ！」

「中々やるっスー！」

こちらはナナとソウイチの方、こちらも各々で戦っていたのだが今回の敵のレベルは高く、ソウイチと……特にナナはファンネルにより苦戦を強いられていた。

「どうやらヤタテさんへの援護は厳しそうツス……こっちはこっちで相手をするしか……」

「そんな……最初の相手に邪険にされてサブの相手にもかなわないなんて……」

ナナの焦りはどんどん大きくなってきた。心の中が悔しさでいっぱいになってくる。

——あなたはヤタテさんの背中を守るだけの實力はお持ちなのですか？——

自分が、置いて行かれる様な不安がどんどん大きくなる。

——あなたのレベルはヤタテさんに釣り合いません。差が大きければいずれそれはヤタテさんの墓穴となってしまいますわ——

自分の所為で足を引っ張る……自分だって頑張っているのに……

「なんでよ……」

サツマに言われた事が決定打だった。不安と焦りはどんどん膨れ上がり、そしてナナはもうそれを抑えることは出来なかった。

「なんで！なんでよお！！」

突然我を忘れたかのような絶叫が響く。ナナは叫びながらレール

ガンを撃ちまくった。

「!?ハジメさん!？」

「アタシだって!アタシだってえ!」

「落ち着いてください!ハジメさん!」

アストレアFR2でフォビドウンの攻撃を凌ぎながら、ソウイチがナナを通信でなだめる。

しかしナナは聞く耳を持たず乱射しまくった。

散漫的な射撃はヤクトドーガに難なくかわされ、逆にファンネルで撃ち返される。回避を忘れたナナはストライクの左肩に攻撃を受け左腕を破壊されてしまう。

「あつつ!」

「冷静になってください!ハジメさん!」

被弾の衝撃で少しは冷静になった様だ。

「うっ!ゴメン!...あっ!?!」

その時、ナナは自分の撃ったレールガンがどこに飛んだか気付いた。ヤクトドーガの後ろにはアイとサツマが戦っていたのだ。

「アイ!逃げて!!」

「ストレートならスピードはそっちが上!...でもこっちだって反応速度なら対応できる!」

「地上戦ならば、損傷していてもこのファトゥムはまだまだ使えますわ!」

再びアイの方、ユニコーンとセーントウンが共にビームサーベルを構え立っていた。そのままお互いバーニアを吹かし肉薄する二機、だが突如アイのGポッドに警告音が響いた。

「えっ!?!」

予期せぬ方向からレールガンが飛んできたのだ。レールガンはアイのユニコーンのすぐ傍に着弾、

「うわっ!!」

爆発し砂を大きく撒きあげる。直撃はしなかった物の、その瞬間アイは全神経がそっちにいつてしまい。その場に留まってしまった。

「隙ありー」

そしてその隙を、サツマは逃さなかった……目の前に迫るセートウ
ンのビームサーベル。

「しまっ……!!」

アイが言い終わらないうちに……セートウンのビームサーベルは
アイのユニコーンのコクピットを貫いた……

「ヤタテさんが……負けたんスカ……?!」

「ア・アイイイイ!!」

ソウイチが茫然と眩き、ナナの絶叫が響く中、リーダー機が倒れた
事により、アイ達は敗北した……

「残念でしたわね、あの時邪魔が入らなければあなたが勝っていたの
かもしれないのに」

「流れ弾が来ることだってあります。運も絡むって事ですよ」

「でも……これで解ったでしょう?強いビルダーには強いビルダーが
必要なんです。あなたにはワタクシが必要という事ですわ。

もう一度言いますわ。ワタクシのチームに入っていただけないで
しょうか?」

「出来ませんよ……記念で戦うって言ったハズです」

「そう……では仕方ありませんね、でもまた誘いにきますわ。その時
はいいお返事を待っています」

ペコリと頭を下げるとサツマは他のビルダーと去って行った。ア
イは見送るとナナを見る。ナナはただうつむいていた。

「ハジメさん!アンタが出しゃばんなきや今日のバト……」

ナナに文句を言おうとするソウイチ、だがソウイチの目の前をコン
ドウの手が遮った。

「コンドウさん……」

ソウイチの隣、ソウイチと同じ向きを向いたコンドウはソウイチに
顔だけ向け、無言で首を振った。

「ナナ……ちゃん……」

「ゴメン……アイ……アタシの所為で……」

ナナの声が震えている。その心は負けた悔しさと、自分が敗北を招いてしまった自己嫌悪で一杯だった。

「大丈夫だよ。また今度頑張れば……」

「でも……アタシ……アタシ……」

その場にいた誰もがナナにかけてあげる声が見つからなかった……。少女は声を殺して、ただ泣いていた……。

第20話 「好きになれた理由」(アイ VS ナナ)

「いってきます」

学校に行くべく自宅を出たアイは、ナナの家の玄関を見る。いつもならナナが待っているか、ナナの方から迎えが来るかのどっちかのハズなのだが、

その日はまだ姿を現していなかった。

——ナナちゃんは……まだ来てないか。昨日の負け方……まだ落ち込んでるのかな……——

アイが負けた昨日、落ち込んだままだったナナは話しかけても力なく答えるだけだった。

いつも社交的で積極的なナナがああなるとアイも内心穏やかではない。昨日の事をナナが精神的にひきずってないかアイは心配だった。

ナナの家に入って呼び出そうとアイはする。その時……

「アイ！おっはよー！」

「うわ！ナナちゃん!？」

元気よく扉が開きナナが出てきた。

「どしたん？そんな驚いて」

「え？ああうんゴメン、昨日落ち込んでたからさ、まだそのまま引きずってないかなって思って」

「なーに言ってるのよ、たかが一回の負けじゃない。それで何日もウジウジするなんてありえないでしょ?」

「まあそうだよね普通」

「ハイ、それじゃあこんな所でくっちゃべってないでさっさと学校行こうよ!」

そう言うとナナはいきなり駆け出した。

「わ!もう!待ってよナナちゃん!」

アイも置いてかれないようにと追いかけた。この時アイは「一晩寝たら立ち直れたのかな?」と思っていた。あくまでこの時は……

……

そして学校は省略して放課後、帰路についたアイ達は商店街を歩いていた。

昨日の所為でナナが何か問題を起こしたかといえどそんな事はなく、表面上はいたっていつも通りだった。

「無一文の人が大富豪に、『お前なんか金のない悔しさが分かってたまるか』って言ったんだって。大富豪はなんて言ったと思う？」

『そっちこそ金のある苦勞が分かってたまるか』、って答えたんだって。フフツ、面白いと思わない？」

ナナが自分で言った冗談に口を押さえる。自分で言っただけで受けるのだ。

「あ、……うん、そだね」

力なく答えるアイ、内心『どう反応しろと?!何かの皮肉?!』と聞いていた。アイの隣にはずっと笑顔のナナがいた。

表面上はいつも通りといったが、むしろ文字通り表面が問題だった。

そしてそのアイとナナの後ろ……、薬局入口のマスコット人形に身を隠す二人がいた。

「まずいよアレ!絶対昨日の事響いてるよ!」

タカコが小声で前方のナナへの違和感を口にする。

「あんな変なアメリカンジョーク言うなんてナナらしくないよ……。今まであんな風になった事ないもん……。やっぱり虚勢張ってるんだらうねあれ……」

元々控えめに喋るムツミが更に控えめなトーンで喋った。商店街はこの二人の通学路ではない。

しかし気になってアイとナナの後ろを追跡していたわけだ。

アイ、タカコ、ムツミの全員がナナの様子に強い違和感を感じていた。

表情の柔らかいナナではあるが、今日のナナは無理して笑顔を作っている感が強すぎた。まるで笑顔が顔に張りついているかのようだというのが全員の感想だった。

「おかげで一緒に食べた昼ごはんも食べた気がしなかったよ。ずっと

とあの顔なんだもん。なんか空気張りつめてたし」

「ナナにとつても昨日の挫折みたいな体験、慣れてないだろうからね……。ナナ自身もどうすればいいかわかってないんだと思うよ……」
ムツミ自身、ナナが今のままではいけないと感じていた。

「とはいえ……。こうして尾行してはいるけど、見てるだけとなると……。どうしたもんか……」

そしてアイとナナの方に話を戻そう。

アイはナナに対し気まずさを感じながらも昨日の事を聞きだそうとした。今日は一言もガンブラの話をしていない。

アイは内心、聞いたらまずいんじゃないかと思いつつもおそろる口にしようとす。しかし……

「ねえアイ、今日なんか随分とよそよそしくくない？」

ナナの方から切り出してきた。

「もしかして昨日アタシが負けたので変な勘繰りいれてた？」

「……うん、そりゃあね、なんかいきなりテンション変わり過ぎなんだもの」

この流れになったらもう物怖じする必要はないな、とアイは心の内を言う。

「アンタねえ、時間一晩あったのよ、涙も引くし、これからどうすべきかぐらい自分で考える時間充分あったわよ」

丁度、模型店『ガリア大陸』の前を通った時にナナは歩を止めた。その時、今日初めてナナの表情が真剣な表情に変わる。

「……ナナちゃん……？」

「アイ……アタシさ……。昨日負けて思ったんだ。やっぱりアタシ、アンタと共闘するにはまだ早すぎるんじゃないかってさ……」

「え？」

ニツとナナが笑う、本能的に空気をもう少し明るくしようとしたのだろうか。しかしどこか寂しげだ。

「昨日サツマと戦った時、アタシの不注意で負けちゃったじゃない？
また今度もそういうのあったらマズいし、」

そういう時一緒に戦うのは控えようかなって思ってた。あ！ガン
ブラ辞めるってわけじゃないから安心して！」

「そんな……負けることは珍しい事じゃないよ？ナナちゃん実力つけ
てきたじゃない」

「でもそれは素人的に……でしょ？挑戦者とかと比較したらさすがに
アタシのレベルじゃ不利になるって」

「でもそれじゃチーム組む相手もいなくなっちゃうよ」

「大丈夫だよ、オッサン達がいるじゃない。あの三人と組んだ方が確
実でしょ？」

「でも私、ナナちゃんと組みたいし……楽しみたいよ」

そうアイが言った直後、ナナの顔がクシャッと歪む。

「……アタシだって……」

「え？」

「……アタシだって同じだよ……それ……でもさ……でもさ！仕方な
いじゃない！皆！強いんだよ！」

オッサン倒したアンタにあんな自信満々で挑んで来る位強いんだ
よ!?!アタシじゃ歯が立たなかった！全然！現にアタシの所為でアン
タ負けちゃったじゃない！」

眼尻に涙を浮かべ、ナナはまくしたてた。震える声には自分への無
力感が込められていた。

「でも……負けても楽しめれば」

「それで自分の力も出し切れずにボロ負けしたら楽しいなんて言えな
いじゃない……！それもアンタの脚を引っ張る形で……！」

「それは……」

その時だった。向かい合う二人に声をかける人物がいた。

「やあ二人とも！いい所に来てくれたね！」

「!？」

「!?!ハセベさん!？」

短髪に丸眼鏡、そして作業用エプロン。声の主はガリア大陸の雇わ

れ店員、ハセベだ。

「いや実は今日Gポッドのサーバー定期メンテの日なんだけどね、終わったはいんだけど確認で誰かにガンプラバトルやってほしくて、ビルダーが丁度いなくてさ、是非二人でバトルしてほしいんだけど！」

「え？でも今日はそういう気分じゃ……」

「アタシも……」

「お願い!!」

必死に頼み込むハセベに二人は顔を見合わせた……。

「で、結局ガンプラバトルになると……」

ナナはGポッドの中でぼやいた、あの後もハセベがどうしても折れず、しぶしぶ二人は了承する事になった。

「一応……バトルやるかもしれないって思ったからガンプラ持ってきてたけどさ……あのオッサンの態度……どう見てもアタシ達をバトルさせてアタシの考え変えようって魂胆じゃん……」

ブツブツ文句を言っていると目の前のカタパルトデッキが開く、今回の母艦はガルダだ。『Zガンダム』に登場した空中輸送機。

全長317mにも及ぶその形状は翼を広げた巨大な太った鳥を思わせる。

「無理があるわよ。お互い殴り合えば分かり合えるとも思ってるの？一昔前の少年漫画じゃあるまいし……ま、いいわ。行ってみますか。ハジメ・ナナ、ストライク、出るよ！」

グチグチ言っても仕方ない、ハセベの言う通りという事にしよう、とナナは操縦桿を握りしめ、ガルダから飛び出した。

「うわっ！何この吹雪!?!」

出撃直後、目の前が吹雪で真っ白になる。今回のステージはキリマンジャロ基地、常に吹雪の吹き荒れるキリマンジャロ山のステージだ。登場作品はガルダ同様『Zガンダム』だ。

「アイは……!?!」

こう視界が悪いと敵を捉え辛い。飛びながら周囲を確認する。そ

の時、Gポッドに警告音が響く、自分の視界にビームの弾が飛んでくるのが見えた。

「くっ!？」

真正面から飛んできてくれて助かったとストライクのシールドを構える。

付近にビームは着弾。それによる爆発を防ぐナナ。

「ユニコーン……アイー!」

爆発で巻き上げられた雪と泥をかぶりながら、ナナは前方を見据える。

吹雪の中、アイの機体が姿を現した。ユニコーンガンダムだ。

右腕にビームマグナム、背中にアームドアーマーDE、左腕に二丁のビームガトリングを装備している。いつも通りの装備だ。先程のビームはアームドアーマーから発せられた物だ。

「まさか……このタイミングでナナちゃんと戦う事になるとはね……」

アイの声もやや沈んだ感じがする。こんな時にバトルする事に気まずさを感じてるようだ。

「手は抜かないでよ!やったら嫌だから!」

アイが迷ってるのはナナも分かっていた。でもそれで手を抜かれるのはナナ自身尚更嫌だった。

「わかってる!」

そう言うとユニコーンは一度飛び上がる、ビームガトリングでストライク目掛けてを撃ってきた。盾を前面に構えビームガトリングを防ぐ。

そこからビームライフルを構えユニコーンに撃つ、ユニコーンはそれをシールドで受けると背中のアームドアーマーDEからビームキャノン撃つ、

「アタシが沈んでると思って変に気を使わないでよ!却って嫌だわ!」

「気を使ってなんか!」

「ビームマグナム使っていないのが気を使ってるってんでしょ!」

単発ずつで撃たれるアームドアーマーのビームを回避するストライク。そのままナナはストライクのビームライフルを投げ捨て、対艦刀を抜きユニコーンに突撃。

ユニコーンも左腕でビームトンファアを展開、ストライクを迎え撃った。重なる剣がスパークが起る。

——ここでナナちゃんに手を抜いてもナナちゃんは更に怒らせるだけ……かといって全力でナナちゃん倒しても更にナナちゃんの自信を無くす……どうすれば！——

『こう思ってるって事はやっぱりナナを弱いと自分は思ってるのか……』アイは自分で分析する自分の心に自己嫌悪しながらもユニコーンの腕に力を込めた。

「うーん、熱くなってるねナナ」

アイとナナの対戦を見ていたタカコはいつもの調子で感想を述べる。周りにはコンドウ達ウルフのメンバーもいた。彼らもナナが気がかりだったのだろう。

「……どういう事ですか……？これって……」

ムツミはコンドウ達に問いかける。

「作戦だよ。バトルさせてこうやってお互い本音をぶつけさせようってわけだ。いい勝負をすればハジメも自信が戻るはずだからな」

コンドウは真剣な調子で答えた。

「本当にこれが実を結ぶと思ってるんですか……？」

周りを見渡してムツミは言う。確実ではない為納得いかないという事だ。

「ミヨちゃんじゃないがコンドウさん。俺もこのバトルは納得いかない。ハジメに自信をつけさせるっていつでも荒療治になるとはどうも俺は思えないよ」

ムツミに続いてツチャも乗り気ではない。その場にいた半分が今回のプランに懐疑的だった。だがコンドウは堂々とした態度を崩さ

ない。

「いや、俺はこれがベストだと思う。普通のビルダーをぶつけるよりは強いビルダーと戦わせた方がいい。少なくとも親しいビルダーだ。本音を吐き出させる条件としてはいいハズだ」

「無茶苦茶ですよ……」

反対の意思表示として渋い顔をするムツミ、だがその相方は別の受け取り方をしていた。

「あたしは賛成だな」

「タカコ……?」

「ナナ、泣いていたよ? ナナにとってそれほど好きだって事だもん。だったらなおさら自信つけてほしいもの。ああやって自信なくしたら自分で挑んで克服するしかないもん」

先程と打って変わって真剣な調子でタカコは答えた。ムツミは考える……自分も昨日のナナみたいに陸上やスポーツで壁にぶち当たることもあった。

それで立ち直るには自分で挑み自信をつけるしかなかった。ナナもその時の自分と同じ感じなのだろう。と

「言いたい事は解りました……でもアイちゃんとかじゃ差が大きいですよ……。アイちゃんの相手になるんですか……?」

「ハジメは筋は悪くない。自信さえあれば昨日みたいな事はないだろうし、現状でもヤタテに食らいつく実力はあるよ」

「まあ確かに前の大会で、俺達を相手にしてかなり持ちこたえたっスけど、でもいいんスか? 片方は遠慮、」

もう片方はテンションを高くして自分を誤魔化してる感じっス。本音出せるんでしょうか」

ムツミに代わってソウイチが聞く。

「ヤタテの方はガンプラバトルの方が自分の素を出せる。信じよう」
「駄目だったら……その時はその時か……」

「くっ!」

ユニコーンとの鏖迫り合いに負けて弾き飛ばされるストライク。

その隙をつかれ左腕を切り裂かれた。ストライクはそのまま雪原に背中から倒れ込んだ。

「ナナちゃん!」

「……………もう諦めてよ……………」

「え……………」

「……………やっぱり駄目だよ……………アタシじゃアンタに適いつこない!」

ナナは勢いをつけて虚勢を張っていたがもう崩れそうだった……………。

「これでわかったでしょ……………!アタシが大事なバトルに出たって足引つ張る!必要ないでしょ!別にアタシがチームにいなかったっていいじゃない!」

「それは違うよ!」

「楽しめればいいって!?!やるだけでこんなやられ役なんてゴメンだわ!アタシを前座として使いたいわけ!」

「違うよ!私だってそんな事考えずにナナちゃんとやってたわけじゃ……………」

「じゃあどういうわけ!?!どうしてそうやってアタシに食いつくの!?!」

「だって……………!だってナナちゃんと一緒にやってる時が一番楽しいんだもん!!」

ナナの耳に大音量でアイの叫びが流れた。

「え……………」

「こつちに初めて引越してきた時、馴染めるか、友達は出来るのか、ガンプラが趣味って言って周りは受け入れてくれるのか、凄く不安だった……………正直隠そうかとも思ってた!」

黙るナナ、アイはそのまま語り続ける。

「でもさ、ナナちゃんは率先して私に友達になろうって言ってくれて……………私がガンプラ好きだっていった時も受け入れてくれて凄く嬉しかった。

それどころか一緒にやるようになって、本当に楽しかったし嬉し

かった」

「……」

「だからコンドウさんが協力してくれても、ナナちゃんと一緒にバトルしようって決めてた……」

でも、ナナちゃんにとってそれが逆効果になるなんて……。強い人とのガン普拉バトルが……。嫌な気持ちしか生み出さないって言うなら……

本当に嫌なら、もう何にも……。グスツ……。言えないけどさ……」

アイの声が震えてる。泣きたいのを抑えてるのだろう。

「でも……。でも……。楽しみたいって気持ちが残ってるのなら……。せめて！せめて今のギスギスした不安は吐き出して！元のナナちゃんに戻ってよ！」

「……。アタシだって……」

ナナの声も震えている。涙声になった通信がアイの耳に響く。

「アタシだって……。わかってた……。今日の自分の態度が大人げないって事位……。でも……。初めてだったんだよ？」

熱中出来る事、流行以外の共通の趣味で盛り上がれる事……。もっと活躍したいし、もっと強くなりたかった……。うまくいかない事にイラついてた……。嫌だったんだもん……

アンタの脚引つ張るの、戦力外扱いになるの……」

「ナナちゃん……」

「ゴメン……。アイ……」

「私も……。ゴメン……。ナナちゃんの気持ち……。気付かなくて……」

と、その時Gポッドにけたたましくアラームが鳴る。バトルの制限時間が終わりにかけてる為だ。画面に表示されてるタイマーが30秒を切った。

「あ……。もう時間がないんだ」

「大丈夫！ほんの少しだけどきどき！楽しもうよ！ガン普拉バトル！」

そう言うや否や、ナナのストライクがシールドのガトリングガンを連射する。アイのユニコーンはシールドでそれを防ぐが、

その隙にストライクはI・W・S・P.を最大に吹かし後方に逃

げ込んだ。ストライクが逃げた先には山地林が見える。かなり広い、機体が身を隠す事は難なく出来るだろう。

「隠れた?!」

いぶり出そうと山地林にビームマグナムを撃とうとするアイ。

しかしユニコーンの側面、森から黒い影がバーニアを吹かしユニコーン目掛けて飛んできた。

「ストライク!?!」

吹雪の所為でハッキリ見えなかったわけではないがナナのストライクと判断したアイはビームマグナムを撃ち込む。先程よりは遠慮せずに撃つ。

黒い影は爆発し周辺に破片が飛びちる。が、アイは破片を見て違和感を感じた。

「ストライクの残骸がない!?!」

「そーいう事!!」

「!?!」

直後真上からナナの声が響いた。吹雪吹き荒れる真上から対艦刀を振り上げたストライクが大きく振ってきた。

「そっか!ストライカーをオトリに!!」

「そう!単独で飛ばしたわけ!」

振り下ろしたストライクの対艦刀をアイのユニコーンはビームトンプアーで受け止めた。勢いをつけた為かさつきよりストライクのパワーは増していた。

「アイーッ!!」

アイにナナの通信が響く、大声だがさつきのような悲しさのこもった叫びではなかった。

「アタシもさー今気づいたよ!」

「え?」

「一人で作ったりバトルするよりも!アンタと一緒にが一番楽しいってーッ!」

「ナナちゃん……うん!!」

アイが笑顔で答えると同時にタイムアップとなり、バトルは引き分

けの形で終了した。

「お疲れ様、いいバトルだったよ」

二人がGポッドから出てくるとタカコとムツミ、コンドウ達が出迎えた。直後ナナは呆れた顔をしてぼやく。

「オツサン……タカコとムツミまで……まったく、バトルで立ち直らせようなんて強引すぎなのよ。なんか発案したのオツサン臭いけど?」

「ハハ……まあよかったじゃないか。結果的に立ち直れて」

コンドウは笑ってごまかす。

「いい勝負して自信取り戻させるとかいったの誰だっけ?」

「自信と全然関係ない方向で立ち直ったスけど?」

「うっ……結果オーライだ結果オーライ!」

「……でもま……ちよつとそうやって気い遣ってくれたのはありがたかったわよ……なかつたらもう暫くウジウジしてたでしょうから……」

バツが悪そうに目を逸らしながらナナは小さな声で言った。

「よかった……いつものナナちゃんだ」

アイが安堵の声を上げる。顔も安心した笑みがこぼれていた。それにナナがVサインで返す。

「ま、完全復活って事で」

「これでメンバーは揃ったっスね。今度はサツマさんにリベンジを……」

「何言ってるんだソウイチ。あくまで立ち直ったが挑戦者との戦いにハジメが参加するとは一言も言っていないぞ?」

「あ……そっか、ナナちゃん……やっぱり……」

「?出るよ?アタシ、挑戦者とのバトル」

「えっ!?!」

あまりにもそっけなく答えるナナにアイは驚いた。

「だつてさ、アイにああ言われちゃいちいち気にする必要もないじゃん?言いたい事言ったらなんかスッキリしちゃったし」

「まあ、そう言ったけどさ」

「それに、どうして足引つ張るの恐れていたのか自分でも分かったしね……」

「?なに?」

「いいのいいの、次のガンプラ買いに行こうよ! アイ! 前のレースの時の金券、まだ使ってないんだ!」

「え?! 待ってよナナちゃん! せめて着替えてから……」

アイの手を引き、ヘルメットを抱えながらナナは下の階へと駆け下りていった。その顔には先程の沈んだ雰囲気は微塵も感じさせなかった

——どうしてアイの足引つ張るのを恐れているのか……それはアタシがアイと一緒に思いつきりガンプラバトルしたかったから……

『カシヤツ』

「やっぱりあの笑顔が一番の笑顔だよね」

降りて行くアイとナナの背中をタカコはデジカメに収める。同時に二人を見送った少し後、店員のハセベが二階に上がってきた。

「今あの二人が降りて来たけど、あの様子だとうまくいったみたいだね」

「ええ、あの二人、やり遂げましたよ」

答えるコンドウにハセベは安心して胸を撫で下ろした。

「いやいや、無事ハッピーエンドになってよかった」

「しかし最初聞いた時は驚きましたよ、まさかハセベさんがこんな作戦を発案するなんて」

今回のバトル、実は持ち出したのはコンドウではなくハセベの方だった。

失礼かもだがコンドウはその事に強く驚いていた。ハセベの性格は荒らしに口ごたえされるだけで落ち込む程臆病かつ脆い。

今回の作戦はある意味賭けでもある。ハセベの性格上これを発案したことにコンドウは未だに強い意外さを感じていた。

「いやいや、昨日の事情は知ってるからね。それに僕だって大人として道を誤った若者を救いたいという気持ちはあるよ」

「なんか……ハセベさんじゃないみたいっスねえ」

目の前にいるよく知る店員、だが自分達が知ってるその姿が彼の全てではないのかもしれない、とコンドウは思っていた……。

第21話「再戦の足し算」(フリーダムガンダム・アルクス VS ジャステイスガンダムセートウン)

「出来た……」

ナナは達成感を込めた声を漏らした。場所は自室、隣にいるのはアイ、そして目の前にある物は……

「うん、完成したね。ナナちゃんの新しい機体……」

『『RGフリーダムガンダム』』

目の前にある物はナナが新しい愛機として作ったRGフリーダムガンダム。翼を背負った青と黒の機体だ。

「いやー、一時はどうなるかと思ったけどちゃんと完成してよかった。マスク割れちゃった時はどうかと思ったけどね、Oガンダムで代用できてよかったよ」

そう、目の前にあるRGフリーダムはマスクをOガンダムの物に取り換えており心なしかアニメに近い頭部になっていた。

「感謝しています。アイのジャンクパーツから持ってたけど」

ナナは軽くアイに頭を下げる。言葉通りの気持ちを伝えたわけだ。

「気にしなくていいよ。使う用途の立ってない奴だったし」

「とにかくまあこれで再戦の条件は整ったわね。後はサツマに再戦するだけだわ」

「うん、ただちよつと遠いから向こうとも連絡取ってからと、時間がかつちやうけどね」

以前サツマがアイと戦った際、サツマはアイがチームに入ること想定してガリア大陸の店員、ハセベに自分が拠点としている模型店を教えたらしい。

経由ではあるが連絡を取ることは可能だった。

しかし翌日、ガリア大陸にて……

「今週はダメ？…どういう事よそれ」

ナナの声が店内に響く、店にはタカコやムツミ、コンドウ達も一緒

だ。

「なんか都合つかないんだって、再戦はしてくれるみたいだけどまだしばらく時間がかかるみたい」

「拍子抜ツス。こっちはやる気満々だったのに……」

説明するアイに対しソウイチがぼやく、彼も再戦に燃えていたのだろう。

「といってもそんな重大な事じゃないよ。単純にメンバーの予定がつかないだけだったさ、都合がいたら連絡するって」

「フム……やはりか」

「?コンドウさん?」

「いや、あの後『サターン』について調べてみたんだが。フジさん」

「コンドウがタカコに促す。と「あいあゝい」とタカコが前に出てきた。

「あのサツマって人のチームなんだけど、確かに強いビルダーで周りを固めてるからその実力は折り紙つきなんだって、

でも反面年齢や出身地が全然違う所為か、都合で集まる日が限られてるんだってさ、挑戦者もそれで諦めたりする事が多いらしいよ」

「タカコ、いつの間に調べたの?」

「コンドウさんから頼まれてね。あたしも何か出来たらなって思っ調べてみたの」

「数日でよくそういう状況調べられたね……」

「あたし新聞部だもん」

意外そうにするムツミに余裕の表情でタカコは返した。

「前は友達と一緒にだったらしいけど、一人だけチーム抜けて結成したって言ってたけど、そんな事になっていたんだ」

「おいおい、そんな会うのが限られてるチームってチームとしてどうなんだ?全国制覇を狙うとか言ってたチームがそれって」

ツチャが呆れるとコンドウが返す。

「ああ、連中にはそこにつけ入るスキがある筈だ」

「なんにせよまだ時間はかかるって事ね。まあこっちとしてはフリーダムに慣れる時間が出来てラッキーと思えなくもないけど……」

「だったらチャンスだな」

ナナの呟きにコンドウが口を挟む。

「オッサン？」

「今の内にフリーダム強化や君の実力をつけるにはうってつけという事さ」

コンドウに対し、ナナは自信のない表情で呟く。

「でもアタシ、改造なんてしたことないし……」

「心配はいらないさ。俺達が手伝う」

「ちように使えるかもしれないアイディアとかもあるからね」

「勝てるならそれでいいツス。特訓も欠かしませんからね」

「皆……、ありがとう！」

湧きあがるビルダー達に押され、ナナは今度こそ勝てるかもしれないという気持ちに芽生えつつあった。

「あ、言い忘れていたけどそのサツマって人面白いんだよく下の名前がね……」

「タカコ……今誰も聞いてないよ……」

三日後、チーム『サターン』リーダー、サツマから「二週間後にワタクシの地元のパラモ屋なら都合がつく」という返事があったのだ。

そして二週間後の日曜日、それなりに広さのある一階建ての模型店『ルジャーナ』、そこが『サターン』が拠点としている模型店だった。

「お待ちしておりましたわ。ヤタテ・アイさん」

その奥のGポッドと大型観戦モニターの並んだスペースで彼女、サツマは深々と頭を下げた。

「お忙しい所ありがとうございます。サツマさん」

「ヤタテさんから挑戦していただけるなんて嬉しい限りですわ。もちろん挑戦者等で大変でしょうに」

「いえいえ、当面の目標はサツマさんでしたから」

アイが返した後、ナナが前になる。

「でもアタシ達が自分を鍛える時間は十分とれたわ」

「あら？あなたはヤタテさんのお友達の……少しは実力をつけたのでしょうか？」

「おかげさまでね、今度は負けないから」

「ふうん……少しは楽しむ要素になっていただければ嬉しいですね」

「……」

そっけない返事だ。初めからナナは眼中にないのだろう。反応に釈然としないナナにソウイチが話しかける

「あんま気にしちやいけないツス。バトルで鼻あかしてやりましょう」

「アサダ……アンタがフォローするなんて珍しいわね」

「調子悪くして負けた原因になるの嫌ツスから」

そしてアイ達にとつて再戦ともいえるバトルが始まった。今回のステージは南太平洋上空、登場作品は『ガンダムUC』つまり空中のステージ、

下は雲海、更にその下は海、事実上空中だけという一風変わったステージだ。

「今回のステージは空だけだよ。一定以上落ちたら撃墜扱いになるから気をつけてね」

「分かったわ。アイ」

今回のアイ達の母艦、後方部が巨大化した緑色のスペースシャトルの様な貨物船『ガランシエール』の格納庫でナナ達は通信をかわす。

船側面のハッチの空いた景色は、海のように広がる雲と青い空一色だ。今回のメンバーも前回と同じアイ、ナナ、ソウイチの三人だ。

「飛べない機体にはデータ上ですがサブフライトシステム（SFS）、ベース・ジャバーが支給されるツス。」

といってもデータ上の奴はあくまで飛べるだけって感じで、実際にSFSのプラモをスキャンしてる方が能力は上なんすけどねえ」

「つまりSFSとかいう乗り物を一緒にスキャンした方が有利って事ね」

「そういう事になるツス。ま、俺達は単独飛行の出来る機体ですから

関係ないツスけどね」

ソウイチは会話でナナの機嫌を測っていた。

口では勝てればいいと言っておきながら、なんやかんやでソウイチもナナが変に気を張ってないか心配してる様だ。

そうこうしてる内に発進して下さいという表示がモニターに出る。

「それじゃ……特訓の成果、見せようか!!アंकシャ!出ます!」

「アストレアFR2出るっス!」

「今度は負けない……今度こそ……ハジメ・ナナ!フリーダム……アルクス!出るよ!」

ガランシエールにはカタパルトが無い。直に機体が後方側面のハッチから飛び出す。

左側面のハッチからは、ソウイチのアストレアFR2が緑の粒子を放ちながら、右側面からはアイのアंकシャが背中から落ちる。

直後にくるっと周り円盤状の飛行形態に変形し上昇、そして上部ハッチ(ガランシエールの後方形状は逆三角形な為それぞれの面にハッチあり)

のナナのフリーダムは藍色の翼を広げ飛んで発進口から勢いよく飛翔する。

飛び出すと同時に相手のチーム目掛けて全機が飛んだ。

二週間の猶予はナナのRGフリーダムを改造するには十分な時間だった。肩と腰には追加ブースター。両膝にはアーマーとハンドガン。

ナナの新機体はコンドウ達のアイディアを盛り込んだフリーダムの強化型だった。

なお、ナナの名前にちなんでフリーダムガンダム・アルクス『虹』という名前だがナナは未だに名前を恥ずかshがっていた。(アイが勝手につけた為)

「凄……なんか違う世界みたい。仮想空間だって事忘れそう……」

「うん……」

雲の上を突っ切るといふ状況にナナは感嘆の声を漏らした。上は透き通った真つ青な空、下は海のように広大な雲、

目についた雲が一瞬で通り過ぎる、アイも同様の声を通信で流した。しかし今はバトルの際中だ。いきなり下の雲から数条のビームが飛んでくる。

「!?」

フリーダムは盾を構えながらもすんでの所で機体を捻らせかわす。他の二機はもつと難なくかわした。雲の中に複数の影が見える。

そいつらが撃つたのだと判断すると同時に、撃たれたことで現実に引き戻されたナナ達は、

影めがけてお返しとばかりに撃ちまくる。

とすぐに雲から離れる。雲の中からの不意打ちを避けるためだ。

「アナタ……少しは動きがよくなったようですねえ」

下の雲からサターンの機体が現れる。前回同様フォビドゥン、ヤクトドーガギユネイ機、そして紺色のジャステイス……

「ジャステイスガンダムセートウン！」

ナナが叫んだ。

「ですが残念ながらワタクシには及びません。ヤタテさんをお守りするにはまだ足りませんわね！」

再び撃ってきた射撃をかわす三機、かわすと同時にナナは通信でサツマに返す

「……かもね。アタシ一人じゃ限界があるもの」

「あら？諦めがよろしいですわね」

「だからアタシは欲張るのをやめた。自分の出来る範疇で出来ることをする！」

「力量をわきまえてますのね、でもそれではワタクシ達に勝つ要因にはなりえませんか！」

セートウンがビームサーベルでフリーダム・アルクスに斬りかか

る。ナナも受けようとビームサーベルを抜こうとするがアイのアンクシャが変形しつつ前が出る。

「結果は見えてませんよ！ナナちゃん！ここは私が！」

アンクシャは人型に戻る。そしてビームサーベルでセートウンのビームサーベルを受ける。発生したスパークはお互いの機体色を青白く染める。

「まあ！今回はユニコーンではないのですね！アンクシャが敵の立場のガランシエールから飛び立つなんてシニールですわ！」

「私もそう思いますよ！このステージならコイツの能力をフルに引き出せる！ラツキーでした！」

「でも変形する以上予備動作が不利じゃないんですの?!」

「いいビルダーはどんな機体も乗りこなすものでしょう！」

「おっしやる通りですわ！でも……残念ですが今回はすぐ終わらせませわ！」

「何ッ!？」

そうサツマが言うのと側面からフォビドウンが大鎌、ニーズヘグで斬りかかる。もう一本のビームサーベルで受け止めるアイのアンクシャ

「二人がかり!？」

「ええ！卑怯と罵りたいのならそれで結構！でもあなたの實力はよく解ってます。こうでもしないと確実に勝てる見込みはありませんもの！」

「卑怯とは思いませんよ！頭数が同じ以上！」

アイが叫ぶとバズーカの砲撃が飛んでくる。フォビドウンに命中した弾は爆発を起こし体勢を崩す。その隙にアイのアンクシャは離れた。

「必然的に総力戦になるツスからね！」

援護としてアストレアのバズーカを撃ったソウイチが叫ぶ。

しかしあまりフォビドウンには効いてる様子はない。強襲形態で

アーマーを被つてる為か致命傷にはならなかったようだ。

「伏兵ですか！ならヤクトドーガのファンネルで！」

「了解！リーダー！」

サツマがヤクトドーガに指示を出す。展開したヤクトドーガのファンネルはビームを射ちつつアंकシヤを追いまわす。

加えてセートウンがファトウムーの砲撃を撃ち出す。アंकシヤは攻撃を凌ぎながら両腕のビームキャノンで撃ちかえす。

「くう！変形した方がかわしやすいんだろうけど！こうも攻撃が厳しいと！」

「大丈夫だよ！アイ！」

「ナナちゃん！」

アイの耳にその通信が入ると同時に雲の向こうから五条のビームが飛んできた。

雲を吹き飛ばしたビームはセートウンとヤクトドーガに襲いかかる。ナナのフリーダムが放ったハイマツトフルバーストだ。

「さっきのフリーダム!?いつの間に移動したんですか!？」

二体とも不意を突いたようだ。が命中するには至らずかわされてしまふ。というか本体に当たる砲撃ではなかったので本来なら避ける必要すらなかった。

しかし予期せぬ攻撃はヤクトドーガの注意を引くには充分だった。

「動きを止めたっ!!」

アイのアंकシヤはあらかじめ持っていたビームサーベルからビームを発生させ構え一気に距離を詰める。ヤクトドーガもそれに気付いたようだ。

「く……甘い！ファンネル！」

だがファンネルに指示を送ってもファンネルの反応はなかった。ヤクトのビルダーがそれに気付いた時には、ヤクトの胸にアंकシヤのビームサーベルが深々と突き刺さっていた。

「な！どうしてファンネルの応答が!？」

「さっきのハイマツトフルバースト。狙つてのは本体じゃないんです！」

「ま！まさか！ファンネルを!？」

そう、さっきのハイマツトフルバーストだ。放たれた照射ビームはヤクトドローガではなくファンネルをロックし破壊する目的だった。

「ファンネルに……頼り過ぎたかああっ!!」

そう叫ぶとヤクトドローガは爆散した。

「よしっ！まずは一機！」

「やっぱりあいつら……連携が不十分なのか!？」

観戦モニターを見ながらコンドウはナナの動きに感心していた。『ルジャーナ』のガンプラバトルの観戦モニターはガリア大陸の物より大きく、

コンドウ含めた多くのギヤラリーが見上げる形でバトルを見ていた。その横で見ていたツチャが呟く。

「そだよ、あたしが調べた結果じゃ、最初に言った通り強いスタンドプレイのメンバーを揃えてあるのがサターの特徴。

だけど連携というよりゴリ押し勝利という形が多い。ならこっちは連携で攻めるべきだってコンドウさんは思ったの」

「チーム内で会う機会が全然ないから……?そんな簡単な穴が向こうにあったなんて……」

横のタカコの解説にムツミは呆れる。

「まあいいじゃないか、連携を鍛えておいて損をすることはないんだし」

「違ういな、流れ、変えたか?」

「そんな！前回では一機も落とされなかったのに!？」

「一回負けりや対策位立てるでしょ!」

サツマが驚愕の声を上げた。同時にナナのフリーダム・アルクスが

続けざまに射撃を続行。距離を詰めながら射撃で追いつめようとする。

この二週間、フリーダムの特性を活かせるようナナは特訓を積んできた。高速戦闘をマスターするには至らなかったが

射撃に関してはかなり鍛えられていた。

「このっ！」

予想外の事態にサツマはセートウンのリフターを背中から分離、外れたりフターに乗るとフリーダムに突撃、ビーム砲、マイクロミサイルといった全火力を以て追いつめようとする。

「そりゃ怒るわね！」

ナナはバラエーナを翼に引っ込めると後退しつつ左腕のスナイパーライフルを畳む。畳むことによりライフルは三連バルカンに変形、

下がりながらの迎撃だ。セートウンがフリーダムを追う形での高速戦闘となった。

「ヤタテさんならいざ知らず！あなたに追い込まれるなど！」

「ヒ・ヒ・ヒステリーを起こし……てえええっ！」

バルカンの連射される弾幕は相手の突進力を殺すのに最適だ。

遠距離装備ばかりな為、近距離対応としてとりつけた三連バルカンだが、セートウンは螺旋を描きながら弾幕をかわし突っ込んでくる。

「くっ！当たらない上にスピードも殺せない！」

「当然ですわ！あなたとワタクシには実力差は歴然！数字で言うならワタクシが3でアナタは1！それだけの差があるというのにアナタに良い様にされるなど！」

「す・数字で例え……ないっでよっっ！」

「それだけ解りやすい差だと言うのですわ！」

ナナの機体がガタガタと振動しっぱなしだ。高速での戦闘により機体に負担がかかっている表れである。その影響でGポッドも大きく振動し、

ナナの声も震えてしまう。サツマの方は振動らしき反応はない。このことから分かるようにサツマの言う通り二人の実力差は歴然だ。

そしてついにフリーダムは背中からビームの直撃を受けてしまう。右の翼の付け根に当たり、翼が吹き飛んだ。

「アウツ!? マズイ!? 踏ん張ってよフリーダム!」

全身のバーニアを吹かし、どうにか耐えようとするナナ、ナナは高速戦闘の影響で目の前がフラフラなのをこらえて操縦に専念する。

「無駄なあがきを! 追加したバーニアを吹かしたところで短時間しか持ちませんわ!」

サツマはとどめといわんばかりにリフターの火力を撃ち込む、ミスイルが当たりシールドは破壊、そのままフリーダムは衝撃で落ち始める。

「しまっ!」

「よく持った方ですわ! でも実力不足はどうしようもありませんわね!」

「うわああっ!!」

落ちるフリーダムは雲を突き抜けた。飛べないフリーダムはこのまま落ち、撃墜扱いになるだろう。

「これで心置きなく戦えますわね。ヤタテさん? ……あれ? いない?」

周囲を見回しアイのアンクシヤを探すセータウン、しかし、サツマのGポッドから警告音が響く、

「!?」

下から数条のビームが飛んできた。見覚えのあるビーム、アンクシヤのビームキャノンと、フリーダムの……

「バラエーナ（羽根の中に仕込んだビーム砲）!?! どうして!?!」

「教えてあげるよ! サツマ!」

「そしてお望み通り相手をしてあげますよ! ただし……」

『私（アタシ）達二人同時にね!!』

姿を現したのはアイのアंकシャだ、そしてその上にはナナのフリーダムが乗っていた。

アंकシャのグリップを掴み、寝そべる体勢でフリーダムはバラエーナをセートウンに向けていた。

アंकシャは元々SFSとしての使用が出来る機体だ。アイのアंकシャはSFS用のグリップをそのままつけていた。

アイ自身、この二週間鍛えていなかったわけではない。ナナとの連携とサポートを中心に特訓を積んでいたわけだ。

「フリーダムをアंकシャに乗せるとは……！ならアंकシャだけ落とせば！」

セートウンもアंकシャを撃ち落そうと撃つが、アイのアंकシャはかなり素早く動き回る。そしてその上で容赦なしに撃ちまくるフリーダム、

アंकシャのビームも加えてセートウンを追いつめようとする。

「クツ！援護を！」

サツマは僚機のフォビドウンに援護を求めようとする。しかし

……

「待ってくれリーダー！今はアストレアと戦ってる最中だ！」

そう、フォビドウンはソウイチのアストレアFR2と交戦してる最中だ。バックパックを被った様な強襲形態のフォビドウンは、

アストレアFR2と火器で牽制しながら何度もぶつけ合っていた。

「今距離的にそつちに届くのはフレスベルグ（長距離用の曲がる大型ビーム砲）しかない！こんな時に撃ったら無防備でこつちが！」

「いいからお願います！こつちがやられたらそれで終わりなんです！！」

「リーダー……解った」

鬼気迫るサツマの叫びにフォビドウンのビルダーは渋々了承する。アストレアFR2と離れたと同時にバックパック先端部のフレスベルグを発射、

「うをつ!?このタイミングでそれスか!？」

アストレアにはかわされると同時に歪曲したフレスベルグはアンクシャに向うがあっさりかわされてしまう。なおも撃ち続けようとするフォビドウンだったが……

「一騎打ちの最中にそういうの!スキだらけっス!」

撃つてる隙をつかれてフォビドウンは正面からアストレアのビームサーベル切り裂かれる。予備動作が大きすぎた為だ

「リーダー……だから言ったのに……」

X字に切り裂かれたフォビドウンはそのまま落ちて行った。

「あ……ワ・ワタクシのミスで……!」

「情けないよアンタ!」

「!」

自分の感情的になった判断に後悔するサツマはナナの声で我に戻る。

「強いビルダー集めたって連携がそれじゃ空回りだわ!」

ナナの叫びと共にバラエーナ、そしてその上部に取り付けられたクスフィアスレールガンの連射でセートウンを追いつめる。

だがサツマはそれをやすやすと受けるつもりはなかった。

「友達捨ててまでやって!本当は友達の方がうまくいったんじゃないの?!」

「!!……あなたに!」

ナナの何気ない一言、悪意はなかった。だがそれが今のサツマにとって引き金となった。

「あなたにそれを言う資格はありませんわ!あなたなんかがいい!!」

セートウンの火器の弾幕が一層濃くなる。全武装を駆使し撃ちこんできた。

「!?」

反転し逃げるアイのアンクシャ、背後から来るミサイルとビーム、後方のビームを器用にアンクシャはかわし、ナナのフリーダムは上半身を翻し武装でミサイルを迎撃していた。

「くっ!!」

「友達を捨てて!もう引き返せやしないのに!!関係のないあなたにそんな事を言う資格があっ!!」

「なんでそうまでして必死なのよ!!」

「ここで諦めては……ボリス・シャウアー様に会うというワタクシの夢を叶える等夢のまた夢!!」

「アナタの憧れがが!!シャウアーさんの!!」

「シャウアー?」

サツマの挙げた名前、アイの驚いた反応にナナは首を傾げる。

「昔、イレイ・ハル君と名勝負を繰り広げたガンプライマイスターだよ!」

「じゃあ前にアンタが言ってた影響を受けた勝負って!」

「うん!その人!」

「何をゴチャゴチャと!ここで!それもあなたの様なポツと出に負けでは友達のビルダーを捨てた意味すらなくなってしまいますわああっ!」

「……」

『前のアイを追い詰めた自分みたいだ』とナナは思った。だからこそ、ナナはサツマの心境を察することができた。

「ねえ!前の友達を今のチームに入れるって出来ないの!?!」

「あなたは!!ワタクシをバカにしていますの!?!今更どうやって会えと!!」

「そうやって怒るって事はさ!本当は前の友達ともまたやりたいたいじゃないの!?!後悔してるんじゃないの!?!」

「!!他人事だと思ってる!!ワタクシは友達を裏切った様なものですわ!!出来るわけじゃないでしょおっ!!」

自分にも劣ると決めつけていたナナ、それが自分の心境を言い当てる。更に自分に説教をかます。

それはプライドの高い彼女にとってあまりにも屈辱だった。

絶叫したサツマはセートウンのビームライフを捨て、両手にビームサーベルを抜く。直にフリーダムとアंकシャを叩ききろうとい

うのだ。

「自分でチーム出てったんでしょ!?自力で今のメンバー集めたんでしょ!?それが出来てなんで元に戻るのが無理だって決めつけるのさ!」

なおもナナの言葉は止まらない。

「熱くなったら止められない性分なんですよ!?アイを誘う為にも使った熱意を友達に使うくらいいけないじゃん!憧れてる人に近づきたいならそれ位やってみせてよ!」

「知ったふうな口をつつ!!」

「アイ!反転して!アイツはアタシが!」

反転するアंकシヤ、フリーダムはアंकシヤから立ち上がりビームサーベルを抜く。

「今なら……だからこそアンタはアタシが落とす!」

「アナタが!?もうこちらの戦力はボロボロ!勝つ事は出来ないかもしれない!でもアナタがワタクシに勝つ事は不可能!口を酸っぱくして言ったのに呑み込みの悪い方ですわ!」

二機の距離が急速に縮まる。

「せめて最後にそれを分かせて差し上げますわ!」

「確かにアンタが言った通り数字は1だろうけど!」

「そうですわ!故にアナタ単体では!」

ナナが言い終わらないうちにセータウンは両手のビームサーベルを横一文字に振るった。

「適いませんわあつ!」

勝った!そうサツマは判断した。見た限りフリーダムはサーベルを振るってない。しかし目の前にフリーダムはいなかった。斬った手ごたえもない。

「!?どういう……つつ!」

その時セータウンの両足が切断された。同時に足元のリフターも破壊される。

「えっ!?!」

落ちる瞬間、上下逆さまに反転したアंकシヤと、そのグリップに

ぶら下がるフリーダムが見えた。

「斬る瞬間に……ひっくり返ってましたの!？」

「確かにアタシは一人じゃ適わなかったでしょうね。所詮1でしかなかったのかもしれない。だからこそアイがいた」

「何を……?」

「1だって……他人と足せば3だか4だかにはなるって事よ」

「負けたという状況が解ると同時に急に冷静になってきた。同時に自分のやってた事を思い返す。」

「一人で突っ走っていたな。無理に援護させようとしたなと言うのを今さら思い出せた。」

そしてそれは相手だったアイとナナはよく分かっていた。

「でも私達のそれは……お互いどういう動きをするのか分かってたから動きを合わせる事が出来たんです」

「それをやるには……実力より理解していたことの方が重要だったのよ」

「そうか……ワタクシは……単独の実力ばかり集めて……足し算すらうまくできないのに納得して……」

悟ったサツマはそのままゆっくり落ちて行った。

「フフツ……どうしてかな……前の友達の方が……うまく……出来たのに……」

暫くしてセータウンの爆発の光が確認された。これによりアイ達の勝利でこの戦いは終わった。アイとナナはその光を黙って見ている。

「よろしいこと?今回ワタクシが負けた事は素直に認めましょう」

バトルの後、私服に着替えた全員。

サツマはナナを扇子で指した。負けてなお毅然とした態度を崩そうとしない。ナナに対しては強気な態度でいたいのだろう。

「ですが次はありません。バトルで負けただけならまだしもバトル越

しに大恥をかかせたアナタは決して忘れはしませんわ。『ハジメ・ナナ』その名前、忘れませんわよ!」

そのままサツマは踵を返し去って行く。

「あ、リーダー、待ってください!……あんまりリーダーの事酷い奴だと思わないでくださいね。では」

つきそいのビルダーがフォローを入れながらも、そのままサツマは他のビルダーと共に去って行った。連携は取れてなくとも嫌われてはいないらしい。

「……ヤタテじゃなくてお前を指していたな。ハジメ」

「これってあの人に認められたって事かもね……ナナ……」

「あはは……光栄って言うよりはちよつと不安だわね。また今度戦うかもって思うと……」

それにしても今回はかなりハードだった。今になって緊張の糸が切れたのだろう。ナナはその場でうなだれる。

「しかしきつかったわ今回、もう今日はスタミナ全部使ったって感じ」と、丁度ナナは目の前の床に何かが落ちてる事に気が付いた。

「ん?何これ?」

すぐさま拾うナナ。学生証だった。確認の為開くと、映っていた写真には見覚えがあった。

——あ、さつきのサツマの学生証だわ……。2年C組……!?!——

直後、学生証を見ていたナナが『ブフツ!』と吹き出した。

「?!ナナちゃんどうしたの!」

いきなり吹いたナナにアイが寄る。

「ククツ……アイ、サツマの下の名前なんだけどね……」

「ぐっ……恥ずかしながらちよつと忘れ物しましたわ。この辺で学生証を……」

「あ、『イモエ』」

「っ!?!」

学生証落としたことに気付き、恥ずかしそうに戻ってきたサツマにナナがその言葉を口にした。

ナナが無意識に言った一言だったが、その瞬間サツマの顔が凍りつ

く。同時にアイ達はナナが何を言ったのか理解出来なかった。

「は？イモ……何ナナちゃん」

「……ワタクシの名前ですわよ……ヤタテさん……（ゴニヨゴニヨ）つて……」

問いかけるアイにサツマがボソボソと答える。が、アイ達には聞こえなかったようだ。

「へ？」

「アイ、『イモエ』だって、『サツマ・イモエ』それがコイツの本名なんだから……フ……アハハハ！」

指摘するや否や、いきなり笑い出すナナ。人の名前を笑うのが失礼だというのは理解している。が、今までがガチガチに緊張した状況な為か余計ツボにはまってしまった。

反面今の状況が理解できないアイ達（名前を知っていたタカコは除く）は固まったままだ。あまりにもふざけた名前だったからだ。

「な……何がおかしいんですのおおっ!!」

「いやゴメン！でもだって……そんな外見と話し方なのにイモエって……フフツ」

「人の名前で笑うとか失礼ですわ！言つときますけどおじい様からの小野妹子リスペクトですからね!!」

激昂するイモエ、反面周囲のルジャーナのギャラリーはイモエの名前を知っていた為『またか』と思っていた。

彼女の名前を笑う人間は多かった。

「上等ですわ！忘れないどころか今度会った時は絶対あなたを叩きのめして差し上げますわ！覚えてらっしゃい！ハジメ・ナナ!!」

「え?!アタシだけ!？」

「笑ったのはアナタでしょう！首洗ってなさいませ!!」

そう言うといモエ……サツマはチームメイトと共にルジャーナを去っていった。

「最後は何故かナナちゃんに因縁がついちやったね……」

「いや最後にあんな名前だったとは思わなかったからつい……でも、また戦う事になるでしょうし、こうなったらいつかはアタシ一人で

勝ってみせるよ……イモエ……」

「やっぱり絞まらない名前だね……」

……

「無理な援護を強要したりして申し訳ありませんでした……敗因はワタクシのミスみたいなのですわ……」

その後、サツマはチームメイトに頭を下げ、駅の入り口で別れた。見送ったサツマの耳には、ナナの言った言葉が残る。

——自分でチーム出たんでしょ!?自力で今のメンバー集めたんでしょ!?それが出来てなんで元に戻るのが無理だつて決めつけるのさ!——

「……アナタは気にいりませんが、ワタクシも無駄に高いプライドが嫌になる事がありましたよ……」

サツマは呟くとスマホを取り出した。そして電話帳から電話をかける。その相手は……

「もしもし、ワタクシです。今更どのツラ下げてって感じでしょうけど……、明日会ってくれませんか?直接会って言わなければならぬ事があるんです。……『散々勝手なこととして、ゴメンナサイ……』って……」

第22話「改造のススメ」(ビルトワイバーン『コピー』 VS ドムトルーパー・スノーマン)

「はああっ!!」

宇宙の暗礁宙域、暗黒の空間でナナの機体『フリーダム・アルクス』が目の前の敵にビームサーベルを振り下ろす。

「来いー!」

相対する敵、コンドウのレジエンドBB『騎士ガンダム』は右手に持った電磁ランスでサーベルを受け止めた。

「片手で!」

「フリーダムは確かに早い!だがパワーには劣るという事だ!」

盾を持った左手でフリーダムの腹部を殴り飛ばす騎士ガンダム。フリーダムは後方へ吹っ飛ばす。

「くっ!」

振動するGポッドでナナは眩き、格闘戦では勝てないと判断、一度距離を取る。

「む、何か考えたか!」

コンドウはその場で動かずフリーダムを目で追う。騎士ガンダムには遠距離用の装備がない。

そしてフリーダムは周囲に浮かぶ隕石の影に隠れた。身を隠しながらコンドウの出方を伺う気だ。

暫くしてコンドウのGポッドに警告音が走る。

「後ろか!」

後ろからスナイパーライフルのビームが飛んできた。コンドウは真上に上がり回避、すぐさま撃ってきた方向に目をやると、かなり離れた所に撃った本人、ナナのフリーダム・アルクスがいた。

「仕留められなかった?!」

「甘いな!」

ランスを前に構え、高速で突っ込んでくる騎士ガンダム。ナナはスナイパーライフルじゃ狙えないと背部のバラエーナとクスイファイア

スを展開、そして連射、

弾は騎士ガンダムに向うも、コンドウは軽く左右に機体を動かし回避、撃ち続けるナナ、それでも接近のスピードは緩めず近づいてくる。距離を積まれつつあるナナは、こうなったらと左腕のスナイパーライフルを近・中距離用の三連バルカンに変形、騎士ガンダムに乱射する。

だが乱射の細かい弾幕に騎士ガンダムは気にも留めず突っ込んでくる。

そうこうしてる内にバルカンの弾が切れた。

「あっ！」

もう騎士ガンダムは目の前だ。今度は逃げ切れる自信がない。

焦りながらナナは背部の装備発射スイッチを押す。が、バラエーナとクスイファイアスは反応しない。

——撃てない?! どうして!?

そう思ったと同時にGポッドの警告音が走る。モニターの端には『energy・shortage (エネルギー不足)』の表示があった。

「エネルギーの残りと残弾には常に気を配れって言っただろ！」

コンドウはフリーダムを切り裂きながら叫んだ。

「そんな事言っただってええ!!」

ナナが答えると同時に乗機は爆発した。

「くう……何度もやってると脳みそに響くわね……」

Gポッドから出たナナは眼を回しながらぼやいた。フリーダムの高速移動はかなりの振動をとまなう。

「あそこはビームサーベルにしとくのが正解ツスよ、ハジメさん」
観戦していたソウイチが指摘する。

対戦していたコンドウもGポッドから出てきた。

いつも皆が集まる模型店『ガリア大陸』だが今日はいつもと違いアイはいない。学校で生徒会のヤボ用だ。

今日のお馴染みのメンバーはナナとコンドウ、ツチャ、ソウイチの

四人だけだった。

「そうはいつてるけどねアサダ、オツサンあんな勢いで突っ込んでくるんだもん。本気で来るんだから正直怖いわよ」

「いや、だとしてもどんな時でも平常心を保つのは大事だよ。突っ込んでくるコンドウさんが怖いのは解らんでもないけど」

「……そんな怖いか俺……」

『うん。かなり（っス）』

ナナが自信を失い、それから立ち直って以来、ナナは積極的にコンドウ達とバトルを通じた特訓をしていた。

初めコンドウ達が手加減を加えたメニューだったが今ではコンドウも本気を出し始めてきている。

「でもちよつとずつ自信はついてきてるって感じ、いつかオツサン達にも勝って見せるわよ」

「その意気だ。ヤタテの力を借りたとはいえお前はしつかりサツマに勝った。奴にもいつか追いつけるさ」

「バトルの実力は、ね。でもまだ自信ないのあつてさ」
「？」

首をかしげるコンドウにナナはフリーダム・アルクスを見せる。

「こいつもアイやオツサン達に手伝ってもらって作ったけど、いずれはアタシ自身で改造できるようになりたいんだ。でもアタシ改造した事ないし……」

フリーダム・アルクスはアイやコンドウ達のアイディアを元にフリーダムを改造した物だ。だが実態は、ナナがコンドウ達の作ったパーツをくつつけただけだった。

ナナ本人としてはいずれサツマとの戦いにおいては純粋に自身で作ったガンプラで挑戦したいと思っていた。

「初めての改造か……、よし、ならいいのがあるぞ」

怖いと言われたショックを隠しながらもコンドウは提案した。

……

一階、店の奥の工作室、そこでコンドウら三人はナナにレクチャーをしつつ改造ガンプラを作っていた。

「そこでビルドストライクの額にウイングの角を接着するんす。で乾いたら頭部を接続して完成」

「こうやって……、これで完成ね！」

完成した改造ガンプラを目の前に立たせる。その名は……

「ビルトワイバーンガンダム、完成だな」

『ビルトワイバーンガンダム』『ビルドファイターズのコミカライズ外伝、『プラモダイバーキット&ビルド』の主人公機。

ビルドストライクガンダムにウイングガンダムのパーツを組み合わせており両者のいいところとでもいえるべき機体だ。

劇中ではこれを基本に、様々な追加改造を施し世界大会を勝ち進んだのだ。ちなみに読みは『ビル（ド）』ではなく『ビル（ト）』製作者が『館山ビルト』という少年だからだ。

「なんか凄いアツサリ完成しちゃったわね〜」

ナナは目線をビルトワイバーンの高さに合わせて見つめた。ただ二体のガンプラを分解し組み直す改造だ。改造というともっと難しいイメージがナナにはあった。

「わざわざ最初っから難しい改造をする必要もないだろう。誰だっつてこれ位から経験を積むもんだ」

「ただこれだけってのもなんだから、これから何か追加してみるか？」
「うーん、いきなりそう言われてもなー」

ナナはワイバーンの全身をくまなく見つめる、ふとシールドが目についた。

——コイツ、ストライクと違って純粋な手持ち式なんだ——

ナナがそう思ったときだった。

「たのもーっ！ですうー！」

勢いよく工作室のドアが開き一人の女が入ってきた。

「?!」

「ハジメ・ナナちゃんさんいますかア？」

染めた金髪ショートの高身の女の子だ。フリルがやたらついたピ

ソックスのロリータファッションを着ており異彩を放っていた。

声もやたら甘ったるく喋っており妙なオーラがでていた。ナナと年が近そうだ。

「……えと、ナナはアタシだけど？」

恐る恐る名乗るナナ

「うみゆう〜！ハジメ・ナナさん！ユキとガン普拉バトルしてください！」

女の子はピョンピョンはねながら自分を指さす。ユキと言うのは自分の名前らしい。

「え？アタシ？アイじゃなくて!？」

「ユキは『ゴウセツ・ユキ』っていうんです、模型店『ルジャーナ』でサツマ・イモエにバトルで勝つなんてすごいですう〜！」

『ルジャーナ』？という事はサツマさんのいた所からわざわざ来たのかい？」

「そうなんですウ〜、ナナちゃんさんに憧れちゃってユキとバトルしてほしいなあって思ってきたんですウ」

『ルジャーナ』って隣の県っすよ。喋りの割には熱心なビルダーっすね。もしかして学校休んできたんすか？」

「……うみゆう、学校さんわすれちゃった〜☆てへっ」

——なんだこの人……——

自分を小突く動作をするユキ、男を骨抜きにする動作ではある物の言動やら外見やらであまりにも行き過ぎてる。

コンドウ達はうすら寒いものを感じていた。

「……いいよ、バトルしてあげる」

やや悩むもナナはバトルに応じた。その反応にソウイチがええ、と驚く

「ハジメさん、いいんすか？ヤバイっすよこの人、正直関わんない方が……」

「む〜っ☆そんな事言うなんてひどいんだよお、閻魔様にベロひっこぬかれちゃうんだからあ！」

頬を膨らませるユキ、それはウソつきの話だとツチャが返す。

「形はどうあれアタシだって認められたって事でしょう？アタシだって自信はそれなりにあるしね」

「わあい！よろしくおねがいしますう☆」

「ただ、少し時間を頂戴、使うガンプラの調整がしたいの」

そしてユキが出て行つた後、ナナはコンドウ達を集める。

「本当によかったんスカ？あれ何か腹に一物抱えてる感じツスよ」

「まあなんか接していてそんな感じはしていたけどさ、アタシに憧れてなんて嬉しかったし断りきれないよ」

「まあ、判断するのはお前自身だしな。外見で差別するのもよくないし」

「で、調整と言ったがビルトワイバーンに何かやっておきたい事でもあるのかい？」

「まあね、……それでちよつと手伝って欲しいんだけど」

そして数分後、ガンプラバトルが始まった。ステージは極寒の雪山、曇天の中をビルトワイバーンは飛ぶ。

『どうだ？ビルトワイバーンの感覚は』

観戦モニターからナナにコンドウが声をかける。観戦モニターからは悠々と雪山を飛ぶビルトワイバーンが見えた。

「前使っていたストライクをそのまま強化したって感じね。ストライクで慣れてる分、フリーダムよりも使いやすいかも」

感想を漏らすナナ、と、Gポッドに警告が響く。

「?!」

ナナは警告した方向へシールドを構える。その方向、下の雪原から一発の弾が煙を引き迫ってきた。

「ミサイル?!ううんバズーカの弾!」

飛んできた弾をシールドで受ける。着弾により起こる爆発。

「んっ!」

耐えるもすぐさま後ろから警告音が響いた。「また?!」とナナが防御を取ろうとするが対応する前にビームがワイバーンに飛んできた。背中に直撃するビーム、

Gポッドに右の羽根の損傷を知らせる警告が出た。

「しまったー！これじゃ飛べない!?!」

ナナが叫ぶ中、下の雪原に落ちる。積もってる雪はかなり深い、起き上がったワイバーンの膝まで雪は積もっていた。

「くっ！撃つてきたのはー!」

「うみゆく☆ここなんですう」

気の抜けるユキの声だ。しかし彼女の乗ってる機体を見てナナは、コンドウ達は愕然とした。

「見て下さいー！ドムトルーパーっスー!」

観戦モニターを見ていたソウイチが叫ぶ。ドムトルーパー『ガンダムSEED DESTINY』に登場したSEED版のドムとも言うべき機体だ。

『ファースト』に登場したドムは重量級でありながらもホバーで軽快に飛び回る高機動機だ。オマーージュであるこの機体も同じ特徴を兼ね備えていた。

ユキの機体は全身を白と青系で塗装、背中には『ケルベロスバクウハウンド』という機体の装備を取り付けており、かたの後ろから首長竜の頭のようなビーム砲が伸びていた。

「寒冷地仕様というわけか!」

「これがユキのパートナー、『ドムトルーパー・スノーマン』さんなんですウ☆」

そのままドムトルーパーは全身にビーム状の赤い膜を張り、ビルトワイバーンに体当たりを仕掛ける。

膜は雪を溶かしながらワイバーンに突っ込んできた。

「っ!?!」

シールドで防御するナナ、しかし重量級のドムの体当たり、吹っ飛ばすことはなくとも後ずさりはしてしまう。

「いつくよ☆」

なおも何度も体当たりをぶつけようとするドムトルーパー、

「くっ！」

ナナはワイバーンを一度後ろに大きくジャンプする。そのまま右手に構えたバスターライフルを構える、

「何度も良い様にされるもんですか！」

そして最大出力で撃った。エネルギーの奔流はドムトルーパーを飲み込む。起こる大爆発。

「……やったの?!」

着地するワイバーン、だが爆炎の中をドムトルーパーは平然と突っ込んできた。

「ちよ！効いてない!？」

「残念だったですねぇこのフィールド、『スクリーミングニンバス』は攻性の防御フィールドなんですよ、

更に発生させてる胸の部分にはクリアパーツを取り付けてあるんだあ。無改造のバスターライフルだって無効な位出力はアップですよ」

先程の言葉づかいよりもしっかりした口調でユキは答える。そしてなおも容赦なしに体当たりをかます。シールドで防御を続けるもシールドの赤い表面は碎ける。

下の白いパーツも亀裂が入っていた。

「あは☆シールドさんがおでかけしちやったあ☆」

言葉とは裏腹に確実にワイバーンを追いつめていく。ドムトルーパーの表面にはウエザリングと呼ばれる汚し塗装が施されており、

それがガンプラバトルでは機体強度を高めていた。

「なら接近戦で！」

ナナはバスターライフルをその場に突き刺すとシールドからビームサーベルを取り出す。そのままドムトルーパーに斬りかかった。

「だああっ！」

「あはッー！」

ユキは笑みを浮かべるとドムのバズーカを尻にマウント、背中のバクウのトサカを切り離し、合体させる。これにより短剣状の手持ち武器になるのだ。

ドムトルーパーはその武器でワイバーンのビームサーベルを簡単に受け止める。

「っーだつたらー！」

ナナはワイバーンの頭部からバルカンを発射、だが向かい合うドムの装甲は強固で傷にもならない。

「たいしたことないですねぇ〜」

そのままもう片方の手でワイバーンを殴り飛ばした。悲鳴を上げるナナ、ワイバーンの顔に亀裂が入る。

「このスノーマンさんは頑丈なんだあ☆、全身にウエザリングを入れてるからねえ〜」

ウエザリング、汚し塗装の意味でガンプラに実際の戦場に出た兵器の様なリアリティを持たせる手法だ。

ガンプラ以前から戦闘機や戦車モデル等、スケールモデル時代からあった技術であり、全身に汚しをいれたドムはユキのイメージからますます遠ざかって見えた。

「だからあれだけの機体強度を実現してるわけか……」

コンドウがドムトルーパーを見ながら呟く、

「あれで機体強度が上がるなんて……アタシにはただボロくなってる様に見えないけれど」

ナナの何気ない一言に、コンドウ達は『がくっ』とずっこける。

『ボロいってお前なあ……』

『まあ、鉄だつて生より焼きを入れた方が固くなるって事だな』

「あくそういうもんね」

呆れ説明するコンドウ達、だが一人ナナの発言に違う反応をする人物がいた。

「ボロい？ユキのスノーマンがあ？人が丹精込めて作ったもんを馬鹿にすんじゃねえ!!」

ユキだ。いきなり怒気を孕んだ声で叫び、ビルトワイバーンに斬りかかろうとする。

「!?」

ナナは大きくバックステップをかけながら、ビルドブースターのビームキャノンを展開、ドムトルーパーに発射、

「その言葉遣い、ちよつとは芝居から素に戻ったって感じね」

「チツ！ユキとした事が……！憧れたは芝居だけどそれ以外は趣味ですよお！実力はともかく、もうちよつと知識のある奴かと思えば！

ここまでの素人とは拍子抜けですよお！わざわざ憧れたなんて理由つける道理もないですねえ！」

——趣味だったのか……——

ユキはビームシールドでビームキャノンを防ぎながら暴露。

あまりにもわざとらしすぎる振る舞いだった。全員があれば素じやないと思っていた為、今の荒らい雰囲気誰も不思議に思っていなかった。

「サツマ・イモエを倒したあなたを仕留めればユキは有名ビルダーになれるんですう！」

再びスクリーミングニンバスを稼働させタツクルを仕掛けるユキのドム。

——ビームサーベルじゃ分が悪い！やっぱりバスターライフルが無いと！——

ナナはドムから背を向け、バスターライフルを突き刺したところへ戻ろうとバーニアを吹かす。今現在結構ライフルからは離れてしまっている。

ユキはバズーカを構え、ワイバーンにタツクルを仕掛けようと追いかける。(射撃や武器の使用が出来なくなる為、スクリーミングニンバスは解除)

「手ごたえないですねえ！ヤタテ・アイの方がもつと強いですよ！」

また元の口調に戻りながら(表面だけだが)ワイバーンを襲うユキ

「だったらアタシよりアイを狙った方がいいと思うけど？」

ワイバーンの背後からバクウの頭部からのビームガン、バズーカの弾が飛んでくる。それを凌ぎながらナナは反論。

「おバカさんですねえ。ハジメさんだからいいんですよ。強さは関係ないの。重要なのはイモエに勝ったハジメさんを倒したという事実ですう。」

でもハジメさんの力はまだ未熟、あのイモエを倒したハジメさんを倒せばイモエに適わなくとも名を上げることができそうです」

『お前！それが真つ当なビルダーのやる事か！』

コンドウがユキのドムに抗議する。

「アハハハ！勝てばいいんですよ！」

笑うユキを尻目に丁度バスターライフルを突き刺した場所についたナナはライフルを引き抜いた。

「あつた！これさえあれば！」

ナナはそのままドムトルーパーにライフルを構えようとする。だが振り向こうとした瞬間、

ユキは笑いながらバズーカを放つ、実弾のバズーカは振り向こうとしたワイバーンの背中に当たり爆発を起こした。

「うわっ！」

ナナのワイバーンは雪原に倒れ込む。すぐさまうつ伏せから仰向けに体勢を変え、バスターライフルを向けるが、

ナナの目の前に映ったのは手持ちのビーム短剣を構えたドムトルーパーだった。

「ゲッ！」

すかさずナナはワイバーンのシールドを胴体前面に構える。

「見てください！ユキのドムトルーパー！元々黒い色から塗り辛い白を塗り、全身にデカールとウエザリングは欠かさないんですよ！」

ワイバーンに馬乗りになると、ドムトルーパーはワイバーンのコクピットに短剣を突き刺した。シールドを構えてはいたが半壊状態のシールドでは防ぎきれず

短剣はシールドを貫通する。手ごたえがあつたと確信するユキは

立て続けにワイバーンのシールドに突き刺した。突き刺すたびにシールドは貫通する。

「それに比べ、ハジメさんはただ組み替えただけの簡単改造のビルトワイバーン！そんな素人でもできる改造でユキに勝つことなんてできないんですう!!」

ガツ！ガツ！と何度も短剣を打ち付け、ユキは動きのないビルトワイバーンが沈黙したと確信する。

「ハハハ！これでユキは勝った！ユキのスノーマンは強いのだあ！」
勝利を確信し、高笑いをするユキ。だがコンドウは笑みを含めて言った。

「確かにそのドムトルーパーはいい出来だ。だが……自分で言ったことを痛感することになるな？」

「なにつ?!」

と、突然ユキのGポッドに警告音が響く、ビルトワイバーンがまだ生きてる？とユキが思った直後、ドムトルーパーの左部分を大型のビームが襲う、

左半分はそのまま吹き飛んだ。

「なあっ！」

その際の衝撃で高く吹っ飛ぶ右半身だけのドムトルーパー、どういう事だとビルトワイバーンを見るとバスターライフルを構えたビルトワイバーンが見えた。

「そんなんっ！まだ生きてた!?!なんでっ！」

納得できないとワイバーンを見るとワイバーンの左腕にシールドは握られておらず、緑色に光る六角形の盾が見えた。

「ビー・ビームシールド！」

ビームシールド、その名の通りビーム状のシールドで、手持ちではなく腕から発生器を取りつける機構だ。

ちなみに流用キットは『HGUCガンダムF91』

「そ、アタシがいつも使ってるストライクやフリーダムは腕からシ―

ルドをホールドしてたからね。ビルトワイバーンのシールドは手で持つしかなかったから、

落とした時の為にこれをつけてたってわけ、ビームシールドって奴の存在は知ってたからね」

『いっだってビルダーは簡単な改造から経験を積むし、それから独自のアイディアを思いつくものだ。』

それを甘く見たお前の敗因という事だ。(人が丹精込めて作ったものを馬鹿にするな) というな』

「畜生……この……スットコドツコイがああつっ!!」

右半身だけのドムトルーパーはそのまま爆散、至近距離で撃たれたバスターライフルによって勝負はあっけなくついたのであった。

「クッ！ユキのドムトルーパーが倒されるなんて！」

ユキはドムトルーパーを大事そうに持つ一方でワナワナと怒りに震えていた。

「少しはこれでハジメの強さを認める気になったか？」

「フンだ！『ウルフ』のメンバーに手伝わってもらったおかげで勝てたって事！忘れんじやないですよお！」

なおも悪態をつくユキ、そんな彼女の後ろで一人の人影が現れる。

「なに言ってるんだ？この愚妹」

野太い声だ。その瞬間、ユキの表情が強張る。恐る恐る振り返るユキ

「ゲエッ！ヒョウお兄ちゃん!!なんでここに?！」

お兄ちゃんと呼ばれた男、坊主頭のコンドウに負けない体型の大男は凄みのある顔でユキを睨みつける。

「今日学校サボっただろ？お前の友達から連絡が来たんだよ。(ユキの病気は大丈夫ですか?) って」

「な……なんでここが?！」

「机の上に今日の計画表が乗ってたんだよ。アホか、自分で証拠遺すとか」

「し……しまった……」

「明日先生に報告するからな？ちやんと説教受けるよ？」

怯えるユキからナナ達に顔を向けるヒョウと呼ばれた男、険しい表情は一変、強面ながら優しい笑顔になる。

「すいません、うちのバカ妹がご迷惑をおかけしまして」

いえいえとナナ達は答える。

「それにしても遠目ながらもバトルを拝見させてもらいました。いずれは私ともバトルしてみたいものですね……」

ビルダーとしての表情を見せながらヒョウは言った。

「じゃ、帰るぞ」

ひいひい助けてええとわめくユキの首根っこを引きずりながらヒョウは帰っていった。

「やったじゃないスカ。あのドムトルーパーを倒すなんて」

珍しく褒めるソウイチ、だがナナの表情は勝利に喜んでる様子はない。嬉しくないのかと聞くツチャ

「ううん、アイツの言った通りだよ。オッサン達の力借りて勝ったって思っつき。ビルトワイバーン自体オッサン達に習った機体だし」

「だがあのビームシールドの機構はお前のアイディアだ。お前の実力さ。胸を張れよ」

コンドウのフォローにうん、と頷くナナ、そしてユキ達と入れ違いざまにアイが二階に上がってきた。アイはナナ達を見つけるとすぐさま駆け寄る。

「あ、いたいた。遅くなっちゃったけどまだ皆いてよかったよ。ところでさっき入れ違いで変な二人みたんだけど」

「アイ！それがね！さっきの奴とアタシバトルして勝ったんだよ！」

コンドウの言葉を聞いた所為かナナは嬉々としてアイにバトルの事を話そうとする。

——ハジメも実力をつけてきた。こうやって自分で改造のアイディアを出しているという事は、コイツも一人前になりつつあるな——
コンドウはアイに武勇伝を語るナナを見ながらそう思っていた。

第23話 「くじ引きガン普拉バトル！」

「フア〜……」

「随分あくびすんのねアイ、昨日寝てなかったの？」

朝日の登りきった午前8時、走る電車の中で、欠伸するアイに隣のナナが問いかける。

「恥ずかしながらね……12時回ったあたりから、もうちよつとガン普拉改造しようといじってただけど、その所為で寝付けなくなっちゃって……」

「ん？何を改造してたんだ？」

向かい合う座席に座ったコンドウが反応する。「改造」この単語にコンドウは興味を抱いた様だ。

「ユニコーンですよ。アーマー着せようと色々ジャンクパーツ合わせてたんですけどどうも気に入らなくて……」

アイが瞼を擦りながらつぶやく、

「ほう！」

「それはそうと……なんなんだろうね、イモエ地元のガンプライベント」

「さあな、彼女がこっちのイベントに招待したいとか言っていたが、肝心の内容は話してくれなかった」

「内緒って言ってましたからね」

行先は前回サツマとガン普拉バトルをした場所、模型店『ルジャーナ』

先日サツマからアイ達に『一緒に地元のガンプライベントで勝負しよう』という連絡があったのだ。

参加できたのはアイとナナ、コンドウの三人、ツチャとソウイチは予定の為来れなかったが……。

「その所為でせつかくの休みなのに平日と同じ時間で起きるハメになったけどね」

「いいじゃないか、皆予定なかったし、ダラダラ家で転がってるよりはいいだろう。それよりヤタテ、辛いなら寝ていいが……、アーマー

着せる改造ってどうしたいんだ？」

「あ、大丈夫ですよ。うくん、パーフェクトガンダムみたいにしようかって。HGUCだから変形はナシで割り切る予定です」

「デストロイモードか？」

「はい、でもそうなるのと単純に鎧着ただけじゃサイコフレーム隠れちゃうしどうしようかかって考えてて」

「まあそうなるよな、フルアーマーユニコーンでもアーマー着なかったし」

徐々に話に熱がこもってくる。隣のナナは頬杖をつきながら、アイが眠そうな顔から活力に満ちた顔に変わってくるのを横から眺めていた。

——本当、好きな事やってるアンタはいい顔するよね——

そして一時間後、一同は電車を降り、最寄りの市民体育館へと着いた。待ち合わせはここだ、その入り口付近で彼女、サツマは待っていた。

「おはようございます。お待ちしておりますましたわ。皆さん」

「あ、イモエ、随分早い時間に呼んだじゃない。どうよ、その後友達とは」

ピクツとサツマの口元が歪む。

「サツマとお呼び下さいまし……、恥ずかしながら友達とは和解出来ましたわ。今は昔と今のメンバーを統合して新しいチームとなりましたの」

「そっか。仲直りできたんだ」

「残念ながら今日は都合がつかなかった為これませんがね。本当は友達をあなた達に紹介したかったのですが」

「残念、アタシも一緒に出来るならやりたかったけどな」

「あら命知らずですわね。ワタクシのチームは前のメンバーも粒ぞろいですわ。ハジメさん程度では瞬殺は確実ですわね」

名前を言ったお返しとばかりにいたずらな笑みを浮かべ、サツマは

ナナに言う。

「ちよつと、いきなりそれはないんじゃない？」

「さき、ずつと店の前にいるのもなんですから入って下さいまし、早く受付を済ませましょう」

「スルーすんな！」

——……友達は未だワタクシの入った枠は残していてくれたらしくて……気に入りませんが……感謝はしますわ……ナナ……

口を尖らせるナナを尻目に、誰にも聞こえないようにサツマは呟いた。

「ん？なんだろう？あの白い箱の山」

受付を済ませたアイ達は館内に入る。廊下には長方形のミーティングテーブルが廊下の壁にそって並んでおり、その上には白い箱の山が積まれていた。

「あれが今回のイベントの目玉、『くじ引きガンプラ』ですわ」

「くじ引き？なんなのイモエ」

「だからサツマですわ……。あの中には様々な種類の作ってないガンプラがあります。今回のイベントはあの中の好きな箱を一つ選び、

その中のガンプラを組み立ててバトルする、という内容ですわね」
「なるほど、自分に合わない機体を選ぶこともありそうだから実力意外に運も絡みそうだな」

コンドウが興味深そうに積まれた白い箱を見つめる。

「その通り、ついでに三体でのチームでの出場が可能ですわ」

「へえ、面白いね。素組みでやるの？」

「はい、無論早く受付を済ませた順からガンプラを選ぶルールですから、早いうちに受付を済ませた方が必然的に良い機体を選ぶ確率が上がる為、有利になりますわ」

「だからこんな朝っぱらに呼んだってわけ？」

その通りですわ。と返すサツマ

「へ、塗装とかの必要がないならアタシも気兼ねなくできそうだね」

「そううまくはいきませんわ。ハジメさん」

「ん？どういう事よ？」

「ここにだつて強いビルダーは他にもいますもの。当然今日その人が出ますわ。そしてワタクシは友達がこれない為、その方とチームを組みますわ」

「やっぱいるんだ……」

「その通り、もう来ててもおかしくないんですけど……」

辺りを見回すサツマ

「その強豪ビルダーつて、こないだ『ゴウセツ・ユキ』つて人と戦ったけど、その人？」

「いえ、その方より強いですわね。もう来ててもおかしくないんですけど……」

もう周りは受け付けを済ませたであろう人がちらほら見える。男も女もいれば、年配の人間も若い人間も見えた。

「うーん、見ただけじゃわからんなあ」

「えくと……あ！いましたわ！」

サツマが指を指す。そこにはベンチに座つてカバーのかけられた本を読んでる少年がいた。中性的な少年だ。

「カサハラくん！おはようございます！」

爽やかな笑顔でサツマは駆け寄る。それを見たカサハラと呼ばれた少年は……

「!?ひいつー！サ！サツマさん！」

ビクツとすくみながら答えた、怯えながらもそのまま手をひかれ、連れてこられる少年。

「彼が『ルジャーナ』の強豪ビルダー、カサハラ・リョウ君ですわ！」

「あ……こ……こんにちは……」

オドオドしながら消え入りそうな声で挨拶をする少年、身長は140 cm位か、童顔と身長から見た目かなり幼く、

かつ中性的に見える。男の娘という奴だ。

タカコがいたら間違いないく食いついたらだろうな。というのがアイ達の感想だった。

「サツマさん、小学生ですか？」

「は……はい……五年生です。あなた達は……？」

「隣の県からこのイベントに参加しようと来たんだ。君も出るのかい？」

「はい……あの……お手柔らかに……」

怯えてるのか、サツマの後ろの位置で困惑顔で答える少年に、どうも強豪ビルダーと言われた実感が持てないアイ達だった。

「ちよいイモエ。こつち」

「だからサツマですわ。なんですの？」

ナナはサツマを連れて廊下の端に移動し、サツマに詰め寄る。

「あのさいモエ、本当にこの子が強豪ビルダーなわけ？」

「だからサツマつつてるでしょう。そうですね。彼はこの辺では少しは名の知れたビルダーですわ」

「あのビビりっぷりからそうは見えないけど」

「まあ、初対面ならそう見えますわね。ガンプラバトルでならわかりますわよ。……解らずじまいかもしれませんが」

「は？」

ボソツと付け足すサツマの発言にナナは理解が出来なかった。

その後、イベントが始まり受付をした順にビルダーが箱を取っていく。取ったビルダーはこれから二時間ガンプラを作成し、サバイバルバトルに出場するわけだ。

「全員取ったね？」

アイがナナ、コンドウ、サツマに問いかける。全員が答えるかのように白い箱を見せた。

「じゃあさつき言った通り、いったんここで別れよう」

「それぞれ分かれてガンプラを製作、あえて見せないでガンプラ作ってバトルに参加しようという提案だったな」

「うん、バトルで再会して何を作ったか見せつつ戦おうって事」

「了解ですわ。二時間後に会いましょう」

そして全員が別れる。かに思えたが……

「あのきアイ、ちよつといい？」

アイに一人話しかける。

「ナナちゃん？どしたの」

「いや、なんか変なガンプラ引き当てたみたいで、なんの作品に出てたのか聞きたいんだけど」

「変な？」

「うん……これなんだけど」

そういつてナナは箱の中身を見せた。アイは袋に入ったランナーの束を見る。三角形のパーツがやたら多く、一方で丸みを帯びたパーツも多かった。

説明書に描かれた完成図はガンダムタイプだ。しかし普通のガンダムタイプとは違う。

クリアイエローのアンテナ、丸みを帯びたフォルムにさつき見た赤、青、黄の三角形のパーツ全身に装着してある。ビームサーベルは背中に六本もあり、

そして何より背面にバックパックがない。通常のガンダムとはまるで違う。まるで玩具の様な印象すら受けた。

「これって……」

「こんなにサーベル持ってどうすんのよ？つて思つて」

「凄い！ビギニングガンダムだ！」

「ビ・ビギ……？」

「うん！登場作品のない最初からガンプラだけの機体だよ！ハル君も初めて作ったガンプラがこのガンダムだつて！」

これの強化型が選手権ではハル君が乗って大活躍したんだよ！」
眼を爛々と輝かせてアイは説明する。

「ハル君の……じゃあアンタにとって思い出の機体なんだ」

「あ、うん。まあ、ね」

アイにとつて目標でありきつかけの人だ。『思い出』という言葉にアイは歯がゆさを感じながらも返事する。

「じゃあアンタのガンプラとアタシのこれ、交換する？そういうガンプラとなるとアンタが乗った方がいいんじゃない？」

「いや、さすがにそうは思わないよ。そのガンプラはナナちゃんが使ってる」

「分かった。ハル君程じゃないけど、やってみるね」

「うん、じゃあバトルでね」

ナナは近くの観客席に座ると隣の席に箱を置き、ニツパーを手にした。

「ビギニング……始まり……か」

……

そして二時間後……、サバイバル戦が始まった。ステージはランタオ島。『Gガンダム』に登場した島で、島全体がバトルロイヤルの戦いの場だ。

曇天の空を飛ぶナナのビギニングガンダム。

ナナは始まってさっそく戦闘になった。ビギニングが飛んでる所を『Zガンダム』に登場した量産機、

ハイザックが地上からマシンガン撃ってくる。その名の通りザクの発展型でフォルムはよく似ている。

「始まって早々!?だけどー」

シールドで弾丸を受けると、ナナはビギニングのビームライフルで撃ちかえした。ハイザックはビームをかわしビギニングに迫る。

「接近戦！ビームサーベルをー」

背中にある三本のビームサーベルをまとめて抜くビギニング、そのままハイザックを叩き斬る。切り裂かれたハイザックはそのまま爆炎に包まれて落ちて行った。

「一気に三本も持てるなんて、変わってるわねホント、羽根もナシに飛

べるし……」

飛ぶ感覚はフリーダムやストライクの飛行とまた違った感覚だ。飛ぶというより浮かぶといった感覚だろうか、

ナナはその飛行感覚の違いに違和感を感じる。と、Gポッドに警告音が鳴り響いた。ナナのガンダムめがけて二連の砲撃が飛んでくる。

「!? 誰ー」

ナナは空中で機体を器用にくねらせ避ける。非常に動きやすい機体だとビギニングの感想を心で述べるナナ。

かわした砲撃は放物線を描き遠くの岩山に着弾。大きな爆発を起す。

砲撃は森林地帯から撃ってきた。威力からしてかなりの強敵だとナナは警戒しながら森へとビームライフルを構える。

「まさかビギニングガンダムを引き当てるとは驚きましたわ」

「その声！ イモエー！」

「サツマですわ！ その機体はあなたには過ぎた物です！ 即効退場させていただきますよう！」

森からサツマの機体が姿を現す。小型の球体にマニピュレーター、頭頂部に2連装キャノンを備えたHGUCボールだ。

『ファースト』から登場。本編劇中は棺桶扱いされるなど弱い印象が強い。

大きさはナナのガンダムの膝くらいしかなく、その珍妙な姿にナナは吹き出した。

「って言ってる割にはシヨボ！」

「やかましいですわ！ 単純にハズレ引いただけです！ たかがガンプラの基本性能！ 戦力の決定的差でない事を思い知らせ差し上げますわ！」

「お決まりのセリフを！ 返り討ちよ！」

地上のサツマがキャノン砲を向け、上空のナナがビームライフルを向ける。しかしその時だった。突然オレンジ色のビームがビギニングに迫る。

「何！上からっ!?」

警告音に気づき、真上にシールドを構えて防御するナナ、シールドの表面はただれるも防御しきる。

「いきなり誰ですの?!」

「ヒヤーツハツハツハ!!防いだかあ?」

「っ!」

撃った機体。一体のガンプラがビギニングより高い空中で姿を現す。ガンダムタイプで赤と白で分けられたボディが目を引く。

紅白のガンダムは先ほどまで戦っていたであろうボロボロのガンプラを頭から挿んでいた。胸に穴が空いたM1アストレイだ。(ガンダムSEEDに登場した量産機)

先程の赤い板が紅白のガンダムの背中に納まる。

「彼は！まさかりリボーンズを引き当てるなんて思いませんでしたわ！」

サツマが驚愕の声を上げる。リボーンズガンダム、『ガンダムOO』のラスボスだ。

「ああん？さっきの年増共か？そっちのオバサンはボールひくたあついでねえなあ。安心していいぜ？俺様は御覧の通りリボーンズだ。勝ちも確定だしなあ」

リボーンズのビルダーはサツマのボールに話しかける。彼女の味方の様だ。

「年増?!ア・アンタね……初対面に失礼でしょうが!」

「ああ?!ボケたのか?来たときあつたらうが!」

「ハジメさん……その人、カサハラ・リヨウ君ですわ」

「は?!」

ナナは素っ頓狂な声を上げた、あまりにも今朝あつた少年とは喋りも態度も別人だからだ。

外見もリヨウは前髪をオールバックにし、(額に生々しい傷跡がある)目つきも悪くなっており印象が全く異なっていた。

「知りませんか？ガンプラバトルに入ると性格が変わるビルダーもいるって」

「あーアイが前に言ってたような……」

「そういう事ですわ、彼もその類ですの」

「呑気にくっちゃべってんじゃねえよ！行けや！フィンフアングウ！！」

リボーンズガンダムはM1アストレイを放り投げると、背中から先程のフィン状のフアングを放出する。ガンプラバトルという制約上、登場原作程の性能はないにせよ、難敵なのは間違いない。フィンフアングはビギニングに高速で迫りビームで追いつめようとする。

「うわーちょっとそれはないんじゃない!?ならこっちもー」

今の所距離があるためビームはかわせる。が、いつ当たるか解ったものではない。

当てる自信はないがナナはビギニングのビームライフルを構える。フアングを撃ち落そうというのだ。

だが直後、そのライフルにキャノン砲が撃ちこまれ爆発。

「!?うわー！」

「フアングだけかと思ったら大間違いですよ！」

サツマのボールの援護だ。フアングに気を取られていたナナは避けることが出来なかったのだ。

誘爆によりバランスを崩したビギニング、更にそこからフィンフアングがビギニングに撃ってきた。

「ゲッー」

ナナはシールドを構えて防御、が、再装填したボールのキャノンがビギニングに命中、着弾の衝撃でビギニングは荒地地に墜落。

距離をつめたリボーンズはビギニングを破壊しようとGNバスターライフルを向ける。

「なんだあ。イマイチだなつまんねえ、とつとと消えな」

「クソッ！機体も実力も向こうが上なの!!」

その時だった。リボーンズへ何かが飛んできたのだ。それはボールと同じキャノン砲の弾だ。まっすぐリボーンズガンダム目掛けて飛んでくる。

「なんだあ?!」

リボーンズガンダムは弾を撃ち落そうとライフルを撃つ。ビームは弾を飲み込み爆発するがその直後、

GNバスターライフルを何かが切り裂いた。輪っか状のビームだ。

「何だとお!!」

「誰なの!?まさか!」

ナナが声をあげたその時、二体のガンプラが姿を現した。片方はサツマと同じHGUCボールだ。

もう一体はセーラー服を着た少女のような姿のガンダム、『Gガンダム』に出てきたノーベルガンダムだ。

「あの機体、そうかアイ！その女の子みたいなガンダムに乗ってるのアイなんでしょ!!」

アイの機体だと確信し通信を入れるナナ、そして通信で出てきたビジョンは

「俺だよ」

「……は?」

コンドウだった、しかも彼の衣装がまた酷かった……体のラインが出る水色のボディースーツ、

しかも胸元にはリボンがついておりあまりにもコンドウにはミスマッチだった。ぶっちゃけ気持ち悪い。

「気持ち悪っ!!なんでそんな恰好してんのよオッサン!!」

「やかましい!俺だって恥ずかしいんだ!Gガンダムの機体引いたビルダーは強制でFポッドだったんだぞ!」

「Fポッド?何それ?」

顔を赤らめながらコンドウが言う。通常、ビルダーはコクピットを模したGポッドでシートに座り操縦するが、

FポッドはGガンダムの操縦システムを模したポッドだ。直にビルダーの動きをトレースする為、

立った状態でビルダーは動かす必要がある。そして必然的にスーツも体にフィットするタイプになる。割と近年になって出回り始めたポッドだ。

「残念だけど私はこっちのボールに乗ってるよナナちゃん、皆揃ったからにはもう大丈夫」

「あ、そっちの玉みたいな奴ね。……アンタもそれ引いたんだ」

アイのボールは機体こそ同じだがサツマとは武装が違った。頭頂部のキャノン砲はひとつだけだった。

「チツ！数が多し！ここはリボーンズキャノンで！」

増えた敵にカサハラが舌打ちする。そのまま反転し、機体に変形する。

「何あれ!?裏返し！」

リボーンズガンダムは前後を反転する事によって砲撃戦用のリボーンズキャノンに変形する事が可能だ。

ガンダムタイプの顔はゴードルの顔になり、飛んでいたリボーンズキャノンはそのまま地面に降り立ち、ナナ達に向く。

「来る!?……あれ?」

身構えるアイ達、が、何もしてこない。

「ちよつとーどうしたのよ！わざわざカッコよく変形した割には何もしてないじゃない！」

「ひいー(´・`・)めんなさい！怖くてえー！」

「……へ？」

カサハラを取り乱した情けない声にナナは絶句した。さっきの口の悪さと威勢からは想像もつかない変化だった。

リボーンズキャノンは何もしない、カサハラはGポッド内でガタガタ震えていた。

「あーあ、変形しちゃいましたか」

余計なことを、とでもいわんばかりの調子でサツマは言う。

「ちよつとイモエ！という事よあれ!？」

「イモエじゃない！という事も、彼はガンダムタイプ限定で性格が変わるタイプのビルダーなんですの、

『ガンダムに乗れば自分が主役みたいに強くなった気になれる』とかで、しかも本人は性格が変わってる自覚が一切ありませんの」

「リボーンズキャノンはガンダムタイプじゃないから、か？」

「その通りですわ」

「……」

「ど！とにかく何はともあれチャンス！何もしてこないならこっちらー！」

「そ！そうだな！」

拍子抜けだが絶好のチャンスとリボーンズキャノンに迫るビギニングとノーベル、そしてボール、カサハラはその三機を見るとますます怯えだす。

「うわああ!!こっちないでええつつ!!」

カサハラは眼をつむり、一斉にGNキャノンを乱射、射線上にある物を破壊しまくる。

「撃ちまくって！でもここからならキャノン砲で狙える！」

アイは狙い撃ちじゃ無い分動かない方がいいと判断、リボーンズキャノンに照準を合わせ、頭部のキャノン砲を撃とうとする。が……

「そうはさせるか！」

「!？」

上空から一機のガンダムがボールに殴りかかってくる。これまた『Gガンダム』に登場した格闘戦主体のガンプラ、ゴッドガンダムだ。恐らくカサハラの子の残りのチームメイトだろう。

「カサハラをやらせはしないぜ！覚悟！」

乗ってるのは大人だ。ゴッドガンダムはボール目掛けてパンチを繰り出す。

「来るっ！っボールだつてえ！」

避ける暇はないとアイは判断、ならばとアイはボールのマニピュ

レーターを使いパンチを受け止める。

ボールがゴッドガンダムのパンチを受け止めるとは思っていなかったのだろう。ボールのマニピュレーターは鳥の足のように小さく細長いのだ。

驚愕するゴッドガンダムのビルダー。

「!?アイー！」

ナナは援護としてビギニングをアイのボールに向けようとするが、

「駄目！ナナちゃんはコンドウさんとリボーンズキャノンを！」

「よそ見とは生意気な！空手段持ちの俺を舐めるな！」

ボール相手にこんな余裕をかまされる事にゴッドのビルダーは怒る。圧倒すべくボールにラツシユをかける。

幾つにも見える拳の嵐、一発でも直撃すれば立て続けに食らうとアイは判断、ラツシユにあわせて高速でマニピュレーターを稼働させパンチを受け止める。

「くううっ!!」

前面から迫り来る拳の嵐を全て受け止めるアイ。ボールのマニピュレーターは割とフレシキブルな稼働を誇る。

が、手が届かない範囲は機体ごと動かさなくてはならないため

機体の移動とマニピュレーターの移動を高速でこなしていた。彼女はもう必死だった。

「ばー！馬鹿なあー！」

ゴッドガンダムの拳をボールが『シユパパパパー!』と全て受け止めている。絵面は完全にギャグだ。ゴッドのビルダーはそれが信じられなかった。

「ニッパーの斬り方ひとつで強度は変わる！それを可能にするのが!!ビルダーなんですよ!!」

「くっ！ならばこれでー！」

腰のビームソードに手をやるとボールに横一閃に降るう。さすがにボールにビームソードを受けることは出来ないだろう。

ゴッドガンダムのビルダーはこれで勝ったと安心していた。が、彼のFポッドに警告が走る。

「何!？」

気付いた直後、ゴッドガンダムの脳天からキャノン砲が撃ちこまれ、ゴッドの頭部と胸部は爆散、ビームソードを振るった瞬間、ボールは高くジャンプしていたのだ。

「相手がボールと油断した……。修行のやりなおしだああ!!」

爆発するゴッドガンダムを尻目にアイのボールは着地、「ボールでよくできたな」と自分でも感心していた。

凌ぎ切ったとはいえボールのマニピュレーターはボロボロだった。やはり素組では無理があつたらしい。

だが直後、考えを切り替えたアイは、ボールをリボーンズに向け飛ぶ。ナナとコンドウの援護の為だ。

「待つてて!皆!」

——その頃ナナとコンドウは……

大型ビームの乱射、ナナは阻まれるがコンドウにとって突破できない弾幕ではない。

「よし!このまま一気に!」

一番乗りは軽量のノーベルだ。だがノーベルがリボーンズキャノンを攻撃する前に、リボーンズキャノンを背後から掴む機体があった。

「何?!別のチームか!」

リボーンズは両腕を掴まれ持ち上げられる。両腕には三本の指状のクローがガツチリ食い込んでいた。クローの持ち主はかなりの大型機だ。

「ひっ!何!」

正体はHGのゾックだ。ファーストに登場した前後対象の水陸両用の機体。その姿は太った河童の様な出で立ちだ。

その大きさ、およそリボーンズの1.5倍、別チームのビルダーの機体なのだろう。

その体軀はリボーンズキャノンを軽々と持ち上げる。そのままゾックは胸部のメガ粒子砲でリボーンズキャノンを破壊しようとする。

「うわああつ!!やめてええ!!」

が、カサハラは慌ててリボーンズキャノンのリボーンズガンダムへと変形させる。

「しまった!変形するぞ!」

「ああもう!こんな時に!」

リボーンズキャノンはそのままリボーンズガンダムに変形、フィンファンングをゾック目掛けて射出した。

「へっ!俺を倒そうなんざ甘えんだよ!!」

カサハラはフィンファンングを操作しゾックを真上から撃ち抜いた。一撃で沈黙するゾック。それを尻目に再びフィンファンングはコンドウ達に向き。撃ってくる。

「くっ!だがそんな簡単にやれると思うな!」

防戦一方なナナに対し、ステップを駆使しながらコンドウのノーベルは、リボーンズに近づこうとする。

しかし隙を突こうにもノーベルとビギニングが近づこうするとサツマのボールが援護射撃で二人の進行を阻んだ。

「マズイよオッサン!このまま固まっていたら皆やられちゃう!」

「ならばハジメはボールを頼む!あんなナリだけどキャノン砲は協力だぞ!気を付けてくれ!」

「あいさー!」

コンドウはノーベルをリボーンズに突っ込ませる。

ノーベルを撃とうとするボールだが、そのタイミングでナナはビギニングをボールへと突っ込ませた。

「イモエ!アンタの相手はアタシよ!」

「ハジメさん!やはりアナタとは個人的に雌雄を決したいところですわね!」

「その機体でよく言うわよ!」

ボールはノーベルに撃つはずだった連装砲をビギニングに撃ちこむ。ビギニングはシールドで防ぎ、ビームサーベルを三本構える。

そのままボールのふところへ入る。

「もらった！」

「斬らせはしませんわ！」

ビームサーベルを振ろうとしたがボールの連装砲は既にビギニングに向いている。

「あなたがビームサーベルを振るう前にワタクシが撃ちぬきましてよ！」

「！甘い！」

そう言うとナナはビギニングの頭部バルカンを撃ち込む。ビギニングのバルカンはビームなので通常の物より強力だ、あつという間にボールは鉢の巢となり爆発する。

「それはやっぱり卑怯でしょおおっっ!!」

「よしっ！オッサンの方は!?!」

ノーベルの方も有利に進めつつある様だ。四枚のフィンファングは主を守ろうとコンドウとアイへ集中砲火をかける。

しかしノーベルはうまくかわしながらビームリボンを操り応戦している。

「やるじゃねえか！華奢な体型の割にはパワーがあるぜ！」

「ガンプラを見かけて判断するなって事だ！」

「しらくせえ！色塗りかえてプリキ○アかアイ○ツ仕様にしてやらあー！」

「塗り替えただけで出来るかあー！」

その隙にアイのボールは、リボーンズの背後から少し離れた場所に着地、

——ヤタテか？——

コンドウは向かい合うリボーンズの背面にいるアイの存在に気付いた。アイはここからリボーンズを狙い撃とうというのだ。

ならとコンドウはビームリボンをビームサーベル状に変形、リボーンズに斬りかかる。

「いい度胸だ！」

リボーンズもビームサーベルを持ちノーベルと鏖迫り合いになる。

カサハラは動きを止めたノーベルの背面にフアングを配置、狙い撃とうというのだ。

だが狙い撃とうというのはアイも同じだ。

「今だー！」

フアングを撃たれる前にとアイはキャノン撃とうとする。しかし……

「甘えよー！」

リボーンズは見越したかのようにサーベルを持ってない手を変形させ、その手だけをリボーンズキャノンの形態に変える。

その手には高圧電流を射出するワイヤー『レグナーウィップ』が仕込まれてる。ボール目掛けそれを射出。そこから放たれる電流をモロにボールは食らってしまう。

「うそおっつ!!」

電撃を受けるボール、アイのGポッドの電撃再現の振動に揺られながら叫ぶ。

「見えてねエと思っただのか!?このリボーンズをー！」

「ヤタテっ！ハッ！」

コンドウはアイの安否を気遣う、が直後コンドウのノーベルも背面をフアングで撃たれる。直前で横に動いた為

直撃は避けられたが背面を損傷しノーベルはその場に倒れ込む。

「うおおっ！」

その隙をついてリボーンズガンダムはボールに突っ込んだ。ビームサーベルで直接倒そうというのだろう。

「くっ！早く動かなきゃー！」

「マズいー！」

「アーアイー！」

見ていたナナは倒されそうなアイをどうすれば救えるか、と思索していた。この距離ならビームライフルは当たるだろう。しかし肝心のビームライフルがない。

コンドウのノーベルはまだフアングにつきまとわれてる。その時、ナナは自身の手に握られた三本のビームサーベルが目についた。

「よし！九本もあるんだからたかが三本！」

アイの目の前にリボーンズガンダムが迫る。もう駄目か、とアイは目を瞑った。しかし次の瞬間だった。

「ぐおっ！」

「!？」

リボーンズガンダムの頭部と胴体に、三本のナイフ程度の長さになったビームサーベルが突き刺さっていた。

ナナのビギニングだ。ビームを短く調整したビームサーベルを投げつけたのだ。

「アイ！今よ！」

「ナナちゃん！サンキュー！」

アイはボールのキャノン砲を至近距離のリボーンズのコクピットに撃ち込もうと撃つ。

「くそ！トランザム！」

慌てたリヨウはトランザムで機体性能を向上させる。上がったスピードで至近距離の砲撃をかわそうと試みたのだ。

結果、砲撃はコクピットの直撃を免れたが、右に飛ばうとしていた為左胸と左腕、至近距離のキャノン砲の余波で頭部が吹き飛んだ。

派手な爆炎と共にリボーンズガンダムは吹っ飛ばされる。

「あぎやあ！」

「ここまでね！覚悟なさい！」

改めて三本のビームサーベル持ったビギニングがリボーンズをそのまま斬り裂こうと迫る。このままでは負けるとカサハラは判断する。

「ひっ！やだ！負けちゃうよ！そ・そうだ！だったらトランザムの火力で！」

カサハラが強気になるかどうかはガンダムの頭の有無で決まるよ。うだ。弱気に戻りながらも

持続するトランザムの火力で起死回生を図ろうとする。しかしその時だった。

「ならば！バーサーカーモード!!」

コンドウの野太い声が響くと共に、赤く輝くノーベルガンダムがリボーンズに凄い勢いで突っ込んだ。

ノーベルにもトランザムと同じ仕様でバーサーカーモードが入っていたのだ。

リボーンズガンダムの懐へあつという間に入ると、ノーベルはビームサーベルでリボーンズガンダムを袈裟がけに切り裂いた。

「ひ……………」

「ハジメエ!!トドメを！」

「それあるんだつたらもつと早くつかつてよおお!!」

返事の代わりにコンドウへの愚痴を叫ぶナナ、

上空からビギニングガンダムが三本のサーベルをふりかざす。サーベルを振り下ろすと同時に真つ三つにされたりリボーンズガンダムは爆発した。

操作主を失ったフアングも力なくその場に落ちた。

「そ・そんなああ!!」

その後もバトルは暫く続いたが結果的にアイ達の勝利となった。

「いやいや、一時はどうなる事かと思つたが勝ててよかった。しかしいつもと違う機体に乗るのも面白いもんだ」

上機嫌でバトルの感想を述べるコンドウ

「気に入りました?ノーベルとあのスーツ」

「バカいえ」

「あの……ボクも勉強になりました。またよろしければバトルしてくれますか?」

バトルが終わった後、カサハラ達は距離感が縮まっていた。なんやかんやいって彼も立派なビルダーだという事だ。

「ああ、いい気合だったよ。またやろう」

「でもその時はもうちょっと口調は軟らかくしてほしいかな?」

それを遠巻きに見るサツマ、ナナを見つめながら何故彼女が気に入らないか考える。

ナナは自分の考えを見抜く、サツマが自分の強さと実績を求める一方、友達を捨てたという行為、それに後ろめたさを感じていたのは事実だ。

しかし彼女のプライドとガンコさと性格上、自分の間違いを指摘される事を嫌ってる。

だがナナは間違いを指摘し、結果的に仲直りの電話をかける後押しをしたのは事実だし、サツマ自身もそれは理解していた。

(サツマは知らないが、ナナは完全に見抜いたわけではない。自分がアイとガンπραをしてる時が一番楽しいという経験からの予想だったが)

自分にとってはまだ格下ではあれど、ナナを認めてあげるべきかとサツマが思っているとナナがサツマに駆け寄ってくる。

「あのさ、イモエ」

「もう今日はイモエでいいですわ、それで……」

こうやって遠慮なしな性格も気に入らない要素の一つだとサツマは考える。

「あの子が強いビルダーならアイじゃなくてあの子勧誘すればよかつたじゃない」

「そうですね。それは試しましたわ。でも……」

「？」

「何故か怖がられていますのワタクシ、何故でしょう」

「あく納得」

「どういう意味ですの!?!」

——やっぱコイツ憎つたらしい!!——そうサツマは思っていた。

第24話 「勝利をその手に掴みとれ！」

日曜日に模型店『ルジャーナ』で催されたくじ引きガン普拉バトル大会の翌日、

ナナ達は模型店『ガリア大陸』にてその内容をツチャとソウイチに話していた。集まったのはアイ、ナナ、コンドウ、ツチャ、ソウイチの五人だ

「昨日のバトルは楽しかったわよ、くじ引きでもアタシは結構いいの引けたし」

「ランダムでビギニングひくたあ凄いツスねえ、しかもリボーンズそれで倒すとは」

「まあ、アタシの実力って奴？」

「オイオイ、俺達三人で力合わせて勝ったという事を忘れるなよ？」

「ハハ、ハジメさんも自信がついてきたってわけだ」

「……」

「そういう話聞くとますます出れなかったの悔やむツス。あくあ、俺達も出られたらなあ。ノーベルガンダムに乗ったコンドウさんなんてそうそう見れるもんじゃないツスよ」

一瞬コンドウの顔がバツが悪そうになる。

「見たいのアサダ？ オツサンの服、よく分かんないけど例の全身タイツみたいな格好だったのよ。リボン付きで」

「……やっぱ行けなくて正解だったツス」

「いい加減混ぜっ返すの勘弁してくれ、後になって思い出すの恥ずかしいんだから」

「結構ノリノリでやってたけどねオツサン」

「いや！ なにふり構ってる状況じゃなかったただだから！」

必死に首を振り訂正するコンドウ。

「で、改造するのかコンドウさん、プリキュ○かアイ○ツか艦○れにして自分の愛機に、ラブ○イブの方が良くない？」

「しないよ！ てかなんで今日は俺がいじられなきやいけないんだああ！」

「……」

コンドウがノーベルガンダムに乗ってたと知るとツチャとソウイチは執拗に話に振ってくる。普段はあり得ないコンドウだからだろうか。

——オッサンって案外いじられ系かも——と見ていたナナは感想を思う。

だが賑やかなその横で、一人妙に黙ってる人物がいた。

「ヤタテ? どうしたんだ。さつきから全然喋ってないぞ?」

「え? ……あ……」

気の抜けた声で返事するアイだった。今日はここに来てから一言もしゃべってない。燃え尽きたかのようにそばの椅子に座ったままだった。

「あくツチャさん、アイは今日体力テストあったんだけどね、燃え尽きちゃって」

「体力テストで燃え尽きた? どういう事?」

「今日学校で模型部の部長と言い争いになっちゃってね。そいつが『いい結果残せたらガンπρα買ってあげる』って約束したの」

「大方それでヤタテの奴がムキになって、歩くのもおぼつかない位必死になりすぎたって事かい?」

「ナ! ナナちゃん! 言わないでよ!」

立ち上がったアイが叫ぶと同時に、カクつと膝が折れる。立っていても膝が笑っていた。

「あう……」

「ゴメンゴメンアイ、座ってていいよ」

「体力テストでそこまでとはなあ、体育の授業とかやってるだろ?」

再び椅子に腰掛けるアイ、力を入れるとふとももに痛みが走る為、ゆっくりと座った。しかし痛みは抑えられず声を上げる。

「あたたた! やってますけど……」

「アンタって体力ない上に運動オンチだからね」

「そのうえいつもガンπρα作ってるから運動不足になりがちって事スか」

「高校生でそれってどうなんだよ」

容赦ない発言だ。事実だがぐさぐさとアイに突き刺さる。

「い・いいじゃないですか……ガンプラバトルには関係ないし。操縦するのに運動神経は関係ないですよ」

「そういえばボールでゴッドガンダム倒したんだったな、ヤタテ」

「でもFポッドなら負けそうツスね。あれはやった事ないんすか？」

ソウイチの質問にアイは「うゝ」と唸った。実際に動きをトレースするFポッドなら身体能力は大きくかかわる筈だ。

「そりややった事はないけど……別にいいでしょ？ わざわざ不利な状況でやる必要もないし」

アイが面白くなさそうに口を尖らせる。その時だった

「あくーいたいた！ アイちゃ〜ん！」

二階に駆け上がったってくる男がいた。雇われ店員のハセベだ。

「あ、ハセベさん。どうしたんですか？」

「君宛に店にメールが届いたんだ。君に挑戦したいってさ」

「挑戦状が？」

「お〜来たツスね。今回はどんな人なんすかね？」

「下のパソコンに描いてあるから降りてきて！」

「え!?!ちよつと待って！今私筋肉痛……」

急いでるのかアイの言葉に耳を貸さず、そのままハセベは下に駆けおりにいった。

「とりあえず……下にいかない……」

手すりにしがみつき、一段ずつ降りようとするアイ、その横でソウイチ達が階段を駆け下りていった。

「こつちも興味があるツスから先行ってるツス」

「速く降りてこいよ」

「アイ頑張つて〜」

「みんな待つてよ〜うう〜」

店内にアイのうめき声が響いた。

「え〜なになに……今週日曜日、前回のくじ引きガンプラバトルと同

じ要領でバトルを申し込みたい。

十時に模型店『ダハールのピラミッド』で待つ。ヒガサ・ヨウタ」店のパソコンに届いたメールをアイが読む。その周りをコンドウ達が自分も見ようと集まっていた。

「前回のくじ引きガン普拉バトルと同じ要領？」

「あの時と同じ、ランダムでガン普拉を選んで作るって事だろ？」

「って事は前回のイベントに出てた人スかね？」

「みたいだね、あつた事はないだろうけど顔は見られてるんじゃないかな？」

OKの答えを返信で書きつつアイは答える。

「しかし……ダハールのピラミッドか……」

「知ってるの？オッサン」

「行ったことはないんでなんとも言えんが……最近できた店らしいが割と遠いぞ？場所はルジャーナの方が近い」

『ルジャーナ』隣の県な為かなり遠い。

「って事はまた電車使わなきゃいけないんですか……コストかかるな」

「ん〜それだけだったかなあ」

なにか喉に引っかかった様に唸るコンドウ。

「どした？コンドウさん」

「いや、もう一つ特徴があつたはずなんだが……どうも思い出せない……これが一番重要だったような……」

「なんスかそりゃ」

そして日曜日がやってきた、アイ、ナナ、コンドウ、ツチャ、ソウイチ、そして『面白そう』とついてきたタカコとムツミの7人は店を前にして茫然としていた。

「うわ〜本当にピラミッド型だよナナちゃん」

入口前で見上げながらアイが呟く。一週間近くたったのだからもう筋肉痛は全快していた。

「プラモ屋にこのデザインってどんだけ店長物好きなんだろうね

……」

模型店『ダハールのピラミッド』はルジャーナの一個前の駅の近くにあった。特徴はアイ達の言った通り、

完全なピラミッド型をした建物で、だが周りの駐車場、中に入る自動ドアだけは普通だ。周りは普通の建物だけにあまりにも周囲からは浮いてる建築物だった。

「それにしてもタカコ達がこんな遠くまでついてくるとはねえ」

ついてきたタカコとムツミを見ながらナナが言う。

「前回バトルしたカサハラ君ってカワイイ男の子だったんでしょ？今回のもそういう子かもしれないしこれはインタビューしないとね〜」
「いっつもそうだねタカコ……、ボクは予定なかったから……」

「まあとりあえず入ってみようよ」

そのまま7人は中に入る。ピラミッド型だけあって中は広々としており、様々な商品の置かれた棚が見える。

「中自体は普通のプラモ屋なんだね」

「さすがにな。内装までエジプト風にする必要はないだろうし」

「それでチャレンジャーはどコスか？呼んどいて姿現さないのはいただけないツス」

横一列に並ぶ7人、しかしその時だった。突然アイの後ろから手が伸び、アイの胸を思いつき掴む。

アイは初めは状況が理解できない為硬直していたが直後、理解すると同時に大きな悲鳴を上げる

「いっ!?ぎいいやああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

『!!?』

周囲の客が一齐にこちらを見る。いきなり何が起こったのか理解できないナナ達は驚愕の顔をしていた。

「何?!なんなんですかああ!!」

「あはは!まっ平らだあ!」

手が離れると涙目で顔を真っ赤にして両手で胸を抑えるアイ、後ろからひよこつと少年が出てきた。

「読んだのはオレツチさ、ようこそ。ダハールのピラミッドへ、俺がメールを送ったヒガサ・ヨウタだよん」

快活そうな顔つき、髪はパイナップルの様にひつつめにし、鼻には絆創膏をつけ身長は150cm半ば、

シャツは一部ズボンからはみ出して、見るからにワルガキ、もといイタズラ好きな元気そうな少年だった。

「初対面で何するのおお!!」

「挨拶がわりだよ挨拶がわり。うちのクラスの女子にもやってんだけど皆姉ちゃんみたいなの反応するんだぜ?」

「それ嫌がつてんでしようがああ!!」

「ア・アイちゃん……気持ちに分かるけど抑えて……」

がなるアイをムツミとナナが必死になだめる。

「それより姉ちゃん達前リヨウの奴に勝ったんだろ? いいなあ、オレツチじゃアイツにはいくらやつても勝てないのに」

「リヨウ君とは知り合いかい? 君も前のイベントで出てたの?」

「そだよオッサン、アイツとは幼なじみだよ。前のイベントの時もゾックに乗ってたんだけどリヨウにやられちゃってさ」

「ああ、あのゾックか」

前回リボーンズキャノンに組みついてた奴だ。そのままリボーンズガンダムに変形した後撃ち抜かれて倒されたが、

「そそ、立ち話もなんだから二階で話そうぜ。店長には話つけてプラモ選ぶスペースはつけてもらってんだ」

「……年齢的にはタカコ好みっぽいけど、どうなのタカコ……」

「悪いけどセクハラする子はNG、大事なのはNOタッチ精神だよー」

そしてそのまま、全員が二階にあがる。建物がピラミッド状な為か天井は四角錐の内側の形状をしていた。とはいえ、

ガンプラバトルの設備はしっかりしており左右四台ずつ計八台のポッドがおかれている。

そして二階中央には前のイベント同様テーブルの上に白い箱が置かれていた。公のイベントでなく個人の対戦の為数は十個もないが。

「とりあえず……私はこれを選ぶよ」

アイがまたヨウタが胸を掴まないか警戒しながら箱をとる。

「じゃ、オレはこれね」

アイがとった後、ヨウタも箱を引き抜く。そしてお互いが取ったガンプラの中身をお互いに見せ確認する。

「私のはHGF Cのゴッドガンダムだよ」

「オレはHGのダナジン、お互いいいの引き当てたんじゃね？」

ダナジン、『ガンダムAGE』後半に登場した敵機だ。その姿はドラゴンとしか言いようがない。

「みたいだね、それじゃ作成するから工作室借りるよ」

下に降りていく二人、対一の勝負である以上、ナナ達はそれを見たで見ているしか出来なかった。ツチャが不安げに呟く。

「今日の相手は大丈夫なんだろうか、今までにない相手だしペース乱されて苦戦つても十分考えられる」

「大丈夫でしょツチャさん、現にアイツのゾックに勝ったりボーンズをアタシらが倒してんだよ？アイの腕前なら一人でもアイツ位……」

「……いや、案外マズイかもしれないよ……」

不吉な事を呟いたのはムツミだ。ナナはどゆこと？と疑問に思い問いかける。

「……ここにいる他のビルダー、見てみなよ……」

ムツミが指した二階を見回す。他のビルダーがガンプラバトルで遊んでいるが、ガリア大陸の様なパイロットスーツは誰ひとりとして着ておらず、

前回のコンドウが着ていた様なファイティングスーツを着たビルダーしかいなかった。

「……まさか……」

ナナが頭に不安要素を口にすると同時にコンドウが叫んだ。

「あ！思い出した!!」

……二時間後……

ナナ達は工作室で出来あがったガンプラを見る。アイのゴツドガンダムとヨウタのダナジン、どちらもシールを貼って組み立てただけだが丁寧に仕上げられていた。

「限られた時間でも結構うまくできたなヤタテ」

「基本ですよコンドウさん」

「でも、うまく動かせるの?」

「今更何言ってるのナナちゃん? そりゃ本編と違って普通に操縦するわけだけど……」

——まだ気付いてない!!—— 「いやアイ、実は……」

「普通に操縦? できねーよここ」

「へ?」

ナナが真実を言おうとするがヨウタが代わりに言う。

「いやだつてここ、Fポッドしか置いてねーもん」

「な……」

突如アイの顔が急激に青ざめる。一気に自信を失った感じだ。

「そんな……それじゃ」

「ヤタテ……すまん、俺が前日にいうべきだったんだがここに来るまで忘れてしまつて」

「あ、コンドウさん、大丈夫……へうつ!!」

言葉の途中でまたアイが寄声を上げる。ヨウタがアイの尻を触つたのだ。

「なくに落ち込んでんだよ姉ちゃん」

「またなにスンのおおつつ!!!」

「ねえ君……、もしかしてわざとアイちゃんに不利な状況で戦おうとしてない……?」

不審に思ったムツミがヨウタに問いかける。

「あ！姉ちゃんひでえや！俺が卑怯な手え使ったと思ってる!!」

「え？いや、そうじゃないけど……」

さもシヨックを受けたように驚くヨウタ。

「まあそう言われても仕方ねえやね……オレ、リヨウに対して自信をつけたいだけなのに……」

突然、シユンとしながらヨウタは呟いた。カサハラ・リヨウ、前回戦った凄腕ビルダーだ。

「リヨウ君にか？」

「そうだよ。リヨウとは張りあってるガン普拉仲間だけど、オレはリヨウ程の実力はないんだ。いつもアイツはオレの先を行っちまう。それが羨ましかったんだ。でもいつか！アイツを追い越してみせるって誓った！」

妙に芝居がかった様にリアクションを取るヨウタ

「そのタイミングでヤタテがリヨウ君を倒したわけか」

「そのとおり！正直言っただけだよ。でもアイツを倒した姉ちゃんに勝てばアイツへの自信はつけられる！」

「だからアイに挑戦したってわけ？」

「そう！でも普通にやったんじゃまず勝てない！オレはガン普拉より体育の方が得意だから勝手ながら少しでもこっちに有利な方法で挑みたいんだ！

勝てなくてもいい！ああくせめてオレが自信さえつけられたら！よよよよよよ」

拳を握りながら力説するヨウタ、リアクションが妙に大袈裟に見えるた為胡散臭く見えたが……

「そうなんだ。いいよ、乗ってあげる」

一番先に答えたのはアイだ。

「アイちゃん？いいの？この子はNOタッチ精神を忘れた子だよ」

意味不明な事言わないでよタカコ……とツツコミを入れるムツミ。

「いいもなにも、元々挑戦受ける為に来たんじゃない。それにこういう状況でやるのって別によくある話だよ。私だって今まで勝ってきただからFポッド位わけないよ」

「まあ、別にその辺はボクもいちやもんつけるわけじゃなかったけど……」

それを聞いた瞬間ヨウタの顔がパアツと明るくなった

「おっしやあー！サンキュー姉ちゃん！先着替えて待つてるぜい！」

「負けないからねー！」

そう言いつつ工作室を出ようとするヨウタは

むぎゅ

「っっ!!!」

すれ違いざまにアイの尻を触って行った。

「まーまたああっっ!!!」

「アハハ！胸はちっちええのにケツはデケえんだな姉ちゃん!!」
「なー！」

顔を真っ赤にし、尻をさするアイを尻目にヨウタは出て行った。

「い……言っちゃいけない事を……！」

——気にしてたんだアイ……——

ちなみに口調とは裏腹にヨウタの頭の中は

——なくんてゝのはせゝんぶウツソゝ♪このダハールのピラミッドはまだ出来たばかりでトップのビルダーがいけないわけ。

ここで姉ちゃんみたいな凄腕ビルダーを倒せば、オレがトップビルダーって大手を振って言えるわけゝー！リョウに勝てずとも強豪ビルダーになつてみせるぜゝ♪——

と全っ然言ってる事と本心は違っていた。

そしてガン普拉バトルが始まった。今回のステージは『ネオホンコン決勝大会用リング』

巨大な円形の舞台をビームロープ（プロレスリングのロープのビーム版）が囲み、周囲は海、まさに一対一の為のステージだった。

「こんな恰好までするなんて……」

アイは自分がGガンダム主人公、ドモンと同じデザインのFスー

ツを着ていた。黒い全身タイツの様なスーツに関節部にアンテナ、腹部に日本の日の丸が描かれてる。

啖呵を切ったはいいがこれを着るとなるとさすがに恥ずかしく感じる、しかし向うはそれをお構いなしに仕掛けてきた。

「FポッドならGポッドより得意だぜええ!!」

両手のビームサーベルを振り回しゴッドガンダムに斬りかかるヨウタのダナジン、

「くっ!」

アイもゴッドガンダムのビームサーベルで受け止める。しかし受け止めた時、ダナジンは尻尾のダナジンスピアでゴッドガンダムを薙ぎ払った。

「うあっ!!」

Fポッドに衝撃が走り、ゴッドガンダムは大きく弾き飛ばされる。

「まだ!」

弾き飛ばされ、なお起き上がりビームソードで斬りかかろうとするアイ、しかしそのままバーニアで突撃するかと思いきや、ドタドタと走りながらダナジンに向っていった。

あまり緊張感のない光景だ。そのままダナジンめがけてビームソードを縦に振り下ろすが、簡単にダナジンは横にかわす。振り下ろす予備動作が大きすぎるのだ。

「動きが遅い!でも!」

「なんだ、おせえなあ姉ちゃん、胸!!小さい女は走るの早いんだろ?」

「人それぞれだよおおおおお!!!」

ダナジンはかわした動きで両手!!のビームマシンガンを撃つ。アイは顔を真っ赤にしながらゴッドガンダムでかわそうとするがしきれず、

両腕で顔と胸をガードしマシンガンを受けた。

「予想は出来てたけど、どーすんのよ!圧倒されまくってんじゃん!」

観戦モニターを見ながらナナは叫んだ。

「マズイッス。運動神経がないとは思ってたけどここまでダイレクトに差が出るものとは……」

「向こうがよく動く上に、ヤタテの方は動きがスローモーションだ。これでは当たる攻撃も当たらないぞ」

この場にいた全員がこの状況にマズイと感じていた様だ。

「今のヤタテはファーストのアムロが初めて乗った機体がシャイニングガンダムだったような物だ。どうする？ヤタテ」

「ガンダム見てないボクラじゃ、例えば分からないですコンドウさん……」

「しかもファーストのアムロの体力じゃFスーツすら着れないッス。あれ着るのえらい体力必要スから」

「ハハハ！姉ちゃんもFポッドなら形無しだな！」

「それでも……結構持つてるけど！」

ヨウタは笑いながら余裕をかます。バトルはずっとヨウタが優勢だった。しかしなかなかアイに決定打を与える事は出来ない。

今のアイは確かに動きが鈍いが、いい所にいけそうな攻撃はほとんど捌いている。

サーベルでつき刺そうとすれば同じくサーベルで捌き、顎のビームシューターを至近距離で撃とうとすればバルカンを頭部目掛けて撃ってくる。

向うも散々Gポッドで戦ってきた経験上解ってるのだろう。

「ホント！随分としぶといぜ！ケツが大きいから重くてトロいんだろうけど！」

「ああ!?だからやめてよその言い方！」

アイがまたも大声を上げる。女の子へのこういった発言はヨウタの癖だ。だがこの無神経さはある意味作戦として機能していた。

怒らせて相手の判断を鈍らせる。特に女の子はコンプレックスに敏感だ。

「そしてすばやくは動けない！なら！」

「!」

ヨウタのダナジンはゴッドガンダムの背後に一気に回る。反応の遅れたアイはゴッドガンダムを両脇からダナジンに羽交い絞めにされてしまう。そのまま高度へ飛び立つダナジン

「あー何を!?!」

「このまま地面に叩きつけてやらあ!!」

かなりの高さにあがるとそのままダナジンは一気に急降下をかける。ゴッドガンダムをイズナ落としの要領で頭から叩きつけて破壊するつもりだ。

「マ・マズい!?!」

「残念だったな! ケツデカ姉ちゃん! この勝負もらったぜ!」

「だからやめてって!」

「気にすんなよ! 上半身マッチ棒か、こけしみたいにならぬようにせめてケツだけでかいんだからよ!」

重いならケツから落とす方が効果ありそうだけど! アハハハハ

!!

「」

ぶちっ

勝利を確信し調子に乗ってアイのコンプレックスをつつきまくるまくるヨウタ、

もうじきダナジンはゴッドガンダムを地面に叩きつけるだろう。しかしその時だった。

ゴッドガンダムの背中のバーニアが全開で噴射された、熱は背中のダナジンに直撃する。

「うわーあぶね!!」

ヨウタはダナジンの手を離す。ゴッドガンダムはそのままリングに降り立つ。(しかし着地がうまくいかずよろけたが)

そのままゴッドガンダムは着地したダナジンにゆらっと向き直る。

「なんだ？さつきとなんか様子が？」

「……さつきから黙って聞いていれば好き放題言つて……」

アイが眩くように淡々と喋る。同時に各部の装甲が展開していく。妙に凄みのあるオーラを放っており、ヨウタは本能的にそれを感じていた。

「言つていいことと悪いことの区別も……」

最後に胸部のマルチプライヤーが展開、と同時に背部バーニアを全開でふかす。爆発的な勢いでダナジンに迫る。ゴッドフィールド・ダッシュユだ。

「つかないんかああっっっ」

その勢いでダナジンの顔面を思い切り殴り飛ばす。吹っ飛んだダナジンはそのまま地面を削りながら転がった。

「!!うひいっ!!」

「アイが……キレた」

観戦していた一同は初めて見るアイにナナは驚いていた、というより戦慄していた。

アイはナナ達が聞いた事が無いような大声をあげダナジンに猛攻をかける。つたない動きなのは変わらないが明らかにさつきと違っていた。

普段おとなしい人間程怒らせてはいけないとはよく言ったものである。

「悩むの辞めたバカはほんと強いつてことスかね」

「人の事バカつていうんじゃないソウイチ、しかし、復活だな」

「いやコンドウさん、そんな事より明鏡止水どころか完全に怒りのスーパーモードなんだが……」

「細かい事は気にしちやいけないッス、ツチヤさん」

「こーこりややべえー！」

「逃げんなああああああっっ」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ヨウタはゴツドガンダム!!!の勢いに圧倒されていた。ダナジンが一

りつぶした直後、ヨウタの絶叫が響いた。

「ダーダナジンキャノンが！オレのダナジンキャノンがああつつ!!」
Fポッドのダメージはガンプラからビルダーに連動する事はない。
だがどういうわけかヨウタの精神的ダメージは大きかった。

観戦していたナナ達は絶句していた。そしてなぜか男性陣は地獄
絵図でも見るかのような顔で恐怖におののいていた。

「シヨボ、全然掴み応えないね」
「!?」

原因不明だがアイの発言に精神的ショックを受けるヨウタ、
そして何故か握りつぶした時と発言の際、アイの顔は物凄く楽しそ
うだった。

その隙をつき右腕のゴッドフィンガーはダナジンのコクピット、頭
部を掴みあげる。

「ひいっ!!ガ！ガンダムファイトでコクピットを狙っちゃいけない
んだぞ!!」

「今のステージは決勝大会仕様だよ？本編の決勝大会でコクピットの
攻撃は認められてるよ？」

ヨウタの慌てた声と対照的に妙に淡々とアイは話す。それがヨウ
タには妙に怖く感じた。

「あーケツでかくても胸ちっちゃくても気にする必要ないよ！むしろ
貧乳好きなんだっているし！貧乳はステータスd」

「じゃあ連れてきてよ。その人」

「うース！スレンダーでいいなあ姉ちゃん！」

「……それが」

「え？」

「そう言われるのが一番腹立つフオローなののおおおおお
おおおおっ!!!」

「……ごめんなさああいつつ!!!」

ヒートエンドと叫ぶかの様にアイは絶叫しながらゴッドフィン

ガーでダナジンの頭部を砕いた。コクピットの破壊、これによりバトルはアイの勝利で終わった。

……

「ハア……最悪、勝ったのに全然うれしくないよ」

帰りの電車でアイはげんなりしていた。バトルが終わった時、ヨウタはもう完全に真っ白になっていた。

『子どもには少々刺激が強すぎたようだ』とギャラリーのビルダーがいつていたが、どういう意味かはアイには理解できなかった。

……つまりあの行為は本能的にやっていた事になる。

「まあそれでも負けるよりは余程いいよ……」

「そうだよ、勝ったんだからよかったじゃん」

隣に座ったタカコとムツミがフオローを入れる。アイはバトルが終わってもしばらく不機嫌だった。

ちよつとだけ離れた座席に座ったソウイチとツチャヤが二人を見ながら話す。

「ヤタテさんだけでなく俺達もFポッドのバトル、やつときやよかつたツスカね。近場ないとやりたい気持ちは強くなるツス」

「そうはいつても今日は俺達プラモ持ってきてなかったからな、しかし……人間からかうサジ加減っていうのは気をつけないと」

「ホントツスね、コンドウさんもノーベルガンダム関連でからかうのはある程度控えないと……」

「そうだぞお前ら、あんま人をからかうな！」

——それにしても——

タカコは誰にも見られない様にデジカメで撮ったアイの写真を見る。観戦モニターごしに撮られたアイは、完全に相手をいたぶるのを楽しんでる顔だった。

——アイちゃん、目覚めたのか、それとも元からだったのか……——

アイに見せるのはやめようと珍しくタカコは空気を読んだ。

なお、後にアイが『ダハールの女暴君』とダハールのピラミッドで呼ばれる事になるが、それは別のお話……。

第25話「思い出の宝探し」(アストレアFR2ダーク
マター & レッドセラヴィー VS ジムキャノ
ンクラーケン)

「ナナちゃん！早くガリア大陸へ行こうよ！」

「ああもう、わかったからもうちよつとゆつくり行こうよ！」

初夏の木曜日、夕暮れの商店街をアイが走り、それをナナが小走りで追いかける。

「次のイベント明後日なんだよ！早く練習の仕上げしなくちゃ！」

そう、今週の土曜日はガン普拉バトルのイベント大会の日だ。今回の内容は宝探しのミッション。

かつてあつた複数のガン普拉が一斉に戦う『サバイバル戦』同様、巨大なフィールドに一斉に出場ガン普拉が降り立ち、二人一組で宝を探すという内容だ。

それに加えてアイは、今日の小テストの点数が良かった為、彼女は一層はしゃいでいた。

「ああもう、だからってそんな子供みたいにはしゃがなくてもいいじゃん」

人多いんだからそんなにはしゃいでるとぶつかるわよ？とナナは言おうとしたが

「あいた！」

「キャッ！」

その前にアイは女性とぶつかった。お互いに声を上げ尻もちをつく。

「痛い……！あ！すいません！大丈夫でしたか」

「あ、ええ、大丈夫よ。気にしないで」

立ち上がる二人。相手の安否を気遣うアイに女性は穏やかな笑みを浮かべて答えた。スカートスーツを着た赤い髪の女性だ。

後頭部をお団子状にまとめている。

20代後半に見えるが優秀なキャリアウーマンといった印象で、ア

イが持った第一印象は「カッコいい、そしていい人だ」だった。

「カナコ君。大丈夫かい？」

すぐに中年の男性が現れ女性に話しかける。こちらは50代頭と
いった感じだ。

「あ、はい、大丈夫です。じゃあ行きましようか。それじゃ」

女性はアイ達に会釈すると男と並んで去って行った。優しい笑顔
が印象に残る女性だった。

記憶に残る笑顔は、営業スマイルとかの作り笑いとかではなく
自然な感じの笑顔だった。

「綺麗な人だったね。ナナちゃん」

「ぶつかつつといてその反応ってのもどうなのよ」

ま、綺麗だったのは同意だけだね。とナナは苦笑した後につけ加え
た。

しかし……どうもナナはひっかかりを感じていた。

「なんか……あの人どつかで会ったような気がするんだけど……」

「え？知り合いだった？」

「いや、そうじゃないんだけど……」

……

そして商店街から離れた別の場所、こちらも下校途中の数人の学
生、制服を着た男子中学生だ。

うち一人はご存じアサダ・ソウイチ、

彼はいつもアイ達の前では眉間に皺をよせた仏頂面だが、学校でま
でそうかと言われたらそうではない。

割と普通に仲間とうちとけていた。(それでも笑うことはあまりな
いが)

しかし……今日の彼は一層不機嫌そうな顔をしていた。

「おいソウイチ、いい加減機嫌直せよ」

友達の一人がソウイチに話しかける。

「うるさいなあ」

鬱陶しそうにソウイチは答える。今日の彼は右頬が赤く腫れていた。

「あんな奴が言った事、気にする程でもないだろ。ただの見間違えだ」
友達が続けてソウイチに話しかける。

「……だけど……」

「お前がネガティブになってどうするんだよ。あの人があんな事する人じゃないってお前が一番よく理解してるだろ」

「……」

渋い顔がほんの少し和らぐ、このままいけるか？と友達はソウイチの機嫌を治そうとする。が

「そうかなあ。僕は無視できないと思うけど」

別の友達の余計なひと言。その言葉と同時にソウイチの表情がまた戻る。

お前な！何まぜつかえしてんだ?!と友達がリアクションを取る。

「だってそうでしょ?!火のないところに煙は立たないっていうし、ソウイチのお母さん、

最近帰りが遅いらしいじゃない。それにソウイチのお父さんは……」

「くっ！お前！」

ソウイチはその友達を掴みかかろうとするが、最初の友達が「やめろやめろ！」と間に割って入った為ソウイチはその場にとどまった。

掴みかかろうとした友達も「言い過ぎた、ごめん」と頭を下げる。

「でもさ、ソウイチはお母さんから何も言われてないんだろ。ソウイチもお父さんがいた方がいいって思ったのかも」

「お前ソウイチに懲りない事言うなよ」

——父なんておぶってもらった記憶しかないよ——とソウイチは右頬に手を当てながら心でつぶやく。

「何かそれらしい素振りとかなかったの？」

「……わかんないよ。いつもと変わらない素振りだったし」

事情はこうだった。『ソウイチのお母さんが知らない男と街を歩いてるのを見た』『男の家らしき場所に二人で入るのを見た』とあるソウ

イチのクラスメイトが言った。

これだけなら意味はないだろう。だがクラスメイトの一人がそれで『ソウイチのお母さんが不倫している』とソウイチをからかった。

ソウイチは冗談の受け辛い性格だ。ムキになって反応した為、さらに面白がった数人のクラスメイトがソウイチをからかう。

怒り心頭したソウイチはそのクラスメイトと喧嘩になってしまい、殴り殴られと右頬を腫らす結果となったのだ。(喧嘩自体は先生によつて仲裁されたが)

「でもああでもないしとコミュニケーションもとれない連中だぜ。相手にしなきゃよかったのに」

「……ああしなきゃわからないだろ」

「周りの大人にも相談した方がいいよ。お前が憧れてるコンドウ・シヨウゴさんとかツチヤさんとか、最近仲良くなったヤタテ・アイさんとか」

友達もソウイチのガンプラ仲間的事は知っていた。だがアイの名前が出た途端、ソウイチの苦い顔はますます苦くなった。

「……なんでヤタテさんが出るんだよ」

「だってお前と仲いい人だろ？お前も結構気に入ってるみたいだし」「なっ！あの人には手を貸してるだけだよ！」

慌てるが、アイに対してのソウイチの言ってる事は本心だった。

ソウイチがガンプラバトルチーム『ウルフ』に入った際、ソウイチは周りとの実力差でいじめられることがよくあった。

だからこそ『勝てば誰も文句は言わないだろう』という考えにいたった。

その為、ガンプラバトルを楽しむようにやっつけていながらもコンドウに迫る実力を持った少女、ヤタテ・アイ、

ソウイチにとって彼女は相成れない存在だと思っていた。

「そうかなあ、お前その人とガンプラの話する時、ちよつとは前より楽しそうに話してたぞ。なにかしらお前もその人の影響とか受けてるんじゃないか？」

今まで勝つ事ばかりこだわってたけど、楽しくやりたいて気持

ちも強くなつて来たように見えるし」

「……あ！あの人から学ぶ事なんて何も無い！」

「ああ悪い悪い、解ったからそんなうろたえるなよ」

「コンドウさんと同じ位大きい存在なんじゃないの？ソウイチにとつて」

最後の余計なひと言でまたソウイチが騒ぎ出した。

友達がソウイチをなだめる、落ち着く頃にはソウイチの暮らすマンション『ムーンムーン』についた。そこでソウイチは別れる。

「さつきああは言つたけど、要はちゃんと話しなよって事だからね。気に障ったならゴメンね」

「よく冷やしとけよそのほっぺ」

「解つてるよ。……二人とも、ありがとう」

友達と別れ、ソウイチは自分の家のある五階へエレベーターで上がる。すれ違った近所の人にあいさつをしながら自分の家のドアを合鍵で開ける。

ソウイチは母との二人暮らしだ。ダイニングキッチンに入るとテーブルの上に母の手紙が置いてある。

『遅くなります。晩御飯は作つてあるので食べて下さい。食べる前に手を洗う事 ママより』

「……」

『母は不倫してるんじゃないか？』その疑問がソウイチの心にのしかかる。

——コンドウさんなら、力になってくれるかもしれない——

ソウイチはなぜだかそれが突破口になるかもしれないと思えてきた。ソウイチはガリア大陸に向かう準備の為、自室に向かった。

学校から帰ってきたら、着替えてガリア大陸に行くのがいつものパターンだった。

着替える途中、アイの顔も浮かぶ。

「……アンタじゃない……」

ソウイチは部屋で一人吐き捨てた。

そしていつもの模型店『ガリア大陸』、ソウイチはついたらすぐさま二階へ駆け上がる。コンドウは大抵ここにいる。ソウイチは携帯電話はもっていないが

連絡をとらずともここにくればほぼ会えた。二階に上がると大きな背中が見えた。後ろ向きのコンドウだ。

——あの背中だ——

ソウイチはすぐに話しかけようとするが

「土曜日のイベント、どんなフィールドになるんですかね」

「さあな、宝さがしってわけだから見通しのいい場所ってわけじゃないだろうなあ」

「飛べる機体も重要になりそうですね。それはそうと私はナナちゃんと組みますけど、コンドウさんはツチャさんとソウイチ君どっちと組むんですか？」

コンドウはアイと話しをしていた。後ろからだった為、角度的にかすかにしか見えないが、とても楽しそうな表情だった。

「……」

自分と違ってあんな表情はあまり見せたことがないのに。と、ソウイチにはコンドウのアイに対する表情が面白くなかった。

「コンドウさん……」

「ん？お！ソウイチか。……ってどうしたんだその顔！」

「ソウイチ君!？」

話しかけたソウイチの顔を見るや否やコンドウはソウイチの腫れた頬に驚く、ナナとツチャも寄ってきて同じことを聞いた。

「ただの喧嘩ツスよ。お気になさらず」

「何かで冷やした方がいいよ。といってもここじゃ何も冷やすものもないけど……」

アイも心配する。が、今のソウイチにはその気遣いも鬱陶しい。特に言ってるのがヤタテ・アイという理由で。

「いらないツスよ。それよりもコンドウさん、相談があるんすけど」「ん？どうした？」

ソウイチは母が不倫してるかもしれないという噂と頬の事情をコ

ンドウに話す。真剣な表情で聞いてくれるコンドウにソウイチは安堵していた。

「そりや本当か?!」

「あくまで噂ツスけどね」

「もし本当だったら大変だよ! なにか手伝える事つてないかな?」

コンドウに続いてアイが真剣な表情でソウイチに迫る。真剣なのはコンドウだけではない。

その場にいたアイとナナ、ツチャも同様だった。しかしソウイチにはアイが反応した事がやはり面白くない。

「ヤタテさん、悪いけどこれは俺の問題なんす。身内である『ウルフ』ならともかく、部外者のアンタに口出しされたくない」

いつにも増して渋い顔で言い放つソウイチ。

「え? でも……同じビルダーの仲間、友達じゃない」

「……友達だって?」

ソウイチの言葉に面食らうアイ、そう言われたアイは少しショックだった。

「そうだソウイチ。ヤタテの好意を無駄にするな」

言い放つソウイチにコンドウは怒る。

「コンドウさんは黙ってて下さい。ヤタテさんとはたまたま利害の一致で共闘しただけじゃないスか」

「ソウイチお前!」

「丁度いい。明後日のガンプラ宝探しイベント、ヤタテ・アイさん、俺はアンタに挑戦する」

アイを指でさしながらソウイチは言い放つ。

「もともと次のイベントで競うつもりだったけどいい機会だ。だいたい本来敵同士なのにこうやってなあなあになってる状況がおかしいんだよ。」

今回の戦いで自分達との立場の区別を分からせてあげるツスよ」

「ソウイチ! いい加減にしろ!」

「お母さんの事で辛いのは分かるがその態度はないだろう!」

ソウイチの態度に怒りを露わにするコンドウとツチャ、

「……コンドウさんも結局ヤタテさんが大事スか！」

少年は二人から目を背け言い放った。

「何?!」

「明後日はコンドウさんと組みたかったけど、これじゃあ無理ツスね。一人で出ますよ。それじゃあ」

それだけ言うソウイチは逃げる様に去って行った。

「おい待てー!」

追いかけるコンドウ、ツチヤは暴言を吐かれたアイに駆け寄った。

「すまないヤタテ。解ってくれとは言わないけどソウイチも辛いんだ」

「解ってますよ。家庭の問題ですもん」

「にしても酷くない? オッサン以外に頼ろうとしないとか」

「そう言わないでくれハジメ」

ツチヤはナナもなだめる。しかしナナはそのツチヤの態度に納得がいかなかった。

「アサダに文句言う資格はツチヤさんもあるでしょ? いくらオッサンに憧れてるからってツチヤさんを無視したわけだし」

さつき頼ろうとしたのはコンドウだけだ。ツチヤも気配りが出来る性格な為、コンドウだけに相談を持ちかけたというのは不自然にナナは感じていた。

「まあ、それだけコンドウさんには信頼してるって事なんだろうな……」

「にしても見損なっちゃわよ! 前に比べて態度も軟化したと思っただらあの態度だもん! 友達だと思ってたのあたしらだけなわけ?!」

「……」

アイは思い出す。——— といえば昔、ソウイチ君がビルダーの実力でいじめられた時、いつもコンドウさんが助けてくれたんだっけ……

それだけアイはソウイチにとってコンドウは大きい存在なんだな

と感じていた。

……

その後もコンドウはソウイチを捕まえる事はできず（コンドウは徒歩、ソウイチは自転車だった為）

そのままソウイチは家に帰った。用意してあった夕食を済まし、テレビを見て時間を潰していたが母はまだ帰ってこない。

何か見たいわけじゃない所為か、テレビ番組の内容はまるで頭に入ってこない。

ずっとソウイチの頭には母が不倫してるんじゃないかという不安があったからだ。

「……」

ふとソウイチは部屋の棚に目をやる。棚の上には写真立てが置いてあった。

中の写真に写っていたのは幼稚園児の時のソウイチと一人の女性、そしてもう一人、ガタイの良い男が立っていた。

立ち上がり写真立てを手に持ちながらソウイチは黙りこくる。

「ただいま〜」

「！」

その時、玄関でドアが開く音と共に、聞き慣れた声が響く。

ソウイチは素早く察知すると玄関に向かった。2LDKの部屋の為、すぐに着く。

ソウイチは外ではあまり見せない穏やかな顔で出迎えた。

「おかえりなさい、母さん」

「ただいまソウイチ」

挨拶を返す女性は昼間アイにぶつかった女性その人だった。

「ところで母さん……ちよつと聞きたい事が……」

「……ってどうしたの！その頬！」

ソウイチが不倫の事を母に問いだたそうとするが、母はソウイチの右頬が腫れてる事に気付く。

すぐさま女性の顔が急に真剣な物に変わった。

「あ、これ？なんでもない。ちよつとぶつただけだからほつとけば

……」

「駄目よ！腫れがひくまで冷やさないや、待ってて、いま氷持つてくるから！」

女性は玄関から上がるとパタパタと台所へ消える。しばらくして氷を詰め、タオルをまいたビニール袋をソウイチの右頬にあてがった。

「あ……」

ソウイチは「やめて」と言おうとしたが、目の前の心配そうな母の顔を見るとそんな気持ちも失せる。

「……ありがとう。母さん」

感謝の気持ちを述べると共に——そうだよな。不倫なんかするわけないよな——と思った。

「ソウイチ？そっういえばさっき何か言いかけていたけど？」

「いや、なんでもない……」

翌日……、アイ達は明日のイベントバトルの練習の為、ガリア大陸に立ち寄るべく商店街に向かっていた。

例によって通学路が一緒だったのでタカコとムツミも一緒だった。

「いよいよ明日だね。ソウイチ君、大丈夫だったかな」

「さあね、本人がアタシらの協力拒否してる以上、今は不用意につけないわよ」

商店街の入り口にさしかかる二人。ここまではいつも通りだが、今日はいつもと違っていた。

「ん……？あそこにいるのコンドウさんじゃない……？」

「え？あ、本当だ」

ムツミが指を指す。その先には後ろ姿のコンドウとツチャが見えた。

しかも様子がおかしい。電柱の陰に隠れながら前方の様子をうかがっていた。

気になって声をかけるアイとナナ

「何不審者みたいな事してんのよオッサン！」

『うわっ!!』

完全に不意打ちだったらしい。大声をあげる二人、

「ハジメか!?いきなり話しかけるな!」

「何やってんですか?そんなコソコソと」

「いや、まずはあれを見てくれないか」

ツチャが指をさす方向、見ると昨日の女性と男が向こうに歩いているのが見えた。

「あ、昨日のお姉さん」

「会ったことがあるのか。あの人がソウイチのお母さん、『アサダ・カナコ』さんだ」

全員が『え?!』と驚く、特にアイとナナは、ちよつと会っただけとはいえ、昨日会った時には子持ちとは思えなかつたからだ。

初めて見るタカコとムツミも驚くほど若々しい。

「丁度俺とコンドウさんが会った時に見かけてね。昨日の事も気になるし追跡してるんだ」

「わくスニーキングですか!なんか面白そう!」とタカコ

「言いたい事は分かるけど趣味悪いわね。追跡してどうしようつてのよ」

「さあな、勢いで出たはいいが確めるくらいしか考えてない」

「でもそれで本当に不倫とかだったらどうするんですか?ソウイチ君にそう伝えるわけにもいかないし……」

「……さあな、少なくとも不倫じゃないと俺は思うよ。あの方は旦那さんを絶対忘れない人だ」

「……忘れない?」

含みを持たせた言い方に疑問をもつアイ、そうこうしてる内に六人は追跡、そしてある店に二人は入っていった。

「ゲームセンター?」

そう、二人が入っていったのはゲームセンター『キオ』だった。

閉店したホームセンターを改装したのだろう。かなりの広さの駐

車場と店の大きさが確認出来た。

先に入った二人を追い、入る六人。入るや否や二人は真先にあるコーナーに向かった。

「……………え？…これって……………」

その光景を見た六人は驚きの顔を見せた。

ソウイチの家にコンドウからの電話が来たのはすぐ後だった。コンドウは「至急ゲームセンター『キオ』に来てくれ」

と伝えた。しばらくしてソウイチがやってくる。

店に入るとコンドウが手招きしてるのが見えた。

「いきなりなんなんスか？…こっちは明日のイベントバトルに使う新作の準備で忙しいってのに……………」

文句を言うソウイチにコンドウは「ある人に会わせたい」と案内した。その先は……………」

「なんスかこれ？ゲーセンのガンプラバトルのコーナーじゃないスか？」

ソウイチの言った通りだ。ゲームセンター内に設けられたガンプラバトルの機器一式、観戦モニターとGポッドが6個、

店内の明るさと広さに差はあるが、それはガリア大陸にあった設備と同じだった。

目の前に赤く塗装されたセラヴィーガンダムが戦ってるのが見えた。『ガンダムOO』に登場したガンダム、対艦・要塞用のその機体は両肩と両手、両膝に大型のビーム砲を装備しており全体的に大型だ。『太ってる』といった表現がよく似合う。

セラヴィーは粗さはあるがよく動く、対戦相手のガンプラの攻撃を器用に回避し、難なく両手の『GNバズーカII』で相手を破壊した。「俺たちが見せたかったのはあれだ」

コンドウがセラヴィーを指さす。——あれが何だって言うんスか——そうソウイチが言おうとした時、

「ソウイチ、見てくれた？私の操縦」

ソウイチにとつて馴染みのある声がGポッドから聞こえた。そして声の主がGポッドから現れる。その人は……

「か……母さん？」

ソウイチは言葉が出なかった。自分の母親がパイロットスーツを着てガンプラバトルをしていた事に

「な……なんで？」

わけがわからない。といったソウイチにアイが答える。

「ソウイチ君、お母さん、不倫じゃなかったんだよ」

アイに代わってカナコが前に出る。

「お母さんね。明日のガンプラバトルの大会で、ソウイチと一緒に出たくて、会社の人に習ったの」

「私だよ」という言葉と同時に一人の中年男性が現れる。話の冒頭でカナコと一緒にいた男性だった。

「じゃあ、男の人と一緒に家に入ったってというのは？」

「そこで組み立て方とか習ったのよ。そのほつぺも私を心配してなんでしょ？……ゴメンね。心配かけさせちゃった……」

でも理由は明日、ソウイチと楽しみたくてやったの……、その気持ちだけが理由で、それだけが真実だから」

カナコはソウイチに手を差し出す。

「私と一緒に明日のガンプラバトル、出てくれる？」

「母さん……」

おそろおそろながらもカナコが聞く。ソウイチは「不倫じゃなかった」という安心感、そして自分も「一緒に楽しみたい」

という想いからカナコの手を取ろうとする。が……

「ソウイチ君……」

安堵するアイの、自分の名前を聞いた時、ソウイチはハツとした。そして……

「甘ったれた事言うなよ……」

ソウイチは母、カナコの手を払いのける。

「!?ソウイチ？」

カナコを中心にその場にいた全員が驚く。

「お……俺は今まで勝つことこそが大事なことだと考えてビルダーやってきたんだ……！そのメンツを守る事こそが強者の務め！」

明日だつてヤタテさんとの勝負が取り付けてある……！

そんな大事な時に『楽しみたい』なんて気持ちでバトルなんて出来るか！」

躊躇しながらもソウイチは言い放つ。

「ソウイチ君！そんな言い方ないでしょ！」

止めようとするアイにソウイチは顔を向けた。

「アンタは関係ないって言っただろう！」

「ソウイチ！お前本当にいい加減にしろ！」

コンドウとツチャはソウイチを捕まえようとするがソウイチは二人より早く動き、その場から逃げ出した。

「あつ！お前！」

ソウイチは振り向かず走り続けた。

——ヤタテさんがいなければこんな事には！——そう呟きながら身も心も逃げていた……。

ソウイチが逃げ出した後、アイ達はカナコをベンチに座らせ慰めていた。

ソウイチのあんな拒絶の仕方だ。カナコもかなりショックを受けたのだろう。暫くは鼻をすすらせながら静かに泣いていた。

「グスツ……私が……もつと事前に言っておけば……」

「カナコさんの所為じゃありませんよ。ソウイチの奴……」

「大丈夫ですよ。なんとかかりますよ」

「そうですよ。元気出してくださいオバサン」

「……」

タカコがオバサンと言った時、カナコの泣く音が止んだ。そしてそのまま黙り込んだ。明らかに空気が悪くなった。

「あ……、フ・フジさんの言う通り大丈夫ですよカナコさん！ソウイチだつて内心悪い事したとは思ってるハズですから！」

ツチャが慌ててタカコのアオローをする。横でムツミがタカコを余計な事言うなど目で訴えてる中、

ツチャは自分の発言に確証を持っていた。ソウイチが言いすてた時、声の調子からして無理して言ってる感はありありだったからだ。「でも、なんとかなるっていつでもどうするんですか。宝探しのイベント大会明日ですよ」

「ソウイチの性格上、明日のイベント大会は出るだろう。そこでどうにか説得すればいいんだが……」

途中まで言ったコンドウが黙り込む。と、その時だった。

「それなら私にも手伝わせてくれないか？」

カナコと一緒にいた中年の男が名乗り出た。

「あなたは……？」

……

そして翌日、いつもの市民体育館にて大会は開催される。

アイに挑戦すべく来ていたソウイチは、エントランスで待機しながら気持ちは沈んでいた。

あの後、ソウイチはガンブラやら道具を持って友達の家押しかけ泊まり込んだ。その時今日使うガンブラを完成させたのだった。

しかしながら、完成の達成感も嬉しさもない。それは母達に対して嫌な態度をとってしまった事への後ろめたさに他ならない。

「クソッ……」

しかしアイと母に自分の考えを言った手前、その気持ちを表に出すのは嫌だった。

自分が正しいと思っていた気持ちが変わってきてる事をソウイチは認めたくなかった。

「ソウイチ君。おはよう」

ソウイチを見つけたアイがソウイチに話しかけてくる。

「……おはようございます。今日は負けませんからね。いつまでもアタの後ろにいる俺じゃない」

「ちよいちよい、それはいいんだけどさ、アタ今日は誰と組むつてのよ」

一緒にいたナナが聞く。今日のイベントバトルは二人一組のペアが前提だ。アイ達はソウイチが誰と組むかまだ知らなかった。

「俺一人ツスよ。別に一人でもレギュレーション違反してるわけじゃないんだ」

「そうなんだ」

その言葉と一緒にカナコが現れる。現れた母にソウイチの表情は一瞬怯えたようになるが、すぐに戻った。

「母さん……俺と組もうたって無駄だよ」

「……解ってるわ。今日は私一人が出るから。折角今日の為に出たんだもの、やりたいようにやる。やるからには全力で楽しむわ」

「……」

笑顔とVサインで答えるカナコ、ソウイチの後ろめたさはますます大きくなっていった。

そしてイベントバトルが始まった。ビルダー全員は未だ待機中。始まれば全機が空からフィールドに降り立つ。

今回のフィールドは前々回同様『Gガンダム』に登場した島、ランタオ島だ。島一つで森あり荒地あり崖ありと宝探しのイベントにはもってこいだろう。

アイの機体はいつも通りユニコーン、ソウイチの機体はアストレア
ダークマター

(以前作ったアストレアFR2にダークマターブースターという鳥型
支援機を背中にとりつけた機体だ)

ナナの機体はサツマとの戦いで仕様したフリーダムガンダムアルクスだ。

「勝敗のルールは簡単ツス。イベント通りのルールに乗っ取って正解の宝をとってきた方の勝利ツス」

Gポッドの通信でソウイチがアイとナナに勝負のルールを伝える。
今回のイベントルールはこうだ。ペアの機体の内、片方には円盤状

のアンテナ、リーダードーム（レドーム）が渡される。

これは機体を中心に一定範囲で宝のある場所を探す仕組みだった。宝はランタオ島中いたるところに設置されているが

正解はひとつだけで他は全部ハズレ、正解をとったチームが優勝となるわけだ。

同時に出場ビルダーも同じチーム以外はバラバラの場所に出撃する為、運要素も強く絡むだろう。

「それでいいよ。私達の方は」

アイとナナは応えながらうなずく。そうこうしてるうちにデイスプレイにカウントダウンが始まる。

『9・8・7・6・5』

出場するビルダーがそれぞれの想いを浮かべながらもカウントダウンは止まらない。

『4・3・2・1・0!!』

0という言葉と同時にブザーが鳴る。それを合図にそれぞれのビルダーは一斉にカタパルトから飛び出した。

まずアイ達は着地すると同時にレドームで範囲を確認する。レドームを受け取ったのはナナの方だった。

「どう？ ナナちゃん」

ユニコーンに乗ったアイが聞く。ナナはフリーダム機の飛行能力を活かし、上空で宝を探していた。

「とりあえず一個それらしい点があるわ」

ナナはデイスプレイを見ながら答える。デイスプレイに追加されたリーダーは自機を中心に自動で円形の索敵を行う。

宝がある場所には赤い点で表示されるのだ。

「岩山の方ね。こっちから南が一番近いわ」

「解った。行ってみよう」

「うん。ん？」

と、ナナが答えると同時にナナのGポッドに警告音が響く。「後ろか！」とナナは身をひるがえし後ろからのビームを回避した。

別チームの二機がナナのフリーダムに狙いをつけながら飛んでく

る。今回のイベントは攻撃による妨害は許可されている。

レドームを壊されたら索敵が出来なくなるため一気に不利になる。襲ってきたのはそれが目的なのだろう。とナナとアイは考えた。

「気が早いね！でも歓迎するよーライバルが減るから！」

アイは嬉しそうに応えながらも襲ってきた二機に狙いをつけビームマグナムを放った。

コンドウ達も同じく戦ってる一方で、こちらはソウイチ、彼もまた宝を探してランタオ島を飛び回ってる。しかし……

「チッ！また取られた！」

向かってた先の赤い点が消えたのが見えた。先に宝をとられたという事だ。

向かう途中でソウイチも別のチームに襲われた。向うは二体だがこちらは一人で対抗しなきゃいけない。

その為、余計に時間を食ってしまうというわけだ。

——クソッ！やっぱり一人じゃ自分の筋も通せないってのかよ！

心の中で愚痴っていると、またもGポッドに警告音だ。

「クッ！」

警告音が示した方向にソウイチは身構える。一人な分余計に狙われやすいのだろう。

前方に迫る敵機、迎撃しようとGNビームライフルを構えるソウイチ、がその時だった。向かってきた二機を横からの大型ビームが飲み込んだ。

『!?!』

ソウイチも襲おうとしていたビルダーも驚く、ビームに飲まれた二機はそのまま爆散した。

「大丈夫だった？ソウイチ」

カナコの声だ。同時に乗っていた赤いセラヴィーガンダムが姿を現す。

「母さん……なんで？」

「言ったでしょ?」『やりたいようにやる』って、私はソウイチとこのイベントがしたいの」

「……」

突っぱねようかとも思った。後ろめたさはずっと残ったままだった。

「……勝手にしろよ……」

『軽蔑されてない』という事に内心安堵しながらも、表面上はぶっきらぼうに言いながら、ソウイチはリーダーで宝の位置を確認する。

ここからすぐ近くに宝の赤点が表示されていた。が、また消える。

——また取られた?!——とソウイチが内心叫んだ時だ。

「やあ、頑張ってるかね?」

聞き慣れない男の声がした。誰だとソウイチが見るとオーカー色に塗装されたジムキャノンⅡが見えた。『ガンダム0083』に登場した砲撃用の機体だ。

背中ガンダムmkⅡの物に換装され、その上には大型のコンテナを背負い、両肩はカラミティガンダムのシールドを搭載していた。

「あら、ヤナギさん。そちらの調子はどうですか?」

カナコがフランクにジム・キャノンⅡの男に話しかける。

「ソウイチ、私の会社の上司のヤナギさんよ。私にガンプラを色々教えてくれた人なの」

ソウイチの心情を察したのか、カナコがソウイチに紹介する。前日出ていた中年の男だ

「あ、始めまして……」

しづしづ挨拶するソウイチ

「実は選手だけでなく役員としてもこのイベントに出ててね。ビルダーが違法を行わないか目を光らせてるのさ」

見ただけではあまり喋ってない所為か、近寄りたがたい雰囲気があった。しかしいざ会話してみると、明るい人だというのがよく解る。

「あなたも一人ででてるんスか?」

「ああ、でも支援機と一緒にだからね。そんなにつらくはないよ」

ヤナギは機体の手を使い上を指差す。ビルドブースターmkⅡを改造したであろう支援機が飛んでいた。機体機首下部に逆さまにレドームがついており、

あれで索敵を行うのだろう。

「それじゃあ私も行くよ。役員だからって手加減はしないからね」

そのままヤナギは支援機と共に去って行った。

「……と、いけね。呑気に話し込んでる場合じゃなかった。早く次の宝の場所を探さなきゃ……あれ？」

レーダーを見てソウイチは不審に思った。さつき消えたはずの場所の赤い点がついていたのだ。

見間違いか？と思うソウイチにカナコが話しかける。

「ソウイチ……お母さん、さつき言った通り、自分のやりたい様にやるから、一緒に行くからね」

「……俺だって言っただろ。好きにしながら」

「ソウイチ……」

「早速だけど確認したい場所があるんだ。手伝ってほしい……」

「うん！」

カナコの見せる笑顔、ソウイチはモニター越しの母の笑顔に無意識に安心する。

そんな気持ちの中、機体を飛ばす。それに続いてカナコのセラヴィーも飛び立った。

そしてしばらくして……アイのチームでは……

「アイ、じゃ、開けるから」

「OKナナちゃん」

岩場の中、置かれた小型のコンテナをナナのフリーダムが屈みなが

ら、宝箱の様に開ける。(アイのユニコーンはその後ろで銃を構え周囲を見張っていた。)

「……駄目だわ!またハズレ!」

ナナのフリーダムが『ハズレ』と書かれた紙をアイに見せる。

「もうこれで五個目だよ……正解はどこにあるんだか……」

アイは被ったヘルメットに右手を当てながら呟いた。ずっとこんな調子だ。正解なんて出やしない。

と、アイとナナのGポッドに通信が入った。別チームのコンドウの機体『ミブウルフ』だ。

コンドウもツチャの『ガンダムX黒王号』とチームで各所を探していた。

「ヤタテ、正解は見つけたか?」

「全然ですよ。見つけてたらその場で優勝扱いになりますから……」

「もう本当にあるかどうかすら怪しく思えて来たわよオツサン」

「そうか……俺の方も同じだ。ところでソウイチの方はどうなってるんだろうか」

「さあ……残念ですけど、深い所はカナコさんとヤナギさんに任せるしかないですよ……」

そして再びソウイチの方……

「またハズレだ!」

荒れ地に悔しそうなソウイチの声が響く。こちらも幾つかコンテナを開けたがハズレ続きだった。

「ソウイチ、落ち着いて、でも開けるペースは上がってきてるからいいじゃない」

「でも勝てなきや意味なんて……!」

うまくいかない事による悔しさの声を放ち、ソウイチのアストレアはハズレの紙をビリビリに破り捨てた。

態度にもカツカしてるのは目に見えた。

「ソウイチ……」

「次の、探しに行こう」

ソウイチはレーダーを見る。近くに一つの赤い点が見えた。手がかりがない以上そこを当たるしかない。

と、またも赤い点は消える。

「やあ二人とも、調子はどうだい？」

ソウイチが赤い点の消失に気付くと同時に、またヤナギのジムキャノンⅡが寄ってきた。

「いえ、正解の物はまだ見つけれなくて……」

「ふむ……まあ正解さえ見つけられれば優勝だ。何処か意外な場所にあるのかもしれないなあ」

まあ最後まで頑張ってくれと言いなからヤナギは去って行く。

……そしてまた消えたはずの赤い点がレーダーに現れた。

「！まただ……」

ソウイチは顔をしかめる。なぜあの人と会うたびにレーダーの赤い点が消えたり点いたりするんだろう。

あの機体を中心に何かあるのか？何の為に？何か強いひっかかりを感じた。

——意外な場所にあるかもしれないな——

さつきヤナギが言った言葉をソウイチは考えた。そしてソウイチが見据えた先は……

「あのジムキャノンのコンテナ……そうか！」

そういうや否や、ソウイチは背を向けたジムキャノン目掛けて飛び出した。

狙うは……ジムキャノンⅡのコンテナ！

「そのコンテナの中身！見せてもらう！」

ソウイチはアストレアの右腕に装備したGNソード改をジムキャノンⅡに振るう。

「む!？」

ヤナギは危険を察知すると振り向き。ホバーを活かしたバックステップでそれを回避した。

鈍重そうな外見とは裏腹にかなり軽快だ。

「ちっ！クラーケンブースター!!」

ヤナギが名前を叫ぶと支援機、クラーケンブースターがアストレア目掛けて撃つてきた。カラミティガンダムのパックパックを二体使った

四連ビームキャノンがソウイチを襲う。

「くっ！」

空中から地上に撃ちこまれるビーム、着弾と共に地面は爆発。立て続けに撃ちこまれるビームにソウイチもたじろく。

——このままじゃ追い込まれる?!——

ソウイチがどうすれば、と思案しているとアストレアの前面にカナコのセラヴィーが躍り出る。

「母さん?!」

「GNフィールド！展開！」

カナコが叫ぶと共にセラヴィーの両肩、両足のユニットが開き緑色のバリア、GNフィールドが展開された。

フィールドはビームを防ぎセラヴィーとソウイチのアストレアを守る。

「今の内よ！ソウイチ！」

「うーうん！」

ソウイチは頷くと共に左手にGNビームライフルを持ち、すかさずクラーケンブースターに撃った。

クラーケンブースターは回避行動をとろうとするも、ジムキャノンとは対照的に重武装すぎて軽快に動けない。

下部のレドームにビームは当たり、レドームは破壊された。

と、同時に全フィールドである異変が起きる。

こちらはアイの方

「ん？何これ？」

「どしたの？ナナちゃん」

「いや、なんか一個いきなり反応が現れたんだけど」

コンドウの方

「？こいつは？」

「どうした、サブロウタ」

「いやコンドウさん、一個反応が、しかもこれ動いてるぞ」

反応が一個現れたのはソウイチとカナコの方でも確認できた。

「ソウイチ！これって！」

「ヤナギさんと会う度に近くの宝の反応がついたり消えたりする。ジャミングで何か隠してる証拠だ。」

そしてあのレドームは索敵じゃなくて何か隠す目的……ヤナギさん、つまりアンタが宝を持つてるって事っすよ！」

「……フフフ、ハハハハ！」

ソウイチの指摘にヤナギがいきなり笑い出す。

「大したもんだ。ヒントは与えてやったが自力で私のトリックに気付くとはな！」

ヤナギは背中中のコンテナを切り離し、地面に置いたコンテナを開く、中には緑色に輝く四角い箱があった。

「これが皆の欲しがってる宝、名前は『キューブ』だ」

「ならそれ！すぐもらおうっす！」

「まあ待て、その前にボスと戦うのがイベントの常識というものだろう？クラーケン!!」

ヤナギが叫ぶとクラーケンブースターは機首を切り離し、後方がジムキャノンⅡの背中に、つま先にカラミティの肩が装着される。

四連ビームキャノンを追加されたジムキャノンは量産機にあるまじき威圧感を放っていた。

「私を倒してからにしてもらおうか！このジムキャノン・クラーケンを!!」

「！」
ヤナギはそう言うや否や、全身の火器十門を一斉に発射させる。

カナコはセラヴィーのGNフィールドでビームを防ぎ、ソウイチのアストレアはビームを器用にかわす。

「このー！」

すかさずソウイチはアストレアのビームライフルで撃ちかえす。

「フーン！」

ヤナギのクラーケンホバーで滑るように回避、足にカラミティのホバーを装着した為か

重量級にも関わらず機動力は一層上がっていた。

「ソウイチ！離れてて！」

カナコは叫ぶと共にセラヴィーのGNバズーカⅡとGNキャノン
を全て発射し応戦。全八門の大型ビームがクラーケンを襲った。

「ほうー！」

ヤナギは楽しそうに言うと言うと機体を横に滑らせ回避、押されているに
も関わらず余裕だ。

「二対一はちよつとキツイかなーならばー！」

ヤナギはそう言うと言った背中ブースターを切り離す。

「!?」

「二対二にしようかー！」

驚くソウイチをよそに分離したクラーケンブースターはカナコの
セラヴィーに襲いかかる。

カナコは迎撃しようとするも、クラーケンブースターはそれよりも
早くセラヴィーに火器を撃ちこむ。

避けてる暇はないとセラヴィーはGNフィールドを張り防いだ。

「私はいいいからーあなたはヤナギさんを！」

「おうー！」

ソウイチはGNソードで分離したジムキャノンⅡに斬りかかった。

ジムキャノンⅡは右腕の袖からビームサーベルを抜き、GNソード
を受け止める。

「やるねーカナコさんも実力を早くつけたが、やはり血は争えないか
！」

ジムキャノンⅡのパワーは高く、アストレアのGNソードを弾い
た。

「くっ！余裕を見せつけないでほしいツス！」

左手にビームサーベルを持ち、ソウイチは二刀流で斬りかかる、だ

がジムキャノンⅡは後方に下がりながらそれを受け流す。

「くそっ重量級のジムキャノンⅡなのに！」

「ホバーの機動力は飛躍的に上げている！これ位しなければイベントのボスは務まらないさ！これ位の強敵がいないと楽しくない。君にも解るだろう？」

「うるさい！俺は勝つんだ！勝てればそれでいい！」

「ほうーならー！」

いきなりヤナギのジムキャノンⅡは前にダツシユ、アストレアの前を横切ると、後方にいるセラヴィーに向かった。

「!?母さん！」

ジムキャノンⅡは両肩のシールドを前方に突出し、セラヴィーに勢いよく衝突させる。

使用されたカラムィテイのシールドは衝角としての使い方も出来るのだ。

「え?!キャアー！」

予期せぬ攻撃にセラヴィーは衝角をモロにくらう。GNフィールドはビームも弱い実弾も防げることが出来るが(ガンプラバトル内の話である)

ジムキャノンⅡの突進はそれを上回っていたという事だ。

突進の際にセラヴィーの両肩のGNフィールド発生装置は損傷、GNフィールドは維持できなくなった。

「あっーフィールドが！」

「今だ！クラーケン！」

「っ!!」

GNフィールドが消えた直後、クラーケンブースターがセラヴィーに連続でビーム砲を撃ちこむ、上から肩を、膝を撃ち抜かれ

瞬く間にセラヴィーはボロボロになりその場に倒れる。

「あぁっ！」

「母さん！」

「おっと動くんじゃない」

駆け寄ろうとするソウイチのアストレアにヤナギのジムキャノン

Ⅱはセラヴィーの喉元にビームサーベルをあてがう。

「人質スか？卑怯っスよ！」

「そうじゃないさ。勝ちたいのなら君にチャンスをやろう。気付かないのか？今私の守ってるコンテナはがら空きだ」

言われてソウイチは気付いた。今自分の後方に『キューブ』の入ったコンテナはある。

「取っていいぞ。それを、勝ちたいと思うなら取ればいい」

「な！何を言ってる！」

「勝たなきゃ意味がないんだろう？何を迷う必要があるんだ？」

普通なら喜んで取りに行くだろう。だが今のソウイチは迷っていた。自分自身取りに行っただ方がいいと考えながらも、

「……………」

その場に立ち尽くすアストレア、

と、遠くからアイ達がこちらに向かってきた。新しく出来た赤い点が気になって来たのだ。

「ヤタテ！見ろ！」

「あ、ソウイチ君！」

「どうした！勝ちたいんじゃないのか！」

「ソウイチ……………」

「……………ねえよ」

「何？」

「わかんねえよ!!そんなことおおっつ!!!!!!」

絶叫すると同時にソウイチはジム!!ギャンオンⅡにロケットの様に突っ込んだ。

「何っ!!」

回避が間に合わずジムキャンオンⅡは巻き込まれ、ぶつかった二機は放物線を描き派手に吹っ飛び、ゴロゴロ転がる。

「又オオッ!!」

「……………」

衝撃が止み、起き上がるジムキャノンⅡ、しかしアストレアの方は四つん這いの体勢、膝をついたまま起き上がらない。

「……おかしいんだよ。こんなの……」

歯を食いしばりながら、ソウイチは胸中を漏らし始める。ヤナギはそれを見たまま動かない。

「楽しくやりたい。それはウルフに入った時、思ってた事だった。でも周りは結果を出さなきゃ認めてくれない……」。

だから俺は楽しいって気持ちは間違いだって学んで！勝つ事こそが強いチームの！ビルダーとしての正しい有り方だって思ってた！

それなのに自分の中でそのこだわりを忘れそうになって！」

それは誰の所為だ。アイツだからだ。自分が嫌悪した筈のアイツに自分が……気付かない内に影響されていたから

「勝つ事が一番正しい楽しみ方だって！見せつけたかった人がいたのに！その人の影響を！俺は受け始めている！

なんなんだよ！自分が正しいと思っていた事なのに！こんな簡単に自分が揺らぐなんて！」

『だからお母さんの、お前と楽しみたいという気持ちを拒否したのか？』

「!?」

通信でコンドウの声がする。こちらの方にツチャ、アイ、ナナを含めた四人、いや、現時点で残ってるビルダーが全員こちらに向かってきている。

いきなり表示が増えたのだ。皆ここにあるのが本当の宝だと確信していた。

『お前にもただ純粋に楽しみたい。遊びたいという気持ちがあると、その気持ちを受け入れるのが嫌だ、と』

「……そうつスよ」

『だからって親の気持ちをないがしろにする奴があるか!!』

コンドウの怒り声がソウイチの耳をつんざく、

『コンドウさん、落ち着いて……ソウイチ君、私の所為って思ってる？』

今度はアイの声だ。こちらは少し悲しそうだった。

「……いえ」

『私は今まで自分がガン普拉バトルに掲げてきた想いは、自分で正しいって思ってた事。それがソウイチ君に悪影響を及ぼしたとしても、私は謝ることは出来ない』

「別に謝罪を求めてるわけじゃないっすよ……」

『自分でその気持ちを嫌ってるっていうのなら、私達にあなたが変化を拒むのを止める理由はないのかもしれない』

何を言ってるんだヤタテ！とコンドウは止めに入ろうとするがアイは続ける。

『強制は出来ない。でも今は、お母さんの気持ちを汲んであげて！少しでも楽しみたいって気持ちがあるのなら、せめて今は一緒に楽しんであげて！』

だってあなたのお母さんは、自分でガン普拉バトルをやろうと、変わろうとしたんだもの』

「……強制はしないって言ったはずっすよ……」

『自分が変わるのかどうかは、せめてその後に自分で決めろ、選ぶのは自分自身でしかないんだからな』

「……俺は……」

最後にコンドウが付け足す。アイも同じ事を言おうとしていたらしく、言葉を取られたことに面食らっていた。

「説教は澄んだかね？で、どうするんだい？」

相変わらずヤナギはその場から動かずソウイチの反応を待っていた。

「……俺は……！俺は!!」

ソウイチが叫ぶ瞬間、アストレアの全身が赤く輝く、トランザムだ。立ち上がりまたもジムキャノンIIに斬りかかる。

「ぬっ！」

トランザムの加速により、アストレアの斬撃はなおも早くなっていた。ヤナギもさつきと同じ要領で受け流そうとするがこれにはヤナギも驚く、

「ソウイチ……」

「私と戦うのかね？勝てればいいんじゃないのか？」

「俺は！今はそんなのどうだっていい!!俺は！母さんと!!」

切り上げたGNソードがジムキャノンIIのビームサーベルを弾き飛ばす。次に来る斬撃をかわそうとヤナギはカラミティのシールドを前面に構える、が、

「ガンプラバトルがしたいんだああ!!」

涙を浮かべながらのソウイチの一撃はカラミティのシールドを真つ二つに斬り裂いた。

「ほう！だがこの場には残りのビルダー達が集まりつつあるぞ！はたしてもうすぐ乱戦になるこの場で楽しむ余裕があるかな？」

『ヤナギさん、そうはさせませんよ!』

コンドウの通信がソウイチとヤナギのGポッドにつながる。アイの通信もそれに続く。

『各所のビルダーは私たちが散開して相手をしています。ツチャさんもナナちゃんも一緒ですよ』

『コンドウさん!ヤタテさん!』

『ソウイチ君、とりあえず今はいう事ないよ。楽しんで!お母さんと!』

「……はい!」

「待ってたわ!ソウイチのその言葉!」

ソウイチの返事に続き、カナコの声が響く。直後、セラヴィーのバックパックが分離され、畳まれていた手足が展開、頭部がせり出す。

セラヴィーの分離形態『セラフイムガンダム』だ。分離後はこちらが本体となる。

「母さん!」

「今度こそ一緒に楽しもう!」

セラフイムもトランザムを発動させ赤く輝く。ソウイチは嬉しそうに「うん!」と答えた。

セラフイムは両手をキャノンに戻しジムキャノンIIに撃つ。

「活気をつけて!だが!」

ヤナギはクラーケンブースターをセラフィムに向ける。撃ち落そうというわけだ。

ストレアはセラフィムを助けようとするが少し距離がある。トラザムでも届かないかもしれない。

「母さんに手え出すなああ!!」

ソウイチは背中の中のダークマターブースターを切り離す。コウモリのような形に変形したダークマターブースターは

頭部から大型ビーム砲を発射、ビームはクラーケンブースターの側面を貫いた。黒煙を吹き、爆発するクラーケンブースター

「どうだあつ!」

「何つ!だが……甘いな!」

ジムキャノンⅡは背部のバックパックから左手にビームサーベルを取り出し。アストレア相手に振り上げる。

ダークマターブースターの操縦には欠点があった。それは、分離中は搭載した本体のコントローラが不可だという事。

アストレア本体に強力な火器がない以上、分離するしかなかった。

「っ!」

「わざわざ分離するとはお人よしな奴だな!カナコ君にそっくりだよ!」

その言葉の直後に斬り裂かれる機体、通信を聞いていただけのアイ達はソウイチがこれでやられたかと思った。だが……

直後、ジムキャノンⅡの胸から実体剣が生えた、否、背中から剣が貫いたのだ。

「バカ……なっ!!」

「危機一髪だったわね。ソウイチ」

やったのはカナコのセラフィムだ。ジムキャノンⅡをダークマターブレイドという手甲と一体化した剣で貫いていたのだ。

これはダークマターブースターの可変翼だった部分に変形した物だ。

「ふふっ……親子とはいえ即席のチームと甘く見ていたが……大したものだ。今までの無礼を……許してくれ……」

ダークマターブレイドを引き抜くと同時にジムキャノンIIは倒れ込み爆発、墜落していたクラーケンブースターも同時に爆散した。

「やった……っ！」

安堵の声を上げるソウイチ、トランザムが切れたアストレアにダークマターブースターが再び収まる。

同時にトランザムの切れたセラフィムが寄ってきた。

「皆が残りの人たちを抑えてくれてる。今のうちに宝を取りなよ」

母の言葉にうなづき、コンテナの中に手を突っ込もうとするソウイチ、しかし、ある事が脳裏によぎった。

どうしたの？と不審に思ったカナコが問う。

「……違うチームだから、一緒に表彰台には上がれない……でも一緒に取れば……」

「ソウイチ……ええ!!」

そう言いながらカナコのセラフィムはアストレアと並び、同時にコンテナに手を入れ、宝『キューブ』を掴んだ。

これにより大会はソウイチとカナコの二人の勝利となったのだ。

大会の後はしばらく待機となりその後には表彰式となる。アイ達はコンドウ達とエントランスで待機していた。

タカコとムツミもいるが、ソウイチとカナコはまだ来てない中、アイ達は心配しながらその話をしていた。

「やあ皆、今日は損な役回りをさせてしまいすまなかつたね」

ソウイチ達の前にヤナギがやってきた。心なしか少し声が沈んでいた。

「あ、ヤナギさん、ソウイチ君、うまくいきましたよね」

アイが問いかける。ヤナギが『手伝わせてほしい』と言ったのは先程のソウイチに宝をチラつかせる事だった。

これでソウイチの心に揺さぶりをかけて本心を吐かせるというヤナギ本人の発案だった。

「ああ、うまくいったさ」

「しかしヤナギさんも思い切った事しますね。実際イベントバトルを私用しちやった様なもんですから、怒られたりしないんですか?」

「……もう十分怒られたよ……」

ツチャヤの問いに顔を青ざめてヤナギは答える。よほど絞られたのだろう。

「でも正直危険な賭けすぎましたよ……。もしソウイチ君がこれでの強情を貫いたままだったらどうするつもりだったんですか……?」
「失敗するとは思ってなかったさ。ソウイチ君はカナコさんの息子だからな」

「うーん……それでいいんですか……?」

「まあまあムツミ!結果オーライって事で」

「……要は俺を試してたって事スか……」

現れたソウイチとカナコに「あつ、ソウイチ」とちよつとバツが悪そうにコンドウが言う。

さっきの会話を聞いていた所為かややむくれていた。

「そういう事言っちゃダメよソウイチ、せつかく皆さんがソウイチの為思ってくれたんだから」

「母さんは黙っててよ。……でもま、ちよつと今回は感謝しますよ。今日のイベントでちよつと自分の事考える機会になりましたし」

そう言つてソウイチは、どこかぶつきらぼうながらも頭を下げる。

「……有難う。そしてすいませんでした……」

慣れてない所為か顔は真っ赤だ。

「叱ろうと思つてたけど、自分で謝ることは出来たんだ」

意地悪っぽく言うカナコにソウイチは反論する。

「う……うるさいな、俺だつて悪い事の区別位つくよ!」

「それはよかった。……色々あったけど、楽しかったよ、私」

「……そりやどうも、……俺も楽しかったよ」

「?!アサダ!アンタ今楽しいって……」

「何大げさに驚いてるんスカハジメさん。……どうせ勝つんだったら『楽しい』気持ちで勝った方がいいって思えてきただけっスよ……。」

『友達』の考えをないがしろにするのは申し訳ないっスから……。」

眼を逸らしながら言うソウイチに全員がざわめく。ソウイチの口からあり得ない言葉が出たからだ。

「なんて言っただけはアイに感化されてきたとか〜」

「な！何言ってるんスカフジさん！あくまでそういう考えもアリだっと思っただけっスから!!」

タカコの何気ない発言にソウイチは慌てる。会話が進むたびどんどん顔は赤くなる一方だ。

「いずれにせよ認めたって事には変わらないと思うよ……。」

「ミ・ミヨさんまで！もう！外行ってるっスよ！この場にいたんじやずつとからかわれっぱなしだ！」

不機嫌そうになりながらソウイチはホールから出て行った。

「あー行っちゃった」

「でも今日は私にもソウイチにもいい思い出になりました。ありがとうございます皆さん」

「気にしないでくださいオバサン、当然の事したままですよ〜」

タカコの発言にまた全員が「あ……。」と顔をしかめた。そしてまたカナコが黙りこくる。

「……オバサンじゃないもん……そりやもう30超えたけどまだ32だもん……」

俯きながらブツブツ言いだすカナコ、

「タカコお……!!」

「え?!あ！あたし?!」

何余計な事言ってるんだと迫るムツミにタカコは動揺する。どうにか話題でカナコの機嫌を直そうと考えるタカコ、ある質問が浮かんだ。

「あ！そういえばソウイチ君のお父さん一度も現れてませんね！今日はこないんでしょうか?!」

その質問に全員が凍りついた。知らないアイ達でもある程度答え

は予測出来てたから、

すかさずコンドウやヤナギはタカコの質問を止めさせようとする、しかしカナコは少し黙って言った。

「……亡くなってます。ソウイチが五歳の時に……」

少し悲しそうな顔でカナコは言う。タカコは自分の言った無神経さを後悔。顔を青ざめながら頭を下げる。

「ごめんなさい！知らないとはいえこんな事！」

「いいんです。気にしないで、元々長生き出来ないって言われてた人だから、ある程度覚悟は出来てました。」

それに周りの色々な人が助けてくれたからそこまで辛い思いをせずにすみましたよ」

——旦那を失ってる事自体一番辛いだろうに——、そうその場にした何人が思った事だろう。

「でも、やっぱりソウイチは無意識に男親をダブらせてるのかもしれないですね」

「?どういう事ですかそれ?」

「夫は病弱でしたけど、体型がガツシリしたコンドウさんみたいな人でしてね。特に背中なんかはそっくりだったんです」

コンドウを見ながらカナコは言う。

「……ソウイチ君のお父さんの体型が……」

「オッサンみたい……、まさか……ソウイチがオッサンにピッタリなのって……」

アイ達が一斉にコンドウを見る。動揺するコンドウ

「な！なんだ!？」

「あ、てことはいずれコンドウさん再婚とかでソウイチ君のお父さんに……」

「な!!何イイツ!!」

謝ったにもかかわらずまたも失言するタカコ、ムツミが「タカココオ！」といいながら後ろからタカコの口を塞いだ。

「フッフ、残念ですけど私は今までもこれからも、夫しか愛しませんよ」

カナコはパイロットスーツの左手袋を外し、手を見せた。薬指には結婚指輪が持ち主を護る様に輝いていた。

そして外で一人表彰式を待つソウイチ……、彼の脳裏にはコンドウの背中、そしてアイの笑顔があつた。

——越えたいって思う奴、もう一人増えたのかも……——
そんな事をソウイチは考えていた。

第26話 「面接バトル」

その日、緑まばらなサバンナの大地を幾つもの巨大なロボットが飛び交っていた。無論現実ではなくガンプラバトルの話だ。

その大地にポツンと白い機体と蒼い機体がお互いを睨む様に向かい合っていた。

「いやいやーやるじゃねえか！ワシのグフ相手にこうも持ちこたえるたあ結構なもんだぜ!! AGE系の出来の良さは聞いてたがよ！それだけじゃあねえな!!」

蒼い機体、『ガンダム08小隊』に登場したB3グフ（通称グフ・カスタム）から楽しそうな声が響く、

乗っているのは恰幅のいい50位の男性だ。白髪まじりの髪に口元に白い髭を生やしてる。その外見とは裏腹に眼は子供の様に輝いていた。

「くっ！今までの相手とは全然違う！ガンプラだけじゃない！ビルダーの腕前も！もしかしたらコンドウさんやサツマさんよりも!？」

一方の白い機体、AGE2Eフェンリルに乗ったアイは不安を隠せなかった。

「ほいじゃまー勝負といこうぜい!!」

そう中年の男が言うと同時にヒートサーベルを構えたB3グフがフェンリル突っ込もうとする。アイもアンカーガンを構えた。

——なんで……——

同時にアイはこうなった経緯を思い出し、思わず心の中で叫んだ。

——なんでこうなったのおおっつ!!!——

——話は数日前にさかのぼる。——

株式会社、モノトーン・マウス製作所、ライン製造の下請け会社だ。

模型店『ガリア大陸』から5キロ程離れたこの会社が全ての始まりだった。

「ったくよー。このクソ忙しい時期になんだってバイト面接にワシまで駆り出されなきゃいけないワケ？お前ら人事部だけでいいじゃんよー」

面接室のミーティングテーブルに複数の男が座っていた。一番端の作業服姿の中年、先程B3グフに乗っていた男が隣のスーツ姿の男に愚痴る。

「申し訳ありません。ブスジマ・シンジ工場長。ですが規則ですので」

「ったくー、こっちや仕事してる時間に学生のバイト君の面接相手だぜ？これで作業効率遅れたって、社長はケチって無駄な残業すんなってんだろ？やってらんねーぜ全く」

「静かにして下さい」

文句を垂らすシンジと呼ばれた男、そして、ひとりのガチガチに緊張した学生が入ってきた。

「ヤーヤタテ・アイです！本日はよろしくお願いします！」

アイだった。緊張しながらもおじぎをし、履歴書を提出する。

「あーそんなに緊張しなくていいから、それじゃ2・3質問するよ」

「はい！」

「まずバイトの募集は現場志望の子を募集してたんだけどキミは現場志望かな？だとしたらどうして？」

製造業で女の子が現場志望、というのは珍しいと思った故の質問だった。

「あー！物作るの好きなんで！好きな事への集中力なら自信があります！」

「へー女の子なのに事務じゃなくて現場志望ねえ」

「まー採用するとなるとムサイ男より女の子の方がいいかねー」

「——とシンジは思う。」

「…………およっ」

シンジはアイの履歴書に気になる部分があった。趣味の欄に模型

と書いてあったからだ。

「趣味模型つてあるけど、何作るのさ？」

「え？あの……ガンプラ」

アイはどもる。こういう場でガンプラと言うのはちよつと気がひけた為だ。

「わーお！ガンプラか！ワシも結構やってんのよ！」

「え？本当ですか！」

「いやマジよ？やっぱ何!?ガンプラバトルやんの？」

「はい！腕なら自信あります！コンテストの優勝経験もありますから！」

「うはーマジで!?お前さんみたいなおチビちゃんが！」

「ウオツホン！」

『あ……』

隣の人事部の人間がわざとらしく咳をし、止める。

「それじゃ、質問続けるから」

「はい……」

アイも声を落としてしおらしくなっていた。

そして数分経って面接は終わる。この辺は最初のやり取りでアイも緊張がほぐれた様でスムーズに質問に答える事が出来た。

「それじゃ結果通知は何日かしたら送るから」

「はい、今日はありがとうございます」

アイはそう言って部屋をおじぎをして出る。

「ガンプラバトルかあ、最近やってねえなく、話したら久々にバトルしたくなってきたじゃねえかよ……」

履歴書を持ちながらブツブツ言うブスジマ・シンジ、ガンプラはやっていてもここ一年程バトルにはご無沙汰だった。

「ブスジマさん？」

「なんとかあの嬢ちゃんと勝負する方法はねえもんか……」

「工場長!!」

「うおー！」

呼びかけに応じないブスジマに人事の人間は怒鳴った。聞いてな

かったブスジマは驚く、

「次の方の面接あるんですから今そういう考えはナシにして下さい」

「いや悪い悪い、都合の悪い話は全部聞き流しちまうタチで……ん？」

「では次の方へ」

「そうだ!!ワシは工場長なんだ!この手があらあね!!」

「!？」

大声を出すブスジマに今度は人事の人間がたじろいた。

数日後、アイとナナ、タカコとムツミは下校中、たわいもない話で盛り上がる四人。

「そういえば昨日のテレビ見た?。トップアイドルグループ『SGO C(スゴック)』の皆があんな芸人じみた動きするなんてビックリしたよ私」

「違う……あれはコウジ君じゃない……コウジ君じゃないよ……」

「はいはいムツミ、自分が納得出来ないからって拒絶しちゃ駄目よ。ま、そういうジャンルに足突っ込んでほしくはないってのはアタシも同意見かな?」

「そうだねナナ、でもそういうイメージついちやうともう抜け出せなくなるっていうし、もう手遅れなんじゃない?」

「タアカアコオオツ!!」

逃げるタカコを追いかけるムツミ、いつもの事と苦笑するアイとナナ、

「それはそうとき、アイ」

「ん?」

「こないだバイトの面接行くとか言ってたじゃない?どうしたのよ結果」

「結果だったら来たよ?なんか一次試験通過したから二次試験やるからここでガン普拉バトルしろって」

アイはそういうと鞆から一通の封筒をナナに渡した。封筒の中身

は合格通知、なのだが二次試験をやる為、日曜日十時に模型店『ガリア大陸』に來い。とだけ記されていた。

「なにこれ？面接とガンプラバトル何の関係があんのよ？会社で作ってる物がガンプラ関係？」

「知らないよ。とにかく日曜日にならないと分からないよ」

「なんか怪しいわね……」

「うわー！冗談！冗談だよう！許してー！」

「ホンツトいつつもいつつもいらん事言つてええっ!!」

……

そして日曜日、ガリア大陸にアイは來た。試験絡みと思い、日曜日だというのにアイの服装は制服だった。アイが來ると店員のハセベが駆け寄つてくる。

「あ！アイちゃん遅いじゃないか！」

ちよつと慌てた様なハセベの挙動に不思議に感じるアイ。

「どうしたんですかハセベさん」

「今日ウチでサバイバルバトルやる予定だったんだけど君が出るって聞いてエントリーしたんだよ。もう始まる寸前だよ」

「え?!私出るって言つてませんよ!？」

「そうなの？でも出るって髭はやした50代位の人が言つてたよ。もう何日も前に」

「50代って……まさか……」

そしてバトルが始まった。今回のステージは『ガンダム0083』に登場した。キンバライド基地周辺だ。ダイヤモンド鉱山を改造したこの基地は

ステージの中心部を巨大な鉱山基地がそびえ立ち、その周りをサバンの荒野が広がっていた。

サバンのど真ん中のこの場所にある者はガリア大陸のGポッドから、

ある者はネット回線を通じて別の店から、十人以上のビルダー、十体以上のガンプラが飛び交っていた。

「とりあえず出ては見たけど……向こうが何もいってこないとなると……」

ストライダー形態のAGE2Eフェンリルに乗ったアイが不安げに呟く、今回はユニコーンは改造中な為この機体だ。

直後、アイのGポッドに警告音が流れる。下から始まって早々に『ガンダム0080』に登場した水陸両用機、ズゴックEが頭部ロケットランチャーを狙い撃つてくる。

「こんな乾燥地帯でズゴックだなんて！」

丸みを帯びた頭部から発射されるロケットランチャーを難なくかわしながら、フェンリルはズゴックE目掛けて突撃、

ある程度近づくとすぐさまモビルスーツへ変形、大地に降りると同時にドッズランサーでズゴックEを貫いた。すぐさま爆発するズゴックEから離れる。

「まずは一機……このどこかに面接官の人がいるの!?!?!」

すぐさま背後からいくつもの銃弾がフェンリル目掛けて飛んでくる。寸前に察知していたアイはフェンリルをステップさせ回避。

ターンをかけると、撃つてきた方向に向き直る。

「噂のヤタテ・アイさんかい！」

「あなたが面接官?!ううん!前の人とは声が違う！」

鉱山の上、太陽の逆光を浴びながら犯人はそびえたっていた。

撃つてきたのはHGUCのグフ・カスタムだ。機体から若い男の声が響く、グフは鉱山の上からガトリングシールドでこちらを狙っていた。

「アンタが出るとは予想外だがチャンスだ!アンタを倒して俺の名をガリア大陸にとどろかす!この俺のグフカスタムの餌食と……」

ズルツ

今言い終わるかという瞬間だった。グフカスタムが真ん中から真つ二つとなり爆発した。

「なっ!?!」

「わりいな。今日は嬢ちゃん大事な試験なのよ」

爆発したグフカスタムの背後からもう一機、グフカスタムが現れた。手にはヒートサーベルが握られておりこれで先程のグフカスタムを両断したのだろう。

「よく来たな嬢ちゃん!呼んだのはワシ!ブスジマ・シンジ様だぜ!」

「その声!?!前日に面接に出てた!?!」

「その通り!二次試験はガンプラバトルってわけよ!今日はこの勝負で勝てば見事バイトとして雇ってやるぜい!」

「ちよつと待つてくださいいよ!ガンプラバトルとなんの関係があるんですか!製造業だけどガンプラとは何の関係もない仕事ですよ!?!」

「簡単にやられんなよ!つまんねえから!?!」

「いや!だから!?!」

アイ自身、何故二次試験がガンプラバトルに繋がるのか全く分からなかった。問いかけるも聞いている最中から鉾山から飛び降りると凄い勢いをかけてシンジのグフカスタムが走ってきた。

そのままフェンリル目掛けてヒートサーベルを振り上げるグフ

「まずは一手!?!」

「人の話聞いてください!?!い!?!」

アイが叫ぶと同時にヒートサーベルが振り下ろされる。左腕のシグルブレイドで受け止めるも、その衝撃はアイも後ずさりする程だ。

その一撃を何度も撃ちつけるグフカスタム、何度も受けるうちにシグルブレイドに亀裂が入ってきた。

「ヒビが!なんて重い!?!」

「当然だ!間接強化してあんのよ!これ位のパワーはお茶の子さいさいだぜ!」

「間接!?!あ!」

見るとグフの間接はHGUCの旧ザクの物だ。それだけではない、

腰を捻り、膝を大きく上げる挙動でヒートサーベルを振ってくる。

通常のHGUCのグフカスタムでは腰やパイプが干渉してしまう為出来ない動きだった。

「このグフカスタム！HGUCじゃない!?」

「ピンポーン！ご名答！こいつあHGUCじゃない！旧キットのHGだよ！HGUCの旧ザクとミキシングして作ったのよ！」

「!?」

シンジが自慢げに話す。ブスジマの機体、HGグフカスタムは十年以上前に出たキットだ。当時は傑作といわれていたが現在主流のHGUCの物と比較するときすがに苦しい部分もある。

HGUCの旧ザクを芯にHGグフカスタムのパーツ、胴のパイプをスプリングパイプと金属パーツを組み合わせる事によって柔軟性のある動きを可能にした機体だった。

「だからって大人しくやられる理由には!!」

相手のグフの完成度を理解しつつも、アイは右腕のドツズランサーをそのままグフに突き刺す。しかしグフはガトリングシールドで受け止めた。

ドツズランサーでも貫通できない。

「くっ！堅い！」

「それで終わっちゃあつまんねえだろ？作ったのはHGUCのグフカスタムが出るよりだいぶ前だったんだがなあ、

HGUCのグフカスタムにや負けた事はねーのさ！」

「云いたい事は解りますけど！」

そのままアイはドツズランサーのビームバルカンを乱射、危険を察知したブスジマは素早くバックステップをかける。

「うお！説明してる時にそりやねえだろ!!」

「時と場合を考えて下さい！」

「おいおい。今は楽しいバトルの時間だけ？そんなガチガチじゃあ楽しめねえだろうがよ？」

「普通のバトルだったらそりや楽しんでますよ。でも今は面接試験中でしょ!？」

「あ、忘れてた」

「え!？」

「あーいやなんでもねえ。ん?!」

その時だった。離れた二機目掛けて。数条のビームが飛んでくる。かわす二機。

「何!？」

「他の機体!?!ワシらを狙って来たってか?!」

一体のガンプラが現れる。参加した機体の中でひとときわ大きく目立つ機体だ。HGUCのサイコガンダム、大きさはアイ達の機体の倍以上だ。

「サイコガンダム!先に私達を倒そうって事!？」

「妙な茶々入れやがって!だが大歓迎だぜ!」

妙に嬉しそうに言うのとB3グフは新手の機体達へと突っ込む。

「嬢ちゃん!俺が突っ込むから嬢ちゃんは援護してちょよ!」

「ちょ!?!いきなりそんな事言われても!」

アイの言葉に耳を貸さずブスジマはサイコガンダムへと突っ込んでいった。

「だから人の話聞いてって!!」

バーニアは使わず走るグフ目掛けてサイコガンダムは両手のビーム砲で迎え撃つ。しかしグフは簡単にそれをかわす。

「邪魔くせえな!!」

左腕のガトリングシールドをサイコガンダムの左手に撃ち込む。

そのまま左手は爆発。

予期せぬ事態と、爆発の衝撃にサイコガンダムは片膝をついた。それを見ていたアイは目を疑う。

「嘘!?!ガトリング一発で!?!」

「こいつぁ銃口周りの汚し!筋彫りはモチのロン!ピンバイスで銃口もちゃんと穴開けてんのさ!だから通常の物より威力は上だぜ!」

説明しながらもサイコガンダムに突っ込むグフ。サイコガンダムが膝をついた際に立てた側の膝に飛び乗り、

あつという間にサイコガンダムの頭頂部にグフカスタムは登り

ヒートサーベルをサイコガンダムの頭部へ突き刺した。

「お疲れさん!!」

そのまま離れようとするB3グフ。だがサイコガンダムは完全に沈黙してはおらず、残った手をグフカスタムに向ける。

「おっと！まだ動くんかい！」

「えっと！ブスジマさん！」

直後、その手にフェンリルがドツズランサーを突き刺す。同時にグフはもうサイコガンダムが動かない様コクピットのある頭部を真っ二つに切り裂いた。

すぐさま離れる二機、二人ともお互いが敵である事を忘れていた。

『やったー……あー!』

直後、敵である事を思い出したかのように離れ、撃ちあう二機、もう周囲にはこの二機しか残っていないなかった。

「くっ！ベテランのビルダーの実力は理解してるつもりだけど……ここまで強いなんて!」

「当然だぜ！お前さんが生まれる前からこっちやガンプラ作ってんよ！経験値が違わあな！それに!」

グフは右腕に収納されたヒートロッドを打ち出す。そのままヒートロッドはドツズランサーにくっつく。

「!？」

「グフに乗ってるって事はエース！そういう事だわな!!」

ヒートロッドがついた瞬間『電撃が来る!』とアイは直観的に判断、ドツズランサーから手を離そうとするフェンリル。

しかし遅かった。離す直前に電撃はフェンリルを襲う。そのままグフはヒートロッドを戻すが、フェンリルが手を緩めていた為ドツズランサーもグフの方に引き寄せられた。

「いやいややるじゃねえか！ワシのグフ相手にこうも持ちこたえるたあ結構なもんだぜ!! AGE系の出来の良さは聞いてたがよ！それだけじゃあねえな!!」

「くっ！今までの相手とは全然違う！ガンプラだけじゃない！ビルダーの腕前も！もしかしたらコンドウさんやサツマさんよりも!」

「ほいじやま！勝負といこうぜい!!」

グフがフェンリルに突っ込もうとする。

「ドツズランサーがなくなったって!」

ほんの一瞬、冒頭の台詞を心の中で愚痴るアイもアンカーガンをグフ目掛けて打ち出した。

「来るかい!?!」

ブスジマは左腕のガトリングシールドをシールドごとそのまま投げつけた。ブンブンと音を立てて回るシールドがフェンリルに向かう。

「そのまま投げつけた!?!」

「剣はやれねえがこつちをやるよ!!」

アンカーガンはシールドに当たるも弾かれる。シールドがフェンリル目掛けて飛んでくるも寸での所でよけるフェンリル。

シールドは轟音と土煙を上げてサバンナの地に突き刺さる。

「あ……危なかった……ハッ!」

一瞬目を離れたグフに向き直るフェンリル、グフはジャンプしてヒートサーベルをふり降ろそうとしていた。

シールドが無くなったグフの左腕は奪ったドツズランサーを持っていた。

「避けきれない!?!」

「こいつで!どうだあぁっ!!」

アイはフェンリルのシングルブレイドを盾代わりに使おうと、右腕を頭上に、左腕を腹部に持っていく。防げるかとアイは不安だった。直後結果は分かった。

「そんな……」

「ワシの勝ちだな」

……フェンリルのコクピットを自分のドツズランサーで貫かれるという形で……グフ右腕のヒートサーベルは防ぐ事は出来たのだが、亀裂の入った左腕のシングルブレイドでは防ぎきれなかったのである。

ドツズランサーを受けたシングルブレイドはガラスの様に砕けてい

た。バトルの結果はブスジマの勝利という形で終わった。

「負けました……これで試験に落ちたって事ですよね……」

「いやでも面白かったぜ。またやりてえな」

「でも……負けた以上に今日は悔しいですよ……」

勝負に負けた事、試験に落ちた事、両方の悔しさの板挟みにアイは涙を抑える事が出来なかった。だがブスジマは意外な言葉を言った。

「合格だよ、嬢ちゃん」

「え？」

「悪かったな。本当はよ、二次試験なんざ嘘だったんだよ。封筒送った時からお前さんの合格は会社の方で決まっていた」

「な……!」

緊張が抜けたのかへなへなと床にへたり込むアイ

「そんなああ! ひどすぎますよ!」

「すまねえ、久々にガンプラバトルがやりたくなくなってお前さんの実力も見ておきたかった。今の現役のビルダーってのはどんな腕かなってな」

口調がさつきより真面目になっている。ブスジマなりにアイを騙したことを気にしているのだろう。

「負けちゃいましたけどね……」

「たった一回の負けだろうが、その若さであれだけやれりや十分だ! 次はもつと強くなつてりやいいだろ」

「なんか釈然としませんが……そうですね……負けませんから……次は負けませんかからね!」

「おうよ! ようこそ新しいバイト君!」

Vサインと笑顔でブスジマは答えた。

「でもよく考えたら……」

「ん?」

「普通に誘ってくればこんな嫌な思いしなくてもすんだのに!! なんてこんな事したんですか!」

「だから悪かったって！普通に誘うより試験ダシにすりや本気でやってくれると思つてたんだよ〜!!」

「納得できませんよそんなの!!」

「マジ!? えーと、えーと！ あっ！ それに！ それにだよ！ 最近は違法ビルダーとかいう変なビルダーもいるって話だからよ！」

お前さんがそれだったら態度考えようって魂胆あったんだよ！」

突っ込まれて、慌てて話題を変えるブスジマ、アイは最後の部分が気になったように掴みかかるのをやめた。

「違法ビルダー？ なんですかそれ？」

「いや、よくは分からねエ、だが違法つつー事はよくねえ事だつてのはわかるぜ」

「あの……そりや皆そう思うでしょ……」

とりあえずアイの怒りは少しは和らいだようだ。

——つい最近聞いた噂話だったけど信じてくれてよかった。ワシ自体違法ビルダーなんて信じてないけど、ゴメンよアイちゃん——

と、心の中で謝罪してるのはアイは知りようがなかったが……

なんやかんやで二人は、上司と部下というよりも年の離れた友達のように周りの人間からは見えた。

同時刻……とあるゲームセンターのガンプラバトルコーナー……

丸テーブルに向かい合う様にして、黒髪が腰まで伸びた少女がミディアムボブの女性に小さな箱を渡す。

「ではテストプレイヤーとして、あなたにこれを託します」

「ええ……でもこれ、本当にタダでいいの？」

「こちらがテストプレイヤーと認定して以上、お代はいりませんよ。

代わりにバトルのデータを出来る限り取ってほしいと上からの通達です。まだまだ私達の商品は研究途中ですので」

「データね……分かったわ。といっても別に相手には不自由しないけどね。マスマシやヒロ達もわたしを止めようとバトルに乱入してくるし」

「よろしければ個人的に戦ってほしい相手がいるのですが、チームエ

「デン程ではないにせよ、戦績も良く、いいデータになるかと」

「誰かな？」

「模型店『ガリア大陸』のビルダー、ヤタテ・アイです」

「アイちゃん……いいよ。わたしに任せて」

違法ビルダー……それがガンプラバトル全体を巻き込む大きな運命のうねりとなる事をまだアイは気付いてなかった……。

第27話「違法ビルダー」(ジエノアスキラー & エクシアリペア登場)

「違法ビルダー?」

「はい。昨日言われまして、聞いた事のない言葉だったんですけどコンドウさん知らないかなって」

ガン普拉バトル、というバイト試験から翌日の日曜日、

アイとナナは模型店『ガリア大陸』にいつもの様に寄っていた。日曜日の所為か今日はいつもより人が多い。Gポッドはかなりの行列を作っていた。

行列から外れた横で昨日の話ついでにと、アイとしては軽い話題感覚でコンドウに話を振ってみた。

「さあ?俺も聞き覚えがないな、サブ、お前は?」

「いや、俺も聞いた事はないよ」

コンドウと隣にいたツチャが答える。ソウイチはまだ店に来ていない為、コンドウ達は二人だけだった。

「それはともかくとして、バイト自体は受かったんだろ?よかったじゃないか」

「勝負自体には負けちゃいましたけどね、実際にはもう結果決まってる、ただ私とバトルしたかったただけだって」

「なんか怪しいなと思ったたらそういう事、でもアンタが負けるってそんな強かったわけ?」

最近強いビルダーは何度も目の当たりにしたナナだが、面接官までそれほど強いとはにわかには信じられなかった。

「そりゃあねえ、正攻法じゃ本当齒が立たなかったよ。改造した旧キットのグフカスタムでもう大暴れしちゃってて」

「ほう!今時旧キットの改造か!どんなのか見てみたいな!」

コンドウが興味の反応を見せる。と、

「おお坊主!ワシのグフがみてえってか!いいとも!存分に見てくれい!」

コンドウの目の前にその改造したHGグフカスタムが現れる。

「な！なんだ!？」

「あれ!?ブスジマさん!!なんでこんな所に!」

アイが驚きの反応を見せる。ブスジマが手に持った改造グフをコンドウの目の前に見せつけていたのだ。

「おうアイちゃん!今日は休日だぜ!昨日バトルした所為かガン普拉バトル魂に火がついてよ!プライベート来たってわけだ!」

「ブスジマ……?ヤタテ!もしかしてこの人とバトルしたのか?!」

コンドウが血相を変えてアイに詰め寄る。アイはしどろもどろに答える。

「え?そうですけど、知ってる人なんですか?」

「ああ、俺がここで有名になる前、敵ナシと言われたビルダーだ。ここ1年姿を消してたんだがこの人とバトルしたとは……」

「あーあんとときや忙しい時期だったからよ。趣味も出来る時期と出来ない時期があるってこった」

「へえ、じゃあオツサンと戦った事はないんだ」

「そういう事になるな。この人がずっとガン普拉バトルを続けていたら、俺は今の地位にはいなかっただろう」

「いやいや持ち上げてくれんじゃねえの、もつと褒めてちよ」

と、ブスジマが上機嫌になってる頃、ソウイチがやってきた。アイ達を見つけるや否や駆け寄ってくる。

「どうも皆さんお揃いで、見ない人もいるツスけど」

「あ、ソウイチ君だ。こちらは私のバイト先の上司のブスジマさんだよ」

「あ、どうも。いやあついに来たツスね!この時期が!」

「アンタは珍しくテンション高いわね。盛り上がる時期って何よ?」

ナナが問う。それを見たソウイチは意外そうに驚いた。

「ハジメさん、ヤタテさんに聞いてなかったんスか?ガン普拉バトル選手権ツス!」

「あー!そういえばもうそんな時期だね」

「?ガン普拉選手権……ガン普拉バトルの全国大会とか?」

言葉と二人の反応からして意味はナナでもなんとなく予想できた。

「察しが良いツスねハジメさん。その通り、全国からガン普拉ビルダーが集まり、そして、戦って!戦って!戦い抜いて!」

最後まで勝ち残った者が「最強のガン普拉ビルダー」の栄光を手にする事が出来るんす!」

「だから今日はいつになく人が多かったんだ」と言いながらナナは見回す。

「前は4チームごとのサバイバルだったんすけど、去年からはトーナメント方式になったツスからね、今のうちに特訓しておきたいって事ツス」

「去年は地区予選決勝で落ちたから俺達、今年こそは全国へ行きたいもんだ」

コンドウは遠くを見る様に思い出す。去年はエデンに負けたのだ。

「大丈夫ツスよ!去年に比べて俺達のレベルもアップしてるツス!」

「おくつと!そうは言うがな諸君!ライバルだって増えてんの忘れてねえか?」

ブスジマが自分を指さす。

「ワシだってちようどガン普拉魂に火がついた身だ。以前からのガン普拉仲間誘って大会にだって出るつもりだぜ!」

「そうですね。更に今年はヤタテもいる。更にビルドファイターズの放送で改造ガン普拉の

ハードルも下がり、ルーキーのビルダーも増えてる事だ。きっと激戦な年になるだろう」

「かまいませんよ!その方がやりがいがあるつてもんツス!」

望むところといった表情でソウイチは返す。以前より暗さの減ったそれは宝探しからの変化かもしれない。

「張りきってるなソウイチ、俺達も負けてられないな」

「ワシだって同じだぜ。折角来たんだし対戦してみないか?坊主」

感心するコンドウにブスジマが対戦を持ちかける。坊主といったその瞬間、コンドウの脳天に雷の様な衝撃が走った。

——坊主!?いつもオッサンオッサン言われてた俺が坊主?!そりや自分はオッサンじゃないと思ってたけどハジメの奴があんまりオッサンオッサン言ってたから、自分でもやっぱりオッサンじゃないかとちよつと思つてたけど、やっぱりそれは若い奴から見た視点であつて

世間的に見れば俺はまだまだ坊主!若いという事か!やはり俺はまだまだ若いんだな!!——

とコンドウは自分で勝手に感動していた。

「……なんかオッサン、様子が変だよ。プルプル震えて目えキラキラしてるし」

「……気にしないでくれ。コンドウさんも複雑なお年頃なんだ」

ツチャは目を逸らしながら言った。コンドウの胸中を察したのだろう。

と、ソウイチが口を開ける。

「そーいや皆俺が来る前なんの話してたんスか?」

「昨日の私の面接バトル関係だよ。後は名前だけだけど違法ビルダー」

それを聞いたソウイチが眉をひそめる。

「違法ビルダー?ああ、都市伝説のあれスか」

「アサダ?アンタ知ってるの?!」

声を出したのはナナだ。だがその場にいた全員がソウイチの反応に興味を示していた。コンドウも感激の状態から覚めて興味を示す。

「よくある噂の類ツスよ。ネットではちらほらネタになつるツス。」

ガンプラを使わずデータの入ったチップだけをスキヤナーに通してバトルするって言う無法者の事ツス。

スキヤナーさえ誤魔化しまえばデータ上は問題なくバトルで表示されるって仕組みだとか、

中にはそのテストプレイヤーもいるって話ツス。ま、要はガンプラのマジコンツスね」

「そんなビルダーがいるんだ……」

「マジかよ、知らなかったワシ……」

「俺も初耳だな……」

驚くアイとコンドウとブスジマ、ソウイチは呆れてそれを止めた。

「いや、何真に受けてんスカ!? だからさっき言ったでしょ!? ネットの都市伝説だって！よくあるネタ話ツス！ただのガセツス！」

「どういう事だソウイチ」

「大概こういう人のたくさん集まったりするゲームにはガセ話が横行するもんツス。ネット対戦なんてあると尚更ね。」

あるビルダーと対戦したら戦績カードのデータが消されるのだの、

ガンプラにオカルトな儀式して真夜中にガンプラバトルすると死んだビルダーとネット対戦できるのだの、

こういうネタや噂は尽かないツスよ。これだってどうせネット掲示板だかで誰かの流した類ツスよ」

「噂や都市伝説か、『ビギニングファントム事変』もそれに含まれるんだらうか？」

コンドウが呟くとソウイチがあきれる様に言う。

「コンドウさん、あれまだ信じてたんスカ？公式でイベントバトルって言うてたらしいじゃないスカ」

「いや、確かに公式からはイベントとあったが、そうじゃないと俺は……」

コンドウに呆れながら言うソウイチ、ナナはただ一つ内容の分からない事件名を不思議に思った。

「何？そのファントム事変って」

「それだったら俺も分かるよハジメさん、知ってる奴が近い所にいるからね」

ツチャがナナに説明する。

『『ビギニングファントム事変』というのは数年前に行われた巨大なネットガンプラバトルのイベントの事だよ。』

ステージの宇宙には宇宙を埋め尽くす程のCPUのザクが蠢き、飛

び入りのビルダー含めて過去最大数のビルダーとガンプラが参加したと言われている。

最深部の巨大要塞には黒いビギニングガンダムが待ち構えたって内容だったそうだ」

「イベントバトル？それがなんで噂？そしてオッサンが？」

「それだったらワシも分かるぜ。ワシの耳にも入る噂だったからな」

今度はブスジマが説明をする。

「……ちよつと変だったんだよそのイベント。普通イベントやるんだったら事前に開催予告するだろ？」

それが無かった。それにさっき言った通り出てたビルダーとガンプラは過去最大なのにとんどの参加ビルダーが途中参加だった。

参加申請とかの手続きもナシに」

「ん〜。かと言って疑う程不自然とも思えないけど」

「当然バトルの後にはそのイベントの問い合わせが殺到した。バンダイは『抜き打ちの自由参加型イベントバトル』と答えたが……」

参加ビルダーの中に『あれはイベントじゃない』と言う奴が現れた」

「どういう事よ？」

「わからねえ、だがあれに参加していた一部のビルダーは妙な違和感をバトルで感じていたらしい。」

ほとんどの奴はイベントって事で納得してるらしいが、一部納得してないでイベントじゃないと言ってる奴もいるんだよ」

「でも根も葉もない噂って所ね。一部の人が信じてるってだけか」

「見てもいないのにそう断定するのは酷いじゃないかハジメ」

「？オッサン？」

いつの間にかコンドウがナナ達の前にいた。

「だつてなにかしら証拠があつて言ってるわけじゃないでしょ？ただ感じたってだけじゃ見切り発車も良い所よ」

「確かにそうだが……」

詰まるコンドウにソウイチがフォローを入れる。

「まあそう言わないで欲しいツス。ハジメさん、コンドウさんはファ

ントム事変の時、実際にその場に参加していたんスよ」

「え！そうなの!？」

「たまたまだ。その時俺だけがGポッドのある店にいただけだよ」

「ふーん、じゃあさ、そう言うんだったらその時信じるキツカケみたいな見たとか？」

「あ、そりゃ俺たちも聞いた事なかったな。どんなだったんだ？コンドウさん」

五人の視線がコンドウに注がれる。コンドウは思い出す様な素振りを見せ言った。

「キツカケか、そうだな……バトルを見た」

「は？それだけ？」

「まあな、普通のバトルだったらこんな事思わなかったかもしれない。でも何か目を離さずにはいられないバトルだった」

——その時、参加した俺は乗っていたゼクが原型を損なう程負傷し、半壊したまま宇宙を漂っていた。動く事も出来ず、

いつ撃墜されるかヒヤヒヤしていた……その時俺は見たんだ。『Zガンダム』に登場したドック艦、黒く塗装されたラビアンローズの外壁、

そこで戦っていた二体のガンプラ……、黒いビギニングガンダムと赤いビギニングガンダム、何の変哲もないガンプラのハズなのだが、黒いビギニングからは説明出来ないような禍々しいオーラを感じた。

対する赤いビギニングは燃え上がるようなオーラを放ち、そのまま炎状のフィールドを全身に纏っていた。見ただけでビリビリするような気迫だったよ。

赤いビギニングガンダムがそのまま迫る黒いビギニングガンダムを一本の剣で叩ききった。

その太刀筋は炎となり黒いビギニングだけでなく全長数キロに及ぶラビアンローズまで切り裂く程だった……まさに人機一体、

ビルダーとガンプラが最高までシンクロして初めて放つことが出

来た技だつて直観的に理解出来た。

俺は感動と鳥肌でずっとそれに見とれていた。撃墜されるかもという恐怖は一切忘れていたんだ。

気がついたらバトルは終了していた。そして何故だかこのバトルはイベントではない。そう俺は思えてならなかった。――

「フアントム事変、名前は知ってたけどそんな事があつたんですか……」

アイがポツリと呟く。

「見ただけでそう感じるなんて、余程気合の入つたバトルだつたんでしようね」

「まあな、それを見て以来、俺もそれ位魂を燃え上がらせるバトルを目ざして腕を磨いたわけだ」

「あ！前にガンプラサバイバル大会で言つてた『あの時見た魂を震わすバトル』ってもしかして！」

アイはハツとした。コンドウがサバイバル大会の時アイに言った言葉だ。(12話参照)

「そう、それがそのバトルだ。今も忘れられないバトルだつたな……」
「初耳だぜ、ワシもイレイ・ハルやボリス・シャウアーらガンプラマイスターも出てたつていうのは聞いてたが」

「黒いビギニングの正体は分からないけど、魂を燃え上がらせるバトル、私も……ハル君とそんなバトルがしたいです。」

今度の大会、勝ち上がることが出来ればハル君と戦えるでしょうか……」

「お！少年ガンプラマイスター、イレイ・ハルと戦いたいとは大きく出たツスね！」

アイはここで言うべきじゃなかったかなと思つた。イレイ・ハルに對しては憧れ以外にも感情がある。

「ちよつとした憧れよアサダ」

ナナがフォローを入れたその時だつた。急にGポツドの方のビルダー達がどよめき始める。

「オイ、どうなつてんだこれ!?!」

「分からない！なんか変なのが出て来たぞ！」

「なんだアイツ!?強いぞ！」

「なんか騒ぎはじめたぜ？」

「なにかあったのかな？」

気になったアイ達は近くにいたビルダーの一人に問いかける。

「何かあったのか？」

「あ、コンドウさん。いきなりネット回線から対戦相手が割り込んできたんです！」

「いきなりか？」

「はい！いきなり第三軍として出てきて相手は見境なしに撃ってくるんです！」

アイはそのまま観戦モニターを見る。炎に包まれる都市のフィールド、その中で残骸になった機体を紫色に塗装されたジェノアスが踏みつけていた。確認出来たのは三機、

「三機とも同じ装備のジェノアス!?肩にスタークジェガンのミサイル、ライフルの前半分はスナイパーライフルとバズーカを括りつけて……ありや相当な攻撃重視ツス！」

ソウイチがジェノアスの改造機を分析すると同時に向こうから通信が入った。観戦モニターのスピーカーから声が入る。

『ヤタテ・アイはどこ?』

「!?」

ジェノアスのビルダーの声だろう。アイの名前を聞いた瞬間、ビルダーの人だかりは一斉にアイに向いた。

「私を呼んでる?」

「いつもみたいにアンタへの挑戦者って事!?随分派手な事するじゃない」

「どうする?ヤタテ」

「もちろん受けますよ。ちよつとこんな挑戦の仕方は気に入りません

けど」

……

すぐさまアイはバトルに入った。機体はいつものアームドアー
マーVNとDEを装備したユニコーン、デストロイモード

今回の場所はダブリン、『ZZガンダム』に登場したアイルランドの
首都。

モビルスーツの身長より高い高層建築物は少ない。曇り空とマッ
プ上真ん中を流れるリフィー川が特徴のマップだ。

「ガン普拉バトルとは関係ねえが世界的ビールメーカー、『ギネス』が
有名だぜい」

「しかしダブルゼータのダブリンか……こりや早めに決着つけないと
後でマズいッスよ……」

「?何があんのよ」

「見てれば分かるッス」

アイの機体、ビームマグナムを構えたユニコーンが周囲を見回す。
周りは自分の腰程度の建築物だらけだ。

「自分から勝負を仕掛けておいて姿を現さないなんて……」

その時、警告音と共に複数のミサイルが飛んできた。

「?!こつちを狙って!」

アイはミサイルがホーミングと悟ると後退しつつビームマグナムを
上空に向け発射、ビームの濁流はミサイルをまとめて飲み込み迎撃す
る。

が、別方向からもミサイルは飛んでくる。ビームマグナムの再装填
タイムラグは間がある。このままでは不利だ。

そうアイは考えるとアームドアーマーDEを上空のミサイルに向
けビームを発射、ビームを受け爆発したミサイルは周りのミサイルに
誘爆し

連続的に爆発を起こした。

「ようこそアイちゃん、受けてくれた事に感謝するわ。わたしなりの
方法と、私の機体『ジェノアSK（キラ）カスタム』でね」

紫色のジェノアスが三機現れる。声がするのは真ん中のジェノアス。ビルダーの声から察するに女性だ。

「強引じゃないですか？ ネット回線とはいえ出入りの店に割り込むなんて」

「ただのウォーミングアップよ。自分の機体は慣らした状態で挑みたいじゃない？」

「強引すぎます！ それに三対一で言うセリフじゃないですよ！」

「大丈夫。ハンディキャップは用意してるわ、この二機は私の設定したCPUで動いてるわ」

「対戦で無人機?!」

アイが叫んだ瞬間、三機のジェノアスKが散開し各々で撃ってきた。ユニコーンは後退しつつアームドアーマーDEで迎撃する。

「くっ！」

一機のジェノアスKに放ったビームは軽くかわされる。同時に狙ったジェノアスKがバズーカで撃ちかえす。

シールドで防ぐアイ、その瞬間に後ろに回り込んだリーダー機がスナイパーライフルを撃ってきた。

「その綺麗な純白をつっ飛ばしてあげる」

「くっ!?!」

アイはとっさに真後ろに身をひるがえしアームドアーマーDEでビームを受ける。

「まだですよ！ 伊達に今まで勝ってないんです！」

「強がり」

後ろを向いた所為か、背中を向けた方のジェノアスは遠慮なしに撃ってくる。

アイはユニコーンのバーニアを全開、真上へと大きくジャンプし回避、

追い打ちをかけようと三機は肩部のミサイルランチャーを一斉にユニコーンに放った。爆発がユニコーンのいた空域を吹き飛ばす。

爆発による黒煙が周囲を覆う。ジェノアスKのビルダーはこつちの目くらましになってしまったと舌打ちした。

「ユニコーンの残骸は……ないわね。チリも残さなかった?」

ユニコーンはもう逃げたと判断した挑戦者は再び散開しユニコーンを探す。

無人機の一機が川沿いに降り立ちユニコーンを探す。近くにユニコーンの姿はない。

その時だった。橋の下から発射されたビームが一機のジェノアスKを貫通する。

ビームマグナムだ。胴体に大穴を開けられたジェノアスKが倒れ込み、

同時に橋を崩しながらユニコーンが立ち上がった。橋の真下で待ち伏せていたのだ。

「よし!まずは一機!」

と、Gポッドに警告音が走る。背後から長距離でジェノアスが撃つてきたのだ。

「また後ろから?!」

ユニコーンは横にステップをかけて回避、川の水しぶきをあげながら身をひるがえし、ジェノアスKにアームドアーマーDEのビームを放つ。

アームドアーマーのビームは予想していたのだろう。ジェノアスKも横に回避、

その隙についてアイのユニコーンは続けてビームを撃ちながら距離をつめた。左腕のシールドで頭部をガードするジェノアスK、

だが胴体はガラ空きだ。そのまま胸部にビームの直撃を受けて爆発する。

「……何?あのリアクション?」

「どうした?」

観戦モニターでバトルを見ていたナナが疑問の声を上げる

「いや、今の敵、頭ガードしてたけどコクピットって頭にあるの?」

「いや、ジェノアスのコクピットは胸のハズだが……確かに妙だな」

ナナが感じていた疑問はアイも感じていた。

「今のジエノアス……頭を守ってた？」

「あつという間に二機、本当に伊達じゃないね」

「!?後ろから！」

後ろから残りの一機が左の盾に装備されたビームサーベルで斬りかかる。アイも左腕からビームトンファアを発生させ受け止めた。

「所詮は無人！今までの挑戦者の方がよっぽど手ごわいです！」

「でしょうね。わたしが操作すればこんな事にはならなかったのに……」

「何?!」

「でもわたしはあの二機とは違う、あなたは勝てない」

「決めつけないで!!」

だが挑戦者が大口を叩くだけの事はあった。普通に彼女は強い。アイのユニコーンのビームトンファアを軽く捌く。

「くっ！強い！」

「当然よ、あなたを倒すと言った以上相応の実力は必要だもの」

「尚更ワケが分かりませんよ！なんで無人機なんかつけたんですか！」

「ちよつとした実験ね」

「何?!」

と、その時だった。Gポッドが突如激しく振動する。ダメージの物ではない。そしてアイはその正体を知っていた。

「!?時間が！」

すぐさま空を、フィールドの中心部の空を見上げる。巨大なシリンドラー型人工衛星、スペースコロニーが都市中心部に今まさに落ちようとしていた。

「な！何アレ!?!」

モニターを見ていたナナが画面の異様な状況に驚いていた。

「コロニー落とし……ガンダムでダブリンはコロニー落としが行われ

た街なんス！」

「あれが落ちたらどうなのよ！」

「街を吹き飛ばして衝撃波がフィールド全体を襲うツス。出来るだけ離ればダメージも軽減できるんすが、ヤタテさんのあの位置だと……」

「そんな……アイ！逃げて！」

「早く終わらせないと!!」

アイの顔に焦りが見え始める。ジェノアスKを仕留めようとビームサーベルを一層振るう。

「頑張るね」

挑戦者のジェノアスKは急にその場から背を向け離れる。

「逃げる!?でも自分から背を向けるなんて迂闊すぎる！」

チャンスとばかりにビームマグナムをむけるアイ。だが次の瞬間だった。

「大丈夫、信頼してる仲間がいるもの」

「!?」

ワイヤー状の何かがビームマグナムに巻きつく、直後、電撃がユニコーンを襲った。激しい光にユニコーンは包まれる。ハンブラビの装備、海へビだ。

「う！あああああああ!!!」

「この場でとどめをさしたいけど……放っておいてもわたしの勝ちは確定同然ね、さようなら」

挑戦者のジェノアスKはそのまま離脱する。

「一体……何が……!」

誰が海へビを放ったのか自機の顔だけでも向けるユニコーン、それを見たアイは目を疑った。

「嘘……!」

最初に破壊したジェノアスKが胸部の破損部をベキベキと音を立

て、勝手に元に戻りながら右手で海へビを握っていた。

次の瞬間、コロニーが地表に激突。ホワイトアウトするGポッドと観戦モニター、ユニコーンはジェノアスKごと衝撃波により吹き飛んだ。

「間に……合わなかったあああああああああああああ!!!」

しばらくして視界が元に戻る。フィールド中心部には巨大なコロニーが突き刺さり、コロニーや建築物の破片が黒い雪の様に空を舞っていた。

廃墟に変わったフィールドに倒れていたユニコーンは……まだ生きていた。

「く……破損率は……」

操縦桿を動かすもユニコーンはギギギ……と音を立てるだけで動けない。全身酷い損傷でギリギリ生きてる状態だった。

「動け……!動いて!」

「しびといね。まだ生きてるなんて」

「!?!」

眼の前に三機のジェノアスKが集まっていた。こちらも三機とも衝撃によりダメージをおっていた。

アイのユニコーンと一緒に吹き飛ばされたジェノアスKはもはやボロボロの状態だった。だが三機とも再生していた。

外れたパーツは勝手に戻り、割れたパーツは生える様に埋まり、空いた穴は時間を巻き戻したかのように戻る。異様で不気味な光景だった。

「どうして……なんなの!あんなガンプラ!」

ナナは今の状況が受け入れられないでいた。アイが負ける以上にルールを無視した敵が理解できない。

「い・違法ビルダーツス」

「え?」

ソウイチが信じられないといった表情で言う。

「ネットで見た通りツス!ありえない!あんな現実味のない物が實在

してたなんて！」

「マーマジで存在してたのかよ……」

ブスジマ以下、他の全員も似たような表情だった。

ジェノアスKのバイザーの中心部が赤く不気味に光る。アイをあげ笑うかのように。

「まだ私の心は死んでないのに！動いてよ！」

「ごめんねアイちゃん、あの人からの依頼だから……わたしもこうしないとスランプから立ち直れないの」

スランプという言葉、それにアイは聞き覚えがあった。それに関連する人物は……

「まさかあなたは……フジミヤ・レムさ」

アイの言葉を遮るようにジェノアスKがビームサーベルを振り上げる。ここまでかとアイは目を閉じた。だが次の瞬間だった。

「そこまでです!!レムさん！」

一機のガンプラがアイのユニコーンの前に立つ。そのガンプラは右腕にある大きな剣を掲げ、振り下ろしたジェノアスKのビームサーベルを受けた。

アイはその機体に、ビルダーの声に見覚えがあった。

「パーフェクトストライク!?ヒロさん!？」

「ボクだけじゃありません！」

直後、右にいた無人のジェノアスKの頭部が真つ二つに両断された。そのまま頭部を破壊されたジェノアスKは動かなくなった。

青い、先端の割れたGNソード、そして半壊した顔に左腕に布をまとった機体。『ガンダムOO』に登場したエクシア・リペアだ。

十分な設備もなしに修理した機体という設定の為、ボロボロな外見になっていた。

「エクシアリペア?!あれを作成するなんて!」

「その機体……ヒロ!」

ジェノアスKに乗ったビルダー、レムは驚いた風に言った。

「レムさん、どうしてこんな事を……」

「こちらのセリフよ。ヒロ、せつかく勝っていた勝負だというのに!」

「勝負!?違法ビルダーに手を出したあなたがいう事ですか!?!」

「……何度言わせれば気が済むの?それでも勝ちたいの!」

その会話を絶つかの様にエクシアリペアがレムのジェノアスKに斬りかかった。とつさにバックステップでかわすジェノアスK。

「所詮言い訳だよ!かのフィリップ・マーロウは言った!『撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ』と、

君は対等の勝負をしていない時点でそんな資格はない!」

「その言い回しと声はマスマさん?!」

エクシアリペアに乗ったビルダー、フクオウジ・マスマは割れたGNソードでジェノアスKに斬りかかる。

「深夜アニメからの引用かと思ってたよ!」

レムが叫ぶ中斬り合う二機、それを残った無人のジェノアスKがエクシアリペアに海へビを放つ、海へビはGNソードに巻きついた。

そのまま電撃を受けたところを切り裂くつもりだろう。

「マスマさん!」

見てる事しか出来ないアイは叫ぶ。

「心配ご無用!」

「!?!」

バツ!とエクシアリペアが左腕の布を翻す。布の下からはガンブラシステムウェポンのガトリングの銃身が出てきた。電撃が来る前に無人機の頭部を撃ち抜く。

「布を下に武器を隠していた……?!」

「本来のエクシアリペアは左腕がない。故に腕がないと思込ませて

不意打ちするわけだね」

驚くアイにヒロが説明した。その横でエクシアリペアはジェノアスKに突撃。スピードを載せたGNソードの突きを放った。

「終わりだー」

「あっ!!」

レムが対応しようとするも遅かった、ジェノアスKの頭部に深々とGNソードが突き刺さる。

粉碎された頭部の中からは一緒にICチップの様な物が落ちた。そしてジェノアスKは全て爆発、結果的にはアイの勝利となった。

「ではこれで失礼するよ」

バトルの終わる直前、その場を離れようとするヒロとマスミ、アイは納得できない事が多すぎた。

「待って下さい!何が起きてるんですか!?!なんであんな物が!あれ乗っていたのレムさんでしょ!?!マスミさんとヒロさんの仲間の!!」

黙っていたマスミが口を開ける。

「アイちゃん、答えることはできない。ただ……」

「?」

「この件には関わらないで」

そう言い残し、二人は去って行った。ガンプラバトルの終わったGポッドでアイは思った。

チーム『エデン』のビルダー、フジミヤ・レム、彼女が違法ビルダーと呼ばれる者に所属していた。

そしてそれを追うチームメイトのハガネ・ヒロとフクオウジ・マスミ……

「一体何が起きているの……?」

そして違法モデラー達のいるとあるゲームセンターのGポッド

「これだけ離れてるのにあの二人が邪魔にはいるなんて……」

Gポッドからヘルメットを脱いだレムが出てくる。彼女を黒髪の

少女が出迎えた。

「残念でしたね。後少しだったのですが」

「マスマミにわたしを止める権利なんてないのに……」

苦々しい顔でレムは呟く。

「ですがいいデータは取れたハズです。無駄にはなりませんよ」

「そう……では一応の成功は収めたという事ね」

「あら？とんでもない。まだヤタテ・アイに完全な屈辱を与えてませ
ん」

「?!アイちゃんに勝つまでやれっつて!?!」

「その通り」

——この人……アイちゃんに恨みでもあるの?——

淡々という黒髪の少女にレムは眉をひそめた……

第28話 「推参!!パーフェクトユニコーン!!!」(パーフェクトユニコーンガンダム「不完全」登場)

昼時、とあるファミレス、店の端に設けられたボックス席に三人の男と一人の女が座っていた。

雰囲気からか、テーブルの上の注文したであろうコーヒーやお茶にはどれも手が付けられていない、友達同士の談笑にしてはピリピリした空気だった。

「今月に入って違法ビルダー……、アイツが勝手にバトルに割り込む回数はどうも増えてるよ」

「段々抵抗が無くなってきたんだろうね。最初は自分が悪いことしてるんだらうけど、慣れた分感覚がマヒしてきた」

女、アズマ・ヨウコが言うとハガネ・ヒロが答えた。次にヨウコはゼデルに問いかける。

「今日、本人の家には？」

「行つては見たけどよ。出かけてていねえ。いても居留守使われて家に入ってくれないだろうな。大学の講義もうまい事会わないようにしてるみたいだし」

頬杖をつきながらゼデルは答えた。

「つまりどつちとも会える事は出来ないと……」

「そういうこつた」

次にヨウコは黒髪の青年、マスマミに聞く。

「で、全然首回ってないけどどうするのよ。今まで通りこのままアイツのバトルに介入し続けるつもり？」

「もちろんだよ」

即答するマスマミ。ハア、とヨウコはため息を吐く

「即答してるけどアンタね、向こう全然取り合ってくれないのよ?もう説得したって無駄なのは増えてるバトル回数見て分かるでしょ?」

「でも、こうするしかない。バンダイの方に問い合わせるバトルに違

法ビルダーのデータが入れない様にしても、

向こうは暫くすればそのプロテクトの網をかいくぐってまたバトルに入り込む」

「ヒロも話に入り込んだ。」

「ねえヨウコ、何も僕たちは全部の違法ビルダーを相手にしようってんじゃないよ。あくまで彼女を……」

フジミヤさんを違法ビルダーからやめさせるのが目的だ。これは身内の問題なんだよ」

「ハア……身内ってそもそも関係ないビルダー襲ってるのに、それで片づけようとするっておかしくない？顔見知りのアイちゃんまで襲われたのよ?」

再びため息の後、ヨウコは一気にまくしたてた。

「それに……全部身内の問題だけで片付けようとするのもアタシは納得いかないよ!」

アイちゃんの時に聞かれた事、話しても良かったのに秘密にして、場合によつてはアイちゃんも協力してくれるかも……」

「ダメだ。これはボク達だけの問題だ。ボク達だけでやるんだ」

マスマミが口を開いた。その言葉には絶対に曲げないという意思がこもっていた。

が、いつも同じセリフを聞かされている上に納得がいかない答えだ。ヨウコには逆効果だったようだ。ヨウコは席を立つ

「そればかり言うんだったらもういいよ、あたしはあたしの考えでやるから」

「どこに行くんだ?ヨウコ」

「せめてアイちゃんには何があったか言うべきでしょ?そこから先は気を付けて位しか言えないかもしれないけど」

「おい!待てよヨウコ!」

「止めても無駄よゼデル、皆のフォロー役はいつもの事だけどね、本心も分からない奴の尻拭いなんて冗談じゃないわ」

「この勘定ワリカンじゃなかったのか!」

「空気読んでよアンタ!!」

「わ！悪かったよ！」

更に怒り心頭したヨウコは店を出る。ゼデルも冗談を外したのを理解するとヨウコを止めようと店を出てった。

「……解ってるよ、ボクのやり方が間違いだって……でもボクが止めなきゃいけない理由があるんだ……」

マスマスの男は俯きながら呟いた。

所かわってこちらはアイの方、いつもの様にナナやムツミ達と一緒に下校してる最中だった。ただ一つ違った事を除いて……

「アイ、大丈夫？」

「うん……」

アイは右肩をナナに、左肩をムツミに組み合った状態で歩いていた。(タカコは後ろでカバン持ち) アイの眼の下には濃いクマが出来ている。

「またガンプラ作りで無理して……」

ムツミはアイの顔を見ながら言った。アイがこうなったのは単純に寝不足だ。先週違法ビルダーに襲われて以降、

家に帰っては睡眠時間を削りながら新しいガンプラを作ってたわけだ。

「アイ、土日なんて完全に引きこもって作ってたからね」

「だ……大丈夫だよ……まだ私17だよ？これ位……」

絞り出した声でアイは答えた。それでも今日の朝は元気だったが、時間が経つにつれてこの有り様だった。

「よく言うよ……帰りの時なんて完全にフラフラだったじゃない……」

「フジミヤさんが襲ってきてから、一週間経つけど……なんだったんだろうねアレ」

ナナが言う。あのバトルの後、挑戦者からは何のアクションもなかった。当日そこにいたビルダーは暫くは違法ビルダーに警戒して

いたが

日数が経つにつれ、何事もなかったかのようにいつものバトルに戻りつつあった。

「うう……分かんないよ……。現実離れた展開ばかりで今となつては本当にあつたのか？つて感覚すら湧いてきたもの」

アイは眠い目に耐えながら、しかししつかりとした意志で答えた。彼女にとつても無視できる話題ではない。

「やっぱそうなっちゃうよね。アタシもなんかそういうイベントだったんじゃないかって思ったりしてるもん」

「でも一応警戒してるけどね。またあんなのが襲ってきても大丈夫な様にユニコーンを改造してたんだ」

うってかわつて自信を持った顔でアイは言う。「ユニコーンの改造」以前電車の中で言つた言葉をナナは思い出した。もう随分立つ。

「あくもしかして前言つてた奴？」

「ボク達にはよくわからないけど……。寝不足の原因がそれつて事だね……」

「う……まあそうだね」

アイがたじろきながら答える。ムツミの小言が飛んでくると思つたからだ。「別に悪くは言つてないよ」

と、ムツミもアイの考えを読みとり答えた。

「結構時間かかったから凄いのが出来そうじゃない？アタシとしても完成が楽しみだわ」

「ありがとナナちゃん。もう本体は完成したしほぼ改造完了だよ。後は背中追加武装だけだね」

「でも……その前に休んだ方がいいんじゃないの……？まともに歩けないんだし……」

心配するムツミにアイは答える。

「大丈夫だよムツミちゃん、自分の体のことは自分が一番よく知ってるもの」

「そんなフラフラで言われても説得力ないよ……」

「アイちゃん、今日一気にラストスパートかけるわけ？」

「そりゃね、あーでもちよつと帰る前にガリア大陸によつてかないと」

「？何か塗料でも買うの？」

ナナの問いに、アイは答える前にスマホを取り出してメールを見せた。

「ううん、コンドウさんから連絡が来たの。私に会いたい人がいるって」

そうこう話してる内に模型店『ガリア大陸』に四人は来た。

「おおヤタテ、待ってたぞ」

「こんにちはコンドウさん、誰か来たんですか？」

「もしかしてまた挑戦者とか？」

「そういうんじゃないよ。話たい事があるんだってある人がね」

「あたしがハセベさんとコンドウさん通じて呼んでもらったんだ」

コンドウが言い終わると同時に、店の奥から一人の女性が現れた。

サイドテールの長身の女性、その人は……

「ヨウコさん！」

意外な来客にアイが声を上げた。

「あー！前ヒロさんのチームメイト！」

「ご名答。ゴメンね、こんな回りくどい方法で来てもらって」

「俺もいるぜ」

ゼデルも現れる。ヨウコを止めようとしたが結局説得できずここまでズルズル来てしまった様だ。

「前の変な外人さんだね。でも二人だけ？ヒロさんは？」

タカコがまだいないかと見回す。彼女自身以前試験開けで会った仲だ。

「今日はアタシ達だけだよ。ちよつとヒロ達とはギクシヤクしちやつててさ」

「ここに来た理由って、やっぱり違法ビルダーに関してですか？」
「まあね。こないだはヒロ達がロクにワケも伝えなかつたわけだし、
……それに、あたし達の不始末となると……ね」

そのヨウコの口ぶりにアイとナナはヒロ達と関係があると思った。

「通信ではワケありみたいに感じましたけど……やっぱり……あの違法ビルダー、貴方達のチーム『エデン』のレムさんなんですか？」

「それは……」

「た！大変だアイちゃん！」

アイの問いにヨウコが言おうとした瞬間、店員のハセベが遮った。慌てて走ってきたのだ。

「ハセベさん!?ちよつと今いい所なのに……」

「それ所じゃないんだ！また前みたいに変なビルダーが割り込んできた！同じようにアイちゃんを出せと言ってきてるんだよ！」

このタイミングで？とナナが顔をしかめる。

「随分とタイミングがいいわね。アイが今いるって見抜かれてんのかしら」

「むしろあたし達の方がつけられてたかなあ」

「あー否定できねえなこりや」

やつちやつたかも、という顔をするヨウコとゼデル。

「でも無視するわけにもいきませんよ！私出ます！」

アイは鞆からガンプラを取り出す。前回使用したユニコーンだ。

「だったらあたし達も一緒に参加させてよ。もしかしたらあたし達が呼んじやつたかもしれないし、それに……ちよつとアイツには言いたい事あるしね」

ヨウコとゼデルも同時参加の名乗りを上げる。アイは快く承諾した。

「アイ、未完成とはいえ、家にある奴は取ってこないの？」

しかしナナはどうにも心配な様だ。アイに確認を取る。

「大丈夫だよナナちゃん。今日はゼデルさんもヨウコさんもいるし、それに一度戦った相手だし、もう向こうのトリックは解ってるもの」

トリック、頭を破壊すれば再生能力を持った違法ビルダーのガンプ
ラはその能力を失い、停止するというものだ。

ナナは不安げな表情を見せるがアイはいつもの笑顔で返した。

「……」

Gポッドに入るアイの表情を見ながら、ナナはなににか考える。

「ねえムツミ、ちよつといいい?」

「?」

そしてナナはムツミに話しかけた。

……

そしてバトルが始まった。今回のフィールドは夜間のブリュッセル、ベルギーの首都にしてOVA『ガンダムWエンドレスワルツ』の決戦場所。

クリスマスの夜(という設定)。雪が積もり静まり返った街に三機のガンプラが街の中心、広場に降り立つ。

アイのユニコーン(アームドアーマーVNは今日は装備してない)、ヨウコのヴェルデバスター、ゼデルのブルデュエルだ。

二機とも『機動戦士ガンダムSEED C・E・73―STARGAZER―』に登場したバスターガンダムとデュエルガンダムの発展機だ。

「エンドレスワルツの決戦場所かあ、本編じゃ物凄い数のサーペントが出て来たけど……」

「こつちでもそういう流れになるってわけね」

ヨウコが返すとアイに前方を見る様促す。

アイが見ると建築物とほぼ同等の高さの機体がそれぞれ三方向の大通りから押し寄せてくる。

機体は前回アイが戦ったジエノアスカスタムだ。それも一体二体ではない。見えた機体の後方からも幾つもの同じ機影が見えた。

「こんな狭い通りでご苦労なこつた!」

ブルデュエルに乗ったゼデルが毒を吐くと同時に、ジエノアスのう

ち一機が右腕のバズーカを撃ってきた。散開しかわすアイ達三機。

「前と同じでこれも無人機ってわけですか!？」

アイは独り言と相手への問いかけを同時に口にしたがその答えは帰ってこない。

「チッ！」

アイ達3機は散開したまま、一機ずつそれぞれの大通りを高速で低空飛行で飛ぶ。Gポッドから見える景色、機体の左右で建物が高速で横切る中、

進行方向にいるジェノアスKカスタム達もアイ達を迎撃すべく撃ってくる。

「待ち伏せならもつとわかり辛くして下さいよ!!」

アイは砲撃を左腕のアームドアーマーDで受けながら、右腕のビームマグナムで習いを定め撃つ。

狙いはジェノアスの頭部。前回の戦いでそこを破壊されると再生できないと解ったからだ。

ビームマグナムはジェノアスの頭部を胴体ごと飲み込み簡単に破壊、その後ろで並んでいたジェノアスも巻き込んだ。

頭部を破壊されたジェノアスはそのまま倒れ込む。無論律儀に一列に並んでいたわけではないので撃ち漏らしたジェノアスが倒れた機体を飛び越え再び撃ってきた。

「次から次へと!!」

一方ヨウコ達も似た様な状況だった。

こちらも相手の頭部を撃ってはいるがいかんせん数が多すぎる。

「ああもうしつこい！アイツこんなに陰険だったつけ!？」

ヴェルデバスターに乗ったヨウコが愚痴ると同時にジェノアスも撃ってきた。かわすヨウコ、だが爆発は建物を巻き込み。さらに爆発を大きくした。

「人数が多いだけに今日の貧乏くじはデカいの引いたかな？でも！」

爆風の中からヴェルデバスターが飛び出す。自機の両手にはパコネット（銃剣）を展開させたビームライフルが二丁。目の前には左右にジェノアスが二機並んでいる。

「いつも損な役回りばかりなんだもの！」

そのまま銃剣で左右のジェノアスの胸上部を突き刺す。そして銃剣上部にしていたビームライフルを撃つ。

場所的にそれはジェノアスの頭部を撃ち抜いた。

「ついでで憂き晴らしさせてよね!!」

逃げるのをやめたヨウコはヴェルデバスターを振り向かせ、後部より接近してくるジェノアス達を全身の火器を一斉に放ち、迎え撃つた。

「人気者は辛いぜー！うおりゃあ!!」

ゼデルの方はブルデュエルでジェノアスの大群を恐れずに突っ込んだ。

ブルデュエルの両手のビームサーベルを敵の数を恐れずに振り回す。ジェノアスの方もビームサーベルで受けようとするが、

大抵の機体は受ける前に頭部を切り裂かれる。

無計画に見えるかもしれないがブルデュエルの戦い方はしっかりと頭部を狙っていた。

少しすると後方でジェノアスが三機撃ってきた。援軍だ。

「ゴキブリかテメェらー！」

ゼデルはブルデュエルの左肩からクナイ状の投擲武器を取り出す。

『Mk315ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾』だ。投げようとするが直前に機体に何かの衝撃が走った。

「うおっ！なんだ!?!」

背部からジェノアスが一機組みついてきた。そのままジェノアスはブルデュエルのコクピットを突き刺そうとビームサーベルを取り出す。

「不意打ちたあ卑怯だぜ!!」

ゼデルは機体背部のスラスタアの全力で吹かす。大出力のスラスタアはジェノアスを簡単に吹き飛ばす。

ブルデュエルはそのままの勢いで、前方のジェノアス三機に突っ込むブルデュエル。

「食らいやがれ!!」

三機のジェノアス目掛けてステイレットを投げつけるブルデュエル。ステイレットはジェノアス各機の頭部に一本ずつ当たり爆散。その場でジェノアス三機は沈黙。

と、先程吹き飛ばしたジェノアスが衝撃のダメージを再生しつつ、バズーカをブルデュエルに向ける。まだ生きていたのだ。

バンツ!

撃った音が響くがブルデュエルは無事だった。ジェノアスが撃とうとする直前にブルデュエルのハンドガン、

正式名称『リトラクタブルビームライフル』でジェノアスの頭部を撃ち抜いていたのだ。

数分して、大体の敵を倒した三機は散会した場所に戻ってきた。

「こっちは大体終わりましたよ」

「こっちもね。でもまだバトルは終わってないって事は……」

「いるんだよな。まだ向こうの真打ちがよ!」

その瞬間、三機のGポッドに警告音が響いた。同時に真上からミサイルとビームの雨が降り注ぐ。とっさに三機はかわす。

「前回とは打って変わって調子がいいじゃない?ほとんどのわたしのジェノアスを破壊するなんて」

「?!あの機体は!!」

アイは叫んだ。何故なら上空にいたのはアイが以前戦った機体。ユニコーンガンダム四号機『デウラハン』だからだ。

そして聞き覚えのあるその声は……

「その余裕の態度、レムウウ!」

アイの隣にいたゼデルが怒りの声を上げる。

「ゼデル。今回はヒロ達はいないのね、まああの二人がいなのは意外だったけど」

「そう言うって事はあたし達をつけていたわけじゃないって事？」

ヨウコがデュラハンのビルダーに疑問を問いかける。さつきヨウコ自身が言った通り、

自分の所為でここに違法ビルダーを呼び込んだんじゃないかという不安があったからだ。

「指示があつたってだけだよ。あなた達は邪魔以外の何物でもないもの」

「随分な言い方じゃねえか！それが俺達仲間と言うセリフかよ！」

「……仲間だからこそ、わたしは置いて行かれたくないだけだ……っ！」

言い終わらないうちに、ヴェルデバスターがデュラハンを撃つた。かわすデュラハン。

「……ヨウコ！」

「だからってこんな方法とつて本気でどうにかなるって思ってるわけ!? アンタが誰にも迷惑かけないなら……」

正しいってんならヒロもマスミも止めようとしなわよ！」

明らかに怒気を込めた声でヨウコが言う。

「その通りだ!! 無駄に多いジェノアスは俺たちが破壊したぜ! もうお前は一人同然! とつと降参しやがれ!」

「一人? 誰が?」

そう言うでデュラハンの全身から赤い光が溢れた。アイ達はとつさに目を覆う。

「何これ!? 目くらまし!?」

「今更こんなもんで!」

「! 待ってください!! 機体の反応が!」

アイの慌てた声が響く、デュラハンが光ると同時に倒したはずのジェノアスが再び立ち上がった。頭部含めた損傷箇所を再生して……

「なんで!? 頭は破壊したのに!」

「今回ののはちよつと趣向が違うの。今までののは再生機能を持ったチップを積んでいたけど。今回はわたしの発した信号で再生機能のオンオフが切り替えられる仕様だよ」

「さっきの光か!」

「そういう事、じゃあまた全部相手してもらおうかしら? わたし含めてね!」

先程再生したジェノアス達は八方から真っ直ぐこちらへ向かってくる。アイ達の顔に焦りが見えた。

「だったらあなたを先に倒せば!」

「アイちゃん!?!」

上空のデュラハン目掛け、アイがユニコーンで飛ぶ。そのままデュラハンを倒すつもりだ。

ビームサーベルを抜き、斬りかかるユニコーン。デュラハンもビームサーベルを抜き、二機は鏝迫り合いになる。

「レムさんなんですよ?! チーム『エデン』のビルダーの!」

「……そうだよ。アイちゃん、わたしはフジミヤ・レム」

淡々とした声でレムは答えた。

「勝てないスランプがあったからって何故こんな事を!?! まともなビルダーのすることじゃない!」

「……解ってるよ……、でもね……」

デュラハンはそのまま右肩のビームキャノンを正面のユニコーンに向ける、アイはすぐさま『撃つ気だ!』と判断、

「くっ!」

アイはユニコーンをデュラハンから離れ、ビームマグナムをデュラハンに向ける。狙うは頭部

「これで!」

「さっき言ったこと、覚えてない?」

「!?!」

直後、ユニコーンのバックパックが爆発する、否、撃たれたのだ。アイは落ちるユニコーンで悟ったと同時に見た。

再生したジェノアスが撃ってきたのを。

「アイちゃん!!」

叫ぶヨウコ、そのままユニコーンは地表に激突する。

「ま・前と同じ方法でやられるなんて……………」

「くっ！レムウウ!!」

周囲から来るジェノアスを迎撃しながらゼデルは叫ぶ。蘇ったジェノアスは既にアイ達三人を囲みつつあった。

「そんな事してまで勝ちてえのかよ!!そんなんで勝って嬉しいのか!? 満足なのか!? 答えろおお!!」

「…………満足なんて、するわけないじゃない」

攻撃はジェノアス達に任せながらレムは答える。意外な答えにゼデルは動揺した。

「何?!」

「これで勝ったってわたしの心は満たされないよ。でも、もう戻れないよ…………。わたし、これじゃなきや勝てなくなってる。これで頼りにされるの気に入り始めてる

だんだん罪悪感が薄くなってきたもの…………」

徐々に気まずそうにレムは答える。

「だからって…………子供みたいな事を!!」

アイはユニコーンを立ち上がらせると残った全身のバーニアを使い再びデュラハンに迫る。振るうビームサーベル

「遅いよ」

「っー」

レムは難なくデュラハンのビームサーベルでユニコーンのビームサーベルを切り払う。舞うユニコーンのビームサーベル。

そのままデュラハンは空いた左腕のビームライフルをユニコーンの腹、コクピットに押し当てた。

「…………までなの?!」と間近の銃に覚悟を決めるアイだったが…………

「ちよつと待ったあ!!」

その時だった。全ビルダーの目のスクリーンに『乱入者あり』の文字が表示された。

「なに……?」と一瞬疑問に思うレム、

直後横から白い機体がデュラハン目掛けて凄いい勢いで飛んできた。
「なっ?!」

そのままその機体はデュラハンに蹴りをかましデュラハンを吹き飛ばした。

「ああっ!!」

「な!何だありや!」

「サイコフレームの緑色の……ユニコーン!」

ゼデルとヨウコが驚く。白い機体の正体はユニコーンガンダム・デストロイモードだった。だがただのユニコーンではない。

サイコフレームはメタリックグリーンに輝き、各部にはアヴァランチエクシアのパーツを流用したアーマーを着ていた。そしてアイはその機体に見覚えがあった。

「あの機体!なんでここに!」

「あたたた!結構強烈ねこれ飛ばすの!」

「ナ・ナナちゃん!」

そのユニコーンから通信が入る。相手はナナだ。

「この機体が必要になって思ってたアンタの家から持ってきたのよ。ムツミに頼んでさ」

「いやそりやまあ本体自体はもう仕上げてあるけど、無茶するなあ」

「とにかくアタシのGポッドに乗り換えて!こっちの機体だったら十分戦えるハズ!」

「ちよつとズルいかもしれないけど……わかった!」

「させないっ!!」

レムのデュラハンがそのままアイのユニコーンを破壊しようと全身の火器を撃つ。ユニコーンは左腕のアームドアーマーDEを構え、防御で精一杯だ。

「くっ!これじゃ乗り換えられない!」

「まだ諦めるな！」

「!?」

突如響いた声と共に現れたのはヒロのパーフェクトストライクとマスマシのエクシアリペアだ。

「ヒロさん！マスマシさん！」

「ここは僕達が引き受ける！ヤタテさんは早く機体を乗り換えて！」

「よくこのフィールドがわかりましたね！」

「今回はオンラインじゃなくて直にガリア大陸のGポッドで乱入しただけだよ！元々はヨウゴに謝りたくて寄っただけだね！」

「くっ！ジェノアス隊！あの二機とユニコーンを破壊して！」

レムがジェノアス達に指令を出す。そのジェノアス達の攻撃を一手に捌くパーフェクトストライク。そしてエクシアリペアはデユラハンに斬りかかった。

「ボクの機体のデータコピーか！穏やかな気持ちじゃないよ！」

「アイ！今のうちに！」

「うんナナちゃん！」

アイとナナは機体を少し離れた場所で待機させる。そしてアイとナナはお互いGポッドを開けて機体を交換する。

「アンタのユニコーンはアタシに任せて！」

「お願い！」

急いでいたのか。制服のままのナナとすれ違い、アイは改造ユニコーンのGポッドに乗り込んだ。離れた場所では息を上げたムツミが見えた。

アイはムツミにサムズアップをしながらGポッドに入り込む。

「……いきなりの実戦になっちゃったけど……行くよ！『パーフェクトユニコーン』!!」

アイが叫ぶとそれに応える様にパーフェクトユニコーンの眼が、サイコフレームが輝いた。

一方こちらはヒロ達の方

「クッ！前以上の性能か！」

「そりやデータだけとはいえ、ボクの作ったデユラハンだからね！」
「自慢になるか！」

エクシアリペアとパーフェクトストライクはデユラハンに押されつつあった。それからジェノアスもヒロ達の相手として加勢し、数の暴力に押されつつあった。ヒロ達だけではない。

ヨウコもゼデルも同様だ。特にこちらは一戦していた為息切れも激しくヒロ達より戦力で押されていた。その分余ったジェノアス達はヒロ達に送り込まれていた。

上空ではデユラハンとストライク、リペアが戦い、ジェノアス達は下からストライクとリペアを狙い撃つという図式だ。

万が一ジェノアスの援護がデユラハンに当たってもデユラハンはすぐさま再生する仕組みだ。

「しかし動きが前よりどんどん良くなってるよフジミヤさん、スランプ解消できたなら戻ってきて欲しいけど」

「残念だよヒロ、わたし違法ビルダーをやってる時だけスランプを忘れられるみたい」

「懲りやしない……！お前を止めるまでは！」

「マスマミ……まだそんな事を言って、責任を感じるのはいいけれど見苦しいよ。それに、あなたはあの事で責任を感じる、

つまりそれは悪いことをしたと思ってる。それ自体が間違いだとは思わないの？」

プライベート通信だ。レムの声はマスマミにだけ繋がった。

「何を!？」

「私は今の状況が、正しいと思ってる。私としてはあなたは正しい事をしたと思ってるから放っておいてもいいと思うんだけど？」

「君という奴は！」

なおもジェノアス達はエクシアリペア達を撃ち続ける。その時だった。一筋の緑色の光が凄い勢いでデユラハンに迫っていた。レムはそれに気付く。

「あの光は……アイちゃん!?ジェノアス隊！撃ち落として！」

数機のジェノアスが光り目掛けてミサイルとバズーカで緑色の光

に撃ちまくる。光は弾をかわし鋭角的に上昇、クツと曲がり幾重もの弾をかわす。

無論ただかわすだけではない。光の中から放たれた複数のビームはジェノアスを次々と撃ち抜いた。

「なんて機動性なの!?!」

そのまま光はデュラハンにぶつかるとつさにデュラハンはビームサーベルでその光を受け止めた。だがその勢いは凄まじくデュラハンをも押し出してしまふ。

光は止まり光の正体が姿を現す。さつきナナが乗っていたユニコーンだ。肩部のアーマーからビームサーベルを出しデュラハンのビームサーベルを受け止める。

全身のサイコフレームは緑色に輝き夜の街を照らす。

「なんて輝きだ!」

「何?!このパワーは!」

「これがパーフェクトユニコーン!とっておきの私のユニコーンだよ!!」

「あなた!アイちゃん!!」

デュラハンは一旦距離を離すとジェノアス達を呼び寄せる。周囲からジェノアス達はPユニコーンに囲むように飛び上がる。

各々の手にはビームサーベルが握られていた。

「パーフェクト!?!名前負けよ!やれ!」

「甘い!」

アイはPユニコーンの両肩からビームサーベルを最大出力で発生させぐるっと一回転させる。大型のビームサーベルはたやすくジェノアス達を切り裂き腹部を真つ二つにし、落とす。

「なっ!?!」

「観念しなよ!もうあなたに勝ち目はない!」

そのままユニコーンとデュラハン二機は鏝迫り合いになる。

「嘘よ!まだ私は負けてはいない!!」

「往生際の悪さも強さの一つなのかもしれないけれど!」

パワーでデュラハンは押し切られ、そのまま持っていた左腕を切り

落とす。

「ひっ!？」

「それだけじゃ勝てやしない!!」

撤退しようとするデュラハン、Pユニコーンにミサイルポッドを撃ちまくるが全て両腕の火器で撃ち落される。

直後爆風の中を凄まじい速さでデュラハンを追いかける。

逃げ切れないと判断したレムはデュラハンを、両腕のライフルをPユニコーンに向ける。しかし遅かった。

すでにPユニコーンはビームサーベルを振り上げていた。

「これでええっ!!」

次の瞬間にはデュラハンが背部ごとX字形に切り裂いた。

再生するか?とアイは神経を尖らせる。と、そこへヒロから通信が入る。

「アイちゃん!違法ビルダーの機体は再生核の部分から広がる様に再生する!再生の為蠢いてる部分を破壊するんだ!」

ヒロの言葉を頼りに切られたデュラハンを見るアイ、再生に動いてるパーツはあった。デュラハンの背中に設けられたビームキャノン。

アイは即座にビームマグナムを向け放つ。キャノンをビームが飲み込み破壊、これにより核を破壊されたデュラハンはやがて撃墜扱いになった。

直後司令塔を潰されたジェノアス達も機能を停止。リーダー機を倒した事によりバトルはアイ達の勝利で終わった。

……

バトルが終わった後、アイ達は事のいきさつをマスミ達から聞いていた。

「あの日、僕達がアイちゃん、ナナちゃん、ツチヤさんの三人とガンブラバトルをしてから暫く後、

僕達行きつけのホビショップで荒らしのビルダーがいると聞いてね。駆けつけてみればそこに居たのは……」

「違法ビルダーになったフジミヤさんだったって事ね」

「そういう事よ、それで降止めようとしたんだけど全然聞かなくて、説得かねてバトルに乱入って流れになっちゃったわけ」

「そのままドロドロの展開になっちゃったって事ですか」

「そうだな。あいつらは優れたビルダーのガンプレイヤーを集めてデータを複製をどんどん作っている。今回のマスマミのデユラハンもその要領だったわけだぜ」

「ありがとうムツミちゃん。ムツミちゃんとナナちゃんがPユニコーン持つてこなかったら負けてたよ」

「フフツ。今日の立て役者はボクって事だね……」

珍しくノリ良く答えるムツミ、調子乗らない、とツツコミを入れるナナ

と、その時二階にハセベがドタドタと駆け上がってきた。

「た！大変だよアイちゃん！」

「ハセベさん？なんですか今度は?!」

「さつきバトルに乱入してきた荒らしのビルダーからメールが来たんだ！ここで顔を合わせて直接バトルしようって!!」

『ハアツツ!!』

何故こういう展開になったとその場にいた全員が声を上げた。

下に降り、パソコンに表示されたメールをアイが読む。内容はこうだ。

「二回もやられるとは思わなかった上にマスマミ達まで来た。このままじゃこれから先も邪魔されるのは面倒だ。」

だから明日の午後七時、直接ガリア大陸に来た上で貴方と対戦したい。ただしこれで私が勝ったらもうエデンのメンバーは私に関わらない事。……ってあります」

「挑戦状のつもりかよ。いくらなんでも急すぎる上に一方的すぎるぜ。」

呆気にとられたゼデルが言う。猪突猛進な彼ですらそのメールの態度には呆れた様だ。そしてその場にいた全員が同じ様な心境だった。

「もう、前みたいに皆でチーム組むの……出来ないのかな」

ヨウコが諦めるかのように言う。だがその言葉を認めない人間が一人いた。

「そんなことないよ」

ヒロだった。

「確かにフジミヤさんは、ああ負けず嫌いで一人で突っ走るところがあるけれど、それでも人の痛みが分からない人じゃないよ」

「そうですよ」

アイもそれに続いた。

「私にはレムさんがどういう人間かはわかりません。でも皆がこうしてまで止めようとしてるって事はそれだけ大事な存在だったって事じゃないですか」

「アイちゃん……そうだよ、元に戻れるって信じようよ」

「アイ……アンタ結構酷い目に合されたのによくそんな事いえるわね」

「いいでしょナナちゃん。行き詰ったのがきっかけで、そのまま友達も失うなんて嫌すぎるもん」

「別に悪く言ってるわけじゃないわよ。てことはやっぱ挑戦、受けるわけ？」

「うん、受けるけどチームは……」

アイはヒロ達に向き直る。ヒロとマスマミはアイの次に言う言葉を理解した様だ。

「だったら僕を同じチームに入れて欲しい！フジミヤさんの眼を覚まさせたい！」

「元よりそのつもりでしたよ。よろしくお願いします」

結束を表すかのように握手をするアイとヒロ。次にアイはマスマミの方に向く

「マスマミさん……。前に言いましたよね。『この件には関わらないで』って、でももうそんな状況じゃないと思います。だから……」

「うん……、こうなってしまうてはボクもそのつもりだよ。向うから来てくれるなら尚更だしね」

半ば諦めたようにマスミは答えた

「助かります。よろしくお願いします」

「でも……これだけは覚えておいて欲しい。アイツの目を覚まさせるのはボクじゃなくちやいけないんだ。レムとの対決はボクに譲ってほしい」

「おいマスミ！お前この期に及んで何言ってるんだ!!」

マスミの言葉に食って掛かるゼデル

「これだけは譲れないんだ」

「よくは解りませんが。いいですよ」

「助かるよ。アイちゃん」

会話を見ていたナナはマスミの態度に腑に落ちなかった。

「フクオウジさん……なんか前と感じ違って見えるわね」

ナナの独り言にヨウコが反応する。

「あ、やっぱりそう見えるナナちゃん？」

「ヨウコさん、はい、なんか前は変な発言多かったけどずっと明るい人だったのに」

マスミは狙ってやってるのか。自然にやってるのかは解らなかったがいわゆる中二キャラだった。

しかし今日の彼からはそんな雰囲気は微塵もない。ナナにはそれがなんだかひどく寂しく見えた。

「レムとマスミって幼馴染みだからね。だからかな？レムが違法ビルダーになったので一番ショック受けてたみたいだし、

だからこそ自分の手でどうにかしたいって気持ちなのかな。ま、あいつの態度のおかげで今日あたし達がこっち来る原因になったけど」

苦笑しながらヨウコは言った。

「仲間すら歪めちゃうものなんだ……だからこそ、明日は勝たなきゃいけないですね」

「そうね……明日の午後七時か……」

ヨウコは明日来るであろう激戦に苦戦への不安と、もしかしたらレ

ムが元に戻ってくれるかもしれないという期待を胸に抱いていた……。

そして違法モデラー達のいるとあるゲームセンターのGポッドにて……

「私の送ったメールはうまく届いた様ですね」

「みたいね。それにしても機体はどうするの？あのユニコーン相手じゃ、デュラハンのコピーデータでも役者不足だと思っけど？」

「フフ……折角の舞台です。新型で挑みたいじゃないですか？」

口元を釣り上げ笑う黒髪の少女、

「新型？」

「ええ、今日まで一週間期間を空けた甲斐がありました。」

あなた達優秀なビルダーがデータを集めてくれたおかげで、もう間もなく完成するんですよ。

コピーでない、私達のオリジナルの機体が……あなたには私と共にその新型に乗ってもらいます」

『私と共に』その言葉がレムの頭にひっかかった

「あなたもその勝負に出るといふの」

「はい、テストも兼ねますから、それに……チャンスですもの、ヤタテ・アイに屈辱の涙を与える……フフッ」

待ち遠しそうに笑う少女、レムは少女をひどく不気味に感じた。

第29話「決戦前夜」(合体ミブウルフ登場)

—…後一日しかない。急いで完成させなきゃ…
模型店『ガリア大陸』奥の工作室…テーブルの上に置かれたユニ
コーンを見ながらアイはそう思った。

違法ビルダー、フジミヤ・レムを圧倒した改造機『パーフェクトユ
ニコーン』

強力ではあったが、この機体は名に反して『パーフェクト』な状態
ではない。武装の一部が出来ていないのだ。

今回フジミヤ・レムに勝利することは出来た。だが明日は恐らく今
日以上の激戦となるだろう。

こちらの手の内を中途半端ながらも見せてしまった以上、明日は完
全な状態にしなければならぬ。

そう考えると早くユニコーンに手を加えねばとアイは考える。が
…

「あ…」

ふらつと眼が回り、アイはその場にへたり込む。

「アイー大丈夫?!」

どよめく周囲、一番手にナナがアイに駆け寄った。

「あ…ナナちゃん。大丈夫、ちよつと眠いだけだから…」

眼を擦りながらアイは答える。睡眠時間を削りながらパーフェク
トユニコーンを製作していた上、

さつきまで緊張状態だった所為か物凄い眠気がアイを襲ってきた。
まぶたが重い。意識が開いてもまたすぐ落ちてしまう。

「アイ。早く帰って休もうよ。今日のバトル前でもボロボロだったの
に」

「ナナちゃん、そういうわけにもいかないよ…帰ってユニコーンを完
成させなきゃ…」

「アイちゃん…まだ無理をするって言うの…? 駄目だよ…これ以上
は」

「そうだよ。明日だって大事なバトルが控えてあるんだから、別に

今のままでも十分強いんだからいいじゃん」

「う…そういう…わけにもいかないよ。今のコイツじや明日のバトルに勝てないかもしれない。挑むんなら完全な状態で挑みたいんだもん…」

「今これ以上無理したら機体は完璧になってもアンタの方が持たないわよ。機体が不完全でもアンタが完全な方がいいとアタシは思うけど?」

「そうだよ…ボクもそう思う…」

これ以上アイが無理をするのは友達としても嫌なのだろう。ナナ、ムツミ、タカコは全員自分の意志を伝える。

だがそんな中…、あるビルダーが名乗りを上げた。

「なら、残りの作業は俺にやらせてくれないか?」

コンドウ・シヨウゴだった。アイ達は「え?」と一斉に彼を見る。

「どういう風にしたいか教えてくれれば仕上げてみせるさ」

「いいんですか?」とアイが訪ねる。

「もちろん。友達として協力したい」

コンドウの発言に安堵するアイ、直後「ただ一つだけ、俺の頼みも聞いて欲しい」とコンドウは付け加えた。

「俺ともう一度、ガンプラバトルをしてくれないか? 勝ち負けは問わない」

「ちよつとオツサン!なんでこんな時にそんな条件付けるのよ!」

もうアイはボロボロだ。こんな時にどうしてそんな条件を付けるのか。とナナは食ってかかる。

「ハジメ、答えよう。ヤタテの実力を確かめたいんだ。相手はスランプとはいえ俺の勝てなかったフジミヤ・レム

そしておそらく向こうは切り札を出してくる。

俺に勝てない様なら明日の違法ビルダーとの戦いは恐らく勝てないだろう」

「コンドウさん…いいですよ」

眼を擦りながらアイは答える。

「え?ちよつとアイ」

「私も機体も、自信はつけておきたいですから」

「ありがとう。今の本気、出してくれよ」

感謝の笑顔でコンドウは答えた。

「だったらそのバトル、俺達も加えてくれないか」

と、聞き慣れた男の声が聞こえた。アイが振り返ると工作室の入口にツチャとソウイチの二人がいた。

「お前達…」

「ツチャさん、ソウイチ君」

「来てみたら面白そうな事になったみたいじゃないか。コンドウさん」

「話はハセベさんから聞いたっす。気に入らない連中っすね。借り物ででかい顔するなんて」

ソウイチは違法ビルダーへの不快感を顔に表しながらパーフェクトユニコーンを見る。

「これが切り札スか。見事なユニコーンっす」

「ああ、俺達も何か出来ないかと思つてたところだよ。手伝える事があるなら手伝いたいんだ

ただやっぱりコンドウさんと同じく俺達とも戦ってほしい」

「え？私ひとりで、ですか？む！無茶ですよ！」

慌てるアイにコンドウが真剣な顔で声をかける。

「ヤタテ、無茶じゃないさ。今までお前はたくさんのビルダーの挑戦を受け、試練ともとれる挑戦を何度も乗り越えてきた。お前の傍でずっと見てきた俺が言うんだぞ？」

「コンドウさん…」

「そうだヤタテさん、手加減はしない。そんな俺達を叩きのめして俺達を安心させてほしいんだ」

「俺は安心しないスけどね。むしろ面白くないっす」と余計なひと言のソウイチ

「ぶれないねソウイチ君…でも、解りました。こんな状態ですから加減は出来ませんよ！全力でいきますから!!」

寝ぼけていた心に闘志を灯し、アイは答えた。

「ああ！来い！」

：

そしてバトルが始まる。今回のステージは『コンペイトウ』と呼ばれる小惑星とその宙域だ。

登場作品は『機動戦士ガンダム』と『機動戦士ガンダム0083

STAR DUST MEMORY』

最初は『ソロモン』と呼ばれる資源衛星を改造した宇宙要塞だ。『機動戦士ガンダム』に登場した際戦場となり陥落、

その後連邦軍に接收され名を『コンペイトウ』と改める事になる。形状はその名の通り、金平糖に似た形をした巨大な衛星だ。

「そういえば、コンドウさんと戦うのって前のサバイバル大会以来だな…」

出撃したアイは宇宙空間を飛びながら昔を思い出す。まだコンドウ達との距離は大きく空いていた。

あの時はチームにナナと模型部のコウヤがいた。だが今回はアイ一人だ。

『勝てるのか？』と息を呑むアイ、コンドウ達『ウルフ』の実力はよく分かっていた。

「ん?!」

と、その時アイの視界の端に一条のレーザーが見えた。アイのパーフェクトユニコーンに放たれた物ではない。

レーザーはある地点に注がれる。そして注がれた地点にある物体が光った様な気がした。

—来る!!—

アイはそう思うと思いつきり上方向に飛ぶ。直後、巨大なエネルギーの濁流がアイのさつきままでの地点を襲った。

「ガンダムエックス黒王号のハイパーサテライトキャノン!! ツチャヤヤんか!」

かつて一緒に戦った仲間の機体を思い出し、サテライトキャノンの発射地点目掛けて全力で飛ぶ。

さっきのレーザーはハイパーサテライトキャノンを撃つ為の準備だったわけだ。

発射中のエックス黒王号はその地点から動く事が出来ない為、発射地点を割り出すのは簡単だ。

発射地点に向かう途中、サテライトキャノンの射角が上に上がる。移動してるユニコーンに向け、当てるつもりだ。

が、ユニコーンは射角を動かす前から右に移動。そのまま大きく旋回、サテライトキャノンを撃った相手の後ろから襲おうというわけだ。

そうこうしてるうちに相手が見えてきた。以前共に戦った『ガンダムエックス黒王号』だ。

「ツチャヤさん！覚悟！」

「！後ろから!!」

ツチャヤの叫びを聞きながらアイは、ユニコーンの両手の武装を向け一斉に黒王号に撃つ。が…

「させんぞヤタテ!!」

野太い声が聞こえると共にマルーンに塗られた機体が両者の間に割って入る。黒王号に放たれたビームは割って入ったその機体に向かう。

「甘い！」

その機体は左右一本ずつ握られた実体剣を盾とし、ビームを防ぐ、以前コンドウがサバイバル大会でアイと激闘を繰り広げた『ミブウルフ』だ。

「防がれた!?ハッ！」

直後アイのユニコーンに真上から赤い機体が斬りかかってくる。ソウイチの『ガンダムアストレアFR2ダークマター』だ。

アイはバックステップの要領で後方に回避、同時に両手の火器を一斉に発射しようとするも、ダークマターは左手にGNビームライフルを握っておりそのまま撃ってくる。

「チッ!!」

右腕のシールドで受けるアイのユニコーン、だがユニコーンの左腕

は空いている。そのままダークマターに向けて撃つ。

しかしダークマターは難なくこれを回避、ダークマターの攻撃を防御した事により一瞬ユニコーンの動作が遅れた。

その為回避させる隙をダークマターに与えてしまったのだ。

そしてサテライトキャノンを撃ち終わった黒王号、ダークマター、ミブウルフの三体は並びパーフェクトユニコーンに相対する。

「コンドウさん…」

「まるで以前のサバイバル大会を思い出すな…、あの時はハジメ達と力を合わせ、俺に勝利する事が出来た。だが次はお前一人だ…やれるか?!俺達に!!」

そう言った直後、三機は散開、パーフェクトユニコーン目掛けて攻撃を仕掛ける。

左右から黒王号とダークマターがそれぞれビームライフルを撃ちながら迫ってくる。

アイはかわすと両肩のアーマーからビームサーベルを発生、黒王号に斬りかかる。

「まず一番の火力を潰す!」

「サテライトキャノンが怖いか!!」

ツチャはサテライトキャノンの先端から大型ビームトマホークを発生、ユニコーンのサーベルを受け止める。

「クツ!サテライトキャノンから発生してるとはいえ普通のビームトマホーク!私のサーベルだつて負けちゃいない!」

「だが近接装備はこれだけじゃないぞ!」

ツチャはそう叫ぶと片腕をサテライトキャノンの最後部にある柄を引き抜く、それは改造前のガンダムエックスの基本装備であるビームソードになっていた。

そのままビームトマホークを押し返そうとしているユニコーンに突き刺そうとするツチャ、

だがアイも読んでいたのだろう。右腕のビームガン黒王号に向けていた。撃たれると判断したツチャは黒王号を下がらせる。

だがタダではすまさんと言わんばかりに下がりながら左肩のミサイル、左足側面のバルカンを撃ちまくるツチャ。

アイの方も下がるが彼女のGポッドに警告音が響く、ツチャの攻撃に対してではない。

「上かー！」

アイが気づくとコンドウのミブウルフが腹部を展開させ球状のビーム、トライパニツシャーを撃ってくる。

このままユニコーンを下がらせるべきかとアイは一瞬思索するがそれじゃジリ貧になるとアイは判断、そのまま前方の黒王号に向けて全力で突っ込む。

真正面から突っ込んでくるかと迎え撃つツチャ、ユニコーン目掛けてビームトマホークを横に大きく振るう。が手ごたえがない。

ユニコーンは大きく前屈みの姿勢になっておりビームトマホークをかわしたのだ。

「ソウイチ!!」

叫ぶツチャ、するとユニコーン目掛けて上から大型ビームが降ってきた。ソウイチのアストレアがダークマターブースターを分離させブースターの頭部から

撃ってきたのだ。

「こんな間近なのに大型ビームを!? けどっ！」

アイは身をひるがえすと機体左肩部のアーマーでビームを受け止める。ツチャは左腕に握られたビームソードでユニコーンを突き刺そうとするも

その前にアイのユニコーンにコクピット部に右腕でパンチを撃ちこまれる。

「なっ!!」

ツチャが驚きの声を上げる。直後黒王号のコクピットはユニコーンのビームガンで撃ち抜かれていた。

「ツチャさんが!？」

「次はっ!!」

アイはダークマターブースターのビームを防ぎつつ、ユニコーンを

腕を黒王号にめり込ませたまま真上にブーストをかける。狙うはソウイチのダークマターブースター、

「ソウイチ!!」

コンドウのミブウルフがアイのユニコーンめがけてトライパニツシャーを撃つ。アイは腕にめり込ませた黒王号をトライパニツシャー目掛けて放り投げた。

トライパニツシャーに向かう黒王号。「何!」とコンドウが驚きの声を上げる。

直後、トライパニツシャーが当たった黒王号は大爆発を起こす。ほぼ同時にダークマターブースターのビームも撃ち終わる。

と同時にユニコーンがダークマターブースターに迫る。両肩部のビームサーベルを構えながら。

「うわっ!!」と声を上げ、寸での所でユニコーンの斬撃をかわすソウイチのアストレア、

追撃をしようとするアイだがコンドウのミブウルフがパーフェクトユニコーンに斬りかかってくる。

アイは背中から両手二本ビームサーベルを抜き、そのままビーム刃でミブウルフのシラヌイとウンリユウを受け止めた。

その際にソウイチのダークマターブースターはアストレアと合体、コンドウとソウイチの二機は一度ユニコーンから距離を取る。

「大したもんだな!俺達三人相手にするどころかあつという間にサブを倒すとは!」

「必死でやってるだけです!」

「:俺達も必死にならなきゃいけないって事っスね!これは!」

「ああ、ソウイチ!やるぞ!」

「あいさ!」

『トランザム!!』

二人が同時に叫ぶと共に乗機が赤く輝く。強化形態、トランザムだ。

「二機同時に?!」

アイが叫ぶや否やミブウルフとアストレアはユニコーンに襲いか

かる。

アイは二機同時に相手をするのはマズイと判断、コンペイトウの内部で戦おうとそこへ向かう。

「行かせるかー!」

アイの正面をコンドウのミブウルフがバスターソードで斬りかかる。

右肩のビームサーベルで受け止めるアイ、

「後ろがから空きっスよ!」

「!?」

ソウイチのアストレアが後ろからユニコーンを斬り裂こうと襲ってくる。

アストレアのGNソードをアイは左肩のビームサーベルで受け止めた。

「やるな!だが片腕で俺達を防げるかな?!」

コンドウはバスターソードのバーニアを点火、これにより増したパワーに受け止めたユニコーンの肩アーマーがきしみだす。

「ぐうっ!!」

「トランザム終わったら弱体化するリスクがある以上、こっちも余裕はないんスよ!決めさせてもらおうっス!」

ソウイチもアストレアのGNソードにこめる力を全開にする。このままでは押し切られるのは時間の問題だ。

「させる…もんですか!!」

アイは叫ぶと両腕のビームガンとビームガトリングをパージ、武装の下部からビームトンファアが展開、ビームの刃が飛び出た。

「何?!」

コンドウが叫ぶと同時にアイはビームトンファアをミブウルフとアストレアに振るう。直前に二機は下がった為ビームトンファアの刃に斬り裂かれることはなかった。

「そっちが剣で来るなら!こっちも剣ですよ!」

「うわ、ド派手にやるねえアイちゃん、コンドウさん達もだけど」

観戦モニターでアイの戦いを見ていたタカコが呑気な声をあげる。彼女が言葉を発するまで誰一人言葉はその場になかった。

エデンのメンバー、店員のハセベ含めて、皆そのバトルに見入っていたのだから。

「でも…勝てるの？アイちゃん…以前と似たような構図だけど…あの時もコンドウさんのトランザムっていうシステムに圧倒されてたし…」

ムツミが続けて言う。冬のガン普拉バトル大会の事だ、あの時はアイ一人でコンドウと戦ったがミブウルフのトランザムに圧倒されっぱなしだった。

その上今回は二対一の戦いだ。ムツミは不安を隠せなかった。

「大丈夫よムツミ。アイの奴、オッサンとアサダの動きに対応してる」
ナナがモニターをじっと見ながらフォローを入れた。目の前のモニターでは三機が高速で動きながらぶつかり合うように戦闘を行っていた。

「ん？」

ふとバトルを見ていたタカコが違和感を声に出した。

「?どうしたのタカコ」

「アイちゃんのガンダム、もともと緑に光ってたけどさ。なんか光強くなってる？」

「この!!」

ソウイチのアストレアがユニコーンにGNビームライフルを連射する。簡単にユニコーンはそれを簡単にかわす。

「ソウイチ!加速しながらの照準なんて無理だ!」

コンドウが接近戦で挑め!とソウイチに指摘せんばかりに、前に回り込んだミブウルフがアイのユニコーンにGNバスターソードで斬りかかってくる。

「またその手を!」

アイはユニコーンの両肩、両腕のビームサーベルを重ね、バスターソードを受け止める。

「何!?!」

「四本束ねれば!!これ位!!」

アイが叫ぶと同時にユニコーンの緑色の部分、『サイコフレーム』がさつきより強く輝きだす。

「これは!?パワーが上がっている!?!」

「だあぁっ!!」

瞬時に両腕を広げ、ミブウルフを弾き飛ばすユニコーン、その拍子にミブウルフはバスターソードを手から離してしまった。

「チャンス!覚悟!!」

アイは四本のビームサーベルを構えミブウルフに突っ込む。

コンドウは一度しまった背中の実体剣、シラヌイとウンリユウをとろうとする、だがユニコーンは思った以上に早い、

剣をとる前に自分が斬り裂かれてしまうだろう。「ここまでか」と覚悟を決めるコンドウ、だが…

「コンドウさあぁん!!」

ソウイチのアストレアがミブウルフを横から突き飛ばした。ミブウルフは横に飛びユニコーンの斬撃を回避、

だが本来ミブウルフがいた場所にいたアストレアは…

「ソ!ソウイチ!」

「な!ソウイチ君?!」

「残念ですが、俺の方が弱いっすから…、勝って下さい。コンドウさん…」

ユニコーンの斬撃を受け、四つに斬り裂かれたアストレアは爆散、ウルフの面々はコンドウ一人となった。

「ヤタテエエ!!」

コンドウは続けてアイに斬りかかろうとバスターソードを振り下ろす。それを両腕のビームトンファアで受け止めるアイ。

が、直後ミブウルフの赤い粒子の輝きが収まる。

ミブウルフのトランザムが解除されたのだ。それと同時にペナルティとしてミブウルフの性能が大きく低下する。

「くっ!トランザムの限界時間が!!」

「尽きましたか!!」

アイが叫ぶと同時にユニコーンはミブウルフを弾き飛ばす。今のミブウルフのパワーではアイのユニコーンに勝てない。

そのままミブウルフは浮かぶコンペイトウの地表に背中から叩きつけられた。

「うおっ!!」

追いつめられたミブウルフにユニコーンが迫る。どうにか迎え撃とうとするがバスターソードはさっき弾かれた時に手を離れたため紛失。

——くそっ!バスターソードが!今のパワー、そしてシラヌイとウンリユウで勝てるのか?!——

コンドウが一瞬思案した瞬間、前方の視界端に細長い、見覚えのある物が浮かんでるのが見えた。

「?あれは…」

「ここまですよ!コンドウさん!」

どンドン距離を縮めるユニコーン、

「そうか!!あれは!」

ミブウルフを前に加速させるコンドウ、ミブウルフがさっきの見覚えのある物をつかんだのと

アイのユニコーンがビームトンファアを突き刺そうとするのはほぼ同時だった。

「覚悟!!」

勝利を確信したアイ、だが直後、ビームトンファアは大型のビームトマホークで受け止められた。

「な?!その手に持ってるのって!」

驚きの声を上げるアイ、ミブウルフの手に握られる物、それは撃墜されたガンダムエックス黒王号の

ハイパーサテライトキャノンだった。これだけは無傷で漂流していたわけだ。

「フン!性能が落ちたからといってなんだ!俺は全力でやるだけだ!ソウイチ達に勝てと言われたんだからな!」

ビームトンファアとビームトマホーク、鏢迫り合いのスパークを起こしながら諦めない声を上げるコンドウ。

「そうっスよコンドウさん！これを使って欲しいっス！」

直後撃墜されたハズのソウイチの声が響いた。とミブウルフの真上から一機の機影が写る。それは…

『?!ダークマターブースター!!』

アイとコンドウの両者が叫ぶ。飛んできたのはソウイチのアストレアが背中に装着していたダークマターブースターだ。

「そう！こいつを外したらアストレア本体のコントロールは出来な
いっスからね！ミブウルフに突っ込んだアストレアはコントロール
不能だったんスよ！」

コンドウさん！すぐ背中のバックパックをパージして!!」

「?!こっか!?!」

コンドウが指摘通りに背中の装備をパージさせる。直後、ソウイチのダークマターブースターがミブウルフの背中に装着される。

同時に再びミブウルフのエネルギー状態がトランザム可能に戻った。

「こ！これは！」

「ダークマターブースターの正式名称は『トランザムブースター』トランザムの安定化を狙った物っス。ミブウルフにも使えて当たり前でしょう?」

「でもソウイチ君！無改造でつけられるものじゃないのに！」

「俺が先にやられるのは解ってたっスからね。ジョイントパーツもブースターにくっつけてたんスよ」

「ソウイチ…どうしてそこまで…」

「言ったでしょう?俺の方が弱いっスから…だから、勝って下さい…俺達ウルフの意地を…」

「ソウイチ…解った!!」

コンドウが叫ぶと再びミブウルフの全身が赤く輝く、それもさつきより強く！

「なー！これ程のパワーをー！」

アイが驚きの声を上げる。と同時に、ミブウルフの武装は仲間の装備で固められていた。

「どうやら！！これからが本番のようだぜ！！ヤタテエ！！！」

今度はミブウルフの方がアイのユニコーンを弾き飛ばす。

「くう！！望むところおおおお！！！」

サテライトキャノン振りかぶり突っ込んでくるミブウルフ、アイのユニコーンもまた四本のビームサーベルを身構え突っ込んでいった。

…少しの時間が過ぎた。

バトルはさつきと同じようにお互い二条の光となり、高速でぶつかり合い、ぶつかる度に大きな光を暗黒の宇宙に彩った。

だが飛ぶ二つの光はどんどん強くなってゆく、まるでそれはお互いの燃え上がる心を表している様だった。

そのバトルを観戦していたナナ達は、ただただ見守るしかなかった。

「くあっー！」

何度目かのぶつかり合いの後、アイの音が響き渡ると共にユニコーンの右腕が宙に舞った。流れはコンドウの方に向いている。

コンドウは追い打ちとして再びサテライトキャノンユニコーンに振り被る。

「もらったあ！！！」

「！！！」

振り下ろされるサテライトキャノン、アイはすかさず左腕のビームトンファアードサテライトキャノンを受け止める。

今までで一番激しいスパークを起こす鏢迫り合いだ。

「ぐーううう！！！」

が、パワーはトランザム中のミブウルフには適わないらしい。ユニコーンの腕がカタカタ震えている。

「俺には負けられない理由がある！だが楽しいなヤタテ！お互いの全力を尽くした勝負は!!」

「?!」

「あの時！以前ビギニングファントム事変があつた時！俺が見た魂を燃やし尽くすようなガン普拉バトル！今それが出来ている！

こんな充実する様な事があるか！」

コンドウの楽しそうな声が響き渡る。

「俺が目指した物が！今ここにあるんだ!!」

「楽しいのは同意ですよ…でも！」

アイが叫ぶと同時にユニコーンの目が光り、震えていた左腕が止まる。

ユニコーンのパワーが上がって行つてるのだ。

「私はこれ位じゃ満足できないですよ!!」

直後、ユニコーンのビームトンファアのビームが大きくなり始めた。

それに伴い、ビームトンファアの刃がサテライトキャノンのビーム刃に食い込んでくる。

「な！何?!」

「私は数年前！ガンプラマイスター『イレイ・ハル』君に助けられて！そしてハル君とボリス・シャウアーさんのガン普拉バトルをこの目で見ました！」

女としてあの人に会いたい！ビルダーとしてあの人みたいになりたい！あの人に追いつきたい！

ガン普拉をどれだけ好きになってもその夢は諦めない！」

「お前!!イレイ・ハルのバトルを見たのか!!」

「その為に！私は今ここで立ち止まるわけにはいかないんです!!だから!!私はあああつ!!」

アイが叫ぶと同時にビームトンファアはサテライトキャノンを持っていたミブウルフごと真つ二つに斬り裂いた。

「超えたか…俺の腕も…俺の立つてる場所も…」

少しだけ悔しそうに…だが嬉しそうにコンドウがつぶやくと同時

にミブウルフは爆発。このバトルはアイの勝利で終わった。

…

「…それで仕上げれば完成です。指定したパーツはムツミちゃんがパーフェクトユニコーン入れて持ってきた箱にあらかじめ入ってますから」

バトルが終わった後、アイは工作室で、箱に入ったパーフェクトユニコーンのまだ使っていないパーツを見せながらコンドウに改造の指示を出す。

「解った。任せろヤタテ」

コンドウが箱を受け取るのを見ると「じゃあ後お願いします…」と言い、コテツとアイはその場に倒れそうになる。

「わわ！アイ！」

ナナが体勢を崩したアイを受け止める。ナナの耳にはアイの寝息が聞こえた。

「つたく、最後の最後で締まらない真似を…」

「そう言わないでよアサダ、アイは全力を出し切ったんだから」

面白くなさそうなソウイチにナナがフォローを入れる。

「完全にこれで全力出し切ったって感じだね。コンドウさん」

「しかしすぐえ戦いだったぜ！感動もんだ！」

と、ツチャとゼデルがコンドウに話しかける。ゼデルの方はさっきのバトルに興奮してるらしく眼は爛々と輝いていた。

「本当ですよ。まさかこんな派手なバトルになるなんて」

「その通りです…。素晴らしいバトルでした…」

タカコとムツミもゼデルに賛同する。

「そうか？俺としても悔いのないバトルだったさ」

「ところで気になったん事があるんですけど…」

「なんだ？と質問を承諾するコンドウ」

「いえ、途中アイちゃんのガンプラが光が強くなったりビームの刃が強くなったりでどうしてあんなったのかなって思ってた…」

「あれか？そうだな…ありていに言えばヤタテの強い気持ちがあるユニコーンに伝わった。かな？」

「え？」と声を出すタカコとムツミ。

あまりにも科学技術を駆使したガンプラバトルにしては、答えが真逆のベクトルだったからだ。

「ハハ、ありえないって顔してるな。でも本当だよ二人とも、作る時の『楽しい』という気持ち、完成した時の『嬉しい』という気持ちがガンプラ

に宿り、応えてくれる。ガンプラバトルってのはそういうのが成立するもんなんだ」

コンドウが言ってる事は本当だった。現にガンプラの中には使用者の『魂』が極限に高まる事によって使用可能となる武器もある。

「にわかには信じがたいですけど…：そう言うならそうなんでしょうね…」

「ん〜オカルトだねえ〜」

「…でも、なんだか解る気がします。アイちゃん…：好きだって思った事には凄い集中力出しますからね。

だからこそガンダムに興味薄いナナをガンプラに興味を持たせたのかもしれないです…：本当に好きな事を楽しそうにやるっていうの、

他人も引き込む説得力があるんだと思います」

「そうだね〜、ソウイチ君の考えも改めた事もあるし。いいな〜アイちゃん、ああやってカワイイ子と距離縮めちゃうんだから」

「黙ってタカコ…」

「おうおうあんま難しく考えんな二人とも！物に魂が宿るっていう考えは昔っからあつたらろう?!」

「ゼデルさん〜、日本人じゃないあなたが言います〜?」

「あん? そうか?」

ゼデルとタカコが問答する中、ツチャとムツミがコンドウに話しかける。

「にしても…：決着ついたって感じだな」

「サブ…：ああ、完敗だ。凄い奴だよヤタテは」

「それにしてもアイちゃんに憧れの人が出たとは知りませんでしたけ

ど…凄い人だったんですか？そのイレイ・ハルって人」

「ああ、わずか一年でガンプラを極めたという少年だ。ヤタテの奴…彼に会った事があったとはな」

「好きな物に取り組む姿勢はその人から学んだのかもしれないね…」

「そうかもな。もしくはアイツの元々の才能だったかもしれないぞ」と返すコンドウ、ともかくこれなら明日も大丈夫だろう。

俺達は明日、ヤタテが全力で戦えるよう、全力でサポートをするだけだ…。

そう思いながら、さつき教えてもらったパーフェクトユニコーンの完全体、コンドウはまだ形にならないそれを頭でイメージしていた…。

—でもヤタテ…お前だったら、ウルフを任せられるかもしれないが…残念だ…—

謎の言葉を浮かべながら…。

…

そしてレム達のいるゲームセンター

「…負けちゃった…」

Gポッドの中、撃墜されたレムはつぶやく。目の前に『あなたは撃墜されました』の表示が浮かんでいた。

—やっぱり駄目だ…、普通のガンプラじゃスランプのまま…—

ハロ型スキヤナーから自分のガンプラを取り出す。

違法機体ではない。ガンダムA G Eに登場したファルシアというピンク色の機体だった。

スランプに陥る前、愛用していた機体だ。

—やっぱりこつちじゃないと駄目みたい…—

レムは目の前に一つの1cmにも満たない箱状のICチップを取り出す。

その中には違法ビルダーのデータが入っていた。

—ごめんね皆…わたし、負け癖は相変わらずでこつちだけ勝ち癖が

ついてきちゃった……

そうマスミ達へ謝罪を心の中でしながら、かつ自己嫌悪に陥りながら、レムは明日のバトルを楽しみに感じていた。

—おかしいよね……これをやってる時だけ、皆と一緒にの位置に立ってる気持ちになれるんだもの……ダメだな……わたし……—

第30話「ビルダーの意地と誇り（前編）」（マステマガンダム & ネフィリムガンダム登場）

その日、模型店ガリア大陸は妙な緊張感に包まれていた。本日7時に違法ビルダーが直接ガリア大陸に来る。その上でバトルをするからだ。

時刻は6時30分。7時で閉まるはずの店はほとんどの客はいないはずだった。

しかしその日に限り2階に数人の男女がいた。ナナ、ムツミ、コンドウ、ツチャ、ソウイチ、ヨウコ、ゼデル、そしてヒロとマスマミの9人だ。

「指定した時間まで後30分か」

ツチャが携帯の時計を見ながらつぶやく。

「本当に来るんスカね？違法ビルダーって奴は」

「来るよ。アイツは、レムは勝負を投げるような奴じゃない」

「ですが…」

ソウイチの呟きにマスマミが答える。だがレムの内面をよく知らないソウイチにとってはその答えも信用しきれなかった。

「かつての仲間が言ってるんだ。そうに違いないさ。ソウイチ」

コンドウがソウイチに言う。

「でもよ、肝心のアイちゃんもまだ来てないじゃねえか。そっちを心配した方が…」

「大丈夫ですよゼデルさん。さっき連絡したらタカコと一緒に商店街走ってるって」

ゼデルの問いにナナがスマホの履歴を見せながら答える。外では雨の降っていた。アーケード街の為直接降ってはいなかったが音が静かな店内に木霊する。

—舞台は完全に整った…早く来い、ヤタテ—

コンドウがテーブルの上に置かれたパーフェクトユニコーンを見ながら心で呟く。

Exsガンダムのパックパックを流用した背中が追加された、完全な形になったパーフェクトユニコーンがそこには置かれていた。

「ハッ！ハッ！」

暗くなつた商店街をアイは息を切らせながら走っていた。

「思った以上に補習授業に時間を取られちゃったね〜アイちゃん」

「お互い小テストでカワイイ点数を取ったからってこんな日に補習しなくても…、用事あるからって言ったのにギリギリまで帰してくれなかったし…」

「全く油断してたタイミングで来るなんて」とアイとタカコは、ナナや店で待ってる皆への申し訳なさを感じながら愚痴っていた。とその時だった。

「あっ！」

雨の為路面が濡れていたのが災いしたか、もしくは余計な小言を漏らしていたからだろうか、

ステンとアイはその場に足を滑らせて転んでしまった。その拍子に鞆の中もばらまいてしまう。

その時アイの胸ポケットから学生手帳が抜けて床に滑り落ちる。

「わっ！大丈夫アイちゃん?!」

「しーしまった！学生手帳！」

手帳のカバーの中にはガンプラバトルで使うカードが入っていたのだ。

ノートや教科書に目もくれず、慌てて探そうとするアイ、しかしかなり遠くへ滑ってしまった。

その上探そうにも薄暗い時間だ。視界が悪く周りには仕事や学校の帰りの人で多い、

ちよつと時間がかかるだろう。と、辺りを見回すと一人の少女がアイに向って歩いてくるのが見えた。

しかもその手にはアイの学生手帳を持って。

「これ、貴方の？」

少女はアイに箱を手渡す。アイはそれを受け取った。

「あ、はい。ありがとうございます…」

少し戸惑いながらも受け取ると同時にアイは中身を確認する。ちゃんとカードも入っており雨で塗れてもないようだ。確認と同時に安堵感が沸く、

「よかったね〜」

「うん、余計な時間取られなくてすんだよ」

「ガン普拉バトルのカードが見えたけど…好きなんですね。いい顔をしています」

「あ…そう見えました？ちよつと恥ずかしいですかね…」

自分の状況が分かるとちよつと恥ずかしくなる。だがすぐさまアイは我に返るとタカコと落とした物をまとめ鞆に入れ始めた。先程の少女も手伝ってくれた。

「これでいい?」

「あ、はい。何から何までありがとうございます」

ここへきてようやくアイとタカコは少女の顔を見る。年齢は少し上位だろうか。透けるような白い肌、アイより二割は長い脚、

前髪は目を覆い尽くす長さだが目が隠れる量ではない。腰にまで届く艶やかな黒髪に堀の深い顔立ち、

脇の店の電灯に照らされ、見える目は二重瞼、ほんわかした印象を持った美少女だ。

「じゃあ私はこれで」

「はい、じゃ私も」

すぐさまアイはガリア大陸に行こうと走り始めた。だがすれ違う瞬間、少女はアイにだけ聞こえる声で言った。

「今日のガン普拉バトル、精々頑張ってください。ヤタテ・アイ」

「え…?!」

予期せぬ発言にアイは振り向く。しかしそこに少女の姿はなかった。

「今のって一体…」

「どうしたのアイちゃん、早く行こうよ」

「あ、うん、ゴメンねタカコちゃん」

2人がガリア大陸についた時にはもう7時にさしかかろうとしている時だった。

「ごめん！待たせちゃった！」

「アイ！遅いよ！」

謝りながらアイとタカコは店内の階段を駆け上がってきた。

「何かあったんスか？」

「途中でちよつとトラブっちゃってね。でも親切な人が助けてくれたからこの通り間に合ったよ」

「親切な人？」

ヒロが問うとアイはその人の特徴をジェスチャーと言葉で答える

「長い黒髪の綺麗な人でしたよ。でも私の名前や今日ガンプラバトルするの知ってたみたいで不思議な人でした」

「あれ？そうなの？知ってたんだ」と言うタカコ

「知ってるって事は案外今日戦う違法ビルダーじゃないの？レムさんとは違う人とか？」

「そうかなあ……」

「これから大事なバトルだつてのに随分とゆるい空気ね？」
『!?!』

全員が声のした方に目をやる。一人の女性が立っていた。たれ目とシャギーのかかったミディアムボブの茶髪にシャツワンピース。

見慣れた女性だ。

「…レム」

「久しぶり皆。変わりはないみたいで安心したよ」

「レムさん……」

「久しぶりい？随分じゃねえか。ちよくちよくバトルで会ってんだろ？」

「顔を合わせてって事よゼデル。ガンプラ越しでだけだなんて寂しいでしょ」

気怠そうな態度で返すレム、前回とはまた違った雰囲気だ。彼女の
中で何か心境の変化があったのだろうか。

「ねえレム。あたし達もう大学生だよ？それがこんな節度も守れない
バトルの勝ちかたして何が楽しいの？こつちと縁切つてまでそんな
物手に入れて嬉しいの?!」

「又聞き程度の話だが同感だ。大体そんな物で勝ち続けたって所詮は
はみ出し者だ。フェアが条件の場で、特別扱いされた力で勝ったって
誇れる資格なんてない」

ヨウコの言葉にコンドウが続いた。その場にいた全員が違法ビル
ダーに賛成していなかった。

「でも、私がこうなる事は運命だった。折角手に入れた力なんだから。
有効に使わなきゃいけないじゃない？ねえ、マスミ？」

「…」 黙るマスミ

「無視するわけ？まあいいよ。来て早々お説教なんてされたくない。
早いところ始めよう？」

沈黙を保っていたヒロが口を開いた。

「わかったよ。フジミヤさん、君が反省も後悔もしないのならするま
で相手するまでだ」

穏やかではあったが強い口調だ。二人の…否、バトルに出る四人の
間に電撃が走っていた。

バトルに入り込んだ三機は宇宙に飛び出す。遠くではM字形の巨
大な要塞が見える。

表示されたステージは『宇宙要塞アンバット宙域』だ。ガンダムA
GEにおけるフリット編決戦の地で、

激戦の再現の為か幾つもの爆発のエフェクトが遠くで起こってい
た。 作中では『コウモリ退治戦役』と呼ばれる戦いだ。

「コウモリ退治戦役のステージですか」

「まさに決戦といった趣だね。なんとしても今回で終わりにしなけれ
ば…」

「ああ…」

ヒロが決意を固める。マスマも控えめだが同じ心境なのか言葉を返す。

と、その時敵機の反応が複数現れる。見ると機械化した四足歩行の竜のような機体が数機、尻尾のビーム砲を向けながら飛んでくる。

AGE本編で登場したガフランやバクトだ。

「ガフラン!?あれが今回のレムさんの機体?!」

「違う!ヤタテさん!第三勢力扱いのNPCだ!」

ヒロが言うと同時にアイも理解した。今回はガンダムAGEのステージ、それも節目の決戦の場だ。再現として出てきてもおかしくない。

「いわば防衛線ですか!」

「レム達は向こうにいるんだろう。ここで手こずるわけにはいかないな」

マスマが言うのとエクシアリペアをGNソードを展開させる。そしてガフラン達の中へ突っ込んだ。

「本当にレムさんを止めるために必死なんですね」

「ああ、元々責任感が強い奴だったからね」

―だが、本当にそれだけなんだろうか―ヒロは自分にそう問いかけながら、アイと共にエクシアリペアに続いた。

三機はそのまま強行突破をかける。アイのPユニコーンはダッシュしながら両肩のビームサーベルを使い、すれ違いざまにガフラン達を切り裂く。

「んっ!コンドウさんが作ってくれた追加のブースター、うまく機能してる。さすがコンドウさん!」

アイは機体の推進力から確信する。完成したPユニコーンは背部にEXSガンダムのブースターを追加、

更に右背部にビームキャノン、左にはミサイルポッドを取り付けてある。

不釣り合いなほど大きなブースターだ。機体のバランスは悪くは

なれど直進的な加速はユニコーンの能力に加え更に上がっていた。
(これはPユニコーンが元々マスミのデュラハンに対抗する為の機体だからだった)

そのおかげでガフラン達の迎撃も難なくかわし突破できる。他の二機も同様の勢いで敵機を蹴散らしていた。そのまま三機とも防衛線を突破し、合流する。

「三機とも無事だったみたいだな」

「この程度だったら軽いですよ」

「しかし…」

ヒロはジツと破壊したヴェイガン機の残骸を見る。いつもの改造ジェノアスの様に再生するんじゃないかと不安に思っていたからだ。アイ達二人も同じ心境だった。

「再生…しませんね」

「この後出てくるのか…それとも今回はそれが不要ないともいえるのか?」

「教えてあげるよ! 正解は後者!」

『!』

声がすると直後にビームが飛んできた。三機は散開しかわす。同時に前方を見る。一機の紺色の機体が見えた。

「レムか!」

「もう手駒も必要ないもの、私のこの機体があればね…」

「な! 何だというんだ…? あのサイズは!?!」

ヒロが…否、バトル参加不参加問わずその場にいた全員が絶句した。敵のサイズが異常なのだ。ゆうに百メートルはある程のサイズだ。

「下僕がない分、大きさにデータを割いたということか?!」

「その通り、丁度虎の子、マステマガンダムが間に合ったの。強そうだしよっ…」

上半身はスローネドライなのだが両腕は四本、外側の腕はクローを備え、下半身は肥大化、まさに異形という言葉に相応しい外見だ。

「数で押すだけでなくそんな大きさのまやかしに！まだ目を覚まさな
いんですか!?!フジミヤさん！」

ヒロはマステマ目掛けてビームキャノン『アグニ』を撃つ。
「馬鹿な人」

マステマガンドムの全面に緑の泡のような物が現れる。それはア
グニを弾いた、弾かれたそれはあたかもレムに向ってヒロが投げかけ
た言葉の様に…。

「!?!」

「何度同じやりとりするの?」

そう言うとレムはマステマガンドムの両腕のビームキャノンにエ
ネルギーを溜める。否、アグニを弾いた泡のようなビームがビーム
キャノン先端に収束する。

そして両腕のそれをストライクめがけて放った。ビーム砲を撃つ
というのにまるで剣を振るうかのような腕の動きだ。

「ビーム砲もないのにビームを撃つ!?!」

ヒロはソレをかわすが…巨大なビームはしなつてストライクを襲
う。直撃は避けられた物の背中の中のストライカーは破壊されてしまう。

いわばそれは巨大なビームの『剣』だった。

「うわあっ!」

観戦モニターでそれを見ていたコンドウ達がどよめく。武装に何
か見覚えがあるようだ。

「コンドウさん、あれは…」

「ああ、I f s (イフス) ユニットか…」

「何よ。そのI f s ユニットって」

いつもの様にナナが疑問を投げかける。彼女としては初めて聞く
単語だ。

「ビギニング系にだけ搭載された機構だ。機体各所に見える5角系状
のパーツ、あれだ」

「あれはあのパーツごとにビームやエネルギーを蓄え、攻撃、防御、推
進、全ての強化を図る事が出来るんだよ。」

他にもI f s ユニット同士でエネルギーを譲り渡す事が出来たり、

他の機体の防御にも使えたりと何でもアリのシステムだね」

「ハジメさんも前にビギニング作ったでしょう？全身にある三角形のパーツ、あれもそうっス」

「あーアレね」

ナナは特徴的なビギニングの姿を思い出す。やたら三角形のパーツが多いのが記憶に残っていた。

「反面エネルギー効率が悪くなったり、しっかり作り込まないとまとも扱えないとか欠点もあるんだよ」

「そうだな、If sユニットをつければ強いというわけではない」

「…予定の出力が出てないじゃない？」

中波したストライク、その前でレムが愚痴る。

『ヒロ！（ヒロさん！）』

「だ！大丈夫！」

「まあ、これでも十分かな？」

「そんな図体でよく言う!!」

接近戦ならとマスミはGNソードを展開、アイもビームサーベルを、ヒロも幸い壊れていなかった対艦刀を手に続いた。

「クツ！ちよつとサイズ大きすぎたかな!？」

レムは距離を取ろうと後方に下がる。大きすぎる故に接近戦の取り回しが悪くなってしまったのに今気付いたようだ。

「いきなり逃げ腰?!観念したか!？」

「違うわよ！」

加速度が勝る為かPユニコーンがエクシアリペアより早くマステマに迫る。レムは叫ぶとマステマのクローを使いユニコーンの肩のビームサーベルを受け止めた。

機体のサイズが大型化してる為クローだけでも敵機の身長程もあるサイズだ。

「だったら実弾なら！」

「っ！」

ミサイルポッドを撃ちまくるアイ、

もう一方のクローでガードするレム、派手な爆発が起きるがあまり意に介してない。

「クツ！鬱陶しい！掴んで握りつぶして…」

「よそ見をしている場合じゃないぞ！レム!!」

「なっ！」

相手はアイだけではない。ヒロもまた対艦刀で斬りかかる。それもまたクローで受け止める。

「これ位！」

「だったらこれでどうだ！」

マスミのエクシアリペアが突撃する。狙うはマステマの胸部コクピット。

「マスミ!?!」

「再生するとはいえ少しは時間が稼げるだろう!!」

「ちっ！」

「それは必要ありませんよ？」

「!?!」

その時だった。真上からマステマが撃つたのと同じビームがエクシアを襲った。ビームはエクシアを薙ぎ払い破壊する。

「ぐわあっ!!」

「マスミ！」

吹き飛ぶエクシア。同様の攻撃がPユニコーンとストライクにも飛んでくる。

「!?!」

後退しかわす二機、バトルが終わってないということはまだリダー機であるマスミは沈んでない。

そう思いながらヒロは攻撃があった上を見た。撃つたであろう上空から一機のガンプラが降りてきた。

細長い体躯の機体、『劇場版機動戦士ガンダム00』に登場したラファエルガンダムの改造機だ。

大きさは通常の物と同じだが右腕がクロー状になっており、その大

きさは異常なほど大きかった。GNアーチャーという機体の下半身を改造した物だった。

こちらもやはり Ifsユニットがついている。

「新手…?」

「不甲斐ないですね。レムさん」

ラファエルの声が周囲に通信となって伝わる。女の声だ。

「アナタね。どういう事? Ifsユニットの出力が予定より低いじゃない」

「初テストも兼ねたバトルです。不足の事態は起こるといいますよ」

「テストもしてない!?聞いてないわよ!」

「言ってますから」

「な!」

「援軍? それにしても何て余裕な…」

「あれゝあの声…?」

マステマガンドムの横に降り立つと同時に少女はレムと悠長に会話を始める。その光景にヒロ達は茫然としていた。

同時にアイとタカコはその声に聞き覚えがあった。

「まあ私としても今回のあなたの不具合には申し訳ないと思っはいます。お詫びとしてヤタテ・アイの相手は私がしましょう」

「よく言うわよ。自分からアイを倒してほしって頼んだくせに! 今回のバトルだってあなたは!」

「…私を?」

「それについては否定は…できませんね!」

改造ラファエルは凄い勢いでアイのユニコーンに突撃する。そして右腕のクローで薙ぎ払おうと襲いかかる。アイはクローをビームサーベルで受け止めた。

「やはり最も頼れるのは自分だけということでしょうか?」

「何者なんですか!?! あなたは! 人を倒したいとか言って!」

「何者？先程あつたばかりじゃありませんか」

「まさか!!」

そう言うのとモニターにラファエルのビルダーの顔が映し出される。見覚えのある顔…というかさつき会った顔だ。

「その顔…学生手帳落とした時の!」

さつき会った黒髪の美少女だった。首から下はパイロットスーツに着替えてはいるもののメットは被っていないかった。

あなたのおかげでレム様からのクレームが多くて迷惑しています。彼女のご機嫌の為に早々にやられて頂きたいのですが」

「!あなたも違法ビルダー!」

「まだ名前は申し上げてませんでしたね?『リンネ』と申します。そしてこの機体は『ネフィリムガンダム』以後お見知りおきを」

Gポッド内で恭しくお辞儀をするリンネと名乗る少女。

直後ネフィリムの右腕に光が収束される。さつきの攻撃が来る! そうアイは判断し回避しようとバックステップをかける。

直後、I f sユニットで作られたビームが放たれる。マステマガンダムが放ったものと同様のビームだ。

ある程度距離を取っていた為かすめたがアイは回避出来た。

「くっ!」

「おいしいおいしい、それよりも違法ビルダーなどと差別的な物言いですね?新世代ビルダーと私たちは名乗ってますのに」

なおも右腕のI f sユニットを収束させようとするネフィリム。その隙を逃さずアイはPユニコーンの全身からありつただけビームを撃ち込んだ。

「新世代!?ガンプラである意味もない様な物を作っておいて何を!」

「何も理解してないのですね」

リンネは収束中のネフィリムの右腕をかざす。収束されたI f sユニットは全ビームを弾き、本体にダメージは一切通らなかった。

「効いてない!?!」

「私たちは理想系のガン普拉バトルを目指しているのですよ? 作品の上手い下手にとらわれないガン普拉バトルを」

「何を!?!」

「考えても見てください。ガン普拉製作が上手い人もいれば下手な人も必ずいる。うまい人は環境や工具をきちんと用意します。

ですがそれには相応のお金やスペースが必要になります。子供や貧しい人では用意したくてもできません」

言ってる事はある程度は理解できた。だが聞いてられるかといわんがばかりにビームサーベルで斬りかかるPユニコーン、

その攻撃もネフィリムは右腕から発するI f sユニットで防いだ。

「それだけではありません、あまりにもうまい作品は下手な人のプライドを砕き、作る意欲もそぎ落とす事もあります。格差社会なんですよ、今のガン普拉バトルは、

ですが私達の商品を使えばそんなのは関係ありません。ひとつのデータを買えばそれで済む。自分の物の完成度を気にする必要もない」

「さつきから屁理屈をつらつらと!! 環境や工具がないなら無いなりに工夫したりアイデア出したりするのがガン普拉の醍醐味でしょう!?!」

出来上がったデータだけで何が楽しいっていうの?!」

お互いの戦いはこう着したまま続く、撃ち合い、斬り合い、そして言い合う。

「そう思えるのは私達新世代ビルダーの絶対数が少ないからに過ぎません。それが当たり前になる程増えれば文句なんて誰も言いませんよ?」

例えば私達が使ってるI f sユニット、イレイ・ハルが卑怯な手でガン普拉マイスターになった方法と同様です」

「ニヤツとリンネの口元が笑った。

「!!!」

淡々とした口調、しかしイレイ・ハルの部分だけ、さも馬鹿にしたような言い方だった。

「ハル君が卑怯?! ハル君と何の関係があるっていうんですか!!!」

「ええ卑怯ですよ。ビギニングガンダムという怪しい機体に乗る、他の機体を自分だけが持つていたI f sユニットで蹂躪した。」

初心者であるにも関わらずI f sユニットの性能で百戦錬磨のガンプライスター、ボリス・シャウアーとも渡り合い、

そして一年でガンプライスターの座に上り詰めた。

でもそれは当時一人だけ持っていたI f sユニットの恩恵にすぎません。これが卑怯じゃなくてなんだと言うんですか?」

その言葉にアイは抑えようのない怒りが一気に溢れ出す!!

「それ以上!!!侮辱するなあああああああああ!!!」

怒りに任せアイはPユニコーンの全火力をネフィリムに^{!!}発射する。しかしI f sユニットにはなす術もなく防がれる。!!

「ですが彼を非難する人間はいない、いえ、いるでしょうが目立たない、何故だかわかります? ビギニング30が一般販売され、

誰でもI f sユニットが扱えるようになったからですよ?」

「なっ!」

防がれたのを見てアイが我に返るもネフィリムは右腕から収束させたビームを放つ。回避の一瞬遅れたPユニコーンは直撃は免れたものの食らってしまう。

「うああっ!!!」

「ヤタテ・アイ…、所詮ハルも道具に頼るしかない、その程度の男でしかなかったんですよ…」

そのままガツとネフィリムはPユニコーンの顔面をクローでつまむように掴む。直撃には至らないものの、さっきの一撃で左腕と左足はぐっさり持っていかれた。

「すぐには倒しませんよ。営業を妨害したあなたには私達との実力差

を見せつける必要がありますからね。」

「くっ…」

満足げに語るリンネの前髪が影になる。髪の間から除く目は、影の中で瞳だけが光り不気味な二つの光点となっていた。

少し離れた場所でレムと戦っていたヒロもそれは見えた、

「ヤタテさんー!」

「よそ見をするなんて余裕があるのね!」

隙をついたマステマのクローがストライクを掴む、そのまま握りつぶそうと力を込めた。

「フェイズシフト装甲はガンプラバトルではない。仮にあったとしてもどこまで持つかしらね!?!」

「ぐ…うわあああ!!」

ヒロの絶叫と共にギシギシとストライクのボディが軋む。

レムは自分達の勝利は確定していた

「もう…いいだろ…」

「?」

レムに通信が入る。通信を入れてきたのはマスマだった。彼のエクスシアも半壊し、動く事もままならない様子だった。

「マスマ?」

「もういいだろ!?!お前はもう昔と同じ自信を取り戻せた!これ以上お前は何を望むんだ!もうやめろ!」

「…ダメだよ。元のガンプラでやってみてもスランプはそのままだったもの、折角楽に勝てる方法を見つけたのよ?飽きるまで味わっていたいわ」

「テメエと言う奴は!マスマがどんな気持ちでお前止めようとしていたのか、わかんねえのか!?!」

観戦モニターからバトルを見ていたゼデルが叫ぶ。よく通る声はGポッドにも届く。

「マスマはなあ!今でもお前が元に戻ってくれてるって信じてるんだよ!コイツの想い!しらねえとはいわさねえぞ!!」

「想い?…フフツ」

嘲笑するような笑い、ゼデルには不快に思えた。

「何がおかしい!」

「想いなんて思われてるんだマスマシ、じゃあゼデル何にも知らないんだね」

「どういう事よ!?!」

哀れむかのように笑うレム、その態度にヨウコも疑問に思った。

「マスマシが動いているのは想いなんかじゃないよ!自分のメンツを守りたいだけ!だってコイツは…」

「!や・やめろ!やめてくれ!!」

突如マスマシが慌てだす

「その慌てよう、やっぱり皆に言っていないんだ。昔っからそうだよ。自分の間違いは認めないところあったもん。」

私に違法ビルダーのデータを渡したのはねえ!マスマシなんだよ!!」

『…っ!!』

その場にいた全員に言葉にならない衝撃が全員に走った。

「嘘…」

ヨウコの口から唾然とした声が漏れる。ゼデルも声に出ない衝撃がある様だ。

「本当ですよ?マスマシさんからは以前新世代ビルダーのデータをお買い上げ頂きましたから」

「そう、スランプになった私に違法ビルダーのデータを渡したんだよ。これを使えば勝てるって」

「違う…違うんだ!ボクは!」

「フン!」

言い訳しようとするマスマシ、だがもう片方のクロウがマスマシのエクシアリペアを掴みあげる。

「マスマシ!」

「なんで自分のせいでこうなったって皆に言わなかったの?結局守りたかったのは自分のプライドだけでしょ?早いうちに処理しておけばバレないかもってさ!」

「ち…違う…！違うんだ！」

「違わないよ！それでわたしの想い？この甘ったれ!!」

そのままクローに力を込めエクシアリペアを砕こうとする。

「うわあああああ!!」

マスミが絶叫する中、アイが沈黙する。

観戦していた全員も茫然としていた。最も違法ビルダーを憎んでいたマスミが…、レムが違法ビルダーになるきっかけを作ったのがマスミ自信だということに。

流れは完全に向こうに傾いた。もう駄目なのかとバトルを見る全員が思った時…

「…じゃないぞ…」

ヒロが呟く。Gポッドの中、体はワナワナと震えていた。

「ヒロ？」

「僕は信じないぞ！マスミがそんな物の為に戦っていたなんて僕は信じない!!」

「何の根拠もなしに何を言ってるの？わたしは」

「僕はリーダーと一緒にレムを止めようと何度も戦ってきた！何も話さなかったリーダーの真意は僕にだってわからなかった！だけどレム！」

君を止められないたびにマスミは悲しそうな顔をしていた！ヨウコに何を言われてもただ耐えていた！

僕はそんなマスミをずっと見て来たんだ！だから僕は思う！いや！分かるんだ！

仮に邪な気持ちがあったとしても！マスミは君を止めたいという純粋な気持ちだってあったはずだ！」

「そんな事…言ってもないのにわかるわけないじゃない！自分勝手に言った事でそんな自信満々に言わないでよ！」

レムがストライクを掴んだクローに最大の力を込める。このままストライクを押しつぶす気だ。だがストライクは潰れなかった。

「…のおお!!」

ヒロはありつただけの力を込め手足を拡げる。なんとストライクは

押しつぶそうとしたマステマのクローをギギギ…と音を立て押し出していた。

「嘘!?握りつぶせない!？」

「自分勝手に言ってるのは…君だろうか!!僕は今までの経験を…心で感じた事を信じる!それを否定したら…今までの自分まで否定する事になるだろうかああ!!」

「!…ヒロさん」

「ヒ…ヒロ…」

「こ…この…!」

アイとマスマミが呟く中、レムはヒロのストライクを完全に破壊しようとするマステマ内側の腕、手のひらのビームマシンガンをストライクに向けた。

「ヒロさん!」

アイは叫ぶとネフィリム腹部に向け膝を曲げる。そして膝のバーニアを吹かすと膝アーマーを腹部目掛けて切り離し飛ばした。

「な!？」

意表をつかれたリンネはバックステップを取る、有効打にはならないもののユニコーンの脱出には繋がった。

続けてアイはPユニコーンのビームマグナムとビームキャノンでマステマ目掛けて撃った。

「くっ!」

一方でマステマにやられるのかと一瞬思案するヒロ、だがその直前に別の方向から飛んできたビームがストライクをエクシアリアペア、

両方のクローのIf sユニットのない部分に命中、そのままビームは貫通しクローは破壊された。レムは意識がヒロのストライクに集中していた為防衛が出来なかったのだ。

「!？」

驚愕するヒロ、だがすぐアイが撃つのだと理解する。

「ヤタテさん!」

「まだ歯向かうというのですか!」

リンネはネフィリムのクローで襲いかかる。だがアイは左肩の

ビームサーベルで受け止めた。

「!?」

「今気付いたよ…私も、ハル君に憧れたのはただ強いからじゃない…！心で感じたから！心から楽しいって思えるバトルを見せてくれたから!!だから私はそれを！」

そのまま薙ぎ払う動作でネフィリムを弾く。

「信じるー！」

「くっ！」

「今の私のきっかけを作ってくれた想いを！あなたの言葉一つで否定させるもんですか！」

「なんでよ…」

ギリツ…と音を立ててリンネは歯を食いしばる。

「なんでよツツツツツ!!!」

リンネの端正な顔が歪む。そして怒号と同時にネフィリムの背中
のコンテナが展開、

そしてGNミサイルが一齐に発射され、一齐にPユニコーンに向か
う。

「っ?!」

リンネの絶叫を表したかのようなGNミサイルの雨、

アイは全火力を持ってGNミサイルを迎撃、密集に近かったミサイ
ルはひとつ爆発すると連続で周囲のミサイルを巻き込み爆発した。

その爆風を突き破りネフィリムのIf sユニットのビーム、巨大な
ビームサーベルがアイに振り下ろされる。

「クッー！」

アイはビームの横を通りミサイルを撃ちかえす。

実弾の方がIf sユニットには効果があるからだ。ミサイルはネ
フィリムに続けざまに命中する。

「?!避けないー！」

回避動作を行わずネフィリムはミサイルを受ける。命中したミサ
イルは爆発しネフィリムのボディを削る。

「どうするんだい？」

「実はもう一機持ってきたマスミのガンプラがあるの、マスミ本人は使い慣れた方を選んだけどね。昨日のアイちゃん同様乗り換えさせれば…」

「ちよつと待てよ」

ゼデルがヨウコを止める。何か引つかかった様な顔つきだ

「ゼデル？」

「お前はレムにマスミが違法ビルダーのデータ渡したの、何とも思わねえのか？」

「…騙されたって言いたいのか？」

「…そうじゃねえよ、ただ…」

「ゼデル…アンタの言いたい事はわかるよ。でも今は優先順位を間違えるわけにはいかないのよ」

「…」

「ちよつと！二人して話し合ってる所悪いけど早い所結論だしてよ！！」

ナナの慌てた声で二人はハツとする。見ると損傷したマステマガンダムのクローは再生の途中だった。

「強気だね…！でもね、わたし達が優勢なのは変わらないんだから！」

ベキベキと音を立ててクローを再生させながらレムはGポッドの中でモニター上のエクシアとストライクを見下ろしていた。

「クツ！」

「マスミ！聞こえる!?」

マスミのGポッドにヨウコの声が響く、通信ではなく直にGポッドの外から話しかけてきているのだ。

「ヨウコ?!」

「今ゼデルがアンタのもう一機を空いてるGポッドに入れたわ！それから乗り換えて！」

「アレを出したのか！」

「…アタシにはさ…アンタが何を思ってたかなんて分からない。でも…今まで一緒にやってきたんだもん。信じさせてよ…」

「…すまない…」

マスミがエクシアのGポッドから出るとゼデルが立っていた。ゼデルは真剣な顔でマスミの肩に手を置いた。

「エクシアには俺が乗る。マスミ…今は何も言わねエ、だが…勝てよ」

「ゼデル…」

「今のあなた達！再生しきったとはいえチャージで一発で十分だわ！」

マステマガンダムの腹部ビームキャノンがチャージが行われる。大口径のビームキャノンはエクシアとストライクを狙っていた。

「クソッ！」

ヒロは射線から離れようと必死にレバーを動かす。だがさっきの無理が祟ったのかもしれない。避けようにも機体が思う様に動かないのだ。

そして放たれるビームキャノン、もうダメかとヒロは思ったその時、

ストライクの横を大型のビームが走る。それはマステマのビームに直撃、ビームは相殺された。

「何!?!」

「な、なんだ?今の!?!」

二人とも状況が全く理解できないようだ。

「レム!お前を違法ビルダーにしてしまったのはボクの責任だ!」

「その声!マスミ!?!」

レムは撃たれた方向を見た。そこにいたのは黒いユニコーンガンダム、ユニコーン二号機、バンシイだ。

背中にマガノイクタチという畳んだ翼の様な装備を背負ったその機体は先ほど撃ったであろうハイパー・メガ・ライフルを構えていた。

「だからボクはお前が違法ビルダーをやめるまで追い続ける!ボクを

信じてくれた仲間の為にも！このデュラハン！デストロイモードで
！！
」

その叫びに呼応するかのようにバンシィのサイコフレイムが音を
響かせ、赤く輝く。それはまるで友への懺悔の叫びのようだった…

第31話「ビルダーの意地と誇り（後編）」（デュラハン・デストロイモード登場）

マスミの乗り換えたユニコーンガンダム2号機「バンシイ」の改造機、「デュラハン・デストロイモード」が赤く輝く、それは怒りと悲しみ、両方を表している様だった。

「それ、完成したんだ。選手権に向けて作ってたそれを」

違法データ、マステマガンダムに乗ったレムが腹部ビームキャノンを向ける。

「いいよ、おいで！どんな機体で来ようとわたしのマステマの敵じゃない！」

「いいだろう！デュラハン！行くぞ!!」

そう言うデュラハンと呼ばれた機体は背中のウイング状のパーツ、マガノクイタチを拡げ飛び立つ。

凄まじい加速でデュラハンは赤い光となってマステマに突っ込む。その後方で、Gポッドを交換したゼデルのエクシアリペアはヒロのストライクを抱えて退避していた。

「ひやく凄い加速、あんな隠し玉があったなんて、アイちゃんのユニコーン並だよ」

「とっておきの機体だからね。マスミにとっても集大成みたいなものよ」

タカコはバンシイの動きを見てただただ驚愕するしかない。

「でもヨウコさん、あんな凄い機体があるんだったら何で最初っから出さなかったの？」

「俺もそう思う。何故エクシアリペアの方を使ってたんだ」

タカコの疑問にコンドウも賛同する。今回の勝負は大事な一戦だ。あえてエクシアリペアを使う理由が分からない。

「あの機体ね、レムのアイディアが入ってるの。レム本人はあれが完

成するのを楽しみにしてたからね。

変に見せたら却って神経逆撫でしかねないと思っただけだ。」

「それはそうとあのライフルの先のビームトマホークって…」

デュラハンの武装に自分と共通した武器がついてるのがツチャには気になった。HGシナンジュのビームトマホークだ。

「あれねツチャさん、あれ貴方の機体ガンダムエックス魔王見て影響受けたみたい。使うかどうかは最後まで迷っただけだね」

マスミとレムが戦ってる横でアイとリンネ：パーフェクトユニコーン（以下Pユニコーン）とネフィリムガンダムの戦いも続いていた。

アイのPユニコーンは左手足を持って行かれた状態だ。

「随分と活気づいて来ましたね。乗り換えるとは卑怯な人」

「あなたが言うんですか？」

「…まあいいでしょう。ここでは余計な茶々が入るかもしれません。場所を変えましょう！」

そう言うとネフィリムは背中のGNアーチャーのブースターの角度を水平に変える。そして一気に遠くに見える宇宙要塞アンバットに飛ぶ。

凄まじい加速だ。

「ついて来なさい！」

「!?早い！まてえ！」

リンネは宇宙要塞アンバット内部へと消える。アイもそれを追いかけた。

追いかけるアイのPユニコーンに高速移動の振動はほとんど見られない。それだけアイのガンプラの完成度が増したという事だ。

一方のデュラハンとマステマガンダムの戦いは激しいものだ。デュラハンがマステマの周りを高速で動き回り、ライフルに取り付けたビームトマホークで何度も斬りかかる、

それに対応しクローで応戦するマステマガンダム、マステマのサイズデータ改ざん（100m）を逆手に取った戦法だった。

「どうした!? 凌ぐだけで精一杯か!？」

「冗談言わないでよ!」

デュラハンの全長の倍以上あるマステマ、100m級のこれだけの大型機で素早く動き回るデュラハン相手に凌ぐのはレムが優れたガンプラビルダーである証だ。

だが切り裂いても突き刺してもマステマガンダムはすぐに損傷箇所を再生する。

「どんなに頑張ってもジリ貧なのは明白だよ!? こっちにはif sユニットと再生能力がある!」

「チツ!」

デュラハンが一旦距離を置きハイパー・メガ・ライフルをマステマ目掛けて撃つ。

相当な出力だ。過負荷でif sユニットを貫通できないかと考えたからだ。しかしif sユニットに弾かれる。

「無駄だって言ってるの分らないの!? 再生するのは装甲だけじゃない! エネルギーだってそうなんだから!」

「クツ!」

マスマの脳裏に焦りがよぎる。このままではレムの言った通りジリ貧になる。と

「やっぱりif sユニットは貫けないのか…」

「クソツ! 俺らも戦えりゃ!」

マスマの耳にヒロとゼデルの通信が聞こえる。二人とも共に戦いたいのだろう。だがストライクは満足に腕も動かせない状態だ。

唯一残った武装は握られた対艦刀、しかしエネルギーもわずかだ。

ゼデルのエクシアに抱えられて動けるやっとな動ける状態だ。抱えたエクシアも左腕とGNソードは損失、完全な丸腰状態で二人とも戦闘に参加できる状態ではなかった。

その時、会話を聞いたマスミにある作戦が思い浮かぶ。

「…そうだなーこれなら！ゼテル！ヒーロー！」

『!?』

そしてこちらはアイとリンネ、Pユニコーンは、アンバットの通路を高速で飛びながらネフィリムを追う。

「一体どこまで行くの!?!」

要塞内、所々がツタの様な機械で覆われた、異形の通路を飛びながら、アイはユニコーンのビームマグナムを撃つ。

通路の幅は広く大型のユニコーンサイズでも悠々に通れる。だがスペースがあるにも関わらずネフィリムは避けずビームを背中で受け止めた。

ビームマグナムの出力でもifsユニットは貫けないからだ。

「まだ移動中なのにせっかちですね、ならー！」

ネフィリムの眼が光ると同時に、Pユニコーンとネフィリムの前方と後方にガフランが二機ずつ現れる。

後方のガフランが二機アイのPユニコーン目掛けて両手のビームマシンガンを飛びながら撃ってきた。

「!?マズイ！ヴェイガンの要塞だからいるのは当然なのに気付けなかった!?!」

避けながらPユニコーンは変わらずネフィリムを追い続ける。ここで見失うわけにはいかない。

だが前方のネフィリムも目の前のネフィリムを素通りし、Pユニコーンにビームサーベルで斬りかかってくる。

「!邪魔しないでよ!!」

残った右肩アーマーからビームサーベルを出し、ビームサーベルを振り上げた体勢のガフランを二機、まとめて横一文字に切り裂く。

それで起きた爆風が通路を満たすがその中をPユニコーンが突き破った。

「NPCまで操ったんですか!?!あなたは!」

「驚く必要はないでしょう? AGE本編でもゼダスがファルシアを

操ったんですもの」

「このっ！」

と、その時、後方にいた残りのガフランが二機テールランチャーを撃ってくる。ランチャーはPユニコーンの右のブースターに被弾。

小爆発を再現した振動がアイのGポッドを襲う。

「うわっ！小細工を！」

「兵法と言ってくださいな。ついでにもう一つ見せておきましょうか。機体だけではないんですよ？」

リンネがそう言った時、ネフィリムの前方で隔壁が閉まり始める。リンネが隔壁を操作したのだ。

「閉じる前に通れますかね？」

閉まりかけの隔壁をリンネが通る。閉じてしまつては通ることが出来ない。アイも急いで通らなければならぬが、後方のガフランが嫌がらせと言わんばかりにランチャーを撃ち続ける。

「邪魔だあっ！」

アイはそう言うのと損傷した背部右のブースターを切り離す。後方に飛んでいくそのブースターは、すぐ後ろを飛んでいたガフランに激突し、爆発。

爆発によりもう一機のガフランも怯み攻撃が一瞬止む、その隙をついてアイのPユニコーンは最大加速で閉じる寸前の隔壁を通り抜けた。

ユニコーンが通り過ぎた直後、隔壁は完全に閉じる。追っていたガフランは閉じた隔壁に衝突したのだろう。アイの耳に後ろからの爆発音が響いた。

「くっ！…ありがとうコンドウさん。あなたが完成させてくれたなかつたら追いつけなかつた…」

コンドウへ感謝しながら進むアイ、程なくして開けた場所に出た。円柱状の巨大な白い部屋で、中心部には球体（その上下は台座状の機械が連結している）形の機体がゴウンゴウンと音を立てていた。

ユニコーンの大きさを成人男性と例えるなら部屋は球場並の広さか。

「ここは…アンバット動力炉？」

「その通り」

「っ!？」

真上から声がし、ネフィリムが右腕のクロローで襲いかかってくる。アイはPユニコーンのビームサーベルで応戦する。

激突したビームとクロローを包むifsユニットのビーム膜が激しい閃光を散らす。

「くっ…ここなら邪魔は入らないって算段でここに逃げ込んだの!？」

「ええ。余計な茶々を入れられたら困りますから。折角私がレム様に提案したバトルを汚されては適いませんからね？」

「!やっぱり今回のバトルはあなたが仕組んだ事だったの?!」

「ええ。彼女は実にお得意様です。勝利に飢えていた為か私の思想も理解して下さり今では良き顧客であると共にテストプレイヤーですよ」

「洗脳までしてええええええ!!!」

ミサイルポッドを撃ち出すアイ、だがリンネのネフィリムはミサイルの間を器用に突っ切ってくる。

「なっ!」

驚愕するアイだがネフィリムを迎え撃つべくビームサーベルを振るう、しかしネフィリムの姿はそこには無い。

すぐ目の前に屈んだ体勢でネフィリムはいた。

「ちっ!」

舌打ちするアイ、ユニコーンの右足で蹴りをいれようとするもこれも空振り、

「後ろか!」

「遅いよ」

アイは気付くも、直後に後ろに回ったネフィリムが、ユニコーンの背中にキックを入れる。

「がっ!」

ユニコーンは床に叩きつけられうめき声を出すアイ、

そのままネフィリムはユニコーンの背中に馬乗りになろうとする。そのままクロードで仕留めるつもりだ。

だがネフィリムが馬乗りになろうという瞬間、アイはPユニコーンのミサイルポッドを反転させ、後方に一斉発射、

馬乗りになろうとしたのが災いしたのだろう。回避行動をとろうとしたもののネフィリムは何発かは避けきれず被弾、

Pユニコーンが体勢を立て直すには十分な隙だった。Pユニコーンはバーニアで浮かびながらもネフィリムに相對する。

「私とした事が…油断しましたね」

「意地があるんですよ！…こっちにだって！」

フツと笑うリンネ…だが次の瞬間、彼女の笑みはいびつに歪む。

「では仕方ありませんね。もう少しいたぶっておきたかったです…本気で相手をしてあげますよ!!」

< p f >

アイとリンネの戦いがこう着する中、アンバットの外、マスミ達とレムも激しい戦いが続いていた。

「…をしてくれ！」

「わかった！マスミ！」

マスミはヒロとゼデルにだけプライベート通信で作戦内容を伝える。レムには何かコソコソ話しをしていた位にしか分からない、

「何をコソコソと！」

クロードを振るい、i f sユニットのビームでデュラハンを薙ぎ払おうとするマステマ、

i f sユニットのビームをかわすと右肩のランサーダートをマステマの胸へ発射する。

「悪いな！お前が前のままだったらちゃんと言せたかもしれないんだが！」

「悠長にしてー！」

マステマはランサーダートをかわすとまたもデュラハンをi f sユニットで薙ぎ払おうとする。

しかしマスミはあっさりかわすとデュラハンを背後に回り込ませ

る。マステマガンドムの背後にデユラハンはいた。

「後ろ!？」

攻撃を防ごうとif sユニットの防御フィールドを全身に発生させるレム。

「甘い!」

バンシイの背中が前面に展開する。ゴールドフレーム天から移植したマガノイクタチだ。鋏状へと変わった翼はマステマを挟みこもうとif sユニットに激突する。

「無理よ!if sユニットは貫けない!」

「無理じゃない!」

「!？」

そうマスマミが叫んだ直後、マガノイクタチはif sユニットを貫きマステマガンドムを挟み込んだ。直後マステマからスパークが起る。

「何これ!？エネルギーが吸われてる!？」

レムはモニターのモニターを見てエネルギーがどんどんなくなっていくのを理解した。と、同時にフィールドが消える。

「あつ!フィールドが!」

マガノイクタチには挟み込んだ相手のエネルギーを吸収する特殊武器だ。燃費の悪いif sユニットはすぐ使えなくなってしまう。

「そうだ!エネルギーがなくてはif sユニットも使えまい!」

「フフ:甘いね」

「!？」

「さっき言った事を忘れてない?なくなっただけで回復するのよ?それにまともに今戦えるのはあなただけ、

他は満身創痍、ポンコツのストライクとエクシア、それにいつまでもあなたがエネルギーを吸えるわけじゃない、あなたのやった事は所詮無駄:」

「そのポンコツをなめんなよ!」

「!?」

レムの耳に別の声が響いた。両手で対艦刀を構えたヒロのストライクがマステマガンダムに高速で突っ込んできたのだ。それも全身を赤く輝かせながら

「ストライクが…赤く!?」

「うあああああああああああああ!!!」

「こー来ないで!」

マステマはクロローを振り回しストライクを迎撃しようとする。しかしif sユニットの補助が無い為動きは鈍重だ。

「う!動きが!」

そのままストライクはコクピットに対艦刀を突き刺す。衝撃を利用した一撃は深々とコクピットに突き刺さる。

「なんですつて!」

「りやあああ!!!」

突き刺したまま、ヒロは下に対艦刀を振り下ろす。防御出来ないマステマガンダムの胸から下を切り裂く。

「な…なんで。瀕死のストライクがあんな動きを…」

「ストライクだけかと思ったか?」

「ゼデル!?」

ストライクの背後からゼデルの声がした。そして後ろから現れたのは同じく半壊したエクシアリアペアだ。それも赤く輝くトランザム状態。

「俺がトランザム状態で抱えてたのさ」

「そんな…でも無駄よ…まだ再生コアは…」

「いや、もう終わりだああ!!」

「!?」

マスマの声がすると真上から再生中のマステマを脳天からビームが飲み込む。デュラハンのハイパー・メガ・ライフルだ。

マステマのエネルギーを吸った最大出力の一撃は巨大化したマスマの胴体部を飲み込む程だった。

「そんな……私は勝利への……絶対の力を手に入れたのに……!!なんで……!」

レムは今の状況が理解できなかった。久々に勝つ感触を得たというのにかつての仲間には勝てない。その状況が、

「フジミヤさん……あなたに戻ってきてほしいから……ですよ」

ヒロの声がレムの耳に届いた。

「え……ヒロ君……」

レムのつぶやきと同時にマステマガンドゥムが爆発する。再生コアも今の一撃で破壊したらしい、

モニターに『敵機を撃墜しました』の表示が出た。安堵と同時に虚しい感情が各々の胸に残った。

「再生コアごと破壊できたみてえだな」

「うん、だけど……レムさん……」

「まだバトルは終わってないよ。レムはガンプラバトルのリーダーじゃなかった」

そう言うとマスマシは要塞アンバットに機体を向ける。

「マスマシ、行くのかい? ヤタテさんを助けに」

「うん、彼女も仲間だからね」

そう言うとデュラハン是一条の赤い光となり、アンバットへ飛び立った。

「くあつー!」

動力室の壁にアイのユニコーンは叩きつけられる。壁にめり込んだPユニコーンはもうボロボロの状態だ。

武装も右肩のビームサーベルしか残されてない。

対するネファイリムガンダムは無傷、再生したのか、と思われるだろうが、あれから彼女のネファイリムは一発も被弾していない。

「こ……これほどまでの実力があつたなんて……」

「当然ですよ。私の操縦は天才なんですから、あなたの動きは完全に見切りました」

「何……?!」と自信を砕かれるアイ、リンネは己の勝利を確信していた。

「これで解りましたか？既存のガンプラに乗ったあなたでは私には勝てない」と

「まだ…まだだよ…」

ベコツ…とへこんだ壁からアイは、Pユニコーンは出てくる。右肩からはビームサーベルを出して。

「随分と理解の薄い頭です。あなたの実力では勝てないとまだ解らないのですか？」

「解らないよ、まだ私のガンプラ魂は消えてないもん」

「フツ…魂？目に見えない盲信ですね。今までどうやって勝って来たのか不思議でなりませんよ」

「そりやそんなデータの固まりに乗ってればそう思えるでしょ！」

そう言うときアイは前方のネフィリム目掛けてPユニコーンへ突進させる。ビームサーベルをストレートパンチの様に撃ち込む気だ。

「馬鹿な人…」

リンネは真つ向から防ごうとネフィリムのifsユニットを発生させる。Pユニコーンは大きく肩アーマーを突出し…

ビームサーベルを消した。

「はっ!」

そのままPユニコーンの右肩アーマーはifsユニットを貫通、ネフィリムのクローに大きくめり込む。

そのままアイはクローをめりこませたままビームサーベルを再発生。パーツの内側からビームが貫通しネフィリムの破壊、

さすがのifsユニットも内側からの攻撃はどうしようもない。

ネフィリム右腕を突き出した体勢だったためにバックパツク右側までビームサーベルは貫いていた。そのままアイは発生させたビームサーベルを振り上げる。

右腕と右側バックパツクごとネフィリムは裂かれた。

「う！嘘!？」

「ifsユニットはIフィールドを利用したシステム。ビームには無敵だけど実体装備には無敵じゃない!」

ネフィリムのダメージによりリンネに隙が出来た。

そのまま再生中のネフィリムをアイはPユニコーンで背中から押し出す。目指すは動力炉。

動力炉の大きさはユニコーンやネフィリムの比ではない。その誘爆にネフィリムを巻き込めば倒せるとアイは考えたからだ。

「イレイ・ハル君はね！適当にビギングガンダムを作ったわけじゃない！自分で出来る範疇で精いっぱい作り込んだんだ！

だからビギニングは答えてくれた！想いがこもってたからシャウアーと戦えたんだ！お前みたいに表面上の性能に頼ってたんじゃない!!!」

揺れるGポッドの中で叫ぶアイ、心の震えが表に出てきたようでもあった。

「そ！それでも！彼が強いシステムを使ってたのは事実よ!」

「彼がそれでifsユニットを使いこなせたのも事実でしょお!!!」

アイの叫びにリンネの顔が歪む、敗北への恐怖の表情に

「や！やめて！やめてえ!!助けて！お父さああんっつ!!!」

情けない声でリンネは懇願する。しかしやはりアイは聞く耳を持たなかった。Pユニコーンはネフィリムを動力炉に強引に突っ込ませる。

すぐさまPユニコーンは退避、衝撃でひしゃげた動力炉はそのまま爆発、ネフィリムも誘爆で吹き飛んだ。

「わ・私だけが負けるなんて…どうせ負けるなら…引き分けにしてやるわ…アイイイイ!!!」

炎に包まれるネフィリムの中、リンネが絶叫する、直後アンバットがグラツと揺れた。

「な！何が起きたの!？」

「馬鹿ね。動力炉を破壊したのよ。それが原因で宇宙要塞アンバット

は自爆する。どうせ負けるならあなたも道連れよ…」

「しまった！まだ倒し切れてない！」

ボテツと動力炉から床に落ち、ヨロヨロと瀕死のネフィリムがユニコーンめがけて歩いてくる。左腕はなく特徴的な右腕もかろうじて形を保つてゐる程度だった、

ボロボロになつても迫るその姿はまるでゾンビの様だ。

「貴方さえいなければ…貴方さえ…」

「くっ！」

アイは残つたビームサーベルを発生させる。が、その時、ネフィリムの真横から要塞の壁を突き破り大型のビームが飛んできた。

「っ!？」

ビームに飲まれたネフィリムはそのまま吹っ飛ばされる。空いた障壁から出てきたのはマスマスのデュラハンだ。助けに来たのだろう。

「アイちゃん！無事!？」

「マスマスさん！」

「脱出する！捕まってくれ！」

マスマスはデュラハンの手をPユニコーンに差し出す。手を掴みデュラハンの開けた穴を通り脱出しようとする二機。要塞内はすでに小規模な爆発が起こつてゐる。

動力炉の部屋に残されたのは胸と頭だけになったネフィリムだ。再生中ではあるが今は動けない。そして要塞の爆発によってネフィリムは撃墜となるだろう。

「もう少しで出口だ！」

「間に合うの…!？」

『アイ…ヤタテ・アイ』

「?!」

その時だった。アイの耳に取り残されたリンネの通信が入る。アイだけ送った通信だった。

『覚えておきなさい…アイ…私達新世代ビルダーは…望むべくして生み出された。私達は正しい…』

そして…あなたの好きなイレイ・ハルを…！嫌ってる人間はいくらでもいるという事をね!!!」

「!」
そうリンネが叫んだ瞬間、要塞は爆発に包まれる。後方から爆発が迫る中、

アイとマスミは発進口からギリギリで脱出する。幾つもの爆発がM字形の要塞をつつみ。宇宙要塞アンバットは崩壊した。

同時に爆発に巻き込まれたネフィリムは撃墜扱いとなったためバトルは終了するのであった。

「…う…」

リンネの言った言葉がアイの胸に突き刺さる。今のガンプラバトルは実力差の社会だという事、

それを救う為の違法ビルダーだという事、

イレイ・ハルはif sユニットに頼るだけの卑怯者だという事、

そして、ハルを嫌う人間はいくらでもいるという事…!!

「うわああああああああああああああああああ!!!」

遠くでアンバットが爆発する中、アイは叫んだ。その胸の内は言いようのない悔しきで一杯だったから…!!

バトルが終わった後、コンドウはアイに駆け寄る。

「やったな！ヤタテ！」

「コンドウさん…、コンドウさんがユニコーンを完成させてくれたおかげですよ。有難うございます」

眼を合せながらも力なく応えるアイ、一方のレムは茫然と立ち尽くしていた。

「マステマが…わたしの切り札が負けるとはね…」

「経験と、仲間がいたからこそその勝利だよ。ただ勝利しか見ようとしなかったやり方ではこうなって当たり前だったんだ」

ヒロがレムの背後から話しかける。他にもレムの周りにはアイ、マスミ、ヨウコ、ゼデルが取り囲むように立っていた。

しかしその雰囲気は彼女を責めようと言った雰囲気はない。

「今からでも遅くはないよ。帰ってきてくれレム」

「色々あったけどアンタもやっぱりあたし達に必要なだったんだよ。考え直してよーレム」

「湿っぽい関係なんて御免だぜレム！」

「ゼデル：ヨウコ、ありがとう：皆、優しいね：でも：」

その時だった。急に周囲が真っ暗になる。明かりが一斉に消えたのだ。

「な！なに！」

「何も見えない!? 停電スか!？」

「ひい！俺暗いの駄目なんだ!!」

「ちよつとどこ触ってんのよ！」

「レ！レムは!？」

全員がどよめく中、どこからともなくレムの声が出た。

「今更戻れるわけないよ：：もうこうなった以上、私はこの道を進み続ける！私はもう、違法ビルダーなんだから!!」

その時、バシヤツ！と一瞬強い光が暗闇を照らした。タカコがデジカメのフラッシュをたいたのだ。

「いたよ皆!! 階段の所！」

タカコの声が響く中、何人もの男たちがタカコの指定した場所に突っ走る。

「もう一つ、わたし達は宣伝の為、違法ビルダーとしてガンプラ選手権に出るよ。止めたいなら大会で止めて！待ってるから！」

そのままレムは階段を下りて行った。追いかけた男たちが階段に着くころには消えていた明かりがあった。しかしそこにレムの姿は無かった。

直後慌てて店員のハセベが二階に駆け上がった。

「だ！大丈夫だったかい皆！店を閉める準備をしていたらいきなり電気が消えちゃって！」

「停電だったんでしようか？」

「いや、ブレーカーだったよ。他の店はまだ電気がついてたからね」

コンドウの言葉にハセベは何故こうなった？と首をかしげる。

「誰かが落としましたんでしょうかね？」

「多分そうだと思う。気づかないうちに忍び込まれたのかも」

「そんな事より女の子がいまませんでした!? ウェーブがかったショートの!」

「挑戦状を送ってきた娘だね。すまない、あいにく見なかったよ…」

申し訳なさそうにうなだれるハセベ

「逃がしたか…」

その場にいた全員が沈黙する。この結果に何人もの人間が無力感や嫌なモヤモヤを感じていた。

アイの耳に未だリンネの最後の言葉が、リンネを救えなかった悔しさがのしかかる。

ずつと消えない怒りがアイの胸に灯っていた。

—なんなの…! この気分…! 勝ったのに全然嬉しくない!!—

「ハア…ハア…」

商店街の入り口で膝に手を置きながらレムは息を切らしていた。ここまで走ってきたようだ。

「残念な結果に終わりましたね。レム様」

「!? リンネ…」

レムが顔を上げると、雨の降り続けるアーケード街の入り口を背景に、リンネが立っていた。

「あなたも大概ロクな目に合わなかったと思うけど？」

「お見苦しい所をお見せしてしまいましたね。では例の物を…」

「解ってるよ。これでしょ？」

レムはカバンの中から透明なプラスチックのケースに入ったICチップを取り出す。

箱状ではあるもののICチップを覆う程度の大きさしかなくかなり小さかった。

それをリンネに渡した。

「確かに、今回の戦闘データ、及びif sユニットの実戦データは今後の開発に非常に貢献することでしょう」

「それでアイちゃんに復讐を、って事？」

「小さいことですね。私達はいずれガン普拉バトルに革命を起こすのですよ」

そう言いながらリンネの頭の中はアイを下す事で一杯だった。レムもそれに感づいているのだろう。聞いてみる。

「…なんでさっきのバトル、ガリア大陸にいなかったわけ？あなたはどこにいたの？」

「最寄りのゲームセンターですよ？違法ビルダーを憎む人達がたくさ
んいる場所に私自ら赴くわけにはいかないでしょう？」

「じゃあもう一つ、あなた…アイちゃんに何の恨みがあるの？どうしてそこまで執念を燃やすの？」

「さあ？…ここら辺はプライベートな問題ですので、女の過去を探ろう
など野暮というものですわ。フフ…」

不気味に彼女は笑って見せた。

第32話「好きだから！」（パーフェクトユニコーンガンダム VS ユニコーンガンダム4号機 『デュラハン・デストロイモード』）

バトルでレムを説得する事は結局叶わず…、その結果にそこにいた全員が結果に沈黙せざるをえなかった。

特にアイの顔は（レム以外の原因もあるのだろうが）悔しさや怒りを抑え込んでいるのか眉間に皺をよせていた。

「それじゃ、帰るかな…。いつまでもこうしてるわけにはいかないんだし」

マスミが口を開け沈黙を破る。時間はもう7時30分を回っていた。

「そうだね…」とヨウコが言う。が…

「ちよつと待てよ」

その言葉に異を唱える人物がいた。ゼデルだ。

「ゼデル？」

「マスミ、教えろ。お前は本当にレムに違法ビルダーのデータを渡したのか？」

「…それは…」

マスミの目をジツと見るゼデル。眼を逸らしながらもるマスミ

「言えよ」

「…本当だ。ボクが渡した。」

その言葉にヨウコは衝撃を受けた。マスミは自分の口から『渡した』とは言つてなかった。

レムが嘘をつく人間とは思わなかった。しかし『もしかしたら』とヨウコはマスミの潔白を信じていたからだ。

「どうして？」とマスミに問い詰めようとするヨウコだったが…

「なら話は早え、俺とガンプラバトルをしろ」

「え？」

渋い顔で言ったゼデル。その場にいた全員が疑問に思った。大事

な一戦の後だというのに何故またバトルするのか。と、

「どうしてって顔してんな。教えてやる。俺はお前がなんでレムに違法データ渡したことを黙ってたのが気に食わねえ」

「ゼデル。アンタそれ…」

ヨウコがその事はもう終わった。と言おうとしたが。

「それは分かってたんだよ。でもなんで俺たちに言ってくれなかったのか。同じチームなのに、それが俺の頭ん中でグルグル回ってたんだ。」

このまま言わなかったら、今後お前の態度に影響しちまうかもしれないえ」

ゼデルは自分のガンプラ、アーマーで着ぶくれたような機体、ブルデュエルをカバンから取り出す。

「正直な話、さっきの瞬間お前には幻滅してんだ」

『幻滅』という言葉にビクツとマスミは体を震わせる。

「だからガンプラバトルで吐きだしたい。俺はガンプラビルダーだ。あーだこーだ口で言うより、今俺がスッキリするにはそれしか思い浮かばねえんだよ」

「アンタ…言ってる事メチャクチャじゃない」

ヨウコが呆れながら言った。だが、ヨウコ自身ゼデルの気持ちも分かった。何故同じチームに黙っていたのか。

それはエデンのメンバー全員の気持ちだ。

「…わかった。受けて立つ。ボクだって申し訳ないという気持ちはある」

マスミは真剣な顔つきで言った。真正面からゼデルの気持ちを受け止める。といった表情だ。

「だったら僕も参加させてほしい！」

次に名乗り出たのはヒロだ。

「後腐れしたくないのは僕だって同じなんだ！」

『『エデン』のメンバー総出のバトルって事ですね…。てことはヨウコさんも出るんですか…?』

「うーん、そりゃあたしだって不満はあるけど、バトルで発散って程でもないかな、むしろあたしより…」

ムツミの問いかけをヨウコはやんわりと否定する、そして彼女が見たのは…

「アイちゃん。あなたが出た方がいいよ」

「…え？私ですか？」

まさか自分が指名されるとは思わなかったのだろう。アイは先程の表情から一転し、素っ頓狂な声をあげた。

「発散したい不満はあたし達とは違うだろうけどさ。ここで溜め込んじゃ可愛い顔が台無しだよ？」

「え、でもこれって…」

エデンの仲間内の問題、アイはそう言おうとした。

「自分が入る余地はないって思うか？とんでもねえよ。ここで嫌な気分持ったのはお前も同じなら尚更だぜ？」

それを遮ったのはゼデルだ。

「そうだよ。僕としても巻き込んだ様なものだしね」

ヒロが言うと同時に、エデン以外の全員も同感だと言葉の代わりに頷いた。

「そうだな。自分の心につつかえた物、全部吐き出してこい！」

「いつてきなよアイ」

「そうッス。それに…俺としてはユニコーンとデュラハン、これの戦いも見てみたいッスから」

「ソウイチ、そりや空気読まない発言だろ」

ソウイチにツツコミを入れるツチャ、アイは暫く黙りこむと、意を決するかのように深呼吸した。

「解ったよ。胸に湧き始めたモヤモヤ、大きくならないうちに吐き出す！」

…

そして本日最後のバトルが始まった。バトルフィールドは『アーモリーワン』機動戦士ガンダムSEED DESTINYにおいて三機のガンダムが奪取された始まりの場所。

軍工廠のある砂時計型コロニー『プラント』内部に四機の機体が降り立つ。チーム構成はゼデルはアイ、マスミとヒロ。それぞれ二人

ずつ、

今回はリーダーを定めておらず。両機倒されて初めて試合終了となる。

始まって早々、直後にゼデルのブルデュエルとマスマミのデユラハン、二機が格納庫の並んだ区域を低空飛行しながら撃ち合っていた。ブルデュエルは両手のビームハンドガン、

『リトラクタブルビームライフル』を連射、デユラハンは一定の距離を保ちながら手持ちのハイパー・メガ・ライフルを発射、両機ともかわしながらの撃ち合いだった。

「チツ！ラチがあかねえなっ！」

「!?」

ゼデルはブルデュエルの武器をビームサーベルに持ち替えるとデユラハンに突撃、そして横に薙ぎ払う。

だがビームサーベルを振った場所にはデユラハンはおらず、ビームサーベルは虚しく空を切っただけだった。

「上かつ！」

「もらった！」

マスマミのデユラハンはブルデュエルの真上に飛び上がっていた。突如デユラハンの背部の翼『マガノイクタチ』が全面に展開する。

そしてマガノイクタチからワイヤーにつながれた檣上の物体が打ち出される。

マガノイクタチ内部に格納されていた『マガノシラホコ』だ。

「甘いんだよ!!」

ブルデュエルは軽くかわすとそのまま右腕シールドのレールガンを発射。

「んっ！」

マスマミはそれをかわしながらデユラハンを横に一回転。すると打ち出されたままのマガノシラホコが弧を描きながらブルデュエルに襲いかかった。

「なにっ！」

シールドで防ぐゼデル。マガノシラホコはシールド表面を切り裂

く、二つのマガノシラホコがシールドを通り過ぎるがゼデルは油断してなかった。

何故ならバンシイはその隙について左腕のカギ爪、ツムハノタチで斬りかかってきたからだ。

「もらったぞゼデル！」

「こなくそおお!!」

それをビームサーベルで受けるブルデュエル、両者とも先程のバトルの疲れを一切見せない気迫だった。

一方のアイとヒロも壮絶な戦いをしていた。もっともこちらは最初からサーベルで斬り合っていたのだが、

「なんでマスミさんと戦わず私と戦うんですか！」

「しおれてる君が気になったからさ！」

ヒロのパーフェクトストライクが振るう対艦刀を、アイは機体右肩のビームサーベルで受け止める。

「どうしたヤタテさん！動きが鈍いぞ！」

ヒロは直観的に思った。本気を出したアイなら自分位簡単に倒せるだろうと思っただからだ。

「何を迷ってる！」

「…悔しいんですよ!!」

ビームサーベルでストライクを払いながらアイは叫んだ。

「何が！」

「リンネって人が言ってた事です！自分たちは正しいって!!違法モデルが望まれたガンプラバトルの救う方法だって！私の憧れのビルダーを嫌う人間は幾らでもいるって！」

ヒロはパーフェクトストライクの右肩部のガンランチャーを発射、ユニコーンにはかわすとすがさず両腕のビームガンとビームガトリングで応戦する。

「私自身！あんな支離滅裂なのが正しいなんて思いませんよ！でもね！あんな毅然とした態度だと逆にこっちに非がある様に感じる！私には！あんな大義名分はない！」

「だから納得できるってか！」

「そうは思ってませんよ！でもね！あれに対抗するとして、ただがむしやらにガンプラバトルやってきた私はなんなんだって！」

「悔しいのは……僕も同じさ！」

かわしながら後退しつつ、パーフェクトストライクは距離を取り大型ビーム砲、アグニを発射した。

舌打ちをしながらかわすアイ、

「またフジミヤさんを救えなかった！かつての仲間を！あの人は単純に仲間というだけじゃなかった！僕にとっては特別な人だった！」

アイも負けじと右肩のビームキャノン撃つ。ぶつかり合う大型ビームは強烈な光を放ち相殺される。

光がやむと二機は再び突撃、鏖迫り合いの体勢になる。

「彼女は変わってしまったよ！それでもいつか戻ると信じてきた！でもまたダメだった！」

「もう！諦めるという事ですか!?!」

「違うよ！」

ヒロの眼がクワツと見開かれると、さらに対艦刀の勢いが増した。それはPユニコーンを、ビームサーベルを押しつけた。

尻もちをつくPユニコーン

「僕は諦めない！いつか彼女が戻ってきてくれると信じている！何度駄目になっても諦めないぞ！」

所変わって再びこちらはゼデルとマスミの方だ。機体の完成度か、ビルダーの腕か、徐々にゼデルの方が押されるようになってしまった。

お互いの機体は相対するもブルデュエルは膝をついていた。

「やつぱり、つええんだよな……！」

「必死でやってるだけだよ……！」

「それだけの腕があるなら自分だけでも十分ってか？」

「ゼデル……！」

「ちよつとゼデル！そんな言い方ないでしょ!？」

観戦してるヨウコが怒りの声をあげる。黙っていたマスミに対して不満があるのは彼女も同じだがゼデルの言い方は納得できなかった。

「黙つてろヨウコ！俺は自分が納得できなきや気がすまねえ!!」

ブルデュエルは再びビームサーベルを抜きデュラハンに突っ込む、デュラハンもまた迎え撃つかのようにライフルからビームトマホークを発生し飛び立つ。

二体が斬撃でぶつかり合いながらゼデルが叫ぶ。

「何故だマスミ！何故俺たちに自分がレムに違法データ渡したのを黙っていた！」

俺たちを信じてなかったのかよ！なんで自分一人で抱え込むような事したんだ！」

「信じては…いたさー！」

バトルで気分が高揚していたのだろうか。それともゼデルの叫びにつられてだろうか。答えるマスミの声も感情が籠ってきた。

「なら!!信用してたならなんで言わなかったんだああ!!!」

ブルデュエルは右手でデュラハンのメガ・ライフルを殴りつけた。その瞬間。デュラハンのライフルが爆発した。

マスミはライフルが破壊されるのを見て驚愕した。見るとブルデュエルの右拳も破壊されていた。

ブルデュエルのクナイ型投擲武器、ステイレット投擲噴進対装甲貫入弾を持ったまま直に殴ったのだ

「うおおおお!!」

ゼデルは叫びながらデュラハンを左手で、拳のない右手で殴りつける。バトルでの高揚故か、友への怒りなのか、

はたまた両方かは定かではない。マスミはデュラハンの両腕でブルデュエルのパンチを防ぐ。

「ごんだけ言われて！まだ何も言わないのかよ！自分の気持ち一つ言ってくれないのかよおお!!」

「そんな事ない！ボクは…ボクは!!」

その瞬間、ガード一辺倒だったバンシイがブルデュエルに思いつきリストレートをかました。後方へ吹っ飛ぶブルデュエル。

「なっ！」

「自分の皆への信用を失われるのが怖かった！嫌だったんだああっ!!」

マスマミの言葉は放った拳と同様の勢いのある本音だった。

「…レムに自信を取り戻してやりたかった…でも普通のやり方じゃダメだった…だからたまたま見つけたネットの広告からダメ元で違法ビルダーのデータを注文した。」

せめて勝つ感覚位は思い出させてあげようって…」

「俺たちが初めてアイちゃんに会った日か！」

ためらいつつそうだと答えるマスマミ、

「その後にレムが違法ビルダーとして暴れてるのを皆で止めようとして、その時は言おうとしたよ。でもレムはボクが与えたと言わなかった…」

その時『もしかしたらバレない』かもしれないと思った！」

ゼデルはブルデュエルを起こすとデュラハンの顔面にパンチをいれる。吹き飛ぶデュラハン

「だからその心に従ったってか！」

「元々レムに自信をつけさせようと、そんな理由はあってもチートを使ってしまったのは事実だ。それは許せなかったし、

レムが暴走を始めてしまった事が悲しかったし、辛かった。でも…心の中でバレない事を祈ってる自分がいた！」

「本当なのかよ！納得いかねえ!!」

ゼデルの言葉はなんとなく発した物だ。それだけじゃないと彼は思ったからだ。

ブルデュエルの拳がデュラハンの頬に叩き込まれる。だが吹っ飛ばずデュラハンはその場から動かない。

顔面でパンチを受けたままギギギ…とブルデュエルに向き直るデュラハン。

「いや、それだって違う…。そんな感情は関係ない…。ただ単純に、今の環境が変わるのが、ボクが皆に嫌われるのを恐れただけなんだろうな…。」

「…。」

「ボクはさ…、昔つから皆が中二病つて言う様な設定を考えるのが大好きで、そういう振る舞いもしたいからしていたし、周りにも積極的に話していた。」

でも当然それで馬鹿にされてた時期あったしそれで傷ついた事だってある。

気にしない様に心がけていたけど、正直しんどい時もあったよ。大
学来るまでは」

「…俺達か？」

「皆と出会えてガンプサークルを初めて、存分に話す事が出来た。
楽しかったよ。」

でも今回のことがバレたりして、皆が離れていったら今のサークル
『エデン』は今の形が無くなる。

そう考えたら怖くて言えなかった…それでこのまま…。」

直後ブルデュエルがまたデュラハンを殴る。そのバトルはまるで
喧嘩の様に見えた。

「アホか!!最初つから告白してりやいいだろうが!!変にズルズルひき
ずりやがって!!」

「…好きだからだ」

「あ?」

「レムもいたワイワイやるチームが好きだからだ!ボクだけでどうに
か出来るならやろうと思った!レムを助けたって気持ちも本当だ
!」

でも…どれか欠けたらエデンはエデンじゃなくなってしまいかも
知れない!そう思うとなおさら怖くて言えなかった!

いらぬ迷惑と責任は種まいたボクだけで十分なんだ!!」

「…この…!どアホがああっ!!」

ひとときわ大きくブルデュエルがバンシイの顔面を殴りつける、吹き

飛んだデュラハンの顔面に亀裂が入った。

「うわっ！」

「そんなのが責任の取り方になるかよ!! 迷惑だっぺんならとことんかけさせるよ! ベストな答えが出るまで迷惑かけりやいいだろ?! だって俺たちはチームだろうが！」

「！」

「辛い時も苦しい時も一緒にやってきたチームだろうが! 背負い込む物も共有して初めてチームだろうが！」

「ゼ…ゼデル…:…どうしてそうまでしてボクを気に掛ける! 幻滅したんじゃないのか!？」

いくら同じチームとはいえマスマは自分がチームの皆に悪いことをしてしまったという感覚はあった。

気にかけてくれる事に嬉しい感覚はあったが、故に納得しきれなかった。嫌われたんじゃないかという

「決まっぺんだろ…:…」

ゼデル達がいかけの少し前、アイ達のバトルも佳境に入っていた。右手のビームガンでストライクを狙い撃つユニコーン、ビームはストライクの対艦刀に当たり爆発する。

「チツ! だがこつちの得物はまだまだあるぞ!!」

ヒロが叫ぶとパーフェクトストライクはアグニを発射、アイはアグニのビームをかわすが、そのビームが後方で爆発。

アーモリーワンの外壁に大穴を開けたのだ。周囲の物体は宇宙の真空に吸い込まれる。

実際なら大惨事だが、仮想空間であるガンプラバトルで住民がいない。無人の空間だ。アイもヒロも当然理解していた。

「プラントに穴が!？」

「まだまだ終わらないぞ！」

左腕からアンカー・パンツァーアイゼンを発射、アンカーはユニコーンの右手のビームガンを挟み込む。

「!？」

「諦めない！何故なら僕はレムの事が好きだからだ！」
「え!？」

突然の告白にドキツとするアイ、その隙を逃さずヒロはパーフェクトストライクのビームブーメラン、

マイダスメツサーを投げつけた。マイダスメツサーはユニコーンのビームキャノンに当たり爆発する。

「こー告白が突然すぎますー!」

「本心だからいいんだ！僕は心で感じた事を信じる！だからこの意志は彼女に伝わるまで折れない！」

ヒロは叫ぶとアンカーを巻き取る。ビキビキと音を立ててパンツアーアイゼンはユニコーンのビームガンをシールドごとはぎ取った。一度に二つの武器を失うユニコーン。

ああも言われると聞いてるこっちが恥ずかしくなる。アイは顔を赤らめながらもヒロとの気迫の差を感じていた。

「そんな自信、私になんて!」

「自信なんてのは自分が思い込めばいいだけの話だろう!？」

ヒロはパーフェクトストライクのビームサーベルを抜き二刀流で斬りかかる。向うのテンションに比べこちらのテンションは低い。アイはそれを凌ぐだけで精一杯だ。

「今の君は覇気がない！弱気すぎる！僕が最初にあつた時の君の方が強かった！それは違法ビルダーなんかよりよほど解りやすい意志があつたからだ！」

「え?!」

その時、ヒロではない人間が大きく叫んだ。

「そんなの！皆レムやお前の事が好きだからに決まってるだろうが!!」

「!？」

ゼデルだった。言った対象もアイではなくマスマミにだ。

「嫌いな奴に心配したり気にかけてたりするかよ！レムを追いかけたのだって同じチームだからじゃねえ！」

好きな奴だからだ!!そうじゃなきゃ背負い込むもん共有したいな

んていいやしねえ!!」

「ゼデル…」

聞いていたアイはゼデルが自分に言った言葉ではないと直後に理解した。でも自分の中では引つかかっていた。

「そんな単純な理由で?」

「それでいいんだよ」

「ヒロさん?」

ヒロは右手のビームサーベルを握ったままユニコーンを右手で指さす、向かい合うストライクの中でヒロは言った。

「僕たちは遊びでガン普拉バトルをやっている。確かに才能や技術、信念も必要なかもしれない。でもその前に一番必要な物がある。

ガン普拉が好きかどうか、楽しんでるかどうかって事だ」

「そうだ。ヤタテ」

今度はコンドウの言葉だ。

「確かに違法の奴らには大義名分があるかもしれない。でもその為に善良なビルダーを悲しませて、それに責任を感じない。

それでガン普拉バトルを変えるなんてちゃんちゃらおかしい!」

「コンドウさん…」

「自分には大義名分がないだって?それは違う。最初に僕と戦った時、ガン普拉を好きだって気持ち、楽しもうという気持ち。僕にちゃんと伝わっていたよ」

「…私にはあいつらみたいな信念、ないですよ。でも自分がガン普拉バトルで全力で楽しみたいって気持ちは

本当です。だからこそ、ああやってビルダーの、ガン普拉バトルの

定義を踏みじろうとしてるあいつらは許せない」

「それでいいんだよ、答えはもう…出てるじゃないか!」

二刀流のビームサーベルを構え。ヒロがストライクで斬りかかる。

「そうか…そうですよね!」

アイはユニコーンの両手を展開、ビームトンファーで迎え撃った。ストライクの二刀流を受け止めるアイ、

起こるスパーク、

「別に難しく考える必要なんてなかったんだ！だって今まで何があってもこの気持ち、根っこにあつたんだから！私、ガンプラバトルが好きです！」

だから私は思いっきり楽しむ！全力で遊ぶ形で！『好き』って気持ちで表現する！

それがあいつらに対抗する気持ちです！だってそれは！ハル君が教えてくれたやり方なんですから！」

ビームトンファアはストライクを弾き飛ばす。ストライクは開けた穴に吸い込まれそうになるが

どうにかバランスを保ち、ユニコーンに突っ込んだ。お互いが剣を構え突っ込む。

『うおおおっつ!!』

すれ違い、背合せになる二機、直後、ストライクが膝をつく。

「これだよ、君のその気迫が見たかった…」

ヒロがそう言った直後、ストライクが爆散した。

同じ頃デュラハンとブルデュエルの戦いも決着がつこうとしていた。

「ヒロとアイちゃんの言う通りだな…。ボクも変に身構える必要なんてなかったんだ。チームが好きなのは、ボクだって同じだ！」

「そういうこつた！うだうだ言ってる暇あつたら動けつてな！」

「ああ！古人曰く！あ、いやエクストリームガンダムの中の人曰く『人生はプラモデルと一緒に。まずは動け！』だ！」

デュラハンがビームトンファアを展開、ブルデュエルもビームサーベルを構え突撃、

「ゼデル!!」

ブルデュエルの斬撃が縦にまっすぐ降りてくる。マスマはデュラハンを横にそらしかわすと右腕のビームトンファアでブルデュエルの胴体を切り裂いた。

「悪かったよ。黙っていて…」

「メンツ守りたくて俺たちに黙っていた事とか？」

「ゼデル！しつこい！」

観戦側からヨウコの声が響く。

「いいんだヨウコ。ボクにそういう邪な気持ちがあつたのは事実だ！」

「正直だな。変に取り繕うよりそつちの方がスッキリするぜ。それより言ってくれよ。あの決めゼリフ」

「ああ、眠れ、紅き光に包まれて……」

「やっぱお前はそれがいいぜ」

フツとゼデルが笑うとブルデュエルは爆発した。

「ゼデル……」

マスミはそのままアイのPユニコーンに向き直った。

「お互い、心のモヤは晴れたようですね」

「そういう事だよ。アイちゃん、安心すると不安もない。となればやる事は……」

「ええ！勝負！」

ユニコーンとバンシイ、二機が飛び立ちぶつかる。お互い心が晴れた所為だろうか、更に動きは鋭さを増していた。

「ここは狭い！外で決着をつけよう！アイちゃん！」

「望むところですよ！」

二機はヒロの空けたアーモリーワンの外壁から飛び出す。高速で動きながらお互いをビームトンファーでぶつけ合う。

「このデュラハン・デストロイモードはフルCGのOVA『イグルー重力戦線』で出てきた死神が宿った設定だ！」

君に勝てるかな！」

ぶつかり合うたびに二機のサイコフレームは激しく輝いていた。まるで今のビルダーの心情を表すかのよう、

「やるな！さつきより動きがよくなってきたぞ！」

「色々と吹っ切れましたからね！」

「それはボクも同じ事だ！」

「ヒロさん同様！これからもレムさんを追いかけるという事ですか

!？」

離れた状態でランサーダートを発射するマスミ、アイはかわすとビームガトリングでデュラハンを撃とうとする、が、

高速で動き回るデュラハンはあつと言う間に距離を詰め、ビームガトリングを切り落とす。

「当然だよー！」

すかさずアイは右腕のビームトンファアでバンシイを切り裂こうとする、が、コクピット狙いだったがすんでの所でかわされ、背部のマガノイクタチ左半分を切り落とした。

「チッ！おいしい！」

「マガノイクタチがつ?! なら君もあのリンネとかいうビルダーと因縁が続くと思うかい!？」

その体勢のままバンシイはツムノハタチをユニコーンの左肩追加アーマーのつけ根に突き刺した。切り裂かれたアーマーはそのまま爆散。

「クッ！解りませんね！でも彼女がまた来るといふのなら私の魂全部ぶつけるまでです!!」

「ボクもだよー！レムがまた屁理屈こねるようなら首輪つけてでも連れて帰る！」

そのまま追い打ちをかけようとコクピットに突き刺した。胸部装甲に突き刺さるビームトンファア、

「どうだー！」

一瞬勝つたと確信するマスミ、だが突き刺さっていたのは宇宙空間に漂う胸部アーマーだけだった。

「何?! アーマーだけだ?! っ上か!？」

真上にユニコーンがいると判断したマスミ、真上にはアーマーを全て脱いだユニコーンがいた。

「まだ間に合う!!」そう思い、すぐさまビームトンファアでユニコーンを突き刺そうとするマスミ、だがビームトンファアはユニコーンの前で止まる。

否、ユニコーンから溢れた緑の光が、オーラの様なフィールドで攻撃を防いだのだ。

「サイコ・フィールド!?」

「私だって!」

「!?!」

ユニコーンはそのまま両手のビームトンファーをバンシイ目掛けて振り下ろす。

「しまっ!!!」

「あの日から!」

一瞬、アイの脳裏に自分にとつての始まりの日がよぎった。イレイ・ハルと出会った日の事を…。

「あの日から続いた気持ち否定させやしない!!」

胴体を両断されるデュラハン、撃墜される瞬間、マスマは目の前のユニコーンが虹色の光を発するののように見えた。

「一角獣が…死神すらも突き殺したか…」

その光の正体、サイコ・フィールド、サイコフレイムの共鳴現象により発生する謎の力場、劇中の正体はわかってない。

またガンプラバトルでも再現される事があるというがこちらも事件は全く解明されてない。

一部ではガンプラ魂が極限に高まると発生すると噂があるが、都市伝説の域を出てない。だがマスマやコンドウを初め

信じているビルダーは多い。

「サイコ・フィールド…好きこそ物の上手なれ…か…」

次の瞬間、デュラハン・デストロイモードは爆発、アイの勝利でバトルは終わった。

…

バトルが終わった後、全員が憑き物が取れた様に晴れやかだった。

「しかし、結構脆い所あったんですね。マスマさん」

「そうだよアイちゃん、ボクは皆が思ってる程立派じゃないよ。皆いたからあの中二病に自信が持ってたってわけだよ」

「いやいや。しかし最後の最後でスッキリしたぜ。これでエデンも元通り…ってわけじゃねえがな」

「いつか元に戻せるよ。よく知ってるからね。フジミヤさんの事も、皆が諦めない心を持つてるって事も！」

「そうだね」

マスミがフツと笑顔を見せながら言った。アイ達は久しぶりにマスミの笑顔を見た。初めて会った時と同じ、にこやかな笑顔だった。

「そうね。今後も頑張っていくとして、おいとましましょうか」

「そうだなヨウコ。んじゃマスミ、これ頼むわ」

「へ？」

ゼデルは自分のカバンをマスミに手渡した。中はガンプラと大学で使う教材だ。意味が解らないと言った顔をするマスミ

「いや、なんやかんやで騙っていたのは事実だから帰りの荷物運びだけで許してやろうかなって思ってる」

「ゼ・ゼデル?!」

「あ、そういうことだったら僕も」

「ヒロ!?!」

ヒロがゼデルのカバンの上に自分のカバンも乗せる。マスミは素っ頓狂な声をあげた。

「ヨ！ヨウコ！せめて一緒に持って！ちよつとこれはいくらなんでも…」

マスミはヨウコに助けを求める。

「そうね…じゃあたしのもお願い」

ヨウコもまたカバンをマスミに持たせた。

「ヨ！ヨウコオオツツ!!」

「これ一回で許してやるってんだからいいだろ？いいじゃねえか、ボロ雑巾みたいに遣い倒しにしてやるか思ってるわけじゃねえんだからよ」

「いやいやそんな怖い考えあんまりだよ!!ボクら仲間なんだから!!」

「仲間なら酸いも甘いもあつてこそでしょ?」

仲間、ヨウコがそう言ったところでヒロがアイとマスマミに向き直る。

「仲間といえば、ところでマスマミ、そしてアイちゃん」

「ん?」

「なんですか?」

ヒロは二人を見据えると意を決したかのように話し出す。

「フジミヤさんは言っていた。『自分は違法ビルダーとしてガンブラ選手権に入る』って、僕は次の選手権、アイちゃんと同じチームに入ろうと思う」

『えっ!?!』

その場にいた全員が驚きの声を上げた。

「別に選手権は出るつもりですけど、まだチームなんて立派な物はまだないですよ?そもそもどうしてそんな事を?」

「レムやあの違法ビルダーはアイちゃんを狙っていた。僕達のチーム『エデン』にいればフジミヤさんに会うことは出来るかもしれないけれど」

フジミヤさんを手分けして、という意味でもこっちにいた方がいいと思うんだ

引き続きマスマミ達はフジミヤさんを追いかけるんだろう?だから僕はアイちゃんの側で追いかけたい」

「挟み撃ちにするって事か」

「うーん」

マスマミは一瞬思索する。がすぐに答えが出た様だ。

「ちよつと思うところはあるけれど、そういう事ならいいよ」

「勝手いってすまない。マスマミ」

「いいさ、このままイタチごっこやってるわけにもいかない。でもその気持ちがあるって事は

いつまでも君はエデンのメンバーでもあるという事を忘れないでくれ」

「解ったよマスミ…」

「後カバン持って」

「それはダメだよマスミ…」

「なんでだ」

そしてエデンのメンバーとタカコとムツミと解れたアイはウルフのメンバーと帰路についていた。これは夜道を歩くにあたりコンドウ達にボディガードしてもらおうのも兼ねていた。

「凄まじい一日だったね」

「そうね。でもま、ヒロさん達のギスギスが解消されたのが救いだっ
たかもね」

「そうだね、ヒロさんも私のチームに入ってくれてるって言うし、違法ビルダーの心配もあるけど選手権への気合も入ってきたよ」

「チーム結成もしてないけどね。でも当然アタシはいれてくれるん
でしょ？」

「そりやあもう、三人は必要だからナナちゃんとヒロさん入れれば規
定数に達するよ」

アイ達の会話を聞きながらコンドウはアイとナナを考え込むよう
に見つめていた。そんなコンドウに小声でツチャが話しかける。

「フクオウジ・マスミすら倒した。ヤタテ、恐ろしい女の子だ」

「それより、いいの？コンドウさん、アイちゃんにあの事話さな
くて」

「いいさ。あんまり彼女たちに押し付けるのはよくない…」

「だいたいコンドウさんに時間がない事も知らないんだろ？」

「まあそれは後々話すさ…」

そういうとコンドウは違法ビルダーの事を思い出していた。

「違法ビルダーか…でもあの二人の機体、あの禍々しい雰囲気はど
こかで見たような…まさかな」

第33話「模型戦士ガンプラビルダーズI・B」(バイアラン・スパイダー登場)

戦艦の残骸や小惑星がまばらに浮かぶ宙域、コンペイトウ、核攻撃の跡が生々しく残る宙域で二機のガンプラが激突していた。

一機はアイのパーフェクトユニコーン、そしてもう一機はマスラオの改造機、ミブウルフだ。手には実体剣が二刀流で握られていた。

「トランザム!!」

ミブウルフに乗ったコンドウの声が響く、同時にマルーンで塗装されたミブウルフのボディが真っ赤に輝く。

トランザムによるブーストで一気にパーフェクトユニコーンに斬りかかった。

アイも負けじとビームマグナムを離し両手に二本のビームサーベルを持ち、迎え撃つ。

「はあぁっ!!」

「くうっ!!」

ミブウルフは高速でユニコーンの周りを飛び、接近する度に刀を撃ちつける、それを必死に受け止めるユニコーン。

一見ミブウルフが押ししてる様に見えるがユニコーンはきちんと対処できていた。

「やるな!もう素でトランザムの反応速度についてこれるとは!!」

「サイコフレイムの反応速度!舐めないでくださいよ!」

「俺にはむしろお前のレベルだと思いがなっ!!」

刀を捨てるミブウルフ。直後腰のバスターソードを取りだしユニコーンに勢いよく振り下ろした。

「!?クウツ!」

ユニコーンに乗ったアイは両手のビームサーベルを交差させ受け止めた。

「止めたか!だが前の時は四本だが今回は二本!こんな物では止まらんぞ!」

直後、バスターソードのブースターが点火、パワーの増したバスターソードがユニコーンを押し出そうとする。

「くっ…こんのっ!!」

パワーに耐えるユニコーンの両腕、及びアイのGポッドが振動で揺れる。アイは対抗すべく背部のブースターを最大出力で吹かす。

大推力によりユニコーンの増したパワーはバスターソードを押し返す。

「でええいつ!!」

力いっぱい両手を広げバスターソードをミブウルフごと弾いた。

「ほうーまた改良を加えたか!!パワーが増してるぞー!」

緑に輝くユニコーンと赤く輝くミブウルフ、お互いが勝敗をつけようと突撃する。

「はあぁっつ!!」

ミブウルフは剣を前に突出し勢いよく突撃。アイは両腕のビームトンファアを構え突っ込む。そのまま二機はすれ違うと同時にお互いの獲物をぶつけ合う。

そして背合せになる二機

「どっちが勝った?!」

ギャラリーのソウイチがコンドウが勝ってほしいと祈りつつ声を上げる。

ほぼ重なった二機はここからではどっちが勝ったか見えない。

「コンドウさん…」

ツチャがモニターを見つめ呟いた。

「…やるな!!」

コンドウは満足したかのような声を上げるとミブウルフはバスターソードを握っていた両手首、そしてその後ろの胴体部が真っ二つになる。

コンドウの方は胴体を切り裂かれていたのだ。そしてそのままミブウルフは爆散、このバトルはアイの勝利で幕を閉じた。

「いやはや、半年前からは想像できんな」

ヘルメットを外し、顔の汗を拭きながらコンドウは言った。

「そんな、サイコフレームの力でトランザムにどうにかついてこれただけですよ。パーフェクトユニコーンはコンドウさんに手伝わってもらったんですし」

アイもまたヘルメットを外し両手に持ったタオルで汗を拭う。

「使いこなしてるって事だろう?」

「そうだよアイ、前まで苦戦していたオツサンを一人で倒しちゃうんだから。」

「こうして二人のタイマンを見るのは初めてだけどやっぱりレベルが高いよ!」

ギヤラリーのナナに続き、ヒロが興奮した様に言う。他にまわりにいるのはツチャとソウイチだ。

この日、突如コンドウが対戦して欲しいとアイに言って来たのだ。先日アイがコンドウに勝って以降、アイは負け無しだ。

アイの実力は操縦、ガンプラ製作、共に飛躍的に技術が上がっていた。

「色々なビルダーから挑戦を受けて、それをステップにするとはねえ、大したもんだよホント」

ツチャも感心したように言う。

「…そうツスね」

反面ソウイチは面白くなさそうに答えた。リーダーのコンドウが負けたことが悔しいんだろうか。

「とにかくこれで、安心してつてわけでもないが…胸のつかえが取れた。これでこの街を離れられるよ」

穏やかな表情で言うコンドウ、最後の「この街を離れる」という言葉にアイもナナも食いついた。

「え?…どういう事ですか?」

「あくまだ言ってなかったな。実は俺…、仕事の都合でこの街を離れなければいけなくなったんだ」

『え、えええ!!』

聞いてない！と驚くアイとナナ

「ちよ！オツサン！アタシ聞いてない!!」

「いや、まあ言ってるないし…。つい最近急遽上司に言われた事なんだよ。だから引越す前にヤタテと思う存分にバトルをしておきたかったわけさ」

「じゃあツチャさんが次のリーダーですか？」

「らしいね、あんま責任ある立場は御免なんだけど」

「ちよ！ちよつと待ってよ?!じゃあ選手権はどうすんのよ！」

ナナの脳裏に不安がよぎる。選手権では原則三体チームになる為、最低ビルダーが三人必要になるからだ。

「それなら心配いらさないさ二人とも、まだ時間はあるからもう一人位はどうにでもなるよ」

ツチャが心配いらないとばかりに言う。

「何か力になれる事ないですかね？」

「あ…だったらヤタテさん！俺たちのチームに入って下さい！」

突然黙っていたソウイチが叫んだ。

「え？」

ガシツとソウイチがアイの肩を掴む。いつになく大胆な行動を取るソウイチに戸惑うアイ、アイの反応も気にせずソウイチはまくし立てる。

「ヤタテさんだったらコンドウさんが抜けた穴もカバー出来るツス！」

「アンタだって俺たちの実力は知ってるでしょう?!きつと役に…」

「ソウイチ!!」

「あ…」

コンドウが止めようと叫ぶ。ソウイチはハツとしてアイの肩から手を離れた。

「すまないな。気持ちだけでも嬉しいよ。ありがとう」

「オツサン、いつ頃この街出るの？」

「ああ、来週の日曜日だ。11時の電車に乗るから見送りに来てほしいな」

「そっか、…なんか寂しくなるね…」

「残念です。僕もアイちゃんのチームにも入ったからコンドウさんの戦い方を学びたかったのに…」

「そんな大層な物じゃないよハガネ君。皆俺に決して見劣りするもんじゃないさ」

「そんな…」

「見送りには…絶対行きますね…」

アイ、ナナ、ヒロの三人は突然の事に驚きながらも近いコンドウとの別れを受け入れた。

そしてその帰り、帰路についた三人は横一列に並びながら商店街を歩いていった。

いつものアイとナナの二人に加え、駅まではヒロも同じ道なので一緒だ。

「しかしびつくりしたよね。コンドウさんがこの街離れるなんて…」

「そうね、同じチームでもないのにいつも一緒にいるのが当たり前に感じてたから…オツサンいなくなるって思ってもまだピンと来ないわ」

「でも僕達はいいとしてあの二人はもっと辛い思いなのかもね…」

「そう…ですね」

ヒロはソウイチがアイに掴みかかった時の事を思い出す。一緒にいる期間の浅いヒロもソウイチがあんな行動を起こす人間じゃないのは承知している。

そのソウイチがあんな行動を取るといふ事はそれだけショックが大きいんだろうと考えた。アイとナナも同様の事を考えていた。

「アイさ、アサダに掴まれた時、オツサンが止めなかったらどう答えるつもりだったの？」

「…わかんない。あんな風に言ってくるとは思わなかったし、でもナナちゃん達とチーム組んだ以上簡単についていけないよ」

「チーム組む前だったらまた違ってたかもね」とナナ

「どうなるんだろうか、ウルフは…」

そして一週間後、コンドウの言っていた日曜日がやってきた。

アイとナナはお互いに合流、商店街に向かいそこを通り、駅へと向かう。梅雨明けの気温は容赦なく二人を照りつける。

「うー暑…まだ十時だったのになんなのよ今年の気温…」

「猛暑とか前にテレビでやってた気がするけど…想像もつかないよ」

「アテになんないわよそんな情報。去年だっとうん十年だか百年に一度の暑さとか言っただけじゃなかったっけ？つかここんどこ毎年こんなもんでしょ？」

大体大昔なんて確認しようもないじゃん」

なんか考えるのも面倒になってきた…

と二人が汗を拭いながら足を駅へと向かわせる。その時だった。アイのカバンから音楽が鳴り響いた。

「あれ？アイ、スマホなってるけど」

「？こんな時に誰だろう」

アイはディスプレイの相手を見る。相手はソウイチだ。アイはウルフのメンバーのアドレスは全員スマホに登録していた。

「ソウイチ君だ。はいもしもし？」

『ヤタテさんですか？俺です』

アイが出るとソウイチが何か決意したように話してきた。

「ソウイチ君？どうしたの？」

『コンドウさんを見送る前にどうしても相談したい事があるんす。至急ガリア大陸に来てください』

「今から？でも時間…」

『お願いします。待ってますから』

そういうとソウイチは一方的に電話を切った。その態度をアイは不審に思った。

「切れちゃった、なんだろう。ソウイチ君いつもと様子が違うようなの…」

「アサダの奴なんだって？」

「ガリア大陸に今すぐ来てだつて」

そして二人はガリア大陸にやってきた。商店街が通り道になって
いる為余計な時間はかからない。

「ふう、クーラーが気持ちいいわね」

「のんびりしてる暇ないよナナちゃん。ソウイチ君は…」

「俺ならここにいます」

ソウイチが目の前に出てきた。それもパイロットスーツを身につけて。いつにも増して神妙な表情だ。

「ソウイチ君？なんでパイロットスーツを？」

「待つてました。ひとつ、どうしても頼みたい事があるんす」

そう言うソウイチはアイを指さす。

「今ここでガン普拉バトルで俺と戦ってください！」

「え?!」

「ちよつと！何考えてんのよアサダ！今アタシ達もアンタもオツサン
見送りにいかなきゃいけない状況でしょ!」

「解った上でいってるんす！」

「大体なんで今なのよ！見送った後ならいくらでもバトル出来るじゃん！」

「今じやなきやダメなんす！応じてくれないなら俺は見送りにいきま
せん!!」

「だつたらせめてコンドウさんに連絡を…」

「駄目だ！」

ソウイチの目は本気だった。何かを成し遂げようとする男の顔だ。

「いいよ。受けてあげる」

「アイ？」

「長い付き合いのソウイチ君がいなきやコンドウさん寂しがるよ。早
く終わらせて行こう」

「ありがとうございます…。全力で来てください」

恭しく、しかし真剣な顔で頭を下げるソウイチ

そして更衣室でパイロットスーツに着替えるアイ、着替え終わり個室から出てきたアイをナナがジト目で見ている。

アイがバトルに応じたのが納得できない様だ。

「なんでバトル受けたのよ」

「解ってるよ。たださ、いつもとソウイチ君違ってた。なんか初めて会った時と同じになってた感じがして…」

「?まあ確かにあの刺々しい感じはしてたけど…」

ナナはソウイチと最初あった時を思い出す。今でこそ心を開いてくれたのか、気兼ねなく話が出来る仲だが

最初は強い警戒心を発していた。今日のソウイチはその時と同じ雰囲気だった。

「なんか無理に連れ出すよりバトルで勝手納得させた方がいいって思ってたんだよ」

「そういう事、でもやるんだったらサクツとお願いね」

なし崩しでバトルが始まった。今回のバトルはトリントン基地(夜間)、

滑走路や倉庫を含めれば結構な広さだが、周りのオーストラリアの荒野から見ればポツンとたたずむ程度の大きさかもしれない。

ジオン残党の攻撃を受けたガンダム0083の始まりの場所だ。

「歩いて出撃ってのは慣れないな…」

周囲を警戒しながらアイのパーフェクトユニコーンがライトのついた格納庫から出てくる。

今回はカタパルトからの出撃はない。元ネタの本編ではこの出撃タイムニングでやられた登場人物がいる為に油断できない。

攻撃を受けた基地というだけあって辺り一面は火の海、司令部のある管制塔は長距離攻撃攻撃により爆発、と周りは廃墟一步手前な状況だった。

「きましたね?」

「ソウイチ君!?!」

ソウイチの声がすると同時にビームが飛んできた。アイはすぐさまバーニアを吹かし横に回避。ビームは格納庫に当たり爆発する。

アイはすぐ横の爆発を見ないまま前方を確認、月をバックに目立つ赤い機体が見える。

「そこか！」

アイはユニコーンの背部のビームキャノンを向けすぐさま撃つ。

「おつと!!」

ビームをかわす赤い機体、大型の肩部に細長い腕、そして夜の闇によく映える赤いカラーリング。

なにより聞こえたソウイチの声、あの機体だとアイは確信する。

「バイアランカスタム！それがあなたの機体?!」

バイアランカスタム、登場作品は『機動戦士ガンダムUC』Zガンダムで登場した自力飛行の出来る試作機、バイアランを改良した機体で

異様に伸びた両腕部のクローが特徴的だ。自力飛行が出来るだけあってかなり背中のバーニア類は大きい、

ちなみにカスタムの前は目はモノアイだったがカスタム後ではゴーグル目である。

「そうッス！俺の新作！この『バイアラン・スパイダー』であんたに勝ってみせる!!」

両肩には本来バーニアがついていたが外され、代わりにシグーデーパーアームズのビームキャノン、更にその先にはGNソード2が装着されていた。

攻撃力を出来る限り上げる為だろう。すぐさまソウイチはバイアランの両肩、ビームキャノンをユニコーン目掛けて撃つ。

「チッー！」

アイはすかさず前のめりの体勢でバーニアを吹かず。ユニコーン

のすぐ後ろをビームが通過した。そのまま右手のビームマグナムをバイアランへ向け放とうとする。

「来るか！」

だがソウイチは来るのが解ってたらしい。ソウイチはバイアランを真っ直ぐ突っ込ませ、いきなりライダーキックの体勢をとる。

「格闘戦!？」

「甘いぜ！」

アイが不審に思った直後、バイアランの足の裏から大型のビームサーベルが発生。バイアランの足の裏にアストレイのビームサーベルを仕込んであったのだ。

「何!？」

目の前に迫るビームの刃、驚きつつもとつさに横に回避するアイ、自分のいた場所をバイアランが突っ込む。

ユニコーンは丁度バイアランの側面にいる。今ならやれるとアイはユニコーン左肩アーマーのビームトンファアを発生、バイアランに斬りかかる。

「チツ！」

ソウイチは舌打ちをすると拳のない右腕からビームサーベルを発生させる。

アイはすかさず対応、ユニコーンのビームトンファアとビームがぶつかり合いスパークが起きる。

バイアランスパイダーはそのままの体勢で左腕をユニコーンに向ける。拳がない代わりに手の先についたメガ粒子砲がユニコーンに乗ったアイの目に映った。

—撃たれる!—

そうアイは判断すると右手に持ったビームマグナムの柄でバイアランの左腕を上を払いのける。左腕は払われた直後にメガ粒子砲が放たれた。

「読まれてたか！」

今度はアイがバイアランを撃ち抜こうとビームマグナムを向ける。

ソウイチはすかさずバイアランの右手の横に取り付けられたクロー
を展開、

ガキヤツ！と音を立ててビームマグナムをクローが掴む。

「しまった!!」

グシャツとビームマグナムを潰すクロー、アイはすかさずユニコー
ンをバックステップで下がらせる。

ソウイチが以前より強くなってる。アイはそう感じた。実力の向
上なのだろうがそれだけではない何かを感じていた。

「下がらせてたまるか!!」

バイアランが両肩のビームを撃ちながら再び突っ込んでくる。
滑走路の上をアイは後退し、かわしながらミサイルを撃つ。

かまわず突っ込んでくるソウイチ、だが真つ直ぐだ。アイは背部の
ビームキャノンで狙い撃つ。

「甘いよっ!」

ユニコーンから放たれた巨大なビームがバイアラン目掛けて突っ
込む。

「クソツ!」

ソウイチが気付いた直後、バイアランの場所をビームが襲い爆発。
爆発が納まると大きなその場所にはクレーターがあいていた。

「やったの?…っ!」

違和感を感じ、突如上を向くアイ、上空からバイアランが両肩のG
Nソードと両腕のビームサーベル。そして足からもビームサーベル
が発生、

計六本の剣を持ち襲ってきた。その姿は正に蜘蛛と言った姿だっ
た。

「あれ位で終わるかよ!!」

「数を出してきて!ならば!」

アイはユニコーンの両腕のシールドを捨てる。持ったままでは両
手のビームトンファアが干渉して使えないからだ。

アーマーのビームサーベルだけでは細かいサーベルの動きが出来
ない。相手が六本ももつてるとなると尚更だ。

両肩のビームサーベルと両腕のビームトンファー、ユニコーンも四本のビームサーベルでバイアランを迎え撃った。

お互いの剣が全てぶつかり合うが鏑迫り合いにはならない。ソウイチが連続で斬りかかり、アイはそれを捌きながらぶつかっては離れの連続だった。

相手、バイアランの方がサーベルの数が多い為、密着を続けるのは危険だとアイは判断した為だ。

―何！今日のソウイチ君はいつもと違う!?―

ソウイチの勢いは今までの比じゃない。敗北を恐れていない。しかしヤケになつてゐるわけでもない勢いだった。

「なんか鬼気迫るわね、アイツ…」

観戦していたナナもソウイチの気迫を感じていた。と、ちょうどその時だった。

「なんだ？どうして今のタイミングであの二人が戦つてるんだ？」

「こんな時にガンプラバトル？」

聞き慣れた声がふたつした。

「あ、ツチャさんとハガネさん」

呼んだわけではないがアイが遅れるかもしれないと、それぞれに連絡はしていた。場所は教えていたので気になったツチャとヒロがこちらに来たわけだ。

「どういう事なんだ。ハジメさん」

「アサダがどうしてもバトルしてほしいって聞かなかつたのよ」

「ソウイチ君が？なんだってまた…」

「それは解らないけど、少なくともアイツ本気よ」

ナナ達が何故…と疑問に思う間もバトルは進んでいた。斬り合いは続き、一度お互いは離れ火の海の中で向かい合っていた。

「…何故俺がこんな時間に試合を申し込んだか知りたいスか？」

「え？」

ソウイチ問いかけた直後、再びバイアランが六本のサーベルを持ち突っ込んでくる。

「今から二年前の事ツス、この近辺に実力ある二人のガンプラビルダーがいた……！」

「コンドウさんとツチャさん?!」

六本のビームサーベルを、体を縦横に回す要領で斬りかかってくるバイアラン。

器用にビームトンファーでサーベルを捌きながらアイは答える。

「そう！あの二人は優れた腕を持っていた！そして徐々に実力あるビルダーとして知名度を上げていった！そんな時！あの二人に憧れるビルダーが現れた！」

「それがソウイチ君?!」

「そうッス！俺はあの二人の強さに憧れた！身近な分俺にとってはすごいガンプラマイスターより格好よく思えた！」

俺が仲間に入りたいと言ったらあの二人は快く承諾してくれたんだ！でも中にはそれが気に入らない人間だっている！」

——ツチャさんが前に言っていた話?!——

ソウイチの叫びに怒りが混じって聞こえた。

アイはソウイチがウルフに入ったばかりの頃、実力が分不相応だという理由でいじめを受けていたというツチャの話を思い出す。

「そうさ！実力が合っていない！アサダだけに底が浅いって！結局他人は結果でしか人を認めようとしらない！だから俺は楽しむ事を捨てて勝利にだけ集中した！」

それなのにアンタは！あんなに強いのにあんなに楽しそうで！コンドウさんでさえ勝てなかったマスマミさんにまで勝って！」

ビームサーベル越しにソウイチの感情が伝わってくる。羨望とも憎悪とも違う、それだけの激しさだった。

「クツ！私は！私は無我夢中でやってただけだよ！」

「それでもアンタはコンドウさんに認められた！」

——気に入らないことに勝利だけに固執した俺の考えまで変えて！

そう喉元で声を押し殺すソウイチ、直後、バイアランの左手のビームサーベルがユニコーンの右肩を貫く。そのままバツクパツクもビームサーベルが貫通し爆発が起こる。

「くっ！これ位でえ!!」

捌ききれなかったと心で呟くアイ。だがアイもこのままやられて
いるわけではない。

当たったと一瞬ソウイチは安心した。そこに隙が出来た。

おかえしとばかりに左腕のビームトンファーでバイアランの両足を切り落とす。

「あっ！」

「私に見とれ過ぎたね！」

「クッ！自意識過剰っス！」

足を失った事により後方に倒れそうになるバイアラン、だが尻もちをついた瞬間でなおもユニコーンを撃ってくる。

両肩のビームキャノンだ。

「失礼な！」

アイも後方に下がりつつ回避、ミサイルポッドでひき撃ちを行う。バイアランは足を失いながらも機体の推力により後方に下がりつつミサイルを迎撃。

そのまま二機は一旦離れ身構えながら再び睨みあう。

「アサダ…」

観戦していたナナ達にもソウイチの叫びは聞こえていた。

「そんなコンドウさんもこの街を離れなきゃいけない…。だから言いますよ。コンドウさんはね。『ウルフ』をアンタに任せられたんだ
！」

「え?!」

驚くアイ、その隙を逃さずソウイチのバイアランは高く飛び上がる
！

「ちよつと待て！ソウイチ！」

ソウイチのヘルメットにツチヤの声が響く、「なんで知ってるんだ」と言いたそうな叫びだった。

「ツチヤさんもいるんすか、俺にだけは言わなかったみたいけどわかるんすよーコンドウさん解りやすいからー!」

「言わなかった!?!」

「そうだよー俺だけにはコンドウさんは言わなかった!アンタを迎える事で!俺が不満を持つ事は見抜かれてた!」

バイアランの両肩、GNソードから数百メートルにも及ぶ長大なビームサーベルが発生する。ライザーソードだ。

本編ではダブルオーライザーが太陽炉のエネルギーを使っていたが、通常のエネルギーを使用するバイアランは著しくエネルギーを消耗する。

故に使えるのはこれ一回だけだ。

「確かに俺はアンタがウルフを受け継ぐのは嫌だよ!でも俺はアンタの実力は認めてるし!アンタ以上にウルフを任せられるのはいないと思ってる!!」

「!?!」

「どっちつかずは嫌だ!だから全力のアンタと戦って自分を納得させたかった!俺の実力が追いついてないなら自分を極限状態に追い込むしかなかったんだ!」

「!極限って...!だからこんなギリギリの時間に!?!」

「そうさ!実力が伴わないなら!?!」

長大なビームサーベルがアイのいる地点目掛けて振りかぶり、振り下ろされた。

「魂でカバーするだけだあっ!!!」

ユニコーンの真上、滑走路を巨大なビームが切り裂いた。その後方の基地施設もだ。その際に大爆発が起こり辺りは大爆発に包まれる。

「やったか!?!」

もうバイアランのエネルギーはわずかだ。自由落下を防ぐ為のエネルギーしかない。少しして爆発がやむとユニコーンの姿は確認出

来なかった。

跡形もなく倒したかかわして身を隠したか、ソウイチが思案した時

：

ソウイチのGポッドから警告が鳴った。慌てて横に回避、バイアランの横を大型のビームが襲った。真下から撃たれたものだ。

「!?まさか!」

ソウイチが真下を確認する、アイのユニコーンがビームキャノンを構えこちらを狙っていたのが見えた。

「く!駄目だったのか!ライザーソードでも!!」

「ソウイチ君!君の気持ちは解ったよ!でもね!私は受け継ぐなんて一言も言っていないよ!!」

アイは叫ぶとユニコーンがバイアラン目掛けて最大出力でビームを放った。

「くっ!うおおあ!!」

エネルギーがほとんどない為バイアランは満足に動く事も出来ない。バイアランスパイダーはほぼ無抵抗のままビームに飲み込まれ爆発。

「バカな事したっスね…」

かろうじてコクピット部が残り、火だるまで落下していくバイアラン、Gポッドの中ではソウイチの頬を悔し涙が一筋伝っていた。

「ソウイチ君…」

「その自覚はあったっス。それでも…せめてコンドウさんの気持ちをアンタに伝えたかった…。自分の気持ちの整理と一緒に片付けるにはコレしかなかったんスよ…」

ソウイチがそういうと、グシャツと音を立ててバイアランが滑走路に激突。

そしてバイアランは爆散。爆発の瞬間、少年の脳裏に今までの事が走馬灯の様に浮かんできた。

—あ!あの!コンドウ・ショウゴさんっスよね!—

—?そうだけど君は?—

—アサダ・ソウイチつていいいます！俺！コンドウさんと同じチームに入りたいつス！—

—チーム？いや、俺とコンドウさんはただ集まりでやってるだけでチームって大層なもんじゃ…—

—まあそう言うなサブ。アサダ・ソウイチ君…だったな。ならどうだい？親睦を深めるってわけで俺と一緒にガン普拉バトルしてみるか？—

—はい！—

—全然菌が立ちませんでした…—

—ははは、でもいい戦いだつたぞ—

—でもこんな実力じゃ俺コンドウさんと肩を並べて戦えないツス

—実力なんて関係ないさ俺たちは同じ釜の飯を食った仲間ならぬ同じガン普拉バトルで遊んだチームなんだからな—

—そうだ。まずは自分が楽しまないと—

—あ…ありがとうございます！—

—といつてもまだ表情硬いな、笑わないし—

—そっちは遠慮しときやす—

—ケツ！コンドウの腰巾着って言うからどんな実力者かと思えばこんな弱ええのかよ！—

—コンドウも物好きだねえ。こんな足手まといつれてるなんてよ

—…—

—おいお前ら！いい加減にしろ！これ以上言ったら承知しないぞ

—ソウイチ、あんな奴らのいう事なんか気にするな—

—…実力さえありゃいいんだろ…実力さえあればあいつ等を黙らせられる…勝てばいい！勝てば！—

―色々あったけど、楽しかったよ、私―
―…そりやどうも、…俺も楽しかったよ―
―?!アサダ!アンタ今楽しいって…―
―何大げさに驚いてるんスカハジメさん。…どうせ勝つんだっただら『楽しい』気持ちで勝つた方がいいって思えてきただけっスよ…。『友達』の考えをないがしろにするのは申し訳ないっスから…―
―なんて言って本当はアイちゃんに感化されてきたとか〜―
―な!何言ってるんスカフジさん!あくまでそういう考えもありだつて思っただけっスから!!―

「…チツ。よりによってなんで今こんな事思い出すんだ…」

ソウイチは一人Gポッドの中で呟いた。

「無茶苦茶だよ。こんな方法で戦おうなんて」

Gポッドから出てきたソウイチをアイが呆れながら言う。後ろにいるナナとツチャも同じ心境だった。

「悪かったっスよ。これしか思いつかなかったんスから…」

眼を閉じ頭を掻きながらソウイチは答えた。自分の行動に恥ずかしさを感じているのだろう。

「ソウイチ君、君が言ってた話だけ…」

アイは口を濁して…そして…。

そして山回駅の一番線ホーム、コンドウはもうすぐ来るであろう電車を待っていた。まだ見送りのメンバーはタカコとムツミの二人しかない

「…遅いな皆」

「今こっちにダッシュユで向かってるって連絡がありました…もうすぐです…」

「でも、間に合うの〜?」

タカコは呟きながら駅の時計を見る。時計の針はもう11時間際

だ。

と、その時だ。

「お〜い！・コンドウさ〜ん!!」

「!」

ツチヤの声がする。コンドウは声の方を見るとアイ、ナナ、ヒロ、ツチヤ、ソウイチの四人が走って来るのが見えた。

「ごめんなさい！遅くなっちゃって!」

「遅いよアイちゃん!」

「間に合ってよかった!」

息を切らせるアイに安堵しながらもコンドウは叫んだ。

「すいませんコンドウさん!俺がヤタテさんにウルフを継いで欲しいってワガママ言ってたんす!」

ソウイチが申し訳なさそうに、だが潔く前に出た。

「!?ソウイチ、お前!」

「知ってましたよ。でもヤタテさんにウルフを継いで欲しいってのは…たぶん俺の意志でもあったんす」

驚くコンドウにソウイチは説明する。

「それで、ソウイチ君と…うん、皆と話し合ってたんです。結果としてせつかくのお話なんですけれども…」

アイの態度が控えめだ。ダメかもしれないという予想がコンドウの脳裏によぎった。

「!駄目…か?」

「私、今までナナちゃんと一緒にやってきましたし、これからはヒロさんも加えてやっていこうと思っていました」

「だからさ…、皆で一緒にやって行こうって決めたってワケ」

アイの言葉にナナが続く。

「それって…」

「一緒のチームになろうって事だよ。コンドウさん」

ツチヤが続いた。

「正確には僕とナナちゃんもウルフに移る、って条件で移籍したんだけどね」

ヒロが付け足す。彼本人もこの案で納得しているようだ。

「お・お前ら…」

「一本取られたって顔してるなコンドウさん。こうなるとは思わなかったか?」

「あ・ああ」

こうなるとはコンドウ自身思ってたなかった。あくまでヤタテがウルフを引き継いでくれたらいいな程度にしか考えていなかったからだ。

「ちよつとオツサン、アタシら眼中にないわけ?」

「いや、そういうわけでないが…」

「あ、もしかして嫌ですか?コンドウさんナシで話進めちゃったし…」

「いや、とんでもない!凄く嬉しいよ!」

コンドウにとって過度な期待を抱いてはいけないと思ってたが故の驚きと嬉しさだった。そうこうしてる内に電車が来る。コンドウはこの電車に乗らなければならない。

「おつともう時間か、これで当分この街ともお別れだな…」

「コンドウさん…」

「そんな悲しそうな顔をしないでくれ。もう会えないってわけじゃあない。最後は笑顔で送ってくれないか。新生ウルフとして…」

それぞれ悲しそうな顔をしてる皆にコンドウは言った。

「いえ、チームの名前は変えるツスよ。コンドウさん」

「え!?!ソウイチ君?!」

アイが驚きの声を上げる。ソウイチの発言にその場にいた全員がどよめいた。

「ウルフは俺達三人の思い出のチームツス。別の人が入ったならそれは俺にとってウルフじゃない」

「おいソウイチ。そりゃ失礼な言い方だろ」

ソウイチの発言にツチャヤが釘を刺す。

「そうじゃないツス。これは新しい始まりみたいなもんだって俺思うんす。俺達全員の門出の合図って事でチームの名前を変えようと俺

は思ったんスよ」

「そんな事言ったって唐突でしょ？」

「いや、俺はいいと思うぞ」

「へ？オッサン?!」

渋るナナにコンドウは了承する。ソウイチが決して軽はずみに言ってるわけではないと解ってるのだろう。

「コンドウさんがそう言うなら俺も異論は無いよ」

「僕もだ」

「ちよつとちよつと、アンタ達簡単に賛同しすぎじゃない？」

「じゃあナナちゃんは反対？」

「え？ううん、古参のアンタ達が言うなら別にアタシも反対はしないわよ」

「それで、名前は…？」とムツミ

「もう考えてあるツスよ。俺がコンドウさんから始まりを引き継いだ。ヤタテさんはイレイ・ハルさんから始まりを引き継いだ。

ハジメさんもヤタテさんから、俺達は始まりを引き継いだ名前ツス。相続する始まり『インハーリット・ビギニング』略してチーム『I・

B』（アイビー）ツス」

「I・Bか…いい名前じゃないか」

「頭文字取るなんて随分シャレた名前つけたじゃない」

「アイって私の名前入ってる？なんか自分の名前が入っていると照れるね」

「あ、完全に偶然ツス」

「…そう」

とその時駅のベルが鳴った。電車の発車を意味する。

「もう行かなくちゃ…今までありがとう皆」

「コンドウさん、向うでもガンブラ作りますよね？」

「当然だ。それに、今回の選手権もまだ俺は諦めちゃいない。向うでもチームを組んで出場するつもりだ！」

電車内に乗り込んだコンドウが笑顔で答える。選手権でまた会おうと言わんばかりの笑顔だ。実際その通りの意味なのだろう。

その直後電車のドアが閉まり電車が走り出した。

「コンドウさん！俺達勝ちます！全国大会に行つて見せますから！コンドウさんも勝つて下さい！待ってますから！」

「コンドウさん、向こうでも達者でな！」

「オツサン！元気でね！」

「向こうでかわいい子みつけたら紹介しよ…いだだだ!!ムツミ間接技やめてええ！」

「コンドウさん…！アイちゃん達に比べたら薄い繋がりでしょうけど、ボク達も友達ですよ…！また！」

「さよならコンドウさん！さようなら！」

「今度会う時にはバトルの事教えてください！また！」

全員が別れの挨拶を言いながら電車を見送る。あつという間に電車は見えなくなった。

「…もう見えなくなっちゃったね。…なんか実感わかないよ…」

「そうね…、とりあえず帰ろっか」

「…先行つて欲しいっス」

ソウイチはアイ達に背を向けたまま、電車の走つて行つた方向をみつめていた。

「色々思う事があるんス」

「ソウイチ…解つた。先行つてる。行こう皆」

ツチャがアイ達を連れてその場から離れた。

—おいサブ！ソウイチ！俺達はチームを組んで長いわけだが、肝心のチーム名がまだない！そこでチーム名を考えてみたぞ—

—お、唐突だなコンドウさん。まあチーム名無いのに疑問があるのは俺もだけど—

—どんな名前なんですかい？—

—ああ！『新撰組』はどうだろう！俺達の名前もなんだか近藤、土方、沖田とお馴染みのメンツに似てるしな！—

—いや、似てるって…俺『ヒジカタ』じゃなくて『(土屋)ツチャ』だぞコンドウさん、『土』しか合っていない—

―俺なんて『沖』じゃなくて『浅田』っス、第一沖田みたいな才能も顔もないし…―

―そ・そうか。マッチしてると思ったんだがなあ。じゃあ何か二人も案ないか?―

―いや、いきなりそう言われても…―

―あの、ちよつといいスか?―

―はいソウイチ君―

―新撰組って言うのは京都じゃ『壬生の狼』って呼ばれてたらしいです。狼を取って『ウルフ』ってどうスかね…?―

―…コンドウさん、今まで有難うございました!!―

涙を腕で拭いながら、ソウイチはコンドウの乗った電車が去って行った方向に頭を下げた。

第二部 第三章 『県内予選』編

第34話 「サポーターとフリーガン（前編）」（ビルドスペリオル&ガンダムAGE―1サムライリツパー登場）

『ガン普拉バトル』というコンテンツがある。ガンダムシリーズのプラモデル、通称『ガンプラ』を使いコンピューターの仮想空間内で対戦するという内容だ。これの最低限の条件として、立体物のガンプラを使用しなければいけないという条件がある。

それは『ビルダー』と呼ばれる参加者全員が不変の内容だと信じて疑わなかった。……だが……

——この夏、ガン普拉バトルは変わりつつあった。ガン普拉バトルというホビーを破壊しかねない変化が——

「クソッ！何考えてるんだよアイツは！」

片田舎の町を再現したバトルフィールド、その中の山陰に白いガンプラが体勢を屈め、身を隠す。周囲は敵らしき機体が6機うろついていた。

隠れていた白いガンプラの名前は『スペリオルガンダム』、『ガンダムセンチネル』という模型雑誌の企画から身を起こし、公式にまで上り詰めた異色の作品、その主人公機だ。スラツとした手足に大型の肩が兵器さとヒロイックさを両立させている。

設定上では21mある機体は山も物陰同然だった。周囲は山々と鉄塔、水田にまばらな民家、これら全てが仮想空間内の産物である。

「背中のダメージは……？」

スペリオルに乗っていたパイロット……否、ビルダーは撃たれた箇所を確認する。隠れていた理由は急に後ろから撃たれたからだ。背中のバックパックが一部破損している。と、コクピットに攻撃の警告音が響く。気づかれたか?!と立ち上がるうとするスペリオルのビルダー、直後、真上からの砲撃が来る。

スペリオルは直撃は免れたものの砲撃の威力は高い。山を削る程

の爆発。

「ぐあつ！」

スペリオルも放物線を描き吹き飛ばされる。

「いたいた。いましたよお」

狩りでも楽しんでるかのようには言う敵機のビルダー。水田地帯に落ちたスペリオル、どうにか上半身を起こし背中中の無事だった方のビーム砲を向ける。しかしそれも再び背中を撃たれ完全に背中中は破壊される。

「なっ!!」

「ヒヤッハッハ！俺に勝てるでも思ってたのかあ?！」

少年の、しかし品の無い声が響く。言葉はスペリオルの後方から、さつき撃ってきた方向だった。スペリオルが向くと撃ってきた機体の正体がわかった。全身に三角形のデイトールが施された白と黒の機体『ビギニングガンダム』

ツインアイは外され一つ目、モノアイに換装されており、額のビーム状の角もない。量産型といった趣だ。別方向にいたビギニングはスペリオルの前方に移動、同じデザインの機体が三体、そして背中中の装備の違う僚機の6機が並ぶ。総勢9機の敵機だった。

「くっ！いきなりバトルに割り込んできて！何を考えてるんだ！」

スペリオルのビルダーが叫ぶ。

「スペリオルの元ネタ作品はなあ！女子供のいねえ硬派な作品に出てるんだぜ！ガキが乗るなんて侮辱なんだよ！」

「そうそう、生意気なんだよお前」

リーダーらしき少年が言うとり巻きの一人在同調した。

「なんでいつもこんな事をするんだ！オレ達はただ遊んでいただけなんだぞ！」

「決まってるんだろ？俺は違いの分かる男だ！分かってねえ奴に真実を教えてやるのが勤めだろうが！」

「いつもいちゃもんばっかり言ってる奴の言うことか！そんなんだから誰も学校で相手にしてくれないんだろ！その僚機だってオンライン

ンの付き合いと無人機の癖に！」

そう、彼らは1人につき2機ずつの無人機を随伴していた。武装扱いな為、機体にカウントされてないのだ。

「と！友達くらいリアルでおるわ！」

「ゆ！優秀な人間には優秀な友達以外いらねえんだ！」

「う！うるせえ！折角俺ありがたい説教をしてやってるつてのにい！」

三機のビギニングが慌てる。がすぐに落ち着き、無人機含め装備を一斉にこちらに向けた。

「ガンプラも使わないで何がガンプラバトルだ！違法ビルダー共め！」

「違法？違うね！俺たちは新世代ビルダーだ！作る手間なんざデータの塊である俺らには必要ねえ！ガンプラが好きなお前より！戦争ガンダムアニメが好きな俺達の方が高等なのは当然だ！」

勝ち誇った顔で暴言を吐くビギニングのビルダー

「くっ！純正品でもない癖に……」

と、その時だった『挑戦者が乱入しました！』というアナウンスが聞こえた。乱入者がこのフィールドに入ったのだ。何が起こったと警戒する両方のビルダー、乱入者はスペリオルの前に降り立つ。スペリオルの味方だ。

「あの機体は?!」

乱入者の背中しか見えないビルダーは何がなんだか分からなかった。

「なんだあ？AGE-1？一機だけで来るとは命知らずが！」

乱入者の機体は『ガンダムAGE-1（エイジワン）』、『ガンダムAGE』の序盤主人公機、終盤まで改良を繰り返し、100年という本編の話の流れに最後まで付き添った代表ともいべき機体だ。AGE-1の両手足には『戦国アストレイ』という鎧武者の様な機体のパーツが取り付けられていた。

「俺達を新世代ビルダーと知っての狼藉かよ！とつとと消えな！」

ビギニングの編隊はAGE―1に向けて全機一斉射撃を行う。するとAGE―1は両手に肩の日本刀を抜き取る。そして肩鎧も展開しアームへと変形、こちらにも刀が握られており全部で4本の刀をAGE―1は持っていた。そして刀で飛んできた砲撃を……弾いた。「はっ!？」

驚愕するビギニングのビルダー、弾かれた砲撃は明後日の方向に飛んでいき遠くで爆発、しかし砲撃はこれだけでは終わらない。ミサイルやビームが一齐にAGE―1に向かっていているのだ。AGE―1のビルダーは無言で迫りくる弾幕に刀を振るう。ビームが、ミサイルが、連続で切られ、弾かれ、ダメージを与えられない。

そのままAGE―1は射撃をさばきながら突撃する。「だから何?」とでもいわんばかりに無傷だった。

「……」

無言でAGE―1はアームの方の刀を交差させる様に振るい。巨大な衝撃波となる。それはビギニング達に迫った。

「っ!!」

ビルダー達はまた暴言を吐こうとしたが、衝撃波は巨大だ。しかも横一列に並んでるのがまずかった。両脇にいた無人機と僚機は巻き込まれ真っ二つになる。

「ムリゲー」だの「チートだ」だの叫びながら8機は一斉に爆発、ビギニング達は明らかにバトルに慣れてない動きだった。中央部にいたビギニングも胸、コクピットから下をバツサリ切られ、そのまま水田に落下、やられる寸前だった。

「な!なんなんだアイツは!旧世代の癖に!お!俺の方が優秀なのに!!っ!!」

またも暴言を吐こうとして目の前にAGE―1がこちらを見下ろしているのが見えた。

「お!俺に歯向かうのか!カビの生えた旧世代ビルダーが!!」

暴言を吐いているとAGE―1がビギニングの胸を踏みつける。

「ひっ!」

「悪口以外出す頭も無いの……?」

ボツツとAGE-1のビルダーが呟いた。何の感情も籠ってない冷たい声だった。

「だ！だずげ！べっ!!」

直後、周囲の水田は水と泥が真上に撥ね、泥水の雨がスコールの様に降る。中心部のビギニングはプレス機で潰された様にペシャンコになった。AGE-1に踏み潰されたのでは無い。両手足に使用したガンブラ『戦国アストレイ』には気を込めて放つ、発勁（はつけい）という技がある。

それを足で撃っただけだ。威力は大きく水田地帯に大きなクレーターを作った。スペリオルのビルダーはそれをただ茫然と見ていた。

「凄い……でも……女の声……?」

「さっきの人は一体……」

楕円形の大型の機械『Gポッド』から安物のレーシングスーツに似たパイロットスーツを着た少年が出てくる。こちらがスペリオルのビルダーだったわけだ。

HGのスペリオルガンダムガンブラを手に持っている。

「み！認めねえぞこんなの！」

反対側のGポッドからも同じ格好の少年が出てきた。Gポッドは店の両端に三つずつ並んでおり、それを挟んだ奥の位置に観戦用の大型モニターが設置されてる構造だった。反対側から出てきたのはビギニングのビルダーだ。こちらは手に小さな箱状の物を持っていた。2人とも小学生だった。

「あいつが乱入しなけりや俺が勝っていたんだ！俺はこんなの納得できるか！」

「どう見ても悪いのはそっちだと思っただけど?」

『!?!』

さっきの乱入者らしき人物がGポッドから出てきた。

「……女の子?」

そう、さつきのAGE―1に乗っていたのは少女だった。首を覆う長さの黒髪を後ろで縛っており、目はちよつとたれ目、細身の体ではんのちよつと猫背、

外見的に高校生あたりだろうか。

「テメエかー！ さつき割り込んできやがったのは！ テメエの所為で俺は！」

相手が弱そうと見るや掴みかかろうとする少年、しかし少女は一切動じずに少年を冷めた目で見る。

「やめなよみつともない。周りも見てるよ」

周りにもビルダーは多くいた。あんな戦い方や暴言を吐きまくって、周りからいい目で見られるはずがない。多くの人が怪訝そうな目で少年を見ていた。中には店員を呼ぼうとする人も……

「う……。チツ！ 嫌な気分だ！ もう来るか！」

不愉快そうな声を上げて少年は去っていった。居なくなることを確認するとその場にいた全員が安堵の表情を浮かべた。

「……やっぱいい気分しないな。ああいうフリーガンは」

「あの……」

「？」

少女が呟くと少年が恐る恐る声をかけてきた。少女の態度的に怖い人かもしれないという不安があった。

「助かりました。ありがとうございます」

「ああ、気にしないで、無視できない状況だったからさ。もしかして君の友達だった？」

さつきとは打って変わってにこやかに答える少女。

「友達なんかじゃありませんよ」

いきなり違う声でした。少年と同じ年恰好の少女だ。猫目とサイドテールが可愛らしい。意地悪そうな印象がある。

「こっちの方が友達みたいだね」

「あ、ガンプラ仲間のチトセです」と少年

「アイツは、ヤスはストーカーなんですよ。ケンや私達のケンというのは助けた少年の名前の様だ。」

「逃げてて来たんです俺達、ガンプラ始めたのは最近で、その前はゲームでガンダムの対戦ゲームをやっていたんです。ヤスはその時からの知り合いなんですけど、ちよつと問題がありました」

「アイツは、馬鹿にする様な話題しか出来ないの。私達がゲームのガンダム作品のアニメを見たことないってんで、それを理由にすぐ馬鹿にして、こつちから距離を置こうとしても向こうから来るんだもん。『あのガンダムカッコイイね』って話題で盛り上がりつつも『そのガンダム設定弱えぞ』ってニヤニヤ笑いながら来てばかりで」

大人しそうな割にはかなりズケズケ言う。やや毒舌っぽい。

「こつちも頭にきて先生に言っただけで注意したって全然反省しないもん。学校じゃ嫌われてるよ。私達だってアイツと関わる位ならって、近くにいる仲間と一緒にガンプラバトルに映ったの。アイツもガンプラの話にはついてこれないらしくて、悔しそうな顔していい気味だったわ」

「い・い・い気味って……、でもそれで入ってこれなかったのにこつちに来たの？」

「そうよ。違法ビルダーって奴に手を出したのよ。それで周りの目も気にしないで、あんなドヤ顔してんだもの。普段から周り気にしないからってあんな面の皮厚くなっちゃってさー！」

違法ビルダー。ガンプラを使わずデータチップを使って機体データを構成、それで戦うビルダーの事だ。純正品で無いうえに『ガンプラバトルなのに存在自体が矛盾している！』『非常識』と手を出さない人は多いが、それでも手を出さず人間はいた。ここ一ヶ月でいきなり問題視された問題だった。

「いわゆるあいつ等って『ガノタ』って奴なんでしょ？ヲタクなら常識なものも納得だよ」

『ガノタ』呼んで時の如く『ガンダムヲタク』の略称でありネットスラングだ。しかし世間的にヲタクという言葉自体が蔑称である以上、このガノタという言葉も蔑称だった。現時点での意味はマナーの悪い、ネットと現実問わず平気で他人を傷つけるガンダムヲタクを指す。

ガンダムシリーズは35年以上続く、だがそれは同時にそれ以上の派閥を生み出してしまった……。

「普通だったら全部ガンダム作品愛するのが筋つてもんでしょ？」

「確かにそれはベストな考えだけど、うーん、ガノタやヲタクって言葉も含めて、ちよつと私は違うと思うな」

「え？」

少女の反応にチトセが疑問の反応を示す。だが次はケンが少女に話しかけた。

「アイツ、口ではああ言ったけど、また来ると思います。別の店にでも移ろうかな……」

「はあ？ケン、アンタ何ヘタレてんのよ！」

「でも来るたびにあんな事されたんじや同じ事の繰り返しだし……」

「それじゃ駄目だよ。悔しい思いをしたならギャフンと言わせなきゃ」

「でも…俺には技術も実力も……」

「私でよければ色々教えるよ」

「！お姉さん……お願いします！」

ケンにとっては嬉しい申し出だ。少年は勢いよく頭を下げた。

この模型店『ガリア大陸』は『山回（さんかい）町商店街』の中にある。商店街特有の奥行きある店の奥には工作室が設けられており、買ったその場でガンプラが組めるわけだ。

「ざつくりと君のスペリオル見せてもらったけど、基本はバツチリじゃない。スミ入れもしてるし塗装も足りない所はちゃんと塗ってる。大切に作ったってよく分かるよ」

「有難うございます。でも、今のままでは勝てませんよ。もっと強くしたい……。改造に挑戦してみたいです」

「ケン君……解ったよ。それで何かこうしたいって考えとかある？」

「そうですね……」

それからしばらく三人でスペリオルの改修（シールの所全塗装）、及び改造に取り掛かる。

「スペリオルにプラフスキーウイングをつけたいです。でも合う奴がなくて……」

『プラフスキーウイング』、『ガンダムビルドファイターズ』で主人公機『スタービルドストライク』が装備していた光の翼だ。

「ビルドファイターズやダイバーズは俺がガンプラに興味持つきつかけなんです。他のガンダム作品はゲームとかでしか知らないけど、ビルドストライクやダブルオーダイバーは思い入れがあるからつけたくて、でもサイズ合わなくて」

スペリオルはかなり大型だ。スタービルドストライクのプラフスキーウイングでは小さすぎる。この倍のサイズが必要だ。

「そっか、スペリオルじゃ大柄だからね。普通のサイズじゃ合わないか……、そうだ！いい事思いついた！」

時間はかかったが三人でとりかかればどうということではなかった。

「で、このクリアパーツをつや消しをかけた本体にとりつけて完成だよ。接続部はちよつとだけ削つといた方が取り外しに便利だから」

「よし……完成だ！」

ケンは目の前の生まれ変わった愛機を見つめた。背中にはMGと呼ばれる大型キットの『ユニバースブースター』が取り付けられおり大柄のスペリオルにはちょうど良いサイズだった。武装は取り回しを重視して手にガンブレードを持たせていた。(元々は大型武器が多く、そのままでは干渉する為)

「背負い物が変わった程度だけど随分印象変わるものね」

達成感を肌で感じるケン、だがそれは突如割り込んだ一言でぶち壊しになる。

「はーブツサイクな出来だなおい！」

冒頭でケンのスペリオルをいたぶっていた違法ビルダー、ヤスだった。

「お前！もうここには来ないんじやなかったのか！」

「どう決めようが俺の勝手だろうが！そんな事より似合ってねえな！スペリオルは兵器を意識したデザインが特徴なんだよ！光の翼なんてつけるなんざ、センスがねえのを自己紹介してるようなもんだろが！」

鬼の首でも取ったかのように騒ぐヤス、

「俺がつけたいと思ったからつけただけだ」

「アンタのやってる行為の方が寒いよヤス」

「……わざわざまたいちやもんつけに来たのかな」

チトセの毒舌、そして冷ややかな態度に変わった少女が問いかける。というか嫌に少女の言葉が冷たい。かなり怖い印象があった。少女は相当頭にきてるらしい。

「……まあいいさ。さっきは俺も反省してよ。お前にレベルを合せてやろうと思っただけだよ」

少女に気圧されたのか。少ししおらしくなったヤスが言う。

「……てことは俺とバトルしたいって事か？」

「その通り、今度は正々堂々とだぜ。もし俺が約束を破ったならその姉ちゃんに乱入してもらって助けてもらってもいいぜえ」

「……いいだろう。今度は負けない！絶対に！」

「ちよつとケン。あんたまだスペリオルの改造機に慣れてないのに、数で押すしかない能無し相手ならいいハンデかもしれないけれど本気？」

「大丈夫だよチトセ、スペリオル自体は慣れてるし、それに折角頑張ってるで作ったコイツをこう言われて我慢なんて出来やしない」

「……」

少女はその様をただ見つめていた。少し怪しむようにヤスを見ながら。

そしてお互いがバトルへと移行すべくGポッドの中へ入る。

ボールの内側のようなスペースの中にあっただのはシートと操縦桿、そしてフットペダル。ガンダムお約束の操縦席、その再現というわけだ。パイロットスーツに着替えたケンは、ヘルメット右耳部から巻き取り式コードを伸ばす。そして座席の右側後ろにあるイヤホン

ジャックに繋いだ。これで通信が可能になる。

そして前方にある機械のスリットに、自身のパーソナルデータの入ったカードを挿入。カードを認識するとシートの右側に備え付けであったスキャナーが開く。丸い黄緑色のスキャナー、その外見は機動戦士ガンダムにおけるマスケットロボ『ハロ』を模した物だ。

ケンはその中にさっき作ったスペリオルを入れる。これでスキャナーはガンプラを認識、ケンの作品はケンの乗機へと姿を変えた。

「凄い……能力値が格段に上がっている」

ケンは生まれ変わった自機の能力を見て驚愕する。ちなみに、ヤスの場合は箱状のデータチップを入れて機体データを構成するというやり方だ。それが違法ビルダーと正規ビルダーの違いだった。

そして画面が戦艦内の格納庫内に切り替わる。CGで再現された整備兵が自分の下を慌ただしく動いている。『今回のステージは日本の田舎町、夏の夕方です』と画面に表示された後、整備兵は自機の前から退避、目の前のカタパルトが開く。

『ゲームをスタートします。戦果を期待します』

「よし！『ビルドスペリオルガンダム』！出ます！」

ケンは叫ぶと同時に機体が前に滑り出す。足場がカタパルト端まで来るとスペリオルは飛んだ。ステージはさっきと同じ地形だったが今度は夕方だった。

「絶対に負けるもんか！」

ケンはそう自分の相棒を信じながら飛び立った。

※後半へ続く。

第35話 「サポーターとフリーガン（後編）」

「さあいつでも来い！」

「行ってやるよ！」

飛びながら啖呵を切るケンに、ヤスは三機のビギニングで挑む。近づきつつビギニング達は遠距離射撃でビルドスペリオルに撃つてくる。

「っ！」

ケンは横にスペリオルを移動。さっきのバトルとは違った滑らかな操縦感触にケンは内心驚く。

「感じが違うー！これなら！」

ケンはスペリオルの背中、ユニバースブースターのビーム砲を前面に展開、腋の下からせり出した大型ビーム砲を放つ。ビームの濁流は、回避行動を取ろうとした無人機の一体を飲み込む。

「なっ！」

スペリオルの力に驚くヤス、反面ケンは「これならやれる」と確信した。

「こー懲りずに!!」

尚も距離を取り射撃を撃ってくるビギニング二体、だがビームライフル。これが不味かった。スペリオル左肩にぶら下げた赤いシールドを展開、シールドはビームを吸収、スペリオルのエネルギーが増す。

「お前の許しをこうつもりなんて無い！」

ケンがそう叫ぶと同時にスペリオルの背中から巨大なクリアブルーの翼が出現する。これこそがとりつけたユニバースブースターの最大の特徴。『プラフスキーウイング』、これにより驚異的なスピードを実現する。

一気に迫るスペリオル。細かい機動はまだ出来ないが、直線なら問題は無い。凄まじい速度だ。慌てたヤスは、無人機をその場に盾代わ

りに置き一斉射撃を行わせようとする。そして自分は後退、

「逃げるな！卑怯だぞ！」

ケンのスペリオルは射撃を撃つ前のビギニングにあつという間に
迫り右手のガンブレードで斬り裂く、「う！嘘だ！」と叫ぶヤス、だが
舌の根の乾かぬうちにケンのスペリオルはヤスのビギニングに迫る
「うわああ!!」と叫ぶヤス、ガンブレードを振り上げ勝利を確信するケ
ン。しかし……

『挑戦者が乱入しました！』というアナウンス。と同時に上空から泡
の様なエフェクトをまとった大型ビームがスペリオルを薙ぎ払った。
「なっ！」

吹っ飛ばすペリオル、倒れたスペリオルは上空を見る。巨大な下半
身と、巨大なクロールと小さい上半身を持った四本腕の機体が見えた。
違法ビルダーの高性能機『マステマガンダム』だ。

「相手は一人だろうか？何をやってるんだヤス」

「おお先生！遅いじゃないですか！」

マステマに乗ったビルダーが言う。ヤスが乱入者に根回しをして
いたらしい。

「あ・新手……」

「俺だけじゃない」

マステマに乗ったビルダーが言った瞬間、空にヤスの乗っていた量
産型ビギニング、その同型が次々と現れる。1体、2体、それどこ
ろの数ではない。空を埋め尽くしかねない数だ。

「なんだあの数！」

「驚いたかあ?!あの女が乱入しても安心な様に用心棒を頼みまくって
たのよ！1人につき無人機含めて3体、それが33人で俺込みで10
0体のモビルスーツよお!!」

「ヤス！ここまで下種な行為を！」

「下種？違うね。ガンダムは戦争だぜ！勝者が絶対となる。それが戦
場の掟だ！お前の好きなガンプラアニメとは違うんだよ!!」

「所詮はジャンルの違いだ！そんな勝手な理屈をリアルで持ち込むな

！」

「俺が言っただから受け入れろ。かの偉い先生も言っただぜえ。『公表された作品は見る人全部が自由に批評する権利を持つ。それを妨げることはできない』ってなあ！言論の自由って奴だなあ！」

観戦モニターを通じて、バトルの様子はチトセと少女にもよく見えた。

「サイッター！あいつら、なんであんな事平気をするの?!ムツカツクわ!!」

「……フェアどころの話じゃない。ケン君助けなきや」

少女は、ケンのバトルに乱入しようとGポッドに向かう。

「お姉さん?でもあいつら100人もいるのよ!勝てるわけないよ」

チトセに対し、少女は当然とばかりの顔で言った。

「?勝てるよ。だって私は……」

そして再びバトル内、全ビギニングが武器を構えスペリオルを狙う。

「フン、つまらんな。初心者にこうもいじめまがいの事をするとは」

マステマに乗ったビルダーが吐き捨てる。

「おや?先生は不満ですか?」

「強い女のビルダーと聞いて『ヤタテ・アイ』を倒すチャンスになると思っていたが、出ないじゃないか。このマステマも奴と戦う為に用意したというのに」

「ヤタテ・アイ?誰ですかそれ」

「それは……」

その時、乱入者のアナウンスが違法ビルダー達に流れた。『来るか!』と身構える。直後巨大な衝撃波がビギニングの群れに突っ込む。回避行動をとったビギニング達、だがその所為でスペリオルへの攻撃は中断される。遠くから四本の刀を構えたAGE-1が高速で飛んでくる。

「ケン君、動ける?」

「お姉さん……はい！」

「下がってて！後は私がやる！」

「え?!無理ですよ！」

相手は100体だ。とてもじゃないがあの女の人でも100体相手には出来ない！とケンと思った。

「まあ見てなよ！」

「へ！何言ってるやがる！」

と、一体のビギニングがビームサーベルで突っ込んでくる。勝手に彼女を弱いと判断したのだろう。「ま！待て！」とヤスの制止も聞かずに違法ビルダーはAGE-1を突き刺そうと両手でビームサーベルを構え突っ込んでくる。

「……」

無言で少女は刀を振るう。直後、ビギニングは真つ二つになりその場に落下した。

「へ？あれ？あああああつっ!!!」

間抜けな断末魔を残し違法ビルダーは落とされた。

「……だから粘着のフリーガンとは関わりたくないんだよ。一部声が大いなのがいるだけで、大人しくしてる人まで変な目で見られる」

少女はうんざりした口調で呟く。こうした相手は慣れているらしい。

「！いい！一斉攻撃だ！数で圧倒してください!!」

ヤスが用心棒達に命令を下す。一斉に量産型ビギニングがAGE-1めがけて撃ってきた。

「……」

少女は無言でAGE-1を飛行、ビギニングの射撃を軽くかわしながら群れの中に突っ込む。凄まじいスピードだ。群れの中に突っ込むと四本の刀を前進しながら振るう。一度振るう度に量産型ビギニングの体が真つ二つに裂ける。その度に違法ビルダーの悲鳴が聞こえた。半分は無人機の為無言だったが、

「……フフ」

仏頂面だった少女の顔が綻ぶ、嫌な暴言ばかり吐いてた連中の悲鳴

が聞こえる。自分でも不思議だがゾクゾクしてくる。

「このー！」

「っ！」

と、左右からビームサーベルを構えたビギニングが襲ってくる。接近戦に持ち込むつもりだ。AGE―1は左右肩アームの刀でサーベルを受け止める。と、上下前後からもビギニングは同じようにサーベルで襲ってくる。

「所詮は一体！この数に勝てるはずがねえ！」

「あつそ」

少女はAGE―1の力を込める。刀は簡単にビームサーベルを貫通、ビギニングを真っ二つにする。

「何んだとおおっ！」

驚く別の違法ビルダー。直後AGE―1は上下前後に衝撃波を飛ばす。全てビギニングに当たり撃破。

「な！なんなんだあの刀の切れ味は！」

「……私の刀の刃の塗装は黒を下地に塗って、その上にシルバーで塗装してるの。だから貴方程度は簡単にナマスに出来るよ」

「な！なんだそりゃああー！」

塗装の専門的な知識のないビルダーの様だ。少女の言った事は理解できなかった。そして少女は再び群れの中に突入する。もうビギニング達は恐れ慄いていた。

「凄い……刀だけしかないのに……」

離れた場所に移動したケンも少女の戦い方をまたも茫然と見ていた。

AGE―1はあつという間に100体いたビギニングをほぼ破壊、残ったのは2体だけだった。ヤスのビギニングとマステマだ。

「手ごたえ無いね。もう終わり？」

「いや！まだだ！」

と、マステマガンダムがクローを使いAGE―1に襲いかかる。刀

を交差させクローを受け止めるAGE―1

「へえ、少しは腕の立ちそうなのが出てきたね。でも味方は見殺し同然とはね」

「面識なんてない奴ばかりさ！お前を疲弊させるならそれで十分な連中だったって事だ」

「無駄だねそれ」

少女はそう言うときクローを簡単にX字に斬り裂く。「なんだとー」と驚愕する違法ビルダーそのまま少女はマステマを斬り裂こうと四本の剣を連続で振った。あつという間に手足を切り裂かれマステマは地に伏す。

「この場で最低限の礼儀もわきまえない人に私は負けないよ」

「そーそうか！お前は！この模型店『ガリア大陸』最強のチーム『I・B』そのリーダーにしてチーム最強のビルダー『ヤタテ・アイ』！」
マステマのビルダーが言い終わらないうちに、少女……アイはトドメとしてマステマを一刀両断。縦に斬り裂かれたマステマはそのまま爆散した。

「さ・最強のビルダー？あのAGE女が？」

ヤスはへたれこみアイのAGE―1を茫然と見た。「残ったのはあなた一人だよ」とAGE―1がこちらに向き、悠然と歩いてくる。

「くー来るな！」

コウタはビームライフルでAGE―1を撃つ。しかしAGE―1は日本刀を軽く振るいビームを弾いた。

「なーなんでそんなにマジになってんだよ！ただこっちは批評しただけだろうが！」

「さっき君が言ってた『批評する権利』だけど、あれはね『言われた側は怒る権利がある。それでその権はおしまい』って続きがあるんだよ。私にだってあなたの態度は怒る権利があるんだから。言っていない場所と悪い場所すら解らないの？」

「きー綺麗事ばかりぬかして!!どうせお前みたいな奴は全部のガンダム作品を愛せとか抜かすんだろうが！」

言葉を交わす度にビギニングは撃ち、AGE―1は軽く刀でそれを

いなし悠然と歩いてくる。何度もそうしてる内にエネルギー切れとなる。

カチカチとライフルは無意味な音を出すだけだった。

「……別にかまやしないよ。気にいらぬなら叩いても、不満なら文句言つても、場所もわきまえない。ファンも作品もこきおろすのが目的みたいな行動、それで何が『違いの分かる男』？だから同じ『ガノタ』として『フリーガン』には関わりたくないんだよ」

「フ？フリーガン?!」

「態度選ぶ権利はさあ、こつちにもあるんだよ?」

フリーガン、意味はごろつき、サッカー用語で破壊や妨害、選手やファンに暴力を振るう過激なファン達の事を言う。中には暴れるのが目的だから便乗して叩く。

という連中も多い為、ガンプラビルダー達の用語でも使われている。(あくまでこの世界の設定です) こんな血の気の多い過激なファンはどんなジャンルにだっている。

「お姉さん！いやアイさん待って！」

『?!』

ケンの声がした。スペリオルが姿を現しヤスのビギニングに向かってくる。

「そいつは俺が！」

「ケン！お前だけはあ!!」

ヤスは絶叫するとビームサーベルを抜きスペリオルに向かう。もはやヤケだった。しかし相手のスペリオルは素手だ。勝てるかもしれない。

「くだらない遊びでやってる奴らなんかにい！」

「くだらない遊び？そう遊びさ！だがな！」

突如スペリオルの右手が青く輝く、ユニバースブースターを取り付けたことにより装備できた拳『ビルドナックル』だ。

「それに夢中になる楽しさ！お前にも分けてやりたいくらいだ!!」

「俺を見下すんじゃない!!俺の方が格上なんだよおお!!」

ビギニングはビームサーベルを振るう。迎え撃つはビルドナック

ル。拳は剣に勝てないとヤスは判断、俺の勝ちだと一瞬確信する。だがビルドナツクルはビームの刀身を飴細工の様に砕き、その後ろにあるビギニングの胸、コクピットを貫通した。

「な・なんで……嘘だあ!!」

叫びと共に爆発するヤスとビギニング、これにより勝者はアイとケンの二人となった。

「また助けられちゃいましたね! いやあかつこ良かったですよアイさん!」

「ねー! まるで子供と大人の喧嘩みたい!」

「気にしなくていいよ。向うが勝手に約束破っただけなもの」

バトルが終わった後、ケンとチトセはアイに駆け寄る。ヤスは泣きながら逃げ帰ったらしい。

「でもどうやってあそこまで強くなったんですか?」

「経験、積んだだけ、かな? 結構いつも挑戦者とか来るし」

「挑戦者、ですか、それは丁度いい」

ケンの顔が妖しく微笑む。

「え?」

「だったら俺の挑戦! 受けて下さい! さっきのバトル見てたら俺の方もスイッチはいつちやいましたよ!」

「ケン君……OK! 受けて立つ!」

アイの方も笑顔でそれに答えた。さっきまでの冷たいアイとはまるで違った。温もりある笑顔だった。お互いの笑顔にもう辛気臭さはなかった。

「なんスか。ヤタテさん一人で100人も相手に出来るかと思いましたがどうって事なかったつスね」

それを見ていた少年がはすっぱな口調でアイを心配した。他にも数人の男女がいた。三人の男と三人の女が、ちなみにさっきの言葉と言ったのはその中で一番年下の少年『アサダ・ソウイチ』だ。

「当然だよソウイチ君。アイちゃんは僕達のリーダーなんだからさ」

短髪でややゴツめの青年『ハガネ・ヒロ』がソウイチに告げる。

「それにしても最近はやっぱり違法ビルダーが増えたな。来月の選手権予選でも多く出てきそうって話だし、大会はどうなることやら……」

眼鏡をかけた長身の青年、『ツチャ・サブロウタ』が大会を心配する。「今はまだ違法ビルダーに懐疑的な人達が多いからいいですよ……。でも増えてしまったらもつと状況は悪くなっていく事でしょうね……」

仏頂面の女の子、『ミヨ・ムツミ』は今後を憂う。眩くような声が特徴だ。

「違法だけにマナーの悪い子も増えるだろうね。悪ガキは撮ってても面白くないからやんなつちやうよ。もうせ新規ならもつといい男の子入ってほしいもんだよ」

デジカメを持ったセミロングの少女、『フジ・タカコ』が言う。ムツミと彼女はガンプラを作らずあくまで付添いみたいなものだ。

「でも大丈夫だとアタシは思うな。色んな所の強豪ビルダーはアイみたいに違法連中と戦ってるっていうし」

ポニーテールの快活そうな少女『ハジメ・ナナ』は皆にそう告げた。

彼女はアイの親友。そしてムツミとタカコ以外、全員がアイのチーム『I・B』のメンバーだ。

「それにさ、見てよ」

ナナが観戦モニターを指さすとアイとケンが楽しそうにバトルしてるのが見えた。

『楽しいですよ！アイさん！これが本当のガンプラバトルなんですよ！』

『そう！自分が好きだって気持ち表現すれば何だって楽しいはずだよ！』

『わかります！燃えあがれええ!!』

「アイやああいう子を見てると何とかなるって、なんかそう思えてくるのよね」

——この夏、ガン普拉バトルは変わりつつあった。ガン普拉バトルというホビーを破壊しかねない変化が、だがその中でも変化を拒み、戦う者達がいた。

これはその戦う者達のうちの一かけらの物語、そして好きな物に魂を込める者達の物語——

第36話 「少年の心を持ち続けた大人達」(前編)

今回は34話と35話から二週間前の話、アイ達がコンドウと別れてから一週間が過ぎた。

その日は土曜日、アイはバイトの為、『モノトーンマウス製作所』という中小企業に赴く。

二階もない建物の一室、グリーンに塗られた床の上にそう大きくない機械が置かれていた。機械と機械の間にはローラー状のベルトコンベアが設けられ、

その上をどの何に使うか解らない部品が流れていく。そんな中一人一人の紺色の作業服を着た作業員が黙々と部品を付けたしていた。

ここで作業をする時アイは余計な事は考えない様にしている。時間を気にするとかえって時間の流れがゆっくりになってしまっていた。

——あー、そういえばこの部品何の機械に使うんだっけ、確か前聞いた時は工場ラインの機械部品を製造するライン部品をこのラインで作ってるって言ってたけど……——

無意識に手を動かしながらそんな事を考える作業着のアイ。

と、その時けたたましい音のベルが鳴った。午前中の仕事が終わった合図だった。

「よしっ、今日はここまででいいよ。アイちゃん」

現場の課長が終了をアイに告げた。

「あ、はい、お疲れ様でした」

作業帽子を外しおじぎをするアイ、アイの髪型はいつものボブを一つに結っていた。学生バイトの為、アイの仕事時間は正社員より少ない。今日は午前中のみの仕事だった。

そのまま事務室に向かい、そこでタイムカードを押してから帰る。しかし事務室に入ろうとした時、事務室の中から妙な話声が聞こえた。

「お前も懲りない奴だな！俺の言う通りにすればいいと言ってるだろ

う！」

「けっ！寝言は寝てから言えや！ワシの考えの方がいいもんね！」

二人いるようだ。ドア越しに聞こえる片方の声は工場長、ブスジマ・シンジの声だ。もう一つの声は聞き覚えがない。

声の荒れた調子から、入り辛そうな気分をアイは感じる。その場でどうしようか、と思索する。

その時、事務室のドアがバタンと開かれ、中から一人の男が現れた。年齢は50位だろうか。スラツとした体軀でツルツルの禿げ頭の中
年男性だった。

「相変わらず口で言っても分からないようだな！ならば普通りの方法でわからせてやろう！」

「お〜いいですとも!!こつちや最初つからそのつもりだったんだからな！」

そのまま事務室から出ようとしますがその拍子に男はアイにぶつかった。「わっ」と声をあげるアイ

「おつとすまない、ちよつとよそ見していてね、大丈夫だった？」

打って変わって穏やかな対応でアイに話しかける男、大丈夫だとアイは答えると男は「良かった」と言い立ち去った。

アイの見た男の背中はピンとしていて年齢を感じさせない後姿だった。

「けっ！首洗って待っていやがれってんだ！」

恰幅のいい中年の男が出て後姿の男に叫んだ。工場長、そしてアイ以上の實力を持ったビルダー、ブスジマ・シンジだ。

「わっ！工場長!?!」

いきなり叫んだブスジマに驚くアイ

「やや。アイちゃんじゃねーの。なんでこんな所にいんのよ」

「なんでって。何か工場長が言い争いしてるみたいで事務室に入れなかったんですよ」

「あゝ、ちよいと興奮して大声出しすぎちまったな。わりいわりい」

アイのその発言を聞いて、ようやく自分が大声を出していた事に気付いたららしい。

「それで誰なんですかあの人」

「ウチの親会社の品質管理、略して品管のウチ担当だよ。ウチはその下請けってわけよ」

親会社とはアイが今バイトしてる会社に、仕事を持ち込んでくる会社というわけだ。品管はその仕事や品物に異常がないか調べる部署だ。

「何か仕事でトラブルあったんですか？」

「……まあそんな所だわな」

なんとなく歯切れの悪い答え方だ。

「まあそれはいいんだけどよ。実は明日の日曜日、市民体育館でガンブラのトーナメント大会があるんだよ」

「いきなり話変わりますね……トーナメント大会ですか？」

「今回ののは大人部門みたいな大会なんで、ワシらみたいなベテランが集まる大会なんだが、よけりや応援に来てくれねえか？」

いつもは三人で組んでる奴がいるんだが、今回一人これなくてよ。寂しいうえに、見知った顔がジジイばかりは寂しいのよ」

アイとしては出ない大会とはいえ良い機会だ。ベテランの集まる大会で作った物やバトルを見てみるいいチャンスになるだろう。

「いいですね。友達誘って行きますよ」

「よっしゃ！俄然気合入って来たぜ！」

友達と聞いて若い子がたくさん来ると思ったのだろう。良い所を見せたいとブスジマは明日の大会の気合を込めるのだった。

……

そして日曜日、市民体育館にて

「面白い工場長さんじゃない。大会見に来いなんてさ」

体育館入口、ナナが隣に立ったアイに言う。

「面白いだけじゃないっすよ。ヤタテさんだつて勝てないくらい強かったって人スからね」

「チームも心機一転したんだ。応援だけじゃなく俺たちにも参考になつたらいいな」

ツチャとソウイチも一緒だった。しかし今回はそれだけではない。

「いたいた！アイちゃん!!」

「あ！ヒロさん！」

ヒロが駆け寄ってくる。ヒロの家はアイ達の街から離れている為遅れがちだった。

そしてヒロの後を数人の大学生が歩いてきた。マスミ、ゼデル、ヨウコの三人、チーム『エデン』のメンバーだった。

急な誘いではあったが丁度彼らも余裕があったため来てくれたわけだ。

「皆さんも急な所来てくれてありがとうございます」

「こちらこそ、でも本当に良かったの？あたし達も呼んで」

ヨウコが聞く。別に呼ぶのはアイのチームだけでもよかったはずだ。

「水臭いですよ。それにヒロさんがいたチームなら別に当然です」

「そうっすよ。こんな所にまで敵対チームとか言う必要ないっす」

ソウイチの発言。その瞬間、その場にいた全員が凍りついた。

「……ソウイチ、何か悪い物食べたか……？」

「へ？」

「いや、いつも勝ち負けばかり拘ってるアンタの口からそんな言葉が出るなんて……」

「あ、人の事なんだと思ってるんすか！俺だってそんな四六時中バトルの時みたいな考えはないっす！」

いつもの仏頂面を更にこわばせソウイチは答えた。前に比べて多少は丸くなったソウイチだが、こういった発言は意外だった。

「おおアイちゃん！来てくれたのかよ！」

自信に満ちた大声が響く。ラフな格好の太った中年、ブスジマだった。

「工場長」

軽く手を振るアイ

「いやいや見渡せば大勢でよく来てくれたじゃないの！お！そっちがチーム『エデン』のメンバーかい！ワシが工場長のブスジマ・シンジよ！」

エデンのメンバーと挨拶をかわすブスジマ、

「今日はワシの活躍を見に来てくれてありがとうございます！」

「はいはい、気持ちは分かったから周りの目も気にしてよ」

その時だった。ブスジマの後ろから眼鏡をかけた女の子が話しかけてくる、ショートヘアで前髪をヘアピンでまとめておりおでこが目立つ、中学生辺りだろうか。

インドア派なイメージがある。

「?あなたは?」

「ワシの娘よ、コイツも出場するんでな」

「え?!結婚してたんですかブスジマさん!」

ついアイの口から失礼な発言が出てしまう。次の瞬間「あ」と口を押えたが

「いや当たりめえだろ!なんだと思ってたのよ!」

「うわ!スイマセン!」

「そのお姉さんのいう事も分かるけどね、こんな子供っぽい大人じゃそうも思われるでしょ?」

娘と言われた少女が呆れながら言った。

「うおい!そりゃねえだろミドリ!」

「始めまして皆さん。呼ばれた通り、ワタシが付添いで来たブスジマ・ミドリです」

打って変わって折り目正しく挨拶をするミドリと名乗る少女。

「知りませんでしたよ。こんなしつかりしたお子さんがいたなんて」

「あー、まあ今まで言つてすらなかったしなあ……」

「親がこんな性格ですからね。子供でもやってる事は保護者みたいなもんですよ」

「ミドリ……初対面の相手に親のイメージダウンはないんじゃないかね?」

「だったら最初の所で普通に紹介してればよかったですよ」

ミドリは吐き捨てる。親との間は威厳はないだろうが悪いわけでもないらしい。

「まあとりあえず面白い人だったのは解りますよ」

ナナがフォローに回る。

「お！分かる!?大人の魅力って奴だわねえ！」

「どう解釈すりゃそう受け取るのよ父さん……」

「でもま、面白いだけじゃないぜ！ガン普拉バトルだってお手のもんよ！」

「あ、それには同意します」

以前ブスジマのグフカスタムにコテンパンにされたアイはブスジマの実力を知っていた。

「そんな強いのかい？」

ブスジマの実力を知らないマスミはアイに聞いてみる。

「そりゃあもう、私なんて圧倒されっぱなしでしたから」

「という事は来月の選手権も自信があるんですか？」

ツチャが聞いた。来月の県内予選だ。

「ワシにかかりゃ優勝位間違いなしさね！」

自信満々で答えるブスジマ、その時だった。

「フン、残念ながらそれはない！」

「!?」

一人の男が横に立っていた。年齢は50と言ったところか。セミロングの白髪をオールバックにし、サンタクロースの様な白髭、

白手袋に軍服を思わせるロングコートを着込み、どことなくベテランの軍人を思わせるダンディズム溢れる男だった。しかし服が暑そうだ。

——あの人が三人組んでる内の一人かな？——とアイは考えた。

「テメエは……」

「優勝はそいつではない。私だ」

男は言い放つ。

「ハッ！テメエが言えた事かよ！」

「その過信は何処からくる？今回の大会は何十年もガン普拉を作り続けてきたベテランの集まる大会なのだぞ。負けない保障がどこにある？」

「例え保障が無くってもなあ！ワシのガン普拉魂は誰にも負けやし

ねえ！」

「それだけではどうにもならない事があるという事はいつまでたつても理解しないようだな。なら今回も解らせてやろう！見るがいい！」男はそう言うのと懐から一体のガンプラを取り出した。

「おー」とアイ達から関心の声上がる。

取り出したのは『0080 ポケットの中の戦争』と呼ばれる作品に登場したザクⅡの改良型でFZ型、もしくはザク改と呼ばれるものだ。

通常のザクと違いホバー移動が特徴である。男のザク改はシャア・アズナブル用の真紅のカラーリングが施されていた。

男はザクをブスジマに手渡す。

「モノアイは単独で稼働、肩と下半身はザク後期生産型とのミキシングで可動領域は元々のザク改とは比較にならない！」

パイプも市販のビルダーズパーツを使用した！お前の雑なガンプラとは違う！」

「ぬぬぬ！何おう！それならワシのも見やがれ！」

ザクを手に取り完成度を確かめるブスジマ、彼もまた懐からHGグフカスタムを取り出して男に手渡す。

「HGUCの旧ザクとミキシングの旧キットグフカスタムの改造だぜ！ガラッゾのパーツを移植する事によって腰が動けば足だって上がる！」

シールドだってガトリングがパージ可能だ！新しいパーツを使えばいいってもんじゃねえぜ！」

「フン！だが金属パーツ製の動力パイプが一部塗装がハゲてるじゃないか！お前のガンプラはいつも詰めが甘い！お前の性格と同じだ！」

「詰めが甘くちや工場長が出来てないぜ！課長止まりの奴が言うかよ！」

「アホ！中小企業の工場長と大企業の課長を一緒にするな！」

「誰がアホだ！コスプレ野郎！」

「……何スカ。この子供の喧嘩」

言い争う大人の二人、だが険悪な雰囲気、というよりはまるで子供が言いあつてるかのような感じだった。

「はいはい父さん、そろそろ会場に入ろうよ、今日は見に来てくれた皆もいるんだから悪いでしょ？」

「あ」

「むう」

ウザったそうに止めるミドリ、二人は我に返ると言い争いをやめる。

「私達はビルダーだという事だ。ビルダーならばバトルで決着をつけるという事だな」

「けっ！ワシは最初っからそのつもりだぜい！」

「言っておれ」

そう言つて男は会場内に入つていった。

「気がすんだ？皆待たせちや悪いから会場入るよ」

「時と場所考えてよ！」そう父親に目で伝えながらミドリは言った。

「あースマン……、どうもあいつのあの髭見るとああなっちゃまって……」

「色々スゲエ人だななんか……」

ゼデルもブスジマの勢いには感じる物があるようだ。

「パワーを感じるわね。でもなんかあんたに似てるわねゼデル、仲良くなれそうじゃない？」

「ハッハッハ！ちげえねえ！」

豪快に笑うゼデル、その後全員が会場に入った。

……

そして大会が始まる。今回は一対一のトーナメント式の大会だ。

「イイヤツツツホオオオウウウ!!!」

ブスジマが上機嫌に叫びながら機体と荒野を駆け抜ける。機体は以前アイを打ち負かしたHGグフカスタムだ

対戦相手は背中にロケットの様なブースターを背負い、頭以外の部分が異常に大きいオーカー色の機体、ズサ（登場作品ガンダムZZ）

だ。

全身にミサイルを搭載しており長方形の両肩からミサイルを一斉に撃ってくる。

20発以上の赤いミサイルが一斉に大地に降り注ぎフィールドを爆発で満たす。だがグフカスタムはその爆発をかいくぐると

ヒートソード片手にズサの間近に迫った。慌ててビームサーベルを抜こうとするズサだがグフカスタムは容赦なくズサを縦に切り裂いた。そしてズサは爆発。

「よっしゃー！三回戦突破！」

笑いながらブスジマがGポッドから出てくる。

「ひゃー、何よあの実力、とんでもないわ」

観戦席でブスジマの戦いを見ていたナナはその実力に驚きの声を上げる。

「それぞれがベテランだからレベルの高い大会だろうに、それをあんなに簡単に圧倒するとはね」

マスミも驚きの声を上げる。その場にいた全員が今回の大会のレベルの高さを感じていた。ベテランだらけの大会、

その中でブスジマは対戦相手を圧倒し続けていた。

「優勝はブスジマさんで決まりかな」

「いや、もう一人いるみたいっス」
「？」

ソウイチが大型対戦モニターを指さす。体育館内にはGポッドが八つ置いてあり、一つの試合につき二つずつ、計四つのバトルが並行して行われていた。

対戦モニターも画面を四分割し、それぞれの試合を流していた。ソウイチが示したのはブスジマの試合の隣、髭の男のシャアザクの対戦だった。

「あの試合は……ミドリちゃんの試合だな、相手はさっきの髭の人だ。名前は『ツクイ・クニヒコ』」

ツチャが対戦表を見ながら言う。

「名前がミドリだからって機体の色まで緑ってわけじゃないんすね」

ミドリはザクの対戦相手、ゲルググJ（イエーガー）という機体に乗っていた。

大型ではあるが丸みを帯びておりどこことなくスマートな印象だ。そして手に持った大型ライフルが特徴だ。

本来はピンクだがミドリの機体はオーカーとブラウンで塗装されていた。登場作品は同じく0080

「このっ!!」

ゲルググJに乗ったミドリは一定の距離を保ちながらでツクイのザクを狙い撃つ。いわゆる『引き撃ち』という奴だ。

しかしザクはその引き撃ちを難なくかわしマシンガンで迎撃する。放たれたマシンガンはゲルググJの頭部に命中、

モノアイと呼ばれる単眼を失ったゲルググはなおもザクがさつきいた場所を撃つ。がザクはその場にはすでにおらず、ゲルググのすぐそばに近づいていた。

「くっー」

そしてザクは斧状の武器『ヒートホーク』でゲルググの胴体を切り裂いた。相手の立場としては真っ青になる様なホバースピードだった。

「あつちは随分スマートに決めるね」

アイがつぶやくと、GポッドからザクII改のビルダーが出てくる。悠々とした余裕ある態度だ。格好も相まって歴戦の軍人を思わせた。

「こうして見ると動きに性格が出るって改めて分かるわね」

ナナが言う。初めて見るベテランビルダーの戦いは彼女にとってかなり新鮮な様だ。

「まったく、年寄りのハッスルにはかありませんよ」

そこへ観客席へ負けたミドリが上がってきた。服装はもうパイロットスーツから私服へと変わっていた。

「あ、ブスジマさん」

ソウイチが呼ぶ。が、ミドリは怪訝そうな顔になる。

「ミドリでいいよ。名字で呼ばれるのは嫌だからね。と、スイマセン

ね、みつともない年寄り達のはしゃいだ姿見せちゃいまして」

「そんな事ないよ。年上の人が同じ物にハマってるってなんだか安心するから」

「アハハ、そう言ってくれるとありがたいですよ。ま、今日は若い皆がいるからいいところ見せたんでしようけどね」

笑いながらミドリは言う。彼女自身こういったゲストが多いのは新鮮な気持ちらしい。

「まあ、決勝はかなりうるさくなるでしょうけどね」

「あのツクイって人とブスジマさんが戦うって事ですか？」

「その通りです。あの二人が戦うと大抵子供の喧嘩みたいになっちゃうんですから」

「いい大人がなんでよ？」

「幼なじみなんですよあの二人、ガンプラが出来る前から模型で一緒に遊んでいた関係でして、そしてずっとどっちが上かで争っていた経緯があります」

そうこうしてるうちに決勝戦となった。決勝はミドリの予想通り、ブスジマとツクイの一騎打ちだ。

「よくここまでこれたな！途中でくたばるかと思っただぜ！」

「それはこちらの台詞だ。身の程と言う奴を思い知らせてやる！」

睨みあう二人、視線がぶつかり火花が散る。

『フーン…』

そしてお互いがGポッドに入りバトルが始まった。

※後半へ続く

第37話 「少年の心を持ち続けた大人達」(後編)

バトルフィールドはオーブ近海の孤島、ガンダムSEEDに登場した前半主役機ストライクガンダムと

ライバル機、イージスガンダムが激闘を繰り広げた場所だ。自然豊かなその島は、それほど大きくはなく

十数メートルで表示されるガンプラにとって一つのリングの様な物だった。

「つたく、陰気な天気だぜ。アイツの性格みてえだ」

ブスジマは空を見ながらぼやいた。天候設定は空一面の曇りだ。CGとはいえ嫌な気持ちになる。と、Gポッドに警告音が響く、ツクイのザク改が来た。

「きやがったか!」

ブスジマはグフのヒートサーベルを抜き構える。

「呑気に天気見てる場合か!」

ザク改はホバーで森を突っ切りながらマシンガン撃ってくる。ステップでかわすブスジマの乗ったグフ

「ケッ!余裕なんだよ!」

すかさずブスジマは左腕のガトリングシールドで迎撃する。連続で放たれる弾丸がザクを襲う。

「フン!」

ザク改はホバーを駆使し流れる様に弾丸をかわす。

「ならこいつで!」

ブスジマのグフもザクに合わせるように高速で移動しつつ射撃、そして右腕を向け。ヒートロッドを撃ち出した。

長い付き合いだ、相手の動きはある程度予測出来る。ガシツと音を立ててヒートロッドの先端部がザクの右肩のシールドに張りつく、

「何?!こっちの動きを読んで!」

「何度お前と戦ってると思ってるやがる!」

「チッ!」

電撃が来ると判断したツクイはザクの左手に持ったヒートホークでヒートロッドのワイヤーを切り落とした。

そのままザクは右手のマシンガン下部に取り付けられたグレネードをグフ目掛けて撃つ。

「うお!あぶねえ!」

シールドでガードするグフカスタム。グレネードはシールドに着弾、そして爆発。爆風により周囲は見えなくなる。

「!こいつは!どこから来る!」

グフの正面から爆風を突き破ってザク改が突っ込んでくる。

「だああつ!!」

ツクイは叫びながらザク改のヒートホークを振り下ろす。

「この!」

ブスジマはシールドを身構え防御しようとするが、間に合わずシールドのガトリング部分を切り落とされてしまう。(本体は無事だったが)

だが振り下ろした体勢のザク改には隙がある。今がザク改に攻撃を加えるチャンスだった。

「もらったぜ!!」

狙うはザク改のコクピット、胸だ。グフの右手に握られたヒートサーベルがザク改に迫る。

「くっ!なんの!」

ツクイはザク改の身を捻り右腕を大きく開いた。腕と胴体の間をヒートサーベルの突きが通る。場所をずらしたのだ。

「ゲッ!!」

直後ザク改はヒートサーベルを持ったグフの右腕を脇で挟み込んだ。今のうちにとザク改はグフの頭めがけて左腕のヒートホークを振り上げた。

「野郎！」

ブスジマはさせまいとグフカスタムの左前腕部に搭載された3連装35mmガトリング砲（シールドの下部）をザクに向け放った。

放たれた銃弾がザク改の左手首を破壊、握っていたヒートホークを落としてしまう。

「うおっ!!」

ツクイはさつき脇に挟んだグフカスタムの腕に、ザク改の左腕を思いつき叩きつけた。グフカスタムの右肘から下が衝撃で落ちる。

2体の得物がその場に落ちた。

「なっ！てめえ！」

ブスジマは左腕の3連ガトリング砲でザク改のコクピットを狙おうとする、が、そうなる前にザク改はグフカスタムの鳩尾にキックを入れた。衝撃で吹き飛ぶグフカスタム

「がっつっ!!」

吹き飛びながらも倒れず耐えたグフカスタム。それをツクイのザク改は右腕のマシンガンで狙い撃とうとする。

「もらうぞー！」

「調子に乗るんじゃねえ!!」

ブスジマのグフカスタムも左腕のガトリング砲で迎撃する。フィールドをポツリ、ポツリと雨が降ってきた。

雨の降る中、お互い移動しながらの撃ち合いが始まった。

周りの観客が歓声で賑わう、そんな戦いをアイ達は目の前の戦いを茫然と眺めていた。

「なんて凄い戦い……」

「鬼気迫るって感じね、あれは特に」

それはお互いの全力を出した泥臭さ全開の戦いだっただけ。

「そうですか？ 私にはただの子供の喧嘩にしか見えないですよ」

いつもの事、そんな風にモニターの戦いを見ながらミドリは言った。

お互いの銃撃戦が始まってから暫くの時間が過ぎた。グフカスタムの3連ガトリング砲を撃とうとするも、ガトリング砲はカラカラと音しか出さない。

「ゲッ！弾切れかよー！」

「馬鹿め！残弾も確認しないから！」

ツクイのザク改にはまだ弾が残ってる。そのままグフカスタムを撃ち続けた。

「ケッ！弾がねえなら拳で戦うだけだあ!!」

グフカスタムはザク改へ突っ走る。

「無謀なー！」

ザク改は片手で持ったマシンガンでグフカスタムを撃つ、しかし、グフカスタムはかわしながら猛スピードで突っ込んでくる。

「なんだと!?!」

「うおおっ!!」

グフカスタムの左ストレートがザク改の頭部を殴り飛ばす。

そのままズザッとザク改は大地を転がる。その拍子にザク改はマシンガンを落としてしまった。

「これで条件は五分五分だぜ！」

そのままユラッとザク改は立ち上がる。

「無茶をする！お前と言う奴はいつもいつも野蛮だな！」

「お高くとまってるテメエにやいわれたくねえぜ！」

ザクもまた拳を構え猛スピードで突っ込んできた。

「お前が強引すぎるんだろぅがああ!!!」

そのままグフの顔を殴り飛ばすザク改

「ワシがいつ強引だつてんだよー！」

顔面のひしやげたグフがザク改に回し蹴りを放つ。

「覚えてないんか！俺が頑張って作ったディスプレイ用のMGEX—Sガンダム！無理やり変形させて壊したろぅが！」

ザク改は蹴りをかわしながらグフの角を掴みへし折る。まるで子供が髪の毛を引っ張るかのよう。

「あれは謝つたろうが！それならテメエだつて大学の時！ゼミの可愛こちゃんかガンプラ好きだつてガセ情報教えやがつて！」

ワシがガンプラプレゼントしたらドン引きされたんだぞ!!」

「それだつて謝つただろー！ザクが好きだから俺の事虚弱体質とか言いおつて！やられメカだからとでもいいたいのか！」

「病気がちだつたんだから良いだろうが！テメエだつてワシがデブだからドム男とか言いやがつて！」

「太つてるお前が悪い！」

「なんだとバカ！」

「バカつて言う方がバカなんだこのバカ！」

段々言い争いが子供じみてきた……その所為かアイ達には殴り合おも子供の喧嘩の様な叩きあいになった様に見えた。

観客の歓声がだんだん笑い声になって来た。アイ達は絶句してたか呆れていたかのどつちかだった。

「何スかこの戦い……」

「馬鹿親父……またこんな所で恥さらして……」

ミドリは恥ずかしそうに顔に手を当てていた。

そして勝負は佳境に入っていた。グフカスタムがザク改に腕十字を極めると言う無茶苦茶な展開によって……

「ガーツハツハツハ!!この勝負ワシの勝ちだな！」

グフカスタムがザク改の左腕をへし折ろうとする。

「ぐええ！くそおお!!足首の塗装が不十分なこんないい加減な奴にいい!!」

負けるか！とツクイは背中ofバーニアを全力で吹かす。その勢いで二機はすごい勢いでぬかるんだ地面を滑り出した。

「あつー！テメツ！」

不意を突かれるブスジマ、その拍子に手が緩みザク改の拘束がとかれた。ザク改の滑りがグフカスタムを振り切る。

振り切ったザク改は立ち上がると、そのままさつきヒートホークを

落とした地点に戻った。ヒートホークを回収するためだ。

「待ちやがれ!!」

ヒートホークを回収しようとするツクイにグフカスタムが走ってくる。

「くっ!」

ヒートホークより手近にあつた為、ザク改はグフカスタムのヒートサーベルを掴んだ。すかさずグフカスタムに横に振るう。が

「テメエー!人のモン取るな!」

身をかがませ回避するグフカスタム、そのままザク改のヒートホークをグフカスタムが回収、二機とも敵の武器を持ちながら一旦離れる。

もうお互い満身創痍だった。このまま時間切れで判定に持ち越せば「勝てるかもしれない」とお互いと思う。だがお互いそんな事は望んでいなかった。

「テメエは!」

「お前は!」

『ワシ(俺)が倒す!!』

一気にお互いが突っ込む。捨て身でお互いの武器を振り下ろした。その為お互いが密着したまま離れない。

——どっちが勝った!?!——そう誰もが思った時だった。

「……残念だったな……」

ザク改のツクイが言う。彼のザク改にはヒートホークがコクピットの表面に刺さっていた。

だがまだ皮の部分だ。対するブスジマは……

「オメエの方が……早かったってのかよ……畜生……」

悔しそうにブスジマがうめく、彼のグフカスタムの胸には深々とヒートサーベルが刺さっていた。

剣と斧によるリーチの差、これがこの二人の勝負の明暗をわけたわけだ。

「俺の……勝ちだあ!」

「チクシヨオオオオオオオオオオツツ!!!!!!!」

すぐさま離れるザク改、絶叫と共に、スジマのグフカスタムは爆発した。勝利者はツクイ・クニヒコのザク改だ。

その後の表彰式はとりわけ何も異常なく終わった。二位だったブスジマはずっとどこか悔しそうなままだったが

「いい加減機嫌直してよ父さん。どっちか負けるのは間違いなかったんだから」

アイ達の観客席に戻ってきたブスジマ、彼はずっと黙ったままだった。ふとブスジマの目から涙が滲んできた。

「ちくしょう……」

泣いてるのを見られたくないのだろう。顔を背けながらブスジマは涙を拭った。

「工場長……」

「やれやれ、そんな風に泣かれるとこっちが困るな」

そしてツクイが歩いてきた。こちらは上機嫌だった。

「クニヒコ……てめえ……」

「どうだったかなアイちゃん？俺がシンジより強いって解ったかい？」

「え？あの……どこかでお会いしましたっけ？」

唐突に名前を呼ばれるアイ、しかし彼女の記憶にはこういった人はいない。

「あれ？気付いてない？」

ツクイが髭と髪を外す。付け髭とカツラだった。そして出てきたツルツル頭の顔にアイは見覚えがあった。

「あ！昨日の品管の人！」

「そう俺だよ。若いゲストにいい所見せたくて頑張った甲斐があったってもんさ」

「ケツ！スケベ根性丸出しだぜ！毎回大会でコスプレして出るのによく恥ずかしくねえもんだ！」

「お前が言うな！とにかくこれで選手権のチームリーダーは俺に決まりだな！」

にんまりと笑うツクイ

「ん？リーダー？」

「今日の大会はですね、選手権でどっちがリーダーやるか大会で優勝した方に決めようって話だったんですよ」

ミドリが呆れた様に言う。

「昨日の話し合いでどっちにするか言い争いになっちゃってね。それで元々参加申請してたこの大会で決めようとしたんだよ」

「ああ、だから昨日言い争いに……仕事中にですか?！」

「ははは、お恥ずかしい。品管の仕事ついでにだよ」

——……この人たちも選手権にでるのか……——

ブスジマ達を見ながらヒロは思う。道を外し、自分たちを離れたかつての仲間、レムに再び会う為、

いずれブスジマらを含めた強豪とも戦う事になる。ヒロはそう思うと勝てるかどうか不安だった。そして彼は一つの考えを出した。

「お願いします！僕達全員にあなた達の戦い方を教えてください！」

「ヒロ?!」

「ヒロさん!?!」

「僕達には単純に力試し以外にも勝ちたい理由があります！でも正直全国のビルダーに勝てる自信がありません！僕達に戦い方を教えてください！」

「……アタシからもお願いします！」

次にでたのはナナだ。彼女は周りとの差がある。選手権で足を引つ張らないか不安だった。

「……俺からもお願いするっス」

「俺も！」

「私も！」

次々とメンバーが頼み込んでくる。ついには全員が頼み込むようになっていた

「いいぜ！ワシでよけりや教えてやらあ！」

ブスジマの顔に笑顔が戻る。嬉しかったようだ。

「未来は老人が作る物ではない。か、俺も賛成しよう。だがシンジ、なんで負けたお前が言うんだ？」

「ケツ！いいじゃねえかよ！アイちゃんと最初に知り合ったのは俺だぜ！」

「理由になるか！勝ったのは俺のほうだから俺が言うべきだろう！」

「ケチケチすんな！教えるついでに俺だってもっともっと強くなって次こそお前に勝つもんね！」

「そう単純に行くか！そんな計画性もなしに生きてきたからそんなブクブク太ったんだろが！」

「計画性ないのはどっちだよ！シャア（金髪）やらシロツコ（紫）やら真似して髪何度も染めた結果、一気にハゲたオメエが言うか！」

「仕事のストレスの方がデカいわ！うちの会社の仕事についてこれなくて！泣きながらやめて楽な中小企業行きやがって!!」

「泣いてねえもん！やるかコノヤロー?!」
「上等だ！」

「またも言い争いを始め、取っ組み合いになる二人。しかし怖いという印象は無く、ただただ『馬鹿馬鹿しい』という印象しかなかった。

「また口喧嘩してる」

「ほっときましょう。止めようとするだけ無駄ですよ」
「本当子供みたいっス……」

「残念だけどね、男つてのは幾つになっても男でしかないのよ」
ソウイチに対し、ミドリは悟った様に言った。

「……でも、好きな物を好きな気持ちには持ち続けていたいですよね……」

「女でそれを貫くのは容易じゃないけど……アイちゃん、そうよね」
アイに続くヨウコ

「しっかしあの二人、本当仲悪いわね」

「え？そう？私には普通に仲よさそうに見えるけど」

「嘘!？」

アイの答えにナナは意外そうに答えた。

番外編「スーパーガンプラ対戦OG（前編）」（ヒュツケバ……ビルドアカツキ登場）

とあるガンプラバトル機器設置店、宇宙空間の中で数機のガンプラが戦っていた。

白い一本角の機体、ユニコーンガンダム（ユニコーンモード）を改造したであろうガンプラが右手のビームマシンガンを相手に乱射する。

飛び交う敵機は三機のハンブラビ、『Zガンダム』に登場したエイの様な機体だ。直後ユニコーンのマシンガンの弾が切れた。

それを待っていたかのように三機は散会し、それぞれ一点目掛け、手に持ったレーザー銃の様な武器を撃つ、ワイヤーで先端部を撃ち出し、

絡まった対象に高圧電流で攻撃する『海へビ』だ。撃ち出した海へビはユニコーンのすぐ手前に収束、海へビはクモの巣状に展開されユニコーンを包む。

（名前もズバリ『クモの巣』）

流れた高圧電流がユニコーンを襲う。電流により輝くユニコーン。

「うわああっ!!」

展開が終わると、その場にユニコーンはうなだれる。

「どうしたーもう終わりか?！」

ハンブラビのビルダーがユニコーンのビルダーを挑発する。するとユニコーンのバイザーが鋭く輝いた。

まだ終わりじゃない。そうハンブラビのビルダー達が身構えるとユニコーンはマシンガンを捨て、左腕にマウントされていた剣を引き抜き

再び集ろうとしていたハンブラビ達に飛んでいく。

「見せてやるーコイツの本当の力を!!」

ユニコーンに乗ったビルダーが叫ぶと背中のビルドブースターが展開、ウイングが横倒しになった。

「ウイング展開！ブースター全開！」

そう叫ぶや否や、ユニコーンのスピードが急激に増した。凄まじい勢いでハンブラビ三体に迫るユニコーン。

長身の銃、フェダーインライフルを撃ちまくるハンブラビ達だが、捨て身同然のユニコーンにもかかわらず攻撃をことごとくかわしてくる。

「クッ！所詮ハツタリだ！」

「待て！」

リーダーらしき人物が止めようとするも、一機のハンブラビが果敢にユニコーンに挑む、ユニコーンが実体剣を構え、

ハンブラビがフェダーインライフルの柄の部分からビームサーベルを発生、すれ違う二機、直後、胴体を真つ二つにされたハンブラビの方が爆発した。

「リ・リーダー！うわああ!!」

リーダーらしき人物がやられたハンブラビのビルダーの名前を叫ぶ、そうこうしてるうちにユニコーンはもう一機のハンブラビの眼前に迫っていた。

「は！早い！」

「クラッシャー！セットアップ！」

突如ユニコーンの右腕のシールドが開き、鋏状の武器になる。そのままハンブラビの腹を挟み、後方の小惑星に叩きつける。

そして小惑星の地面が続く限り、ブースターでハンブラビを無理やり引きずった。

「シールドニッパ！クラッシャー!!」

ユニコーンのビルダーが叫ぶと共に、グズグズになったハンブラビの腹部を両断、十秒程度で二機のハンブラビは破壊されたのだ。

「後一機！」とユニコーンのビルダーが叫ぶと後方から残りのハンブラビが斬りかかって来た。

すかさず剣で受け止める。ユニコーン。

「俺達のチームをここまで追いつめるとはな！一人でよくやる！」

「俺一人でも出来るんですよ！アイツがいなくても！俺は！」

「ハハハ！いいだろう！お前一人でどこまで出来るか試してやる！」
そして二機は飛び上がり、高速戦闘に入る。緑の光になるユニコーン、青い光のハンブラビ、お互いが離れては射撃による撃ち合い、ぶつかり合いながらの一瞬の接近戦を繰り返していた。射撃はかわし、接近戦は一瞬の鏖迫り合いが繰り返され勝敗はつかない。
「ハハハ！やるじゃないか！パートナーがいてこそのお前だと思っただがな！」

「いつまでも！アイツに頼った俺じゃない！俺はアイツを！」
「だがそうカッカしては大事な物を見失うぞ」

相手の言葉に疑問を感じるユニコーンのビルダー、その時だった。急にユニコーンの動きが止まる。

「な！何?! エネルギー切れ? そんなああ!!」
「詰めが甘かったなあ！」

直後ハンブラビのビームサーベルを受け、ユニコーンは両断、ユニコーンの敗北となった。

「ど、どぼじてこうなるのおおつ!!」
ユニコーン爆発音とビルダーの涙声が戦場に虚しく響いた。

「よおカズ、惜しかったな」

バトルが終わった後、ハンブラビのビルダーがGポッドから出てきたユニコーンのビルダーに話しかける。

『トリヤマ・カズ』それがユニコーンのビルダーの名前だった。年齢は15歳くらいか。

「トホホ、もう少しで一人で決着つけられたんすけどね」
苦笑いしながらカズは答える。

「しかし、必死だな。一人で戦うことに」
急にカズの表情が真剣なものになる。

「……当然っすよ。今までの甘えた自分とは早くおさらばしたいんす」

「責任を自分で持とうというのはいいい事かもしれないが、それでお前の明るさやいい所が無くなってしまったら意味なんてないだろう？」

そうなら何より悲しむのはたぶんアイツだ」

「でも先輩……」

「強情な奴だ。普段悩まない奴が悩むとここまでズルズルいくか」

「ひ！ひどいっす！その言い方！」

「案外似た境遇の奴と戦ってみるか？」

「似た境遇？誰すか？」

「ヤタテ・アイだ、コンドウ・ショウゴやサツマ・イモエを倒したって奴だ」

「あの人すか？噂には聞きましたけど、聞いた限り全然似た境遇じゃないじゃないすか」

「いや、その相方のハジメとか言う奴だ。奴も自分に悩んで相方と戦って答えを導き出し、サツマから眼をつけられるにいたったという話だからな」

「相方の人すか……」

……

それからしばらくして……いつもの山回町の模型店『ガリア大陸』にて

「やあハジメさん、今日は一人かい？」

「あ、フクオウジさんにサブロウタさん、珍しい組み合わせね」

フクオウジ・マスミとツチャ・サブロウタ、2人が店の二階で見かけたナナに声をかける。今日のナナは一人だ。

「さつきそこで会ってね。そういうハジメさんこそ一人とは珍しいね」

「アイだったらバイトだって、午後になったら来るみたいだけど」

「バイトかあ、アイちゃんも忙しいんだなあ」

「それよりさ、今日はちよっと皆に見てもらいたい新作があるんだけど」

「何か作ってきたのかい？」

「ビルドアカツキ作ってきたの」

二階の丸テーブルにて、箱からビルドアカツキを取り出し立たせようとするナナ、

ここで『ビルドアカツキ』について説明しておこう。『アカツキ』という機体がある。『ガンダムSEED DESTINY』にて登場したストライクの後継機だ。

このアカツキの最大の特徴は全身が金色であるという事、ガンプラでも全身金メッキという豪華仕様だ。

対照的にビルドアカツキの方は金色の部分が白一色だというのが特徴だ。(それと背中のビルドブースターと専用のライフル)

この白は塗装が前提となっている故の白だった。つまり各々がオリジナルカラーで仕上げる事がこのビルドアカツキの醍醐味といえるだろう。

「やはりオリジナルカラーで仕上げたのかい？」

「うん。勿論アイに協力してもらったけどね。半分ずつとはいえ全身塗装だから疲れちゃった」

「どんな色か楽しみだよ」とマスマ。以前ビルドアカツキの改造コンテストも公式であった為、ナナの作品もどんな感じか気になった。

「どんな色で塗ったの？」

「そんな大したもんじゃないわよサブロウタさん。ネットで見た別作品のガンダムの色で塗った位よ。はい」

そう言いながらナナは完成したビルドアカツキをテーブルに出す。

「へえ、スカイブルーか」

全身水色に塗られたアカツキだ。それは鮮やかな印象があった。背中もギラーガやレギルス之物に取り換えられ鋭角的な印象がある。

しかし……ツチヤの反応をよそにマスマは啞然としていた。

「ん？どうしたフクオウジ君？」

「ナ……ナナちゃん……君……これ」

「どしたの？なんか不味かった？」

「いや、そうじゃないけど……君、何のガンダムを参考に？」

「え？何だっけ……あー確か『ヒュツケバイン』」

ナナがその名前を口にした瞬間、マスマとツチヤの二人が凍りついた。

「でも珍しいわよね。どう見てもガンダムなのに名前にガンダムがついてないなんて。あ、そういえばライフルもシールドもな……」

『そーそれ以上言うなあ!!』

叫ぶマスマミとツチャ、ナナはただ「え？」と？マークを浮かべるしか出来なかった。

……

ヒュツケバイン……まず結論から言うところには「ガンダム」という作品カテゴリではない。

別のゲーム作品「スーパーロボット大戦」に登場した主人公機、『パーソナルトルーパー（縮めてPT）』と呼ばれる機種だ。

そのあまりにもガンダムに似た外見からややゴタゴタが発生するという噂がある。マスマミ達が狼狽えたのもその所為だ。

しかしながらそのヒロイックかつスタリッシュなデザイン、異星人から利用したテクノロジー設定、ブラックホールや重力波を利用した武器等、

独自の魅力も非常に強く、ガンダムに負けない魅力を持ったロボットだ。

ちなみに前期カラーと後期カラーが存在し、ナナの持ってきたカラーは前期の方だ。後期しか知らないツチャが最初解らなかったのはこの所為だ。

「えーじゃあこれガンダムじゃないんだ」

「さつきは驚いたけど君は一番あぶなっかしい物を持ってきたというわけだね。ハハハ」

マスマミは軽快に笑う。色に驚いたからといって何か恐ろしい事が起きるわけでもない。

「さつきは驚いてたけど随分変わり身早いわねフクオウジさん」

「よくよく考えてみればオリジナルのガンプラで別作品からアイディアや外見を参考にするのはありふれたものだからね。古人曰く『上手な模倣は最も完全な独創である』だよ」

「はは、それもそうだ。これにいちいち驚いてたらSDガンダムとか

見れないな」

「え？マズミさんの言う事は分かるからいいとして、ツチャさんの方は意味がイマイチ解らないんだけど……」

と、ナナが言いかけたその時だった。

「お姉さん、ハジメ・ナナって人を知らないっすか？」

少年がナナに話しかけてきた。冒頭で出てきたトリヤマ・カズその人だ。

少年の顔を見るナナ

「ナナはアタシだけど……アンタ誰？」

「お姉さんが！あ、スンマセン！俺、トリヤマ・カズって言います。ハジメさんに挑戦したくてここに来たっす！」

トリヤマ・カズという名前にマズミとツチャが反応する。

「トリヤマ・カズ？チーム『ツインバードストライク』の？」

「はい、あなたはフクオウジさんとツチャさんすね。お会いできて光栄っす」

「？ツインバードストライクって？」

ナナの疑問にツチャが答える。

「うん、彼のチームの名前だよ。二人一組のチームでね、抜群のコンビネーションで相手が三体いようとあつという間に倒せる実力者のチームなんだ」

「ん？二人一組って、今日は一人しかないじゃない」

「今相手は留学中なんです。恥ずかしながら今までソイツに色々フォローしてもらってたみたいで……、今年は選手権にも辞退になって今じゃ苦労してます」

頭をかきながら笑ってごまかす少年。

「それで、そいつに頼らない自分になりたいんすけどね、どうも空回りしてるっぼくて、

ハジメさんも同じように相手と色々あつて答えを見つけたって聞きましたんで、ハジメさんと戦えばなにかヒント得られるかなって思ってきたんす」

「そういう事、いいよ、アタシでよければ相手してあげる」

以前アイより自分を倒して点数を稼ごうというビルダーに狙われた経験がナナにはある。その事で少し警戒したが

カズにそれはないだろうと判断、ナナは挑戦に応じたのだった。

——勝てるかは解らないけどね……——

別の部分、バトルの実力差ではナナは警戒を解かなかったが、

そしてバトルが始まる。今回のバトルフィールドは『月面、フォンブラウン市付近』だ。

フォン・ブラウン市というのはガンダムのUC作品に登場する月赤道付近に建造された月面都市だ。

巨大なクレーター内部に作られておりその階層ごとに別れた都市には五千万人が暮らす巨大都市だ。

母艦から出撃するナナ、出撃して早々に見回す。山脈が多い為一度隠れて様子を見ようか。と考えるもそれは中断した。

なぜなら向こうから仕掛けて来たからだ。こちらに向かいながらビームマシンガン撃ってくる。

「チッ！」

ナナも手に持ったライフル。ハイドラショットで応戦。一条のビームがカズの機体に向かう。

「うおっ！」

反射的にシールドを構えるも土壇場でうまく回避したようだ。シールドを構えたまま左腕のガトリングガンに向け発射する。

そうこうしてるうちに離れていたカズの機体が見えた。

「ツチャヤさん……あれ……」

「ユニコーンガンダム4号機『ヒポグリフ』!!行きます!!」

「ビルトビルガーじゃないかああっ!!お前もかああっ!!」

——四号機って……ボクのデュラハンと被ってるよ……、でも言えない……あれガリルナガンパクって作ったなんて……——

※後半に続く。

番外編「スーパーガンダムプラ対戦OG（後編）」（ビルトビ……ユニコーンガンダム4号機・ヒポグリフ登場）

ビルトビルガー……これもヒュッケバイン同様ガンダムではなくPTと呼ばれる、機種だ。接近戦に強く調整された機体で

右手に装備されたクワガタムシの様なハサミ『スタッグビートルクラッシャー』は必殺の威力を持っている。

表面のアーマーは用途によってパーズでき、高い機動性と重装甲の両立を実現した機体といえるだろう。

「参考にした程度っすけどね。こいつはユニコーンガンダム4号機『ヒポグリフ』っす」

「4号機って……確か前にマスマシさんが使ってた機体もユニコーン4号機だったけど」

「あれ？別に4号機を名乗ってる人がいたんすね。公式じゃ無い分被ることってよくあるっす。この機体はデストロイモードへの変形機能を持たないって設定なんすよ」

「まあ被る被らないはバトルには関係のない事ね！」

ガトリングのかわしっつ撃ちかえすナナが言う。

「ちがいないっす!!」

カズはそう言うとなナのビルドアカツキとの距離を一気に詰める。

その間もナナはハイドラショットで撃ち落そうとするが、鋭角的に動くユニコーン・ヒポグリフには中々当たらない。

と、一発のハイドラショットが命中、「やったか？」と思案するナナだが、お構いなしにヒポグリフは突っ込んでくる。右腕のシールドで防いだのだ。

「甘い甘い……この程度じゃくたばらないぜ！」

そう言うとき「ガパッ」と音を立ててシールドが開く、挟み切ろうと言う魂胆はナナにも理解できた。

「コイツで潰すっ！」

「その前に腕切るわよ！」

ナナが叫びながらハイドラショットからビームソードを発生させる。その数、なんと10本。

そのままナナは突っ込んでくるヒポグリフにビルドアカツキを全力で飛ばす。正面から突っ込もうというのだ。

「お互い、覚悟を決めようぜっ！」

「せえええいっ!!」

シールドニツパーを突き出すヒポグリフ、ハイドラショットを振り下ろすアカツキ、お互いの武器ががぶつかり合う。大きな衝撃音が響くが

お互いの武器を破壊するには至らない。

「くっ！」

「ちっ！」

いや、束ねたビームサーベルを受けても溶断出来ないシールドニツパーの方が頑丈というべきか。再度挟み切ろうとするカズのヒポグリフ、

「チャクラムッ!!」

ナナはバックステップの要領で後ろに飛びながら左腕のレドームヨーヨーと飛ばす。外側に刃のついたヨーヨーだ。

ビーム状ワイヤーで掌とつながったヨーヨーはヒポグリフの右腕にグルグルと巻きつく。

「あっ！」

カズが声を上げる。挟み切ることに集中していた為か対応が遅れてしまった為だ。ワイヤーでがんにがらめになったヨーヨーはヒポグリフの右腕を切り裂いた。

「向こうの手に乗せられちまったっ?!」

「どうよ！アイがいなくなっちゃってこれ位出来るわ！」

ナナがガッツポーズを取りながら言う。

「フツ……その通りっすね。でも俺も相棒に頼らない人間になる為に……」

覚悟を決めたようにカズが言うと、左手の剣、ヒートメタルソードを左手に持つ、

「負けるわけにはいかねえんだ!!」

ビルドブースターを展開、異常なスピードでアカツキに向かう。

「何?!早い!」

とつさに回避しようとするも、すれ違った直後、破壊されたアカツキに右腕が舞った。

「右腕が!ハイドラショットがまだ使えたのに!」

「ならもう片方も破壊するぜ!」

急旋回し、突っ込んでくるヒポグリフ。ナナはバルカンで牽制するしかない。が、意にも介さずヒポグリフは何度もすれ違いざまに斬撃を繰り返してくる。

「くっ!アンター!相方相方って言うけど十分強いじゃない!なんかやってる事が必死に見えるけど」

「……強いなんてとんでもない。相方がいない俺はおちこぼれですよ。そして必死ってのは多分合ってるでしょうね」

「何?!」

カズは攻撃中ながらも相方を話し始める。

「俺の相手は幼馴染みです。口うるさくてガンプラ仲間であると同時に朝起こしに来たり、飯を作ってくれたり

おせっかいですけど非常にありがたい女でしたよ。ガンプラバトルでも的確にフォローしてくれました」

話をしていながらも、攻撃の手はゆるめない。

「まるでラブコメね!」

ナナはレドームヨヨヨで迎撃しようとするが、アツサリかわされる。

「でもその娘は海外留学にいきました。俺のことは心配してくれましたけど。元々行きたがってたから

俺も勧めて説得しましたよ。……その後の生活で、俺は自分のズボラさを思い知りました」

次にすれ違った時はアカツキの右足を吹き飛ばす。

「俺の両親も海外ですから、最初は自由な一人暮らしと喜んだんですけどね！そいつがいたおかげでどれだけ助けられたか俺は痛感したんです！」

そして思った！ソイツに頼らない人間になりたいと！

「……好きなんだ、その人の事！」

「そしてアイツを守る人間になると誓った！」

そして三度目のすれ違い、左手を破壊されたアカツキはその場に倒れ込む。真上からアカツキめがけて突っ込む。

「その一歩として、頼らないビルダーになってみせる！奴に食いつけ！ヒポグリフ!!」

「……アンタもなんだ」

「？」

上からの突撃を食らう前に、ナナは倒れたままのアカツキのブースターを全開で吹かす。ズザザ！と音を立てて地表を滑り、アカツキはヒポグリフの進行方向から脱出、

「月面に突っ込ませる気か!? だけどまだ早い!!」

ヒポグリフを地表に激突させるにはタイミングが早かった様だ。ヒポグリフは可変翼を動かし、なだらかな放物線を描きながらアカツキの行った方向を追いかける。

いつの間にか低空飛行に変わっていたアカツキ、スピードは上がったが推力はヒポグリフの方が上、アカツキとの距離は徐々に縮まっていた。

「直線でこいつに勝てると思うな！」

「飛び散れっ！」

「?!」

ナナがそう言うと、アカツキの背中のユニットが開く、そして中から光の胞子が大量に出てきた。一瞬それは海を漂うマリンスノーの様にも見えたが、

それは一斉に真後ろのヒポグリフに高速で向って行った。

「胞子ビット?!」

カズが叫ぶ、『ガンダムAGE』に登場したビーム光球、無数のビームの弾を自在に操る技術だ。ナナのアカツキには

その制御ユニットが搭載されていた為使用できるというわけだ。

——真正面から?! まずい! 直線だから止まりきれない……!! ——

可変翼でブレーキをかけようとするも、その時に胞子ビットがヒポグリフの全身を襲った。

「うわああっ!!」

全身にビームの弾が撃ちこまれ、瞬く間にヒポグリフはボロボロになっっていく。

「今だっ!」

「!?」

ナナはダメ押しとしてアカツキの背中にぶら下げたビームキャノンをヒポグリフに撃ちこむ。

これが決め手になった。

「お・俺って……やっぱりおちこぼれ……?」

致命傷になったヒポグリフは月面に墜落する。

「……アンタの気持ち、解るよ」

「?」

「アタシもさ、同じだよ。相方のアイにいつも助けてもらってばかりで、焦って必死になって、自暴自棄になって、

迷惑かけない様にガンプラバトルをやめようとしても、アイがいたからアタシは立ち直れた。

アタシはアイツに頼りながらも自分を高めようって思った。程度は違うけどさ、頼る事って悪い事じゃないよ」

「でも……、俺は男っすよ。男なら好きな娘にはいい所を見せたい!」

「男を上げようと必死になるのは良い事だよ。でもなんかアンタ必死に見える。そんなギスギスしたアンタは幼馴染みの娘も見たくはないんじゃない?」

『頼っていい』っていうのは『強引に自分を変える必要はない』って意味だよ」

「でも意志を確かめるなんて……出来ない!」

「だからって自分を変に捻じ曲げる必要はないよ絶対、上昇志向があるのはいいけど、もうちよつと肩の力、抜いたほうがいいよ。」

焦り過ぎて自分を見失ったらその娘も悲しむと思うから」

「……そうか。そうっすね」

そうカズが言った瞬間、ヒポグリフは爆散。ナナの勝利となった。

バトルの後、握手を交わす二人

「有難うございます。ちよつと気が楽になりました」

「次は二人揃った時にバトルしたいわね。その時はこつちもアイと一緒に勝負したいわ」

「望むところっすよ。二人揃ったツインバードストライク、俺も今日より心身共に強くなつて相手しますから！後悔させちやいますから！」

「うん！楽しみにしてるー！」

そうしてカズは店を後にする。

「大したものだよナナちゃん、アカツキの背中に胞子ビットを仕込むとはね」

「マスマさん、あの装備、あれはアイが作ってくれたんですよ。結局、今回もアイに頼らなきゃ勝てなかつたな…」

だからこそ、アタシもトリヤマみたいに努力し続けなきゃって思った」

「そうか。ナナちゃん」

「しかしハジメさん。なんでヤタテさんはビットなんてヒユツケバインに似合わないものを取り付けたんだろう？」

「さあツチャさん、なんかアイが『私はアシユクリーフ派』とか言ってたけど？」

(※スーパーロボット大戦64主人公機です。ヒユツケ同様ガンダムのおマージュ的ロボですが、大人の都合上64以外に出られないとか。

胞子ビットに似た『スプラッシュユブレイカー』という装備を持っています)

「またマイナーなもん好きだったんだなヤタテさん……」

その頃のアイは……

——あー、ヒユツケばっか目立ってるのになんで64のスパロボは目立てないんだろう……——

「くらあアイちゃん!!手が止まってるぞ!!単純作業だからってやる気は最低限出さんかい!!簡単な作業だからって事故がないと思うな!皆にも影響すんだから!」

「うわあごめんなさい工場長!!」

バイト先のラインで怒られていた。

第38話 「変わった友、変われなかった友（前編）」

七月半ば、昼下がりの土曜日……この日も模型店『ガリア大陸』、その二階ではガンプラバトルは盛んに行われていた。四機のガンプラが仮想の宇宙空間を飛び交う。ここ近隣最強のビルダー、ヤタテ・アイ、そして挑戦者の少年たちの愛機だ。

「覚悟！ アンタを倒して学校の奴らに自慢するんだ！」

挑戦者の一人、ギラ・ズールアンジェロ機がヤタテ・アイの機体、パーフェクトユニコーンにビームランチャー『ランゲ・ブルーノ砲・改』を撃つ。それを援護とし、仲間の二体は前に出ながらビームマシンガンを撃ちまくった。

敵の機体は『ガンダムUC』に登場した第二次世界大戦のドイツ兵の様な姿の緑色の機体、ギラ・ズール。同じくUCに登場した機体で遠距離装備のマイナーチェンジ、ギラ・ズールアンジェロ機、色は紫だ。そして『ガンダムAGE』に登場した太ったリザードマンの様な機体、バクトの三機だ。

「私と戦ったことは自慢にならないのかな?！」

弾幕の中を掻い潜るアイのパーフェクトユニコーンは、回避行動を取りつつ高速で接近、なおかつ右腕のビームマグナム、左腕のビームガトリングで迎撃。マグナムはバクトを貫き、ギラズールもガトリングでハチの巣になり爆散、

アンジェロ機に乗った少年が仲間の名前を叫ぶ。しかし直後少年は気が付いた。「やられる!」と、パーフェクトユニコーンが背中から伸びたビームキャノンでこちらを狙い撃ったのだ。少年は気付いた直後、放たれたビームに飲まれ爆発、簡単に決着はついた。

「ちえー本当強いな姉ちゃん」

「次こそ勝つからなー今にみてるよー」

「勝ったら胸、長時間揉ませろよー」

「揉むのは絶対嫌だけど挑戦はいつでもいいよ」

毒づきながらも根に持たない風に去る挑戦者達を見送るアイ。彼女はかつてここの最強のビルダー『コンドウ・シヨウゴ』と戦い、勝利し、その所為で彼女を倒し、名を上げようとするビルダー達から挑戦を受ける立場となった。しかし彼女はそれすらもステツプとして成長。今では以前より遥かに実力を上げていた。

「張り切ってるなヤタテさん」

そんなアイに話しかけてくる青年がいる。少し髪の毛の伸びた眼鏡の青年『ツチャ・サブロウタ』。アイの仲間チームメイト、23歳のフリーターだ。

「あ、こんにちはツチャさん」

挨拶するアイ、当然ツチャも返す。

「当然ですよ。今はコンドウさんからチーム受け継いだんですから」

やる気十分に答えるアイ。そう、彼女は仕事の都合で街を離れざるを得なくなったコンドウからチームを任された。そしてアイは自分の仲間と統合し新チーム『I・B』のリーダーとなったのだ。

「頼もしいな。君達がいるなら今回は本当に全国に行けるかもしれない……」

「全国……そのつもりですよ。『イレイ・ハル』君に会いたいです。そして全身全霊をかけたバトルがしたいんです」

『イレイ・ハル』10代ながらビルダーの頂点『ガンプライスター』に上り詰めた少年、数年前、彼の頂上決戦のバトルに強く影響を受けたアイは

ハルに恋愛とも憧れともつかない感情を抱いた。今言えることは『彼と会って、最高のガンプラバトルがしたい』それがアイの夢だ。「なら選手権に向けて俺達も腕を上げなきゃな。今度は俺と戦ってくれないか？ヤタテさん」

そう言っつてツチャは持ってきた機体を見せる。『ZZガンダム』に登場した可変分離機、バウ、その改造機。最初アイがツチャとバトルした時もこの機体だった。

「わ！バウH（ハーフ）だ懐かしい！これ持ってきたんですか?！」

「本来俺は変形と分離をする機体が好みなんでね。最近勘が鈍ってた

からここらで戻したくて、俺と戦ってくれるかい?」

「ええ、喜んで」「アイさん!話はつきましたね!俺と勝負して下さい!」

アイが言いかけた時に元気よく少年が声をかけてきた。小学生だ。

「君は……コウタ君?」

アイにとつては知った顔だった。コウタ、ここ最近しよつちゆうア
イに挑戦を繰り返してくるガンプラ好きの少年ビルダーだった。

「顔を覚えておいてくれたんですね。嬉しいです」

「そりゃ君、何度も来てるからね」

「思えば随分あなたに挑戦しましたね。そんなに日に余裕はないです
からね」と少年は答える。

「そっか、来週引越しだっけ」

そう、このコウタという少年、来週に親の都合でこの街を離れな
ければならない。だから積極的に強くなろうと努力していた。そして
アイと全力で勝負がしたいと思っていた。

「本格的な改造に挑戦してみました!今度は負けません!」

「いいけど、ちよつと順番待ちになつちやうけどいいかな?」

先にツチャの方が挑戦をしてきた。順番で先にツチャとのバトル
をしようとするが、

「いや、俺は後の方でいいよ。折角彼もやる気十分で来たんだからさ」

「解りました。有難うございます。それじゃ勝負だよコウタ君」

そしてバトルが始まる。フィールドは夜間都市部、明かりのついた
高層ビルが立ち並ぶ中、アイのパーフェクトユニコーンが大通りに降
り立つ。

「コウタ君は……上か」

上空に敵機が見えた。黒い機体だ。まだハッキリ見えないが、すぐ
さまアイは背中のビームキャノンを上へ発射、コウタの機体は難なく
かわすと接近してくる。アイのユニコーンも接近しようと飛び上が
る。飛行する二機、そうこうしている内にコウタの機体が見えた。

「ダークマターブースターをつけたシグター!!」

アイは叫ぶ、シグー、『ガンダムSEED』に登場した細身かつ鋭角的な機体だ。コウタのシグーはダークマターブースターという追加パーツがついていた。両腕もエクシアダークマターという機体の物に代わっていた。

「そう！ただ何にも対策もナシにアンタに挑戦しやしない！このシグー・ダークマターでアンタを倒す！」

アイはコウタとのバトル歴を思い出す。最初はただ組んでシール貼っただけのいわゆる『素組み』という状態だった。次は色が足りない部分を塗装し、モールド（筋）にスミを入れディテールを強調した『スミ入れ』をやったシグー、

次はシールの部分も含め全部塗装したシグー、そして今回はシグーダークマター、挑戦する度にコウタのレベルは上がっていた。

「くっらえっ!!」

シグーの右腕に装備されたダークマターライフルをコウタは撃つ。

「おっとー!」

アイは細いビームを難なく回避、左腕のビームガトリングで牽制を行う。当たりはしなかったがシグーの目の前を通るビームの弾丸。一瞬シグーは足を止める。ユニコーンは高速で接近、右肩のビームサーベルを展開、切りかかる。

「これでー!」

「っ!」

シグーはダークマターライフルの盾部からビームサーベルを発生、ユニコーンのビームサーベルを受け止める。

「受け止めた!?」

「てええや!!」

シグーは左手首からビームサーベルを発生させる。そのままユニコーンを斬ろうと横に薙ぎ払おうとする、が、その前にユニコーンは左手にビームマグナムを持ち替え、ビームマグナムを持ち替え、空い

た右腕でシグーの鳩尾にパンチをいれる。シグーはそのまま後方に吹っ飛んだ。

「素組みだったらめり込んでそのまま終わってたんだけどね！塗装で強度も上がってるって事だね！」

「すぐさま体勢を直すシグーにアイは言い放った。

「クッ！そうだ！今の俺の全部をつぎ込んだのがシグー・ダークマターだ！負けるわけにはいかない！トランザム！」

コウタが叫んだ直後、シグーが真っ赤に輝く、性能を上げるブースト形態『トランザム』だ。

「シグーがトランザムを!?そうかダークマターの効果で！」

トランザムは『ガンダムOO』に出てきた機体のみが使えるブーストだ。しかし背中についたダークマターブースターはそれを他作品の機体にも使える効果がある。トランザムの制限時間を越えれば性能は低下するというデメリットも追加されるが、

「おおおっ!!」

夜景が綺麗な街を眼下に、残像を残すスピードでユニコーンの周りをグルグル回り、ダークマターライフルと、手首からのバルカンを連射するコウタのシグー、アイのユニコーンは最小限の動きで回避する！

「なんて気迫！」

「当然だ！アンタを倒すには一瞬のスキを突く！」

「見事な魂だよ！だけど！」

アイはそういうとユニコーンの右腕のビームガンでシグーの進行方向へ向けて発射、

「っ!?!」

撃たれたビームは真っすぐシグーへ向かう。とつさに急停止をかけたシグーは右腕とダークマターブースターの右部分を貫通、破壊した。

「やーやられるもんかあ!!」

諦めないとコウタのシグーは左手首からビームサーベルを構え、高速でユニコーンに突っ込んだ。

「まだ……未熟！」

ユニコーンは両肩のビームサーベルを展開、それ違いざまにシグーの腹部を斬り裂いた。

「なっ！」

真つ二つにされたシグーはそのまま爆散、難なくアイの勝利となった。

「完敗でした……」

沈んだ声のコウタがアイに言った。かなり悔しいのだろう。

「でもガンプラの出来も動きも一歩ずつよくなってるよ。このまま突き詰めればもつとあなたは強くなれるよ」

「有難うございます。また挑戦しますから、それじゃ……」

そのままコウタは二階を後にした。

「……たまに思うんですけど、もつと加減した方が良かったんでしゅうか」

アイが見送った体勢のまま後ろのツチャに話しかける。

「挑戦者は記念に戦おうとするタイプと倒して名を上げようとするタイプに分かれるからね。あの子の場合全力で戦った方が為になった筈だ。あの子は加減すると怒るしね」

「そうですね……ああ沈んだ風に見ると気持ち揺らぎますよ」

「でも加減した方が失礼になる事は君も解るだろう？向こうは全身全霊で来たんだからさ」

「そうですね……」

アイがそう言った時、コウタとすれ違いざまに見知った顔が二階に上がってきた。それも七人もだ。

「あ、いたいた。アイちゃん!!」

ややガツシリした青年、『ハガネ・ヒロ』がアイの名を呼んだ。そこにいたのはヒロを含め、癪毛の仏頂面の少年『アサダ・ソウイチ』。アイのバイト先の上司で、恰幅のいいヒゲの中年『ブスジマ・シンジ』、ブスジマの幼馴染みでハg……もとい剃った頭の中年『ツクイ・クニヒコ』

セミロングで大きい目と口が特徴の新聞部少女『フジ・タカコ』短髪でちよつと近寄りた陸上少女『ミヨ・ムツミ』そしてポニーテールのアイの親友『ハジメ・ナナ』全員アイの代表的な友達、そして仲間だ。

「皆、一斉に来るなんて珍しいね」

「たまたまそこで行き会ってね。って大変なんだ！」

「え？」

ヒロの言葉にクエスチョンを浮かべるアイ。

「まずは見て欲しいッス！こいつを！」

ソウイチが一冊の本をアイに手渡す。模型雑誌『ブルジョワモデル』だ。

「ブルジョワモデルう？まだ廃刊になってなかったのこれ？」

怪訝な顔で表紙を見るアイ、数ある全国で売られてる模型雑誌の中でもぶつちぎりでワースト一位になってる不人気模型雑誌だ。理由は掲載物が総じていい加減なのが原因だ。模型作例はよく見たら手抜きだわ、バトルで勝つにはジュースに一服盛れだの散々だ。

「俺だってこんなんに金出したくないッスよ。それより見てほしいのはこの中ッス」

—母さんが間違って買ってきたんスけどね—という言葉を飲み込みソウイチはある記事をアイに見せた。

……

アイ達がブルジョワモデルを見てる中、一階に降りたコウタは、模型売場奥の工作室で立ち尽くしていた。

—結局アイさんには適わなかった……。勝ちたくて腕を磨いてきたのに……。コイツを活躍させたかったのに……。アイさんと……。最高の思い出を作りたかったのに……。—

手に持ったシグーを見ながらコウタは悔し涙を浮かべる。

「災難だよなあ、自分でいくら努力してもその上をいつちまう奴がいる」

そんなコウタに話しかける男がいた。手にはサイコロサイズの小さな箱を二個、ポンポンと上下させていた。

「あなたは？」

そしてアイ達に視点を戻す。

「なになにこれ!!」

アイの叫びが響いた。

「そうッス。違法ビルダーの宣伝ッス」

そう、ブルジョワモデル内の特集として違法ビルダー（ガンプラを使わずデータの塊でバトルをしようとするビルダーの事）が記事が何ページも書かれていた。違法ビルダーはガンプラバトルのスキヤナーをICチップにより誤作動させ、ガンプラの形を構成させる仕組みだ。

タイプは二つあり、違法ビルダーオリジナルの機体で戦うタイプ、もう一つは他人の機体をコピーした物に乗るタイプだった。ちなみに記事では違法ビルダーとは呼ばれず『新世代ビルダー』と書かれていた。（更に純正品ではない）

「つたく、ガンプラバトルにデータだけでやるとはね、何考えてやがる」

「便利な世の中はいいが、ここまで便利になられちゃ迷惑だな」とぼやくブスジマに続くツクイ

「しかしネットで派手に宣伝か……厄介な事になるかもな」

ツチャが苦虫を噛み潰した様に言う。

「ネットのガノタ……いやフリーガンの連中がガンプラバトルにくるかもしれないって事スか」

「フリーガン……？サッカー用語ですか……？」とムツミ

「意味はサッカーのと同じッス。ガンダムヲタク、通称ガノタの中でもマナーの悪い連中を指すッス、やってる事はネットでもリアルでもお構いなし作品を叩いたり、叩いてる作品が好きな人を人格否定に持ってつたりする人を指すッス」

「気に入らないガンダム作品を、気に入らないサッカーチームに置き換えればそのままの意味になるね……」

ソウイチに続き、ツチャが説明する。

「節度守ってる人も、合わない作品は不満や文句はやってるよ。無論許されてる場所でだけどね。住み分けが出来てるなら問題はない。それが出来てないフリーガンは俺達ガノタから見ても鼻つまみ者だ。

そして、一番嫌われるのはネットだから許される叩きを『リアルでやっていい』と勘違いした連中、それがガンプラバトルに入ってくるんじゃないかという不安がある。元々ガンプラバトルはガンプラを使う事が絶対条件だからね。それはお金も時間もかかる。逆にそれがフリーガンを抑え込む抑止力になってたと言われている。『面倒だ』って理由でね」

「フリーガンは模型店よりゲーセンの方が出やすいって聞くよ。雰囲気の違いもあるんだろうな」とヒロが付け足した。

「更にフリーガンや違法ビルダーだらけになった場合は多分もつと悲惨になるだろう。何も知らない新参の人達も『ガンプラバトルはガンプラを使わなくていい』

　　と思いでデータで参入する人も増えてしまうかも知れない。だがもしそんな人達ばかりになれば……」

「なれば？」

「最悪、ガンプラバトルというコンテンツ自体が終わる」

　　ツチャの言葉に全員が沈黙する。

「……やはり違法ビルダーというのは間違っているという事です……フリーガンという人種はアイドルファンでもいます……男女問わず……」

　　国民的アイドルグループ『SGOC』のファンのムツミは、アイドルヲタクという分野のフリーガンを知ってる。その経験からツチャの言ってる事は理解出来た。スポーツをやってるムツミのフェア精神としても、違法ビルダーのシステムは許せない様だ。

「そうかな？アタシはアリだと思うけど」

　　タカコだけはなんとも言えない口調で答えた。

「え？タカコ……どうして……？」

　　ムツミが食いつく、

「だってそうでしょ？皆が皆うまくガンプラ作れるわけじゃないし、

写真だってデジカメみたいに簡単に現像出来る様になったんだし、ガン普拉バトルだってそうなってもおかしくないよとアタシは思うなく、皆が皆悪い人ばかりじゃないだろうし」

「フジさん、君が言ってる事も一理あるよ」

ツチャがタカコに話しかける。

「でもガン普拉バトルはあくまで最近出来たガン普拉を楽しむ一つの方法でしかない。ガンプラは作るから愛着が沸く、作るからこんな装備や塗装や汚しにしてみたいというアイディアも浮かぶ、

そして、その想像を形にする楽しさや達成感こそガンプラの、いや、模型の神髄の筈だ。そして形にした物を動かせる感動がガンプラバトルなんだ」

「でも気軽に自由に遊べる方が人も多くなるだろうし……」

「自由と無法は違う。正しく遊ぶにはある程度の規則が必要なんだよ。それが守れないというのなら……」

いつになく饒舌にまくしたてるツチャ、少し萎縮するタカコ

「あ、すまない、少し熱くなり過ぎた。だからガン普拉作りが下手な奴は大人しく負けろってかあ？ サブロウタよお」

『ツ!!』

ツチャの声を男が遮る。ツチャとソウイチの二人の顔が強く強張った。聞き覚えのある声らしい。

「その声……セリト!!」

ツチャが男の名前を言う。ツチャの視線の先に長身の男の姿が見えた。

「よう！久しぶりだなあ！ サブロウタ！ ソウイチ！」

笑うセリトと呼ばれた男。それを強く睨みつけるソウイチ、対して冷ややかな目で見るツチャ、

「誰？ あの人」

「ヤタテさん、カモザワ・セリト、一年半前までここで活動していたビルダーツス、嫌な性格すぎてキレたコンドウさんにぶん殴られて追い出されましたけどね」

苦虫を噛み潰した様に言うソウイチ、相当彼に苦い思いがある様

子だ。

「ケツ。お前をいじるのは楽しかったぜソウイチ！コンドウがいなくなってもナンバー一になれないか、相変わらずお前は弱えまんまだな」

「っ!!この!!」

飛びかかろうとするソウイチ、それを片手を横に、ソウイチの目の前に突出し止めるツチャ、

「相変わらずだな、その暴言癖、大方コンドウさんがいなくなつて戻ってきたって所か？」

「そうともサブロウタ、お前に復讐するためにな」

復讐という言葉にアイは首をかしげる。

「そして、その女」

カモザワはアイを指さす。

「私？」

「女がここの一番のビルダーになるなんざ相当ここのレベルは劣化したみたいだな。よっぽどコンドウは運が悪いみてえだな」

ガンプラの出来をどうこう言うより作品で判別する態度にアイはムツと来る。

「最っ低……」

ナナが怒りの表情を見せる。そんなナナにソウイチが告げ口する。

「ああやって人格否定にすぐ持つていく。だから追い出されたんス。コンドウさんに」

アイ以上に不機嫌そうにフリーガンを見つめるナナ、そんなナナにツチャが告げ足す。

「でもハジメさん、俺やソウイチ、ヤタテさんもガノタだ。オタク全員がああだと思わないで欲しい」

そんなフォローをお構いなしにカモザワは喋りをやめない。

「言いたい放題だな。お前を倒してここの一番に帰り咲いてやるのさ。その為に力も仲間もある」

そしてもう一人、少年がアイ達の前に現れる。アイはカモザワの脇にいた少年の顔を見て驚いた。知ってる顔だからだ。

「?コウタ君?!なんで君はそこにいるの?」

さつき挑戦してきたコウタだ。

「アイさん、今までの俺は間違っていた。またあなたに挑戦します!今度は負けない!」

「だそうだ。勝負は2対2、女とサブロウタの二人だ」

「なんだかよく分からないけど、いいよ」と了承するアイ、そして「いいだろう」と答えるツチャ。二人の目はいつものガンプラを楽しむ目ではなかった。

……

そしてバトルに移行する。フィールドは戦闘により崩壊寸前になった都市だ。さつきの都市のマイナーチェンジとなる。ただし昼の設定で全体に霧が立ち込める。ほぼ別物とっていいだろう。母艦から出たアイとツチャは機体を飛ばしながら敵を探す。

「霧が濃いな……」

「嫌な予感がします……」

そうアイが言うとGポッドに警告音が響く。霧の中から泡をまとった様な大型ビームが振り下ろされてくる。

「あのビームは!!」

アイとツチャはそれぞれ左右に回避する。すぐさま二人は撃つてきた場所に撃つ。ビームは霧を吹き飛ばし対象へ向かった。二機の攻撃が着弾したと思ったら、ビームが弾ける様に拡散するのが見えた。防がれたらしい。そして霧を吹き飛ばした事により敵の正体が見えた。

細長い体躯、しかし左腕だけは以上に大きくなってる。なにより五角形のパーツが全身についた黒い機体、それは……

「ネフィリムガンダム!!」

第31話でアイと激闘を繰り広げたガンダムだ。五角形のパーツはifs(イフス)ユニットと言って、ビームを蓄えることが出来る。それを利用し、左手のクローを攻撃、防御に転用出来るのが特徴だ。そしてこの機体はガンプラではなくデータの塊だ。

「その機体!お前データを買ったのか?!」

「そうさ！・店は限られてるがもう販売はしてる！ガンプラみたいにも面倒な作成もなしでいいもんだぜえ!!そしてそれはこれだけじゃない！」

直後、アイ達の上空からビームや実弾の雨が降ってくる。下がって回避するユニコーン、そして分離し回避するツチヤのバウ、さつき撃ってきた拍子で上の霧が晴れた。撃ってきた上空を見るとアイは絶句する。

「あれは…ビギニングガンダム!?!」

撃ってきたのはかつてアイが強く影響を受けたイレイ・ハルの機体『ビギニングガンダム』。黒く塗装され、ツインアイは一つ目のモノアイになっておりV字のアンテナは無くなっていた。それが3機もいた。コウタのビギニングはドラグーンという遠隔操作武器が背中についていた。

随伴期の背中には『パワードアームズパワーダー』というサブアームと大型射撃武器を組み合わせた装備があった。

「その二機は護衛の無人機さ！オートで動いてくれて勝手に援護してくれるんだと！お前は俺を含めて4機まとめて相手しなきゃいけないってわけだあ！」

カモザワが叫ぶ、そしてなおも続く射撃の雨、回避しながらアイはビギニングへとビームガンを撃ち返す。しかしビームは前面に出てきたビギニングにシールドで防がれる。

「防いだ?!」

「シグーのままじゃ防げなかっただろうな。だけど今なら！」

防いだのはコウタのビギニングだ。なおもビギニング達の一斉射撃は続く。

「コウタ君！本当に違法ビルダーになっちゃったの?!」

「そうですよ！このビギニングはデータだ！」

アイはユニコーンで上空に飛び上がる。両肩のビームサーベルを発生させ、射撃の中を掻い潜りながら両腕の火器を撃ちまくる。コウタ以外の無人ビギニングはあつという間に二機落とす。アイは残ったコウタのビギニングに右肩のビームサーベルで斬りかかる。それ

をビームサーベルで受けるコウタ。

「避けようとしたらあつという間だ！やはり強いねアイさん！だけど！」

「君だって実力はあるよ！そんなデータの塊にどうして！」

「作ってるのが……ミジメになつたんだ！」

後ろへ下がるビギニング。コウタはシールドから二本のビームサーベルを取り出すと片手に計三本のビームサーベルを構える。指の間でビームサーベルを持つビギニング独自の持ち方だ。直後、持ったマニピュレーターがまばゆく輝いた。

「ビームサーベルが?!」

「シャイニング！ビームサーベル！」

そのまま斬りかかるビギニング。ただのビームサーベルじゃないとアイは両肩のビームサーベルを交差させシャイニングビームサーベルを受け止める。ビームの接触によりスパークが起こる。スパーク量はシャイニングビームサーベルの威力を物語っていた。

「くっ！なんて威力！」

「凄い！凄いよ！これが俺の欲しかった力だ！」

「何?!」

そしてこちらはツチャの方。上半身（バウ・アタッカー）と下半身（バウ・ナッター）をそれぞれ戦闘機のような飛行形態に分離変形させネフィリムと戦うツチャ。

「お前がコウタ君をそそのかしたのか！」

バウ・アタッカーを動かしたりライフルをネフィリムに連射するツチャ、カモザワのネフィリムは左手から防御フィールドを展開、悠々と防御する。

「違うね！悔しそうな彼を救ってあげただけさ！」

「何を！」

「あのガキは自分が強くなりたがってた！聞けばあの女に挑戦する度にガンプラの完成度を上げていたそうじゃないか！でも圧倒されっぱなしだった！その度にミジメな思いをしてきた！目標に勝てない

なら自分は何の為にガンプラを作ってたんだ!とな!

ネフィリムは背中のコンテナからミサイルを撃ってくる。旋回し
かわすツチャ。すかさず撃ち返す。

「だからって彼を違法ビルダーにするなんて!」

「俺達は新世代ビルダーだ!ならそんな手の込んだ機体に乗ったお前
はなんだ!」

「何を?!」

「大人げないだろうが!自分だけいい機体に乗って好き勝手暴れる!
そんなのが作れるにしたって卑怯だ!それが原因で作る意欲を削が
れる奴がどれだけいると思ってる!」

ツチャはミサイルを迎撃しながらカモザワと問答を繰り返す。カ
モザワもミサイルとビームを併用しつつツチャを追いつめようとす
る。『あまりにもうまい作品は、経験の少ない人のプライドを砕き、作
る意欲もそぎ落とす事もある』これは以前アイが別の違法ビルダーに
言われた事と同じだった。

「現にあのガキが新世代ビルダーになった理由はあの女にあるんだよ
!お前が俺を裏切った様に!俺達はその復讐をするのさ!」

「人として最低の事をやったお前が言えた事か!!」

またもビームを撃つバウ・アタッカー、それをクローで防ぐネフィ
リム。だがネフィリムの背中はがら空きだ。直後、ネフィリムの背後
からバウの下半身、バウ・ナッターが霧を突き破り突っ込んでくる。
進行方向はネフィリムの背中。

「何!?!」

カモザワが気づく。だが回避は間に合わないとツチャは確信する。
「ビームには無敵のif sユニットでも!実体兵器なら防げないだろ
う!」

駄目押しとしてツチャのバウ・アタッカーも攻撃を続ける。挟み撃
ちだ。

「そうかい。だが甘いな」

その時、ツチャのGポッドに警告音が響く。

「?!」

直後、バウ・アタツカーとバウ・ナツターが真上から撃たれる。そのまま墜落するバウ・アタツカー、バウ・ナツターの方はネフィリムのクローに掴まれた。

「何が起きた…あー!」

ツチャは上を見て声を上げた。パワードアームズパワーダーを装備した一つ目のビギニングがもう二体いたのだ。霧の中に隠れていたのだろう。

「紹介が遅れたな。俺の随伴機の量産型ビギニングだ。無人機だけ?」

自慢げに言うとかモザワのネフィリムをバウ・ナツターを握りつぶした。

こちらは少し時間を戻してアイの方だ。ユニコーンはシャイニングビームサーベルを受けるも、決定打にはならない。両肩を全開させビギニングを弾くユニコーン。ビギニングはドラグーンを展開させユニコーンを追いつめようとする。

「やっぱりいいな!俺が作ったガンプラより強い!」

対するユニコーンは軽快に動き、両手の火器でドラグーンを撃ち落して行く。

「でもそのビギニングはあなたの作った物どころか!ガンプラですらない!こんなの間違ってるよ!」

「そんな強い機体に、強い実力を持ったアンタが言うか!!」

全てのドラグーンを撃ち落した後、ビギニングは普通に斬りかかってくる。アイはそれをビームサーベルで受ける。

「シグー乗ってた時の方がアナタは強かったよ!」

「何を言ってる?!ステータスはこっちの方が上だ!」

「でもシグーの方が気持ちはこもってた!」

パワーはユニコーンの方が上だ。ビギニングは押される。

「クツ!気持ちだけで何が変わるって言うんだ!!」

一度下がり相対する二機、お互いビームサーベルを構える。

「変わるよ。バトルで操縦や出来は重要だろうけど、一番重要なのは、

それだけじゃない！」

アイのユニコーン、その緑のサイコフレームの輝きが増す。アイの気迫にユニコーンが同調してるのだ。ガンプラに込めた気持ちや情熱で性能のブーストがかかるのがガンプラバトル独自のシステム。

オカルト的な不確かな要素ではあるが、それこそがガンプラバトルをただの性能競争で済まさない新世代ホビーとする面白さの要因だった。サイコフレームの輝きに応える様に両肩のビームサーベルの出力も上がる！

「なんだ！この力は！」

「力の芯になるのは心！心の通ってないガンプラなんかに！」

そのままユニコーンはビギニングに突っ込みながら数倍の大ききになったビームサーベルを振り下ろした。

「負けやしないっ!!」

「くうっ！シャ！シャイニングビームサーベル!!」

再びぶつかり合う光の剣、今度はすぐにビギニングのシャイニングビームサーベルに亀裂が入る。そのまま剣を砕かれたビギニングはユニコーンのビームサーベルに飲み込まれた。

「ばー馬鹿なああっ!!」

そのままビギニングは消滅。誰かが作ったものではなく、データではただのNPCと変わらなかった。その直後、アイのヘルメットからツチヤの叫びが聞こえた。

「ぐああっ！」

「ツチヤさんがっ!？」

見るとネフィリムがバウ・ナッターを握りつぶしたのが、そしてバウ・アタツカーが墜落したのが見えた。このままではツチヤはやられてしまう。そうはさせまいとアイはネフィリムの方に飛ぶ。

「ツチヤさんっ!!」

「あん？あの女か！」

アイに気づいたカモザワは無人のビギニングをけしかける。

「邪魔をするなああ!!」

アイはビギニング二体をそのまま横一文字に斬り裂く。「馬鹿な

！』と叫ぶカモザワ、そのままアイはネフィリムに巨大化したままのビームサーベルを振り下ろした。

「な！なんなんだ！こいつはあ!!」

アイの底知れない気迫に恐怖するカモザワ、ネフィリムは最大出力でフィールドを展開し、ビームサーベルを受け止める。が、直後にネフィリムのフィールドは消失。何故ならネフィリムのフィールド発生部であるクロウ。その肘関節が切り落とされたのだ。

「な！なんで！いきなりネフィリムの腕が！ハッ！まさか！」

カモザワはツチャの方を見る。上半身だけになったツチャのバウが投げ、戻ってきたビームブーメランを手に取るのが見えた。アイに気を取られている内に上半身だけになったツチャのバウが投げたのだろう。

「残念だったな！お前の腕前じゃもう一番にはなれないぜ！セリト！」

「この！裏切り者がああ!!」

カモザワのネフィリムはそのまま爆散、バトルはアイとツチャの勝利となった。

……

「ビギニングに乗り換えても、勝てないのか……俺は」

Gポッドから出たコウタはその場に膝をついた。

「……データの塊じゃ魂を込める事は出来ないよ。コウタ君」

アイは真剣な顔でコウタに話しかけた。コウタは無言のまままだだが聞いてると判断したアイはそのまま話を続ける。

「あんな無茶な方法で強くなろうとしたって、いきなり強くなる事は出来ないよ。でも時間をかければあなたはもつともつと強くなれる。私がさつきやったのだって、努力し続ければきつと出来るよ……」

「……でも、時間はないんだ！俺は引越す前に強くなりたいんだ！」
「それでも……、やっちゃいけない事をやっていい理由にはならないだろう」とツチャ

「私は君が違法ビルダーになった思い出なんて、作りたくないよ。私は君と楽しい思い出が作りたいたんだもの」

その言葉にコウタの体がピクツと揺れる。

「アイさん……」

「騙されるなよ！コウタ！」

アイとコウタの話にカモザワが割って入る。「セリト！」とツチャが叫んだ。

「そいつらは適当な事言ってるだけだ！お前が強くならなかつた時の事なんか何も考えちゃいない！」

「そんな……アイさんはそんな事……」

「それよりも俺がもつと強い機体を用意してやる！さつきみたいな女のインチキが出来るような機体をだ！そうすりやお前はもつと確実に強くなれる！」

「セリト！お前そこまで落ちたのか！」

「俺が落ちただと？うるさいサブロウタ！お前だって俺と同じ叩きが生きがいなガノタだったろうが！」

『え？』

カモザワの言葉に多くの人間が凍りついた。

「……俺、行きます」

そしてコウタはカモザワの提案を了承する。

「コウタ君……!?!」

「アイさん、ごめんなさい……でもあなたは俺の憧れなんです……。あなたの事が……だからこそ引越す前に……」

「待てよ二人とも！」

アイ達7人はその場を離れようとするカモザワとコウタを捕まえようとする。が、二人は一斉に走り出す。その時、コウタのシグーが靴から落ちた。

「あ！シグーが！」

「駄目だ！捕まるぞ！」

アイ達が迫ってきてる。拾ってたら捕まるだろう。コウタは少しだけためらう素振りを見せるが、すぐにカモザワとその場を後にした。

「明日の昼！またバトルしましょう！次こそは！」

一方的な言葉とシグーだけを残して。後にはそれに加え嫌な空気だけが残った。

「……くっ！ちよつとツチャヤさん！アイツの言った事！本当だったの?!」

ナナはツチャヤに食ってかかる。

「……本当だ」

「ハジメさん、言いたい事はわかるツス。でも信じてほしいツス。ツチャヤさんは信用できる人ツスよ」

「……アサダ」

「そうだね」ヒロも続く

「コンドウさんやソウイチ君がずっと一緒にいて不満を出さなかったんだ。サブロウタさんは信頼できる人のはずだよ」

ナナは思い出した。以前ツチャヤ達のチームを纏めていたリーダー『コンドウ・シヨウゴ』彼とツチャヤは長い付き合いだ。コンドウは真面目な人柄の男だ。ツチャヤが悪い人のままなら付き合いを続ける事はないだろうとナナは考えた。

「……そうね。コンドウのオッサンが信頼していたのがツチャヤさんだもの。アタシも信じるよ」

「そう言ってくれると助かるよ」

そしてツチャヤは真剣な顔で皆に言う。

「明日のバトル、もう一度俺は出るよ。あいつ等が越えてはいけないラインを越えたという事を教えなければ」

「そうですよ。やりましょう」

ツチャヤにアイが続く、アイは床に落ちたコウタのシグーを手に取り、同じく真剣な顔で言った。

「私達には私達のやり方があるんだから」

第39話 「変わった友、変われなかった友（後編）」
（アツシマー・デコレーション登場）

かつてコンドウに追い出されたビルダー、カモザワ・セリト、彼は違法ビルダーとなつて戻つてきた。行き詰つた少年ビルダー、コウタを連れて……、アイ達はバトルで対決し、勝利するもコウタを救う事は出来なかつた。

そしてカモザワはツチャの過去を一部話しながら翌日の再戦を取り付けたのだ。

——あのガンダム作品は駄目な出来だな。主人公にとっても感情移入出来ねえよ！——

——そうだな。セリト君がいうならそうなんだろうな——

——おーそうだけサブロウタ！——

……

——おい！絶交つてどういうつもりだ！——

——僕が好きなガンダム作品、お構いなしに叩いてたろ？それ意外にも下に見るような発言ばかり、そんな人と会話したくないよ——

——ま！待てよ！クソツ！裏切りやがって！——

——セリト君、僕は君を裏切らないよ——

——……ありがとよ。サブロウタ——

……

——もう俺につきまとうなよ！サブロウタ！——

——セリト、どうしてそんな事言うの？親が離婚して辛いのは分かるよ。でも俺達は友達だろう？——

——それで母ちゃんの実家に引き取られる事になった。……それで引つ越さなきゃいけないくなつた——

——え？——

——仲直りするから大丈夫だつて父ちゃんも母ちゃんも、先生もオバちゃんも言つてた。それなのに駄目だ。皆俺を裏切りやがる——

……俺は裏切らないよ、セリト、ずっと俺達は友達だ……

——おい久しぶり！サブロウタ！この街に戻ってきたぜ！——

——セリト！セリトじゃないか！もう何年ぶりだろう！——

——まだガンダム好きなのか!?俺も相変わらず好きだぜ！——

——当然俺もだよ！あ！そうだ！セリト！お前を誘いたかったんだ！——

——なんだ？——

——俺達ガンプラバトルのチーム！入らないか?!——

「……ん」

眠っていたツチャは目を覚ます。ツチャの自室だ。何があつたか思い出す。今日の再戦に備え、新作の仕上げが終わった時。机に突っ伏した体勢で寝てしまったらしい。窓から朝日が差し込んでいた。

——そうか……完成した安心感からそのまま寝てしまったんだ

……

顔の下に腕を敷いてた体勢で寝ていた所為か、腕がビリビリする。痺れをこらえながら、机の上の新作をツチャは見る。両肩と背中にならイトニングバックウエポンシステムを取り付けたアツシマーだ。

——俺は、あいつが引越した後、ガンプラを始め、入れ違いに理不尽なガンダム作品叩きをしなくなった。叩いてるよりガンプラに没頭してる方が楽しかったからだ……。当然セリトもある程度大人になって、分別がついて叩かない様になったと俺は勝手に思った。……あんな事になるなんて……

そしてこちらはアイの方

「ううん……ふああ……」

ベッドで寝ていたアイは上半身を起こし、机の上のガンプラを見る。今日のバトルで使うガンプラだ。

「気合、入れていくかな」

そして身支度を整え、服を着替えると、机の引き出しを開けて、小

さな箱を取り出す。

「昔を思い出してしんみりしちゃうから、出したくなかったんだけど……。今の私はもう自分のチームを持つリーダーだから……」

箱を空けると中にはヘアゴムがあった。ガンダムのマスコット、『ハロ』とその変種『サイコハロ』のボンボンがついていた。

「だから、気合を分けて、ノドカ……」

誰かの名前を呟くと、アイはヘアゴムをくわえ後頭部の髪を纏めだした。

……

そして昼、対戦すべくアイとツチャの二人は集まる。周りのアイの仲間は昨日と同じだ。

「あれ？珍しいねアイ、ヘアゴムつけたんだ」

アイの髪型に気づいたナナが指摘する。

「昔の友達にもらったんだ。引越すときにね。思い出したからつけてみたの」

「あーそういえばアイって今年の頭に引越してきたんだっけ、すっかり忘れてたわ」

と、そうこうしてる内に相手の二人がやってきた。カモザワとコウタだ。

「昨日は不覚をとったが今日は負けねえ、もうお前らは必要ないって教えてやるぜ」

「その台詞、そっくり返すぞ」

ツチャとカモザワの二人が対峙し火花を散らす。

「アイさん、今日こそあなたに勝つ！今日の機体なら！あなたとも互角だー！」

「……機体だけ強くしたって、駄目だってもう解ってるでしょ……？」
コウタも同様気合を入れる。反面アイの方は冷ややかだった。

そしてバトルが始まった。宇宙のフィールドにアイの機体が飛ぶ。いつものパーフェクトユニコーンガンダムではない、その機体は……
「来たっ！」

と、相手が撃つたであろう一斉放火が始まる。ミサイル、連射型のビームに高出力の大型ビームが連続でアイめがけて来る。

「この量、一機の砲撃じゃない！でもこの攻撃、どこかで……」

と、Gポッドに警告音が走る。アイも同時に『上から来る！』と判断、機体をバックステップの要領でかわす。

「かわしたか！さすがはアイさん！……何っ！」

「その声！コウタ君！えっ！」

お互いが相手の機体を見て驚いた。なぜなら、

「その機体、俺のシグダークマターに乗ってるのか?!」

「あなたこそ！私のパーフェクトユニコーンのデータをコピーしたの?!」

「その通り！」

コウタでない声が響いた。別のビルダーだ。同時に攻撃がやむ。そして数機の敵機が集まってくる。アイの敵機は全機、アイが昨日使ってたパーフェクトユニコーン（以下ユニコーン）だった。

アイの使ってた物との違いはボディを走るライン、サイコフレイムの色が赤くなっている事だろうか。しかもその数は以前より遥かに多い、コウタ含め12機は見えた。

「数が多すぎる！これで私と戦えと！」

前回同様、一機につき護衛の無人機が二機いた。

「その通りだ！安っぽいシグーだな！」

コウタの仲間の違法ビルダーが乗ってるユニコーンが一斉に前に出る。そして撃ってきた。アイはかわしながら前に突っ込む。

「あなたの仲間のシグーだよ!!」

「だが俺達が乗ってる機体はお前が一番よく知ってるだろう！勝てるわけねえだろ!!ましてや、そんなのシグーに！」

そう言った違法ビルダーは無人のユニコーンを二体けしかける。無人機はビームトンファアで斬りかかってきた。それをアイはダークマターライフルの、左手首のビームサーベル計二本で受け止める。

「初対面で差別?!」

「ガンπρα作ってバトルなんざ女子供もやってる遊びだつて事だ！」

——またこういう奴か——と心で舌打ちするアイ。

と、シグーと無人のユニコーンが鏝迫り合いの最中にユニコーンの背後から、違法ビルダーのユニコーンが、シグーを撃ってくる。

「あっー！」

アイが声を上げる。が、狙い撃ちしたのはユニコーンへだ。無人機だから貫通させてシグーごと葬り去ろうという魂胆だ。ユニコーンの爆発はシグーを包み込んだ。間髪いれずにユニコーンに撃ち続ける違法ビルダー。

「ガンダムはなあ！戦争を扱った硬派なドラマなんだよ！ガンダムは俺みたいなむせる硬派なファンだけでいいんだ！」

そんな自分に酔った発言が他人によく見えるはずがない。見ていたナナ達7人は不快な気持ちだった。

「自己陶醉じゃん。あれもフリーガンて奴？」

「最近はそういうのも少なくなってきたんだがな」とブスジマ。

「自分が異常だつて気づかないのあいつら」

「気付いてないんだよナナ……。ああいうのは自分が気づかないうちになつてるんだもの……」

ムツミは淡々とモニターを見ながら呟いた。

「でも呑気だね皆、アイちゃんやられちゃったかもしれないのに」とタカコ

「タカコ……君はアイちゃんがあれ位でやられると思つてたの……？」

「まつさかく」といわんばかりにタカコは呑気な顔で首を横に振った。

「ハハハ！やつぱり機体の性能だけに頼つてた女だったな！」

アイ達が戦つてる遠くでネフィリムに乗ったカモザワが笑つていた。

「そう見えるならやはりお前の目は節穴だな」

「!？」

ツチヤの声だ。どこにいる！と見回すカモザワ、見ると上にツチヤ

の乗った新型が見えた。『機動戦士Ζガンダム』に登場した機体、アツシマー。

妙に厚ぼつたい体躯をしているがそれもその筈、変形でパンケーキの様な形状に姿を変える機構を持った機体だ。ツチヤのアツシマーは、背中にライトニングブースターという支援機と合体していた。

「サブロウタアア!!」

「アツシマー・デコレーション!出るぞ!!」

ネフィリムで襲い掛かるカモザワ、そしてこちらもアイのユニコーンのコピー機が随伴し襲い掛かってきた。ツチヤもビームライフルを向け、応戦する、こちらでも戦闘が始まった。

そしてこちらは再びアイの方、爆発が収まるとシグラーの姿はなく、違法ビルダー達はもう倒したと思ひ込んでいた。

「ハハハ!俺みたいなのが人間が集まってガンプラバトルを硬派に変えてやる!」

「ふーん、じゃあこつちもそれなりの態度で対応しなきゃねえ」

「!?!」

アイの声が聞こえた。それもちよつといつもより冷たい響きで。硬派気取りのフリーガンが声のする方。後ろを見るとアイのシグラーが無傷でその場にいた。

「アイさん!」

コウタの安堵した声が響く。

「この!女がああ!!」

またもフリーガンのユニコーンがシグラーに向けて全火器を発射する。シグラーはそれを掻い潜りながら右手のダークマターライフルを撃つ。距離を詰めながらユニコーンのビームマグナムとビームガン、ガトリング、ビームキャノンが破損、どんどん武器は失われていった。

「アッ!アッ!」

そこへ別の違法ビルダーのユニコーンが救援に来た。

「お!お前ら!ちようどいい!俺は下がる!後は任せた!」

そそくさと後退しながらフリーガンは違法ビルダー達に命令した。「戦場の厳しさを教えてやるよ!」

そう言いながらさつきとは別の違法ビルダーの乗ったユニコーン達が撃ってくる。しかしシグーは複数の射撃も難なくかわす。

「……大口たたいておいて射撃全然へたくソじやん」

冷めた口調で呆れるアイ、そして弾幕を掻い潜りながら撃っていた一機のユニコーンに接近、あらかじめ左手に持っていたダークマターブレイドで近かったユニコーンの腹部を一刀両断。ユニコーン一機は爆発。

「弱いね。他もこんなもん?」

——やっぱり商品な所為か、前と違って再生能力はないみたい——
そう思いながらアイが呟くと、二機のユニコーンがビームトンファーで斬りかかってくる。

「このアマアア!!!」

——パワーじゃ適わないけど——

「話しかけないでくれる?汚い言葉で」

まず一機目のユニコーンがシグー目掛けて縦にビームトンファアを振る。しかしシグーは横に回避、すかさずビームサーベルでコクピット目掛けてビームサーベルを突き刺した。一機目はそのまま沈黙。

直後背後から二機目のユニコーンがビームトンファアを横に薙ぎ払う。これでシグーは破壊したと違法ビルダーは思う。だがシグーは身を屈めて回避、アイはそのままシグー本体を横に一回転させる。シグーの背中の右側にはダークマターブレイドがマウントされていた。

——小回りはききやすいんだよね——

ウイング状にマウントしたままとはいえ。武器を振り回す事には変わりない。背中のダークマターブレイドはユニコーンを引き裂く。手に持っていないくとも切れ味は変わらなかった。と、

遠距離からまた複数のユニコーンが撃ってきた。こちらが遠距離

攻撃に乏しいと知っているのだろう。すぐさま向かおうとするアイ、しかし後方から別のユニコーンが撃ちながら追いかけてくる。

「邪魔だなあ」

アイはダークマターブースター先端部（◇の形をした部分）からGNキャノンを発射、シグーに装着している場合は下側をむいてるGNキャノンはユニコーンに真つすぐ向かう。出力は落としてはいたがユニコーンの胸部、コクピットを貫通しユニコーンは爆散。悲鳴を上げるフリーガンだがそれがアイの耳にとって心地いい。

——なんだろう。ゾクゾクしちゃう。きつとバトルの熱だね——

そう勘違いしつつアイは、後ろに目もくれず前方のユニコーンに斬りかかった。冷淡を装いながらも、自分の表情がSっ気全開になりつつある事も知らずに、

「うひょく、強えぜアイちゃん」

観戦モニターを見ていたブスジマが感心した。

「でもアイちゃん……なんかいつも様子が違うよ……」

ムツミがモニター越しのアイの顔を見て違和感を感じる。フリーガンの悲鳴を聞くとき、とても楽しそうなしかし邪悪な笑顔をしていた。

「あ、そういえばあの顔前にもあったじゃない。あ、これだ」

そう言いながらタカコがデジカメに保存してある写真を皆に見せた。以前アイがバトルで小学生の悪ガキビルダーにセクハラの挑発を受けまくってた時の事だ。キレたアイは相手の股間を爆熱ゴッドフィンガーでヒートエンドしてしまったのだ（第24話参照）その時のアイの表情はまさに今フリーガンを痛めつけてる時と同じ顔だったのだ。

「つまり……アイちゃんは今キレてるって事か？」

上記の説明を受けたブスジマとツクイ、そしてツクイが疑問を口にした。

「ううん。あれ位じゃアイはキレませんよ。今までだって嫌な相手にも普通に対応してたんだもの」

「多分フリーガン狩りを楽しんでるんだと思います……」

ナナが推測をそしてムツミが予想を口にする。実際その通りだった。

「どSだったんだなアイちゃん。よっぽどフリーガン共が嫌いなのかもしれねえぜ」

「あれじゃ多分自覚ないですよ！アイちゃん自分の性癖」

視線をアイの戦場に戻そう。

「凄い……あれが俺のシグーの動きなのか」

コウタは攻撃を忘れながら、茫然とシグーの動きを遠巻きに見ていた。あれだけ自分を圧倒したユニコーンをあつという間に殲滅するシグー、それもブースト状態のトランザムシステムを使つてない状態で、だ。敵対してないならこれ程見て嬉しいう事はないだろう。

遠くでシグーが、ダークマターライフルでユニコーンのコクピットを撃ちぬいたのが見えた。

「最初のフリーガンはどっかいつちやつたけど、見えてる限り後はあなただけ」

アイは残りのユニコーン目掛けてダークマターライフルを撃ちながら接近する。

「くっ！アイさん!!」

コウタはダークマターライフルをかわすと両手の武装で撃ち返す。これもアイはかわすが、この時アイは相手がコウタと気づいたようだ。

「!?コウタ君!」

アイの口調と表情が元に戻る。

「さすがだよ！俺のシグーであんなたくさんユニコーンを殲滅した！」

「これで解つたでしょう?!データの塊じゃ性能高かったって実力を発揮できない！でも心さえ！魂さえあれば！実力を100パーセント以上発揮できる！あなたのシグーだつてこんなに強いんだよ!?!そしてあなたも!」

「その上から視線を!!やめろおお!!」

激昂したコウタのユニコーンはビームトンファアを大きく振り下ろす。無言のアイは右腕のビームサーベルで受け止めた。

「それだっておごりじゃないか!!こっちがどれだけ苦しんだかもしれないで!!」

パワー自体はユニコーンの方が上だ。シグアの腕がきしむ。

「……そうかもね、私のエゴかもしれない、でも……何度もバトルしてきたあなただもの。私には解るよ!今データに乗ってるあなたが一番弱いよ!」

アイのシグアが赤くなる。トランザムだ。増したパワーでユニコーンを弾き飛ばす。

「うあつ!」

大きく飛ばされたユニコーンだが、すぐ体勢を立て直しビームキャノンで応戦。軽くかわすアイ、ビームキャノンは後ろの小惑星に当たり小惑星は爆発、コウタの機体では味わったことのない威力だった。

「あんたは!やっぱり酷い人だ!口ではああ言っておいて!でも自分だけこんな凄い機体に乗って!!」

「それはこのシグアだって同じだよ!自分で動かして確信した!このシグアはさ、あなたのステップアップに応えたくて一生懸命だったんだ!だから強い!」

反撃せず説得しようとするアイ、この間もトランザムは続いていた。

「あなたがもつと強くなりたい、うまくなりたいって意思を続けければ、このシグアだって答え続けてくれるよ!でもそれには時間が必要なの!」

「でも……でも……!もう俺は引越す!そしたらもうあんたには会えない!俺はガンプラは好きだけど!……あんたは俺の初恋なんです!」

「え?!」

コウタの言葉に驚くアイ、なお観戦してる全員にもバツチリその声は聞こえた。

「でもアンタに会えなくなったら強くなっても意味がない！アンタにいい所を見せたかった！アイさんが忘れない思い出を作りたかったんだ!!」

「コ・コウタ君……」

アイは顔を赤らめ、一瞬申し訳なさそうな顔をする。しかしすぐ真剣な表情に戻す。

「このバトル終わったらさ。シグーの調整とかバトルのレクチャー、一緒にやろうよ。私でよければ知ってる事全部教えるから、あなたが忘れなければ、私も忘れないから」

アイだってガンプラをやって嫌な気持ちになってほしくはなかった。アイなりの実力差と思いつきの出の両方を埋める案だった。

「……本当に？忘れないでくれるんですか？」

「うん、だから……」

その時、アイのシグーのトランザムが切れた。そしてペナルティとしてシグーのステータスが大きく低下した。その時だった。コウタのユニコーンがうめき声をあげる。

次の瞬間、コウタのユニコーンのコクピット部からビームサーベルが生えた。コウタのユニコーンが背中から突き刺されたのだ。これによりコウタのユニコーンは撃破扱いとなる。

「コウタ君!!」

「敵と戯れるんじゃないよ」

刺したのは最初に武装をつぶしたユニコーンだった。乗ってるのはさっきの硬派言っていた男だ。

「仲間に対して!」

「ああ？敵と慣れ合った腰抜けを処分しただけだろうが、あのまま続けても呆けてお前を倒せなかったらうよ。なら」

そう言うとフリーガンのユニコーンはコウタのユニコーンの両手の武器を外し自分に付け替えた。

「こうやって武器のスペアになってくれりや十分役に立ったぜ。更にお前はトランザムが切れて性能も落ちてるからな！お前を倒せば硬派な俺は有名人だ!!」

「待つ事も戦術だ」そう言いながらフリーガンのユニコーンは新調した両手の武器をアイに向けた。

「あんたは人間のクズだね。最低野郎。いやただの『最低』か」
「あ？」

「……最初の内に片付けとくべきだったよ。いたぶりたかったけど。もういいや」

フリーガンは武器のトリガーを引こうとする。が、その瞬間。アイがダークマターブレイドをユニコーン目掛けて投げる。ダークマターブレイドはユニコーンの右肩の付け根を貫通。ユニコーンの右腕が舞った。

「なっ!!」

たじろくフリーガン、気を取り直しガトリングを撃とうとするがすでにアイのシグーは目の前にいた。直後、左腕の肘から下が舞った。シグーがビームサーベルで斬り裂いたのだ。

「弱いね。常識も勇気も無くて何が硬派？」

「っ!!貴様!!」

女に馬鹿にされた、それも鼻で笑って。激昂したフリーガンが左肩のビームサーベルで斬りかかってくる。シグーは左手首のビームサーベルで受け止める。だがトランザムの影響でシグーのパワーはさつきより落ちていた。勝てるかと確信するフリーガン。だがシグーの腕は動かない。パワー負けはしてないのだ。

「な！何故だ！何故パワーで押せない!!」

「負けられないんだよ……。コウタ君のシグーの強さの証明……。負けたら申し訳ないでしょ？」

アイの魂は大きく燃え上がる。シグーはそれを通じ力となっていた。そして右腕のダークマターライフルをユニコーンに向けて連射、ビームは左肩と両足、そして頭部に的確に当たり破壊。

自分で作ったのだ。構造上弱い所ばかり狙うのはたやすい。そして蹴りを入れ、近くの小惑星に落とす。

「ぐあっっ!!よ！よくも!!」

残ったユニコーンの胸部、コクピットをシグーが踏みつける。フリー

リガンのGポッドに軋む演出が起こった。

「よーよくも!!よくも初心者俺にこんな初心者狩りみたいな事しやがったな!!辞めてやる!お前らが俺みたいな新世代ビルダーの初心者の心を傷つけて!どんどん人口を減らしてくんだ!!お前らの所為でガンプラバトルは終わる!!」

「いなくなるんだ。じゃあ願ってもないね」

アイはためらいもせずに踏んづけた足に力を入れる。アイの表情はとてもいい笑顔だった。そっけないアイの言葉だったが、フリーガンにはアイの全てが恐ろしく感じた。

「ひっ!!やー!やめっ!」

「あなたいらない」

プラスチックの碎ける音を立て、ユニコーンは完全に破壊、この近辺はアイのシグーだけが残った。

「ツチャさんの方は?」

アイはツチャのいるであろう方向を見る。戦ってるであろうビームと爆発の光が見えた。

「あそこか!」

アイはそのまま飛び立った。

そしてツチャの方のバトルだ。アイに劣る実力のツチャとはいえ、フリーガンのユニコーンに遅れは取らない。

「このっ!!」

ユニコーンがアツシマー・デコレーション（以下アツシマー）を撃ち落そうと撃つが、円盤状に変形したアツシマーは軽くかわしユニコーンの目の前に迫る。

「あつ!アツシマーがああ!!」

叫ぶビルダー、直後ユニコーンはライフルに撃ちぬかれ爆散する。

「これで残るはお前だけだ!セリト!」

「馬鹿な!!あれだけの高性能のユニコーンが!」

「諦めろ!!お前のやり方では長く持つもんか!!」

再び人型に変形したアツシマーは左手にをトマホークに持ち替え、ネフィリムに斬りかかる。「おのれ!!」と叫びカモザワは左手のフィールドでトマホークを防ぐ。

「俺を裏切ったお前なんかにい！俺を裏切らないって言ったろぅがああ!!」

「そうだな!!俺はお前を裏切った！お前と再会し！コンドウさん達との集まりにお前を誘ったのは俺だ!!」

大声でツチャとカモザワが叫ぶ、お互い溜めた感情を吐き出すかのように、そしてそれはアイや観戦していたメンバーにも聞こえた。

「だがお前は変わっていたなサブロウタ!!」

「俺の方はもつとお前は分別がついてると思ったよ!」

一度離れる二機、ネフィリムはミサイルを撃ち、アツシマーはビームライフルでミサイルを迎撃する。迎撃しそびれたミサイルがアツシマーに向かう。

「チッ!!」

舌打ちするツチャ、変形すると桁外れのスピードでミサイルから回り込み背中のビームガンで迎撃した。そのアツシマーをif sユニットのビームで撃ち落そうとするネフィリム。アツシマーの側面からビームが迫る。

「甘い!!」

ツチャが叫ぶとアツシマーの背部が分離、シールドと合体し支援機へと変わる。ライトニングブースターだ。アツシマーとブースター、二機の間をビームが通った。

「アツシマーが!?!」

そのままネフィリムに迫る二機、両機とも全火力をネフィリムにさらす。ネフィリムはクローのフィールドで攻撃防ぐも、アツシマーの攻撃を防げば、ライトニングブースターが防御出来ない角度から、ライトニングブースターの攻撃を防げば、アツシマーが防御出来ない角度から撃ってくる。

ツチャの二機がネフィリムとすれ違う頃にはネフィリムの左手の

クローが吹き飛んでいた。アツシマーは再合体。ビームライフルをネフィリムに向け、とどめとばかりに撃った。そのままネフィリムは胸を撃ちぬかれた。

「いい加減!!大人になれよっ!!」

「っ!!」

撃ち抜かれたままネフィリムは沈黙する、もう決着はついた。

「ツチャさんー!」とアイのシグーがアツシマーに寄って来た。援護しようとして来たがもう終わっていた。

「ヤタテさん。終わったよこつちも」

「お前だけが……変わったしまった」

「否定しか出来ないのが間違っていると気づいただけだ。お前も……遅くないよ。間違った考えを捨てろよ。コンドウさんに殴られた時、お前も逃げなければもっと早く自分を変えられた筈なのに!」

「今さら……そんな事言うのかよ。俺が殴られた原因!お前がコンドウにチクらなければ!!一人だけ変わって!俺を!俺を置いていくなよ!お!俺をおお!!」

カモザワの絶叫と共にネフィリムは爆散。これにより勝者はアイとツチャの二人となった。

……

Gポッドから出るツチャとアイ、皆が二人の周りに集まってくる。その多くがツチャとカモザワの関係を聞こうとするが

「昔、セリトをコンドウさんのチームに誘ったのは俺だ」

察したのか、はたまた最初から言うつもりだったのか、ツチャは語り出す。

「でもあいつはあの性格のままだった所為か打ち解けることは出来なかった。俺は打ち解けることは出来たけどそれがまずかつたんだろうな。その時、別のチームメイトが二人いたよ。セリトとは馬が合わなかつたんだけどね」

「二人?オツサンの他にビルダーが他にいたの?!」とナナが言う。

「まあね」とツチャは答えた。

『二人のビルダー』というワードはそこにいた多くのメンバーが気に

なった。聞いた事すらなかったからだ。ヒロも聞いてみる。

「僕も知りませんでした。どうなったんですか。それで」

「教えてやるよ!!俺はな!その二人への不満をサブロウタに話した。言うなって言ったのに!あろうことか俺の抱えていた不満をコンドウにチクった!!昔俺に『何があつても裏切らない』そう約束したのだ!!」

パイロットスーツから着替えたカモザワがツチャの話に割って入る。その隣にはコウタともう一人いた。ツチャはそのまま話を続けた。

「相談のつもりだった!」

「完全にお前の心はコンドウの側に行った!ソウイチにも当り散らした俺はコンドウに追い出された!結果的にサブロウタは俺を裏切ったんだよ!」

「その後ツチャさんも出て行こうとしたんスけど、コンドウさんから止められたんス。その後に俺が入ってきて現在の『ウルフ』に変わったんス」

自分の含まれた話なのかソウイチも話し始める。

「コンドウのオッサン、いじられ役かと思ったら結構やるわね。そんな過去があつたとは……、あれ?でもツチャさん昔『俺とコンドウさんでチーム始めた』って言ってたような……(第8話参照)」

「鋭いねハジメさん。後者は最初っから言ったらややこしいだろ?」

「で、俺をけなして今の勝利至上主義に変えたのもカモザワさんツス、あんまりしつこかつたんでコンドウさんついにキレちゃつて、鉄拳制裁したらそのまま来なくなつたんスけどね」

「そしてその時、俺はお前との縁を完全に切った」

殴られたカモザワを思い出したのだろう。珍しくソウイチがいたずらっぽく笑う。

「チツ!いいかサブロウタ!女!俺達はこの程度で諦めたりはしない!ガリア大陸は俺達の物だ!!お前からこの店の地位もガンプラバトルも奪い取る!!それが俺の復讐だ!!」

「お前がその気持ちでいる限り、俺達は何度でも叩きのめす」

悪態をつきながらその場を去ろうとするカモザワ、ツチャはそれに冷静に返す。

「……おいサブロウタ。最後に聞かせろ。お前は今でも俺を友達と思ってるか？」

「……悪いけど、縁は切ったままだ」

「……そうかい」

そう言いながらカモザワはその場を後にした。そしてもう一人が前に出る。会った事のないヒヨロつとした男だ。気が弱いらしくアイに対してオドオドしながら言う。

「さつきはよくもやったな。ヤタテ・アイ。お前ら強いビルダー達はあらかじめネットで俺達新世代ビルダーにお尋ね者として知れ渡ってるんだ。これからお前はどんどん新世代ビルダーに狙われるぜ」

「?どこかでお会いしましたっけ」

さつきのバトルでは話した覚えがない。アイは首をかしげる。

「さつきシグーに踏み潰された硬派ビルダーだよ」

その言葉に全員が凍りつく、三人目がここにいたのか。というツツコミは全員が忘れてしまった。と、ソウイチがフリーガンに掴みかかる。

「言いたい放題言いやがって!!」

「うおっ!!ばー!暴力はやめろ!!」

泣きそうな顔で拒絶するフリーガン、

「さつきあんな暴言吐いてて何なんだその落差」とヒロ

「あ、俺が強気になれるのはネットとバトルの中だけだ。普段ネット弁慶な所為か、バーチャルな空間でしか強気になれなくて」

その反応に全員が呆れる。弱気そうだがその分腹の底に色々溜め込んでるのだろう。

「大した腕も無い癖に自慢げに言うなよ!人を散々嫌な気分させて!」

「どーとにかくこれで勝ったと思うなよ!!」

そそくさとその場を去るフリーガン。強気になっていようとなつていまいと、性格は悪いらしい。

……

「で、このシグーの腕はダークマターをそのまま移植した物だけど、当然エクシアの武装もつけられるよ」

「アメイジングエクシアの方なら結構その辺も豪華な武装だったんだけどお金なくて」

「私は持つてるよ？じゃああなたの持つてるパーツと交換しない？中古屋で買ったんだけど今は使う目途も立ってないの」

「じゃあ同じく使う目途の立ってないプロミネンスブレイドとブレイクニルブレイドで」

そしてその後、アイは工作室でシグーの改造をしていた。アイは自分に出来る限りの事をコウタに教えていた。お互い忘れない思い出になる様に、アイは全力で教え、コウタは全力でそれを吸収していた。そして遠巻きにそれを見るナナ達、ガラス張りの工作室は店の方からでもよく見える。

「おーおー、熱いね」

「ひと段落ついて良かったよ……」

「ヤタテさん、そういえば前に言ってたツスね。ガンプラが好き、全力で遊ぶ形で『好き』って気持ちを表現する。それが自分なりのフリーガンや違法ビルダーへの対抗する気持ちだつて。今が正にそうツスね」

「そうだねソウイチ君。……ねえツチャさん」

タカコがツチャに問いかける。何か思った様だ。

「違法ビルダーが来れば悪い人も来るだろうけど、いい人だつてたくさん来るつて言っただけど、やっぱり間違っていたのかな。あたし」

今日見たフリーガンの傍若無人ぶりをみるとそう思ってしまった。

「……間違つてるとは言い切れないよ。色んな人が気軽にガンプラバトルにさわるきつかけになるなら、それ自体は悪い事じゃない。ただそれでやり込むならつていうのもあるけどね」

少なくともああいう奴らばかりになるなら、戦わなくちゃいけない」

「なんか昨日と言つてる事違くない？」

「物事にはなんにだっていい所と悪い所があるって気付いただけさ」
「そういえばツチヤさん、さっきの話、出て行ったビルダーが二人いるって聞きましたけど、その出てった二人はどうなったんですか？」
今度はヒロがツチヤに話しかける。

「ん？まだガンプラ続けているとは言ってたけど、俺とは会いたくないって言われてたから、コンドウさんを通じてしか様子は解らなかつたよ。コンドウさんとだけは会ってたみたいだから」

「今度の選手権、会えますかね？」

「解らない。大会とかは避けてたみたいだし、でもコンドウさんの口からヤタテさんの事は聞いてたかもしれない。もし、ヤタテさんに興味が沸いたとしたら……」

……

同時刻、ガリア大陸以外のガンプラバトルが出来る店では同じく違法ビルダーが徒党を組み暴れまわっていた。しかしその日、それでガンプラバトルのコーナーが乗っ取られることはまずなかった。何故ならガリア大陸同様、強豪ビルダーが迎撃をしていたからだ。そしてこの店でも……

「ひっ！ひいっ!!」

深夜の市街地を再現したステージで二機の量産型ビギニングガンダムが逃げ惑ってた。建物の影に身を隠す2機

「なんなんだあの化け物は!!50機はいた仲間がいつの間にか壊滅だ!!」

「はぐれたもう1機が心配だ。早く合流しなきゃ」

その時、何か物音がした。ビギニングガンダムが見ると同じ型のビギニングガンダムが見えた。はぐれた3機目らしい。「無事だったか!」と再会を喜ぼうとする違法ビルダー、しかし次の瞬間。

ズルツ……ドサツ……

合流したビギニングガンダムの体は縦に真つ二つに裂け、その場に倒れた……。裂けたビギニングの後ろには巨大なチェーンソーを持った、熊のシルエットが見えた。

『う!!うわあああああ!!』

違法ビルダーの絶叫が響く。しかしすぐに叫びはチエーンソーの爆音にかき消され、2体は斬り裂かれその場に倒れた。市街地には破壊されたビギニングが何機も横たわってた。さっきの熊のシルエツトがやったらしい。熊に乗ったビルダーが声を漏らす。

「きひっ！きひひっ！笑っちゃうよねえ。散々ムカつく事ばつか言つて口先ばつかなんだからさあ」

女らしい、違法ビルダーを全機破壊した事に満足げな笑いを上げる。

「アタシどころかアイにも適いやしないよ」

アイの名を上げた所でフツと表情が暗くなる。

「……そっやももう半年位か……アイ……会いたいよ……」

この声の、熊の持ち主がガンプラバトル選手権、県内予選を大いに盛り上げる事を、アイはまだ知らなかった。

県内予選まで、あと3週間。

第40話「山回高校、学校七不思議（前編）」（ベアツ
ガイ・スケア登場）

戦艦や人工衛生の残骸がまばらに浮かぶ宇宙空間。そこでいつもの様にガン普拉バトルは行われていた。

目立つのはモノアイタイプのビギニングガンダム、量産型ビギニングガンダム。違法ビルダー達に売られる基本的な機体だ。

「行け！ドラグリーン」

量産型ビギニングガンダムに乗った違法ビルダーが叫ぶ。背中
の太陽の様な形をした装備からコーン状の射撃武器がいくつも飛び出
した。

これは『プロヴィデンスガンダム』という機体（ガンダムSEED
登場）の『ドラグリーン』という遠隔操作射撃武器だ。

射出されたドラグリーンは対戦相手に向かい。ビームを幾重にも連
射する。対戦相手、ガンダムAGE-1はそれを器用にかわしドラ
グリーンを撃ち落して行く。

ビギニングに攻撃はしてないが、AGE-1は追いつめられた様子
はない。しかもその場からは移動せずに。だ。

「ドラグリーンに気をとれらてるな！今がチャンス！」

もう一機の量産型ビギニングが前面にビームの刃を形成。AGE
-1に突撃する。

このビギニングの背中には『ハイペリオンガンダム』という機体の
『アルミューレ・リュミエール』という装備がついていた。

これは機体を覆うバリアを展開、更に射撃や突撃武器にもなる優れ
ものだ。AGE-1の目の前にビギニングが迫る。

「これで俺達の勝利だ！」

違法ビルダーは叫ぶも、AGE-1は宇宙空間にも関わらず、ムー
ンサルトをする様な動きで上に回避、それだけではなく、回避動作の
ついでで、突っ込んできたビギニングを右手に持ったライフルで真っ
二つに斬り裂いた。

これは『アストレイ・グリーンフレーム』という機体の装備していた『ツインソードライフル』という武器だ。銃身を変形させビームソードを発生させる複合武器だ。

「なーんだとおー！」

違法ビルダーが叫ぶもビギニングは爆発。驚愕するドラグーン持ちの違法ビルダー、と、AGE―1は背中の大型ビーム砲『グラエストロランチャー』を展開。こちらに向けて発射。

不意をつかれたビギニングはそのままビームを直撃、撃墜された。

……

バトルが終わり、AGE―1に乗っていたビルダー、アイがGポッドから出てくる。相手側の違法ビルダーもGポッドから出てきた。二人の少年だ。

「クソッ！新世代ビルダーにまでなったのに勝てないのか！」

「強すぎるー！」

違法ビルダーの二人はあっけなくやられた自分達を責める。

「……どうして違法ビルダーなんかに手を出したの？」

普段通りのテンションでアイは問いかけた。少年達はアイを見ながら言った。

「……あんたみたいな人には解らないだろうな！俺達はガンプラ作りがうまくいかないから新世代ビルダーになった！うまくいかなければ楽しい物だって楽しくない！こいつだって！」

違法ビルダーは横の少年を指さす。

「ガンプラバトルはやりたくてもガンプラを作る技術がない！それでもこの普通のガンダムゲーム以上に自由な世界を暴れたかった！」

金の問題だってある！それでも指をくわえて見てるだけなんてのは出来なかつたんだよ！」

「でも、私が強いつていうのは経験つんだからだよ。何だって努力しなきゃ実力だつてつかないよ。だからさ……」

アイは穏やかな顔で手を二人に差し伸べる。

「私で知ってる作り方とか技術だつたらいくらでも教えるよ。うまく

いかなければ楽しい物だつて楽しくないっていうんだつたらさ、楽しくなるまで付き合うよ」

片方の少年はムツとした顔で答える。

「なー何を言うんだーそんなの俺の新世代ビルダーとしてのプライドが……」

「じゃ、僕お姉さんに教わりたいです」

反面もう一人の少年はすんなりアイの提案に飛びついた。

「なっ！」

「君はいいの？」

「うっ……俺もー!!」

少年二人は店内奥の工作室でアイからガン普拉製作のレクチャーを受けていた。工作室はガラス張りなので店内からはよく見える。

そんな三人を店側から見守る人達がいた。アイのチームメイト達4人だ。

「ヤタテさん、違法ビルダーに教えてるんだな」

「2週間前のあれ以来、違法ビルダーとかに積極的に教えてるらしいッス。『ガン普拉の面白さを少しでも』ってつもりらしいッスよ」

「前にマナー悪い奴いたぶって笑ってたとは到底思えないわね。ハハ」

ナナは以前のアイの豹変を思い出してギャップに苦笑する。

「しかし」

と、ヘタレオーラ満載の無精ひげと短髪の中年男性が話に入ってきた。模型店『ガリア大陸』のやとわれ店員『ハセベ・シロウ』だ。

「アイちゃんがAGE―1を作っていたとはね。初めて会った時には既にあれの後継機AGE―2に乗ってたのに。大会で使うつもりかな？」

「あ、ハセベさん。あのAGE―1スか？あれ確かヤタテさんが引越してくる前に使ってた機体ッスよ。大会で使うAGE―3は俺達総動員で作ってるッス」

そう。選手権の県内予選でアイ達はリーダー機にAGE―3を使

うと皆に話していた。そしてその製作は全員で行っていた。

「そうなんだ。それはそうと、AGE-1にもスプリッター迷彩が施されてるんだね」とハセベ

「『スプリッター迷彩』?」聞き慣れない言葉にナナが首をかしげる。

「ハジメさん、ヤタテさんのAGE系に塗られてた色を分割する塗り方だよ。元々は航空機とかで使われた塗り方だね」

「へえ、そういう塗り方かあ。そういえば今作ってるAGE-3もそのスプリッター迷彩つてのが塗られてたわね。アイのこだわりかなあ」

ナナが考えてると三人は工作室から出てくる。アイのレクチャーが終わった様だ。少年二人の元々持っていたガンプラは改修され見違えるようになっていた。

「恩を売ったつもりだろうけど!お前に懐いたりはしないぞ!これで今度はお前をやっつけてやる!」

片方の少年は素直に礼を言ったが、もう片方の少年はなおもアイにつつかかる。

「いつでもいいよ」

「ぐぬぬ……これで勝ったと思うなよー!」

そう言い少年二人は去っていった。教えたアイの顔は満足げだ。そんなアイにナナが話しかける。

「ヤッホー、アイ、いい顔してんじゃん」

「あ、ナナちゃん。教えたらどんどん吸収してくれたからね。真剣にやってくれて嬉しかったよ」

「でも向こうも事情があるとはいえ違法連中ツスよ。レクチャーするなんて変わってるツスよ」とソウイチ

「フリーガンじゃないんだからさ。私はガンプラ作る醍醐味を少しでも知ってもらいたいだけだよ。違法ビルダーとして敵対するにしてもそれは関係ないよ。余計な事しちゃった?ソウイチ君」

ソウイチは卑怯な手を嫌うとはいえ、勝つ事に強い拘りがある。ソウイチにとっては不快かもしれないとアイは思った。

「いや、強者ならそれ位の余裕はあってもらわないと困るツスよ」

「おーおー可愛くないのー」とナナ、そして「余計なお世話ツス」と返すソウイチ。ふとナナは店内の時計を確認する。

「と、そろそろお昼ね。間に合ってよかったわ」

「あれ？ナナちゃん用事？」とアイ

「いや、アンタね。午後は夏休みの宿題片付けるってんで、今日はタカコの家でお泊り会って約束してたでしょ？」

呆れながら言うナナにアイは「あ」と声を出した。そう、今アイ達は夏休みに入っていた。宿題を効率よく消化すべく、休み中に昼からタカコの家で勉強会をする計画を立てていたのだ。今日は家に誰もいないという事で泊まりだ。

「いけない！教えるの夢中で忘れてたよ！」

「アンタねえ……ま、いいわ。それじゃアタシらここらでおいとまします」

「ああわかった。気をつけてね」

挨拶もそこそこにアイ達はタカコの家に向かった。

……

「へえ、子供達にガンプラのレクチャーね……」

アイ達はタカコの家に向かう途中、部活帰りのムツミと合流、アイ達が住んでるのは別の住宅地を歩きながらムツミにさつきあった事を話す。夏の所為かムツミの肌は日焼けで黒くなっていた。

「なーんかどーでもいいって感じの台詞ね」

「ううん、そんな事ないよ……。ギスギスしたまま終わったら悲しすぎるもの……。競技なんだからそういうのはやっぱり出来る限り無い方がいいよ……」

「ありがとうムツミちゃん」

「でもさ……」

何か言いたげなムツミ、アイ達は不思議に思う。

「アイちゃんて自覚ないだろうけどさ、フリーガン……態度の悪すぎる人達限定だけど、違法の人達相手にする時かなり怖いよ……。その子達怖がったりしなかったの……？」

「う……それは……」

ムツミの発言に詰まるアイ、心当たりがあるらしい。

「あー聞いてよムツミ。三日前なんだけどアイったらね、普通の子をフリーガンと間違えちゃって泣かせちゃったのよ。それでアイの方も泣きながら謝る事態に」

「わーお……」

「うわーっ!!やめてやめて!!」

慌てながら話を遮ろうとするアイ、その件は自分の態度がいつもと違うと自覚せざるを得なかった。

「アハハ、ゴメンゴメン、でもいいじゃん。向こうも最終的に許してくれたんだし」

笑い話として成立する結果だからこそナナは話したわけだ。

「もう！それはそうと!!タカコちゃんの家に行くのって初めてだよ私、どんな感じなのかなあ」

強引に話題を逸らそうとするアイ、とはいえこっちに引っ越して来て、アイは一度もタカコの家に行った事はない。友達の家がどんな感じなのか興味があったのは事実だ。

「フフ、アイ、タカコの性格解ってるでしょ？家自体はともかく部屋は散らかりっぱなしよ」

慌てふためくアイに笑みを浮かべながらナナは答えた。

「大丈夫だよ……タカコの部屋だったら先週ボクが（強制的に）タカコと協力して部屋の掃除したから……さすがに一週間じゃ元に戻らないよ……」

……

そして目的の一軒家に到着する。タカコの家だ。インターホンを押すが反応しない。暫くして勝手に入ろうとドアに手をかけるムツミだが、

「……閉まってる」

合鍵はムツミが持っていた為、開けて中に入る三人。玄関に入ると「ワン！」という鳴き声が三人を出迎えた。犬だ。色は全体的に茶色く、外見はほぼ柴犬だ。

「この子がアシュリーだね」

「アイがその犬の名前を言った。タカコが『アシユリー』という名前の犬を飼ってるというのは話題に上がった事が何度かある。(※小説ではだしてません)実際アイは見たのは初めてだ。ちなみに雑種の雄だ。」

「うん。こんにちはアシユリー……タカコは上……?」

ムツミがアシユリーを撫でながら問いかける。するとアシユリーは短く吠え、導くようにとてとと階段を上がって行く。タカコの部屋につれていこうとしているのだ。

「空気読むのだったらタカコよりうまいのかもね……」

ムツミは苦笑しながらアシユリーに付いて行った。

「一週間じゃ元に戻らない……ハズだったんだけど……」

到着したタカコの部屋の中、フローリングの床の上で三人は絶句していた。部屋の中は服やら雑誌やらが散乱。

部屋の中心に置かれたテーブルの上には、デジカメに繋がれた開きっぱなしのノートパソコン(棚の上のプリンタに繋がれている)、そして食べかけのお菓子。

床の上にはお菓子の食べかすが散乱、この散らかりっぷりがタカコの部屋の基本形だった。

「かー……。くかー……」

そしてベッドの上には薄着で、ヘソを出して寝てるタカコの姿があった。呑気そうな寝顔なのが彼女らしいというのが全員の感想だった。

アイ達の横でアシユリーが「クウーン」と鳴きながらうなだれる。

「……」

ムツミは無言でタカコの前に出ると、両手を使い鼻と口を塞いだ。みるみる内にタカコの顔が青ざめ、震えてくる。

「……ぶはっ!!!」

苦しさに飛び起きるタカコ、彼女が起きてすぐ見たのは渋い顔したムツミだった。

「な！何?!ぶちっことプールでハーレムしてたら水が溢れて!!」

「やあタカコ……」

「あ、ムツミだ〜おはよ〜」

タカコはいつものマイペースさで返した。

「もう昼だよ!」

「う〜しよがないじゃ〜ん。終業式用の新聞、新聞部一同で作ってたんだから。記事書くにも部屋が片づいてたら集中できなかつたんだよ〜」

「それで今日までに片付けようとしてこのままズルズルいつたと……」

「一気にやろうとしたんだけどね〜」

タカコが起きた後、まずはタカコの部屋の掃除に取り掛かる4人。「駄目だよタカコちゃん、一気にやろうつてのがそもそも間違いないだよ。一日五分でもいいから習慣つけないと」

床に掃除機をかけながらアイが言う。

「あ、アイ、掃除機の前に棚の上の方から拭いとかないと、埃が落ちちゃう」

ベランダから布団を干してるナナが振り向きながら言った。

「大丈夫だよナナ……、アイちゃんあつという間に全部拭いちやつた……。手馴れてる……」

「早っ!」

「そんな事ないよ。先週掃除やったんだから拭く量自体は少ないんだし」

「そういえば、アイの部屋って何度か上がったけど、散らかってるって思った事はないわね」

ナナは思い出しながら言った。タカコもムツミもアイの部屋に上がった事はある。がいつも片づいてる印象があった。

特にナナはアイの隣人、割とよくアイの部屋に入るがいつも汚れてると思った事は一度もない。

「元々ガンプラよく作ってるから散らかしやすいからね。こういうのはマメにする様にしてるの」

「アイちゃん、すっかりした所あつたんだね〜」

「意外だと思った?」

「確かに動きに迷いが無い……手際がいいよアイちゃん……」

ムツミはアイを見ながら感心していた。確かに先週掃除したから拭く量は少なめで十分なのかもしれないが、それにしたって早い。しかもいい加減にやつてる様に見えない。

「そういうえば、アイがどういう生活してたか、アタシ達まだ知らなかったな」

「アイちゃん……、あんまり話さないからね……」

瞬く間に日は暮れ、夕食の支度となる。メニューはカレー、

ダイニングキッチンに立っていたアイ、ナナ、タカコの三人はカレーを作るべくそれぞれの役割をこなす。

「……ねえ、やっぱりボクも何か手伝おうか……?」

リビングのソファで座ってたムツミが申し訳なきように聞いてきた。彼女の横にはアシユリーが伏せている。

「大丈夫だって、ムツミはそこでテレビでも見てて〜」

鍋で豚肉を炒めているタカコが言う。

「ムツミこういうの苦手だからね」

タカコの横で野菜を切るナナがタカコの言葉に続く。

「でも意外だよな。ムツミちゃんこういうの苦手って」

そしてナナの横、シンクでアイが野菜の皮を剥く。包丁を扱ってる為、喋ってはいても目の前の野菜の皮向きに集中していた。

「ムツミはね〜勉強とかスポーツはかなりの物なんだけど、アドリブとか手先を使った細かい作業全然駄目なんだ〜」

中学の時家庭科の授業で指切っちゃうとかしよっちゅうで、高校受験で山回高校選んだのも『家庭科がないから』って理由が大きかったんだよ〜」

「よ〜余計な事言わないでよ〜」

顔を赤らめうろたえるムツミ、そして「へえ〜」と答えながらアイはナナのまな板の横に、剥いたじゃがいもを置いた。ナナが切り終わ

る前に早いペースで皮むきを済ましてるのだ。

「いや、意外つつつたらあんたも相当よアイ……、皮剥くペース早い上に皮がゼーンぶ繋がってるじゃない」

シンのクの中の皮をつまむとタカコとムツミに見せるナナ、ニンジンとタマネギはともかく、ジャガイモは全部皮が繋がっていた。

ムツミも詰め寄って感心する。

「わく凄いい、ガンプラやってるからやっぱり器用なんだね」

「タカコも料理は出来る方だけど、ここまでじゃないよ……羨ましい……」

「いやー皮が剥けるからって料理が出来るわけじゃないよ。それに、これでもブランクある方だよ私」

手を休め、照れつつもアイは答える。

「考えてみたら、アイが料理作った所って見た事ないなあ。学校のお昼だってアンタいつも購買とかコンビニだし」

「自炊自体はしてたんだけどね、正直こっち引越して来てからやる気なくなっちゃって」

「やる気ね……もしかしてアイちゃん、彼氏とか前住んでた所でいた……？」

『彼氏』というワードにアイは「え?!」と顔を真っ赤にする。

「いーいやいやいや!!いないよ!なんでそんな事いうの!!」

「だってアイちゃんが一番実力を発揮するのは、自分が興味を持った事に対してじゃない……。自分の為によりも誰かの為に作った方がアイちゃんらしいと思っただよ……」

自分の為だったなら今でも自分で作り続けてるだろうし、とムツミは思いながら言う。

「あーそう言う事、彼氏だったらいらないよ。ただ…作ってあげた幼馴染みだったらいたよ。女だけど」

「え?!」と答えるナナ達三人、

「昔住んでた所だね。私の親が共働きだった上に、家の近い友達の方も共働きだったんだ。」

親は大抵遅くてさ、二人で色々協力してご飯作ったりとか家事分担

してただけどね、やってくうちに慣れてきたってわけ」

「へえ、昔住んでた所かあ、あれ？そういえばアイちゃんが住んでた所ってどこだっけ」

「忘れたのタカコ、アイちゃんの出身『玄礼木市』（くろれきし）だよ……」

『玄礼木市』（くろれきし）アイ達の今住んでる『山回町』（さんかいちよう）とは同じ県内だがかなりの都会だ。

「あ、玄礼木ね！ね、ね、アイちゃん！どんな人だったの？その幼馴染みて〜」

「妹みたいな奴かな。口で説明するより、明日解ると思うよ。元々電話で連絡とかはちよくちよくしてただけど。実は明日の納涼祭で私の家に泊まりに来るって

そいつもガンプラもやってるからね。ガリア大陸のイベントにも出るってさ」

納涼祭、いつもアイ達が寄ってる山回商店街での催しだ。商店街の店一つ一つが祭りの店をやる事になっており、

それはアイ達の行きつけの模型店『ガリア大陸』でも例外ではなかった。

なんでもアイ達の学校、山回高校の体育館へ、ガリア大陸始め、周囲の店からGポッドを集め、ガンプラバトルを使ったお化け屋敷を企画してるとか。

今日の昼からもガリア大陸のGポッドは体育館へと運ばれていた。

「それ早く言つてよ!!」

「どんな人なんだろ。楽しみ〜」

「妹みたいな幼馴染みか……。」

……

そして翌日午前10時30分、ナナ達は母校、『山回高校』に向かう。といってもアイは今いない。イベントの調整として先に高校に向かったのだ。

通り道となる商店街の中は人で一杯だ。

「ひゃー凄い活気だわ」

「ガリア大陸のイベントって何時からだっけ？」

「11時からだよ。30分あるから大丈夫だよ」

「そっか。そんな時にアイの昔の友達にも会えるわけね。やっぱりアイに似て穏やかな人なのかな？」

「もしかしてメイクゴテゴテのギャル系だったりして」

「冗談めかしたタカコの発言だがムツミには的を得ているかも思えた。

「そうかもね……。なんか最近アイちゃんって意外な一面が次々とでてくるし……。案外そういう人かも……」

「そうね。半年以上アイと一緒にいるけど、アイには驚かされてばかりだよ」

「そうだね……。普段は温厚で、ちよつと抜けてて、勉強も運動も苦手だけど好きな事には凄い力を発揮して……。それは相変わらずだけど、最近は遅い所もよく見るよ……」

「ムツミくなんかアイちゃんの悪い所ばかり言っていない？」

「いや、そんなつもりは……」

ガンプラがうまいから始まり、加虐的な一面、昨日見せた家庭的な一面。そして今日、アイの幼馴染みと会える。また自分を驚かせるような事になるんだろうな。

ムツミの言葉に続き、なんとなくナナはそう思えた。……と、その時だった。

「だーかーらー！コナミはわざと見てないって言ってるじゃん!!」

「ああ?!わざとらしくアタシの後ろで見てた癖に何言ってるんだよ!!」

聞き覚えのない声と、聞き覚えのある声が聞こえた。覚えのある方はかなり困惑気味に聞こえた。聞こえた方を見ると女同士が言い争っているのが見えた。

「あれ?あいつ」

ナナは近寄って見る。髪型が違う上にしばらく会ってなかったが記憶に残る顔だった。

「ってああ!ナナじゃない!!助けてーっ!!」

ナナが近づくとや否や、ツーサイドアップの髪型を振り回しナナに抱

きつく小柄な少女、

「なっ！どうしたんですかウミノ先輩！」

山回高校模型部部长『ウミノ・コナミ』だった。

「いいがかりつけてきたのよアイツ！勝手にパンツ見たって!!」

「こつちが屈んでた時に後ろから盛大に見てたじゃねえか!!」

「たまたま視線が合ったただけでしょ!!コナミがベンチで座ってた周りであんな無防備な姿でかがんで！まあたまたま見えちゃったのは事実だけどー！」

「ちよつと待ってよ、アタシ的には全然話が見えないんだけど」

「ああ？何だアンタら」

怪訝そうな顔でナナを見てくる相手の少女、ギザギザに生えた歯、ピンクに染めた長いツインテールとかなりエキセントリックな外見だ。

特に目は記憶に残りそうだ。長いまつ毛、妙に目力のある瞳、目の下に濃いクマ、一言で表すなら……。『怖い顔』だ。

かなり不機嫌らしく尚更凄みがある。しかし同時に首から下は綺麗なボディラインだった。胸の大きさや腰のくびれが服の上からでも分かる。

「こいつの知り合いよ。まずは何があつたか話してほしいわね」

「あ？部外者なら引っ込んでてくんない？こつちはイラついてる上に時間ねえんだから」

「まあまあ…、脇目もふらずに屈んでたって事は何か探してたのかい……っ。」

ムツミがやんわりと聞こうとする。

「ブレスレットだ。左腕につける奴なんだけど……落とした」

「それで探してたってわけね。つつつてもこの人だからじゃ探すのも難しいんじゃない？」

「あ!?!諦めろってか!!」

「あーもう！話は最後まで聞いてよ！これだけ人がいるんなら交番いけば落し物で届けられてるんじゃないの！」

少女の凄みは噛みついて来てもおかしくない物だった。うろたえながらも答えるナナ。しかし『交番』というワードに少女は萎縮する。「う……交番？そういうところはちよつと……」

「？何うろたえてんのよ。なんか万引きでもして手に入れたブレスレットだった？」

「あ?!ちげえよ!アンタアタシを何だと思ってんだ!いいよ!行くよ!いきやあいいんだろ!」

「待つて!方向反対!」

「う……!わざとだよ!!」

5人は交番に行くのと駐在警官に事情を説明する。ブレスレットはアッサリ見つかった。

「あつた!これだ!」

「いやー、さつき落とし物で届けられていたんだよ。こういう日は落とし物も多いから皆も気をつけてね」

「はい。有難うございます」

「ところで君……」

警察官はブレスレットを落とした少女に声をかける。

「う……なんスか?」

「君、ちよつと聞きたい事あるんだけどいいかな?お父さんとお母さんはどうしたんだい?」

暫く少女への質問が続いた後、少女含めナナ達は解放された。

「あんただけなんか質問責めにあつたわね。まんま職務質問だったわ」

「うっさい。どいつもこいつも人相で人疑いやがつて!」

苦虫を噛み潰した様な表情で少女は吐き捨てた。これが初めての経験というわけではないらしい。

「だから交番とか行きたくなかったわけだね」

「ま、腹立ったけど、今回はこれを取り戻せたから許す。よかつた……本当に……」

少女は左腕につけたブレスレットを愛おしそうに右手でつかんだ。先程の凶暴そうな印象が消える位、切なげな表情を浮かべて……。

「大事なんだ。そのブレスレット」

「まあな。友達から誕生日プレゼントにもらった……もういない奴だからさ……」

『もういない』というワードにその友達がどうなったかは想像に難くない。タカコ含め、ナナ達はどう言葉をかけていいか解らなかった。

「ゴメン……嫌な事聞いたかも」

「いや、気にすんな。……そこのガキ」

「ガ！ガキってコナミの事?!」

『コナミは18歳だ』そう言おうとしたが、少女の言葉は続く。

「こつちも悪かった。どうしてもなくしたくなくて、頭に血が登っちゃってあんな態度をとっちゃって」

恭しく頭を下げる少女。その行動に全員が意外に思えた。

「と、時間は……。急がねえと、ブレスレットありがとう！じやあな!!」

スマホで時間を確認すると少女は軽快に走って行った。安心した彼女の表情はまだ怖いが爽やかな印象もあった。

「台風みたいな奴だったわね」

「部長さんも災難でしたね……。タイミング悪く絡まれちゃって……。ところでどうしてあんな所で？ヤマモトとカワサキの二人は？いつも一緒にしょ」

「コウヤとナガレの二人だったら、ガン普拉バトルのイベントに出るって言うんでコナミだけこつちで待機してたのよ。とんだ災難だったわ」

不機嫌そうに答えるコナミ。

「ガリア大陸のイベントって言ったらガン普拉バトルでお化け屋敷やるって聞いたけど」

「ふんだ！ガキの遊びだわ！コナミは大人の女だからそんな遊びには付き合ってもらえないってわけ!!」

「本当はお化けが怖いんじゃないですか？」

「ちー違うわよ!!」

ムキになりながら答えるコナミ、冗談で言ったが凶星の様だ。

「解ったからそんなムキにならないで下さいよ。っとそういうえば時間は…うわっ！結構もってかれたな」

ナナも時計を見ると11時まであと10分を切っていた。交番は商店街の出入り口にある。高校へはここから10分はかかる。

「急がないと…!」

ムツミがそういうと4人は全員ガリア大陸に向かった。

「コナミはここでお祭り楽しんでるわよ」

コナミだけがそこに残り、ナナ達を見送った。

「全くガキね。イベントに一喜一憂しちゃって、イベントより男のナンプアを待つのが大人の女ってもんじゃない？」

「ねえ君」

「キターツ!!はいっ！なんですか!」

「君迷子?こんな所でどうしたの?お父さんとお母さんは?」

「……」

ウミノ・コナミ、身長135cm。

……

「ああいたいた！皆！遅いよ!!」

「何やってんスカ全く」

「事故にでもあったかと心配したよ」

高校の体育館につくとアイが出迎えてくれた。ツチャヤソウイチ、ヒロも一緒だった。

「ゴメンねアイ、ちよっとトラブルがあつて」

「トラブル?」

「変な奴に絡まれてね。で、受け付けの方は?」

「まだ大丈夫。早く名簿に書いて」

アイは参加者申請書をナナに手渡した。

体育館の中は午前中だというのに薄暗い、窓は黒カーテンで遮られていたからだ。とはいえクーラーはガンガンに効いてるため涼しい

が、

講堂部分には大型スクリーンが備えられており、そこから選手の視界を通して、分割された画面がギャラリーに提供されるというわけだ。

そして講堂の下にはズラーツと近場の店から集められたGポッドが並んでる。今回はパイロットスーツは着ない。持ち込み、もしくは貸し出しのイヤホンで通信を行う事になっている。

また完成品のガンプラのレンタルもされておりガンプラを作らない子も出られる仕様だ。

「今回はジャンケンで俺が勝ったので、俺が三人目になるツスよ」

「よろしくねアサダ。そういえば、アイ、アンタの昔の友達って来てるの？」

いるのかと辺りを見回すナナ。

「それがね、まだ来てないの。せつかくこっちで参加申請したつてのに……何やってんだろ。ノドカ……」

モヤモヤはあるが、アイ、ナナ、ソウイチの三人はGポッドへと入り込む。それをギャラリーに紛れ遠巻きに見るツチャとヒロ、タカコとムツミ。

「今回はヒロさん達二人は出なくていいんですか……？」

「大丈夫。今日は一回だけのイベントってわけじゃない。アイちゃん達の次に出ればいいだけの事だよ」

「しかしガンプラバトルでお化け屋敷ですか、どんなのになるか楽しみですね」

「まあそうなんだけどさ。正直ちよつと心配事はあるかな？ソウイチ関係で……」

「え？」

と二人が話し込んでる後ろ、受け付けの所で一人の少女が駆け込んだ。

「待って!!アタシも参加しまああすっつ!!」

そしてイベントが開始する『ガンプラバトル学校七不思議』が……、
……

「ん……」

『フリーダムアルクス』に乗ったナナは目を開ける。まずアイ『AGE-1サムライリツパー』とソウイチ『ガンダムF91』を含めた自分達は夜の学校の教室の一つにいた。

明かりはないが外からの月明りで視界は良好だ。

「これって……機体が人間サイズになってる？どこよここ」

今の搭乗機の大きさは人間の大きさ。もしくはそれより一回り小さいサイズに変えられていた。(元々のサイズは問わないらしい)

場所については学校内のマップと現在地は画面表示で確認できたが、廊下から頭を出したソウイチのF91は扉の上のプレートを確認する。

『2-B』って書いてあるッス」

「って事はうちのクラスね」

そしてこちらは観戦してるムツミ達の視点だ。

「ガンプラに乗ってるのに教室が見えますよ……今日はどういうイベントなんでしょうか……？」

ギヤラリーのムツミがパンフレットを持ったヒロに聞く。

「そうだね。えーと、なんでも学校内の七不思議をガンプラに乗って討伐するっていうルールらしい、開始地点はバラバラだけど、七不思議の名前と説明は画面に表示されている。

一番先に七不思議全部倒したチームが優勝だっけさ。ちなみに学校と七不思議はこの山回高校のトレースだっけ。ちなみに初心者コースと上級者コースがあっけ今回は上級者コースだっけさ」

「という事はイニシチアブはうちの生徒のナナが持ってますね……。しかしうちの学校で七不思議か……。2-B近場の七不思議といったら……」

『校長室の呪いの人形』だね」

そしてアイ達に視点を戻そう。アイ達は今校長室の前にいた。同

じ校舎、同じ階とアイ達の教室に近い。

「この中に第一の七不思議があるんスね……。呪いの人形ってどんなのスカ?」

「確か夜中に髪の毛の伸びる日本人形がいて、見た者は髪で絞め殺される。だったかな?」

「限られたスペースで戦うことになるからね。気を引き締めていかないと……」

サムライリッパの刀を構え校長室の扉を開けるアイ、三人は中に入る。中は普通の教室並の広さがあった。来客用のソファとテーブル、パソコンの置かれた豪華そうな机、その横に置かれた

本やトロフィーの詰め込まれた棚、そして……。その横に置かれた問題の日本人形……。ではなく!

「……ガンダムナドレ?」

アイが呟くと同時に全員が校長室に入る。と扉がバタンと勢いよく閉まった。そして目の前のガンダムナドレが浮かび上がり、髪の毛が、否、コードが動き出した。

ガンダムナドレ……。『ガンダムOO』に登場したガンダムだ。ほぼ真っ白なカラーリング、スラツとした体系だが、

通常は全身追加装甲で覆われており、『ガンダムヴァーチェ』という白黒で大型の重武装の機体に偽装されている。

最大の特徴は頭部から生えた女性のロングヘアの様な赤いコード(追加装甲との接続用)だ。これと細い体躯により女性型のガンダムに見える。

目の前のナドレは市松人形のように黒く塗装されていた。

話を戻そう。ナドレは伸びたコードを腕の様に振るい攻撃してくる。本編ではあり得ない使い方だ。そしてコードは抜き手の様に突き刺そうとしてくる。

「うわっとー!」

ナナはコードを回避。

「ガンプラバトルだから七不思議もガンプラツスカ!!聞いた通りツス!!」

ソウイチも同様に回避しながらビームライフルで撃ち返す。が、ナドレは余ったコードで射撃を防御、盾としても使えるコードだった。「ネタに走ってる割には手ごわい?!」

「ならさ!!」とアイは叫ぶと果敢に接近を試みる。ナドレは接近に反応してコードを振るう。が、アイは日本刀を振り回しコードを切り裂いた。

「どうやら接近戦に弱いみたいだよ!」

「よしっ!!」とナナとソウイチは叫ぶとお互いのビームライフルでナドレを撃ち抜く。コードを切られた為防御ができなかった。そしてナドレは爆散。

アイ達の画面上の七不思議にチェックが入った。

「よしっ!これで一つ目クリア!」

「……情報通り。ガンプラならいくらやつても怖くないツスね。早いとこ別の七不思議も攻略しちゃいましょう。次は何階に行くんaska?」

「アンタだけ聞いてたわけ?ズルい。まあそれはともかく後の七不思議は、別の校舎行かないといけないわね」

ナナは画面上のマップを目にする。山回高校は三つの校舎で成り立っている。今アイ達のいる校舎が南側『第三校舎』、一番新しい校舎で普通教室や職員室、保健室はもっぱらこちらにある。

そして東側の『第二校舎』、理科室や美術室等、特別教室はこちらに集中している。そして北側『第一校舎』コンクリート製の旧校舎で、もう使われてない教室等があり今では部室や倉庫に使われている。

上空から見ると『コ』の字状になるのが山回高校の特徴だ。

「つまり第三校舎じゃもう七不思議はないんaska」

「らしいよ。後は第二か第一で集中してるんだってさ」

「じゃあさっさと行きましようよ。ガンプラバトルで肝試しなんて趣味が悪いツスから」

ソウイチは校長室のドアを開けて出ようとする。が、直後ソウイチのF91の鼻先を横からビームが掠める。

「うをつ!!」

すぐさま後退するソウイチのF91、開いたドアからは連続で撃たれ続けるビームが見えた。

「別のチームのガンプラッスね。大方こつちを先に倒そうって魂胆スかね」

「見た所左右から撃たれてるって事は2チームいるのかな。一気に倒さない」と

「なら俺が左のチームを」とソウイチ、「じゃあ私が右だね」とアイ、二機は武器を構えると校長室から出て、見えた敵のガンプラめがけて走り出した。

「あーちよつと！アタシは?!」ナナは一人残され困惑していた。

アイのAGE-1サムライリッパー（以下サムライリッパー）は肩に取り付けてあつた刀を両手に持ち、前方の敵機に突っ込む。

敵のガンプラは三機が固まって射撃体勢をとっていた。まっすぐ来るサムライリッパーを落とそうとビームライフルを連射、だがサムライリッパーの刀はビームを切る位訳ない。次々とビームをはじきながら三機に接近、瞬く間に敵機をまとめて切り裂いた。

そしてこちらはソウイチの方。ソウイチは左腕のビームシールドを前面に展開しながら敵のビームを防御、そして右腕のビームライフルを撃ちながら確実に敵機を撃破していく。

「もらったあ!!」

と、いきなり横の教室の扉から敵機がビームサーベルを構え襲ってきた。潜んでいたようだ。ソウイチは冷静にバックステップで回避、すぐさま背中に備え付けられていたビーム兵器『ヴェスバー』を展開、最大出力で撃った。このヴェスバーは機体ジエネレーターに直結したF91の必殺武器だ。その威力はさつき襲ってきた敵も、その奥の敵も飲み込み爆散させた。爆風が廊下を覆う。

F91はビームシールドを構えたままその場に踏ん張った。

「くっ！エネルギー大食いするから使いたくなかったんスけどねえ!!」

そして三人は第二校舎、理科室の前に来た。中では既に誰かがバトルをしてるらしい。爆発音らしき音が聞こえる。

「理科室スか。定番スね。大方人体模型が動くとかじゃないスか？」

「そ、七不思議のひとつ『徘徊する人体模型』ってね。ガンプラで人体模型ってどんなのになるやら」

そう言うつて中に入ると見知った機体が二体と、半分の内部機構が丸見えになったガンダムが戦っていた。

「!?援軍が来てくれたみたいだぞ！コウヤ！」

これまた聞き覚えのある声だ。

「?!その声と、あのレジエンドとハイゴッグ！模型部のコウヤ君とカワサキ君?!」

黒いハイゴッグと緑のアメイジングブースターを取り付けたレジエンドガンダム、乗ってたのは山回高校模型部の『カワサキ・ナガレ』（ハイゴッグ）と『ヤマモト・コウヤ』（レジエンド）

以前アイ達と対戦し、そして共闘した仲間だ。

「いいところに！ちよつと手伝ってくれ!!あいつ結構硬いんだ！うおっ!!」

敵の放ったビームを肩のアーマーで防ぐレジエンド、敵はこちらより二回りほど大きい。にも関わらず、狭い理科室の中を飛びながら正確にこつちを撃ってくる。その機体は……

「右半分の内部機構が露出してる?!メカニックモデルのガンダムだ！」

「何それ?!」とナナが聞く。

「見ての通り人体模型みたいに中のメカが露出してるモデルだよ！」とアイは答える。見ると腹部のコクピットブロックがすっぽり抜けていた。

迎撃すべく、ナナはフリーダムの火器を前面に展開、そして発射、フルバーストモードだ。メカニックモデルのガンダムはシールドで防御する。

が、高出力のビームによりガタガタとメカニックモデルは震える。続けてアイは別方向からサムライリッパーの刀から衝撃破を飛ばす。

三日月状の衝撃波はメカニックモデルの背中に直撃、

可動箇所が少ないメカニックモデルは直立のまま倒れる。が、フワツとまた浮かぶように起き上がった。

「げー効いてない!!」

さっきの攻撃を意にも介さずメカニックモデルはまた撃つてきた。

理科室の中をそれぞれ走りながら避ける5人、

「どーすりゃいいのよ!!なんか弱点ないわけ?!」

「ちよつと待っててくれ!怪談の解説を読んでるから対策があるはずだ!」

カワサキがディスプレイの説明を見ながら答える。古来より怪談や都市伝説には対策という物がある。初心者がこのイベントをプレイする事もある程度考慮しての措置だった。

と、直後メカニックモデルはハイゴッグめがけてライフルを撃つてきた。「やられる!」と全員が思った。直後!

「何の!!」

ソウイチのF91がハイゴッグの前に出た。そしてビームシールドで相手のビームを防御、

「カワサキさん!早く!」

「ソウイチ君!ああ!!……分かったぞ!隣の理科準備室だ!そこに奴の心臓部がある!それを壊せば!」

ならばと理科準備室に向かおうとするアイ達、(理科室と準備室は廊下に出ずとも直接つながってる)しかしメカニックモデルは行かすまいとライフルを向けた。が、

「させるか!!」

コウヤのイメージングレジエンドが浮かんだメカニックモデルに体当たりを食らわした。コウヤのイメージングレジエンドは直線的なスピードが非常に高い。

狭い理科室では活かす機会に恵まれないが、体当たりなら話は別だ。

「うんじよあ!!」

衝撃に奇声をあげるコウヤ。ゴロゴロと音を立て転がる二機、その

際にアイとナナは理科準備室へと移動した。

「コウヤ！（ヤマモトさん！）」

「ぐええ……頭にくるぜこいつは……」

目を回すコウヤのレジェンド、メカニックモデルは再び浮かび、無言で目の前のレジェンドにライフルを向けた。今のコウヤは上手く動けない。

させまいとソウイチとナガレの二人はメカニックモデルに飛びかかるうとする。が、直後メカニックモデルの黄色く光る眼は停止、向けていたライフルも、持ってた腕ごとだらんと下げると、床に落ちて砕け散った。

「間に合っただけだね」

四角いコクピットブロック『コアファイター』を刀に突き刺したアイのサムライリッパーとナナのフリーダムアルクスが理科準備室から戻ってきた。

安堵する三人、これで二つ目の七不思議はクリアだ。

「俺達は第一校舎から始めたんだがちよつとやり辛くて先に校長室に行くところだったんだ」

「第一校舎の方は今チーム同士の小競り合いが厳しいぜ。一応七不思議の一つはクリアしたんだが直後別チームに襲われて一人やられちゃってな」

理科室から出るとコウヤ達は自分の事情を話す。

「なんでアタシ達みたいに協力して七不思議倒そうとしないんだか」「それはねナナちゃん。倒した実績は居合わせた人達全員につくけどさ。最終的に倒した優先順位は倒したチームにつくからだよ」

「ってルールらしいな。まあまだ不思議は五つあるんだ。まだまだ負けねえぜ！」

そして五人は別れた。いよいよアイ達は第一校舎に向かう。

「次はどこいくんすか？」

「一番近いのは……おもちや研究部だわ……」

説明を読んだナナは沈んだトーンで答えた。アイもそれを聞く

と顔が強ばる。

「おもちゃ研究部う？なおさら大した事なさそうツスねえ」

……

『第一校舎三階』

「びいいいいやあああああああ!!!!こつちくんなああつ!!!!」

ビームライフルを乱射しながらソウイチが絶叫した。目の前にはガンプラではなく、パワードアームズパワーダーを装備したぬいぐるみや球体関節人形（20cm強、アイ達の機体はだいたい160cm）がビットの様に飛び交い攻撃してくる。

今アイ達がいる教室は普通の教室の半分に満たない大きさだった。しかし全員が入った直後、いきなり空間が広がり、円柱状の黒い巨大な部屋となった。

空間の中央部には奇妙な魔法陣が描かれており。その前にはアイ達の機体と同サイズの球体関節人形がビーム兵器を撃ってくる。魔法陣を守るかの様に

「なんなんスかこいつらああつ!!!!どいつもこいつも気持ち悪いビジュアルでええっ!!」

飛んでくる人形は全員ホラーかゾンビめいたアレンジがされており、血を流していたり白目をむいていたりで、グロテスクか怖いか気持ち悪いかといった印象しかなかった。

『人形達のサバト』ウチのおもちゃ研ね。オカルト研との掛け持ちなのよ。その所為で扱う玩具もなんかおっかないのばかりで、それで夜な夜な変な儀式やってるって言われてんのよ」

フルバーストで迎撃するナナが答える。アイもその横で刀で次々と人形を切り落としていた。余談だがおもちゃ研は模型部との親交もあり、自作のホラードールも模型部室で作る事もあるとか。

当然部長のコナミは嫌がってる。

「ナナちゃん……ゴメン私もちよつと見てて気持ち悪くなってきた……あんま可愛いとも思えないし」

「同感ねーじゃあさつきと片付けますか!!」

最大出力のフルバーストで人形たちを吹き飛ばすナナのフリーダ

ム、

「アイ！あの魔法陣を消せば人形は全部止まるって書いてあった！」

「ナナちゃん！オツケー！」

フルバーストの射線上だったスペースをアイのサムライリッパは大きくジャンプ、刀を大きく振るい四重の衝撃波を下に書いてある魔法陣に放った。

大型のドールがそれを相殺しようと撃とうとするも、それより先に衝撃波は地面に到達。魔法陣を打ち消し余波で球体関節人形も吹き飛びその場に倒れた。

そして空間は元の狭い部屋に戻る。窓は黒カーテンで閉め切られ。棚には棺桶の様なケースに入ったホラー系ドールやぬいぐるみ。綿でなくお米のつまったベアツガイⅢ、

部屋の奥に書かれた魔法陣と相変わらず気分のいい空間には感じられなかった。

「戻っても趣味の悪い部屋ツス。早く出ましょう」

アイとナナが先に出て、ソウイチが最後に部屋を出ようとするが、

「ソウイチ君！後ろ！」

「っ?!」

ソウイチが振り返るときっきの大型ドールがソウイチのF91に飛びかかろうとしてきた。とはいえ装備はもう使えない様だ。だがボロボロの所為か更にグロテスクだ。

ソウイチはたまらずビームライフルを向けて迎撃しようと引き金を引くも……

カチンツ

「弾切れっ?!」

ライフルは空しく音を出すだけだった。もう目の前にドールはいた。ちょうど扉をF91が塞いでるためその後ろにいるナナ達はむやみに撃てない。

抱き着こうと飛びかかるドール。

「あ……びゃああああああああああつっつ
!!!!!!」

絶叫するソウイチ。しかし人形はちょうど抱き着くタイミングで笑いながら煙の様に消えた。「フフフツ」という笑い声を残して……

「……どうやら演出だったらしいね。大丈夫？」
F91の肩に手を置くアイ、だがF91は置いた手の力でその場で倒れこんだ。

「……真っ白になって安心してらるわ。「ぬ」と「ね」の区別がつかなくな顔してまあ……」

「あうあうあー」

……

「全部ガンプラで済ますと思ったらガチなの用意してきたね……悪趣味だなあ……」

観戦モニターで見てたムツミもあの演出は怖かったようだ。

「去年はさつきみたいなのがいるステージを攻略する脱出ゲームみたいなイベントだったからね。リアル過ぎて不評らしかったんだけど、一方で喜ぶ人もいたから残したって感じかな」

ツチャが去年のこういったイベントを思い出しながら言った。

「その時もソウイチ君は？」

「うん、泣いてたよ。本人はそれで怖がってると思われたくないらしくて、意地はって積極的に出ようとするんだけど……」

「自分から地雷を踏みますか……難儀な……」

『今年ガンプラに置き換える』って聞いてそれならと立候補したんだけどね」

「前に都市伝説言ってた時は平気だと思ったんだけどね……ってあれ？」

「どうしたの？」と聞くヒロ達、タカコは別のビルダーのモニターを指さした。

指刺したモニターのビジョンは隠れてる二人のビルダーの物だ。二機とも量産型ビギニング、違法ビルダーだ。

ついでに乗っているのは前回アイが叩き潰したフリーガン（硬派ヲタク、以下テツ）と一週間前に叩き潰したヤスというフリーガンだっ

た。

「違法ビルダーがどうかした……？」

「ううん。そくじゃなくてチェーンソー持った熊が……」

『第一校舎一階』

モニター先のビギニング達はある一つの教室に隠れていた。これまた倉庫に使われていた様な扉の一つしかない教室だった。

「な！なんだよ！あのバケモノは！！あんなアトラクションあつたのか！！」

「し！知りませんよ！！テツさん」

怒鳴るテツにヤスは怯えながら答えた。三機目のビギニングはさつき出会ったガンプラにあつという間にやられてしまったのだ。チェーンソーで真つ二つだ。それはチェーンソーを持った熊だった。「くそっ！奴は警戒すべきだがこのままではアトラクションでは勝てない！」

テツはこのままでは負けるといふ焦りからか教室を出ようとする。

「あ！テツさんどこへ！」

「こんな所にいられるか！俺は一人で行く！何！俺は一流の兵士だ。あいつとは出会わなければいいだけの話だ！」

そう言いながら教室の外へ出るテツ、廊下に出るとすぐ辺りを見回す。誰もいない……。ふと、背後で『カタツ』という物音がする。思わずライフルを構えながら振り向くテツ、しかし誰もいない。

「な……なんだ驚かせやがって……」

そう言つてテツは前に体勢を戻す。が、目の前にチェーンソーを持った熊がいた。次の瞬間テツの脳天にチェーンソーが……失礼、テツの乗ったビギニングの脳天にチェーンソーが刺さる。

「ぎーぎやああああ！！！！」

テツの絶叫！ヤスの目の前にテツのビギニングは真つ二つになつていった。

「テ！テツさん！！」

ヤスが叫ぶと真つ二つになったテツのビギニングは力なく倒れた。

「きひっ！きひひっ！！気づかないとでも思ったわけえ？バツカだよねえ袋小路みたいな教室に隠れるなんてさあ！」

熊に乗ったビルダーの黄色い声が聞こえる。女だ。裂けたビギニングを蹴飛ばして熊が教室の中に入ってくる。影になって鮮明な姿は見えないがベアツガイの改造というのは分かった。左腕に搭載されたチエーンソーが轟音を上げる。

「くー熊が！！熊があああああ！！！」

それがヤスの断末魔となった。ついでに二人揃ってこの光景は度々夢に出る光景となり、ベアツガイ系が怖く感じる様になるがそれはまた別のお話。

『第一校舎二階東側、女子トイレ前』

「ん？なんか絶叫が聞こえたわね」

「何だろ？つとソウイチ君、大丈夫？」

「ありがとうございます……。俺とした事が……油断したツス。もう大丈夫ツスから……」

サムライリッパーに肩を貸してもらった体勢だったF91は自分の足で立った。ビームライフルはもう使えないから捨てたが、

「クソツ……情けないなあ……次はどうにかして挽回しないと……」

「で、次がこの女子トイレ『少女の住むトイレ』よ。ちよつとここは複雑っぽいわね」

画面の説明を見ながらナナが呟く。

「どういう事スか」

「学校じゃ二通りあんのよこの噂、一つは『女子の怨霊がこもった鏡が見た人を鏡の中に引きずり込む』もう一つは『四番目の個室に住んでる女子の幽霊が、その個室に入った女子を鋏持って切り殺しに来る』ってのよ。」

このイベントでもその二つの説明でどっちがあるかはわからないの。ちなみに弱点は『恐れないで女子を倒せ！』だつてさ」

アイは説明を聞きながら女子トイレの中をのぞく。奥まった空間だが横スペースはほとんどない。

「この狭さじゃ自由に動けないね。とりあえず私一人入ってみるよ」
アイはサムライリツパーの両腰のビームサーベルを取り出し。ダガー程の長さにビームを発生、狭すぎるためここでは長い刀は使えない。

「何かあったらすぐ呼んでくださいよ！」

「うん。お願いねソウイチ君」

そう言つてアイはトイレの中に入る。

「さて、どうしたもんかな……」

少し進んで右側に備え付けてあつた鏡を見る。その瞬間アイは「あつー」と叫ぶ。映つてたのは自分の機体ではなかった！直後サムライリツパーはその鏡の中に吸い込まれた！

「あつー！アイ！（ヤタテさん!!）」

ナナとソウイチが叫ぶ。

アイが鏡に吸い込まれた直後、画面が切り替わる。さっきのおもちや研のステージによく似た円柱状の巨大な部屋だ。違いは敵が一体だけ部屋の中央にいた事。

「ノーベルガンダムだ……お化けみたいなアレンジになってるけど……」

ノーベルガンダム……Gガンダムに登場した女性型ガンダムだ。細長い体躯でセーラー服を着たロングヘアアの少女の様な姿をしており、新体操の様なスタイルで戦う軽量機だ。

しかし目の前のノーベルはそんな印象は全然ない。肌に相当する部分の白いボディは幽霊の様に青白く、セーラー服状の部分はボロボロに汚しが入れている。目は真つ赤で両手には

『ハイパーガン普拉バトルウェポンズ』という商品の『シザーソード』という剣を二刀流で持っていた。これは支点の部分を組み合わせる事によってハサミ状に出来る武器だ。怪談に合わせたアレンジをしたノーベルガンダムだった。

そして鏡に映つてたのもこのガンダムだ。ノーベルガンダムはゆるらつ……とした動きを見せると一転、素早い動きで切りかかってくる

る。

「怪談混ぜたってわけ！たかが怪奇につ!!」

負けじとアイはビームサーベルの長さをロングにし、肩アーマーの刀を展開、ノーベルガンダムに立ち向かった。

そしてトイレの外では……

「やばいよーアイが吸い込まれた!」

「急いで後追わなきゃ!……っ?!ハジメさん!伏せて!!」

ふと、ソウイチはナナのフリーダムにけた繰りをかます。その場に倒れるナナのフリーダム。

「うわっ!何よ!」

すぐさまソウイチはナナの前に躍り出る、そして屈みながらビームシールドを全開。直後、大型のビームが廊下を襲った。

「っ!!」

驚愕するナナ、どうにかビームは防ぎ切った様だ。ビームが止むと東側階段付近に……チェーンソーを持った熊……否、ウイニングガンダムのパーツを両腕に付けた。ピンクと赤に塗られたベアツガイがこちらに走ってくるのが見えた。

さっきの熊、チェーンソーの正体はウイニングガンダムのシールドだった。

「な!!何あれ!!」

ナナもこれには驚愕する。あんな七不思議はない。しかしそんなナナを尻目にソウイチはベアツガイに立ち向かおうとする。

「アサダ!まさかあいつに立ち向かおうっての?!無理よ!」

「無理でもやるんす!今俺達が引いたらアイツは女子トイレの中のヤタテさんを襲うかもしれない!」

あいつは只者じゃない。そんな気がしたから、

「倒せないにしても俺達で時間を稼がないと!!」

「……アサダ、アンタらしくないね。そこは『絶対勝つ』ってのがアンタらしいと思うけど」

「あ……」

「ま、いいわ。アタシも負けるのはゴメンだからね！行くわよ!!」

「はい!!」

——それにしても…縫い目っぽく見えるけど、……赤いスプリツター?——

そうナナは思いながら、ソウイチと共にベアツガイに立ち向かっていく。反面ベアツガイに乗ったビルダー、ナナ達の助けたブレスレットの少女は余裕の態度を崩さなかった。

「きひひっ!フリーダムとF91か。結構作りこんでるけど……アタシの敵じゃねえんだよ!!アイに!アタシがどんだけ腕上げたかの証明の為に!やられちまいなあ!!」

闘争心をむき出しにする少女。……少女のツインテールの右結び目では、アイと同じデザインのアゴムが揺れていた……。

※後半に続く

第41話 「山回高校、学校七不思議（後編）」

「このおっ!!」

仮想空間ではあるが深夜の学校の廊下、向かい合う三機。

F91に乗ったソウイチはヴェスバーを展開、そしてフリーダムに乗ったナナは羽に内蔵されたビーム砲をベアツガイに向ける。

「こんだけ狭けりゃ避けられないでしょ!!」

そう言いながらナナとソウイチは一斉に発射。

「浅知恵え!!」

ベアツガイのビルダーは叫ぶとベアツガイの目が光る。次の瞬間、ベアツガイの目から巨大なビームが発射された。正に『目が粒子砲』である。

「なにそれえ!!」

ナナが叫ぶとエネルギーの塊はぶつかり合う。そして起こる爆発。フリーダムとF91は爆風に踏ん張った。

爆風が止むとその場にベアツガイはいない。「どこに行った?」と見回す二人。

「後ろか!!」

気づいたソウイチが叫んだ。後方から切り離して飛ばしたベアツガイの左手、ウイニングガンダムのコアファイターが突っ込んでくるのが見えた。

先端部に取り付けられたチェーンソーのけたたましい音が響く。

「うおっとー!」

とつさに二人は回避。反転して襲ってくるコアファイター、チェーンソーだけではなく機首から大口径バルカンまで撃ってくる。

「ちよこまかと!!」

ナナはフリーダムの左腕のロングレンジライフルを畳み、三連バルカンに変形させ撃った。連射の方がこのスペースでは都合がいい。

撃ち落とそうとするが相手が小さく、高速で動く為中々当たらない。フリーダムも大きさにここじゃ狭くて飛ぶことができない。

「くそっ!ライフルが使えれば!!」

バルカンと胸部マシンキャノンを撃ちながらソウイチが愚痴る。ヴェスバーではエネルギーを食い過ぎて使えない。その時だった。追い打ちとばかりに姿を現したベアツガイのミサイルがナナとソウイチに撃ち込まれる。

「!!」

起こる爆発、ナナの方は小さいとはいえシールドで防御。

「うう、アサダ、大丈夫? あっ!!」

隣のソウイチの方を見てナナは絶句した。ソウイチのF91は腹から下をベアツガイの右腕『ウイニングナツクル』に握られていた。

姿を現したベアツガイの右腕は伸びていた。ちなみにミサイルはベアツガイの背中の中のランドセルがミサイルランチャーになってる為、そこから撃った。

「う……あ……」

ギシギシと言う音と共にうめき声を上げるソウイチ。凄い力だ。背中のヴェスバーに、本体に亀裂が入ってきた。

「きひっ! きひひっ!! バツカじゃないの!! アンタさつきアタシのメガ粒子砲受けた時、ビームシールド駄目にしてただろ!」

そう。ビームシールドのあるF91の左腕は黒く変色してる。さっきのビームは防御するには負荷が強すぎたのだ。

「っ!! アサダを離せ!!」

「あ? その声……驚いたぜ。アンタさつきアタシのブレスレット探してくれたポニーテールの女じゃない?」

「?! そういうアンタはさっきの商店街の?!」

「ま、悪いけど勝負で情けはかけねえよ」

ナナはベアツガイを撃とうとするが、ベアツガイはすぐさま伸ばした腕を元に戻し、F91を盾にする。そしてフリーダムの中からコアファイターが迫る。駄目かと思ったナナ、だが次の瞬間。

「ナナちゃん!!」

トイレから出てきたアイのサムライリッパーが刀を振るう。それはチェーンソーに当たりコアファイターを弾いた。

「アイ!! 終わったの?!」

「うん！画面見て！チェック入ってるでしょ?!」

「あ、本当だ」とナナ。その頃、鏡の中のノーベルはナマス切りにされて完全に破壊されていた。(ちなみに時間経過で復活するのでどのチームも必ず一度七不思議を倒す必要がある)

「それじゃ、どうにかしてソウイチ君を助けなきや……って、あのベアツガイ?!でも両腕は……」

ベアツガイを見た途端アイは驚く。

「!?ガンダムAGE―1E?!でも背中にアタシの作ったランチャーがついてない!あんなウエアはなかったのに!!」

同様にベアツガイのビルダーも驚いた。ふとベアツガイの手が緩む。

「!!今だ!!」

ソウイチはすぐさまF91をベアツガイに向ける。そして胸部のマシンキャノンのベアツガイの外側の『目』の部分、ビーム砲目がけて撃った。

『ガガッ!』と音を立ててベアツガイの右目は破壊される。

「なにいつ!!」

1、 怯んだベアツガイは手を離してしまった。その隙に離脱するF9

「ヤタテさん!!今だ!!」

「ソウイチ君!うん!」

すぐさまアイはベアツガイに斬りかかろうと、四本の刀を構え飛びかかった。

「チツ!新しく作ったウエアだろうけどなあ!!」

ベアツガイのビルダーが叫ぶと弾かれたコアファイターが再び動き出した。

サムライリッパーの背後からチェーンソーを回すコアファイターが迫る。

「アイ!後ろっ!」

「っ!!」

アイはサムライリッパーの右手の刀二本を重ねてチェーンソーを

受け止めた。『ギャギギツ!!』と耳をつんざくような音と、火花を立ててお互いは一歩も譲らない。

「これで終わりのな訳ねえだろ!!」
「っ!!」

駄目押しとばかりにベアツガイはウイニングナツクルで殴り掛かってくる。サムライリッパはその拳を左の手甲で受け止める。衝撃の振動がアイのGポッドに伝わる。

「へえ、受け止めたんだ。おもり入れて威力上げてあるんだけどなあ」「私だって！前よりは腕を上げたつもりだからね！」

「あ？言うじゃん！でもアタシには勝てない！だってアンタに……ん？」

その時、アイを倒させまいと、フリーダムとF91がベアツガイ目掛けて一斉にビームを放つ。ベアツガイは後退しながらかわす。狭い為避けきれない分はウイニングナツクルで受け止めて防御した。

ちょうどその時、チエーンソーを受けていたサムライリッパの刀は二本とも折られた。だがサムライリッパは突っ込んできたコアファイターを屈んで回避、コアファイターはベアツガイの左腕に収まった。

「チツ！こっちは一体だけだつてのに張り切っちゃってまあ」

「弱気だね。それが連絡したときに『一人で参加する』ってはりきつてた人のセリフ？」

「ま、こっちはまだ七不思議全部攻略してないぜ。ここは逃げさせてもらうかな!!」

直後ベアツガイの背中の中のランドセルが展開、ミサイルはアイ達目がけて放たれる。全員がバルカンが刀で迎撃するが、破壊したミサイルはスモークだった。辺り一面が煙で覆われる。

ベアツガイの影が逃げるのが見えた。

「あー待ちなさい!!」

ナナは叫びながらベアツガイの逃げた方へ射撃を撃ちまくった。しかし手ごたえがない。逃げられた様だ。

「……逃げたか」

「ヤタテさん、有難うございます。助かったツス」

「ソウイチ君、ううん、こっちこそ助かったよ。有難う」

「……助けてもらって言うのも何ですけど、本物ツスよね。ヤタテさん」

「え？なんで？」

「いやだって鏡から出てきたんだし、実は偽物なんて演出とかじゃ……、ああいや、神経質になりました。忘れてください」

前の七不思議でおおいに怖がった所為だろう。どうもソウイチは身構えてしまう。

直後、F91のヴェスバーが音を立てて崩れた。さつき撃つたので耐えられなかったらしい。

「あ、無理が祟ったツスね」

「アタシのビームピストル、渡しとくから使つてよ」とナナ、ソウイチは「恩にきります」と返した。

「それはそうとアイ、さつきの熊のビルダー、知り合い？妙にフランクな会話してた様に見えたけど」

「ああ、そうだね……実はアイツは」

「今はいいツスよヤタテさん。俺達は残りの七不思議を倒さなきゃいけないんすから、駄弁つてる暇はないんだ」

ソウイチはさつきナナから手渡されたビームピストルを二丁持ち、足早に次の七不思議の所に行こうとする。

「あ……ソウイチ君」

「アサダ！つたく……そんな早くいかないですよ。あんたオカルトに免疫ないんだから」

「っ！そんな事ないツスよ!!」

『第二校舎二階北側、階段』

「アサダ！そっち行つた!!」

二階と三階を結ぶ階段の踊り場、その大鏡から出てきた七不思議の機体とアイ達三人は戦っていた。

相手は『ガンダムseeddestiny』に登場した『ガイアガンダム』普通の機体に比べて細長い手足をしており、四つん這いの体勢になる事により犬型に変形するガンダムだ。

ただ、今戦ってるガイアガンダムは手足が左右あべこべに付けられており、逆さ四つん這いで壁を高速で這いながら手に持ったビームライフルを撃ってくる。まるで蜘蛛だ。

「くそっ！動きが気持ち悪い!!」

ソウイチはビームガンを撃ちまくりながら迎撃しようとする。五番目の七不思議『階段の蜘蛛男』階段で転げ落ちて、全身骨折で死んだ生徒の霊が大鏡に宿ったという七不思議だ。

ナナがどうにか撃ち落とそうとフルバーストを連続で放つ。しかし相手はガイアは器用にかわす。

「なんなのよ!!あの超反応は!!」

「クツソー!!役立たずになってたまるか!!」

ナナとソウイチの二人の声に焦りが見え始めた。射撃が、刀の衝撃波がことごとくかわされる。撃っても撃っても即座に反応しかかわされてしまうのだ。

「ナナちゃん、あの七不思議の弱点は?」

「それであれだけ載ってないのよ。なんかその項目だけ空白になっていて」

「自分で考えろって事かな」

そう言いながらアイは辺りを見回す。目についたのは踊り場の大鏡だ。

「鏡にまつわる七不思議なら」

トン、とサムライリッパは鏡に掌を当てる。また吸い込まれるかと思っただがそんな事はなかった。

「中に入るタイプじゃないなら!!」

そういうとアイはサムライリッパの当てた掌に力を込めた。掌が一瞬輝くと中心から鏡に高速でヒビが入り、鏡が砕け散った。

サムライリッパの素材『戦国アストレイ』の能力、粒子発勁(りゅうしはつけい)だ。対象の内部にエネルギー(元ネタではプラフス

キー粒子）を注ぎ込み対象を内部から爆発させる。

鏡が砕けた瞬間、天井に張り付いていたガイアガンダムは停止、地面に落ちると虫の死骸のように手足を丸め、砕け散った。

「鏡が本体だったんスカ、こんな簡単な事に気が付かなかったなんて……」

ソウイチが苦虫を噛み潰した様に言う。

「アサダ、しょうがないよ。連戦で疲れてるんだし……」

「……分かってますよ。大人げなく不機嫌になるつもりはありません」

そう言いながらもソウイチは自分とアイの実力差に不満はあった。

『あの人を、アイを越えたい』そう思いながら自分を鍛えてはいたが、そんな自分の何歩も先にアイは行ってしまふ。

それは自分のチームとしては頼もしいし、嬉しい事でもある。しかし自分のプライド的に素直に喜べなかった。

……

そして三人は第三校舎から残りの七不思議攻略の為に体育館に向かう。体育館は第一、第三校舎から渡り廊下を使って向かう。

（三階、二階からは非常階段で渡り廊下に降りる。その際第一校舎と第三校舎の渡り廊下は合流して体育館へ続く）

「あのベアツガイに会わない様に第三校舎使ったけど、まだ旧校舎にいるのかな……」

移動しながらナナは不安を口にする。

「違うみたいッスよ!!」

ソウイチが叫んだ。体育館の方からさっきのベアツガイが歩いているのが見えた。こちらに気が付いたのだろう。いきなりベアツガイはこちらに走ってくる。

「……ソウイチ君、ここは私に任せて、あなた達は体育館へ!!」

アイは両手に残った刀を持つとナナとソウイチに先に行くよう促した。

「ヤタテさん……でも俺達じゃ次に勝てるかどうか……」

「アサダ、行こう」

ナナがソウイチに共に行くように促す。続けて、アイに聞こえない様通信を切り替えてソウイチに話しかけた。

「アンタの気持ち、アタシにも分かるよ。アタシだってアイみたいに強くなりたい。でもアイはすごい勢いでレベルアップしてる。でもアイはアタシ達を頼りにしてくれてるんだ。今は自分のするべきことをやろうよ」

「ハジメさん……」

「アイ！頼むわ!!」

そう言うとなナは体育館の方へ飛び立つ。ソウイチもそれに続いた。

「ナナちゃん、ソウイチ君、お願いね……」

そしてアイはベアツガイを迎え撃つべく身構えた。ベアツガイも構えをとりながら対峙する。お互いは横にすり足をしながら校庭に出た。

「アイ！アタシはもう六つの七不思議を攻略した。後は残りを倒すだけだ」

「悪いけどそれは出来ないよ。負けるつもりなんてないもん」

「強気だなあおい。さっきはあんな防戦一方だったのに」

「今度は広さも十分、負けないよ！」

「そうかい。でもアタシは倒せねえ！だって!!」

再びベアツガイはチェーンソーを回転させサムライリッパーに襲い掛かる。

「だってアンタにガン普拉教えたの！アタシなんだからなあ!!」

そして体育館に入ったナナとソウイチ。『ダン、ダン、ダン』とドリブルをする音が響く。音のする方、バスケットを見ると大柄なグレーの機体が、自分の頭でドリブルをしているのが見えた。

機体は『ジオング』だ。お腕をひっくり返した様な形状のスカートと膝下の脚部、頭はモノアイで口におちよぼ口の様なビーム砲、両耳の部分にはバーニアと細い角、

『ファースト』と呼ばれる『機動戦士ガンダム』のラスボスだ。脚部が

ついでるのは『パーフェクトジオング』と呼ばれてるバリエーションだ。大きさはナナ達の機体の2・5倍はある。

頭部は脱出ポッドとして胴体から切り離せる仕様で、この怪談に選ばれたのはそういうギミックがあるからだろう。

「ジオングか……大方あれとバスケットをして勝ってんでしょ？」

「ご名答、『体育館の首なしバスケット部員』弱点はバスケットの勝負で勝てよ」

「ならやる事はひとつだ!!」

そういうと二機はコートに躍り出る。パーフェクトジオングは動じること無く。相手を倒すべく腰の左右についたビーム砲を発射、二機共かわすとジオングに迫る。

そしてフリーダムがジオングのボールを掠め取った。

「やった！ハジメさんナイス！」

「部活経験はないけど！こん位アタシだつて!!」

そのままドリブルしつつジオングの反対方向のゴールにいれようとするが、ジオングは両手を切り離し頭を取り返そうとしてくる。ジオングは肘下からの両手を切り離し遠隔操作できるので。

そして両手の指先は全てビーム砲、フリーダムに撃ってくる。

「どードリブルしながら避けろつて無理でしょ！」

ならばとナナはフリーダムの翼を広げ、高くジャンプ、飛んでしまえばいいとナナは思ったのだ。持ったまま歩いてないので反則にはなっていない。

「 Dank!! 決める！」

右手でジオングの頭を高く掲げゴールに入れようとするナナ、その時、ボール変わりのジオングの頭がビームをフリーダム目に撃ってきた。フリーダムの右肩に当たるビーム。

「うわっ!!」

ショックで怯むナナ、ジオングの口から撃ったのだ。威力はそれ程ではなく、フリーダムのダメージも肩アーマーを吹き飛ばす程度に留まったが、

その隙を突かれジオングの頭は伸びてきた両腕に奪還される。

限界稼働のF91の瞬発力だからこそできる芸当だった。まさに神業。これにはジオングも怯んだ。その隙を逃さずソウイチはジオングの頭を弾く。

頭はナナのフリーダムの方へと向かう。

「ハジメさん!!いまだああ!!」

「ゴメン笑いそう!!でもソウイチ!!無駄にしないわ!!!」

デイフェンスのコミカルさに笑いをこらえながら、しかしソウイチの気持ちを汲みながら、ナナもバウンドしたジオングの頭を掴むとゴールへと飛んでいった。今度はジオングの口は上に向けている。

ジオングの方も両腕をのぼし頭を奪還しようとする。が、間に合わない。

「これで!!ゲームセット!!」

その叫びと共にナナはゴールにダンクシュートを決めた。これにてバスケ勝負はナナ達の勝利となった。ジオングは砂の様に崩れ消えていった。

「アサダ、アンタのおかげで助かったわ。ありがとう」

ナナはゴール下でへたれたソウイチのF91の腕を掴み起こした。既にF91のブースト形態は解かれていた。

「こつちこそ、俺は自分に来る事しただけツスよ。それよりヤタテさんと後一つの七不思議へ急がないと」

「アイはともかく、後一つは近いから大丈夫よ。場所はグラウンドの『ぐら公様』よ」

……

そしてこちらはイベントを観戦してるヒロ達の視点だ。

「ぐら公様?..なんか検討もつかない名前が出てきたなあ」

ヒロはタカコとムツミに聞いてみる。それにはタカコの方が答えた。

「あいあい。お答えしましよ。『ぐら公様』っていうのは昔っからの山回町を守ってるっていう土地神様なんですよ。なんでも巨大なプテラノドンみたいな姿っていて昔は龍神様なんていわれてたみたいですけどね。」

七不思議は六つ廻った後にグラウンドで空を見上げると飛んでる『ぐら公様』が見えるって言われてます」

「な、七不思議って割には急にUMAっぽいなあ……」

「学校っていうよりこの町全体の不思議ですかね。ここら一帯が盗賊に悩まされていた時に降臨して、この土地と人を守ったって文献もありますよ。なんでもある侍が『ぐら公様』と勝負して、打ち負かしたら力を貸してくれたとかで、

その時相手の軍勢が撃ってきた矢を、飛行体勢から着地体勢に変わるっていう不意打ちで相手の軍勢蹴散らしたとか、その際にはあまりの圧倒っぷりに『阿修羅すら凌駕する存在』とか言われたらしいです」

「突っ込みどころ満載すぎる……」

「でも、この七不思議は唯一目撃情報が絶えないんです。七不思議を体験した体験してないに関わらず、夜のグラウンドで月をバツクに飛んでる所を見た人が何人もいます。

実際グラウンドの位置って『ぐら公様』を祀ってた祠があったらしいんですけど」

タカコの説明にツチャも関心する。

「俺もこの町の土地神様は知ってるけど、よく知ってるねフジさん」

「当然ですよ。ツチャさん、去年その特集で、新聞部総出で学級新聞書きましたからね。実際探しに山入りましたけど結局見つからなかったんですよ」

そして今度はアイの方に視点に移そう。

アイのサムライリッパーとベアッガイの戦いは苛烈を極めた。校庭で二体は何度も斬り合う。

「だああっ!!」

外側のサブアームで刀を持ち、内側の手でビームサーベルを持つアイのサムライリッパー、ベアッガイの方は右目を切られ目が粒子砲は使えない。しかし変わらさずチェーンソーとウイニングナツクルで攻撃を受ける。

再び離れる二体、お互いボロボロだ。どちらも獲物は刃こぼれを起

こし全身小さな傷が目立つ。

「しぶといぜアイ……ここまで腕上げてるなんて……」

「こつちのセリフだよ……。ここまであなたが強くなってるとはね、ノドカ」

そして両機とも構えを取る。

「当然……約束じゃん。アンタとのき!!」

そしてお互いに向かって走り出す。ベアツガイはウイニングナツクルで殴り掛かろうとしてくる。

「それも……こつちのセリフだね!!」

対するアイはそれを剣を使わず。飛び蹴り体勢で挑んだ。

「剣で受けねえ?! 正気?!」

サムライリッパーの脚とウイニングナツクルがぶつかり合った。直後、ウイニングナツクルが潰れた。

「なっ!! たかがキツクに!!」

「脚で撃ったんだよ。粒子発動を!」

くるつとバク中しながら向き直るサムライリッパー、本来粒子発動は内部から爆発させる物だ。しかし外部から潰すというのはアイのアレンジだった。

「きひっ!! きひひっ!! 楽しい! 楽しいよ! やっぱアンタとのバトルって面白い!!」

「私もだよ。だけどそんなに時間はかけられないからね!!」

続きを、と身構える二体だが、ナナの通信がアイに入る。

「アイ、こつちは体育館の七不思議を倒したわ! 後はグラウンドだけ! そこで合流しましょ!」

「ナナちゃん! わかった!」

通信が切れるとアイはベアツガイの方を向いたままバックで移動、ある程度距離を置くと背を向け逃げ出した。

「あ! 待てこら!!」

「ごめんノドカ、もう時間稼ぎは必要ないみたい!!」

ベアツガイもアイを追いかけながらグラウンドへ向かった。

……

グラウンドのど真ん中にフリーダムとF91は立つ。すると月明りが一瞬かげる。

なんだと思つて上を見ると、満月をバックに飛ぶ巨大な翼竜が見えた。いくなれば黒いケツアルコアトルス（白亜紀末の生物史上最大の翼竜、大きさはキリン並）、それが『ぐら公様』だった。

「あれさえ倒せば決まる!!」

そう言うとフリーダムとF91は飛び上がる。空中戦だ。ぐら公様は敵の二機を察知すると口から青い弾を連続で撃ち出していく。まるでリニアカノンだ。

「ちよっ!!:怪獣?!」

フリーダムはシールドで防ぎ、F91は回避、反撃とばかりにフリーダムは三連バルカンで、F91はビームピストルで、ぐら公様に射撃を撃ち出す。

お互いが器用にかわしながらの空中戦となった。

「ちっ!!ラチがあかない!!だったら退路を塞ぐわ!!」

フリーダムはハイマツトフルバーストの体勢を取るとフルバーストを発射、五つの大型ビームが上空のぐら公様に迫る。うち一つはど真ん中だ。

「当たるー!」そうナナは確信した。

しかしその瞬間フワツとぐら公様の体は浮かんだ。翼の向きを調節したのだ。ぐら公様の股下をフルバーストのビームが通り過ぎた。

「何ーあの回避はー!」

そのままぐら公様は上空にも拘わらず翼を畳む、そして急降下、下の方で飛んでるフリーダムに迫る。

「ハジメさん!!」

ソウイチはビームピストルをぐら公様に撃ちこむ。しかしぐら公様は右に、左に体をひるがえしながらかわす。そして『邪魔だ』といわんばかりにF91に青い弾を発射、

「うわあっ!!」

命中したF91は大きく弾かれる。そしてぐら公様は右腕でフリーダムの頭を掴み、更に急降下、

「な!! 掴まれた!! きゃあああ!!」

そのままぐら公様はグラウンドに突っ込んだ。グラウンドは巨大な土煙をあげる。

「!! フリーダムが?! ナナちゃん!!」

グラウンドに向かつてアイはフリーダムが叩きつけられたのが見えた。土煙が晴れるとグラウンドにクレーターが出来ていた。

その中心でナナのフリーダムはほぼフレームだけの状態になっていた。撃墜扱いにはなっていないが、やられる寸前だ。

「くっ! 頑丈なRGだったからまだ撃墜になってないけど! これじゃ!!」

ナナが操縦桿を動かしながら叫ぶ。フリーダムがほとんど動かない。とどめを刺そうとぐら公様は右手を振りかざすが……

「ハジメさん!!」

ソウイチのF91がビームサーベルでぐら公様の右手に斬りかかった。ぐら公様は右の翼の骨格でビームサーベルを受け止めた。

「?! 巨大生物なのにビームを!!」

そのままF91を弾く。ケタ外れのパワーだ。だが直後ぐら公様は空へ飛んだ。さつきぐら公様のいた場所をサムライリツパーの刀の衝撃波が通った。アイの放った斬撃だ。

サムライリツパーはクレーターの中心部に移動。ナナのフリーダムの体を起こす。

「ナナちゃん!! 大丈夫?!」

「アイ、だ、駄目っぽい……」

「どうにかしてアイツを倒せばいいんだろうけど、ああも早く動かれちゃ!!」

上空でぐら公様とF91が戦ってる。F91はボロボロな為、高速で飛び回るぐら公様に圧倒されっぱなしだ。

「アンタも飛べばいいじゃねえかアイ」

「無茶言わないでよノドカ! グラエストロランチャー外したんだから飛べないよ!!」

「……飛ぶ方法ならあるぜ」

「へ？」

そして上空ではF91がぐら公様に掴まれる『抱きしめたいな』と言わんばかりに

「くっそおお!!離せえ!!」

と、その時、下の方から三日月型の衝撃波が迫ってくるのが見えた。サムライリッパの衝撃波だ。ぐら公様はこれを回避、

ソウイチは飛んできた方向を見ると、サムライリッパがウイニングのコアファイターに乗って迫ってくるのが見えた。

「ヤタテさん?!」

「ソウイチ君!大丈夫!」

サムライリッパは続けて衝撃波で攻撃を、そしてコアファイターもバルカンを撃ちながらぐら公様に突撃をかける、しかしぐら公様はことごとくこれを回避、

そして突撃を回避されたコアファイターはぐら公様を通り過ぎた。しかし次の瞬間……。

『ドンッ』という音と共にぐら公様に振動と亀裂が走る。その際に掴まれたF91も手放した。

「っ?!何が起きたんだ!?!」

ソウイチが見るとぐら公様の背中に乗ったサムライリッパが見えた。背中に映ったサムライリッパはぐら公様に粒子発動を撃ちこんだのだ。手はサブアーム含め刀で塞がっているので足で放った。

「いつの間に!ヤタテさん!!」

「ソウイチ君!手伝って!まだ落とせてない!!」

駄目押しと刀とビームサーベル四本をぐら公様に突き刺しながらアイが叫んだ。

「よっ!!」

ソウイチも両手にビームサーベルを構えると手首を高速で回転。二刀流は擬似的なビームサーベルのチェーンソーを作る。そしてぐら公様の体を切り裂いた。

しかし血は出ない、あくまで扱いは模型なのかパーツが壊れる演出

だった。しかしまだ負けなはいわんばかりにぐら公様は口を大きく咆哮をあげる。

そのタイミングでだ。ぐら公様の口にビームが撃ち込まれた。翼竜の頭部はそれで吹き飛ばされた。

「ロングレンジライフル?!ハジメさん!!」

下を見るとクレーターの中心部でフリーダムが右腕のライフルを向けてるのが見えた。寝たままの体勢でそこから撃つたのだ。直後、ライフルが小規模な爆発を上げ、壊れた。

その一撃が決め手となった。ぐら公様は墜落し砕けた、アイのサムライリッパはF91に抱えられながらグラウンドに降り立つ。

「どうやら一人もやられずに済んだみたいだね?」

フリーダムを起こしながらアイが安堵の声を上げる。

「そうね。ありがとう、コアファイターで手を貸してくれて」

「気にすんじゃないねえ、ブレスレットの札だよ。借り作るの嫌いだからさ」

同時に『ミッションクリア』というアナウンスが流れた。これでアイ達とベアツガイの少女の優勝は決定となった。

と、突然ぐら公様の残骸が輝きだす。

「何?!まだあるんすか?!」

身構える全機、だが残骸からは金色のオーラが溢れ、それは翼竜の形となり天に昇って行った。

——童ヨ、見事ナリ——

という言葉を残して、通信ではなく、頭に直接入ってくるような声だった。システムではない。妙な存在感がある声だった。

「……な、なんだったの?」

……

Gポッドから出てきたアイ達にツチャ達が駆け寄る。

「凄いじゃないか!今日はいつにも増して激戦だったのに一人も欠けることなく優勝できた!」

「……最初は俺もそう思ったんすけどね。よく考えたら一人でこなす

「奴もいたからそれ喜んでいいか……」

ソウイチの頭にはさっきのベアツガイが浮かんでいた。考えてみたらあのベアツガイは一人でこのミッションをほぼ完遂した。

大会ではそいつとも戦うかもしれない。そしてアイとの自分との実力差、そう考えたら今のままでもいいのか。というソウイチの不安があった。

「こんな時に何言ってるのよアサダ！ここは素直に喜びましょ！折角のイベントなんだからさ」

「ハジメさん、そうッスね……。そういえばヤタテさん、さっきのベアツガイの人は？」

「アタシならここだぜ」

すぐさまそのビルダーは現れた。ピンクのツインテールとクマの凄く鋭い目、ナナ達が商店街で会った少女だ。ナナは別として、タカコ達はその少女がベアツガイのビルダーだと知ると驚いた。

「戦いぶりはよく分かったぜ。ま、ちよつとはアイもマシになったって事かねえ」

「もー、こんな時にまで憎まれ口言わないでよ。私の友達の前なんだからさ」

「あー悪い。今日位は相手怒らせたくなかったんだけどさ。でも今したい事はさ、そんな事じゃなくて……そんな事じゃなくて……」

ふと少女の目尻に涙が浮かぶ、そしておもむろにアイに抱き着いた。

「久しぶり、アイ。会いたかった……！ずっとずっと会いたかった！」

無邪気な笑顔で少女はアイに抱き着いていた。アイの左腕に豊満な少女の胸が押し当てられる。

「わわ！ノドカ!!……私も楽しみにしてたよ。あなたに会えるのさ」

アイも笑顔で答えた。ふと、アイは少女の左腕のブレスレットが目についた。

「あ、それ私があげたブレスレット。まだつけてくれたんだ」

「そういうアンタもアタシのヘアゴムつけててくれてるじゃん」

「最近付け始めたんだけどね。なんか見てると昔しんみりしちゃって」

「え？あんた、そのブレスレット、死んだ友達から貰ったって言ったじゃん」

と、ナナが少女に突っ込みを入れた。これにはアイも少女も面食らう

「ああ?!横から何言ってやがる!!んな事言ってねえ!!」

「いやだって『もういない』って」

「引っ越していなくなっただっただっただよ!!何失礼な勘違いしてんだ!!!」

「って事は……、アイちゃん……、もしかしてその人が……」

「ムツミちゃん、うん、紹介まだだったね。私の幼馴染『ユミヒラ・ノドカ(弓平和)』」

「ま、言いたい事はあるけどよ。よろしく」

予想していたナナ等は除き、そこにいたほぼ全員が驚きの声を上げた。

——それにしても……半年でまた胸大きくなったねノドカ……それに引き換え私の胸は……くっ——

そしてアイの方は心の中で喜びと嘆きの感情が入り混じっていたという。

※おまけ、スタッフの会話

「いやーそれにしてもラストで土地神を再現した翼竜出すなんてパンチが効いてますねハセベさん」

「それなんだけど……あんなプログラム入ってないんだよ」

「え?」

「大体翼竜自体出ない筈だよ。あそこは1/100 オーバーフラッグが出るはずだったんだから」

「じゃーじゃああの翼竜は?!」

その後のイベントではちゃんと最後はオーバーフラッグが出た。しかしそれから、『ぐら公様』の目撃情報はまた増えたという……。

都市伝説、信じる信じないはあなた次第……。

第42話「開幕!!ガン普拉バトル選手権!!(前編)」(ガンダムAGE―3E & ウイングガンダムノヴァ登場)

「開幕!!ガン普拉バトル選手権!!(前編)」

——今日でお別れだね……—

——……アタシ、泣かねえよ。今までお互い助け合ってきたけど、これからは一人で出来る様にならなくちゃいけねえんだから……—

——うん……ノドカ、もつと皆に愛想よくしなきゃ駄目だよ——

——分かってる——

——ご飯、ちゃんと野菜も食べなよ——

——分かってるよ——

——私、山回町に行ってもガン普拉続けるよ。約束だもの——

——ああ、約束は二つ、『お互い自立しよう』そして——

——『選手権の時になったら、私は新しいガンプラのチームを見せる』ってね。あ……もう行かなきゃ——

——あ!待ってアイ!このヘアゴム、片方やるよ——

——え?だってそれ、ノドカが欲しかった奴じゃない——

——アンタも欲しがってたのをアタシがごり押しで買った奴だぜ。アンタにだって持つてる権利はあるよ——

——ありがとう、ノドカ……元気でね……グスツ——

——何泣いてんだよ……もう会えないわけじゃないのに……泣きたいのはアタシだって同じなのに……そんな事されたら……アタシも……アタ……シも……—

「このハロ付ヘアゴムはね、ノドカから片方貰ったものなんだ」

アイは昔を思い出しながら自分のヘアゴムのいきさつを説明する。

イベントが終わった後、チームI・Bのメンバーとタカコとムツミを連れて近所の牛丼チェーン店『ローラの牛』に来ていた。

ツチャ達もイベントを終えた後、昼食を取りに一つのボックス席に四人ずつが座る。二つのボックス席、グループ的には『アイ、ノドカ、ナナ、ソウイチ』『ツチャ、ヒロ、タカコ、ムツミ』となっていた。「昔っからアタシの方ががつついて、アイの欲しがってた物をとっちゃうってのが結構あったからな。そのへアゴムもそうだったからさ。なんか申し訳なくなつてとつきに渡しちまった」

バツが悪そうにお冷を飲むノドカ、その後ろのボックス席でタカコが「そうなんだくありがと」と答えた。ヘアゴムのデザインが同じと気づいたタカコの質問だった。

「ま、この七人がアンタのガンプラチームってわけ？さっきのバトル見るに結構な人集めたじゃねえか」

「うち二人は普通の友達だけだね。更に言うなら集めたんじやなくて、複雑な経緯があつた結果なんだ。皆信頼のおける仲間友達だよ」

「ところでノドカだっけ？アンタ、小さい頃からアイと友達だったんでしょ？どんな風に付き合ってたか興味あるんだけど」

今度はナナが向かいのノドカに詰め寄る。

「いきなり呼び捨てかよ。あー、アイとの付き合いは気が付いたら仲良くなつてたって感じだなあ。何しろ生まれる前から親同士が仲良しで」

「生まれた病院も同じで誕生日も二日しか違わなかったよね私達、ノドカが先で」

「お互い対になる様に名前も『アイ』と『ノドカ』で愛と平和つてつけられたんだよ」

「もし仲悪かったらどうするつもりだったんだか」とアイが苦笑する。

「ま、付き合いは生まれた病院からだけど。アタシの方がアイを引っ張ってる感じだったな。アイは妹みてえなもんだ」

「えー私が妹お？ちよつと待ってよ。ノドカ考えなしに周りに突っかかってばっかだったじゃん。私が苦勞してフォローしてばっかだったんだよ？むしろノドカの方が手のかかる妹みたいだつて思つてたよ私」

「あ？何言ってんだよ。アタシの方が二日早く生まれてんだからアタシの方がお姉さんだろ？」

「いや双子じゃないんだから、おじさんとおばさんからも『アイちゃんはノドカのお姉さんみたいだねえ』って言われてたよ私」

「それだったらアタシもアンタのおじさんとおばさんに『ノドカちゃんはアイのお姉ちゃんみたい』って同じ事言われてたぜ」

やいのやいのとどっちが姉かでもめる二人、だが険悪な雰囲気は無い。この言い争いすら楽しそうなアイとノドカだった。中が良かったというのはその場にいた六人全員が理解出来た。

と、そうこうしてうちに「お待たせしました」と店員が注文した牛丼を次々と持ってきた。トッピングはそれぞれ違うが、ソウイチがカレーライスを頼んだ以外は全員大体同じだった。

皆揃って食べようとするが「ちよつと待てよ。注文間違えてる」と、ノドカが言い出す。

「アタシの注文したトッピングはチーズの奴だよ。これピーマン牛丼じゃねえか」

「も！申し訳ございません！」と店員が慌てて取り替えようとするが、それをアイが制止する。

「あー、大丈夫ですよ。チーズ牛丼だったら私も注文したから、私のと交換しようよノドカ」

「あ？でも……」
「いいからさ、私だったら何だって食べられるし」

ノドカは渋々ながらも承諾すると、次からは気を付けるよう店員に言った。

「ま、気を取り直していただきやすか」とソウイチ、

「それにしても、あの様子じゃまだピーマン食べられない？ノドカ」

イタズラっぽくアイが笑いながら聞いた。『ギクツ』と擬音が聞こえそうに震えたノドカ。

「？ノドカちゃんピーマンが嫌いなのかい？」とそのリアクションを見たヒロが聞く。

「……別に嫌いな物あったって生きていけんだろ？」

「ヒロさん、実は偏食なんですよノドカって」アイはそう言いながらノドカの趣向、特に野菜が駄目で、昔は肉料理に混ぜ込んだりして食べるよう工夫していたのを思い出す。

「うー、余計な事言うんじゃないよ」と恥ずかしそうにノドカがアイを小突く。

「あーごめんごめん、でも好き嫌いが未だに激しいんじゃないよあ、やっぱり私の方がお姉さんかなー」

「お母さんみてえな事言うなよー」

なおも二人はじゃれ合う。そんな様子をナナ達は珍しそうに見ていた。

「珍しいですね……ああいうラフなアイちゃん……」

「それ程までに気を許してる友達って事なんだろうな」

ツチャは二人の様子を見ながら牛丼を口に運んだ。

……

昼食後もなんやかんやで納涼祭を楽しんだアイ達、そして夕方皆と別れるとノドカはアイの家泊まる。今日はアイの両親は旅行に行ってる為、アイとノドカの二人だけだ。

二人はダイニングキッチンで、夕食を作るか外食するか出前取るかで話をしていた。

「外食だったら昼に食べたんだし、アタシはありもんでいいよアイ」

「といっても、余り残り物はないんだけどね……」

冷蔵庫の中をのぞきながらアイが呟く、こういった会話も二人が姉妹同然に育った故だった。

「アンタが作るもんだつたらなんでもいいよ、アタシ」

「うーん、blankあるからあんま自信ないんだけどね。いいよ、その代わり昔みたいの手伝ってくれる？」

こう提案したのはアイが昔、両親が共働きだった為、ノドカと協力して夕食や家事をやっていた。それを懐かしんだからだった。

「アタシお客さんなんだけどな、でもいいよ。昔みたいに作りますか」

やや反論しながらも了承するノドカ、だが彼女もアイ同様、昔の思い出を懐かしんだからこその答えだった。エプロンを付けてキッチン

ンに並ぶ二人。

「ちようどひき肉と玉ねぎがあるからハンバーグ出来るね」

「アンタの事だからなんか混ぜるんだろ？」

「そうだねー……」と冷蔵庫の野菜室を調べながら答えるアイ、と、目についたのはレンコンだ。

「ノドカ的に受け良かったからレンコン摩り下ろして混ぜるかな？」

「？そんなりアクション取ったっけアタシ」

「少なくとも玄札木市（くろれきし）の時は文句はほとんどなかったよ」

「じゃあアタシが前みたいにレンコン摩ればいいんだな」

「うん、おろし金はその棚の中だから」

大抵こういう事はアイが引つ張っていく。台所ではアイが指揮を取り、ノドカはアイの言う事を聞いてばかりだった。作り方自体はこねたハンバーグに摩り下ろしたレンコンを混ぜた以外はオーソドックスな物だ。そうしていながらも他愛もない会話が続く。

引つ越してお互いどうなったか、どんな学園生活を送っているのか、食生活はどうしているのか。そんな話をしながらアイは残すは焼くだけのハンバーグをフライパンに入れ、蓋を置いた。

「そっか、アイの方はおばさんが仕事辞めたからおばさんが料理作ってくれてるってわけね」

「おかげで私の方はだらけちゃったけどね。そっちは相変わらず？」

「まあな、父さんも母さんも仕事で忙しくて、アタシじゃうまく飯も作れないからやっぱ近所の『ローラの牛』で済ましてばっかだよ」

「まああそこならすぐ行けたからね。色んな所で食べたけどローラの牛が一番味が良かったかなやっぱ」

「きひひっ。アンタもそれで牛丼好きになったからねえ」

その後の夕食時も、テレビを見てる時も、他愛無い世間話をしながら時間は過ぎていく。そして就寝時、風呂上がりに寝巻を着て、髪を下ろしたノドカがアイのベッドに座る。座る際に薄い寝巻越しにノドカの豊満な胸がポヨンと揺れる。

アイの部屋でベッドはノドカが、アイは床で布団を敷いて寝る所

だ。

「悪いな。ベッドとつちやって」

「いいって」

「それにしてもアンタのチームの友達、ナナっていったっけ、仲良いみたいじゃない」

「ナナちゃん。うん、私が引越してきて最初に出会った同い年の子、そして最初に出来た友達だよ。この街の事や勉強とか、色々教えてもらったたりでお世話になりっぱなしだよ」

「……でもさ、ガンプらの実力はそうでもないみたいだろ？」

やや真剣な口調でノドカは言葉にする。

「え？そりやまだガンプら初めて半年位だからねナナちゃん。でもそれであれだけ戦えるんだから大したもんだよ。センスかなりいいよ」
「……でも選手権は来週だろ。荒削りの実力で満足できるのかよ？アンタ『イレイ・ハル』に会いたって言ってたじゃねえか」

イレイ・ハル、アイの憧れのガンプらマイスター、アイは彼と見る人を感じさせる様な全力のガンプらバトルをするのが夢だった。選手権で全国で勝ち進めば彼に会えるかもしれないとアイは踏んでいた。ノドカの発言にアイは違和感を感じる。

「……ナナちゃんじゃ勝ち進めないって思ってる？」

「正直そう思うぜ。アイのチーム、他のメンバーだって結構な使い手だろうけど、必ずしも全国に勝ち進めるとは思えねえ。……なあアイ、やっぱりアタシとまた組まねえか？」

真剣な口調は増し、真剣な表情でノドカはアイに詰め寄った。

「え？……ノドカ……？」

「アタシもアンタも、前と比べてずっとずっと強くなった。これでアタシ達が組めば怖い物なんてねえよ」

「もしかして玄札木の皆とうまくいってないの？部長のセクハラに耐えられなくなった？」

「いや、んな事ねえよ。……でもさ」

「悪いけどそれは出来ないよ……」

「アイ……？」

「今のチームはき、お世話になった人から預かったチームなの。その人だって全国に行きたくて切磋琢磨してきた人だよ。それが続けられなくて私にチームを預けてくれた。」

今更その人を、ううん、他の皆だって私を信じてくれた。チームの皆を裏切るなんてできないよ」

真剣な剣幕でアイは答える。強い意志が感じられた。ノドカもこれには駄目かと素直に思えた。

「そつか……分かってるよ。冗談だよ冗談。アタシだって今のチームにいる責任はあるよ。自分のチームじゃエースなんだからさ、悪かったよ。変な事言って……」

——アイ、自立出来たんだ。——そうノドカは自分の言葉を飲み込んだ。

「いいよ。ところで……」

アイはまじまじとノドカの胸を見る。圧倒的ボリューム差、彼女を山とするならアイのは平地だった。

「胸さ、また大きくなったみたいだけど……今何cm……？」

それを聞くや否や、ニツとノドカの顔に笑みが生まれる。

「あ？もしかして今でも羨ましい？」

「はっ倒すよ」

「悪い悪い。こんなん持ってたって碌なもんじゃねえよ。太って見られるわ肩幅デカいわ、部長にセクハラやられるわで」

「部長も黙ってれば美人なのに……あんま言いたかないけど、それでも羨ましいもんは羨ましいよ」

「まー確かに中学生の時、バストアップ体操やってあんな結果になったアンタとしては……」

「はつとばすよ……。一番言っちゃいけない事って知ってるでしょ。いいから答えてよ」アイの声にちよつと怒気がちよつと入る。彼女にとって一番言ってはいけない事の様だ。

「う……悪かったよ。ちよつと耳貸して、アタシのバストサイズは……」

恥ずかしそうにノドカはアイに耳打ちした。

「……………う、嘘でしょっつ!!!!もうすぐ90じゃん!!!」
……

そして一週間後、いよいよガン普拉バトル選手権の地区予選が開催される。場所はアイの故郷『玄礼木市』の多目的ホール『ホワイトドーム』そのメインアリーナだ。

「ひやく凄いだね。今までの市民体育館の比じゃないよ」

メインアリーナ（試合場）の観客席に座りながらタカコは周りを見回す。ホワイトドームはスポーツイベントやコンサートに講演会、様々な用途に対応している。

試合場のGポッドの数も、その上に吊るされた観客席の方向それぞれに向けられたスクリーンの大きさも、観客席の数、そして観客の数も今までの比ではない。大会規模も大きく、今日から毎週日曜日に3週間に分けて予選を選抜するらしい。

「この中から一つだけ全国に行くチームが選ばれるわけね」

タカコの隣、観客席のソウイチ……の母親、『アサダ・カナコ』が呟いた。今観客席に座ってるアイの身内はタカコ、ムツミ、ソウイチ、カナコ、そしてブスジマ・ミドリの五人だ。

「ていうかなんで母さんいるのさ」

「もうつれないわねソウイチ。可愛い息子の試合なんですもの。見に行かなきゃ失礼でしょ?」

「それもあるけど、今日はカナコさんは父さんのチームの応援も兼ねているのソウイチ君」ミドリがソウイチに告げ口する。

「なんでブスジマさんの応援に母さんが?」とソウイチ。

「だってブスジマさんのチームに私の上司のヤナギさんがいるんだから当然でしょ?」

「え?!ヤナギさんがブスジマさんのチームに?!」とソウイチは驚愕。ヤナギ・ユウジ、登場は25話、カナコにガン普拉を教え、ソウイチとカナコを相手に激戦を繰り広げたベテランビルダーだ。

「そういう事。ところで、あれだけ試合場にGポッドがあるって事はサバイバル形式の試合になるって事かしら?」

「あいあ〜い。ちよつと待って下さいね〜」そういつてタカコがパンフレットで調べる。

「まずはトーナメントの前にサバイバル戦やっである程度のチームを振るいにかけるらしいですよ。これである程度数が減ったらトーナメントに組み込むルールですつて、ちなみに全部同じフィールド内じゃなくてフィールドは四つに分けてバトルするみたいですよ〜」

「なるほどね。ところでナナちゃんはいないの？今回アイちゃんのチームはツチャさんとハガネさんの三人でしょ？」

「いや、ハジメさんもバトルには出るから今試合場にいるよ母さん。今回の機体は特別性なんだ」

「ん？どういう事よ」

そして選手控え室では……

「いい!?この予選を突破すれば県内予選のトーナメントに出られます！まずはここを突破しなければ始まりませんよ!」

アイがナナとツチャとヒロにハツパをかけていた。

「分かってるよ。この予選にはフジミヤさんはいない。でも君達の為に戦わせてほしい!」

「俺達もヒロ君の為に戦おう。そして俺達自身の為に!」

「つたく緊張するわね。アタシの実力でどこまで通用するか」

「今までやって来た事を信じようよ。それに今回は私達もついてるんだし」

緊張するナナをアイは励ます。「俺達もついてるぞ」とツチャ達は頷いた。

「皆……お願い!!」

「じゃあ行くよ皆!!チーム『I・B』……」アイが突き出した手に全員が手を重ねる。

「ファイト!!」「オー!!」「ファイト!!」「オー!!」

スポーツの試合の様に気合を入れると全員が試合場へ向かっていった。

そして予選のサバイバルが始まる……。今回のフィールドは『熱帯のジャングル』見渡す限り森、森、森、隠れる所には不自由しないだろう。

『機動戦士Zガンダム』に登場した羽を広げた太った鳥の様な母艦『ガルド』から三人の機体が飛び出す。遠くでも母艦から次々と機体が発進するのが見えた。

チームI・Bの機体は、ツチヤの『デコレーション・アツシマー』、ヒロの新作『ウイングガンダム・ノヴァ』そしてアイの、いやアイ達の新作『ガンダムAGE3E（エンハンスド）』だ。

三体共飛行可能な機体で当然飛んでいる。飛んでる眼下の密林に各々の影が見えた。

「今回の機体、ブスジマさんの家でエアブラシって奴を使わせてもらって塗装した奴だけど、どんな感じ？」

ナナがアイに問いかける。今AGE3Eにはアイとナナの二人乗りだ。『エアブラシ』とは希釈した塗料をコンプレッサーやエア缶といったエアの圧力で、スプレーの様にパーツに吹き付けるツールだ。

これにより筆以上にムラのない塗装が可能になる。当然コンプレッサー含めると高額な為、アイ達は手が出せない。持っていたブスジマや、ツクイといった大人たちから使わせてもらい、レクチャーを受けて塗装した。

「軽いよ。塗装の精度が上がったおかげで今まで以上に動きが滑らかになった感じ」

「アタシも練習の時、操縦してみたけどやっぱりそう感じるよね。……違法ビルダーに納得するわけじゃないけどさ。便利だけどなんかズルいよね。こういう高級な道具もってる人程有利になっちゃうんだもん」

「……………」

ナナの言葉にアイは力無く答える。同時に違法ビルダーの事も頭に浮かぶ。お金が無くて道具も買えず、それでも勝ちたいという気持ち。違法ビルダーに手を出す理由となってしまうという事実を……。「与太話は後にするんだ!!来るぞ!!」

ツチャが二人の話を遮った。青空をバックに遠くから数体のガンブラがライフルを撃ってくる。

「そうだった!!皆!まずは私が撃つから!!」

アイは叫ぶと右手に構えたバスターライフルを最大出力で放った。エネルギーの濁流は数体の敵を飲み込む。そこからかわした数体の敵が散開しつつ、引き続き射撃をしてくる。

「なら漏れた敵はこっちも散会して叩くぞ!!」

「了解!油断しないでね!」

三体共散開、それぞれ分かれた敵に向かい突っ込んでいった。

「ん?アイちゃんのガンダムにはナナちゃんも乗ってるの?」

こちらは観客席、カナコがアイのAGE3Eを見ながら疑問を口にする。ソウイチがいち早くその疑問に答えた。

「その通り母さん、今回ヤタテさんのガンダムは二人乗りって事になってるんだ」

「何か理由があるの?二人で分割して操縦するとか」

「あれは分離形態があつて、その時に二人で操縦するようになってるんだよ。一人でまかなう事もできるけど、それぞれ二人の方が細かい操作が出来るからね。その分分離状態でどつちかがやられた場合は連動して撃墜扱いになるっていうデメリットがあるんだよ」

「へーそういう仕様も出来るんだ」

以前分離機に乗っていたカナコは感心した声を上げた。

散開した敵機が飛びながらヒロを取り囲もうとする。ヒロのウィングガンダムノヴァは手に持ったツインバスターライフルを二丁拳銃に分割、左右に一丁ずつ向けるとすぐさま発射、そして回転し周りの敵を一掃する。

「一度やってみたかったんだよなこのシチュエーション!!」

遠くではアイのAGE3Eがバスターライフル下部のビームライフルで一機を撃ち抜く。そして左側の敵を左腕のガントレットに仕込んだバルカンで迎撃、

「重武装ってわりには本当コイツよく動くわねー」

「元々キャパシティに余裕ある機体だからね」

このAGE3Eの改造の狙いはズバリ『手数を増やす事』である。本来のAGE-3はパワーとキャパシティに余裕が有るものの、武装がビームサーベルと『シグマシスライフル』というビームバズーカのみだ。それを補うため腕にバルカン、両肩に小型シールドブラスター、足にGNソードIIと重武装の機体と化していた。

その向こうでもアツシマーがトマホークで敵機を両断、こちらは派手さはないが堅実に相手を仕留めるスタイルの様だ。

「ツチャさんも終わったみたい。一息はついたかな?」

「ソーフツフツフ、そうはいかないよ!!!」

「?!」

突如声が響くと共に下の密林から何条ものビームが、そして更に上空から何条も射撃が放たれてくる。アイ達はそれを難なく回避、ジャングルから撃ってきた機体が、空から撃ってきた機体が姿を現す。

「新手の三機?」

対峙する六機、新手の機体は『Gのレコンギスタ』に登場した『ダハック』という。後頭部が円盤の様になっており。掌からビームシールドを発生できる。しかも背中の四本のサブアームを展開させビームソードを発生出来る機体。改造としてサブアームの上部に、パワードアームズパワーダーのガトリングとミサイルが一部のアームごと追加されていた。

二機目は『ガンダムOO』の射撃機体『ケルデイルガンダム』遠距離と近距離、どちらにも対応できる射撃の万能機だ。さらに『シールドビット』という六角形のビットをいくつも装備しており防御にも隙がない。この機体の頭部は『ジムストライカー』という機体の頭部と、

『ツインビームスピア』という槍状の武器を移植されており近距離にも対応していた。

三機目は『ガンダムW』に登場した『メリクリウス』という雷神様を模した機体だ。防御能力を高めた機体で、背中には雷神の小さな太鼓のような円盤が左右に五つずつ装備されている。これは展開することによって電磁フィールドを発生出来る『プラネイトデیفエンスー』という防御装備だ。メテオホッパーという支援機に乗っておりメテオホッパー自体にも左右のプロペラントタンクは『ウイングガンダムゼロ』の翼に変えられており。フロントの部分もウイングゼロのシールド（ツインバスターライフルを取り付けてある）に変えられていた。

「久しぶりだなあ！ヤタテさんよ!!」

黒く塗装されたダハツクのビルダーが叫ぶ。

「?前と戦ったビルダー?!」

「つれねえなあ!以前クロノスで戦った。『セキラン・ライター（関蘭雷太）（第15・16話登場）』だぜ!!」

「!!」

「俺もいるぜ!!以前レースで戦った。『アマミヤ・ニワカ（雨宮丹羽可）（第14話登場）』だぜ!!」とメリクリウスから叫ぶ。

「ソフツ!そして僕は『ヒカワ・ミゾレ（斐川雲）（第16話登場）』さ!!」ジム頭のケルディムが叫ぶ。

全員が、アイ達と以前戦った経験のあるビルダーだった。アイも全員を思い出す。

「あなた達は!!それぞれのチームを持っていたのに共闘という事ですか?!!」

「その通りさ!だが俺達はチームを合併し、チーム『キマイラ』として生まれ変わった!!俺達はその中のエースの集まりなのさ!!」

「ソフフ!目的は二つ!煮え湯を飲まされた君達に復讐する事!そして県内予選を勝つ為さ!!」

「ミゾレはムツミちゃんにいい所見せるのが目的だろう?」とダハツクに乗ったライターが茶化す。「よ!余計な事を言わないでくれたまえ

！』と返すミゾレ。

「ははっ！ま、あの時の俺達とは違うからなあ！そういうわけだから大人しく復讐されなあ!!」

ライタの叫びを号令に三機が一斉に撃ってくる。目的はアイのAGE―3E一機のみ、しかしAGE―3は難なくかわすとダハックの後ろに軽やかに回り込む。

「ダハックにもパテで重りを入れたみたいだけどね!!やっぱり挙動が遅くなってるよ!!」背後から撃ち抜こうと両手のバルカンを構えるアイ、

「ニワカ!!」

「おうさあ!!」

ライタが叫ぶとニワカのメリクリウスがAGE―3Eの前に出る。それもプラネイトデیفエンサーを展開した状態で、それにより発生したフィールドはバルカンをも弾いた。

「!?」

「アイ！休まないで!!」

ナナの叫びにハツとし回避行動を取るアイ、さっきアイのいた地点にビームが走った。ニワカのケルデймが狙撃したのだ。

「惜しいねえ。でも僕達も以前よりやるものだろう?」

いけると確信するニワカ、しかし彼のGポッドに警告音が走る。

「!?」

ケルデймもとっさに回避行動を取る。ツチャのアッシマーがライフルを撃ってきたのだ。ヒロのウインググノヴァが、ツチャのアッシマーが、AGE―3Eを守る様に集まる。

「敵はアイちゃんだけじゃない！俺達も相手してもらおうか!!」

「へっ！面白れえ！俺はメリクリウスだから相手はあのウイングガンダムにするぜ！」ニワカがヒロ相手に突っ込む。

「いいだろう！来い！」

「ソフツ！ならツチャさん！あなたも復讐の対象ですからお相手願いましょうか!!」ミゾレのケルデймはシールドビットを展開、ケルデймごとアッシマー目がけて撃ってくる。

「いいだろう！複数の操作という物の神髄を見せてやろう!!」

それぞれ二機は離れ、対戦へと持ち込む。残ったのはライタのダハックとアイのAGE3E、

「さて！残った俺達はすぐさま始めようか!!」

「上等!!ナナちゃん!すっかり捕まってる!!」

「OKアイ!ぶん回しちゃって!!」

そして二機もまた飛び交う。ダハックは両掌からビームシールドを発生させ前面をしっかりとガード。しかしダハックの武装は、ほぼ背中に集中している為、防御しながら攻撃してくる。

アイも左手にGNソードII、ライフルモードを持ちながら撃とうとするが、ダハックのビームシールドは掌についてるだけあって器用に角度を変えて防御してくる。

そしてなおも背中中の武装でこちらを迎撃しようと撃ってくるのだ。

「ならさつき同様!後ろを取る!」

AGE3Eはダハックの周りを大きく円を描きながら射撃を続ける。最初是对応しきれていたダハックだがそのうちAGE3Eの動きについてこれなくなってくる。そして後ろを取った。

そこだとAGE3Eは左手のGNソードIIで背後から切りかかる。

「フッ!」

ライタは不敵に笑みを浮かべる。そして背中中のサブアームを後ろに展開、ビームサーベルを四本纏めて後ろに向け、GNソードIIを受け止めるダハック。

「何!!でも甘い!!」

アイはすぐさま右足を振り上げる。足にはもう一つのGNソードIIがマウントされたままだ。足はダハックを切り裂き、ダハックはそのまま落ちていく。

「な!うおお?!」

密林の中にダハックが入ると、アイのAGE3Eはジャングルへ向けて最大出力でバスターライフルを撃った。起こる大爆発と出来上がるクレーター。

「やったの?」

「とりあえずは何も起きない……ひとまずはやってみた」

そしてこちらはヒロの方、メリクリウスはウイングガンダムノヴァを追いかけながら、メテオホッパのフロントに搭載されたツインバスターライフルを撃ちまくる。しかしノヴァは難なくかわす。飛行形態のバードモードになってないにも関わらずだ。

時折ノヴァは振り向きながらバスターライフルで撃ち返すが、すぐさまメリクリウスはプラネイトディフェンサーでメテオホッパごとと機体を防御、攻撃中にディフェンサーは展開できない為、ラグがあるがヒロの攻撃はうまくさばっていた。

「やはり硬いか！ならばー！」

そういうとヒロは逃げていたノヴァを反転、メリクリウスに突っ込んでいく。

「来るかよーだがー！」

ニワカは叫ぶとツインバスターライフルで迎撃しようとする。しかしかわしながらヒロは突っ込んでくる。シールドの尖った先端部を突き出しながらノヴァは突っ込んできた。

「くっ！メリクリウス！間に合ええ!!」

ヒロのシールドが届く直前、メリクリウスの防御フィールドが張られる。これで防げると思ったニワカ、だがノヴァのシールドはフィールドを貫通、メリクリウスのコクピットにめり込んだ。

「なっ!!なんで!!」

「甘いな！プラネイトディフェンサーは実弾には耐性が弱いんだ!!ましてや機体の重量をかけたこの一撃、貫通されて当然というわけだ！」

「お！おのれええ!!」

グラツとメリクリウスはメテオホッパから落ちるとジャングルへと落ちていった。メテオホッパはそのままアイとライタが戦っていた所へ落ちていった。

「いけるーこのウイングガンダムノヴァなら!!」

ヒロは自分の自信作に強い手ごたえを感じていた。

そしてツチャの方だ。天候は雲一つない快晴の筈が、いきなり曇ってきて徐々に雨が降ってきた。

「ん？雨か」

チームが減ってきた影響の仕様変更だろう。すぐに雨は土砂降りとなった。

「考え事とは余裕ですね!!」

ミゾレの声にツチャはすぐケルディムに集中する。

「ソフフッ！いかに分離したかく乱戦闘が得意なツチャさんでも、この数は防ぎきれないでしょう!!」

ミゾレが高笑いをしながらシールドビットを飛ばす。ビットはそれぞれ細かいビームを撃ちながらアツシマーを追い詰めようとする。

「数を出せばいいという物じゃないさ!!」

アツシマーデコレーションは分離、アツシマーとライトニングブースターは逆方向へ飛んだ。

そして高速で飛びながら、ライトニングブースターとの連携でビットとケルディムのターゲットを分散させかく乱する。

ビットは追いかけてながら追撃するが撃っても撃ってもアツシマーとライトニングブースターはその先を行く。分離した二機はビットをかわしながら距離を狭め、どんどんケルディムに迫ってくる。

「……このー来るなー」

焦りながらミゾレは残しておいたシールドビット同士を四つ合体させる。アサルトモードだ。こうする事によって高出力のビームを撃つ事が出来るのだ。

ちようにアツシマーはケルディムの照準ど真ん中にいる。「今だ!」とミゾレは確信、チャージ不十分ながら、アサルトモードのシールドビットからビームを放つ。アツシマーに当たるビーム。閃光がミゾレのGポッドを覆う。勝ったとミゾレは確信する。だが次の瞬間、放たれたビームがケルディムを貫いた。

「なに!!」

落ちていくケルディム、ミゾレは閃光が止んだGポッドからアツシ

マーを見る。アツシマーの前にはライトニングブースターが旋回していた。そして機首部分のシールドはビームを受けた後があり、ここで防御したのだろう。チャージ不十分で撃った上、土砂降りの中で撃った所為でアサルモードの威力はミゾレの予想以下となってしまう。

「質よりも量とは言うが、質を共わなければ意味はないぜ!!」

「そーそんなあ!!」

そう叫びながらミゾレのケルデームは爆散。

「ふう、どうにかこのサブイバルも切り抜けられそうだ」

安堵するツチャ……しかし

「へ、そんなうまくいくわけねえだろ？サブロウタよお」

「?!その声?!」

直後、アツシマーの目の前に、巨大なガンプラのシルエットが現れた。土砂降りの為姿は分かり辛い、そしてその声もツチャは聞き覚えがあった。

続けてアイ達の方だ。遠くではまだ戦闘が続いてる。こちらも土砂降りだ。

「ありやりや、さつきまで晴れてたのに」

「ある程度ガンプラの数が減ってきたから仕様が代わったんでしょ？これじゃ動きも悪くなっちゃうしビームの威力も下がっちゃうな。早くヒロさん達と合流しないと」

「へーその前にアンタは倒されるのさ!!」

「?!」

いきなり入ってきた通信にアイは顔をしかめる。土砂降りの中で幾つもの機影が見えた。数は30近いだろう。そしてアイ達はその機影に見覚えがあり、声にも聞き覚えがあった。

「ネフィリムガンダムとマステマガンダム!」

違法ビルダー達のお出ましだった……。

※後半に続く。

第43話「開幕!!ガン普拉バトル選手権!!(後編)」(R プラン・ガンダムブリュンヒルデ登場)

ガン普拉バトル県内予選、トーナメントに上がるには参加チーム全員のサバイバル戦に生き残らなければならなかった。アイ達は今まで育んできた力でサバイバルを有利に進めるが、違法ビルダー達が大量挙げて押し寄せてくるのであった。

その頃別のフィールドでは。

「ぬうおお!!」

グフカスタムに乗ったブスジマの叫びが砂漠のフィールドに響く。彼はダブルオーライザーが振り下ろしたGNソードⅢをヒートソードで受け止めた。今のダブルオーライザーはブースト状態。トランザムだ。全体的に強化されたブスジマのグフカスタムだが、トランザムのパワーには少々部が悪いらしい。

しかしすぐさまダブルオーライザーの背中に銃弾が撃ち込まれ、ダブルオーライザーは倒れこみ爆散。ブスジマが見たのは彼の味方。ツクイ・クニヒコのシャア専用ザク、ヤナギ・ユウジのジムキャノンⅡが火器を向けていた事だった。銃口から火が出ており二体で撃つたのだろう。

「クニヒコー!ユウジー!おめえ!」

「シンジ!トランザム状態のダブルオーライザーと正面からぶつかり合う奴があるかこのバカ!!」

「なんだとこの野郎!!」

「まあまあシンジもクニも落ち着きなよ」

身構えるシンジ、煽るツクイにヤナギは二人をなだめる。二人とも放っておくとすぐ喧嘩になるからヤナギはいつも止める立場だ。といても『喧嘩するほど仲がいい』を地でいってる二人なのはヤナギも知っていたが。

「チツ!……まあ俺らはこの調子なら予選通過は余裕だな。アイちゃ

ん達はどうかだろうよ」

そしてまた別のフィールドでは……

「チツ！まいったな！部長達とはぐれた！」

『ガンダムA.G.E』に登場した敵ポジションのガンダム『ガンダムレギルス』に搭乗したノドカが宇宙フィールドで戦っていた。僚機とははぐれてしまい今は一機だ。それを狙って何機ものガンプラが襲ってくる。

「あ?!群れを成しやがって!こんなところで止まれるかよ!!アイとまた戦うまではああ!!」

ノドカは自分を鼓舞しながら敵の群れに突っ込んでいった。

そしてアイのフィールド、スコールの降り続くジャングルでは、目の前に違法ビルダーの機体が現れる。四本腕の巨体、『マステマガンダム』、肥大化した右腕の機体、ネフィリムガンダム、それらが30機以上の群れを成してアイ達へ襲ってくる。今のアイのチームは皆分散していた。

「こっちが一人になる所をねらって！」

アイが叫ぶや否や、アイのA.G.E―3Eに撃ってくる違法ビルダー達、アイはかわすとすかさずバスターライフルを構え撃ち返す。放たれたエネルギーの濁流は数機の違法ビルダーの機体を飲み込み。そこから狙われなかった、もしくはうまくかわした違法ビルダー達はかまわず突っ込んでくる。

「チツ！」

「アイ!ここは逃げる?!」

サブパイロットとして乗ったナナが提案する。が、

「まさか！」

自信を持った声でアイは返答、

「そう言うと思った!やって頂戴！」

両手にGNソードII(ソードモード)を構える。そして二刀流のまま違法ビルダー達の群れに突っ込んだ。違法ビルダーの機体もまた

迎撃しようとして突っ込みながら撃ってくる。しかしAGE―3Eはかわしながら高速で距離を縮める。

「つあぁっ!!」

アイは叫びながらSNソードIIを振り下ろす。目の前にいたネフィリムは右手から防御フィールドを張ろうとするも、その前にGNソードIIで真つ二つにされ破壊。

左右からマステマガンダムが一機ずつクロウで潰そうと襲ってくるが、アイは両手のGNソードIIをライフルモードに変形、AGE―3Eの手を左右に大きく広げ、マステマのクロウにGNソードIIに深々と突き刺さる。すかさずアイはライフルモードのトリガーを弾いた。放たれたビームが両方のマステマの腕を破壊、そしてマステマ2機が怯んだ所を、アイは瞬く間にマステマの胴体を切り裂き破壊する。墜落し爆発するマステマ、

今までと同じ強さだ。もっと強い違法ビルダーが出てくるかと思っただがこれではアイも拍子抜けだ。

「やれやれ!またこんな展開?!いい加減ワンパターンなのって飽きるんだけどね!」

「それでもねえぜ!!」

「?」

そういうとマステマガンダムが二体、前に出てくる。

「久しぶりだなあ!AGEの女!」

マステマからの通信が入る。スクールで聞き取り辛いが聞き覚えのある声だ。

「その声!ケン君とチトセちゃんに因縁つけてたヤスって違法ビルダー!」(35&36話登場)

「俺もいるんだよ女!硬派な俺様もな!」

「あなたは……コウタ君をだまし討ちにしたフリーガン」

「一流の兵士、テツ様だ!」(39話登場)

アイにとって苦い思い出の対戦相手だ。実力はアイが圧倒する物の、突っかかり方に問題があり気分よく対戦する事が出来ない相手だ。

「性懲りもなしにこんな数で押す戦法取るってわけ？」

と、そこへヒロのウイングガンダムノヴァが戻ってきた。

「アイちゃん！無事かい！」

「ヒロさん！」

「違法ビルダー達が来るのが見えたからね。戻ってきたよ」

「助かります！さあどうする！強気に出てきたはいいけど、私達に勝てるとは到底思えないけど？」

「それでもねえさ！今回はスゲエ助っ人を用意してきたからな！！」

「助っ人？」

「そうともさ！さあ先生！出番ですぜ！！」

ヤスはその切り札の力でアイを倒そうとする。……が、

「……」

「誰も来ないじゃん」

ナナが訝しげに突っ込みを入れる。

「ど！どうしたんだ！先生はあー！」

テツが慌てた声で周囲の違法ビルダーに確認しようとする。

「た！大変です！先生がツチャのアッシマーと戦ってます！」

「な！なにいい！！」

「なんかよくわからないけど、じゃあこのまま倒しちゃっていいわけ？」

「待ってよアイ。ツチャさんは助けに行かなくていいの？さっきの助っ人って奴はツチャさんと戦ってるんでしょ？」

そうだ。奴らがあれ程自信満々な態度でいられるのだから、性能か操縦技術か、少なくともどちらかが秀でてるのは目に見えていた。

「まずは目の前の障害を排除すべきだよナナちゃん。どの道僕達は彼らを倒さなくちゃいけないわけだし」

「そういう事だよ！行くよ！」

そう言うのと二機はテツとヤスのマステマガンダムに襲い掛かる。

「くっ！！お前ら俺達を守れ！！」

テツが号令をかけるとテツのマステマガンダムを庇う様に、仲間や無人機のネフイリムガンダムが前に出る。が、アイはすかさず目の前

のネフィリムに思いっきり膝蹴りをかます。そして怯んだ所をGNソードIIで容赦なく切り裂く。ヒロのノヴァも同様、シールドを前面に突き出し、メリクリウスと同じ要領でネフィリムの防御フィールドに突っ込ませた。シールドはネフィリムのフィールドを張った右腕を貫通、直後に守りを失ったネフィリムにバスターライフルを撃ちこんだ。

「……この!!」

テツとヤスは後方から援護をしようとするがその前に前衛の機体はやられていく。瞬く間に仲間の数は減っているのだ。

「おーおいー！先生が来るまで時間を稼げー！なんかあの女の弱点はねえのか!!」

再びヤスの慌てた声が響く。彼とテツは以前、ガンダム作品への暴言を言いながら戦っていた。そして怒らせたアイに容赦なくフルボッコにされた。ヤスもテツも彼女を怒らせるのはよそうと考えていた。恐れていたのだ。故に作品への批判は無しでいこうと決めたのだが、これでは意味がない。

「じゃー弱点ーあつー！」

ふと一体のネフィリムガンダムのビルダーが叫ぶ。高校生らしい。

「ありましたー！あの女の中学時代の同級生が俺の友達だったんです！ちよつと耳貸してー！」

「なー何ー！」

ネフィリムガンダムに耳を貸すヤスとテツのマスターガンダム二機、接触通信なので音はこの三機しか聞こえない。しかしその隙をアイは逃さなかった。

「何をしているの?!三機まとめてもらう!!」

アイはGNソードIIを二本とも横に構え、違法ビルダー三機ごと破壊しようとする。もうすぐその刃は三機に届く。だが……。

「おい女ーいやヤタテ・アイー！お前中学校時代クラスでバストアップ体操流行った時、自分だけ尻だけが大きくなったらしいな!!」

テツの叫びが大音響で周りに響いた。それを聞いたアイは

「っ!!!な!!!」

GNソードⅡを横に構えたまま固まった。

「しめた!!」

マステマガンダムは固まったAGE―3Eをクロードで握りつぶそうと襲い掛かる。

「ちよつとアイ!動いて!!」

「な……なんでその事……」

悶絶しながら言葉をひり出すアイ、これはマズイとナナは判断。すぐさまコントロールを切り替えクロードをかわす。今のメイン操作はナナだ。

「へ!聞いた通りだ!お前は体型のコンプレックスが強いらしいな!それを突けば倒せるぜ!」

そういうや否や残った違法ビルダーの機体がAGE―3Eに一斉に撃ってくる。悪口つきで、

「やーいバスト74!」

「でも尻は86!!」

「洋梨体型!」

「アイちゃんペツチャンコ!イエイ!!」

「ちよ!ちよつとアイ!しっかりして!」

ナナはそんな暴言を耳にしながら必死に違法ビルダーの射撃をかわしていく。

「うおい!女の人にそんな事言っちゃダメだろ!!」

ヒロはビームサーベルを構え、テツとヤスのマステマガンダムに突っ込んでいく。そして二体のマステマと切り結ぶ、マステマはクローで対応しようとするもウイングノヴァの動きは非常に素早い。しかし残った機体はなおもアイのAGE―3Eを襲ってる。

「何言ってるんだ!大きい胸は包容力の証よ!85cm以上の胸じゃなければ俺は認めねえ!!」byヤス

「貧乳はステータスなんて言ってるけどありや嘘だな!無い物に価値なんかなかねえんだ!!」byテツ

『アイちゃんペツチャンコ!イエイ!!アイちゃんペツチャンコ!イエイ!!アイちゃんペツチャンコ!イエイ!!』

アイの悪口を歌にするという小学生の様なやり方を交えて攻撃していた。しかも楽しそうに歌いながら、だ。

「あああアンタラねえええ!!」とかわしながらナナは叫んだ。

「ぶちっ

と、アイが「何がそんなに楽しいの……?」と、ボソツと呟いた。

「え?アイ?」

アイの言葉にナナが反応するも、コントロールは再びアイの方に移っていた。

「何がそんなに…楽しいんだあっつ!!!」

固まっていたアイが血走った眼で絶叫、そして二刀流のGNソードⅡからは機体全長を遥かに超える長さの長大なビームサーベルが発生する。最大出力、ライザーソードだ。スコールに濡れる大型ビームソードはいつもと違った光を放っていた。

「何がっ!!」

AGE-3EがGNソードⅡを一振りするごとに遠くにいたネイリムガンダム他数機を巻き込んで真つ二つにし撃墜、「嘘だ!!」
「俺悪口言ってるのにいい!!」と悲鳴を上げる違法ビルダー達、

「何がっ!!!」

もう一振りすると別の場所にいたマステマガンダム達を同じ要領で撃墜。

「何がああっつ!!!」

そして最後にピロが戦ってるマステマガンダム二機目がけて飛び込みながら剣を振り上げる。

「ええっ?!アイちゃん!」

「ヒ!ピロさんよけて!!じゃなくてじっとして!!アイがキレたああ!!」とナナが叫ぶ。キレたアイが振り下ろしたライザーソードはノヴァの左右前方にいたマステマ二機に命中。クローの先端部にフィールドを張り防御しようとしたテツとヤスだった。が、

「ひいっ!!なんだこの出力!!」

ライザーソードの出力が高すぎる。ガクガクとライザーソードを

受けたクローが揺れる。そして二体は防いだものの、そのまま地面に叩きつけられた。

そしてこちらは観戦席、ソウイチ達は茫然とアイの怒りを見ていた。

「わーお、過激ね」

「あ、アイさん……怖いです」

アサダ・カナコとブスジマ・ミドリがアイの豹変を見ながらつぶやく。この二人はアイがキレるのを見るのは初めてだった。

「まああんな風に言われたら頭に来るのもわかるんですけどね……」
とムツミ

「でも大丈夫スカねヤタテさん、ライザーソードはエネルギーを大食いするツス。AGE-3はエネルギーに余裕があるスけどあそこで一気に使っているものか」

と、その時だった。アイ達のフィールドの観戦モニターがちらつき始める。

「あれ？…なんだろう。モニターが……」

タカコが不審がるもどんどんちらつきは強くなっていき、モニターは砂嵐状態となった。

……

そしてアイ達のフィールド、モニターは見えなくなったが、フィールド上は変わりはない。今アイ達は墜落したマステマ達に追い打ちをかけていた。アイは鬼の様な形相で、だ。

「だからさあ、別に不満があつたら文句いっていいんだってば。ただしそれにはマナーが必要だって分からないの？」

両手でGNソードIIを突き付けながらアイが淡々と詰め寄る。マステマは完全に達磨にされていた。

「いや、アイ……こんな時に言うのもあれだけど、こんな事やってる場合じゃ……」

「ねえナナちゃん、なんで女の人のスリーサイズって女のコンプレックスにひっかかる事ばかり書いてあるんだろうね。男の人にだっ

てそういうの書くべきだと思っただよね」マステマのコクピットを剣先でぐりぐりしながらぼやくアイ、妙にアンニュイ雰囲気があった。

「な、何を書くつてのよ……」

「そりゃオチンこ「やめて!!」

「うう……ず、ずいばせん……」

「やつぱり怖い……この人……」二人にとってトラウマになりそうだった。と、その時だった。アイのGポッドの警告音が走る。右からだ。

「?!」

とつさにバックステップで回避するアイ、大型のビームがマステマ二機を飲み込む。

「こーこのビームは！先生のおお!!」

「な！何故俺達をおお!!」

テツとヤスはビームに飲み込まれ機体と共に消滅。ビームは地面ごと抉り、土からは煙が上がる。直後、ドシャツと音を立てて一体のガンプラが落ちてくる。ツチャのアッシマー・デコレーションだ。

「つーツチャさん!!」

駆け寄るアイ達、泥で汚れたボディには全身に亀裂と弾痕、そして数本馬上槍の様な物体が突き刺さってるのが見えた。相当なダメージを受けてるといふのは簡単に予測できた。

「ツチャさん?!何が起きたの?!」

「しっかりしてくださいー！ツチャさんー！」

——この武器……アルケーのファングだ。でもこのサイズは……
——ツチャを案じながら、刺さった武器に違和感を持つ。アルケーの『ファング』はビーム刃で遠隔操作で相手に突き刺す小型の武器だ。しかし大きすぎる。アッシマーに突き刺さったのはゆうに5倍はある。

「う……アイツが……セリト……」

力なく答えるツチャ、AGE-3Eとウイングノヴァの周りが暗くなる。何かが上の光を遮った。アイは上空を見上げる。アッシマーを痛めつけたであろう一体の巨大なガンプラが確認できた。

「何よ……。あの大きさ……！」

同じく見上げたナナが呆気にとられた声を上げた。大きさはアイ達の機体の5倍はある。ジャスティスガンダムの上半身にズサの肩部ミサイルポッドと腕と足、右腕にアルケーガンダムのバスターソードと肩部外側に遠隔操作武器『ファング』を装備、頭部は『バクウケルベロスハウンド』という大型の頭部が取り付けられており、怪物然とした気味の悪さを持った機体だった。

「if sユニットがついてる?!まさかあの機体!」とヒロ。

「新世代ビルダー最新型!『ラグナロクプラン・ガンダムブリュンヒルデ』よ!」と叫ぶ巨大ガンプラ。そしてその声にアイは聞き覚えがあった。

「その声!!カモザワ・セリト!!」

アイが叫ぶ。セリトは以前ツチャと幼馴染だったビルダーだ。周囲の態度が悪すぎた為、ツチャと所属していたチームを追い出され、違法ビルダーに身をやつした男だ。

「しばらくぶりだな女、こんなに早く他の新世代ビルダーを倒すたあやるじゃねえか」

「仲間がやられたのに随分と他人事ですね」

「仲間あ?あいつらの自己責任だろう?俺は俺の優先事項をやつただけだぜ」ツチャのアッシマーを見ながらセリトは満足げに言った。

「次はお前らだ!!予選敗退で惨めに散りやがれ!!」

そしてセリトは叫びながら両肩と脚部からミサイルを一斉発射、アイは舌打ちをしながら両腕のバルカンを発射、バルカンの命中したミサイルは爆発、一つのミサイルを爆発させれば後はほとんどのミサイルが誘爆していく。ミサイルは大型化してる為当然爆発も大きい。

「くっ!皆がこの日の為に腕を磨いてきたんですよ!あなたの様な人間が出ていい場じゃない!!」

アイが叫ぶ。ミサイルの爆炎をカモフラージュに、ファングが炎の中から突つ切つて襲つてきた。しかしアイはGNソードIIでファン

グを切り払う。

「このっ!!」

アイはAGE―3Eを飛び上がらせ切りかかる。

「フンッ!」

ブリュンヒルデは右腕のバスターソードで難なくGNソードIIを受け止める。

「くっ! パワーが上がらない!」

「さすがにライザーソード使った後じゃ疲弊してるだろお! ん?」

と、ブリュンヒルデの左右から大型ビームが撃ち込まれる。ヒロとツチャだ。しかしブリュンヒルデは機体の周りに球状のバリアを張り、ビームを無効化。

「防いだ?!」と驚くヒロ。撃つたのはこの二人の機体だった。

「馬鹿だなお前ら。この機体のif sユニットが見えねえか」

「くっ! なめるな!!」アイは叫びながら残ったエネルギーでAGE―3Eのパワーを上げる。『ぐぐぐ……』と音を立ててブリュンヒルデの腕を押し返し始めた。

「何?!」

「うおおっ!!」アイの叫びと共にAGE―3Eは剣を大きく振るう。斬られたブリュンヒルデの右腕が宙に舞った。

「よしっ! 勝てない相手じゃない!」

「この! アマアアっ!!」

セリトの絶叫と共にブリュンヒルデの頭部が大きく開かれる。そして口の中に確認できる光。

「アイ! あれって撃とうとしてるんじゃない!」

「だろうね! 下がらなきゃ!!」

後退しようとするアイ。ヒロとツチャも何とか阻止しようとするブリュンヒルデに斬りかかった。しかしAGE―3Eの隙を逃さずブリュンヒルデの口から大型のビームが放たれる。土砂降りの雨の中でそれは雷が鳴った様な閃光だった。

「っ!!」

!!』と赤い光は一瞬凄まじい光量となる。強い光にヒロは思わず目を覆う。

「ん?! なっ! 倒したはずの違法ビルダーの機体が!」

ツチャは周囲を見て絶句した。さっきアイが破壊したはずのマステマガンダムやネフイリムガンダムが再生しているのだ。

「これが再生機構『アインヘルヤルシテム』だ。これさえあれば俺達は絶対負けねえ!」得意げに言うセリト。

——アインヘルヤル、確かマスミが言っていた。北欧神話で死んでヴァルキリーに導かれ、戦う事を強制された勇者達の事って。その際に再び死んでも夕方に生き返らされ、また戦うという……。ブリュンヒルデって名前もまさにヴァルキリー——そうヒロは思いながら「格好つけて!!」と叫んだ。

「貴様という奴は! こんな事をして大会側が黙ってるはずがないだろうが!」

「知ったことか! 俺はな! お前に復讐さえできれば! 結果さえ残せればそれでいい!」

そうこうしてるうちにマステマとネフイリムの再生は完了。ブリュンヒルデの周りに違法ビルダーの機体は集まっていく。

「おお、先生のおかげで蘇る事ができました」

「来てくれない時はどうなるかと思いましたがよ」

ヤストとテツがセリトに話しかける。さっき撃たれた事は水に流したのか、それとも機嫌を取りたいのか。どっちにしても情けないと見ていたアイ達は考える。

「ふん、俺達の勝利は確定したも同然だな! ガリア大陸ナンバーワンの名誉も! ガンプラバトルの最先端も! すべて俺達の物だ!!」

そして一斉に襲い掛かってくる違法ビルダー達、だがそれにアイ達は絶望していなかった。なおも武器を構え、戦おうとする。

「誰がやられるか! お前らの様な魂なしにやられる程! 俺達は情けないはない!!」

「そうだ! こんな所でやられてたまるか! レムさんを救うまでは!!」

「そうだよ! アタシだってこの大会! 全身全霊かけたんだから! あん

たらに負けたんじや普通に負けるよりずっと恥ずかしいわ!!」

「そうだよー私達はあきらめない!!」

その姿勢に違法ビルダー達はただのハツタリと高を括っていた。しかしそれは意外な形で覆される事となる。

『へーよく言ったぜ!!』

「?!」

突如聞こえる通信、直後、違法ビルダー達のいる場所に弾丸やミサイルが次々と撃ち込まれていく。その攻撃にさらされたマスターマやネフィリムは次々と破壊されていく。

「な!なんだ!何が起きた!!」

「お前ら違法ビルダーだな?」

慌てるテツのマスターマに巨大な翼を広げた機体が翼で切りかかった。ジャイオンという『Gのレコンギスタ』に登場した機体だ。翼の様な背中のユニット『ビッグアーム』先端部からビームサーベルやソードビットといった武装が特徴の機体だ。

「テツさん!」

「普通のビルダーには容赦なくても違法同士には優しいのかい?」

叫ぶヤスに別の機体がビームサーベルで斬りかかる。

「な?!」

こちらの機体は肩部と体躯の大きい異形のガンダム『GP02サイサリス』『0083』に登場したガンダムで核攻撃を目的とした禁忌の機体。それ専用のバズーカと弾頭を装備してるが通常のパワーも優れており、ビームサーベルでマスターマのパワーを圧倒していた。

「なんだ!なんなんだこれはあ!!」

テツとヤスも、自分の状況を飲み込めないまま機体を切り裂かれ爆散した。

「大したことはないな……」

「それよりサイトウさん、あのAGE-3に乗ってるのがコンドウさんの言ってたヤタテ・アイちゃんなんだろ?可愛いかなあ?声かけよっかなあ」

「さあな、だがコンドウさんがあれだけ楽しそうに話してた子だ。強

いのは確かだろう。だがいきなりナンパはやめろよシンパチ」

別の場所では『ガンダムUC』に登場した『クシャトリア』がファネルを展開し複数の違法ビルダーを相手にする。そのクシャトリアに連携を取りながらドイツ軍兵士の様な恰好をした機体『ギラ・ズール』の改造機が二機、違法ビルダーを次々と落とすとしていった。

「二人とも、さっさと片付けるよ……。この程度の相手に遅れを取ったらお姉さまの顔に泥を塗るもの」

「了解！」

リーダーらしき紫のギラ・ズールから聞こえた声は女の物だった。

それ以外にも何機もの機体が違法ビルダー達に襲い掛かる。全員が通常のビルダーだ。アイ達もこの状況には啞然としていた。

「何が起こったの?!これは」

「おやおやおや? わからないんですかア。残った普通のビルダーさん達ですよ」

急に気の抜ける女の声が聞こえた。ナナとツチヤはその声に聞き覚えがあった。

「ドムトルーパー・スノーマン? そしてその気持ち悪い声……ユキ?!」

アイ達が振り返ると白く塗った『ガンダムSEED DESTINY』に登場した『ドムトルーパー』がいた。乗っていたのは以前ナナが戦ったビルダー『ゴウセツ・ユキ(豪説由紀)』(第22話登場)だ。他にオーカー系で塗られたドムトルーパーと緑で塗られたドムトルーパーがいた。そしてそれぞれ背中 of 換装式装備『ウィザード』はそれぞれ違っていた。

「気持ち悪いってなんだオイ!!……じゃなかった……気持ち悪いなんてひどいですう」

「あー悪かったわよ。それで普通のビルダーって、あいつら皆違法ビルダーを許せないとか?」

「そりや皆激おこぶんぶん丸ですよお☆」

「ユキ、お前ちよつと黙ってる。そのしゃべり気持ち悪いって言って

るだろう」と緑のドムトルーパーが前に出てきた。ユキは「う……」とつぶやきながら下がる。どうやら彼女の頭の上がない相手らしい。「とにかく俺達は君達の味方だ。俺達だって違法ビルダーには鬱憤が溜まっている。故に協力させて欲しい」

と、6機の周りにマステマガンダムとネフイリムガンダムが集まってくる。せめてアイを倒そうという見積もりなのだろう。

「ここは俺達に任せて君達はボスらしきあの新型を倒してくれ！」

「有難うございます！行こう皆！」

そしてアイとツチャとヒロは三機ともブリュンヒルデに飛び立った。なおもさっきのマステマ達はアイを追おうとするが、ユキ達は逃がそうとしない。

「あは☆逃がしませんよお」

「そういう事だ！やるぞお前ら！ゴウセツ三兄妹！ジェットストリームアタックだ！」

「くそっ！あいつら数が増えた途端元気になりやがって!!」

ブリュンヒルデに乗ったセリトは現状が理解出来ないでいた。そしてアイ達はブリュンヒルデに立ち向かう。

「もう違法ビルダー達の再生はさせない!!」

アイのAGE-3Eは左腕を失ってなお、右腕でGNソードを振りかぶり切りつける。ヒロとツチャの二機も同様に斬りかかる。

「くっ！お前ら！」

バスターソードで剣を受け止めながらも、セリトに焦りが出始める。

「終わりだ！セリト！観念しな！」

「サブロウタアア!! テメエ！これで終われるわきやねえだろうが!! あの女から預かったブリュンヒルデだ！たかが三機位！」

「残念だったな！3機じゃねえ！6機だ!!」

いきなり乱入する声、そして遠くからブリュンヒルデ目がけて二条のビームが放たれてくる。if sユニットのバリアはそれを防ぐ。

「な！なんだ！」

遠くからメテオホッパーに乗ったダハックがこちらに突っ込んでくるのが見えた。前編で戦ったライタのダハックだ。

「あのメテオホッパーは!?まさか!」

「ニワカの物を拝借したぜ!まだこっちはそれほどボロボロじゃないしな!!」

「くっ!サブロウタ達にやられたってんなら!何故俺達を狙う!憎いのはサブロウタ達じゃねえのか!」

リフターのビーム砲をダハックに撃つブリュンヒルデ。しかしダハックは両掌からのビームシールドでそれを防ぐ。ライタはさつきアイにやられた時も、これでバスターライフルを防御したのだ。

「くっそお!!フアング!!」

アイ達の斬撃をしのぎながらもダハックを止めるべくフアングを撃ち出す。ダハックはまっすぐ高速でこっちに向かってきている。特攻をかけるかもしれないとセリトは焦っていた。いくつものフアングが様々な方向からダハックに向かう。両掌のフィールドでは防ぎきれないだろう!

「危ない!ライタ君!」

ダハックを突き刺すべく襲うフアング。しかしフアングは突如飛んできたシールドビットに防がれる(それもトランザムがかけてある状態だった)。フアングとシールドビットはぶつかり合うごとに相殺し碎け散る。

「ミゾレ君のシールドビット?!」

「シーフツフツフ!聞こえるかい新型機の違法ビルダーさん」

ミゾレの声だ。ミゾレの機体は胴体を撃ち抜かれてなお、まだ薄皮一枚で首が繋がっていた。地面でボロボロの状態でシールドビットを操作していたのだ。

「確かに僕らはヤタテさん達は憎いよ。でもね、君たちの方はもつと嫌いで憎いのさ!」

そういうとミゾレのケルデイルから小規模の爆発が起こる。もう機体が限界なのにトランザムを使った所為だ。

「それじゃあライタ。あいつらに僕らの意地を見せたまえ。僕は先に

逝くから。じゃあな！」

そして地面のある地点でGN粒子をまき散らしながらの爆発が見えた。

「ミゾレ！任せろ!!」

そしてメテオホッパで突っ込もうとするライタ。ぶつけられてたまるかと、セリトは再びブリュンヒルデの口を開けてダハックを撃ち抜こうとする。

「やらせるかよ!!」

ヒロのウイングノヴァがマシンキャノンブリュンヒルデの開いた口に撃ち込む。爆発と共にブリュンヒルデの頭部が吹き飛ぶ。

「お前ら！離れな!!」

ライタの声と共にアイ達は後退、直後、ダハックはジャンプ、ブリュンヒルデのどてっ腹にメテオホッパが衝突。その際発生した大爆発にブリュンヒルデは巻き込まれる。

「やったー！叫ぶナナ、

あれだけの爆発なら倒せた。そう確信し安堵するライタ。しかし次の瞬間……爆炎を突き破りビームがダハックの腹部を貫通した。

「なっ……!?!」

状況を受け入れられないまま、ライタのダハックは爆発。そして爆炎の中からブリュンヒルデの背中のリフターが現れた。

「リフターだけ?!」

「以前戦った違法ビルダーの機体は再生コアがあった！リフターがコアか！」ヒロが叫んだ。

「しつこすぎるんだよ teme エら!!だが俺はまだやれる！一度時間をかければ俺は再生するんだ！このグラーネ（リフターの名前）で俺さえ生き残れば!!」

そういいながらブリュンヒルデのリフターはアイ達から反転、高速でその場から逃げようとする。

「大人しくやられちやいなよ……」

そう言うとアイはAGE-3Eをやり投げの体勢でGNソードIIを構えた。アイの怒りが、ガンプラ魂が、AGE-3Eにブーストを

かける。

「同意見よアイ。女のアタシにや解ないけどさ。男の意地つて奴に……」

淡々とナナもアイに同意する。彼女もアイ同様、怒りと魂がAGE
―3Eに力を与えていた。

『そんなセコイ手で答えようとするなああつ!!』

アイとナナは叫びながら一気に投擲する。まっすぐGNソードII
はリフターを超える速度で追いつがる。怒りとガンプラ魂のブー
トがかかったその速度は、音速を簡単に超えていた。そしてリフター
のど真ん中を貫通。真つ二つにリフターは裂けた。

「おー俺がー俺が死んだらああつ!!!サブロウタアアツツ!!!」

そしてリフターは完全に爆散。そのままGNソードIIは上空の雨
雲を突き破り、土砂降りのフィールドを一瞬で青空に変えた。光に照
らされる勝利したビルダー達。同時にこれで規定数に機体の数が
減ったのだろう。これでバトルは終了した。

……

「カモザワ・セリトさんは参加してなかったですって?!」

アイの声がエントランスに響いた。サバイバル戦が終わった後、ツ
チヤはセリトに文句の一つでも言おうとしたが、見つからない、参加
名簿を確認したがどこにも『カモザワ・セリト』という名前は存在し
なかった。

「私達も見てる時、途中からアイちゃん達のフィールド見れなくなっ
ちやったのよ。まさかそんな激戦になっていたなんて」とカナコ。
「一応、大会側にはかけあっておいたから、何かしら対策はやってくれ
るはずですよ」とミドリが続く、

「そういうこつたぜ。アイちゃんがそんな事になってるたあ、外部か
ら乱入してくるたあ、ワシだって経験した事はねえぜ」

「こんな大規模な事になるなんて、どうなっちゃうんだろう。この大
会……」

違法ビルダー、もしかしたら自分が思ってるよりずっと大規模な連

中なのかもしれないと不安になるアイ、だがそんなアイに一人の男が話しかける。

「関係ねえだろ。ヤタテさんよ。立ちふさがる連中は皆ぶっ飛ばせばいい」

「え？」

そこにいたのは三人の男達、チーム『キマイラ』のライタ達だった。否、それ以上の多くのビルダーがライタ達の後ろに並んでいた。彼らはさっきのバトルでアイ達を助けたビルダー達だ。

「俺達は自分のガンプラが一番だつて証明の為に戦つてる。弱かろうが強かろうが、それは皆おんなじ気持ちだぜ」

「それを横から出てきた初心者が、ガンプラの醍醐味も知らないで知り尽くした気んでいるなんて頭にこないかい？」

「そんなデータだけ使つてる連中が、苦労もなしに勝ちまくるつて事は俺達の楽しんできた気持ちも踏みにじつてるつて事だ。それを見るだけなんて出来るわけないんだよなあ」

「ま、なんにせよ相手にしたら違法ビルダーだろうと普通のビルダーだろうと全力で答えるしかねえんだ。だから全力でぶっ飛ばせばいいんだよ。こつちから変に深入りしたつて碌な事ねえからな」

「そつか。そうだよね……ありがとう」

……

そしてある別の場所では

「クソツ!!してやられたぜー!あの女ああ!!」

薄暗い部屋、一つだけ置かれていたGポッドから出てきたセリトは怒りを抑えられずにいた。

「残念でしたね。カモザワさん」

「あんたか……リンネ」

妙に髪の毛の長い少女がセリトに話しかける。部屋が薄暗い所為か目が隠れており、表情をうかがう事が出来ない。以前アイが戦った違法ビルダーにしてブローカー、そしてアイを一方的に憎んでる女『リンネ』だ。

「折角新型機をもらったのに情けない所を見せちまったな」

「いえいえ、あなたのおかげで貴重なデータを得られました。……それよりあなたはこれからどうするおつもりですか？」

「さあな、負けちまったし、指を加えてツチャ達の負けるのを待つか」「もしよろしければ私と一緒にブローカーをしませんか？」

「何？」

「あのチーム『I・B』に復讐をしたい人物がいるのは私も同じですから……フッフ」

不敵に口元に笑みを見せるリンネ、それを遠巻きにヒロのかつての仲間『フジミヤ・レム』は無言で見ていた。

「……お前らに協力すればサブロウタ達に復讐出来るんだな？」

「ええ、当然です」

「いいだろう。手を貸してやる。そして今度こそサブロウタたちを!!」

……

そうこうしてる内にトーナメント票が出来上がり、エントランスに貼られた。複数のフィールドでサバイバルを行った所為か、ふるいにかけたとはいえかなりの数のビルダーのチームが残った。

「いやー随分規模の大きいトーナメントだねえー」

「この中で一位だけが全国か……頑張つてね皆……」

「任せてよムツミちゃん、それで私たちのチームはと……」

「あ、あつたよアイ、初戦の相手は……チーム『ストレイキャッツ』？聞いた事ないチームだわ」

「それは俺達のチームだ。ヤタテ、ハジメ……」

人ごみをかき分けながら三人の男がアイ達に相對する。似た顔の三人の青年。皆揃って眼が細く首が太い、なんだか太った猫を思わせる外見が特徴。その男達をアイは見覚えがあつた。

「あなた達は……ケイ三兄弟（第1話・3話・4話登場）」

第44話「求めたのは勝利の美酒と栄光」（ジ・Oグ ラップラー登場）

多目的アリーナのエントランス、トーナメント表の前に集まったアイ達とケイ三兄弟、人ごみはその周囲に集まり、トーナメント表よりも六人を見ていた。

「まさかあなた達が一回戦相手になるなんてね」

「全くだ。トーナメントには64ものチームが出てる。そんな中で復讐相手であるお前らにいきなりでぶつかるとは思わなかったぜ」

ケイ三兄弟の長男、マツオはトーナメント表に視線を移しながら呟いた。心なしか雰囲気が以前会った時より落ち着いた気がする。

「アンタ、前にアイが挑戦者を相手にしていた時一度も姿見せなかったけど、何やってたのよ」

警戒しながらナナが問いかける。彼ら、特に長男のマツオはアイに対し、「俺がアイを倒す」と息巻いていたが、ここ四か月一度も姿を見せなかった。

「有り体に言っちゃえば、特訓を積んでたって奴だな。……へッ、おかげで自信と実力はついたつもりだ」

そう言うマツオは確かに印象が変わっていた。除く肌や手はゴツゴツした印象になっていた。依然と比べてかなり筋肉を付けた様だ。

「以前会った時より雰囲気随分変わった気がするけど、鍛えていたという事だね」

「ん？あんたは……確か俺達をゼイドラで圧倒した（第13話参照）」

「ハガネ・ヒロだよ。今はアイちゃんのチームでお世話になっている」

「そいつは……丁度いいぜ！俺のリベンジにはあんたへの復讐も含まれているんだ！今の俺の実力を試すために！俺の恥をすぐために！俺達と戦ってもらおうか！」

「なーに格好つけてんだ。マツオ」

突如マツオの左右から屈強な男が二人現れる。直後、マツオの顔が青ざめた。

「せ！先輩！」突然の乱入者にアイ達は困惑する。

「ガンプラに関しちやよくわからねえが、相手に失礼な態度を取っちゃ駄目っていつも言ってるだろうが、ちゃんと頭下げな」

「う……」と言いながらマツオは渋々頭を下げる。弟のタケオとウメオも慌てて頭を下げる。

「いやあ後輩のコイツが失礼な態度とりまして、すみませんね。こいつ礼儀知らずで」もう片方の先輩がアイ達に話しかける。二人揃って強面だがえらくフランクだ。

「あ、大丈夫です。別に気にしてませんから」とアイ。

「も、もう口でいう事は無い。……よろしくお願いします」とマツオは先輩に注意しつつの言葉でその場を後にした。「待ってくれ兄ちゃん！」と弟達も後に続く。

「前にアイツに因縁つけられたって聞きましたんで、不快に思ってたないかと心配だったんですが大丈夫でしたか？」

残った先輩達がアイ達に頭を下げる。「いえいえ」とアイ達は答える。

「アイツも根は悪い奴じゃないんで、どうか次の試合ではちゃんと戦ってやって下さい。それじゃ」

「え、あの、最後に聞かせてください。何の先輩なんですか？」

「大学の『レスリング部』です」

そしてトーナメント表の前から移動し、三兄弟について話し始めるアイ達、

「まさかレスリングやる様になっていたとはね。にしてもあいつ、随分と自信ありげになったわねー」

「そうだね。あの態度も自信の表れって事なんだろうけど、やっぱガンプラバトルでも格闘スタイルが得意になったのかな」

そう話し合っていると、前回戦ったミゾレとニワカ、そしてライタがアイ達に話しかけてきた。

「さっきのやり取り見てたぜ。お前ら、あの三兄弟が初戦の相手か？」

「あ、ライタ君、まあね」

「……気を付けた方がいいぜ。あいつら、違法ビルダーかもしれない」
ライタの発言に眉をしかめるアイ達「どういう事？」と言葉にせずとも表情から伝わった。次にミゾレが続く。

「実は数日前、別のゲーセンで彼ら三兄弟を見たのさ。きっきのサブイバルで君達が戦った違法ビルダー『テツ』と『ヤス』と話し合ってる所をね」

「あのデブの三兄弟、ほとんど俺達の前にも姿を現さないから、得体のしれない所があるんだよ。案外本当は奴らと結託して妙な準備でもしてるかもしれない。気をつけてくれ」

「あの違法ビルダーと一緒に？アイ……もしかしたら本当に……」

ナナも疑いを持つとうとする。ナナ自身、先輩と名乗る二人がそう言ったとはいえ、あの三兄弟は正直信用できない。アイを騙した経験があるからだ。

「違法ビルダー……かなあ。実際に戦ってる所見てないから何とも言えないよ……」

「そう思うよ。ナナちゃん、確証も無いのに人を違法ビルダーだなんて疑うのはよくないよ」とヒロがナナに忠告する。

「ちよっとお人好しすぎない？ヒロさんだって簡単に信用するのは甘いよ。フジミヤ・レムさんだって違法ビルダーになっちゃって、きっかけを作ったマスミさんがそれを隠してたって目にあつたのに……あ！」

しまった！とナナはハツとする。ヒロはナナの発言に少し眉間に皺を寄せた。

「ごーごめんなさい！」

「いや、いいよ。マスミが黙っていたのは事実だし、マスミの事は信じてたからね」

「前々から思ってたっすけど、ヒロさんって簡単に人を信用するっすよね」

「否定できないなあソウイチ君、まあ……僕の場合、理屈より心で感じた事を信じた方がうまくいくんだ。だからあの兄弟達だって、自信は本物だと思うからクリーンファイトで答えてくれると思うよ」

「そうかなあ、アタシはどうも信用しきれないけど……」

「ちよつとちよつと！何辛気臭い話してるんですか!!」

その時、突如黄色い声が響く、アイにとつては聞き覚えのある声だった。

「あ！えつと……チトセちゃん！」

「あつたりー！お久しぶりですヤタテお姉ちゃん！」

にこやかに答える猫目とサイドテールが可愛らしい女子小学生。『チトセ』だ。以前友達の『ケン』がガンプラバトルでフリーガンに絡まれていた所をアイが助けたといういきさつがある。

「あの人達でしたら大丈夫ですよ。ちゃんと正々堂々としたバトルで勝ってましたから」

「さっきのサバイバルで見たのかい？」

「その前からですよ。大学の合間を縫ってやってたらしくて、別の店ではトップのビルダーとして頑張っていました。あの人達の活躍はこの目で見てたから分かりますよ」

「本当？機体とか戦法とか分かる?!」ナナが食いつく。

「あーはいはい。機体は確かジ・Oって奴でしたね。迫りくる相手をパイルドライバーで潰すわ。ラリアットでふつとばすは凄い戦い方でしたよ」

レスリングだけに肉弾戦よりの改造か……とアイ達は分析、しかし一人ナナは納得出来ないでいた。

「ちよつと待つてよ。ジ・Oって言ったらあの横綱みたいな恰好の機体でしょ？そんなよく動けるわけ？」

「あり得ない事じゃないよ。ジ・Oはああ見えて全身にバーニアを装備してるから非常に素早い。更に優れたパワーと隠し腕の器用さ。改造次第によつてはそう言った使い方も出来るだろう。ただ技量は高いとみて間違いないね」

「情報有難うチトセちゃん、そういうえばケン君は今日は一緒じゃないの？」

ケン第34話と35話で一緒にいた少年だ。アイにガンプラの

技術を教えてもらいビルドスペリオルを完成させた。

「いつも一緒つてわけじゃないですよ。ケンの奴今回は『アイお姉ちゃんに挑戦するんだ』って言って別のチームに行っちゃいましたよ。付き合い長い私の事ほつといて、ちえー男つてデリカシー無いですよ」

むくれながら答えるチトセ。アイ達は苦笑しながらチトセをなだめていた。同時に「やっぱりあの三兄弟は違法ビルダーじゃないんだ」と信用の個人差はあれど、警戒をゆるめた。

……そして、それを見る奴らもいた。

「チツ！テツさん、どうやらあのAGEの女、あのデブ兄弟とバトルするみたいですよ」違法ビルダー、テツとヤスの二人だった。

「ううう……どつちも気に入らないなあ……なんか文句言いたいけど……どうしよう怖いし……」テツが弱気に答える。彼はネットやガンプラバトル等、バーチャルな空間でなければ強気になれない性格だった。

ヤスは思い出していた。数日前（先述のニワカの言っていた話である）のあるゲーセンのガンプラバトルコーナーでの事を。その日、ヤスとテツはマツオ達がアイにリベンジを狙っている事。そして昔卑怯な手で勝っていた事を調べあげ、ヤス達はマツオ達三兄弟を仲間に引き込もうとしていたのだ。

「あんたらがああAGEの女に恨みを抱いてるのは知ってるぜ！聞けばあんたらも実力ある旧世代ビルダーなんだから？これを使えばもつともつと強くなれるぜ」

確実に仲間に来る確信があつたのだろうか、ヤスの態度はいつも以上に横柄だった。

「に、兄ちゃん。チャンスだぜ。これがあればヤタテの奴らも」

タケオとウメオは賛成の意思を示した。ヤスは簡単に仲間に引き込めると思った。が、

「いらねえ」

「あ？今なんつった？」

「いらねえって言うてんだ。ガン普拉バトルの邪魔になる。帰ってくれ」

「おいデブの兄ちゃん、あの女に勝ちたいんだろう？今の実力で勝てると思ってるのか？アンタの実力じゃアイツの実力にはまだ及ばないぜー」

「その為に少しでも力を研磨してんだよ。邪魔になるから帰れ」

「い！今更いい子ぶりやがって！！無理だ！お前らに勝てるはずがねえ！！時代遅れの旧世代ビルダーが！！」

「聞こえなかったのか？」

マツオは淡々として表情でヤスの胸ぐらを掴み持ち上げた。小柄な小学生のヤスは軽々と持ち上げられる。強気だったヤスの表情が一転して苦しそうになる。声を出そうにもうめき声しか出ない。掴まれた服の襟が首を絞めてしまってるのだ。足をバタつかせて抵抗するがマツオはビクともしない。それ程の腕力だった。その横でテツはただブルブル震えていた。

「周りの迷惑になる。帰れ！！」

そういうとマツオはヤスを放り投げた。受け身の知識も無いヤスは背中を打ち付けてしまった。

「て！テメエ！テメエなんか無様に負けちまえバーカ！！」

そのままヤスは捨て台詞を吐きながら、そして泣きそうになりながらテツと共にゲーセンから出て行った。その後、イラつきながらヤスは街をぶらついていた。

「くそっ！あのデブ……ムカツク……」

その時だった……ヤスに話しかける人物がいた。

「あの……さっきの事でお話が……」

「あん？」

誰がヤスに話しかけたかは伏せておこう。そして今、違法ビルダーの誘いを蹴ったマツオはアイと対決する事になった。

「文句は言えない。かといつてどっちも気に入らないし応援なんて……どうしよう……」

「へっ、何も問題ないですよ」

不安で肩を強ばらせるテツ、反面ヤスは余裕だ。

「ど……どうしたの……？」

「応援しましょう。俺達であのAGEの女を……」ヤスは小学生とは思えない悪どい表情で笑った……。

……

そしてバトル一回戦が始まる。フィールドは『北アフリカ砂漠地帯』『ガンダムSEED』に登場した砂漠だ。雲一つない青空、見渡す限りの砂と灼熱の大地。遮蔽物のないフィールドはガチンコで戦うにはピッタリな空間だろう。三機とも木馬の様な母艦、アークエンジェルから出撃する。

「前にあの三兄弟と戦ったのと似た様なフィールドになったわね」

「うん、でも私達もあの兄弟達も随分変わったはず、気を付けていこう！」

機体を飛ばしながら、ナナの問いにアイが答える。今回のチームはアイ&ナナのAGE-3E、ソウイチのバイアラン・スパイダー、そしてヒロのウイングガンダムノヴァだ。

「見通しがいい所為か遠くの敵の母艦『レセツプス』が見えるっすよ」
『ガンダムSEED』に登場した顔のないスフィンクスの様な姿の陸上母艦レセツプス、そこから敵対チーム『ストレイキャッツ』の三機が飛び出してくる。機体のサイズ的にここからでは光の粒ぐらいにしか見えないが。その中でひととき凄いい勢いで突っ込んでくる機体がある。恐らくマツオのジ・Oだろう。

「あれか!!」

アイ達はここぞとばかりにジ・Oめがけて撃ちまくる。しかしジ・Oは左右に動き射撃を回避しながら突っ込んでくる。凄まじい加速力だ。そうこうして内にもジ・Oの姿が確認できた。背中にライトニングバックウエポンシステムMK-IIを取り付けており、更に機動力を底上げした機体だ。

「クッーなら」

ソウイチがバイアランの左右のライザーソードを展開。数百メー

トルに及ぶビームソードが出現。

「っ！ソウイチ君！待って!!」

「こいつでえっ!!」

アイの制止を聞かず、ソウイチは相手を薙ぎ払おうと、ライザーソードを大きく振るう。数百メートルに及ぶライザーソードは遠くで砂を巻き上げながら広範囲を爆発させる。そして巻き上がった砂塵はジ・Oを巻き込んでいく。バイアランが振り切った時はジ・Oはその場から消えていた。

「やったか?!」

「元ウルフのメンバーも随分短絡的な手を使う様になったもんだな」
「っ!!」

バイアランの上空にジ・Oはいた。すかさず上に対応しようと両腕を上げるソウイチ。しかしジ・Oはバイアランの攻撃が飛んでくる前に背中の中の左右のブースターの向きを器用に変えてバイアランの背後に立つ。後ろを取られたと判断したソウイチはすぐさま背中の中大型バーニアを全開にしようとするが、

「逃がすか!!」

マツオの音が響くと同時にジ・Oの首の左右のビームキャノンからビームサーベルが発生、バイアランのバーニアと両肩をあつという間に切り裂く。バイアランの両腕とブースターが砂漠の砂地に落ちた。

「なっ!」

「ソウイチ君!」

驚きの声を上げるソウイチ、アイ達はすかさず救援に向かおうとするが。突如アイはAGE-3Eの歩を止める。

「何?!なんで止まるのアイ!」

「周囲を見て」

ナナは周囲を見て驚愕する。丸い物に棒状の物が四方向突き出し、てる小型の物体。それが周囲にいくつも浮かんでる。浮遊機雷、ハイドボンブだ。上空を見ると浮遊機雷を盾からばら撒いてる機体が見えた。『Zガンダム』に登場した『パラス・アテネ』。機雷をばら撒い

てるその機体はギャンバルカンのパーツを身に着けており、両手に持ったギャンのシールドからハイドポンプをばら撒いていたのだ。(なおギャンバルカンのキャノン砲と干渉する為、パラスアテネの肩のアーマーの角度は下げている)

「浮遊機雷か！なら、ばら撒いてる奴ごと誘爆させる！」

ヒロのウイングノヴァがバスターライフルをパラス・アテネに向けて構える。が、直後ヒロのGポッドに警告音が入る。後ろから二条のビームが飛んできたのだ。すかさずシールドで防御するヒロのノヴァ。

「何だ！三機目がいるのか!？」

「ヒロさん！機雷はこっちで！」

アイが機雷に両腕のバルカンを撃ちこみ誘爆させる。しかしソウイチのバイアランはすでにマツオのジ・Oに背中から捕まれ。空高く飛んでいた。

「くっ！離せよ!!」

ソウイチはバイアランの脚裏のサーベルを使ってジ・Oの足を破壊しようとするも出来ない、ジ・Oの腰フロントアーマーに収納された隠し腕に足をがちり掴まれていたのだ。そしてジ・Oは落下体勢に入りライトニングバックウエポンシステムMk-IIIのバーニアを全開にする。頭を下にしたバックドロップの体勢だ。

「ジ・Oセメントクラッシュ!!!」

マツオの叫びが木霊する。あつという間にジ・Oは頭から地面に落下。

「うわああつ!!」

ソウイチの叫びが聞こえた。搭乗機のバイアランの上半身は地面に激突した衝撃でひしゃげ、めり込んだまま動かない。ゆらつとジ・Oは立ち上がりアイ達に向き直った。

「次はお前らだ。ヤタテ！」

「まー待てー！」

そのままマツオはアイ達に突っ込もうとするが。ソウイチの叫びに止まる。まだソウイチのバイアランは生きていた。両腕を、頭部を

失ってなおジ・O目がけて残りのバーニアをふかし足裏のビームサーベルで戦おうと突っ込む。

「うおおおおお!!!」

「まだ諦めねえか! いいだろう! ならこのフィニッシュホールドで答えてやるぜ!!」

そう言うときマツオはバイアラン目がけ背中のバーニアを全開、自らの片腕を広げ突っ込んだ。ラリアットの体勢だ。バイアランも飛び蹴りの体勢でジ・Oに突っ込む。

「ただのラリアットでビームサーベルに勝てるもんか!!」

「笑止!!」

直後、ジ・Oのラリアットが赤く輝く、そして輝いた腕はビームの刃を飴細工の様に砕く。

「この輝きは! ビルドナツクル?!」

「ビルドツツ!!! ボンバアアツツ!!!」

マツオは叫ぶ。ラリアットはバイアランを襲い、空高く吹っ飛ばした。その衝撃たるやバイアランの全身に亀裂が入る。

「この威力……。ガン普拉魂が……。でも、ヤタテさん! こいつの戦い方は!!」

言い終わらない内にソウイチのバイアランは爆散、空高くでの爆発だった為、バイアランの破片が周囲に雨の様に降り注いだ。当然アイ達もそれは見ざるを得なかった。

観戦席ではソウイチがやられた姿を、彼の母親、カナコはしっかりと見ていた。

「あぁーっ! ソウイチっ!!」

倒される息子に母は嘆きの声を上げる。

「よっしゃ!! マツオの奴派手に決めやがった!!」

「俺達のアイディアも盛り込んだんだ。これ位やってくれないとな!!」

その近くでマツオの先輩二人はマツオに対しての称賛の声を上げる。先輩をはじめとした周囲の反応はカナコとは違った。派手なパ

フォーマンスによりバイアランを破壊した事により歓声が起こる。今回は今までとは規模の違う大会だ。観客も多く、その声も大きかった。試合を見ていたアイの仲間達はそれを複雑な表情で見っていた。

そして再びガンプラバトルの内部では：

「アサダがつ!!」

ナナが驚愕の声を上げた。マツオが本当に強くなっていったのが正直驚きだった。そして観客席からの歓声はガンプラバトルの中にも届く。

「んんーっ。いい声援だぜ……耳に染み渡る」

マツオはそれを穏やかな表情で聞き取る。

「てかアンタ本当にあの卑怯だった三兄弟?!ぜんっぜん感じ違うんだけど!!」

「そう思うだろうな!俺はこの四か月!自分を変えたつもりだぜ!!」

そう言うときジ・Oは両腕でビームサーベルを持ちながら斬りかかってくる。相手を掴むために隠し腕も展開した。

「フォール狙いで行くぜ!!」

「っ!!アイちゃん!技の一つ一つが大きい!掴まれたら終わりだ!距離を取って戦って!」

パラス・アテネの相手をしながらヒロが叫んだ。

「クッ!解ってますよ!!」

アイもAGE―3Eの右手にバスターライフルを、左手にGNソードライフルモードで迎え撃とうとする。迫るジ・Oにバスターライフルを撃つアイのAGE―3E、しかし軽くかわすとジ・Oは突っ込んでくる。アイもジ・Oに向いたまま後ろに下がりながらも射撃で応戦。しかしそんなAGE―3EにGポッドからの警告音が走る。

「後ろ?!」

しかし正面からもジ・Oがすぐそこに迫る。ジ・Oは隠し腕でAGE―3Eをつかもうとする。その上の両手にはビームサーベルが握られている。隠し腕でこちらを抑え込んでからビームサーベルで切り裂くつもりだろう。シャコのパンチの様に隠し腕が素早く飛び出す。

相手を上から押さえつけようとするのはレスリングの基本だ。

アイはさせまいと、AGE―3Eの両腕の袖からビームサーベルを発生させ振るう。ジ・Oの隠し腕が片側、切り裂かれ宙に舞う。

「ほうっ!!」

マツオの関心の声上がる。自分では素早く動かしたつもりだが、向こうは簡単に対応してくる。ならば力比べとマツオはビームサーベルを直接AGE―3Eに振り下ろす。AGE―3Eはそれを受け止めた。パワーだったらAGE―3Eも負けてはいない。「押し返せろ!」同乗していたナナは一瞬確信するが、

「ッ!アイ!後ろからビームが!!」

「っ!?!」

AGE―3Eの背中にビームが迫ってくる。アイはAGE―3Eの位置をすり足ですらす。AGE―3Eのすぐ横で爆発が起きる。

「うわっ!!さっきの警告音の奴!?!」

「アイツ!余計なことを……だが!チャンスだ!」

ひるんだAGE―3Eを残りの隠し腕でつかもうとするジ・O、だがアイもこう来るといっものは分かっていた。右足をハイキックの要領で蹴り上げる。右足にはGNソードⅡがマウントされていた。足の剣先はジ・Oに迫る。

「ぬあっ!!」

すんでの所で下がるジ・O。のど元をGNソードが通り過ぎた。

所代わってヒロとパラス・アテネのバトルはヒロの方が優勢だった。パラス・アテネの方はシールドミサイルと背中のがトリングキヤノンで弾幕を張りながらウィングノヴァを圧倒しようとするも相性が悪い。

「実弾の弾幕ならこっちが有利だ!!」

ヒロは叫びながらツインバスターライフルを放つ。高出力のビーム兵器を持ったウィングノヴァには実弾の弾幕も意味をなさない。大型のビームで弾幕ごと飲み込んでしまうからだ。ひるむパラス・アテネのビルダー、その隙にウィングノヴァは右腕にビームサーベルを

握り、一気にウイングノヴァは距離を詰める。パラス・アテネをビームサーベルで横一文字に切り裂こうとする。

「っ!!」

だがパラスアテネはシールド中心部からビームサーベルを発生させノヴァのビームサーベルを受け止めた。

「何っ!？」

直後、ノヴァの真横からビームが飛んでくる。隠れている三機目だろう。とつさにヒロは左腕のシールドで防御。そこからパラスアテネは鏝迫り合いのままシールドの弾幕を撃ちまくる。至近距離からのミサイルにノヴァは思わず後退。

「くそっ! いいタイミングで撃ってくるな!!」

「……悪いけど、このまま時間は稼がせてもらおうわよ。あんちゃんの邪魔はさせない!」

「?!」

パラスアテネからビルダーの声が発する。ヒロは違和感を覚えた。女の声だったからだ。

「フッフ……いいねえ! お前を倒せば大歓声が期待できそうだ」

アイと対峙したマツオはニヤリとした笑みを浮かべる。アイは「歓声?」と聞き返した。

「そうとも、観客たちは面白いバトルを望んでる。俺の最高の技で……お前をぶつとばすのさ!!」

そう言うとマツオは再びジ・Oのビームサーベルを構え斬りかかってくる。

「改心したと思ったら、自己顕示欲ばかり強くなっちゃったみたいでまあ!!」

「改心?! 俺は別に改心した覚えはないぞ!! 覚えたのは、自分への自信と! 勝利の美酒だけだあ!!」

マツオはそう叫びながらAGE―3Eに斬りかかった。

「俺は! お前が別のビルダー達から挑戦を受けていた時! 大学のレスリング部でひたすらトレーニングを繰り返していたんだ!!」

そしてお互いの機体がぶつかり合いあいながら、マツオは自分がどんな経験をしてきたか話し出す。

——そう、その厳しい生活はとてもじゃないがお前への打倒のガンブラの製作も、ガンプラバトルの特訓も両立できるものじゃなかった。無理やり勧誘されたレスリング部だったが、正直どちらかは辞めようかとも考えていた。だが——

「ケイ、いるかー」

——ある日、俺がガンブラを作ってる時に先輩は俺が一人暮らしをしてるアパートに来た。——

「へーガンブラか。最近流行のガンプラバトルとかやるのか？」

「はは、まあ、ですがどうも勝てなくて自信持てないですよ」

「勝つ自信か。そこでお前に朗報だ。お前次の試合に出ろ」

——あろう事か先輩は俺に試合に出ろと言った——

「待ってください！俺は全然試合経験ないんですよ！！大事な試合に俺なんかが！」

「もちろん大事な試合だったらお前は出さないよ」

「なっ!!」

——そして俺は試合に出た。レスリングはマットに両肩をついた方の負けだ。俺はとにかく勝つ事だけを頭に無我夢中でフオールを狙った……相手を押さえつけた歓声と拍手、褒めてくれた先生と先輩、その小さいながらも起こった歓声と拍手、褒めてくれた先生と先輩、その感覚が忘れられなくなった！そしてもっと自分を高めたいと思っただけ！——

「そして俺はこの経験をガンプラバトルでも活かせないかと考えた。そして先輩のアイデアや自分の経験を元に作り上げたのがこのジ・O グラップラーだ」

「確かに見事な改造だよ。プロレスをジ・Oにやらせるとはね」

「へー！ありがとよ。最もレスリングとプロレスは厳密には別物だがな」

「回想聞く限りはいい話っぽいけど、結局それで勝利に酔いたいのが

目的なら台無しね！」

「フン！言つたらろうが！俺は別に改心した覚えはないと！それにな
!!」

引き撃ちするアイのAGE-3Eに対し、ビームサーベルで切りか
かりながらマツオは叫ぶ。元々自己顕示欲と承認欲求は持っていた
のがマツオだ。表面上な部分と精神的な余裕は良き方向に進んだが
根っこの部分は変わっていないかつたと言う事だろう。

「ガン普拉バトルってのは相手のガン普拉を壊せばいいんだぜ!!折角
壊すなら！ド派手な技で壊すのが相手のガン普拉と！作つた奴への
手向けつてもんだぜ!!」

「アンタ……本当に変わってない!!」

アイとマツオの戦いの一方で、ウイングノヴァとパラスアテネの戦
いは決着を迎えようとしていた。押され切つたパラス・アテネはシー
ルドを失つてる。

「二機そろつて必死に僕を止めようとして！アイちゃんとのバトルに
水をさして欲しくないって事かな！」

「そうよ！あのお姉ちゃんを倒すのはあんちゃんの目標だったんだ!!
その為にあんちゃんは自分を磨いてきたんだから!!」

「そうか!!」

ヒロが叫ぶ。同時にウイングノヴァのビームサーベルがパラスア
テネの胴体を横一文字に切り裂いた。

「あーあんちゃんー！なーんちゃって!!」

慌てた声から一転、おどけた声と共にパラス・アテネの無事だった
バックパックが分離し飛んでいく。二門のガトリングキャノンを備
え付けた脱出機。ヴァリユアブルポッドだ。

「しまったー！浅いー！」

相手はそのまま離脱しようとするが、ヒロは逃すものかとバスター
ライフルを構えた。しかしそれもGポッドへの警告音で我に返る。
またもウイングノヴァの後方から二条のビームが飛んできた。三機
目の援護だろう。

「うおつと!!」

難なくかわすヒロ、すかさずツインバスターライフルを左右に分割し、ヴァリユアブルポッドと撃つてきた三機目に向けてそれぞれのパスターライフルを構える。だがさっきの隙をついてヴァリユアブルポッドはとうに離脱。横槍を入れてきた三機目も姿を消していた。

——しまった。見失ったか……本当タイミングで撃つてくるな……とはいえ襲つてこないと言う事は、アイちゃんと合流した方がいいか——

アイが集中して狙われたら面倒だとヒロは判断、ここから確認できるアイとマツオのバトルの場へと飛び立った。

こちらのバトルも佳境に入りつつあった。対峙した二機、ジ・Oの左腕は再び赤く輝きだす。ソウイチのバイアランを破壊したラリアット技『ビルドボンバー』だ。更にジ・Oは首のビームキャノンとビームライフルを併用し牽制、AGE―3Eの動きを止めようとしながら突っ込んでいく。バックウエポンのバーニアが一層火を噴いた。砂塵を巻き上げ瞬く間に距離を詰める。

「ビルド!!ボンバー!!」

「ツ!!ナナちゃん!!」

ビルドボンバーがAGE―3Eに当たる直前、AGE―3Eは分離し回避、そしてすぐさまジ・Oの真上の上空で合体。ジ・Oが上に対空攻撃を仕掛ける前に、AGE―3EはGNソードIIをジ・Oめがけて大きく振りかぶる。そして力いっぱい投擲した。

投げたGNソードIIに対し——脳天からやられるか?!——とマツオは焦り回避しようとする。ジ・Oが動く前にGNソードIIはジ・Oに届いた。その一撃はジ・O本体には命中せず、背中のバックウエポンとバックパックのジョイント部を切り裂いた。

「あれ〜背中だけ? アイちゃん外しちゃった?」

観客席でアイの攻撃に疑問を持ったタカコが口にする。その隣でツチャが答える。

「いや、あれでいいはずだよ。だって……」

その周りでどんどん観客の歓声は大きくなっていった。派手なパフォーマンスを好むマツオの立ち回りは場を大きく盛り上げていった。

「うおおー!!ケイ!やっちまえー!!」

先輩達もノリノリで叫ぶ。

「し!しまった!!ライトニングバックウエポンが!!」

マツオの狼狽した声が響く。彼にとつてかなり重要な部位だったらしい。

「さっきソウイチ君にかけた技を見てて思ったよ。確かにあなたの技は強力だけど。その多くが背中中のバックウエポンの突進力に頼った物。そこをつけば脆いつてね!」

「アサダの奴はね、やられながらもそれをアタシ達に伝えようとしたってわけ」

「そういう事かよ……。だがこうでなくちゃ面白くねえ!!お前を倒すのは俺だ!これ位で戦う術を無くす俺じゃねえぜ!!」

技の要を失つてなお、ジ・Oはビームサーベルを両手に構えAGE―3Eに斬りかかろうとする。だがその時だった。

ビキ……ビキビキ……

「ん?なんだこの音」

マツオが突如自機から発する音に首を傾げる。

「アイ!見て!」

ナナが驚きの声を上げた。さっき破壊したジ・Oのパーツが再生しているのだ。それはまぎれもなく違法ビルダーの再生システム『インヘルヤルシステム』だった。

「アンタ、それ違法ビルダーのギミックじゃない!なんでそれ持つてるのよ!!」

「ま!待て!俺は違法ビルダーになった覚えは!」

マツオのうろたえぶりとマツオのジ・Oが再生した事はギャラリ―

達にも衝撃的だった。先ほどの派手な歓声は鳴りを潜め。どよめきの声が次第に出てくる。

「あの人……違法ビルダーだったの?!」

「どうだろう。あのうろたえぶりはなんか引つ掛かる」

ツチャの疑問を余所に、別の場所では誰かが声高らかに叫んだ。

「おい!! やっぱアイツは違法ビルダーだったんだ! いい子ぶってクリーンファイトやってる様な真似しとらずと俺達を騙してたんだな!!」

違法ビルダーのヤスだった。

「アイツ……違法ビルダーの! 自分の事は棚に上げて!!」

ツチャが渋い顔をして言った。ヤスも違法ビルダーなのに、自分の事は新世代ビルダーと名乗り、自分の事は棚上げし、マツオの事はいかにも悪人と言った風に叫ぶ。そんなヤスを知るツチャ達は怒りの感情が湧いてきた。だが彼に同調するギャラリーもいた。

「本性は卑怯な違法ビルダーだったのかよ! 情けないぜ!!」

「そうだな!! 俺ファンだったのにこの有り様かよー!!」

「違法ビルダーだったなんて! さっさとガンプラバトルなんかやめちまえー!!」

ヤスを中心に徐々に暴言を吐くギャラリーが増えてきた。この流れにツチャは違和感を覚える。

「なんだ?! 周到すぎる!」

「打ち合わせでもしてみたみたい……あの同調してるの……多分彼らも違法ビルダーでしょうね……サバイバルの時見なかった人も多い……」
「そうね。でも普通の人達も影響されてるみたい……」

ムツミとカナコも違和感を感じたようだ。だが次第にギャラリーの暴言はどんどん広がっていく。違法ビルダーを嫌う人達はもちろん、それ以外でも元々エキサイトしていたギャラリー達だ。それ故に悪く言う方向に行くのも簡単だった。

歓声はどんどんブーイングへと変わっていく、それはマツオの心を抉っていった

「ちー違うー俺は！俺は違法ビルダーなんかじゃ!!」

外に向けてマツオは弁明を叫んだ。しかしブーイングに勢いづいたギャラリィ達は止まらない。

「違うー違うんだあ!!」

その場に膝をつき、四つん這いの体勢になるジ・O。相手のAGE
—3Eの目の前で、だ。

「アイ、どうしよう？ちよつとこの状況はアタシも異常だと思うけど」
「ナナちゃん…私もだよ。チャンスといえばチャンスかもしれないけれど、この状況で倒すのもちよつと違うと思う」

アイとナナはどうするか思案していた。このうろたえぶりはわざとやった様には思えない。……しかし、それとは別問題で、今棒立ちになっているAGE—3Eを倒すチャンスなのは明白だった。

「……兄ちゃんがあそこまでショックを受けるのは意外だったけど、決めさせてもらうぜ!!ヤタテ!!」

AGE—3Eを狙う機体が照準をAGE—3Eの背中につける。そして撃とうとした時だった。

「させるかあっ!!」

ヒロの叫び声が聞こえた。ヒロのウイングノヴァアの放ったバスターライフルの最大出力が砂漠のある地点を撃った。ビームの濁流は大地を飲み込み今までで最大の大爆発を起こす。その爆発はバスターライフルの着弾地点を中心に、広がる様に砂が滝の様に落ちていった。今の一撃が砂漠に大穴を開けた。

「なー何ー」

後ろで起こった大爆発にアイもナナもマツオも一斉に向いた。そして穴がこちらに広がっているのが見えた。

「大地が落ちて行ってる?!うわっ!!」

そのままAGE—3Eもジ・Oも落ちていった。地下には古代ギリシャの様な遺跡が広がっていた。ところどころ砂に埋もれてはいるがそれはまぎれもなく上の砂漠と同じ位の広さの巨大な空間だった。AGE—3Eもジ・Oも地下の砂の上に降り立つ。

「何これ?!地下に古代遺跡?!」

「ステージ元ネタの漫画版であつたんだよ。このシチュエーション。ステージの仕様が変わったつて事だね」

「ん？ねえアイ！あれ見て!!」

アイはナナの指定した地点を見た。少し離れた場所に半壊状態の手足の生えた黒い鳥賊の様な機体『グリーン地中機動試験評価タイプ』が見えた。『ガンダムSEED』に登場した水陸両用機『グリーン』のバリエーション機だ。この機体の特徴はその名の通り地中を潜航出来ることだ。キット化されていない為、自作かプロショップに作ってもらったかのどつちかだろう。

「うう、な、直さないと……」

タケオの声が響いた。乗っていたのはマツオの弟だった。タケオが言うところのグーンのモノアイが一瞬光る。すると半壊したグーンのボディが見る見るうちに再生していく。

「た、タケオ。お前そのシステムは」

再生するタケオに気づいたマツオが近づいた。

「兄ちゃん、ゴメン。俺が以前のヤスって奴に頼んで違法ビルダーのデータを売ってもらったんだ」

「な！ならどうして俺の方まで再生した！このジ・Oは普通に作りこんだ機体の筈だ！」

「データいじって再生プログラムが兄ちゃんのジ・Oにも反映する様にチツプ付けたんだ。あの時の違法ビルダーから買った！」

「っ！お前!!」

ジ・Oはグーンを蹴り飛ばす。「うわあっ」というタケオの声、アイ達は「あっ！」と声を上げた。

「何故だ！何故こんな余計な事しやがった!!」

「ちよ！ちよつと！こんな時に兄弟喧嘩はやめてよ!!」

なおもグーン殴り掛かろうとするジ・Oを思わずAGEE-3Eはしがみついで止めた。

「お！俺は！兄ちゃんに勝ってほしかったんだ！」

「俺の為だと……?」

「兄ちゃんはあの姉ちゃんに勝つために自分を鍛えていた。でも兄

「自己中なもんか!! 少なくとも弟さんは兄さんに勝って欲しいという気持ちは本物だっつ!! さつき僕はお兄さんのチームメイトと戦った! 彼らはお兄さんがアイちゃんと呼ぶ存分に戦える様僕を必死に足止めしていた!! 『アイちゃんを倒す事は兄さんの目標だった! だから邪魔はさせない!』って!! そんな風に慕われるお兄さんが自己中なもんか!! 彼らは善人だ! さつきみたいな事になったのも少し不器用だっただけなんだ!! 僕はそう信じる!!」

「ヒロ……」

観客席でヒロの剣幕を見ていたチーム『エデン』のメンバー達、

「……もういいぜ。ヒロさんよ」

「?! マツオ君……」

「元々俺達は嫌われていた。今更好かれる側になろうなんて虫が良すぎたっただけだ」

「だったら!! なんでさつき君を見ていた観客たちは君に歓声を送ったんだ!!」

「そうだよ。ヒロさんの言う通り。嫌われてたら歓声なんて送ってないよ」

「へっ。自分の行いを改めたのも、自分でちやほやされる目的だったんだがな」

「それでもそれを見て楽しんでくれた人がいたのも事実だ!」

「あんちゃん。その人達の言う通りだよ」

その時だった。ジ・Oの後ろに一機の戦闘機がホバリングで止まる。さつきヒロが逃がしたヴァリユアブルポッドだ。

「チトセ……」

ヴァリユアブルポッドから発する声はアイ達にも聞こえた。しかもそれはアイ達全員が聞き覚えのある声だった。

「あ……アイ、今の声って……」

「しかも『あんちゃん』って……まさか!」

アイは愕然とする。口ぶりからしてさつき会った人物だ。

「アイお姉ちゃん。そうですよ。チトセです。フルネームは『ケイ・チトセ』あの三兄弟は四兄妹なんです」

アイとナナは開いた口が塞がらなかった。余りにも似てない妹だったから。

「う……嘘……」

「アハハ、言いたい事は解りますけど今はそんな事言ってる場合じゃなくて、あんちゃん。タケあんちゃんがやった事は確かに許せないよ。でも、一度はああやって皆を沸かせたんだもん。またさつきみたいに全力でやればきつと皆分かってくれるよ。だってあんちゃんはさつき言われた通り、自分の為とはいえ皆を楽しませたのも事実なんだから」

「だが……」

「あーもうウジウジしないでよ！ただでさえ試合中で時間惜しいのに!!いいから早くさつきのノリでやんなよ!!やんなかったらあの秘密！……ここでバラすから!!」

「な！何！わ！解った！解ったからここで言うな!!」

『秘密って何。凄い気になる』という全員が感じた疑問をよそにマツオのジ・Oは再び目に力強い光を灯した。

「恥ずかしい所を見せたな。今度は手加減なしでいくぜ」

「かかっておいで！」と身構えるアイのAGE—3E。

「いや、悪いがまずはお前と戦いたい。ヒロ」

さつきまでの狼狽ぶりを誤魔化すかのようにヒロのノヴァをジ・Oは指さす。

「？僕を？」

「さつきああ言われたらな。俺の中で妙なスイッチが入りやがった。先にお前を倒さなきゃ気が済まなくなっただぜ」

「そうか。解ったよ。相手になる」

「ふ、そうとなりやこの直した部分はいらねえな」

そういうとマツオはさつきアイに破壊されたライトニングウェポンと隠し腕をはがそうとする。しかしヒロはそれを止めた。

「待ってくれ。それだってタケオ君の勝ってほしいという気持ちだっ

た筈だ。どうか直したままで戦ってほしい」

「何言ってるんだお前」そう返そうとしたが、無視できない言葉だった。

「……変な奴だな。お前。後悔すんじゃないぞ!!」

そう言うとお互いはビームサーベルを発生させ、一気に距離を詰める。

「アイちゃんは手を出さないでくれ!!」

そう言うのとヒロは両手にビームサーベルを構えジ・Oに斬りかかる。(バスターライフルは分割し盾に装着)ジ・Oもまた両手とビームキャノン部のビームサーベル、計四本で切りかかる。

「こいつに接近戦を挑むたあ無謀だな!!」

隠し腕でノヴァをつかもうとしながらマツオが叫ぶ。ヒロはそれを器用にかわし剣を捌く。ツインバスターライフルは使えない。さつき何度も撃った所為でノヴァにはエネルギーに余裕がないのだ。砂に埋没した古代遺跡で戦う二機は、さながらコロッセオで戦う剣闘士の様だった。

「負ける気は無い!!」

ノヴァは牽制として首横からマシンキャノンを発射、狙うは構造上弱い関節と隠し腕、察知したジ・Oは後方へホバーしながら下がる。そしてある程度距離を取るとすぐさまバックウェポンを全力噴射し突っ込んできた。凄まじい突進力だ。

「っ！来るか！」

ノヴァが下がろうにもジ・Oの突進力は凄まじい。避ける事自体余計とヒロは判断、正面から受け止めようとビームサーベルを構えた。

「うおおおおっ!!!」

マツオの咆哮と共にビームサーベルを振り上げ衝突するジ・O。砂塵舞う中ノヴァは二本のビームサーベルでそれを受け止めた。といてもその勢いにノヴァは罅迫り合いの体勢のまま相当後ろに下がることになるが、

「くっ!!ううっ!!」

ジ・O衝突の勢いに足がガクガクと震える。進路上の石造りの建築物に背中から突っ込んで突き破る。遠くで残りの二人と戦っていたアイとナナは思わず「ヒロさん!」と叫んだ。しかしノヴァは倒れる事無くしつかりとジ・Oを受け止めた。やがて勢いも無くなり止まる二機。

「ほう!コイツの勢いに耐えるとはなあ!!」

「当然だ!僕だってこいつに自分の全てをつぎ込んだんだ!!」

「だがない!」

マツオの不敵な笑み、直後ジ・Oがライトニングバックウエポンを最大出力で上空へ飛び上がる。ノヴァも一緒だった。ジ・Oの隠し腕はノヴァの脚を掴んでいたのだ。ジ・Oは程なくして穴から脱出、それでもなお上空へと飛び続ける。ロケットの様な推力だ。

「うわっ!!離せ!!」

「詰めが甘いぜ!!俺のド派手な技!『ジ・Oドライバー』で砕いてやる!!」

そういうとマツオはノヴァをひっくり返し、ノヴァの頭を下に向けて。両腕を隠し腕に掴まれ。両足を両腕に掴まれたパイルドライバーの体勢だ。(ノヴァの前後の向きはジ・Oと向かい合う体勢だったりする)そして地面に向けてジ・Oは真っ逆さまにバーニアを点火、落ち始めた。

「この技はジ・Oの構造上、尻もちが付けられない!!立ったままの体勢で地面に降り、その衝撃で相手を股のスタビライザーで砕く!!この股を格好悪いという奴もいるがそれは違う!敵を潰す断頭台ってわけだ!!」

「くっ!!このお!!」

ヒロは最大パワーでジ・Oの拘束から逃れようとする。しかしジ・Oの腕を振りほどくことは出来ない。

「諦めろ!そのウィングのパワーじゃこいつからは逃れられない!!」

ノヴァは上半身を反らせ、エビぞりの様な体勢になる。その時だった。ノヴァの左腕からシールドが射出され。ノヴァの背中に装着さ

れる。飛行形態。バードモードになろうというのだ。

「負けられないんだ……僕には!!果たさなければならぬ事があるんだ!!」

「バードモードで脱出しようってか!!無駄だ!その推力じゃコイツからは……なにいつ!!」

突如ノヴァのボディは青く輝く。エネルギーの幕を全身に張ったのだ。しかもこれには攻撃判定があり、ジ・Oの接触していた部分はすぐさま蒸発。ジ・Oの拘束を解いたノヴァは脱出した。

「切り札は最後まで取っておくものだよ!!」

「くっ!お前!!」

砂漠で青空の下、バードモードのノヴァは反転、青いエネルギーを纏ったままジ・Oに突撃をかける。

「うおおおっ!!」

「拳がなくなっただってなあ!!」

ノヴァに向かい合うジ・Oの右腕が赤く輝く。ソウイチを葬ったリアット『ビルドボンバー』だ。ジ・Oもまた最大推力でノヴァに向かっていった。

「ビルド!ボンバアアツ!!」

「ノヴァ!!ストラアアイクツツ!!」

『うわああああああっ!!!!』

お互いが自分の全てを技にかけ、相手へとぶつかっていく。ノヴァの青い光、ジ・Oの赤い光、ぶつかり合う時にはまばゆい光がフィールドを覆った。

「うわっ!!凄い光!!」

「どつちが勝ったの?!」

タケオのグリーンとチトセのヴァリアブルポッドを破壊し、遺跡から上がってきたアイのAGE-3Eは光量に目を覆った。暫くしても光は収まらない。少し光が収まるとアイとナナは二機を薄目で見える。まだノヴァとジ・Oはぶつかりあっていたまま膠着していた。二機と

も接触部分には亀裂が入っていた。そしてノヴァのシールド先端部分の亀裂は大きくなつていく。

「くうっ！なんてパワーだ!!」

「ハハハ！どうやら俺のフォールの様だな!!」

「舐めるな!!僕はこの所でつつ!!終われないんだあつつ!!」

再びノヴァの放つ光が、推力が強くなる。その勢いはジ・Oの腕の中にノヴァの機種がめり込み、次の瞬間ジ・Oグラップラーの体はウイングノヴァのボディに引き裂かれた。ジ・Oの上半身が舞う。

「なっ!!俺の!!フォール負けかあっ!!」

マツオは叫ぶ。そして上半身と下半身、まとめて爆発。タケオのグリーンを破壊した為、ジ・Oの再生する術は失われていた。これにより、アイ達のチームは勝利を収めた。

Gポッドの中、マツオは愛機を取り出し、申し訳なさそうに見つめた。

「……お疲れさん、俺のジ・Oグラップラー」

そしてGポッドから出てくると、ギャラリー達は一斉に拍手と歓声を送った。

「すげえ！すげえバトルだったぞ!!」

「本当！感動的だったよ!!」

「うおおっ!!お前こそ真のビルダーだ!!」

その拍手と歓声は全てマツオに注がれていた。当然その中にはマツオを疑ったライタ達もいた。しかもライタは泣いているという有り様だ。啞然としていたマツオの顔は次第にはころんでいく。

「ありがとうよ!!皆!!」

マツオは笑顔で自分の愛機を高く掲げた。

……

「い！急げ！早く逃げなきゃ!!」

その頃、マツオにヤジを送った違法ビルダー達は会場から一目散に逃げようと廊下を走っていた。

「おーっと、逃がさんぞ」

「ひっ!!」

ヤストテツの進路上に数人の大男がたっていた。マツオの先輩達だ。

「お前らだな？あんなヤジ飛ばしてマツオを傷つけた違法ビルダーって連中は」

「ウメオ君、あのヤストテツって奴がマツオに暴言吐いて、タケオ君に違法ビルダーのチップを売ったんだな？」

「はい。あいつらです」

反転して逃げようとする違法ビルダー、しかしその進路上にも先輩は現れ、退路も塞がれてしまう。

「な！なんだよ！俺達をどうしようっていうんだ！」

「ひ……ぼ、暴力はやめて……」

ヤストテツ、他違法ビルダーらは怯えながらも抗議する。

「暴力は振るわねえけど、なにかしらお仕置きはしとかねえとなあ」

「おお、そうだ。明日っからレスリング部で合同合宿あんだろ？折角だから雑用に連れてくんべ、トレーニングにも参加させときや少しはいい薬になるだろ。丁度人手が足りなかったしな」

「お、名案だな」

「ふ！ふざけんな!!初対面の相手に！俺らの親の了承もなしに!!」

「じゃ、親御さんに確認取るから一人ひとり電話番号言え」

「いいですよ……」(どうせOKなんか出すもんか……)

……数十分後……

「ほぼ全員OKだつてよ……」

「う！嘘だあ!!」

「決まって皆『一日中遊んでるか家でゴロゴロしてるんだからいい経験になる』ってご家族の方が言ってたぞ」

それから一週間、違法ビルダーの面々はレスリング部地獄のトレーニングと雑用（と連日の脱走未遂）で死にかける羽目になるが、それは別のお話。

……

「悪かったよ兄ちゃん……。思えば馬鹿な事をした」

「気にすんな。終わったことだ。同じ事をやらなけりやそれでいい……その、悪かったな。俺も自分が称賛される事ばかり考えてた」
試合が終わった後。アイ達とマツオ達はラウンジに座りながらお互いの機体を見せ合っていた。マツオとタケオの機体の傍には中に入っていた違法ビルダーのICチップが入っていた。

「それにしても妙な話ね。違法ビルダーの機体でもガンプラ魂が使えたなんて、今まででつきり使えないもんだと思っていたわ」

「さあね、今まではデータの塊だったから使おうにも使えなかったのかも」

「それにしても、マツオ君のジ・Oもそうだけど、タケオ君の地中用グリーンも見事な物だね。原型機は発売されたけどこの機体自体は発売されて無いからね」

「でもあんまマジマジと見ないで下さいよ。慣れてない改造だったんで出来は正直……」

「そんな事ない。見事だよ」

「あ、有難うございます。地中へ潜る機能はif sユニットをグリーン内部に取り付けて機体をビームで覆って付けたんですよ。違法ビルダーから買ったのはあくまで再生機能だけです」

照れながらもタケオは自分の機体をアピールする。

「……なあヒロよ。なんでお前、俺を信じた。なんでタケオを庇ってくれた」

ヒロに感じた疑問をマツオは口にする。

「……僕の友達は、勝ちたいという気持ちと、勝てない現実にとずっと悩んでいたからだよ」

「？」

「そしてうまくいかない事に、別の友達は少しでも勝つ感覚を思い出させようって違法ビルダーの機体を与えた。でも友達はそのまま違法ビルダーとして普通のビルダー相手に暴れまわる結果になってしまった」

「今はそいつは？」

「そのまま違法ビルダー側に行ってしまった。この大会に出るって言

うから今はアイちゃん達と行動してるってわけだよ。連れ戻す為
ね」

「……連れ戻せると思ってるのか？お前……」

「出来るよ。僕は信じる。その友達も、僕自身も」

「……そうかい」

出来るわけない。そう言おうとしたがヒロの口調と表情は真剣そ
のものだった。マツオは何も言えなかった。なんだかそれを現実に
出来る様な気がしたから。

「ま、今回は俺の負けだが次は負けねえぜ、もつと強くなってお前に挑
戦するぜ！ヒロよ！」

「あれ？あんた確かアイ倒すのが目当てだったんじゃ……」

今までアイ打倒だったのがいきないヒロ打倒になっていた。ナナ
は疑問を持たずにいられなかった。

「いーいいいだろ?!別にどっちも倒すのが目標だったんだ！手始めにお
前からって事だ！」

狼狽した表情でマツオは答える。そうは言いながらマツオのライ
バル意識はヒロの方に映っていた。

「んー、なんか蚊帳の外ですよ私、妹って衝撃の真実のつもりだったの
になんか悔しい」

その横でジューズ飲んでたチトセは不機嫌そうな表情だった。

「まくまく、ところでチトセちゃん、マツオさんの秘密ってなんだった
の〜」

「あーあれですか？あれはですね。違法ビルダー見て『俺もあんな風
だったのか』って勝手に落ち込んで〜」

「っ!!い！言うな!!それ以上言うなああっ!!」

慌ててチトセを止めるマツオ、その姿になんだか見てたアイ達は吹
き出してしまふ。笑い声が周りに木霊した。

「……アタシ抜きでも、盛り上がってるじゃねえか……アイ……」

少し離れた場所で、『一回戦を勝ち抜いた』とアイに報告しようとし
たノドカは、談笑するアイを柱の陰から隠れながら見ていた。若干む

くれながら。

番外編2 「アイの過去回想その1」 ※百合っぽいので注意

「やったねアイ！二回戦も突破！」

多目的アリーナのガンプラバトル会場。試合結果のアナウンスが流れる中、Gポッドから出てきたナナは同様にGポッドから出てきたアイに駆け寄る。ケイ三兄弟を退けた後、二回戦も難なく勝利する事が出来た。

「うん！ナナちゃん！」

「で、手を上げて頂戴。ハイタッチしたいから」

「あ、うん」

片腕を上げてハイタッチの体勢を取るアイ、ナナはその上げた手に勢いよくハイタッチをする。パイロットスーツを着ていた為手袋越しだったが音は勢い良く響いた。

「まだ二回戦を勝ったっていうのに気が早いっスねーハジメさん」

ソウイチとツチャもGポッドから出てくるとアイ達に近づいてくる。ツチャはにこやかだがソウイチには呆られながら言った。

「いいじゃない。一回でも負けたら終了なんだからさ」

「そうだね。私も少なくともノドカと戦うまでは負けられないよ」

「ハッ、言ってくれるじゃねえか。アイ」

アイが言った直後、アイに話しかけてくる女の子がいた。目力のある桃色ツインテール。アイの幼馴染のノドカだ。

「ノドカ」

「フン。アタシらも二回戦は突破したぜ。アタシもアンタに勝つまでは負けるつもりなんてねえんだからな」

片手を上げたままノドカは言う。しかも若干そわそわしてる。

「……なんで片手だけ上げてるの？」

「……アタシにもハイタッチしてよ！」

ムツとしながら恥ずかしそうに返すノドカ。「え？ああうん！」アイはたじろきながらも、むくれるノドカの手にハイタッチ、満足げな

表情を見せ、手を下ろすノドカ。

「でもさ、トーナメント表は見たけどアイ達のチームとノドカのチームはブロックが違うよ。バトルするとなると決勝になっちゃうわよ」水を刺す様な発言だが、ナナは思った事を口にした。そう、今回の大会のトーナメント表は32チームが2ブロックに分かれている。アイとノドカのチームがかち合うには決勝まで勝ち進む必要があった。

「ナナだっけ？アンタのレベルじゃ不安になるのも仕方ないでしょうね。でもま、この程度の大会レベルじゃアタシもアイも遅れを取るとは思えないけどね。キヒヒ」

皮肉付きのノドカの返しだ。自分が言いだしつぺと分かってはいたがムツとするナナ。

「失礼な事言わないでよノドカ、ナナちゃんはあなたが思ってるよりずっと強いよ」フォローを入れるアイ。

「ま、それを確かめるのは決勝でね」

と、そこで三人の様子を見ていたツチャが、かねてから疑問に思っていた事を聞く。

「それはそうと、ユミヒラさん、気になっていたんだけど」

「ん？眼鏡の……ツチャさんだっけ？何さ」とノドカ

「眼鏡……まあいいや。チームメイトの二人は近くにいるのかい？」

ツチャに発言にナナも疑問に思った。

「あーそっか。チームって事は三人いるのよね。どんな人なの？ア……ツツ!!!」

その時だった。ナナの尻に妙な感触が走った。誰かが触ったのだ。溜まらず顔を真っ赤にし、両手でお尻を遮りながらナナは凄い勢いで振り返る。

「だ！誰よ!!今触ったの!!」

「おやすまない。君のスタイルがなかなか良かったのでね。……ざつと85cmと言ったところか」

後ろにいた人物がしれっとした口調で言った。少女だ。目の前には前髪ぱつつんで長髪。身長は170cm近くあり、顔つきは精悍さと

気怠そうな雰囲気併せ持っている。妙な雰囲気醸し出していた。「あ、副部長。お久しぶりです……相変わらずですか」アイは呆れながら言った。

「やあアイ、久しぶり、これでもセーブはしたつもりだよ。胸の方が形はよさげだったから揉みしできたかったんだがね」

その発言に「ひっ……」と絶句し、離れるナナ。それをよそに、副部長と呼ばれた少女は表情を変えずに淡々と喋る。表情に反して動いている部分はわきわきと動く手の指と、徐々にナナとの距離を積みめようとする足だった。しかし、突如副部長の両脇から手が伸び、そのまま副部長の体を持ち上げ羽交い絞めにする。手は男の物らしい、かなり肉がついていた。

「あのさあ、ユメカ。久しぶりにアイちゃんに会うんだからさういうセクハラはやめようって言ったじゃない。怖がつてんじゃないの……」

ギリギリと音を立てて副部長にかかる両腕に力がこもる。副部長の後ろにいる人物の声はかなり怒気がこもっていた。

「う……す、すまない。ノゾム。痛い、ちよ、痛いから手え離して」

脂汗を流しながら懇願する副部長

「部長もいたんですか。よかつたあ」安堵するアイ

「当然だろアイ。副部長止められるの部長だけなんだから」とノドカ「ヤタテさん。この人達も引越す前の友達スか？」状況を飲み込みきれないソウイチがアイに尋ねた。

「と、まあ恥ずかしい所は見せてしまったけど、僕がアイちゃんの昔所属していた模型部の部長、『ケンモチ・ノゾム』（剣持希望）といいます。高校三年生だよ」

場所を移してラウンジにて、テーブルに向かい合う形で座って自己紹介を始める。さつき副部長を羽交い絞めにした恰幅のいい少年が自己紹介をする。太っていて短髪、目つきの鋭いマツオと対照的に穏やかそうな笑顔を湛えた少年だ。

「引越す前は模型部にいたんスか。ヤタテさん」

ソウイチの問いに「うん」と返すアイ

「そして副部長の『タテノ・ユメカ』（盾野夢佳）同じく高校三年生だ」
長髪の少女がナナに向けて頭を下げる。ナナは警戒したまま挨拶を返した。

「まあ他にも私達の仲間は紹介したい所だがとりあえずは私達二人だけとしておこう。いずれ君達の事もよく知りたいからね」

「副部長、ナナちゃんの胸見ながら言うのやめてください」と渋い顔をしながらアイは言う。

「大丈夫だよアイちゃん。ユメカにはこっちから監視しとくから、さて、そろそろお昼休みだ。会ってそうそうだけど僕達は戻るよ。ユメカ行くよ」

「え？部長、お弁当一緒に食べないんですか？一応作ってきたんですけど」

「私達の方は元々外食の予定だったんでね、皆を待たせるわけにはいかないさ」

「じゃあアイ、アタシも戻るよ……」

渋々とノドカは戻ろうとするが……、

「いや、ノドカ君は残れ。顔に残りたいって書いてあるぞ」

「え？でも……」

「折角久しぶりに会えたんだから、もっと話でもしなよ」

「皆には私達から言っておくから、ただし代償として胸を揉「やっばい」です」「冗談だ。何もいらなから行っておいで」

「……有難うございます！」

ノドカは深々と頭を下げると嬉しそうにアイ達に駆けていった。

「おーアイちゃん!!こっちはこっちは!!」

アイ達は別のラウンジに移動。こちらはテーブル等はない巨大な部屋だが、そこかしこにビニールシートを敷いて、買ってきた物や作ってきた弁当を食べながら談笑するビルダー達が見えた。入り口付近で見回すと恰幅のいい50代のヒゲ中年。ブスジマが手を振って場所を教えてくれた。靴を脱いだブスジマの周りにはタカコ達や

ブスジマのチームメイトがビニールシートを敷いて、座ってるのが見えた。

「工場長。お待たせしました」

「おーもう腹ペコだぜ。早く皆で食べようや！ガツハツハ！」

どっかとその場に豪快に胡坐をかくブスジマ、そしてカナコが、ミドリが弁当を取り出す。元々弁当を作ってくる担当は話し合いで決まっていた。カナコとミドリ、そしてアイの三人だ。

「大目に作ってきたからこの人数でも充分間に合うはずだよ」

「悪いね。俺達の方まで用意してくれて」

重ねた弁当箱を展開するアイを見ながらツチヤは少し申し訳なきように言った。

「別に苦にもならないですよ。なんかこの間、久しぶりに料理作ったらまた自分の中で火がついたみたいで」

ウキウキしながらアイは弁当箱を開ける。一番上の弁当箱にはおにぎりが何個も詰まっており、下の箱には卵焼きやら小さいサイズのハンバーグ、焼きそば等が入っていた。

「遠足じゃあるまいし、こういう時にまで親や友達が作った弁当食べる事になるとは思わなかったっすよ」

「だったらソウイチだけ別の所で食べる？」と若干刺々しくソウイチの母、カナコは言う。ソウイチは慌てて「そういう意味で言ったんじゃないよ！」と返した。

「……昔もさ、部活とかで弁当作ってほしいって奴に作ってあげたりしたよね。アイ、懐かしいよ」

「そういえばアイちゃん。昔の部活の話っていうの、聞きたいなあたし」

「え？タカコちゃん？」

「お、いいね。酒の肴ならぬ弁当の肴ってか？」

「僕も気になるな……少しでいいから話してほしいな……」

それからどんどん自分も聞きたいという意見が飛び出す。

「うん、せっかくだから話そうかな。……で、どの話しようか、ノドカ」「あ？なんでアタシに聞くんだよ」ノドカはそう言いながらアイの

作ったおにぎりを頬張る。

「いやーどうも昔話っていつても範囲広すぎて」

「別にこういう部活だったって伝わればいいだろ？」

「そうだね。じゃあとりあえず当たり前障りのない所から……」

アイがどうい学校生活をしていたか、それはアイの言葉を、それをノドカの回想を通して話を進めよう（ナナ達知らない人に最小限伝えるだけのアイの言葉では、どうしても省略する部分が出来てしまうからだ）

アタシとアイが住んでいた街『玄礼木市（くろれきし）』の、『市立冬宮（とうぐう）高校』そこがアタシとアイの通っていた高校だ。時は六月の曇り空のある日、アタシは一人自分の所属する模型部へと廊下を歩いていった。廊下では下校やアタシと同じ様に部活に向かう様々な生徒と行き交う。でもそんなのはアタシにとってどうでもいい事、普段授業がつまらない分、部活にだけは一層やる気が出てくる。アタシは模型部が好きだ。アイのいる部活が、
「ちよつとユミヒラさん！見つけましたよ!!」

と、階段の踊り場からいきなりアタシの目の前に数人の生徒が立ちはだかる。ピンで征服と繋げた左腕の腕章が目立つ、生徒会の連中だ。

「あなたの班、庭掃除担当なのにまたアナタの分担はアイ先輩に任せましたね？」

リーダー格の女子が前に出ながら言う。真ん中わけでたれ目だけどキツツイ奴、胸と態度がデカい女『マトイ・マコト（的射真実）』アタシに何かと突っかかって来る。

「いいじゃねえかよ。今日のはその前にアイの掃除当番をアタシが代わってやったんだから、今日のはアイも班の皆だつて了承してるんだ」

「そういうわけには行きません!!定められたルールを勝手に変えるなど許されません！こんな雨の日にアイ先輩に掃除をさせるなど！」

マコト、アタシらと同じ年なのにアイに対しては『先輩』とつける。

なんでも小学生時代、習い事の関係でそう呼び続けているとか、実はもう一つアタシをやつかむ理由はあるんだけどな。

「それ以外にも罪状はあります！その着崩した下品な制服の着方。そのピンクの髪」

「あ？いいじゃねえかよ。別に校則違反にはなつてねえんだから！」

「そうは参りません！あなたの所為で学校の印象が悪くなるわけには行きません！アイ先輩も不良になってしまったら大変です！」

「はあーあ、滅茶苦茶だなおい」

アタシはため息を吐くと一呼吸おいて言い直す。

「結局アタシ、アイが大事つてわけかよ？アタシ以外にも取り締まる不良はたくさんいるだろうが」

「な！何を！」

「あ、いたいた。ノドカ、掃除終わったよー」

と、そこへアタシの見知った奴がこつちへ来る。アタシの赤ちゃんの時から親友、アイだ。

「あ！アイ先輩！こんにちは!!」

明らかにマコトのテンションが上がる。

「あ、マコトちゃんこんにちは。ノドカ、先行つてつて言ったのにどうしたの？」

「あ？マコトの奴らに捕まったんだよ」

「少々風紀の乱れについて注意しまして、それよりアイ先輩。以前のワタシの提案考えて頂けましたか？」

「『模型部やめて総合手芸部に来い』って事？悪いけど模型部を動かすもりはないよ」

『総合手芸部』個人や趣味での刺繍や編み物、手を使つての製作物を揃えた部活だ。生徒会の息のかかった部活で、マコトは生徒会とこの掛け持ちだ。当然その中には模型も含まれてるから模型部とは衝突が絶えねえ。さつき言ったもう一つの理由つてのはこの事だ。

「な、何故ですか？ワタシ達の所は模型以外にも沢山のジャンルを取り揃えています。部活上の繋がりがあれば人の繋がりも大きくなります。わざわざ模型部という一つのジャンルに固執する必要もないで

「ように」

「私は今の部活が好きだからだよ。確かに規模が大きくなれば環境もよくなるかもしれないけれど、私一人だけ移る気にはなれないよ」

予想は出来てたけどやっぱりアイは誘いを断った。アイはいつでもアタシの期待を裏切ったりはしない。

「いずれは手芸部は料理関係も取り入れます。その暁にはアイ先輩には料理担当の部長をやって欲しいのです!」

「悪いけど今は料理でそこまで上手いつもりはないよ、というかせめて模型部員全員が手芸部に移るとかじゃダメなの?」

「それは出来ません。模型部のトップにはあの『魔女』が……」
「魔女?それは誰の事かな?」

その言葉と共にマコトの後ろから手が伸びてきて、マコトの胸を鷲掴みにした。後ろに誰かいる。アタシとアイはその人物を知っていた。

「ひゃうツ!!」
「?!」

マコトの口から色々感情が混ざった声が漏れた。表情は恥ずかしいと今の状況が理解できないのが混ざった顔だ。

「ふ!副部長!」

「げ!生徒会潰した魔女!」

アイとマコトが叫ぶと共に後ろの人物は手を離す。姿を現したのは副部長『タテノ・ユメカ』だった。

「何か険悪な雰囲気が見えたのでね、何か事件でもあったのかい?」

「今思いつきりマコトちゃんにセクハラかましたのが事件です副部長」

「いやいや、掴みがいのありそうな胸があったのでね。しかしマトイ・マコト君だったかな?君の胸は弾力より柔らかさの方が上だな、どちらかと言えば前に掴んだ若干肉のあるお腹の方が揉みがいがある」
「っ!!」

今度は恥ずかしさと嫌悪さが混ざった表情だ。次に副部長は別の生徒会女子に目を向ける。自信のなさそうなオドオドした子だった。
「おお君は、大ききさこそ劣るが胸の揉み心地は君の方が上だった。見

事な胸だよ。しかし残念だ。揉み心地はマコト君のお腹の方が上だ」
「えっ」

「そうだマコト君、もう一度揉ませてくれないか、君の若干肉の余った
お腹を……」

手をワキワキさせる副部長。表情に変化はないけど若干声が震えてる
辺り本気だ。いつも思ってるけど変態だこの人。

「ふー不愉快です！今日はここで退却します！ユミヒラさん！次は制服
と髪を正してきなさい！」

「やなこと」とアタシは舌を出して見送った。見送る生徒会の後ろ姿
「何誇らしげな顔してるの！」とマコトは、さつき副部長が胸の感触が
いいと言った子をどついていた。悔しがってやんの。

「さて、邪魔者もいなくなったらし行こうか。私たちの部活へ」

廊下のさつきの所から少し離れた技術室、そこがアタシ達の部室だ。
特別教室を使ってるだけあって中は普通の教室より広い。

「やあ皆、遅かったじゃない」

入ったら待っていたのは恰幅のいい男、『ケンモチ・ノゾム』と数名
の部員達だった。

「生徒会の連中に絡まれたんですよ。アイまで手芸部に来いとか言い
やがって、何考えてんだあいつ等」

「仕方ないだろう。前々からこの生徒会は嫌われてるからね。特に
模型部は生徒会から目の敵だ……」

「ユメカ、その話を自分から言うんじゃないよ」

「ふ、そうだったなノゾム」

珍しくしんみりした顔の副部長。昔何かあったらしいけどこの当
時のアタシ達には知る由もねえことだ。

「それよりアイちゃんとノドカちゃん。もうすぐ『イングレッサ』で模
型部選抜ガン普拉バトル大会があるよ。二人とも学校代表として出
てもらおうからにはしつかりやってくれよ」

部員の一人がそう言った。『イングレッサ』っていうのはアタシ達
のいきつけのおもちや屋、五階建てのビルそのものが店になってお

り、ガンプラ関係も非常に充実してる。そこでここら一带の模型部の代表選手を集めてガンプラバトル大会を開こうって催しがある。その代表でアタシとアイが選ばれたってわけだ。

「解つてますよ。その為に新機体作りましたから」

「残念ですがそれは無理です！」

持ってきた箱から新作を取り出そうとするアイだけど、ある人物によって遮られた。その声を聞いてアタシは『ゲツ』となった。マコトだ。今度は取り巻きは全員男子になっていた。副部長のセクハラ防止の為か、男子はマコトを守るみたいに取り囲んでいた。

「学校代表は私達手芸部も出ます。あなた達の出る幕はありませんよ」

「おやマコト君、お腹揉まれに「来てません。まあ今日の所は練習試合の申し込みと言った所でしようか。代表の一人はワタシですからね今日はアイ先輩とバトルがしたいんですよ」

「あ？なんでアイとなんだよ。普通アタシじゃねえのか」

「模型部最強とうたわれたあなたも頭はカラツポですか。実力差が離れすぎた人と戦っても練習になるわけじゃないじゃないですか」

いちいちトゲのついた発言がムカツク。アタシがアイといつも一緒なのがそんなに嫌か。

「ま、そんなピンク髪じゃ頭の中もピンク一色でしょうけどねえ。あなたみたいなのがアイ先輩と一緒にいる資格なんてないですよー」

「っ!!てめえっ!!」

「うわあっ!!ノドカ!やめて!!」

掴みかかろうとするアタシをアイが腕を掴んで必死に止める。

「止めるな!アイ!」

「そうだ。落ち着けノドカ君」

「副部長!!止めるふりして胸揉むな!!」

ついでに部長がアタシの胸を後ろから掴んで止める。ホンットこの人は!!

「何どさくさに紛れて胸揉んでるのかなユメカ」

「うおおお……ごめんノゾム……つい……」

そんな副部長の顔面を部長がアイアンクロウで止める。マコトや他の部員もそれを呆れながら見ていた。

「とにかく、試合だったら応じるよマコトちゃん。でもその前にノドカに謝ってほしいな」

「……嫌ですよ。どうしても言うなら試合に勝ったなら謝りましょう」

「受けて立つよ」

……

そしてアタシ達はイングレッツサに移動、ガンプラバトルのある階層へ向かう。模型コーナーの一部をくり抜いたガンプラバトルのスペースだけど、店自体が大きいからかなりのスペースがある。アタシ達は観戦モニターを見ながらアイのバトルの行く末を見守っていた。フィールドは宇宙空間だ。

「ガンダムAGE―1E！行きます!!」

アイの新作ガンプラが見えた。ガンダムAGE―1を改造した機体で、本体には変わった所は見られない。でも手に持った武装が違っていた。『アストレイグリーンプレーム』という機体のツインソードライフルという、大型ビーム銃剣付きライフルになっていた。シールドもアストレイの物になっていた。

対するマコトの機体は『Gガンダム』に登場したノーベルガンダム（髪はバーサーカーモード、左右端の髪はちよつとカットしてある）見れば背中にはGNアーチャーという機体のバックパックがついていた。ミサイル内蔵の大型のブースターが左右二機、更に二丁拳銃（銃身の先にビームサーベル付）を持っており、よく言えば弱点を補っている。悪くいえば長所を殺した改造とアタシは感じた。（Gガン系は格闘特化な為）

「アイ先輩！勝負ですよ！」

「ノーベルガンダム!?あの改造は！」

すげえスピードでノーベルガンダムはAGE―1に迫ってくる。GNアーチャーのライフルに取り付けられたビームサーベルを発生

させ、迫るマコトのノーベルガンダム。アイはツインソードライフルのビーム銃剣で迎え撃つ。ノーベルガンダムはビームサーベルを交差させ、アイは銃剣を構えてぶつかり合う。

「くっ!!スピード加えての勢いがこんなにあるなんて!!」

弱音を吐くアイ、でもAGE-1はノーベルガンダムの勢いを受け止めた。

「へえーやはりアイ先輩の作ったガンプラ!出来がいいって事ですか!GNアーチャーの勢い付きのビームサーベルを受け止めるなんて!」

「当然!ノドカからのお墨付きだもの!」

ふふん。アタシの名前を出す辺り理解出来てんじゃんアイ。なおマコトはGNアーチャーのブースターで押し切ろうとするも、アイは左腕のシールドの先端部分で殴りつける。衝撃で離れるノーベルガンダム。距離は中距離。すかさずアイは追い打ちをかけようという。ライフルを撃ちまくった。ノーベルガンダムはその場から一旦離れようと距離を取りつつ、背部ブースターからミサイルを撃ちまくる。

「っ!」

アイは後退しながらライフルでミサイルを迎撃、爆発により誘爆するミサイル。AGE-1には当たらなかったがノーベルガンダムが撤退する時間は稼げた。辺りを見回すアイ。近くに廃棄衛星とか浮かんでるんだから隠れりやいいのに……、

「やっぱり一筋縄ではいかないんですねアイ先輩、素敵です。ならとっておきで決めます!!」

そういうとまたミサイルが飛んできた。さつきより数は多い。「おんなじ事だよ!」とアイはミサイルにライフルを撃ち迎撃する。それに起こる爆風の中をノーベルガンダムは突っ切ってきた。

「来たっ!!」

アイはライフルで打ち落とそうとするも、ノーベルガンダムは急激に角度を変える。

「っ!」

そして円の動きを描きながら、そして高速で動きながらAGE-1

目がけてビームライフルを撃ちまくった。前後左右からの攻撃にAGE―1は防戦一方になる。もつと動けばよかつたのに。そしてアイのAGE―1はツインソードライフルを右腕ごと失い、その場になだれた。全身もうボロボロだ。これを見ていた時、正直言つてハラハラしっぱなしだった。

「トドメと参りますか!!」

そう言うとマコトのノーベルガンダムはビームサーベルを銃身に発生させAGE―1目がけて突っ込んでくる。しかしその時だった。AGE―1の黄色い瞳が強く輝いた。まだ諦めてないぞとでも言うかのように。

「甘いー」

アイはそう言うとAGE―1のシールドをノーベルガンダム目がけて投擲。「ただのシールドを投げた所で!」そうマコトは言った。だが直後、シールドの先からビームサーベルが発生、

「何ー」

慌ててマコトはビームサーベルをよけようとノーベルガンダムの角度を変える。しかしそれが災いし、GNアーチャーの左側ブラスターをビームサーベルが切り裂いた。単純にこれはマコトの判断ミスだ。バランスを崩したノーベルガンダムは加速を中断しその場に止まる。しかしそこへアイのAGE―1が迫る。シールドを投げたすぐ後、自分も高速でシールドを追いかけたのだ。

「隙あり!!」

「ああっ!!」

アイはそのままビームサーベルを振り下ろす。対応しようとしたマコトだがノーベルガンダムはそのまま切り裂かれ爆散、アイの勝ちだ。つたく!ハラハラさせて!

「御免なさい。ユミヒラさん、不愉快にさせる事を言ってしまった」

約束通り、深々と頭を下げるマコト、アイが絡むと途端に素直になるなコイツは……とはいえアタシ自身こいつの誠意を無下にするわけにはいかない。アイも見ているし、

「ま、謝ってくれりや別にかまやしねえよ。それにしてもアイ、防戦一方だったじゃねえか。もつとああ言う所は動かなきゃ駄目だぜ」

「えーいいじゃん勝ったんだから。それにまだ慣れてないんだもの」

「言い訳しない」

「普段アイ先輩に頭が上がらないからってこういう時だけ強気ですか」

ボソツと皮肉を言うマコト、アタシにとってはかなりムツと来た言葉だった。

「なんだとマコト！」

「ふん！今回は所詮練習に過ぎません！大会の時はこうはいきませんよ！！帰りますよ！……ユミヒラさん！やはりあなたはアイ先輩の足かせです！もつと彼女には相応しい人間がいると言う事を忘れないで下さいね！！」

「マコトちゃん！！」

アイとアタシが反応するも、一目散にマコトはその場を後にした。……副部長がその横で手をわきわきしながら我慢していたのはノーコメントで。

「……アイ、さつきはアタシも言い過ぎたな、ちよつと思いついた追加武装があるから作ったら使ってくれよ」

「本当？有難うノドカ。大会までにもつと頑張らなくちゃ」

笑顔で答えてくれたアイ、……子供の時からずつと思ってたけど、やっぱり好きだ。こいつの笑顔。その一方で『アイ先輩の足かせ』という言葉がアタシに突き刺さる……。

……

その後は各自解散と言う事で皆イングリッサから家に帰ることになった。

「しよつちゆうイングリッサに寄ってるから時間節約できてラッキーだな」

「本当だね。あ、雨降ってるよ」

店の自動ドアを開けたアイが空を見上げながら言った。かなりの勢いだ。

「マジかよ。アタシ傘持ってきてねえぞ」

「私は折り畳みの持ってきてるけど、一人用だから狭いよ。濡れるのやだし」

「そうだ。アイ、いい事思いついたぜ」

「ノドカ……私……」

お互い指を絡ませながらアイが憂いを秘めた目でアタシを見つめる。

「なんだよ、アイ……」

アタシはお互いの体温を感じながらアイに聞き返した。雨の所為か指先が冷たい。

「周りの視線が痛いよ。ヤダよこの体勢」

お互い向かい合う体勢にアイは文句をたれた。アタシだって嫌だよ。濡れるの嫌だからお互い向かい合う形で片手で傘を持って、もう片方の手で、手をつないでスペース確保しながら移動するという方法を取った。コンビニまで近いからという理由でアイにはごり押ししたが、やめときゃよかったとちよつと後悔。

「悪い、我慢して。コンビニでビニール傘買うまでの辛抱だから」

嫌ではあるけど、アイとこんなに向かい合って密着するのいつ以来だろう。なんか懐かしい。なんだかもう少しこのままでいたかった。……今にして思えば、こんなおかしな方法取ったのも、もしかしたら『アイの一番はアタシ』と自分や周りに言い聞かせたかったからなのかもしれない……思い出したらまた恥ずかしくなってきたああ!!!

——小さい頃も、こんな目にあつた時も、アタシはアイとずっと一緒だって、疑いを持たなかった。——

「とまあそんな部活やってたんだよ」

アイがアタシの回想と同じ事を話す。とはいえマコトや傘の下りは大幅カットなのは言うまでもねえ。

「生徒会と対立してたわけ？結構向こうでもスリリングな部活やって

たわけね」

ナナの奴が呑気そうな声を上げた。全員が話を聞きながら弁当を食べていたのもうほとんど弁当は残ってない。

「で、結局大会はどうなったの……」

「それはねムツミちゃん「あの、ヤタテ・アイさんですよね」

突然ガキ共が数人話しかけてきた。大会に参加した選手ってわけではなさそうだ。手にはガン普拉を持っている。

「アイさんのガン普拉を参考に改造に挑戦してみました。よかったら見て貰えますか」

「うん、いいよ。ゴメンムツミちゃん。ちよつと待ってて」

話を中断させてアイはガン普拉へのコメントを始める。アタシはスマホでの時間を確認した。もうそんなに昼休みの時間は残ってない。多分話す前に午後の試合は始まるだろう。かつての親友と再会は出来たけど、変わりつつあった親友の環境に、アタシの心はちよつとモヤモヤしていた……。

第45話 『第三回戦! 模型部と再戦!』(ジंकウス
(GN-X)・チャリオット登場)

「アイ、遅いな。何やってるんだろ」

昼休みの終わる少し前、アイは子供のビルダー達に自作のガンプラのコメントやアドバイスを頼まれ、それが長引いてしまった為にナナ達に「先に行つて」と促した。すぐにアイも来るだろうとナナ達は手早く女子更衣室で着替えて、入り口付近の廊下で他のメンバーと待機。アイを待つがなかなか来ない。

「まあいざとなつたら私服で出るっすかねヤタテさん」とソウイチが言う。別にパイロットスーツで出場しなくてはいけない。というわけではないのであまり深刻そうには思つてなかつた。

と、廊下の奥から足早に駆けてくる少女が見えた。アイだ。

「ナナちゃん! お待たせ!」

「アイ! 早く早く!!」

「ごめんごめん。で、三回戦の相手はどんな相手になつたの?」

A4サイズに縮小されたトーナメント表を見ながらナナは言う。

「意外よ。実はね……」

「あーっはっはっは!! まさかこんな早くアンタ達に当たるなんて好都合だわ!! これもコナミの日頃の行いがいい所為ね!!」

「その声、コドモ部長!!」

とっさのナナの発言、それに言われた対象は激昂する。

「何度言つたら分かるのよーっ!! コナミはコドモじゃなくてコナミよ!!」

納得いかない応えにわめく少女。身長135cmのツーサイドアツプ、模型部部长兼マスコット『ウミノ・コナミ(海野小奈美)』だ。

「部長さん? じゃあ次の相手は模型部?」とアイは予想。

「そういうこつた。次に当たるのは俺達つてわけだぜー」

「よろしくー」

ひよこつと便乗する形で答えるのは額の広い少年「ヤマモト・コウ

ヤ(山元孝也)「そして片目の隠れた少年「カワサキ・ナガレ(川崎流)」
どちらも模型部所属だ。

「まさかあなた達とも当たる事になるとはね。結構昔の仲間とよく当
たるなあ」とアイ。

「ま、こつちとしてはラッキーだぜ。コンドウさんもいなくなつち
まったけど、今じゃお前らのチームを倒すのが俺達の今の目標さ」

「随分と自信あるじゃない？アイやアタシ達と戦うつてのに」

「無謀じゃない位には自信はあるさ」とナガレ

「ま、次の試合はコナミが勝つて見せるわ！ここら一帯では最強のビ
ルダーであるアンタに勝てば県内予選は勝つたも同然ね！コナミ達
をその辺のヘボビルダーと一緒にしない事ね!!」

コナミはいつもの様に自信満々でアイ達につつかかる。しかし言
い方が悪かった。そこへコナミに突つかかる別のビルダーがいた。

「おやおやおやく？寝ぼけた事言ってくれてるじゃないですかあゝ
☆」

染めた金髪ショートの長身の身体、甘ロリファッションに身を包ん
だ目隠れ系少女、白く塗ったドムトルーパーに乗ったビルダー『ゴウ
セツ・ユキ(豪説由紀)』だった。

「ハジメさん達をやつつけるのはユキ達『ゴレム兵団』ですよお」
「あれ？ユキ？あんたとも当たるっけ？」

「んも〜ハジメさん☆トーナメント表をよく見て下さいよお。ユキ達
とはその模型部さん達の次、Aブロック準決勝で当たりますよ〜！」

ユキの言った通りナナはトーナメント表をチェック。「あ、本当だ」
と声に出す。見ると確かに模型部に勝った次はユキ達と当たる様だ。
「ちよつと！何勝手な事言ってるのよ!!アイ達を倒すのはコナミ達よ
！」

コナミは自分達が負ける様な発言をしたユキに食って掛かった。
身長差は対照的だった。

「フフン。役者が違うんですよお☆見てましたよお、あなた達の試合。
確かにチームメイトのその男の子二人はなかなかの実力のビル
ダーさんみたいですがあ、あなたは地味に機雷ばら撒いたりと役割が

地味じゃないですかあ☆」

「な！何言ってるのよ!!そりゃコナミはもつと前面に出て活躍はしたいけど!!」

「聞けば元々後先考えない戦い方で墓穴掘る事も多いらしいじゃないですかあ☆リーダーがそれじゃたかが知れてますよお☆」

「ちよつと君、言いたい事は分かるけど言い方がひどくないか?もうちよつとオブラートに……」

ちよつと言い方がきつい。ナガレとコウヤがユキに言おうとするが……。

「何よ!!そんな痛い格好してるアンタに言われたかないわよ!!やっつて恥ずかしくないの?!」

「ああ?!」

ギロツとユキの前髪の間から除く目がコナミを睨む。どこぞの井戸の中の幽霊よろしく、凄まじく凄味のある瞳だ。コナミはビクツと震えると慌ててコウヤの後ろに隠れた。

「……ねえ、ナナちゃん。あの人、変わってるね」

「あーそういえばアイツと会うの初めてだっけアイ」

その後ろでアイとナナは小声でユキへの感想を話す。ユキは本来、アイ達のいる地域のビルダーではない。以前ナナとタイムマンで挑戦してきたが、それはアイには実力的に敵わないと判断したが故の行爲だった。(第22話参照) その時も自分の悪口を言われた際に荒い口調になっていた。沸点の低い腹黒娘なのだ。

「うふふふ☆度胸もない。これじゃユキ達がハジメさん達と戦うのは目に見えてますねえ」

怖がるコナミを見ながら、満悦なユキ、その時、彼女の後ろで二人の人影が現れる。

「言いたい事は言い終わったか?この愚昧」

「見てたぞ。あちらさんに落ち度はなかったらうが」

後ろからの声に突如ユキの顔は青ざめる。後ろにいたのは坊主頭のコンドウに負けない体型の大男、もう一人は頭にバンダナを巻いた高身長かつ長髪の青年。どちらもガラがいいとは正直言い切れない。

そんな第一印象とは裏腹に、男二人揃ってユキの頭を掴んで強制的に謝らせた。

「うおおお!!痛い痛い!ごめんなさい兄ちゃん!!」

ユキが兄と呼んだ2人、どうやら彼女は二人には頭が上がらないらしい。

「あ、いえ、こちらこそ、元々はうちの部長の失言もありましたし」

ナガレが相手に気圧されながら答える。

「あはは。どうやらどっちも苦労してる紅一点がいるようで」

コウヤは空気を読まずに発言。ナガレは「バカ!空気読め!」と目くばせする。しかしコウヤの発言はユキの兄達にとって受けたらしく「違うない!ハハハ!」と大笑いしていた。

「……なんか前もこんな流れだった様な」

アイはマツオと戦った時を、副部長を思い出しながら呟いた。どういうわけか大会では相手のビルダーには頭の上がない仲間が必ずいるな。とアイは思う。

「何故だか知らないけど大会で会った相手皆なんか逆らえない人が必ずいるわよねー。なんつーかわンパターン」とナナが続く。

「と、どちらかに当たるとなると、自己紹介はしとかなきゃな。俺はユキの兄、ヒョウ(平)」アイとナナの会話にも気づかず坊主頭の大男が名乗る。

「俺は長男のコウセツ(高説)」続けて長髪の男が名乗る。

「どっちが勝ちあがっても全力で相手をさせてもらうぜ!」と言って、今日は準々決勝、つまり第三回戦までで、準決勝は来週なんだけどな」とヒョウ

「まあとにかく、お互いいい試合にしようや!ほら俺達も試合に行くぜ!ユキ!」

コウセツはユキの首根っこを掴んだままズルズル引きずっていった。これまた「前とおんなじだなあ」とナナはしみじみ思っていた。

「……とまあ、ごちゃごちゃしちゃったけど!お前ら倒すのは俺達だって事だ!」

「いい試合にしよう!」

「あ！時間！早く着替えななきゃ!!」

と、もうすぐ試合だ。アイは慌てて更衣室に入っていった。
「……」

未だコウヤの後ろでただ一人ダンマリを決め込むコナミ。が、口を開く。小声でコウヤとナガレに話しかけた。

「ねえ、コウヤ、ナガレ、次の試合もコナミが出ていいの？」

打って変わって珍しく弱気だ。

「？何言ってるんですか部長」

「だって、相手はアイよ。正直コナミよりうまい人はたくさんいるじゃない。今更コナミが出たって……」

「何言ってるんですか部長、部長らしくない。もっと自分に自信持つてく
ださいよ」

「それに、今回が部長の最後の見せ場じゃないですか。部長が出る事は皆承諾してるんだ」

そう、今回の大会で三年生のコナミは引退する。コナミは部長という立場とはいえ、自分が試合に出ていいのかと考えていた。臆病な上、自分の実力の無さは自覚していたからだ。

「お情けで出ろって事？」

「そうじゃないですよ。ちゃんと理由はあります」

「何よ」

と、その時、パイロットスーツを着たアイが更衣室から出てきた。

「お待たせ！行くよ皆!!」

そう言ってアイはナナ達と試合会場へ向かう。コウヤ達も「おっと俺達も急ぐぜ！」と後に続いた。

「ちよつとー！さっきの答えは?!」

コナミは後を追いかけてながら叫んだ。

そうして今日最後の試合が始まった。フィールドは廃墟になった大都会『ニューヤーク市』。ボロボロになった建築物とガレキの山だ。

「前にアンタがヤマモトと戦った時と同じフィールドね」

「うん。ただ違いは天気かな？」

第二話でコウヤとアイが戦った場所だ。前回同様アイは半壊したドーム野球場に隠された母艦、ホワイトベースから発進する。今回の僚機はツチャとヒロだ。道路に降り立ったアイが上空を見上げながらさっきの台詞を呟いた。前は曇りの天気だったが、今回の天候は晴れた夜になっていた。空に浮かぶ満月が綺麗だ。

「前にも戦った場所だけど、どこから攻めてくるかわからない。気を付けて皆」

「っ！さっそく来たみたいだぜ!!」

ヒロの叫びと同時に全員のGポッドに警告音が走る。上空から針状のミサイルが幾重にも弾幕となって飛んできた。

「ミサイルっ！数が多い」

「でもあんなに密集して!!簡単に誘爆できるわね!!」

ナナは両腕を向けると備え付けられたバルカンを発射、一発当たったミサイルは簡単に誘爆する。しかし次の瞬間。黄色の煙が『ぶわっ!!』と広がった。瞬く間に誘爆したミサイルは次々と煙幕をまき散らす。アイ達の周りは煙幕に覆われた。

「っ！何これ!!」

「煙幕か?!くそっ！すぐ上空に上がらなきゃ!!」

直後、アイ達のいる地点の煙幕を突き破りながら大型ビームが撃ち込まれる。すんでの所でアイ達は回避、煙幕の突き破った部分から撃ったであろう敵を見る。見えたのは『機動戦士ガンダム』に登場したゴッグという機体だ。背中に『ガンダムOO』のラファエルガンダムという機体のビームキャノンを背負い。両足の外側にビルダーズパーツのホバーユニットが取り付けられていた。元々鈍重な機体をスムーズに動かす為の改造とアイ達は考えた。しかし考えていても動かなければどうにもならない。真上に煙幕から飛び出すアイ達、しかし……、

「もらったああ!!」

「っ!!」

コウヤの声が響く、コウヤのアメイジングレジェンドガンダムがヒロのウイングガンダムノヴァにヒートナタで斬りかかってきたのだ。

「チツ!!」

ビームサーベルでナタを受けるヒロ。鏢迫り合いになる二機。そこを目がけてナガレのゴッグはさっきのビームキャノンでノヴァとレジエンドに撃ってくる。当たる直前にコウヤは離れる。ヒロも急いで離れる。二機がいた所を大型のビームが通り過ぎた。

「ノヴァの機動力じゃなかったら危なかったな……!」

「安心するのはまだ早いぜ!!」

またも斬りかかってくるコウヤのレジエンド、しかし何度も同じ手に引っ掛かるアイ達ではない。ツチャのアッシマーはコウヤのレジエンドに飛び、アイとナナはナガレのゴッグへバスターライフルを最大出力で撃った。コウヤもナガレもすぐさま後退、二機とも軽快に動けるように改造してある。そしてまたもさっきと同様に針状ミサイルが飛んでくる。

「ラチがあかんぜ!!」

「なら僕に任せろ!!皆は僕の真下にいてくれ!!」

ヒロはそう叫ぶとツインバスターライフルを分割し、ノヴァを上空に飛び上がらせる。左右にバスターライフルを一丁ずつ持つと最大出力で発射。そして撃ちながらぐるぐると回転。ビームはミサイルと建築物を巻き込み破壊、蒸発させる。発したビームの光は凄まじい。撃ち終わると周囲の建築物はほとんど消滅、上空にはバスターライフルをかわしたであろうコウヤのレジエンド、むき出しになった遠くの地面にはナガレのゴッグが見えた。

「見つけた!!」

アイはそう言うと、ナガレのゴッグにAGE-3Eを突撃させる。「させるか!」とコウヤはアイを阻止すべくレジエンドを向かわせる。しかしツチャのアッシマー・デコレーションがコウヤに斬りかかる。コウヤもヒートナタでアッシマーに対応するしかなかった。

「覚悟っ!!」

身構えるゴッグにGNソードを振り下ろすアイ、しかし次の瞬間、紅い機体が二機の間を割って入った。GNソードをライフルの先に

取り付けられたビームサーベルで受け止める。

「ジンクス?!」

アイが叫ぶ、『ガンダムOO』に登場した敵の量産型ガンダム『ジンクス（GN-X）』だ。メテオホッパーに乗り、本体にもヴァリユアブルポッドの武装が追加されており、その姿は古代の馬を用いた戦車『チャリオット』に乗った騎士の様だった。

「部長!!ジンクスチャリオットで姿を出さないでって言ったじゃないですか!!こういう時は機雷を撒けて!!」

「無駄よ!!どうせやったってこいつらには通用しないわ!!ここで数で押し切った方が!!」

ジンクスから黄色い叫びが聞こえた。これに乗っているのはコナミ部長だ。

「部長さんの機体ですか!ならここで倒す!!」

「簡単にいくと思わないでよ!!」

そういうやコナミのジンクスはシールドをAGE-3Eに向ける。攻撃が来ると判断したアイはすぐさま後退、シールドの中心部からビームサーベルが発生し、さっきAGE-3Eがいたところを切り裂いた。

「くっ!!コウヤ!部長が見つかった!!援護に来てくれ!!」

「ちよつと待てよ!こつちも精一杯だ!!」

ナガレはコウヤを呼び戻すべく通信を入れる。しかし今のコウヤはアツシマーとノヴァの二機と戦っていて援護にいけない。コウヤは右手にリボルバー、左手にナタを持ち二機と応戦していた。

「弱気な発言だけど!俺達と膠着する実力とは!!」

ツチャはコウヤの実力に感心する。押しではいるがそれは二対一だからだ。タイマンなら自分と互角の実力だ。直感ではあるが、ヒロもツチャもコウヤに対してかなりの潜在能力を感じていた。

「肝試しん時は狭かったし、コイツの実力を発揮しきれなかったですからね!!広けりゃこつちのもんだ!!」

「強くなったな!ならこつちも短期で決める!!」

そう言うのとツチャのアッシマーは分離、そしてヒロとの連携でレジエンドを倒そうとする。しかし変形の瞬間、コウヤは左手のナタをアッシマーの背中、ライトニングバックウエポンに投げつけた。アッシマーデコレーションは支援機との連携で真価を発揮する。しかしアッシマーは変形しなければ空を飛べない。空中戦の連携は変形しなければ出来ないのだ。ナタは変形中のバックウエポンの機首（シールドとの合体はまだしてない）に突き刺さる。

「何ー」

「やらせるかッ!!」

ヒロはコウヤを阻止しようとビームサーベルで斬りかかる。それと同時にリボルバーの追い打ちを阻止しようと、ウィングノヴァの首の襟部が開く。マシンキャノンだ。それをレジエンドのマニピュレーター目がけて撃ちこんだ。しかし察知していたレジエンドは腰のバーニアを前面に回しふかす。マシンキャノンが届く前にレジエンドは後退、そして下がりながら両手にリボルバーを構えライトニングバックウエポンに撃ちまくった。

「駄目押しだぜ!!」

コウヤがそう言った直後、弾丸を受けまくったバックウエポンは爆発、その隙についてレジエンドは仰向けのままバーニアを最大出力でふかす。逃がすかとヒロはツインバスターライフルで追い打ちをかけるがレジエンドは驚異的な推力でかわし、部長の元へ向かっていった。

「くそっ！油断したつもりはないのに!!」

「後を追おう!!」

「しかし……半年前と比べて本当に強くなったな。彼は……」

「にやっ!!」

コナミのジnkクスがAGE-3Eの斬撃で地面に叩き付けられた。メテオホッパーも墜落してしまい、ナガレのゴッグももうボロボロだ。

「残念だけど！コウヤ君が来る前に終わらせてもらいます!!」

「……やっぱりコナミじや、駄目なんだ。コナミじや……」

コナミはアイと自分の実力差を感じながら悔し涙を流す。自分は部長なのに……と、

「覚悟!!」

そしてアイはAGE-3EのGNソードを振り降ろす。もう駄目かと思うコナミ、しかし……

「部長うつつ!!」

ナガレのゴッグがコナミのジnkスを突き飛ばした。状況が理解出来ないまま、悲鳴を上げながら転がるコナミのジnkス。

「ううつーな！ナガレ!!」

コナミが気づいた時にはナガレのゴッグはもうGNソードで切り裂かれていた。

「なんで！コナミなんか！」

「本当はサポートに回ったままでいて欲しかったんですけど……こうなったら部長に全てを託したい」

「無理よ!!コナミに期待したってナガレの思うように出来ない！出来っこないよ!!」

「部長……俺達は信じてます。部長はやればできる子です」

そう言った直後、ナガレのゴッグは爆発、すぐ後にコウヤのレジェンドが到着したが、ナガレのゴッグがやられた事は遠くからでも知っていた様だ。

「ナガレ！遅かったのかよ!!」

すぐ後にツチャとヒロも到着、アイ達はコウヤに向かい合う。そしてジnkスを庇う様に構えるコウヤのレジェンド、

「コウヤ……ナガレが……」

「部長、ここは俺が食い止めます。部長はさつき墜落したメテオホッパを回収して万全で迎え撃って下さい」

「何言ってるのよ！無理よ!!コナミの実力じゃ!!2人で戦った方が！」

「俺が向こうを少しでも消耗させた方が確実なんです！」

コウヤの意見、普通ならコナミはその発言に舞い上がりすぐ調子に乗るだろう。しかし今の彼女にとってその台詞は納得できなかった。

「なんでよ……なんでコナミにそんな期待するの？アンタだけじゃない！ナガレも！他の部員も！皆皆!!格好つけてるわけ?!」

「……部長は駄目な奴なんかじゃないですよ。俺達はそれを知ってるから、その理由があるから部長をチームに入れたんですよ」

それを見ていたアイ達はある種、やり辛さを感じていた。しかし止まるわけにはいかず攻撃を仕掛ける。

「なんか、アタシ達が悪者みたいね」

「かといって手加減するわけにはいかないよ!!」

そう言いながらアイ達は射撃で攻撃を仕掛ける。

「俺達皆！部長を信じてますから!!」

そう言うコウヤも三体を迎え撃つべく飛び上がった。たった一機で三機を相手にする。コウヤの実力はコナミも知っていたが結果は完全に見えていた。どんどんコウヤのレジエンドはボロボロになっっていく。

「やめて……やめてよ……」

コナミはもどかしさを感じながらも、ただ茫然とそれを見ていた。しかし心は……魂は……。

「うあつ!!」

程なくしてコウヤのレジエンドは墜落。ブースターもボロボロでもう飛べそうにない。なにより胸部にはアツシマーのトマホークが突き刺さっていた。だがそれを見た瞬間。コナミの中で何か『爆発的に燃え上がった』
「やめろおおおつっつ!!!」

その叫びと共に、ジジクスのライフルの先端部からビームサーベルが発生、ただのビームサーベルではない。ジンクスがすつぽり入ってしまいそうな太さで、出力も並のビームの比ではない。光量もさっきのバスターライフルの比では無い『夜のフィールドが昼に変わる』といえ解りやすいだろうか。三機とも近くに寄っていたアイ達は散開、しかしコナミの豹変に皆驚いていた。

「な！何よ一体!!」

「部長さんの……ガン普拉魂?!!」

「落ち着くんだ!!長さはそれ程じゃない!距離をとりながらなら!!」

そう言うツチャを尻目にコナミはビームサーベルを振るう。次の瞬間、出力はそのままにビームサーベルの長さが一瞬で伸びる。フィールドの端から端まで届く長さだ。不意を突かれたツチャのアッシマーは真つ二つにされ爆散。

「なっ!!うわああっ!!」

撃墜されるツチャを遠目に見ながらコウヤはガッツポーズを取っていた。

「よっしや!!さすがだぜ部長!!」

コウヤ達が部長に期待していたのはこれだった。実はコナミ部長のガン普拉魂は凄まじい爆発力がある。これがコウヤ達にとつての切り札だった。しかしいつでも出せる物でもない。これは部長が本気でやる気にならなければ出来ない事だ。すぐに逃げ腰になったり、他人の成果を奪おうとする部長では出すに出せない。しかもその爆発力を自覚させてはすぐに調子に乗るのは見えていた。だからコウヤ達はこの事を部長に言わないでいた。

「俺は……までですけど、後は……頼みます……」

勝利の手ごたえを感じながらコウヤのレジェンドは爆発した。

「メテオホッパーツツ!!」

コナミが叫ぶと離れ離れになった支援機が再びコナミのジンクスに戻ってきた。ジンクスはそれに乗るとアイとヒロに襲い掛かる。

「っ!攻撃力は凄くても守りは変わってない筈だ!!攻め方次第なら!!アイちゃん!連携を!!」

ヒロはそう言うとうAG E-3Eとの連携の高速戦闘でジンクスを翻弄しようとする、しかし、

「おっそいのよ!!バーカ!!」

メテオホッパーと合体したジンクスの機動力はウイングのバード形態に匹敵する(元々メテオホッパーはウイングガンダムフェニー

チエの支援機だからだ。ウイングの後ろに回り込んだジンクスはウイングノヴァを背中から袈裟懸けに切り裂いた。

「うおわっ!!」

とつさに回避した為直撃は避けられた様だ。しかし背中をかすめただけとはいえ出力が違う。翼をごっそり失ったノヴァは墜落していった。

「ヒロさんっ!!」

「次はアンタよ!!アイイイ!!」

「っ!!」

コナミはそのままアイのAGE-3Eに襲い掛かる。だがアイとナナも思わぬ強敵に魂が震える。それに伴いGNソードIIもライザーソードの形態となり、二機はぶつかり合った。いきり立ったビームのぶつかり合いはさつき以上の光量を生み出す。

「なんてパワーよ!!アタシら二人のガンプラ魂付きのライザーソードを正面から受け止めるなんて!!」

「こんな凄まじい力を持つてたんだね!部長!!」

「負けられないのよ!!コナミは!!部長さんなんだからああっっ!!!!」

受けながらアイは自分が勝てるかどうか考える。これだけのブーストだ。エネルギーの消費は激しいからもう少し時間が経てばジンクスはエネルギー切れになるだろう。しかし今は支援機のメテオホッパーと合体している。メテオホッパーの左右のバインダーにはエネルギーカートリッジがついておりエネルギー切れはまだ期待出来ないだろう。どうするかとアイは考える。

その時だった。下からのビームの射撃がメテオホッパーのカートリッジをバインダーごと貫いた。下を見ると分割したツインバスターライフルを持ったウイングガンダムノヴァが見えた。撃つたのはノヴァだった。

「ヒロさん!!」

「とどめを刺さなかったのは失敗だったな!!」

その一撃でコナミのメテオホッパーはバランスを崩す。だがバランスを崩しながらもアイに一撃加えようとコナミはビームサーベル

をAGE―3E目がけて振るった。ライザーソードを構えるアイ、しかしその直前、ジnkスのライフルは砕け散った。過負荷だ。それと同時にビームサーベルも失う。

「ライフルが壊れた?!」

「負担が大きすぎたんだよ!!」

「そんな……さっきの横やりがなくなっただってコナミは負けてたって事じゃない……う……うわあああああん!」

コナミは自分の惨めさに泣いていた。そのままコナミのジnkスは爆散、第三回戦もアイ達の勝利となった。

試合が終わっても、なかなかコナミはGポッドから出てこなかった。心配したコウヤ達模型部はコナミのGポッドの前に集まる。アイ達三人も一緒だ。

「あ、出てきた」

暫くしてコナミが出てくる。ずっと泣いていたのだろう。涙の跡で目が真っ赤だった。

「……粹がった拳句があのだザマよ。やっぱりコナミは出来の悪いバカってわけね……」

ささくれた言い方で自虐するコナミ。自分を嫌悪していたのは目に見えていた。しかしコナミの様に彼女を見てる人達は部員もアイ達も含め、一人もいなかった。

「そんな事ないですよ部長。立派でした」

「そうだけ。なにせ今日一番ヤタテ達を苦戦させたの部長なんだからな!」

「あなたの様な部長がいる事は俺達の誇りです」

「マスコットとしても優秀だ!」

「萌えっつ」

気休めじゃないのはコナミも理解できた。しかし素直に喜べない。

「な!何よ!そんな事言われたってコナミは騙されないわよ!!」

「よっしや!じゃあ行動で示そうぜ!優勝まで取っておきたかったけど!部長を胴上げだあ!!」

「はあ?!あんた何言ってる!!ちよつとお!!」

コウヤの掛け声と共にコナミを持ち上げ胴上げし始める模型部員達

「ちよつと!!どこ触ってるのよセクハラあ!!」

「大丈夫つす部長、模型部にロリコンはいないツスから」

「何言ってるのよ!!コナミは大人の女……やめ……やめ……やめて……きやははは!!やめてよー」

胴上げされながら、コナミは次第にはしやぎながら嬉し涙を流していた。それは形ある実績ではないが、彼女の心にとって大きな勲章となっていた。

「……コドモって言うの、返上かな」

ナナが穏やかな笑顔で呟く。アイ達もコナミの笑顔を穏やかな顔で見ている。

「あーヤタテさん!!大変っス!!」

しかしそんな穏やかな時間は突如壊される事となる。ソウイチが血相を変えてアイ達に話しかけてきた。

「どうしたのソウイチ君?そんな慌てて」

「さっきのゴウセツ三兄妹、負けたっス!!!」

第46話『ジェットストリームアタック』（ドムトルーパー三人衆登場）

「ユキ!!」

場所は女子更衣室前の廊下、うなだれながらベンチに座った目隠れの少女『ゴウセツ・ユキ』。ナナは、いの一番に彼女に駆け寄った。

「は、ハジメ……」

弱々しくナナに返事をするユキ、彼女の格好はパイロットスーツのまま、負けたショックからか着替える気力もまだ沸かないのだろう。「破られた……兄ちゃん達が……ウチらのジェットストリームアタックが」

いつもは猫を被ったキャラで通してるユキだが、この時はショックが大きいのか素の状態だった。

「……ユキ、そんなあからさまにひきずるな」

女子更衣室の隣、男子更衣室から出てきた青年、彼女の兄であるコウセツが妹を慰める。彼は既に着替えは済んでいた。と、しかしユキ達を破った面々の顔はまだ知らない。アイはユキ達を破ったビルダーがどんな人物達なのか気になった。

「相手のチームは……『グラン・ギニョール』ってチームでしたね。どんなチームだったんですか？」とトーナメント表を見ながらアイが問いかける。

「それは……」

「私達を探してるってわけ？ 『女王』様？」

コウセツが応えようとした時、更衣室から三人の少女ビルダーが現れた。それを見てアイ達は言葉が出なかった。

——な……何だあの格好は——

アイの隣、ツチャが思わずそう言いそうになる。が『失礼な発言』と自分で判断し言葉を飲み込んだ。相手は三人とも女子だった。薄化粧をしているが年齢は恐らく10代後半、しかしそれぞれの服装が特殊すぎた。リーダーらしき少女は振袖の様な恰好をしているが着物を

着ているわけではない。右眼には眼帯、衣装にもフリルにコルセットが目立つ。

「何アレ？着物？」

「…和ゴシック、和ゴスか和ロリって奴さね。ゴシックアンドロリータの一種」と意気消沈していたユキが答える。

「ゴシックアンドロリータ？」

「知らねえ奴ならゴスロリって呼べば解りやすいか？」

「ああ！」とナナは納得の声を上げた。和ゴスの左右にいる2人も妙な格好だった。一人はバンドで使われそうなゴシック衣装だが、アークセサリーであろう骸骨やロザリオが目立つ。『パンクロリイタ』という奴だ。そしてもう一人はチャイナドレスを連想させるロリイタ服『チャイナロリ』を着ていた小柄な少女だ。ちなみにどちらも服装はユキの解説だ。

「……よく知ってますねユキさん」とアイ

「ウチもいつもは甘ロリの格好だから」

彼女も普段着はピンクのロリータファッションだ。だからそれ位は知っていた。と、アイの前に和ロリの少女はつかつかと歩いてくる。かなり真に迫った表情だ。アイの前に立つなりこう言った。

「こつちが話しかけたのにシカトとは随分じゃない『女王』」

「え？女王？誰が」誰に言われたのか理解できず辺りを見回すアイ、だが和ゴスの少女は強い口調で言う。

「何を言っているの？ヤタテ・アイ、お前が模型店『ダハールのピラミッド』では女王とうたわれたトップのビルダーなのは知っているわ」

なおも理解出来ないといったアイ、だがナナ達は『あれか……』と思いついて出していた。以前アイは模型店『ダハールのピラミッド』において挑戦者からガンプラバトルを挑まれる。しかしその時ある事情でアイは対戦相手の股間をゴッドフィンガーでヒートエンドしてしまい、相手の心に大きな傷をつけた。その容赦のなさからアイは『女暴君』や『女王』と呼ばれていたのだった。(第24話参照)

「そりゃ別の模型店で戦った経験はあるけど、そんな通り名がついた

覚えなんて……」

「自分の通り名すら把握して無いというの？ バトルはなかなかやるみたいだけど。正直気位はそれほどではないと言うことかしら？」

失望したかの様に吐き捨てる和ゴスの少女、アイ個人に対して思う所があるのか言い方が刺々しい。

「……年上の割には礼儀がなっていないっスね。初対面でやる態度と言葉っスか？」

ソウイチがアイの前に躍り出る。

「子供ね。私は相手と馴れ合う為にガン普拉バトルをやってるわけじゃないの」

「そういう態度や考えは随分と大人げないんじゃないスか？ そういう余裕の無さ、みつともないっス」

「ブン……どの分野も舐められたら終わりなのよ。トップに立つのに必要なのは他人を引っ張っていく強さとカリスマ性。といっても子供じゃ解らないでしょうね」

ソウイチの眉間の皺が更に深くなる。自分も勝つ結果には執着がある。だがそれでこんな態度を取っていいとは思わなかった。……以前自分が似た様な態度を取っていた経験からか。

「女王と呼ばれるくらいならそれ位持つてると思ってたのに、別にそんな事はなかったわね。こんなのにあの人が目をつけていたなんて……」

苦虫を噛み潰した様な顔をする和ゴスの少女。「あの人？」とアイ達が疑問に思うも。少女は話すのをやめない。

「まあいい。次にお前達と当たるのは私達よ。倒すには変わらないから首を洗って待つていることね」

そう言う少女は踵を返し会場から去って行った。チームメイトの二人はアイ達におじぎをする彼女に続いて去って行った。和ゴスの少女とは対照的に丁寧だった。

「次はあの色物集団と戦うわけ？ 随分と失礼な奴らじゃない」

「だが、奴らの実力は見かけからは想像できん。俺達のジェットストリームアタックを打ち破り、それぞれ一対一の勝負になったが誰一人

勝てなかった」とヒョウ。続いてコウセツが口を開く。

「そこでだ。ヤタテさん、俺達は君達に勝ってもらいてえ。幸い試合は来週だ。明日是非俺達と特訓のバトルをしてくれねえか？」

「ナナ、正直ウチらもリベンジしてえが、負けた以上それは無理だ。だからアンタ達に託したい」

ユキもナナに向かい胸中を吐く。断る理由は無い。アイ達はそれを了承。翌日にガリア大陸でまた会おうと約束をするのだった。

そして翌日……模型店『ガリア大陸』にてビルダー達は集う。指定した時間にユキ達はくるも、アイ達の姿は未だ見えない。

「おやおやく？ナナちゃん達はまだ来てないんですかあ？」

いつもの猫を被ったユキが二階のガンプラバトルのスペースを見回す。と、二階が上がってきた兄のヒョウがユキに指摘する。

「いや、下の階の工作室を見てみろよ」

ヒョウが一階店の奥に案内する。工作室の中でアイ達はやいのやいのと話し合ってるのが見えた。

「何やってるんですかあ？」

「あ、ユキちゃん。次の準決勝でどの機体で挑むか話し合ってるね」
テーブルの上にはHGのAGE-3フォートレスとオービタルが置いてあるのが見えた。特別手は加えられておらず、これから改造をするつもりなのだろう。

「ありや、次の機体は乗り換えですかあアイちゃん」

「ウエアを変えるつもりだよ。それに伴ってサブのビルダーも変えるつもりだよ」

「次はフォートレスで行きたいんで俺が乗るっすよ。あの女、なんか気に入らないっすからね、準決勝は俺がヤタテさんと出ます」とアイに続いてソウイチが言う。

「まあ最もまだ改造案もいまいちだから次のバトルで色々参考にしたいんだけどね」

「リベンジも兼ねたバトルのつもりでしたが、まあいいですう。準備

出来次第バトル開始といきましょ☆」

昨日の敗北は立ち直ったらしい。片腕上げて笑顔のユキ、

「それだったらいつでもいいよ。よろしくね」

快く応じるアイ、このままバトルに直行かと思いきや、コウセツが口を開けた。

「それなら、ハジメは次のバトルはアイの僚機で出るのか？」

いきなりコウセツがナナに話を振る。予期してなかったナナは「へ？アタシ？」と素っ頓狂な声をあげた。

「ハジメ、お前は聞けば、かのサツマからライバル視されると聞いたぜ。サツマといえば地区の中でも有数のビルダーだ。お前さんに負けてから彼女は散り散りになっていたチームを再結成し、修行し今地区予選では快進撃らしいぜ」

「イモエの奴が？」

サツマというのは以前ナナが倒したビルダー『サツマ・イモエ』（薩摩妹江）の事だ。プライドの高い実力者であり、アイとの連携とはいえ自身を倒したナナに対して執着を見せていた。コウセツはその件において何故ナナに執着しているかが気になっていたわけだ。

「そのサツマの奴が執着するお前の実力、見てみたい」

「あー、お手柔らかに、そんな期待するもんじゃないですよ……」

自身なさげにナナは答えた。

——何でアタシなわけ！イモエ！——

謙虚な言葉の裏で、そうナナは心の中でサツマに対して毒づいた。

そしてバトルが始まる。今回のバトルは晴れた洋上でのバトルとなる。母艦は空母、綺麗な水平線と太陽照り付ける中でアイ達は出撃する。ナナのフリーダム・アルクスとツチャのアツシマー・デコレーションが青空を舞う中、アイとソウイチのAGE-3フォートレスは飛ばずに水面に着地する。フォートレスはホバーと両肩、両腕に搭載された4門の大型ビームキャノン『シグマシスキャノン』が特徴の機体だ。今のAGE-3は水面に浮いている。

「飛ぶのは慣れてるけど、浮いてるのはどうも変な気分だね」

「まあホバー機は限られてるっすからね。それよりあの三兄妹の戦い方、俺見てましたけど手の内言わなくてもいいんすか？」

「まずは初見でどれだけ気付けるか試してみたいんだ。来るよー」

そう言うや否や、一機こちらに迫ってくるのが見えた。『ガンダム Seed Destiny』で登場した『ドムトルーパー』という機体だ。白く塗装され、背中にケルベロスウィザードという装備をしているユキ専用機だ。こちらもホバーで浮いており、ドムの走る後はドム以上の大きさの水柱がたっている。

「お久しぶりですうー！『ドムトルーパー・スノーマン』ですよお!!」

「白いつて事はユキ専用機か！一機で来るんならアタシが！」

ナナのフリーダムが全射撃武器を展開、ハイマツトフルバーストだ。全てをユキの白ドムとその周辺目がけて発射。回避地点を考慮した上で撃ったビームは白ドムに向かう。が本体へのビームはビームシールドで防御、周りに当たったビームは幾つもの水柱を上げる。白ドムは臆さず、ナナの射撃を見抜いてるかの様な動きで水柱をかわす。器用にビームの間を縫う動きだ。

「ちよつとは腕を上げた様ですけどお!!ユキ達はそれ以上上げてるんですよお!!」

そう返しながら白ドムはバズーカで迎撃してくる。ビームと実弾の併用だ。ナナもそれをかわしビームライフルを向ける。

「っーハジメさん！一人に気を取られないで!!」

叫ぶソウイチ。その時だった。水中から一発の砲弾が空のフリーダム目がけて飛んでくる。

「っーいけない！ナナちゃん!!」

気づいたアイはフォートレスの右袖部のシグマシスキャノンで砲弾を迎撃、一門でもビームバズーカ並の出力だ。ビームに飲まれた砲弾は大爆発を起こす。眼下で起こった爆発にナナは一瞬気を取られる。

「気を取られましたねえ!!」

ユキはバズーカを撃ち続ける。

「強気ね！でもドムは飛べないんでしょ!!」

ナナは相手は飛べないと知っていた為、距離を置きながら対応しようとして両手の重火器を向ける。

「距離を取るか。いい判断だ！だが基本だな!!」

直後、白ドムの背後からもう一機の機体が現れる。巨大なハルバードを持った茶色い砂漠仕様のドムトルーパーだった。白ドムの後ろにピツタリついていた為、派手な水しぶきで隠していたのだ。この為わざと白ドムは水しぶきを大袈裟に起こしていた。茶ドムは白ドムを踏み台にするとフリーダム目がけて大ジャンプ。

「妹を踏み台にしたあ!？」

「括目しろ!!これが俺の『ドムトルーパー・サンドマン』だあ!!!」

驚愕するナナ、ビームサーベルで対応しようとするも、それより早く茶ドムはフリーダムにハルバードを振り降ろそうとする。

「させるかよっ!!」

ツチャのアッシマーがフリーダムの前に割って入り、トマホークでハルバードを受け止める。鏢迫り合いになり茶ドムはアッシマーを海に落とそうと全バーニアをふかす。膠着状態となる二機、その時、フリーダムとアッシマーの二機を目がけて水中からミサイルが飛んでくる。

「おっとー!」

ツチャはアッシマーの背部コンテナからマイクロミサイルを発射、ミサイルは海面からのミサイルに向かいミサイル同士で誘爆。すぐさまアイ達はいぶりだすべく、敵が撃ってきた水中ヘビームキャノンを撃ち込んだ。起こる爆発の水柱。

「ハハッ！やはりそう簡単にはいかねえか!!」

そこから三機目の機体が飛び出てきた。長男コウセツの声が機体から聞こえた。

「緑のドムトルーパー!？」

アイが叫んだ。ミサイルポッドと実弾のキャノン砲を背中に装備した、密林仕様の緑色に塗られたドムトルーパーだった。緑ドムは脚

部のホバーを作動させる。水面を波打たせつつ、緑ドムが水面に立つ。すかさず白ドムと一緒に撃ちながら後退、緑のドムトルーパーはかなりの重武装だったが、ホバーの所為かかなり軽快に動く。

「ツチャさんから離れてよ！」

ツチャの援護をすべくナナのフリーダムはビームライフルを鏝迫り合い中の茶ドムに向ける。しかし撃とうとした直前にフリーダムとアツシマーに緑ドムの射撃が迫る。とっさにシールドで防御するナナとツチャの機体、その隙について茶ドムも後退、三機とも色違いのドムトルーパー。それがユキ達ゴウセツ三兄妹の機体だった。

「ドムトルーパーが三体か！」

「その通り!!これが俺の『ドムトルーパー・ウッドゴレム』!!」

『そして!!三人揃ってチーム!!ゴレム兵団!!』

名乗り終わるとすぐさまドムトルーパーはアイ達に撃ってくる。アイ達は攻撃を避けながら重火器を撃ち続ける。しかし三体ともビームシールドで射撃を防御、そのうちドムトルーパーはチーム同士、三機との間隔を狭ませる。縦一列に並ぼうとしているのだ。それを見たソウイチは焦り出す。

「いけない!奴らを一列にしちやいけないっス!!」

「え?!」

しかしすぐにドムトルーパーは縦一列に並ぶ。前からヒョウ、コウセツ、ユキの順だ。

「二対一ではやっぱ苦戦するよなあ!だがこれ位は出来て当たり前だぜ!ここからがテストの本命!いくぜ!ヒョウ!!ユキ!!」

「は☆い☆」

「いつでもOKだ!!兄貴!!」

そしてすぐさまアイ達に向かいだした。三機とも腹部の兵装『スクリーミングニンバス』を起動させる。

『ジェットストリームアタック!!』

「っ!!」

スクリーミングニンバスはドムの全身にビームと同属性の攻性防御フィールドを張る装備だ。この装備は三機同時に使う事により数倍の出力を発揮する。その為三機のドムが赤く強く輝きだす。ドム三機はそれぞれの射撃武器をアイ達に撃ちまくってくる。

「そろそろそろあつ!!」

三機共武装は元々豊富な上に、更に追加されてる、距離が離れていても容赦がない。

「くっ！考えなしに撃ってきて!! 一列に並んでるなら貫通させちやえばいいでしょ!!」

ナナは左腕のロングレンジライフルを展開、発射。アイ達も負けじとそれぞれの火器をジェットストリームアタックに撃ち込む。が、撃った攻撃はビーム実弾問わず全てドム前面のフィールドに碎かれる。

「何よあれ！前戦った時はあんなに強力じゃなかったのに!!」

「三機揃うと更に出力は上がってるんですよお☆」

その直後、ナナのフリーダムにコウセツの緑ドムの180mmキヤノンが当たる。ナナの方はまだ撃ち続けていようとした為回避が遅れたのだ。そのまま落下するフリーダム。

「うわつと!!」

しかし撃墜にはならずフリーダムは海面スレスレで体勢を直す。しかしドムの方はそれを逃がさない。

「フリーダムが落ちた！散開だ!」

フリーダムに反応するかのようにドムトルーパーはそれぞれ散開(燃費の都合上スクリーミングニンバスは解除)、あつという間にフリーダムの周りを囲む。

「ターゲットを中央に固定……やるぜ！マシン展開！フォーメーション 『デルタアタック』!!」

「な！何よ！きやあつ!!」

ドムトルーパー三機はグルグルとフリーダムの周りを円形に回り、一斉に火器をフリーダムに撃ち込む。

「ナナちゃん!!」

グルグルと動きながらドムの攻撃は続く。アイ達はフリーダムを討たせまいとビームを撃ち込みながらフリーダムの元へ急ぐが、ドムトルーパーはそれぞれビームシールドも展開していた。アイとツチヤの射撃は正確な反応で防がれ、集中砲火にさらされたフリーダムはあつという間にボロボロになっていく。

「そんな！飛べない相手にいつ!!」

直後フリーダムは爆発。フリーダムの周りを回っていたドムの間隔は綺麗なトライアングル状になっていた。

——……これがサツマの奴が執着してるというハジメ・ナナか？弱くねえか？——

コウセツはナナの実力に納得がいかないでいた。サツマが執着するにはどうも肩すかしの実力だ。しかしその思案もアイ達の射撃によつて中断せざるを得なくなる。

「ハジメさんが！よくも!!」

ナナの吊いとばかりにツチャとアイの射撃は激しさを増す。対するドムトルーパーはこの場から離れようと三機とも背中合わせとなり、再びグルグル回り出す。ビームシールドと重火器を撃ちまくりながらという防御と攻撃を兼ね備えた体系だった。

「密集体系だ!!離れるぞ!!」コウセツの声に返事で返すヒョウとユキ。そう言いながらアイ達の射撃をかわしながら回ったままの体勢で後退していく。

「くっ……こんなにガードが堅いなんて!!」アイがユキ達の連携に驚きの声を上げる。

「さっきのハジメさんを取り囲んでいたフォーメーション、綺麗な正三角形だった。ああいう攻撃はタイミングがズレれば仲間を撃ちかねないというのに、それだけ彼らの連携が優れているという事か……」

「でも向こうの弾薬だって無限じゃないっす。このまま長期戦に持ち込めば勝機も……」

「……それだったらさ。ちよつと考えがあるんだけど」

「え？もう何か思いついたんすか?!」アイの提案に驚くソウイチ。

一方こちらはコウセツ達の方、ドムトルーパー三機は現在近場の小島、その中の森に隠れていた。

「ユキ、お前の方のエネルギーは」

「六割位ですう……六割位さね」いつもの猫なで声で答えようとするが、兄から何を言われるか解っていたので言い直すユキ、

「俺の方も同じ位だぜ兄貴。このまま順調にいけばエネルギー全部使い切る前に倒せるな」

「どうだろうな。ハジメ・ナナという奴が思ったより弱かったわけだが、正直ヤタテ・アイの実力はあんなもんじゃねえ筈だ。あのサツマも倒したんだからな」

「考えすぎじゃない大兄ちゃん？」

「そうでなければ地元でなく、こっちで選手権にエントリーした甲斐がねえ」

「ま、こっちじゃサツマと戦わないで済むから気楽でいいけどねえ」

と、その時、コウセツの視界にAGE-3フォートレスが入った。こちらを探しているらしくキョロキョロと辺りを見回してる。

「本命が来たな。一人なのは気になるが、頂く!!行くぞー!」

そしてドムトルーパーは三機ともフォートレスを撃墜すべく襲い掛かる。フォートレスは後退しながら両腕のビーム砲を撃つが、いずれのドムトルーパーも軽やかにかわす。そして逃がすまいとあつという間にフリーダムと同じ要領でフォートレスを取り囲んだ。

「飛行できないフォートレスで俺達の前に姿を現すとは愚かだなあ!! デルタアタックだ!」

そう言って全火力をAGE-3に叩き込む。だが着弾の直前だった。フォートレスは分離し真上に逃げる。AGE-3は頭部と背中を構成するコアファイターと残りの部分を構成するウエアに分離する事が出来る。フォートレスでは飛行は出来ないが分離状態なら可能だ。

「な!逃がすな!撃ち続ける!!」

アイの乗ったコアファイター、ソウイチの乗ったウエア『Gホツ

パー』、ドムトルーパー各機はそれぞれを撃ち落とすべく撃ちまくる。しかし二機はぐねぐねとした軌道を描きながら器用に追撃をかわし、真上へと高く、速く飛ぶ。

「ソウイチ君！チャージは?!」

「つい今終わったっス!!」

「よし！AGE—3！再合体!!」

アイの号令と共にコアファイターとGホッパーは再び合体。この状態では飛行が出来ないので落ちるだけ、下でドムトルーパーが武器を掲げこちらが落ちるのを待ってる。が、フォートレスは全てのシグマシスキャノン我真下に向ける。

「っーやべえー！皆離れる!!」フォートレスの様子にコウセツがその場から離れようとする。しかし遅い、フォートレスのシグマシスキャノンはフルチャージで発射。四門の出力をまとめた威力は単体の比では無い。フォートレスの全長の何倍もの大きさのビームが海面に放たれる。ドムトルーパーはシグマシスキャノンをどうにか回避する。しかしシグマシスキャノンは海面に当たり、直後ビームのエネルギーによって気化された海は広範囲にわたって大爆発を起こす。水蒸気爆発だ。ドムトルーパーはシグマシスキャノン自体は回避したものの。爆発によりそれぞれが大きく吹き飛ばされる。

「な！なにっ!!」

「シグマシスキャノンに当たればめっけもんだっただけどね!!」

「コーコンチクショー!!なんとか体勢を立て直してもう一度ジエツトストーリームアタックを!!」口悪く叫ぶユキ、そんな彼女の発言にある男の声が割って入る。

「いやー悪いがおしまいだ!!」ツチャだ。

「っ!!」

直後、ユキとヒョウ、それぞれのドムトルーパーをビームが貫いた。ツチャのアッシマーデコレーションだ。分離して飛行形態となりそれぞれを撃つたのだ。吹き飛ばされてる状態で無防備だったドムトルーパーは簡単に撃ち抜かれた。

「れ、練習したのに——っ!!」

それがユキの断末魔だった。ヒヨウも呆気にとられながら爆散。残りはコウセツの緑ドム一機となった。

「ユキー・ヒヨウ!!っ!？」

兄妹達の名前を叫ぶコウセツ、だが自分の上空に影が見え、上を見ると、シグマシスキャノンを構えたAGE-3フォートレスが降ってきた。フォートレスは袖部のシグマシスキャノンをパンチの容量でドムトルーパーを脳天から殴りつける。フォートレスにはビームサーベルが無い。しかしパワーとシグマシスキャノンの頑丈さは高く、殴りつけるのも得意だった。

シグマシスキャノンは脳天にめり込み。その勢いのままフォートレスはシグマシスキャノンを発射。ゼロ距離で放たれたシグマシスキャノンにドムトルーパーはあつけなく爆散。

「アイ……やっぱ凄いやアンタ」

Gポッドから出てきたナナが観戦モニターでアイの雄姿を見ていた。フォートレスは爆発で起こった水柱の雨に濡れながら、圧倒的な存在感を醸し出していた。コウセツ達『ゴレム兵団』とのバトルはアイ達『I・B』の勝利で幕を閉じた。

「ジェットストリームアタックは三体集まったのフォーメーションでしたからね。攻撃が貫通したら別の機体に誘爆しやすい問題もあります。だから攻撃のタイミングは掴みやすいと考えたんですよ」

「それで真上からシグマシスキャノンを撃ったわけかよ。俺達がかわした事も計算して」

「水蒸気爆発は念の為って感じですよ。あそこまで動きのキレがいいとそりゃ慎重にもなります。ガンダムXでもあった戦法ですよ」

バトルが終わった後、アイ達はどうして自分があの作戦を遂行したかを説明する。

「実を言うとな、俺達があのゴスロリのチームに負けた時も三体で固まっていた所をトラップで襲われたんだ。プラズマ・リーダーって分かるだろ？」

「?ねえアイ、プラズマリーダーって?」ナナが聞き慣れない武装名に

アイに説明を求める。ナナのガンダム作品視聴は幼稚園時代にSEEDを見たつきりだ。

「解りやすく言うとは高圧電流のトラップだよ」

『プラズマ・リーダー』3基の発生器からなる電磁結界発生装置だ。ビームで機体を覆うスクリーミングニンバスも電撃系には意味を成さない。『ヴァル・ヴァロ』という『ガンダム0083』に登場した蟹の様なモビルアーマーのみが装備していた。

——ガンダム作品の知識も薄いのか?——

「あの、コウセツさん。てことは敵はヴァル・ヴァロ?」

ナナの知識のなさに怪訝な表情を見せるコウセツ。以前アイ達と戦い、そしてナナに敗れた実力派ビルダー『サツマ・イモエ』彼女は実力が大きく劣るナナに対して執着を見せている。コウセツはそれが正直言つて今理解出来ないでいた。が、アイの問いかけにコウセツは我に返る。

「ん?あ、いや、積んでいたのはクシャトリアだ。他の機体はギラ・ズールが二機だったな。プラズマ・リーダーを食らった後は散開したんだがそれぞれ一対一で戦ったんだがそれでも勝てなかった」

「トラップを駆使するタイプか。今までにないタイプの相手だけに、かつてない強敵になりそうだね。アイちゃん」

「そうですねヒロさん。それだけに対策やAGE-3の改造をしつかりやっておかないと」

「AGE-3フォートレスの改造機は確かソウイチ君との二人乗りだったな。実際に動かしてみても何か掴めたかい?」

「いやあヒョウさん。一回じゃなんとも、でもパワーはあるけどビームサーベルもないし、シグマシスキャノンもあそこまで強力だと使いづらいつつ。もう何回か戦ってみてビジョンを明確にしたいっすけど」

「うにやあ☆そういうことなら協力しますよお☆まだ時間はあるんですからあ。でも今度こそウチらが勝つからな」悔しさからか、最後だけ口が悪くなるユキであった。

——それにしても……——

一週間後の大会への意気込みが盛り上がる中、コウセツはナナを見る。彼女はアイ達の意気込みから一歩引いた様子だった。自分の実力にアイ程の自信がないのだろう。さっきの負けも影響した行為だった。

——なんでサツマがコイツにこだわってるのかわからん……——

番外編3 「アイの過去回想その2」 ※前より百合っぽいので注意

——嫌なざわつきだ——そうGポッドの中で、ソウイチは焦りと不安に心で愚痴った。

霧の立ち込めるオーストラリアの海岸沿い。AGE-3フォートレスに一人で乗ったソウイチは辺りを警戒しつつ見回す。

ただのフォートレスではない。本来両袖の部分には本来シグマシスキャノンが左右一丁ずつついていたが、ソウイチの乗ってるフォートレスは、ビームサーベルを内蔵したバックラー状のシールドに変えられていた。AGE-3ノーマルの腕だ。

「参ったな。奴らどこにいったんだ」

うまくいかない状況にソウイチは声を出す。対戦相手はユキ達3兄妹のドムトルーパー。今回ソウイチは単独で対戦したいと志願したのだ。向こうから来ないかと思案しているソウイチだったが、Gポッドのアラームが鳴る。望み通り向こうから来たらしい。

「ちっ!!」

霧の影響で、ほとんど周りは見えない。しかも周りは機体を隠せる大きさの岩がゴロゴロしていた。と、左右からドムトルーパーが二機、ビームサーベルで斬りかかってくる。早く気付いたソウイチは両腕のシールドからビームサーベルを発生、

ドムトルーパー二機のビームサーベルを受け止める。ビームの接触のスパークにより一層視界は悪くなった。しかしドムトルーパーはいち早くフォートレスから離れると後退していく。

「っ・舐めるなっ!!」

挑発という解釈をしたソウイチは両肩のシグマシスキャノンを最大出力でドムの逃げた方向に撃つ。本来は四丁だが二丁でもシグマシスキャノンの出力はすさまじい。ビームの濁流は霧を吹き飛ばし、周囲の岩を飲み込みながら射線上の全ての物を蒸発させていった。

「やったか?」

「随分焦ってるじゃないか」

真後ろで声がした。長男コウセツだ。

「っ!？」

ソウイチはすぐさま後方へビームサーベルを振るう。しかしコウセツの乗った緑のドムトルーパーは屈んで回避、すぐさま振り返りながら立ち上がりつつ、AGE-3の腕を掴み、一本背負いの要領で投げる。

「うわっ!!」

予期せぬ投げに綺麗に投げられるソウイチとAGE-3、地面に叩き付けられたAGE-3のコクピットにすかさずビームサーベルが突き刺された。ソウイチのAGE-3は破壊、ソウイチの敗北だ。

「あ、有難うございました。くっそー。イマイチだ……」

模型店ガリア大陸の二階、Gポッドから出たソウイチは戦ってくれたコウセツ達に礼を言いながらも、自分の不甲斐なさにぼやいた。

「余り俺達を舐めない方がいい。一人で俺達全員を相手をしようなんて無茶だ」

コウセツが自信を強く表に出しながら言った。

「くっ！も！もう一回お願いします！」

「アサダー！アンタまた一人でやるつもり?!」

見ていたナナが聞いた。アイ達の特訓が始まってから数日。ソウイチの様子が変わってきた。どうも出来る限り一人で戦おうとする様になってきたのだ。

「皆と協力すれば済む話でしょ。特にアンタは次のバトルはアイと2人乗りじゃない。なんでアイと一緒にやんないのよ」

「解ってますよ。俺一人突っ走ったって意味ないって、でも……ヤタテさんをアテにしすぎるのもなんか違う気がするんす」

「ソウイチ君?」

「確かにヤタテさんの実力は俺達より頭一つ抜きん出てます。でも全国に行ったら今のヤタテさん並のビルダーはゴロゴロでるハズっす。今の俺達の実力で満足してたらきつと足元をすくわれますよ」

そんなソウイチにツチャが話しかける。

「ソウイチ、お前の気持ちは分かるよ。そしてお前と同じ悩みは俺達も持つてる悩みだ」

「だったらー!」

「だからこそだよ。ソウイチ君、今はわざとペースを乱すわけにはいかない。僕達はなんとしてでも全国にいなきやいけない。その為にももつと連携を磨いた方がいいと思う」

今度はヒロだ。全国に行かなければいけない理由と気持ちは彼も強い。だからこそ慎重だった。

「解ってますけど……」

「なあヤタテ、今度はお前が乗ったフォートレスと戦いたい。引き受けてくれるか」

「解りました。ソウイチ君、ちよつとフォートレス貸して」

解りました。とソウイチはフォートレスを貸すとアイはGポッドに向かつていく。

「コンドウさんからチームを受け継いでから、ヤタテさんどんどんそつなくこなしていくっスね……」

「?まあそうだな。とはいえ普段はのほほんとしたままだけどね」

ぼやくソウイチにツチャが続く。

「俺だつて必死に頑張ってるのに……」

ソウイチの言葉にツチャとヒロが疑問を持つ。と、その時だった。
「せんぱーいっつっつ!!!」

突然黄色い声が響いた。「先輩」というここで馴染みのないワードに疑問を持ちながら、全員が声のした方に向く。

「っ!!マコトちゃん?!」

向いたと同時にアイが驚愕の声を上げる。たれ目の女の子が息を切らせながら(と胸を揺らしながら)アイへと走ってきた。そしてアイへとジャンプし抱き着く。

「どわあ!!」

いきなりの乱暴な抱擁にアイは抱き着いた少女ごとその場に倒れた。

「ヤ！ヤタテさん！」

「あ、ソウイチ君、大丈夫だよ。頭は打ってない」

「いや、フォートレスは!？」

「そっち?!？」

冗談ですとソウイチは答える。フォートレスはアイがとつさに両手で掲げていた為無傷だった。

「あ………すいませんアイ先輩！つい嬉しさのあまり我を忘れて……」

言葉だけはしおらしく、だが抱き着いた腕は力を込めてる為アイをがっちりとホールドしたままだ。

「うん、大丈夫……」

「そうですか。ではあらためて……アイ先輩！お久しぶりです！ワタシは一日たりともあなたを忘れた事はありませんでしたよお!!」

寝っ転がったまま嬉しそうに声を上げる少女。しかしアイ以外の人間には状況が理解しがたい。

「えと……その人もアイの昔の仲間とか？」

ナナが恐る恐るアイと少女に聞いた。

「おや、アイ先輩の友達ですか？ワタシは『マトイ・マコト(的射真実)』アイ先輩の最高の友達ですよ」

「最高って……、別に優先順位つけるつもりはないけどね、ナナちゃん、前に話した生徒会のマコトちゃん」

「よろしくお願いします」

——マコトちゃん、あなたも育ったんだね……でも私は……ちくしょう、なんで——

抱き着かれた時にアイはマコトの胸の大きさを理解した。『ノドカより大きい』そう理解したアイは、かつての親友との再会を喜ぶと同時に心の中で泣いていた。一向に育たない自分の胸に……

——そして——

「総合手芸部の方は今回の選手権には出場してませんからね。生徒会の仕事があるとはいえ正直暇ですから、アイ先輩に会いたくてこっちに飛んできたんですよ」

近くのファミレスで昼食を注文するアイ達、全員ボックス席に座りながら、久しぶりの友達と会えたマコトと名乗る少女はとても快活に答える。アイに会えたのがそれ程嬉しいということだろう。

「そっか、向こうは皆元気なんだね。それと……」

「……ノドカの事でしたら大丈夫ですよ。直接会ったんでしよう?」

やっぱりその事ですか。そんな表情でマコトはアイの言おうとしていた事を言い当てた。

「うん……また私と組みたいって言われたよ。なんか向こうで皆とうまくいってないのかなって不安になっちゃってさ」

「大丈夫ですよ。何か問題あったら真っ先にワタシが先輩に連絡をいれます。無いつて事は円満ですよ。それはそうと……」

マコトはナナ達に興味があるらしい。アイのチームメイトやユキ達を品定めする様に、しかし迅速に見回した。

「ノドカから聞いてましたけど、中々なメンバーを集めたみたいですね。……変なものもありますけど……」

ユキを見ながら呟くマコト、当のユキは「ひどいですう」と猫なで声で反論。

「その人は助っ人だから、今日はアタシだけだけど、学校でいつも一緒なのはちゃんと常識的なのばかりよ」とナナがさすがずフォロー。いつもアイとナナが一緒にいる二人、タカコは学校で新聞の取材。ムツミは陸上部の合宿で一週間いない。

「そうですか。よかった。アイ先輩が不良に囲まれやしないか心配だったんですから」

「おい！ウチが非常識だつてか！」とユキが食って掛かろうとするがコウセツ達に止められる。

「……あの、ちよつといいですか?」

次に口を開いたのはソウイチだった。何か聞きたいことがあるのだろう。「何かな」とマコト

「引越す前のヤタテさんってどういう人だったんですか?ガンプラバトルの実力もどれくらい強さだったんすか?」

今ソウイチは自分に対して焦りつつあった。同時にいつもの調子

でバトルをこなすアイに対する嫉妬が少し大きくなっていった。

「?アンタ目の前に本人いるんだから本人に聞けばいいでしょ?とナナ」

「第三者の方が正確に分析出来るとおもったんすよ。あ、ホラ!前に『イングレッツサ』って店でガンプラバトルの大会があつたじゃないスか。その時マコトさんも関わっていたんでしよう?」

その話聞きたいっす」

『イングレッツサ』引越す前のアイ達の行きつけのおもちや屋だ。ホビーショップで構成された五階建てのビル。そこでガンプラバトル大会が開かれ、

アイとノドカが出場した話があるがアイはまだその話を話していない。

「あの時の話ですか。いいですよ。あの話はワタシとアイ先輩とでも思い出深い話ですので、私とアイ先輩の友情の深さを証明s「マコトちゃん!!最小限でいいから!!」

「仕方ありませんね。ではイングレッツサ大会の時の話を……」

と、マコトが昔話をしようとしてるその頃、ちょうど行き違いでノドカはガリア大陸に来ていた。

「ありや?アイの奴今日はいないのか?」

二階のガンプラバトルスペースを見回すノドカ、しかしアイ達の姿はなかった。今日はまだ来てないのか周囲の客に聞こうとするが、彼女を見つけたある人物がノドカに話しかける。

「君は確か……アイちゃんの友達のユミヒラちゃんだね?」

『ガリア大陸』と描かれた作業用エプロンを来た中年がノドカに話しかける

「?アンタは、確か……誰?」

「はは……店員のハセベだよ」

……

ここからは一部は人づてに聞いた部分もありますが、ワタシ、マト

イ・マコトの視点で話を進めましょう。その日はおもちゃ屋、『イングレッツサ』のガンプラバトル大会の日、アイ先輩はノドカとイングレッツサへと向かっていました。

「それにしてもあれだよ。今日は曇りなのに妙に蒸し暑い」

季節は六月半ば、雨が多い時期ではありませんが立派な夏日です。アイ先輩は髪を一つにまとめ、夏服から露出した首筋からは汗がじつとりと滲んできます。ノドカはよく見てなかったけど同じなんじゃないでしょうか？

「イングレッツサに着いたらクーラー効いてるから多少はマシになるっしょ?」

「え?ノドカ、今日改装工事と被っちゃってるから屋上でやるって言ってたじゃない。知らなかった?」

「え?マジ?!受ける……いや受けねえ!雨降ったらどうすんだ?!」

「一応イベント用のテントとかは張ってるから大丈夫だろうけど」

「でもこんなに蒸し暑いんだろ?日射病になったらどうすんだって話だよ」

直後、ノドカの『日射病』というワードにアイ先輩がぐつと肩を落しました。ノドカに対して呆れたのでしょうか。

「いやノドカ、太陽出てないんだから日射病じゃなくて『熱中症』だよ『ねっちゅーしょー』」

ゆっくりとした口調でノドカに指摘するアイ先輩。

「やはりユミヒラさんは頭が足りないようですね。ちゃんと解ってる辺りアイ先輩の頭はユミヒラさんとは出来が違うと言うことですね」「あ?つかなんでお前がここにいるんだよマコト」

怪訝そうな顔でワタシを睨むユミヒラさん。今ワタシはアイ先輩を真ん中に挟み、ノドカの三人で歩道を並んで歩いていました。

「いいじゃないですか。大体ユミヒラさんがいつもくつき過ぎなんですよ。アイ先輩を拘束する権利はあなたにはありません」

アイ先輩を独占している。というアピールでワタシはアイ先輩の右腕に抱き着きました。

「あ？マジ受ける。同じチームで幼馴染なんだ。一緒にいて当然じゃねえか。敵対チームのお前がいる方がおかしいってんだよ！」

「さっさとどっか行け！しっしっ!!」そういうジエスチャーをしながら、ノドカもアイ先輩の左腕に抱き着きました。その言い方にムツと来ます。

「なんで私に抱き着くの？」というアイ先輩の発言を無視して、おかしとばかりにワタシは意地悪に言い返しました。

「おやおや、こんな時にまで敵対心丸出しですか？野蛮ですね。熱中症って言葉も知らない位ですから無理もないでしょうけど。ほっほっほ」

「ああ？てめえ……」

ノドカは私に掴みかかろうとしましたがアイ先輩が「わー！抑えてノドカ！」となだめてくれました。いけない。アイ先輩の手を煩わせてしまいました。

「……言い過ぎでした。ごめんなさい。でもワタシだったらもつとユーモアな知恵がありますけどねえ。アイ先輩、私の名前を言いながら『熱中症』ってすぐくゆっくり言ってみて下さい」

「いやいや言わないから」結果が解りきってるのかアイ先輩は苦笑いしながら拒否しました。むー、言葉だけなんだからいいじゃないですか。

「アイ、ねえっ、チューしよ……。あつ、『ねっチューしよう』か……。つて！お前アイになんて事言わせようとするんだよ!!」

言葉の意味からノドカはワタシに食って掛かってきます。別にジョークなのがいいじゃないですか。

「いーいいいじゃないですか！所詮悪ふざけですよ!!」

「生徒会が下ネタかよ！やっぱお前異常だ!!女同士でこんな事言わせようなんざ!!……思い出した！だからお前とアタシが初対面の時もあんな事やってたんだな!!」

「初対面って……ああ、あの事ですか。……」

「初対面、あれか……」

初対面、とはワタシとノドカが初めて会った時の事です。その事は

おいおい話しましょう。アイ先輩も思い出したのでしよう。徐々に顔が紅潮していくのが解ります。恥ずかしい記憶ですよ。

「あーあの時は不可抗力です!!勉強もユーマアもない!!スポーツとガンプラしか取り柄の無いようなあなたに言われる筋合いはありませんよー!」

「あーもう二人ともいい加減にしてよー!!周り見てるんだから!!」

気付けばワタシ達は通行人の注目の的でした。途端に赤面するワタシ達三人、その後もワタシは「お前の所為だ」「あなたの所為」とノドカと言いい争いながらイングリッサに到着しました。

「結局言っても分かりませんか、ちょうどいい。今日のトーナメントでどちらがアイ先輩にふさわしいかハッキリさせましょう!」

「いや、そんな友達をランク付するつもりは私には……」

「あ?マジ受けるわ!昔アイと習い事が一緒だか知らねえがアイに執着しすぎじゃねえの?!なんだってそんなにアイにこだわりやがる!!」

「っ!……楽しいからですよ」

「ん?」

急に私の表情が曇ったのでしよう。ワタシの反応にノドカが首を傾げました。そうこうしてる内に手芸部のメンバーが私を迎えに来たのでワタシは合流、アイ先輩と別れる事になりました。

「今トーナメント表を見せてもらいましたが、決勝でワタシ達と戦うようですよ。勝ち残れるか楽しみですね」

「あ?言っつてな!アタシらが絶対勝つ!」

「負けないからね。でも楽しもうマコトちゃん」

「おいアイ、変な手心加えんなよ」

ノドカと比べてアイ先輩のなんて気遣いの出来る言葉、やはりアイ先輩、あなたはノドカの隣にいるべきじゃない。そう思いながらワタシは手芸部に先導されながら屋上へ歩いていきました。

「あのピンク髪が模型部最強の『ユミヒラ・ノドカ』ですか……俺達で勝てるんでしょうかね?」

手芸部の部員が不安げに聞きました。ノドカの実力、それはアイ先輩とは比べ物にならないと言われています。

「くつくつく。何を心配してるんだお前ら？」

品の無い声がワタシ達の横から響きました。これまた品の無い顔の男が現れました。この方はガンプラバトルでワタシの相手となるビルダーです。

「所詮女の作るガンプラだぜ？ガンプラは本来男の作るもんだ。専門外の奴らが作ったって恐るにたりねえよ」

「ワタシの性別を知っての発言ですか？それは」

「あ、いやそんな事は……」

ワタシが不機嫌そうな顔を見せると彼は急に押し黙りました。とはいえ彼の発言は一応気休めにはなりました。

「まあ確かにあなたの言う通り、大丈夫ですよ。この日の為にワタシ達は腕を磨いてきたんですから」

……

「……と思ったんですけどね……」

屋上の観戦モニターを見ながらワタシは絶句しました。準決勝、アイ先輩達の試合です。

「おらおらおらあ!!!」

雄叫びを上げながらノドカは弾幕を掻い潜ります。相手は『ガンダムSEED』に登場したフリーダムガンダムとジャスティスガンダム。しかも二機とも武装ユニット『ミーティア』を装備していました。

背中に小型戦艦を接続したような機体からはヤマアラシの針のごとくミサイルやビームが乱射されます。アイ先輩のガンダムAGE-1は攻撃を掻い潜るのに精いっぱいですが、

ノドカの方は全く恐れなくてミーティアに突っ込んでいきます。乗機は高機動型に改造したジェノアス。至近距離に入ると、そのまま手に持った銃剣をフリーダムのコクピットに突き刺し破壊。後方からジャスティスのミーティアが大型ビームブレードで斬りかかってくる。

ノドカのジェノアスは後ろを向いているにも拘わらず横に回避、縦に降られたビームソードはフリーダムをミーティアごと真つ二つにし大爆発を起こしました。

しかしその爆発はジャスティスの目くらましとなつてしまいました。視界を奪われた隙にノドカのジェノアスは左手にビームサーベルを持ち、ジャスティスを切り裂きました。完全にノドカの実力は他を寄せ付けない強さで圧倒していました。

「ちえー、私の出番またなかったなあ」

「アタシの実力にかかればこんなもんよ。アイ、やっぱアタシカッコイイっしょ？」

得意げになるノドカ、アイ先輩にいい所を見せようとかっこつけて……ぐぬぬ。

「やべえよ……あんなのと戦うつてのかよ……」

ワタシの相方が青ざめた顔で二人に怯えていました。しかしあの実力は驚異です。このまま戦っても結果は日の目を見るより明らか、「どうしますマトイさん、棄権します？」

「……こうなったら仕方ありません。秘策としてワタシにいい考えがあります」

「何があるんだよ」

「生徒会の権力を見せてやるまでですよ」

準決勝までが終わり、残すは決勝戦のみとなりました。しかし決勝戦前には休憩の昼休みを挟みます。アイ先輩とノドカ、模型部の面々は屋上でシートを広げてお弁当を食べていました。それもアイ先輩の手作り弁当を！です！なんと羨ましい！

「ふむ、ここまでは順当に勝ち進んできたな。この調子なら私達模型部が勝つのも必然だな」

「まず、と音を立てながら、湯呑に入れたお茶を飲む副部長のタテノユメカ。呑気そうな雰囲気ですが、かつて生徒会を潰したと言われる魔女……。彼女がいては作戦が実行できません。

「でも良かったのかい？アイちゃんに昼食の弁当作ってもらえて」

「いいんですよ。あれこれ考えるの苦手ですから、ちようどいい気分転換になりました」

重箱を片付けながらアイ先輩は嫌味なしに答えました。やはりアイ先輩は優しい。と、ずっと眺めてるわけにはいきません。ワタシ達は作戦を実行しなければ、ワタシは自分の隣に待機させていた小学生の男の子に「よろしくね」とアイ先輩の方に行くように目くばせしました。

ビルダーの子供はアイ先輩の所へととてと歩いていきます。

「あーあのー！そこのお姉さん！ヤタテ・アイさんですよ！それとタテノ・ユメカさん！」

「そうだけど、君は？」

アイ先輩は穏やかな顔で少年に答えました。

「2人ともファンです！準決勝までの戦いを見て、僕感動しました！2人の意見を取り入れてガンプラを作りたくて、それで今下の階でガンプラ買いたいんですが！ガンプラ選ぶのに一緒に選んでほしいんです！そしてアドバイスを下さい！」

「あ、ありがとう。でも私あんまり活躍出来てないよ。どっちかという横のノドカの方が……」

「顔が怖いんで……」

「なんだこの野郎」

「ふむ、アイ君がいるのはいいが私を指名する理由がいまいち解らないな」

「あ！あなたも立ち振る舞いがファンなんです！血も涙もない上にあの人を食ったような立ち振る舞いが！」

「ガンプラと関係が無いじゃないか」

「あ、でも僕の姉、姉ちゃんもファンなんです！姉ちゃんもユメカさんのファンで！一緒に姉ちゃんの分のガンプラも選んでくれませんか?!」

「君の姉さんかい？どうも怪しいな」

「ボインですよ」

「よし行こう。今すぐ行こう」

ボインと聞いた瞬間にユメカの表情は途端に明るくなりました。この魔女は……！

「ユメカ……君が行くんじや粗相があつちや大変だ。僕もついていくよ」

渋い顔で名乗りを上げたのは太った少年、模型部の部長、ケンモチ・ノゾム、ユメカが暴走すれば彼もまたおまけでついてくる様なものです。

「とういうわけで私達は下の階のプラモ売り場見てくるから、後よろしくねノドカ」

「おう、決勝の時間までには戻ってこいよ」

そうしてアイ先輩は少年を連れて下の階へ降りていきました。少してワタシは弁当箱を片手にノドカ達に向かいます。

「あれユミヒラさん？アイ先輩はいないんですか？」

「あ？さつきガキ連れて下降りて行つたぜ」

「そうですか。残念です。折角お詫びに一緒に食べようとしたのに」
わざとらしくワタシはアイ先輩がいないのを意外そうに言いました。「お前も弁当作ってきたのか？」とノドカは言いました。

「まあいいでしょうユミヒラさん。用があつたのはあなたですから」

「あ？」

「実は朝の事でお詫びを言いたくて、さすがのワタシも言い過ぎました。これ、よかつたら食べてもらえますか？」

ワタシは長方形の弁当箱を開けました。中には箱のスペースギツシりに、色とりどりのサンドイッチが入っていました。

「お前のお詫びかよ。なんか怪しいなあ、変なもんでも入ってんじやねえか？」

「失礼な、よく見てて下さい」

ワタシはサンドイッチを一つ掴むと一口それを食べました。よく噛んで飲み込むともう一口、

「自分で言うのもなんですが、美味しいです」

「毒が入ってねえみてえだな。ま、もらっておくよ。アイと一緒に食べるぜ」

「！そ！それはいけません！」

「なんで？」

「あなたに持ってきたからです！これはあなたがアイ先輩にふさわしいという証なんですから！考えを改めました！ワタシじゃあなたにはとても敵いませんよ!!」

「お……おう」

「じゃー食べて下さい！今すぐ!!」

「まあそう言うんだったら……」

そういうとノドカはワタシの作ったサンドイッチを一つ取ると食べました。次の瞬間、ノドカの表情が一気に曇る。そして次の瞬間、顔は青ざめ!! 一気に脂汗が顔面から吹き出し……

「っ?!ぎええええええええ!!なんじゃこりやああああああああああああ!!」

この世の思のとは思えない奇声を発しながらノドカは倒れこみ、気を失いました!! 残った模型部員達は一齐にノドカに駆け寄ります。ワタシはその隙に一目散に逃げました。

「……元々アイ先輩と一緒に食べる為に作ったんですけど、やっぱり他人の舌には未だ駄目でしたか……」

ワタシは自分のサンドイッチの味を思い出しながら走って行きました。その後、アイ先輩が駆けつけて気絶したノドカを起こしたようです。しかし自分でいうのもなんですが、常人がワタシの料理を食べる平気でいられる訳がない。丸一日尾を引くんですよ。ワタシの料理の味は。これで決勝はいいハンデになるハズです。

そして休憩時間が終わり決勝戦となりました。険しい顔でワタシと対峙するアイ先輩、明らかに顔色の悪いノドカ、二人とも怒っているのは見ただけで分かります。しかし今日は負けるわけにはいきません。でも後でアイ先輩には謝っておきましょう。……ノドカは別にいいや。

「まず最初に言っておきます。あの男の子を差し向けたのはワタシ達です。やはり怒ってますか。アイ先輩」

ここで自供したのは黙ってても副部長のタテノ・ユメカに調べられてばれると踏んだからです。あの人はもの凄くこういう事や弱みを握るのが敏感なんです。

「当然だよマコトちゃん。……何でこんな事したの」

「……理由もなしにアイ先輩にべつたりなユミヒラさんが許せなかったから、ですかね」

「え？」

「お、おい。マトイ……！てめえよくもあんな激マズ料理食わせやがったな……！」

震える声でノドカはワタシに怒りを向けてきました。しかしボロボロな声、明らかに笑ってる膝、青ざめた顔色、調子の悪さは一目瞭然でした。行ける。これなら！

「ノドカ、大丈夫？棄権する？」

「冗談……！アタシはやれるぜ……！」

「無理しないでね」

そしてバトルが始まりました。今回の舞台はジャブロー基地、時間帯は満月の眩しい夜。ガンダムシリーズ最初の作品、ファーストに登場した地球連邦軍本部。南米にあるともギアナにあるとも言われており、ジャングルの真下、地下の巨大な鍾乳洞を利用した大型の基地です。お互いのチームは母艦から出撃、ジャングルの岩山に降り立ちます。

ワタシはGNアーチャーのバックパックを取り付けたノーベルガンダム。相方のビルダーは狙撃用の機体『ジムスナイパーII』『ポケットの中の戦争』という作品に登場した量産機で、名前の通り狙撃に強い機体です。

加えてこの機体の背中には『ガンダムSEED』に登場した『プロヴィデンスガンダム』の遠隔操作装備『ドラグーン』が装備されています。射撃は一切の隙がありません。アイ先輩とノドカの二人も岩山に降り立つのが見えました。高機動型のジェノアスとガンダムAGE-1、お互いの姿は丸わかりというわけです。

と、すぐさまノドカの乗機であるジェノアスが猛スピードでこちらへ向かってきます。その後ろをアイ先輩のガンダムAGE-1が追いかけていきます。

「マトイイイツ!!!」

肩と額宛てはHGのジェスタ、マシンガンと背中にはHGのジン・ハイマニューバのパーツを移植したジェノアスでした。更に目を引くのは全身のデカールです。人魚やタツノオトシゴ、海をイメージしたデカールが目を引きまます。総合手芸部所属の私はそれがガンプラに違和感ある物だとすぐに気づきました。何故ならこれはプラモ用のデカールではありませんから。

と、それよりも攻撃的なフォルムを持つジェノアスはマシンガンを乱射しながら私達にまっすぐ向かってきます。

「待ってよノドカ!!」

AGE-1は背中に背負った武装とスラスターの複合兵装『グラエストロランチャー』を装備してるにも拘わらず、AGE-1の機動性はジェノアスには劣る様です。差はどんどん開いている。この隙にノドカのジェノアスを倒してしまおうとワタシはノーベルでマシンガンの弾を掻い潜り、ジェノアスに斬りかかりました。

「まだ元氣みたいですね。ワタシの料理を食べてそんなに叫ぶとは」

「そんなノーベルガンダムにGNアーチャーつけた程度の改造で勝てると思うなよ!!」

マシンガンの銃剣でノーベルのビームサーベルを受け止めるジェノアス、機体は元氣な様ですが声は相変わらず上ずってます。恐らく気持ち悪いのでしょうか。

「このまま高速戦闘で揺らしたらどうなりますかね!」

「クククツ!どうなるか楽しみだぜ!」

ワタシの相方が叫びました。鏢迫り合いの状態のジェノアスを撃ち抜こうと、相方のジムスナイパーIIはジェノアスにスナイパーライフルで狙い撃とうとします。この状態ではジェノアスは避けられないでしょう。

「!新手法!」

このままあつけなく勝敗は決する。と思いきや、後方からの二条の大型ビーム、そして六つのミサイルが飛んできました。ビームはジム

スナイパーIIの狙撃を遮断し、ミサイルはジェノアスを跨いでワタシのノーベルの背中へと向かいます。ワタシは悔しさに呻くとその場から離れつつミサイルを迎撃しました。

「ノドカ！一人で突っ走っちゃだめだよ!!」

「アイ！おせえぞ!!」

撃ったのはアイ先輩でした。合流した二機は寄り添いながら私達に撃ってきます。

「やはり先輩でしたか。そんな簡単に勝てるとは思いませんでしたが……」

ここで分散させるか、二機とも相手をするか、正直迷いましたが、ワタシの願望は先輩の相手がしたいという事でした。

故に分散させるべきと考えたワタシは相方のジムスナイパーIIにノドカの相手をする様に打診します。相方は応じると背中の中のドラグーンを展開、ノドカのジェノアスに撃ちながら突っ込んでいきます。

「タイムンと行こうじゃねえか！模型部最強の女!!」

「サシでやろうってか?!」

「その通り！お前を倒せば俺が最強だ!!」

「待ってノドカ！本調子じゃないんだよ！ここは協力して！」先輩っ!!っ!!」

ノドカを止めようとするアイ先輩を止める様にワタシは斬りかかりました。アイ先輩のAGE-1はツインソードライフルから二本のビームサーベルを発生、ノーベルのビームサーベルを受け止めました。その隙にノドカはジムスナイパーIIへと飛びます。

「やっと二人つきりになれましたね。私は二人の時間を過ごしたかったですよ。アイ先輩」

「私の場合は皆でワイワイやる方が好きなんだけどね!!」

ノドカを追いかけるのを諦めたアイ先輩。先輩は叫ぶとシールドの先端部に取り付けたビームサーベルを発生させます。前にワタシとバトルした時に使った手です。またもワタシのノーベルを切り裂

こうとする。素早く察知したワタシはそれをバックステップで回避、「おっと！それは前にやられましたからね。今度はそうはいきませんですよ！その背中の新装備！どれ程早いか見せてください!!」

「いいよ！ノドカが作ってくれたグラストロランチャーの力！見せてあげる！」

アイ先輩のAGE―1、でも新装備を作ったのはノドカ、なんだかアイ先輩との時間に水を差されたようでムツと来ます。

「っ！こんな所までユミヒラさんは邪魔をする!!」

ワタシのノーベルは背部ブースターからミサイルを展開、一斉発射してすぐさまノーベルをAGE―1に突撃させます。アイ先輩のAGE―1もグラストロランチャーの推進力とミサイルを使いこちらへと迫りました。

一方のノドカの方のバトル、ジムスナイパーIIの方は長時間飛べない為、ジェノアスの方が有利かと思いきや、ノドカの方はどうもジムスナイパーIIの方に押されっぱなしでした。

「オラオラー！どうしたどうしたあい!!」

コーン状のドラグーンが五基、飛び交いながら内蔵式のビーム砲でジェノアスを狙い撃ちます。ジェノアスの方は最初の方こそ豪快なスピードと動きで避けていましたが、次第に動きは小さくなってきました。現在はドラグーンに取り囲まれるような体勢です。

「ぐっ！くそっ！……！ぎ……！ぎぼちわるい……！」

「これが模型部最強とうたわれた女か？」

「っ！人が調子悪い時に調子に乗りやがってえ!!」

怒りを返す様にジェノアスはマシンガンを撃ちます。ですがジムスナイパーIIは距離を置いてる為が攻撃は届かない。そして隙をついてドラグーンの射撃が邪魔をする。さっきからこんな感じですよ。今のノドカのコンディションは最悪。加速のきついノドカのジェノアスでは素早く動くことが出来ないのでした。

「へっ！機体の長所も活かせねえたあお笑いだぜ!!その機体のデカールも同じだ!!」

「何だと!!」

「よく見りやそのジエノアスのデカール! 妙に膨らんでると思ったら
ネイルアートのシールと小物用の転写シールじゃねえか!! 全然似
合ってねえな!」

「何を!!」

「俺は総合手芸部にいたから分かるぜ! ネイルアート担当や小物製作
担当の女どもが使っていたツールだ! 役にも立たねえのに可愛さ優
先かよ! 女の考えそうな事だなあ!!」

「っ! アイの出したアイディアだ! アタシの『ジエノアス・ピースメー
カー』を馬鹿にすんじゃねえ!!」

相手の挑発に怒りながらもノドカはジムスナイパーⅡに向かって
いききました。あの勢いだと自分の気持ち悪さは忘れたのでしょう。
単純です。

さて、一方でこちらの空中戦は……

「でええい!!」

満月をバツクに、私のノーベルが背部コンテナから一斉にミサイル
を発射します。アイ先輩はグラエストロランチャアのビームで収束
しかけていたミサイルを一気に撃ち落とします。ビームの濁流は月夜
で明るいジャングルを更に照らしました。しかしすべて撃ち落とす
たわけではありません。撃ち漏らしたミサイルは二発A G E ー1に
飛んでいきます。

「チッ! 頭部にバルカンが搭載されてないのって地味に不便かも!!」

そう言ったアイ先輩は引き離そうと上昇しますがミサイルはホー
ミング式、執拗に追いかけます。ワタシもミサイルとで挟み撃ちをす
るべく二丁のビームライフルを撃ちながらA G E ー1に接近、アイ先
輩はワタシのビームライフルを回避しながらツインソードライフル
をミサイルに撃ちました。撃ったビームはミサイルに一発ずつ当て
ていき二発迎撃、

ワタシはノーベルのビームサーベルを発生させ、二刀流でA G E ー

1に斬りかかります。しかしAGE―1もライフルとシールドの
ビームサーベルでそれぞれを受け止めました。

「フツ！高校では初めてですね。こうやって二人つきりになれるの
は」

ワタシは通信をアイ先輩だけに聞こえる様つなげました。

「それはそうだけと言ってる場合じゃないでしょ！ノドカにした事！
私は怒ったままだよ!!」

「ええ、ワタシの料理の腕も相変わらずですよ！思い出しますね！ワ
タシが先輩と初めて会った時の事を!」

「？小学生の料理教室の時の事を?!」

——そうです。ワタシが何故アイ先輩に執着するのか。あれはワ
タシが小学4年生の時の事です。

自分でいうのもなんですが、ワタシは子供の時から勉強もスポーツ
も出来る才女でした。しかし一番のワタシの出来ない事があります。
それはワタシが重度の味音痴だという事でした。人が美味しい物を
不味いと言い、不味い物を美味しいと言う。生まれつき天邪鬼の舌で
した。

親はりハビリや克服を兼ねてワタシを料理教室に通わせました。
しかしワタシの料理の腕はあのままです。加えて周りの生徒はほと
んどが大人の人でした。

アドバイスを貰ったり手伝ってもらった時はうまくいきましたが
ワタシは一人でやりたかった。加えて教室では自分が作った物を他
の生徒に食べてもらう行事がよくあります。

ワタシの料理は皆にやんわりとですが避けられました。そしてワ
タシは皆が美味しいという物を不味いと感じながら食べる。……次
第にワタシは料理が作るのも食べるのも嫌いになっていきました。
徐々にワタシは周囲と壁を作っていったんです。

やめようかと考えていたそんな時、一人だけワタシと同一年の生徒
がいました。……その人がアイ先輩でした。

「ねえマトイさん。よかつたら私の家で料理の練習しない?」

帰り道で話しかけてきたのがアイ先輩でした。その笑顔は今と変わりはありません。反面ワタシの表情はかなり曇っていたと思います。

「……なんですかヤタテさん？練習なら一人で出来ますよ」

「まあそう言わずに、他の人に食べてもらおう時にマトイさん、凄く寂しそうにしてるでしょ。他の人の好みとかも勉強しておくとか良くなるかもと思ってさ」

「美味しい物は誰が食べても美味しいでしょう？ワタシの料理は好みの勉強でどうにかなるものじゃありませんよ」

「でもさ、私はマトイさんに笑顔で作ってほしいんだ。ムスツとした顔で料理を作るより、楽しい気持ちで笑顔で作った方が絶対いいよ。そっちの方が作るの好きになれるから」

作るのを好きになる。味の結果ばかりを追い求めていた自分にとっては盲点でした。渋々ではありましたが、それ以降ワタシと先輩は家で一緒に料理を作る練習をする様になりました。アイ先輩は私の作ってる途中の料理を味見しながらアドバイス等をくれました。

少しずつではありますが自分の下に頼らない味を少しずつ覚えて、教室の人達にも評価を貰って……、料理を作るのを好きになっていったんです。そして私は、次第にアイ先輩に心を開いていったんです。

「今日のブラウニーは皆好評だったね」

そしてある日、アイ先輩の家に御呼ばれしたワタシは、キッチンで野菜を切りつつ、今日の料理教室の事を話していました。

「中にゴボウ入れてたのが意外でしたよ。あれってヤタテさんが考えたんですか？」

「ううん、割と鉄板のやり方だよ。でも食べさせたい奴がいるってのも事実だね」

「食べさせたい奴」という言葉に私は反応しました。

「幼馴染の友達なんだけどね。私の親さ、友達の親も共働きでさ、晩御飯はいつもそいつと外食とか自分達で用意してたんだけど、そいつが凄く好き嫌い多くてね。体壊しちゃいけないって思って料理教室通い始めたの」

「凄いですねヤタテさん。友達の為にそこまでするなんて」

「そんな大した事じゃないよ。食べるのは私も同じだからね」

するすると大根の皮を包丁でむいてる先輩。普段はのんびりした印象なのに、こういう風に何かに打ち込むこの人の姿は、いつも凄く格好良く見えるんです。ただ一心不乱に撃ち込む姿、自分がプライドを優先させていた事を考えるとなんだか自分が小さく見えてくる。そして自分はある事を思いつきました。

「そんな事ありません！あ！あの！決めました！今日からヤタテさんの事！『先輩』って呼ばせてください!!」

「いいっつ!?!……あっつ!」

突拍子の無いワタシの発言にアイ先輩は凄く驚いたようです。直後アイ先輩は顔を強くしかめました。さっきの拍子に包丁で親指を切ってしまったのです。

「も！もう！何言ってるのマコトちゃん!!」

「え？わああ!!ヾ(´▽`)めんなさい！変な事言っつて!!」

自分の所為で先輩が指を切ってしまった。その失態にワタシは頭の中が一気に真っ白になっていきました。

「ででででも料理教室に通っていたの先輩が先だったんでこう呼ぶべきだと思っつてたんです!!」

「ま、まあ別に誰かにそんな風に呼ばれた事ないから別にいいけど、そ、それより血を拭きたいんだけど救急箱……」

照れながらもアイ先輩の切った親指からは血が溢れてきます。照れと混乱でワタシはどうすべきか解りませんでした。そしてとっさにワタシはとんでもない行動に出てしまいました。

「わ！わかりました!!」

ワタシはとっさにアイ先輩の切った親指を……口に咥えました。

「ええ!!マ！マコトちゃん!!」

動揺するアイ先輩をよそに、ワタシはアイ先輩の傷口を嘗めます。アイ先輩の血……しょっぱくて美味しい……。自分の味覚がおかしいのは自覚はしていますが、これも他人と違う感想でしょうか？不思議な感覚ですが、ワタシは舐めるのに夢中になっていたんです。そし

てワタシの行動に先輩も固まっています。

「……何してんだお前ら？」

しばらく先輩の血を舐めていたワタシは突然の声によって現実呼び戻されました。指から口を離し、見るとツインテールの目つきの悪い女がいました。そう、につくきノドカです。

「あ、ノドカおかえり」

「おう、そいつが料理教室の奴か？」

「うん、マトイ・マコトちゃんだよ」

「あ、どうも初めまして……」

挨拶を先輩から促されて挨拶をするワタシ、ノドカの目は訝しげにワタシを見ていました。

「なんていうか……指舐めてあんな表情してたなんて……アイ、友達は選んだ方がいいんじゃないか？」

「!!」

グサツとワタシの胸に言葉が突き刺さりました。そんなに変な顔してましたかワタシ!!

「そんなこと言っちゃ駄目だよノドカ、マコトちゃんなんでも出来る人なんだから」

「いやだって上目遣いで指嘗めるって……、アイ、お前もしかしてそういう趣味が」

「ないよ!!急に指切ったからとつきにやっちゃただけだよ!お互い慌てていただけだよ!」

顔を赤くしながらアイ先輩は救急箱を取りに行きました。

「ま、いっか。ちよつと疲れてるからアタシ部屋行って休んでるぜ。飯になったら呼べよ」

「うん。今日は豚汁だよ」

「変な野菜入れんなよ」

「それはどうだろう」

そんなやり取りをしながらノドカは自室に向かっていきました。その横で恥ずかしさの余り、ワタシはぶるぶると震えていました。

「まああれが私の幼馴染だよ。口は悪いけど心は悪くないから嫌いに

ならないでね、ってマコトちゃん?どうしたの?」

「み!見られたああ!!しかも気持ち悪いな事言われたああ
!!!」

「うわあ!!マコトちゃん落ち着いて!!」

そんなこんなでワタシとアイ先輩は親睦を深めていきました。しかしそれも長くは続きませんでした。元々学校は別々、中学校に上がると同時にアイ先輩は料理教室をやめ、ワタシと先輩は音信不通になっていきました。その所為か腕を上げかけた料理の腕もだんだん戻って行ってしまったんです。

そして高校で再会。でもその横には常にあのノドカがいたのです。

そして趣味は模型が増えていました。そしてワタシはアイ先輩を総合手芸部に引き込もうとしました。ノドカと引き離すべく。――

ワタシがそんな事を脳裏に思い出しながらもアイ先輩とのバトルは続いていました。両者ともビームライフルを撃ちあいますが、お互いが飛べるうえに機動力を改造した機体です。射撃ではそもそも当たり前せん。

「高速で動き回って!ラチがあかないよ!!」

「同感です!!」

ならば!とアイ先輩は眼下のジャングルにAGE―1Eを突っ込ませました。直後、ジャングルの中からビームが幾重にもノーベルに向かってきます。木々に隠れながらライフルを連射してきたわけです。

「そう来ますか!ならば!!」

ワタシは背部コンテナのミサイルを全展開、一斉に発射し真下のジャングルに雨のごとくバラバラに降らせました。それによる爆発はジャングルを火の海に変えます。いぶりだす作戦です。

「逃げないで出てきてください!」

「誰が逃げたって言ったの!!」

火の海と化したジャングルの中から一つの物体が高速でこちらに向かってきました。暗くてよく見えませんが、これがアイ先輩のAG

E―1と確信するとワタシはビームライフルに取り付けられたビームサーベルを振るいました。

防御するかと思いきやそれはあっけなく切り裂かれる。「やったか？」と思つたワタシですが、直後、Gポッドのアナウンスに、そして切つた物体の正体にハツとしました。

「AGE―1じゃない！グラエストロランチャー！それじゃ!!」

後ろを振り返ろうとした瞬間、ノーベルは背中を大きく切り裂かれました。ワタシがビームサーベルで斬つた物体はAGE―1のグラエストロランチャー、気を取られてる内にノーベルの背中には斬られ、GNアーチャーのパーツは破損、ノーベル本体はジャングルへと墜落していきました。

「失敗したね！マコトちゃん!!」

不時着し、膝をつくノーベルにAGE―1は悠然と歩いてきます。

「まだ！まだですよ！ワタシには！アイ先輩の為に勝たなきゃいけないですから!!」

ワタシはそう叫ぶと武装を投げ捨て、背中に残っていたパーツをパージ、ワタシは素の状態となったノーベルガンダムの『切り札』を作動させました。

「私の為にとってどういう……ハツ!!」

アイ先輩が言い終わる前にノーベルの異変に気付いたようです。

ノーベル本体は真っ赤に輝き、ばらけた髪状のフィンは怒髪天の様に逆立つ、咆哮の様な衝撃波は周囲の木々をなぎ倒します。思わず相対するAGE―1も身構えます。そしてノーベルは少し屈むと、獣の様な勢いでAGE―1へと迫りました。これがノーベルガンダムの切り札、バーサーカーモードです。

「ワタシはですねっ!!」

動きの妨げになるGNアーチャーのパーツは全て外した為、この姿では徒手空拳での戦い方となります。しかし本来格闘に強く調整されたノーベルには素手で問題ありません。ワタシはノーベルの貫手を連続で放ち、AGE―1を襲います。

連続で放つ貫手は幾重にも重なって見える速度です。あらゆる方

向から襲ってくる貫手にAGE―1はシールドで防御しますがすぐにシールドは穴だらけになります。

「なんて威力!!」

「このマニピュレーターはメッキシルバーで塗装してあります。ガンプラバトルでの硬度は増してるのですよ」

防御は駄目だとアイ先輩は悟ったのでしよう。シールドを捨て、開いた左手にビームサーベルを持ちました。こちらもバーサーカーモードはそんなに長く持ちません。すぐさまワタシはAGE―1を破壊すべく飛びかかり、貫手と蹴りの連打を浴びせました。アイ先輩は声を上げながらビームサーベルで必死にそれを捌きます。

「アイ先輩が料理教室をやめた後!!私はいつかアイ先輩と再会した時の為に腕をみがこうとしました!!でも……できませんでした!!」

AGE―1を押しながらワタシは自分の胸中を語る。蹴りが一つ、AGE―1の頭を掠めました。

「ツ!!なんで?!」

「気付いたんですよ!自分一人で料理を極めようとしていたけれど!あなたがいたからこそワタシはうまく料理が出来たんです!あなたと料理をしていいからこそ楽しかったって!だから来てほしいんです!総合手芸部の料理部に!!」

「それでも私は!今の模型部が好きだよ!!」

「もう一度!あなたと一緒にいたんです!」

直後、AGE―1の右腕にノーベルの回し蹴りが炸裂、ライフルが空に舞いました。その勢いを利用してもう一回蹴りを見舞います、さつきより角度を上につけた一撃でした。ノーベルのパワーはAGE―1を大きく蹴り上げました。

「かはっ!!!」

追い打ちとして、ノーベルをジャンプさせます。宙に舞ったAGE―1の高さを超えると、AGE―1をかかと落として叩き落とします。轟音と土砂を巻き上げてAGE―1はジャングルへ墜落しました。

「うわあああっっ!!!」

「ワタシとあなたの為にやられてください!!先輩!!」

その光景は遠くで戦ってるノドカにも見えた様です。こちらもジムスナイパーⅡの猛攻と自分のコンデイションの影響でもうボロボロでした。

「あ、アイが!!」

場所は見通しのいい開けた岩山。膝をついた体勢のジェノアス・ピースメーカー、機体越しに燃えるジャングルを見つめるノドカ、気持ち悪さを抑え、なんとか彼女はこの状況をどうしようかと考えました。

「クソッ……ここからじゃ遠すぎる!!どうすりや……!!」

「ハハハッ……この期に及んでお仲間の心配か?!自分の心配をした方がいいぜえ!!」

ハツとしたノドカはジムスナイパーⅡの方を見ます。トドメとしてスナイパーライフルを構え、ジェノアスを狙っていました。

「!あれだ!!」

「地獄に落ちな!!」

ジムスナイパーⅡがトリガーを弾こうとした瞬間、ジェノアスはスラスターを全開、ジムスナイパーⅡに一気に迫ります。ジムスナイパーⅡは一瞬驚きましたが、すぐ冷静になってスナイパーライフルをジェノアスに撃ちました。しかしジェノアスは機体を僅かに動かし回避、

「なっ!!」

「アイが待つてんだ!!それよこせええ!!うぷっ……」

そしてジムスナイパーⅡがドラグーンで対応しようとする前に、ジェノアスは銃剣付きのライフルをジムスナイパーⅡ目がけて全力で投擲します。狙いはコクピット、

しかし投げる直前に気持ち悪さが襲って来た為か投げるタイミングが一瞬ずれました。その所為で狙いが狂った事とジムが回避行動をとっていた為、銃剣はジムスナイパーⅡの右肩を貫きました

右腕ごと空を舞うライフル。「それだけありや十分だ!」と、すぐさ

まジェノアスはスナイパーライフルを掴み、少し離れた場所に降り立つ。そしてスナイパーライフルを構えました。ノーベルを狙撃するつもりです。

「……この野郎!!だが残念だったな!その場所で撃ってもAGE―1の所へは届かねえぜ!何故ならその距離は通常機のセンサーじゃ届かねえ!!」

そう言いながらもジムスナイパーIIはジェノアスの狙撃を阻止すべくドラグーンでジェノアスを襲います。ドラグーンからのビーム砲にジェノアスは晒され、見る見るうちにパーツが破損していく。だがノドカは動じませんでした。そしてビーム砲がジェノアスの頭部のクリパーツを砕いた瞬間。

「アイ!アタシは信じてるぜ!!受け取れ!!」

ノドカはそう叫ぶとスナイパーライフルを撃ちました。弾丸は真っ直ぐこちらへ向かいました。それを知らないワタシはノーベルの左手でAGE―1の首を掴み持ち上げていました。コクピットにトドメをさすべく、右手にさつき捨てたビームライフルを持って。

「強化した蹴りなのに、AGE―1本体は壊せないみたいですね!でもビームサーベルならそれも無駄ですよ!」

「くっ!」

「楽しかったです。アイ先輩!」

コクピットにビームサーベルを突き立てようとしたその瞬間、ワタシのノーベルの胸をジェノアスが撃った弾丸が貫通しました。中心部、コクピットを一撃でした。

「え?なぜ……」

その時のワタシは自分の置かれた状況が一切理解できませんでした。そのままノーベルは倒れこみ爆発、ワタシは撃墜扱いとなりました。

「ノドカ……ノドカだね?」

「な!何故だ!!お前の頭部のセンサーで!!」

「き、きひひ♪こいつのどこが通常機のセンサーって言ったよ」

そう言いながらノドカはジェノアスの頭をジムスナイパーIIに見

せつけるかのように向けました。ジェノアスの頭部の中心部には寶石の様なパーツが輝いていました。

「それは……宝石?」

「あ? なわけねーだろ。百均で売ってたラインストーンシールだ。ちよつとした裏技だな!」

「ひ! 卑怯者がああ!! ガンプラの正規品使わないたあ!!」

「アホか! 合法だろうがよ!!」

ワタシの相手は、自分が間接的にワタシの撃墜の原因を作ってしまったと思ったのでしよう。怒り心頭でジェノアスに襲い掛かりました。それを見ていたアイ先輩は「今度は自分が助けねば!」とジェノアスの方へ向かおうとします。しかし素の状態のAGE-1では素早く動けません。何かないかと辺りを見回す。

目についたのはさつきワタシが破壊したグラエストロランチャー。しかし右側の羽根とビームキャノンがごっそり切断されています。これでは飛べるかも分かりません。しかし考えている余裕はアイ先輩にはありませんでした。

「ノドカが作った物だもん! 信じてるよ!」

そう言つて先輩はグラエストロランチャーを装備。全力でスラスタを吹かします。少ししてAGE-1は飛び立ちました。少しよろめいてますが出力は落ちて無いようです。

「おらおらあ!! 覚悟しやがれ!」

ジムスナイパーIIの猛攻、必死になったノドカは気持ち悪いのを押し込んで回避に専念。しかし追い詰められ、その場に墜落しました。

「くっ……畜生……」

「ここまで持つとは思わなかったぜ! さすがは模型部最強の女ってか? だがこれで終わりだ」ノドカアア!!」

突然の先輩の叫び、そしてグラエストロランチャーの残ったビーム砲がジムスナイパーIIを襲います。とつさにジムスナイパーIIはそれを回避、続けてAGE-1はグラエストロランチャーを切り離して

ジムスナイパーⅡ目がけて飛ばしました。ジムスナイパーⅡとグラエストロランチャーの距離が近い。焦ったジムスナイパーⅡは全てのドラグーンを投入し、迎撃しようと全火力を叩き込みます。その隙をついてジェノアスの前に降り立ちました。

「アイ?!あんな装備でここまで来たのかよ?!」

さつき飛ばしたグラエストロランチャーの状態、そして現在のAG E-1の装備を見てノドカは驚きました。半壊状態のグラエストロランチャーでは飛べるとさすがに彼女も思ってたのでしよう。「うん!バランスは悪かったけどね。ノドカの作った物だもん。信じてたから」

「アイ……そうかよ」

「ノドカ?」

「お前が見てるんだ。アタシがここで弱気になっちゃいけない!!」

ノドカは歯をぎらつかせ、笑みを浮かべると勢いよく立ち上がりました。二対揃ってグラエストロランチャーを撃墜したジムスナイパーⅡに向き合います。

「くっ!お前ら!!」

「観念しやがれ!!アタシら二人を相手にして無事で済むと思うなよ!」

そう言いながら二体共ビームサーベルを構え、ジムスナイパーⅡに突っ込んでいきました。

「このおおお!!どいつもこいつもおお!!」

激昂したジムスナイパーⅡはドラグーンを五基全て飛ばして二機を撃墜しようとしています。高速で放たれるドラグーンの細いビームは二体を襲います。

「わわっ!ちよつとこれは!!」

アイ先輩は避けるのに精いっぱいその場で回りながら回避という状況になってしまいました。しかし一方でノドカの方は絶妙のタイミングで回避しつつどんどん距離を詰めていきます。さつきより動きが早い。

「なんだ!なんなんだ!この動きはああ!!」

焦りと共に相方はドラグーンをノドカに集中させようとしています。しかしそうする前に、ジェノアスの進行上にあつたドラグーンは切り裂かれ、その為あつという間に二機はジムの目の前に到達、ジムもビームサーベルで対応しようとするもその前にAGE-1とジェノアスに切り裂かれました。

「アイが見てるんだよ！かつこ悪い所なんて見せられるか!!」

「ぐーお、女二人揃えば元気になりやがって……!!」

「あ？嫌な所なんて見せたくねえからな。特にアイにはさ」

「タテノ・ユメカに弱みを握られてたから、女と模型部は嫌いだつたが、どうやら、俺の勝手だつたらしい……な……」

そう言つてジムスナイパーIIは爆散。イングレッツサの大会はアイ先輩とノドカ、模型部の優勝となりました。

「凄いよノドカ!!あれだけ辛そうだったのにあんなに敵なしだつたじゃない!!」

アイ先輩はGポッドから出てくるや否や、ノドカのGポッドに駆け寄ります。しかし当のノドカはGポッドから飛び出すや否や、口に手を当てながら走っていききました。あー……どうやら押し込めてた気持ち悪いのが今更ぶり返したようで、

「の、ノドカ?」

十中八九トイレに行ったんでしようね。策を講じたにも関わらず負けた事は悔しいですが、ノドカの締まらない終わりを考えると少しは一矢報いたといった感じでしょうか。

「ねえユメカ、あの手芸部の人、ユメカに弱み握られてたつて言つたけど、君何したの?」

「……さあ?心当たりが有りすぎてさっぱりだよノゾム、まあ私が覚えてないのだから大した事ではないだろう」

「大した事だと思ふよ?!」

そしてその後、イベントも終わり、全員が帰路に着こうとしていた時でした。早く準備を整えたワタシは、アイ先輩をイングレッツサの入

り口で待っていました。手芸部や模型部の面々は出て行くのを見ましたが肝心のアイ先輩とノドカは見えてません。

まだかな……と待っていると。「あれ？マコトちゃん？」と知った声が聞こえました。模型部部長のケンモチさんとタテノさんの二人でした。……タテノさんのセクハラが来るかもとワタシは警戒として体をこわばせます。

「アイちゃんを待っているのかい？」

「ええ、一緒じゃないんですか？」

「ヤタテ君達だったら上の階のゲーセンコーナーにいるぞ。ところでマトイ君、今日はどうも手が寂しいんだ。君の胸を揉ませ「ユメカ、いい加減にしようね。僕達は先に帰るけど上に行けばアイちゃん達に会えると思うから、それじゃ」

「あーマシユマロちゃんがー、駄目ならお腹でいいからー」と名残惜しそうにタテノさんはケンモチさんに首根っこを掴まれイングレッツサを出て行きました。……ケンモチさん苦労してますね。

そして言われた通り五階のゲームセンターのコーナーにワタシは行きました。ソシャゲが流行って以来、ここも人が少なくなったと言われてますが、確かに人は余り見ません。これならアイ先輩は楽に見つかりそうと思い見回しながら探します。……いました。ノドカと一緒にプリクラを撮ってます。機械の後ろの布の所為で二人の足しか見えませんでした。……気が付きました。

「アイ先輩!!」

「あつマコトちゃん」

「げえ!!マトイ?!なんでお前がくんだよ!!」

すぐさま突撃、二人してタッチパネルを操作して撮影の準備をする所でした。

「二人だけでプリクラ撮ろうなんてズルいですよ!ワタシも入れて下さい!!」

「ああ?やだよ。なんでお前なんかと。こっちは優勝記念で撮ってるんだぜ?」

「そういう事言っちゃ駄目だつてばノドカ、折角だから三人で撮ろうよ」

さっすがー♪アイ先輩は話が分かるツ！二つ返事でワタシは賛成するとすぐさまアイ先輩の横にくつつきました。

「おい、くつつき過ぎだぜマトイ、スペースねえんだからもつと離れろ！」

「気のせいです。そういうあなたこそくつつき過ぎじゃないですか。バトルの時もそうでしたけどアイ先輩が絡むと必死過ぎじゃないですか？」

いつも先輩にべったりなノドカだから今日位はこうしたいというのがワタシの本音でした。

「テメエが言うか！アタシに毒物食わせといて仲間ヅラすんな！」

「そういえばユミヒラさん。決勝終わった後気持ち悪そうでしたね、もしかして戻しちやったんじゃないですかあ」

「なっ！」

「やっぱりですか。アイ先輩。そんな汚い人と一緒にいちやいけませんよ。ワタシと一緒に……」

「ああもう二人とも!!いい加減にしてよ!!いくらなんでも今日ひどいよマコトちゃん!!」

突然タツチパネルを操作していた先輩が怒りました。明らかに迫力が違います。しまった、調子に乗りすぎた……。

「あ!!……ごめんなさい……」

それを見ていたノドカもまた、顔は強ばっていました。怒らせた先輩の怖さ、彼女も知ってるようです。

「それと私まだ怒ってるんだからね。ノドカ気持ち悪くさせたの」

「……ユミヒラさん、ごめんなさい」

「……一応反省してるってんなら別に文句はねえよ」

「写真位はさ、皆心からの笑顔で撮ろうよ。……準備出来たよ。じゃ、カウントとるよ」

先輩が操作し終わると女性声の音声で「10、9、8」とカウントダウンが始まりました。アイ先輩は先ほどとは打って変わって、笑顔

でVサイン、ノドカも先輩と腕を組み同様のポーズを取りました。

その時……、ワタシとノドカでの、アイ先輩との歴史の差を思い知らされた気がします。幼馴染と友達、赤ちゃんの時から付き合いと小学生の限られた時間の関係……。このままではアイ先輩を手芸部に引き込めない。そんな不安と焦りがワタシをめぐります。

「マコトちゃんもポーズしようよ」

棒立ちのワタシに先輩が声をかけます。私も先輩の右腕に左腕を絡ませて笑顔を作りました。その瞬間、フラッシュと同時に写真が撮れました。三人の笑顔が映った写真。でもワタシにはこれから、ノドカと先輩を取り合う前触れの様に見えました。どうも微笑ましいという感じはしませんでした。

——そして結果次第ではアイ先輩とワタシはずっと一緒にいられる。そう思い、その為にノドカには負けませんと誓っていたのです。

「と、いうわけです。別にアイ先輩は特別強かったわけではありませんよ」

場所は再びファミレスです。ワタシは最小限の部分だけアイ先輩の仲間達に語って聞かせました。

「なんか話の半分が余計だった気がするんすけど、意外だったっす。ユミヒラさんはそんなに強かったんすか」

「そりやそうですよ。前ノドカがアイ先輩に会いに行った後、帰ってきて悔しそうでしたよ。『今のアタシと対等にやり合いやがった』って」

「ま、そういう事よアサダ。そんなすぐに強くなれるわけじゃないんだから、時間の許す限り地道にやってくしかないでしょ？」

注文したジュースをストローでかき回していたナナさんが答えます。

「……まあ、そうっすね」

口だけは納得した風なソウイチ君。でも表情から内心は納得してないだろう。と会って間もないワタシでも分かりました。

「つまり、なにが言いたいかという事ですよソウイチ君。誰か仲間がいるだけで強くなれたり、目標が出来たりするものです。要は一人にこだわっちゃ駄目って事です。ねえ、アイ先輩」

「ま、そうだね」

「解つてても踏ん切りがつかないってのもあるんすよ」

どうすればいいんだ。とばかりにソウイチ君はソファの背もたれに体を預け、天を仰ぎました。この人達の実力次第でアイ先輩が全国に行けるかどうかも左右される。実力差の離れたワタシは頑張れとしか言えませんでした……。

……その頃ノドカは……

ベアツガイ・スケアーに乗ったノドカは十人参加型のサバイバルバトルに参加していた。とはいえノドカ以外は並のビルダーだ。もうほとんど残ってるビルダーはいない。ノドカはバトルの決着をつけるべく残りの敵に真正面から突っ込んでいった。

相手は『鉄血のオルフェンズ』に登場したガンダム『ガンダムグシオン』それも1/100スケールの大型機だ。アステロイドベルトで船団を強奪する為に改造されたガンダムで、外見上はとてもガンダムとは思えない程ふとましい。例えようものなら二足歩行になった機械のウシガエルと言ったところか。フィールドは炎天下の砂漠、グシオンは宇宙でしか活動出来ない本編設定だが、ガン普拉バトルでは関係ないことである。

ホバー移動で巨大ハンマー『グシオンハンマー』を振りかぶるグシオン、ノドカのベアツガイは真つ向から右手のウイニングナックルで受け止める。武装同士がぶつかり爆音が響く、直後、グシオンハンマーに亀裂が入り、ハンマーが砕けた。

「甘えぜ!!」

そのまま左手のバズソーを回転させながら左手を戦闘機として射出させる。分離した左手はグシオンの胸部のど真ん中を貫通し、破壊した。そのままバトルは終了。サバイバル戦はノドカの勝利である。

「ふいー、あんま大した事ねえなこー」

Gポッドから出た途端。ノドカは刺々しい言葉を発した。といっても誰かに聞かれる大きさではない。

「この空気、感じられたかい？ユミヒラちゃん」

「ハセベさんか。まあね、規模はともかく、雰囲気はいいよ。アイが好きそうな場所だぜ」

今回ノドカがここでガン普拉バトルをしたのは、アイが実力を育んだこの場所がどんな感じなのか知りたかったからだ。周りはいろんな人がガン普拉談義やさっきのバトルの話をしてる。皆楽しそうだ。

「でもレベルはあくまで並って所だ。よくアイの奴ここであれだけ腕を上げられたよ」

「そうだね。でも今の雰囲気を作り上げたのは……アイちゃんかもね」

「あ？」

「アイちゃんは好きな事には徹底的に取り組む、凄く楽しそうにね。それが周りにも『自分もやってみよう』って思わせたりする。今までも激戦は多くあったよ。でもその都度アイちゃんはライバルと友達になり、見てる人達に参加したくなる気持ちにさせる。アイちゃんにはそういう魅力があるんだ」

「あー……。分かるぜ。アイの奴、好きになった事には集中力すげえもん」

「……実は僕もね。アイちゃんには期待してるんだ」
「あ？」

ハセベはそう言ってノドカに自分のアイに対する気持ちを吐き出した。

「僕も昔はガン普拉の頂点に立ちたいって思って腕を磨いてたんだ。ガン普拉バトルも無い時代からずっとプロやチャンピオンを目指してね。でも現実の壁を越える事は僕には出来なかった……。勝手な事だけど、僕はアイちゃんに夢を託したんだ。最もアイちゃんには言っていない。自分で勝手に思ってるだけなんだけど」

ハセベに面識のほぼないノドカには気付かなかったが、この時のハセベはとても活き活きとした眼をしていた。うだつの上かららない、と

いう印象位しかない彼が、だ。それだけアイに対して期待をしてると言うことだろう。

でも、正直、そう思われるのはノドカにとっては面白くなかった。アイがもう自分からどんどん離れてしまってる。という事を突き付けられてる様で……。

「……オジサンも、アイが好きなんだ」

憂いを帯びた声をノドカは出す。彼女にいつもの強気な感じはしない。

「ん？事件にならない分野でね」

「アタシもアイと別れたとき、お互い頼ってたから自立しようって約束したんだ。アイの方はうまく自立出来たみたいで、でもアタシの方は駄目だ。ずっとあの時から足踏みしたまま」

途中でノドカは言葉を止めた。

——アイツをいつもアタシが引く張ってたと思ってたのに、本当はアイがアタシの方を引く張ってくれてた。アイがいてくれたから……アタシ、今でもアイツに依存しかけてるんだ——

そう言おうとしたがさすがに親しくないハセベにここまででは言えない。というか、さつき漏らしてしまった言葉も気分的につい出てしまった物だ「何言ってるんだアタシは」とノドカは心の中でぼやく。

しかしハセベの解釈は「アイちゃんが離れていってるのが寂しい」と正解の解釈だった。

「……自分は余りに言える立場じゃないけど、別に無理に自立できなくてもいいんじゃないかな？」

「あ？」

「確かに変わろうとする事は大切だと思うよ。でも君は無理をしてる様にも見える。離れるにしてももっと時間をかけてゆっくりやるべきだと僕は思うよ。アイちゃんが引く越した時点で距離は離れてしまったかもしれないけど、きつと心の距離は変わってない。心の準備も出来てないで無理に離れようとする、もっと大切な物を失ってしまうよ」

「べ、別に無理なんかしてねえよ」とノドカは吐き捨てた。しかしそう

言われて少しは気が晴れたのだろう。少し表情が和らいだ感じだ。

——そっか……まだアイと一緒にいいんだ。——

そう思うノドカの横で、ハセベもノドカの事は大丈夫だろうと思
い。彼もまた、アイへ期待する自分の心について考えていた。

……かつて自分の失った物への後悔を想いに混ぜ込んで。

第47話『トラップを越えろ（前編）』（チーム、グラ ン・ギニョール登場）

見渡す限りの湿地帯、遠くに見える緑の山々、日本の山中をモデルにしたバトルフィールドでガンプラバトルが行われていた。フリーダムガンダムの改造機。フリーダムアルクスとAGE3ーフォートレスだ。バトルが始まって暫く経つがフォートレスの方が押されているらしい。程なくして空中からのフリーダムのビームライフルに右肩を撃ち抜かれ、右腕を破損。

「うわッ！」

爆発の衝撃を再現した振動がGポッドを襲った。ソウイチの頭がツーンと痛む。眼も痛い。最もこれは疲れ目から来る物だ。それだけ今日は多くバトルをやっていた。

「くっ！勝てない！なんでだ！」

Gポッドの中でソウイチは叫んだ。昼食が終わった後、ガンプラバトルの練習は続いた。バトルしていたのはナナとソウイチである。ソウイチが無理を言って申し込んだバトルだった。

「アサダ、もう何度もバトルしてるけど、そろそろ休んだ方が……」

「気にしないでください！これ位なんでもない！」

「飛んでるこっちに馬鹿正直に撃ってきて！動きどんどん悪くなってるっつのアンタ！」

ナナが毒づく。アイ達の中で一番経験の浅いナナでもソウイチが空回りしてるのは目に見えていた。彼はうまくいかない焦り、アイとの実力差の焦りからどんどん動きが荒くなっていた。

「ハジメさんに言われたらおしまいっス！」

「自覚はあるけどムカつくわー!!」

ナナの返答を表す様にフリーダムアルクスはハイマツトフルバースト、飛びながらの一斉発射をフォートレスに放つ。焦りから回避の遅れたフォートレスは回避しきれず直撃、沼の泥を巻き上げながら爆発した。

ナナの圧勝である。ソウイチの空回りによってどんどん彼の動きは悪くなっていった。

「ソウイチ君。いい加減一人にこだわるとやめようよ」

「解ってるっすよ。でも……」

「ワタシに言われた事、解ってるでしょう？あなたの意地を張る気持ちばかりですよ。でも……」

「ああもう、これじゃアタシがアンタに勝った事も素直に喜べやしないわ」

アイに続き、マコトとナナが続く。正直この状況のソウイチは見るに堪えない。

「だから解ってるって……」

「そうカツカするなソウイチ。そんなんじやわざわぎ見に来てくれたあの人に申し訳ないだろう」

あの人って誰スか？と言うソウイチにツチャは親指で示した。彼のよく知る人だった。

「ソウイチ、青春してるみたいね」

「……母さん!？」

ソウイチの母親、アサダ・カナコ（浅田加奈子）だった。息子とは対照的にやわらかい雰囲気がある。

結局あの後、大人しくソウイチは見学に移行していた。自分の醜態を母親に見せなくなかったからだ。その後ソウイチはアイ達と別れ帰路につく。今日は母親と一緒に帰りだ。

眼が痛い……自転車を手で押しながらソウイチはそんな事を考えていた。今日はずっと準決勝への特訓をしていたが、未だ自分で納得できる戦法は見つからない。夢中でガンプラバトルにかじりついてた所為だろう。眼球と頭がズキズキと鈍く痛む。時間帯は夕方、周りには社会人の人達や親子連れがまばらにいる。

「ちよつと今日は調子出なかつたみたいね」

「何やってんだらう。俺……」

母の言葉にポロツとソウイチの本心が零れた。本来ならアイと組めばもつと強くなれる。アイと協力した方が合理的、仲間にも散々言われてるし、自分だってそれが正解ってのは分かる。でもあくまで自分だけの力で、というのにどうしても拘ってしまおう。

「アイちゃんと組むの、やっぱり嫌？」

そんな事ないよとソウイチは返した。アイの事は信頼してる。友達だとも思ってる。でも彼女に対するライバル意識はまだ彼にとつてそのままだ。だからもつと時間的に追い込まれるまでつい一人に執着してしまうのだろう。

「そっか……」

息子のそんな心中を察してか。カナコはあまりあーだこーだ言う気にはなれなかった。その代わり、何か思いながらソウイチを横目で見つめる。

「？なんだよ？」

「いや、ついこの間まであんなに小さかったのに、大きくなったなって」

「?!さっきまでと話関係ないじゃん！」

「いいじゃない。変に口出ししたってアンタ悩むだけだし」

「つたく……ついこの間っていつさ？」

「お父さんのお葬式の時、かな」

随分前だな。とソウイチ。

「いつの間にか悩んだりで一丁前になっちゃって、お葬式の時、泣きながら『大人になったらママと結婚して楽させてあげる！』って皆の前で叫んでいたの、凄くよく覚えてるわ」

「……言ってるねえ」

一瞬ソウイチの顔が青ざめる。穏やかだった顔も引きつっていた。全く記憶にない。

「まあソウイチにとっては覚えてないだろうけど、私にとっては凄く救われた言葉だったなって思い出したの。結婚は無理だけどね」

「無理に決まってるだろ？後言ってるねえよ！ホントに！」

必死になりながらソウイチは否定する。とはいえ母の笑顔と「救わ

れた」という言葉に複雑な心境だった。言ってもいない事でつち上げられてからかわれてるのか、感謝されてる事にソウイチが照れてるのか、ソウイチ自身でも解らない。

「あーごめんごめん。……なんかね。今のアンタ昔のお父さんによく似てるわ」

「父さんに？」

五歳の時に死んだ父親だ。碌に思い出の無いソウイチは食いついた。

「病弱な人だったからね。自分が長生き出来ないって解っていたから一人で何でもやろうってこだわってた人だったわ」

「立派な人だったってのは知ってる人からよく聞いてたよ。父さんの職業って確か……」

父が死んだ後、ソウイチ達親子は父の残したお金や、祖父母や父に恩のある人に助けられていた。ある程度ではあるが、それが親子共々救いにはなった。

「高校教師よ。でもってお母さんはその時の生徒」

「生徒と結婚した時点で、立派な人ってのに疑問があるんだけど」

「それは、お母さんがワガママで無理やり通したわけだから、お父さんの方はノーカンよノーカン」

「不純だ」とソウイチは不快そうに顔をしかめる。そこを自分の子供に言うなよ。とも言葉で付け加えた。

ああ拗ねないでとカナコは言う。本当は幼子をあやす様に言いたかったが、ソウイチはこういうのを嫌がる。思春期特有のやり辛さをカナコは感じていた。

「でも意外だな。イメージとしては一人でなんでも決められたり、こなせる人だっと思ってたけど」

「そうでもないわよ。私と結婚したらお互い頼る様になってね。死んだ後の頼れる人を選んだのも、自分が死んだら自分じゃどうしようもないって解っていたからなんだから」

「だから他の人に頼ったって？……俺も次のバトルはそうした方がい

「いつて?」

「言い方が乱暴よ。……でもその通り。お父さんは自分が後悔しながら死にたくないって言ってたからそうしたわ。あんたの事だから言うわよ。ソウイチ、あんた今のまま意地を張り続けたら絶対後悔する」

「……っ!」

「最近のあんた見てるとなんだか感じが柔らかくなったわ。だからこそ今度のガン普拉バトルの大会はその感じでやって欲しいって私も思ってる。過去は過去になつたら動かしようがないんだからさ」

去年のガン普拉大会、ソウイチ達は地区予選での敗退だった。その時は実力も荒く、ソウイチの態度も荒かった。

「……しようがないな」

頭を搔きながらソウイチは漏らした。親の言いなりになるのは辛いが、親を悲しませたくもない。死んだ父親に絡む事となると尚更だった。

「今年は色々な意味でもチャンスなんだ。少なくとも俺のミスでチャンス逃すわけにはいかないからな」

「そうよ、どうせなら思い出はベストな形にしましょう」

翌日、ソウイチは己の行いを改め、連携の特訓、トラップの対策を重点的に鍛えた。そして一週間経ち、準決勝の日が来る。多目的アリーナ『ホワイトドーム』の通路でアイ達は集まる。

「成果を見せる時が来たっスね」

「うん、これに勝てばAブロックの決勝、更にそれに勝てば……」

「全国の切符が手に入る……ってわけだね……」

応援に来ていたムツミが言う。彼女とタカコも今日は都合が良かった為にアリーナに来ている。

「頑張つてね皆々。所で準決勝はあのごスロリ軍団って事で、決勝の相手は?」

「チーム『エデン』か、チーム『ライオンハート』、どっちも僕達には因縁のある相手だな」

ヒロは覚悟を表すかのように真剣な表情で告げる。

「チーム『エデン』……かつてヒロが在籍していたチームですね……。でももう一つの『ライオンハート』は聞いた事のないチームです……。どんな因縁が？」

「当然だよミヨさん、調べてみたけど『ライオンハート』はヤタテさんが来る前に俺達と一緒にいた奴が立ち上げたチームだからだ」

ツチャもヒロに続く様に答える。かつて、ソウイチがコンドウ達とチームを組む前にツチャとコンドウ、そしてもう二人の仲間は同じ集まりだった。しかしツチャの旧友、カモザワがその四人の関係を荒らしてしまい、愛想を尽かした二人はツチャ達の元を離れてしまった。

その後ソウイチがツチャ達のチームに入り、なおも好き勝手に暴れるカモザワはコンドウの怒りを買って追放。その後アイ達が引越してきたというわけだ。

「どちらも一筋縄にはいかない相手でしょうね。それに勝ったらBブロックの勝ち上がったチーム、ノドカのチーム『オベロン・テイターニア』ブスジマさんのチーム『前世代』」

「どつちにせよ強敵には変わりないね」

「はい皆、調子はどう？」

とその時カナコが様子を見に来た。

「あ、オバサン」

ふいにタカコがそう反応する。ヒロとソウイチを除く全員が「あゝ」と固まった。オバサンと呼ばれたカナコは表情が曇り、黙り込んだ。『まだ若いもん』と言わんばかりのオーラを出しまくりながら、

「すいませえんカナコさん!!!」

そう言いながらムツミは慌ててタカコにコブラツイストをかけていた。

「わ〜ごめんなさい！つて言葉のあやじゃん!!別にいいでしょムツミ〜いだからだ!!」

「ああもう面倒くさい！母さん！試合控えてんだから応援なら早いとこすませてよ！大体オバサン言われる年齢なのは合ってるだろ！もうすぐ333なんだから！」

ソウイチの駄目押しだった。その場にいた全員が更に凍りつく。しかし……

「う、そうね。皆、頑張ってるね。応援してるから」

別に態度を悪くした様子はない。大丈夫かと全員は思った。

「『大人になったらママと結婚して楽させてあげる！』って小さい頃言ってたソウイチだけど、もう立派に戦えるからね」

……大丈夫じゃなかった。カナコの引きつった笑顔での爆弾発言はソウイチと周りの顔を愕然とさせる。

「言ってねえええっ!!なんだよ今この状況で大人げねえ事を!!」

「フーンだ。世の中言っちゃいけないことあるんだから」

頬をぷうと膨らませながらカナコはそっぽを向く。

「いい年齢した大人のやる事かああ!!」

周りがまあまあとだめる中、それを見ながら「フツ」と鼻で笑う声が聞こえた。アイ達は一斉に声のした方を向く。そこにいたのは和ゴスと眼帯の少女、次のアイ達の対戦相手……。

『『グラン・ギニョール』の……』

「カンナミ・ツボミ（函南つぼみ）だ。子供みたいに馬鹿騒ぎをして、緊張感がないな。元から気位がないと思っていたけどこれ程とはね」

相も変わらずの挑発だ。アイ達はうまく受け流すが一人彼女に食って掛かる少年がいた。ソウイチだ。

「あんたも相変わらずっすね。舐められたくないならそんな態度取っていい理由にもならないと思うっすけど」

「おやおや、ママと結婚したいとか言ってた子供の割に背伸びした事を言うんだな」

「っ!!昔の話っすよ!第一覚えてねえ!!」

「親も親だな。大人げない態度を取って、まあお前らの親ならその程度だろうな」

「っ!あんたは!」

握り拳を作りながらソウイチはつぼみと名乗った少女を睨みつける。しかしそのソウイチの前にアイが右手を出し制止する。

「生憎だよ。こっちは立場あるビルダーなら楽しくやって、見てる人

達にもいい影響を与えたいってスタンスだからね。お高くとまるだけが立場や実力あるビルダーのする事とはとても思えないけど?」

怒気を含んだアイの声だ。静かな怒りがある分妙な威圧感がある。

「……フン。まあいい。最もお前たちが本当に実力あるビルダーかはこれから確かめさせてもらう、勝負が楽しみだな」

そう吐き捨てながら少女はその場から去っていった。アイの威圧感に押されたのか?と何人かは思ったかもしれない。

「嫌な奴ね。なんであんなのが強豪なんだか」

「まあ彼女の実力がどんな物なのか、お手並み拝見と行こう」

「あの、ソウイチゴメンね。お母さん大人げなかった」

「いいよ母さん。頑張るよ俺」

そしてバトルが始まった……。今回のバトルフィールドは『オーブ連合首長国オノゴロ島』。オーブという国は『ガンダムSEED』に登場した中立国であり、大きささまざまな島から構成される島嶼国である。

オノゴロ島はその中でも軍事の中心地であり、国防本部と軍事産業の中枢、『モルゲンレーテ社』の本社及び工場が存在している。平たく言えば今回のバトルは海沿いの都市のバトルとなるだろう。そうこうしてる内にアイ達の出撃準備は整い。後は母艦のアークエンジンから出撃するだけだ。

「ハガネ・ヒロ、ウイングガンダム・ノヴァ」

「ツチャ・サブロウタ、アツシマーデコレーション」

「ヤタテ・アイ、そして……」

「アサダ・ソウイチ!ガンダムAGE-3E『サラマンダー』!!」

「行くぜ! (出るよ!) (行きます!) (出撃する!)」

各々は声を上げつつカタパルトから出撃、薄暗い通路上のカタパルトから出撃すると青空と真つ青な海が出迎えてくれた。眩しさにアイ達は一瞬眼をつむる。アイ達のチームは海側からスタートだ。逆に向こうは山側から。

「あれだけ緊張してた準決勝だけど、観光みたいなフィールドだな」

「あの都市は軍事施設だけだね。ともかく気を抜かないで行こう！」
「そうですねヒロさん。ソウイチ君、落ち着いていこう」

「大丈夫。あの三兄妹から特訓も受けてたんすから。それにこの機体なら……」

アイとソウイチの機体、AGE-3Eのオリジナルウェア『サラマ
ンダー』フォートレスを改造した機体で、両腕にシュルムガルス
のナツクルを装備。（パーツ提供ブスジマさん）重心のバランスを取る
ためにAGE-1タイタスの両腕を尻尾に改造。更に以前アイが
作ったパーフェクトユニコーンの余剰パーツを仕込み、フォートレス
は接近戦もこなせる万能機となったのだ。

「コウセツさん達はトラップでやられたって言ってたけど……」

「海上だからってトラップは無しとは思えないが……来た!!」

ツチャは上を見ながら叫ぶ、と同時に何条もの細いビームが雨の
様に降ってくる。全機とも散開し回避、撃ってるのはじょうごの様な小
さな物体だ。ざっと見ただけで20近くはある。

「ファンネル?!誰が撃ってるってんだ!!」

ファンネル、サイコミュと呼ばれる装置によって特殊な脳波で操る
移動ビーム砲台、しかしガンプラバトルでは脳波でなくマニュアル操
作である。アイ達は分散させるべく散開、それぞれのファンネルがア
イ達を襲う。3つ分散しても5以上のファンネルが襲ってくる。

「時間はかけてられないな!ならば!」

ヒロはツインバスターライフルを分割し、左右に一丁ずつ向ける。

「ヒロさん!まさか!」

「離れて皆!」

と、バスターライフルをすぐさま発射、そして回転し周りのファン
ネルを一掃する。半分以上のファンネルはそれで破壊出来た。そこ
から少し離れた場所でファンネルを飛ばした機体が隠れていた。自
分が飛ばしたファンネルが破壊されてもこれ位は予想出来ていた。

「……第二陣出撃……」

声の主は消え入りそうな声で呟く。直後、近くの小島や雲の中に待機させていた残りのファンネルを飛ばした。アイ達もこれには驚く。「おかわりかっ！撃ってる奴が見えない！海の中から撃ってるってわけスか?!」

「海か！ヤタテさん！こないだのあれで行こう!!特訓の時の!!」
「うーうん!!」

何をやるかは全員が分かった。飛行出来ないサラマンダーは一旦分離し上昇、構成するのはコアファイターと、改造したGホッパー、『Gドレイク』だ。

続けてアツシマーとノヴァは変形し追うように飛翔、ファンネルはそれを阻止すべく執拗に撃ち続けるが、高速で飛んでる4機には当たらない。

そしてサラマンダーは高高度で再合体、ノヴァとアツシマーも変形、サラマンダーの隣で停止すると、全機が最大のビーム兵器を海面に撃ち込んだ。直後、撃った地点の海は大きく膨れ上がり水蒸気爆発を起こす。

全機の火力を集中させた威力は前回の比ではない。大規模な爆発とそれにより飛び上がった海水は大規模な天気雨になって降り注ぐ。それに伴いファンネルも爆発に巻き込まれ一掃出来た。

「で、やったの?海の中の敵は?!」

「いやー見ろー!」

「っ!何だあれ!」

ツチャは空のある地点を指差す。そこには一か所だけ色が濃い空があった。濡れているのだ。何かが布を纏ってる。

「あれがファンネルのトリックだね!っ?!」

直後、水中を突っ切って四つの物体が空中に飛び上がってきた。緑色のスペースシャトルの様な形状のバインダーだ。先端部にはサブアームとビームサーベルが取り付けられており。アイ達に突っ込んでくる。

「うわっ!あのバインダーは!」

アイ達はが叫びながら回避かビームサーベルで切り裂こうとする、しかし同時に布の中から大型ビームが放たれてきた。

「なにっ！」

ビームはかわしたがその所為でバインダーの破壊は出来なかった。そしてバインダーは布の地点に集まる。そして布の中から手が突き出し、纏った布を引き裂き正体を表した。それは。

「やはりクシャトリヤか!!」

ツチャの叫びと共にバインダーが4枚本体に合体。『ガンダムU C』に登場したネオジオン残党『袖付き』の機体。アイ達の機体より一回り大きいサイズの機体だ。四枚のバインダーにスラスタやファンネルを集中させており高い攻撃力と機動力を誇る。このクシャトリヤにはビルダーズパーツHDのファンネルが二個分搭載されておりファンネルの数が倍近くになっていたのだ。

そして蝶のデカールがバインダーによく貼られている。

「そうか！カメレオンクロスか!!」

試合を見ながら叫ぶコウセツに「え？」とムツミが短い疑問の声を上げた。

「布の片方を空の色で、もう片方を情景スプレーで塗ってあるんだ。それをガンプラに纏わせて簡単な擬態をしたってわけだ」

「最も完璧に全身をくるんできると放熱とか問題もあるから不用意に動けないんだがな」

ナダレもコウセツの解説の補足を行う。

「だからあそこから動かなかったわけですか……」

「へーなんか凄そうな敵が出てきたねーあんちゃん」

別の観客席でアイの試合を見ていた女の子が声を上げる。ケイ・チトセとその兄達、ケイ三兄弟だ。

「どうだかな。小細工を使ってる様だがヤタテには通用するとは思えないぜ」

長男マツオが冷静に返す。

「なんか冷静だねあんちゃん。ハラハラしないの？」

「格闘技つてのは番狂わせはねえ、必ず実力が上の奴が勝つ。あいつらやヒロが。所でお前の方こそいいのか？向こうの試合を応援しなくて」

マツオはアイ達の試合の反対方向を指さした。マスマミ達チーム『エデン』と『ライオンハート』の試合だ。急にチトセの頬がむくれる。「いいの！私の事ないがしろにした奴の試合なんか!!」

さて、アイ達の方に話を戻そう。クシャトリヤのビルダーは無言でバインダーを開き浮遊機雷をばら撒く。拳にも満たない大きさだがスギ花粉の様にばら撒く。数は優に100を越えていた。

「あのクシャトリヤ！バインダーがリペアードの方だ！」

クシャトリヤのガンプラにもバリエーションはある。バインダーの部分だけはリペアードと呼ばれる物に換装されている。リペアード版はバインダー開閉ギミックがあり、中にファンネルミサイルを搭載出来る仕様だ。だがこのクシャトリヤはファンネルの代わりに機雷やらトラップやらを搭載しているとアイ達は判断する。

「大方バインダーでトラップをばら撒いてたって所!？」

「……」

無言だ。聞く耳は持たないらしい。

「言いたくないならそのまま退場してもらおうよ!!機雷ごとこの一撃で!!」

ヒロはノヴァアのツインバスターライフルを構え、機雷ごとクシャトリヤを狙い撃とうとする。その時だった。ヒロのGポッドに警告音が響く。

「っ!？」

とつさにヒロは回避行動を取ろうとするが敵の弾速は早い、撃つ寸前だったツインバスターライフルは撃ち抜かれ破壊されてしまう。

「バスターライフルが?!」

「面倒な武器だったから破壊させてもらった」

少し離れた場所に、飛びながらロケットランチャーを構えた機体が

見えた。旧大戦の軍人の様なフォルムの機体『ガンダムUC』に登場したギラ・ズールだ。赤紫に塗装されており、薔薇のデカールが目を引き。アメジングザクのパーツが取り付けられており、武装はミサイル、ヒートナタ、リボルバー、ロケットランチャーと距離を選ばない改造が施されていた。それは飛行可能な程の推力を得ていた。

「それじゃあ本体は私が仕上げるよ」

聞いた事のない声が響くとノヴァの頭上が暗くなる。上を見るともう一体のギラ・ズールが斬りかかってくる。白い塗装に背中の中文字のバインダー。蜥蜴のデカールが貼られており、目をひく武装はつま先とビームライフル先の鋭利な剣、それが左手のビームトマホークで斬りかかってくる。こちらにも飛行可能な様だ。

「っー」

ヒロはビームサーベルでビームトマホークを受け止める。それを追い打ちとばかりに再び赤紫のギラ・ズールは長距離からノヴァを狙い撃とうとする。

「させるかあ!!」

アイとソウイチのサラマンダーは飛び上がり、手甲のビームサーベルで斬りかかる。赤いギラ・ズールは左手にヒートナタを持つとサラマンダーのビームサーベルを受け止めた。

そのまま離れたギラ・ズールはクシャトリヤと合流、白いギラ・ズールもアツシマーの援護によってノヴァから離れざるを得なかったようだ。三機それぞれがアイ達に相對する。

「やはり『女王』と呼ばれたビルダーと言うことか。一筋縄じゃいかな
い」

「そんな迷惑な二つ名、持っても嬉しくないんですよ」
「そうですか。では力づくで奪いましょう。そうでなければ意味はありませんから」

白いギラ・ズールのビルダーが口を開いた。赤紫のギラ・ズールのビルダーと対照的に温厚そうな口調だった。

「二つ名が相応の物かはすぐにわかるさ。……それでは我ら『グラン・ギニョール』の公演、存分にお楽しみくださいませ」

そういつてツボミと名乗った少女達は恭しくお辞儀をする。

「ヌマツ・ナエ（沼津苗）　ギラ・ズール・アイスバーグ（白いギラ・ズール）、そしてこっちはアタミ・モエ（熱海萌）とクシャトリヤ・エクレー
ル」

「……」

頑なにクシャトリヤのビルダーは言葉を話そうとしない。それを理解してるのか白いギラ・ズールのビルダーが代わりに紹介した。

「そしてカンナミ・ツボミ（函南つぼみ）、ギラ・ズール・ウタゲ（赤紫のギラ・ズール）……グラン・ギニョール!!開幕!!」

つぼみの一声によって三機は散開、そして一斉にアイに銃口を向けた。狙いはアイ一人というわけだ。全機が一斉にアイを狙ってくる。

※ちなみにウタゲ（赤薔薇）、アイスバーグ（白薔薇）、エクレー（緑薔薇）、全て薔薇の品種名ある。）

「くっ……こっちを集中攻撃で！」

飛び続けると浮遊機雷でロクに回避も出来ない。アイ達は着水するとホバリングしながら攻撃を回避、同時に両腕のガトリングガンを展開しつつ敵と機雷を迎撃しようとする。しかしそれぞれが早い為にラチがあかない。相手三機も着水すると水上を走りながら距離を詰めてくる。

「ヤタテさん!!彼女の相手は俺がする！」

ツチャのアッシマーがギラ・ズール・アイスバーグ（以下アイスバーグ）にトマホークで斬りかかる。アイスバーグもビームトマホークでそれを受け止めた。

「アッシマーですかー!いいですよお！」

瞬時に離れ二機とも高速でぶつかり合う。それを見ていたクシャトリヤは残った数個のファンネルで援護しようとするが、

「余計な手助けはやめてもらいたいもんだな！」

ヒロのノヴァがクシャトリヤに斬りかかり援護を阻止する。クシャトリヤもビームサーベルでノヴァのビームサーベルを受け止める。サイズの事もあってかパワーはクシャトリヤの方が上だ。しかしスピードはノヴァの方が上、

機雷の隙間を縫うような速い動きでノヴァは斬りかかりヒットアンドアウェイを繰り返す。反面クシャトリヤは凶体の所為で思うように動けない。胸部のビーム砲で機雷をまき込み誘爆させようとするがノヴァは早くうまくいかない。

「……」

と、クシャトリヤのビルダーは何か思いついたらしい。ノヴァと切り結ぶ瞬間、開いていた方の手でノヴァを掴むとそのまま真下の海へ突っ込んでいく。

「ヒロさん?! (ハガネさん?!)」

「っ?!何を!!」

ビームサーベルでクシャトリヤの腕を切り落とそうとするノヴァ、しかしその行動の前に、海に突っ込んだ二機は大きな水柱をあげて海中に潜っていった。これによりアイの相手はツボミのギラ・ズール・ウタゲ (以下ウタゲ) のみとなった。

「皆、大丈夫だよね」

「でも一応これでフェアになったっす!!信じるしかない!!行きますよ!!」

「おっしや!!」

サラマンダーの手甲からビームサーベルが発生し、ウタゲに斬りかかる。ウタゲもまた両手にヒートナタを構え突っ込んでくる。

その頃のツチャとナエの戦いである。オノゴロ島高高度、機雷の無い位の高度で二機は激しくぶつかっていた。ツチャはアツシマーのパワーを活かして短期で決めたかったが、戦ってみてやり辛さを感じていた。

「このおっ!!」

ツチャはアッシマーのトマホークでアイスバーグに斬りかかる。アイスバーグは銃剣で受け止めると即座に蹴りを入れてこようとしてくる。アイスバーグのつま先にはナイフが取り付けられているのだ。

とつさに離れるツチャのアッシマー・デコレーション、かといって中距離のアイスバーグは背中サブアームからハンドガンとビームガンを連射してくる。動きが早い上に迎撃用の装備が非常に充実しているのだ。足を止めての近接戦闘は非常に危険である。

「あの三兄妹を倒しただけあるな。ならば!」

アッシマー・デコレーションは変形、背中ライトニングバックウエポンからミサイルを撃ちつつ高速でかく乱、射撃でアイスバーグを追い詰めようとする。アイスバーグもまた撃ち落とそうとアッシマーに追いつがる。並走する二機。

「この子についていけそうな機体ですね!面白い!」

二機とも青空をバックに後ろを取り、取られの高速戦闘をこなす。普通、高速戦闘はガンプラの出来によって機体に相当な振動や負荷がかかる。しかしアイスバーグに乗ったナエはしれっとしており、その出来栄えが分かるだろう。

「人型のままあの速度を保つのか?!」

「確かに空気抵抗がちよっときついですけど!イニシチアブは!」

そのままアイスバーグはビームトマホークでアッシマーに斬りかかる。

「手持ちの武器が使える事ですね!」

「くっ!」

ツチャはアッシマーを反転、機体の右部分、トマホークの刃の部分でビームトマホークを受け止めた。

「ほおっ!やりますわね!!」

「お互い様だ!一対一なら!」

「へえ、でしたら!」

その時だった。ツチャのGポッドに警告音が走る。「なんだ?!」と

ツチャは警戒するが下の陸地の方、モルゲンレーテ社から小型のミサイルがいくつも発射されるのが見えた。正面からこっちに向かって、「な！なんだああ!？」

ミサイルはアツシマーの周囲で爆発を起こす。

「真下がモルゲンレーテなのはまずかったですね！」

「くそっ！誘導されていたのか?!」

うまく爆発郡から抜け出そうとするアツシマーだったが、アツシマーを取り囲む様にミサイルは放たれていた。360度から飛んでくるミサイル。アツシマーはたまたまらず真上に上昇。それがアイスバーグのついている隙を与えてしまった。

「いただきます!!」

「なっ！」

丁度アツシマーは反転しかけた所為で機体下部、つまりコクピットをさらけ出してる状態だった。そのままコクピットめがけてビームトマホークを振り降ろすアイスバーグ、変形してトマホークで受け止めるか。と、ツチャは考える。しかし間に合わない。とつさにアツシマーは体を180度半回転、アイスバーグに背中を見せる体勢となった。ビームトマホークはアツシマーの背中中の装備、ライトニングバツクウエポンを切り裂く。

「いまだっ!!」

即座にツチャはライトニングウエポンを切り離し、MS形態に変形、ビームライフルをライトニングウエポングしに撃ち込んだ。

「なあっ!!」

一撃で決めることは出来なかったらしい。しかしアイスバーグの右腕は肩ごと貫通出来た。このまま畳みかけようと思ったが、なおもミサイルは飛んでくる。場所を離れようとツチャは再度変形させその場を離れた。

「くっ！待ちなさいー！」

追いかけるアイスバーグ。

そしてこちらは水上戦のアイ達とツボミ。ウタゲは背中中のミサイ

ルを撃ちながらヒートナタで襲い掛かる。サラマンダーの方はビームサーベルは出しながら、ガトリングガンで引き撃ちしながらミサイルを迎撃、爆風の中をウタゲは突っ切ってくる。サラマンダーはヒートナタをビームサーベルで受けた。

「女王、パワーはある方だな」

「余裕だねー」

盛り返そうとするサラマンダー。が、ウタゲは膝蹴りを相手の腹部に叩き込みサラマンダーを後方に吹っ飛ばした。しかしダメージはそれほど無い。追撃でブースターをふかしたウタゲは左手のヒートナタをサラマンダーに振り下ろす。が、サラマンダーはすぐに体勢を立て直し左に回避。

「くうっ！」

「立ち直りが早い！並のガンプラならこれで壊れてたのに！」

そのままウタゲは体勢を変えずに左手のヒートナタを逆手持ちにし、左のサラマンダーに突き刺そうとする。

「させるかあっ！」

が、アイも読んでいた。ヒートナタ目がけて左の手甲でパンチをかます。

「っ?!」

分が悪いと感じたツボミはすぐさま身をかがめる。機体のギリギリ上をパンチとビームサーベルが掠める。すかさずツボミはミサイルポッドをサラマンダーに向けて発射、サラマンダーはとっさに右手の手甲で防御する。すぐさま二機は離れる。

「くっ！かなりの手練れだね！これは！」

「チャージ無しでシグマシスキャノンが撃てればこんな奴！」

「大丈夫。パワーはこっちの方が上だから！」

「フン、それがどうした？」

その時だった。ツボミの言葉と同時にウタゲの後方、軍事工場モルゲンレーテの方から、小型の物体が幾つも雲を弾きながら飛んでくるのが見えた。

「ヤタテさん?!あれは!」

ソウイチが叫んだ。小型ミサイルだ。ゆうに百発はあろう、それが横一列に並びながらこちらに飛んでくる。

「ミサイルポッド?!あれも設置したトラップ?!なんて数!」

「お前達を倒す為に大判ぶるまいよ」

「チツ!」

ウタゲは巻き込まれない様に離れるが、後退しながらもロケットランチャーでこつちを撃つてくる。ノヴァのバスターライフルを破壊した弾丸だ。受けたらまずいとアイ達は判断。チャージしたシグマシスキャノンでミサイルを薙ぎ払おうとする。

が、そうさせまいとウタゲが執拗に撃つてくる。チャージは出来ても撃つのに足を止めるからだ。かといってガトリングガンで迎撃しようとするもミサイルの数が多すぎる。

「クツ!だったら距離をとれば!」

距離を置けばミサイルの射程から逃れられるとアイとソウイチは判断。もつと沖の海でウタゲの相手をしようと考えてる。しかしその直後だった。

『ドンツ!!ドドンツツ!!』

少し離れた場所で爆発の水柱が上がるのが見えた。そしてその中からヒロのウイングノヴァが飛び上がるのが見えた。

「ヒロさん!!(ハガネさん!!)」

「アイちゃん!海の中は機雷で一杯だ!しかも!」

言い終わらないうちにファンネルのビームが数条、ノヴァを襲う。うまく回避しながらノヴァは飛び上がる。後を追うようにクシヤトリヤが水面から上がってくる。と、同時にいくつもの十字状に棒が突き出た丸い物体が海からゆっくり上がってきた。それも、周囲の海から一斉にだ。その数は100か200か。浮かんでる浮遊機雷と同じ形だ。

「やはり最初に僕達をファンネルで足止めしていたのは機雷やミサイルを設置する為か!」

「そう。お前たちが呑気にファンネルの相手をしていたおかげでばら

撒きやすかったな」

「やっぱりクシャトリヤのバインダーを全部コンテナとして使ったんだ」

公式でバインダーごとファンネルとして使用出来る設定だからこそ出来た戦法だった。

「ヤタテ・アイ、私達はお前を倒す為にこの大会に出た。勝たなければ出た意味はない」

そうこうしてる内に アイ達の回りにもハイドボンブが上がってきた。周りはクシャトリヤとウタゲ、こちらは状況のどんどん悪くなっていった。

※後半へ続く。

第48話 『トラップを越えろ（後編）』（覚醒・ガンダムAGE—3Eサラマンダー）

「ヤタテさん!!」

そこへ一機の変形したアツシマーがビームライフルを撃ちこみながらアイ達に合流した。ツチャのアツシマーだ。ウタゲとクシャトリヤは回避するもアツシマーの合流を許してしまう。

「このままじゃジリ貧だ！モルゲンレーテの方へ！」

「でもミサイルが！」

「ミサイルなら設置型だ！弾切れを待つか懐に飛び込んで一気に破壊すれば！」

「やらせるか!!」

そう言ってウタゲはハンドガンでハイドポンプを撃つ。それによって起きた爆発は近場のハイドポンプを巻き込み連鎖爆発を起こす。しかしその爆発でも安心は出来ない。爆風の中にウタゲとクシャトリヤは射撃を撃ち続けた。爆風が晴れるとそこにはアイ達はいない。

「やったか?」

直後、ウタゲとクシャトリヤの後ろから水しぶきと音がした。振り返ると分離したサラマンダーが飛んでいくのが見えた。水面すぐ近くを潜ったのだ。向かった方向はモルゲンレーテ、すぐさま後方から撃ち落とそうとする二機、だが二機のビルダーはすぐさまハツとする。そして横に身をひるがえす。

直後、近接武器を構えたアツシマーとノヴァが突きの体勢で海中から飛び出してきた。ツボミ達を狙ったわけだ。とっさの回避で空振りとなったが。

「あーおしい！通りたかったら俺達を倒してからにしてもらおうか！」

仕留められなかったと分かるとすぐ離れる二機、だが直後、右手を失ったアイスバーグがアツシマー達の前に躍り出る。ナエがアツシ

マーを追ってきたのだ。

「だったら私も混ぜてくれないかなあ？ツボミ、あなたは女王を追って、ここは私達が」

「ナエ、結構やられたみたいだが大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。でもここままだよちよつとスツキリしないから、あのアッシマーと決着をつけたいかな。なんてね」

「分かった」そう言うのとツボミのウタゲはアイ達の後を追いかける。そして入れ違いにナエのアイスバーグがツチャ達に立ちはだかった。そんなツチャにある考えが浮かぶ。

「……ヒロ、君は彼女の後を追ってくれ」

「っ!?!ツチャさん?」

「君の方が俺より足が速い。ヤタテさん達が何かあつた時に援護してやってくれ」

「でも損傷したアッシマーであの二体を相手にするんじゃない?」

「大丈夫だ!それに、こんな所で俺達は止まれない。そうだろう?」

——君にはやらなきゃいけないことがある——そう言いたげな声だった。そしてヒロもそれは理解出来た。

「……解りました。頼みます!」

そう言うのとヒロのノヴァはライフルが無いにせよバードモードへ変形、すぐさまツボミの後を追った。

「あつ待ちなさい!私のメンツが!」

アイスバーグがノヴァを追おうと飛ぶが、すぐさまアッシマーが右手のトマホークで斬りかかる。アイスバーグはビームトマホークでそれを受けた。

「気にするな!ここで俺を倒す方が大きいメンツだろう!」

すぐさまアッシマーはアイスバーグを払いのける。と、クシャトリヤの背部からファンネルが六つ射出、アッシマーを補足しだした。温存していたファンネルらしく形は筒状ときつきまでとは違っていた。

「どっちもですよ!!」

「行かせない!!」

コアファイターとGドレイクを追いながらロケットランチャーで撃ち落とそうとするツボミ、しかし二機とも軽快な動きで正面からのミサイル郡を、そして後方からの射撃を回避する。全員が必死だった。

「後少し！」

「ミサイルポッドが……あれかあ!!」

モルゲンレーテの工場地帯が目視できると同時に設置されたミサイルポッド郡が見えた。目指すはあれらの中心部。あそこに合体して降り立つ。

「中心部の高高度で合体、降り立ったらシグマシスキャノン発射だよ！」

「多少のダメージは覚悟の上っス！やってやるう!!」

「させるか！撃ち落としてやる！」

コアファイターの合体を阻止しようとロケットランチャーをコアファイターに向けるツボミのウタゲ、しかし……

「こつちのセリフだあ!!」

「!?」

ウイングノヴァがバードモードから変形しライダーキックをウタゲにかます。ロケットランチャーの両手持ちで集中していたツボミはノヴァの蹴りをモロに食らう。

「ぐほっ！くっ！貴様!!」

そうこうしてる内にコアファイターとGドレイクはミサイルをかわしながら真上に飛ぶ。そして隙を見て合体。すぐさま真下、ミサイルポッドの中心部に降り立つ。全てのミサイルポッドが一斉にサラマンダーを狙う。

「発射OKっス!!」

「撃てえええっつ!!!」

直後サラマンダーのシグマシスキャノンは最大出力で発射、まず発射進路上のミサイルポッドを破壊、そのまま尻尾のバーニアを横に向けて噴射させ、ホバーのサラマンダーを回し始める。そのままサラマンダーはシグマシスキャノンを発射しながら機体を360度何度も

回転させる。射程上の物体は全て破壊。

「なっ!!」

「ローリングバスターライフルの応用か!うまくいったな!」

その破壊力にミサイルポッド含むモルゲンレーテ社自体が火の海と化していった。ウタゲとノヴァも巻き込まれまいとその場から離れる。しかしそんな中でも二機は剣を交えぶつかりあった。

「これでもう条件は五分と五分だ!観念するんだな!」

鏢迫り合いのヒロとツボミ、だがツボミは余裕の態度は崩さない。

「まさか、ミサイルを破壊された位で何を得意げに」

「しらばっくれるな!」

「だったらあれをしてみるんだな。あの女王の周りを」

「何!?!」

鏢迫り合いをしながらもヒロはノヴァの頭をサラムンダーの方に向けた。そして愕然とした。

「あ!あれは!」

さて、こちらはツチャの方、シグマシスキャノンの光はこちらでも確認できた。ツチャにはそれが成功の証拠と判断した。

「ヤタテさん、やったんだな!」

しかしアッシマーの方はもうボロボロだった。アッシマーの頭部と左腕は破損。全身も亀裂が入りボロボロなのは誰が見ても分かる。残った武器も右手に持ったトマホークだけだった。

「余裕じゃないですか。あなたはもう瀕死だというのに」

「だが勝つね、俺達は。女王だかなんだか知らないが、アイツらの強さが俺が一番知っているから」

「思うだけなら誰だってそう思えます!」

とどめとばかりにアイスバーグはアッシマーに斬りかかる。アッシマーはそれをトマホークで受け止めると最後の力でビームトマホークを払いのけた。勢い余って双方のトマホークは手をすっぽ抜け、同時に海の中へ沈む。

「っ!」

「おおおっ!!」

武器を失ったアツシマーは残った右手で全力パンチを繰り出す。とっさにアイスバグはそれを左手で受け止めた。強い衝撃がアイスバグに、ナエのGポッドに襲い掛かる。

「ぐうっ!!こーこの!!」

「まだまだあーもう一発!!」

渾身の一撃を放つ気迫だった。予想外の展開とツチャの気迫はナエを驚かせるほどだった。だが……その直後だった。アツシマーの全身を何条ものビームが撃ち抜いた。

クシャトリヤのファンネルだ。そのままツチャのアツシマーは海中に沈み爆散。勝負の最後はあっけなくついた。

「モエ、助かったわ。ありがとう」

「……ごめんね、手を出して……」

かすれた様な小さな声でクシャトリヤのビルダーは答えた。「気にしないで」とナエは答える。ナエの相手だからと自分は控えめにしていたのだが、ツチャの気迫にそうはいかないと思っただけらしい。

そしてアイ達の方は、

「あーあれは!」

サラマンダーを取り囲む様に、三つのカプセル状の物体が地面から高速でせり上がってきた。配置はトライアングル状、アイ達もその存在と正体のに気づいたようだ。

「これって……!」

「っ!ヤバイ!ソウイチ君!早くここから離れなk」

アイが言い終わる前にカプセルは開き、内部機構が露出、三点を結ぶかのようにプラズマ結界が走る。トライアングルの中にいたサラマンダーは高圧電流にさらされた。

『うーうわあああああああ!!!』

二人の叫びが重なる。猛烈な振動が二人のGポッドを襲った。

「やはりプラズマリーダーか!!」

「そういう事だ!こうなった時の備え位用意してある!」

どうにかプラズマリーダーを破壊出来ないかとヒロは考える。プラズマリーダーは三基揃って初めて結界を発生出来る。一基でも破壊できればプラズマ結界は止められる。しかしウタゲはノヴァを離そうとしない。ノヴァもウタゲの相手で精いっぱいだった。

「時間の問題だ。弱り切った女王達を倒し、私達の方が価値があるとお姉さまに理解してもらおう！アハハハ!!」

「くそおおお!!お姉さまお姉さまって!なんだって俺達が狙われなきやいけないんだ!!」

サラマンダーに乗っていたソウイチが叫ぶ。アイも気になっていた疑問だった。

「フン……お姉さまはヤタテ・アイ、女王と呼ばれたお前を倒そうとしていたのよ。お前の肩書『女王』という二つ名を奪うべくね」

「何?!」

ノヴァと斬り合いながらもツボミはまくし立てる。

「女王、女神、美しさと強さの調和、そう言った称号は全てお姉さまが独占すべき名だ。私達に倒される位ならお前らが持っても意味なんてない。だからお姉さまにその名を献上する」

「くっ!そんな理由で……!」

「我慢ならなんだよ。敬愛する人が自分達より、ロクに顔も知らない人間に夢中になるなんて」

「トラップばかり使うような方法で勝って!!それで称号奪えるって言うのかよ!」

「子供の理論だな。他人は結果しか見ない。過程なんて見やしない」
「っ!」

ソウイチは口ごもる。自分も持っている持論だったからだ。

「お前は何の為にバトルをする?私はお姉さまの為にする。私達が強者と認められれば、私達の師匠でもあるお姉さまもまた強者と認められる。親なんかに現をぬかすお前とは違う」

「……!」

「楽しいからだけじゃ不満ですか!」

アイの結界の中からの訴え、しかしツボミはその考えを一蹴する。

「ハッ！情けない！女王がそんな低俗な考えとは！そして相方は自立も出来ない子供、上昇志向の理由からしてお前達とは違うんだよ」

自立できないという言葉。とモニターでほとぼしる電撃。

——…自立出来ない。だと?!——

言い返そうとした。でも出来ない。『そうかもしれない』と自身を考えてみて思ったから、それはソウイチにとって昔の記憶を一瞬思い出す。

——俺は昔、家で父さんの部屋が自分の部屋になった時、押入れの隅っこで父さんの遺品、ガンプラの沢山入った箱を見つけた。

父さんはガンダムやガンプラが好きな人だった。…なんで俺はガンプラとガンダムを始めた？それは、俺が病弱な父さんに遊んでもらった記憶がないから。父さんの好きな物を知りたかったからだ。…きつかけは父さんの好きな物で…父さんを越えたかったから。

…自立は出来てないかもしれない。でも!——

「あなたはっ!!」

「大人を気取る子供がっ!!」

アイもヒロもその態度に怒りを表す。だがその言葉がソウイチの心にとって引き金となった。

——でも!!俺の！俺達の上昇志向の意思は!——

「好きでやってて何が悪い…!」

「えっ?」

ボソツと呟くソウイチ、直後表情は激情の顔となり叫んだ。

「楽しくてやってて!!思い出の為にやって何が悪いって言うんだああっ!!!」

ソウイチはサラマンダーのコントロールを自分に切りかえる。そしてテールブースターを最大出力で吹かす。進行方向は右側のプラズマリーダー発生装置。そのままサラマンダーは発生装置に激突、発生装置は破壊されプラズマ結界も消え失せる。

「ソ！ソウイチ君！無茶するなあ!」

むくりと満身創痍のサラマンダーは起き上がる。ゆらつとウタゲに向き直った直後、最大出力で突撃。最大出力の上乗せでサラマン

ダーはウタゲに全力のパンチをかました。

「なっ!!」

とつさにシールドを構えてウタゲは防御する。が、その衝撃は強い。シールドは砕け散り、ウタゲは大きく吹っ飛ばされた。

「ソ・ソウイチ君……」

「くっガキがあああ!!」

倒れこんだ状態から起き上がるとうとするウタゲ、そんなウタゲの左右にアイスバーグとクシャトリヤが合流する。

「ツボミ、大丈夫?」

「二体共無事なのか?!じゃあツチャさんは!!」ヒロは叫んだ。

「倒しちゃいましたよ。立派なビルダーでした」

「こつちの有利は変わらないというわけか。まだまだいけるな!」そう言つてツボミはヒートナタを構え再びサラマンダーに襲い掛かる。

「ソウイチ君!コントロールを私に!」

「待って!ここは俺にやらせて下さい!!」

「えっ!」とアイは一瞬戸惑う。

「絶対勝つてみせます!!俺を信じて!!」

今までの印象の違う言葉だ。なんだかアイはそれが信じられる気がした。

「分かった。お願いね!」

そしてヒロの方、こちらはアイスバーグと交戦しようとしていた。そこから少し離れた地点でクシャトリヤがファンネルで両方の決闘を援護しようという図式である。

「次は君です」クシャトリヤから予備のビームトマホークを受け取ったアイスバーグ、そのままノヴァに向き直る。

「……ツチャさんを倒して僕まで倒せるって!思い上がりだな!」

ノヴァもビームサーベルを構え突っ込む。ノヴァはファンネルの迎え撃つ中ジグザグに動きファンネルの射撃をかく乱。その勢いでアイスバーグに斬りかかった。火の海となったモルゲンレーテで各々の決闘が始まる!

そしてこちらはアイの方、ウタゲとサラマンダーはぶつかり合う。両手でヒートナタを構え。援護のファンネルで牽制を行うがサラマンダーの手甲で防がれるか、かわされるかだ。ウタゲは突っ込んできたサラマンダーのビームサーベルをヒートナタで受けた。

「あの三兄妹を倒したからどんな凄いビルダーかと思ったら拍子抜けだよー！」

「なんだとー！」

「確かに実力はあるみたいだけどね！人を親を馬鹿にする様な三流ビルダーだったとはねー！」

「そうっスね！この分じやあんたの言うお姉さまとやらもたかが知れてる!!」

「っ!!貴様ああ!!」

激昂するツボミ。それに合わせてウタゲのパワーが増していく。と、同時に本体が、そしてヒートナタが怪しく赤く輝きだす。アイ達もよく知ってる輝きだった。

「これってー！」

「ガン普拉魂スか!!」

「お姉さまを悪く言うなああ!!」

赤く輝くヒートナタは大きさ自体は変わっていない。しかしその威力は桁外れに上がっていた。サラマンダーのビームサーベルを碎き、そのままヒートナタを受けていた右手甲を拳ごと切り裂く。

「なっー！」

すかさずクシヤトリヤのファンネルが援護の射撃を行う。回避しきれなかったサラマンダーはビームを右肩に受け小破、右腕は完全に使えなくなった。

「お姉さまはー！私達に信じる道を行けと示してくれた人だ!!何も知らない癖に!!」

そのまま決着をつけるべくウタゲは両手のヒートナタを振り上げ突撃。

「年増みたいっスね！ヒステリー起こしてええっ!!」

ソウイチも残った左腕に力を込める。激昂したソウイチの魂が、サ

ラマンダーの左腕のビームサーベルを巨大に、そして長大にする。ソウイチのガンプラ魂もまたサラマンダーにブーストをかけていた。

「ソウイチ君！ガンプラ魂を!」

「アンタの分も下さい！ヤタテさん!!」

「いわれずとも!!」

アイの魂も上乘せして一層ビームサーベルは強く輝く。

「なっ!」

「アンタがお姉さまってのを大事に思ってる様に！俺達だって大切な人がいるんだ!!自分だけが！特別だと思うなよおお!!」

サラマンダーはその場で周囲にビームサーベルを振り下ろす。クシャトリヤの放ったファンネルはその場で叩き落とされる。そしてウタゲに迫る。ツボミはナタを交差させてそれを受ける。片腕とはいえパワーはサラマンダーの方が上だ。ヒートナタの刃にビームサーベルが食い込んでいる。溶断しているのだ。

「くっ!大切な人だと!!お前の場合は親だろうがああっ!!」

すぐさまウタゲはヒートナタを手放して横に回避、両手にリボルバーを持ち、撃ち落とそうとするが間に合わない。サラマンダーはウタゲを突き刺そうと突っ込んでくる。

「親が大切で何が悪いって言うんだああっ!!」

やられる!そう判断するツボミ、……次の瞬間だった。誰かがウタゲを横に突き飛ばした。

「っ!?!」

「モ！モエー!」

突き飛ばしたのはクシャトリヤだった。クシャトリヤはコクピットに深々とビームサーベルを食らい、誰が見ても致命傷だった。

「……ツボミ……そんなに怒っちゃ……怖いよ……」

そう言つてモエは左後方のバインダーを開いてウタゲに武器を射出する。ギラ・ズール用のビームトマホークだ。直後クシャトリヤは爆散。爆炎の中をサラマンダーがウタゲに向き直る。

「ごめん……ごめん!モエー!」

そしてヒロ達の方も決着がつきつつあった。こちらも高機動な機体同士、黒煙の空でぶつかり合っていた。そんな中での地表の大爆発、クシャトリヤの爆発だ。それはナエ達も理解できた。

「やられたの?!モエが!ツボミの方は?!」

「他人の心配をしてる余裕はないぞ?!」

「!」

ヒロのノヴァがビームサーベルで斬りかかる。とっさにナエもビームトマホークでビームサーベルを受け止める。

「くっ!でもまだ負けるもんですか!!お姉さまの!皆の為に!」

「……残念だったな。君はもう終わりだ!」

「なんですってえ?!……あつ!」

次の瞬間、ヒロの言葉が理解出来た。アイスバグの左腕、肘から下に亀裂が入り、そして握ったビームトマホークを残り砕け散った。ナエには心当たりがあった。ツチャのアッシマーの最後のパンチを受けた部位だった。

「そこに攻撃を加えた覚えはない。ツチャさんがやったんだろうな!」

そのままノヴァはアイスバグを一刀両断、これによりアイスバグも撃墜となった。

そんな事は露知らず、こちらも最後の決着となる。サラマンダーがビームサーベルを、ウタゲがビームトマホークを構えて相対する。モエが身を挺して庇ってくれた為、ツボミは冷静になれた。

「二撃……コクピットに一撃加えれば勝てる!」

そして二機とも同じタイミングで突っ込む。お互いこれで決めるつもりだ。だが近接武器の射程はサラマンダーの方が長い、サラマンダーはビームサーベルの射程に入るや否や、ウタゲめがけて左に振るう。

「きたっ!」

が、ウタゲは身をかがめてこれを回避。一気に懐に突っ込む。最初からツボミは回避に専念、隙を見せたらトマホークをコクピットに打

ち込むつもりだった。振り上げるビームトマホーク。これで終わり、ツボミは勝利を確信する。

「これで!! チェックメイト!!」

「かかった……」

反面冷静なソウイチの声、直後、ウタゲの右側面から強い衝撃が襲った。

「っ?!」

そのまま左の方向に吹っ飛ばされるウタゲ、ただの打撃ではない。衝撃を受けた部分はビームによる溶解も受けていた。そしてそれは十分致命傷になっていた。「何が起こったの」そう思いサラマンダーを見てツボミは驚いた。

サラマンダーは背中を見せていた。そして尻尾の部分が先端のブースターを切り離し、チャムラム状のビームが尻尾についていた。『ビームリアット』尻尾に利用したタイタスが元々持っていた武器だ。ビームサーベルを振るった勢いで一回転し、勢いでビームリアットをぶつけたわけだ。

「裏をかかれたのは、私の方だったのか……」

「タイタスの腕を使った尻尾だからね。パワーのあるパーツだから攻撃にも使える様にしたってわけだよ」

「ナエ……モエ……ごめんなさい……お姉さま……サk」

言い終わる前にウタゲは爆散。これで準決勝はアイ達の勝利となった。

……

「やったね皆! これでAブロック決勝進出だわ!」

バトルが終わるや否や、ナナ達が駆け寄ってくる。

「今回はまた凄い相手だったね」

「よくウチらの雪辱、晴らしてくれたよ……うう」

感極まってユキの目に涙が浮かぶ。

「母さん……、やったよ」

「ソウイチ、格好よかったよあんだ」

「それにしてもアサダ、随分と思いつた事したじゃん。皆の前で『親

が大切で何が悪い』って大声で決めてさあ」

その瞬間、ソウイチの顔が一瞬で青ざめる。

「……もしかして……聞かれてました?」

「もうぼつちり」とその場にいた全員がうなづいた。と、同時にソウイチの顔が真っ赤になる。

「……終わりだああっ!!!もうお婿にいけないいつつ!!!」

「まあまあソウイチ君、人としてはおかしくもなんともない事だから」
「そうだよ。僕の身内なんか恥ずかしい技名大声で言っただけだから」としての奴までいるんだから」

「ていうかいつも大声でバトル中叫んでたり身の上話してたりするの
に今更恥ずかしいがるわけ?」

アイ達がソウイチをなだめる中、パイロットスーツの少女がこちらに歩いてきた。泣きぼくろと首から下げた『骸骨から這い出る蛇』の形をしたネックレスが目を引く。アイ達にとっては知ってる顔だった。

「お取込みみたいですけど。おめでとうございます」

「あなたは……確かヌマヅ・ナエさん」

「覚えてくれていたんですね。私達のリーダーが不快になる様な事を言ってしまったって、すいませんでした」

「……当の本人はいないんすか」

ソウイチは納得いかなそうさ。言った本人がいないなんて、と表情に出た。

「ちよつとツボミの方は気持ちを落ち着けてる途中なので。とりあえず『戦ってくれてありがとう』と言わせて下さい。それじゃ」

そのままナエはその場を後にする。

「正直……最後まで嫌な感じって印象だよ……」とムツミ、どうも釈然としないといった顔だ。

「まあいいじゃない。だんまりでいなくなるよりずっといいよ」

「でもソウイチ、なんかあのリーダーの娘、昔のお前になんか似てたな」

「はあ?!何言ってるんすか!あんな奴のどこが!!」

「ああ、確かに私との初戦の時っぽかった（第9話参照）」
「嘘だあつっ!!」

……

——「なんでまた浮気なんかしたの!!」

「最初はそんな気はなかったんだ!!ただ同僚の娘が仕事で失敗して寂しそうだったからー仕方なかったんだ!」

「自分から手を出しておいてなんなのその言いぐさ!!」

「困ってる人を助けてあげただけだよ!」

「なんで開き直ってるのよ!!ツボミの怪我だってそれで目を離すから!!」

夜、電気の消した畳張りの和室。ふすま一枚越しの隣の部屋から両親の怒鳴り声が聞こえる。暗闇の部屋では敷布団の中で右目に包帯を巻いた少女が横になっていた。

時刻は夜11時、子供なら眠ってる時間だが眠れるはずがない。自分が事故を起こした時から毎日が両親の喧嘩だ。一番頼るべき二人の仲たがいに少女は怖いという気持ちで一杯だった。布団に潜り込んで両耳を塞ぐ。

涙の止まらない目をギュッと閉じ、「早く終わって、早く終わって」と必死に祈りながら……。——

「……ツボミ……ツボミ……」

「……あ」

ハッとツボミは気が付く。場所は女子トイレの洗面台。バトルが終わった後彼女はここへ直行していた。そして横にいたのはモエだ。後を追ってきたのだろう。

「大丈夫?」と小さな声でツボミに声をかける。言葉の量的にそっけなさそうだが、ツボミは彼女が強く心配してくれてるのがわかった。

「ああ、ちよつとメイク崩れちゃったから落としに来たの。今落とすから」

目元の辺りが黒くにじんてる、だいぶ泣いたのだろう。

「無理しないでね……」そんなモエの言葉を受けながら、ツボミはメイ

クを落そうと右目の眼帯を外した……。下には痛々しい火傷の跡があった。ジツと鏡に映った火傷を見る。それに伴いアイとソウイチの言葉がフラツシユバツクする。

——人の親を馬鹿にする三流ビルダーだったとはね！——

——親が大切に何が悪いって言うんだあつ!!!——

「……何が親だ」

呟きながらツボミは一層けわしい表情となる。そしてアイやソウイチ達に再選を誓うのだった。

——このままじゃすまさない……。許さない……。許さない。許さない！見てろ！女王！クソガキ！お姉さまにあやかった服と！親衛隊の名に懸けて!!——

「エデンが負けたって?!」

ヒロがもう一つのAブロック準決勝の結果に驚愕の声を上げる。

「相手はライオンハートか!」

続くツチャ、そんなアイ達にある人物が話しかける。

「その通りだよ!ヤタテ・アイさん!」

少年の声だ。そしてその声にアイは聞き覚えがあった。

「あれ?ケン君じゃない。久しぶり、どうしたの?」

第34・35話でアイに違法ビルダーから助けられた10歳の少年。エビス・ケンである。

「知らないの?彼は俺達のチームメイトなんだよ」

続けて二人の男が現れた。天然パーマの寡黙な男、そして眼鏡の明るそうな少年。

「えっと、どちらさん?」

「ハジメさん、サイトウ・ジロウ。そしてクラタ・シンパチ……」

「……もしかして、この人達が」

「そ、予想通り、ケン君含めた僕達三人がチーム『ライオンハート』だよん」

「そして、ヤタテさんが引っ越して来る前の俺達の元メンバーだ」

第49話「極寒の決死圏（前編）」（チーム・ライオン・ハート登場）

「なんて……なんてことだ……」

チーム『エデン』リーダー、マスマは自分の置かれた状況を受け入れられずにいた。『Gガンダム』に登場したネオフランスの夕日に照らされる街、パリ。

赤く太陽に染められるのはエツフェル塔と、マスマの搭乗機であるユニコーンガンダム4号機・デュラハン。仲間のゼデルとヨウコの搭乗機、ブルデュエルとヴェルデバスターはすでに撃墜となつてしまつていた。夕日により逆光となつた敵チーム『ライオン・ハート』が悠然とデュラハンに歩いてくる。こちらは三機とも健在だった。

「なかなかの腕だったけどさ、僕達を相手にするには今一步なんだよね」

逆光により出来た大柄なシルエットがライフルを構えて言った。

「……既に勝利は確信してゐるってわけか！ だけどボクはこんな所で終わるわけには!!」

マスマの叫び、そして感情によりデュラハンの目が、そして全身を走るサイコフレームが赤く強く輝く。全エネルギーを右手のハイパーメガライフルに込める。幸い敵は正面に三機とも並んでいる。高出力のライフルの威力ならうまくいけば三機纏めて倒せるかもしれない……。いや、何としても仕留めてみせる。そうマスマは瞬時に考えを巡らせ、それとは別に操縦桿を動かす。

「いかないんだっ!!!」

デュラハンはフルチャージのハイパーメガライフルをライオン・ハートの三体に向ける。相対する三体は特に回避行動も取らない。

「動かないだっ!! 舐めるなあっ!!!」

だがマスマにとって相手が動かないのは好都合だった。マスマは三体まとめて消し去ろうとトリガーを弾く。

「インファイニートウム・ルーメン!!!」

叫びながらマスミはライフルを放つ。三体纏めて簡単に飲み込む程のビームだ。巻き込んだ建築物は爆発と蒸発を起こしながら敵へと向かう。

「……酔狂だな」

ライオン・ハートのビルダーの一人がボソツと呟く。と、同時にビームがライオン・ハートの三機を飲み込む。しかしそれでマスミは安心しない。デュラハンのライフルのビームを撃ち続ける。これで終わる……この出力で防げるはずがない。そうマスミは思った。だが……。

「……なんだ?! あ! あれは!!」

ライオン・ハートの機体のいた地点からビームが避けるように分かるのが見えた。ビームの光によって見えないがマスミは理解出来た。敵はこの出力のビームを弾いてる。と。そう判断した直後、その機体が高速でこちらに迫ってくるのが見えた。突撃してくる。

「なっ!!」

「だが嫌いじゃねえよ」

敵が間近に迫った瞬間。マスミの目には……炎を纏った巨大な拳が見えた。

「……手だと?!」

直後、その機体はデュラハンに激突しデュラハンを砕いた。夕日の影になって見えないその機体は攻撃手段すらハッキリさせずにデュラハンの胴体を粉々に砕いたのだ。

「終わる……こんな所で……ボクが?!」

胴体を砕かれてマスミは、残った頭部で砕いた相手を見る。変形を解き影を炎が照らしながら、拳から人型のガンプラへと戻る様が見えた。

「……ガンプラ十箇条、その1、『ガンプラは火気厳禁』。俺の方が火力は上だったな」

「……レム……!」

そのままデュラハンは光を失い、マスミの無念の声と共にデュラハンは爆発。かつてアイ達と時にぶつかり、時に協力したチーム『エデ

ン』はここで敗退となった。

そしてライオン・ハートのメンバーは同じくAブロック決勝へと勝ち上がったアイ達と相對する事となった。

「久しぶり、と気安く言つていい関係かな？」

ツチャは二人に対して慎重に問いかける。

「微妙な所だな。俺達がガリア大陸を去るきっかけみたいなものだからな」

天然パーマの男、サイトウ・ジロウがそつけなく答えた。険しいツチャに対して、サイトウの方は表情に変化があまり無い。冷めた印象がある彼は、ツチャに対してどんな感情があるのかいまいち読めない。

「それにしてもさつききの試合。結構いい試合だったけど、勝つて良かったじゃない？ 僕らも観戦し甲斐があるよ」

その後方であつげらんとした表情で眼鏡をかけた少年、シンパチが声を上げた。その言葉にアイ達は疑問を上げる。

「観戦？ 俺達の試合を見ていたんスか？」

「まあな。さつききの奴らも凄腕だったかもしれないが、俺達はあの女以上の自信はあるな」

「そういう事です。アイさん。俺はあなた達とこんな場で戦つてみたかった。そしてあなたを越えたかった。次の試合は俺達と俺の挑戦なんです。受けてもらいますよ」

そしてケンもまた、真剣な表情でアイ達を見つめる。気合十分と云つた感じだ。

「ケン君……いいよ。それ位の方がこっちもやりがいがあるもの」

「いい顔だ。コンドウさんが見込んだだけの事はあるな。いいバトルになる様期待してるぜ」

フツとサイトウがニヤリとした笑みを浮かべる。さつきまで仏頂面だったが見てる方のイメージが少し和らいだ。

「あれがコンドウさんの言つてた二人か……」

と、こちらはアイの後方にいたムツミとタカコ、次の対戦相手の感

君の言った通りボクはSGOCの大ファンでファンレター出したりとコンサート行ったりグッズ複数買いは当たり前なんだけどね!!
本当はもっとSGOCの為になる事をしてあげたいって思ってるの
!

思い返せば10歳の時!流行だからって友達に合わせる形でバラエティ番組のSGOC×SGOCを見始めた口だけどその日からボクの人生は決定づけられた様な物だよ!たかがアイドルと高をくくっていたボクの心は木端微塵に打ち砕かれて!その日からボクはSGOCの!いやコウジ君の為に生きる愛の戦士になろうと誓ったわけだよ!!

君に言われるまではただ遠くで見守るファンの一人で充分だってボクはずっと思っていたんだ!!ボクら一人一人の応援する気持ちがあるSGOCの支えになって!!ボク達ファンはSGOCの方からは元気を貰う!そんな距離はあっても共生みたいな関係でボクらはいいとずーっつと考えていたんだよ!!

ムツミは詰め寄り続け超早口でまくし立てる。シンパチは困惑した表情で後ずさり。アイもナナもタカコもこんなムツミを見るのは初めてだった。

「い!いや言ってますせん!ただの予想で言っただけですから!」

「ムツミ……さつき社交辞令だから本気にするなって言ったじゃん

」

ムツミは間もおかずに凄いスピードでタカコの後ろに回り込む、そして瞬く間に手足をひっかけタカコにコブラツイストをかけた。

「ぎええく!!ちよつと!さすがに今回はあたし悪くないよおお!!」

アイ達は止めようとしたが、ムツミから出てる異様なオーラにつき躊躇してしまう。そしてムツミはコブラツイストかけたままシンパチに再び詰め寄る。ついにはシンパチの背中を壁に押しつけてしまふ。ムツミは壁に張り付いたシンパチの間近でまくし立てる。

「最近はいドルを襲ったりネットで暴力的なつぶやきをする様なひどいファンと呼ぶのもおこがましい様な連中がいるけどボクらは違

う!!だってそうでしょ!!アイドルっていうのは遠くから応援するからいいのであって自分で独り占めしようっていうのはおこがましいっいたらないよ!

それでもアイドルだってリアルに生きる人間である事には変わりはない!!隠して結婚していたり隠し子がいたりするのは当然だよ!そう!誰か選ぶのは十分に有り得る!!ボクはそれでも応援し続けようって考えていたんだよ!!!

だけどボクもリアルに生きてる以上もしかしたらボクが選ばれるかもしれない!!!選ぶとしたら距離は縮まる!!さつきも言ったけどリアルで生きる者同士!距離が縮まったらきつと人間的に悪い所も見えてくるかもしれない!!それを突き付けられたとしてもボクは全部それを受け入れるつもりだよ!!

コウジ君が隣にいてくれるなら痛い事だつて苦しい事だつて笑顔で耐えられるから!!コウジ君になら地雷原を走れと言われたら笑顔で受けて全力疾走するし!!誰か暗殺しろってんなら笑顔でボクはするよ!でもコウジ君ならそんな事はしないってのはつきり分かるよ!だってコウジ君の優しさは全部理解してるつもりだよ!!

ああでもそういう関係になるってなら寝起きのコウジ君も入浴シーンのコウジ君も見放題って事だよね!!あああ!!!駄目だよ!不純な事考えちゃ!ファン失格!でもでもボクが特別な人になるっていうならそういう事に対する慣れも必y(r y

直後、ムツミを背後から掴んだアイとナナはそのままムツミをシンパチからはがして引きずって行った。

「分かったから!ムツミちゃんの気持ちは彼に伝わったから!!」

「怖がってるんだから向こういくわよ!」

「ちよ!待ってよ!ボクはまだ伝えたいことは全体の100分の1も伝えてないの!!!」

そのまま離れていったアイ達を見ながら男達は固まってしまった。

「えーと……言いたい事は色々あったけど、なんかそんな気分じゃなくなっちゃった……」

「……そうだな。ま、まあビルダーなら言いたい事はバトルで伝える

「でいいんじゃないか？」

「そ、そうだな！じゃあ続きはバトルで！」

「ジロさん……中々個性的な人でしたね……」

「シンパチ、無理すんな」

怯えるシンパチをなだめながらサイトウ達はその場を後にした。ムツミの剣幕に周囲の人はなんだなんだとこちらを見ている。

「おいおい、なんかこっちは暗い気分でしたのに馬鹿らしくなっちゃまったなあ〜」

と、そう言いながらゼデルとヨウコ、そしてマスミの三人がツチャ達の所へ歩いてきた。さっきのやりとりを見ていたらしい。ヒロにとってははかつての仲間の敗北だ。すぐにでも様子を見に行きたかったが好都合だった。

「ゼデル、皆」

「悪いな。負けちゃった」

たはは、と苦笑いしながらゼデルは言った。

「皆はAブロックの決勝まで勝ち上がったわね。悔しいけど後はお願い」

ヨウコが続く。あっけらかんとしてるがそれが悔しさをまぎわらす物だというのはヒロもツチャも分かっていた。

「……分かった。後は任せてくれ」

「……出来るのかよ」

安心させようと言うヒロに対してマスミはボソツと呟く。

「マスミ？」

「さっきの試合!!ボク達は一分もしない内に負けたんだぞ!!それなのにヒロ達はあるなに時間がかかって勝った!!それであいつらに勝てるっていいのか?!!ボク達が！ボク達が圧倒されたんだぞ!!絶対助けようって決めたのに!!あれだけ血の滲む様な努力をしてきたって言うのに!!」

助けよう……それは違法ビルダーに走ってしまったヒロ達の仲間『フジミヤ・レム』を救おうという決意だった。その為にマスミ達は牙を研いできたが圧倒されての敗北、屈辱と自分の無力さでマスミは打

ちのめさされていた。

「マスミ……。でも、僕達はここまで来れた。アイちゃん達の力のおかげもあつたらうけどここまで来れたんだ」

「それはアイちゃん達に頼つてると言うことか?!!!お前は!!」

「マスミ！八つ当たりはよして!!」

ヨウコが止めに入る。ゼデルも「悔しいのはお前だけじゃねえ!!」と続いた。二人の剣幕にマスミはハツとする。

「ヒロ、悪いな。ちよつとこっちはボロボロだ。負けちまった以上は仕方ねえが当分応援しかできそうにねえ」

「それだけでもありがたいよ。ありがとう」

「……すまない。ヒロ、頭に血がのぼってしまつて」

「気にしてないよ。……さてと、こう言われたからにはいつも以上に気合入れてかないとな」

「応援してるからね」

ヒロ達に想いを託しながら、同時にマスミ達は自分の気持ちの整理の準備を進めていた。ヒロもそれは察していたのだろう。だからこそ負けられないと闘志を燃やしていた。

「ヒロ、ヤタテさん、皆応援ついでだけど、ちよつといいか？さつきボクがバトルで経験した事なんだが……」

その頃、他のチーム達も次の試合への気合を入れていた。

「ノドカ、アイ先輩達も無事決勝へ進めたみたいですよ」

ある控室、こちらはノドカ達のチーム『オベロン・ティターニア』、ノドカのいる模型部のメンバーではないが付き添いの爆乳少女マツイ・マコトが控室に入ってくるなりノドカに報告した。

「あ？そうかよ。……当然だよな。ここであいつが負けたら受けねえよ。アイツはアタシが……」

ベンチに座ったノドカはむくれた表情のまま答える。どうも今日はノドカの覇気がない。

「どうしたのかね？ノドカ。今日はずっとふくれっ面だな。どうせふくれるなら胸の方に「黙つてろ副部長、こっっちゃ真剣なんだ」

副部長のユメカも問いただそうとするがノドカはこれを一蹴、普段からユメカのセクハラ発言に関して不快そうな顔をしていたが今日はいつにも増して嫌そうに答えた。

「ノドカ、今日は調子が悪いの？Bブロック決勝は休むかい？」

部長のノゾムが今度は恐る恐る聞いた。今度は対照的に少し落ち着いた顔で答える。

「部長、大丈夫だよ。アタシはやれる」

「でも、今度の相手はかつてアイちゃんが煮え湯を飲まされたというチーム『前世代』だよ。どうも今日のバトルは君は荒っぽくなってる感じだ。言い方はキツイだろうけど、ベストは尽くせるのかい？」

「なおさらだよ。そいつらに勝てなきゃアイ達には勝てねえ。アタシらは全国に行かなきゃ意味がねえんだ。アタシにとっても部長達にとってもチャンスじゃねえか。任せてくれよ」

そのままノゾムは少し間を置いて「そうか」と答えた。ノドカの調子に少し不安はあったが、ノドカはノゾム達の中で最強のビルダーだ。少し調子が悪いとしても他の模型部員でノドカや自分達に敵うビルダーはいない。これ位では替えようが無かった。

「ケンモチさん。なんか……様子が変ですね。今日のノドカ」

「私が胸を触ろうとするといつもあんな顔だがね」

「あなたには聞いてません魔女」

マコトは疑問に感じる。いつもはアイの事になるともっと嬉しそうに話すのがノドカだ。今日のノドカはどんな事があってもムスツとした表情のままだ。

「どうもいきなり今日あんな感じになったんだよ。こつちも心配だな」

「だが見た感じバトルでの強さに影響はないな。あの態度の理由は今日のバトルが終わってから調べても問題あるまい」

「……態度だけじゃないんです。分かるでしょう？」

マコトはノドカの髪を見ながら不安げに呟いた。今日のノドカは、アイがつけてるヘアゴムは外していたからだ。

そして少ししてバトルが始まろうとしていた。今アイ達は、アリーナのフィールドに設置されたGポッドへ入る直前のミーティングをしていた。

「おさらい、いいかな？今回は事前に水中戦つていう情報があつたから、水中でも使える改造で行くよ。サブは今回ツチャさんでお願いします」

「任せておいてくれ。僚機はハガネ君とハジメさんだな」

「ああ、今回は僕にとつてもツチャさんにとつても重要なバトルになります。頑張りましょう!!」

「これでアタシらが勝つたらブスジマさんかノドカの奴が相手つてわけね。頑張りましょう」

「そういうユミヒラさんのバトルも同時進行か」

ヒロは別方向を見ながら呟いた。フィールドにはBブロックの準決勝も同時進行となつていた。ノドカ達やブスジマ達も同様にミーティングをしていた。

「ノドカ！ブスジマさん！」

どちらも自分にとつて思い入れのある人だ。アイは一言声をかけおこうと近寄つて声をかけた。どちらのチームも反応する。

「アイ……」

「よおアイちゃん！準決勝まで来るたあ流石だな！」

「ブスジマさんにレクチャーしてもらつたからですよ！」

「御上手だねえ。エアブラシとか使わせただけど、バトルとかは僕らの仕事との時間が合わなくて自力でやつたんだから謙遜するなよ！アイちゃん達も頑張りよ！」

「はい……ここで負けたら格好悪いですから！じゃあね！ノドカ！」

そのままアイはナナ達の方へ戻つていった。それを見ていたノドカはただ黙つていた。

「ノドカ……？」

それを観客席で見っていたマコトはなおさら違和感を感じていた。やはりアイが絡んでも反応がない。と。

マコトの疑問をよそにアリーナの熱気は増すばかりだ。次のバトルの熱気に、観客達は様々な想いでそれを見ていた。……しかし、あの通路付近でそれを面白くなさそうに見ている男女が数人いた。

「クソッ！面白くねえな！よりによってサブロウタとあの女のチーム、そしてサイトウ達のバトルかよー！」

吐き捨てた男はかつてツチャの親友だった男。カモザワ・セリトだ。そう、その男女はカモザワ、フジミヤ・レム、そしてリンネの三人、違法ビルダーのブローカー達だった。

「マスミ達は負けたんだ……ヒロ達、どうなっちゃうのかな……」

「腹立たしいぜ！新世代ビルダーは全滅！せめてサブロウタ達もサイトウ達も負けてくれねえと気が済まねえなー！」

「それなら心配はいりませんよ」

余裕の表情で、リンネは呟いた。

「ヤタテさんは、ここで負けた方が幸せかもしれませんよ？フッフ……」

そしてバトルが始まる。今回のバトルは『連邦軍北極基地』『ポケットの中の戦争』に冒頭に登場した基地で『サイクロプス隊』という部隊が襲撃した基地である。といってもアイ達がいるのは水中で、母艦はユーコンという潜水艦だ。潜水艦故にカタパルトは存在せずハッチが開くとそのままそれぞれの機体がゆっくりと海中に落ちていく。と、同時に起動すると推力を頼りに海の中を進んでいった。

「AGE―3Eの水中用装備は動かしてみてもどんな感じよ？」

「コアファイターは重くなっちゃったけど悪くないよ」

今回のチームはリーダー機にアイとツチャの機体。AGE―3Eのオリジナルウエア『ウンディーネ』、ナナのフリーダム・アルクス、そしてヒロのウイングガンダムノヴァの三機だ。三機は視界の悪い海中を警戒しつつ進む。

「随分静かね。水中に北極だから殺風景だと思ってたけどこうも暗いんじゃない……ん？」

「上か?!」

言葉を言い終える前にGポッドに警告音が走る。直後上空から大型のビームが二条水中を襲った。突然降ってきた光の柱にとっさに回避をする三機。狙ったのは後方のユーコンだったらしい。ビームの直撃を受けたユーコンはそのまま轟沈。

「こつちをおびき出そうってわけ?!乗ってあげますか!」

「断る理由はないな!」

「ヒロさん!ナナちゃん!!」

「あいよ!」と言葉を返してナナとヒロは撃たれた方角へツインバスターライフルを、そしてハイマツトフルバーストを放つ。それに続く様にアイはウンディーネを水上へと飛び出していく。ただ飛び出していくよりは安心できる。

「こつちもアイに続くわよ!ヒロさん!」

一瞬アイへの援護として撃ち続けようと思案するナナだったがここからでは水上がロクに見えない。

「いや!こつちにもいるみたいだ!!」

ヒロが別の方向を見つめながら言う。直後先端にビームサーベルのついたコーン状の物体が六つ飛んでくるのが見えた。

「ソード・ファンネルだ!!やはりマスマミの言った通り!!」

一方こちらは水面から飛び出したアイのウンディーネ。海と氷の陸の高低差は100メートルを超えていた。岩山の如き高さの氷の大地。

予想した通り迎撃としてウンディーネへの歓迎の様に射撃が放たれる。敵は空中にいた。薄い霧のかかった曇り空に佇むはケンのビルドスペリオルガンダム、そしてもう一機、『0083』に登場したG P-02の改造機だ。核弾頭搭載のバズーカは外されライトニングガンダムフルバーニアンのハイビームライフルを構えている。

「アイさん!」

「ケン君か!予想通りの迎撃!!」

「だがこれ位恐れる攻撃じゃないな!!」

ウンディーネは撃たれる中を飛びながら回避してゆく。敵機はこちらを狙いながら迅速に撃ってくる。が、ウンディーネは機体を突撃させながらもくるっと器用に回し射撃を回避。と同時に右腕の二連ビームガンを撃ちながら迎撃。ウンディーネのマニューバはアクロバティックな動きはしていない。ほぼ直線だが最小限の細かい動きで回避。淡々とながら高速でスペリオルに迫る。

ウンディーネのベース機、AGE-3オービタルは、本来宇宙空間での戦闘と仲間との連携を想定した機体だ。元々単独の空中戦はあまり得意ではない。その上改造は水中戦を想定した物だ。が、アイは機体を器用に回しながら撃ち返していく。機体の相性を操縦でカバーしてるわけだ。

「やるな！ヤタテさん！水中戦用の改造で、しかも最小限でこれ程の動きを！」

ツチャヤが関心の声を上げる。

「さすが！コンドウさんの見込んだ人だ！でも甘いんじゃない!?」

シンパチのサイサリスが横のスペリオルとの距離を開けながら飛び、そしてウンディーネに撃ちまくる。先述のオービタルの弱点を彼は知っていた。あの水中用の改造ならなおさら複数相手は辛いだろうと判断したのだ。だがウンディーネはそれに対して驚いた素振りは見せない。

「やれると思って別れたね。でもこれ位、こつちもやれると思わなきゃ!!」

アイは右腕の実体剣を展開、回避ついでの勢いでサイサリス目がけて剣の投擲を行う。大型の剣にも関わらず投げナイフの容量だ。剣は空気を切り裂く音を上げる程の勢いだ、真っ直ぐサイサリスに向かう。

「ナッー」と焦った声を上げたシンパチは剣を大型シールドで防御。本編では大型の冷却装置としての意味合いの盾だったが、ガンプラバトルでは普通に堅牢な盾として機能している。しかしその盾にも剣は深々と突き刺さりサイサリスの持ち手のすぐ下を剣が掠めていた。「あれだけの質量をあんな勢いで!!」

「AGE―3のパワーを利用すればこれ位出来るよ！」

「やっぱり!!俺の目標の人はこれ位大きくないと意味ないですよね!!
アイさん！」

直後ケンのビルドスペリオルがビームサーベルで斬りかかる。アイはウンディーネ左腕のビームサーベルでこれを受け止めた。鏝迫り合いの体勢になる二体だがパワーはウンディーネの方が上だ。ケンもアイもそれは解っていた。

「スペリオルのパワーは大したもんだけど!こっちのパワーだって!!」

「敵わないでしょうね!!だからパチさん!!」

「お任せあれっ!!」

ビルドスペリオル目がけてサイサリスはハイビームビームライフルを連射する。どうしたとアイ達は思ったが即座に理解出来た。撃たれたのはスペリオルの左肩部。アブゾーブシールドのある部位だ。ケンはシールドを展開させビームを吸収。すぐさま自分のエネルギーに変換。

「来た来た来たあっ!!」

エネルギーが溜まるとスペリオルの目の輝きが増す。と同時に背部から四隅の尖った四角のゲートが出現し、スペリオルの前にせり出す。ゲートにぶつかったウンディーネは後方に弾かれた。

「し!しまった!!プラススキーパワーゲート!!」

「出鼻くじかれたみたいと言わないで下さいよ!こうしてもあなたとの差はまだあるんだ!!」

驚愕するアイ達にして冷静かつ謙虚なケン、ゲートをくぐると同時にスペリオルの背中に青いプラススキーウイングが出現、スピードモードだ。青い光の翼を纏ったスペリオルの機動力は格段に上がる。スペリオルはウンディーネに高速で斬りかかる。

ウンディーネはビームサーベルとビームガンでどうにか迎撃しようとするがスペリオルは早い。ウンディーネにガンブレードとビームサーベルですれ違いざまに切り裂こうとヒットアンドアウェイを繰り返す。

「考えたね！それでも！」

アイのウンディーネはそれにしつかり対応できていた。すれ違わざまにバルカンを撃ちながら斬りかかるスペリオル、しかしウンディーネはバルカンは避けず斬りかかってきたガンブレードをビームサーベルで弾く。最小限の動きを駆使して攻撃を弾く。そして通り過ぎたスペリオルが反転する隙を狙ってビームガンで狙い撃つ。

「くうっ！切り札を使っても楽しんで勝てるとは思わなかったけど！」

ウイングで機体を覆いビームを防ぐスペリオル。その時、ウンディーネの背後にサイサリスがシールドを突き出して突撃するのが見えた。

「女性に2対1をするのは気が引けるがね!!」

「っ!？」

サイサリスのシールドにはビルダースパーツのバーニアが埋め込まれていた。その四つのバーニアからビームのパイルが突き出された。ビームラムだ。

「遅い！つらぬけええっ！」

「ヤタテさん!!」

ツチャの叫びが聞こえた。ウンディーネはサイサリスの目の前だ。これで倒せると確信するシンパチ、しかしシールド越しにシンパチは手応えを感じない。直後、分離したウンディーネがシールドの上下からサイサリスの後方に飛んでいくのが見えた。

コアファイターと分離したウンディーネ用ウェア『Gダゴン』だ。すぐさまサイサリスの真後ろにウンディーネは合体。ビームサーベルを振りかざす。

「落ちなよ!!」

「しまっ!!」

やられると確信するシンパチ。ケンもすぐさま向かおうとするが間に合わない。その時だった。ゴゴゴゴ……という地響きと共に北極の大地に亀裂が入る。直後。亀裂の中から巨大な拳が炎を纏ってウンディーネ目がけて突っ込んできた。

「なっ!!」

思わず回避するアイとツチャ。その所為でサイサリスへのとどめはし損なつたが、それはいわゆる両手の指を組んだ様な形の紫色の拳だった。

「ジロさん!!」

「だらしねえぞシンパチ、ケン」

拳に乗ったビルダー、サイトウ・ジロウが気怠そうに呟きながら拳の指を解く。指は背中に移動し翼の様な形になった。

「やっぱりジャイオーン！マスミさんの言った通り！」

ジャイオーン『Gのレコンギスタ』に登場した機体だ。翼とも手とも取れる形の『ビッグアーム』という装備が特徴である。この機体には通常のビームライフルが装備されていたが代わりにカレトヴルツフ炎という遠近距離に対応できる複合兵装を装備していた。

「ジロウ！ハジメさんとヒロ君をどうした!!」

ツチャの問いかけに答える間も無く、水中からナナのフリーダムとヒロのウイングノヴァが飛び出して来る。一部破損しているがまだ健在だった。

「見りゃわかんذار。シンパチ達がピンチだったんでな」

「ナナちゃん！大丈夫?!」

「アイ……アタシは大丈夫。でも強いわあの人……」

「にしてもケンとシンパチ相手にしてこうも押すたあ予想以上だ。……面白れえ」

ジャイオーンの顔面が笑ったように歪む。ガンダムに近い顔つきのジャイオーンだが、顔面はモニターな為表情を変えることが可能だ。カレトヴルツフ炎を左肩に担いでいたジャイオーンだが、すぐさまそれをライフルとしてウンディーネに向け、上部のガトリングガン炎、中央部のビームライフル炎、株のグレネード炎、これらを一齐に連射する。

「ケン。シンパチ。俺がやる。シヨウゴさんが気に入った女だ。相手

してみたくなつたんでな」

「いきなり勝手な!!」

かわしながらビームガンで反撃するアイとツチヤ、サイトウはビツグアームをシールドとして使いそれを防衛、そのままソードファンネル6基を全て射出、ウンディーネを追い詰めようとする。さつきまでの相手とは違うとアイは判断。すぐさま得意フィールドである水中へウンディーネを突っ込ませた。すぐさま後を追うジャイオン。

「アイが！アイ一人じゃ心配だわ！アタシ等も追いかけてきなきゃ！」

「おつとそうはいかないぞ！」

北極上空でフリーダムとウイングノヴァの行く手を残りの二体が阻む。

「ちよつと不満はあるけど！僕達はあなた等に相手してもらいますよ!!」

「なら俺はナナさんの相手をしたいですパチさん！あの人がって俺の目標の一人だったんだ！」

そう言うとケンのスペリオルはナナのフリーダムに突っ込んでいく。ナナもまたそれに応える様に飛んでいった。

「あーあ、僕が相手したかったのに。まあ贅沢は言ってもらえませんか!!」

そういうとシンパチはヒロのノヴァに盾を構え突っ込んでいった。

「こつちも敵討ちとして無視できないんでね!!かかってこい!!」

第50話 「極寒の決死圏（後編）」

曇天の北極の空を光の翼を広げたスペリオルがフリーダムを襲う。青い翼は薄くかかった霧の中で氷の様に輝いていた。

「クッ！は！早い!!」

ウンディーネと戦った要領、高速ですれ違いざまにガンブレードで切り裂くヒットアンドアウェイをフリーダムにも仕掛けるケン、ウンディーネの方には見切られていたがナナのフリーダムの方は十分通用していた。

「いける！ハジメ・ナナさん！あなたを倒して俺は次のステップに行かせてもらう！一対一では無いけれど！アイさんを倒してあの人を越えるんだ!!」

「アイを越えるですって!?!」

今の斬撃でフリーダムの右腕が舞った。ビームサーベルをにぎったままだった。ナナは左腕のシールド内蔵三連バルカンでどうかに対応しようとスペリオルに狙い撃つ。が、スペリオルのスピードは速く三連バルカンの連射でも当たらない。

「させやしないわよ！アタシはアイには及ばないけど！自分で出来る事はやるって決めたから!」

「……無理だよ！あなたに俺は止められない!」

「なんですってえ!!」

フリーダムは残った武装全てを展開し、一斉射撃を放つ。その中を掻い潜りスペリオルは迫る。

「あなたは遠慮してる!!アイさんを越えるのは無理だって思ってる!」

「っ！余計なお世話よ!!」

どんどんフリーダムに距離を詰めつつあるスペリオル、ケンが機体の左手に力を込めるとスペリオルの左手が青く輝く。ガンプラ魂を込めた拳、ビルドナックルだ。

「そんな気持ちで俺は負けるわけにはいかない!!俺はアイさんを越えたい!そして全国で俺と俺の相棒を知らしめたい!そのためにそん

な気持ちに!!」

「くっ!!」

どうにか距離を取ろうとするナナ。しかしスペリオルの拳はもう目の前だ。左手を振りかぶるスペリオル。

「負けてたまるかああ!!」

そのままスペリオルのビルドナツクルはフリーダム腹部を貫通、拳を引き抜かれたフリーダムはそのまま落下し爆発した。それを見届けるとスペリオルはそのままアイとサイトウのバトルに介入すべく海中に突っ込んでいった。

「そんな事……アタシが一番よく解ってるわよ……」

ブラックアウトしたGポッドの中でナナはうつむきながら呟いた……。涙とある感情を抑えるように歯を食いしばりながら。

「いやあ、あっはっは。まさかエデンの方もこちらにいらっしやるとは思いませんでしたよ」

一方こちらはヒロとシンパチの方である。こちらは氷原上の連邦軍基地で地上戦を行っていた。お互いが高速で並走しながら銃を構える。ウイングノヴァの方は普通の低空飛行だが、サイサリスの方は中腰体勢でホバーによる移動の為、雪煙を巻き上げながらの移動だ。「君達がいた時にコンドウさんとは戦ってはいなかった気がするんだけどね!!」

両肩のマシンキャノンでサイサリスの牽制を行うノヴァ。しかし重装甲のサイサリスにそれは通用せず、盾を前に押し出して突っ込んでくる。ウンディーネの時と同じ要領でシールドからのビームラムでノヴァの意表を突こうとするシンパチ。しかしヒロはノヴァをサイサリスの左側面にとっさに移動させる。

ノヴァの右手にはビームサーベルが握られていた。そのままサイサリスを切り裂くつもりだ。

「スピードならこっちが上だ!」

「あーやっぱ重量級のサイサリスじゃあ相性が悪い……かな!!」

そのままシンパチはサイサリスのシールドをノヴァに力任せにぶ

ん回す。サイサリスは重量級な分、パワーはノヴァを大きく上回っていた。シールドをぶつけられたノヴァの方もシールドで防御。しかしさっきの衝撃でシールドは大きく歪んでしまった。

「ただで起き上がるものか!!」

ふつとばされていながらもツインバスターライフルを構えサイサリスに発射するヒロ。ハンガーや管制塔をまき込んでビームは基地もろともサイサリスを蒸発させる。しかしそこにサイサリスの姿はない。どこだとヒロは試算しながらも仰向けに倒れる。と、相手の姿が見えた。ノヴァの視界の先、真上である。

「上か!」

「一応元のサイサリスより軽量化はしてるんですよ!!」

サイサリスは落下しながらシールドを下に向ける。ビームラムでノヴァを押し潰すつもりだ。すかさずバーニアを全開にしてその場から離れるノヴァ、ノヴァの足元をサイサリスが轟音を立てて

落下する。サイサリスは再び立ち上がり盾を構えようとするも、その前にノヴァはバスターライフルを向けようとする。が、サイサリスの方が早くハイビームライフルを向けた。

「ちいっ!!」

すかさずヒロはマシンキャノンを発射しライフルの先端部に命中。

「うわっ!あぶなっ!!」

不自然に狼狽するシンパチ。ガガガツと音を立ててライフルは爆発。その隙についてヒロのノヴァはバスターライフルを放った。

「間に合うかなっ?!」

回避行動をとろうとするシンパチだったが間に合わない。とっさに盾を構えるがそのままサイサリスはバスターライフルのビームに飲まれた。

そしてこちらは水中のアイとサイトウの方である。

「水中戦なら!!」

ウンディーネが左腕のビームサーベルでジャイオーンに迫る。食

い止めようとジャイオーンはカレトヴルツフ炎のライフルモードで迎撃しようと連射する。しかしウンディーネはそれらを難なくかわしジャイオーンにへと迫る。さつきとは打って変わって正に水を得た魚だ。

「そつちの本領発揮ってか？だがな」

ジロウは慌てた様子もなく、ビッグ・アーム左側のビームサーベル三本を交差させて、ウンディーネのサーベルを受け止めた。「ならば」とアイは右腕のビームガンで迎撃しようとするが、すかさずジャイオーンは右側のソード・ファンネルを三本射出、更にカレトヴルツフ炎をウンディーネに向ける。

「こいつは元々早いんでな。水中だからって多少減速したところで」

「チツ!!」

「ヤタテさん！離れるぞ!!」

ウンディーネはスクリューを全開にし、ジャイオーンから一時後退、同時にジャイオーン目がけて両肩の魚雷を六発発射。水中用の弾頭はスクリューによつて高速でジャイオーンに向かう。

しかしジャイオーンはビッグ・アームの親指部、板状の大型クローを魚雷に向け、内蔵ビームキャノンを発射。水中の為出力は下がってはいるが魚雷を巻き込み爆発させるには十分だ。しかし全ての魚雷を爆発させるには至らず、残りの魚雷は爆発の中を突っ切つてジャイオーンに迫る。

「やれやれ。ぶっちゃけ安全に勝ちたかつたんだけどな」

ジロウがそう言った直後、魚雷はジャイオーン付近で爆発。遠くで見えていたアイとツチャはジャイオーンがどうなつたかは確認はできない。元々暗い海だ。確認できるのは爆風と大量の泡だけだった。

「あれで終わるわけないでしょうね！」

「ああ！来るぞ!!」

ツチャの言う通りだった。魚雷の爆風の中から炎を纏った物体が突っ切ってきた。それは先程地上で北極を砕いてきたビッグ・アームを両手の様に合体させたジャイオーンだった。

「やつぱこいつを使わなきゃ勝てねえって事か」

「ジロウ!!」

ジャイオーンは親指のビッグ・アームからビームを連射させながらウンディーネに迫る。巨大な炎の拳となったジャイオーンの周りには高温となって周囲の温度が沸騰の泡を立てまくる。水中なのに炎は衰える事はない。

「水中の中で炎を維持するなんて!!」

「我ながら非常識とは思うがね」

「冷めてる人と思いきや!!熱い人って事ですか?!

とはいえウンディーネの方が早いのは変わらない。射撃をかわしながら魚雷を撃ち返す。がジャイオーンは意にも介してない。魚雷と衝突しながら突っ込んでくるが、爆発を物ともしないで突っ込んでくる。

「ビッグナツクルにこんなちやちな手は通用しねえよ」

水中で炎を纏った拳。という非常識な光景だが、それに乗っているジロウは冷静だった。ウンディーネ目がけて突っ込んでくるジャイオーン、しかし突っ込んできたビッグナツクルを右側にかわす。その際にジャイオーンは親指部、板状のビッグ・アームをウンディーネに向け、そのままビームサーベルを発生。

板状のビッグ・アームからのビームサーベルは両脇部から一枚二本ずつビームサーベルが伸びる。しかも長さは調整可能で最大出力はジャイオーンの身長以上だ。そのままウンディーネを串刺しにしようとするつもりだろうが、アイのウンディーネは再び分離、さっきまでウンディーネのいた地点をビームサーベルが貫いた。

「おっ!?!」

すぐ後方へとカレトヴルツフ炎を向けて上部のガトリングガン炎を連射する。そして振り向くジャイオーン。後方で合体していたウンディーネがジャイオーンの背中を狙っていたのだろうか、それをジロウは見抜いていた。ジャイオーンの後方に合体していたウンディーネは慌ててカレトヴルツフのビームを回避する。

「クソッ!引っ掛かったと思ったのに!」

「デメエの作ったガンプラだ。脇腹くれえ把握してるさ!」

そしてまたビッグナツクルとなったジャイオーンはウンディーネに突っ込んでいく。

「ここまで腕を上げていたなんて!!」

「うざったい奴相手にしよっちゅう練習してたんでね。サブロウタ。お前が責任を放棄した奴だよ」

嫌味つたらしく吐き捨てるジロウにツチヤはすぐピンと来る。アイもすぐ理解できた。ジロウの口調から嫌ってる人物なのは解ったし、サイトウとツチヤのお互いが知ってる人物は一人しか浮かばない。

「セリトの事か!」

「ああそうさ。……解つててほつたらかしたのかねえ!お前は!!」

「解つててだど?!」

先程の様な攻防が続く中、Gポッドの警告音がアイとツチヤの耳をつんざく。ウンディーネ目がけて上から一機のガンプラが海中へ突っ込んできた。

「サイトウさん!こっちは終わりましたよ!」

「ビルドスペリオル?!ケン君か!それじゃナナちゃんは!」

「倒しちゃいましたよ!」と強気な発言に反して一旦後退するビルドスペリオル。阻止しようとするウンディーネだが、ジャイオーンがビッグナツクルで妨害する為、後退を許してしまう。すぐさまケンハスペリオルのモードを切り替えた。

再びパワーゲートを発生させ、突っ込むと今度は背中からウイングではなく、熱帯魚のベタの様なヒレが現れた。

「これがスペリオルのアクアモード!!覚悟!!」

アクアモード。ビルドスペリオルのユニバースブースターに搭載された機能の一つで水中用のモードだ。しかし元ネタのビルドフアイターズでは使われなかったモードであり、どんな姿になるかはビルダーそれぞれの想像次第となっている。(スタッフのつぶやきではゲートをサーフィンの様に使うとか……)

アクアモードとなったビルドスペリオルはウンディーネに猛ス

スピードで迫る。

「二対一か!!」

「卑怯かもしれませんがね!!俺もこの人達に拾ってもらって鍛えてもらった恩義がありますからー!」

「そして俺達は全国に行きたいんでね!!」とジャイオーンも加わる。

「どつちも早いけど!水中用の武器は無い!!」

アイは二体を引き離そうと全身のスクリューを全開にしてその場から離れる。それを追いかける二機。アイはウンディーネを二体に向かい合わせながら逃亡。

かつ魚雷を発射していく。(逃亡には尻のハイドロジェットを使用)しかし水中のスピードに優れるアクアモードにはかわされるかガンブレードによる迎撃。ジャイオーンの方は攻防一体のビッグナツクルで気にせず突っ込んでくる。決定打にはならない。

ジャイオーンのスピードは水中用ではない為ウンディーネとアクアモードのスペリオルには劣る。スペリオルとジャイオーンの距離は徐々に広がっていった。ウンディーネとスペリオルのスピードはほぼ同じだ。

「どうしますツチャさん?!このまま向こうの息切れを待ちますか?!」

——動きはビルドスペリオルの方が早いな……ならば!——

「いや!ヤタテさん!考えがある!ここは俺の言うとおりに!!」

「!お願いします!ツチャさん!!」

そう言うや否や、ウンディーネは逃げるのをやめて停止。直後左腕のビームサーベルでスペリオルに立ち向かう。

「正面から来る?!上等!!」

スペリオルの方もガンブレードでウンディーネに斬りかかる。すれ違うように斬り合う二機。その場にビッグナツクルで向かうジャイオーンからは、闇の中緑と青の光の筋が何度もぶつかる様に見えていた。そしてジャイオーンが二機の姿を確認出来る程に近付くと、ぶつかり合いはやめて二機が鏝迫り合いをしている様に見えた。(ジャイオーン視点ではスペリオルの背中が見える)

「ケンの奴に手こずるとも思えねえが、このまま一気に畳みかける!!」

そのまま一気にジロウはビッグナツクルでウンディーネの側面に突っ込むべく大きく旋回する。その時、ケンの悲痛な叫びが通信で聞こえた。

「！ジロウさん！来ないで！！こいつは！」
「っ!？」

ジロウに通信が届いた時だった。ウンディーネは鏢迫り合いの体勢だったスペリオルをジャイオーンの盾にした。見ればスペリオルのボディはワイヤーアンカーでぐるぐる巻きとなり、動きを封じられていた。

「うおっ!!」

慌ててビッグナツクルを解除し停止するジャイオーン。その場で『ばっ』と音を立ててビッグ・アームを開く。その時だった。ジャイオーンの背中に爆発の衝撃が走る。直撃だ。その際にビッグ・アームのバックパックが破壊されビッグナツクルは使用不可となる。

「ビー・ビッグ・アームがっ!!なんだ?!三機目か?!」
「やった！成功！」

振り向いたジャイオーンの目の前にはアイのコアファイターがいた。後方からサブロックガンを撃ってバックパックを破壊したのだ。

「コアファイターがこっちに!?!じゃあ！あれは！」
スペリオル越しのウンディーネは分離したGダゴンだった。
「すいませんっ！我ながら！まだ未熟っ!!」

ケンが叫んだ瞬間にGダゴンはビームガンを連射しスペリオルのコクピットを何度も撃ち抜く。沈黙したスペリオルは海底に沈んでいた。これによりスペリオル撃墜。

一方観客席の方、チトセとマツオの席では……、

「ああっ！ケン!!」

「ははは、やっぱり心配か。アイツが」

「っ！んなことあないわよ!!むしろザマーミロだわ!!」

顔を真っ赤にしながら否定するチトセ、「なんで顔を赤くするか

ねえ」とマツオは喉に出かかった言葉を飲み込む。これ以上藪蛇でうるさくされて試合を見れないのは困るからだ。

「ケン……すまねえ……あそこで分離を気づいていれば……」

後悔するが既に遅い。もうスペリオルは撃墜となった。と、同時に再合体したウンディーネが斬りかかってくる。

「このまま一気に畳みかける!!」

「っ!!このお!!」

ジャイオーンはカレットヴルツフ炎でビームサーベルを凌ぐ。しかし向こうの方が水中用な為、動きのキレがいい。流れはアイ達の方に流れている。

——このままではまずい……。負けるのか？俺達が——

そうジロウは心の中で焦り始めていた。どうするか。と考えた時だった。シンパチから通信が入った。

「あー、生きてます？ジロウさん」

「っ!!何呑気に通信入れてんだお前!!試合はどうなっている!!」

呑気そうなシンパチの声について苛立ってしまうジロウ。

「いやはや、駄目っぽいです」

その頃地上ではボロボロのサイサリスが尻もちをついていた。盾を失い。背部のライトニングバックウエポンもブースターとビームキャノンを片方が破損。ウイングノヴァに追い詰められていたのだ。右腕のライフルは後生大事に持つてはいるがもはや満身創痍である。

「僕は駄目ですけど、ジロウさんの方は大丈夫ですよ。僕らには……全国行つてコンドウさんに再会、そして全国にライオンハートありつて知らしめる目標がありますからね」

「……シンパチ！俺の方は！」

「言わないでください。こっちはこっちでどうにかしますから。後はよろしく」

そう言つて一方的に通信を切るシンパチ。直後、サイサリスのコクピットをノヴァのビームサーベルの貫く。通信にかまけて無防備だった為ノヴァはこの隙を逃さなかった。

「棒立ちとは！覚悟を決めたか?!」

「……いやー、お強いですね。確かヒロさんはお仲間が違法ビルダーになってしまって、その人を説得すべく全国を目指しているのだから。ただ僕らとは覚悟が違うかなあ」

いや、わずかにコクピットをそれた。とっさにかわしたのだ。ヒロはそのまま横に薙ぎ払おうとするがシンパチはサイサリスの左腕でノヴァのビームサーベルを握った拳と腕をしっかりとつかむ。元々パワーに優れたサイサリスだ。ガツチリとノヴァを抑え込む。

「一体何を！」

「でも僕らだって気概は負けてないつもりですよ。野郎なのは嫌ですけど、一緒に地獄へ行ってもらいますよ……これなーんだ」

直後、サイサリスが先端部を切り落としたライフルを見せた。ハンドガンタイプになったライフルの先にはバズーカの弾頭がついていた。しかしただの弾頭ではない。その正体をヒロは察しがついた。

「核弾頭!!」

「そう！サイサリスは元々核攻撃用の機体ですからねえ!!とっておきの武器ですよ!!」

その弾頭目がけてサイサリスは頭部バルカンを撃ち込む。直後、弾頭は点火、ヒロの視界は一瞬だけ真っ白に輝く。

「うーうおおおっ!!」

直後にブラックアウト。あっという間の撃墜扱いとなる。フィールドでは通常の爆発とは比較にならない爆発が、そして衝撃波と熱が北極の大地を覆った。観客席のモニターでも画面が真っ白になる程の光だ。そしてその影響は地上だけではなかった。

「くうっ！何なのーこれは!!」

海中のアイ達も核爆発の衝撃波に身をさらされていた。凄まじい海流だ。その上砕かれた流水が幾つも隕石のごとく海中に流れてくる。その場にいられない。

「シンパチが!!アイツがやったのか!!うおお!!」

「んぎぎぎ!!負けるもんですかああ!!!」

必死にこらえる二機だが、まずジロウのジャイオンが海流に流さ

れる。

「どうにかしてやりすぎす方法は!!っ!いかんヤタテさん!!」

「えっ?!」

水中用のウンディーネも必死にこらえるが、直後、非常に大きな氷塊がウンディーネの背中に衝突する。その際にハイドロジェットとスクリュー部を破損。そのまま海の中へ流された。

「うわー負けたーっ!!」

暫くして海流と衝撃波は収まる。落ち着いたウンディーネは海中を見回しジャイオンを探す。水中用の推進機能は損傷したがそれ以上の損傷は無かったのは不幸中の幸いか。周りは流されてきた氷塊だらけだ。まるでアステロイドベルトの様である。

「向こうも探してるはずだけど。どこにいるんだ。ジロウの奴」

「地上にいるのかもしれないけど……とにかくスクリューとジェットがやられたのは痛手ですよ!早く上がった方が!!」

「そうだな。……あぶない!!」

「えっ!」

突如鳴り響くGポッドの警告音。同時に下部、海底から何かキラリと光る。巨大な三日月状の衝撃波が進路上の氷塊を粉々に砕きながらこちらに迫ってきているのだ。

「斬撃波!・戦国アストレイの使っていた!」

剣を衝撃波として飛ばす。それは以前アイも使っていた技だ。しかし大きさと存在感が桁違いだ。真っ直ぐ剣を振り降ろした斬撃波ではあるがウンディーネが10体縦に入りそうな巨大さだ。

「残ったスラスターでもこれくらいは!!」

横に回避しながら誰が放ったか見当がつく二人。かわした後の斬撃波はそのまま進路上の物体を全て砕いていく。そして陸地に当たった瞬間、アイの背後に凄まじい光と、先程の核爆発程ではないにせよ大爆発が起きた。

「くっ!また?!」

「これがお前の最後の切り札か!ジロウ!!」

「やれやれ。こうなつちや俺達も勝てる自信は無くなつちまったよ。だけどさ……!!」

ジロウの声がヘルメットに響く。海底からボロボロになったジャイオンが現れた。残った武装は赤く輝くカレトヴルツフ炎のみ。この状態はカレトヴルツフ全体にプラフスキー粒子を纏わせて斬撃の威力を上げたバスターソードモードだ。(ただこちらのガンプラバトルではエネルギーを纏ってる程度の物だが)あれを使って放ったのだと言うことは容易に想像できた。

「ジロウ!!」

ジャイオンはそのままカレトヴルツフ炎を左腰に仕舞う。居合切りの動作だ。そして少し間を置くと一気にそれを横に振るう。その際に出た斬撃波が猛スピードでウンディーネに向かう。得物の振るう範囲とに比較して飛び出す斬撃波は余りにも大きい。

だが直線的だ。ウンディーネは残りのスラストを全て使い斬撃波を回り込む様に回避。ジャイオンへとビームサーベルを構えて向かう。

「名付けて『太陽風牙』出来ればこいつは使いたくなかった……まだ未完成だからな。けどよ、シンパチがあんな必死になったんだ!」

そして次第にジロウの言葉の語気が強くなっていく。

「ここで使わなかったらしめしがかねえだろ!!」

「なら使わせない!!」

叫ぶジロウとアイ、満身創痍の機体同士がぶつかり合う。だがカレトヴルツフ炎とビームサーベルで鏝迫り合いをした瞬間。『ピシッ』という音がアイとツチャの耳に入る。二人は気付いた。ジャイオンとカレトヴルツフ炎に亀裂が入ってる。それがどんどん広がってるのだ。

「ジロウ! その亀裂! 反動か!?!」

「言つたらうが! 未完成だつて!! おいそれと使えるもんじゃねえ!!」

二体の剣戟は続く。カレトヴルツフを打ち付ける度にジャイオンの亀裂は大きくなっていく。しかしジロウは攻撃をやめようとなない。

「！もうやめろジロウ!!熱くなり過ぎだ!」

「熱くなり過ぎ?!そうだな!お前はカモザワの奴を止めもしないで冷静に無関係を装ったよな!」

「何だと!」

「カモザワが!あのバカが違法ビルダーになった時!なんでお前は止めなかった!あの後に違法ビルダー共引き連れてこつちまで襲う様になりやがったんだぞ!!」

「セリトが?!」

気迫の差か、いつの間にかウンディーネの方が押される流れになつていった。

「くっ!俺はアイツとの縁は切つたつもりだ!!関係ない!」

「元々あいつを連れてきたのはお前だろうが!!責任放棄してるだけじゃねえか!逃げてるだけだ!!」

「待つてくださいいよ!ツチャさんはその後でカモザワさんに愛想を尽かしたから!」

「アイちゃんだっけか!でもよ!」

ひときわ力強くカレトヴルツフを振るうジロウ。その威力にウンディーネは吹っ飛ばされる。

「うあっ!!」

「あいつが、カモザワが一番心を許していたのもツチャだったんだ!あいつがショウゴさんに殴られて追い出された後に、少しでもフォロ―してればもっとマシになってたかもしれない!そう思うとやりきれねえんだよ!!」

距離を取ろうとするウンディーネ、それをジャイオーンはライフルモードでの射撃で追いかける。

「あいつらが暴れた時!俺達の拠点の店でビルダーも辞める奴は何人もいたんだ!俺はお前を許せねえ!!」

「……………」

「それは結果論です!違法ビルダーになるなんて誰が予想出来ましたか!」

「だが一度カモザワはサブロウタの前に現れた!あの時だつて止める

チャンスだったはずだ！……おい！サブロウター！」

再びバスターモードへ切り替えたカレトヴルツフ炎をジャイオーンは打ち付けてくる。ビームサーベルで受けるウンディーネだが、向こうの気迫は攻撃の事しか考えていない。カレトヴルツフの負荷を全く考えてない動きだ。

「お前こんな時までこんな女の子に言わせて自分じゃ言わねえのか!!
テメエでケジメもつけねえのか!!」

「……ヤタテさん、コントロールをこつちに」

「！ツチャさん！」

「手は出さないでくれ……!」

ツチャにコントロールが渡った瞬間、ツチャは右腕のビームガンをジャイオーンに連射する。とっさにかわすジャイオーン、
「!!」

「逆恨みじゃないのは分かるが、正直全部納得出来たわけじゃない。
だがこれだけは言える!!」

離れたジャイオーン目がけてウンディーネがビームサーベルを構えて突っ込んでいく。

「ここどうだうだ悩むつもりは無いつて事だ!!」

「そうかよ!!!」

再び居合切りの体勢でウンディーネを待ち構えるジャイオーン。
ジロウはわずかな時間でツチャの動きを予想する。

——こつちが切り札を使うのは向こうも予測しているはずだ。そしてサブロウターの得意分野は分離のかく乱。恐らくこつちの居合を分離でかわして、そのまま分離後こつちを集中攻撃……なら居合の動作を利用して、どちらか近い方へカレトヴルツフを向け、そのままライフルでコクピットを狙う！——

そう予想しジロウは構えに力を込める。ウンディーネはそのまま突っ込んでくる。

「よけてみせろよ!!」

そう言つてジロウは居合の衝撃波を放った。衝撃波は目の前のウンディーネに迫る。かわすと予想したジロウだったがウンディーネ

は意外な行動に出た。そのままビームサーベルで衝撃波を受け止めたのだ。

「よけずに！止めただと?!俺の切り札を?!」

目の前で鏢迫り合う機体は強烈なスパークを放つ。

「くうっ！」

アイは眩しくて思わず手で目を覆う。

——これが……ツチャヤさん一人のガンプラ魂?!一人でこれだけの物を受け止めるようなパワーを!——

「ジロウウウ!!」

ツチャヤの叫びに応えるかのようにウンディーネのビームサーベルはどんどん大きくなっていく。出力が魂に応じて上がってきてるのだ。そしてビームサーベルが衝撃波の中に食い込み始める。

——まさか!あいつのガンプラ魂が俺より勝ってるだと?まだまだ!もう一撃居合を!——

再び居合の構えに入るジャイオーンだが、その瞬間にガンプラ魂で出力が強化されたビームサーベルが衝撃波を真つ二つに切り裂いた。そしてその後方にいたジャイオーンを襲う。

「くそっ!!」

粒子を張ったカレトヴルツフで受け止めようとするジャイオーン。しかしボロボロの剣で受け止める事は敵わず。ビームサーベルを受けたカレトヴルツフは砕け、ジャイオーンも同時に真つ二つになってしまう。

「なっ!!」

「解ってもらえたか」

「チッ!気合い入れたってのにこれかよ。……大声出して疲れた」

そう言っただけジャイオーンは爆発。チーム『ライオン・ハート』は全滅。これにより準決勝はアイ達の勝利となった。

「アタシ個人としてはやられちゃったのは悔しいけど、どうにか決勝までこれたわね」

「ああ、これで後は決勝。ユミヒラさんとブスジマさん。どっちが相

手になるかだ……」とツチャ。

バトルが終わった後、アイ達は集まり、来週の決勝の相手が誰になるのか気がかりになっていた。無論気になるのはそれだけではないが。

「おいおい。さつき言った事は無視して次の事考えてんのかよ」

「あ、サイトウさん」

サイトウ達三人がこちらに歩いてくる。ツチャに対しての気に入らなそうな表情はそのままだった。

「別に無視してはいない。セリトに関しては……やるさ。俺、友達に戻るかは解らない。だが俺が原因でこじれたってんならな」

一応気にはかけていたらしい。とはいえ余り動揺とかは見えない。そのそっけなさがジロウは真剣に見えない気がして気に入らない。

「そうかい。その割にはドライな反応だな」

「意地悪ですね〜ジロさん」と苦笑いしながら言うシンパチ。「うるせーな」と返すジロウ。

「今は選手権だから俺個人の問題を入れるわけにはいかないと思っただけさ。大体セリトは選手権出てないだろう。予選でハツキングして集団で襲ってきたけど」

「お前……違法ビルダーがあれくらいで手を引くと思ってるのか？セリト含めてあいつらはまた必ず来るぜ」

「でもだからってアイさん達に任せっきりにするつもりはないですからね！俺！必ず次は勝ちますから！」

目を腫らしたケンがアイに向けて言い放つ。負けたことはかなり悔しかったらしい。

「え〜でも負けちゃったんでしょ？もうどうしようもないじゃん」とナナ。

「あ、知らないんですか？負けたチームは一度バトルロイヤルで敗者復活戦やるんですよ」

「え？そうなんだ。知らなかったわ」

「まあ全国規模での敗者復活戦になりますからねえ。これまた激戦になりますよ」

「そういう事だ。俺たちは必ず勝ちあがってみせる。もつともつと強くなつてだ。『ガンプラ十箇条その2、ガンプラは日々精進』ってな」
「?・なんですかそれ」

「俺達の師匠の言葉ですよ。遠くに住んでるからたまにしか会えないんですけどね。とにかく強い人ですよ」

ケンはそのビルダーを思い出しながらその人への尊敬の念を言葉にする。最もどんな人か知らないアイ達にとってはその気持ちも気づくことはないだろうが、

そしてジロウ達はアイ達より早くその場を後にした。通路を通り玄関に向かう三人。

「それで、どうするんですか? 技はもちろん機体だって強化しないと」
「負けたのは悔しいが、チャンスがある以上いつまでもクヨクヨしてるわけにはいかない。さっきのバトルでそれぞれが自分の機体の弱点や足りない所が見えつつある。三人はそれぞれの操縦や機体強化のプランを考えつつあった。」

「そうだな。どうするか」

次は負けない。そうジロウは、三人は心で誓う。その時だった。一人の男がジロウ達の前に躍り出た。

「だったら! 敗者復活戦にはボクを加えてくれないか!？」

「ん? お前……!」

「それにしても……アイちゃんとツチャヤさん、二人のガンプラ魂とはいえ、まさかあの気迫を押し返すとはね……」

「ん? 違うよムツミちゃん。あれはツチャヤさん一人で」

「!・ツチャヤさん一人で?!」

ムツミは声を荒げる位に驚愕する。以前ツチャヤがコンドウとソウイチでチーム組んでアイとバトルした時、アイは三位一体となったコンドウの気迫を押し返した。あのコンドウの気迫は恐らくツチャヤとソウイチの物も加えていたとムツミは思っていた。少なくともツチャヤのガンプラ魂はコンドウ程ではないとムツミは考えていたのだ。

——アイちゃんの気迫以上の物をツチヤさんが持っていたの……？それとも……やっぱりそれがアイちゃんの……——

ムツミはアイを見ながら今までガンプラに関するアイの笑顔を出す。アイはいつだって心から楽しそうだった。コンドウさんも言っていた。「本当に楽しそうにやる者は他人にも影響を及ぼす」と。もしかしたら、ツチヤさんもアイちゃんの影響で……そうムツミは考えていた。

当のアイはソウイチ達と話し込んで。ノドカ達の試合結果が分かっただけらしい。

「やっぱりノドカが勝ったんですね！やった！」

「おいおい。ワシらが負けたってのにやったはねえだろアイちゃんよ」

敗北したブスジマ達がやってきた。来て早々に遠回りながら自分の敗北を喜ばれたのに少々複雑な心境だった。ブスジマ・シンジ50歳。複雑なお年頃である。

「あーブ……ブスジマさん……すいません」

バツが悪そうに頭を下げるアイ達。今のアイの心境はシンジをビルダーの仲間として見て無く。ついバイト先の上司としての反応を失ってしまった。

「ワハハ！冗談だよ！ともかくアイちゃんの幼馴染だけあってつええのなんの！決勝はアイちゃんもうかうかしてらんねえぜ！」

これにより一週間の時間を置いてAブロックとBブロックまとめの決勝戦となる。

「だがな、どうも不安だ……」

割って入ったのは軍服とロングのウィッグを付けた男、ツクイ・クニヒコだ。どうも彼の方は腑に落ちないところがあるらしい。

「なんですか？」

「バトルしてた時だったんだが、どうも彼女からガンプラバトルを楽しもうって気が感じられなかったんだよ。まるで勝つ事だけに無我夢中になってる様に思えたぞ」

「そりゃ試合なんだから必死になるだろう？」とヤナギがツツコミを

入れる。「それはそうだが……」とツクイはのどにつつかえがある様にどもる。

「じゃあ本人に聞いてみます」

そう言っただけでアイはノドカ達の方にかけていく。ノドカ達がGポツドから出てきて部長達と話し込んでいたようだ。

「ノドカ」

軽快な笑顔とテンポでアイはノドカに話しかける。アイの声を聴いた途端、ノドカの体がビクツと萎縮した。

「？ノドカ、凄いよブスジマさんに勝つなんて、私なんてまだ勝ったこともない人だよ」

ノドカの反応に疑問を持つアイ。しかし話し続ける。

「う……ああ」

「どうしたの元気ないよ？調子悪いの？」

「いや……別に」目をそらしながら応えるノドカにますますアイは違和感を持つ。

「ねえ、変だよ。風邪ひかないのがノドカの自慢だけど、熱でもあるんじゃないの？」

体温を確かめようとノドカの額に手を当てようとするアイ、しかし

……

「……な」

「え？」

「さわんなくて言ってるんだろ!!!」

突然怒りと泣きが混じった表情でノドカはアイの手を払いのけた。

「ノ……ノド……カ？」

突然の事にアイは茫然とする。

「なんだよ……。あの時、お互い自立しようって約束したのに……これじゃ全然ダメじゃねえか……アンタと一緒にじゃ……ダメなんだよ……アタシは……ミジメなんだよ……」

アイだけでは無い。アイとノドカ、どちらかだけでも知ってる全員が突然の事に固まっていた。ただ一人……観客席で笑ってる一人を除いて。

「フッフ……アハハハハハ！愚かなビルダーは友達も同レベルという事ですね。さあ、どうします？ヤタテ・アイ！」

声の主、リンネは心の底から喜びの笑いを上げていた。

第51話「流転とスウィートポテト（前編）」（メテオビルドイージスガンダム登場）

「ねえ……ノドカ、どうしたの？変だよ」

ノドカの叫びにアリーナ中の空気は凍り付く。さつきまで賑わっていたのが嘘のようだ。広大なアリーナだが、ノドカの叫びはそれを全て黙らせるほどの大きな叫びだった。

アイはそれを非常に複雑そうな表情で問いただす。拒絶されたシヨックやそれを認めたくない気持ち。そして「何故」という疑問、それが絡み合った心境の表れだった。

「自立……したいんだよ……アタシは、今までアンタを引っ張ってきただけだった。アタシがいなきやアンタは駄目だつてずっと思ってた。アンタにガンプラを教えたのアタシじゃん。

アンタにガンプラバトル誘ったのアタシじゃん……。アンタいなくなつて気づいたんだよ。アタシが引っ張っていたんじゃない、アンタに引っ張られていたなんて」

「ノドカ……」

「受ける。受けるよな……。アタシは寂しい思いをしてたっていうのに、アイは引っ越してあつという間に友達見つけて、あつさりチームも組んで、自分ばかりいい思いしてたじゃん。そりやアンタがいなくなった後にアタシ、アンタとまたガンプラバトルしたいって思ってたけど、本当は……ミジメになるんだよ。お前見てると……」

俯きながら、ノドカは下唇をギョツと噛みしめる。さつきの言葉に説得力を持たせる動作だった。しかしアイにはそれが本心なのか解らない。自分に対してこんな事を言う事は今までなかったからだ。

「今改めて言わせてもらうぜ。アイ、いやチームI・B、決勝ではお前らを叩き潰す。手加減なんざ最初っからするつもりはねえ」

「て・手加減しないのは当たり前じゃない。でも競うからには楽しくやりたいよ。私とあなたの仲じゃない。ねえノドカ、そんな変な事言わないだよ」

「うるせえな。……関わりたくねえんだよ！お前なんかと！」
「っ!!」

関わりたくないという言葉にアイは固まる。絶望を現した様な表情だった。

「ノドカ……あんた何考えてるのよ」

芯が抜けた様によるけたアイを、ナナが支えながら問い詰める。彼女もノドカの反応に納得がいかない様だった。

「ナナ……別に普通の事だろうが、どれだけ仲が良くつつたって、競い合ってるんだぞアタシらは、トーナメントじゃ潰しあいになるんだからな」

「アンタね。んなギスギスした決勝なんてこっちから願ひ下げよ。こっちは楽しむ事だって目的なんだから」

「ハッ！受けるわ！お前自分の実力解ってるのかよ！あんなチンケな実力でアタシと部長達には絶対に勝てねえ！」

「……………」

その発言にナナは言葉を失う。自分の実力がアイに大きく劣るのはその通りだから。それを後ろで見ていた太った部長、ノゾムとユメカが見ていられないとばかりにノドカを止めようとする。

「ノドカ！いい加減に……………」

だがそれより早く、一人の人影が素早くノドカの前に躍り出る。そして……

パンツ!!

乾いた強烈な音が響いた。躍り出たのはマコトだ。彼女が無言でノドカの頬をひっぱたいたのだ。それを見ていたアイの関係者全員が固まった。

「バカじゃないの？ノドカ」

「マコト……………」

ノドカ自身ぶたれた事を理解するのに少しの時間を有した。最初は茫然としたノドカだったが、ノドカの顔はまた不機嫌そうな顔に戻る。

「ハッ！だ・大好きなアイを馬鹿にされて悔しいってか？よかったな。

もうアイはアタシには必要ないからお前らにくれてやるよ」

ノドカの挑発にマコトは表情を変えない。それどころか憐れんだ表情で言う。

「友達を物呼ばわり？アイ先輩はどうやらあなたを買い被ってたみたいですねえ。こんなバカ丸出しな行動を取る上に、思いやり一つ持てないなんてね」

「なんだとー！」

「バカだつて言ってるんですよ！自分勝手に！臆病で！」

売り言葉に買い言葉。興奮したノドカはマコトの胸倉を掴む。直後にマコトはノドカの髪を引っ張る。お互いが本気になってるのはすぐに分かった。もうキャットファイト直前だ。

「ちよつと落ち着け！二人とも！」

「やめて欲しいっス!!大人げない！」

ツチャがそれを遮りノドカの方を引っぺがす。それに続いてソウイチもマコトの方をひっぺがした。女二人は手首を掴まれた状態だ。ソウイチの方は女性に免疫がないらしく少し頬を赤らめてる。

「少年。照れがあるぞ。彼女の怒りを鎮めるには胸を揉m「ユメカ」

ユメカの言葉を鬼の様な形相で遮るノゾム。対して接点のないナ達ですらゾツとする怖い声だった。ソウイチはマコトといい、ユメカがどうも苦手だった。

——このマコトさんといい、ユメカさんといい、どうも下品なオーラが出てるっス……——

とまあ、そんな事はどうでもいいとして、だ。どうにかツチャは二人をなだめようとする。

「何があったか解らないが、落ち着くんだ二人とも。少し時間を置いて、三人で話し合った方が……」

「今更善人面すんじやねえよ！サブロウタ!!」

聞き覚えのある声が響く。と同時に誰かがツチャの横に体当たりをかました。

「うわーなんだ！」

そのまま横倒しになるツチャとノドカ。倒れこんだ拍子にツチャ

はノドカの手を放してしまふ。女の子相手に力を込められないと少し手を緩めていたのが災いした。倒れるとすぐさま体当たりをしてきた相手を見る。よく知った顔がそこにあつた。

「セリト!?お前!」

かつてのツチャの友達だつた男。カモザワ・セリトだつた。彼はもう倒れたノドカの手を引いてその場を離れようとしていた。

「別にいいだろ?俺たち以外にもう一組位縁を切るような友達がい たつてさあ」

「お前がやったのか!お前が彼女に妙な入れ知恵を!」

「……あばよ!」

質問に答えずにセリトはその場を後にしようとする。後を追いか けようとするアイ達だつたが、走つていくノドカとセリトの後ろ、ツ チャ達の前を何人もの違法ビルダーらしき人物達が壁の様に遮る。 その中にはテツとヤスもいた。

「あんたら!どけよ!」とソウイチ。

「そういうわけにはいかねえ。俺たち新世代ビルダーのやる事だ。旧 世代は黙つてみていやがれ」

「そうさ。俺たちの趣向返しも兼ねているからな」

「あ?趣向返し?」

「そうともさ!お前らの所為である時俺たちは地獄を見た!俺達は なあ!大学のレスリング部の合宿に強制的に連れていかれて!雑用 と朝から晩までのトレーニングで死ぬ様な目にあつてきたんだぞ!

(44話参照)」

「マツオの奴が言つてたな。合宿に違法ビルダーの奴らを更生の為に 雑用で連れて行つたつて」とヒロ。マツオとは一度一緒に戦つて以 降、会う機会が増えたらしい。

「てめえら!中高生だろうが!いまだにやっていい事と悪いことの区 別もつかねえのか!」とブスジマ

「なんつても言いやがれ!あの女は俺達の側へついた。俺達は高みの 見物だあ!どうなるか見物だなあ!」

そう言つて頃合いだと言わんばかりに一目散に違法ビルダー達は

逃げて行った。最初から時間稼ぎの為に出てきたらしい。

……

違法ビルダー達が引き揚げた後、ブスジマやノゾム達を含めたナナ達はノドカを探しに、室内、屋外を問わずアリーナの敷地中を探し回った。時刻はちょうど昼。真夏の太陽はそんな中を容赦なく照り付けた。動くだけで汗が噴き出るも気にせず、外担当のソウイチ達男子は一心不乱に探し回る。しかしやはりというかノドカもセリトも姿は無い。

しばらくして全員が玄関口で集合する。

「いたっスか？」

「ううん。てことはそっちもか」

「やっぱり帰っちゃったんでしょうね」

アリーナの玄関口で合流したナナ達は結果を報告しあう。ナナはエントランス内のベンチに座ったアイに目をやった。座ったアイは未だにうなだれていた。近くにはカナコが寄り添っている。相当シヨックだったらしい。

「よお、観客席から見てたぜ。面倒な事になっちまったな」

「マツオ」

と、集合していたナナ達の所へマツオが歩いてきた。会ったことのないマコトは訝しげな眼で彼を見る。妹のチトセはいない。

「こっちもそのノドカって女には会えなかったが収穫はあったぜ」

「……どうしたんだそれ」

マツオの左右の手それぞれには首筋を掴まれた猫よろしく、ヤスとテツの二人がぶら下がっていた。ヒロは意外な手土産を見て驚愕。他の全員も声には出してないが同じ感想だった。

「離せ！ 離せよお!!」

「野蛮人めえ、俺達をどうするつもりだあ」

手足をばたつかせて逃げようとするヤスとテツだが、その度にマツオは腕に力を込める。その度に首筋の服が二人の首を絞まり「うっ」とうめき声と共に大人しくさせた。

「さつき帰る途中で違法ビルダーの集まりに出くわしてな。顔を知っ

てるこいつら二人を捕まえといたぜ。まあちよいと乱暴なやり方かもしれねえが」

「意外だけどありがたいわ。さあ!!言いなさい!!あんたノドカに何したの!!」

二人に詰め寄るナナ、他の全員も無言の圧力で二人に迫る。

「し!知らねえ!俺達はあのセリトって人にああやって並ぶ様言われただけだあ!!あのノドカとかいう女を仲間に加えるとか言って!」

「本当だろうな!!」

「マジだつて!!信じてくれよお!!」

「さつき俺も問いたただいたけど同じ答えだったぜ。正直こいつらに重要な情報を教えてると思えねえがな。さつきこいつら捕まえたらこいつらの仲間一目散に見捨てて逃げ出してやんの」

「う!うるせえ!どのみちお前ら旧世代は終わりだ!これだから野蛮なサル共は!!」

「……とりあえず、折角捕まえたんだから当分こつちのレスリング部でこき使うことにするぜ。根性叩き直るまでやつとくからなあ」

マツオの発言に二人の顔は青ざめる。以前の合宿で相当きつい目にあつたらしい。

「まあ、あのノドカつて子に連中がいらん知恵回したのは確実だろうが、どうにかなると思ってるぜ。気を落さないようヤタテに伝えてくれよ……ヒロ、お前も今日はキツイことがあつたらうが、気を落すなよ」

「有難う。マツオ、やつぱり君はいい人だ」

「ケツ!んな簡単に人を信用すんじやねえよ!……じゃあな」

そのまま「ほら行くぞ」とテツとヤスを引きずっていくマツオ。「助けてええ!!」という二人の悲鳴だけが木霊した。

——もうすっかりあいつもアタシ達の味方だなあ——とナナは思う。……さて、それからアイに駆け寄るナナ。

「アイ……大丈夫?」

「ナナちゃん……うん、少し落ち着いた」

エントランスのベンチに座っていたアイにナナは問いかける。

「先輩……。ごめんなさい！」

マコトがかなりの勢いでアイに頭を下げた。その拍子に揺れる胸。

「マコトちゃん……」

「引越す前、ワタシにノドカが孤立しない様に託してくれたのに！
ワタシがもつとアイツの事を見ていれば！」

「マコトちゃんの所為じゃないよ……」

「そうだよ。あれはどう考えても違法ビルダーが噛んでるよ。普通
不満はあってもあんな風に言うとは思えないもん。きつと言った後
に後悔してると思うよ」

「タカコの言う通りだよアイちゃん……。ノドカの事は詳しいとは言
えないボク達だけど。でもアイちゃんと気の合う親友だったわけだ
もの。悪い人なもんか……。自分が間違っていたって後で気づくは
ずだよ……」

タカコとムツミもそれに続く。

「二人とも……。ありがとう。でも……。わかんないよ。昔はね。いつも
私とノドカは一緒だったんだ。その時は何でもノドカの事は解るつ
て思ってたのに……。仮に私から自立したいといっても、あんな違法
ビルダーについていくなんて……。本当にバカだよ。アイツ……」

「アイ……」

「……。わかんなくなっちゃった。ノドカの気持ち……」
その時だった。馴染みの無い声アイ達の耳に入る。ただし聞き
覚えのある声だった。

「事情は大体呑み込みましたわ。このタイミングでそういう展開にな
るとは、辛いですわね」

ナナは真つ先にその声に反応する。

「ん？まさか！」

ナナは声のした方を見る。三人の女子がそこにいる。声を出した
のは真ん中の少女だろう。閉じた扇子を持ったウエーブのかかった
銀髪の少女。ナナは、アイ達はその姿の少女をよく知っていた。

「イモエー！イモエじゃん!!」

「つて！会って早々大声でその名前呼ばないでくださいまし!!」

自信のありそうな端正な表情が一気に崩れた。サツマ・イモエ（薩摩妹江）、以前アイ達とバトルし、ナナと因縁がついた少女。プライドの高い彼女は下の名前で呼ばれる事を嫌がる。

「あーごめんごめん、で、そちらの二人は？」ナナはイモエの左右に連れている少女の事を聞く。両脇の少女はあつた事がない。フクロウかペンギンの雛を擬人化させた様なかなり太った少女と、その少女に隠れるようにこちらを伺う少女の二人だ。隠れてる方は後生大事そうにうさぎのぬいぐるみを抱えてる。二人ともイモエと同世代らしい。

「前に言ってた友達ですわよ。……この度、ワタクシの地域では見事ワタクシが県内予選を優勝した事を言いたくて、今日ここまで来たんですの」

軽く会釈する二人の少女。二人の紹介はおいおいとしてだ。

「えーじゃあサツマさん！」アイが打って変わってのテンションで食いついた。サツマは申し訳ない気持ちを持ちながらも、待ってましたと反応する。

「ええ。全国大会に出ますわ。そして……アイさん。あなた達の県はあなた達が優勝すると思ひ、視察も兼ねてこちらにきたのですが……」

こんな事態になつてしまうとは、と、サツマは付け加えた。

「見苦しいところを見せちゃいましたね」

「……ねえ、もっちゃん。明日のルジャーナ主催のガン普拉バトル大会、アイさん達を呼ぼうよ」

太った少女がイモエにそう言った。ルジャーナとはサツマ達が拠点にしてる模型店だ。

「?!何言ってますのよチヨコ！このタイミングで！」

「ガン普拉バトル大会？そつちで明日あんの？」

「ええ、サバイバル形式の奴がね。誘うつもりではあつたんですけど、正直言つて今日の有り様では」

「わ……私も誘つた方が……いいと思う」

隠れてる少女がそれに続く、「スグリまで」とイモエ。慌ててチヨコ

と呼ばれた少女の後ろに隠れたスグリという少女。

「だ……だって元々招待するのも目的だったんだよ……？少しでもアイさんに気分転換になって欲しいし……それに……ゴニョゴニョ」

「はい？ちよつと、後半解りませんわよスグリ」

言葉を続けているうちにどんだん言葉が小さくなっていくスグリ、イモエはもう一度言う様に耳を向ける。

「お気持ちは嬉しいですけど……でも」

「いや、行った方がいいと思うよ」

断ろうとするアイだったがノゾムが意外な言葉を口にした。ユメカも「そうだな」と同調する。

「ノドカの方も時間が経てば自分が何をしたか自覚はするはずだよ。今はアイちゃんもノドカの方も落ち着く時間は必要なはずだ」

「そうだな。折角の地域チャンピオンの誘いなんだ。無下にする必要もあるまい」

「先輩、ノドカの方はワタシ達に任せて下さい。アイツには文句は言わせませんよ。アイ先輩は一刻も早く元気になって」

アイは弱りつつも思案する。確かにそうだ。次の相手はノドカ、自分が勝てなかったブスジマでさえ勝利した。おそらく今まで以上に厳しい戦いになるだろうから。ノドカとは来週までにどうか和解しておきたいが、来週には嫌でも会う。しかしイモエの誘いは今だけだ。何か参考になるかもしれない。

「うん……。じゃあ明日は、お邪魔しちやおつかいな」

「決まりですね。では明日」

……

そして翌日、イモエ達のホームグラウンドの街、その市民体育館にて再びアイ達チーム『I・B』とイモエ達は再会する。エントランスの時計は午前十時を指していた。

「改めまして、ようこそおいでくださいました」

「久しぶりねここも、以前はここでガンプラの素組でサバイバルをやったんだっけ？」

「ええ、あの時は買ってその場で組んだガンプラをそのままバトルに

投入していましたが、今回は普通のサバイバルですわ。自分のとっておきの作品で挑めるといっわけですわね」

「と、言うことはアンタのチームメイトも出るんだ」

「ええ、紹介しますわ。こちら（太ってる方）が『ヒルガオ・チョコ（昼顔千代子）』そしてこちら（隠れてる方）が『ルコウ・スグリ（流紅直里）』」

「二回目だけど初めまして。もっちゃんからは話は聞いてますよ」

ニコニコ笑いながらチョコは握手として右手を差し出して来る。快くアイは握手に応じた。

「それにしてもアンタ、もっちゃんなんて呼ばれてるのね。そんなナリして」

意地悪そうに笑うナナ、

「いいじゃないですよ。小さい頃からのあだ名ですわよ」

「じゃあ今日のバトルで私達『スウィートポテト』の実力をお見せしますね」

「スウィートポテト……サツマイモ」とナナ

「何が言いたいんですのよ……いいじゃないですよ……。そうしたってあの二人が言ったんですから……」

赤面するイモエ。チーム名をそれに許可したのはチームを一度捨てた事による後ろめたさがあるからか。とナナは予想した。

そして三十分後、会場内での手続きと開会式を済ませたアイ達ビルダー一同は体育館のコートに並べられたGポッドに入っていく。そして愛機をスキヤンすると共にサバイバル戦が始まった。

アイは眼下に一面の森が広がっている中を飛ぶ。今回のアイの機体は『スタービルドストライクガンダム』『ガンダムビルドファイターズ』後半の主人公機で主人公のイオリ・セイは相棒のレイジと共にこの機体で世界大会に殴り込みをかけた。

「今回はカサレリアか……綺麗なフィールド」

アイは少し元気の無い調子で感想を述べる。『ポイント・カサレリ

ア』『Vガンダム』に登場した地域で山や谷、深い森といった自然豊かな地域だ。名前はポリネシアの言葉で「こんには・さようなら」の意味がある。CGによるバーチャルな空間ではあるが高度なグラフィック技術は自然の雄大さを上手く描いており、圧倒されそうな映像だった。しかし今のアイにはそれも心に引く掛からない。

「ちよつとアイ、本当に大丈夫?」

並行して飛んでいるストライクフリーダムに乗ったナナが問う。一日時間は置いたがどうにもアイの元気は戻り切っていない様に感じる。

「大丈夫だよナナちゃん。昨日よりはずっと楽になったから」

ナナの心配。今までの勝利はアイありきの勝利だった。今の自分達の実力不足をアイの実力でうまくカバーしてきたが、アイの調子が崩れてしまうと今までの調子すらうまくいかないだろう。この心配はそんな打算的な物もあったが大部分は友達としての純粋な心配だった。

「アサダの奴は別の所で戦ってるか。イモエ達の方は……」

「それならここにいましてよ!!」

自信にあふれた声がする。アイ達が声のした方、上を目にすると太陽を背にした機体が突っ込んできた。二人に向けてビームライフルを乱射してくる。

「うわっ!イモエ?!」

ビームシールドで防御をするナナ、反撃しようと背中中のドラグーンを飛ばすもドラグーンが撃つ前に影はドラグーンを撃ち抜き破壊。

「ドラグーンが!!」

「ハジメさん!乗り換えたばかりみたいですよわね!!複雑な機構のストフリを簡単に使いこなせると思わないでくださいまし!!」

そのまま影は左腕の袖部からビームサーベルを発生させてストライクフリーダム(以下ストフリ)に斬りかかる。慌ててビームサーベルで迎え撃とうとするナナだったが向こうの方が早い。

「どれほど腕を上げたのかと思いきや!ふがないですよわ!ハジメさん!!」

「は！早い！」

焦るナナ、しかしストフリの前に躍り出たアイのストライクが、ビームサーベルで相手のビームサーベルを受け止める。鏝迫り合いによる激しいスパークにより影の正体が照らされる。

「イージスガンダム！」

ナナが叫ぶと同時にイージスとストライクは一度離れる。『イージスガンダム』『ガンダムSEED』に登場したガンダムでストライクのライバル機だ。独特な変形機構を持っておりまるで四本指の手の様な形態へと変形できる。

「落ち込んでいたとはいえさすがの反応速度ですわね！ヤタテさん！」

「それが県内予選を勝ち抜いた機体ってわけですか?！」

「その通り！名づけて『メテオビルドイージスガンダム』！スタービルドストライクのイージス版といった所ですわね！」

そしてイージスはすぐさまライフルを向けてストライクへと放つ。

盾と銃の武器類はスタービルドストライクからの流用だ。

「ッ！」

アイはすぐさま左手のアブソープシールドを構え展開、ビームを吸収する。吸収したビームはストライクにエネルギーとして還元される。

「スタービルドストライクのシステム流用なら！特徴や癖は解ってますよ！」

そのまま得たエネルギーでストライクのモードを切り替え変えようとするアイ。しかしその時だ。眼下の森から何条ものビームが撃たれてくる。線の様に細いビームだが直撃すれば致命傷は確実。

「っ！」

モードを切り替えようとしていたアイはとつさに回避。しかし射撃は休みなく続く。撃たれている範疇はアイ達のいる近辺のみなあたり、アイ達の撃墜が狙いなのだろう。ナナのストフリもビームシールドで防衛、サツマのイージスも細かい動きで回避しているのが見えた。

「何ですよこれは！」

「イモエ！あんたの作業じゃなさそうね！」

「そんなわけないでしょう!!」と、しのぎながらの問答をするナナとイモエ、

「コソコソと隠れちゃって!!出てきなさいよ!!」

射撃が途切れた瞬間を狙ってナナはストフリを上空に急上昇させる。森からのビームはナナを狙って一層激しくなるが、それをサツマとアイがアブソープシールドで援護防御。

「イモエ!?アンタまで！」アイの援護防御はともかく敵対チームのイモエの援護は予想してなかったため驚くナナ。

「イモエ言うな！ともかく何か考えがありそうですわね！やるならさっさとやって下さいまし!!」

「恩に着るわ！」

そのままナナのストフリは天高く上り、両手にライフル。腰のレールガン、腹部ビーム砲、全てを前面に展開。最大出力で眼下の森に放つ。ハイマツトフルバーストだ。

「いっけええっつ!!」

放たれた何条ものビームは森林地帯を直撃。着弾地点の至る所を爆発で吹き飛ばす。

「どうよ！こういったコソコソした戦法は前も見たもん！対策位!!」得意げに話すナナだが

「バカ!!確実な撃墜も確認できないで動きを止めちゃ!!……危ないっ！」

「え!?!」

サツマの叫ぶ中再びビームは放たれていく、今度は油断していたストフリに集中してだ。ナナはビームシールドで防御しようとするが間に合わない、全ては防ぎきれずビームに晒されたストフリは瞬く間にボロボロになっていく。

「く！うううっ！シールドを発生させる前に！」

「ハジメさんっ！見てられませんかっ!!」

すぐさまサツマはイージスを変形させる。と同時にイージスから

青い翼が現れる。

「イージスにプラフスキーウイングが?!」

「今のビームでたらふく吸収できましたからね!!スピードモード!!」

そのままイージスは高速でストフリめがけて上昇、これも下からのビームは狙うが当たらない。ロックしても撃った頃にはイージスはその先だ。瞬く間にイージスはストフリの上真上に付くと、四隅のクローを展開、爪先だけをそれぞれ中心部に合わせるとイージス腹部のビーム、スキュラを発射させようとする。しかし目の前にはナナのストフリがいる。

「ちよつとイモエー!アタシが目の前に!!」

「アタックモード!!発射!!」

——あ、もしかしてイモエ言い過ぎて怒らせた?——

ナナが冷静にずれたことを考えながらも、お構いなしにサツマは最大出力でスキュラを発射、そのまま自分はスキュラで破壊されると思ったナナだが、ビームはストフリを避ける様にドーム状に拡散していく。

「何これ!ビームが避けてる!」

と驚愕するもナナは目の前のイージスを見た。スキュラから撃たれたビームは合わさった爪の部分にぶつかり、拡散されたのだ。これによりナナはスキュラがストフリを避けていると錯覚したわけだ。

拡散されたビームはストフリフルバースト同様着弾地点で爆発する。しかし爆発の大きさはストフリ物より大きい。程無くして三機の機影が森から飛び出してきた。鳥のような顔、大柄な体躯、左右の肩に三つずつ積んだ筒状の武器。

「ヤクト・ドーガー!ギユネイ機が一体!そしてクエス機二機の三体構成ですわね!」

そういうや否や、サツマはイージスを再び人型に変形させ、プラフスキーウイングを展開、ヤクトドーガに突っ込んでいった。ヤクトの方は迎撃しようと肩の筒、小型遠隔操作式ビーム砲、ファンネルを用いて迎撃しようとする。

が、イージスのスピードはすさまじい。瞬く間に三機に接近、まず両袖のビームサーベルを発生させるとギユネイ機に突撃、ギユネイ機もビームサーベルで迎え撃とうとする。すれ違いざまにお互いが剣を振るう。直後、ギユネイ機の胴体は寸断されて爆発。

それを見て警戒したクエス機二機は距離を置いて迎撃しようとする。イージスの上下と前後左右から何条ものビームがイージスを襲う。イージスの周りにファンネルを配置していたわけだ。シールドで吸収出来ない分で倒せばいいという算段だろう。しかしイモエは余裕だ。

「愚策！」

イモエはイージスを真下の森へと突っ込ませた。さつきと逆だ。イージスが潜った地点をファンネルで集中的に撃つヤクトドーガだったが、直後別の場所で放たれた三条の大型ビームにヤクトは二体とも撃ち抜かれる。森から撃ったイージスのスキュラとユニバースブースターのパーツのビーム砲だ。主を失ったファンネルも、そのまま無力化し落ちていく。

「ふうっ……ハジメさん、生きてますか？」

「なんとか……アイの方は？」

「別のところで戦ってますわ」とサツマ、見ればアイのスタービルドストライクが複数の改造されたハイモックと戦ってるのが見えた。ミサイルポッドが全身に追加され、弾幕を張りながらストライクを追い詰めようとする三機、しかしアイはこれまたスピードモードで弾幕を突破しハイモックに接近、瞬く間にハイモックを撃墜していく。

「ヤタテさんの方はあまり深刻というわけではないみたいですよわね……反面あなたは行き詰ってる感じですよ……」

「……何よ」

「あなたと最初に会った時の事を思い出すって感じですよわね」

色々と言葉に含みを持たせた様な口調だった。最初に会ったとき、というのはサツマがアイを自分のチームに勧誘しようとした時だ。その時自分の実力に自信を持ってないナナはサツマにとって眼中の無い人間だったが、どういうわけか彼女はナナに対し意識し始めてる。

「焦ってるって？あの時みたいに」

「そう見えますすわね。正直見苦しい」

「なっ!!」

「だからこそ、ワタクシとしましては歯がゆいですよ。あなたがこの程度で止まるなんて」

「……イモエ」

「こんな時くらいサツマと言いなさいまし。だからこそ、残りの一週間、ワタクシ達が特訓付けてあげますわ。ヤタテさんとの、そしてあなたとの決着は全国大会こそが望ましいですもの」

いつの間にかナナにとって気安い仲になっていたサツマだ。しかし今この申し出は自信を失いかけていたナナにとってあまりにもありがたい話だった。

『ありがとう』そうナナが言おうとした時だったが、突如二人のGポツドに警告音が走る。

「危ない！」とサツマはナナのストフリにとびかかりお互い吹っ飛ばす。二体の真後ろを大型ビームが通り過ぎた。ただのビームではない。泡をまとった様なビーム、ナナにはそれが見覚えがあった。

「あのビーム！確かif sユニットとかいう奴！てことは！」

「見つけたぜえ！『スイッチトポテト』のイモエさんよお!!」

木々をなぎ倒しながら一体のガンプラが現れる。ただの機体では無い。変形したイージスのボディを下半身とし、上半身にゼダス、肩にケルベロスウィザード、頭部にアルケーを使用したという節操のない組み合わせだ。そして体には五角系のパーツがついている。if sユニットだ。

「何ですよ！あの悪趣味な機体は！しかもあの大きさは!!」大きさは優に200mを超えている。通常では有り得ないサイズだ。撃つたであろう違法機体は見上げなければ全身が確認できない。

「違法ビルダーだわ！あんな感じの機体にアタシ達も戦ったもん！」

後半へ続く！

第52話「流転とスウィートポテト（後編）」（参上！
チームスウィートポテト！）」

「クッククック！久しぶりだなあ！県内予選以来か！」

「予選で戦った相手?！」

「声からして……確か二回戦辺りで戦った相手ですわ。やったら口先だけでかいのがいましたもの」

「ケツ！言つてやがれ！あの時は不覚をとったが今度はそうはいかねえ！この『ラグナロクプラン・ガンダムフリスト』であんたらを倒してやるぜ！そっちのアイとか言う奴らもろともな！」

「アイはアタシじゃないけどアタシらも?！」

「ああそうさ！この機体をくれた奴が言つたんだ！今日アイとか言う奴らがここに来るから徹底的に屈辱を与えろつて……なあ!!」

そういうや否や、フリストと呼んだ機体は。下半身の両前足を上げる。そして先部についていた銃口から先程の様なビームを発射する。泡をまとった様なビームが射線上の木々をなぎ倒して二機を襲った。破壊と同時に猛烈な土煙を上げて二機を巻き込んでいく。

「すげえ！すげえぞ！この機体は！これが違法ビルダー、いや新世代ビルダーの力か!!」

「何が新世代ですよ!!」

土煙の中から変形したビルドイージスが飛び出してきた。迎撃しようとして再び撃つフリストだが、難なくイージスはかわして突っ込んでくる。イージスはそのままスキュラを発射するがフリストは全身にバリアを張りビームを防いだ。

「やはりビームは通用しませんか！ならば！」

プラフスキーウイングを展開させ凄まじいスピードでフリストの周りを飛び回るイージス。どうにか迎撃しようとして、フリストは両前足からビームサーベルを発生させ振り回す。しかしイージスのスピードにはついていけない。

「くっ！ハエみてえに！うおっ!!」

その時、フリストにレールガンが二弾命中し、フリストは体制を崩した。ナナのストフリの撃ったレールガンだ。

「このっ！チビどもがあっ!!」

「そのチビにみっともなくやられなさいな!!」

直後、巡航形態のイージスがフリストの上半身に突っ込んできた。クローを突き出したイージスはフリストの上半身、丁度腹部の後ろ側に突っ込んでくる。高速で突っ込んだイージスは、フリストの腹部に轟音とともにめり込んだ。

衝撃で倒れそうになるフリストだったが四本脚を踏んばらせ、大地を少し滑る程度で済ませる。

「だ！だがこのフリストはこんなもんじゃねえ！こんなのでやられるかよー!」

「噂通りの化け物ですわね！ならば!」

直後、イージスのクローが展開。フリストもガンプラの扱いなので中は空洞だ。そしてイージスの10倍以上の大きさは内部でのクロー展開もたやすい。

「内側から破壊する!!」

クローを広げるとそのままイージスはスキュラを撃ち込む。さつきと同じ拡散式だ。内部の攻撃にさすがにif sユニットでも対処できない。体内からのビームの乱射にフリストの上半身至る所からビームが突き破る。そのままフリストの上半身はもげて原型をとどめないまでに破壊。そのまま離脱しストフリの所へ戻るイージス。

「大したことありませんわね！この程度で終わりとは!」

「待つて！あの連中はあれ位じゃ!」

ナナがそう言うのとフリストの破壊された腹部から上半身がメキメキと音を立てて生えてきた。ナナにとっては見慣れた光景だがサツマにとつてはあまりにも異様な光景だった。

「再生ですの?!」

「コアになつてる部分があるからそれを壊さなきゃダメだよ！ちなみにコアから広がる様に再生するからコアは多分下半身にあるわ!!」

「醜いですわね！機体のビジュアルといい、能力といい!!」

「ナナちゃん！サツマさん！」

と、そこへアイのストライクが飛んでくる。フリストの大きさは遠目からでもあまりにも目立ちすぎた。

「違法ビルダーの新型機?!」

「アイ！気を付けて！」とナナが叫ぶなか、アイはライフルを構える。

「ん？アイ？そうか。お前がアイかあ」

「?!」

突然の反応にアイは聞くそぶりを見せながらも飛び出す。フリストの方も上半身の火器を乱射し、迎撃しようとする。

「この機体をくれた女から聞いたぜ。お前、友達から拒絶されたらしいなあー！」

「な!!」

その瞬間にアイの動作は遅くなった。それでも一瞬の事だ。「今は余計な事は考えない」アイはそう言わんばかりに首を振るうと、フリストにストライクはビームサーベルで切りかかる。フリストは袖のビームサーベルでそれを受け止めた。本来サイズが大きい分動きが緩慢になるのがお約束だが、違法ビルダーのif sユニットはその動きをカバーする。

「うーうるさい!!」

「ずっと友達だと思っていた奴が裏切るってのはショックだよなあ！」

フリストはストライクを薙ぎ払う動作で弾いた。すぐに体勢を直すストライク。

「どうだい？その女も新世代ビルダーになったんだ！あんたも俺達の側へ……」

「戯言を言うなっ!!」

響き渡るアイの怒号、と同時にアイはユニバースブースターのビームキャノンを展開、スタービームライフルと一緒に撃ち込む。

「ヤタテさん!!if sユニットを搭載した機体にビームは!!」

サツマが止めるも遅かった。フリストは難なくビームを吸収。if sユニットはビームを蓄えて力にするシステムだ。今のアイは頭

に血が上っていた。

「馬鹿だな！こいつにビームを撃ち込むとは!!」

「しまった!!」

供給したエネルギーでフリストは下半身からのスキュラを発射。アイは自分のミスに戸惑った物の、これをかわして反撃に出ようとスピードモードに切り替えようとする。

「ノドカだって!!自分がやった事の良い悪いの判別はつく奴だよ!違法ビルダーなんか!!」

なんやかんや言ってアイの方もノドカの事は信じていたらしい。アイの叫びと共にストライクのプラススキーウイングはストライクの背中に発生。これで反撃に出ると思われたが、

「それはどうかな?俺達が使ってるこの機体はな、そのノドカって女から受け取ったんだからよ」

「っ?!」

別の声がアイの耳に響く。それを聞いた瞬間、アイの手の動きが止まった。と同時に後方からもう一機のフリストが飛びながらビームサーベルで切りかかってくる。今のアイは棒立ちだ。

「アイ!!危ない!!」

ナナのストフリがとっさにストライクを庇おうとする。が、それより早く一機の機体がストライクを庇った。サツマのイージスだ。袖から発生したビームサーベル同士がスパークする。

「実力で適わないから口先頼みですか!!とことん情けないですわね!!」

「サ!サツマさん!!」

「ふん!!物好きだなあ!!だが!!」

次の瞬間だった。イージスとストライクを横側から何条ものビームの雨が襲ってきた。ストライクとイージスはそのままビームの雨に晒される。

「な!なんですの!!」

「うわあぁっ!!」

トドメとばかりにひとときわ大型のビームが二機を呑み込んだ。ス

キュラだ。フリストの三機目がいたらしい。そのまま蒸発かと思いきや、ストライクとイージスは大きく吹き飛ばされ開けた場所に落ちていく。二機ともスキュラを吸収しようとして吸収しきれなかったのだろう。

二機のアブソープシールドは大きく破損。もう吸えない状態だ。焼け野原となった大地に墜落する二機。アイ達の目の前に悠然と降り立つ三機目のフリスト。そしてそれに続く20機近くのネフィリムガンダムとマステマガンダム。スキュラの前の一斉射撃はこいつらの仕業だったらしい。

カサレリアの自然は見る影もない。大火事となった大森林に佇むフリストはまるで怪獣にも見えた。

「さー三機ともそんな大型機を!!」

「ネフィリムとマステマまで!」

「そうさ。こいつはお前らを倒す為にノドカって女がくれたんだ『これを使ってアイを倒せ。徹底的な屈辱を与えろ』ってな」

「嘘だ……嘘だよ。ノドカがそんな事する筈ないよ」

アイの声が震えている。アイの心に亀裂が入り始めていた。

「解らないかなあ。この機体。それがその友達って女の答えなんだよ。普通違法ビルダーでも無い俺達にこんな貴重な新型機を与えるなんて考えられるか?」

「ヤタテさん! 奴のたわ言に惑わされしないで下さいまし!!」

サツマのイージスが立ち上がるようにするも膝が震えている。そんなイージスをフリストがスキュラでトドメを刺そうとするが。発射直前で機体右側から爆発が起こりスキュラは大きくアイ達を逸れた。ナナのストフリが腰のレールガンで妨害したのだ。

「貴様!!」

「うあつー!」

フリストはストフリに腕のビームガンを撃つ。ストフリは直撃しなかったものの、大きく吹き飛ばされ倒れこむ。

「ハジメさん!!」

「フーン!」

イージスも切りかかるがフリストはビームサーベルで軽くないです。イージスは地面に激突。

「無様だな。県内予選では敵なしだったビルダーが、友人関係一人うまくいかなかっただけでこの有様だ」

二番目に出てきたフリストのビルダーが言う。勝てるかと確信したのか挑発には余裕が感じられた。

「こ……これが現実だなんて……ノドカ……なんで……!」

「そう……これが現実だ!お前はその友達って奴の事を何ひとつ解ってなかったって事だ!!はーっはっはっは!」

フリストのビルダーが笑うと僚機の違法ビルダーも笑い声を上げた。アイは自分が消えてしまいそうだった。

「全機、一斉射撃だ。あのストライクとイージスを撃つ!」

そう言うフリストは全火器をアイ達に向ける。もう駄目かとアイ達が思った。その時だった。

「別にまだ信じてたっつていいんじゃないかなあ」

気の抜けた声が響く。何だかわずかな時間に疑問に持つアイ達。

「この声!遅いですわよ!!」

ただ一人、サツマにとつては聞き慣れた声だった。直後、最初にナ達と遭遇したフリストめがけて二個のウエポンコンテナが突っ込んできた。ブースターを内蔵したアメイジングウエポンバインダーだ。

とつさの事に対応出来なかったフリストに、コンテナは轟音を上げながら勢いよく突き刺さった。一つは上半身に、もう一つはスキュラに、バインダーは半開きになると。ミサイルがせり出し、フリストの内部から一斉に発射。

「いーいかん!スキュラの部分は!うおおおおお!!」

そのまま一機目のフリストは爆炎に包まれながらバインダーもろとも崩れ落ちた。スキュラの部分が再生コアだったのだ。突然の事に違法ビルダー達は慌てる。

「な!なんだ!何が起きた!!」

「し!指示を下さい!」

「構うもんか！今のうちにストライクとイージスを!!」

違法ビルダーは最優先でストライクとイージスを破壊しようとする。しかしそれを予想したかの様に大型のミサイルが飛んでくる。これが違法ビルダーとアイ達の間で爆発。爆風はなく代わりに『ブワッ!』と勢いよく黒煙がミサイルから発生。広範囲に包み込んだ。スモークデイスチャージャーだ。

混乱する違法ビルダー達を尻目にアイのストライクの腰に何か挟み込まれる。有線式の銃上のアンカーだ。

「うわっ！何!」

「大丈夫だよ。それは敵じゃない。もっちゃん！アイちゃんのついでに回収するからそれに捕まって!!」

謎の声が言い終わる前にアンカーは引っ込み始める。サツマは自分への対応に呆れる。

「ひでえ!まあいいですわ!スグリ!お願い!」

「もっちゃんなら簡単でしょ?!」

「当たり前ですわ!」とサツマは難なくアイのストライクに追いつきアンカーを掴む。そのままアンカーに繋がれた二機は黒煙を脱出。スモークの先には三体のガンプラがいた。オレンジに塗られたヤクトドーガの改造機と、MSV及びガンダムUCに登場した象の様な鼻を持つ機体。ウサギの耳をつけた様なジュアッグの改造機だ。そしてナナのストフリと、いつの間にか合流したソウイチのバイアラン・スパイダーである。

「無事スか!ヤタテさん!」

「ソウイチ君もいたんだ」とアイ。

「チヨコ!スグリ!もつと早く来れなかったんですの?!」

「ごめんねー。別の場所でも違法ビルダー達と戦っていたから。はい予備のアブソーブシールド」

チヨコのヤクト・ドーガのバインダーが一つ開くと二つのアブソーブシールドが飛び出す。装備の予備も運搬しているらしい。

「もっちゃん。この二体が?」とナナ、ナナのもっちゃん発言にサツマは激昂。

「何ドサマギで呼んでますのハジメさん!!……ええ、ヤクトドーガに乗ってる方がチョココ、ジュアッグに乗ってる方がスグリですわ」

「ヤクトは鳥顔が好きだから選んだんだよねー。スグリの方も動物好きだからジュアッグを選んだって感じかなー」

「もつと兎っぽいのがいてくれればそっちを選んだんだけどね」

スグリの口調が変わってる。どうやらバトルの時に性格が変わるタイプの様だ。どうも現在進行形で危機的状况とは思えないのほほんさのあるのがチョココとスグリだった。

「くっ！貴様らあ!!ほのぼのしてるんじゃないやねえ!!」

スモークの中からフリストやネフィリム達が飛び出して来る。そしてアイ達に向けてビームを発射。散開し避ける各機。

「新型機だろうと！さつきは不覚を取りましたが本気を出せばワタクシ一人で！」と違法ビルダーに立ち向かおうとするサツマだった。だが、

「待つて待つてもつちゃん。ザコは私達に任せて欲しいんだなこれが、皆に私達の実力を見せつけておきたいからね」

やる気満々なサツマに反して呑気なままのチョココが言った。

「……いいでしょう。任せますわ」

「へ？待つてよ!!相手は違法ビルダーの新型！それも二機よ！たった三機で！」

心配するナナを他所にチョココとスグリはお構いなしに前に出る。

「出来るよ？だつて私達」

「県内予選優勝チームだからね!!行くよもつちゃん!!決め台詞決め台詞!!」

「ああもう！仕切るのはワタクシですわよ！まあいいですわ！サツ

マ・イモエ『メテオビルドイージス』

「ヒルガオ・チョココ『ブリザ・ドーガ』

「ルコウ・スグリ『ラビットジュアッグ』

さつきまでのゆるい雰囲気はどこへやら。全員が真剣な表情で自機の名前を呼ぶ。出撃前の緊張感の再現とでも言うべきだろうか。

「チーム『スウィート・ポテト』!! 『目標を!! 刈り取る!!』」

三人同時に叫ぶや否や、三機とも一斉に空へと飛び出してゆく。
「へっ！飛んで火にいる夏の虫！」

前面にネフィリムとマステマが出てくる。飛び出したイージス達三機をカモとばかりに狙い撃ちにするネフィリム達。しかしジュアッグとブリザ・ドーガ、そしてイージスは散会する様に回避、イージス以外の二機とも装備によって機動力は強化されていた。

「甘いねえ。機体だけ変えれば勝てると思ったのかなあ！」

チヨコがそう言うのとブリザ・ドーガのバインダーが少しだけ開く、隙間から飛び出したのは四丁の実弾ライフル。両腕とサブアームで掴むと同時にバインダーからミサイルを一斉に発射。その数は尋常ではない。土砂降りの如し数のミサイルが違法ビルダー達に向かっていく。

「うーうわああっ!!」

ミサイルで混乱している違法ビルダー達の中にブリザは突っ込むと同時にライフルを乱射する。やたらめったに撃ってるようにも見えるがその射撃は正確に敵のコクピットを射抜いていく。ただのライフルの威力ではない。遠目で見ていたアイ達は愕然としていた。

「やー野郎!!」

離れていた違法ビルダー達がチヨコのブリザを狙い撃とうとする。が、それを二体の間を阻止するかにように大型ガトリングの弾丸が阻止、撃つたのは飛んでるラビットジュアッグ。スグリだ。

「熱くならないでよ。きたない言葉は耳障りだよ」

「何スカしてやがるー!」とマステマとネフィリムはジュアッグに向けて一斉に撃つ。しかしジュアッグは背部にスカルウエポンのバインダーを装備している。フレッシュブルに稼働するバインダーの為に変則的な動きでジュアッグは回避しつつ、両腕のロケットランチャーを違法ビルダー目掛けて撃つ。

そのままマステマに着弾したロケットランチャーは大爆発を起こしてマステマの上半身を吹き飛ばした。爆発あつての実弾兵器では

あるが、改造してあるらしくこれまた相当な威力だった。スグリはそのままジュアツグのランチャーを撃ち続けて違法ビルダーを次々と落としていく。ジュアツグの周りで幾つもの爆発の花が咲いた。

「このー調子に乗るんじゃないねえ!!」

そんな中、一機のネフィリムがジュアツグの後ろに回り込み、もう一機のネフィリムが前面から攻める。二機とも右腕のクローで仕留めるつもりだ。

「ちよつとは連携っぽいことできるんだ。でもさ!」

直後、ジュアツグの頭部の耳が後ろに可動。これもロケットランチャーだ。「ゲッ!」と違法ビルダーが呻くもすでに遅い。ジュアツグは前後の敵をまとめて撃ち落とした。

「そーそんな!! たった二機のガンプラに!!」

フリストの違法ビルダーはこの展開に納得がいかなかった。自分は無敵の力を手に入れたはずだ。それをこんな簡単に崩されるなんて、と。そんな中、サツマのイージスは容赦なく切りかかる。

「性能に頼るだけだからそんな事になるんですよ!!」

イージスは両腕のビームサーベルでフリスト二機に立ち向かっていった。軽快な動きで翻弄するイージス、フリストは上半身のビームマシンガンで迎撃しようとするもイージスが小さい上に速過ぎる。しかしイージスもビームサーベルでは決定力に欠けた。

その証拠にフリストの隙をついてイージスはフリストの首を跳ねた。が、すぐに新しい頭部が生えて来たため効果が無い。

「キリがありませんわ!! チョココ!!」

「あいよー!」

サツマの号令と共に、ブリザからのミサイルがさつきと同様に発射された。それはフリスト二機に収束されていく。フリストの大きさに合わせてか、その数はさつきの量を超えていた。土砂降りの如し数のミサイルがフリストに一機に向かっていく。早々に離れるサツマのイージス。

「くーうるせえ!!」

迎撃しようと違法ビルダーはスキュラでミサイルを撃つ。ビーム

に巻き込んだミサイルは撃破出来たが、撃ち漏らした分は真っ直ぐフリストに向かつていく。しかしそれでミサイルに気をとられる中、『ドンッ』という音と共にフリスト二機の背後に衝撃が走った。

飛んでるジュアツグが逆さまの体勢でロケットランチャーを撃ってきたのだ。その威力にフリストの装甲は碎ける。が、決定打にはならない。再生中のままフリストの内一機は両腕のビーム砲で迎撃しようとして撃ちまくるも。ジュアツグはさつき同様、鋭角的な動きで回避。背中のフレシキブルに動くスカルウェポンの恩恵だ。

「全然動き自体は予選の時と変わってないんだよねえ。普通はリベンジなら戦法も変えるでしょうに」

「こんのや……ウオッ!!」

違法ビルダーが愚痴る直後、フリスト二機はミサイルにさらされる。数百メートルに及ぶフリストにとってはミサイル一つの爆発はさして意味がないだろう。しかしミサイルの数は尋常では無い。全身いたる所で起こる爆発がフリスト二機の外装を削り取っていく。瞬間にフリスト二機の姿はボロボロになっていった。

「やーやってくれるじゃねえか!だがな!」

違法ビルダーが叫ぶ直後。フリスト二機の外装が中央部から広がる様に元に戻っていく。違法ビルダーのガンプラが持つ再生機構だ。「確かコア部分から広がる様に再生するって言っていましたわね……」

再生の中心部、二機とも上半身の腹部から再生してる。そこがコアだと判断する三人。さつきのミサイルはコアを把握する為の物だった。

「狙うはあそこ……どうやら……この技を見せる必要がありそうですわね!!」

「もっちゃん!やるの?!」

「もちですわ!」

「援護は?!エネルギーはいる?!」

「ノープロブレム!!」

そう言ったサツマはイージスをモバイルアーマー形態へ変形させる。そしてそのまま残りのエネルギーでスピードモードに切り替えた。

イージスはモビルアーマー形態のままプラフスキーウイングを出現させ、フリストに突っ込ませた。

「さあ!! さあさあ!! 正念場ですわよイージス!! ワタクシと共に! 燃え上がちなさいませ!!」

サツマの高揚した声に應えるかのように、そのままイージス全身の色がプラフスキーウイング同様に青く輝く。そしてその速度は更に増した。剛速球でフリストに迫るその姿はまさに光の矢。

「ちっ! おい! ここは任せた!! リーダー機の俺は少し身を隠すぜ」

リーダー機のフリストが僚機を見捨てて退避する。再生の時間稼ぎだ。

「え!? ちょっとリーダー! っ!」

動揺する僚機だがイージスが迫る。自分の大きさの十分の一にも満たない相手だというのに、凄まじい威圧感である。やられると恐怖した違法ビルダーは、

「う! うわああっ!!」

叫びながらスキュラの最大出力で真正面のイージスを撃つ。高出力のビームに飲みこまれるイージスだが……

「その程度でもっちゃんは止められないよ」

「舐めちゃ駄目だよ。私達の大將はね……!」

スグリとチョコが呟いた直後、イージスは飲み込んだビームを反射させる。最初にイージスが見せたスキュラの拡散の様に、ビームがかわす様に反射させてるのだ。

「ビルドッ!! バンカアアッ!!」

サツマが叫んだ直後、『ガッ!』と音を立ててイージスはフリストを貫通。腹部と下半身股間部を丸々と抉ったその威力に見ていたアイ達は驚愕する。

「ナッ!!」

一瞬の事に理解しきれないビルダーと共に、二機目のフリストは爆散。そのまま逃げる三機目のフリスト目がけて突撃するイージス。

「う! 嘘だ! 嘘だ嘘だ嘘だ!! こんなアツサリと!! 新型をもらったんだぞ!!」

「相手の友達をダシに使い、自分の友達を切り捨てたあなたに勝てると思いませんか?！」

そのままさつきと同じ手順でイージスはフリストに突っ込み貫通させる。

「がっ!!!」

上半身と下半身が別れたフリストは勢いよく上半身が宙に舞い。そして地面に突き刺さった。

「ふうっ！」

丁度イージスのエネルギーも尽きてきたらしい。ウイングを解き、同時に変形も解くイージス。

「友達……ね。ク……ククク」

安心していたサツマ達の耳に違法ビルダーの通信が入る。さつき上半身だけになったフリストだ。コアを外してしまつたらしくフリストの上半身はうろうろと蠢きながら再生していた。

「チッ！仕留めそこなつた!？」

サツマは自身が一撃で仕留められなかつた事に舌打ちしながらも銃を向ける。

「そーいやあお前も昔あの友達二人とチーム解消してたよなあ。お前がああの二人を見捨てて」

「だからなんだと言いますの!」

「同情してるのか?あのヤタテって女に。だが無理だね。お前の場合は友達を見捨てても友達は待っていた。だがあの女の場合は肝心の友達が拒絶した。お前の状況とはわけが違う」

「……」

遠くで聞いていたアイの体が小刻みに震えている。ノドカとの関係はもう戻らない。そう間接的に言われて心に突き刺さる。

「ノドカって奴の本心を見抜けなかつたお前に友達でいる資格なんて無いって事さ!!」

「……くっ」

「考えてることが解なくなつたって、当たり前でしょ」

それを遮つた声があった。スグリだ。

「スグリ……?」

「友達だからって、考えてる事とか、どんな不満があるとか、口に出さないで理解は出来ないよ。だって別の命だもん」

「その通りだよ。解ってあげたかったらちゃんと話しなきゃ」

チヨコもそれに続く。

「今更何を言ってるんだ!!こいつは直にその友達に『関わりたくない』そう言われた!もうどうしようもねえんだ」

「一方的に、でしょ?そのノドカって人から。……ねえ、アイちゃん。アイちゃんはどうしたい?その友達と……」

「私は……」

アイの脳裏にノドカの笑顔が浮かぶ。それも赤ちゃんの時から現在までの成長の段階が流れる様に、だ。……ノドカ……赤ちゃんの時から一緒に、お互い親が共働きだからご飯を作ったりして、深く考えないで動くノドカのフォローで苦労して……、お互いが自立したいって分かれて……そして昨日絶交を言い渡されて……それでも……

「私……やっぱり……ノドカと一緒にいたい……友達に戻りたいよ!!」

アイが涙で顔を濡らしながら叫んだ。拒絶されても、それでも友達でいたかったから。

「ちっ!!だが向こうはそうは思って……」

違法ビルダーが分断されたフリストの下半身をコントロールする。起動した下半身はアイのストライクめがけてスキュラをチャージ。

「ねえだろ!」

そういつた瞬間にスキュラを発射、ビームの濁流がストライクに向かう。

「アイちゃん!だからだよ、ノドカちゃんて奴にきちんと会わななきゃ!!」

「そうだよ!ちゃんと顔を合わせて話さなきゃ何も解らないんだもの!!」

チヨコが、スグリが叫ぶ、

「チヨコさん。スグリさん……!私っ!!」

次の瞬間にアイのストライクに光が灯る。そしてプラフスキーウイングがストライクの背中から発生、ウイングはストライクをくるむとスキュラから防御、ウイングを盾にしたストライクは無傷だった。そのままストライクは撃ち終わったフリストに突っ込む。

「そうだよーだからこそ!!話がしたい!!ノドカと言葉を交わしたい!!だからこそそんな風に言われて!!」

直後、ストライクのプラフスキーウイングは消える。と同時にストライクの右手が青く輝く。腕部に全てのエネルギーを集中させたRGビルドナツクルだ。

「黙ってられるわけ!!ないでしょおっ!!」

そのままフリスト(下半身)を上部から殴りつけるストライク、ナツクルの勢いは凄まじく直立状態だったフリストを貫通。そのままストライクは地面に降り立った、直後フリストは全身に亀裂が入り崩れていく。

その様子を見ていた違法ビルダーは再生中のフリストの中で驚愕するばかりだった。

「ばーバカナー!パンチ一発で!」

「見くびりすぎましたわね!!ついでにあなたも食らいなさいな!!」

同様にイージスの方も左手を青く輝かせながら突っ込んでくる。そのままイージスはフリスト(分断された上半身)の胸中心部に拳を勢いよく打ち込んだ。

「メテオツ!!ナツクルツツ!!」

フリストの装甲を貫いたナツクル。拳を引き抜くとフリストの全身に亀裂が入る。どうやらこっちの再生コアは胸だったらしい。

『挑戦する気概が人を成長させる』……。それを機械に頼ったあなた達ではこうなって当然でしたわね」

「……誰の受け売りだそりゃあ」

「……死んだおじい様ですわ。この扇子をくれた……」

フリストの爆発、もう事切れた相手に見せるかのようにサツマは扇子を開く。蘭の花の描かれた扇子だ。そしてその後もサバイバルバトルは続いたが、結果的にアイ達とサツマ達の勝利となった。

……

「……ありがとうございます。あそこで励ましてくれなかったらどうなってたか」

バトルが終わった後、アイはチョコとスグリに頭を下げた。

「気にしなくていいよ。厳密にはナナちゃんに言われた事らしいけど。借りを返したわけだから」

「その……本当はナナちゃんへ返したかったんだすけどね……」

元のおどおどした態度に戻ったスグリがボソボソと答える。

「借り？」とナナがきよんとした顔で言った。

「私たちもさ。元々もっちゃんと疎遠になっていたの知ってるよね」

疎遠……サツマは元々チョコ達とはトップを目指して徹底的にやるか。楽しさ重視でそこそこのところで満足するか。という考えの違いからすれ違っていた。それを正したのはナナだった。(17・1

9話参照)

「もっちゃんてば一回決めたらガンコだからねえ。そのもっちゃんがある日突然頭下げてきて、それがアイちゃん達とバトルした直後だよ！」

「何が言いたいんですのよ!!」と横でサツマが顔を真っ赤にして言った。

「やっぱり、直接会って、同じ目線で話をしないと分かり合えないな……って思ったんです……。その時の私達って、もっちゃんが考えを変えるまでひたすら待とうって決めてたんです……。もっちゃんガンコだから言っても聞かないなって勝手に私達で思ってた……」

「……でもそれはお互いの勝手な決めつけ、ですわよ」

「そう言う事か」と言いたげな表情で、今度は冷静にサツマが答え始める。

「あの時、ワタクシがハジメさん達に負けたのは連携がまともに取れなかったから。そして、今ワタクシが一番連携を取れるのは……チョコとスグリの二人だけ。それを理解出来たのはあなた達に負けてからですわ」

「私達も似たようなもんだよ。もっちゃん」答えるチョコの横でうん

うんと首を縦に振るスグリ。

「早い話が、ノドカも暫くしたら言った事を後悔してるかもしれない。こうやって時間を置いてから、また話し合ってみたら仲直りできるかもしれない。そう言う事ですわ。この二人がいたいのは、昨日あなたの友達が同じ事を言っただでしよう?」

「そっだよ」とチヨコは相槌を打つ。

「ありがとうございます。……私、やっぱり諦めません。ノドカともう一度話し合ってみます」

今回のバトルを経由して、信じてみることをより深くアイは理解できた。とにかく今は行動に移そう。アイはそう心に決めるのだった。

「アイ。復活ってわけ?よかったあ。とりあえずこれで決勝には万全で望めるわね」

「ちよつとハジメさん!何他人事みたいに言ってますのよ!!」

満面の笑みのナナにサツマは詰め寄る。

「え?……イモエ?」

「あなたのあの戦い方はなんですよ!!ストフリに乗ったにも関わらずまるで羽根をもがれた蝶ですわ!」

「え?だってストフリには乗り換えたばかりだし……」

「問答無用!!バトルの時に言った通り!決勝までにビシバシ行きますわよ!!強くなってもらわないとこっちが恥ですわ!!とりあえずルジャーナで猛特訓ですわね」

「ええっ!ちよ!ちよつと休ませてよ!!」

不機嫌気味にナナの手を引くサツマにナナは悲痛な叫びをあげた。何故サツマがナナにこだわるのか。まだナナ本人はそれを知らない……。

第53話 「邪神像アイちゃん」

「アイちゃん達は今どうしてるかなあ……」

アーケード街内の模型店、『ガリア大陸』、その二階にあるガンプラバトルコーナーでベリーショートの上少女、ミヨ・ムツミ（弥代睦美）は呟いた。

「立ち直つてるといいけどね」

その隣でロングの髪と呑気そうな顔つきの少女、フジ・タカコ（藤鷹子）がさして気にもしないように答える。商店街特有の細長い店内。二人の目の前にはガンプラバトルの中継モニターが置かれており、その左右ではバトル用のカプセル型インターフェース、Gポッドが左右に三個ずつ置かれていた。

そのポッドにガンプラビルダーがローテーションで出入りしており自分が作った機体を仮想空間の戦場に参加させていた。

「しかし違法ビルダーが闊歩してるっていう状況だっけ言うけど……、こうやって見ると全然そんな実感が湧かないね……」

ムツミは辺りを見回す。周りのビルダー、つまり自分のガンプラで戦う人達は当然ながら自分のガンプラをそれぞれ手に持っていた。違法ビルダーというのは最近問題になっていて、ガンプラを使用せず機体のデータだけで戦う連中の事だ。ガンプラバトルというコンテンツに矛盾している上に、公式の正規品ではない。とはいえ自分の周りにいるビルダーにはそれらしいビルダーは見えなかった。

「ここら辺トップのビルダーがアイちゃん達だからね。皆アイちゃんのお仕置きを恐れているって事かな」

と、その時だった。一人の少女が二人に話しかける。

「あれ？珍しいですね。タカコさんとムツミさんだけですか？」

二人が目をやると中学生くらいの眼鏡をかけたショートカットの少女がいた。二人には面識があった。

「君は……ブスジマ・ミドリちゃんだったかな……」

「久しぶり。珍しいのはお互い様だよ。ここで会うってのは無かったからね」

「そうですね。……アイさんの方は大丈夫ですか？」

アイ、先日友達と仲違いするのはミドリも知っていた。一方的にアイの幼馴染、ノドカがアイを拒絶するというのをガンブラ選手権会場で大声で見せつけられれば心配になるというものだ。

「今日別地区の予選突破ビルダーと出かけて行ったよ……。大丈夫と信じるしかない……」

「アイちゃん達次第としか言いようがないよ」

二人とも深刻そうでなく答える様にミドリは多少肩すかしを食らう。

「思ったより気にしてなさそうですね」

「そんな事ないよ……。アイちゃんにはナナや仲間達だっているし……」

「今までだつてなんとかしてきたのがアイちゃんだもの。あたし達に今出来る事は何も無いよ」

「そういうもんですかね？よく解りません」とミドリ。

「そういうミドリちゃんだつてシンジさんは、お父さんの事は心配じゃないの？昨日ノドカにコテンパンにやられたじゃない……」

「娘の私に出来る事なんて何もありませんよ。仲間もいるし別に心配する要素なんて……。あ、前言撤回。よく解ります。お二人の気持ち」

「お互い様その2だね」

しれつと言うタカコにムツミとミドリは苦笑。

「それでお二人はどうしてここに？」

「さつきはああは言ったけどさ……。今日ボク達が来たのも落ち込んでるアイちゃんに何か買ってあげられないか考えたんだけど……」

「ガンブラやってないあたし達にはいまいち解らないんだよね」

「……ボク達も前言撤回。ここへ来ている時点で心配しているみたいだ……」

今度は三人揃って笑った。

その頃アイ達はどうしているかと言うと……。模型店『ガリア大陸』から隣の県の模型店『ルジャーナ』にて

「だああっ！」

仮想空間の中でガンダムSEEDに登場したストライクフリーダムとイージスの改造機、メテオイージスが宇宙空間でぶつかり合っていた。

「重武装なのにそんなにちよこまか動き回ってえ!!」

ナナはストフリりの全武装を展開、一斉発射、ハイマツトフルバーストだ。しかし腹部大型ビーム砲のカリドウスだけは撃たない。他の武装で誘導して腹部ビーム砲でトドメをさそうという魂胆だ。

「そんな散漫的な攻撃で！」

射線からナナのストフリりの正面にイージスは回避しつつ移動、今だ！とナナは判断、カリドウスを撃つ。が、イージスはこれを左腕のアブソーブシールドで予測してたように吸収。

「あっ！」

「ワタクシを陥れようとした様ですが！そう来ることはわかってましたわ!!」

そういうとイージスはライフルを通常のままストフリりに数発撃つ。防ごうとビームシールドを展開するナナ、しかしライフルで狙ったのは防御していた部位ではなく、正面から見えていた背中の羽根だ。瞬間に破壊されていく羽根。

「ストフリりの動きは損傷次第で簡単に鈍るからもつと気を遣えと言ったでしょう!!」

そのままイージスはストフリりに接近し両袖のビームサーベルで切り裂いた。「そんな事言っただってええ!!」とストフリりは爆散した。

「ナナちゃん。お疲れ様。だいぶ絞られたみたいだね」

「アイ、はは、ご覧の有様よ……」

楕円形のGポッドから安物のレーシングスーツに似たパイロットスーツを着た少女、ハジメ・ナナ（始菜々）が出てくる。彼女の親友であって凄腕のビルダー、アイはナナに労いつつ同情した。

「ハジメさん、不甲斐ないですね。全然ストフリりを物に出来てないじゃないですの」

同じ様に色違いのパイロットスーツを着た少女サツマがナナに声をかけた。すらつとした体軀、ハーフ故の銀髪はシニヨンで纏められている。

「アンタね……、指摘すんのはいいんだけど注文多すぎなのよイモエ」
イモエという言葉にサツマは一瞬露骨に不機嫌そうな顔をする。サツマ・イモエ（薩摩妹江）……彼女の下の名前で気安くその名で呼ばれる事を彼女は好まない。

「そう無神経な事言えるって事はまだ余裕があるって事でしょうかな？」

「もーだめだよーもっちゃん。ハジメさんが言ってた通りもっちゃん
が言い過ぎだったのは事実なんだから」

イモエを太ったチームメイトの少女、ヒルガオ・チヨコ（昼顔千代子）がにこやかに止めに入る。

「チヨコ。でも……」

「チヨコの言う通りです……もっちゃん、言い出したら聞かないから……一人ですっ走りすぎだよ……」

チヨコの隣、小柄でおどおどした少女、ルコウ・スグリ（流紅直里）もそれに続く、サツマは「スグリまで」と面白くなさそうだ。

「ゴメンねーハジメさん、まあもっちゃんてばハジメさんにかなり入れ込んでるみたいだからね。決して嫌ってるわけじゃないの。許してあげてね。ほらもっちゃんもゴメンしようね」

「なんですのよ。保護者みたいな事言わないでくださいまし」

「言い出したら聞かないけど根はいい子なの……」

「好きな子には意地悪したくなるとかそういう事だから」

「あぁなあたあたあちいいい!!」

激昂したサツマはチヨコ達に飛びかかろうとするが、ひよいとかわすと「わー怒った怒った」「逃げろー」と一目散に逃げて行った。「待ちなさい!」と追いかけていくサツマをナナは茫然と見ていた。「何やってんのよ」とナナは呆れながら呟いた。

「とりあえず、特訓で何か掴めそうっすか？」

サツマ達を見送りながらナナに問いかける。蓮っ葉な敬語で話し

かけるのは14歳の少年、アサダ・ソウイチだ。

「正直わかんない。ストフリを使いこなしたいんだけどさ。どうもフリーダム系は発展することになっていうか軽くなっていく感じ」

「ストライク系から乗り換えるたびにハジメさんと相性が悪くなっていくわけか」

チームメイトのハガネ・ヒロが分析する。ナナは最初はストライクガンダムという換装装備はあれど標準的な機体に乗っていた。しかし、フリーダム、ストライクフリーダムと乗り換えるたびに機体は軽量化、上級者向けとなっていきナナとの相性は悪くなるばかりだった。

「ウェイトがある方がいいならグステイニーに乗り換えた方がいいんじゃないかな？高機動、かつ重装備だけど正直ストフリよりはハジメさん向きだと思うよ」

それに続いて指摘するのはツチャ・サブロウタ、アイとナナ、そしてこの三人を含めてチーム『I・B』だ。

「乗り換えた方がいいってのはアタシも解るんだけどさ」

ストライクフリーダムを手にとってまじまじと見つめるナナ、フリーダムってアタシが小さい頃、ストライクと並んで見た初めてのガンダムだったからさ。どうしても思い出に突き刺さってるっていうか、使いたいわって気持ちがあるのよね」

「じゃあまたストライクの方向性で言ってみる？」

「それはそれで、乗り換え無しじゃ個人的にパワーアップした実感湧かないし」

「何それ」とアイは苦笑。

「まあまだ時間はあるし、暫くナナちゃんは休んでいてよ。次は私の方がひと暴れしたい感じかな」

「助かるわ。アタシの方はちよつとヘトヘトだから休ませてもらうね」

そういうとナナは近くのベンチに腰掛けた。さつきまでサツマとワンツーマンで何度も特訓していたからだ。

「ああ……次は俺がやりたかったんすけどね。まあいつか」

「でも相手はどうするんだい？サツマさんはさつきどっか行っちゃったし」

ヒロが周りを見渡しながら疑問を出した。さっきのサツマ、彼女は現在地区代表として、今は全国大会を待つ身。故に県内最強であり対戦相手としてもうってつけだったわけだ。しかしそのサツマがさつきどっか行ってしまった。

「あ、そうでした。どうしよう……」

誰か相手でもないかな。と探そうとするアイ、そこへだ。

「姉ちゃん！だったらオレツチと戦ってくれよ！」

元気のいい声が響いた。少年の声だ。

「ぐ、その声は……」

アイが警戒心を見せながら声のした方へ振り向いた。そこにいたのは一纏めにした髪型、鼻に絆創膏、ズボンから一部はみ出したシャツ。悪ガキといった格好の少年の名は、

「ヒガサ・ヨウタ君……久しぶりだね……」

ひきつった顔で距離を取りつつ、アイは答えた。

「……彼がヨウタ君か」とヒロは呟く。

ヒガサ・ヨウタ。名のあるビルダーというわけではないが、アイに挑戦したビルダーの一人（第24話参照）だ。

そう、その時は単組みのガンプラ対決でアイをセクハラで追い詰めたが、その際にアイの逆鱗に触れてしまい爆熱ゴッドフィンガーで股間を潰された男だ。セクハラという女の尊厳を踏みにじる行為によって男の尊厳を握りつぶされた男である。

「元氣そうだね……」

拒絶する。という程ではないが、受け入れようとはしていないアイの態度はヨウタも解った。

「そう警戒しないでくれよ。今日はまた姉ちゃんに挑戦って意味もあって会いに来たんだぜ？」

「ね、ねえヨウタ。やっぱりやめようよ……」

その後ろにいた男の娘と言っているいい外見の少年がヨウタに問いかける。彼はカサハラ・リヨウ、オドオドした態度だがその実力はヨウ

夕を大きく上回るビルダーだ。「カサハラ君もいたんだ」とアイは気づいた。

「何言っただよりヨウ！こちとら再戦の目途がたった所に、向こうから来てくれるたあ又とないチャンスじゃねえか！」

「ふええ……そういう意味じゃないよお、アレを本人の前で使うなんてええ」

「今日の所は再戦だ。俺達二人のタッグと戦ってもらうぜ！」

「ふええ！僕も出るの?!」

「……セクハラ禁止ならいいよ」

「おっしや！イタズラだったらしいぜ！オレツチだって反省したんだ！へへっこの日の為の秘密兵器を見せる時が来たぜ!!」

ノリノリのヨウタに怯えながらのリョウ。リョウのその態度が単なる怯えでない事は、その場にいた誰も気づかなかった。

……

そしてバトルへと移行すべくアイはGポッドへと入る。Gポッド内部スペースの中の操縦席へパイロットスーツに着替えたアイは座る。パーソナルデータの入ったカードを目の前のスリットに入れ、ハロを模したスキヤナーに自分のスタービルドストライクを入れた。

「ヨウタ君、随分自信あげだったな……。警戒はしておいた方がいいよね」

スキヤンすると共に目の前の映像がCGの格納庫内部に切り替わる。ノーマルスーツを着た整備員が発信を促すジェスチャーをしているのが目に入った。『今回のステージは火星から地球への航路です』と表示される。

『ゲームをスタートします。戦果を期待します』そのアナウンスと共にアイは出撃の声を上げる。

「ヤタテ・アイ！スタービルドストライク！出ます！」

その言葉と同時にストライクの乗ったカタパルトは勢いよく進む。それはGポッドを振動となつてアイを襲った。そのまま投げ出された機体は風に乗った鳥の様に目的の戦場へと飛んでいく(宇宙ではあるが)。ガンダム作品における出撃の再現、これこそがガン普拉バト

ルへの通過儀礼、自分で作ったプラモをわが身を預ける相棒とする儀式だった。

「オルフェンズのステージか……」

自分が発進した宇宙航行艦、イサリビを見ながらアイは呟く。このステージは『鉄血のオルフェンズ』登場したステージ、引き寄せられたデブリ、つまり宇宙ゴミが密集しており更に電波障害も発生しているという難所だ。視界のそこかしこに宇宙ゴミが見えた。

アイが出撃したのは観戦モニターを見ていたナナ達も確認できた。

「今回はまた視界の悪いステージね」

「こんな状況じゃ高機動なスタービルドでは分が悪いかな」

「はてさて、向こうは何乗ってくるかな？」

視点をアイに戻そう。程無くして突っ込んでくる機体が一機見えた。白と紫のカラーリング、背中の羽根型バインダーのガンダム、それは……。

「アイズガンダム！」

「待ってたぜえ！アンタと戦えるこの時をよお!!」

『OO外伝』に登場した機体、アイズガンダムだ。赤い粒子をまき散らしながら右腕のGNバスターライフルを向け発射、真っ赤なビームの奔流がデブリを飲み込みながらストライクを襲う。

「その物言い！リョウ君だね！」

アイはストライクのアブソープシールドでビームを吸収、そのまま前方にパワーゲートを生成。通過しプラフスキーウイングを発生させようとする。これによりスタービルドストライクは超高速での機動が可能となる。

「失態だね！ビームが多いアイズじゃ私とは相性が悪いよ！」

「だがゲートをくぐらなきゃウイングは生成できねえ！」

ストライクにアイズがビームサーベルで邪魔する。とっさに回避するアイ、アイズガンダムもまたバインダーを後方に向けた高速移動形態となっていた。

「多機能だが手間も多いのがスタービルドの難点だぜ！」

「考えたね！でも！」

アイもストライクにビームサーベルを持たせて応戦する。待つてましたといわんばかりにGポッド内のリョウは闘争本能を嬉々としてむき出しにしていた。彼は普段はおとなしいが、ガンダム系の機体に乗ると攻撃的になる。この理由は彼が『ガンダムにのれば僕も強くなった気になれる』というのが理由だ。オールバックにした額には痛々しい傷跡があった。

両機は真っ向からぶつかり合う。そのまま二機はビームサーベルでぶつかり合い、斬り合う。進路上のデブリは器用に避けるか破壊するかのどっちかだった。

「ハッハッハ！友達に裏切られて調子が悪いって聞いたけどやるじゃねえか！」

「さっきまではね！でも私にはうじうじ悩んでるより面と向かってそいつに会おうって決めただけ！」

「よく言っただぜオバサン！だがその気迫も俺にとっては血沸き肉躍る材料だ！」

一度離れるとリョウはアイズのバインダーを右に寄せる。バスターライフルの強化を行うアタックモードだ。そのまま砲撃を発射、これによりビームがある程度曲射が可能。ストライクの意表を突こうとする。

「君もヨウタ君同様に失礼じゃない?!」

難なくアイはかわすとビームサーベルでアイズガンダムに切りかかる。

「アイツと一緒にされんのは心外だぜ！」

今度はアイズはバインダーを左に寄せる。シールド強化のデイフェンスモードだ。防御フィールド、GNフィールドが発生しビームサーベルを弾いた。

「っ！」

「おおりゃあ!!」

その隙を付いてそのままビームサーベルで切り裂こうとするアイ

ズガンダム。が、アイはバルカンをアイズの頭部目掛けて発射、とつさにリヨウはアイズの頭部を手で防御。

「うおっ！何しやがる！」

そのままストライクは背中のユニバースブラスターから吊り下げられたビームキャノンを撃ちながら後退、一際大きなデブリに隠れる。

「大したもんだね！思った以上にやる！」

「お互い様だぜ！」

そう言うとアイズのバインダーは肩越しに展開、これがアイズガンダム最強の武装、アルヴァアロンキャノンだ。

「ふつとべええ!!」

リヨウが叫ぶとアイズのライフルとは比較にならないビームの濁流がデブリを飲み込んだ。が、デブリから飛び出したストライクは発射中だったアイズの頭部にビームを一発撃ち込む。

「なっ！」

そのまま破壊されるアイズの頭部、アルヴァアロンキャノンを中断されたと同時にエネルギーはほぼ無くなった。

「リヨウ君、うまくアイズを使いこなしてるけどそこまでだよ。ちよつとゴリ押しが過ぎたね」

「ひーひいひい!!やめて！やだ！やめてよお！」

ガンダムの頭部を失った事によりリヨウは元の気弱な性格に戻っていた。こうなった彼はただ狼狽するだけだった。強気のコピーはガンダムの頭部だ。

「やった！アイったら完勝じゃん」

観戦モニターを見ていたナナは喜びの声を上げた。

「待て待て。バトルを吹っかけてきたヨウタ君がいらないな。どういう事だ？」

「消耗を狙って隠れてるのか？しかし……」

「ん？ね！ねえ！ちよつとあれ!!」

突然ナナが愕然とした声を上げた。信じられない物でも見たかの

ような顔だった。

アイの方でも異常は気づいた。Gポッドに警告音が鳴ったのだ。
「何？」

警告した方向を見ると一条の光がこちらへ突っ込んでくるのが見えた。ヨウタの機体だとアイは判断。

「ヨウタ君か。なら相手を」

そういつた瞬間だった。スタービルドストライクのユニバースブースターが破壊された。何かに撃たれたのだ。

「な！」

「俺を前によそ見とは余裕だなあ！」

撃たれた方を見ると、アイズガンダムが新しい頭部を取り付けていた。これによりリヨウは再び強気に。

「予備の頭部?！」

「シールドの裏に隠しておいたんだよ。ヨウタの奴の提案だ」

「よくやったぜ！リヨウ！」

ヨウタの声が響いた。同時に彼の乗った機体が武器を振り回す。恐竜の頭を横したレンチメイスだ。外見の通り挟み込みチェーンソーで切断する武器だ。

「バルバトスの!?!」

捕まるまいとアイはレンチメイスを回避、その時アイはヨウタの機体を確認した。と、

「なあ!!」

奇声を発すると同時にアイは完全に硬直。隙ありとヨウタは再びレンチメイスで挟み切ろうとする。今度はアイの回避が遅れた。ストライクの左足は捕まり、その隙についてアイズガンダムは切りかかってくる。アイはストライクの左足を自分のビームサーベルで切り落とし脱出。

「な……な……な……」

アイは恥ずかしさで一杯だった。ヨウタの乗ったガンプラ、バルバトスのアーマーを着こんだエプロンドレスに猫背、藍色の髪と瞳、そ

れは……。

「何で……何で！何で私そっくりのガンプラ作ったのおおつつ!!!」

メイド服を着たアイそっくりだったからだ。

「すげえだろ！プロの人に誕生日プレゼントで作ってもらった『邪神像あい』だぜ！」

ドヤ顔で自分の乗った邪神像あいを説明するヨウタ、反面リョウは関わりたくないとはかりに顔を逸らしていた。

「セクハラああ！セクハラだよ!!何考えてんの!!てか何！邪神像って!!」

「まあ待てよ姉ちゃん、これは違法ビルダーへの対策でもあるんだぜ？」

「何言ってるの?!」

「そうさ！以前姉ちゃんと戦った時の姉ちゃんのキレっぷりは凄かったぜ。あの時の怖さ！まさに邪神！これは違法連中に対しても有効に違いない！てなワケだ！」

そう言うヨウタは外側のサブアーム、それに備え付けられたマシンガン撃つてくる。背中のブースターを失ったアイだがビルドストライクは素でも高機動だ。難なく回避する。

「理由になってない!!」

「簡単には落とせないか！だが見てみな！お年玉貯金を注ぎ込んで作らせたこの邪神像あい！姉ちゃんの得意な戦法、かつて使った技！身長、肌と髪の色と質感は元より姉ちゃんのスリーサイズも完全再現！」

「なんで知ってるのおお!!!」

アイは真っ赤になった顔で絶叫しながらスタービームライフルを連射。しかしこれらはデیفエンスモードのアイズガンダムに防がれる。

「ある人から情報もらったんだよ！加えて俺はリョウの奴とのタッグだぜ！オレッツチ達の親友コンビには勝てねえぜ！」

「あんま近くに寄るんじゃねえよヨウタ。友達だと思われるだろう

が」

一秒でも自分そっくりのガンプラを見ていたくはない。アイはさっさと邪神像あいを倒そうとビームサーベルで切りかかる。しかし援護に入るのはアイズガンダム。向こうもビームサーベルでのぶつかり合いとなる。すぐさまヨウタの邪神像あいが両腕のマシガンでストライクに撃ってくる。

どちらか一方は防御。もう一方は攻撃とポジションを徹底してる為、なかなか決定打にはならない。リョウの腕はフォローが上手い。「くうっ！連携が取れてる?!」

「姉ちゃんをキレさせるわけにはいかねえんでな!! さっさとケリをつかせてもらうぜ!!」

そういうとヨウタは邪神像あいのポケットからキャンディを複数取り出すと掌に乗せて息を吹きかけて飛ばす。直後、キャンディはポンポンと音を立てて一瞬で人型に膨らむ。かく乱用のダミーバルーンだ。しかしその姿は自機を模した物ではなかった。

「な…な…な…」

今度はナナの方が絶句していた。

「ハ…ハジメさんだ」

横で茫然としたツチャが呟いた。ダミーバルーンはアイの友達や周辺の人物の物だった。しかも格好がエプロンドレスのアイに合わせたのか。

ナナ||メイド。タカコ||バニーガール。ムツミ||巫女。ノドカ||サキユバス。マコト||牛柄ビキニ。ユキ||幽霊（井戸から出てきたシーン）。と全員マニアックな格好で再現していた。所々どよめきと笑いが起こる店内。ネタにされたナナの顔はみるみるうちに真っ赤になっていた。

「なんつーもん作ってんのよあんだああ!!」

ナナが悲痛な叫びを上げながら止めようとする。しかしその横で、

「うわああーっ!! 見るな！見るなああ!!」

ソウイチがナナ以上の赤面と絶叫を上げていた。ダミーバルーン

の中にはソウイチの母、カナコのバルーンも含まれていたからだ。……しかも衣装は魔法少女（もうすぐ33歳）。観戦モニターを体で遮り隠そうとするソウイチだが、当然彼の体よりモニターはずっと大きい。隠せるはずがない。バルーンながらも一番見たくない親の姿に完全にパニックになっていた。

——周り知らない人ばかりなんだから黙っていればいいのに——
ツチャはそう心の中でソウイチに思っていた。なおその横で「レムさんのバルーンは無いのか……残念」とヒロが思っていたのは誰も知らない。

「ヨウタクん……あの時潰したのに君は全然反省してないのかなあ？」

アイの言葉に怒気が含まれ始めた。目も血走り始めていた。

「おいヨウタ。案の上キレ始めたじゃねえか。知らねえぞ俺」

リヨウの声に若干の焦りが見え始めた

「解ってるさリヨウ、でも俺はやらなきゃならねえ！男である以上女の子が大好きだ！皆女の子のこういう格好は妄想すんだろ?!それを見たいのは皆の願いだ！それを伝えたいんだよ！」

「俺は警察にお前の身柄を伝えてえよ」

「……二人とも、遺言はそれ？もういいよ。二人ともチリ一つ残さずに消してあげる」

二人の漫才を待つてられないとばかりにアイは破壊しようと思構えた。ストライクからエクトプラズムめいた妙なオーラが見え始めた。

「げえー！おいヨウタ!!俺まで共犯者みてえに思われたろうが!どうしてくれんだよー!」

「決まってるぜ!やりたい事はやったから潔くやられよう!」

「ふざけんな!」

と、その時だった。『挑戦者が乱入しました』という表示がディスプレイの前面に表示される。

「あん?……なんだ!?!」

直後、警告音と共に上空から雨の様にビームが降ってくる。それもアイやヨウタ達を狙った射撃だ。

「うーうおお!!」

必死に回避する三機、しかしヨウタとリョウの二人は回避しきれなかった。リョウのアイズガンダムは再び頭部と各部を損傷。

「く、くそ。かわしきれなかった……」

「ひいいい!何?!何が起きたの?!」

「あーっはっはっは。あーいい悲鳴」

聞き覚えの無い女性の声が響く。直後、数機の巨大な機体が降臨する様に降りてくる。違法ビルダーの機体。ガンダムブリュンヒルデだ。以前戦ったときより小型だ。しかしアイ達の機体の倍はある。撃ってきたのはこいつだ。

「違法ビルダー!?!」

「有名だけど低俗な旧世代ビルダーが今日はいるって聞いたけど、いい具合に弱ってんじゃない。あんたら倒せば私がここの女王ね」

「様は私達を倒すって事!?!」

「バトルに出たって事はそういう事じゃん。馬鹿じゃないの?」

鼻で笑うような相手の態度にムツと来るアイ。

「礼儀がなつてないね。初対面で馬鹿呼ばわりとはね」

「ああアタシとSだからさ。アンタらに嫌な思いさせるの楽しくて仕方ないの。個性だから気にしないで」

直後に複数のブリュンヒルデが「さすが姫!」「そこに痺れる憧れる!」と同意する。取り巻きなのだろう。

「噂じゃあんたもどSだって言うじゃん?でも今のバトル見てたけどアタシの方がずっと上位ね」

「?私がどS?何かの間違いじゃない?」

理解出来ないというアイの反応に

「ああやっぱりそう思う?あんたみたいな地味な子がどSだなんておかしいと思ったわ。とにかくあんたを倒せばアタシの名も上がるわ!その為に生贄になりなさい!」

直後にブリュンヒルデ達が一齐にアイ達を仕留めるべく飛び立つ。

「気持ちよくさせてから潰してあげる！」

「丁重にお断りさせてもらおうよ！」

射撃を仕掛けてくるブリュンヒルデ、アイはそれをかわしつつライフルで撃ち返す。しかしブリュンヒルデはフィールドを発生、ビーム兵器は吸収される。これは違法ビルダーの機体各部に i f s ユニツトと呼ばれる強化パーツが取り付けられているからだ。その効果はビームを吸収するバリアをはり、ビーム出力UP、更に機動力も上がるという装備だ。

「チツ！こりやさすがに姉ちゃんをやつてる場合じゃないぜ！」

「ふええ！う！うん！さすがにあいつらは許せないよ！！」

ヨウタとリヨウの二人もアイの側に加勢する。違法ビルダーは通常のビルダーにとつては共通の敵だ。

「といつても！射撃じやさすがに勝負はつかないか！」

「なら俺に任せておけよ！！邪神像あいには鉄血のオルフェンズの実弾兵器で固めてあるんだぜ！！対違法ビルダーのこの力を見せてやるぜ！」

そう言うとヨウタの邪神像あいは先行。止めるアイとリヨウを聞かずブリュンヒルデにマシンガン撃つ。

「その表情！ガンプラでも恐怖の顔つきにはなるのかしら！」

「させるか！！」

ヨウタは邪神像あいの背中に取り付けられたメイスを振りかぶる。それを受け止めるブリュンヒルデ。が、邪神像あいのパワーはかなりの物だ。そのままブリュンヒルデを弾き飛ばす。

「うあっ!？」

「このままゴリ押しでいけるぜ!!」

行けると確信するヨウタ。だが違法ビルダーは余裕の態度を崩さない。

「フッフフ。馬鹿ね。パワーだけでアタシに勝てると思つてるの？」

弾かれたブリュンヒルデは受け止めた部位。右腕のバスターソードを損傷していた。しかしすぐさま損傷箇所は再生する。これが違法ビルダーの特徴、そして嫌われる原因だ。

「ゲッ！再生すんのかよ！」

「試作品をもらったのよ！それに新世代ビルダーの技術は日々向上してるのよ！さあ好きなだけ悲鳴を上げなさい！」

そう言うとり巻きブリュンヒルデ二体が遠隔操作武器のファングを両肩から射出、邪神像あい襲ってくる。本体の射撃も加えてヨウタを追い詰める算段だ。突出したヨウタは実質3対1の状況となる。

「ヨウタ君が！先行するから！」

アイがヨウタの所へ向かおうとするも、別のブリュンヒルデが五体遮る。

「邪魔しないでよ！」

「姫のやる事はなんでも正しいのだよ!!」

すぐ横でもリヨウのアイズガンダムはもう一機のブリュンヒルデに襲われていた。頭部を破壊されて気弱に戻っていたリヨウは悲鳴を上げるばかりだった。

暫くして邪神像あいは吹き飛ばされ後方のデブリに背中から衝突する。

「ぐあっ!!」

ガンプラとはいえダメージを負った邪神像あいには苦悶の表情を浮かべていた。

「たままないわねえ。相手が絶望でもかく様は」

対して違法ビルダーのブリュンヒルデ三体は無傷、再生システム『アインヘルヤルシステム』の所為だ。

「そんな卑怯な手で勝って嬉しいのかよ」

「当然、他人の不幸は蜜の味って言うでしょ？相手が必死なのにこっちは対戦していても高みの見物でいられる。最高じゃない」

後方で取り巻きの二人が「YES！姫の言う通りです！」と続いた。

「やっぱ最低だなあんた」

「どSだからさ。個性よアタシの」

「まずい！ヨウタ君が！」

「うわああん！ヨウタ君んんん!!」

それを見ていたアイ達はどうかブリュンヒルデの攻撃を裁いていた。が、リヨウの方は怯えていてまともに動けない。アイはそれを庇いながらの為防戦一方になっていた。

「再生のコアを潰せばいいんだろうけど……これだけ大きいと今の装備じゃ！」

「……なら俺のGポッドと入れ替えてこの邪神像あいに乗れよ」

突如ヨウタのGポッドからの通信が入った。

「ヨウタ君？」

「このまま向こうがでかいツラのままやられるのはゴメンだぜ。姉ちゃん、オレッチだつてビルダーの端くれなんだ！このまま終わつてたまるか!!そして姉ちゃんの方がずっと俺達より強いのも事実なんだよー！」

「ヨウタ君、解った。と言いたいところだけど！ちよつと今は敵を裁くので精いっぱいだよー」

「だったらあたしとアサダに任せてよ！アイ！」

「母さんのバルーン!!バルーンどこ?!」

「?!ナナちゃんとソウイチ君?!」

口調はいつもと違うが聞き慣れた声、ソウイチのバイアラン・スパイダーとナナのストライクフリーダムだ。

「アタシ達だつて違法ビルダーは許せないんだから！」

「黙ってみてられないんすよ！それに母さんのバルーン割られたらすつごい嫌っス!!」

そういうと二体はブリュンヒルデにそれぞれ立ち向かっていく。

アイはその二人の行為を無駄にはいけないと判断。ヨウタに通信を返す。ちなみにバルーンはどこかに流れてしまったらしい。

「解ったよヨウタ君！Gポッドの交換行くよ！」

「おうさー！」

そう言うと二人はお互いにGポッドから出る。そのまますれ違いながら相手のGポッドに入った。

「フン！何やってるか知らないけど！無駄！ゼーんぶ無駄！さあアタシにひざまづけ！」

そのままとどめを刺そうとバスターソードを振り上げるブリュンヒルデ。しかし振り下ろされた次の瞬間。邪神像あいの表情が諦めの無い表情に、そして外側のサブアームでバスターソードを真剣白羽どりの体勢で受け止めた。

「何?!」

「でやあつ!!」と声を上げるとそのままブリュンヒルデをブン投げる。ソードが右腕と一体化していた為本体ごと舞った。

「姫！貴様あー！」

取り巻きがフアングを使いアイに襲う。アイは冷静にサブアームのマシンガンでフアングを迎撃。

「何?!」

「小回りを効くために前より小型にしたんだろうけど、やっぱり性能に頼ってる所つてあるよね。違法ビルダーは」

この隙に落とした武器、宙に浮かんだメイスを回収し今度はブリュンヒルデに向かう。来させまいと撃ちまくるブリュンヒルデだがアイの方は意にも解さないようにかわしながら突っ込んでくる。

「くそっ！小さいからつてちよこまかと！」

「今度はそっちが良い様にやられる番だよ……」

「ヒッ!!」

相当怒っていたのだろう。アイから発せられる声は妙な冷たさがあった。それと連動してか、取り巻きが見た邪神像あいの表情は、銃を付きつける殺人鬼の様だった。直後、邪神像あいのメイスがバットの要領でフルスイング。『ゴッ!』という音と共にブリュンヒルデの左腕がひしやげる。勢いを加えたとはいえ明らかに行き過ぎた威力だ。

「何だよ！この威力は!!」

「結構な威力だね。……作った人はちゃんと心を籠めて作ってくれたみたい。後本当に私専用みたいな感触」

ガンプラバトルという物は、作った時の気持ちだが、込めた魂が機体にブーストとなる事もある。それこそがガンプラバトルが単純な性能競争で留まらない魅力の理由だった。

「魂だとい!?そんな超常現象なんかにい!!」

ビキビキと時間を巻き戻すようにブリュンヒルデは再生していく。このシステムはいわゆるコア部分があり、そこから広がる様に再生していくという特徴があった。コアの位置は一機一機違いがあるが、これにより場所の予想はつく。

「となるとー」

今度は頭部目掛けて思いつき振り下ろす。頭上をバスターソードでガードしようと覆う違法ビルダーだったが。受けたまま腕とソードはVの字状にひしゃげて頭部ごと損壊。そのまま今度は再生せずに沈黙。コアは頭だった。

「うー嘘だ!!旧世代ビルダーなんかにい!!」

もう一機のブリュンヒルデがアイに対して撃ちまくる。自分達がやられるとは思っていなかったのだろう。

「焦りすぎ!!」

アイは撃墜したブリュンヒルデの裏側に隠れる。盾にされたブリュンヒルデはその身に射撃を受けて爆散。その爆炎の中からメイスが槍投げの要領で高速で突っ込んでくる。

「なっー」

予期せぬ攻撃にブリュンヒルデの腹部にメイスは深々と突き刺さる。そのままブリュンヒルデは後方のデブリに衝突。隕石でも受けたクレーターのようブリュンヒルデはペシヤンこになった。コアを巻き込んだのだろう。そのままブリュンヒルデは沈黙した。

「なーなんでー!こんな事ありえない!絶対負けないから新世代ビルダーになったのに!!」

最初に名乗った女性ビルダーが信じられないとばかりに叫んだ。残った相手にアイはメイスで立ち向かう。

「最低の遊びはもう終わり!観念したらどうなの!」

火力で邪神像あいを圧倒しようとするも、フアングも射撃も意味を成さない。難なくアイはかわし、迎撃し突っ込んでいく。慌てた違法ビルダーは近くにあったデブリをブリュンヒルデで掴み投げる。

「最後のあがきがこれ？拍子抜け！」

「くー！こんのお!!」

もう邪神像あいはメイスを大きく振りかぶっていた。もう駄目だと言わんばかりに違法ビルダーは周りの物を確認もせず投じた。

「っ!？」

その時だった。メイスを振り下ろそうとしたアイの手が止まった。何故ならアイの目の前にある物は

「ノドカのバルーン……!」

アイを拒絶したノドカのダミーバルーンだった。アイはバルーンの寸前でピタツとメイスを止めた。その様子は相手の違法ビルダーにも解った。

「?へえ、バルーンでもあんたの友達は打てないって?」

違法ビルダーは周りを見回す。ヨウタのばら撒いたバルーンは全てこちら流れていた為無事だった。そしてこれが切り札になると違法ビルダーは判断。

「じゃあこうされたらどうかな?!」

そう言うとバルーンを手あたり次第アイに投げつける。攻撃するわけにはいかずその場で止まるアイ。違法ビルダーはかまわず射撃を仕掛けてくる。その内のバルーンの一つ、またノドカの物が邪神像あいの真正面に流れる。このままではバルーンに当たる。そう思うとアイはとっさにメイスを盾にバルーンを庇う。ブリュンヒルデは頭部からの高出力ビームを撃ってくる。怪獣の熱線の様なビームを必死にアイは防ぐ。

「アハハ！たかが風船にそんな必死になっちゃって！大体そいつもアインタを拒絶した奴じゃん!!そんな奴を庇うなんてバツカだねえ!!」

「関係ない!!関係ないよ!!拒絶されたとしても!!私は違法ビルダーになったアイツを改心させたい！本心が知りたい！私はアイツが好きだから！だから偽物のバルーンでも守ってみせる!!」

「ふん!!じゃあ他のバルーンを狙っても庇うのかしら!」

「何!?!」

「まずいわ!押ししていたのに!」

「母さんのバルーンまであるっスよ!まずい!!」

「だああ!バルーン出さなきゃよかったああ!!」

「ふええ!もう駄目だあく!」

アイが再び押されているのはナナの方からでも見えた。とはいえこちらも違法ビルダーに押されていた。

「フン!仲間の心配をしてる余裕があるのか?」

「よく言うわよ!再生に頼ってる様な奴が!」

そう。ナナ達が一体二体はどうかできたが、最終的に数で押されてしまっていた。と、その時だった。『挑戦者が乱入しました!』というアナウンスが再び起きる。誰が?と困惑する。直後、ブリュンヒルデのGポッドに警告音が、直後に雨の様な量のミサイルが降り注ぐ。それによりとどめを刺そうとしていたブリュンヒルデの攻撃も中断。

「この攻撃!まさか!!」

「そのまさかですわ!」

サツマの乗ったメテオイージスガンダム達だ。戻ってきて乱入したのだろう。

「ワタクシ達のシマでよくもまあ好き勝手してくれましたわね!」

「しかもお客さんのアイちゃん達相手にだよ!」

「ツケは払ってもらおうよ」

身構えるチョココのブリザ・ドーガとスグリのラビットジュアッグ。しかし遠くにいるアイとはまだ距離がある。

「チョコ!プラスキーウイングでヤタテさんの所へ飛びますわ!ビームを!」

すぐさまサツマのイージスにビームを数発撃つチョコ、イージスはシールドで吸収すると変形、巡航形態でアイの所へ突っ込んでいった。

「待ってイモエ!アタシも!」

ナナのストフリもイージスを掴む。

「ハジメさん?! まあいい! しっかり捕まってなさいな!!」

そういうとイージスは変形したまま青い翼を発生させ超高速でブリュンヒルデに突っ込んでいった。

「アツハツハツハ! 一個ずつ風船を割って……何!」

こちらでもアウンズは聞こえた。と、それからわずかな時間でサツマのイージスは弾丸の様にブリュンヒルデに突っ込んでくる。そのままイージスはブリュンヒルデを貫通。

「ぐああつ!」

そのまま腹部を分断されたブリュンヒルデは宙を舞う。と、ナナのストライクフリーダムが邪神像あいに駆け寄る。

「アイ! 大丈夫?!」

「ナナちゃん! サツマさん!」

「改めてみると凄いナリしてるわねアンタ」

「それ言わないでナナちゃん」

「何安心してますの!! コアを逃しましたわ!」

「二人とも! バルーンの保護をお願い! それで私は思いつきり戦える!!」

「友達を模したバルーンでピンチになりますか。甘いですわね……」

「ちよつとイモエ!!」

「でも、だからこそ友達を大事に出来るんでしょうね。解りました。バルーンの保護はワタクシ達に任せて!」

そういうと二機はバルーンに向かう。

「つまらない展開だわ! どいつもこいつも生真面目にやりやがって!」

「ふう……セコイ手しか使えない人が何を言うの?」

上半身のみ、再生中のブリュンヒルデの中で違法ビルダーが声を荒げる。それに対してアイが冷たく、そして怒りを込めて言い放つ。

「っ!?!」

ぞわつと違法ビルダーの背筋に悪寒が走った。アイから発せられる威圧感は拳銃でも突きつけられたかのようだった。アイの態度に呼応して邪神像あいの表情もどんどん怒りの表情になっていく。

「くっ！ムカつくからあんただけでも虐めるわ！」

震えた声でそう言うのとブリュンヒルデは再びフアングを飛ばす。しかしアイに同じ手は通用しない。サブアームのマシガンで迎撃、あつという間に近づかれる。

「自分の性格が悪趣味なのを押し付けなくてくれる？」

「何が！アタシはどSだ!!嫌がる相手に押し付けるのは当然でしょ！」

そう言うのとバスターソードを横に薙ぎ払う。がそこに邪神像あいはいない。どこだと辺りを見回す違法ビルダー、直後頭上からアイの声が響く。

「それ、どSって言わないよ。よくわかんないけど」

「!?」
「相手が求めている時だけに相手を気持ちよくさせてこそどSでしょ」

ブリュンヒルデの頭部に邪神像あいは乗っかっていた。と、乗っていた両足が青く輝きだす。と、同時に表情が邪悪となる。相手にとっては死刑宣告と同様だった。

「ひっ！やーやめて!!」

「だーめ♪」

恐怖に歪んだ声を上げる違法ビルダー。瞬間、ブリュンヒルデが頭から一気に潰れていく。そしてひび割れ、崩壊。これはアイが踏み潰す様な発頸を以前使用していたからだ。コアごと潰されるブリュンヒルデ。

「あーああああ!!!」

断末魔を上げる違法ビルダー、アイはその声を聴きながら妙な興奮感を覚えていた。そして邪神像あいも連動するように同じ表情で震えていた。自覚のない。彼女こそが生まれついでの真のどSだった。

「で、ヨウタ君、これもらっていいよね？」

バトルが終わった直後、アイの第一声はそれだった。表情は張り付いたような笑顔だが妙な凄みがある。

「えええ?! そりやねえよ姉ちゃん! すっげえ金かったしそれで違法ビルダーと戦うつもりだったのに!」

「文句ある?」

一瞬だけ笑顔を解除、言い分は聞かないとばかりの暴君の様な表情だった。

「見てたぞ。おいチビ」

また別の声があるとヨウタの後ろから、ロリータファッションの少女がヨウタに組み付いた。彼女もビルダー、ゴウセツ・ユキだ。さっきのバルーンでは幽霊のコスプレだった。

「ウチを幽霊の恰好させるたあどういうこつたあ! ああ?!」

「ギャー!! 増えたああ!!」

「で、貰うから」

突然の乱入者に困惑の声を上げるヨウタ。その隣でナナ達はまた別の話をしていた。

「いやいや。しかし一時はどうなるかと思ったわよ」

ナナが安堵したように呟いた。反面ソウイチは渋い顔のままだった。

「あれで自己採点はいいい点数はとれたと思ってますの? ハジメさん」

皮肉る様にサツマが言う。ジョークか本気が解らない。

「むー解ってるわよ。まあ違法ビルダーにだって皆で力を合わせれば負けはしないからいいじゃない」

「くっ! これで勝ったと思ってるわけ?! 甘いわね!」

別のGポッドから違法ビルダーが出てきた。中学生位の少女だった。

「さっきの奴か。もつとまともな趣味をもつたらどうなんだ」

「ほつとけ!! それはそうと! アタシらを倒したのは誰だ! ほとんどアイって奴じゃない! そして乱入してきたサツマ達だわ! そんな力が

偏っていたって勝てるわけがないわ!」

「アンター!それだって皆でカバーしあえば!」

「ハッ!劇甘!新世代ビルダーの機体の性能はまだまだ発展途上よ!いずれはアイの性能だって追い越す機体で倒してやるんだから!首洗って待つてなさい!」

そう言うのと違法ビルダーは去って行った。取り巻きはオンライン参加だったらしい。彼女一人だった。だが先程の発言を負け惜しみと受け取れるのはほとんどいなかった。

「アイツの言う通りっスよ……」

ソウイチが口を開く。

「やっぱりこのままじゃ駄目なんだ。力を合わせようにも、それぞれの力を上げておくに越したことは無いっス。やっぱりまだまだ俺達も強くならなきゃ……」

悔しさと不安を混ぜた言葉だった。

「なら精進あるのみですわね。もつとワタクシが……」

サツマが言いかけた時だった。アイのスマホに着信が入る。電話だ。

「誰だろう?……ムツミちゃんだ」

ディスプレイの名前を見るとアイは何気なく電話に出る。

「もしもしムツミちゃん?」

「あ!アイちゃん!!大変だよ!!今ガリア大陸に違法ビルダーが集団で暴れてる!!」

「っ!!なんですって?!」

オンラインでどうにかガリア大陸の回線に入り込めないか確認するアイ達、しかし回線は閉じており、乱入は出来なかった。こうしてアイ達は急遽ガリア大陸にトンボ帰りとなる。……しかしこの後の事件が、アイ達チームI・Bにとつてとても大きなターニングポイントになるとは、この時誰が思ったろうか……。

第54話「破天荒なお姉さま」(オーバーデステイニー ガンダム登場)

このままじゃ駄目だ。ガリア大陸へ戻る電車の中、ソウイチはそう思っていた。違法ビルダー達はほとんどん力を付けて行ってる。それも苦勞をしないで、それに比べて今の自分らは行き詰ってる感じだ。このままじゃ近い将来俺達は負ける。

苦虫を噛み潰したような表情がずっと続いているのが皆にはわかった。

「ねえアサダ、アンタ……考えてる事当てようか」

隣りの席に座っているナナが言った。

「……言わなくても解るでしょう？ 以前のアンタと同じだ」

ソウイチはぶつきらぼうに答える。ナナ自身も自分の実力不足に悩まされていた事があった。

「耳が痛いわね。でもだからこそ焦っちゃ駄目よ。自分が周りに追い越される悔しさは、アタシも解ってるつもりよ……それに、アンタの悩み、アタシも同じなんだからさ」

「ハジメさん……」

今実力不足で悩んでいるのはナナだって同じだ。

「といっても悩み共有する位しかできないけどさ」

「……まあ、それでも有難いっすよ」

笑った。というわけではないが、眉間の皺を取りながらソウイチは答えた。

「そう言えるだけでも成長したな。ソウイチの奴」

反対側の席でツチャヤが小声で言う。

「でもソウイチ君、最近はちよつと昔に戻りつつあります……」

アイが心配そうに言った。ソウイチはアイと会った時は常に仏頂面で、勝利の結果以外眼中にない様な少年だった。それがアイ達との交流によって考えを改めつつある。しかしだ。最近は実力の壁に悩み、また昔の面が顔を覗かせつつあった。

「焦ってるんだよ。ソウイチ君は、壁を乗り越えたらもう一つ大きな壁が待ち受けていた」

「俺達に出来るのは、道を間違えない様に見守るだけさ」

「壁でしたら、ここにいる私達全員が当たってる様なものですけどね……」

アイがあまり見せないネガティブなトーンで言った。実力以外にも道を違えた友達との関係等、チームI・Bの面々はそれぞれの壁に直面していた。

「各々どうにかするしかないよ」

「ところで、どうなってるんでしょうね。ガリア大陸は」

同行していたサツマ達が呟く。電車の窓には午後の夏日が差し込んでいる。向こうに付くのは夕方だろう。焦る気持ちを抑えつつ。ジリジリと時間が経つのを待つしかなかった。

そして山回商店街に着くころには、案の定日も落ちかけていた。といってもまだ日の高い夏の日、ガリア大陸へ一同は向かい。そして入る。

「おかしいな。誰もいない」

一回のプラモ売り場を見渡すも、人っ子一人いない。二階のガンブラバトルのコーナーはどうだ。とい全員が二階へ上がっていった。「あっ」

ソウイチが声を上げる。二階に人はいた。背を向けた少女が、アイ達があつた事のある人物だ。奴が違法ビルダーかと全員が身構える。

「アンタは確か……ツボミ！」
「情けない奴らだな。うかつに自分のホームグラウンドを留守にするなど」

振り返ると、和ゴスと眼帯を身に着けた顔が見えた。ツボミ……地区予選でチーム『グラン・ギニョール』としてアイ達と戦い、ソウイチとの因縁を作った女だ。

「これは君がやったのか」

「ああ、手ごたえはなかったな」と余裕の表情を浮かべるツボミ。

「見損なつたぜ!!あれだけ誇りだの自分は高等みたいに言つときながら!自分は違法ビルダーになるなんて!」とソウイチが身構える。

「?私が違法ビルダー?何を言ってるんだ?」

怪訝な顔をするツボミ、直後、よく知った声が響く。

「ソウイチ君!その人は違うよ!ボク達を、ううん。ここにいた皆を助けてくれたんだ!」

現れたのはムツミだった。当然タカコとミドリ、そして店員のハセベも一緒だ。

「違法ビルダー達が暴れている時に、この人達が乱入して止めてくれたんだよ」

続くタカコ。直後、奥の更衣室から大勢の人間が現れる。そして縛られた違法ビルダーらしき男が数人転がった。猿ぐつわもされておりウーウー呻っていた。

「なんだあの恰好?」

ヒロが怪訝な顔で言う。出てきた大勢のビルダーらしき人間。その多くが、祭りの様な法被を、そしてハチマキをつけていた。まるでアイドルのファンクラブの様だ。ハチマキには『サキ(ハート)LOVE』と書かれており、法被の背中には髪の長い女性の横顔シルエツトが描かれていた。

「あ……あれは……あ、あの恰好は……まさか……」

一人、顔面蒼白になっている人物がいた。サツマだ。珍しく怯えている。

「どしたの?イモエ」

「いえ、親衛隊だけのはず、なら彼女がここにいるはずが……」

「だからなんだってのよ。あいつら何?」

「彼女達はミス「我ら!ミシマ・サキさん親衛隊!」

法被を着た全員が唐突に叫ぶと、三人の少女が前に出る。一人は和ゴスのツボミ、そしてカントリーロリのナエとチャイナロリのモエ。これまたアイ達が予選で戦った三人だ。

「皆さん、決勝まで行けたみたいで、おめでとうございます。丁度私達が挑戦しようってタイミングで違法ビルダーが暴れてまして、タイミ

ングが良くて良かったですよ」

と、フレンドリーにナエが話す。ツボミの仏頂面、モエの無表情に對して彼女は、包容力のある自然な笑顔を浮かべている。

「フン。違法ビルダーとあっては、私達も放っておくわけにはいかないのでな、気は進まないが助けてやったよ」

「もう駄目よツボミ、場の空気を悪くしては、折角今日はお姉様も一緒なのに」

「お姉様？それって……」

アイが言った直後、ザツと音を立ててツボミ達含めて親衛隊が部屋の左右に寄った。まるでVIPに道を作るかのようにだった。

「控えよ。お姉様の御前だ」

中央に現れたのは、長い金髪で黒いゴスロリを着た若い女性だ。年齢は二十代だろうか。気品と自信に満ち溢れた顔つきは相当な美貌を持つ。目を引くのはカラコンではあるが金色の瞳だ。人形のように美しい。という表現が似合う姿だった。

「こんにちは。あなた達がチームI・Bってわけ？そして、その地味なあなたがアイね」

と、口を開けば出てきたのは蓮っ葉な言葉使い。

「地味?!」

固まるアイ。サツマ除いてその場にいた多くが何とも言えない気分になる。

「あなたが『女王』っていう二つ名持つてるって聞いてね。私が持つべきだから奪いに来たわ」

しれっとした表情でアイに對してとんでもない事を言い出した。

「え……そんな二つ名、別に持つていても嬉しくないんであげますよ」

「あら、それはそれで拍子抜けね。駄目よそんな反応は、もつと『絶対渡さない!』っていう姿勢で対応しなきゃ」

「そんな異名があった事自体つい最近知った位ですよ」

「あらそうなの？でも挑戦を断る理由にはならないわ。私と戦ってもらうわよ」

自分のペースでズケズケ話を進める女性に、アイはタジタジ、ナナ

達はあつけにとられるばかりだった

「な……なんなのよあの傍若無人っぷりは」

「彼女は……ミシマ・サキ、チーム『SAKI』リーダーですわ」

サツマが禁忌と対面したかのように口を開く。

「SAKI? 聞いた事ないわね」

「いえ、その筋では恐ろしく有名ですわ。リーダーのサキの實力は完全に全国で、いえ世界で充分通用できるという實力の持ち主、加えてあのビジュアルと行動力、ファンを引き付けるカリスマの持ち主」

瞬間、『あつ』と言いそうになってツチャとヒロが青ざめる。思い出したようだ。

「あら言うじゃない。その通りよ」

「そして負けたら延々と不機嫌で初心者バトルに乱入して憂さ晴らし。仲間使つて相手の疲労を平気で狙う。仲間は全員召使い扱い、通つたらペンペン草一本生えない。破壊神、凶々しさ一番、厚顔無恥、その他恐ろしい噂は絶えませんわ」

「ちよつとお!!」とサツマの評価を遮るサキ。

「うわ……そういう人なんだ」

「今回のヤタテさんの異名を奪う行為も恐らく初めてではありませんわ。以前、『美しさと強さの調和』と評されたビルダーがいましたが……それを『私への評価を盗むなんて許さない!』と逆恨みしてバトルをけしかけたとか……」

「げー……あれ? チームってんならあの人だけってわけじゃないでしょ? 今日来てる奴に仲間はいないの?」

「んー………思い出せませんわね」

眉間に皺を寄せて、目一杯思い出す素振りをしているサツマだが、結局出てこない。

「チームSAKIって、リーダーはやたら濃いのに、他のチームメンバーは限りなく印象に残りづらいんですのよ」

「何なのそのチーム」

「貴様ら! お姉様に対してその態度はなんだ!」

不機嫌そうなツボミに続いて「そうだそうだ!」それがいいんだろ

！」「ああ踏んでほしい！」と親衛隊のメンバーも続く。

「要するに俺達に挑戦するって事だろうか？だったらガンプラバトルで決着つけようじゃないスカ」

それをソウイチが前に歩いて言った。

「ガキ……。丁度いい。お姉様の手を煩わせるわけにはいかない。その前に私と戦って「あらいいわよ。あなた達全員、私一人で十分ね」
「へ？あの……。お姉様？」

珍しくツボミが抜けた声を上げた。

「いいじゃない。醜い違法ビルダーとさつき悪口の悪口で不快だったもの。ここらで汗をかいてスッキリしたいわ」

まるで自分が絶対優勝と言った様な自信だ。ソウイチには舐められたようで不愉快だ。

「な！舐めるなよ！アンタが一人でいいって言うんなら俺達の方も一人で十回「解りました。お言葉に甘えてこちらは全員で相手になりませ」

ソウイチを遮りながらツチャが言った。

「ツチャさん！アンタは俺達が負けると……」

「ハツタリはよせ。彼女はそこらのビルダーとはわけが違う。秒殺されるのがオチだ」

「う……」

ハツタリというのは正解だった。ソウイチは無理にでも自分を強く見せようとしている。

「それに……。このバトルで得られる物があるなら全員で得るべきだ。そうだろうか？」

ツチャとしてはチャンスというべき事件だった。普通だったら一生お目にかかれない相手だ。もしかしたら自分たちにとって大きなプラスになるかもしれない。という思惑があった。

「確かに……」

「あなたのご厚意に感謝します」

「礼儀を知っている様ね。誰が来ようと構やしないわ」

ツチャにそう言って、サキはゴスロリの上着を脱いだ。下には黒い

ボンテージを身に着けており、白い肌がより強調される。

「全員纏めてお姉さんが相手をしてあげる」

「変な奴……」

ソウイチはその行動に顔を赤らめながら呟く。

今回バトルに出るのはアイのスタービルドストライク、ナナのストライクフリーダム、ツチャのアツシマーデコレーション、ヒロのウイングガンダムノヴァ、そしてソウイチのバイアランスパイダーだ。

「勝つんだ……。俺達が」

ソウイチが自分に言い聞かせるように言う。土砂降りの今回のバトルフィールドは『ガンダムSEED DESTINY』に登場したジブラルタル基地、基地のある陸とそこから離れた海、対照的なフィールドが並ぶステージだ。そしてフィールドは嵐によって海は大しげだ。

「ソウイチ、変に気負うなよ」

「解つてますよ。今回の相手は並じゃないって事位、来た！」

「速い！もうか！」

サキの乗ったらしき機体が高速で突っ込んでくる。マントを被っており姿は見えない。アイは光の翼の速度かと予想する。

「女を待たせるなんて失礼ね！」

「ほざけ！」

ソウイチはサキに狙いをつけようとするが、撃とうとしていたGNソードが撃たれ爆発。

「なっ！」

「焦っちゃ駄目よ坊や。お姉さんが大人にしてあげようか」

真紅のサキの瞳が猛禽類の様に相手を捕える。彼女はバトルの時は金色のカラコンを赤に変えていた。

「そう言える程！アンタは大人なのかよ！」

ソウイチはバイアランスのビームサーベルで迎撃しようとするが、サキの機体は即座に離れ左掌からなにかを撃ち出す。

「当然！そして私は最強よ！」

高速のそれがバイアランの右肩ライフルに当たると即座にバイアランの右腕まで一気に凍結する。氷結弾だ。

「凍るだつて?!」

そのままバイアランを撃ちぬこうとするサキだが、それはナナのストフリの一斉射に阻まれる。難なくかわすサキだがそこからアイのスタービルドストライクがスタービームライフル。最大チャージで拡散ビームを放つ。これもかわし、サキの機体は両腕それぞれに射撃武器を持ち、アイとナナを撃ち抜こうとする。

「させるかあ!」

即座にヒロのウイングノヴァがビームサーベルで切りかかる。が、サキの機体の右手のライフルから長いビームソードが伸び、サーベルを受け止めた。そして左のライフルでノヴァを撃とうとする。が、今度はツチャのアッシマーが邪魔をする。分離で挟み撃ちをしようというわけだ。

「次から次へと考えるわね!でも百万年早い!」

即座にライフルを変形させ銃身を伸ばす。アッシマーに向けてると同時に、ライフルと左肩から二条のビームが放たれた。

「何?!」

肩からは完全に予想外だった。アッシマー本体はかわすも、肩部で狙われていたバックウエポンはこれで撃墜されて墮ちた。

「それで終わり?私を満足させるにはまだまだだね」

強風で敗れたマントが飛ばされ、サキの機体が露わになる。同時に稲光がその機体を照らした。その機体は……。

「デステイニーガンダム!」

アイが叫んだ。『ガンダムSEED DESTINY』の主人公機、大剣と長距離ビーム砲、なおかつ光の翼持ちの高火力勝つ高機動の機体だ。

「大剣はライフルと併用の出来るムラマサブラスター。おまけに肩にはノーネームライフルか!」

「柔肌を見たからには責任は取ってもらわよ。この『オーバーデス

「ティニーガンダム』のね!!」

両目、及び額のモノアイが輝くと同時に、光の翼『ヴォワチュールリユミエール』を展開、内蔵したビームソード全てを出したムラマサブラスターを両手で構え、さっき以上の速度で突っ込んでくる。

「くっ！高機動ならアタシのストフリだつて！」

二刀流でナナのストフリが迎え撃つ。しかしストフリがビームサーベルを振るった瞬間、デステイニーはストフリの真下に移動。そのままムラマサブラスターのビームソードを振るった。即座に半身を切り落とされて海に落ちるストフリ。

「作りが雑!!バリが見えてるわよ！」

「よ！余計なお世話よ！」

今度はツチャのアッシマーがトマホークで切りかかる。しかしデステイニーは左掌で受け止めると即座にトマホークは凍結、本体ごと凍らされると思ったツチャは即座にトマホークを手放しライフルで撃とうとするが、読んでいたサキはブラスターの射撃でアッシマーを撃ち抜いた。

「何っ！」

「作りは丁寧！でもなつてないわね!!」

直後、遠くからツインバスターライフルでこっちを狙っているとサキは判断。ヒロのウィングノヴァだ。サキは左手に長距離モードのライフルを持つと、左肩のノーネイムライフルと共鳴させる。

ツインバスターライフルが撃つのとデステイニーのライフルが最大出力で撃たれるのは同時、ぶつかり合う両者のエネルギー、勝ったのはデステイニーの方だ。ノヴァはビームに飲まれてバスターライフルを破損。そのまま本体は海に落ちた。

「ぐああっ！」

「未熟！」

「いつまでも好きにやらせない！」

プフスキーウィングを展開させたアイのストライクが二刀流でデ

ステイニーに切りかかる。サキはムラマサブラスターで難なく受け止めた。

「ビームサーベルを受け止めた!？」

「パール塗装よ。四重に塗られた特殊塗料がビーム耐性をつける。その所為で重さはアロンダイト以上だけどね!」

ストライクを弾くと両機は高速で飛び回りぶつかり合う。膠着してるかと思いきや、アイの方が押されていた。

「少しはいいテクニックを持つてるのね!でも私を満足させるには不足ね!」

「次元が違う!?!そんな!」

そのままステイニーはムラマサブラスターをストライクめがけて振り下ろす。が、ストライクはそれを真剣白羽どりで受け止めた。そのままユニバースブラスターのビーム砲でステイニーを狙う。

「ビーム程度で終わると思ったのかしら!?!」

直後。ムラマサブラスターの骸骨レリーフの先、刀身部が高速で回転し出す。ビームドリルはストライクの両腕を瞬く間にズタズタにした。そして海に落ちるストライク。

「そんな!」

「私が主役よ!!」

そして残ったのはソウイチのバイアランのみ。仇討の思いだ。右腕が凍ったままステイニーに切りかかる。

「なんなんだアンタは!」

「元氣ね坊や。でもそれだけ」

連続で切りかかるバイアラン、しかしステイニーはそれを余裕でいなす。

「右側ががら空き!!」

ステイニーはバイアランの右腕に回し蹴りを見舞う。弾力の無い右腕は碎け散る。

「ぐっ!!まだまだあ!!」

なおも突っ込むバイアラン。

「……皆ダサかったけど、あなたが一番ダサいわよ。坊や」

サキは呆れる。攻撃を簡単にいなし、バイアランを弾くデステイニー。体格差は問題ではない。

「なんだとー！」

「余裕がないわ。ただ突っ込んでるだけ。それでは優雅さも美しさも欠片もない」

「美しさだつて!? 勝てばいいだろ! それと楽しむ事!!」

「あら基本は解ってるのね。でも口ではそう言ってもあなたはガムシヤラなだけ、考えなしでは泣いてるわ。あなたの仲間が。ガンプらが」

「知ったような口をつ!! だったらあなたの考えはなんなんだ!」

頭に血が上ったソウイチは同じ様に突撃を繰り返すしかできなかった。デステイニーはムラマサブラスターをあらためて構え、向かい合う。

「決まってるわ。おしやれ。かつこいいファッションよ」

「は? 何を!」

予想してなかった答えにソウイチは肩すかしをする。

「おしやれつてのはね。自分で自分のポテンシャルを引き出す事よ。自分でコーディネートを考えて人に見せる。伝える。そこに余裕や美しさが無くては魅力は半分も引き出せやしないもの」

それがサキの信念だ。振るうムラマサブラスター。バイアランの左半身が舞った。

「なっ!」

「最近は違法ビルダーなんていう、コーディネートもロクに出来ない、工夫も努力も考えてない癖に、デカイ顔してるやつらが多くて不快よ。そいつらが執着してるヤタテ・アイって人がどんなのか気になつて来たつてもあるけど、こんな半熟だらけとはね!」

そう言つてデステイニーはバイアランを海に叩き落とす。

「見かけ倒しよ坊や。いえ、皆100万年早い」

そのままバイアランは海中に沈んでいく。機体はまだ動く。だがサキの戦いぶりにソウイチは絶望しかけていた。勝てるわけがないと。

「か……勝てない。適いつこない……あんな奴に……」

「だったら、もうやめる？」

そんなソウイチの周りにアイ達が寄ってくる。全機ボロボロではあったがまだ機体は動く。

「ヤタテさん。皆」

「本当に適わないよ。あの実力。トドメ刺さない様に加減したんだろ
うね」

「俺達を舐めてるのかもしれないな。でもこのまま終わったら得るものはただの屈辱だ」

「まだ機体がボロボロでも、僕達には出来る事がある。そうだろう？」
「どうせなら最後まであがきましょうよ」

—— そうだ……自分たちは自分を信じてここまで来た——

「機体が動くならまだやれる……でもどうやって」

—— そこで会ったのは圧倒的な実力差の女——

「決まってるでしょ……」

—— 負けに負けても——

「ガン普拉バトルはただの性能競争じゃない」

—— 気持ちまで愚弄されて——

「気持ちだけなら……」

—— 黙ってられるか！——

「負けるつもりはないわ！」

それが全員の気持ちの一致だった。今回の相手は違法ビルダーではない。だからこそ今の自分を全て出し切りたい。ぶつきたいという気持ちもあった。機体もビルダーに呼応するように目が強く輝く。

「本当にこれで終わり？ 見かけ倒しで終わるつもりなの？ あなた達」

サキがそう言った時だった。

「ううおおおおおっつ！！」

アイのストライクが飛び蹴りの体勢で海から突っ込んできた。プラフスキーウイングだ。

「直線的に突っ込んでも！」

かわそうとするサキ、しかし突如Gポッドの警告音にハツとする。海面からのビーム。ナナのストフリドラグーンだ。予想できる回避場所に使えるドラグーンを配置し連射。回避が遅れたサキはアイのキックを回避しきれない。とっさにムラマサブラスターを盾にキックを、否、発頸を受ける。ブラスターはこれで一気に破壊。

「戦国アストレイみたいに?!」

「普通のビルドストライクだと思っただんですか!!」

「甘いわね!こっちはまだ武器が!」

ライフルを構えるとデステイニーはその場から退避、追いかけるドラグーン。だが一直線に並んでいたのが不味かった。デステイニーはさっきのライフルの共鳴で再び最大出力を撃つ。ドラグーンはこれで一気に失う。またもサキのGポッドに警告音。今度はデステイニーの後方からだ。

「捨て身で行くぜえ!!」

ヒロのウイングノヴァ。その真後ろにアツシマーだ。両機とも変形して、アツシマーがノヴァを盾に、撃って隠れてを繰り返す。デステイニーはノヴァに氷結弾を撃ち込む。バードモードのノヴァは機首部分が凍り付く。

「甘い!」

だがノヴァの機首部分はシールドだ。切り離して変形しながらビームサーベルで切りかかる。アツシマーも駄目押しとライフルを連射。デステイニーはビームサーベルで受けながら後退。そこへアイのストライクが再び発頸を撃ち込むべくデステイニー後方から突っ込んでくる。

「これでええっ!!」

「ふうっ……ちよつとは燃えるじゃない。お姉さんも本気だそうかしら!!」

サキがそう言うと、サキの赤い瞳が、デステイニーの目が一層強く輝きだす。斬り合いをしていたノヴァを弾くと真後ろのストライクを振り向きざまに切り裂いた。

「なっ!!」

「俺にだって!!俺だってなあ!!!勝ちたい理由はあるんだ!!ガンプラが好きだって気持ちは!!!アンタにだって負けるもんかああっ!!!」

その時。バイアランにソウイチのガンプラ魂が呼応する。増した勢いはデステイニーの腕を軋みさせる。

——何?この感覚……?!このガンプラ魂は?——

ガンプラ魂はサキ自身も当然ある。だが……ソウイチのガンプラ魂はサキにとつて、何故だかシンパシーを感じる物だった。次の瞬間、デステイニーの左腕が舞った。貫通するバイアラン。

「くっ!!」

「ど!どうだあつ!」

向き直るソウイチ、デステイニーは左腕を損傷。対するバイアランは負荷で限界だった。小規模な爆発を起こしていく。

「そ!そんな!っ!!」

バイアランが爆発する直前。真上から巨大なビームがバイアランを飲み込んだ。これによりソウイチは撃墜。直後『挑戦者が乱入しました』というアナウンスが残ったナナとサキのGポッドに、そして観戦モニターに入る。

「アサダー!まさかっ!」

「あつはつは!早速一機ゲットー!しかしまたとない大物がかったわね!」

「?!あの声は!」

撃墜され、観戦しているアイ達にとっては聞いた声だった。前回ルジャーナで戦った少女の違法ビルダーだ。前回出てきたブリュンヒルデが、そしてマステマガンダムとネフィリムガンダムが、何十機もバトルフィールドに乱入してくる。

「もうボロボロじゃん!凄い人らしいけど、今なら楽に倒せるわね!」

「アナタ達……違法ビルダーね」

機体の外見、非常識な行為からサキが面白くない様に言う。嫌悪感が言葉からにじみ出ていた。

「ミシマ・サキ、なんかよく解んないけどアイ以上に有名人らしいじゃん。アイを倒せなかったのは残念だけど、アンタ倒せば充分おつりが

くるわ！アタシは新世代ビルダーのカリスマになれるわね！」

「流石の戦略眼です姫！」「どうか功績は我々にもおこぼれを！」と彼女の取り巻きらしき違法ビルダーが続く。

「よく言うわよ……さつきアタシ達と戦った時と同じパターンじゃない」

「また人が弱ってる所を狙って！」と観戦していたヒロ達が吐き捨てる。

「結果さえよければいいのよ。それにしても調べたけど、サキ、アタツて大人でゴシッククロリータファッションなのね……ダサツ！」

「……なんですって？」

「年を考えろって話よ。取り巻きだって踊らされちゃってまあ、知ってる？これら新世代ビルダーはすでにファッション雑誌にも特集が組まれてるの。いずれはアタシ達はアンタ以上におしやれでセンスがあるって認知になるでしょうね」

「それ……、自分を信じて出した考えかしら？」

「？自分の考えなんて持つ必要ないわよ。流行に乗っていればオシヤレ。勝手に皆賞賛してくれるわ」

「……じゃあそれが間違いだって思った時は？」

「さつきからうるさいなあ。しらばっくれればいいでしょ？間違いなんて認めたら舐められるわ。オバサン、センスがある様には思えないけど、まあ折角だからその座と知名度、アタシがもらってあげるわ！」
「かかれ！」と号令をあげると取り巻きの違法ビルダー達が一斉にサキ達に飛びかかる。

「くっ！戦おうにもこんな状態じゃ！」とナナ、対照的にサキは冷静だ。

「アナタ達、そこで休んでなさい」

「デステイニーが前に出る。」

「何を言うの！アタシだって頑張れば戦え「巻きまこまれるわよ！」

サキがナナの言葉を遮るとデステイニーの体がぐぐぐ……つと強張る。

「さあデステイニー…… 吼 え な さ い !!!」

直後、解き放つように間接各部から青白い炎が噴き出した。

「オオオオツ!!!」

周囲を震撼させる程の咆哮を上げる様な動作と音をデステイニーが上げる。アイ達はそれを見て言葉を失った。

「まだ上の形態があつたつて言うのか?！」

「ナイトロシステム……!」

アイが呟くと、バトル中のデステイニーは爆発的な勢いで飛び出す!そして右足に青い炎を纏わせると、それを巨大に、何キロもの長さに燃え上がらせる!そのまま勢いよく回し蹴りの動作で違法ビルダー達を薙ぎ払う。

「なんだこれはああ!!」「ひ! 姫ええ!!」

蹴りの勢いは嵐の雲をも薙ぎ払う。一斉に雲は晴れて月夜の明かりがデステイニーを照らした。その姿はまるで月下の悪魔。

「う! 嘘! 嘘よ! なんてあんなモードが!」

「女には隠し事は多い物よ?」

真正面から迫るデステイニー、ブリュンヒルデは頭部のビーム砲で狙い撃つが。デステイニーはそれを意にも介さず突っ込んでいく。

「ひとつ言っておくわ。あなたには私の様なカリスマにはなれない」

「何を!」

「踊らされてるだけだって言ってるのよ。自分で工夫もできない。努力もしない。自分で非も認めない。自分が好きだって表現も表せない!」

「アタシは! アタシは!! 踊らせる側の人間だあつ!」

「もらっただけのデータに乗ってるアナタが言う資格はないわ」

そのままデステイニーはブリュンヒルデを衝撃で天高く弾き飛ばす。そのままデステイニーは飛び蹴りの体勢で、ブリュンヒルデ目掛けて飛び上がった。

「だから……一億年早い!!」

そのまま蹴り抜くと違法ビルダーは絶叫。そしてブリュンヒルデは爆散。その衝撃は蹴りにも関わらず本体丸ごと消し飛ばす威力

だった。

「たった一体で……凄い……」

アイの感嘆の声、それは他に観戦していた全員も同じ感想だった。「流星ですお姉様。それでこそカリスマと呼ばれたお人……」

見とれるツボミ。同様にツチヤ達もその戦いに衝撃を感じていた。

「……！」

特にソウイチにとってそれはひときわ強い衝撃だ。何も言葉が出ない。言いたい事はいくらでもあるのに、

———すげえ……。こいつらが惚れるわけだ……。でも俺は………俺……このままでいいのか？———

そしてソウイチの胸中にある想いが芽生える。

そしてそのままバトルは終わりを迎えた。あの後ナナもあっさりやられ、勝利はサキの物となった。

「お姉様！お見事です！これで女王の二つ名はお姉様の物ですね！」
いつも仏頂面のツボミが爛々と輝く笑顔で駆け寄った。

「これが私の実力よ。私が一番強いのは当然だから、気を落とさないで欲しいわ。戦ってみて思ったけど、あなた達のセンスは悪くないもつと強くなれるでしょうね」

さつきまでの態度とはかけ離れた。アイ達にとっては意外に感じた慰めの言葉だ。サキのそれは年上の大人としての表情だった。

「……あんなの見せられたら自信も無くすわよ」

「皆そうやって這い上がる物よ。まあ最も、今のままでは全国へは通用は難しいでしょうけどね」

「だったら!!俺を！俺達を弟子にして下さい!!!」

一際大きな声でその言葉を発したのは……

「ソウイチ君？」

「あなたの実力！感動しました！悔しいけど俺達の実力ではあなたに適わない！学ばせてほしいんです！あなたから!!」

必死すぎる表情だ。『これを逃してはいけない』その心情が伝わってくるようだ。

「ガキ！失礼な奴だな！お姉様にそんな凶々しい口を！」あら、良いわよ」

あまりにもあつさりサキは承諾した。「へ？ちよ、お姉様？」と慌てるツボミ。周りの親衛隊にもどよめきが走る。

「いいじゃない。丁度この街には暫く滞在する予定だったし、私のファンが増えたって事でしよう？」

「え？まあ……」とツボミはどもる。

「それに……なんか興味あるのよね。あの子」

バイアランのキックを思い出しながらサキは言う。

「お！お姉様?!そんな！」

この世の終わりとばかりの衝撃を受けるツボミ。

「全然そう言う意味じゃないわよ！むしろ……なんか似てるのよね。あの血気盛んな所がツボミ、あなたに」

予期せぬ言葉にツボミが固まった。

「!?な！何を言ってるんですか！あんなガキが私に!!」

「ああ……なんかそれ解る……」とモエ。

「えへへ、じゃあよろしくねアサダ君」とナエが親睦を深めようと寄ってくる。

「お！お前らああ！」予想と全く違う状況にツボミは声を荒げた。

「で、あなた達はどうするの？」とサキはアイ達の判断を仰ぐ。

チームI・B全員がそれに関して話し合う。確かにサキは凄いと感じたアイ達だが、弟子入りの申請までは頭になかった。

「ちよつと！どうすんのよ！こんな展開になるとは思わなかったわよ！」

「確かにアサダ君の気持ちも解るけど……」

「あの人の技術が盗めるならそれもいいだろうけど……」

「あー確かにアタシも劇的に強くなれるかも」

「ハジメさん！あなたワタクシの指導のどこが不満だって言いますの!!」

「……すいません。少し考えさせて下さい」と話し合いが終わらない内にツチャが言う。「え？ツチャさん?!」と彼の行動にアイ達は納得

がいかない。

「あら失礼ね。まあ一晩位ならいいわ。早く答えは出してね」

そして帰り道、アイ達は近所のガンプラバトルコーナーのあるゲームセンターに場所を移し、話し合いを続ける。

「どうしたんですかツチャさん。あれは流石に失礼じゃ……」

コーナーの一角、丸テーブルに座りながらアイはツチャに問いかけた。

「解ってる。だけどソウイチは必死なんだ。あいつ一人で、俺達を気にしないで鍛錬出来るなら、一人で集中させた方がいいかもしれないって思ってる」

ソウイチの悩んでる姿、バトルの時の爆発的な力を思い出しながらツチャは言った。

「ちよつと部の悪い賭けじゃないですかツチャさん？周りは彼女の親衛隊で一杯だぞ。新人いびりでもあったら逆効果になりかねないよ」
「まあ、勘が混じってるな確かに。自分でもこれで良い判断したとは思いつらい」

「でもソウイチ君も思い切ったよね。ヘタすりやチームI・Bごとあのサキって人の下請けになりかねないよ」

「それだけ必死って事なんでしょ……」タカコとムツミもソウイチの判断には驚いたようだ。

「鍛錬したいのはアタシだって同じよ。特にあのツボミって奴は姑みたくないびりしそうで心配だわ。アサダの味方も兼ねてアタシもサキって人の弟子入りに……」

「ちよつとハジメさん！アナタはワタクシが強くしますのよ！」とサツマがナナに食って掛かろうとする。その時だった。

「サキさんは、ツボミちゃんはその事をする人間じゃないから大丈夫だよ」

聞き慣れない声が出た。声のする方へ向くと一人の若い男性が出た。

「あなたは？」

「僕はアスメ・シンゴ、サキさんのチームメイトだよ」

笑いかけるシンゴと名乗る青年。そこそこ美形と言つていい、整つた顔立ちではあるが、どうにも特徴がない。

「え!? あなたが?! でもなんか地味ですね……あ」

と口にした瞬間。アイは慌てて口を押える。つい思つた事が出てしまった。

「ハハ……よく言われるよ。でも大丈夫。サキさんがああやって了承するつていうのは珍しいよ。蔑ろにする事はないから安心してほしいな」

まあスパルタになるだろうけどね。とシンゴは付け加える。

「ん? あの、お兄さんもあのサキつて人のチームメイトなんですよね!」とナナが食いつく。「うん、そうだよ」と答えるシンゴ。

「だったらアタシ達の指導。あなたにお願い出来ませんか?」

突然のナナの申し出に全員が「ハ?!」という表情だった。

「だってあの人のチームメイトだったら凄い実力だつて事でしょ? アサダの奴はサキさんに任せてアタシ達は」

「そうはいきませんわ!!」とサツマが遮る。

「ハジメさんはワタクシが強くなります! 例えサキさんの仲間だとしても部外者は引つ込んでいて頂きたいですわ!!」

「えーイモエ。いいでしょ別にー」

「ジェラシーだねもっちゃん」

「言い出したら聞かないんだから」

「黙つてなさいまし!!」とサツマはチョコとスグリに荒ぶる。

「考え直しなさいハジメさん! 別にこの人に頼らなくても!」

「……ねえサツマ、アンタは気楽だよ。もう全国決まってるんだから……」

急にナナの表情が曇りだす。我慢していたものが噴き出したようだった。

「え?」ナナの変化に思わず強張るサツマ。

「でもアタシは違う……アイやアンタみたいな実力なんてない。アタシには人に頼つて教えてもらうしかない……。アタシだつて、この人

やサキって人に頼れるチャンスがあるなら、賭けてみたいのよ。自分に……」

「ハジメさん……ごめんなさい……」言い出したら聞かない。自分の悪い癖がまた出たなとサツマは思いながら頭を下げた。

「ですが、ハジメさんの師匠となるべき方ですわ。半端な実力では話になりません。あなたの実力、ワタクシが見定めさせてもらいます。アスメ・シンゴさんと言いましたわね！タイマンしてもらいますわよ！」

そう言つてサツマはイーゼスを取り出す。

「そう。解つたよ！ビルダーとして受けて立つ！」

——五分後——

「あ……有り得ませんわ……ミシマ・サキ並の実力者が……こんな所にも……」

サツマは信じられないという表情で自機のイーゼスを持ちながらうなだれていた。結果はサツマの惨敗だった。シンゴの機体はビギニングガンダムD。ビギニングガンダムのバリエーション機だ。紺色が主体で従来のビギニングより四角いフォルム。従来のガンダムに近いシルエツトになっている。

高速移動で圧倒しようとしたイーゼスは、簡単に攻撃を読まれて完封だった。

「く！悔しいですがあなたがハジメさんの師匠としてふさわしいという事ですわね！」

「わあ！よろしくお願いします！師匠！」

「なんか……ぐいぐい話進めてるねナナ……」とムツミ。

「ナナさんにとつてもチャンスだっと思ってたんでしよう」とミドリが続いた。

しかしこのナナ達の態度は……シンゴという男がギャルゲー主人公並に無個性で影が薄いので、ナナ達が自然と話を進める形になってしまっている事は、誰も気づかなかつた。

——うーん。師匠かあ——

そう呼ばれる事に内心嬉しくなるシンゴ、サキさんに褒めてもらえ

るかな。と淡い思いをはせる。

——師匠……か——

シンゴとは別にツチャもまた、ナナを見ながら少し考え込む。

「僕達も彼に教えてもらいますかツチャさん？」とそんなツチャにヒロが訪ねる。

「……いや、今思ったんだが、俺の方は昔の友達を訪ねてみようと思う」

「昔の友達？チーム『ライオンハート』の人達ですか？」

ライオンハート……かつてのツチャ達の仲間が立ち上げたチーム。

「ああ。あそこにいた俺の友達、ジロウの奴が『凄く強い師匠に教えてもらってる』って言ってたのを思い出した。俺の方はそっちに会ってみようと思うんだ」

「でも確か、たまにしか会えないって言ってたじゃないですか」とアイが続く。

「その時はその時だな。そんなに時間はかからないだろうし」

「そうですね。じゃあ僕もツチャさんについていきますよ。何せ相手はボクの仲間達『エデン』を倒した人、その師匠ですから」

「ああ、構わないよ」

「皆バラバラになっちゃいますね。じゃあ特に決まってるけど私は……」とアイ。

「……部長達と合流して、ノドカに会いに行つてこようと思います。決勝の前に話がしたいです。バトルの前に話で解決できるならしたいですよ」

「そうか……じゃあ皆、一度分かれるな」

「ワ！ワタクシもハジメさんと一緒にいますわ！」

「もっちゃん、今日は日が暮れるから駄目だよ」とチヨコ。

「ぐ……でしたら明日お泊りセット持ってハジメさんの家に行きますからね!!」

「なんでアタシの家に泊まる事前提?!」

とまあこうして一度全員が離れてそれぞれの場所で自分を見つめなおす事となった。……後に、こういった行動を取った事は運命だっ

たかもしれない。そうアイ達は思うことになる。何故ならこの出来事がなければ、彼女達が最強のビルダーになる事は、なかったのかもしれないのだから……

搭乗公式キャラクター

『ミシマ・サキ』

登場作品『模型戦士ガンプラビルダーズD』

金髪と白い肌、黒いゴスロリとボンテージという非常に派手なファッションの持ち主。ガンプラに対して『かつこいいファッション』と捕えており、一切の妥協を許さない。

一方で十歳近く年の離れた甥っ子と口喧嘩が絶えないという子供っぽい面も、作中ではヒロイン兼、師匠兼、ライバル兼、ラスボス兼、真の主人公（全て主観ですw）と多彩な役柄を演じていた。……他のキャラが地味すぎるからとかでは無い……きつと。

なお後に『ガンダムビルドファイターズA』でもそっくりさんが登場。ユウキ・タツヤとバトルして負けてました。

『アスメ・シンゴ』

登場作品『模型戦士ガンプラビルダーズD』

ビルダーズDの主人公。美形ではあるが覇気が無い為モテないとの事。向かいに住んでいたサキに「あなたとイイコトしたいな」とガンプラに誘われビルダーとなった。……ぶっちゃけキャラが薄い。後に『ガンダムビルドファイターズA』でもそっくりさんが登場。サキのそっくりさんの専属ビルダーとなっていた。……それでいいのか主人公。

第55話 「炎のガンプラビルダー」(Gアザゼル登場)

「僕はあつた事無い人ですけど、どういふ人なんですか。ジロウさんって」

時刻は午前中、国道を走るツチャの軽自動車。助手席に乗ったヒロは問いかける。向かう先はサイトウ・ジロウの拠点にしている模型店『ミスルトウ』。運転中のツチャはヒロを見ずに答える。

「一言で言えば天邪鬼。だな。ぶっきらぼうに見えて繊細、無関心に見えて面倒見がいい。そしてものぐさでやる気がない風に見えて熱血漢で曲がった事が嫌い」

「だからこそ、今は仕事で離れたコンドウさんと仲が良かったんでしようね」

「そうだな。俺よりも付き合いは長い奴だよ」

サイトウ・ジロウ、チーム『ライオン・ハート』所属でアイ達と戦った男。「強い師匠がいる」という発言が気にかかったツチャ達は、彼のホームグラウンドの店に連絡、そして向かっていった。

「師匠には連絡をつけるって言っていたけど、どうなるかな」
「ガンプラ十箇条。か」

それはジロウと戦った際に発言した格言、師匠の受け売りとの事だ。ヒロの仲間を圧倒する実力者の師匠。一体どういう人なのだろう。とヒロは不安と期待を胸に秘めていた。

そしてミスルトウに到着する二人。出迎えたのは長身の青年ジロウと、メガネをかけた少年シンパチの二人だ。

「よう、来たか」

「こんにちは」

ミスルトウという模型店は、二階建ての大きいかなり古い作りの建物だった。汚い、というわけではないが、くすんだ色合いは高度経済成長期に作られた物、若干の昭和の面影を残していた建物だ。

「ここが今のホームグラウンドか」

「まあな。入れよ。皆が待っているぜ」

店に入ると、ある事にツチャは気づいた。揃えは普通の店ではあるのだが、どうにも客の年齢層が……。

「……気のせいかな子供が多いな」

「よく解つたな。避難所みてえなもんだよここは」

ジロウがそう言うのと、子供達とすれ違う。

「あ！ジロウさんこんちにはー」

「おう」

「今度僕の作ったガン普拉見てよー」

「後でな」

「父ちゃんのコンビニの廃棄処分品持ってきたよジロさん」

「マジか!!後で頼むぜ!」

と、すれ違うたび、もしくは遠くでジロウを見かけた際に声をかけてくる子供が多かった。

「好かれてるなお前」

「勝手にあいつらが話しかけてくるだけだ」

「後、相変わらず貧乏だなお前」

「ほっとけ!」

「あの、避難所っていうのは?」

話しかけるヒロにジロウは気を取り直し、向き直る。

「違法ビルダー達に出入りしてるゲーセンや模型店を荒らされたり、乗っ取られて逃げてきた奴らだよ。あいつらは」

「……そうなのか」

「新世代ビルダーだか何だか知らねえが、結局やつてる事はマウンティングだ。だから俺は違法ビルダーを許せねえ。お前の友達、セリトもな」

「解つてる。だからこそ、力をつけたい」

「そうだな。二階に来な。面白いもんが見れるぜ」

そして二階に上がるツチャ達、二階はガン普拉バトルコーナーになっていた。広さ以外はガリア大陸と変わらない。観戦モニターを見ると二体のガン普拉が戦ってるのが見えた。片方はよく知ってる

機体だ。

「あれは……ケン君のビルドスペリオルか」

ケン、アイからガンプラを学び、そしてアイを越えるべくチームライオン・ハートに移籍した男。相手は見たことのない機体だ。ジャイオンの翼を持ち、スローネやアルケイのパーツが組み込まれた、手の長い紫のガンプラだ。

「ヒロ！待ってたよ！」

「ようヒロ！会いたかったぜ！」

と、観戦していた女性と、大柄な白人男性がヒロ達に気付くと素早く寄ってくる。ヒロの元チームメイト。ヨウコとゼデルだ。

「あれ二人とも！どうしてここに!？」

それはヒロを大いに驚かせた。

「色々あってな。今はここで厄介になってるよ」

「リーダーのマスミの奴は？」

「あれを見てみればわかるわ」

そう言つてヨウコは観戦モニターを指し示す。

「このプラフスキーウイングのスピードについて来れるか!!」

ケンのスペリオルが高速で紫の機体に迫る。しかし紫の機体は消えたと思いきやスペリオルの背後に移動。その機動力はスペリオルを上回る。「早い！」ツチャ達もケンもそう思った。

「甘いな！」

紫の機体が翼先端からのビームサーベルで切りかかろうとする。スペリオルも翼を盾にビームサーベルを防ごうとする。が、ビームサーベルはウイングをたやすく貫通。スペリオルは右腕ごと切り裂かれる。これによりライフルは破損。

「うわあっ！」

しかしスペリオルもこのまま黙ってはいない。拳に光を宿す。ビルドナツクルだ。

「負けてっ！たまるかあ!!」

そのまま左腕での必殺ブロー、しかし紫の機体は翼で全身を包む様にして防御、まるで両手が包み込んだような防御形態だった。ナツクルが効かない。

「なっー!」

「今度はこちらの拳だ!!」

そう言つて紫の機体はビルダーの叫びに呼応するかののように輝きだす。赤い光をまとう。

「まだだっ!俺の魂を吸え!スペリオルウツ!!」

ケンがそう叫ぶとスペリオルの拳は一層強く輝く、

「燃やせ!燃やせ!燃やせええっ!!」

更に輝くビルドナツクル。自分の気持ちにしても、時間にしてもこれが限界だ。後はぶつけるのみ。紫の機体も防御形態のまま突っ込んでくる。

「うわああっ!!」

お互いぶつかり合う二体。光の強さはスペリオルの方が上だ。しかし……、

「……破あっ!!」

紫の機体の方が力を込めると、こちらの方が強く輝いた。そしてそのままスペリオルを圧倒し、砕く。

「こんな!こんな!!」

「ボクだって!気持ちなら負けない!!ニヒトオオツツ!!ナツクルツツ!!!」

そのまま砕かれて爆散するスペリオル。紫の機体からの声、ヒロはそれに聞き覚えがあった。

「眠れ。真紅の光の中で……」

「……あの声、痛い言い回しは……」

「クツソ!負けたああ!!」

Gポッドから出てくるや否や悔しそうにするケン。

「おいおいケン、悔しいのは解るけどでかい声をだすなよ」

周りの迷惑だろ。とジロウが注意する。

「ジロさん。そらそうですけど、今の自分の全てを投げ打ったんですよ。それがことごとく通用しないなんて」

「だったらあいつみたいに、また頑張ればいいだろ」

そう言うのとGポッドから黒いパイロットスーツを着た青年が出てきた。ヘルメットを外すとヒロのよく知った顔が現れる。

「皆の協力でボクのGアザゼルは完成したからね。ケン君の協力もあってこそだよ」

リーダーのマスミだった。

「情けはよして下さい……」

「いや、そういうつもりじゃ……。君がもっと強くなりたならボクは惜しみなく協力するよ」

「それ、結局上から目線ですね」

むくれながらケンがそう言うとその男、マスミは発言が裏目に出たと困惑する。

「す、すまない……」

「フツ。アハハ！冗談ですよマスミさん！言ったからには協力はしてもらいますよ！何はともあれGアザゼルの完成おめでとごさいます！」

「っ！うん！」

「マスミ？マスミじゃないか！」

ヒロは駆け寄る。フクオウジ・マスミ。かつてのヒロの仲間である。チームメイトの一人、レムが違法ビルダーとなってしまう。ヒロはアイ達の仲間として、マスミは自分のチームで、二手に分かれてチームメイト、フジミヤ・レムを追っていたのだが、予選でマスミ達は、ジロウのチームに敗退したのだった。

「ヒロ！来てたのか！」

「どうしてここに?!そしてあの機体は?」

「順を追って話すよ」

「敗者復活戦にはぼくを加えてくれないか!？」

先日、選手権の県内予選でサイトウさん達に負けた後、ぼくは彼に

頼み込んだ。

「お前は！……何考えてんだよお前。負かした相手に言うセリフか？」

当初の反応は、当然ながらサイトウさんは呆れていた。当然だな。逆の立場なら、ぼくも似た対応をしていたらう。

「相応の実力ならある！絶対に皆に損はさせない！」

頼む！とぼくはその場で土下座をした。後ろで見ていたチームメイトのゼデルとヨウコも驚いていた。そこまでするか?!と。

「おい。男がそんな情けない真似すんな。なんでそこまでするんだよお前」

「……約束と意地だ。幼馴染がぼくの所為で違法ビルダーになった。原因がぼくにあるのなら、解決はぼくがしなければならいんだ！」

「その幼馴染は全国に行きや会えるってか」

「そうです。一時期、周りにばれたくないと思っていたが、それが原因の拡大につながってしまった。自分の全てを投げ打ってでも止めたいんだ！」

そうだ。情けない事に、レムのスランプ脱出の為に、勝つ感覚を味合わせようと、ぼくは違法ビルダーのデータをレムに手渡した。その所為でレムは違法ビルダーのテストプレイヤーとなってしまうた。

もしかしたらレムの件がなければ、ここまで大きな問題にはならなかったかもしれない。というのがマスマミの心理にあった。

「口に出したとたんに言い訳臭くなるな」

「う……で、でも！」

「……ま、いや。好きにしろよ」

ぶつきらぼうにも答えるサイトウさんだった。シンパチ君も「またか」と呆れながら笑っていた。

「お人よしですよねえ。ジロさんって、あ、僕シンパチって言います。よろしく願います。お姉さん」

そう言って声をかけるシンパチ君、しかし声をかけたのはヨウコの方だった。

「いや、声をかけるのは向こうだから……」

「男はやだなあ」

となんやかんやあつてシンパチ君はヨウコにだけ嬉しそうに、そしてぼく達にはイヤイヤこのミスルトウの住所を教えてくれた。そこでこの皆、そして彼らの師匠の協力で、このGアザゼルを完全に仕上げる事が出来たんだ。

——
そう言つてマスミは紫のガンプラを見せる。さつきバトルでスペリオルを圧倒した機体だ。

「お前の新しい機体か。凄かったな」

今までと桁違い、というのがヒロ達の感想だ。

「元々作りこんでいた奴だったんだけどね。皆の、特に師匠の監修で予想以上の物になったよ」

「さつきから師匠つて言ってるけど、誰なんだい？」

「それは……あの人だよ」

マスミが示すとその人はそこにいた。バトルに負けたケンと話をしていた。マスミが自分を呼んでると気づくや近寄ってくる。

「？呼んだかい？」

そう言つて現れたのは髪の毛の赤い青年だ。年はヒロ達に近そうだが、予想以上に若い。というのがヒロ達の感想だった。年齢はヒロと近そうだ。

「師匠！紹介するよ。この人がぼくの、いや、ジロウさん達含めての師匠『ネツキ・タケル』さんだ」

炎の様に逆立つ髪、若さと熱さを併せ持ったような青年だった。

「そんなかしこまって紹介される様な人間じゃないよ俺は、それにしても……」

抑え込んでいた物を解き放つように、タケルと呼ばれた青年は爛々と目を輝かせてGアザゼルを見た。

「いいよーさつきのバトル！そしてこのガンプラ！凄くいい！」

子供の様に目を輝かせるタケルに戸惑うヒロ達、

「お互いの心を最大限に燃やしたバトル！俺の心までがんが燃え上ってきたぜ!!」

「俺は負けちゃいましたけどね」とついてきたケンがぼやく。

「何言ってるんだよ。結果じゃない！あんな豪快な光！ケン！君がそれだけ大きく燃え上がらせたって事じゃないか！今回はまあ性能差かもしれないが、気持ちは負けちゃいない！もし君がもっと強くなりたいて言うなら！俺は惜しみなく協力するぜ！」

ケンもそれに「はい！」と頷く。豪快な人だな。というのがツチャ達の感想だった。

「さてと、……チーム『I・B』の人達ですね。噂は聞いていますよ。違法ビルダー達から目を付けられてるって」

打って変わって真剣な表情となるタケル。

「ええ、といってもリーダーは来れなかつたんですけど。って俺達の事ご存じなんですか？」

「違法ビルダーの奴らからはお尋ね者みたいですからね。その中でもリーダーのヤタテ・アイって人が特に目を付けられてるみたいだけど、そうか、来れないのはちよつと残念だな」

「強くて真っ直ぐな女の子ですよ」とマスマミ。

「ちよつと顔が地味ですけどそれがいいんですよ」とシンパチ、当然ジロウが「黙れ」と止める。

「しかし……目を付けられてるというのはあまり実感してませんが、やはりですか。どういうわけか市場で出回ってない試作品まで投入してるみたいで」

ツチャは今までの自分達を襲ってきた違法ビルダーを思い出す。

「それでも君たちは奴らを退けて来たんだろう？」

「はい。しかし……妙な感じですね。何故そんな物まで使って自分達を襲うのか。心当たりはありませんよ」

——……考えてみたらおかしい。違法ビルダーはヒロ君や俺に関わる人が多い。そして前日のヤタテさんの幼馴染、ユミヒラさんが違法ビルダーに味方した件。……全てが俺達の周りに集中してる？

……何故だ？——

タケルと話をしながらツチャはそんな事を考える。

「まあそれはそうと、俺も何故呼ばれたかは理解はしてるよ。俺に出来る事ならなんでも聞いてくれ」

そう持ちかけるタケル。快く承諾しようとするツチャ。その時だった。

「その前に、ヒロ、そしてツチャさん、ぼくとバトルをしてくれないか？」

マスミが提案をする。

「マスミ？」

「このGアザゼルは予選敗退の、敗者復活戦用に作り上げたぼくのとっておきなんだ。そしてまだ十分なテストもしていない。君たちと戦ってこいつを更に強くしたい」

「マスミ、別に今でなくとも」とヒロ。

「いやヒロ、今でなければいけないんだ。お互いどちらがレムを助けるか、ハッキリさせたい」

「お前……？」

レムという名前が出たとたんにマスミの表情がぎらつく。ライブルへの意識その物だった。

「わかった。存分に二人とも戦うと良い」

それを後押ししたのはタケルの方だった。

「タケルさん？」

「ただし一対一のバトルではなく、ある場所へ乱入した方がいいと思っうぜ」

更にそれに割って入るのはジロウだった。突然の提案に疑問に思っうヒロ達。

「ジロウさん？何故そんな事を？」

タケルは疑問に思いながらも、ジロウはそれに真剣な表情で答えた。

「さつき店長からの連絡だ。ある店の初心者用イベント大会で、違法ビルダーの集団が初心者狩りをしてるって匿名で連絡があったぜ……！」

そしてバトルが……と行きたいが、時間を少し巻き戻して、視点をアイ達の方に戻してみよう。

「ここに来るのも懐かしいな」

場所はアイの生まれ故郷、『玄札木市』その駅前のベンチだ。ここがアイと先輩たちとの待ち合わせ場所だった。

——思えば自分は馬鹿な事をしてるのかもしれない——

アイはそう思った。このまま会えなくなってしまうとノドカとは決勝で会える。しかしアイはその前に会って話で解決して、スッキリした気分で決勝に臨みたかったのが本音だ。

だがそうはいかなかった。というべきだろうか。実は今日、アイは既にノドカから呼び出しを受けていたからだ。

「難しい顔をしているねえ。そういう顔もまたそそるよ」

「っ!」

考えていると、唐突な発言。そして背後から抱き付く女の手、見覚えのある手だ。

「副部長!」

アイは叫ぶ。副部長『タテノ・ユメカ』（盾野夢佳）、前髪ぱつっんの長髪スレンダー、セクハラ魔人やら魔女やらの異名がある。

「すうー。あー懐かしい匂いだあ」

抱き付いたままアイの匂いを吸うユメカ。変態だー!!
「ひいひい!!人前なのに匂いを嗅がないで下さい!!」

精悍さと気怠さが同居した顔でとんでもない行動をするユメカ。周りの人がアイを見ているが、ユメカは気にも止めない。

「よく人前でそう言う事が出来るよなユメカア?」

そんなユメカを一言で制止させる男が一人、『ケンモチ・ノゾム』（剣持希望）、太っていて短髪、今の笑顔はいつもの穏やかそうな表情だが、今のユメカに対しては鬼の様なオーラを出していた。これも変わらずだなとアイは取り乱しつつも思った。

「う……やだなあノゾム、可愛いジョークじゃないか」

ユメカは彼にだけは頭が上がらない。そのまま渋々と手を放す。

「あー、相変わらずですね二人とも」

アイは変わらないなど懐かしく思いながらも、冷や汗をかいていた。

「それで結局、ノドカには会えたんですか？」

「いや、残念ながらまだだよ」

「そうですか」

やっぱり、と思いつつも、残念に思うアイ。

「しかし、君の方は連絡で会う算段があると言っていたね。あれはどういう事だい？」

「……昨日、皆と別れた後、部長達に連絡取ろうとした時でした」

ユメカの発言からアイは話し始める。昨日、アイが家に帰った後に、アイのスマホに連絡が来た。相手はノドカだ。

「何てあったんだ？」

「……今日、イングレッツサで待っているって」

かつてアイの出入りしていた総合店、『イングレッツサ』五階建てのビルそのものが店だ。

「イングレッツサか。……大丈夫かな」

含みのある部長の発言に疑問に思うアイ達。

「何かあるんですか？」

「今日のイングレッツサ、初心者用のガンプラバトル大会だぞ」

——
そうこうしてる内にイングレッツサについた。ノドカを止める。そう思いながらも、この場所に懐かしさを感じるアイ。いつも自分がノドカと遊んでいた場所だ。

感傷に浸る間もなく、模型店のある階層にエスカレーターで昇る。階層の一部を使用したガンプラバトルのスペース。そこにつくと……。

「何これ……」

状況は凄惨の一言だった。モニター越しの戦場では、初心者達のガンプラは違法ビルダーに狩られ、蹂躪されていた。楽しい大会のはず

が、周りにいるのは意気消沈したり泣いてる子供達。狩られた初心者達だ。

「サーバーにハッキングでもかけたのかアイツら！」

怒りの声をあげるノゾム。ふと観戦モニターを見覚えのある機体が横ぎった。ノドカのガンダムレギルスだ。

「ノドカ！」

アイが怒りながらモニターの機体へ……ノドカに話しかける。

「……よう、来たか」

淡々と答えるノドカ。来るのを待ってたと言わんばかりの対応だった。

「何を……！何を考えてるのあなたは!!」

「みりやわかんذار。今のアタシは悪党だ」

「……最低になつたなお前」

ノゾムが怒りの表情でレギルスを睨み付ける。

「全くだね。体はそんなに最高なのに」

「言つてろよ二人とも。やっぱりお前がいてくれなきや始まらない。さあ、やろうぜ」

そう言つてノドカはGポッドに入る様に促す。

「ノドカ……アイツの目を覚まさせる！」

「俺達も行くぞユメカ！」

「いわれずとも！皆！よく耐えたな！後はお姉さん達に任せておけ!!」

そう言つて全員がGポッドに入りガンプラをセット、そしてフィールドに乱入した。

フィールド場所は夜間の荒野。ガンダムXで初めてサテライトキャノン撃つた場所だ。満月に照らされており、全体的に見通しがよく初心者が遊ぶには向いているだろう。

「ノドカ！どこにいるの！」

AGE―3Eに乗ったアイが叫ぶ。ここまでノドカに対して怒りを覚えたのはいつ以来だろう。地面に降り立とうとするも、歓迎する

かのような射撃の雨だ。(撃ってるのは地上からだが)。

見慣れた違法ビルダーの機体群。全てがアイのAGE-3Eに向けられている。

「うええ！何なのあの数！」

いつもは無人の随伴期ふくめて数十機程度だが、今回はその十倍以上は数がある。

「数だけは出しちゃってまあ！」

アイはGNソードIIを向けてフィールドを持たない機体から迎撃をしていく。その背後からネフィリムガンダムがクロードで掴みかかってきた。

「浅知恵を！」

そう言つて振り向きざまにネフィリムを切断破壊。そのまま違法ビルダーの密集した場所へ降り立ち、周囲の機体を回転しながら切り裂いた。

「どこだあつ！ノドカツツ!!」

「クツクツク！ノドカ、ノドカ、ね。有名ビルダーもヘタレだな」

「ツ！」

声のした方を向くと一際大きい機体が見えた。違法ビルダーの四本足の機体。ガンダムフリストだ。

「その機体は！うんざりするよ。似たような機体ばかりで」

「そう腐るなよ。折角会えたんだからな。それより見ろよ」

違法ビルダーが場所を示すと、二機のネフィリムがそれぞれのクローに、初心者機体を掴んでるのが見えた。初心者機体は大きく破損しており反撃する力もなさそうだ。

「動くなよ？少しでも動けばあいつらを潰す」

「人質のつもり？最低だね」

「その通りだ。だがお前さんも正義の味方のつもりなら俺達の言う事は素直に聞くべきじゃあないのか？」

「うん、無駄だと思うよ」

アイがそう言った瞬間。ネフィリムのクロードが切断されて初心者機体は投げ出される。何が起きたと困惑する違法ビルダー。と、一

機のガンダムが着地する。ビームソードで居合の構えを取ったゴツドガンダムだ。

「不用心だな！敵がアイちゃんだけと思ったか！」

ノゾムの機体だ。クローから解放された初心者の機体を抱えるとその場から一気に離れる。ゴツドガンダムを迎撃しようとする違法ビルダーだが、直後……

「石破!!天驚おおお拳んっつ!!」

真上からの叫びと共に、敵機は降ってきた巨大なエネルギー波に飲み込まれ消滅。その後降りてきたのはマスターガンダム。ユメカの機体だ。

「遅いですよ！二人とも！」

「ふっ。主役は遅れてやってくる物だよ」

「部長達かよ！お前らなんて呼んでねえよ！」

ノドカの声だ。直後、大型ビームがアイ達三人目掛けて飛んでくる。三人は難なくこれを回避。

「ノドカアア!!」

アイの絶叫、そして現れたのはガンダムレギルス。ノドカの機体だ。さっきのビームは胸のビームバスターだ。

「アイ、縁切りの試合だ。受けてくれよ！」

「ふぎけないですよ！今日は話し合いのつもりだったんだから！それを！」

「こんな事やったアタシを今更信じるってか！甘いんだよ！」

そう言つてノドカは再びビームバスターを撃つ。アイは回避するとレギルス目掛けて切りかかる。

「ノドカツ!!」

「チツ！部長達を揉みつぶしにしろ！アタシはアイをやる！」

そう言うとなんか新しい違法ビルダーの機体が更にオンラインで乱入してくる。今度は50mクラスのブリュンヒルデだ。

「まだ残りがあったのか！」

「おいおい！ヤタテ・アイの奴と戦わせてくれるんじゃないのか」

よ！」

ブリュンヒルデに乗った違法ビルダーが愚痴る。

「コイツはアタシの獲物だ！その試作品に乗れるだけでありがたいと思えー！」

ノドカは邪魔するなど言わんばかりの声で返すと、アイのAGE―3とぶつかり合う。

「チツ！まあいい。確かにこの機体をもらっただけでおつりは来るな。というわけで俺達と戦ってもらおうか」

そう言つてノドムとユメカに向き直る違法ビルダー。

「やれると思ってるのか？お前らごときにやられる俺達じゃないぜ」

「自分たちは新世代ビルダーとか言っておいて野蛮極まりないねえ」

対するノゾム達は余裕だ。

「関係ないね。俺達は元々ならず者のビルダーよ。こんな楽な方法で強くなれるなら乗るのが得つてなもんさ」

そういう事だ。と他の違法ビルダーも集まってくる。このまま数で押し切るつもりだろう。

「初心者を庇いながらになるけど、どっちが多く倒すか競争するかい？ユメカ」

「いいだろうノゾム。久しぶりに私も熱くなつてきt……ん？」

そう言つた時だった『挑戦者が乱入しました』というアナウンスが全員に流れる。また違法ビルダーかと身構える二人だが、今度は違つた。

「なんだ？AGE―3？ヤタテさんか？」

アツシマーが聞き覚えのある声を上げた。

「?!ツチャさん?!」

アイが答えると、アツシマーの両脇からウィングノヴァとGアザゼルが飛び出してくる。

「ヒロさんと！その機体は?!」

「アイちゃんか!?!ぼくだ！」

「マスキさん!?!どうして?!」

「話せば長くなるけど！ここの初心者狩りを阻止しに来た！」

三機が通常のビルダーと判断すると、違法ビルダー達は撃墜しようと撃つてくる。そうはさせるかと散会し回避。

「大した数だな！だがこのGアザゼルの慣らしにはもってこいだ！」

そう言うとマスマスはスペリオルを倒した時の様に全身を翼で包む。そして気合いと共に赤いエネルギーに包まれる。

「聞くがいい!!告死天使の羽音をツツ!!」

同様の技『ニヒト・ナックル』で一直線に突貫。その拳に触れた者、余波を受ける者は成す術もなく、ただ破壊されるのみ。

「そしてえっ!!」

胸部中心から一発の銃弾を撃ち込む。が着弾と同時にそれはブラックホールとなり、周囲の違法ビルダーの機体を吸い込み、押しつぶしていった。

「さあ！圧壊するがいい！」

阿鼻叫喚となる違法ビルダー達。

「マスマスの奴凄いな！だがボクも!!」

負けてられるかと言わんばかりにヒロもノヴァもバードモードに変形。その全身にエネルギーを纏い、低空飛行で密集地帯へと突っ込んだ。

「ノヴァアアツツ!!ストライクウウ!!!」

そのまま不死鳥の翼がなぎ倒す如く、進路上の敵をなぎ倒していく二機。その気迫はアイや部長達にも伝わっていた。

「凄い！なんて気迫だ！」

アツシマーに乗ったツチャヤが驚きの声を上げた。彼の方は一機ずつ確実に仕留めていくスタイルだった。そしてその衝撃を感じたのは部長達も同様だ。

「飛び入りと思いきや……これは凄いな」

「何を言ってるんだノゾム。私達も負けてられない！そうだろう?!」

「ああ！触発されるぜ！」

「奇遇だねえ！私もだよ！」

ゴッドガンダムとマスターガンダム。マスマシ達の熱気に充てられた様に、二機のガンダムが黄金の如く輝きだす。明鏡止水。ハイパー

「くっ！させるかあ!!」

AGE-3EのGNソードⅡを最大出力。ライザーソードの形態だ。正面に構えたGNソードⅡの間から超巨大なビームサーベルが発生。そのまま胞子ごと巻き込みレギルスに振り下ろす。

「なんだとおー！」

回避しようにも間に合わない。これまでかと目を瞑るノドカ。その時だった。

「しゃんとなさい。ノドカちゃん」

突如襲った射撃がアイのAGE3-Eを襲った。ライザーソードで無防備だったAGE-3Eは横っ腹に攻撃を受けて攻撃は中断される。

「うわっ！まだ敵が!？」

「助けに来たわよ」

撃ったのは遠隔操作射撃武器のファンネルだった。天から降臨するかのようにその主がゆっくり降りてきた。遠隔操作武器を多く装備したガツデス、その改造機だ。全身にif sユニットが輝き、頭部はガンダムタイプとなっている。珍しくサイズは通常のも物だ。

「久しぶりね。アイちゃん。そして皆」

まるで友達にでも会ったかのように気安い声で話しかける声、女性の声だ。その声はアイ達のチーム全員に向けられていた。そしてその声を、ヒロとマスミは忘れもしない……。何故ならそれは……。

「っ!!レム!!」

「フジミヤさん?!フジミヤ・レムさんなのか!？」

そう、スランプによって違法ビルダーへと身をやつし、ヒロ達のチームから離れていった女性ビルダー。レムだった。すぐさまレムのガツデスに向かって飛ぶマスミとヒロの機体。

「レム！何故ここにいる！」

「フジミヤさん！」

「二人とも、追いかけてきたんだ！嬉しい！」

そう言いつつも、対応はファンネルとファングの歓迎だった。二体とも回避と迎撃で迎え撃つ。

「質問に答えろおおっ!!」

ノヴァとアザゼル。背中合わせで回りながら大型ビームを撃ち、ファンネルらを落としていく二機に対して、レムは安心感を覚えた。「新入りのノドカちゃんがイタズラをしていたみたいだね。私が助けにきたの」

「新入りだつて?!身も心も違法ビルダーのつもりか!!」

「当然、私は悪女ですから」

悪びれる様子もなく答えるレム。以前と態度の変わったレムに二人は怒りを覚える。

「随分変わったねレムさん!そんな事をする人じゃなかったのに!」

「あなた達は変わらないんじゃない?未だに私を信じようとするのはお人よしにも程があるわよ!」

ファンネルとファンングを落とすとヒロ達はガツデスに切りかかる。それを手に持った槍で受け止めた。

「君がどうなろうと関係ないね!自分の信じたやり方で行くと決めた!」

「わお。ワイルドな人!」

そう言うレムは再びファンネルを射出。再生機能のあるこの機体はファンネルを撃ち落としてもすぐ元通りだ。その対応に二機は追われるため、その隙についてガツデスは離れ、レギルスに寄り添う。「ノドカちゃん。単独行動はやめなさいな。誰彼かまわず新世代ビルダー試作型のデータをばら撒いて」

「は!受けるわ!アンタが秩序ヅラすんな!」

「耳が痛いわね」

仲間にも関わらず、刺々しい対応のノドカ。苦笑するレムは自機の槍を天に掲げる。すると槍は強く輝きだす。それに呼応するかのように、破壊したはずの違法ビルダーの機体が見るみる再生し始めた。

「アインヘルヤルシステムって奴か!」

「そう!そして私のこの機体は、ガンダム・スクルドよ!覚えておいてね!いくわよノドカちゃん!」

「アタシに命令すんな!!」

そう言うとスクルドと名乗った機体はレギルスと一緒にアイ達に襲い掛かる。更に破壊したはずの違法ビルダー達は蘇り、一斉にアイ達に襲っていく。

「！まずいです！折角押してきたのこれじゃー！」半壊したAGE3—Eがツチャのアツシマーに抱えられながら叫んだ。

「ヤタテさん！大丈夫か!？」

「ツチャさん。ええ、どうやらフジミヤさん、手加減してくれたみたいですよ」

まだレムの心はそこまで離れては、堕ちてはいない。と伝えるかのように話すアイ。

「やっぱりフジミヤさんはまだ違法ビルダーになりきってないって事かな！」

「冗談！」

スクルドは再びファンネルとファングの連携でノヴァとアザゼルを追い詰めようとする。更にそれに他の違法ビルダー達も援護に加わる。

「ハハハ！無駄な努力ばかりする奴らだ！」

倒した違法ビルダーが復活した事により、また強気を露わにする。大柄なブリュンヒルデがGアザゼルをなぎ倒そうと腕の剣を振るう。

「なんだと！」

「あのレムって人、お前らの仲間らしいな！そしてノドカって奴も！そしてお前らはそいつらを助けようとしている！」

「それがどうした！」

「あいつらはもはや完全に俺達の側の人間だ！むしろそこから引きはがそうとするお前らの方が、自分勝手にエゴイズムだと思うがね！」

「……うんざりだなその問答！」

マスミは一切動じずに剣をかわずと先程のニヒトナツクルで打ち砕く。その場にいたアイ達には、その心理攻撃に一切の動揺は見られない。

「何!？」

「それ位で折れる意志ならとつくに折れてるんだよ!!」

ノヴァがビームサーベルでネフィリムに切りかかる。Iフィールドの死角部分を狙って切り裂いた。

「ぼく達はなあ！腹をくくった！間違ったら正すのが仲間ってなもんだ!!」

「間違いだとお！俺達が間違ってるんでもいいのかあ！」

『どう見たって間違ってるだろお!!』

ハモリながら敵を撃墜していく二人。

「フフ！余裕ね！でも甘いわ！」

再びアインヘルヤルシステムにより再生させようとするスクルド。またも再生していく違法ビルダー機。スクルドはブリュンヒルデ達の後方に隠れており、中々攻撃のチャンスが無い。

「チッコウも何度もやられると押し切られるな!!」

『だったら俺に任せろ!!』

その時だった。『挑戦者が乱入しました』というアナウンスの直後、巨大な火の玉がヒロ達の所へ突っ込んでくる。

「なんだ！あれは！」

「あれは！タケル師匠だ!!」

マスマミが言うのと火の玉の正体。赤い機体が姿を現す。ビギニングガンダムだ。しかし各部のif sユニットは丸い形をしており、全身に日の丸をつけたような印象がある。

「ネツキ・タケルさんの機体はビギニングJガンダムか！」

ヒロが興奮気味に叫ぶ。ビギニングJガンダム。バーニングJソードというロングソードを二本標準装備した接近戦仕様のビギニングガンダムだ。

「ノーマルに作ったただけなのにあの迫力と作りこみ。凄いな。かなりの職人氣質と見た」

「これはこれは……中々お目にかかれない人と会えたね……」

部長達も意外な大物ゲストに感嘆の声を上げた。

「ネツキ・タケルだど!?こりやすげえ！かの有名な炎のビルダーじゃねえか！奴を倒せば俺も有名人だ！」

「なんだと！俺にやらせろ！」

タケルの名前に違法ビルダー達も食いついてくる。タケルの名を知らないビルダーも、名を上げようとどんどん集まってきた。

「タケルさん！逃げて下さい！いくらなんでもあの数は！」

「……大丈夫……フウツ……」

タケルは違法ビルダーの攻撃の中、精神統一を行っていた。そんな中、最小限の動きで射撃を回避していく。

「へっ！たかが一機だ！近づいちゃえば！」

一機のマステマがビギニングJに切りかかった。その時だ。タケルの目がカツ！と見開かれる。そしてビギニングJはバーニングJソードでマステマを横に一閃。

「なっ！うわああっ!!」

マステマは全身火だるまになって燃えていく。と同時にバーニングソードからおびただしい炎が噴き出す。天に掲げるソードは夜を照らす。一気にステージ全体が照明の如く明るくなった。炎の長さは数十キロにも及んだ。

「ガンプラ十箇条！その一！ガンプラは火気厳禁!!」

全身に烈迫の気合いを込めるタケル。

「なんて炎だ！夜が昼に変わった！」

「？見ろ！違法ビルダーの機体が！」

その様子にもどうも違法ビルダー達の様子がおかしい。ビギニングJを見ながら動くことが無い。まるで恐怖しているかの様だ。

「なんだ!?!急に動きが悪いぞ！」

「スクルドが怯えている？あのビギニングの炎に!?!」

「その7！ガンプラを愛する者は千差万別!!全ての人がその資格を持つ！だが……外道に落ちたお前らにその資格はない!!」

タケルはそのまま炎の剣を横に振った。ハイパーバーニングモード、そしてこれが超ハイパーバーニングスラッシュだ。

「反省しろおおっつっ!!!!」

それは何百機もの違法ビルダーの機体を巻き込んで消し炭へと変えていく。

「なんだ！こんな！こんなああ!!!!」

—— 剣筋から炎……？まさか……!! ——

それを見ていたツチャに衝撃が走った。かつて彼の親友にして、チームリーダーのコンドウが体験したバトルの内容とそれは酷似していたからだ。

「以外……ねーこんな大物ゲストがいたなんて！」

今の一撃で完全に戦力をひっくり返された。こんな展開になるとは思わなかったレム。他に残ったのはノドカと僅かな違法ビルダーのみ、

「レムウウ!!」

感傷に浸る間も無く。マスミとヒロが追ってくる。

「性懲りもなく!!」

再生させようと槍を掲げるスクルド、しかしシステムを起動させる前にアザゼルがビッグアームを一つファンネルとして飛ばす。サーベルを発生させずに腕に衝突させて槍を飛ばした。

「あっ!!」

「レム!!待っていてくれ!ぼくは必ず全国へ行く!」

マスミの乗ったアザゼルが、

「僕もだ!そして君を!」

ヒロの乗ったノヴァが、

『必ず迎えに行く!!』

さっきのビギニングJからの魂に触発されてか、ノヴァが青く輝き、アザゼルが真紅に輝く。そして二機が背中合わせとなり、スクルドにノヴァストライクの要領で突撃をかける。それは最初に違法ビルダー達を薙ぎ払った時とは比較にならない光量だった。

「あなた達……待ってるから……」

レムはそう言うのと無防備で突撃を受け、そのまま消滅。それをノドカのレギルスは黙ってみていた。

「レム……？萎えた。もういいや」

「ノドカ?」

アイがレギルスと戦うべく剣を構える。がレギルスは戦意を喪失したかの様に構えを解いた。

「受けるわ。こんなアタシらが負けるの目に見えてるじゃん。お前との決着はやっぱり決勝の方がいいわ。というわけでアタシ帰るか」

「待って！ノドカ！」

アイが止めようとするも、レギルスは一瞬でその場からテレポートしたかの様にいなくなる。……そして残った違法ビルダー達も程無くして殲滅となった。これによりアイ達の、そしてマスミ達の勝利となった。

「ノドカ……！」

Gポッドから出てくるや否や、悔しさを露わにするアイ、初心者大会を襲う様な真似をするほどに堕ちてしまった彼女に対して、アイは複雑な感情を浮かべる。信じると誓ったはずなのに……。

「……残念だったな。アイ」

ユメカが話しかけてくる。彼女もわずかに申し訳なさそうな表情だった。

「ええ……」

「だが、信じるんだろう？」

とノゾムがユメカに続いて問いかけた。

「……もちろんですよ。……ここまでされるとちよつときついですけどね」

「幸せもんだな。ノドカは……だが馬鹿だ」

一方こちらはツチャ達の方だ。

「凄いバトルだった。あれがマスミと、タケルさんの力なのか！」

ヒロが感動の声を上げる。タケルの実力。それはヒロ達の予想を大きく上回っていた。

「当然だろ。師匠はな、『フロントム事変』を終結させた英雄なんだよ」「っ！やっぱり!!」

ビギニングフロントム事変、それは以前に行われた巨大なネットガン普拉バトルのイベントの事だ。しかし事前発表の無い抜き打ち

だった事、イベントでは片付かない禍々しさを感じた者もいる所為か、「あれはイベントではない」という噂もちらほらあった。コンドウ・ショウゴはかつてこのバトルに参加し、炎の剣を掲げたビギングJガンダムを目撃、今後の目標にする程の影響を受けたわけだ。

「そんなんじゃないさ。俺一人の力じゃない。イレイ・ハルや多くの仲間達、ビルダーと力を合わせてやっと勝てた相手なんだから」

知らなければ言えないセリフをタケルはしれっと話す。つまり

……

「……という事は、ビギングファントム事変はイベントでは無く」

「……ああ、公式からはイベントと表向きは発表されたけど、あれは実際にあった事件だよ」

タケルは思い出す様にツチャに告げた。

「っ!?……何故、公式はイベントなどと……」

「そうしなければ、ガンプラバトルが終わっていたかもしれない。そういう事件だったからだよ。そして……今世間を騒がせている違法ビルダー達も、多分同じテクノロジーだ」

「?違法ビルダーが?どういう事ですか?」

「……今はまだ話せない。皆が揃った時に話させてくれないか?」

「ま、つまるところ、ショウゴさんの言った事は間違ってたわけだ」

サイトウが誇るかのように言う。

「それで、ジロウさんから連絡を受けてね。ガンプラを通じて俺達は知り合いになったわけだよ」

「苦労したぜ。本当はショウゴさんに会わせなかったんだがな、知り合う前にショウゴさんはこの街を離れて行ってしまった」

「それで、俺はたまに、ここで違法ビルダーに追われてここに流れ着いた子供達や、皆のガンプラのコーチをさせてもらってるってわけさ」
「嬉しいけど、物好きですよねタケルさんも、僕達みたいな木端のビルダーに構う事ないのに」

半ば呆れるシンパチにタケルは子供の様な笑顔で答えた。

「へへっ!じっちゃんガンプラ十箇条!その9!」
『ガンプラに国境

なし！作れば皆親友となる』ってね！」

そんな明るい話題の中、ノドカ達の方、ガンプラバトルコーナーのあるゲームセンターでは対照的に辛気臭い雰囲気だった。

「……余計な事しやがって」

ノドカは吐き捨てる様にレムに言った。

「あら？別にいいでしょ？あなたは新入りの癖に生意気だつてリンネからよく思われてないのよ」

「実戦データがたくさん手に入っていていいじゃねえかよ」

「その割には普通にやられそうだったけど？」

「うるせえ！大体あの時来るのはアイだけのはずだったんだ！なんで部長やツチャ達まできやがった！」

「さあ？」

レムは大げさに身に覚えがないといったジェスチャーをする。

「……アンタがやったんじゃないかねえのか？あいつらに連絡を入れたの」

「まさか？」

余裕の表情のまま答えるレム。余裕のないノドカとはとことん対照的だった。

「……チツ！まあいい。このままじゃアタシのレギルスは力不足だ。もつと強くしなけりやならねえな……」

そのまま挨拶もせず立ち去るノドカ。

「待ってよ。あなたの監視をリンネから頼まれてるんだから」

追いかけてようとするレム。その時、レムのスマホにメールが入る。レムはそれに目をやる。差出人はマスミ、そしてヒロの二人それぞれだ。

『必ず全国で迎えに行くから』

どちらもそんな内容のメールだった。

——二人とも、定期的に送ってくるよね。……だからか、今回の初心者狩りを止められたけど——

そう、先述のミスルトウに連絡を入れたのはレムだった。マスミとヒロは定期的にレムにメールを送ってくる。マスミはつい先日『ミス

ルトウに移籍した』とメールで知らせていた為、連絡先を知っていたわけだ。

——ユミヒラ・ノドカちゃん……。友達を裏切っても、自立した事にはならないのよ……——

「へっくしょ!!」

身を案じるレムに対して、ノドカは女の子らしくない大きなくしゃみを出していた。

登場公式キャラクター

『ネツキ・タケル』

登場作品『模型戦士ガンプラビルダーズJ』

ガンプラビルダーズJの主人公。赤く逆立った髪は炎を思わせ、見た目に変わらず熱い性格、とはいえガンプラ製作に対しては丁寧な職人気質であり、バトルよりも製作の方が得意という繊細な一面も。師匠である祖父の残したガンプラ十箇条が彼の行動指針だ。そして十箇条は彼の経験と成長、思い出と共に増え続けている。

原作ではホビージャパンの实在のプロモテラー達と戦いを重ね成長。ビギニングファントム事変を食い止めた。……ちなみに天然ジゴロ。

第56話「菜々」

一面真っ白な雪の山脈、それを眼下にエールストライクガンダムが飛んでいた。といつても滑空だが。空は灰色の曇天だ。

——思い起こせば、アタシはアイツの後ろを追いかけてばかりだったな——

乗っていたビルダー、ナナは物思いにふける。が、今はバトル中、それを許さないかの様に、サツマのビルドイージスが高速で切りかかってくる。

「覚悟ー！」

気持ちを切り替えるナナ、ビームライフルを撃ちながらサツマを迎え撃つが、サツマのイージスは軽くかわすと両手袖のビームサーベルで切りかかってきた。

「がら空きですわ!!」

そう言つてストライクに振り下ろすサツマだが、ナナはストライクのビームサーベルで受け止める。

「いつまでも！アタシだって！」

そのままキックを仕掛けるナナ、反撃を予想していたサツマは、鏝迫り合いにはせずに後退する。ストライクのキックは空振りとなつた。

「あーずるいー！」

「あなたに言われる筋合いはありませんわ！」

後退しつつライフルを撃ちつづけるサツマ。ナナはストライクの滑空を解除、地面に降り立ち回避。ライフルを向ける。しかし撃つのをためらった。イージスのシールド、アブソープシールドに吸収されるのを恐れたからだ。

「警戒するとは少しは知恵を付けましたわね！でもね！」

サツマはイージスにプラフスキーウイングを形成させる。吸収せずともイージスのエネルギーで短時間ならウイングの形成は可能だった。「あつ！」というナナを尻目に、イージスはストライクの周りを高速で動き回りながら切りまくる。

「っ！うああ!!」

みるみるうちに、雪原上のストライクはズタズタにされていく。イージスはトドメとして一閃しようと剣を振るう。

「終わりですわー!」

「っ！まだよー!」

そう言っつてナナは背中中のエールパックを切り離してイージスに飛ばした。悪あがきだとサツマはパックを切り裂く。パックの爆発の中を突っ切りながらイージスが突っ込んできた。イージスはストライク目掛けてサーベルを振り下ろす。

「くっ!」

ナナはとっさにストライクを仰向けに寝そべらせた。横に振るつたイージスのビームサーベルは空振り。

「はっ!?!」

「何度も同じ手を使おうとしているアンタの方も甘いわ!」

ストライクの手にはビームサーベルが握られていた。そのまま振るつたビームサーベルはイージスを切り裂いた。

「う！嘘おお!!」

といつても致命傷にはならずだ。両太ももを切り裂いてイージスはその場に転倒する。

「やったー!どうよー!」

「だからって!勝った気にならないでくださいまし!」

イージスの変形、起き上がったストライクにクローで組み付くと凄いい勢いで空高く飛んだ。そのまま中央部のビーム砲。スキュラを発射。ゼロ距離の大型ビーム砲はストライクを貫き爆散させた。

「それはやっばずるいでしょおお!!」

サツマの勝利ではあったが、プライドの高い彼女にとっては苦い物だった。

「くっ!ワタクシとした事が……!」

「あーあ、やっぱり乗り慣れたストライクでも駄目かあ」

Gポッドから出てきたナナがぼやいた。場所はガリア大陸から少

し離れたゲームセンター『キオ』だ。模型店と違ってここの常連ビルダーはそれほど多くない。こうした対戦の特訓は、こういった場所の方が向いていた。

「屈辱ですわね。あなたに一矢報われるとは」

向かいのGポッドから出てきたサツマは、苦虫を噛み潰したように呟く。

「勝つたくせによく言うわよ」

面白くなさそうにナナが言う。

「まあまあナナちゃん。もっちゃんもこれで別の戦法とかに目を向けざるを得ないよ。もっちゃんの方もプラススキーウイングの性能に頼ってる所ってあったんだろうね」

その場をなだめようとしたのはサツマの親友、チヨコだ。その後ろのスグリもうんうんと頷いた。

「あなた達……」

「もっちゃん。良くないよ。相手にそういう態度は、ナナちゃんが君の戦法を見破りつつあるのは本当なんだからさ」

口ではそう言いながらも「君が望んだ方向にナナちゃんはちゃん向きつつあるよ」と、チヨコは心の中で呟く。

「……そうですわね。ちよつと大人げなかったですわ」

怒ってばかりいてもしょうがない。と、サツマはしおらしく反応する。すると、観戦していたシンゴがナナ達へ寄ってきた。

「どうだった？」

このバトルを提案したのはシンゴではない。サツマだった。しかも彼女の提案としてナナにわざわざ昔乗っていたストライクガンダムに乗る様に指示をしたのだった。

「やっぱり乗り慣れている機体の方が動かしやすいですね。でもアシシとしてはストフリの方が強くなりたいのが本音ですけど」

「でも今までで一番いい動きでしたわよ」

「やっぱ、アンタもアシシがストライクの方が向いてると思ってる？」

「正直な話、それで決勝に挑んでほしいですわね」

「だったら問題ないわよ。一応アシシも考えてはいる。ストフリの変更

造は着手してるんだからね」

そう言つてナナ達は隣の休憩所のコーナーへ移動。椅子の備え付けてない。立ち話用の丸テーブルへ持つてきた箱を取り出す。中に入っていたのはフリーダム改造機だ。

「両手足がレオパルド・ダヴィンチに変わってるね」

「まあね。ちよつとフリーダム系で不満に思っていたところがあったからその解消って感じで」

「思ったより重武装ではありませんのね」

「羽根は通常のフリーダムのままよ。残念だけど、アタシじゃドラグーンは使いこなせないからさ……」

「でもレオパルドの両肩と両足には三mm穴があるから、後付けでファンネルとかを付けることはできそうだね。面白い改造だよ」

シンゴにとっては興味深い改造だった。フリーダム系列のセオリーに反した改造案だ。

「本当ですか？できればアドバイスとか欲しいんですけど」

「む！ワタクシの意見もお聞きくださいませ！」

ナナがシンゴに教えを受けてるのが、どうも気に入らないサツマは食いついた。

——
そうこうしていく内に時間は過ぎていく。気が付けばあつという間に夕方だった。

「それじゃあまた明日、よろしくお願いします」

「うん。また明日」

そしてシンゴと別れたナナ達は帰路につく。

「スパルタも辞さないかと思いきや、思ったより放任でしたわね」

ナナとサツマ達は同じ方向に歩道を歩く。サツマがナナの家に今泊りに来ているからだ。黄昏時の歩道を仕事帰りであろう自動車がライト付きでびゅんびゅん通り過ぎていった。

「でもアタシがまさか本当にアタシの家に泊まりに来るとはねえ」

「そこまでする？」とナナは呆れる。「敵情視察ですわ」とサツマは一
言だけ言った。

「ゴメンねナナちゃん。私達まで受け入れちゃって、もっちゃん言い出したら聞かないからさ」

チヨコが若干バツが悪そうに言う。言われたサツマは自分の所為にされた様な言い方にムツとする。

「気にしないでよ。アタシ一人っ子だからさ。こういう賑やかなのは歓迎するわ。今日はアイも帰ってこないもん」

そう。アイは今日は副部長の家で泊まりだった。自分達の故郷に来たついでに、ノドカの家に直接行こうという考えだ。と、話し込んでる内に自宅についた。

「ただいまー』『お邪魔しまーす』

ナナ達が家の中に入ると出迎えたのは熱気だった。フローリングの家の中には屋内特有の熱気がムワツと出迎える。

「あーおかえりー」

と、少し間をおいてナナによく似た女性が顔を出す。母親だ。

「あつついわねー。クーラーつけようよ」

「リビングの方はついてるわよ」

「手を洗ったら夕飯の支度、私達で手伝いますよ」

すぐさまサツマがそう言った。強引な所はあれど、自分の立場は理解しているつもりなのだろう。

「あら有難う。本当にサツマちゃんは気が利くわねー。誰かさんとは大違いだわ」

大げさにナナを見ながら母はため息をついた。

「なんでアタシ見ながら言うのよー」

「なんででしょうねー」

漫才めいたやり取りをするナナと母親、サツマはそれを微笑ましそうに見つめていた。

「あ、そうそう。あんたもう一人友達来てるわよ。今日泊まるって」
突然の事にナナは顔をしかめる。これ以上誰かが来るというのは全く予想していなかった。

「へ？そんな話聞いてないわ。誰よ」

「ワタシですよ。ハジメさん」

と、その時リビングの戸が開くと同時に、ある人物が現れる。たれ目と豊満な胸。そこにいた人物をナナは知っていた。

「あれ?!マコトじゃん!どうしてここに来たのよ!」

ナナは驚きの声を上げた。これは完全に予想外の来客だった。マコト・マコト、アイの故郷での幼馴染だ。

「アイ先輩の所へ泊まりに行こうとしたんですけどね。あいにく今日先輩は出かけていて、他に行く当てがなかったんですよ」

「情性でアタシんどこ来たんかい」

「とにかく今日はもう帰るには遅いので、できれば泊めていただきたいのですが」

人に物を頼む態度じゃ無いわね。とナナは思う。

「まあそれだったらいよいよ」

と、娘の態度に反して、あつけらかんとナナの母は言った。

「いい?!お母さん!勝手に話を進めないでよ!」

「別にいいでしょ?一人増えようが同じ事よ」

母がそう言うのとマコトの顔がパアツと明るくなり礼を勢いよくする、ついでに90cm越えの胸が揺れた。

「有難うございます!あ!夕飯のお手伝い!ワタシもしますよ!」

その発言にナナの表情が青ざめる。マコトが凄まじい飯マズなのはナナも知っていたからだ。

「わああっ!それだけは駄目ええっ!!」

その後は特に問題もなく時間は過ぎていった。いつもより賑やかに夕食を済ませて、入浴の時間割はいつもよりもスケジュールがカツとなった程度の変化があったが。

「ふー、お風呂空きましたわー」

風呂上がりで頭にタオルを巻き、なおかつ小豆色ジャージ姿のサツマが出ながら言った。ちなみに入浴順はジャンケンで決めた。

「パジャマは地味ねアンタ」

「余計なお世話ですわ。こういう格好が一番落ち着きますのよ。で、次はチョコが入りますの?」

「アツハツハ。ジャンケンの結果がどうあれ。私は最後でいいよ。この体じゃ入ったらお湯なくなっちゃうし」

自分の腹を太鼓のように叩きながら90kgの少女は笑って見せた。

「じゃあ、次は順番にアタシね。悪いわね先もらっちゃって」

そう言つてナナは洗面所に入る。ポニーテールのシユシユを外す。ぶわつと彼女の髪がロングヘアに広がった。そして自分の靴下を脱いで洗濯籠にいれる。

——しかし今日は本当に賑やかになったわねー。他の散り散りになった皆も頑張つてるだろうし、何としても自分の実力を高めないと……—

不安もあるが、それを思つてはいけないと心の中の不安を振り払う。なんとしても実力を物にするとナナは心に誓う。と、洗面所の奥の鏡に自分が写つてるのが見えた。

「……頼むわよ。今週中が勝負だから」

鏡に写る自分にそう言いながら、鏡を軽く小突きながらナナは言った。

「大丈夫ですよハジメさんなら、アイ先輩の選んだ人ですから」

そして鏡に写つたもう一人の人物。マコトが励ます様に言う。

「そう言つてくれると助かるわ。有難うマコト。……ん？」

上着に手をかけていたナナの手が止まる。少し間をおいて、無言でナナはマコトを掴むと、洗面所の外へ放り投げた。

「あう」

そして洗面所の引き戸を閉じるナナ。

「な！何故ですかハジメさん！何故ワタシと一緒にには入らないのですか！」

「アホか！なんでアタシと一緒にに入らなきゃいけないの！」

洗面所の扉にもたれながら言うマコト。その大声になんだなんだとサツマ達が寄ってくる。

「ワタシには知る義務があります！アイ先輩の認めたあなたがどんな人なのか！よく知りたいんです！あなたの事が！」

「お風呂入ると何の関係があるっていうの!?!一人にさせてよお

!!

アイの友達って皆こういう奴らなの?!とナナは彼女たちの突飛さに冷や汗をかいた。

その後はガンプラ改造や戦術のアイデア出しやミーティング。たわいもない話ばかりだ。変則的なパジャマパーティーとなった。ナナの一人部屋は四人分の布団が敷かれて、いつものフローリングの床がほとんど覆われた。その上で円陣を組む様に談笑する五人。

「で、チヨコが『芸能事務所にスカウトされたよー!』って喜んでいたので、貰った名刺よく見たら、女子プロレスのスカウトだったんです。で、それ見た男子は大笑いして、チヨコは怒りのあまり、男子に一斗缶で殴りかかって……」

「んもー、もっちゃん。昔の事だよー」

笑いながら言うチヨコ。顔では笑っていたが、彼女の右手は持参していたリングを力を込めて握っていた。暫くしてボタボタと汗を噴き出してリングを握りつぶされた。張り付いた笑顔に反して、これ以上言うなという意思表示だろう。なお左手にはタライをリングの下の位置で持つており、汗が布団を汚す事はなかった。

「う……」

それ私物で持つてきたのか。という突っ込みより、これ以上地雷を踏むのはいけないという感情が、その場の全員に一致した。同時に、スカウトされた理由が皆よく解った。

「ね、ねえイモエ、アンタいつも扇子持つてるけど、あれお爺さんのなんでしょう?どういう人だったの?」

「?お爺様の事ですか?」

話題を変える。ナナにとっては気になっていた事だ。

「……この扇子をくれたお爺様は、ワタクシの人生の師匠でしたわね……。一番身内で過ごした時間が長い人でしたわ」

今も持つている扇子を広げるサツマ。墨で描かれた蘭の柄が見えた。彼女の表情は懐かしむとも、感慨深そうにしているとも見える。

「?あんだ、両親は?」

「海外ですわ」とサツマは一言で済ました。

「代わりに今はお婆ちゃん二人で暮らしているんだよね。もっちゃんは」

手を洗って戻ってきたチヨコが話に加わる。どつかと部屋の中に胡坐をかいた。

「そつか。……意外ね。そんな話し方だから家にメイドさんが何人もいるのかと思っただわ」

「浅はかなお金持ちのイメージですわね」

棘の付いた言い方だ。言い返したいがこらえるナナ。

「いつもいつもイモエイモエ言ってるからこれ位はいいでしょう？

……アウトドア、インドア問わず遊び好きで、いつも小さかったワタクシを遊びに連れて行ってくれましたわ」

懐かしむようにサツマは言う。とりあえず怒りは引つ込めて質問を続ける。

「今ガン普拉をやってるのもその影響？」

「そうですね。『世の中なんだって学ぶ要素がある。だから挑戦を続ける。挑戦する気概こそが人を強くする』それがお爺様の持論でした。……ワタクシのイモエという名前も、お爺様がつけてくれた名前でしたわ」

「ええーそんなお笑いみたいな名前がー？」

「あなた本当に空気読みませんわね……小野妹子、平安時代において髓への使者として海を渡り成し遂げた人物。今よりもずっと命がけの環境で挑戦をして、成し遂げた偉人。それがワタクシの名前」

なんかつける名前としては釈然としない。とナナは言いそうになるも、喉でとどめる。それと同時に、その名前には祖父の想いが込められているんだな。とナナは思った。

「お爺ちゃん子だったんだ」

「ええ、それが解ったのなら、あなたもワタクシの名前を気安く呼ぶのはやめなさいな」

「えー。別にいいじゃん。ていうかさ、アタシが名前呼んでアンタが狼狽えてんだから、アンタの方が自分の名前にコンプレックス持って

んじゃないの？」

「ぐ……」

若干目を背けながらサツマはどもった。

「こりゃ一本取られたねもっちゃん」

そう言うチヨコを尻目にサツマは一つ咳払いをいする。

「ま……だからあなたが両親と仲がいいのは正直羨ましいですわね。ワタクシの両親は出張でお金は稼いでるかもしれないけれど、一緒にはいてくれないんですもの」

「どんな人間も、与えられた時間は一人分だけって事か」

「すー……すー……」

更に夜も更けて、全員が就寝についた。ナナの部屋の中は五人がそれぞれの布団で寝ていた。ちなみにサツマはスグリと一緒にナナのベッドで寝ていた。理由はチヨコの体積が大きすぎるからだ。部屋の中でそれぞれの寝息と、エアコンの音が部屋を満たす。

「……」

チヨコの隣で寝ていたナナは目を開ける。どうも寝付けない。

——……ちよつと水でも飲んでくるかな——

エアコンが効いているとはいえ、今は真夏。喉を潤おそうとナナは部屋を出た。

「……」

閉まる扉。それを見ながらも一つの影が起き上がった。

「……っプハア！」

水を飲みながらナナは息をつく。冷たいとは言い難いが水は身に染みる。

「ワタシにも水をもらえますか？」

突然の声にビクツとなるナナ、ダイニングキッチンの所だけ電気をつけていた為、ナナの視線の正面。リビングの方で人影が見える。その正体はすぐに解った。

「あ……マコトか。アンタも眠れなかった？」

リビングと流しの仕切りごしのナナに向かって歩を進めるマコト。薄着だからか歩く度に揺れる。何がとは言わんが……

「ええ、服を着て眠るのって慣れてなくて……」

「は？」

「あ。な！なんでもないです！なんでも！」

予想してない答えにナナは顔をしかめる、こぼした発言に後悔するマコトは顔を真っ赤にして、なんでもないとごまかした。

「……アンタも災難よね。ノドカやアイと入れ違いになつてさ」

水飲む？とナナは付け加える。マコトはいえ。とだけ答えた。

「でも代わりにあなたと会えました。あの……聞きたかったことがあります」

そう言つてマコトはナナに詰め寄る。ナナは大方アイの事だろうな。と思つた。

「あなたにとってアイ先輩ってどんな人ですか？」

やっぱりね。と、風呂でのやり取りを思い出す。予想しやすいなどナナは苦笑した。

「アタシにとってアイは、そうね。単純に友達かな」

「……本当ですか？好きじゃないんですか」

「まあ好きは好きよ。……つてアンタそんな顔しないでよ。アンタの言う好きとアタシの言う好きは間違いなく違うんだから」

表情で対抗心をむき出しにするマコトを、ナナはなだめる。

「ただね。不思議な奴だつて思うわ。なんていうかアイツが打ち込んでいる物を見ると、なんだかこつちまでアイツと一緒に事をやってみたくなる」

「そうですね。ワタシもそういう経験がありました」

「そういうのに優れた才能があるんでしょうね。……内心、アイツが羨ましいわ」

コップを水洗いすると、ナナは一息ついて話し出す。

「アタシ、今まで打ち込む物がなかったからさ。その所為か、思えばアイの後を追いかけるつてのをずっとやってきた感じ。……でもそれを終わりにしたい」

アイと出会って、自分の周りは大きく変わった。精々自分の考えに留まる範囲ではあるが、無趣味だったナナにとっては新鮮な物だった。

「だから、アイツの隣で一緒に歩むビルダーにアタシはなりたい。それが無きや、きつとアタシはずつと今のまま進めないと思うから」

いずれは自分の力だけでアイに迫れる作品を作れる様になりたい。と思っていたナナだ。

「むーやっぱりライバルじゃないですかワタシと」

再び敵対心を表面に出すマコト。「だからアンタの好きとは違うんだってば」とナナ。

「でも本音が聞けて良かったです」

「周りに言わないでよ？アンタがアイの友達だって言うから信用して言ったんだからさ」

「それはどうも。なんかいい友達になれそうですねワタシ達」

「そりやどうも、って、そう言うんだったら、その敬語やめてくれない？」

「あ、そうですね。ナナ」

なおも敬語をやめてないマコトにナナは思わず嘖き出す。

「あーなんで笑うんですかー」

「だってアンタも敬語変わってないじゃん」

たわいもない事だが、何故だかナナにはツボに入った。

「もう、アイ先輩とは全然違うタイプですよあなたは」

「そりやそうでしょ。そう言えばアイの奴、今ちゃんと寝てるのかなあ」

「アイの奴、昨日は副部長の家で泊まっていたから、部屋に侵入されなしか警戒してて、一睡も出来なかったってさ」

「先輩、よりによって魔女の家泊まるなんて可哀想に……」

翌日のゲーセン・キオにて、スマホのアプリでアイと連絡をとっていたナナは、アイと近況報告をしていた。副部長はかつて生徒会と敵対していたので魔女という異名があった。

「やあ皆、おはよう。今日は見ない子もいるね」

そうこうしてやってきたのはシンゴだった。おはようとナナ達も挨拶を返しマコトを紹介する。

「それで、今日はどうするんだい？」

「レクチャーを受けたい所ですけど、改造機を完成させたいですよ。そして使いこなせるようになりたいです」

そう言っつてナナ達はガリア大陸に移動。模型店でなければ工作室は無いからだ。

「やあ皆、いらっしやい」

店に入るや否や、出迎えたのは店員のハセベだ。

「おはようございます。今日もアサダの奴はスパルタ？」

ガンプラバトルコーナーのある二階への階段を見ながらナナは問いかけた。ソウイチの方は自分達を打ち負かしたミシマ・サキに稽古をつけてもらってる。

「そうだね。昨日も閉店時間の後も、別の店でやってたらしくて、もうアサダ君もよれよれだよ」

サキ、及びサキ親衛隊にしごかれるソウイチ、さすがに自分から言い出したとはいえ、ソウイチが気の毒になってくる。

「じゃあ今は工作室は使っても大丈夫ですね？」

「うん。いいよ。はいマスターキー」

そしてナナ達は店内の奥の工作室に移動。フリーダム改造に取り掛かる。

「で、いよいよコイツの改造に取り掛かりたいところだけど」

「今回は特別ですわよ。指示は出してくださいな」

「シンゴさんもアドバイスお願いします」

うんと快く了承するシンゴ。改造に取り掛かる全員。まずはナナの説明だ。

「当然違法の奴らと戦う装備はあるんですのよね」

「当然よ。重量は改造前より増えると思うけど、素早く動くのは想定済みだからね。アイ達と相談して、どれ使うかってのは考えていてね」

そう言っただけで見たのはフラウロスのショートバレルキャノンだ。連射性に優れたたつくりだ。

「実弾装備ですか」

「これ以外にも作っておきたい装備とかはあるんだけどね。まあ今回は本体を第一に仕上げたいかな」

「なんか追加装備でも考えてるって感じですかね」

「……実はね。これ」

そう言っただけでナナは一つの箱を取り出した。中に入っていたのはHGのユニコーンガンダム二号機バンシイ・ノルン。

「このサイコフレームって奴をき。追加アーマーとして組み込みたいの」

ユニコーン系列のサイコフレームは強力なパワーを持つ。ナナとしてはこの力をフリーダムに加えたかった。

「ではそれは、本体と一緒に作っちゃいましょうよ。塗装で仕上げた後だと面倒ですよ」

「それは今回は待つてほしいかな。……こればかりは自分の力でやりたいの」

ナナは、どうにか自分で頼らない様にと、意固地になっていた。

「……」

その様子を、シンゴはじつと黙ってみていた。

……

そして数時間たって……

「後は乾かすだけですわね」

艶消しをかけて後は乾くのみになった。

「でも追加装備を考えてあるとはいえ、素の装備は元のフリーダムと対して変わりませんわね。妙にシンプルですわ」

サツマは改造したフリーダムを見ながら言った。手足がレオパルド・ダヴィンチに変えてある所が。少しごつめのフリーダムと言った所か。

「二応ライフルにバンシイ・ノルンのリボルビングランチャーの武器は取り付けたわよ。まあ決定力に欠けるともいえなくもないけどさ」

「あの！だったら！」

ナナに対してマコトは一つのパーツを渡す。ガンダムフラウロスの大型レールガン『ギヤラクシーキャノン』だ。長大な砲身はフリーダム の身長並にある。

「これ。いいの？」

「はい！ナナにはこれ使ってほしくて。これなら」

呼び捨て？と、マコトに対してその場にいた全員が思った。

「ギヤラクシーキャノンだっけ。背中につけるタイプね確か、この大ききさだったら、フリーダムに付けるには両手持ちの方に出来るかも……」

どういう改造にしようか。と余剰のパーツを見ながらナナは考える。と、その時だった。

「大変だよ！ハジメさん！」

工作室にハセベが慌てて入ってくる。

「どうしたんですか？ハセベさん」

「君に挑戦者だよ！」

そう言うのと彼の後ろの方から三人のビルダーが現れる。ゴウセツ三人兄弟だ。

「よお。チームI・Bは今君一人か。ハジメさん」

長男のゴウセツがロングヘアを揺らしながら言った。

「何か御用ですか」

ナナの問いにゴウセツは人差し指を突きつけた。

「さつきハセベさんが言ったそのままの意味だ。お前さん個人に挑戦をする」

「どういう事ですか。あなた達」

止めようとするサツマをナナが止めた。

「待ってイモエ、いいよ。丁度初陣にはいい感じだわ」

ナナは新型のフリーダムを横目で示しながら言った。まだ仕上げは乾燥中だが、後数分もすれば乾くだろう。

「ただアタシとしてはまだ生乾きよ。後少しだけ時間を頂戴」

——ナナさんが一人で戦うのですか？本体が出来るとはいえま

だ武器は不十分――

マコトはナナに対して心配していた。まだフリーダムはさつき言った様に武器も不十分だったからだ。

「……シンゴさん」

「なんだい？」とマコトに呼ばれたシンゴは答えた。

「考えがあります。……ちよつと手伝ってください」

――
そして暫くして二階のガンプラバトルコーナーに移動する。

「なんなんだ。特訓を中断して」

和ゴスの女ビルダー、ツボミが面白くなさそうに言った。

「挑戦者だつてさ。ナナ一人が戦うんですって」

カントリーローリーターの女ビルダー。ナエが答える。彼女は宴会芸でも見るかのような感覚で言った。

「フン。あの未熟者一人の力で勝てるものか」

「あら、そう言っちゃ駄目よツボミ、三日会わなきゃ女は大きく変わる物よ」

ゴスロリのビルダー、サキはそう言ってツボミをなだめた。普段はゴスロリを着ている彼女だが、ソウイチの相手をしていたのか今はパイロットスーツだ。

「お姉様はあの女が勝てると?」

「いえ、シンゴが面倒を見ている女の子でしょう?無様に負けてほしいわね」

しれつととんでもない事を言うサキ。……シンゴが面倒を見ている。という部分が彼女にとつては面白くないのだろう。

「はあ!はあ!……くっ!ハジメさんが?!大丈夫なのかよ!」

その横でフラフラになっていたソウイチが答えた。サキの練習は完全にスパルタだった。……これは先述のシンゴにナナが特訓を受けてる事に対しての、ソウイチへの八つ当たりが原因だったりする。バトルが中断され、休憩時間でラツキーと思つたソウイチだったが、ナナが一人で戦うと解ると驚きの声を上げた。

「マコトとシンゴさんは?」

チョコが辺りを見回しながら言う。周りはサキ達と親衛隊。かなりの人数だった。

「……まだ下でやる事があるって……」とスグリがぼそりと答えた。

——アタシもここで一人で勝って見せなきゃ、変われない。行くわよ！——

今回のフィールドはギアナ高地ロマイア山。上は切り立ったテールブルマウンテンだらけ。そして下は鬱蒼としたジャングルだ。自然の驚異はバーチャル空間で十二分に再現されていた。夜の大空を飛ぶナナの新型フリーダム。動作確認しながら自分の新しい相棒の感触を確かめる。

「ストフリの時よりは扱いやすそうだけど……」

ナナは傍らマップを確認する。このフィールドには広大な地下空間があり、大きな二面性を持つ。と、前方に敵機を確認。

「来たー！」

遠くに機影が三機見えた。金色の部位があるのだろうか。キラキラとセンサーとは違う類の光が見えた。と、チカツと光ると長距離射撃用のビームが飛んでくる。

「んっ!!」

真正面だった為に早期警戒が出来た。難なくかわすナナ。撃った敵機の僚機二機が高速で飛んでくる。追撃というわけだろう。

「速いーあの速度はー！」

見覚えのある動きだ。二体は両手にそれぞれ持ったライフルを連射してくる。後退しながら対応するナナ、

「でもってあの武装はー！」

敵機片方は腹部からのビーム砲を撃ってくる。そしてもう一機は両手にビームサーベルを構えて切りかかってきた。ナナの方も二刀流のビームサーベルで受け止める。鏝迫り合いとなった時にナナは相手の正体を確信した。

「やっぱりーストフリー！」

そう。ゴウセツ三兄妹は乗機をストライクフリーダムに乗り換え

ていた。

「そうさー！その通り！」

鏑迫り合いのフリーダムを弾くストフリ、三機のストフリが並ぶ。全機の白かった部分は黒く塗装されており、黄色いセンサーアイは赤く塗装されており、まるで堕天使と言った姿だった。

「俺は！お前がサツマのお気に入りといい事実が気に入らない！お前がそれだけの資質があるというのなら！納得させてみる！俺を！このゴーレム兵団を倒してな！」

そう言うのと三体のストフリは一斉に飛び出してくる。と、両手のライフルで撃ってくる。機動力の高いストライクフリーダムの連射力は脅威だ。

「勝手にそれ！……やってやろうじゃん!!」

ナナのフリーダムはハイマツトフルバースト。つまり全弾一斉発射で迎撃をしようと撃つ。しかしそれぞれのストフリは回避、その内の一機、ヒョウのストフリが側面から切りかかってくる。

「っー」

ビームサーベルで受け止めるナナのフリーダム。だが、ユキのストフリが背後の八基の遠隔操作砲台。ドラグーンを射出して、ナナのフリーダムの背中を狙う。フリーダムの真後ろにユキのストフリはいた。

「こっちはガンダムだぜえ！」

「こっちもよー！」

ユキが撃とうとした瞬間。ナナも背後のレールガンを後方に向けて連射する。

「回っただって!?!」

予期せぬ攻撃に対応が遅れる。やられると思った瞬間。コウセツのストフリがビームシールドでユキをかばい防御。

「ユキ！油断するな！」

「兄ちゃん！サンキュー！」

一瞬茫然とするユキだが、ユキはドラグーンの操作に再び集中。それに続く様に三機とドラグーンを射出した。狙うはナナのフリーダ

ム。

「沈めえ！」

「っ！」

ナナはスロットルを全開、フリーダムに力を込めた。ストフリの力を大きく上回る新型フリーダムはヒョウのストフリの押し返す。そのまま腹部に蹴りをいれるとその場から高速で離れる。パワーはレオパルド・ダ・ヴィンチの手足を使用したことによる恩恵だった。

「ちっ！さすがに舐めた態度はとれねえか!!」

先程までフリーダムがいた場所をドラグーンのビームが襲った。そのまま距離を放そうと飛ぶフリーダムを背後から追いかけるドラグーン。フリーダムは再びレールガンを後方に向けて迎撃しようと撃ちつつける。

「あんたらーそんな撃ってるよエネルギー切れ起こすわよ！」

ナナが以前乗っていた機体だ。ガンダムの知識に疎いナナでもストフリの性能は熟知していた。コウセツは兄妹に支持を出してドラグーンを停止。その場から落ちていくドラグーン。向き直るナナ。

「なるほど。確かにちよつとした腕だな。……正直お前さんを舐めていたぜ。非礼をわびる。だからこそ！」

そしてストフリ三機の翼に光の翼が発生。ヴォワチュール・リュミエールという高速移動機構だ。ドラグーンを装着しては出来ない形態だった。

「本気でいかせてもらうぜ!!」

ナナはかつて自分を撃墜したコウセツ達の動きを思い出した。その瞬間。以前とは比較にならない勢いで散会するストフリ達、「とっておきが来る！」とナナは判断。

『アルタアタック！』

以前自分を撃墜した技だ。自分の周りをトライアングル状に配置。高速で回りながら火器を連射する技。以前の自分はこの技に成すすべもなくやられた。

——同じ技を！なんか手はないの!?!——

一瞬思索するナナ、周りは切り立った崖、そして見えるのは洞窟。

「そうだわ!!」

そう言うとギアナのテーブルマウンテンに躊躇いなく飛ぶナナ。「小細工を!」と追いかけるストフリ達。じきにフリーダムは岩山の中の鍾乳洞に入って行つた。先述の通りこのステージは地下通路が張り巡らされている。

「デルタアタックを不発にするか。知恵をつける」

追いかけていく三機、途中で白く変色する程の朽ちたズゴックが見えた。地下では飛べない。先頭を歩くユキのストフリ。

「大丈夫。こっちはガンダムですよ……ガンダムだぜ兄ちゃん」

程無くして、開けた鍾乳洞の広場で、ナナのフリーダムが見えた。

「みーつけたあ!!」

獲物を見つけたとばかりにユキのストフリは飛び上がり腹部のビーム砲を撃つ。が、フリーダムは迅速に回避。背部のビーム砲。バラエーナを向けた。

「ハッ!そんなのこいつの速度なら!」

回避しようと横に飛ぶユキのストフリ。

「バカ!ここで飛ぶな!」

コウセツの罵声がユキの耳に飛ぶ。直後、天井から伸びた鍾乳石にストフリは激突。

「なっ!」

ナナはその隙を逃がさなかった。バラエーナでユキのストフリを撃ち抜く。

「そんな!ウチのストライクフリーダムがあっ!」

断末魔を上げて爆散するストフリ、「あのバカ……」とコウセツとヒョウはユキの軽率な行動を呪った。これでデルタアタックは使えない。

「兄貴!二機の連携で仕留めよう!」

「ああ!低空飛行だ!」

そうして二機の連携で追い詰めようとするコウセツ達、しかしフリーダムは飛ばずに軽快な動きで攻撃をかわし続ける。

「何故だ!フリーダムがあんな動きを!」

「見ろ！あの足！レオパルドの足だ！」

レオパルド・ダ・ヴィンチの足の底にはローラーがついている。これで足を動かさずとも地上で高速移動する事が可能だ。

「狭い場所じゃフリーダム系は真価を發揮できないの！残念だったわね！」

フリーダムは避けながらストフリめがけて火器を放つ。だが二体は回避かビームシールドで防御。

「そんなもの！」

「頭上に注意よ」

ナナの指摘した直後、天井から落盤が降ってきた。さっきのフリーダムの攻撃だ。あわてて回避する二体、だが、ヒヨウのストフリが回避を遅れて大岩を一つ受けた。それをナナは逃がさなかった。直後にヒヨウのストフリは撃ち抜かれて爆散。

「あー兄貴いい!!」

コウセツは、自分の状況を受け入れざるを得なかった。内心格下だと思っていたビルダーに完全にしてやられた。フリーダム系の特性は向こうがずつと把握していたのだ。

「……大した奴だよ。俺達がこんなに簡単にやられるなんて」

「安直にストフリをアタシよりうまく使えるって見せつけようとしたんでしょけど、そうはいかないわよ。正直癪に障るわ！」

「そうだな。だが俺達もこのまま引き下がるわけにはいかねえ！刺し違えても意地を見せるぜ!!」

そう言うコウセツのストフリは二刀流でビームサーベルを構えると、フリーダム目掛けて突っ込んでいく。ナナはライフル下部のリボルビングランチャーに取り付けられたミサイルを一発撃った。

「っー」

ミサイルはストフリ目の前の地面に着弾、直後、その場が広範囲に燃え上がる。ナパーム弾だ。ストフリは急制動。

その爆風を突っ切って、フリーダムがライフル下部から十手形のビームサーベル。ビームジュツテで突っ込んできた。そのままストフリはコクピットを貫通し倒れこむ。最後に接近戦で答えてくれた

のは自分に対する礼儀なのだろうとコウセツは思った。

「完敗だ……」

そのままストフリは爆散。反してフリーダムGポッド、ナナの方は自分のやった事にも関わらず実感はなかった。しかしストフリの爆散した姿を見ながら、徐々に嬉しさがこみ上げてくる。

「……やった……やったー!!」

思わず顔がほころび、笑顔に変わり、うれし涙を流すほどだった。

「か！勝ちました！勝ちましたわー!!」

両手で万歳をしながら喜ぶサツマ、チヨコとスグリも笑顔で拍手をしていた。

「す！すげえ！ハジメさんフリーダムの特性を理解して！あんな強かったんだ！」

ソウイチもナナが勝利したという事実に大喜びする。

「あれ？どうなったんですか」

そうこうしてる内にマコトが上がってきた。シンゴも一緒だ。

「ええ！ハジメさんの勝ちですわ！」

「起点効かせて全部一人で倒しちゃったんだから！もう凄かったよ!!」

「え？終わり？……じゃあなんでまだバトル終了してないんですか？」

マコトの指摘に「あ」と全員が声を上げて観戦モニターに向き直る。まだモニターが停止してない。

その違和感ナナ自身も気づいていた。バトルが終了しない。

「？どうなってんのよ。まだバトル終了してないじゃない」

「はっ！お前が勝つとはねえ！」

聞覚えのない声が聞こえる直後、『挑戦者が現れました！』というアナウンスが入る。そして終わってない原因をナナは理解した。

「まさか！」

足元に亀裂が入る。まだ何かがあると判断したナナはすぐさまそ

の場を離れる。自分がいた場所を大型のビームが襲った。

「下から?！」

その場所から、フリーダムスの倍はある機体が出てきた。違法ビルダーの機体だ。

「お前がナナか、あーあ、ハズレを引いた」

「なんですって!」

「チームIBでは最弱と言われた奴だろう?これじゃあ一人で挑んで新世代ビルダー仲間を出し抜こうと思ったが、お前じゃな」

そうは言うが、襲ってきたという事は自分を標的にするという事だろう。すぐに撃つてくる違法ビルダー。その場から離れるナナ。

「ま、折角だからお前で我慢するか!」

「失礼ね!!」

向こうはステージの状況を気にかけていない。火力に物を言わせて撃ちまくってくる。狭い場所というのはお構いなしだ。

「バカ!こんな所で撃ちまくったら!」

鍾乳洞内に振動が、亀裂が入り、落盤が起こる。これ以上は、この地下空間は持たないと判断したナナは即脱出。追撃しようとする違法ビルダーだが、落盤に巻き込まれ断念。

「急げ!急げ!」

自分の背後に落盤が迫ってくる。フリーダムスのローラーダッシュで迅速に脱出を図るナナ。もし足を負傷してたらと思うとゾツとする。

「見えた!出口だ!」

鍾乳洞から飛び出すと、出入り口から粉塵が大量に舞った。違法ビルダーも巻き込まれたかと警戒しつつ思うナナ。

「まさかさつききの落盤でやられちゃった?……いやっ!」

地響きが起こると共に、出入り口が周囲の岩山ごと吹き飛んだ。その爆風の中を、違法ビルダーの機体が悠然と出てきた。

「で!でたああ!!」

ガンダムグシオンがベースだ。その姿は背中に長大なレールガンを備え、その両脇に実弾のランチャーやミサイルポッドでゴテゴテに

武装していた。まるでロボット怪獣といった装用だった。その上で if s ユニットが全身についていた。

「新世代ビルダー用のガンダム、『ガンダムスコグル』だ。お前の勝ちはない。観念するんだな!!」

そう言うと、違法ビルダーは全身のミサイルを乱射してくる。雨の様に降り注ぐミサイル、ナナは回避しつつも逃げるしかなかった。

「相手があの大きさなら!」

頃合いを見て反転、ナナはライフル下部の武器の一つ。瞬光式徹甲榴弾を撃ち込んだ。スコグルの腹部にそれは命中。ナナは弾切れになるまで連続でそれを撃ち込む。

「何をするかと思えば!」

違法ビルダーが嘲笑った瞬間。着弾地点からそれは一気に燃え上がる。

「な!」

「よく燃えるわ!」

内部に潜り込んで相手を燃やしてから炸裂するしくみだ。実弾やミサイルを積んでいた機体なので、弾薬を誘爆させながら破壊し続ける。ナナは自分の兵装の予想以上の威力に感心する。このスキにと、ナパーム含め、残りの実弾武器を一気に撃ち込む。スコグルの外見はどンドン削れていった。

「なるほど!・ビーム系の保護された相手でもナパーム系なら!」

サツマの感心する声も耳に入らず、ナナは必死で撃ちつづけた。

「やれる!・このペースなら!」

燃焼と再生を続けるスコグル。再生コアの場所はおおよそその検討はついた。やれない相手じゃない。やれるとナナは確信。……しかし次の瞬間だった。Gポッドに警告音が入る。ハッとするナナ。

「え?!わあ!!」

撃ち込んでいたライフルを撃ち抜かれた。その爆風で吹き飛ばされるナナ。

「ハア……. 何やってんだよお前は……. ハア」

一機のガンダムレギルスが上空から降りてきた。ノドカの機体だ。

どういうわけか辛そうに喋っている。

「アンター！まさかノドカ!？」

「でけえ声出すな……当たりだよ。まさかお前がここまでやるとはな。……ま、アイと一緒にならそれ位は当然だな」

「あの違法ビルダーはアンタの回し者ってわけ?!」

「そう……ゲホッ！ゴホッ!……だよ。フウ……フウ……」

咳き込んでる上に息が上がってる。声は淡が絡んでおりかなり辛そうだ。

「アンタ……風邪ひいてるの?」

「うるせえな……アタシより自分を心配しろよ……。あいつはもう再生してお前を狙ってるぜ……」

ナナはスコグルを見る。ノドカの言った通り、再生したスコグルがこつちに向かってくるのが見えた。しかしまだ燃烧は続いており、さながらゾンビの様だった。

「舐めた真似をしゃがって!」

そう言つて違法ビルダーは全ミサイルをフリーダム一機めがけて発射。

「やっぱ!」

迎撃しようにももう武器がない。このままやられるのか。という想いと、このまま終わつてたまるか。という想いの両方がナナを駆け巡った。

「ハジメさん!!」

その時だった。一機のガンプラがフリーダムを庇うように躍り出る。と、同時にビームライフルをミサイルの密集地帯に向けて発射。爆発したミサイルは周りのミサイルを誘爆。残ったミサイルもそのまま迎撃。

「シンゴさん!?!」

シンゴのビギニングDだ。そしてもう一機。紫に塗られた大型甲冑の様な機体。ヘルムヴィーゲ・リンカーという機体だ。

「ナナ!」

ヘルムヴィーゲからマコトの声が聞こえた。そしてナナのフリー

ダムにある武器を放り投げる。

「これって！アンタのよこしたダインスレイヴ！」

マコトから貰ったレールガンだ。それは両手持ち式に改造されており、大型のマストドライバーキャノンと化していた。

「勝手にすいません！でも！使って欲しいんです！」

「今はありがたいわ！サンキュー！」

レールガンを構えるフリーダム。構えたフォームは、矢を放つために弓を構えた風に見えた。

「くう……させるかよ！」

発射を阻止しようとするレギルス。しかしマコトのヘルムヴィーゲが大剣を構え、止めに入る。

「マコト……テメエ……ゴホッ！ゴホッ！」

淡の絡んだ声でマコトに食いつくノドカ。

「風邪ですか……知ってます？夏風邪って馬鹿が引くんですよ？」

「あ？テメエ……！」

レギルスはビームサーベルで切りかかるも、マコトのヘルムヴィーゲは大剣を分離させ受け止める。

「大方アイ先輩拒絶した事に、自分でもストレスかかったって所でしよう？本当に馬鹿ですねえ」

挑発に怒り心頭になるノドカ、体調不良とはいえノドカの技の切れはそこまで落ちてはいない。必死になってビームサーベルをさばいていくマコト。

「今です！ナナ！今のうちにチャージを!!」

「やってるわよ!!」

受け取ったレールガン。撃つのにチャージは必要だ。スコグルの相手はシンゴが務めていた。そして、ナナはさっきのマコトの言葉を思い出す。

「アイを拒絶したから……か。アタシも案外アイツに近かったかもね……」

自分の力で……、そうこだわっていたが、それが行き過ぎてしまえばノドカの様になってしまうのではないかとナナは思った。先程の

バトルの勝利で、勢いと熱さのついたナナの心は、強く燃え上がる。ナナ自身のガンプラ魂だ。それがレールガンにチャージ以上の力を注いでいるのを感じる。

「……ノドカー!」

突然名前を呼ばれたノドカはナナに意識を向ける。そして大型レールガンがチャージ完了しつつあるのを気づいた。砲身が、銃口が、強く輝きだす。

「アタシはやっぱり一人じゃ限界はあるのかもしれない! けど! だからこそ! アタシはアイに支えてもらう! そしてアタシは! アイを支える! アンタも意地張ってないで! アイに向き合いなさい!」

「っ!! 黙れええ!!」

レギルスはマコトのヘルムヴィーゲを弾くと。ナナのフリーダムに突っ込んでいった。激昂したノドカはフリーダムの真正面。射線上に入る。その後ろはスコグルもいた。

「よけて! 皆! ハジメ・ナナ……戦場を!!」

ナナはトリガーを弾く。

「駆け抜けるよっっ!!」

次の瞬間。実弾とは思えない光の奔流が放たれた。すぐさま回避するシンゴのビギニングD、ノドカと違法ビルダーは声を上げる間も無くそれに巻き込まれる。

「これが実弾?! 嘘だろ!」

ソウイチが驚愕しながら声を上げた。強烈な光はまともに直視出来ないほどだ。……暫くして光が止む。射線上にあった者は根こそぎ消滅しており、全員が驚きの余り声も出ない。

「な……な……何なのよこの威力……」

一番驚いていたのはナナ自身だった。撃ったフリーダムも機体の放熱を行うと、燃え尽きたとばかりにガクツとその場に膝をつく。

「ナナ! 凄いです!」

「もう一步も動けそうもないわ……。大した物ね。この武器」

「ほとんど作ったのはシンゴさんですよ」

「何……安心してんだお前ら……!!」

マコトが安堵した声を上げた直後、ノドカの辛そうな声が響いた。声の響いた方、上空を見ると、頭と脊髄と翼、そして尻尾だけになったレギルスがいた。脱出機構のレギルスコアだ。

「しまったーまだ動けたのか!？」

シンゴのビギニングDが身構える。ノドカも流石に勝つ事は不可能と判断。引き上げるしかなかった。

「……クソツッ!もう今日はここまでだな……覚えてろよ……決勝戦で……お前らを……」

そう言つてレギルスコアはその場から消え去る。撤退した様だ。同時にナナの眼の前のディスプレイに『WIN』の文字が入った。勝った……やったんだ……その実感がナナにふつふつと湧いてきた。

「あは……あはは!!やったああ!!」

ナナは仲間から力を貸してもらったとはいえ、この結果に大喜びとなった。

バトルが終了して、ヘルメットを外したナナがGポッドから出る。最初にコウセツ達三兄妹が拍手で出迎えた。

「……完敗だぜ。お前さんの力、見せてもらった」

「君と戦えた事、俺達も今後の糧にしていくよ」

「いいか!ウチら今回はストフリに慣れてなかったただけだ!今度会つた時は必ずお前を倒す!」

そしてサツマ達やソウイチが三兄妹に続く、

「やっぱり!やっぱりワタクシの目には狂いはありませんでしたわああ!!」

「もっちゃん!泣き過ぎだよ!でも本当にすごいよナナちゃん!」

「……あなたの魂、今ギンギラギン……」

「ハジメさん!まさかアンタにこんな潜在能力があつたなんて!!凄いです!!」

ソウイチも今まで見た事の無い様なキラキラした瞳の笑顔で食いついてくる。純粹に感動したという事だろう。だがナナには違和感が凄まじかった。

「あ、ありがとうアサダ、皆。……あ」

そしてナナの目にはシンゴとマコトの二人が入った。今回勝てたのはこの二人のおかげだ。もう一度お礼を言おうとナナは話しかける。

「有難うございました。あのレールガンが無ければ負けていました」
「そんな事ありませんよ。あれがナナの本当の力というわけですね」
満面の笑顔で答えるマコト。対するシンゴの笑顔は優しい物だった。

「……それで、今も君は一人だけでやろうって思うかい？」

「……そうしたかったけど……向いてないっばいですね」

「それでいいんだよ。協力し合う事で高められる事だってあるはずさ」

「そう言う言葉、何度も言われた事だけど、今になってようやく意味が解った気がします」

一皮むけたかな。とナナは笑いながら言った。かつて、ナナは『アイと一緒のガンプラが一番楽しい』と思った。それを改めて噛みしめるナナ。

「でもでも、まだ入り口に立った程度にしか思ってませんよアタシは。もつと色々教えて下さいね！」

「ああ！改めてよろしくね！」

「へえ。二人で随分と盛り上がってるじゃないの……」

その時、ぬうつと金髪の女性が二人の会話に割って入る。ミシマ・サキだ。

「サ！サキさん！」

「若い子の方がいいって事かしら？」

「いえ！そんな事は！」

脂汗を流しながらサキの機嫌を取ろうとするシンゴ。

「じゃあなーんでさつきはあんなに楽しそうだったのかしらあ？」

サキの表情は冷淡ですらあった。しかし胸中の怒りは相当な物だろう。シンゴもそれが解っているのだから必死に取り繕うとする。

「そ、それは彼女が素直な子だから」

第57話「創一」

「バイアラン！行くぜ!!」

ソウイチは一層険しい顔で月面を低空飛行で駆けていく。機体の中から見えた視点では、クレーターや盛り上がった丘がビュンビュンと凄いい勢いで過ぎていくが、ソウイチには知った事ではない。ソウイチの向いている意識は正面のバトル相手、サキのみだ。

「さあ！来なさい!!」

時刻はナナがバトルで勝利した日の夜。模型店ガリア大陸の閉店間際のバトルである。仮想空間内による月面でのバトルフィールド。サキは相対する機体を値踏みする様に見ながらその場を動かない。

「あんたに勝つ為に!!」

両肩のGNソードⅡライフルを向けて発射、なんなく回避するサキ、しかしその回避の動きを見据えてかの射撃。

「へえ！でも分不相応!」

が、これも避けられる。手加減してかサキは反撃はしてこない。

「うおおっ!」

続けてのGNソードⅡをソードモードに切り替えての斬撃。が、これまたビームサーベルで受けられて弾かれる。ソウイチが揺れるGポッドの中、相手を見るとデステイニーはそこにはいない。何処へ行ったと見回すとGポッドからの警告音。上かと見上げるとデステイニーが真上からライフルを撃ってくる。

「くっ!」

横に回避するソウイチ。真上に向けて両側のGNソードⅡを真上に向ける、

「あの構えはライザーソードかしら!」

ライザーソード。バイアランが豆粒と例えてもいい程の超大型ビームサーベルである。発動にはあらかじめGNソードを対象の方向に向ける必要がある。

「ふっ!百万年早い!!」

そういうとサキはデステイニーの出力を上げる。閃光といわんば

かりの勢いでバイアランの側面に移動。デステイニーはそのまま
ビームサーベルで切りかかる。

「ワンパターンね！坊や！」

「甘いんだ!!」

が、バイアランは近づいてきたデステイニーに向けてGNソードの
射撃を放った。ライザーソードは発動していない。

「つとー！」

すんでの所でビームを回避するサキ、さっきの回避よりは危うかつ
た。

「ライザーソードみたいな硬直の長すぎる武器を使うわけないでしょ
う!!」

「多少は知恵をつけたわね！でもまだまだだよ！」

回避したデステイニーはそのままビームサーベルで切りかかる。
バイアランはGNソードで受け止めた。

「あらーやるじゃない！」

感心した声を上げるサキ。ソウイチの動きは疲労がある物の、キレ
が増していた。

「勝つんだ！俺は!!」

歯を食いしばり、そしていつも以上の険しい顔でソウイチはサキに
食らいつく。その気迫にサキは負ける気が……しなかった。

「でもそれだけでは勝てないわ」

サキは余裕のままだ。一度離れるデステイニー。

「何故なら!!」

デステイニーのナイトロシステムを発動させるサキ。青白い炎を
上げたデステイニーがさつきとは比べ物にならない勢いで迫る。

「速い!!」

「スミ入れが拭きとれ切れてない部分がある！」

サーベルですれ違いざまにバイアランの右足を切り落とす。

「あっー！」

「バリの処理がまだ甘い！そして塗りにムラがある!!」

次に左腕。左足。どんどんバイアランのボディは破損していく。

「そして何よりも！」

そしてバイアランを正面から一刀両断。

「あなたに笑顔がない!!それが一番の敗因よ!!」

「っ!!うわああっ!!」

バイアランでは完全にサキのデステイニーには歯が立たなかった。ソウイチは敗北を喫したのだ。

「つつう。やっとナイトロシステムまで引きずり出せたつてのに……」

「お疲れ様ー。ソウイチ君」

苦々しい顔のソウイチに反して、にこやかな顔で出迎えた人がいた。泣きぼくろと首から下げた『骸骨から這い出る蛇』の形をしたネックレスを付け、そしてカントローローターを身に着けたビルダー、ヌマツ・ナエ（沼津苗）だ。

「ナエさん」

「負けちゃったのは残念だけど、ナイトロまで出せたつて事は、お姉様を本気にさせたつて事だよ。明日はもつといい所までいけるよ」

明るく、そして包み込むように優しく話しかけてくるナエ、ソウイチの険しい表情は解かれ、少年は若干顔を赤らめた。

「あ、有難う……ごいいます……」

サキとの特訓は完全にスパルタそのものだ。ほぼ休む間もなく、サキとのバトルや、親衛隊との全員抜き、そしてガンプラ製作の連続である。そんな中、ソウイチにとってナエの存在は癒しだった。自分がサキに弟子入りした後、親衛隊からの陰口や敵対心は周りから受けてはいたが、そんな中、分け隔てなく接してくれたのが彼女だ。最初から味方でいてくれた女性。それがナエだった。

——優しいな。ナエさんは……——

包容力のある女性に慣れ親しんでないソウイチも、彼女には心を開きつつあった。

「無様だな。ガキ」

が、そんな余韻も一人の声でぶち壊しになった。右眼に眼帯を付け

た和ゴスの少女、カンナミ・ツボミ（函南つぼみ）だ。彼女の後ろでチャイナロリータ服の少女、アタミ・モエ（熱海萌）が隠れている。「ツボミさん、あーあ、また文句スか」

そつぽを向きながらソウイチはぶつきらぼうに答える。ナエと対照的にツボミは敵対心が一番むき出しに接してくる。以前シンゴが「ツボミは姑みみたいな事をする人間じゃない」と言っただけだったが、確かにイビリは無かった物の、半分読みが外れたといえた。

「もうお姉様から離れたらどうだ。お前の限界などたかが知れている。それがお前の為だ」

「嫌っスよ。アンタこそ俺に嫉妬スか。みつともない」

「貴様……」

「駄目よツボミ。ソウイチ君必死に頑張つて、結果を出し始めてるんだから」

「ナエ。お前もソイツに情を出し過ぎだ。よそ者相手にそんな事をして、お前の為にならないぞ」

「あら。いいでしょ？ソウイチ君可愛いんだから」

「か、可愛いって……」

可愛い。そう言われるのは今まででは馬鹿にされてる様で嫌な気分ではあったが、なんだかナエに言われると悪い気はしなかった。

「男に可愛いなど、褒めてる事にはならないな」

「っ……やっぱ俺への嫉妬じゃないスか。可愛げの欠片の無い人が言ってるんだから。あーあ、年寄りみたいにヒステリー起こしちゃって」

聞いてらんないとばかりに耳を塞ぎながら言うソウイチに、ツボミは怒りの表情で突っかかる。

「っ!!お前!!」

それをナエが止める。

「もうーやめなさい!!」

ソウイチが弟子入りしてから、こういうやり取りが多い。ツボミという少女にとって、自分の憧れのお姉様が、自分に煮え湯を飲ませた男の師匠となっていたのだ。そしてソウイチが実力を高めたとして

も、サキやツボミ達へのメリットはあまり期待できない。こうなるのはある意味自然だった。

反面他の親衛隊員からソウイチに、そういう態度を口にするビルダーは少なかった。これはツボミが彼らの言いたい事を代弁していたからと言えなくもない。ツボミはそういったネガティブな役割の大部分を引き受けているともいえた。

「本当にあなた達、仲が悪いのねー」

と、パイロットスーツからいつものゴスロリ衣装に着替えたサキが出てくる。

「あ、お姉様。申し訳ございません。お目汚しを」

「いいのよ。それより明日のスケジュールはどうしようかしら」

「……まだやるのですか?」

ここ二日間、サキはソウイチとワンツーマンだった。とはいえ、彼女は疲れると他の親衛隊員がソウイチのバトル相手となり、ソウイチに碌に休みはなかった。

「まあね。アイツも少しは男を見せて来たじゃない」

「何故あの少年にそこまでこだわるのですか?」

ツボミには解らない。サキが彼を気に掛ける理由が、

「あなたに似た所が気になるって言ったでしょう?」

「納得できません!!」

「んー……そうだね。ソウイチ、明日はツボミとチーム組んで、違法ビルダー達の占領した店舗で戦いを挑みなさい」

閃いた。といった表情になるや否や、ソウイチやツボミ達に言うサキ。二人は耳を疑った。

「!?何を言ってるのですかお姉様!!」

「そうっすよ!なんでこんな人と!」

同時に言う二人、直後にお互いがにらみ合う。

「いいじゃない。せっかく会ったんだから仲良くなさいな。少しは私を休ませてほしいものだわ」

軽いストレッチの動作をしながらサキは言った。疲れてるという意思表示でもある。

「それじゃあ今日は解散よ。私は待ち合わせがあるから」

「あれ？これから別の店で特訓じゃないんスか？」

「今日はこれで終わりよ。シンゴと夕食の待ち合わせがあるの。じゃあ皆気を付けて宿に帰るのよ」

そう言いながらサキは「さーて、何シンゴに奢ってもらおうかなー」と口にしながら上機嫌に去っていった。その場にいた全員が「昼間シンゴを問い詰めた時に、一方的に取り付けた約束だな」とサキに対して思った。

「……まさかさっきのナイト口、本気にさせたんじゃないやなくて、早く終わらせて約束に向かう為に使ったんじゃないや……」

「あはは……」

かもね。と答えようとしたが、ソウイチを思っただか、苦笑いでごまかすしかナエには出来なかった。

「ま、いいや。それじゃ皆さんお疲れ様でした」

そう言っただソウイチもその場を離れる。親衛隊各員も解散。それぞれの宿へと帰る事になった。

「私達もホテルに帰ろう。全くガキの所為で無駄に疲れる」

「だから駄目だっただそう言っちゃ」

「……そういえばさ……」

チャイナロリのモエがボソツと口を開いた。気になる事があったようだ。

「モエ達三人、ホテルの利用今日までだったけど、新しいホテル予約やったの？」

そう、元々今日で滞在は終わりにする予定だったわけだ。ソウイチの弟子入りで伸びてしまった為、ツボミ達は別の宿に予約を入れる必要があった。

『それだったら大丈夫』

ツボミとナエ、お互いが顔を見合わせながら言った。

『「ナエに」「ツボミに」やってもらったから』

同じタイミングでお互いを人差し指で示しながらの言葉。

『……えっ？』

……直後にお互いが青ざめる。……まさか予約してなかったのか。
と

「……まさかナエ?……やってない。とか?」

「え?ツボミがやってくれるんじゃない?」

これで状況を把握した。予約してない。と、

「お!おい!私はナエがやってきてると思ったぞ!」

「嘘でしょ!私はツボミがやってきてたっててつきり!だってツボミあの時返事するから!」

「え?!いつだ!!」

「お姉様とソウイチ君のバトルをぐぬぬって恨めしそうに見てた時よ!私個人的な用事で爬虫類カフェに行きたいからって頼んだじゃない!!」

「あ!あの時……」

あの時はソウイチに対して恨みの感情で一杯だった。だからサキとソウイチ以外は何もツボミの頭には入らなかったわけだ。議論を続けながら一階に降りていく三人。荷物どうしよう。これからどうしようという気持ちで全員が一杯だった。

「……ウオークイン(予約ナシ)する?確か空き部屋あるんだったら泊まれるの……」

「でも足元見られる可能性高いよ?割引ナシだって言うし」

「荷物はある。最悪野宿か道の駅で……」

「?……ねえあれ……」

と、一回に降りるとモエが奥の方を指さした。なんだと二人が奥を見ると、少年が一人、ガラス張りの工作室でガンπραを作ってるのが見えた。ソウイチだ。

「……おい。何をやってるんだ」

奥の工作室に入るなり、ツボミはソウイチに問いかける。

「あれ?まだいたんすか?」

「何をしていると聞いている」

「……決勝用の機体っすよ。バイアランもいいけど、そろそろ自分もサキさんや決勝、全国で通用するガンπραを完成させたいんす。親と

店の人からは許可貰ってますから」

ツボミの言葉に対して、ソウイチは普通に答える。刺々しい言い方をしなければ、ソウイチの対応も普通だった。今はこの人に構ってる場合じゃないというのも理由ではあったが。

「自宅で出来るんじゃないのか？」

「家だと休む方向に体が引つ張られちゃうんすよ。疲れてるから帰ったら寝てしまいそうなんす」

そう、バトルの疲労でソウイチの身体はかなりへばっていた。しかし今のバイアランではサキには通用しない。以前に自分が出したガンプラ魂の一撃、あれをいつでも出せて、そして耐えられる機体がソウイチには必要だった。

「そうなんだ……ん？寝る？」

その時、聞いていたナエに浮かんだ案があった。

「ソ！ソウイチ君！ちよつといいかな!!」

意の一番にナエがソウイチの傍に詰め寄った。「な！なんすか!?!」とソウイチは間近のナエの顔に赤面した。

「私達を今日君の家に泊めて!!」

ナエはそんなソウイチの反応を気にも留めずに言葉を続けた。表情に余裕が無い。

「はい？」

「今日トラブルあってホテル泊まれないの！ソウイチ君のガンプラ手伝うからさ！いいでしょ!!」

その剣幕にただ事ではないなとソウイチは下心なしで思った。

「おい！正気か！こいつの家に泊まるなど！」

ツボミとしては断固反対だった。ソウイチの家に泊まるというのは自分の弱みに繋がりかねない、ツボミとしては了承はしたくなかった。

「……元はと言えば誰の所為だと思ってるの？」

「ぐ……」

怒気をはらんだナエの声にたじろくツボミ。ツボミが反対する理由は他にもあった。彼女は地区予選でアイ達と戦った時に、ソウイチ

を家族ごと馬鹿にした。そんな事をしてソウイチの家に泊まっても気まずいとしか言いようがない。

「モエは？」

どうにかモエを味方につけようとするツボミ。

「……モエも野宿はやだ……」

トコトコとチャイナロリの少女はナエの側へかけていった。

「別にいいっすよ。俺スマホ持ってないんで、親への連絡は店の電話使いますから、答え出すなら早くしてください」

「あ、大丈夫よソウイチ君、ツボミも泊まるから」

ナエの発言にツボミは「何を！」と抗議の声を上げる。

「一人だけ野宿するつもり?!そんなことしても迷惑にしかならないわよ」

「ぐ……」

私は別で宿を探す。と言いたいが不便さは解っていた。ナエ達がいるなら仕方ない。とツボミは首を縦に振るしかなかった。

二時間後……。

「お風呂お先もらいましたー」

マンション『ムーンムーン』の一室。ソウイチの自宅の居間にて、首からタオルをかけたナエが入浴上がりを伝えた。今の恰好はシャツとショートパンツのラフな格好である。そしてすっぴん。

「はーい」

ソウイチの母、カナコが明るく答えた。ソウイチとは対照的に明るくほがらかな女性だ。

「すみません。ご飯ご馳走になっただけでなくお風呂まで」

「いいのいいの。家はいつも二人だからね。賑やかなのは大歓迎よ。それじゃあ次はツボミちゃんの番ね」

そう言うとかナコとナエはソウイチの部屋へと向かい、ドアを開けた。

「お風呂空いたわよツボミちゃん。入っちゃいなよ」

部屋の中ではソウイチが勉強机に向かい新型機を製作。ツボミと

モエはその後方のテーブルで、製作の手伝いをしていた。

「はい……」

遠慮しながらツボミは答える。彼女の服装も部屋着となっていた。右眼の眼帯は外されており、右眼は前髪で隠れている。そして眼鏡をかけていた。そそくさとツボミは風呂へと向かう。

「じゃあ私も手伝うねー」

参加するナエにソウイチは安堵の息を吐いた。

「ふうっ。助かりますよ。さっきまでだと空気重くて」

会話をする気になれないとソウイチはやり辛さを感じていた。ツボミは常にムスツとしていて、既に入浴後のモエは恥ずかしがって話をしようとしなない。

「ウフフ。でもさすがはツボミね。ガンプラ製作はきっちりやる」

ナエはツボミの担当したパーツを見ながら言った。変な細工はしておらず、丁寧に仕上げている。

「本当っスね。ちよつと意外っス」

「根は真面目だからねアイツ。ああ、もちろんモエのパーツも綺麗よ」
褒めて欲しそうなモエにナエはそう言った。

「しかし、女の子三人連れていたのは驚いたわね。私の学生時代を思い出すわ」

三人のやり取りを見ながらカナコは言い出す。

「でもやってる事はガンプラ製作ですよ。間違いは起こりませんか」

安心してくださいとナエの発言にカナコはちよつと残念そうな顔をする。

「それがちよつと残念よねー。私が高校時代の時は体を許したのはお父さんだけだけどー」

「っ!!余計なお世話だよ!!邪魔だからさっさとどっか行ってよ!!!」

息子としてはカナコの発言がいちいち癪に障る。カナコに出ているようにソウイチは顔を真っ赤にして大声を上げた。

「もう照れちゃってー。じゃあ皆、根を詰め過ぎない様にねー」

気にもしない様子でカナコはソウイチの部屋を後にした。今日帰ってきてからずっとこんな調子である。

「何やってんだよ母さん……」

母のテンションに頭痛がしてくるソウイチ。思わず頭に左手を当てながら呟いた。

「うふふ……ソウイチ君こうやって毎日楽しい生活をしてるのね」

その後ろのテーブルで作業しながらナエが笑う。

「女の子が来てはしゃいでるだけっすよ。……すみません。新型の製作の手伝いまでしてもらって」

「気にしないでいいよ。一晩泊めてくれるお礼だもの。とりあえず、今日は形にするまでしよう。塗装以降は明日朝早くから済ませちゃおうよ」

「出来れば今日中に塗装まで仕上げたいんですけどね」

ナエの提案と自分のプランはどうも食い違っている。ソウイチとしては今日塗装までやっておきたかった。

「駄目だよ。ソウイチ君もちゃんと休んでからバトルに望まないよ、大丈夫だよ。完成まで手伝うから」

「はあ、有難うございます」

「もつとも、夜更かしは肌に悪いからってのもあるけどね」

「なんスかそりゃ」

「……ナエ、楽しそう」

ボソツとモエがナエに言った。ソウイチには数えるほどしか聞いてない彼女の声だ。

「あら、楽しいわよ。可愛い弟が出来たみたいでね」

「っ！だから可愛いって言わないでください！」

「あら？だってソウイチ君可愛いじゃない」

完全にからかっている。ナエの一面を垣間見つつも、この人にこのままもてあそばれ続けるのはソウイチにとって面白くない。何か話題を変えようと試みる。

「……そういえば聞きたい事があったんすけど！」

ソウイチの問いに「なにかしら」と応えるナエ。

「ナエさん達はサキさんにどうして憧れたんスか？」

興味はある疑問だった。この三人がサキに憧れた理由は何なのか知りたかった。特にツボミの心酔っぷりはハンパでは無い。

「あーその事ね。……自分達にとって、『こう生きたい』って理想の人だったから。かな」

「？自己中に生きる事が、スか？……あ」

しまった。と口を押えるソウイチ、サキへの本音は一部ではあるがこれだった。

「フフ。良く知らないと思うっちゃうよね。丁度いいわ。休憩かねて話しましょう」

——私達がいた街では、ツボミと私は別の学校の同級生だったの、モエは下級生だったけどね。ライトニングホビーっていうお店で、ドール関係のコーナーで知り合った。皆家庭や学校でうまくいかない事があつた所為かな、自然と仲良く、そしてお店に集まる様になっていったわ。

「？ガンプラじゃなくてドールっスか？」

まあね、お姉様……ミシマ・サキさんはその時にガンプラコーナーでよく見るお姉さんだった。しょっちゅう荷物持ちにシンゴさんを連れていたっけ。……いつもゴスロリ着てたからね、すぐに記憶に残ったな。……出入りしていたお店でも工作室があつてね、少し離れた場所でサキさん達の工作とかやり取りとか見ている。

サキさんその時からガンプラうまくてね、店頭のショーウィンドウで作品が展示して貰えるほどの実力だったのよ。

『……あのショーウィンドウの中のプラモデル、いつものゴスロリの人のだよね……』

『だからなんだよ。趣味を人にひけらかすとかいい趣味とは思えないな。あの恰好と言い、なんでそういうのを人に見せびらかすんだか……』

——その時はガンプラに興味は無かったからサキさんとの接点も無かった。サキさんに対しても変な人っていう印象しかなかったな。

でもある時に、サキさんとの接点が出来た……

「接点が出来た時っていうのは……？」

「それはちよつと教えられないかな……」

その部分を省略して話そうとするナエだったが、モエはそれを遮った。

「……いいよ、ナエ、モエが話すから……」

そう言つて一際小柄な少女が話し出す。

——モエね。学校でずっと一人だったの、自分から人の輪に入ろうとしないで、向こうから人が来るのをずっと待ちながら自分の世界に入り浸つてた。……だからね、学校ではいじめの格好の標的だった……。だからその時のモエは、ドールで盛り上がってる時だけがモエが幸せな時だった。その事件が起きた日、偶然か、探したのかは解らないけど、いじめをしている人達がお店の工作室に来たの……

『アタミさんじゃない。こんな所でなにやってるの?』

——モエね。その時怖くて動けなかった。ツボミとナエは味方として庇つてくれたけど、こっちは三人、向こうは四人。向こうは強気なままだった——

『高校生にもなつて人形遊び?子供っぽいわね』

『ちよつとそれ貸してよ』

——笑いながら言うその人達に、貸したらいたずらされるのは目に見えていた。嫌だつて言おうとするけど……怖くて声が出ない——

『その態度、信用できないな』

『私達も共同で作ってるドールなの。あまり部外者にベタベタ触らせたくはないわね』

『私はアタミさんに聞いているの。そっちの方が部外者でしょ?』

——ツボミとナエの態度にも彼女達は気にも留めなかった。モエの友達つてだけで、下に見ていたんだと思う——

『お前ら……!』

——怖くて声の出せないモエに、ツボミはつい声を荒げようとしたの。でもその時だった——

——工作室内に、大きな金属音が響いた。その場にいた全員が、何

が起きた？と音のした方を見た。塗装する際に、パーツを乗せて運ぶステンレスのトレイ、それが床に落とされていた。それを落としたのがお姉様、サキさんだった。――

『失礼』

――一言だけお姉様はこつちを見ながらそう言った。それを見ながらいじめっ子達は、興が削がれた様に出ていったの――
「その一言だけで出ていったんスか？」

――普通の人だったら、そうはならなかったかもしれない。もしかしたら、からかう標的をサキさんに変えたかもしれない。悪目立ちしていると言っている恰好だったから。でもサキさんにはそれを許さない何かがあったの。うまく言えないけど、覇気というか風格、オーラが、絶対的な自信みたいな物が……。――

『あ、あの……有難うございます……』

――モエね、サキさんにお礼が言いたくて傍に寄って言ったの、「何もしてないわ」とサキさんは笑顔で言ってくれた。そして、モエが思わず持っていたドールを見ながら言ってくれた。――

『綺麗なドールね。あなたが作ったのかしら？』

――なんだか嬉しくなって、ドールの話題で盛り上がったの。服がモエの自作だとか、このパーツはツボミが、ナエが選んだとか、少ししてツボミとナエも話に参加していた。そしてお姉様はこう言ったの。――

『でもこんないい出来なのにもったいないわね。皆に見せればいいのに』

――それに関して、ツボミが反論したの、「余計なお世話です。あくまで自分の為の物ですから」って――

『そう。でもこの作品からは『好き』っていう気持ち伝わってくる。このドールもあなた達の魅力だわ。それを人に伝える意志があれば、あなたはもつと人を魅了できるでしょうね。ねえ、やっぱりこのドール……』

『助けてくれた事は感謝しますが、しつこいですよ』

『あらそう。悪かったわね』

——気にしない素振りです。サキさんはドールの話題に戻って行った。……でもモエはそれを見て、なんだかこの人ともっとお近づきになリたかった。いい趣味と言ってくれた人はいた。でも初めてだったの、趣味をモエ達の魅力だと言ってくれた人……

『……あの、このロボットの作り方……教えて、下さい……』

——暫くして、いつもの工作室で、モエはHGのクシャトリヤを持ってお姉様の所へ行った。お姉様は「いいわよ」と快く承諾してくれた——

『モエ、お前はなんで』

『モエ、自分を変えたい……。あの人の真似をする形でいいから学びたいの……。モエに、魅力があるのなら……』

——元々自分を変えたいって気持ちにはあつたの。でも出来やしないうって諦めていた……。でもお姉様と会って、これを逃しちやいけないうってなんだか思えた……。それは、ツボミとナエも同じ気持ちだったみたいで、少しして二人もお姉様にガンブラを教えて貰う様になつていったの——

『お姉様！ゴスロリのお姉様を見習って、私達もゴシックローリータファッションを着てみようと思います！』

『あら？うーん、正直賛同しかねるわね』

『どうしてですか？』

『同じファッションが並んでいても魅力を引き出したとは言えないわ。あなた達にはそれぞれもっと似合うファッションがあると思うの。そうね。一緒に探しましょう』

——そして自分らしさと魅力を探る内に、モエ達はそれぞれ別のローリータファッションに身を包む様になつていったの……。それからビルダーの腕を磨いて、サキさん親衛隊の存在を知って、リーダー不在だった時に襲撃。電撃作戦で親衛隊を乗っ取つたの。そして今に至るの——

「そんな事があつたんすか、まさか一番目立たないアタミさんがきつかけだったなんて……」

「長く喋っていたから疲れたの……」

同時にモエがここまで長く喋った事にソウイチは驚いた。舌つたらずな口調と声、彼女が喋りたがらないのはこれの所為かと即興で分析するソウイチ。

「アサダ君が感じたのと同じ、自分を変えたいって気持ちがあった時、それを突き動かす奔放さがお姉様にはあったのよ。特にツボミに至ってはコンプレックスってのもあるからね。自立した女性には強く惹かれたってのもあるでしょうね」

「?コンプレックス?」

「……親に対して劣等感があるのよ。憎んでも言っていないわね」

「それってどういう……」

ソウイチの疑問にナエは人差し指をソウイチの唇の前に持っていて。いわゆる「シー」と黙る様に伝えるジェスチャーだ。

「悪いけどこれ以上は言えないわ。でもだからこそアイツは強がっている。自分の力だけで生きていこうと必死なの。ツボミは悪人ではない事だけは確かだから、そんなに嫌わないであげてね」

「それは解りましたけど……ナエさんの理由は何だったんですか?」

一番疑問だったのはナエの境遇だ。コミュニケーション能力に難があつたとかは到底思えない。

「それはね……」

ナエの笑顔が消える。とソウイチの両肩に手を置くと、顔を近づける。まるでキスをするかの様に。

「っ!?!ナエさん!?!」

何をするんだと赤面、反面妙な期待をするソウイチ。お互いの顔が近づくとナエは口を開ける。直後……蛇のような先が割れた舌。スプリットタンが見えた。ナエの舌だ。

「っ!!!」

赤面していたソウイチの表情が一転、驚きの表情で青ざめた。ナエの人柄とあまりにもかけ離れたそれに、ソウイチは衝撃を受けた。

「アハハ、期待しちゃった?……私ね、爬虫類大好きでね。親に内緒で、ベロをこうしちゃったの。それで周りとうまく行かなくなっ

ちやつてね……」

「す……すいません……」

拒絶するような自分の反応に謝るソウイチ。思い出してみると確かに、ナエの普段のアクセサリや機体マーキングには、蛇や蜥蜴、骸骨がかなり多い。女性がやるには少々特殊だった。

「まさかあの機体の骸骨とか蜥蜴とかがって、サキさんに会う前から……」

「そ。前から私が好きだった奴」

「モエ達の機体マーキング、タトゥーシールをインクジェットプリンタでデカールに作り変えて貼るっていうのも、ナエのアイデアなの……」

「趣味って……どこで繋がるか解らないっスね……」

もう一つのナエの一面を見ながらソウイチは何も言えなかった。自分とはまったく違った道を歩んできた女達。それぞれが自分とは別の苦労を経験してきた。年下として敬意を感じるソウイチであった。

休憩も兼ねた話もそこそこに、ソウイチの新型機はどんどん出来上がっていく……。本来一人で一気にやろうとしていた物が四人で進めるのだ。飛躍的な速さで出来上がっていく。

「ふーっ。今日はここまでだな」

「お疲れ様——」

塗装用にマスキングと分解を済ませ、それぞれクリップに挟み、並んだパーツを見ながらソウイチは安心する声を出した。こんなに早くここまで出来るとは思っていなかったからだ。

「有難う！助かりました！」

「どういたしまして。これで明日の朝から塗装すればお昼には間に合うね」

「本当にナエさんは頼りになりますよ」

「アサダ君、モエも手伝ったよ……」

「もちろんアタミさんもっス」

「あら。駄目よ男の子が女に向かって頼りになるなんて言っちゃ」
「え？あ……すいません」

謝ってばかりだな。とソウイチは自分でも思った。
「なんだ。もう出来たのか」

と、風呂上がりでドライヤーをかけてきたツボミがソウイチの部屋に入る。ツボミが風呂に入ってから一時間近く経っていた。三人でやればこんな物だ。

「ええ、ツボミさん達のおかげっスよ」

「ふん。敵に塩を送っただけだ。とはいえ仲間として明日私と組むんだろう？精々足を引つ張らない様に早く休んでおけ」

そう言っつてツボミはもう自分はここにいるつもりはないと寝室に向かつて出ていった。ナエはツンデレと言おうとしたが彼女には照れの様子はなかった。

「ツボミったら、素直じゃないんだから」

こんなんで明日うまくいくのかなあ。とソウイチは少し不安だった。

と、ソウイチ達がそんな風に話をしてる間にツボミは用意された寝室へと向かっていく。

「あら、ツボミちゃん。区切りはついた？」

と、そこへ話しかけたのはカナコだった。

「あ、アサダさん……」

かしこまった風に答えるツボミ、気まずさがあつた所為かちよつと距離を意識する。

「カナコでいいわよ。睡眠前の紅茶淹れたんだけど飲む？」

カナコは四人分の紅茶を入れたトレイを持っていた。断ろうかと思つたが、もう淹れてあつた物を無下にする必要もないと考えた。泊めてもらった恩もある為に、突き放す様な態度も取れない。

「そうですね……いただきます」

そしてカナコはソウイチの部屋に入り紅茶を全員に配る。が、ツボミだけは居間のテーブルでカナコと飲んでいた。こちらではテレビ

はつけてはいるが、お互いの間は静寂が流れた。向かいの椅子同士で座る二人。

「こっちでよかったの？ナエちゃん達と一緒に飲んだ方が……」

「いえ、今はちよつと一人でいたくて……」

正直ソウイチとは居づらい。しかし親の前でそんな事を言うわけにもいかない。

「そっか。……ねえ、明日はソウイチと組むんでしょ？どうかよろしくね」

「それは……大丈夫ですよ。ソウイチ君はきちんと成長しています。明日は心配要りませんから」

ソウイチの前ではとても言わないような事を、ツボミは言った。カノコの前でまた大人げない態度を取る事は流石に忍び寄りない。サキから遠ざかると流石のツボミも分別はついていた。

「そう。……あのね、ツボミちゃんの事も聞きたいんだけど」
「なんですかとツボミは答える。」

「ツボミちゃんの方も無理してない？」

「……どういう意味ですか？」

「なーんか常に身構えてるって感じがするからかな？険しい顔しててさ」

「それ……私がソウイチ君に似ているとかですか？」

ティーカップの紅茶を飲みながらツボミは、また似てると言われたと心の中で愚痴った。

「ううん。昔の私」

「ぶふお!!」

しれつと言う予想外の言葉に思わず紅茶を飲んでいたタイミングで吹き出してしまった。まさか母に似ていると言われるとは。

「あああ、大丈夫？ほらタオル」

「ケホツケホッ！うう、すいません……」

むせながら紅茶で汚れた部分をタオルで拭きながら、この場にソウイチ達がいなくてよかったと心底思うツボミ。

「昔、私もね。自分の力だけで、周りを思い通りにしようって思ってい

た時期があつたのよ。丁度そんな顔しててね」

「……自分の力だけで、というのは当たり前ですかね」

「周りが自分を裏切り続けている。それでヘラヘラしてる周りが嫌で嫌で仕方ない。皆私を馬鹿にしてるんだろう。特に大人はそう。そんな風に思っていたかな、当時の私は」

見透かされてるわけではない。だが割とツボミにとつて理解出来る言葉だった。若干の不快感を感じたツボミは少し意地悪な返しをする。

「ハッキリ言わないんですか……？ 私のその態度、間違ってるって」

「間違ってるなら、とつくにソウイチのあの態度はやめなさいって言ってるわよ。幸い犯罪とかには繋がらない事だからね。自分の心で変わりたいと納得しなければやめる事は出来ないと思うわ。私の経歴上……」

「変わりたい……ですか？」

「うん。他人の影響とかってのはあるけど、最終的に自分を変えてやれるのは自分だけだもの、ソウイチにはやっていい事と悪い事の区別はしっかり教えてあるから、私に出来るのはほとんど見守るだけね」

「……それでもソウイチ君が悪い事をしてしまった時は？」

「一緒に謝るわ。親ですもの」

「そう……ですか……。すいません。こんな事を聞いて……」
少し大人げない態度を取ってしまったな。とツボミは自己嫌悪をする。

「気にしないで、ま、ソウイチも結構余裕ないのはあるからちよつと心配になっちゃってね」

「それ、私がソウイチ君にも似ているって事じゃないですか……」

結局それか、とツボミは不満そうに答えた。

「私も経歴した事よ。私の血はどうもこうなり易いみたい。……死んじやった夫の方も、自分でなんでも出来る様になって意識はしてたけど冷静ではあつただけだね」

父親の事を言われるツボミ。ソウイチの父親の姿が無い当たり予想はしていたが……。

「あ……すいません……」

亡くなつた父親の発言。初対面の相手に言う事じゃないと思いがらも、自分が思い出させたかもしれないとツボミは謝った。カナコの方もそれを察してくれたようだ。ちよつとベラベラ喋りすぎたかな。とカナコは心の中で反省する。

「ううん。私が勝手に言った事よ。でも大切な物を残してくれた」

「ソウイチ君、ですか」

「そう。かけがえのない存在だから私達はソウイチってつけたの、創造した一っだけの命、創一」

「……どうしてそんな事まで、私に話すんですか？初対面ですよ」

正直どうかしている。自分が信頼するに値するかどうかすら解らないのに。

「さつき言ったでしょ？似てるのよ。私に、だからかな、なんだかこういう事まで話したくなっちゃう。あなたがバトルで文句を言った時からなーんか似てるなって思ったの」

「あの時に……？」

「と、愚痴を言える人も多かつたわけじゃないから、ついつい喋りすぎちゃつたかな」

なんだかこの人には合わないな。そう思えたツボミだ。だが話してみればソウイチよりずっと話しやすい。

「……ま、明日のタッグ戦はあなたがいれば安心でしょうね。楽勝でしょ？」

「……当然です。楽勝ですよ」

「頼もしいわね。でもだつたらもうちよつと笑つた方がいいと思うな」

「別に、そんな必要はありません」

「折角やるんですもの。余裕があるなら楽しくやらないと、楽勝つていうのはね、楽しく勝つって意味なんだからさ」

「……楽しく勝つ。ですか」

あまり大人や親という存在の言葉を信用はしたくない。だが素直に感心してしまう一言だつた。

「これね。私が学生時代の時に、夫から言われた事なの」
カナコにとってはソウイチが本当に追い詰められた時に激励しようとしていた言葉だった……。

翌日正午、ガリア大陸の工作室にて……。

「出来た……！」

目の前の作品。赤いGセルフを見ながらソウイチは感嘆の声を上げた。Gセルフ……『Gのレコンギスタ』の主人公機、機体そのものはストライクに近く。背中の武装を変える事によって様々な状況に対応する機体だ。

「まだ本体と一部の装備だけだけどね」とナエは言う。追加装備はさすがに間に合わないかと判断。重要そうな部分だけを作ったわけだ。急ぎ過ぎてもいい物は出来ないというナエ達の判断だった。

「赤いGセルフなの。名前は？」

「まだ決めていませんでしたね……うーん。そうだなあ……」

「まだ決めてなかったのか、お前の新型の名前」

何をやってるんだと言わんばかりのツボミの態度。

「別にいいじゃないスカあ。何か神話由来でつけるかなあ」

「……この世に一つしかない掛け替えのない機体だろ。……C1だ」
「え？」

ツボミの。一番意外な人物からの名前の提案だった。

「Gセルフ・C1、お前の名前、創一だよ。Gセルフ・クリエイションワン」

「なんか、ダサいっスね」

「なんだと」

「まあでも似合うかも、有難うございます。カンナミさん」

「……いいさ」

——ツボミ、今日は優しいよねなんか——

——何かあったのかな？——

ツボミの態度は今朝から少し柔らかくなった風にナエ達は感じていた。不思議である。

「?でもなんでカンナミさん、俺の名前の漢字表記知っていたんスカ?」

「っ……どうだっぺいいだろう」

「おめでとう。完成したのね」

ツボミが若干の困惑を見せる中、工作室に入ってくるゴスロリの女性、サキだ。

「サキさん」

「これからのバトルはあなたにとってテストでもあるわ。このバトルを乗り越えられないのなら、あなたはいらぬ!もうあなたはただの人よ!」

「え!?やめていいんスカ!」

解放されるという事実にめっちゃいい笑顔で返すソウイチ。

「……なんで今すっごいいい笑顔だったのかしら?」

「え?す!すいません!あまりの悲しみのオーバーフローでつい笑顔に……」

サキにとつてはとつておきの発破のつもりだった。しかしこんな反応されるといふのは面白くない。

「まあいいわ。何にしろ結果を出さなければならぬ。二人とも頑張る事ね」

サキのその発言にソウイチとツボミは「はい」と答えた。今日はソウイチはツボミと組んで挑まなくてはならない。

「で、場所はどこの店舗スカ?」

「ここから隣町の店舗『ペズン』よ」

「じゃあそこに行けばいいわけっスね」

「あーその必要もなくなったわ」

「は?」

サキの言ってる事が理解出来ないソウイチとツボミ、と、その時だった。

「おいーミシマ・サキの奴はいるか?!」

大きな声と共に数人の男が入ってくる。

「あー来たのね」

「あら来たのね。じゃねえよ！お前の所為でどれだけの俺達の仲間が泣かされたと思ってるんだ！」

「そうだ！今日これなかった奴なんてな！トラウマになってんだぞ！」

話を聞く限り、被害者ともいえるかもしれない。が、状況が入ってこない。

「サキさん。なんなんスカこの人達」

サキの前にやってきた男が答える。

「聞いてくれよ！俺達はな！ペズンっていう模型店で活動していた新世代ビルダーだったんだが！」

「ん？ペズン？サキさん。今日俺達が戦うのって！」

「そう。こいつらよ」

入ってきた男たちはソウイチ達に事情を話そうとするが、サキの仲間と解るとそれを中断する。

「なんだと。こいつらが？」

「そう。あなた達の戦う相手になるわ」

「ちつ。そういう事かよ。その為に俺達をここへ呼んだと」

「……サキさん、憂さ晴らして泣かせたんスカこの人達」

サキの性格と、相手の態度から察するに、これが一番可能性が高そうな予想だった。

「何を言ってるのよ。昨日シンゴと一緒に、違法ビルダーのたむろしてる店を2・3件襲撃しただけよ」

「何恨みを買ってるんですか!!」

「さあ！戦いなさい！私をかけて!!一人の女を巡って男達が戦う。これぞガンダム！」

「聞けよ人の話！」とソウイチは怒りの声を上げるがサキは気にしない。

「お姉様。私は女なのですが」

ツボミの突っ込みにサキは動じない。

「そうね。男女は関係ないわね。とにかく私の為に戦いなさい！まさに今の私の気分はララァ!!」

「どう見てもVガンラスボスのカテジナっス」

サキに不満のあったソウイチは反射的にそう突っ込んでしまった。

「……何か言った?!」

直後に凄い目力で睨まれるソウイチ。

「ナンデモナイッスヨー」とポロツと出てしまった本音を、脂汗を流しつつごまかすソウイチであった。

「ちいっ!あの女に乗せられたってのか、だが俺も新世代ビルダーだ。お前の弟子位ぶっ潰してやるぜ!!覚悟しな!」

「ソウイチ君!頑張れ!」

「ナエ、私の応援は?」

「二人とも頑張れ!」ととってつけた様にモエが応援する。ついで見たいな扱いに呆れたツボミである。「もういい……」とツボミは虚しく返すしかなかった。そしてすぐにいつものきつい感じに自分を切り替える。

「フン。獣のような男達……誰がお姉様の一番か見せてやる」

そういつもの調子でバトルに挑もうとするが、昨日のカナコの言葉を思い出す。

「……楽しく勝つ。か」

そしてバトルが始まった。今回のバトルステージは月面都市、昨日サキと戦った場所と同じ場所である。

「アサダ・ソウイチ!Gセルフ・C1!」

「カンナミ・ツボミ!ギラズール・ウタゲ!」

『出る!!』

そう言つて母艦アルビオンの左右のカタパルトからお互いが飛び出していく。今回は仲間である。が、どうしても警戒は怠らない。

「おい」

早速ツボミの方から通信が入る。大方足を引っ張るなだろうなとソウイチは予想した。

「……今日は味方だ。よろしく頼む」

機体を警戒態勢のまま、ツボミはソウイチに通信を入れる。

「あ、はい……(こちらこそ)」

正直、挑発が飛んでくるかと思ったが、今日のツボミはどうも大人しい。ソウイチは違和感を感じていた。と、感傷に浸っている場合ではない。敵の砲撃がソウイチ達二人を狙ってきた。

「おっとー」

が、これを難なくかわす。遠くから見えるのはいつも通りのネフィリムガンダムとマステマガンダム。それがそれぞれ10機はいる。

「どうします？競争と行きますか？」

ソウイチの予想では、競争でも持ちかけられるかと想像する。自分に対してのツボミの態度ではそうしてもおかしくない。

「何を言っている？今日はそういう事をしている場合じゃないだろう？」

口ではそう言うも、ネフィリム達は散会して襲ってくる。固まっているよりはずっといいだろうと判断。

「……まあいいだろう。各個撃破だ！」

「別れて戦います！」

「ああ、勝とう。……アサダ」

「!?」

アサダ、ツボミがそう呼んだことにより一瞬ソウイチは戸惑う。停止したGセルフを尻目にウタゲが先行する。

「あの人……俺をガキじゃなくて名字で呼んだ？やっぱ変だ！」

と、気を取り直したソウイチはGセルフを先に行ったウタゲに続いた。そう言つて2機は散会、ソウイチの赤いGセルフにネフィリムガンダムが迫る。

「うおおっ!!」

ソウイチはGセルフの腰部に取り付けられていた大型ハンマーを振り回した。ネフィリムはクローのフィールドで防御しようとするも、大質量のハンマーは意にも介さず吹き飛ばす。そのままひしゃげ、弾かれたネフィリムは爆散。

「よしーいい感じだー」

その敵討ちと言わんばかりの勢いでマステマガンダムが両手のク

ローから超大型ビームサーベルを発生させてソウイチを襲う。ソウイチのGセルフは背部のバーニアを器用に動かして回避。

「高機動が自慢のAGE3オービタルを使ったユニットだ！当たるかよ！」

背中に備え付けられた大型キャノンを稼働。少しのチャージと共に、砲撃は放たれた。

「へっ！ビームキャノンがこのマステマに!!」

フィールドで防ごうとするも、それは簡単にマステマのボディを貫通し、貫く。

「残念だったな！これは超大型レールガンだよ！」

「馬鹿なあっ！」という大声と共にマステマは爆散、ソウイチは自分の作り上げた機体の手ごたえを感じていた。予想以上の出来となった。

「行ける！これなら！」

その向こうでツボミはソウイチのGセルフの戦いを見ていた。

「……少しはやる様になったな」

こちらにもギラ・ズールウタゲの力を持つて着々と違法ビルダーを落としていく。こちらも実弾で固めた改造だ。と、ソウイチに感心している場合ではない。ツボミはソウイチ以上の結果を出して、自分がソウイチより優秀である事を知らしめねばならなかった。

「昨日の事はあれど！それとこれとは話は別だ！」

マステマが2体襲ってくる。大きさはウタゲの倍以上、先程と同じ泡を纏ったビームを振り下ろしてくる。ウタゲは横に回避すると背部のミサイルポッドからミサイルを乱射、いくつもの爆発はマステマを覆うが、マステマが複数だ。散漫的になった爆発はマステマを仕留めるには至らず。しかし目くらましにはなった。マステマの前にウタゲはいない。

どこだと探すマステマの腹部側面を、ロケットランチャーの砲弾が直撃、上半身と下半身が泣き別れになったマステマは爆散。怯んだ2体目のマステマに容赦なく同じ要領でランチャーを撃ち込んだ。

「いやいや、ソウイチ君の新型機。凄いやねー」

無邪気にナエはソウイチの方の活躍を称賛していた。

「……ツボミの方も応援しないとツボミが拗ねちゃうの……」

「ツボミの方も心配ないわよ。相変わらずのキレですもの」と安心しているようなナエの反応。これは二人の信頼関係の賜物とも言えた。そのナエの言葉に、サキがそれに付け足す。

「とはいえ、ただうまいだけならそこそこの人なら出来るわ。もう一歩先へ行かなければならないのよ。それ以上を望むのなら」

「お姉様……」

「これでラストだ!」

ハンマーを振り回してマステマを脳天から叩き潰すソウイチのGセルフ。これが最後の一体である。ソウイチのGセルフにツボミのウタゲが寄ってくる。

「これで10体目、さつき確認できたのは10体ずつだから」

「引き分けだな。今のところは……」

そう言つて二人は辺りを警戒する。そう、あくまで今のところは引き分けだ。だがバトル前に出てきた違法ビルダーはまだ姿を表していない。

「いるんだろう?出てこい!」

「ケツ!不愉快だがあの女が見込んだだけの事はあるつか。腹だたしいぜ!」

直後『挑戦者が現れました!』といういつものアナウンス。そして違法ビルダーの巨大な機体が彼方から飛んでくる。ソウイチ達の10倍はあろうというバスターガンダムの改造機だ。手持ちの大砲は外されており、両拳の部分は銃身に改造。if sユニットで固めており全身が火器といった姿だ。

「ラグナロクプラン!ガンダムシグローン!いくぜ!」

そう言うとバスターガンダムの改造機。シグローンは全火器を一斉に発射。ソウイチ達はこれを難なく回避。

「どいつもこいつも芸の無い戦い方をする!アサダ!」

「了解!」

2体はお互いの兵装を一齐にシグルーンに発射しようと構える。

「おっと！させるかよ！」

『っ!』

後方から別の砲撃が飛んできた。二人はそれを回避する。シグルーンがもう2体現れる。

「もう2体いたのか!？」

「まだまだおかわりはあるぜえ」

そう言うのと、シグルーンは額から強烈な光を放つ。と同時に破壊したはずの僚機は再生。さらに付き添いとしてのマステマとネフィリムの追加で乱入。敵の総数は50近くとなった。

「数で押そうって魂胆か！息巻いてたくせに結局それかよ!!」

「ほとほと芸の無い奴だな！お姉様に煮え湯を飲まされたらしいが、それも納得だな」

「うるせえ！お前ら倒してあのサキって女にリベンジを申し込む！お前らはそのウォーミングアップだ！」

そう言つて違法ビルダー達はソウイチ達に襲い掛かってくる。二人は反論を重ねながら迎撃をする事になる。戦車砲を撃ちながらツボミが叫ぶ。

「見苦しいな！大方お姉様に身の程知らずな喧嘩を売ったといった所だろう」

さつき同様に一機ずつ落としていくツボミのウタゲ、それに続いてソウイチがハンマーとレールキャノンで相手を撃ち落としていく。

「もしくは普通のビルダーにリンチみたいなたバトルをしてお仕置きされたとかスカねえ」

「っ！売ってねえ！昨日あの女から売ってきたんだよ！」

——昨日の夜！大体8時くらいだったか、俺達は普通にペズン店内でたむろしていた！そこへ！

『ちよつとあんた達！ムシヤクシヤするから私のバトルに付き合いなさい！』

あのサキって女が現れた！同じ新世代ビルダーか。もしくはカモ

か。とにかく俺達は応じてバトルに参加した！

『ああもう！むかつくわ！シンゴの奴ううっ!!』

3分後、それは蹂躪、虐殺と言っていい結果だった。

『何よ！この程度で終わり?!もつとたくさん違法ビルダーを連れてきなさい!!』

『え?いやだってこんな夜遅くじゃ…!!』

『いいから!!男がケチケチしない!!呼ばなかったら大声で泣き叫ぶわよ!!!』

泣かれちやかなわんと都合のつく新世代ビルダー達全員に収集かけて奴に挑んだけど!それでも結果はかわらずだ!!奴は俺達の残骸の上に悠々と乗ってやがった!!

『見なさい!やっぱり私の方が強いのよ!なのに!なのに!!シンゴの奴ナナの話題出すなんてええっつ!!』

よくわからんが男との痴話喧嘩でこっちは八つ当たりの的にされたってわけじゃねえか!!

「お姉様……何をしていたんですか……」

「だって……しようがないじゃない。昨日シンゴの奴、夕食の最中にナナの話題を出すんだもの……。八つ当たりしていいビルダーなんて違法ビルダー以外に思いつかなかったのよー」

「八つ当たりしようって発想を何とかしてください!」

その後俺はこんなバトルに駆り出された新世代仲間達に『あれはどいう事だー』って問い合わせ、そして俺の言い訳が延々続いたわけだ!!許せん!ゴスロリ姿のビルダーなんてそう多くはねえ!調べたらあっさり見つかったぜ!ミシマ・サキ!俺は同じく奴に恨みのあるビルダーを集めてリベンジに来たってわけだ!——

「なに考えてんだよサキさん……」

頭を抱えるソウイチ、正直違法ビルダーの気持ちがちよつと理解できさる。

「貴様ら！結局はお姉様への恨みなのは変わらないだろうが!!」

「そうさ！恨みさ！だがアイツの身勝手っぷりを知らないお前じゃねえだろ！」

「……………うう……………」

心当たりがある為、言葉につまるソウイチ、

「世迷いごとを！」

反面ツボミの方は意に介さない。と、別の違法ビルダーが射撃と同時に恨み節をぶつける。

「俺の方はなあ！周りから評価されていたのを『その評価は私が受けるべきなのよ!』と言つていきなり襲われたんだよ!!」

「あー……………やっぱり他にもそういう被害にあった人がいたんだー……………」

「評価を守れなかった貴様らが悪いだろうが！」

「……………わかる……………」

更に気持ちちが解るソウイチ。サキ側に立ち続けるツボミ。

「そう言うのかよ!!本人のモラルがあればなら弟子のモラルだって最低じゃねえか！そりや俺達新世代ビルダーだって、アレな所があるのはわかるわ！でもな！だからって俺達に対して何してもいいってわけじゃねえだろ!!お前らみたいな信者に言つても解るまい!!この気持ち!!」

「解らないな！お前らの理k「解ります！その気持ち!!」

ツボミが両断しようとしたらソウイチが同意した。しかもめっちゃいい返事で、「はあ?!」とツボミは返す。

「俺も同じ目にあつたんですよ！サキさんの自己中さ！俺も腹に据えかねます！」

「おおそうか！」と違法ビルダーも感激の声を上げる。どうやら本当に嬉しい様だ。

「大体最初会った時から酷い人だとは思っていましたがよ！他人に対しての敬意もなんも持ってない！」

「解るわ！」

「自分が最強だと信じて疑わない！それはいいんすけど自分が不満を

持つと平気で八つ当たりしてくる！人にされて嫌な事はするなって事も守れてないという大人げなさ!!」

「ぐもつとも!!」

「ぶつちやけ俺が今まで会ったビルダーの中で完全にワーストと言っているモラルの人でした！ほとんど反面教師にしかありませんよ!!」
「うおお！同志よ!!」

共感したソウイチと違法ビルダー達はその手をサイズの違いはあれど固く結んだ。人は解り合う事が出来るのだ。シグルーンの拳は銃身になつていたが強引に握手である。

「おい……おいガキイ!!貴様お姉様の前でそんな事を言うのかあ!!」

ツボミの方は敬愛している人をそう言われて我慢できるわけがない。怒りを露わに戦車砲をソウイチのGセルフへと向けた。

「おーつと、動くなよ。こいつは人質だ」

と、違法ビルダーはソウイチのGセルフを楯にしてウタゲの前に突き出す。両手を掴まれたGセルフは礫にされた様な姿勢となった。

「なっ?」

さつきまで仲良しだった風に見せかけてのこの反応だ。ツボミの方もつい戸惑う。

「これはどういう事スか?」

「お前の気持ちは解ったが、俺達は敵である事には変わりないな。少年、俺達でお前の分まで仇は取ってやるよ！安心してやられな」

そう言つて違法ビルダーが号令をかけると別の違法ビルダーはウタゲの方に一斉に発射していく。

「チッ！アサダ！お前が事態をややくしくさせたんだぞ！」

かわしながら器用にツボミはウタゲで迎撃していく。

「ハハハ！おい余り派手に動くんじゃねえぞ！こいつの命がどうなつても」

「あー、ま、その方が都合いいンスけどね。あまり情が写つたらこつちもやりにくくなるんで」

「何?!」

違法ビルダーがそう言った瞬間。両腕を掴まれていたソウイチの

Gセルフは、勢いをつけてボディごと背中のカannonを後方に向けて。と、そのままレールキャノンを発射、シグルーンをそのまま破壊する。

「きー貴様あつ!!」

シグルーンの上半身が消し飛びながら、違法ビルダーは恨みの叫びをあげる。

「確かにサキさんはあんたの言った通り、人間は最低っス。自己中、大人げなき、どれをとつてもそれは覆せない」

『……あはは、アサダくーん、いい度胸してるじゃない……』

通信越しに聞こえるサキの乾いた声、しかし今はそれに意識を向ける場合ではないとソウイチは本能的に判断。声からのドス黒いオーラに、見て見ぬふりをするしかないからだ。

「だがね、そういった人でも、ガンプラに対しては真摯に取り組んでいた！好きな事にはとことん真剣になれる人なんだ！」

初めて会った時、サキがアイの称号を奪いに来た時、ガンプラの扱いを『おしやれ』と称した。そしておしやれとして自分らしさを一切捨てる違法ビルダーに対して怒りを見せた。

「だからそこだけは！とことん尊敬出来る人なんだよ!!」

スレッズハンマーを振りかぶりながらソウイチは叫び、さつき吹き飛ばしたシグルーンの再生コアへと叩きつけた。『ぐしやっ』と音を立てて其の部分は破壊。失格となる。

「なっーなんじゃそらああつ!!!」

「随分と白々しいな。お姉様の雷が怖くてとつさに思いついた嘘なんじゃないのか？」

反面ツボミは冷静にソウイチに返した。ツボミにとつてもさつきのサキの声は怖いという他なかった。

「え……ソンナコトハナイッスヨー」

怖いのはその通りのソウイチだった。実際半分は当たっていたりする。

「フン。だがまあいい、今は違法ビルダー達を片付けるのが先決だ。手を貸してもらおうぞ」

「あ……了解つスよ！」

何はともあれ、ここで負けるわけにはいかない。ソウイチのGセルフは背中のレールキャノンを最大出力で稼働させる。だがこれでは足りない。もつと、もつとだ。あの時にサキに対して出した力。自分のガンプラ魂を。

「……なあアサダ、ガンプラバトル。楽しいか？」

「なんスか突然」

「楽しいかって聞いてるんだ」

「……楽しいつスよ」

「そうか。じゃあ勝てるな！楽しく勝つ！私達の楽勝だ！」

そのツボミの言葉にサキは笑みを浮かべる。

『……いい言葉じゃない』そうサキは呟いた。

「？なんかよく解んないけど……楽しく勝つ。か。いい言葉だ！」

「ちっ！させるか！全機発射用意！奴を撃たせるな！！」

嫌な予感がすると違法ビルダー達は一斉に射撃の構えを取る。だがソウイチの方のチャージは丁度発射体勢に入っていた。

「アサダ・ソウイチ……Gセルフ・C1!!勝ちに行くぜっ!!!」

そう叫ぶとGセルフのキャノン砲から最大出力でレールキャノンが放たれる。超大型ビームの様なエネルギーの奔流となってそれは敵を次々と飲み込んでいく。

「な！バカなああっ!!」

実際にはビームではない。飲まれた違法ビルダーは断末魔の悲鳴を上げながら爆発に飲まれていく。

『へえ、中々おしゃれなのを作ったじゃない』

モニターで観戦するサキは、ソウイチのGセルフを見て感嘆の声を上げる。それはツボミの方にも聞こえていた。

「これは……思った以上に仕上がったな……」

光が収まると、残りの違法ビルダーの機体が突っ込んでくる。数体の違法仲間を盾にして、その隙に再び再生させようとする魂胆だろう。

「と、感心している場合じゃないな！」

彼女も自分の機体への思い、サキへの思いは同様に熱い物だった。戦車砲を捨ててヒートナタを両手に構える。

「本気出していくぞ!!ウタゲ!!」

ツボミの思いに答えるように、ウタゲのヒートナタが輝きだす。彼女の方もガンプラ魂を発動。さっきの一撃を漏れた違法ビルダー達へと突っ込んでいく。

「くっ……いつら……ムキになりやがってえ!!」

次々と違法ビルダー機を切り裂いて落としていくツボミのウタゲ、手軽さを最優先させた違法ビルダーにとつては理解しがたい物だった。手間をかけてガンプラを完成させることも、ここまで遊びに入れ込む事も。

「当然だ!私の魅力だからな。このガンプラは!だから!」

そう言つてツボミはナタを振るう。放たれた衝撃波はシグルーンを縦一閃にする。この際に再生コアごと叩き切った様だ。

「楽しく勝つ!楽勝だ!」

そのままシグルーンは爆散。

「ワケ解んねえんだよ!たかが遊びだろうが!」

残り一機。最後のシグルーンがウタゲに一斉射撃をかけようと構えた。

「だから全力で!遊んでるんだろうがっ!!」

そのタイミングでソウイチのGセルフがハンマーを振り上げながら落ちてくる。そして一撃をシグルーンに思い切り叩きつけた。

「だから楽しく!勝つ!」

「あの女に関わるとおおっ!!碌な事がねええっ!!」

そんな断末魔を上げてシグルーンは一撃で碎かれ破壊。これで最後の一体は破壊されてソウイチとツボミの勝利となる。

「それで何か言残したい事はあるのかしらあ。坊や?」

バトルが終わった後に出迎えたのは不機嫌全開で仁王立ちしたサキだった。

「え、えーと……」

冷や汗を流しながらソウイチはどう言い訳するかを考えていた。

「……言い訳はしません。さつき言った事が俺にとつての全てです」
「へえ」

「だからこそ言わせて貰います。俺はいつかあなたを越える！越えてやる！ああは言っても俺は弟子なんですからね！」

「越える？……ふっ！あつはつは！十万年早い台詞だわ！」

口を手を当てながらサキは笑う。ツボにはまった言葉だったのか大きく笑う。口の中を見せようとしなのは女性的と言えよう。

「ま、いいわ。今回で少しは美しさが、成長が見えた。強くなつて見せなさい。ただし私ももつともつと強くなつてるわよ」

「望むところですよ！」

「と、それとこれとは別だわ。キツイお仕置きをしなきゃねえ」

忘れてそうで忘れてなかった自分への暴言、そのツケをソウイチに払わせようとするサキ。不味いとソウイチは判断。

「……あ！あれはなんだ!!!」

と、ソウイチはサキの後ろを指さして叫んだ。「何よ」と後ろを振り向いて確認するサキ、その隙にソウイチは全力疾走で下の階へ逃亡。

「このスキにー！」

「ああ！待ちなさい!!」

サキもスカートだというのに全力で追いかける。ツボミ達は黙ってそれを見ていた。

「お姉様……はしたない……」

「お疲れ様ツボミ」

そんなツボミにナエとモエが話しかけてくる。

「ありがとう二人とも……」

「かつこよかったの。特にあの『楽しく勝つ』っていうセリフ」

「ああ、あれは……。そう教えてくれた人がいたんだ」

「誰？」と問いかけるナエにツボミは「秘密だ」とはぐらかした。まあナエの方も昨日からの変化にある程度の予想はつくが、放っておいた方がいいかなとそれ以上は言わなかった。

——それにしても……私が男性の言葉を引用するなんてな……父

親か――

父親……その言葉と一緒に、ツボミの昔がフラッシュバックする……。

『いるんだろう?! どうして開けてくれないんだ!!』

ツボミの記憶の中……、平屋の一軒家の奥で、一人の幼い少女が母親と抱き合って震えていた。右目周りに痛々しい火傷の跡がある少女。昔のツボミだった。外からの男性の大声が部屋の中に響いた。さつきからずつとこんな調子だ。

『ママ……』

『大丈夫……このまま待っていれば……』

幼いツボミは必死になつて母親に抱き付いていた。怖さが増すと親を掴む力も強くなった。母親の方も子を守ろうと抱く力を強くした。

『どうして会ってくれないんだ!! 俺だって皆の事は愛してるのに!! ちゃんと手続きは踏んだのに!! どうして!! どうして!!』

直後、大きな割れる音が響いた。ガラスが割られた。……程無くして人の気配がする。誰かが割った窓から入ってきた。足音がどんどん大きくなって、ツボミ達のいる部屋に入ってきた。勢いよく引き戸をあけると一人の壮年の男が姿を表す。

『ツボミ! パパだよ!』

男は余裕のない表情で二人に手を差し出そうとする。ツボミにとっては差しのべられた手も、まるで自分と母親を握りつぶそうとする手に見えた。恐怖の対象でしかなかった。それが近づいてくると、ツボミは大きく泣き叫んだ。

『い・嫌……来ないでえええっ!!!』

「ううっ……」

思い出したのは一瞬だったが、ツボミは立ちくらみをする。

「ツボミ? ……どうしたの?」

「あ……なんでもない……ちよつと気合いの入ったバトルだったから

「疲れただけだ……」

「そう言いながら、ツボミはソウイチの父親が無くなっている事を思
い出す。」

「……アサダの父親は亡くなっているんだっただ……羨ましい
……な——」

「自分の父親と少年の父親の違いを思いつつ。」